

グレモリー家の次男 リ メイク版

EGO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある傭兵がある戦場で民間人をかばって死んだ。そんな男が神様の気まぐれ(?)で転生することに……。

オリ主「これは、面倒なことになった……」
若干面倒嫌いなオリ主が頑張っていくお話。

前作、グレモリー家の次男を読み返していて、ここをこうしたらな。こうしても良かったかな。と思い、リメイクすることにしました。そのリメイク前のものを消すかは

未定ですがね。

「前回のままでいい」という方はブラウザバックしてください。

所々設定を変えていきますので、読んでいただく前に作者から一言。

「前作は忘れろ」

以上です。

目次

プロローグ

転生

悪魔転生のマーセナリー

l i f e 0 1 転生したはいいが

……

l i f e 0 2 苦手な奴

l i f e 0 3 初陣

l i f e 0 4 切り裂き魔

l i f e 0 5 幹部襲来

l i f e 0 6 全てを賭けて

l i f e 0 7 撤退、そして……

81

l i f e 0 8 第三勢力、乱入

95

l i f e 0 9 共闘、三勢力

l i f e 1 0 二天龍討伐作戦

122

l i f e 1 1 告白

l i f e 1 2 亡命者

l i f e 1 3 新魔王

l i f e 1 4 はぐれ

l i f e 1 5 妹

l i f e 1 6 義妹？

l o s t l i f e 新たな任務

185

111

139

151

158

164

173

1

13

22

32

44

55

67

月光校舎のエクスカリバー

mission 01 ジャックの任務

mission 02 動き出す者たち

mission 03 戦いを求める者

mission 04 禁手

mission 05 今こそ決着を

mission 06 接触と提案

mission 02 覇龍

mission 03 任務完了

mission 04 決戦に向けて

mission 05 退却

mission 06 突入

停止教室のヴァンパイア

Return life 01 帰宅

mission 01 行動開始

mission 02 作戦開始

mission 03 突入

mission 04 退却

mission 05 決戦に向けて

mission 06 接触と提案

mission 02 覇龍

mission 03 任務完了

mission 04 決戦に向けて

mission 05 退却

mission 06 突入

mission 07 接触と提案

mission 08 接触と提案

246

260

343

329

322

308

体育館裏のホーリー

297

287

214

276

225

276

235

と自己紹介

354

Return life02 久しぶ

りのオフ

365

幕間編①

Extra life01 面倒事

幕間編②

life06 悪神迎撃

445

life07 決戦中盤

455

life08 決着

467

life09 置き土産

475

379

放課後のラグナロク

life01 テロリスト狩り

483

392

life02 主神訪日

魔王集結

489

life03 悪神襲来

498

life04 共闘宣言

我らサタ

life05 作戦確認

505

レンジャー!

Extra life04

我らサタ

505

Extra life01 義姉訪日

Extra life02 魔王訪日

Extra life03 魔王集結

Extra life04 我らサタ

life04	探し人	584
life03	妖怪の町へ	575
life02	夕食会	567
life01	修学旅行開始	556
趣味	修学旅行はパンデモニウム	544
Extra	life08 傍迷惑は	536
Extra	life07 儀式終了	526
V	赤龍帝	
Extra	life06 ブラック	
515	Extra	
Extra	life05 儀式	

Extra	life02	いざ、山	698
幕間編③	life12	解決	670
Extra	life11	増援到着	658
Extra	life10	脅威の英雄	645
Extra	life09	それぞれの敵	637
Extra	life08	接触	624
Extra	life07	作戦開始	613
Extra	life06	作戦確認	603
Extra	life05	出現	590
Extra	life01	意外な客	
Extra	life02	へ	

Extra life 03 見せろ、

life 01 ゲームに向けて

根性! 708

773

Extra life 04 ハルマゲ

life 02 相談 784

ドン再び 開会式編 721

life 03 アグレアスへ 795

Extra life 05 個人種

life 04 切り裂き魔VS聖槍

目① パン食い競争 731

806

Extra life 06 個人種目

life 05 場所は大事 817

② 借りもの競争 741

幕間編④

Extra life 07 団体種目

Extra life 01 人魚を求

玉入れ 騎馬戦 748

めて 826

Extra life 08 決戦 バ

Extra life 02 人魚のた

トンリレー 761

めに 837

学園祭のライオンハート

Extra life 03 面倒から

	は逃げられない	—	—	849
	Extra	life04	レベリン	
	グという名の作業	—	—	859
	Extra	life05	ゲーム終	
	了	—	—	877
	Extra	life06	魔法少女	
	?魔王少女だろ?	—	—	890
	Extra	life07	オーデイ	
	シヨン終了	—	—	905
	進級試験とウロボロス	—	—	
	life01	突然の始まり	—	921
	life02	訪問者	—	932
	life03	いざ、試験へ	—	947
	life04	英雄襲来	—	961
	life05	脅威の聖槍	—	975
	life06	切り裂き魔王VS聖槍	—	
	再び	—	—	991
	life07	現状確認	—	1005
	life08	脱出作戦開始	—	1021
	life09	脱出	—	1038
	補習授業のヒーローズ	—	—	
	life01	首都防衛戦	—	1048
	life02	ミサイルカーニバル	—	
	1064	—	—	
	life03	謎の力	—	1074
	life04	圧倒的な力	—	1087

行つてかデート	Extra life 05	悪魔と侍	1168
に行こう!	Extra life 04	少しの変化	1157
のは……	Extra life 03	一番強い	1146
	Extra life 02	眷属集結	1133
	Extra life 01	甥っ子訪	1123
	幕間編⑤		1110
			1099

1260	Extra life 04	安全だった場所	1260
1272	Extra life 05	流れに任せて	1272
1239	Extra life 03	深夜の会談	1239
1225	Extra life 02	慣らし運転は大事	1225
1210	Extra life 01	契約	1210
1193	Extra life 07	たまには作るのもいい	1193
1184	Extra life 06	京都からの客	1184
		進路指導のウイザード	

life14	新たな敵の名	1519
life15	チーム結成	1535
教員研修のヴァルキリー		
life01	小さな大問題	1551
life02	課題	1564
life03	厄介なヒト	1580
life04	デート	1592
life05	報告	1607
life06	学校へ	1613
life07	約束	1626
life08	招かれざる客	1637
life09	防衛戦開始	1653
life10	ロイVSGレンデル	

life11	防衛戦 終盤	1663
life12	贖罪	1694
life13	嵐が去って	1714
life14	苦労は絶えない	1727
聖誕祭のファニーエンジェル		
life01	変わり始めた日常	1744
life02	天界巡り	1756
life03	謎の剣士	1769
life04	剣士再び	1781
life05	語られる真実	1791
決着		

life04	決戦に向けて	21612
life03	説明	1512
life02	邪龍VS邪龍を宿す者	140
life01	力を求めて	2122
life06	核(コア)	21052
life05	悪意の終わり	20932
life04	過去との決着	20762
life03	罪(かこ)に呑まれた男	2062
life02	最悪の再会	20482
life01	限界	2031

自由登校のルシファー

lost06	追われる者	23132
lost05	追う者たち	22962
lost04	過去を探って	22812
lost03	再会	22672
lost02	邂逅	22512
lost01	変わってしまった日常	2236
lost01	学年末のファントム	22242
lost01	遺された者	22216
life07	帰還	21621
life06	兄弟共闘	19721
life05	ロイVストライヘキサ	176

2427	m i s s i o n 0 4	下層(コキユートス)へ 進化した怪物	2414	m i s s i o n 0 3	突入、地獄の最	2398	m i s s i o n 0 2	紅髪 の聖劍使	2382	m i s s i o n 0 1	覚悟を決めて	2365	s s i o n	mission	back And Starts mission	lost07	戦場へ	2331	lost08	助言	lost09	Memory is
------	---	-----------------------	------	---	---------	------	---	------------	------	---	--------	------	-----------------------	---------	----------------------------------	--------	-----	------	--------	----	--------	--------------

m i s s i o n l 2	(クローン) 救うために	2521	m i s s i o n l 1	目覚める皇獣	2507	m i s s i o n l 0	突入	2494	せ	m i s s i o n 0 9	リゼ ヴィムを 探	2481	m i s s i o n 0 8	戦場へ	2467	m i s s i o n 0 7	仕切り直し	2454	m i s s i o n 0 6	悪意の再開	2440	き	m i s s i o n 0 5	紅が 交差す ると
---	-----------------	------	---	--------	------	---	----	------	---	---	-----------------	------	---	-----	------	---	-------	------	---	-------	------	---	---	-----------------

卒業式のアポカリプス

2601	2585	2566	2549
mission15	mission14	mission13	
終わらせる者	父として	死を纏う者	
sin01	sin02	sin03	sin04
冥府へ	命を刈り取る者	死に挑め	覚醒
sin05			
羽化			
2684	2665	2651	2633
2620			

2774	2760		
return15	return14	return13	return12
過去を	帰宅	現状把	病室に
return11	return10	return09	return08
語りと共に	懺悔(ざんげ)		
return07	return06	return05	return04
父の代	語る		
2799			
2714	2699		
2746	2731		

わりに

2821

Final life 次の舞台で

2855

喪失者と龍神少女

Missing link 01

次元

の狭間

2883

プロローグ

転生

ある時代、ある戦場で一人の男傭兵が死んだ。普段はふざけているように振る舞いながら、戦いとなると何の躊躇ためらいもなく、ただ機械的に人を殺していくさまから、その男は人間ながら『悪魔』と呼ばれた。

そんな男の最期は、意外なことにも戦場で誰かを助けたからだった。助けに行かなければその男傭兵は死なずにすんだ。なのに助けたのだ。

その生涯のほとんどを戦場で過ごし、誰かに感謝されるわけでもなく、誰かに知られることもなく、ただ多くの命を奪って死んだその男傭兵の魂は、間違いなく地獄に墮ちる。

「あつ!? やっちゃった!」

—— 筈だった。

(俺、どうしたんだったか)

そんなことを思いつつ地面に大の字に寝ている件くだんの男。

寝転んだまま周囲を見回し、場所を確認しようとする。
だが――。

(何も無い。いや、寝転んでいる以上は床か地面はあるのか)

本当に何も無い。右を見ても左を見ても白一色の空間が広がっているだけだ。

男は考えても仕方ないと割りきり、なぜここにいるのかを考え始めた。

(いつもの通りに戦場に出て、それで……………)

しばらく考え――、

(夢だな。よし、寝よう)

夢だと決めつけた。

あの時自分は撃たれた筈だ。それで死んでいたらこんなことにはなっていないだろうから、多分これは昏睡状態の俺が見ている覚めない夢ってやつなのだろう。

男はそう決めつけると目を閉じて再び寝ようとするが、

「ちよつ!?!ちよつと待つてくださいい!」

「あ?」

突然の声に反応して目を開けた。頭側の視線の先には白いローブを着た、腰まで伸びたブロンドの髪を風(?)になびかせる美女が浮いていた。

(……………パンツの色は白か)

男故^{ゆえ}なのか、寝転んでいるためチラチラ見える謎の美女のパンツに目が行く男。

「……………ツ！」

とうの美女は男の視線に気がついたようで、顔を真っ赤にしながらパンツが見えないようにローブの裾で隠す。

(チツ)

心の中で舌打ちをする男に謎の美女が言った。

「あ、あなた、変に落ち着いてますね」

「まあ、夢の中と割り切れればな」

即答で返した男に謎の美女は溜め息をついた。なぜあんなことをしてしまったのか。美女はそれを後悔し始めていたが、再び寝ようとしている男を見て、無理やり本題に入る。

「あなたに言いたいことがあります！」

「女のパンツを覗くな、か？」

「それもそうですが、今はいいです！」

美女は男の言葉を軽く流して話を続ける。

「あなたは死にました」

「……………は？」

「……………は？」

男の一言と表情に思わず間抜けな顔になる美女。男は構わずに続ける。

「驚かしてスマンな。こう、感情は一回爆発させた方が落ち着くからな」

「……………はあ？」

「で、あんたは何者だ？」

いまだ困惑気味の美女に男が訊くと、美女は一度咳払いをしてから言った。

「私は神様です！」

男はその発言を聞き流すようにポケットからタバコを取り出す。火がないことに気がつきシヨックを受けていた。

「聞いていますか!？」

「あ? ああ、で、なんだ、M s. 神様」

そう返しながら男はタバコをくわえてライターを探す。いくつかのポケットを探り携帯灰皿は見つけたが、肝心のライターが見つからず、しょんぼりし始めた。

明らかに信じていない男に自称神様の美女は手招きした。

「?」

タバコをくわえながら自称神様に近づいていく男。手が届く距離まで近づくと、自称神様は男がくわえるタバコに人差し指を近づけると、

ゴッ!

人差し指の先に小さな火を灯した。

「これで信じてくれますか?」

「……………どうも」

若干驚きながらもタバコに火をつけ、自称神様に当たらないように紫煙を吐き出す。

(タバコの味がしないってことは、本当に死んでるのか)

自分が本当に死んでいるという事実を実感した男だが、すぐに自称神様に訊いた。

「で? Ms. 神様。その死んだ筈の俺を何でこんなところに?」

「あなたにはこれから転生していただきます!」

ニコニコ顔で言った自称神様の言葉に、男は呆れながら味のしないタバコを吸う。明

らかに何言っただこいつという目で自称神様を見ている。

信じていない男に、自称神様は少し大きめの声で再び男に言った。

「ですから、転生していただきます!」

「てん……………せい?」

明らかに狼狽^{うろた}えている男の言葉と表情に自称神様は頷いた。

「はい! もう一度、別の形で生きてもらいます!」

「……………いらんお世話だ」

男は無愛想にそう返すが、

「あ、これは決定事項なので、拒否権もありませんよ？」

(この屁あま……!)

「誰が屁ですか!？」

「聞こえてんのかよ……」

「神様なんです!心の声ぐらい聞けます!」

胸を張って返す自称神様だが、男は気にすることなくタバコを携帯灰皿に入れる。そして、自称神様に訊いた。

「何でだ?」

「はい?」

「何で俺みたいな奴にもう一度生きろと?」

男の質問に自称神様は真剣な表情で答えた。

「多くの命を奪ってきたあなたですが、最期は人を守って死にました」

「ああ。本当、何であんなことしちまったんだか……」

「なぜやったかは置いておいて、そんなあなたに私は興味があります」

「興味?俺にか?」

「はい」

「……………」

自称神様の一言に黙りこむ男。

(俺に興味があるとは、とんだ物好きだな)

そんなことを思う男に構わず自称神様は続ける。

「ですから、次の世界でも好きに生きてください」

「向こうでまた大量に殺すかもしれないぞ?」

「向こうで何をするかはあなた次第です」

男の微笑に自称神様も不敵な笑いで返す。

二人がしばらく睨みあうようにしていると、男は大きな溜め息をつけてから言った。

「やれやれ、面倒なことになったな」

後頭部をかきながら答える男。その返答に自称神様も笑顔で答えた。

「まあ、本当に何をするかはあなた次第なので、私は責任を取りませんし、命を奪つても魂の強制送還なんてこともありませんから」

「へいへい」

男は適当に返しつつ自称神様に訊いた。

「細かいことは聞かないが、何か条件とかあるのか?」

自称神様はどこからかホワイトボードを持ってきてそれを男に見せる。が、

「たった一つにホワイトボードを使うか？」

「き、気にしないでください……！」

自称神様は男の正論に狼狽える。それもそうだろう、大きめのホワイトボードの真ん中にポツンと何かが書いてあるだけなのだ。

「えっと、何て書いてあるんだ？」

「え？ 読めませんか？」

「M s . 神様。字を練習しろ。読めん」

「うっ!？」

男の一言に露骨にショックを受ける自称神様だが、「仕方ないですね」と呟くと口頭で告げた。

「あなたの意識は次の世界に行ってもしばらくは覚醒しません。人間で言うところの『物心ついた頃』に完全に覚醒します」

「それだけか？」

「はい」

男の確認に自称神様は頷き、そして付け加えた。

「行き先はそれなりに危険なので、すぐに戻って来ないでくださいね」

「了解」

「では……………」

男の返事を聞いた自称神様の右手には何かのボタンが握られている。

「おい、M s. 神様。なん——」

「いつてらつしゃーい」

男が言い切る前に自称神様はボタンを押す。すると、

ガタンッ！

何かが開く音と共に男は浮遊感に襲われた。男はその瞬間に理解した。——床が抜けたのだと。そして、このまま落ちるのだと。

「これは、面倒だな……………」

男がそう呟きながら落下していくなかで、自分を送り出す自称神様の笑顔が妙に癩かんに障ったことは言うまでもない。

こうして、男の第二の人生がスタートする。のだが、男はある勘違いをしていた。

自称神様は男に別の形で生きてもらおうと言ったのだ。つまり、男の第二の人生は人間ではない『何か』ということになる。

男がその事実気がつくのはもう少し先の話……………。

「で、自分のミスで死なせたとは言っていないんだな？」

「は、はい……」

先程の自称神様が正座をして、派手な椅子に座る見るからに偉そうな男性に睨まれていた。

「まったく、なぜおまえはそんなに適当なのだ」

「その、変なことというと、殺されそうだったので……」

自称神様の言葉に呆れながら溜め息を吐く偉そうな男性。

「まあよい。通例の通りに転生はさせたのだろう？」

「は、はい」

「それで、行き先は？」

「ハイスクールD×Dだったはずです」

そこまで聞くと偉そうな男性は背もたれに体を預けて大きく息を吐いた。

「その男、すぐに戻ってくることはないだろうな？」

「……大丈夫だと思いますよ？」

「……………やれやれ」

首を左右に振りながら困り顔になる偉そうな男性。

転生した男は知らないのだ。自称神様に転生の理由はあーだこーだと言っていたが、実際はその自称神様のミスによるものだ。

転生した男がそれを知るよしもないが、とにもかくにも、こうして男は転生することになったのだ。

悪魔転生のマーセナリー

l i f e 0 1 転生したはいいが……

俺はなぜかM s. 神様に興味を持たれて転生とやらをした。

M s. 神様の言っていた通りに、物心ついた(だいたい五才)頃に俺としての意識がはつきりしてきた。

それで、最初は驚いたが、今の俺は『悪魔』のようだ。だが、それは一年もしないうちに慣れた。あの神様に会ったあとだからな。

それはそれとして、今の俺は六歳だ。周りからはかなり落ち着いた子供だと思われる。その周りつてのは、別にご近所さんではない。『メイド』と『執事』の皆さんだ。

どうやら、俺が生まれた家はかなりいいところらしい。ななじゅうふたはしら七二柱とかいう悪魔の階級

があり、俺が生まれたのは五六位の『グレモリー家』だ。五六位と聞いた時は下の方かなと思っただが、十分過ぎるほどだ。現に、

「ハイ、どっかだっけ？」

俺は、自分が住む屋敷で軽く迷子になっているのだ！自慢じゃないが、一年そこらで広大な屋敷を覚えるのは無理だった。時々改築、改装しやがって！余計にわからなく

なつたよ！

「はあ……面倒なことになつたな……」

溜め息を吐きながら周囲を見渡す。長い廊下と無数の扉、これは面倒だ。

後頭部をかきながら再び溜め息を吐く。昔ならタバコを吸っているとところだが、今は子供だし、そもそも禁煙だろうし……。とりあえず部屋に戻るか。

俺は戻るかもわからない自分の部屋を指さそうと踵を返すが、

「あ、いたいた。ロイ！探したよ」

「サーゼクス兄さん、助かりました……」

俺に声をかけてきた少年——サーゼクス・グレモリーは俺の兄だ。多分、俺を探してくれていたのだろう。ちなみに『ロイ・グレモリー』が今の俺の名前だ。

「まったく、ロイは方向音痴なのかい？」

「もう少し細かい地図が欲しいところです」

兄さんの質問に苦笑しながら答える。本当に地図をくれ。地図さえあれば一日で完璧に叩き込める。この際自分で作るか？六歳の子供がやっていたら怪しまれそうだけどな。

俺がそんな事を考えていると兄さんが言った。

「お母様が呼んでいたよ。お勉強の時間だ」

最近は勉強をしていることが多い。体も動かしているがな。

「わかってはいますが、迷ったんです」

「今度から迎えに行くか、迎えがくるまで部屋にいてくれ」

「わかりました」

兄さんの苦笑混じりの言葉に返事を返す。次からは部屋で待つことにしよう。で、そのうち地図を作る。

俺が決心しているなかで兄さんは俺の手を引いた。

「ほら、行くよ」

「はい」

俺は手を引かれるままに歩くが、兄さんの表情をチラツと見る。

「兄さん、何で笑っているんです?」

なぜか兄さんは笑っていた。俺をバカにしたような笑みではなく、どこか嬉しそうな表情だ。

「世話のかかる弟がいると退屈しないからね」

その表情のまま俺の質問に返す兄さん。多分、兄にしかわからない何かなんだろう。俺にも下に誰かいるとわかるのかな?

そんな話をしながら勉強部屋に、兄さんがノックしてから部屋に入るが、ドアの先に

は、

「ロイ、説明を……………」

青筋を立てている垂麻色の髪の美人、もとい俺の母親——ヴェネラナ・グレモリーが立っていた。表情はニコニコとしているが、プレツシャーが凄まじい。髪の毛がウネウネうごめいているし……。

「えと、また迷子になりました」

俺が申し訳なさそうに言うと、母さんがニコニコ顔のまま近づいてくる。

「そう、あなたはいつになつたら屋敷の間取りを覚えてくれるのかしら？」

「……………いつになりますかね？」

俺が苦笑しながらそう返した瞬間、母さんの手が俺の頭を掴んできた！そして力をこめてくるっ！

「いだだだだだだっ！」

このヒト、割りと容赦ないんだよね！実際問題かなり痛い！

数秒後、ようやく解放された。まだジンジンと痛むが、そのうち引く筈だ。

「まったく、今度地図をあげます。その時にしっかりと覚えなさい。わかりましたか？」

「は、はい……………」

「あはははは……………」

頭を押さえながら返事をする俺と、それを見て苦笑する兄さん。兄さんにもこういう時代があった筈だ。わからないけど……。

俺が苦笑している兄さんを半目で睨んでいると母さんが手を叩いた。

「少し遅れてしまいました、早速始めますよ」

「はい」

返事と共に席につき、母さんが俺たちに対面するように設置された席に座る。という訳で勉強タイムだ！

数時間後。

「今日はここまでにしましょう」

母さんが壁にかかった時計で時間を確認しながら言った。

「はい、お母様」

兄さんはまだ余裕そうに答えるが、

「あ、ありがとうございます」

俺は若干ショート気味だ。悪魔とグレモリーの歴史、わからん。わかるうとは思っているのだが、わからん。やはり、体を動かしている方が楽だし合っていると思うんだ。

「まだご飯まで時間がありますから、二人で何かしてらっしゃい」

母さんが頭から煙を出している俺を見ながら言った。多分、気分転換してこいと言いたいのだろう。

「はい。ロイ、いつものやろう」

「はいー行きましょうー！」

兄さんの誘いに即答で答える。俺たちは裏庭でよく『魔力』の扱い方を練習しているのだ。兄さんも俺くらいの時からやっているらしく、なかなか上手である。

てなわけで、移動！

移動完了つと。グレモリー家のメインの屋敷の裏にある学校の校庭ほどのスペース。俺と兄さんは動きやすい格好に着替えてそこに来ていた。

「ロイ、いいかい？魔力の使用で大事なことはイメージだ。創造力、想像力を使ってどうしたいか、どうさせたいかを考えるんだ」

「前にも言っていましたね。変な球体しか出来ませんでしたけど……」

前にもやったのだが、歪な球体がいくつか出来ただけだった。まあ、そんな急いでい

るわけじゃないからいいんだけどな。

「前よりももつと細かく、具体的に考えるんだ」

兄さんは簡単そうに言うが、実際はかなり難しい。何もないところに、イメージだけで物を作れというのだ。単純に放つだけなら楽なんだがな。

「もつと細かく、具体的に……」

兄さんの言葉を復唱しながら右手を前に出して、目を閉じて集中する。この際何でもいい！イメージ、イメージ、イメージ………！

ふと脳裏に前世で愛用していたコンバットナイフが浮かんだ。

「……これは」

兄さんの眩きが俺の耳に届いた。俺が恐る恐る目を開けると――、

「おおー」

俺の右手には紅のコンバットナイフが握られていた。なんだ、前世のことを生かせば存外イメージって簡単かもしれんな。

魔力で出来ているおかげなのか、非常に軽い。試しに振ってみると紅の残像を残している。見た目の割には派手な気がするな。

「面白いね、ナイフと言えはいいのかな？」

「多分そうですね」

一旦振るのを止めて兄さんに視線を送る。兄さんはあごに手をやって何かを考えているようだ。

「あの、何か？」

「いや、球体からいきなりそうなったからね。ちよつと驚いただけさ」

兄さんはいつもの笑顔で俺に言った。

「試しに何か切ってみるかいい？」

兄さんの言葉に頷いて周囲を見回す。近くには木くらいしかないな。母さんには何か壊すかもとは言っているから問題ない筈だ。

「とりあえず、あの木を」

「やってみるといい」

兄さんの許しを得てその木の近くに移動する。高さは三メートルくらいの低めの木だ。

その木の根元に行き、ナイフを順手に構える。念のため刃の部分に魔力を込めておく。切れないとは思うが、やるだけやっておきたい。

「ふうふう……」

ゆっくりと息を吐き、腰を少し落としながら左足を引き、ナイフを顔の前に持っている。そして、

「ハッ！」

気合いの掛け声と共にナイフを水平に振り抜く！

「……………」

「……………」

俺と兄さんは沈黙に包まれていた。理由は簡単だ。

「……………めりこんだ？」

「……………めりこんだね」

ナイフが木にめりこんでいるのだ。引つ張ったり押ししたりしてもびくともしない。完璧に芯に食い込んでしまっているようだ。

俺は溜め息を吐きながら手を離す。するとナイフも塵になるように消えた。

「まあ、最初はこんなものだよ」

「そうですね？」

二人して何とも言えない空気が流れていたが、「もう少しやってみる」ということで練習を続ける俺と兄さんなのだった。

life 02 苦手な奴

転生してから、俺には苦手な奴がいる。兄さんはそこまで苦手というわけではないよ
うだが、なぜあの娘むすめのテンションに何も思わないのか、俺は疑問しかない。

そんな事を思いつつ、馬車に揺られている俺と兄さん。そして、

「いいかい、一人とも。いつものように向こうのヒトには迷惑をかけないようにね」

俺たちの向かいに座りながら注意しているのが、俺たちと同じ紅髪のダンディーな男
性、父親——ジオティクス・グレモリーだ。

俺から見ても母さんの尻しりにしかれてるように見ているが、それでもれつきとしたグレ
モリー家の現当主だ。ちなみに、母さんのように厳しくはない。むしろ俺たちに甘い。
その厳しい母さんは留守番だ。

「わかりました」

俺と兄さんは返事をするが、俺は内心面倒に思っている。

俺たちが向かっているのは『シトリー家』の屋敷だ。

ななじゅうふたはしら

七二柱ななじゅうふたはしらのなかでは十二位の立

場だったりする。

数字だけ見れば、結構上の立場に思えるが、父さんと現当主様が旧知の仲らしく、お

互いが当主になってもよく会っているようだ。

それだけなら俺と兄さんは行かなくてもいいような気がするが、何でもシトリー家の次期当主の女の子が俺たち（特に俺）を気に入ったらしく、『グレモリー様が来るのなら、あの子たちも来ますよね？来ますよね!』と、シトリー現当主に言ってしまったらしい。それで向こうのヒトも大事な愛娘に年の近い友達が出来たと思えば上機嫌に。父さんもそう思つて上機嫌という、会うことが絶対避けられない状態になつてしまつたのだ。

どうしてこうなつた……………。

俺が心の中でぼやいているうちに馬車がゆつくりと停止、扉が外から開かれた。目の前にはグレモリーの屋敷と同じかそれ以上の大きさの屋敷があり、周りは自然ばかりだ。

馬車から降りた俺たちに扉を開けたと思われるメイドが一礼する。

「グレモリー家の皆様、お待ちしております」

「うむ、当主様はどこに？」

「はい、ご案内します」

「助かるよ」

父さんがメイドについて行こうとすると、俺たちを見て、

「さて、お父さんはお話ししてくるから、二人はセラフオルーちゃんのところに行つてき

なさい」

その顔はとても明るいものであり、ものすごく嬉しそうである。これからシトリー現当主様と親バカトークを繰り広げるつもりなんだろう。

父さんの言葉が終わると屋敷の扉が開かれた。メイドと父さんが先に進み、俺と兄さんがそれに続く。そして途中で合流してきたもう一人のメイドに連れられ、俺と兄さんはそのセラフオールという女の子のいる部屋へ。

部屋に続くドアの前、俺は自分の心臓な鼓動が速くなっていることを意識していた。すげえバクバクしているよ、ホント。

俺はゆっくりと息を吐きながら、自分を落ち着かせる。

そうだ、会うのはたかが女の子一人だ。ビビることはない。父さんたちの話が終わるまで適当に流しておけば――。

「ロイちゃああああんっ!」

俺の名前を叫びながらドアが開け放たれ、女の子が俺に飛び付いてきた!

「ぐぼはっ!」

不意打ちでろくに踏ん張ることが出来ず、そのまま女の子に押される形で壁に背中か

ら激突する。壁に沿うように滑りながら床に座り込む。

会うたびにこうなるの忘れていた……。平和ボケしてきたなこりや、気を付けねえと……。

背中の痛みを堪えながら、俺の胸に頬擦りしている女の子の顔を見る。

「うふふ〜」

すごい上機嫌なニコニコ顔のこの娘が俺の苦手な奴——セラフオルー・シトリーだ。年は俺と兄さんのちようど真ん中（俺と兄さんは3歳差）ぐらいにあたる。

かなり活発な娘であり、初めて会った時からテンションが変わらない。もしかしたら上がっているかもしれない。

「ロ、ロイ、大丈夫かい？」

兄さんが驚きながら俺の心配はしてくれるが、引き剥がそうとはしない。まあ、前によろうとして暴れたからな。

「お嬢様、ロイ様が困っています。離れてあげてください」

「いやー！」

メイドの言葉を軽く流しながらいまだに俺に頬擦りしてくるセラフオルー。俺は嘆息して彼女に言った。

「セラフオルーさん、離れてください。暑いです、痛いです」

「……はーい」

俺の言葉でようやく離れてくれたが、少し拗ねた感じの声だ。どんだけ俺を抱き締めたいんだよ……。

俺は立ち上がり、服についた埃を払う。——仕草はするがこの屋敷も手入れが行き届いており、そこまで汚れていない。

俺がそんな事しているとメイドが言った。

「それでは、私はこれで失礼します。お嬢様、もう手遅れだと思えますが、失礼のないようにお願いします」

「OK☆任せなさい☆」

メイドの言葉に満面の笑みで答えるセラフォルー。この先大丈夫だろうかシトリー家。このフリーダムガールが次期当主って心配になるぞ。

そんなこんなで俺たちはセラフォルーの部屋にお邪魔することになった。

二時間程いたのだろうか。もつと長く感じるが、多分それぐらいだ筈だ。

俺は赤面しながら顔を俯け、三角座りしていた。理由は簡単だ。

「私も弟か妹がいればなく」

「確かに退屈はしないだろうね」

兄さんが俺の小さい頃（物心つく前）の話をしているのだ。漏らしたあの、転んだあの、迷子になったあの……迷子は最近でもあるな。とにかくそんな話をしているのだ。

あまりの恥ずかしさに、何も言えない状況の俺を見てセラフオールが言った。

「でもロイちゃん。その頃の子は誰だつてそんな感じよ。私やサーゼクスちゃんだつてね？」

「僕はあまりお母様やお父様には聞かないからよくわからないけどね」

セラフオールの振りに苦笑しながら答える兄さん。俺は顔を上げながら兄さんを見た。

「兄さん、たまには自分のことを暴露してください……」

「じ、自分で自分のことを言うのかい!？」

俺の振りに今度は驚愕する兄さんだが、セラフオールは構わずに俺の顔を見てきていた。

「ふふ、恥ずかしがるロイちゃんも可愛いわね」

小声で何か言っていたが、うまく聞き取れなかった。何と言ったのか俺が聞き返そうとすると、ドアがノックされ、「失礼します」の一言の後に開かれた。

「サーゼクス様、ロイ様、グレモリー当主様がお呼びです」

「どうやら、話しが終わったようだ。ようやく解放されるのか……。」

俺が前世に気づかれぬようにホツと息を吐くと、セラフオルーが抱きついてきた。

「え〜！まだロイと一緒にいたい〜！」

多分だが、セラフオルーは俺を弟みたいな感じで扱っているんだと思う。今の言葉も完全に遊び足りない子供のそれだ。

「ロイは人気だね」

他人事のように言ってくる兄さん。頼むから置いていかないでくれよ？

俺がその事を考えながら頬に汗を滲ませているとメイドが言った。

「ロイ様にもロイ様のご都合があります。わがままおっしゃらないでください」

少し怒気を感じる声音。さすがのセラフオルーも怯む――、

「それでもよー！」

ことはなかった。逆に俺を抱き締る力が強くなっている！こいつ、変に根性あるな。いや、ただわがままなだけか。

一歩も引かないセラフオルーにメイドが困っていると、

「サーゼクス、ロイ、どうしたんだい？」

開けっ放しだったドアから父さんが入ってきた。入ってきて早々に俺とセラフオ

ルーを見て朗らかに笑う父さん。

「セラフオルーちゃんはロイが好きなんだね」

「……………」

父さんの一言にセラフオルーは顔を赤くしている。が、離す気配はない。顔を赤くするなんて、いきなりどうしたんだ？

俺が首をかしげていると父さんが片ひざをついて、視線をセラフオルーに合わせるとやさしく諭すように言った。

「いいかい、セラフオルー。キミの気持ちはわからないわけではないけれど、ロイは嫌がつているだろう？」

それを聞いた途端に不安そうな顔で俺を見てくるセラフオルー。俺は「あははは……」と苦笑するしかなかったが、セラフオルーはショックを受けている様子だった。

「だから、今回は離してあげてくれないか？また来るから」

父さんの言葉にセラフオルーは頷くと名残惜しそうに俺を解放してくれた。一応、俺の口からも言うておく。

「セラフオルーさん、また来ますから、抱きつくのはその時をお願いします」

セラフオルーは涙目になりながらも頷くと俺に言ってきた。

「ロイ、私のこと次から『セラフオルー』って呼んで……」

なるほど、『さん』付けを辞めて呼び捨てにしてくれてよかったか。そのぐらいならいいか。

「わかりまし——」

「あと敬語もなしにして……」

「……………」

俺に被せるように言ってきたセラフォルの言葉で言い淀んでしまった。チラリと父さんを見ると、笑顔で一度頷く。

俺は一度深呼吸をしてからセラフォルに改めて言った。

「わかった。また会おう、セラフォル」

出来るだけの笑顔でそう言うと、セラフォルは満面の笑みを浮かべて、「うん！」と言いながら頷いた。

こうして、俺たちはグレモリーの屋敷に帰ることになった。父さんと兄さんに続いて帰りの馬車に乗り込もうとすると、

「ロイー！またね——」

部屋の窓を開けて、先ほどと同じ笑顔で俺に手を振っているセラフォルが見えた。

「またな——」

俺は手を振り返してから馬車に乗り込む。すると、父さんが謎の笑みを浮かべて俺を

見てきていた。

「……あの、父さん？何か？」

「いやなに、ロイに随分早い春が来たのかな、とね？」

「？」

父さんの言葉に俺は首をかしげることしか出来なかったが、セラフオールの見せてくれたあの笑顔は輝いて見えた。

「サーゼクスも、頑張らないと弟に先を越されてしまうよ？」

「がんばります。ロイには負けません」

セラフオールの笑顔を思い出しながら窓の向こうの景色を見る俺を他所に、兄さんと父さんが何か喋っていたが、俺の耳は簡単にそれを聞き流し、俺がその言葉を理解することはできなかった。

life 03 初陣

俺が転生してから早くも二三年。

俺も一端の悪魔になることが出来た。が、ある問題が起きた。俺個人のものではなく、悪魔という種が全て絡む大問題だ。

冥界のある森の中、俺は『戦闘服』に身を包み、多数の悪魔に紛れていた。

ポケットと冥界特有の紫色の空を見上げ、小さく溜め息を吐く。本当、あのM.S. 神様を一発ぶん殴りたい気分だ。

「ローイー！見つけたわよ☆」

そんな俺に『戦闘服』を着たセラフオルーが駆け寄ってくる。俺たち男はいいとして、あんな体のラインが出るような格好、恥ずかしくないのか？

俺はその疑問を飲み込んでセラフオルーに右手を軽く挙げながら答える。

「セラ、相変わらずだな」

「もちろんよ☆」

横チヨキをしながら答えるセラフオルー、もとい『セラ』。かなり前の呼び捨てやタメ口の流れて、俺はセラフオルーをあだ名で呼ぶことになった（されたとも言う）。

「緊張感ないな、まったく」

俺が嘆息するようにセラに言うと、いつもの笑顔で返してくる。

「こういう時こそいつも通りがいいのよ☆」

本当に大丈夫だろうか。俺と同様の心配をしたのか、セラに視線が集まっていたが、セラはそれらを特に気にすることなく続ける。

「サーゼクスちゃんは何の場所なんだっけ？」

「ああ、確かその筈だ。まあ、向こうで合流できるだろう」

「そうね」

兄さんは俺たちとは別の場所にいる。目的地は同じ筈だから後で会えるだろう。

俺とセラがそのやり取りを終えると、俺たちよりも年上の悪魔（以下隊長）が言った。「これより『墮天使』に占領された街を奪還する！我々は悪魔として、奴らを殲滅するだけだ！いいいな！」

『はっ！』

その悪魔の声に周りの悪魔たちが答える。そう、俺たちはこれから『戦争』に行く。

墮天使とは、己の欲のために墮ちた天使のことだ。彼らは本来の住処である天界を追い、俺たち悪魔のいる冥界に逃げ込んだ。これは俺が生まれるずっと前の話だ。その悪魔と墮天使はよく小競り合いが起こっていたそうだが、ついに本格的な戦争になって

しまった。

悪魔と墮天使による戦争。大量の死者がでることは間違いなく、下手をすれば悪魔が完全に滅ぼされるかもしれない。

そんな不安を感じつつ、俺は内心でこうも思っていた。

——俺は死んでからも戦争に関わるのか——。

悪魔の俺はこれが初陣であり、セラフォルもそうだ。兄さんは年齢の関係で少し前から戦争に参加していた。

「ふううう……」

俺は自分を落ち着かせるようにゆっくりと息を吐いた。今度こそ、死んだら終わりだ。慎重にいこう。

そんな俺を見て、緊張していると思ったのかセラが言ってきた。

「ロイ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。少々面倒だが、何とかなるだろう」

「そうね」

そう言いながらセラが俺の右手を握ってきたが、俺はあることに気づいた。

「セラ、震えてるぞ」

「……うん」

セラの手が震えていた。俺がその事を言うのと、セラは俯きながら頷いた。そして、セラはいつもの元気なものと違い、小さく呟くように言った。

「これから、戦争に行くんだから、本当は怖いわよ……」

セラはそう言いながら俺の右手を握る手に力をいれる。

「私、ロイほど大人っぽくないから、不安なの……」

セラが俺の前で初めて言ったかもしれない弱気な発言。俺はセラから出た言葉に頷きながら、セラの手を握り返す。

「セラ、心配すんな。何かあったら俺が守ってやる」

その言葉を聞いて顔を上げるセラ。少し顔が赤いような気がするが、俺は頬をかきながら構わず続ける。

「不安なのは誰だっけそうさ。俺だっけ内心怖いしな。だが……」

俺は言葉を区切り、セラに笑顔を向けてやる。

「今の俺にはなくしたくないものがたくさんあるからな」

それを言い終わると俺は顔を真剣なものに戻す。セラは先ほどよりも顔を赤くしながら頷き、訊いてきた。

「ロイ、あなた……自覚ある?」

「は?何の?」

俺が聞き返すとセラは急に手を離してそっぽ向いてしまった。

「知らない！」

なぜか怒らせてしまったようだが、どうにか元気にさせられたか？

俺が微笑していると、セラが俺に背を向けながら、なぜか体をモジモジさせながら言ってきた。

「ありがとう……。ちよつと勇氣出た」

セラはそう言うのと振り向き、珍しく真剣な表情になっていた。

「私も、私が守りたいヒトを守る！」

セラは俺に宣言するように言うと、先ほどの隊長が叫んだ。

「よし！行くぞおおおおッ！」

『オオオオオオオッ！』

隊長の叫びに答えるように、周りの悪魔たちが叫び、次々と蝙蝠のような翼を生やして飛び立っていく。

俺も翼を展開して、彼らに続いていく。セラも遅れないように俺の横についた。今の俺は普通に飛んでいるが、昔は慣れなくてまっすぐ飛べなかったが、そこは練習してどうにかした。

そのセラは俺の事をじつと見てきているが、特に気にすることはなく、戦闘地域を目

指して進み続けた。

私、セラフオールはロイの横を飛びながらある疑問を抱いていた。

さつきロイは、

「今の俺には無くしたくないものがたくさんあるからな」

『今の』……私とほとんど同じ年なのに、まるで昔は何もなかったみたいな言い方。

ロイにも生まれた頃から家族がいるし、サーゼクスちやんもいる。ロイ、何か隠しているのかな？もしかして、子供の頃に何かあったのかな？

俺、ロイの視界にボロボロの街が写った。あれが今回の目的の街なのだが、妙に静かだ。

俺が言い知れぬ不安を抱えていると、耳元に連絡用の魔方陣が展開された。

『各員、警戒しろ。何か変だ』

隊長も何かを感じたようで、俺たちに警戒を促した。それを聞いて周囲を警戒し始める周りの悪魔たち。セラも周囲を見回しながら飛行を続ける。

そして、街の上空に入ろうとした時、

『避けるッ！』

隊長のとっさの叫び。それと同時に街から数十という光で出来た槍が飛んできた！

「ッ！」

俺たちは散開するようにして光の槍を避けていくが、弾幕は薄まることを知らず、逆にどんどん濃くなっていく！

俺は飛んでくる槍を避けながら街を注視する。槍を飛ばしている墮天使は、うまく壊れた建物に隠れながら攻撃してきている。だが、だいたいの場所はわかった！

ナイフを生成し、両手に一本ずつ握る。そして、ゆっくりと息を吸い、そして、

「フッ！」

息を吐くと同時に翼を駆使して一気に突っ込む！独断専行した俺は槍の集中砲火を受けるが、右に左に避けながら高度を落としていく。

ついに、建物の二階に隠れていた墮天使の一人と目が合った。同時に墮天使が驚愕の表情を浮かべていることが確認できた。

驚愕しながらも接近してくる俺に至近距離で槍を投げようとしている墮天使に、逆に

速度を上げて懐に飛び込むように突っ込む！

槍を投げるよりも早く俺のタックルが当たり、うめき声を上げて後ろに転がる墮天使。勢いを殺しきれなかった俺は床で前転するように体制を整え、素早く立ち上がり、遅れて立ち上がった墮天使の喉笛に右手のナイフを突き刺す！

「かつ……………あつ……………」

人間以上の生命力を持つ俺たち異形の者はこの程度では即死しない。ただ苦しいだけだ……………。

墮天使は苦しみながら俺に手を伸ばしてくるが、俺は左のナイフをで眉間を突き刺し、楽にしてやる。

まず一つ……………。

俺がナイフを引き抜くと同時に墮天使の喉笛から血が吹き出し、俺の顔に少しかかる。

それに構うことなく俺はナイフを消して窓から飛び降り、駆け出す。裏道を使い、なるべく攻撃にさらされないように、見つからないようにしながら先ほど見つけた墮天使の元を目指す。

大通りに差し掛かる前、曲がり角に隠れながら顔を出す。通りの向かいの建物の二階から槍が飛ばされている。先ほどの墮天使が死んだことがわかっていないのか、俺に気

がつく様子も下を警戒する様子もない。

俺は気配を殺してその通りを突っ切ると、墮天使が隠れている建物に潜入し、ゆっくりと二階に上がる。案の定、俺に気がつかずに無防備な背中をさらしている墮天使。俺は警戒しながらも近づいていき。ナイフを生成、魔力を使ったことで墮天使が気づき、振り向き様に光の槍を右から水平に振ってくる！が、右のナイフでそれを止め、逆に左のナイフで腹部を刺す！

「ッ!？」

刺された墮天使は苦悶の表情を浮かべると体制を崩した。

その隙は見逃さねえ！

俺は右のナイフで光の槍を弾き、左のナイフを抜いて、刃を水平にしながら再び刺す！そして、右のナイフでも同じように腹部を刺す。

「き、貴様……っ!？」

「二ッ……っ!？」

言うと同時にナイフを左右に振り抜き、墮天使の腹を裂く！内臓が体から飛び出し、床と俺の戦闘服を汚していくが、気にしない。

俺が再び窓から飛び出そうとすると、光の槍が大量に飛んできた！

俺は素早く窓から飛び降りて建物の陰に隠れる。空を見ると、墮天使と悪魔が乱戦を

していた。

——セラは大丈夫か？

そう思った俺の視界の先には、墮天使に得意の氷の魔力で応戦するセラの姿が見えた。援護するために移動しようとするが、再び槍が飛んできてそれを阻む。

物陰から少しだけ顔をだして確認すると、俺を睨むように四人の墮天使が通りの中央を陣取っていた。

近くに高い建物がないため飛ぶことも出来ず、墮天使からしたら正面から来るしかないと思っっているのだろう。

だが、ここは本来なら悪魔の領地だ。地図は細かいものをもらっている。

俺はナイフをその場に置き、気配を殺して建物を回り込むように移動を始める。ナイフをあの場合に残しておけば魔力がそこに残留する。少しだけなら俺があそこから動けないでいると誤解させられるだろう。

気配を殺して裏道を移動し、先ほどの墮天使たちの後ろに出る場所に移動が完了した。

そこから様子を伺うと、墮天使二人が先ほどの場所を確認に、残りの二人が周辺を警戒しているが、俺には気づいていない。

俺は駆け出すと同時に両手にナイフを生成、同時に投げる。それは吸い込まれるよう

に周辺を警戒していた墮天使二人の頭を貫き、即死させた。

四つ……………。

確認に向かっていった墮天使のうち一人が俺に気づいて振り向き様に光の槍を投げってくるが、飛び込み前転のように避けて懐に飛び込み、生成した両手のナイフで滅多刺しにする。

そいつよりも少し奥にいたもう一人の墮天使も俺に気づくが、ナイフで滅多刺しにされながらもまだ息がある墮天使を盾にするように左腕で首を締め、攻撃を受けないようにする。

「お、俺に構わず……………いつを……………」

俺に拘束されている墮天使が息を絶え絶えにしながらそう言うと、残りの一人が覚悟を決めたように頷いて槍を投げようとしてくる。

俺は盾にしていた奴の首をそのまま折り、軽く跳躍。同時に両手に諸刃の直刀を生成する。

墮天使も俺を追うように上を向き、槍を連続で投げてくるが、うまく体を捻りながらそれら避け、落下の勢いそのまま両手の直刀を大上段から一気に振り下ろし、墮天使の両腕を落とす。

肉が斬れる鈍い音と共に血が大量に吹き出し、地面を汚す。墮天使は錯乱するように

叫びながら倒れ、のたうちまわる。

俺はその墮天使に近づき、直刀で眉間を貫いて止めをさす。

六つ……………。

滅多刺しにしたやつと密着したせいで服に血がベツトリとついている。

俺は通りに転がる死体を一瞥、血がついて真つ赤に染まった戦闘服を見て溜め息を吐くと、翼を展開して上空の乱戦に参加するべく上昇を開始した。

l i f e 0 4 切り裂き魔

地上の敵を片付け、俺は再び上空に飛び出した。

右手に直刀を握り直進する俺に、一人の墮天使が立ちはだかる。

「仲間の仇だー！」

墮天使は光で剣を生成し、大上段から降り下ろしてくる！

俺は直刀で真正面からそれを受け止め、お互いの得物から火花を散らしながらその墮天使と睨みあう。

俺は左に受け流すようにして墮天使の体制を崩させる。前のめりになるように体制を崩した墮天使の腹部に鋭く左拳を打ち込む！

「かつー！」

肺の空気を吐き出す墮天使。が、すぐに歯を食い縛り堪えると、体制を整えて剣を再び大上段から振って俺を攻撃してくる！

先ほどよりもいい動きをする墮天使に関心しながら、その一撃を直刀で下から上に弾き、袈裟懸けに体を斬る！

「貴様……………何者だ……………!?!」

血を吹き出しながら息を絶え絶えにして言ってくる墮天使。俺は真剣な表情で――

「ただの悪魔だ……」

そう返した。

同時に直刀でその墮天使の首をはねる。糸が切れた人形のように動かなくなった墮天使は、重力に従って落下していく。

俺はゆっくりと息を吐き、力を抜きながら周りを見る。

殺気立った墮天使十人が俺を囲んでいた。一人一人が異物を見るように俺を睨んできている。

「何なんだあいつは………！」

「そんな事はどうでもいい！ここで殺す！」

ある墮天使の声に応答しながら、墮天使が一斉に突っ込んでくる！

右から来た最初の墮天使がその勢いのまま剣で突きを放ってくる。

俺はスウエーして避け、突きの勢いで突き出た両腕に右手で持っていた直刀を振り上げ、その両腕を落とす。

左から二人の墮天使が来るが、両腕を斬った墮天使の頭を強引に掴み、体が横になるように二人の墮天使の方に投げつける。

墮天使二人ははとつきに受け止めるが、その隙に一気に近づき直刀に魔力を込める。そして、

「フッ！」

直刀で水平に一閃した！その一撃は投げられた墮天使、受け止めた墮天使二人の計三人をまとめて切り裂いた。

バラバラになりながらも落下していく墮天使を一瞥し、残り六人を睨む。

「ちくしょうが！」

「おい、待て、落ち着け!？」

一人の墮天使が槍を片手に仲間の制止を聞かずに俺に突っ込んでくる。さっきの墮天使とは大違いだな。

俺は溜め息を吐きながら直刀を消し、両手にナイフを生成。墮天使の左からの水平斬りを左のナイフで止め、

「舐めるな……………」

右のナイフで喉笛を貫き、左のナイフで剣を弾いて腹を刺す。墮天使は言葉にもならない苦悶の声を上げるが、構わずに腹を何度も刺して殺害する。

あと、五人か……………」

残りの数を確認しながらふと血に汚れた戦闘服を見た。

先ほど以上に血まみれになり、そう簡単には落ちなそうだ。後で洗うことを考えて思わず苦笑してしまった瞬間、墮天使が言った。

「あ、あいつ、笑っているのか……………?」

「イカれてる……………。あの野郎、殺しを楽しんでいやがる!!」

『紅髪クリムゾンの切り裂き魔』……………』

化け物を見るような目で見てきやがって、こちらら服を見て笑ったんだよ!それに、戦いを楽しむ……………か。否定は出来ない。心のどこかで俺は——。

俺はそこまで考えると頭を振ってその考えを捨てる。今は、戦闘に集中しないと。

俺が思考を切り上げようとすると、残っていた墮天使に突如、紅の球体が襲いかかった!
た!

俺に警戒していた墮天使たちは不意打ちの球体に飲み込まれ、塵も残さずに消滅する。

「ロイ!大丈夫か!」

俺よりも上空から兄さんが降下してきた。目を見開き、驚愕の表情を浮かべている。

「ロ、ロイ!?!血まみれじゃないか!」

「俺の血じゃありませんから、大丈夫です」

俺は平然とそう返し、周りを確認する。すると、セラもこちらに向かってきていた。

「ロイ!? その血——」

「俺のじゃない」

セラが言いきる前に返す。まあ、いきなり降下していなくなった奴が血まみれで戻ってくれば心配して当然だろう。

顔についた血を拭いながら兄さんに訊く。

「兄さんがここにいるということは、優勢みたいですね?」

「ああ。墮天使たちは撤退を開始した。この街はそのうち復興するだろう」

「頑張ったかいがあったわね☆」

三人でそんな話を話していると、俺たちの耳元に連絡用の魔方陣が展開された。

『墮天使は完全に撤退、この街を放棄した。諸君、我々の勝利だ!』

俺はそれを聞いてホッと胸を撫で下ろした。街のあちこちから勝どきが聞こえてくる。

セラと兄さんも少し緊張が解けたのか、深く息を吐いていた。

とりあえず、勝ち、か。だが、こんなのがいつまで続くことやら……。まだ始まったばかりだと考えると、面倒だな……………。

俺がこれからの事を考えていると、セラがいたずらっぽいな笑みを浮かべた。

「珍しくロイが真剣な顔をしているわね」

「そうか？俺はいつだってマジメだが……………」

「そうかい？ロイは時々抜けているからね」

兄さんも苦笑しながら俺に言ってきた。俺が抜けているって、俺、何かしたか？

俺が首をかしげたが兄さんはそれ以上何か言うことはなく、「さて、戻ろうか」と言つて先に飛んで行ってしまった。

俺も後を追おうとすると、セラが俺の手をとつてきた。

「どうかしたか？」

俺が訊くとセラは目に涙をにじませて俺を見てきた。

「ちよつ!?!どうした!?!どこか痛むのか!?!」

俺が焦りながら聞いたらセラは首を横に振り、そして口を開いた。

「怖かった……………急にロイが降りていっちゃうんだもん」

「あ……………」

俺は頬をかいた。さすがにあれは急すぎたか？

俺が次の言葉を探しているとセラが続けた。

「守るって言った矢先に置いて行っちゃうんだもん」

言われてみると、そんな事言っていたな。

俺はセラの目を見ながら言う。

「その、ごめんな。今度から気を付ける」

「……………うん」

俺が謝り、セラが頷く。たったそれだけなのになぜか安心できた。セラが生きていることに心から安心している。

「そんじゃ、行こうぜ。兄さんが待ちくたびれちゃう」

「ええ」

今度はしつかりセラのペースに合わせて並走する。今度はしつかり守ってやらないとな。

こうして、俺の初陣は、セラを守るという覚悟と共に、勝利によって幕を閉じた。

数分後、悪魔勢力の前線基地のシャワールーム。

俺は体についた血を落としながら前世の事を考えていた。

『ば、化け物が！』

『来るな！来るなああああつ！』

『お前、人を殺して、何も感じないのか………？』

様々な言葉を残して死んでいく人々。その言葉の殆どが脳裏にこびりついている。

シャワーを浴びながら、俺は自分の右手を見る。先ほどの血は落としたが、この手は真つ赤に染まっている。

俺がそんな事を考えながらシャワーを浴びていると、誰かが入ってくる。

「失礼するよ」

「………兄さん」

兄さんがいつもの笑顔で入ってきて俺の横のシャワーを使う。気まずい無言の時間が流れるが、突然兄さんが口を開いた。

「あの墮天使の言葉、本当か？」

珍しく厳しい声音。墮天使たちの言葉は兄さんにも聞こえていたようだ。

「笑いはしましたけど、血が気持ち悪かったからですよ」

「………」

「………」

無言で俺を見てくる兄さん。俺も兄さんをまっすぐ見る。すると、兄さんはフツと笑った。

「ロイはやっぱり変わっているね。戦闘中にそんな事を気にするなんて」

「少しならいいですけど、さすがにあの量は気になります」

俺が苦笑しながら返すと、兄さんは思い付いたように言った。

「ロイ、場所にもよるけど、僕にもタメ口で構わないよ」

「いいんですか？」

「ああ」

俺の確認に頷く兄さん。なら、そうするのが礼儀というもの。

「わかった。場所にもよるが、タメ口でいかせてもらう」

「あはは……だいぶ変わるね」

「敬語は苦手なんだ。面倒だしな」

「面倒も嫌いだよね……」

「気にするな」

お互い苦笑しながら会話を続けているうちに血は落ちきっていた。

「そんじや、先にあがるかね」

「そうか。また後でね」

「ああ」

それを最後にシャワールームを出ようとすると、

「ロイ、いいか？」

兄さんに呼び止められた。

「?」

俺は疑問符を浮かべながら振り向くと、再び兄さんは真剣な表情になっていた。

俺が兄さんの言葉を待っていると、兄さんは訊いてきた。

「セラフオルーのこと、どう思っている?」

「セラフのこと?」

俺は聞き返しながら考えた。セラフは昔は苦手だった。だが、今はそこまで嫌いじゃない。いい。

「昔よりはいいと思っているが、あんまり変わらないな。昔から変わらない、いい『友人』だ」

言葉の通り、セラフはいい友人だ。いや、幼なじみか? まあ、セラフはこれから戦友になるかもしれないがな。

「……………そうか」

兄さんは少し残念そうに呟いた。俺はその呟きに首をかしげたが特に理由は聞かずにシャワールームを今度こそ後にした。

僕——サーゼクスは、ロイにセラフオルーをどう思うか確認してみた。多分だが、セラフオルーはロイに惹かれている。けれど、ロイはあまり気にしていない様子だった。僕は溜め息を吐きながら弟に恋する幼なじみの事を考える。

「これからも大変だな、セラフオルー」

そして、同時に疑問を抱いた。ロイは何かを隠している気がするのだ。ロイとは昔から競いあい、切磋琢磨してきた。だが、あの戦闘で見せた動きは、『戦闘に慣れた』ものに見えた。

「ロイ、あの動き、一体どこで……？」

僕の呟きは誰かに聞こえることはなく、静かに消えていった。だが、僕がやるべきことは決まっている。

——僕は、ロイが何者であろうと信じる。——
父様や母様もきつとそう思っている筈だ。ロイは、僕の弟なのだから……。

l i f e 0 5 幹部襲来

俺——ロイの初陣から一年ほど経った。

あれから何度も戦場に立ち、何人、何十人という堕天使を斬ってきた。

「はっ—」

「ぎゃっ!？」

また一人、袈裟懸けに体を斬った。そして周りを見回すと、なぜか俺に堕天使が殺到して来ているのがわかった。

まったく、面倒だ……………!

手にしていた直刀を大剣に変え、魔力を込めていく。大剣から紅の滅びの魔力がほとばしり、禍々しく光始める。そして、

「おらあああああっ—」

大上段から一気に降り下ろす!同時に大剣から放たれた滅びが堕天使たちを容赦なく飲み込んでいき、消し飛びしていく。

少しばかり疲れるが、効率はいいな。

そんな事を思いつつ、短く息を吐く。

セラや兄さんは別の戦場らしいからな、今回は助けにいけない。

周りを見れば、割りと悪魔が優勢のように見える。他の戦場はどうかはわからないが、最悪ここから増援として向かうことも出来そうだ。

何て事を考えた瞬間、俺の耳元に連絡用の魔方陣が展開された。そこから焦りの色が強い声が聞こえてくる。

『ロイ・グレモリー、聞こえるか!?!』

「はい。問題ありません」

『他の区画が劣勢のようだ！至急増援に向かってくれ!』

「わかりました」

なぜ慌てているのかは聞かずに答える。それと同時に連絡用魔方陣が転移用魔方陣に変わり、光が俺を包んでいく。

さて、鬼が出るか蛇が出るか、やるだけやるしかないか。

俺を包んでいた転移の光が弾け、視界が回復する。そして、そこに飛び込んできたのは――、

「な、何があつた……………?」

クレーターができ、その周囲の森が吹き飛び、焼けている光景だった。この近辺の地形が変わっているほどの戦闘の後だ。

ただの墮天使と悪魔の戦いではそう簡単にはならないであろうほどの爆撃でもされたような被害。悪魔の気配もほとんど感じない……………。

俺は目を閉じて周囲の気配を探る。何秒かやってみると、クレーターから少し離れた森から微弱な悪魔のオーラを感じる事ができた。その近くには強力な墮天使のオーラも感じる。

ここまでの被害を与えた墮天使。ただ者ではないだろうが、一つだけわかったことがある。

「セラ……………」

俺が感じた悪魔のオーラは、俺がよく知るセラのものだった。俺は即座に飛び出し、セラと墮天使のもとに向かう。

私、セラフォルーはロイと一緒にいくつかの戦闘を生き抜いていた。今回はロイと離れてしまったけれど、きつと大丈夫……………。

戦闘が始まってすぐの私はそう思っていた。けれど、それはすぐに否定された。

「弱い……………。噂の『紅髪^クの切り裂き魔^ム』はいないのか……………」

そう眩きながら数十人の悪魔を数秒で殺害した、ウェーブのかかった黒髪が特徴の墮天使。

初めて見るけれど、私よりは確実に強いことだけは先ほどの戦闘で理解できた。

そして、あの墮天使はロイとの戦いを望んでいる。墮天使たちはロイの事を『切り裂き魔』と呼び、出会うと真つ先に殺そうとしているのは私も知っている。

いつもならロイが勝ってくれるからいいけれど、あの墮天使はマズイ………！ロイは強いけれど、あの墮天使にはきつと勝てない。けれど、きつとロイは戦うはず………。私は、ロイを死なせたくない！

私は覚悟を決めて墮天使に魔方陣を展開しながら手を向ける。墮天使は私を見て見下すように言ってきた。

「貴様、手が震えているぞ？」

私はハツとして手の震えを抑えようとする。けれど震えが止まる気配はなく、余計に大きくなってしまったように思えてしまう。

それでも私は墮天使に言った。

「これは武者震いって言うの。知らないのかしら？」

「強がりは破滅を呼ぶぞ」

墮天使はそう言うやいなや、私に光の槍を投げつけてきた！私とはつさにそれを避け

たけれど、光の槍は地面に当たり爆発した！

ドオオオオオオオオッ！

「ッ!?!」

爆風に耐えながら私は驚愕した。今までの墮天使とは桁違いの威力。地面には大きなクレーターが出来上がり、森の木々を吹き飛ばして火事になっているほど。あんなものが直撃したら――！

「ハアアアアアッ!」

私は恐怖を隠すように叫びながら連続で氷の魔力を墮天使に放っていく！けれど、墮天使はその全てを手にした光の槍で、あっさりと切り払われてしまった。

私は舌打ちをしながら弾幕を濃くしていく。墮天使は少しずつ回避をりはじめていくけれど、当てる気配はない。

私の攻撃を避けながら墮天使は言った。

「これだから素人は嫌なのだ。相手が誰かもわからずに挑んでくる……………」

墮天使は溜め息を吐くと私の視界から消えた!?

気配を探り、とつさに上を見る。視界から消えた墮天使が突きを放とうとしていた!

マズイ、避けられない……………!

私はとつさに防御魔方阵を展開してその一撃に耐えようとする!そして、光の槍と防

御魔方阵が衝突した！その瞬間に私を凄まじい衝撃が襲いかかった！

「キヤアアアアツ！」

私はそのままクレーターに向けて落下していくと、先ほどの墮天使が先回りするように移動していた。

「ツ！」

私が見開くと同時に墮天使の蹴りが私の腹部に炸裂した！

「かはっ！」

肺の空気を吐き出しながら吹き飛ばされ、森の中に落下する。体中の痛みには耐えながら腹部を押さえて咳き込む。

「ツ！」

同時に胸に激痛が走り、表情を歪める。息が荒くなってまったく落ち着かない………。

骨が何本か折れちゃったかな？

私がそう思うと同時にゆっくりと墮天使が降り立った。

「生きているか。まったくしぶといな」

ウエーブのかかった黒髪を風になびかせながら、墮天使は光の槍を手元に作り出した。

「さて、『紅髪クリムゾンの切り裂き魔リッパ』には会えなかった。だが、悪魔を殺せたのだからいいか……」

そう言いながら近づいてくる堕天使。私は逃げようとするけれど、まったく体に力が入らない。

ここまで、なのかな？

私が死を覚悟した時、私の脳裏には色々な記憶が蘇ってきた。お父様やお母様と笑ったこと。サーゼクスちゃんに初めて会ったときのこと。……ロイと一緒に笑ったこと。

ロイ……私……。

堕天使が光の槍を私に降り下ろそうとしてくる。

私はその一撃を避けることも、防ぐこともなく、ただ受け入れるように目を閉じた……。

ガキンツ！

激しく金属がぶつかり合うような音が響き、続いて聞き慣れた声が私の耳に聞こえてきた。

「まったく、泣いてる場合かよ……」

その言葉を聞いて、私は目を開いた。私の視界には堕天使の槍を直刀で防ぐ紅髪の青

年の後ろ姿が写った。

「すまない、待たせたな！」

私に返しながら墮天使を押し返すロイ。

押し返した勢いで斬りかかるけれど、墮天使はそれを読んでいたように後ろに跳んで避け、距離を取る。その表情は狂喜さえ感じる笑み。

「待っていたぞ！ 『紅髪クリムゾンの切り裂き魔リッパ』 ツー！」

「おまえに言っただんじゃねえよ！」

紅髪の青年——ロイはそう返しながら墮天使を睨んだ。

俺は狂喜的な笑みを浮かべる墮天使を見る。

感じるオーラは今まで会った中でも別格。そして、まもっている雰囲気も狂喜を感じさせるやばい奴。

その墮天使に俺は訊く。

「おまえ、何者だ？」

墮天使はフツと鼻で笑うと皮肉で答えた。

「どうやら、悪魔はまともに若者を育てていないようだな」

今の一言。俺ではなく家族までバカにされたような気がして、俺はさらに強く墮天使を睨む。

「もう一度は訊かない。おまえは、誰だ」

墮天使は狂喜の笑みを浮かべて俺に言った。

「俺はコカビエル。『神の子を見張る者』の幹部だ」

「ッ!？」

俺とセラは墮天使幹部——コカビエルの一言で驚愕の表情を浮かべた。

こいつがコカビエル! 話には聞いていたが、まさかこんな奴だとは思っていなかった。

俺たちの驚愕をよそに、コカビエルは言う。

「さあ、殺るぞ、『切り裂き魔』! 俺はおまえを殺しに来たのだからな!」

「……………」

コカビエルの一言と共に高まっていくオーラ。

俺もそれを感じつつ、後ろに倒れているセラに振り向かずと言う。

「セラ、俺がこいつを引き離すからさっさと逃げろ」

「ロイ!？」

セラは驚愕しているが、コカビエルは確実に俺を狙いにくる。ならセラが巻き込まれるリスクを減らしたい。

「大丈夫だ。最悪、刺し違えてでも殺すさ」

俺は少しだけセラの方へ振り向き、安心させるように笑みを浮かべてそう言った。

セラは今にも泣き出しそうな顔をしているが、構わずコカビエルの方へと向き直る。

「話は終わったか？」

「ああ。悪いな、待たせちまって」

「構わんさ。これから楽しくなるのだからな!」

俺はゆつくりと息を吐きながら足を肩幅に開きつつ重心を少し落とし、両手で直刀の柄を握る。そのまま右足をさげて半身に構えると切っ先をコカビエルに向ける。いわゆる霞の構えだ。

「行くぜ?」

「来い!」

俺は飛び出し、勢いのまま突きを放つ!だが、コカビエルは光の槍の槍でそれを受け止めた!

俺は構わずに無理やり押し込んでいく。直刀と槍は激しい火花を散らし、それを見た

コカビエルは再び笑った。

「そうだ！その一撃、その速さ！俺が求めていたものだ！」

「うるせえ！」

俺はそう怒鳴り光の槍を上弾き、空いた腹に右から水平斬りを放つが、

ガキンツッ！

コカビエルが左手に生成した槍で受け止められた！コカビエルは同時に上段から槍を降り下ろしてくる！

俺は素早く左手を開けて逆手持ちになるように直刀を生成、それを受け止め、体の左側に競り合いながらそらす。

右を緩めたら押し負け、左を弱めたら斬られる！だったら！

俺は蹴りを放とうとするが、コカビエルも同じ事を考えたようで、二人の右足の蹴りが同時に相手に炸裂した！

「かつ！」

「くっ！」

二人同時に後ろに転がり、片ひぎをつきながら腹部を押さえる。地味にくる一撃、後で効いてきそうだな。

俺は息を吐きながら立ち上がると、コカビエルも同時に立ち上がる。

幹部の名は伊達じゃない、か。

ちらりとセラの方を見る。いつもと違い、不安そうな顔で俺を見てきている。

俺はセラを助けるためにも、文字通り『死ぬ覚悟』を決めてコカビエルを睨んだ。

l i f e 0 6 全てを賭けて

俺——ロイの表情が変わったことを察し、コカビエルは笑みを強くした。

「表情が変わったな。ようやく本気というわけか？」

「なに、ちよつとヤバイと思っただけだ」

俺とコカビエルはそのやり取りを終えると同時に飛び出す！

俺が直刀の一撃を大上段から降り下ろし、コカビエルがそれを受け止め、そのまま弾き返してくる。

無防備になった俺の腹にコカビエルは再び右回し蹴りを放ってくるが、それを左腕で止め、そのまま掴む。

そのままコカビエルの右足に左手に生成したナイフを突き刺そうとするが、コカビエルは左足でも蹴りを放って来た！

無論、両手がふさがり攻撃に集中しすぎていた俺は、それに反応することは出来ずに蹴り飛ばされる。

「ツ——」

勢いのまま吹き飛ばされるが、素早く翼を展開して体制を整え、同時にコカビエルに

刺し損ねたナイフを投げつける。

コカビエルはそれを弾き返しながら俺に突撃、光の槍で突きを放とうとしてきていた。

吹き飛ばされた勢いを殺しきった俺は地面に両足をつけ、踏ん張りながら直刀を右脇に構える。

コカビエルは顔を狙って勢いよく突きを放ってくるが俺は首をかしげるようにしてそれを避け、無防備になった腹に向けて一気に直刀を振り抜く！

………取った！

その瞬間に俺はそう思ったが、俺の手には固いものを斬ったような感覚があった。

俺が違和感を感じながらコカビエルの腹部を見ると、鋼鉄のようになった翼を使って腹部をカバーしていた。

驚愕する俺はハツとして身を屈める。一瞬後に光の槍が俺の頭の上を通りすぎていく。

俺は右手を地面につけて体を支え、左足で足払いを狙うがコカビエルは軽く跳んでそれを回避。

俺は回った勢いで立ち上がり、回し蹴りを放つ！が、あっさりと受け止められ、そのまま勢いよく近くの木に叩きつけられた！

「かはっ！」

俺は肺の空気を吐き出しながら、そのまま抵抗できずに投げ飛ばされる。

俺が歯を食い縛りながら体制を整えようとした直後、コカビエルは光の槍を投げつけてきた。

直刀を投げつけて光の槍に当てると二つのエネルギー体がぶつかつた影響か、大爆発が起きた！

俺はとつさに気配を殺し、木の影に隠れる。

「はあ……はあ……」

息を整えながら頬を流れる血を拭い、状況を整理する。

セラから離れることには成功した。が、勝てるかどうかは微妙、いや、無理かもな……。

さっきの一撃も避けきれていた筈だが、頬が浅く切れている。本体以上に範囲が広いようだ。

俺が額の脂汗を拭うと同時に鳥肌がたつた！考える間もなくその場にしゃがみこむと、俺が隠れていた木が叩き斬られ、盛大な音とともに倒れる。

俺は転がるようにその木から離れ、素早く振り向き切り株の向こうを睨む。

コカビエルが笑みを浮かべて俺を見てきていた。

「甘いな。その程度、隠れているとは言わん」

俺は溜め息をついた。この感じだと、奇襲は出来なさそうだ。

俺は立ち上がり、直刀を生成し直して刀身に魔力を込めていく。刀身の紅色が少し黒みがかかり、小さな雷のようなものが刀身を走り始める。

それを見てコカビエルは笑う。

「刀身に込める魔力量を増やしたか。確かにそれなら一撃の威力が増すが、消耗もしやすいだらう?」

「確かにそうだが、もとより長期戦は望みじゃないだらう?」

「確かに、それもそうだな」

俺の質問にコカビエルは笑みながら答えると、何かに気がついたように言ってきた。「貴様、あの女を助けるため距離を取ったのだらう?」

「?」

コカビエルの質問に俺が疑問符を浮かべていると、コカビエルは言った。

「あの女を殺せば、おまえはもつと本気になるか?」

「……………は?……………セラを……………『殺す』?」

俺はコカビエルな言葉を一瞬だけ理解できなかつたが、その一撃が過ぎた瞬間、俺の中の何かが切れる音が聞こえた気がした。

「そんな事——」

俺はコカビエルを睨みながら直刀に魔力をさらに込めていく。まるで、今まで自分に眠っていた何かが目覚めたように、魔力量が膨れ上がっていく。

「やらせるわけ、ねえだろ……!」

言い切った瞬間、魔力が全身から放たれる! 直刀と同じような現象が体からも起り、小さな雷に当たった地面や木を焦がしていく。

コカビエルはそれを感じてさらに狂喜的な笑みを見せた。

「ハハハハハッ! いいぞ! いいぞっ!」

同時にコカビエルは飛び出してくるが、俺は直刀をしっかりと握りコカビエルを迎え撃つ!

俺とコカビエルの得物がぶつかり合い、先程よりも激しく火花が散る。

「らああああああっ!」

「チッ!」

俺は強引にコカビエルを押し切り、体制を崩させる。

コカビエルは舌打ちをしながら一对の翼を鋼鉄のようにして、俺を連続で攻撃してきた!

俺は素早く直刀を左手にも生成して二刀流にすると、それを捌いていく! それを見た

コカビエルは翼を十枚に増やし、攻撃を激しく始めた！

墮天使は幹部までになると翼は一对だけではない。こいつも何本あるかわからんな！

俺は連続で捌いていくが、少しずつ体を斬られ始め、

体のあちこちから血を流し始める。だが、その痛みは歯を食い縛って耐える！

ここで倒れたらセラが殺される……！そんな事、やらせるわけにはいかねえ……！

そう思った瞬間に俺の魔力量がさらに増し、爪先にも滅びの刃を展開、少しずつコカビエルの攻撃が見えるようになってきた。

そして、増えた刃で翼の猛攻を捌いていく中で、捌かれた瞬間に一瞬の隙が生まれることがわかった。だったら！

俺はコカビエルの翼を捌いた瞬間に一気に懐に飛び込んだ！コカビエルはそれにあわせて光の槍で突きを放ってくるが、俺は跳躍してコカビエルの頭の上で体を捻りながら反転。そして――、

「フッ！」

翼の根本に狙い済ました一撃を放った！

ビチャ………！

「がああああああ!!」

コカビエルの翼の一つを落とした。

翼は魚が陸で跳ねるように動くが、すぐに動かなくなる。

コカビエルは激痛に耐えるように歯を食い縛り、残った翼で俺を攻撃してくる！

俺は避けようとするが、急に足の力が抜けてしまい、左肩にもろに食らってしまった

！

「がつー！」

斬られた左肩から大量の血が流れる。それに構わず翼を切り払い、俺は後ろに飛び退く。

斬られた左肩を押さえるが、その程度で血は止まることはなく、大量の血が出続けている。それに、左腕がダラリと下がって動かすことができなくなってしまった。

「はぁ……はぁ……」

「はぁ……くっ！」

お互い息を荒くしながら相手を睨む。俺はコカビエルを睨みながらも片ひざをついてしまった。

血が出過ぎだな。これは、マズイ……………。

俺は痛みに耐えてコカビエルを睨み、そのコカビエルは背中から大量の血を流しながら憎々しげに言ってきた。

「悪魔ごときが、俺の翼をッ！」

「カラスみたいに汚い羽だ。……要らないだろ？」

「貴様ああああッ！」

俺が言うやいなや激昂しながらコカビエルが突撃してきた！俺は避けようとするが、全く足に力が入らない。

「チッ！」

俺は舌打ちをしながら即席で右手に盾を生成する。そして、

ガキインッ！

コカビエルの突きを盾で受けるが、踏ん張ることが出来ない俺は激しい衝突音と共に吹き飛ばされる！

地面を転がり、立ち上がった俺の目に迫りくるコカビエルの姿が写る。

俺は足を懸命に踏ん張り、迎え撃つ姿勢を取る。そこにコカビエルの放った突きを右に飛び込むように避ける。

その勢いを片ひざをつくようにして殺し、コカビエルの方を向いたとき、コカビエルが光の槍をまさに振り上げようとしていた。俺はとっさに避けようとするが、まだ体に力が入らない。

俺はとっさに後ろに上体をそらす——、

「……がつー！あああああああッ!?」

焼けるような激痛が右目を襲い、俺は絶叫しながら右目を押さえて地面をのたうち回る。

「はあ……はあ……くく、ここまでだな」

コカビエルの声に反応して、痛みに耐えながらそちらに目を向ける。

無様に倒れる俺に、コカビエルは余裕そうな笑みを浮かべて近づいてきていた。

こいつは間違いなく俺を殺す。そして、その後にはセラも殺す……。

俺は右目の痛みに耐えるように歯を食い縛り、再び立ち上がる。

何としても、例え命に変えても、セラを守る……！

再び覚悟を決めた俺は左目でコカビエルを睨む。そんな俺を見て、ようやくコカビエルは表情を変えた。まるで、化け物を見るような、恐怖を感じたような目だ。

俺は呟くようにコカビエルに言う。

「その顔が見たかった……」

コカビエルはハツとしたように光の槍を生成する。

「貴様は危険だ！……ここで殺す！」

コカビエルは肉薄し、突きを放ってくるが、再び右手に盾を生成してそれを受ける！

ガキンッ！

「なっ!？」

コカビエルが驚愕の声を漏らした。先程まで吹き飛ばされ続けた俺が耐えたのだ。驚きもするだろう。

「な、なぜだ!？」

「フツ……………」

俺は笑いながらコカビエルを弾き返す。そして盾を素早く直刀に変えて降り下ろす。が、あっさり回避けられてしまった。

俺は足の裏にスパイクのように刃を生成して今の一撃に耐えたのだ。それを知らないコカビエルは少し焦り始める。

「チツ…いい加減に死ね!」

舌打ちをしながら再びコカビエルは突撃してくるが、今度は下から挟り込むように突きを放ってきた!

もちろん盾でそれを受けるが、受けた瞬間に衝撃で俺の体が浮き上がってしまった!

「しまった!」

「(ッ)だな!」

光の槍を風ぎ払ってくるコカビエル。盾でそれを受けた瞬間に俺は弾き飛ばされた

!

木々の枝でさらに傷を増やしながら吹き飛ばされ、森の開けた場所できやく止まる。

「はあ……はあ……ごほっ！」

息を整えようとするが、息の変わりに出てきたのは血だった。何カ所か、骨が逝ったか……。

俺は震える足を懸命に踏ん張り、直刀を杖変わりにして立ち上がる。相変わらず左腕が動かず、ダラリと下がったままだ。

俺がそれを見て苦笑していると、コカビエルが肩で息をしながら現れた。

「まだ生きているのか……!?だが……！」

光の槍に今まで以上に光を濃縮し、刀身を細くしていくコカビエル。貫通力を上げ、盾を出されても突破出来るようにしているようだ。つまり、今度こそ終わらせるつもり……。

逃げようにも、立っているのがやっつとだし、防ぐのは、無理だろう。

ここまで、か……。すまねえ、セラ。守ってやれなかつたな……。

どこか諦めのついた俺の腹部に、焼けるような感覚が走った。ボヤける視界には、俺の腹部に突き刺った光の槍が写る。すでに刺されているようだ。

「これで終わりだな……！」

「コカビエルの一言に完全に諦めがついた俺は、そのまま意識を手放そうとした瞬間――」

「ロイイイイイッ！」

セラの泣くような叫び声が聞こえた……………。

――

私――セラフォルーは懸命に森を走り、少し開けた場所に出ようとしていた。森の至るところに残るオーラを追ってロイを探しているうちに開けた場所に出た。そして、私の目に、

「これで終わりだな……………」

コカビエルに腹を貫かれたロイの姿が写った。

そ、そんな、嘘、でしょ……………？

私は体に入らなくなり、へたりこむようにその場に座り込む。そのままロイを見る。全く動く気配はなく、もしかしたら――。

「ロイイイイイッ！」

私は最悪の結果を否定するように彼の名前を叫んだ！ロイが簡単に死ぬわけない！

ロイは私が、初めて――！

私はハツとしてコカビエルを見る。先程の叫びのせいで私に気がついたようで、肩で息をしながらこちらを向いていた。

「あい……つ。ま……だいたの……か」

かすれる声でそう言うと、消えかけの意識が再び戻ってくる。まだセラの奴は逃げていないようだ……。

光の槍を引き抜こうとしたコカビエルの右腕を左手で掴む。同時に左肩から大量の血が吹き出す。

「ツ!？」

掴まれたコカビエルはゾツとした表情になりながら俺を見る。俺は逆手持ちになるように右手にナイフを生成し、コカビエルの顔面を狙って降り下ろす！

「クツ！」

コカビエルはとつさに左手で防ごうとするが、その一撃は左手を貫き、左目の下当たりに浅く刺さる。

コカビエルは俺の腹に刺した槍を動かして抉ってくるが、あまり痛みは感じない。俺はありつたけの力をナイフと右手に込め、一気に上に振り抜いた！

「あああああああああッ！」

「があああああッ!?!」

同時に腹に刺さった光の槍が消え、コカビエルは絶叫しながら後ろに倒れ、先ほどの俺のようにならうち回る。俺も振り抜いた勢いで後ろに倒れた。

消えかけの意識を懸命に保って上体を起こすと、コカビエルが左目を押さえながら俺を右目で睨んできていた。

いつの間にかセラが駆け寄ってきており、セラが盾になるように俺の前に立つ。

「逃げろ……………セラ……………！死ぬぞ……………!」

俺は絶え絶えの意識でそう言うが、セラは、

「逃がない！だって、私は——ッ!」

セラが何かを言おうとした瞬間、セラの盾になるように何か上空から落下してきた。土煙を上げながら着地したそれは、

「まっ……………たく……………遅い……………ぜ…」

「ごめん。待たせたね……………」

今まで見たことがないほど、冷たい雰囲気を持つ兄さんだった。

life07 撤退、そして……

今まで感じたことがないほど冷たい雰囲気の兄さんは、左目を押さえるコカビエルに言った。

「グリゴリ幹部、コカビエルとお見受けする」

「ああ、そうだが？」

コカビエルは強がるようにそう返し、兄さんに訊いた。

「そう言う貴様は何者だ？」

「貴殿に滅びを送るものだ………！」

凄まじい怒りを隠そうともせず、兄さんはコカビエルにソフトボールサイズの滅びの球体を放った！

コカビエルは九枚の翼を展開して飛び上がるとうまく避けていく。

だが、明らかに動きが悪く、今にも当たりそうだ。

このまま倒してくれ………！

俺がそう願った瞬間、俺たちの上空に積乱雲が発生し、ゴロゴロと稲光を放ち始めた。

「ヤバイな………兄さんッ！」

「わかってるよ！」

俺が呟くと同時に兄さんが攻撃を中断して俺を左肩に担ぎ、距離を取り、セラもそれに続いて逃げ出す。その一瞬後、俺たちのいた所に雷光が突き刺さった！

地面が穿たれ、クレーターが出来上がるが、それはコカビエルよりも明らかに大きなものだ。

同時に俺の視界がまたボヤけ始める。

懸命に意識を保っていると、コカビエルの横に一人の墮天使が着地する。ガタイがよく、まどついているオーラもコカビエルと同等かそれ以上のものだ。

「コカビエル、アザゼルから撤退しろとの命令だ」

「何だ?! バラキエルッ! ここで引けと言うのか!」

バラキエルッ!?! グリゴリの幹部で『神の雷』とかいう異名があった筈だ!

墮天使の幹部が二人でこっちは三人。だが、俺もセラも怪我しているから、まともな勝負は出来ねえな。

俺が霞む意識の中、懸命に頭を働かせていると、バラキエルの一言でその思考がぶっ飛んだ。

「そうだ。天界の『聖書の神』と『天使』が動き始めた」

「チッ!」

「「なっ!?!」」

バラキエルの一言にコカビエルは舌打ちをし、俺たちは間拔けな声を出してしまっ
た。

天界つてのは、俺たち悪魔が住む冥界とは逆、天使たちが住む楽園だ。わかりやすく
言えば、冥界が地獄で、天界は天国って感じだな。

バラキエルは驚く俺たちに構わずコカビエルに訊く。

「その目にその翼、誰にやられた?」

「あそこで無様に担がれているやつだ。あいつが噂の『紅髪クリムゾンの切り裂き魔リッパ』だ」

その一言にバラキエルは少し驚きながら俺を見てくる。

「……噂よりも若いな」

「だが、腕は本物だ。俺の翼と左目を……!」

「とにかく引くぞ。一度状況の整理が必要だ」

バラキエルはそう言うのと、コカビエルと自身を囲むように転移の魔方陣を展開する。

転移の光に包まれる中、コカビエルが憎々しげに叫んだ。

『切り裂き魔リッパ』ッ!次こそは殺す!待っているよ!』

同時にコカビエルとバラキエルは転移の光に消え、この場は静寂に包まれる。

コカビエル、また殺りあうことになりそうだな……。

俺は山場を越えた安心感を感じながらこれからの事を考えていると、また視界が霞み始め、意識が消えそうになる。

「ロ——。だい——か!?!」

「——い!しっ——して!」

兄さんとセラの叫びを聞きながら、俺は今度こそ意識を手放した。

——

僕、サーゼクスの肩でぐったりとして動かなくなるロイ。嫌な予感がして来てみればこんなことに。……もつと早く来ていれば!

僕が後悔の念にかられていると、セラフォールが焦りながらロイに声をかける。

「ロイ!ロイツ!しっかり、しっかりして!」

ロイの左肩と右目から大量の血が流れており、このままでは危険だ。早く運ばなければ!ば!

僕は一旦高度を下ろし、ゆっくりと着地する。セラフォールも僕に続いて着地すると、ロイをセラフォールに預ける。

「セラフォール、ロイを頼む!とりあえず傷口を凍らせるんだ!」

「わ、わかったわ！ロイ！しっかり！」

セラフォルーが慎重に魔力を操り、ロイの傷口を凍らせて止血する。それを横目に確認しながら連絡用の魔方陣を展開する。

「隊長！救護班を早くお願いします！」

『どうした、何があった!?!』

焦る僕の声で何かがあったことを察した隊長は、少し慌て気味に聞き返してくる。僕は早口で告げる。

「ロイがコカビエルと戦闘を行い負傷！このままでは危険です！」

『……ッ！わかった！すぐに救護班を送る！』

隊長は驚愕しながらも素早く返事を返してくれた。そこで連絡用魔方陣を消して周囲を警戒する。もしかしたらどこかに伏兵がいるかもしれない。

セラフォルーは声を震わせ、目を涙を浮かべながらロイに声をかける。

「しっかりして……！目を開けて……！」

セラフォルーの声が届いていないように、ロイは意識を失ったままだった。すると、僕たちの横に魔方陣が展開され、そこから何人かの悪魔が現れる。

「待たせた！怪我人は!?!」

「()です！」

セラフォルーが真っ先に反応してロイを指差す。救護班の悪魔の男性が倒れるロイに近づき、表情を強ばらせながら脈を計る。

「気絶しているだけだな。よし、運ぶぞ！慎重にな……」

『はいー！』

ロイが慎重に魔方陣まで運ばれ、セラと僕もついていく。

ロイ、死なないでくれ……………！

この時の僕は、ただロイの無事を祈るしかなかった。

—

「瀕死の重症です。いつ目を覚めますか……………」

「そんな。ロイは大丈夫なのですか？」

誰かと誰かの会話で少しずつ意識が戻ってくる。俺、どうしたんだっけ？コカビエルと戦って、それで……………。

「ッ!？」

俺はハツとするように上体を起こし、そして、

「いだだだだッ！」

身体中の痛みで再び倒れる。背中には布の柔らかい感覚、そして感じる消毒液の独特の臭いから察するに、ここは病院か？

俺がそれを確かめようと首だけ動かすと、視界の先に驚愕の表情を浮かべた父さん、母さん、兄さん、医者と思われる男性。そして、

「ロ、ロイイイイ………」

目に溜まつた涙を拭いながら俺を見るセラの姿が写った。

父さんたちの格好は戦闘が一段落したのかいつもの格好だ。セラは患者服と思われるものを着ている。

「えと、何がどうなった？」

俺が首をかしげると左肩に激痛が走り、表情を歪める。

「いつつ……、これは響きそうだな」

そう言いつつ体を見ると、体の至るところに包帯が巻かれており、右腕には点滴が繋がれている。

そんな俺を見て、父さんがハツとしながら言ってきた。

「ロイ、大丈夫か!?!どこか痛むか!?!」

そう言いながら俺の両肩に手をついてくるのだが、左肩に再びの激痛が……!!

「父さん、父さん!痛い!左肩が本当に痛い!」

「ああ、すまない……」

謝りながら手を離す父さん。本当に、痛かったな……。

そして、俺は今さらながらあることに気づいた。

視界の右半分が黒くなっているのだ。正確には、見えていないと言うべきか。

俺が右目を触ろうとすると、顔に巻かれた包帯に阻まれる。俺が溜め息を吐くと、医者と思われる男性が言ってきた。

「まさか、（ト）まで早く目を覚ますとは……」

医者の計算は時々当てにならないからな。余命二ヶ月と言われて数年生きる奴だっているぐらいだし。

その医者に母さんが珍しく不安そうに訊く。

「それで、ロイの目は……?」

医者は少し表情を強張らせ、そして断言するように言った。

「もう視力が回復することはないでしょう。堕天使の光が強力なことあり、『フェニックスの涙』の効き目も薄いです」

フェニックスの涙、本当ならあらゆる怪我を直す便利アイテムだ。その名の通り、（ななじゅうふたはしら）

七、二柱の三七位、フェニックス家が作っている。それでも治らないとなると、もう無理だな。

何とも言えない雰囲気、病室だが、医者は言葉を続ける。

「左肩もかなり深く斬られており、後遺症が残ってしまうかもしれません」

それを聞いた俺は優しく自分の左肩に触れる。それでも少し痛いほどであり、相当深くいかれたことはわかる。

「しばらくは絶対安静です。戦線復帰は、無理かもしれません」

医者は絞り出すようにそう言った。戦線復帰は無理……？

俺はそれを否定するように言った。

「怪我を治したら、また出ます」

「「ッ!?!」」

父さんたちは驚愕していると、セラが俺の右手を掴んで語気を強めて言うてくる。

「ロイ、無茶はダメよ！今度こそ——」

「殺される、か？」

「——ッ！それは……」

俺が遮るように言うと、セラは言葉を詰まらせた。そこに畳み掛けるように言葉を続ける。

「悪いが、俺は戦場に出なきゃならないと思ってる」

「……なんで？」

セラが涙を浮かべながら訊いてくると、俺は真剣な表情でセラの手を握り返しながら言う。

「コカビエルと俺は決着がつけられなかった。あいつの左目も潰したが、その程度じゃあいつは止まらないし、周りも止めない筈だ」

「何が言いたいんだい？」

兄さんの質問に、俺はセラを見ながら答える。

「あいつは、セラに気をそらしたせいだ目を潰された。下手したらセラを狙うかもしれない。なら、セラを守ってやらないと」

俺はあの時の戦闘と、今の少しの時間であることがわかった気がする。

俺はあの時、セラを守ろうと必死だった。あの時諦めたのに、セラの声を聞いてまた戦えた。俺は――。

「セラ」

「なに？」

俺は真剣な表情で、俺の右手を握るセラの目を見てしつかりと言う。

「俺、セラの事が好きだ」

「……………」

セラは間抜けな顔をしながら俺を見てきている。

あれ？聞いてなかったか？ならもう一回。

俺は一度咳払いをしてからセラにもう一度言う。

「セラ、『好き』だ」

再びの俺の告白に、セラは顔を真っ赤にしながら後ろを見る。俺は疑問符を浮かべながらそちらに目を向けると、

「ロイにも春が来たか……………」

「誰かさんと違つて大胆ね」

「ロイに先を越されたか……………」

「私は、どういう反応をすれば……………」

喜ぶ父さん。父さんを見ながら懐かしむ母さん。少し残念がる兄さん。オロオロする医者という状況に。

……………考えてみれば、俺は家族の前で告白したのか……………。

その事実がわかった瞬間に俺は耳まで真っ赤になった。だって、そうだろう!? 家族全員の前でいきなり告白したんだぞ!?

俺が慌てて次の言葉を探していると、

「こうしてはいられない。シトリー様を探してくる！今は後方にいた筈だ！」
部屋を飛び出していく父さん。

「では、私たちも席を外しましょうか」

「そうですね、お母様」

頷きあつて退室する母さんと兄さん。

「何かあつたら、呼んでください。ああ、ここであんなことやそんなことはしないでくださいね?」

謎の言葉を残して退室する医者。そして、

「……………」

「……………」

無言の俺とセラ。この気まずい空気をどうにかしようと言葉を探していると、セラが嘆息しながら言った。

「告白してくれるのはいいけど、もつと場所を考えて欲しかった……………」

「ダメか?」

俺が少し不安を感じながら言うとセラは首を横に振り、言葉を続けた。

「いいえ、あなたらしいわ」

「そうかもな」

セラは優しく右目を隠す包帯に触れる。

俺はその手を取り笑みを浮かべると、セラもつられるように笑みを浮かべた。

「ロイ。私もあなたの事が大好き」

セラの言葉を聞いて、俺は心の中でガツポーズを取った。これでもちよつとだけ不安だったからな。

「そうか、なら、よかった……」

俺は不甲斐なく、そこで意識を失ってしまった。

それは度重なる疲れからか、それとも、セラへの告白が成功した安心からなのかは、よくわからない。だが、今だけは、後者だと信じている。

私——セラフォルーは思わず苦笑した。

告白した直後にまた気絶するなんて、ロイも疲れているのかな？その割にはすごい安心したような表情だけだ。

私は息を吐きながらロイのベッドに腰を下ろす。ロイよりはましだけど、私も何本か骨が折れちやつてしまえば、入院しなくちゃいけない。

出来ればロイには戦ってほしくはないけれど、ロイが戦うと言うのなら、

「私がロイの目になってあげる。だから、一緒に生き残りましょう」

私はそう言うと、周囲をキョロキョロと確認してからロイのベッドに潜り込んだ。病院のベッドは意外と小さいから私の体がロイに覆い被さるようになってしまうけど、重くないかな？

私はそんな心配をしながらロイの胸に耳を当てる。

ドクン………ドクン………ドクン………。

ロイの心臓の音が私を落ち着かせてくれる。私たちならきつと大丈夫。きつと生き残れる。

私はそう思いながら、ロイの胸に顔を埋めて襲ってくる眠気に身を任せた。

l i f e 0 8 第三勢力、乱入

俺——ロイはセラに告白してから寝てしまい、今しがた目を覚ましたのだが、

「すう……………すう……………」

なぜか俺の体に覆い被さるように密着して眠るセラの寝顔が俺の目に写った。小さい頃から何度か見ているが、かわいいう寝顔だな。

俺がそんな事を思いつつ、セラの頭を撫でると、

「ロイ〜」

「？」

寝言で俺の名前を呼んできた。俺が首をかしげるとセラは続きを口にする。

「大好き〜」

「……………」

不意打ちの言葉で思わず固まる。さつき聞いたとはいえ、なんか恥ずかしいな。

俺は顔を赤くしながら窓の外を見る。冥界特有の紫色の空がどこまでも広がっている。

久しぶりに青い空も見たいもんだな……………。

俺はそんな事を思いながら、再び眠りについた。

翌日の朝。

「……………」

「……………」

俺はベッドの上で表情を強張らせ、セラは床で正座をさせられていた。

俺も正座させられそうになったが、体を動かすだけで激痛が走るので保留となった。

で、セラを正座させているのが、

「二人とも、説明を……………」

青筋を立てた母さんだ。いつもの激怒モードで俺とセラを交互に睨んできている。

なぜこうなったかは、もうわかる。俺とセラは一晚密着して寝ていたのだ。セラが起きてベッドから降りようとしたらちようどそこに母さんが入ってきた。

セラが母さんに手振りを交えて話す。

「その、ロイが寂しそうだったので、つい……………」

母さんはそれを聞いて俺に視線を向けてくる。ここは話を合わせておくべきだろう

か。

俺が口を開こうとすると、母さんが先に言う。

「セラフォルを庇おうとは思わないことね。怪我が治ったら容赦しないわよ？」

本気モードの母さんを前に、俺はハッキリ言うことにした。

「寝て起きたらセラがベッドに入っていました」

「ちよつと!?!ロイ!?!」

庇ってくれると思っていたであろうセラは慌てるが、母さんに睨まれて大人しくなる。

何かされるにしても、一応ながら彼女も怪我人なので手加減はしてくれている筈だ。

「そう。セラフォル、ちよつと来なさい」

「あの、おぼ様？」

「来なさい……………」

「はい……………」

母さんに連れられて部屋を後にするセラ。まあ、出ていけとも言わなかった俺も俺だ
と思うけどな。

—

「セラフオール、話はわかるわね？」

「はい、おば様……………」

私——セラフオールは若干ながらショックを受けていた。まさか、ロイがあつさりとして裏切るなんて……………。

しょんぼりしている私におば様が言った。

「それは、これからはおば様ではなく『お義母様』と呼びなさい」

「……………え？」

私は間抜けな声を出してしまった。あの厳しいおば様が、さっきのことを咎める様子ではなく、それよりも、お義母様と呼びなさいと言うなんて！

私が驚いていると、おば……………お義母様が言う。

『『え？』ではありません。先程言った通りです』

「わ、わかりました！お義母様！」

私が慌てながらそう言うのと、お義母様は笑顔で私の頭を掴んできた。

「あ、あの〜？」

「では、早速。娘への教育をしましょうか……………」

この感じだと、まだ解放はされないみたい……………。

あれからそれなりに時が経ち、俺はようやく戦線に復帰。今までと変わらずに墮天使相手に頑張っていたのだが、毎回最終的にこうなる。

「だあああああッ！」

「はあああああッ！」

俺と相手の墮天使の得物がぶつかりあい、凄まじい衝撃が戦場を揺らした！その相手とはもちろん、

『『切り裂き魔』ッ！今度こそ殺す！』

「くそ、しつげえな！何回目だ!？」

コカビエルだ。左目に眼帯をつけ、左手に包帯を巻いて戦線に復帰していたようだ。そんな事を言う俺も右目に眼帯をつけてるがな！

俺たちの周辺に展開していた悪魔と墮天使は、俺たちの邪魔にならないように散ってしまっている。

俺はコカビエルとつばぜり合いをしながら言う。

「お互い、結構ボロボロだな！」

「はッ！喋る余裕があるとは、貴様らしいな！」

俺とコカビエルはほぼ同時に後ろに下がり、ほぼ同時に得物を投げつけるが、それが狙ったかのように衝突して爆発が起こる。

俺は息を吐きながら直刀を生成。煙が晴れるとコカビエルも手に光の槍を生成して構えていた。

毎回のようにこうなる。まるで合わせたかのように俺が行くところにはコカビエルが現れ、戦闘になるのだ。

そして、問題はこれだけではない。

「くそー！天使が来たぞッ！」

「チッ！」

悪魔か墮天使の誰かの叫びを聞いて、俺とコカビエルは同時に舌打ちをした。

俺が入院している間に天界の『聖書の神』と『天使』がこの戦争に乱入してきたのだ。天界的には敵をまとめて滅ぼせるからラッキー的なことを考えているに違いない！

「コカビエル！勝負は預ける！」

俺はそう言つて逃げようとするが、

「今回ばかりは逃がさん！」

コカビエルは素早く肉薄してきて光の槍を大上段から振り下ろしてきた！それを直

刀で受け止め、再びつばぜり合いになる。

「言つた筈だ！今度こそ殺すとな！」

「おまえに構つていたら命が足りねえつての！」

光の槍を弾き返して腹部に目掛けて右手で握つた直刀で突きを放つが、コカビエルは素早く光の槍を戻して直刀の切っ先に当て、軌道をそらす。

軌道がそらされた一撃は空を突くが、俺は左手に直刀を逆手持ちになるように生成して一気に振り抜く！

それをコカビエルは余裕を持つて後ろに飛び退くことで回避する。そこに左手の直刀を投げつける！

コカビエルはスウエーをするようにしてそれを避け、俺に笑みを向けてきた。

「貴様の動きはもうわかる。運命に引かれるように何度も出会い、ぶつかりあつてきたからな！」

「気持ち悪いこと言いやがつて！そういうのは女に言え！」

「女がいたら戦うなど言うのか!?!」

「そんな事は言つてねえだろうが！あー、もう！むかつく！」

そうなのだ。俺とコカビエルは何回も、何十回も戦つてきた。お互いに動きの癖はわかつてきた。そのせいで今の訳のわからない会話が出来るほどだ。

そんな俺たちに大量の光の槍が飛んでくる。俺とコカビエルはそれに反応して全て体捌きだけで避けきり、溜め息を吐いた。

俺たちの視界の先には白い羽を生やした男女がたくさん。先ほど発見された天使の一団だろう。

「くそー！」

「チッ！」

俺とコカビエルはそれを見て表情を歪めながら、

「勝負の邪魔をするなあああっ！」

同じ事を言いながら同時に天使の一団に突撃していった！

「オラオラオラ！どうしたッ！」

両手に直刀を生成し、独楽のように回転して連続で天使を切り刻んでいき――、

「どうした？もつと俺を楽しませろ！」

視界の隅には天使たちを連続で突き殺していくコカビエルが写る。

そんな俺とコカビエルによって開けられた穴に悪魔と墮天使たちが突入して一気に乱戦の様相となった！

俺はコカビエルから視線を外し、近くにいてであろうセラの姿を探していると、視界の先にセラと、ある女性天使の姿が写った。女性天使の方はウェーブのかかったブロン

ド髪が特徴のように見える。てか、遠くてよくわからんな。

俺が目を凝らしていると、

「見つけたぞ！」

コカビエルが悪魔と天使を蹴散らしながら突撃してしていた！その勢いのまま突きを放とうとしてきている！

速度的に回避は出来るが、周りからの流れ弾が怖いからな！

俺は即判断を下して、盾を作り出し、衝撃に備える！そして、

ガキイイインツ！

戦線に響き渡る衝撃音！空中で踏ん張れない俺は勢いよく吹っ飛ばされてセラの方

向に……………。

「なあああああ!?セラアアアアアツ！どけえええええつ！」

「え？キヤツ！」

俺の叫びに反応したセラは素早く飛び退き、俺が体制を整えようとすると、

ボフ……………。

「——ツ……………？」

何か柔らかいものに頭から突っ込み、それで勢いが殺された。

その何かに視界を塞がれているが、何だこれ？

俺は確かめるように手で探ると、今まで味わったことのない、とても柔らかい感覚を感じた。

何だろう、ずっと触っていたくなる。

「何だこれ？柔け……………」

俺が疑問符を浮かべながら顔をあげると、

「……………」

顔を真っ赤にした、先ほどのブロンド髪の天使と目があい、

「キ——」

「キ？」

何かを言おうとする女性天使。一応待っていると、

「キヤアアアアアアツ！」

女性天使が叫びながら左手を振り上げて——、

ベチンツ！

「ツ!?!」

全力の平手打ちを食らった！何という重さ、女性とは思えないな！

平手打ちを食らった俺はフラフラと回転するように飛びながらセラの前に流れ着く。

セラの顔を見ると、

「……………」

見たことがないほどの不機嫌な顔で、右手を振り上げて――、
ベチンツ！

「グベラツ!?」

再びの平手打ちを食らった！くそ！俺が何をした!?

俺が予想外の大ダメージで両方の頬を擦っていると、

『墮ちろおおおおおッ!』

男性墮天使たちの絶叫が響き渡った！俺とセラがあまりの音量に耳を押さえてい
と、

「ガブリエル様！お気を確かに!」

「落ちていてください！こういう時は深呼吸です!」

女性天使の何人かが、息を荒くしながら羽を白黒点滅させている先ほどのブロンド髪
の女性天使に近づいて必死に落ち着かせようとしていた。

……………つて、ガブリエル!?! 『熾^{セラフ}天使』の一人じゃねえか!

俺が先ほどの感覚を思い出すように手を動かすと、俺の真横を光の槍が通りすぎて
いった。見ると、ガブリエルを囲んでいた女性天使たちが俺を睨んできている。

「あはは……………」

俺が愛想笑いを浮かべると、天使からだけでなく墮天使からも光の槍が投げつけられてきた！

「ちよつ!?ま、待て！俺が何をした!?!」

俺が困惑しながら逃げ回っていると今度は、

『『切り裂き魔』死ねええええッ!』

コカビエルが突っ込んできた！それを真正面から受け止める！

「くそッ！俺が何をした!?!」

「貴様、わかっていないのか!?!」

「何が!?!」

つばぜり合いながら話していると、コカビエルが若干の嫉妬を感じさせる声音で言ってきた。

「貴様はガブリエルの『乳を揉んだ』のだ!」

「……………知るかあああああつ!?!」

俺は叫びながらコカビエルを押し返すと、再び光の槍が雨のように降り注いでくる！

俺は避けながら高度を下ろして近くの森に隠れた。

胸に触ったのは謝るが、それで墮天使、天使の両陣営が全力で殺しにくるって何なん

だよ!?!

「はあ……………はあ……………くそっ！」

「ロイ、大丈夫？」

俺が汗を拭っていると、セラが隠れながら近づいてきて俺の横についた。

「どうにかな。まったく、何で俺がこんな目に……………」

俺が溜め息混じりにそう言うのと、セラが無言で俺の頬を引っ張ってきた。

「あゝ？」

「……………」

「セラしゃん？」

今、戦闘中だよな？

頬を引っ張られながら俺がそんな事を考え始めていると、

「この辺りだ、探せ！」

『ハッ！』

誰かの号令と応答。俺はセラの手を少し乱暴に振り払って木の影から顔を出すと、

「くそっ！あの野郎どこに隠れた！」

『切り裂き魔^バ』の野郎、羨ましいっ！

殺気を醸し出す墮天使の一団が！そして、その反対からは、

「この辺りの筈だ！探せ！」

『はいっ!』

怒気を醸し出す女性天使の一団が!クソッ!挟まれてやがる!

俺が焦るなか、セラが落ち着いた様子で言った。

「いいタイミングだわ。同士討ちを狙いましょう」

「……………だな」

珍しく冷静なセラに驚きながら俺が頷くと、俺とセラは気配を殺しながら気づかれなないように移動する。そして、墮天使と天使の一団が接触した瞬間、

「どうだ、いたか!」

「いない!あの男、どこに行った!」

なぜか戦わない両者の姿がそこに!なぜだ!?存外仲がいいのか!?

俺が驚いていると、セラが冷静に言った。

「あのヒトたちはロイを殺せればそれでいいみたいね」

「俺は良くないんだが……………」

俺がそう呟くと、背後から気配を感じた。ゆっくりと振り向くと、

「シー……………」

人差し指を立てて口の前にやる兄さんの姿が。

兄さんは周辺を警戒しながらこちらに近づいてくる。兄さんはそのまま俺の横に隠

れ、俺とセラに言う。

「とりあえず、移動しようか。ここは危険だ」

「そうね。ロイが殺されちゃうわ」

「よくわからん理由で死にたくねえな」

セラと俺の返答に頷くと兄さんはあらぬ方向を指差しながら言った。

「とりあえず、あつちだ。先輩方が陣を張っている」

ああ、なるほど。

俺が納得して頷いていると、セラが首をかしげた。

「ちよつと、どういうこと？」

「この先に待ち伏せているから、俺があいつら引き連れてこいつてことだ」

「あー、なるほど」

セラも納得したところで、俺は「よし！」と言って木の影から飛び出して、叫ぶ！

「俺はここだあああああつ！」

『そこかつ！』

天使と墮天使が俺を発見したと同時に走って逃げるが、兄さんとセラは俺とは別方向に逃げていった!!

「ちよつ!?!」

「頑張ってください！」

「死なないでね！」

手を振りながら離脱していく二人。俺は、

「ふざけんなあああつ！」

本日何度目かの絶叫をしながら走り、例のポイントに向かった！

その後は先輩方の頑張りもあってどうにかなったが、この後の戦闘でも天使、墮天使からも狙われ続けたことは言うまでもない。

life09 共闘、三勢力

あれから百年以上戦争は続いた。終わるかもわからない戦争にも各勢力の者たちは落胆することなく、ただひたすら戦い続けていた。

ついには妖精、精霊、人間、妖怪といった様々な種族を巻き込んで戦火は拡大していった。

そんな中、ある出来事が三勢力を襲った。

神と等しい力を持つとされる二匹の龍、『二天龍』と呼ばれる『赤い龍』——ウエルシュ・ドラゴンドライグ、『白い龍』——アルビオンが突如として喧嘩を開始したのだ。

その二匹の喧嘩は三勢力に戦争以上の打撃を与え、ついに三勢力が共同して二天龍を討伐することになったのだ………。

そんなわけで俺——ロイは冥界の森の中の野営地にいた。そして、俺の横には例の如くセラがいるわけだ。

「ロイ、大丈夫？」

「あ、ああ」

セラの問いに苦笑まじりに答える。

相変わらず、俺を憎悪の対象でも見るような視線がこちらから感じるのだ。

俺がやらかした『ガブリエル乳もみ事件（セラ命名）』は百年以上経った今でも引きずられており、戦場でも墮天使（主に男性）、天使（主に女性）の集中砲火を浴びることがよくあった。そんな俺と共闘するのだ、何か思うことがあるのだろうか。

俺が溜め息を吐いて視線を前に向けると、

「む？」

「あ……………」

なぜかこんなところにいるコカビエルと目があつた。その横にはいつかに見た墮天使幹部バラキエル。

そのバラキエルは少し目を見開きながら焦るように汗をかいている。

「ロイ……………」

「大丈夫だ……………」

心配するセラを安心させるように言うと、コカビエルが近づいてきた。

セラは警戒して構えるが、俺は構えずに右手を軽くあげる。

「まさか、こんな事になるとはな」

「まったくだ。貴様と肩を並べる日がくるとはな」

と、言いながら二人して静かにオーラをたぎらせる。それを感じた周りの連中が余計に俺たちに視線を向けてくる。

「ロイ、落ち着いて！」

「おまコカビエルもだ！落ち着け！」

セラが俺に、バラキエルがコカビエルに言ってくるが、俺は構わずに言う。

「だが、決着はいつかつけようぜ？」

「当たり前だ。貴様だけは俺を楽しませてくれる」

それだけ言うと俺とコカビエルは視線を外し、歩き始める。コカビエルとすれ違う瞬間、あいつはいつもの笑みを浮かべながら、

「死んでくれるなよ？」

と言ってきた。俺は一瞬目を見開きながら驚くが、小さく笑みを浮かべながら無言で頷く。

その言葉、そっくりそのままおまえに返すぜ、コカビエル。

この言葉は言わなくてもあいつには伝わる筈だ。

俺が笑みを浮かべていることに気づいたのか、セラが俺の顔を覗きこみながら聞いて

くる。

「ロイ、なんで笑っているの？」

「ああ、宿敵ライバルからの意外な言葉が嬉しくてな」

「そう」

セラはそう答えると前を向きながら急に真剣な表情になった。

「どうした？」

俺が訊くと、セラは足を止める。前を歩いていた俺はセラの顔を見るように振り向くと、彼女は口を開いた。

「ロイ、何か隠してない？」

「隠すって何をだよ？」

俺が聞き返すと、突然セラが俺の手を引いて森の中へ。俺が引つ張られるまま森に入ると、セラは周りには誰もいないことを確認した。

「ロイは、その、年齢以上に大人びてるじゃない？」

「百を越えたら大人びると思うが？」

「そうじゃなくて！」

俺がふざけ半分で聞き返したらセラが少し怒気を込めながら叫んだ。

セラは一度自分を落ち着かせるように息を吐く。

「ロイ、子供の頃とか、初めて戦場に行ったときとか、変に落ち着いてたじゃない？」
セラ、もしかして……………」

俺が嫌な汗をかきながら次の言葉を待っていると、誰かが近づいてくる気配を感じた。

俺とセラがそちらを見ると、

「二人とも、こんなところにいたのか。探したよ」

兄さんが汗を拭いながら俺たちを見ていた。どこからか話を聞かれたかもしれないが、とりあえず今は――、

「兄さん、どうかしたか？」

「そろそろ開始の時間だ。さっき集合がかかった」

「そうか」

俺は頷いて歩き始めようとするが、少し不安そうな顔のセラを見て、俺は覚悟を決めて言う。

「セラ、その話はこれが無事に終わったらだ。兄さんや父さん、母さんにまとめて話す」
突然話題に出された兄さんは首をかしげるが、セラは「わかった」と一言言って俺の方に歩いてくる。そして、急に抱きついてきた！

「セラ……………」

俺が少し驚いていると、セラは俺をぎゅつと抱き締めながら言ってきた。

「私は、あなたが何者でも大好きだからね」

セラはそう言うのと顔をあげて笑顔を見せてくれる。俺も笑みを返してセラの頭を撫でる。

「俺も大好きさ。言葉的に愛してるの方がいいかもしれないがな」

「もう……………!」

顔を赤くして照れるセラ。やっぱりかわいい。

「見せつけてくれるね……………」

なんてことをしていると、兄さんがわざとらしく憎たらしそうに呟いた。

俺たちはハツとして離れる。そして、赤面しながら照れ隠しに兄さんに言う。

「に、兄さんもいいヒト見つければいいじゃねえか」

「そうよ☆ロイには私がいるから安心して☆」

俺との会話は真剣なのに、同年代の誰かに何かを言うときには『☆』マークがつくんだな……………。

「そうだね。僕にもいいヒトが見つければいいんだけど…………」

兄さんはそう言うってどこか遠くを見る。もしかしたら誰かのことを考えているのかもしれない。

そう判断した俺は兄さんに言う。

「何かあったら相談してくれよ。手伝うから」

「私にもね☆」

俺とセラがそう言うと、兄さんは笑みを浮かべて「ありがとう」と答えた。

俺たちがそんな事をやっていると、

「貴様ら、何をしている！召集がかかった筈だぞ！」

年上の悪魔に見つかった。俺たちは謝りながら急ぎ足で集合場所を目指した。

で、集合場所でした話つてのは二天龍の能力の確認だ。

ウエルシュ・ドラゴン

『赤い龍』は十秒おきに自分の力を倍にする能力を持っていて、それを何度も繰り返すことで力を数十倍にまで大きくできる。そして、現在も戦闘中なので力は高まりまくっている模様。

バニング・ドラゴン

『白い龍』は相手の力を半減させて自分の糧にする能力。この能力のせいで上級悪魔だろうが何だろうがあっさり弱体化させられてしまう。そして、その気になればモノの大きさも半分にする能力もある模様。

他にもあるらしいが、俺たちに危険が及びそうなものはこのくらいだそう。その他つてもお気になるが今回は大丈夫だろう。

それを考慮したのかはわからないが、一応の作戦はこうだ。

まず悪魔、墮天使、天使の戦力を二分し、それをそれぞれの龍に当てて分断させる。分断させたら白い方から聖書の神と魔王様四人全員がかりで攻撃して倒すか、封印する。その間残った赤い方は墮天使総督と連携して攻撃していくとのこと。

そして、後は白い方と同じようにすること。

かなり難しい戦いだと思う。まずあの二匹を分散出来るかどうかだ。あの二匹は理由はわからないが常に戦っている。その二匹を分断はかなり難しいだろう。それが失敗しても作戦はあるらしいが、そこまで詳しいことは教えてくれなかった。

俺は息を吐き、軽く伸びをする。今回の戦いは冗談抜きで俺たちの未来がかかってくる。この戦いに勝っても戦争は続き、種が滅びるかもしれない。だが、負けたらそこで終わり。

戦争が終わらないことには、悪魔に未来はない……………。

俺が息を吐くと、何かを考えていることに気づいたのか、セラが肩を叩いてきた。

「ねえ、ロイ」

「セラ、左肩はやめてくれ……………」

「あ、ごめんー！」

俺は少し表情を歪めながらセラに釘を刺した。左肩は動かすことには問題ないが、何かしら衝撃が入ると少し痛む。完全に古傷みたいになってしまった。

俺が軽く左肩を擦りながらセラに訊く。

「で、どうかしたか？真面目な顔して」

「うん。なんか、いいなって思ってた……」

「……………何が？」

俺が訊くと、セラは俺の耳元まで顔を寄せて小声で言ってきた。

「三勢力が手を取り合っていることがよ」

「ッー」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で衝撃が走った。三勢力の和解、それが叶えば未来があるかもしれない！

俺は少し興奮したが、すぐにその興奮は冷める。そんな事、ありえない。俺たち悪魔と天使、墮天使がわかりあうなんてこと……。

俺が少し俯いていると、セラが笑顔で言った。

『場所を考えろ！』って言われそうだけど、私はこれがいいな。三勢力が戦争をしないで手を取り合っている。綺麗事に聞こえると思うけど、これがいつまでも続けばいいの

に……………」

俺は顔を上げ、セラに笑みを向ける。

「難しいと思うが、これから何百年もすればそうなるかもな」

「なるわよ、きつと」

俺たちがまだ見ぬ未来のことを語り合っていると、

「よし！おまえら、聞こえるな？」

前髪が金、他の髪が黒という独特な髪色の男性墮天使が壇上に立った。

「作戦はさつき聞いた通りだ。で、俺たちは『赤い龍』の担当だ。神と魔王の奴らが

パニシング・ドラゴン

『白い龍』を倒すまで何としても抑えるぞ」

『ハッ！』

その男性墮天使の言葉に墮天使は一斉に応答する。絶大なまでのカリスマを發揮しているのが、墮天使総督——アザゼルだ。

入院中にあのアザゼルが書いたらしいよくわからん紙の束、確か『僕の考えた最強の——』何だっけな。まあ、そんなものを読んで退屈を潰していた。

俺がその何かを思い出そうと必死になっていると、アザゼルが嘆息気味に言った。

「おら、悪魔、天使ども。返事はどうした？」

『……………ハッ』

何か、そこら中からやる気のないような、ひどく屈辱そうな感じの返事が聞こえてきたんだが。

溜め息混じりに周りを見てみると、ふとアザゼルと目があった。そのアザゼルはイタズラでも思い付いたように笑った。

「まあ、安心しろ。俺を含めた墮天使幹部ほぼ全員と、『ガブリエルの乳を揉んだ男』もいるからな」

『ツ！』

一気に視線が俺に集まる。あの野郎、今いうことじゃねえだろ!?

俺が驚愕しながら周りを見渡していると、アザゼルが時計を確認しながら言った。

「よしー行くぞー!」

アザゼルの言葉に様々な応答が飛び、三勢力共同の『二天龍討伐作戦』が開始されたのだった。

l i f e 1 0 二天龍討伐作戦

作戦開始と共に俺たちは飛び立ち、二天龍がいるポイントを目指す。現在二天龍は冥界の森の真ん中で戦っているようだ。

俺は周りに目を向け、思わず感嘆の息を吐いた。

つい先日まで戦争をしていた連中が、一つの目標のために協力する。悪魔、堕天使、天使が共に飛ぶ様は壮観だ。

俺が周りを見ながら飛んでいると、前方から爆音が聞こえた。そちらに目を向ければ黒煙と爆発が連続で起こっている。

どうやら、始まるみたいだな……………。

俺が少し緊張気味の自分を落ち着かせるようにゆつくりと息を吐くと耳元に連絡用の魔方陣が展開された。そこから先ほどの男、アザゼルの声が届く。

『よし、おまえらー！始めるぞー！』

アザゼルの声へ応答が飛び交い、俺たちは『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンの対処のため、速度を上げた。

O s t ! B o o s t ! B o o s t ! 』

ウエルシュ・ドラゴン

『赤い龍』の声と共にオーラが膨れ上がっていく！これが力を倍にする能力か！十秒おきについて話じやなかったか!?

俺たちは困惑しながらも素早く切り替えて回避行動を取る。そして、『赤い龍』が口から極太のオーラを放った！

ドゴオオオオオオントツ！

凄まじい衝撃波と爆音が俺たちを襲い、直撃をもらった奴らは跡形もなく消し飛んでいた！そして、今の一撃の余波で山が抉れ取られている！よく見れば、『白い龍』も掠めたのか白い鱗が少し焼け焦げている。

俺は額に流れる脂汗を拭う。

一撃でも貰えば即死、防御は不可能。

その事実を改めて突きつけられ、無意識のうちに手が震える。久しぶりだな、ここまで死ぬかもしれないって思ったのは……………。

俺は短く息を吐き、直刀を生成してしっかりと握る。

さて……………行くか！

ウエルシュ・ドラゴン

俺は覚悟を決めて『赤い龍』に接近を試みる。俺は遠距離攻撃が全くと言っていいほど出来ない。攻撃するにしても、ナイフなどを作って投げつけるか、直接斬るしかな

いのだ。

ウエルシュ・ドラゴン

『赤い龍』はちようどよく俺に背中を向けていたが、背後にいる俺たちを警戒して尻尾を振り回してくる！

俺はそれを見切り、一気に懐に飛び込む！

そして、俺の横についたのは、一人の墮天使。その墮天使が笑みを向けながら言う。

「まったく、貴様らしいな！」

「ハッ！おまえに言われたくねえよ！」

コカビエルだ。こいつも尻尾を見切つて一気に飛び込んだようだ。

俺とコカビエルはほぼ同時に『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンの背中に飛び乗り、そのまま俺は直刀を突

き刺そうとするが、

キンツ！

固いものを全力で突いたような甲高い音が響き、刺さる気配を感じなかった。コカビエルの光の槍も同様に刺さらないようだ。

『チツ！』こざかしいコウモリとカラスだな！』

ウエルシュ・ドラゴン

『赤い龍』は俺とコカビエルの存在に気づいたようで、尻尾を自分の背中に打ち付ける勢いで振り下ろしてきた！

俺とコカビエルは素早くその場を飛び退き、尻尾を避ける。が、尻尾の振り下ろす際

に生まれた風圧で吹き飛ばされた！

「くッ！」

「チッ！」

吹き飛ばされた俺とコカビエルは翼を展開して素早く体制を整える。

背中が鱗が硬すぎて貫けない。危険を覚悟で腹を狙うか、それとも……………。

その時、俺はふとコカビエルと目があつた。俺とコカビエルは共に『目』を潰されている。俺はその潰された右目に眼帯越しに触れる。すると、コカビエルも俺を見て何か気がついたのか頷いてきた。

俺とコカビエル、出来れば別の形で会いたかつたぜ……………。

俺がそう思うと同時に俺とコカビエルは動き出す！再び背中に飛び乗り、二人で頭部を目指していく！

ウエルシユ・ドラゴン

『赤い龍』は再び尻尾を振り下ろそうとしてくるが、その尻尾に攻撃が集中され、軌道がずれる。尻尾は本体横の地面に叩きつけられ、軽い地震のように大地が揺れるが、俺とコカビエルは怯まずに走り続ける。

ついに、俺とコカビエルは頭部に到達。俺は右目、コカビエルは左目に狙いをつけ、それぞれ得物を手にして別れる。俺は走りながら直刀の切っ先に魔力を集中させ、コカビエルも槍の切っ先に光力を集中させていくことがわかる。

そして、俺とコカビエルは同時に飛び降り、そして、ほぼ同時に『赤い龍』の眼球目掛けて突きを放った！その瞬間、

ドゴオオオオオオオオオオツ！

「ツツ！」

凄まじい衝撃が俺とコカビエル、『赤い龍』を襲いかかった！俺たちが放った渾身の一撃は外れ、俺とコカビエルは吹き飛ばされ、『赤い龍』も転倒した。

俺とコカビエルは地面に叩きつけられ、俺は近くにいた悪魔、コカビエルは墮天使に引きずられるように回収されて一旦下がる。

そんな俺の目には『赤い龍』を睨む『白い龍』の姿が写った。

おそらくだが、『白い龍』は周囲を飛んでいた三勢力の連中から力を奪い取り、こちらに放ってきたのだ。先ほどの礼と言わんばかりに『赤い龍』を狙って……………。

俺は歯を食い縛り怒りを抑える。

今の一撃、白い奴の邪魔がなければ確実に当てられた。向こうの連中は何をしていたがった!?

だが、その怒りもすぐに冷めることになる。俺たちの耳に連絡用の魔方陣が展開され、一方的な言葉が送られてきたのだ。

『生き残った者は撤退しろ。後は我々と神がやる』

誰からか、その疑問は起きなかった。今の声は少しだけ聞いたことがある。

百年ほど前の開戦の時に演説を行った男——魔王ルシファアーのものだ。我々というのは他の魔王、ベルゼブブ、レヴィアタン、アスモデウスの三人のことだろう。

そのヒトたちに実際会ったことはないが、多分実力は俺たちよりも高いことは明らかだ。そのルシファアー様が俺たちに連絡してきて、先ほどの一撃から察するに、分断作戦は失敗……。

俺がそこまで考えると、俺を引きずる悪魔が速度を速める。今の言葉が魔王様直々の、最後の命令だと理解したのだろうか、その目には涙が溜まっているように見える。

俺はその悪魔に一声かけて離してもらおうと自分の足で立ち上がり、走り始める。すると、その横にセラが降り立った。

「セラ、生きてたか」

「うん、何とか……」

先ほどの連絡はセラにも届いているのだろう。魔王様の決断を感じて少し不安そうな表情だ。

俺がそんなセラにどう声をかけようか迷っていると、後方から爆音が聞こえ始めた。俺たちはそれに反応するように振り向き、そちらに目を向ける。

大気が震えるほどの衝撃がかなり離れた筈のここでも感じる事ができる。

「魔王様、やはり、命を捨てるおつもりで……」

近くにいた悪魔が涙を浮かべながら膝から崩れ落ちてそう呟いた。それを聞いた周りの悪魔たちも歯を食い縛って涙が流れないように必死に耐えている。

状況のせいで先ほどの言葉を否定することが出来ない。多分だが、今の悪魔の言葉は真実だろう。そして、一緒に戦っている聖書の神も……。

数時間後、爆音が聞こえなくなり、一帯が静寂に包まれた。現場を確認に向かった悪魔によると、二天龍は神セイクリッド・ギア器と呼ばれるものに封印された。それと同時に瀕死の魔王様方と聖書の神が発見され、その場で息を引き取ったことも確認したそうだ……。

こうして、二天龍討伐作戦は魔王全員と聖書の神の死により幕を閉じた。

それにともない、今までの戦いで大打撃を受けた三勢力の戦争は休戦状態に突入。一応の終結となったのだった。

l i f e l l 告白

戦争が休戦状態に入り、しばらく経った頃。

魔王様全員を失ってしまった悪魔は、生き残った上役を中心にこれからどうしていかを決めているようだ。

そんな中、俺、兄さん、セラ、母さん、父さんの五人はグレモリーの屋敷のある部屋に集まっていた。

理由は、二天龍討伐作戦前にセラと交わした約束を守るためだ。

重苦しい空気の中、俺は四人に見つめられている。

そんな中、気を利かせてくれたのかセラが俺に訊いてくる。

「それで、ロイ。私やお義母様かあに隠していることって何なの？」

俺はその問いを聞いて一度瞑目。覚悟を決めるように息を吐いてから口を開く。

「先に言っておきます。これから話すことは本当のことです。俺がおかしくなったというわけではないので安心してください」

俺の言葉にセラと兄さんは少しだけ首をかしげるが、父さんと母さんは動じることなく俺に視線を向けてくる。

それを確認して俺は続ける。

「俺には前世の記憶があります」

『——ッ！』

俺の言葉にさすがの母さんも驚愕の表情を浮かべる。いち早く言葉を理解したのか、父さんが訊いてくる。

「それは、どういうことだい？」

「言葉のままです。俺には、今までロイとして生きてきた以外の、いえ、正確にはそれ以前の記憶があります」

「……」

俺の言葉について黙りこんでしまった四人。俺としては何かしらリアクションがあつてくれると助かったのだが、さすがにそれは無理か。

「ロイ、その、前世の記憶はどういうものなの？」

母さんが困惑気味に俺に訊いてきた。前世の記憶と言つても——、

「物心ついた頃から戦場にいる、いわゆる少年兵でした。それからは、何かあるわけでもなく、死ぬまで戦場に……」

俺がそう言うと、再び重い空気が室内を満たした。前世は家族も親友もいなかった。ある程度の信頼を寄せる戦友はいたが、背中から撃たれないか、常に警戒していたこと

も事実だ。

「それで、どうして今告白をしようと思ったんだい？」

当然の疑問を父さんが言った。俺は一度頷き、口を開く。

「まず一つは話せばこうなることがわかっていたから……」

そして、セラを見つめながら、もう一つの、一番大事なことを言う。

「もう一つは、愛するヒトに隠し事は出来ないと感じたからです」

それを言つて俺は勢いよく四人に頭を下げた。

「今まで黙っていてすみませんでした。これで気味悪がられることも、異物と思われることも承知です。ですが、これが俺の隠していたことです」

しばらくの静寂が室内を包み、俺の胸の鼓動が早まり、額には脂汗が滲み出る。

俺が言葉を待っていると母さんが言った。

「頭を上げなさい、ロイ」

その言葉を受けてゆっくりと頭を上げる。そのまま少し自分を落ち着かせようとしていると、父さんが俺に歩み寄り、左肩に手を置いてきた。

「まったく、一人で抱え込まずにもっと早く言ってくれても良かっただろう？」

「まったくよ。子供の頃からずいぶん大人びていると思つたら、そういう理由だったのね」

母さんが父さんに続き、笑みを浮かべた。次に兄さんが少し困惑しながらも笑みを浮かべ、

「まったく、昔から困った弟だね……」

こんな俺を『弟』と呼んでくれた。そして、最後にセラがいつもの笑顔で言う。

「本当、もっと早く言ってくれても良かったんじゃない？ 私は、私たちは気にしないわよね？」

四人ともあつさりを受け入れてくれた。もしかしたら、M s. 神様はこうなることがわかっていてグレモリー家に、悪魔で一番深い情愛を持つ場所に転生させたのかもしれない。

俺が目元が少し熱くなっていることを感じていると、父さんが改めて『息子』に言い聞かせるように俺の肩に置く手に力を込め、父親の威厳を放ちながら言ってきた。

「いいか、ロイ。おまえは私とヴェネラナの自慢の息子だ。気味悪がる？ 異物と思う？ そんなわけないだろ！」

父さんに面と向かってその言葉を言われ、少しだけ目元が湿っている気がした。俺がそれを感じていると共に、父さんが笑う。

「何だ、珍しいな。ロイが泣くなんて」

「え？」

俺は自分の目元を拭うと、確かに濡れており俺は涙を流していたようだ。それを意識したせいか、余計に涙が流れ始める。

それを聞いたセラと兄さんが父さんの背後から近づいて俺の顔を覗きこむと、おかしそうに笑った。

「本当だ。ロイが泣くところ初めて見たかも」

「そうだね。ロイは我慢強い奴だから」

と、言いながらセラは俺の頭を撫で、兄さんは右肩に手を置いてくる。

俺たちの様子を見ていた母さんが笑顔で言う。

「ロイ、分かったでしょう？ここにはあなたを避けるヒトは居ません。ここがあなたの居場所よ」

ここが俺の居場所……。前世にはそんな場所はなかった……。けど、今は……。

母さんたちの言葉に、溢れる涙が止められない俺は震える声で言う。

「ありがとう、父さん、母さん、兄さん……。セラ。ありがとう……。」

四人は笑顔で頷いてくれる。M s. 神様、今の言葉、おまえにも言ったんだぜ……？

俺がM s. 神様にも心中で礼を言うと、母さんが訊いてきた。

「その前世の記憶ということはわかりました。ですが、ロイ。なぜそれをもって生まれ

「たかはわかるのかしら？」

俺は言葉に困ったが、ここまで来たら正直に話してしまおう。

俺はそう決めて口を開く。

「神様のな何かに会った、からだと思います」

少し言葉を濁してしまった。もう百年以上前のことだ。M s. 神様の顔とかは思い出せない。あいつが本当に神様なのかも、今になって見ればわからない。

俺の言葉に母さんは表情がかたくなったが、

「まあ、それでロイが生まれたのなら、それでいいです」

と言つて頷いた。訳のわからない神様が絡んだことに母さんなりに思うことがあつたのかもしれないが、どうにか納得したようだ。

俺は流れる涙がある程度落ち着かせると、あることに気づき、肩に手を置く父さんに言う。

「それと、父さん……」

「何だい？」

父さんは俺の言葉を待ちながら笑みを絶やさなかったが、

「左肩、すごい痛い……」

「あ……」

俺が短めに言った言葉に間拔けな顔をしながら手を離す。あー、痛かった…………。左肩を優しく擦りながら、セラを見る。

「セラ…………」

「何かしら?」

「こんな俺でも、おまえに隠し事していた俺でも、おまえを愛していいか?」

俺が訊くと、セラは心外だと言わんばかりの表情を浮かべながら言ってきた。

「もう、言っただじやない。私は『あなたが何者でも大好きだから』って」

「そう、だったな…………」

俺はセラに近づき、そのまま抱きしめる。セラは一瞬驚くが俺を抱きしめ返してくれた。

「まったく、見せつけてくれるね……………」

「サーゼクスも頑張りなさい!」

「もう、あなたはあまり急かさないの」

俺とセラの言動を見て兄さんはいつかと同じ言葉を呟き、父さんは少し興奮した様子で兄さんを応援、母さんはそんな父さんを落ち着かせていた。

俺とセラは赤面しながら一旦離れる。すると母さんが父さんに言った。

「この事はシトリー様に言った方がいいのかしらね?」

それを受けた父さんはしばらく考え込むが、一つ頷いて、

「誰にでも隠し事はあるだろう?」

と言った。明らかに俺の覚悟を全否定してくる発言なのだが、多分本人に自覚はない。それにこのヒト、教える気もないのかもしれない。

俺が額に嫌な汗を滲ませていると、セラが言った。

「お父様は何となくロイが隠し事をしていることに気がついていましたよ?」

「なっ!?!」

驚きの声を上げたのは俺だ。まさか、会った回数が極めて少ないあのヒトが!?

驚愕する俺をよそに、セラは笑顔で続ける。

「それと、『彼が何を隠していようと、私はおまえが幸せになれるのならそれでいいさ』とも言っています」

その発言と共に笑顔のシトリー卿の顔がよぎったが、あのヒトもかなり親バカだな。

セラからの伝言を聞いた父さんが再び頷いた。

「そうか、流石はシトリー卿。それでも私たちの息子に愛娘を預けてくれるとは」

「今度挨拶に行かないとですね」

勝手に話を進める父さんと母さん。俺の告白って、あんまり大事になってないな。

俺が拍子抜けしていると、兄さんが言ってきた。

「とにかく、ロイは僕たちの家族であることは間違いない。僕も構わずに今まで通り……」

そこまで言うと、兄さんはイタズラでも思いついたような表情で言ってきた。

「前世の記憶があるということは、年齢は何歳かロイが上になるのかな？」

「兄さんは兄さんです……」

俺は苦笑混じりにそう答える。兄さんが敬語で接してくるのは、ちよつと気持ち悪い。

俺の心の声をよそに、父さんと母さんが言った。

「私たちはともかく、他の悪魔たちが何か言ってくるのは面倒だ。この事は他言無用にしよう」

「そうね。ロイとセラフォルのこれからに関わってきてしまうわ」

どうやら、二人は俺とセラの今後が心配のようだ。

こうして、俺の覚悟の告白は案外あっさりと受け入れられ、俺としての生き方が変わることはなかった。

俺の問題は一応の解決となったが、悪魔が抱えている問題は、いまだに解決の目処がたっていないかった。

l i f e 1 2 亡命者

俺がセラたちに秘密を告白してから一年ほど。

悪魔の上役たちはようやくこれからの方針を決めたようだ。それが『血筋に関係なく、新たな魔王を決める』というものだ。魔王様たちの名前がついに役職名になるというわけだ。

それを聞いて俺はそれもいいかと思つたが、これに反対する者たちがおり、そのせいで決定が遅れていた。

そして、その反対派が亡くなった魔王様方のご子息たちだ。

魔王様の血を引くヒトたちの言葉を下には出来ないと思うが、そのご子息たちの意見が『再び墮天使、天使に宣戦布告する』というものであり、いつもは魔王寄りの考えの上役たちも今回はそれを拒否、今まで議論が続いていたのだ。

上役たちがまったく折れないとわかり、先ほどの方針が決定した時点でご子息たちはついに武力をもってこちらを従わせようとしてきた。

戦争でかなりの数の悪魔が死に、種としての数を減少させた悪魔が、今度は内戦という形で数を減らそうとしていた——。

何て柄にもなく真面目なことを考えながら、俺は冥界の森にいた。木の枝に座り、幹に背を預けて周辺を警戒する。

俺はあれから新魔王推進派のエージェントとして行動している。時には諜報、時には救出など、任務内容は様々だ。

そんな俺の任務は救出と言いますか、支援と言いますか……。

何て事を考えていると、ここに近づいてくる気配が複数。逃げる誰かを何人かで追いかけているようだ。

俺は溜め息をつきながら着ているロープのフードをかぶり、枝の上に立つ。

それと同時に逃げていた悪魔が俺の下を通りすぎ、追ってきた悪魔が確認できた。

俺は両者の間に割り込むように飛び降りる。俺が地面に降り立つと共に逃げていた悪魔が足を止めてこちらに振り向き、追ってきた悪魔たち五人も足を止める。

俺が追ってきた悪魔たちを睨むと、その悪魔が憎々しげに訊いてきた。

「貴様、あのバカどもの手下か!？」

「ああ、そうだが？」

俺は少し怒気を込めながら返答した。

何がバカどもだ、そつちだろぅが………!!

それを口には出さずに直刀を生成する。それを見て悪魔たちが警戒し始める。

「ま、まさか、貴様は!？」

「くそ! 何でこんなところに!」

「だが、これはチャンスだ! ここで殺すぞ!」

「そうだ。所詮は雑魚、我々の敵ではない!」

「さつさと終わらせるぞ」

五人はそこまで話すと俺を囲み、手の先に魔方陣を展開された。逃げてきた悪魔は隠れたようだ。

俺は溜め息を吐き、悪魔たちに言った。

「おまえらに任せていると悪魔が滅びかねないんでね。面倒だが、ここで殺らせてもらうぜ?」

「ほざくな!」

俺の言葉を挑発と受け取った悪魔たちが一斉に魔力弾を放ってきた!

それを俺は余裕を持って跳躍して避ける。

魔力弾同士がぶつかり合い爆発、跳んだ俺と悪魔たちを包むほどの煙が起こり、俺は気配を殺す。そして、着地と同時に動き出す!

まず一人は勢いのまま直刀で首を断ち切り即死させる。

「……………」

そう眩きながら煙の中で混乱している悪魔の懐に飛び込み、腹部に直刀を突き刺す。

「かっ……………」

刺された悪魔は俺を睨みながら反撃しようとしてくるが、腹部に刺さった直刀から一気に滅びの魔力を流し込む。それをされた悪魔は白目を剥きながら体を痙攣させ、最後はぐったりとして動かなくなった。

「……………」

これが俺の滅びの使い方だ。静かに、正確に相手を殺れる。が、間近でやる俺はその苦しむ顔を間近で見るとため気分が悪くなる。

直刀を引き抜くと同時に煙が晴れていき、残った三人が恐怖を感じる眼差しで俺を見てくる。

本人たちは睨んでいるのかもしれないが、三人とも少し腰が引けているように見える。

俺は直刀を消して両手にナイフを生成し、そのまま二人に投げつける。唐突に飛んできたナイフを一人は豪快に後ろに転ぶように避け、一人は眉間に直撃した。

「……………」

避けたというか、ビビって転んだら避けられたという感じか。運のいい奴だな……。

何て事を思いつつ、俺は残った二人に言う。

「で、まだやるかい？俺は構わないがな」

「な、舐めるなああああつ！」

一人が強がるように俺に手を向けて魔方陣を展開する。そして、そこから魔力弾が放たれた。放たれたそれはまっすぐ俺に向かってくるが――、

「こつちのセリフだな」

俺は軽く直刀を振ってそれをかき消す。

こつちとしてはコカビエルを百年以上も相手にしてきたんだ。あの程度なら、避けるまでもない。

俺はわざとらしく溜め息を吐き、俺を見ながら震える二人に最後通告をした。

「で、どうする。捕虜になるか、それとも死ぬかだ」

これで向かってくるのならそれはそれでよし。最後まで抵抗する根性は認めてやる。捕虜になるのなら、まあ、そこまでの奴らだつてことで納得する。

それを聞いた二人は手を挙げて膝をついた。どうやら、捕虜になると決めたようだ。

「了解、そういうことだな」

そう言いながら俺は連絡用魔方陣を展開する。

「こちらゼロ、捕虜を転移させるから用意してくれ」

『了解、ターゲットとは接触出来たか？美人だったか？』

なぜか外見情報も求めてくる俺のオペレーターである男性。こいつとは何度も仕事をしているが、相変わらずだ。

ちなみに『ゼロ』つてのは任務中の俺のコールサインみたいなものだ。

「いや、残念ながらまだだ。今から搜索する」

『了解した。捕虜を転送してくれ』

俺の言葉に少し残念そうに返してくるオペレーター。こいつ、時々何をしたいのかわからない。が、仕事はするので特に迷惑ではないのも事実だ。

そこまで話して連絡用魔方陣を消して代わりに捕虜転送用の転移用魔方陣を展開する。

「無駄に抵抗すんなよ？面倒だからな」

魔力で作った鎖で二人を拘束し、そのまま魔方陣に投げ込む。同時に魔方陣が光を増していき、その光が弾けると共に二人が消えた。念のために確認を取る。

「こちらゼロ、送ったぞ」

『ちよつと待て——よし、確認した。野郎二人でいいんだな？』

「ああ、間違いない。任務に戻る」

『了解した。油断するなよ?』

「わかってるさ」

確認を終えて周りを確認しようとした瞬間、俺の後頭部に何か突きつけられた。

俺は両手を挙げて無抵抗の意志を見せる。言われた瞬間にこれだ、警戒はしていたんだがな……。

「(こちらを向きなさい)」

俺は手を挙げたままゆっくりと振り向く。俺の背後にいたのは、綺麗な銀髪の女性だ。

俺に魔力を込めた指を突きつけながら、とても強い意志を感じる目で確かめるように見てくる。

その女性が指を突きつけながら訊いてくる。

「あなたが、私の亡命を助けにきたヒトでいいのね?」

「あんたがグレイフィア・ルキフグスなら、な?」

俺が確かめるように訊くと、女性は手を下ろして息を吐いた。俺も合わせて手を下げて息を吐いた。

「で、あんたが?」

「ええ。私がグレイフィア・ルキフグスです」

ルキフグス、本来ならルシファーに仕える『番外の悪魔』エキストラデーモンの一族。その女性が、仕えるべき前魔王であるルシファーの元を去ってこちらに来るとはな……………。

俺は笑みを浮かべてグレイフィアさんに言う。

「なら良かった。このまま離脱します、いいですか？」

「急に敬語になりましたね……………」

「また、気にしないでください」

そう言いながら離脱用の転移魔方陣を俺とグレイフィアさんを囲むように展開する。

やれやれ、とりあえず今回の任務は問題なしかな？

俺がそう思うと同時に魔方陣の光は増していき、俺とグレイフィアさんの視界を奪う。

光が止み、視界が回復すると、そこはある部屋の真ん中だった。転移も無事に成功したようだ。

俺が安堵の息を吐いていると、俺たちの後ろから声を掛けられた。

「グレイフィア、無事だったか！」

声に反応して俺とグレイフィアさんは振り向くと、そこにいたのは、

「サーゼクス！」

兄さんだった。その兄さんにグレイフィアさんが抱きつく。俺は頬をかきながら二人を見ていると兄さんが少し涙を溜めながら言った。

「ありがとう、ロイ。彼女も無事だ」

「ま、これが任務だからな」

俺はそう言つてフードを取る。意外と汗をかいたな。後でシャワーを浴びよう。

俺がそう決めると、グレイフィアさんが何かに気づいたように驚愕の声をあげた。

「サーゼクス！あなた、まさか……」

「ああ、少々危険だったが、弟に任務を頼んだ」

「そこまで危険でもなかったがな」

俺はそう返すが、グレイフィアさんは兄さんの頬を容赦なく引つ張る。何だろう、俺もセラにされたような気が……。

兄さんは余計に涙を目に溜めながら言う。

「いふあい！いふあい！グレイフィア、ちよっほはらしてくれ!」

何を言っているかよくわからないが、多分痛いから離してくれのことを言っただけだ。

グレイフィアさんもそれを理解したのか手を離す。

「それで、なぜ弟に？」

少し凄味を見せながら兄さんに訊くグレイフィアさん。兄さんは慣れた様子で答える。

「今までの実績を考えて、ロイが適役だと判断した」

結構がんばっているからな。任務は面倒なものばかりだが……。

俺は嘆息しながら兄さんに言う。

「もういいか？ 報告しないといけないし、長時間森にいたから汗もヤバイんだが……」

「ああ、すまない。戻ってくれて構わないよ」

「了解。そんじや、また後で」

俺は踵を返して部屋を出る。

ここはまあ、簡単な基地みたいな所だ。所属するメンバーの部屋なんかも用意されている。そのせいで最近屋敷に帰れてないんだがな。

それはそれとて、今回助けたあのヒト——グレイフィア・ルキフグスが俺の義姉ねえさんになるかもしれないのか……。

そんな事を思いながら歩いていると、正面からウエーブのかかった金髪の軽い感じの男性悪魔が歩いてくる。

「よっ！ お疲れさん！」

「おまえにはもつと緊張感をもって欲しいんだがな」

「気にすんなって、成功すればいいんだよ！」

と言いながら俺の左肩を叩いてくるこいつはヴィンセント・フェニックス。フェニックス家の次男だ。

次男同士だからなのか、すぐに意気投合でき、今じや俺が現場担当、こいつが後方支援担当のような役割になっている。今回もこいつがオペレーターだ。

で、こいつ、わかっててやってるよな……………？

俺は左肩に置かれた手を掴み、無理やり引き剥がす。

「いてえな、オイ……………」

「あ、わりい、まだ痛むのか？」

「叩かれたりすると特にな……………」

ふざけた様子で心配してくるヴィンセント。こいつ、ふざけた様子だが変なところでしっかりしているからな、その内どっかの幹部とかになりそうだ。

そんな予想をしていると、ヴィンセントは軽い調子で言ってきた。

「ま、とにかくだ。おまえの未来のお姉さんを助けられたんだ、良しとしようや」

「それもそうだな……………」

俺が疲れた様子で言うのと、ヴィンセントは気を遣うように言ってきた。

「その様子だと、飲みには行けそうにないな……………」

「悪いな、今回は疲れた」

俺の言葉を受けて、ヴィンセントは真面目な表情で言ってきた。

「だよな。なら、報告は俺がやつとくから、おまえはしっかり休んで次に備えろ。いいな？」

「言われなくても」

「ならオツケーだ。そんじゃ、またな」

ヴィンセントは手を振りながらどこかに消えていく。あんな奴だが案外忙しそうにしているからな。俺も休めるうちに休もう。

俺はそう決めて、自分の部屋を目指して歩きだした。

l i f e l 3 新魔王

グレイフィア義姉ねえさんが新魔王推進派に亡命してから一気に情勢はこちらが有利となり、戦争推進派である『旧魔王派』を冥界の僻地に飛ばすことで一応の決着となった。そして、ついに新魔王が決定し、その即位式を行うことになった。

新たなルシファーはサーゼクス兄さん。

ベルゼブブはアジュカ・アスタロト。

アスモデウスはファルビウム・グラシヤラボラス。

そして、新たなレヴィアタンは――、

「にゅ〜」

「大丈夫か？」

変な声を出しながら控え室で机に突っ伏しているセラフォル・シトリ、つまりセラである。

セラはいつもと違って式典用の魔王の衣装に身を包んでいた。あのセラでも緊張しているかと思つて様子を見に来てみればこの様子だ。

俺はセラの横に座り、軽く背中を擦つてやる。頭を撫でたらせつかくのセットが崩れ

るからな。

「おまえでも緊張はするんだな」

「当たり前よ。私はロイほど肝は座ってないわ……」

顔を横に向けて俺を見ながら言ってくるセラ。確かに俺は前世の分のアドバンテージがあるからな。

俺は苦笑しながらもセラに言う。

「ま、人生経験が違うってことで、納得してくれ」

「うん……」

セラは再び顔を机に埋めて溜め息を吐いた。何か気が利く事を言っただけだが、何か話題がないものか……。

俺はその話題を探しながらセラを見ると、急にセラが体を起こした。

「うおっ」

俺は少し驚きの声をあげるが、セラは俺の方へと向き直り、目をあわせてくる。俺が黙って見つめ返しているとセラが口を開いた。

「私、頑張る」

「ああ、頑張れ。ってどうしたんだよ急に……」

「昔、言ったじゃない。三勢力が戦争しない方がいいって」

「ああ、あの時か……」

セラの言葉で二天龍討伐作戦の直前の事を思い出す。

セラは三勢力が手を取り合うこと、それがいつまでも続けばいいと言っていた。かなりの時が流れたが、あの言葉は覚えている。

俺が思い返していることを察したのか、セラが覚悟を決めた表情で宣言した。

「私は、何百年かかるかわからないけど、いつか必ず三勢力の和平を実現させる！」

セラが減多なことでは見せない本気の表情。俺も本気の表情で返す。

「なら、俺はそれまでおまえを守る。表からだけじゃなく、影からもな」

俺が言うのとセラが不機嫌そうに頬をつねってきた。結構いいこと言ったと思ったんだが……。

俺が黙ってつねられていると、セラが言う。

「それまでじゃなくて、これからずっと守ってよ。まるで私とはそこまでみたいじゃないー！」

ああ、なるほど。セラが怒るわけだ。

俺は納得すると同時に頬をつねる手を優しく外し、代わりに笑みを浮かべる。

「そうだな。おまえとはいつまでも一緒にいるさ。悪魔の生は長いんだから、死ぬまで退屈させるなよっ！」

俺が訊くと、セラは満面の笑みで、

「もちろんよ！」

と返してきた。ようやくセラっぽくなってきたな。

俺は安心して息を吐く。これなら式典は大丈夫だろう。

俺がそう思っていると、セラが可笑しそうに笑った。

「ふふ。顔がにやけてるわよ？」

「え？マジか……」

俺は顔に触れながら苦笑した。最近胸の内が顔に出やすくなったかな？

「ま、セラなら大丈夫だろ。俺はおまえを信じて進むだけさ」

俺は微笑しながらそう答える。セラは笑顔で頷いたことを確認すると、「じゃあ、後でな」と伝えて部屋を出る。いい加減座席に戻らなければ。

俺が廊下に出て、座席に戻ろうとしばらく歩いていると、

「よっ！」

「またおまえか……」

「何だよ、冷たい奴だな……」

ヴィンセントに出会った。廊下のベンチに座って飲み物を飲んでいたようだ。

俺はヴィンセントに近づきながら訊く。

「で、何でこんなところにいるんだ？」

「うん？中が暑いから、ちよつと出てきた」

「そうか」

俺はヴァインセントの隣に座り、これからのことを考えて息を吐いた。

ヴァインセントが理由を察したのか、俺に言ってくる。

「やつぱりと言えばそうなんだが、上の連中は頭が固いねえ」

「まあ、仕方ないさ……」

俺が溜め息を吐いたのは次期当主のことを考えてだ。

本来なら現当主の長子である兄さんになる筈だったのだが、その兄さんが魔王になったことで次期当主はその弟である俺に——とはならず、しばらくは父さんが続けることになっている。

理由は俺とセラが恋人だからだ。ただですら新ルシファーの弟である俺が新レヴィアタンの恋人、俺は一悪魔としては魔王たちと関わりがありすぎると判断されたらしい。

つまり、魔王二人が俺をひいきするのではないかと考えたのだ。だから、俺は当主になれない。

だが、俺はそれで構わない。セラや兄さんには迷惑がかけられないからだ。だが――

1、

「弟か妹が生まれたら、全部そいつが背負い込むことになるんだよ……」

俺の悩みの種はそれだ。俺が出来ないとなると、多分俺の弟か妹が次期当主になる。それはつまり、その子の自由を奪ってしまうことに繋がるのだ。

俺が再び溜め息を吐くとヴァインセントが肩を叩いてきた。

「ま、その弟だか妹はおまえが支えてやれ。おまえの事だから気づかれないようにやりそうだけだな」

ヴァインセントは笑いながらそう言い、俺はヴァインセントの方に顔を向け、笑みを浮かべながら言う。

「だから左肩は止めろ……」

「ああ、わりい」

こいつ、わざとだろ。めつちや顔がにやけてるぞ。

俺はその言葉を飲み込んで立ち上がる。ヴァインセントも時計を確認して立ち上がるという。

「そんじゃ、また飲みにも行こうぜ。お互い忙しくなりそうだけだな」

「ああ、またな、ヴァインセント。俺に親友がいるとすれば、おまえぐらいなものだ」

俺が真面目に戻すとヴァインセントはわざとらしく気持ち悪そうな表情になりながら

言う。

「気持ち悪いこと言うなよ……。ま、それは俺にも言えることかもな」

二人して苦笑すると、ヴィンセントが右拳を差し出してきた。

俺は黙ってヴィンセントの右拳に自分の左拳を軽くぶつける。これは俺たちの挨拶みたいなものだ。会ったときか別れる時によくやる。

それを終えると俺たちは別れて座席に戻る。戻って早々に母さんの櫛が飛ぶ。

「ロイ！今までどこに行っていたの！」

「す、すいません……」

「まあまあ、ヴェネラナ。ロイにもやることがあるのだから、少しぐらいいいじゃないか」

「あなたはロイに甘すぎます！」

父さんが矛先を鈍らせてくれたが、後で怒られそうだな。

こんなことをしながら、俺はある覚悟を決めた。

今日、この場で悪魔は新たな一步を踏み出した。この先に何かがあるかはわからないが、俺は今ある平和を、今の家族を守るだけだ。

俺が覚悟を決めたと同時に式典が始まり、正式に四人の新魔王が決定した。

これから悪魔はどうなるのか、楽しみだ。

life14 はぐれ

新魔王体制に入ってから、悪魔は種の存続を重視していた。だが、悪魔同士での出生率は高くはないという問題があった。

その中で、新ベルゼブブとなったアジュカがそれを打開できるあるものを開発したのだ。悪魔の駒と呼ばれるそれは他種族のモノを悪魔へと転生させることで『転生悪魔』^{イヴァイル・ピース}と呼ばれるものに変え、上級悪魔たる主の眷属にするというものだ。

悪魔の駒自体はチェスの駒に似た形をしている。

チェスの駒の形をしたそれは上級悪魔に一人につき、『騎士』^{ナイト}、『僧侶』^{ビショップ}、『戦車』^{ルーク}が二つずつ、『女王』^{クイーン}が一つ、そして、『兵士』^{ポーン}が八つの合計十五つ配ることになった。

それぞれの特性はこうだ。

『騎士』^{ナイト}に転生したモノには速度を。

『僧侶』^{ビショップ}に転生したモノには高い魔力を。

『戦車』^{ルーク}に転生したモノには力と堅さを。

『女王』^{クイーン}に転生したモノには上記の三種の特性全てを。

『兵士』^{ポーン}に転生したモノは敵地において『昇格』^{プロモーション}と呼ばれるものを発動し、上記のい

れかに一時的になれる力を与える。

そして、最もたる『王』^{キング}は悪魔の駒と同じ素材で出来た石碑に触れることで登録する。

この制度が投入されてから上級悪魔たちの中では眷族探しが盛んに行われ、それと同時に眷属を揃えた悪魔同士が競いあうレーティング・ゲームなるものも行われるようになっていった。

だが、それは表向きの話。眷族探しが盛んに行われると言ったが、悪魔たち全員が良心を持つてゐるわけではない。

時には自分のものにするために騙し、殺し、奪う。そのような行為も横行し、やがて、上級悪魔である主を殺すなどして逃亡する転生悪魔——はぐれ悪魔の存在も増え始めていた。

俺——ロイは冥界グレモリー領の辺境に来ていた。

俺は歩きながら溜め息を吐く。この仕事は何度目だろうか、減ることはないのだろうか……。そう思えて仕方がないからだ。

旧魔王派とのいざこざが一応の解決がしてから時が流れ、俺はエージェントから狩人^{ハンター}

になっていた。

兄さんたちが始めた転生悪魔制度と、レーティングゲーム。別にそれ自体が悪いと言うつもりはない。だが、やはりと言うべきか、一部の悪魔は自分勝手だ。

俺は歩きながら周囲を見渡す。おそらく村があつたと思われるここは、昔に旧魔王派に攻撃されたきり放置され、焼けた家や瓦礫がそのままとなっている。村人はそのときに亡くなったか、もつと安全な都市部で暮らしているかのどちらかだろう。その生き残つたヒトたちもここには戻ろうとしない。

そんな時代に取り残されたとも言える廃村に來ているわけ、それは――、
「ケケケ……………、ここも見つかつたか……………」

俺は声に反応してそちらを見る。形を保っていた大きめの屋敷から、上半身は人間の男性、下半身は蛇の異形と言える存在が現れた。

「はぐれ悪魔、ジャンだな？」

俺が訊くと、そのはぐれ悪魔は狂喜を感じさせる笑みを浮かべて俺を睨む。

俺は溜め息を吐き、ジャンに警告した。

「いきなりで悪いが、最後通告だ。おとなしく投降しろ。そうすれば殺しはしない」

俺の警告を受け、ジャンは不気味に笑う。

「ケケケケ……………」。何が『投降しろ』だ。投降したところで処刑させるのがオチだろうが

……

「そうとも限らないだろう。おまえが重症を負わせた主にも罪があることはわかってる。なら——」

俺が言葉が続けようとする、ジャンは右手で何かを投げつけてきた。

「ッ！」

ダーツ針のように飛んで来たそれをとつさにキャッチする。見てみると何かの骨なのがわかった。

俺が確認しているところを見ながらジャンは言う。

「それはおまえの前に俺を殺してきた奴、俺の元同僚の骨さ……。あのくそ野郎の仇を取りに来たらしいが、弱かったし、ちやうど腹も減ってたから食っちゃまったよ……！」

ジャンは再び不気味に笑う。俺は手に持った骨を持ち主の死亡報告をするために懐にしまい、直刀を生成する。

「はぐれ悪魔、ジャン。おまえを討伐する。罪は主への反逆と殺人、そして我らの領土に不法に侵入したことだ」

それを聞いたジャンは壊れたように笑う。

「ギャハハハッ！最初からそのつもりだっただろうがッ！」

ジャンはそう言いながら蛇のような尻尾を伸ばし、上から俺に叩きつけようとしてく

る。

俺はそれを右に転がるようにして避け、振り下ろされた尻尾に直刀を振り下ろす！

グシャ……………。

「ひっ!?!」

斬られた尻尾は宙を舞い、嫌な音をたてながら地面に落ちる。堅さ的に『戦車』^{ルック}ではない。

ビビりながらもジャンは俺に肉薄し、連続で拳を放ってくる。それを俺は体捌きだけで避ける。速度的にも『騎士』^{ナイト}じゃない。

ジャンの右拳を受け止め、直刀で腕ごと切断する。

「ギヤツ!?!」

ジャンは後ろに後退し、斬られて肘から先がなくなつた右腕を押さえていた。すると、憤怒の表情で俺を睨み、叫んだ。

「舐めんじゃねおぞ！俺はこんなもんじゃねえ！」

俺は溜め息を吐く。多分こいつは『兵士』^{ポーン}だ。この弱さ、まず間違いないだろう。『兵士』^{ポーン}の最大の特徴でもある『昇格』^{プロモーション}は『王』^{キング}の許可がないと発動することが出来ない。つまり、こいつがいくら叫んでも、俺との差は埋まらない。

俺が溜め息を吐いたことを察してか、ジャンは怒りを強くしながら言葉にならない叫

びを発して俺に突撃してきた。

俺は直刀を大剣に変え、手早く魔力を込める。

「許しは乞わん。恨めよ……………」

その一言と同時にジャンに向けて魔力を解き放つ！

紅に輝く滅びの濁流はジャンに断末魔をあげさせることなく、一瞬にして包み込んでいった――。

滅びの濁流が通った箇所は地面が抉れられていた。気配を探っても先ほどのはぐれ悪魔のものは感じない。

俺は本日何度目かの溜め息を吐いて大剣を消す。これで何人のはぐれを殺したことやら……………。

俺はそう思いながら転移魔方陣を展開して帰路についた。

life15 妹

俺、ロイははぐれ悪魔討伐と死亡者の報告を終わらせると、足早と転移で屋敷に帰った。

到着と同時に右目に魔力を込めて色を碧くする。転移室で一人ホツと息を吐いたと同時に部屋の扉が勢いよく開かれた。

「?」

俺が疑問符を浮かべて扉の方に目を向けると、

「ロイおにーたまっ!」

少し舌足らずな幼い女の子の声と共に、腹部に衝撃が走る。

俺はとつさに足を踏ん張り、腹に突っ込んできた何かを受け止めた。

俺の腹に抱えられるようになっていたその子は、勢いよく顔を上げて無邪気な笑顔を向けてくる。

「ロイおにーたま、おかえりなしやい!」

そう言いながら俺の胸に頬擦りしてくるのがリアス・グレモリー。四年ほど前に生まれた俺の妹であり、グレモリー家次期当主だ。

俺はリアスの頭を撫でながら笑みを浮かべる。

「リアス、前にも言ったけど飛びつくときは一言声をかけてくれ。ビックリするから……」

「え、だって、リーアビックリさせたいんだもん！」

少しだけ頬を膨らませて言うリアス。この子は自分のことをリーアと呼んでいる。ちなみに、兄さんと父さんもだ。

まあ、正確には二人から呼び始めたのだが、その話題は置いておこう。

「それより、リアス。お兄ちゃん汗だく何だけど……」

「きにしない」

俺が口外に「離れてくれ」と言ったのだが、リアスは離れる気はないようだ。俺がどうするか困っていると、

「ロイ様、お帰りなさいませ。お嬢様、あまりお兄様を困らせてはいけませんよ」

メイド服姿のグレイフィア義姉ねえさんが来てくれた。義姉さんは兄さんと結婚後、グレモリー家のメイドをしているのだ。

そんな義姉さんの言葉を受け、リアスは涙目になりながら俺の服をギュツと掴む。

「やーリーア、おにーたまと一緒にいる！」

「リアス……」

妹の愛が凄い。兄さんとか父さんがいても俺にくつついてくるからな。考えみれば、今日はリアスに何も言わずに出てきたんだったか……。

俺は溜め息を吐き、リアスを抱っこしたままで言う。

「義姉さん、とりあえず上がりましょう。母さんに言えば剥がしてくれるかもしれない」

「そうですね、わかりました」

こうして、俺はリアスを抱っこしたまま歩き出す。その間リアスはすぐ上機嫌に鼻歌を歌っていた。

「母さん、ただいま帰りました」

歩くこと数分。母さんがいる広間に到着した。母さんは椅子に座って優雅に紅茶を飲んでいる。

母さんは俺の言葉を受けてマグカップを置くと立ち上がり笑みを浮かべた。

「あら、ロイ、お帰りなさい。早かったわね」

「今回は手早く済みましたから。相手が悪ければもう少しかかったかもしれません」
「とにかく、怪我もしていないようで良かったわ」

母さんはそこまで言うと、俺の胸に顔を埋めるリアスに少しだけ強めに言った。

「リアス、またロイにだだをこねたのね？あまりロイを困らせてはいけません」

「むう、だって、ロイおにーたま、急にいなくなっちゃうんだもん！」

頬を膨らませながら言うリアス。いい加減、風呂に入りたくないなあ。

俺がそんな事を思いながら苦笑していると、母さんが近づいてきて俺の匂いを嗅ぐ。そして、

「ロイ、あなた、匂うわ……………」

「え？」

俺はリアスを片手で支えつつ、服の匂いを嗅ぐ。確かにほんのりと血の臭いがするよ
うな——。

それを察した母さんは素早くリアスを俺から剥がす。リアスは手足をばたつかせて嫌がるが、それに構わずに言う。

「ロイ、お風呂に入ってきたきなさい。リアスはそれまで押さえておきます」

「わかりました」

俺が踵を返して風呂に向かおうとすると、

「やー！だつたらリアもはいるーっ！」

という叫びが聞こえてきたが、俺は無視して移動した。

「はあ〜」

グレモリー屋敷の風呂はいわゆる温泉である。男湯と女湯に別れ、時には父さん、兄さん、俺の三人が使い。時にはお客さんが使うところだ。

体を洗い終えた俺は湯船に浸かって冥界の空を見上げる。

星が見えれば雰囲気が出るんだが……。

俺がそんな事を思っていると、耳元に連絡用魔方陣が展開された。急な仕事かと警戒したが、次の瞬間に力が抜ける。

『ロイ、リアスがそっちに行ったわ。ごめんなさい、あの子元気だから………』

母さんの申し訳なさそうな声。時々リアスは俺たちの予想を越えてくる。

「わかりました。まあ、のんびり浸かっていますよ」

『ごめんなさい。疲れているでしょうに………』

「大丈夫です。妹が甘えてくるのも今ぐらいですから」

そう言つて連絡用魔方陣を消した瞬間、風呂場の扉が勢いよく開かれた。

「おにーたま、みつけた！」

と言いながら駆け出そうとする裸のリアス。俺は反射的に身を乗り出して、

「リアス！風呂場では走るな！」

少し強めに言ってしまった。俺がしまったと思った途端にリアスの目に大粒の涙が溜まり始める！

や、ヤバイ。ここで泣かれるのは困る……………！

俺はタオルを腰に巻いてリアスの前に行き、膝立ちをする。石畳だから地味に痛いけど、ここは我慢だ！

俺は優しくリアスの頭を撫でながら笑みを浮かべる。

「ご、ごめん、リアス。恐かったか？」

リアスは涙を拭いながらコクリと頷く。

「そっか、でも、お風呂場は走っちゃダメだぞ？怪我しちゃうからな」

俺の言葉にリアスは再び頷く。

俺は出来るだけの笑みを浮かべてリアスに言う。

「なら大丈夫。お兄ちゃんは怒らないから、お風呂入ろう」

「うん！」

リアスも笑みを浮かべて頷く。この子、時々暴走するけど聞き分けはいい方だから助かっていたりする。

……………で、

「おにーたま、いたくないー?」

「大丈夫だよ」

リアスに背中を流される俺。さつき嫌ってほど洗ったが、リアスがやると言うので再び洗うことになった。

しばらくゴシゴシと洗ってくれていたリアスの手が急に止まる。

俺は振り向きながらリアスを見ると、俺の左肩に目を向けていた。俺の左肩にはコカビエルにつけられた傷痕がいまだに残っている。

リアスは背伸びをしながら俺の左肩に触れる。

「おにーたま、こっこ、どうしたの?」

「……………」

俺は言葉に困った。今のリアスに本当のことを話してもわからないだろう。なら、何か教訓になりそうなものを…………。

俺はそこでふと思いついた。

「子供の頃にお風呂場で転んじまってな、その時に怪我したんだ……………」

先程のことに関連つけることにした。リアスのことだから大丈夫だとは思いますが、一応だめ押しをしておく。

それを聞いたリアスは頷いて、

「だからおにーたま、リーアをおこったの？」

「うん、まあ、そうだね」

「そうなんだー」

「そこまで話してリアスはお湯をかけてくれる。本当のことを話すにはまだ早いからな……………」

俺はその考えを一旦吹っ切り、リアスの方に向き直って笑みを浮かべる。

「次はリアスの番。ほら、座って」

「はい」

こうして、俺とリアスは二人して洗いっこをしたのだった。

数十分後。

「ふにゅ〜〜〜」

のぼせたリアス。先に上がっていいと言ったのだが、この子は聞いてくれなかった。

脱衣室にて、服を着た俺は服を着させたリアスをうちわで扇ぎながら考え事をしていった。

リアスは次期当主として色々な問題に当たる筈だ。俺はその時に何が出来る……？ 極端な話、俺の得意分野は殺しだ。リアスの障害になるものを排除……したらまずいな。うん、敵が増える。

ウンウンと唸りながら俺が考えていると、リアスがむくりと起き上がって両手を伸ばしてきた。俺は今考えていたことを後回しにしてリアスを抱っこする。とりあえず、部屋に運んでやらねば。

俺は毎日のようにわがままな妹に振り回されながら、今ある平和を満喫していた。

l i f e l 6 義妹？

珍しくありがたいことに何も無い休日。

俺は例の如くリアスの遊び相手になっていた。そして、今は――、

「……………」

グレモリー屋敷の庭にある木の上に息を潜めている。

今回はリアスと手の空いているメイドや執事たちと“かくれんぼ”をすることに
なったのだ。で、鬼はリアス。

俺以外の皆は見つけやすい場所に隠れているが、これは勝負、少々厳しいが本気で勝
ちに行く！

俺はそう決めて木の上に隠れたのだが、誰も来ない。もしかしたら忘れられたか、広
い屋敷をくまなく搜索しているのかもしれない。

俺がそう判断したと同時に近づいてくる気配が一つ。リアスのものだ。

小走り気味に俺が隠れる木の根本に移動すると、周りをキョロキョロと見渡して首を
かしげる。そして、少し時間を置いて一人のメイドが現れた。

「お嬢様、見つかりましたか？」

「うーん、おにーたまどこかな？」

「ここ、キミの真上。」

俺が木の上からバレないように見下ろしていると、メイドが視線を感じたのか見上げてきた。俺と視線が合った瞬間に目を見開いて驚いたが、声には出さずに錆びたロボットのようになぎぎぎぎと重い音をたてながら視線をリアスに戻す。

「いないなく、やつぱりおやしきかな？」

「そ、そうかもしれないですね」

リアスの言葉を受けて再び屋敷を目指す二人。俺はもうしばらくここにいることにした。

一時間後。

こ、これは、どうしたものか。あれから見に来ることもなければ心配すら感じないぞ。

俺が少し慌てっていると耳元に連絡用魔方陣が展開された。

『ロイ、今どこです!?!』

「母さん? えっと、庭の木の上ですけど……」

連絡してきた母さんに驚きつつ、俺は現在地を報告した。すると、母さんは大きく溜め息を吐きながら、

『戻っていらつしやい。リアスがあなたがいなくなったと言って騒いでいます……………』
「……………わかりました」

俺はすぐに木から飛び降りて屋敷に戻る。その最中にこう思った。——次からは手加減しよう。

屋敷に戻ってみると、泣きじやくるリアスと困るメイドたち、少し怒り気味の母さんが確認できた。

泣いていたリアスは俺を見つけると泣いたまま俺に駆け寄ってくる。

「ロイおにーたまああああー！」

「あー、えと、ごめんな」

勢いよく抱きついてきたリアスをそのまま抱き上げ、一応謝る。他に言葉が見つからなかった。そんな俺を見て、母さんが嘆息した。

「リアスと遊んでくれるのは構いません。私やジオテイクスにも見れない時間がありますから。しかし、なぜ遊びに本気になるのです?」

母さんからの質問に、俺は真面目な顔で、

「リアスに勝負の厳しさを教えようと思ったんです」

と返した。その瞬間に母さんのアイアンクローが俺に炸裂する！

「っ!!？」

リアスを落とさないように足を踏ん張るが、相変わらず強烈だ！本当に効く！

「それは大切です。何事も自分の思うようにはいきませんから。しかし、なぜ今なのです？他にもタイミングはあるでしょう？」

「は、はい……すいません……」

母さんの言葉に素直に謝っておく。確かに、リアスがもう少し大きくなってからやれば良かったな！

俺がリアスに悟られないように懸命に痛みを耐えているとグレイフィア義姉さんが現れた。

「お取り込み中に失礼します。セラフォル様がお見えになりました」
「？」

アイアンクローをされながら俺が疑問符を浮かべると、リアスが俺に抱っこされたまま嬉しそうにはしやぎ始めた。

「ソーナー！ソーナー！」

な、なるほど、あの子を連れてきたのか……。なら、納得だ。セラが仕事をサボってなければいいんだが……。

リアスははしやぎ始めたのを見て母さんは手を離してくれた。こめかみ辺りが痛むが、まあ、仕方がない。

息を整える俺を見ながら母さんが言う。

「とにかく、話は後です。セラフォルとあの子はあなたたちが対応しなさい。ロイ、コーヒーぐらいなら淹れられるでしょう?」

「え? まあ、味に自信はありませんが……」

「コーヒー?」

リアスは俺と母さんの会話に首をかしげる。まだコーヒーは知らないか。俺は抱っこする手を直しながらリアスに言う。

「コーヒーってのは、大人の飲み物って言うのか、ちよつと苦い飲み物だな」

苦いという言葉聞いて表情を青くするリアス。苦いのは苦手か。

そんなリアスを安心させるように言う。

「大丈夫だって、リアスには飲ませないから」

「本当?」

「ああ、本当本当」

俺が笑顔でそう言うと、リアスは少し怯えながらも頷いた。ならオツケーだ。

「それでは、母さん、いつてきます!」

「い、いつてきまーす」

俺はリアスを抱っこしたまま玄関ホールに向かい駆け出した。

走ること数分。

「おにーたま、へいき？」

「うん？ああ、大丈夫だよ」

いまだに残る痛みが俺を襲っていた。体力的には何も問題ない。戦場で何時間もぶっ通しで戦ったこともあるんだ、子供一人抱えて走るなんて余裕だ。

何て思っているうちに到着。そこには、

「ロイ！遅いわよー！」

少しご立腹のセラと、

「こんにちはー」

セラと手を繋いで笑顔を浮かべる黒髪の女の子がいた。

「ソーナ！」

リアスがじたばたと暴れ始めたので一旦下ろす。

下ろした瞬間にリアスは走りだし、ソーナと呼んだ女の子に抱きついた。そのソーナと呼ばれた女の子も嫌がらずに抱き締め返していた。

リアスと抱き締めあっている女の子はソーナ・シトリー、セラの妹でありシトリー家の次期当主だ。

妹同士が再開を喜んでいるうちにセラが俺の方に歩いてくる。

「ソーナちゃん、リアスちゃん、本当に仲良さそうで良かったわ」

「ああ、持つべきは友だからな」

二人して年寄り臭いことを言っってはみたが、実際友達は必要だと思う。俺もセラとはそこから始まったわけだし。

「ねえ、ロイ?」

「うん?」

リアスとソーナのことを見ていた俺を不意にセラが呼んできた。俺が振り向くと、
チユ……………。

軽く俺とセラの唇が触れた……。って、え!?

「(ちよ!?!場所と状況を考えろよ!)」

俺が慌てながら小声で言うと、セラはイタズラっぽく舌を出しながら言う。

「だって、ロイと会うのも久しぶりなんだもん☆イタズラしたくもなっちゃうわ☆」

セラはそう言うが、俺はハツとしてリアスたちの方を見る。今のに気づいていないのか、二人で何をしようか話していた。

俺はホツと息を吐き、セラに言う。

「セラ、やってくれるのはいいが、場所は考えてくれ。ハラハラする」

「そのハラハラがいいんじゃない☆」

ダメだこの娘、早く何とかしないと……………。

そう思いながらも俺は話題を変える。

「で、仕事はどうしたんだ。サボった訳じゃないだろうな？」

「だ、大丈夫よ。今日はオフを貰ったわ」

セラは心外だと言わんばかりの目で俺を見てきた。まあ、大丈夫だとは思っていたけ

どせい。

「ロイおにーたまー！セラおねーたまー！」

リアスがトコトコと俺たちの元に走りより、それにソーナが続く。

「何して遊ぶ？」

リアスの問いに俺とセラは笑みを浮かべて、

「さて、何をするか」

「そうね、何をしましょうか」

何をするかを考え始めた。妹と未来の義妹いもつと、俺からしてみれば未来とかそういうのは

関係なく、どちらも大事な家族だ。

数時間後。

「はあ……………」

「ふう……………」

俺とセラは部屋で休んでいた。ベットにはリアスとソーナが寝ている。あれから二人して妹に振り回されたが、どうにか満足させることが出来た。

で、セラは俺が淹れたコーヒーを飲んでいる。自分でも飲んでみているが、美味しいのかはわからない中途半端な味だ。

「それにしても、子供は元気だな」

ふと俺がそんな事を言ったのだが、セラはおかしそうに笑う。

「ふふ、言っていることがお年寄りよ？ 私たち、悪魔的にはまだまだ若いんだから」

「それもそうだが、子供が目の前ではしゃいでいると嫌でもそう思っちゃうんだよな」

そう言いながらコーヒーを一口。相変わらずの味だ。

「で、仕事はどうだ？ あんまり深くは話せないと思うけどな」

俺が訊くとセラは少し俯いた。

「順調だけど、やっぱりはぐれ悪魔は減らないわね。転生悪魔の制度は確かに私たちに
はいいことだけれど、そればかりじゃないわ」

やはり、まだまだそこところは難しいようだ。

俺はセラの肩に手を置いて励ますように言う。

「いつかに言ったが、俺はおまえを信じる。それが間違いでも、少しずついい方向に変えていけばいいさ」

「ロイ……………」

少しだけだが、セラの表情が明るくなった気がする。そして、そのまま少しずつ顔が近づいて……………」

「いやー、二人とも、お熱いね」

「……………」

聞き馴染んだ声が俺たちの後ろから、俺とセラがゆっくりとそちらを向くと、

「やー」

兄さんが軽く右手を挙げていた。って、兄さん!?

俺は驚きを隠しながら兄さんに訊く。

「兄さん、仕事はどうしたよ!?!」

「そうよ、サーゼクスちゃん! 私はオフだけど、サーゼクスちゃんは——」

俺とセラが仕事の心配をしたが、兄さんはそれに構わずに、

「あく、リーアちゃんは可愛いな」

リアスの寝顔をマジマジと見ながら表情を緩めていた。同時にセラが立ち上がり、兄さんに言う。

「何よ！リアスちゃんよりソーナちゃんの方が可愛いわ！」

「む、今のは聞き捨てならないな！ここは勝負といこう！僕はリーアの——」

「だったら私はソーナちゃんの——」
どこからかディスクを取り出す二人。確か、あれは記録媒体だったはずだ。それとはともかく、

「二人とも、他所でやってくれ。二人が起きちまう」

「うん！」

二人は頷くと部屋を出ていってしまった。扉の向こうから二人の声が聞こえてくる。俺は溜め息を吐き、さっきの騒ぎでも起きなかった二人に目を向ける。

可愛い寝顔してるな……。写真でも撮ろうかな……。？

何て考えが一瞬浮かんだが、すぐに首を横に振る！俺はそこまで変態ではない！シスコンではない！———と思いたい！

そんな俺の葛藤は誰にも知られることはなく、いつものように賑やかな俺の休日は過

ぎていったのだった。

lost life 新たな任務

はぐれ狩りとリアスたちの世話をしながら生活すること五年。リアスも九歳となり、だいぶしつかりしてきた。今日も朝にリアスに会ったら落ち着いた感じで、

「ロイお兄様、おはようございます」

と言われた。俺はいつもの軽い感じで、

「おう、おはよう。リアス」

と返したが、俺も固い感じにした方がいいのかと思ってしまう。

『おにーたま』と呼ばれていた頃が懐かしく感じるよ。

そんな事を思いつつ、手早く朝食をとり、出かける準備を始める。今日はあるヒトに呼ばれて魔王領に向かうことになっているのだ。

グレモリー屋敷、転移室。

一応正装に身を包んだ俺は、父さん、母さん、リアスに見送られて魔王領に転移しようとしていた。

「ロイ、大丈夫だとは思いますが失礼のないようにな」

「気をつけていきなさい」

「お兄様、お気をつけて」

「わかっています。話を聞いたらすぐに帰ってきますから」

俺は苦笑しながら三人の言葉に返した。同時に転移用魔方陣に魔力を送り、光を強くさせていく。

いざ、魔王領へ！

光が止むと、そこは見知らぬ部屋。魔方陣の前に係りのヒトと思われるスーツ姿の女性悪魔が待機している。

その女性悪魔が確認するように訊いてくる。

「あなたがロイ・グレモリー様ですね？」

「はい。ロイ・グレモリーです」

俺の返答に女性悪魔が頷くと続けた。

「では、こちらへどうぞ。ベルゼブ様とルシファー様がお待ちです」

「わかりました」

俺は女性悪魔の先導で建物内を進んでいく。やはりと言うべきか、この建物もかなり広い。

廊下を歩き、エレベーターでさらに上へ。エレベーターから出てからもさらに歩く。そして、ある部屋の前で女性悪魔が止まった。

「こちらの部屋です。私はここで失礼します」

「はい、ありがとうございます」

俺が礼を言うと、女性悪魔は「これが仕事ですの」と返してさっさと戻ってしまつた。俺は息を吐きながらドアの前に立ち、三回ノックする。

「失礼します」

一言言つてから部屋に入る。中には見慣れた紅髪の男性と、一度だけ見たことがある緑髪の男性が並んで立っていた。

緑髪の男性が俺を見ながら興味深そうに言う。

「彼が『^{クリムゾン・リッパ}紅髪の切り裂き魔』か。サーゼクス」

「ああ、そうだよ。アジュカ」

そう、この緑髪の男性がアジュカ・ベルゼブブ、新魔王の一人だ。そのアジュカ様が俺に用つて話だったんだが、何事なんだろうか。

俺は姿勢を正して二人に向き直る。

「ロイ・グレモリー、出向しました」

「うん、休んでくれ」

兄さんの言葉に少し姿勢を緩める。固いのは好きじゃないんだ。

俺が言葉を待っているとアジユカ様が単刀直入に言ってきた。

「ロイ・グレモリーくん、キミに私たちから任務をお願いしたい」

「任務……ですか？」

俺が聞き返すとアジユカ様は頷いて書類を見せてきた。

俺はそれを受け取り目を通す。その一番最初に書いてある言葉を見て俺は息を飲んだ。

『旧魔王派へと潜入』………！』

あのバカどものところに潜入するのか、何かヤバイ兵器でも作っているのかもしれないな。

俺が潜入は短期間だと思いついていたが、アジユカ様が補足し始める。

「書いてある通り、キミには潜入捜査官として長期間になってしまうが、旧魔王派への潜入を頼みたい」

長期間、確かに書類を読み進めると色々書いてあるな。

俺は小さく溜め息を吐いた。確かに、これは俺とか現場に慣れた奴じゃないと無理だな。

書類を読み進めていく俺を見て、兄さんが念を押すように言ってくる。

「ロイ、断ってくれてもいいんだ」

兄さんは出来ればそうしてほしいという声音で言ってきたが、俺の答えはだいたい決まっている。

「これは、『魔王全員』で決めた事なんですわね？」

それだけが聞きたかった。セラに黙って決められていたら即断るつもりだ。

俺の胸中を察してか、アジユカ様は言った。

「ああ、魔王全員で話し合った結果だ。他にも候補者はいるが、やはりキミが適任だと判断した」

そうか、なら、決まった。

俺は覚悟を決め、アジユカ様と兄さんに手短かに言った。

「やります」

俺の返事にアジユカ様は頷き、兄さんは小さい声で「ありがとう」と呟いた。

それがセラの望むことなら、それが悪魔の未来に繋がるというのなら、俺はやる。

俺が今すぐにも行けると言わんばかりにアジユカ様を見ていると、苦笑で返された。

「やる気十分なところで悪いが、本格的な準備はこれからなんだ」

今から準備って、何でだよ。こういうのって出来てから呼ぶもんだろ？

俺は失礼を承知でアジユカ様に訊く。

「あの、準備が完了したから俺を呼んだのではないのですか？」

「ああ、準備をして、万が一キミに断られたら全て一からやり直しになってしまおうからね。最終確認をさせてもらっただけさ」

アジユカ様は苦笑しながらそう返してきたが、俺に合わせた装備でも用意してくれるのかな？

俺はそんな疑問を感じつつ、アジユカ様に言う。

「わかりました。では、準備が完了次第開始ということですか？」

「そうなるな。とはいえ、準備にも時間がかかる。一週間程したらまた呼ばせてもらうよ」

「わかりました」

俺が踵を返して部屋を出ようとする、アジユカ様が俺を呼ぶ止めた。

「ロイクン」

「なんででしょうか？」

俺が振り向くとアジユカ様は念を押すように言う。

「これはご両親にも秘密で頼む。説明はごいつからするからな」

と言いながら兄さんを指差す。兄さんも頷いてくれた。

「わかりました。では、失礼します」

今度こそ俺は部屋を出る。後一週間でリアスたちとは一旦お別れか……寂しくなるが、仕方ない、か。

俺はそう思いながら転移室を目指した。

自分の弟に今までよりも危険な任務を任せる。出来れば断って欲しかった、なんて思ってはルシファー失格かな。

「今、断って欲しかったって思ったろ」

アジュカが僕の心を読んだようにそう言った。

僕は苦笑しながらアジュカに訊く。

「はは、分かったかい？」

「サーゼクス、お前とはなかなか長い付き合いだからな。それぐらいは分かるさ」

「僕は魔王失格かな」

「いや、誰だって断って欲しかったと思うさ、それが今回お前だったただけだ」

「ありがとう。アジュカ」

「いいさ、それじゃ俺は準備に戻る。お前の弟は死なせんさ」

自信に満ちた表情でそう言うアジユカ。彼が言うからには大丈夫だろう。僕は本当にいい友をもった。

「アジユカ……頼む」

「任せろ。ああそれと、セラフオールにはお前から言つといてくれよ？彼女との付き合いはお前の方が長い」

「分かってるさ」

さて、セラフオールにはなんて説明しようかな？

早くも一週間。俺は再びアジユカ様に呼び出された。つまり、準備完了というわけだ。

いつもの転移室、俺は黙って父さんたちを見る。父さんたちは既に説明を受けたのか、いつもより厳しい表情のように見える。

俺たちの変化を察してか、リアスも少し慌てているように見える。そんなリアスに俺は近づき、膝をついて視線を合わせる。

「リアス、いいか？俺はまた仕事だが、今回は長くなりそうなんだ」
「そうなのですか？」

急に不安そうになるリアス。俺は安心させるように笑顔を作りながら頭を撫でる。

「ああ。だから、父さんと母さんのこと、あとソーナのことも頼む」

「わ、わかりました」

「ああ、それと」

「何ですか？」

「俺はリアスを見守ってるから、どうにもならない時は心の中で呼んでくれ。きつと助けに行くから」

俺の言葉にリアスが頷いたら「いい子だ」と言いながら少し乱暴に頭を撫でてやる。そして立ち上がり、父さんと母さんの前に行く。

父さんは少し涙目になりながらも力強い声で言う。

「必ず帰ってこい……！」

母さんもそれに続いて力強く頷き、俺を抱き寄せる。

「リアスのことは任せなさい。あなたなら大丈夫」

俺は母さんを抱き締め返しながら頷いた。そして体を離し、最後に言っておく。

「リアスの事、頼みます。俺は近くで守ってやれませんか」

父さんと母さんはその言葉に頷いた。俺は頷き返し、魔方陣の中央へ。そして三人に順番に目を向けると笑みを浮かべる。

「では、行つてきます！」

「いつてらつしやい」

「いつてらつしやいませ」

三人の言葉を聞いたと同時に魔方陣を起動、魔王領に向けて転移した。

魔王領の前に来た部屋。

俺は机の前に立ち、置いてある道具に目を釘付けにされていた。

「あの、アジユカ様、これは？」

俺が疑問符を浮かべながらそれを持ち上げる。黒い二丁の大型のハンドガンだが、アンダーレイルに黒い刃がついている。いわゆる銃剣と呼ばれるものだ。

俺の疑問にアジユカ様は答える。

「うん、キミには魔力を隠して貰うことになるからね。武器は必要だ」

だからと言って、銃剣？

俺の疑問は尽きないが、アジユカ様は構わずに説明を始める。

「さて、まずはこの腕輪だ」

アジユカ様は黒い腕輪を見せてくる。

「これはキミの滅びの魔力を隠すものだ」

「魔力を隠す……ですか？」

俺が訊くとアジユカ様は頷いた。

「ああ、滅びを使ったらすぐにバレてしまうからな」

「なるほど」

確かに、戦闘して即バレは嫌だな……………。

俺が頷くとアジユカ様は続けた。

「そしてそれをすると共に連絡手段にもなっている。……、わかるか？」

アジユカ様は腕輪のとても小さな出っ張りを指差した。

「これですか？」

「ああ、このボタンを押して腕輪に魔力を込める。そして言葉を想像すると文字に変換され、送られてくる。やってみてくれ」

「わかりました」

俺は一旦銃剣を机に置き、腕輪をはめる。そしてボタンを押して魔力を込める。

『あーあー、聞こえますか?』

「やりましたよ?」

俺が訊くとアジユカ様は手元に魔方陣を展開して確認する。そして頷いた。

「大丈夫だ、確認した。問題なさそうだな」

次にアジユカ様は何かの缶を取り出した。その中には黒い塗料のようなもの……。

「……………」

俺は無言でアジユカ様を見る。何が言いたいかは言わなくても分かるだろう。

察してくれたアジユカ様が説明を始める。

「これで髪を染めてくれ。紅はあいつらには刺激が強すぎるからな」

紅はあいつらが憎む新魔王ルシファアの髪色。何も関係なくても因縁をつけられそうだ。

俺は頷き、それを受けとる。手につけてみたが、すごいベトベトしているな。

「では、早速染めてくれ。一度染めたら特殊な方法でしか戻らないように調整してある」
「わかりました」

返事をして即染めていく。だが、やるのが初めてなので少々時間がかかったが、無事に染められたかな? 髪型は後で変えることにしよう。

そんな事を決めつつ、俺はアジユカ様に訊く。

「大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。見事な黒髪だ。ついでに瞳の色も黒に変わる便利機能をつけておいた」

「ありがとうございます。それで、戻し方とは？」

俺が礼を言いながら訊くと、アジユカ様は指先に魔力を込めた。

「魔王の魔力を腕輪にぶつけることだ。今はやらないがね」

「わかりました」

魔力を腕輪につて、外すときに怪我しないか？

俺の疑問を察しているのかは別として、アジユカ様は続ける。

「さて、次はお待ちかねのこれだ」

アジユカ様は銃剣を手に取り、俺に渡してくる。

俺はそれを受け取り、マガジンを抜こうとするが、それらしきものが見当たらない。

俺が銃剣を見回しているとアジユカ様は苦笑した。

「それは悪魔^{エクスシスト}払いが使う光の銃を元に作った銃だ。弾丸の代わりに魔力を使う。一発に魔力を込めれば込めるほど弾は速く、強力なものになる」

「なるほど……………」

「刃の部分は特殊な合金で作ったものだ。そう簡単には折れないから安心してくれ」
「わかりました」

一応の納得はしたが、よくわからない部分があるから後で使ってみよう。

俺がボケッとそう思うと、アジユカ様は銃剣を指差しながら言った。

「ああ、それと、結構隠し要素もあつたりする」

「隠さないで教えてください……」

俺が半目で言うのとアジユカ様は苦笑しながら言った。

「その二丁の撃鉄部分を水平になるように合わせてみる」

「こうですか?」

銃口を外側に向けながら撃鉄部分を合わせた瞬間、鈍く光を放った!一瞬あと、光が

止むと、

「……………何ですか、これ……………」

銃剣が大型の剣かと思いきや柄頭からも黒い刃が延びている。

困惑する俺を見ながらアジユカ様は当然のように言った。

「両剣だが?」

「はあ……………」

当然のように言ってくるアジユカ様に俺は溜め息しか出せなかった。逆に怪しまれ

そうなんだが……。

俺の心配を他所にアジユカ様は言う。

「戻し方はそこ、引き金があるだろ？それを引くんだ」

刃の付け根に目立つように引き金がついている。言われた通りに引いてみると、再び光を放ち、一瞬、間を置いて元の銃剣に戻る。

啞然とする俺を他所にアジユカ様が言う。

「そんな感じのがまだあるから探してみてくれ」

「要らないです！これ以上あつても使いこなせないです！」

俺は本音をぶつけた。俺って転生してから剣ばかりだぞ!?銃はいけるが、ちよつと不安だ！

俺は心配しながらも差し出されたホルスターを受け取り、銃剣をしまう。

「こんなもんだな。サーゼクス、何かあるか？」

アジユカ様は後ろに控えていた兄さんに声をかけた。兄さんは頷き、俺の前にくる。

「ロイ、では頼むよ」

「ああ、こつちは任せろ。そつちは頼むぜ？討伐隊とか出して殺してくれるなよ？」

「わかつているさ」

笑顔混じりにいつもと変わらない会話をし、最後に真面目な顔に戻り、

「リアスのこと、頼む。あいつ寂しがり屋だからな」

「ああ、わかっているさ」

魔王だからやれることは限られるだろうが、それだけは言っておきたかった。

俺はフツと笑い、すぐに表情を引き締める。

「では、ロイ・グレモリー。任務開始します！」

こうして、俺は旧魔王派の領地に向けて出発したのだった。

ロイが任務に出発しようとしている。サーゼクスちゃんたちは『見送りに行かなくていいのか』って言うけど、今は会いに行かない。今行ったら、きつとロイを止めてしま
うから。

だから私は、ロイの無事を信じて待つことにしたの、ロイが帰ってこれる場所を守る
ためにも。

それから数時間。

俺は一人歩き続けていた。だが、そろそろかな？

そう思っていると、俺の前に巨大な城壁のようなものが見えてきた。

俺はそれに近づいていき、門の前に移動する。

すると、門の前に立つ衛兵のような格好の男性が言ってきた。

「何者だ！この先は真の魔王様が住まう地域だぞ！」

それはどうも。目的地に着いたこと教えてもらつちやつたみたいだ。

その衛兵は手に持った剣を構えてきているけどな。

俺は構わずに続ける。

「俺は、その真なる魔王様に仕えるために来た！」

「何？それは本当か？お前、名はなんという！」

名前か、困ったな。特に考えてなかった……。

「ジャック……ジャックだ！」

とつさに出したこれが今の俺の名前だ。

昔の異名の『紅髪クラムゾンの切り裂き魔リッパ』からジャック・ザ・リッパリッパを連想したのは内緒だ

！とりあえずどうだ！

「少し待て！」

それから一分ほど。

「よし！我々は貴殿を歓迎する！」

あつさり門を通された。なんつーザル警備だ。まったく、逆に不安になってきたぞ
……。

まあいいか。とりあえず、ロイ・グレモリー改め『ジャック』、任務開始だ！

月光校舎のエクスカリバー

mission01 ジャックの任務

俺——ジャックが旧魔王派に潜入して早くも九年程。

リアスも何事もなく成長していれば高校三年ぐらいだろうか……。

旧魔王派の任務である町に潜入している俺は、その町の郊外にある廃工場にアジトを作り、そこで生活している。

そのアジトの一室でタバコを吸いながらあることを考えていた。

俺が潜入しているこの町は『駒王町』と呼ばれており、数年前まではクレーリア・ベリアルという女性悪魔が管轄していた。

最初こそ順調であったが、そこで何かが起こり彼女は死亡。そして、管轄する者がいなくなつた隙に俺たちが潜り込めたわけだ。

裏に何かありそうだが、兄さんに聞いてみてもはぐらかされた。当然と言えば当然だろう。兄さんの事だ、俺に負担をかけたくないんだ。

タバコの紫煙を吐き出しながら、ここに来るときに旧魔王派から渡された書類を確認する。

当初の任務内容が書いてあったのだが、それがこの次に管轄する悪魔の監視だった。

……で、その悪魔つてのがまた、変な運命を感じるヒトだったわけだ。

俺は溜め息混じりに紫煙を吐き出し、先ほど届いた指令に目を通すと頭をかいた。

ここ最近、この町に入り込んだ悪魔エッグシネスト払いが何者かに襲撃され、そのまま死亡する事件が多発していた。

旧魔王派としては首を突っ込みたくないが、ここを管轄する悪魔があいつだから何とかしてやりたいとも思ってしまう。

俺はタバコを携帯灰皿に押し込み、黒い革ジャンを身につけ、部屋に置いておいたサングラスをかける。髪も伸びた分を後頭部に束ねて、いわゆる一本結びにしてある。

俺は部屋を出てここに俺と同じように滞在している今の同僚に声をかける。今は広間で談笑していた。

「すまないが、町に出てくる。少し調べたいことが出来た」

「わかりました、リーダー！」

「リーダーなら大丈夫だとは思いますが、お気をつけて」

テーブルを挟んでポーカーをしていた元氣そうな黒髪の男性悪魔クリスと落ち着いた様子の白髪の女性悪魔ジルが返してくると、建物の奥から金髪ショートヘアの女性

悪魔が現れ、

「隊長！私も行きま——」

言いながら小石につまずき、

「——すっ！」

豪快に転んだ。彼女はアリサという名前の新人だ。どこか抜けているが、腕は確かなのも事実だ。

俺は溜め息を吐きながらアリサに言う。

「わかったから早く準備しろ。急ぎって訳でもないが、急げよ？」

「わ、わかりました！」

顔についた汚れを気にすることもなく、アリサは敬礼すると素早く奥に戻っていく。何であんな子がこっちにいるのかね……………。

俺は苦笑しながらチラリとクリスとジルを見る。

「まあ、留守は頼んだ。つってもここに来るとしても、はぐれ悪魔ぐらいだがな」

「大丈夫です！ここは俺たちに任せてください！」

「私の結界に穴はありません。誰も入ってはこれませんよ」

クリスはガッツポーズをしながら、ジルは冷静な笑みを浮かべながら俺に返してきた。

俺たちがチームを組んでいる理由は簡単だ。旧魔王派のトップたちはここ最近、動きが完璧に読まれていることに疑問を持ち、裏切りを想定し始めた。なので、お互いがお互いを監視するという名目でチームを組まされているのだ。

俺とアリサがこの町の悪魔を、ジルとクリスが近くを管轄している悪魔を監視している。その悪魔も、まあ、俺と繋がりがあつた奴だったな。

俺がそんな事を思い返していると、

「お待たせしました〜」

随分ラフな格好に着替えてきたアリサ。俺は再び苦笑しながらアリサに訊く。

「アリサ、寒くないのか?」

「隊長、わかっていませんねえ〜。オシヤレとは我慢なんですよ!」

「わからないしわかりたくもない。それで弱音吐いても助けないぞ」

ドヤ顔のアリサに冷静に返したが、アリサはくじけずに返してくる。

「弱音は吐きませんし、それに隊長には言われたくないです!」

「別に服なんてサイズがあつていれればいいんだよ」

「黒い革ジャン、インナーにサングラスって、悪ぶつているんじゃないですか?」

無意識だろうが煽るような笑みを向けてくるアリサ。俺は無言でアリサに近づき、そのまま頭を鷲掴みにして力を込めていく。

「いたたたたっ!!」

「それが隊長に対する口の聞き方か?」

「わかりました!ごめんなさい!以後気を付けますー!」

俺とアリサのいつものやり取りを見ながらクリスは笑いを堪え、ジルは溜め息を吐いた。

「ならいい」

俺はそんな二人を横目に見ながらアリサを解放するが、アリサは頭を押さえて涙目になりながら睨んでくる。このままではきりが無いので俺は踵を返して出入り口に向かう。

「さっさと行くぞ」

「は、はい!クリスさん、ジルさん、行ってきます!」

「行ってこーい」

「転ばないでね?」

「大丈夫ですよ!」

歩く俺の後ろからそんなやり取りが聞こえたが、そのすぐ後にアリサの「ぎゃ!?!」という声と大きめの音が聞こえてきた。

俺は溜め息を吐きながら構わずに歩き続けた。

「ま、待つてくださーい……………」

アリサの声が聞こえたが俺は構わずに歩き続けた。

アリサと町に繰り出し、駅前で張り込む。アリサは終始疑問符を浮かべていたが、俺は無視するように努めていると、

「来たぞ……………」

「え？つて、あれはー！」

俺たちの視線の先には白いローブを着こんだ二人の女性、いや女の子が話しながら現れたところだった。

栗毛の女の子がニコニコしながら話し、髪に緑のメツシュをいれた女の子がうんざりしながらも慣れた様子で対応している。

別にそこだけを見れば何も感じることはない、だが、髪に緑のメツシュをいれた女の子が持つものに視線がいく。

布に巻かれた長い得物と思われるそれからは、悪魔である俺が危険と思う嫌なオーラを放つたれている。

警戒する俺を見ながら、アリサが周りを気にしながら小声で言ってくる。

「隊長、あの子たちって、まさか……………」

「ああ。あいつら、聖剣を持つているな。そんな奴らが動いたとなると、これはかなり面倒なことになってきた」

「出た！隊長の面倒嫌いいいたたたたつ！」

失礼な事を言ってきた部下に無言でアイアンクロウをくらわせる。

それをしながらもアリサに言う。

「さて、軽く尾行するか。あいつらがどこに滞在しているかぐらいは知っておいた方がいいかもしれん」

「わ、わかりましたあああつ！」

痛みに耐えながら返事をするアリサ。俺は例の二人が歩き始めたことを確認するとアリサを解放。尾行を開始する。

尾行すること数分。二人がある家に入っていった。まさか、ホームステイ的な何かな

のか？

俺がそんな疑問を感じながら、その家の近くで待機することさらに数分。

「っ！」

「隊長……！」

「ああ、わかつてるよ」

ここに近づいてくる悪魔の気配を感じた。数は二つ、ここを管轄している悪魔の眷属だろうとすぐに察することが出来る。

俺とアリサは素早くその場を離れて手を繋ぐと、逆にその二人の悪魔に近づくように歩き始める。

「それにしても、最近寒くないか？そんな格好だと余計だろう？」

「そうでもないわ？慣れれば楽なものよ」

俺たちがそんな会話をしていると、俺たちの横を茶髪の男の子と金髪の女の子が通り過ぎていき、少し慌てた様子で先程の家に入っていく。

俺たちが視界の端でそれを見ながら話を戻す。

「隠していたとはいえ、気づかないか……！」

「まだ悪魔になって日が浅いのかもかもしれませんね」

転生悪魔は転生したばかりだとオーラの察知が下手だ。それを確かめるためにもこ

んなことをしたのだが、どうやらまだ悪魔としては未熟なようだ。

俺とアリサはそう話しながら家の見える位置に戻る。

待つことさらに数分。

今度は強めの悪魔の気配を感じ取れた。俺がアリサにバレないように懐かしさと同時に少しの罪悪感を覚えていると、それと同時に女の子二人が家から出てくる。そして、そのまま歩き始めた。

「隊長、どうしますか？」

「このまま尾行だ……。バレるなよ？」

「わかりました」

俺とアリサは頷きあうと、そのまましばらく尾行を続けた……。

この町を管轄する悪魔、俺にとってはかけがえのない家族であり、二人いる妹の一人……。

俺は脳裏に紅髪の女の子を浮かべながら、尾行を続行した。

数時間後、アジトにて。

「なるほど、ついに聖剣使いが動きましたか……。」

「これは、そろそろ場所を動くべきか？」

「しかし、下手に動いたら見つかってしまうかもしれないよ？」

ジル、クリス、アリサが順で俺に言ってきた。

尾行を続け、聖剣使いの女の子二人は近くの廃教会に入ってしまったところで中止した。途中で栗毛の女の子が謎の絵画と思われるものを買っていたが、何だったのだろうか……。

俺は溜め息を吐き、タバコをくわえて火をつける。

「また、しばらくは静観だな。他にも面倒な報告がさつき本部から来たところだ」

と言いながら紫煙を吐き出す。まさかとは思ったが、多分運命つてのはあるんだろうな……。

「報告ですか？ 一体何が……」

ジルが興味深そうに聞いてきた。俺は頷きながら書類を見せる。それを見た途端にジルとクリスは表情を固くし、アリサは首をかしげて疑問符を浮かべた。そして、クリスが思わず地を出しながら訊いてくる。

「リーダー！ この情報、本当かよ!？」

「ああ、クリス。俺も信じたくはないが、本部は情報の精度を確認済みだそうだ」

「これは厄介ですね……!」

クリスとジルは緊張し始めるが、アリサはついでこれずにオロオロし始めた。

俺はタバコの紫煙を吐き出しながらアリサに訊く。

「おまえは戦争が終わってから生まれたんだったな？」

「はい。戦争のことはお父さんの話でしか知りません」

「なら、そこまでわからないかもしれないが、この町に堕天使の幹部が来てやがる」

「……………え!？」

俺が憎々しげに言うと、アリサもついに驚愕の声を出した。そのままアリサが訊いてくる。

「そ、それで、幹部の誰が……………?」

俺は右目の痛みを堪えるように息と紫煙を吐き、タバコを乱暴に携帯灰皿に押し込むと、アリサに視線を向けながら憎々しげに言った。

「コカビエルだ。堕天使の幹部でも特にイカれた戦鬪狂だよ……………!」

俺とコカビエル、戦争中から続く俺たちの因縁は、俺の妹たちを巻き込む形で続いているようだった。

「じゃあ、お兄ちゃんとかですか?」

俺は無言でサングラスを上にはずらし、じつとアリサを睨む。アリサは「ご、ごめんなさい……」と返して黙ってパフェをつつき始めた。

俺を兄と呼んでいいのは今のところリアスとソーナだけだ。

俺はその言葉の代わりに溜め息を吐き出し、サングラスを元の位置に戻し、視線を例の席に戻す。

すると、茶髪の悪魔くんがケータイでどこかに連絡を取っていた。

バレたかと警戒したが、悪魔たちも聖剣使いも目の前の相手に集中しているのでそれはなさそうだった。

俺はコーヒーを飲み、監視を続行した。

数分後、呼び出されたと思われる金髪のイケメン悪魔が現れた。茶髪の悪魔男子ともう一人の悪魔男子と同じぐらいの年齢だろうか……。

監視を続けていくと聖剣使いの二人はレストランを出ていき、悪魔たちだけが残る。

アリサがそちらを追おうとしたが、俺はそれを手で制してケータイを取り出す。

「ジル、頼んだ……」

『わかりました。クリス、行くわよ』

ジルの声に少し遠くから『任せろ!』と返事が聞こえてきた。聖剣使いの尾行は外に待機していたジルとクリスに任せ、俺とアリサは悪魔たちを監視する。

しばらく待っていると、悪魔たちが急に大声を出してきた。

「俺の目標は——ソーナ会長とデキちゃった結婚をすることだ!でもな……………」

途中で声のトーンを落としたせいで後半は聞き取れなかったが、『ソーナ』って、まさか……………」

俺が嫌な予感を感じていると、茶髪の悪魔くんが続くように、なぜか涙を流しながら叫んだ。

「そうか!なら聞いてくれ!俺の目標は部長の、リアス先輩の乳を揉む、そして吸うことだ!」

ソーナときて、『リアス』ときたか。つまり、あのバカどもは二人の眷属ってことか?あの二人、男を見る目が少し残念かもしれない……………」

俺が妹たちのことを心配していると、アリサが引き気味に言った。

「あの二人、真正正銘のバカですね。何であんな事をこんな人の目のつくところだ……………」

「……………バカなんだろう?」

俺たち同様に周りのお客たちも奇異の視線を二人に送っている。

白い髪の子悪魔と金髪のイケメン悪魔くんは嘆息していたが、あんな二人が知り合いつて苦労しそうだな……………。

レストランの会話を聞いた数日後。

俺とアリサは町に繰り出し、ある建物の屋上で双眼鏡を覗きこんでいた。

双眼鏡のレンズにはレストランで話していた悪魔たち四人が写っており、彼らはここ数日の間、神父の格好で町中を歩き回っていた。

俺とアリサがそんな遠目からの監視に飽き始めていると、ついにその悪魔たちに謎の神父が襲いかかった！

「来ましたね！」

「ああ」

俺の横でアリサがメモ帳を取り出しながらしゃがむ。

一応の俺たちの任務、ここを管轄する悪魔の眷属の戦力確認だ。深いことは直接見ないと調べられないので、こうして地道に調べさせてもらっている。

他の旧魔王派の悪魔たちも同様の事をやっているわけだ。

だが、俺の目は悪魔たちに襲いかかった神父が持つ剣に目がいった。

「聖剣、エクスカリバー、か。さて、どうする、悪魔くんたち？」

俺が興味深そうにそう言うと、アリサが横でメモ帳にエクスカリバーの事を書こうとしていた。が、特に何もわかっていない様子で首をかしげていた。

俺がジツと悪魔たちの様子を見てみると、悪魔たちは神父の服を脱ぎ捨て、そのまま茶髪の悪魔くんが左手に赤い籠手を出現させた。

「あれはー！」

「どうしましたか!？」

俺の驚愕の声にアリサもつられる。俺は少し落ち着かせながらアリサに言う。

「多分だが、あの籠手は赤龍帝の籠手だ。二天龍の片割れ、『赤い龍』を封じ込めた神

滅具……!」

人間は神セイクリッド・ギア 器と呼ばれるものを先天的に持つて生まれることがある。それを持つも

のは大概大物になるが、あの悪魔くんが持つのはその中でもレア物、極めれば神さえ殺せると言われているものだ。

——が、その神は既に死んでいるんだよな。

俺の動揺にアリサも困りながらもメモしていく。

ソーナと結婚すると言っていた悪魔くんは右手にデフォルメしたトカゲの頭を出現させ、そこから神父に向かって舌を伸ばす。あれは確か……。

「あれは黒い龍脈だな。確か、『黒邪の龍王』——ヴリトラを封じた神器の一つだった筈だ」

「メモメモ」と

俺たちが確認しているうちに戦闘が始まり、金髪のイケメン悪魔君が魔剣を手に聖剣使いの神父に挑んでいった。

聖剣の方は残念ながらよく分からないからな、今回は無視だ。

それにしても、

「あの神父、なかなかやるな」

俺はそんな事を思った。

「悪魔四人を相手に聖剣があるとはいえ結構勝負出来ている。結構腕がたつエクソシストなのかもしれない。」

そんな事を思っていると、金髪イケメンくんが魔剣を作り出した！

「今度は魔剣創造か、面倒なやつばかりだな」

「使い手によつてはあらゆる属性の魔剣を作り出せるものでしたのよね？」

「ああ、そうだ。よく勉強しているな」

俺がアリサを褒めると、悪魔たちが動きを止めてある一点を見始めた。

双眼鏡でそちらを見ると、そこに新たな人物が現れていた。神父の格好をした初老の男だ。金髪イケメンくんがその男を憎悪するように睨んでいる。

何言かその初老の神父が聖剣持ちの神父に言うと、二人して逃げようとし始める。そこに聖剣使いの二人の女の子が現れた。

それと同時に聖剣持ちの神父が懐から球体を取り出した。俺はすぐさま双眼鏡から目を離したが、

「どうかしたんですか？」

アリサが逆に双眼鏡を覗きこんでしまった。その瞬間、

「ギヤアアアアツ!?目が、目がああああああ！」

「閃光玉を使いそうだったんだ。言い忘れた」

アリサが目を押さええながら転がり回り、俺はそんな彼女を見ながら平謝りする。そして、ある覚悟を決めた。

「アリサ、戻るぞ。今日確実に何かが起こる」

「は、はい！わかりました！」

目を擦りながら立ち上がり涙目で俺に返すアリサ。俺は頷くとアリサを置いて歩きます。アリサは何度もまばたきしながら俺の後に続く。

アジトに戻った俺はすぐさま本部に連絡を取った。

『ジャック、どうかして?』

俺の通信に答えるのは直属の上司——カテレア・レヴィアタンだ。俺が潜入した当初にこいつの下に配属され、そのまま行動している。

俺はカテレアに進言する。

「カテレア様、私にコカビエルを殺らしてください」

「た、隊長!？」

「……………」

俺の言葉に聞き耳を立てていたアリサは驚き、ジルとクリスは無言で聞いている。

『…………それは、なぜです?』

少し怒気を含んだ声。カテレアはキレかけているが、冷静を装って訊いてきていた。俺も冷静なふりをしてカテレアに言う。

「このままコカビエルがここの悪魔たちを殺せば、再び戦争になります」

『よいではありませんか、私たちはそれを望んでいます』

カテレアの言葉に、俺は心の中で兄さんたちに謝りながら返す。

「今の偽りの魔王どもが支配している限り、戦争が始まったところで同じことの繰り返しです」

『つまり、戦争は今起こすべきではないと?』

「はい」

俺は即答でカテレアに返し、お互い黙りこむ。

すると、俺の背後から声がかかった。

「カテレア様、私からもお願いします」

声の主はジルだ。彼女は俺に微笑しながら言葉を続ける。

「今回の事件、うまく解決させれば三竦みのトップ会談になる可能性もあります。いえ、アザゼルのことですから、絶対にそうなるでしょう。その会談を狙えば……」

『奴らを一網打尽に出来る………とやりたいのかしら?』

「はい」

ジルの言葉を聞いて、カテレアは考えているようだった。俺とジルに軽く頭を下げると、耳元でいつもと違う口調で、

「気にするな。お互い、あの子たちには死んでほしくないからな」

と言ってきた。こいつは俺の本名を知らないが、俺もこいつの本名は知らない。だ

が、俺とジルの右腕には全く同じ腕輪が巻かれている。

俺たちが返答を待っていると、カテレアが言った。

『わかりました、おやりなさい。ただし、我々の存在を悟られないようにするのです。出て来ますね?』

「はい。向こうには偽りの魔王からの増援と思わせるつもりです」

俺はそう返すと、カテレアは『では、後程』と言って連絡用魔方陣を消した。俺は溜め息を吐き、ジルも微笑を浮かべた。

「さて、そういうことだ。ジル、アリサ、おまえらは退路の確保。クリス、おまえはここを守れ。俺が戦闘区域に突入する」

「わかりました」

ジルは口調をいつものものに戻して返事をする。

「ま、リーダーがやるって言うなら従うだけですよ!」

クリスはニカツと歯を見せながら笑みを浮かべた。

「わ、わかりました! 隊長がやるなら私もやります!」

アリサも少し慌てながらも返事をしてくれた。一番若手の彼女には無理をさせているのかもしれない。

だが、俺はその無理を通してでもやらなければならない。コカビエルとの決着、これ

だけは誰かに譲ることのできない、俺がやらなければならないことだ。

俺は瞑目し、深く息を吐く。そして声を張り上げた。

「よし、行くぞー！」

「はいー！」

「おうー！」

俺は号令を飛ばし、各々が応答する。いつもの事をしながら、俺たちは準備に取りかかった。

mission03 戦いを求める者

ジャックチームが作戦の準備を進めているなか、アリサに『真正銘のバカ』と呼ばれた男子悪魔——兵藤一誠は、彼の主にあたる女子悪魔——リアス・グレモリー、そして、彼と同じくリアスの眷属であり、先日ジャックとアリサとすれ違った女子悪魔——アーシア・アルジェントはいつものように寢床につこうとしていた。

—

俺——兵藤一誠は、俺のご主人様である部長ことリアス先輩と、俺の妹的存在であるアーシアと一緒に寝ようとしていたが、かつてないプレッシャーを感じて家の外に目を向ける。

そこには俺の家の前に立ち、こちらを見上げてくる神父の姿が——。

「……クソ神父ッ！」

俺たちに挑戦的であり、同時に下品な笑みを浮かべているのは、今日の放課後に俺たちを襲ってきた神父——フリードだ。

あの野郎！逃げた思ったらこれだ！あのあと何があった？あいつらは？

俺がフリードを追っていったあいつらのことも気になるが、フリードは俺たちに手招きをするかどうかに向かつて駆け出した。

「……………墮天使か」

部長が指を鳴らすと服が寝間着から学生服へ変わる。俺とアーシアも領きあうと、フリードを追って家を飛び出した！

「やつほー、イツセーくん、アーシアたん。ご機嫌麗しいねえ。元気にしてた？」

追うこと数分。道の真ん中でフリードがふざけた口調で話しかけてきた。

「何か用か？」

俺が問うがフリードは嘲笑しながら肩をすくめただけだ。

さつき感じたプレッシャーはこいつのか？でも、あの時感じたのはもつと圧倒的な……………。

俺が疑問を抱いていると、部長が何かに気づいたように空を見上げた。

月をバックに空に浮かんでいるのは……………漆黒の翼を生やした男の墮天使！

いち、に、さん……………翼が九枚！

装飾の凝った黒いローブに身を包んだ墮天使は、部長を捉えると苦笑する。

「はじめましてかな、グレモリー家の娘。紅髪が麗しいものだ……」

その墮天使はそう言うのと、縦に入った左目の傷をなぞり、憎悪の対象を見るように言った。

「忌々しい兄君たちを思い出して反吐が出そうだよ」

いきなりの物言いに俺は驚くが、同時にある疑問を抱いた。

これまで聞いた話だと、部長のお兄様は現ルシファーであるサーゼクス様だけの筈でも、あの墮天使は『たち』って、一体どういうことだ？

俺は疑問を抱きながらも部長を見る。部長は見たことがないほど冷淡な表情を浮かべていた。

「ごきげんよう、墮ちた天使の幹部——コカビエル。それと私の名前はリアス・グレモリーよ。お見知りおきを。もう一つ付け加えさせてもらうなら、グレモリー家と我らが魔王は最も近く、最も遠い存在。この場で政治的なやり取りに私との接触を求めるなら無駄だわ」

コ、コカビエル!? コカビエルって、聖書とかにも名前が載っている本物さん!?

よく見ると、コカビエルは腕に何かを抱えていた。あれは、人か？

「……いつは土産だ」

コカビエルはそう言うところらにその誰かを投げてくる。

「おわっ！」

俺は即座に反応してその誰かを受け止める。そして顔を確認すると、

「イ、イリナ!？」

先日、コカビエルに奪われた聖剣を奪い返しにきた紫藤イリナだった！血まみれで息も荒い！あのあとフリードたちを追ってこうなったのか!?

「お、おい！しっかりしろ！」

俺が呼び掛けても苦しそうに呻くだけだ。これは、ヤバイんじゃないのか!?

「俺たちの根城まで来たのでな、歓迎させてもらった。まあ、二匹逃がしたかな」

コカビエルは嘲笑しながら言う。奴の話だとあの二人は逃げられたらしいな。

「アーシア！」

道にイリナを降ろし、アーシアに治療させてもらう。アーシアの神セイクリッド・ギア器は

トワイライト・ヒーリング聖母の微笑みと呼ばれる、傷を瞬時に治せるといふものだ。

アーシアは体から緑色のオーラを発し、イリナの体がそのオーラに包み込まれていく。徐々にイリナの表情も緩和していき、呼吸も落ち着いてきた。

俺とアーシアがホッと息を吐くと、コカビエルは話を続ける。

「魔王と交渉などというバカげたことはしない。まあ、妹を犯してから殺せば、サーゼク

スとあの男が出てくるかもしれない。いや、サーゼクスなどどうでもいい！俺はあの男と戦えればそれでいいのだ！」

コカビエルは左拳を握りながら、まるで昔を思い出して興奮するように叫んだ。あの男つて、一体誰だ？

部長は侮蔑したような、同時に怒りを込めたような目でコカビエルを睨む。

「コカビエル、あなたはロイお兄様との決着のために再び戦争を起こそうというの？」
「ああ。だが戦争の勃発は奴と戦うための一つの手段だ。だからエクスカリバーを奪ったのだが、天界は何もしてこなかったからな」

コカビエルはそう言うと、部長を睨みながら憎々しげに続ける。

「俺はあの男との、ロイ・グレモリーとの決着がつけられれば十分だ！戦争がどうなるうが、俺と奴が殺しあい、どちらかが死ねば、それで構わん！」

部長とコカビエルの話から察するに、そのロイっていうヒトが部長のお兄さんで、コカビエルとの何かしらの因縁があるのか？

コカビエルは興奮を落ち着かせるように息を吐き、部長に目を向けた。

「奴が今どこにいるかはわからん。だが、妹である貴様を殺せば、奴のことだ、すぐさま現れるだろう。あの時のようにな……………」

コカビエルはまるで懐かしむように言った。こいつ、昔に何があつたんだ？

疑問が続出する俺の前で、部長が俺に聞こえるほどの舌打ちをした。部長がこんなことをするなんてよほどぶちギリしている証拠だ。

コカビエルはその舌打ちを無視して俺に目を向けた。凄まじいプレッシャーだ。マジで全身が震え始める。だが、俺は強気の姿勢だけは崩さずに問う。

「……………俺に何か言いたいことでもあるのか?」

「いいや、だが、アザゼルなら何か言うかもしれないと思っただけだ。あいつのコレクター趣味は異常だ」

——アザゼル? 確か、堕天使の総督だったな。

セイクリッド・ギア
神 器を集めているのか?

「どちらにしろ、俺はおまえの根城で暴れさせてもらうぞ、リアス・グレモリー。戦争の、いや、あの男との決着のためにな! 忌々しい奴の妹、そして、レヴィアタンの妹、それらが通う学び舎だ。戦場としてはちようどいい」

こいつ、無茶苦茶だ! そのロイってヒト、コカビエルに何をしたんだ!?

「ひやははは! 最高でしょ? 俺のボスって。イカレ具合が素敵に最高でさ。俺もついつい張りきつちやうのよお」

フリードは心底おかしそうに哄笑をあげている。そんなフリードを見ながらコカビエルが言う。

「バルパーの研究、ここまできれば本物か。俺の作戦に付いてきたときは正直怪しいと

ころだったかな」

コカビエルとバルパーは手を組んでいるってことか。バルパーが絡んでいるってことは、あいつもきつと——。

俺がこの場にはいない部長の『騎士^{ナイト}』の事を一瞬考えると、コカビエルは九枚の翼を羽ばたかせて学園の方に体を向けた。

「さあ、戦争だ！リアス・グレモリー！『切り裂き魔^バ』のように俺を楽しませろ！」

フリードの野郎が懐から目眩まし用のアイテムを取り出し、それを地面に叩きつける！

閃光が俺たちの視界を奪い、回復した頃にはコカビエルもフリードも消えていた！

あいつらの話だと、あいつらの向かう先は——！

「イツセー、学園に向かうわよ！」

「はいー！」

堕天使幹部との決戦が始まろうとしていた！

俺は木に背を預け、耳に装着した小型のインカムから聞こえるアリスの声に意識を向

ける。

『隊長、聞こえますか?』

「ああ、聞こえるぞ。そっちの準備は?」

『はい! 離脱用魔方陣の準備は出来ました! 魔方陣をルシファーのものに似せるのには苦勞しましたけど……』

「ならいい。俺の合図を待て……」

『わかりました!』

俺は溜め息を吐き、視界の先にある学園に目を向ける。コカビエルが入っていったところに結界が張られたことは確認できた。あとは、中に入るだけだ。

インカムの周波数を変え、ジルにコールする。

「ジル、どうだ?」

『はい、即興にしてはいい結界です。が、まだまだ年同様の甘さが目立ちます。すり抜ける術式もすぐに完成させますので、もう少しお待ち下さい』

「わかった、急げよ」

ジルの言葉に返し、そのままクリスにコールする。

「クリス、そっちは?」

『はい。どうやら、他の班に違う指令が飛ばされたようで、到着して早々にどこかにいつ

てしまいました。内容を聞こうと思ったら、「これは我々の任務だ、そちらはそちらの仕事をしろ」と返されてしまいました』

「なら、仕方ないか……」

俺は溜め息を吐くと周波数をチーム共有のものに変更し、三人に聞こえるように言う。

「さて、諸君。腕の見せ所だ、派手に行こう……」

『派手にやるのは隊長だけですけどね!』

「………アリサ、後で覚えていろよ?」

『え!?!』

『リーダー、死なないでくださいよ?』

「クリス、俺はそこまで弱くないさ……」

『違うんです』

『リーダー、どうかご無事で……』

「ああ、任せろ」

『ま、待つてください! わ、私は……』

俺は三人の言葉に返すと、アリサの言葉を最後まで聞かずにインカムの電源を切る。

そして着ているローブのフードを深く被り、学園の方に視線を戻す。

「さて、コカビエル。決着をつけるか……」

俺の呟きは誰にも聞こえることなく、夜風にのって静かに消えていった――。

mission04 禁手

「リアス先輩。学園を大きな結界で覆っています。これでよほどのことがない限りは外に被害は出ません」

俺、兵藤一誠の前で、先日レストランで語り合った同期の悪魔、匙元士郎が部長にそう報告した。

俺たちが通う『駒王学園』の目と鼻の先にある公園で、俺たちは集まっていた。だが、あいつだけがない、どこにいるんだ？

負傷したイリナはソーナ・シトリー生徒会長のお家で休ませるそうだ。アーシアの力で最悪の結果は回避できたから、とりあえずは安心だろう。

学園を覆う結界は会長の眷属である現生徒会メンバーが維持しているとのこと。中で戦闘をして、流れ弾が近所の家に当たれば大事になってしまう。それを避けるための配慮だ。

「あの結界は周辺への被害を抑えるためのものです。正直言ってしまえば、あの程度ではコカビエルを押さえることは出来ないでしょう。最悪、この町が崩壊します」

会長の言葉を聞いたメンバーは絶句した。堕天使の幹部って、そんな次元の話なのか

!?

なんて傍迷惑な幹部だよ！俺たちの住む町を、ロイってヒトとの決戦をしたいがために破壊する気なのか!?!ふざけんな！

俺が怒りを溜めていると、ふと、今のうちにそのロイってヒトの事を知っておいた方がいいのでは？という考えがよぎった。

「あの、部長」

「何かしら、イツセー」

匙から結界の説明を受けた部長に声をかけ、単刀直入に訊く。

「その、コカビエルが言っていたロイって、どういうヒトなんですか？」

部長は俺の質問に少し驚いた表情をするが、いつもの微笑を浮かべると少し懐かしむように俺に言ってきた。

「コカビエルの言っていたロイ・グレモリーは、サーゼクスお兄様の弟で、私のもう一人の兄よ」

今さらだけど、部長って三人兄妹の末っ子っていうことなのか。

俺が頷いていると、会長が部長に続く。

「兵藤くん。コカビエルの翼を見ましたか？見たのなら、それが何枚か覚えていますか

？」

「え？ああ、はい。確か九枚でした」

俺は少し前の事を思い出しながら答えると、会長が再び訊いてきた。

「それを見て、少し違和感を覚えませんでしたか？」

「……………」

俺は思い出しながら少し考えると、確かに違和感を感じた。本来翼なら一対ずつが普通の筈だ。奇数であるはずがない。

俺がそう考えたのが顔に出ていたのか、会長が言った。

「コカビエルの翼の一枚を落とし、左目を潰したのがロイ様です」

会長が当然のように言ってきた言葉で俺は仰天した！

「か、幹部の翼を落とした!?それに左目を潰したって、何者ですか!?そりゃ因縁つけられますよ!?!」

「けれど、ロイお兄様はとても優しいのよ?子供の頃はよく遊んでもらったわ」

部長が懐かしそうにそう言うが、本当に何者なんですか!?案外ムキムキのマツチヨマンなのか!?

俺が勝手にロイさんの事を考えていると、部長が少し声のトーンを落としながら言った。

「けれど、ロイお兄様もその時に右目を潰されて、左肩にも深い傷をつけられてしまった

の。百年以上たつても時々痛がっていたわ」

「それはリアスが叩くからでしょう？」

「ちよつと、ソーナ!? あなただつて叩いていたでしょう!？」

「あなたのように加減なしに叩いたことはありません」

「いいえ、絶対に全力だったわ!」

「そんな事はありません!」

部長と会長が何か言い合いを始めてしまったが、おかげで少しだけ場の空気が和んだ気がする。

いまだに口論を続けているお二人は、俺たちの視線に気がついたのか、同時に咳払いをして話を戻した。

「それで、ロイお兄様は行方不明なの。ある任務中に消息を絶つてしまったらしいわ」

行方不明。コカビエルはそのロイさんを誘きだすためにこの町に来たつてことなのか？

「その、すいません……」

俺は振つてはいけない話題かもしれないと思い、部長に謝るが、部長は笑みを浮かべた。

「いいのよ。ロイお兄様はきつと生きているわ。あの時、約束したもの……」

再び懐かしむように言う部長。これ以上は踏み込まないほうがいいかもしれない。俺はそう判断して、「ありがとうございました」と言つて話題を終了させる。

それを確認した部長の『女王』^{クイーン}である姫島朱乃副部長が部長に言った。

「この状況はサーゼクス様に打診しましたわ」

それを聞いた部長は頷く。

「ありがとう、朱乃。出来ればサーゼクスお兄様に迷惑はかけたくないのだけれどね……………」

「ご理解していただきありがとうございます。サーゼクス様の加勢が到着するのは一時間後だそうです」

「一時間……。わかりました、その間、私たち生徒会は結界を張り続けてみせます」
会長の決意を聞き、部長も覚悟を決めた様子だ。

「……………」時間ね。さて、私の下僕悪魔たち。これは死戦よ！それでも死ぬことは許さない！生きて帰つてあの学園に通うわよ、皆！」

『はー！』

部長同様に俺たちも覚悟を決め、気合いを込めた声で部長に答えた！

俺——ジャックは学園に結界を張る悪魔たちを監視していた。ジルの術式が完成したら即突入することになるだろう。

中で少し様子を見るかもしれないが、戦闘になることは間違いない。

俺は腕輪のボタンを押し、兄さんに連絡を取る。

『兄さん、これからリアスたちに加勢する。時間の猶予は？』

『あと一時間ほどだ。それが過ぎたらそちらに到着する予定になっている。それまでにタイミングを見て加勢してくれ』

『了解。まあ、一時間も待っているなんて面倒だからな』

『リアスのこと、頼む』

『任せろ。こつちもリアスとの約束があるんでな』

そう返してボタンを再び押し、通信を終える。さて、あとはジルの術式完成を待つだけだ。

待つこと数分。

俺のインカムに通信が入る。

『リーダー、完成しました、今送ります』

その言葉が終わると共に俺の手元に魔方陣が描かれた紙切れが転送されてきた。俺はそれを懐にしまい、ジルに伝える。

「これからしばらく連絡は出来ない。脱出のタイミングになったらこつちから連絡するから、アリサにも言っておいてくれ」

『そのぐらい、自分で言っていただけなのですが……わかりました』

それと同時に通信が切れる。

俺は結界に目を向けると、そこには監視していた髪にメッシュを入れた聖剣使いの女の子が悪魔たちと話し込んでいるところだった。

結界を張っている悪魔たちがそちらに注目しているうちに俺は跳躍して結界の上部から侵入、結界と体が当たる瞬間に紙切れが一瞬光り、結界を無効化してくれた。

俺はそのまま校舎の屋上に着地する。

俺は屋上の柵に手をかけて下を見ると、そこには破壊された体育館と思われるものと、その近くの校庭で三つの頭部を持つ犬——ケルベロスと戦うリアスたちの姿が見てとれた。

それを確認すると次は上を見上げる。そこには、俺に気づいていないであろう宿敵の姿。白濁した左目でリアスたちを見下している。

「カビエル」

俺は気配を殺して奴の左側の校舎の屋上にいた。両目が見えていればコカビエルは俺に気づいただろうが、あいにく俺は奴の死角にいるわけだ。

俺がそれを確認して下に視線を戻すと、先ほどの聖剣使いが参戦していた。

茶髪の男子悪魔がリアスと黒髪ポニーテールの女子に触れると二人のオーラが一気に高まった！

ブリステッド・ギア
赤龍帝の籠手の能力、譲渡か！

あの籠手には高めた力を他人に渡せる能力があるらしい。

オーラを高めたリアスと黒髪女子悪魔がケルベロスを攻撃していくと、そこに金髪イケメン悪魔が参戦し、一気に攻勢に出ていく！

勢いのままケルベロスを全て屠ると、リアスが巨大な滅びの塊をコカビエルに向けて放った！

なかなかの大きさだが、まだまだ甘い……………。

俺と同じ事を考えたのか、コカビエルはそれを片手で防ぎ、上空に受け流した。だが、奴の手からは煙が……………。

コカビエルはそれを見て嬉しそうに笑うと、校庭の真ん中で発光現象が起こった。目を凝らしてみれば、そこには四本の聖剣が浮いていた。見ると、コカビエルが拍手をしているようだ。

俺が首をかき上げてみると、四本の聖剣が一つとなり青白い聖なるオーラを放ちはじめた。かつての戦争で折れた聖剣、エクスカリバー。それは七つに分けられ復元されたらしいが、そのうちの四本を元に戻したのか……………。

俺が納得していると、コカビエルの声が聞こえてきた。

「これで術式が完成した。あと二十分もすればこの町は崩壊するだろう。解除したければ、俺を倒すしかないぞ？」

——ッ！

これは、リアスたちには荷が重いな。兄さんたちが到着するまであと五十分はある、間に合わない！

俺が少し焦り始めると、下では昼に見かけた神父が一つになったエクスカリバーでイクメン金髪悪魔と聖剣使いの女の子と対峙し、睨みあっていた。

すると、奥にいた初老の神父が謎の結晶をイクメン金髪悪魔に見せる。何かはわからないが、あの悪魔くんには何か思い入れがあるものようだ。

初老の神父の言葉は聞き取れないが、実験とかなんとか言っているな。距離がありすぎて読唇術も使えない。

だが、イクメン金髪悪魔の迫力が増した気がする。怒りから生み出された魔力のオーラがイクメン悪魔くんの体を覆う。昔の俺を見ているようだ。

初老の神父は謎の結晶をイケメン金髪悪魔の足元に投げる。悪魔くんはそれを大事そうに手に取り、哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに撫でる。

悪魔くんが涙を流し始めると、その結晶から光が放たれ、校庭を包み込んでいく。上から見ると、まるで雪でも降っているかのようであり、優しい光が悪魔くんを囲んでいく。その光はやがて人の形となっていく。

何かはわからないが、あの悪魔くんにとつては大切な人たちなのだろう。

俺はそうとしかわからないが、突然俺の耳に聖歌が聞こえた。まるで、唯一の希望のように、生きる糧がこれしかないというように、例の悪魔くんも聖歌を口ずさんでいる。俺が聞き入っていると、次は子供の声が聞こえてきた。

『僕らは、一人ではダメだった』

『私たちは聖剣を扱える因子が足りなかった。けど……』

『皆が集まれば、きつと大丈夫……』

聖歌は本来悪魔にダメージを与えるものだ、だが、苦しくはなかった。この学園に充滿する様々な力のせいなのか、それはわからないが、とても温かいものだった。

俺は笑みを浮かべながらリアスの『騎士』を見る。

今の彼なら至れるだろう。神セイクリッド・ギア器は所有者の想いに応える。その想いが、願いが、

この世界の理しとわりにすら逆らうほどに転じた時、あれは起こる！

「
バランス・ブレイカー
禁手」

俺は無意識のうちにそう呟いていた。視線の先にいるリアスの騎士ナイトの手には、聖なるオーラと魔のオーラを放つ一本の剣が握られている。

どうやら、もう少し様子を見たほうが良さそうだ……。

mission 05 今こそ決着を……。

俺——ジャックが見下ろしている校庭には、聖なるオーラと魔のオーラを纏った剣——聖魔剣と呼ばせていただこうか。

その聖魔剣を持ったリアスの『騎士』^{ナイト}がエクスカリバーを持った神父に挑んでいった

！

リアスの『騎士』^{ナイト}は聖剣を攻撃を全て見切り、いなしていく。遠目からでも神父が焦り始めていることがわかる。

すると、髪にメッシュを入れた聖剣使いの少女がもう一本の聖剣を取り出した！

それが纏う聖なるオーラは神父の持つエクスカリバーや『騎士』^{ナイト}が持つ聖魔剣のそれを凌駕しているように感じる。あれは、まさかデュランダルか!?

デュランダルの登場にコカビエルも驚きを隠しきれずに表情を変えた。

そして、デュランダル使いの少女は、エクスカリバー使いの神父に挑んでいった！

エクスカリバーとデュランダルが激突してた瞬間、

ガキイイインツ！

激しい音と共にエクスカリバーが砕かれた！その一撃で校庭の地面も抉られている。

それでもやる気の神父に『騎士^{ナイト}』が一気に詰め寄った！

『騎士^{ナイト}』が聖魔剣を振り降ろし、神父はギリギリ形を保っていたエクスカリバーでそれを受け止めようとする。

バキイイイン。

儂い金属音が鳴り響く。エクスカリバーが完全に粉碎されたのだ。聖魔剣はその勢いのまま、神父を斬り伏せた。

それを見ていた初老の神父が表情を固くしながら何かをぼそぼそと言っている。ここでは聞こえないが、重大な理解したような表情になった瞬間にコカビエルが投げた光の槍に胸を貫かれた。あれは、即死だろう。

あの神父、何を言おうとした？コカビエルが不利になるような情報でも暴露するつもりだったのか？

俺が疑問を抱いていると、コカビエルが哄笑をあげた！

「ハハハハ！カアーハハハハハハハハハハハハッ！」

同時に戦争の時よりも強烈になったオーラをまといつていく。そして、不敵な笑みをりアスたちに浮かべた。

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

コカビエルはそう言いながら、ゆっくりと校庭に向かって降下していった。

俺は銃剣を取り出し、戦闘の準備を始めた。

俺、兵藤一誠は降下してくるコカビエルを見て緊張の汗をかいていた。

部長の『騎士』^{ナイト}である木場が勝つたまではない。けど、ここからだ。

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

コカビエルは自信に満ちた一言に、部長は激昂した。

「私たちにチャンスを与えるというの!? ふざけないで!」

「ふざけないで? ハハハ、ふざけているのはおまえらのほうだ。俺を倒せると思ってるのか?」

鋭い眼光を放つ右目と、白濁した左目が俺たちを睨む。ただそれだけで震えが止まらなくなってしまう。

こんな奴と戦ったロイさんって、どんだけ強いんだよ……!」

俺が震えていることを察しながらも、部長は俺に言う。

「……………イツセー。
セイクリッド・ギア
神器を」

「わ、わかりました!」

俺は返事をしながら俺の籠手に封じられた相棒に訊く。

おい、「ドライグ」！限界まで上げるのにとれくらいかかる？

すると、ドライグは俺にだけ聞こえる声で言ってくる。

『今のおまえだと、三分かそこらだろう』

わかった！とりあえず、町の崩壊よりは早いんだな！

『ああ、いくぞ？』

おう！どこまであげられるかわからないけどな！

俺は相棒とのやり取りを終えると、セイクリッド・ギア神器を起動、倍加を開始した！

『Boost！』

それから約三分。

『Boost！』

「部長！出来ました！」

俺の籠手から強い光が放たれはじめた。それを興味深そうに見るコカビエルが訊いてくる。

「で、誰に譲渡する？」

「イツセー！」

「はい！」

コカビエルに手を向けたのは部長だ！俺は部長の呼び掛けに応じ、横につく。そしてお互いの手を握りあい、俺が倍加したオーラを部長に渡す！

『Transfer!!』

宝玉の光が部長に渡り、部長の体を覆うオーラが膨れ上がった！

す、すげえ！これならいけるかもしれない！

俺は部長の放つオーラを間近で感じながらそう思った。いくら幹部とはいえ、このオーラをぶつけられたら倒れる筈だ！

俺の期待をよそに、コカビエルは笑う。

「フハハハハ！いいぞ！その魔力の波！それは最上級悪魔のものだ！もう少しで魔王クラスだぞ、リアス・グレモリー！おまえも兄たちにも劣らない才に恵まれているようだな！」

心底嬉しそうに、あいつは笑っていた。狂喜に彩られた表情。

「消し飛べエエエエエエッ！」

部長は叫びと共に滅びの魔力をコカビエルに放った！

ゴオオオオオオオオオオッ！

地の底まで響き渡るような振動を撒き散らし、強大な一撃がコカビエルに向かつていく！

それをコカビエルは両手を前に突きだして迎え撃とうていた。

「おもしろい！おもしろいぞ！『切り裂き魔』の妹！」

コカビエルは光を両手に集め、部長の一撃を正面から受けた！その表情は常軌を逸した鬼気のあるものだった。

「ぬううううううんっ！」

部長の一撃が、徐々に勢いを殺され、形を崩れ始めた！あれでもダメなのか!?

コカビエルのローブの端々が破れ、両手からも血を吹き出している。だが、確実に部長のオーラが押されている！

そして、ついに部長の放ったオーラがかき消された……………。

コカビエルは健在で、部長もかなり疲弊している。もう一回譲渡しても、今の一撃ほどのものは撃てないだろう。

くそ！どうすりゃいいんだよ！



私——リアスの一撃は完全に止められた。墮天使の幹部、コカビエル。放つときの私なら、どうにか出来るかもしれないと思つてしまった。

私は自分の事を恥ながら、かわいい下僕たちを見る。全員表情から相当の疲労を感じるけれど、目だけはまだ諦めていない。けれど、このまま続ければ、私たちは殺されてしまう……。

私はあの時の事を思い出した。

『俺はリアスを見守つてるから、どうにもならない時は心の中で呼んでくれ。きつと助けに行くから』

ロイお兄様が、任務に行く前に言つていたこと。あの言葉を言つてくれたから私はロイお兄様に会えなくてもこれまでやってこれた。色々なことがあつたけど、眷族たちと一緒に乗り越えてきた。けれど、今回だけは……。

ロイお兄様………！

私はぎゅつと目をつむり、ロイお兄様の顔を思い浮かべた。気休めではないとはわかつていた。

私は自分がまだ子供だと自覚しながらも、そうすることしか出来なかつた……。

その時、どこか懐かしさを感じる声が聞こえた。

「おまえら、よく凄いだな」

私は目を開けた。コカビエルが私たちから視線を外し、校舎の屋上に目を向けている。私たちがその視線を追っていくと、屋上に立つ人影が見えた。

銃剣と思われるものを持ったそのヒトは、何の躊躇いもなく屋上から飛び降り、校庭に着地する。

黒いローブを身に纏い、フードを深く被った誰かはコカビエルを睨む。

俺——兵藤一誠が突然の登場に驚愕していると、フードの男性が俺たちに言う。

「あとは、任せておけ……………」

声からして男性だと思われるそのヒトは、銃剣のグリップを握り直す。

ま、まさか、サーゼクス様からの援軍がもう到着したのか!? まだ三十分も経っていないのに!?

俺は驚愕しながらも少しだけ安心した。これなら、どうにかなるかもしれない。

俺が安心してしていると、ローブの男性から俺たちとは比較にならない強烈なオーラが放

たれ、風が巻き起こってそのヒトのロープを翻す。顔は見えないが、その黒い両目は常にコカビエルを見据えている。

「ほう、貴様は楽しめそうだな」

コカビエルはそう言いながら光の槍を手元に作り出した。ロープの男性はそれを見たと同時に俺の視界から消えた!? 男性がいた校庭の地面が抉れるほどの動きなのか!?

俺の動体視力では追えないその動きは、コカビエルには見えているようで槍を水平にしながら頭の上に掲げた。それと同時に、

ガキイイインツ!

凄まじい衝撃音と共に衝撃波が放たれ、無事だった校舎の窓ガラスが全て砕け散った!

俺とアーシアは足がふらついてしまうが、どうにか踏ん張って耐える。

あのヒトは異常なまでの速度で踏み込んで大上段から二丁の銃剣を同時に振り降ろしたのでろう! 俺には見えなかった!

俺たちがふらつきながら視線をコカビエルとロープの男性のほうに戻すと、二人が異常なまでの速度で斬りあっていた! 二人の周囲を火花が囲み、地面にも切り傷がつけられていく!

コカビエルが一度大きく光の槍を振り、ロープの男性がそれを後ろに飛んで避ける。

ローブの男性は空中にいる間に銃剣の引き金を引いた。すると、そこから魔力で作られたと思われる弾丸が放たれた！

コカビエルはそれを平然と弾くが、ローブの男性は着地した後も構わずに打ち続けていく。

ローブの男性は弾丸を放ちながらコカビエルに向かって駆け出した！コカビエルも応えるように駆け出す！

一気に間合いが縮んだことで弾丸が何発かコカビエルを掠めるが、大きなダメージにはなっていないようだ。

コカビエルとローブの男性は同時に得物を水平に凧いだ！それらは左右からクロスするように衝突し、再び衝撃波を発生させる！今度は二人を中心に校庭の地面が抉られた！

ローブの男性はつばぜり合いながら、俺たちには聞こえない声で何かを言った。

それを聞いたコカビエルは先ほど以上の狂喜を顔に張り付け、一旦距離を取った。

息を整えながら二人は睨みあっていると、ローブの男性が銃剣の撃鉄部分をあわせ

た。
同時に銃剣から光が放たれ、それが止むと、二丁の銃剣が両剣へと変わった！

俺が銃剣の機能に驚いていると、ローブの男性は躊躇いなく両剣の柄をへし折った!?

俺が驚愕していると、折れた柄の長さが変わっていき、ローブの男性の手におさまる程になった。

ローブの男性は二刀流となり、左手の剣だけ逆手持ちにしてコカビエルと対峙する。対するコカビエルも光の槍にさらに光の込めていくことがわかった。

二人はゆっくりと息を吐き、同時に相手に向かつて突撃した！二人の得物が再び激突し、衝撃波を生み出すと、二人は今度は離れることなく斬りあつていく！

時々見るところができる突きが、斬撃が放たれていくが決定打になることはなく、さらに速度が上がっていく！ついには俺では見えなくなつてしまつた！

俺はちらりと木場を見るが、あいつは瞬きすることなく、二人の戦いを見つめている。見逃すことが恥とも言わんばかりに目を離すことがなく、しっかりと目で追えている。

俺がそう思っている最中にも戦闘の速度は上がつていき、俺にはもはや音しか聞こえなくなつてしまつた。

もう、俺たちが援護とかどうとか言えるレベルではない。俺たちの前では、圧倒的なまでの戦闘が繰り広げられている。

永遠に続くように思えた戦闘だったが、ついに片方が膝をついた。

「くっ」

コカビエルだ。体の至るところに切り傷が作られ、絶えず血が流れ出ている。そし

て、ローブの男性は、

「はあ……はあ……」

肩で息をしながらも大きな怪我はなく、しつかりと立っていた。

コカビエルは光の槍を杖のようにして立ち上がり、ローブの男性に笑みながら言った。

「貴様のような奴と戦えること、やはり俺には戦いが必要なようだ！あの戦争は魔王と神が死んでしまったからな！こんな戦いは久しぶりだ！」

「ちっ……戦闘狂が……！」

ローブの男性は舌打ちをしながらも剣を握り直した。コカビエルもしつかりと立ち上がり、対峙する。が、今、コカビエル、ヤバイこと言わなかったか!?

俺たちの間に混乱が生まれそうになると、俺たちに圧倒的なプレッシャーが襲いかかった！

コカビエルとローブの男性が静かに睨みあっているのだ。二人の間の空間が歪んで見える……！

「……………」

一瞬の静寂。そして、

フツ！

ローブの男性とコカビエルが視界から消え失せた！そして、現れた頃には……………、
「クハハハハ……………」

「ふうふうう……………」

体をバツ字に斬られ大量の血を流しながらなぜか満足そうに笑みを浮かべるコカビエルと、ゆっくりと深く息を吐くローブの男性。あの消えた一瞬で勝負が決まったようだ。

コカビエルはゆっくりとうつ伏せに倒れこみ、口からも血を吐き出した。

ローブの男性は剣を左右に振り、刃についた血を飛ばした。

ローブの男性は剣についた引き金を引く。すると、剣が光を放ちながら銃剣に戻る。

そして、その銃口をコカビエルに向けた。あれでとどめを指すようだ。

俺たちがその流れを見ていると、どこからか声が聞こえた。

「ふふふ、おもしろいな」

ローブの男性が上を見上げた。俺たちもつられるように上を見ると、そこには――

↓

「『白^{バニシツク・ドラゴン}い龍』……………」

ローブの男性が忌々しそうにそれを見ながら言う。

俺たちの視線の先には、一切の曇りも陰りもない、^{プレートアーマー}白い全身鎧を纏った誰かがこちら

を見下ろしていた。

mission 06 接触と提案

『パニシング・ドラゴン白い龍』……………！』

コカビエルとの決着をつけた俺——ジャックは俺を見下ろす白い全身鎧プレートアーマーを身に纏った何者かを睨む。

コカビエルはピクリと動かないが、下の術式はまだ動いているようだ。やはり、とどめを指さないとダメか。だが……………。

俺はその隙を探すが、あの『パニシング・ドラゴン白い龍』は俺から目を離してはくれなさそうだ。

ゆつくりと降下してくる『パニシング・ドラゴン白い龍』。俺は降りてくるそいつを睨み続ける。

俺としては戦いたくない。全快ならともかく、少し疲れているこのタイミングで仕掛けられたら少々辛いからな。

俺の頬に嫌な汗が流れていることを自覚しながら、俺は言う。

「その鎧、デイベイン・デイベイディングスケイル・メイプル白龍皇の鎧か……………。で、何をしに来た？ 『ウエルシュ・ドラゴン赤い龍』に惹かれ

たか？！

俺の質問に答えることなく、そいつは俺の視界から消えた！すぐさまオーラで場所を

探る。

——後ろだな！

俺は振り向きながら銃剣を振り、背後を取ろうとした『パニシング・ドラゴン白い龍』に打ち込む！だが、それは平然と籠手で受け止められた。刃が鎧を突破出来ていない！

俺の銃剣の刃と籠手が火花を散らす、『パニシング・ドラゴン白い龍』は俺に蹴りを放ってきた！

俺は咄嗟にバク宙のようにして避けるが、その余波でフードが外れてしまった！

着地を決めてフードを戻そうとするが、『パニシング・ドラゴン白い龍』がそれを許す筈もなく、すぐさま踏み込んでくると俺の腹部に目掛けて右ストレートを放ってきた！

俺はそれを銃剣をクロスして受けるが、拳の勢いのまま吹き飛ばされ、そのまま校舎に突っ込んでしまった！

てか、このまま隠れていよう。このまま続けたら殺されちまう。あいつ、俺やコカビエルよりも強いぞ。これは、面倒なことになったな。

俺は溜め息を吐きながら気配を消し、近くの物陰に身を潜めた。

——俺——兵藤一誠は困惑していた。

コカビエルが倒れたと思ったら何か変な奴が降りてきて、コカビエルを倒してくれたヒトを殴り飛ばしたのか？まったく何なんだよ！

俺たちが白い奴を警戒していると、そいつが言った。

「さて、コカビエルは倒れてしまっている、か。出来れば俺が戦いたかったが、まあいい」
そう言いながらコカビエルのもとまで歩き、膝をつけてコカビエルに軽く手を触れる。

「念のためだ。恨むなよ？」と言っても、聞こえていないか」

『Divide!』

白い奴から突然音声が聞こえると、ただですら消えかけていたコカビエルのオーラが感じ取れなくなった。

まあ、今の俺じゃ、大きな変化じゃないとわからないけどな。

そのおかげなのか、校庭に張られていた魔方陣も消失したようだ。これで、この町が破壊されることはなくなった。

白い奴はコカビエルを肩に担ぐ。

「さて、あとはフリードもか。聞きださないといけないこともあるからな」

倒れこみフリードのもとにも足を運び、そのまま腕に抱える。

白い奴は光の翼を展開して空に飛び立とうとする。すると、俺の籠手の宝玉から勝手

に光が放たれ、俺には聞きなれた声が発せられた。

『無視か、白いの』

ドライブグが何かを知っているように白い奴に声をかけると、向こうの鎧の宝玉からも光が放たれる。

『起きていたか、赤いの』

『せつかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ、いずれは「戦う運命」だ。こういうこともある』

『しかし、白いの。以前のような敵意を感じられないが?』

『赤いの、それはそちらもだろう』

『お互い、戦い以外の興味対象があるということか』

『そういうことだ。こちらはしばらく独自に楽しませてもらうよ。たまには悪くはないだろう?』

『それもまた一興か。じゃあな』

お、おう。ドライブグが何かわからないが、俺にとって重要そうな話をしている。話についていけないが、何か戦う運命とか何とか言っただけだったか?

俺が疑問を感じながら突っ立っていると、白い奴が俺に言った。

「さて、名乗っておこうか。我が名は『アルビオン』。いずれキミと戦う宿敵さ。覚えて

おいてくれ」

白い奴、もといアルビオンはそう言う白い閃光となって空に飛びつたっていった……。

な、何か訳もわからないまま始まって終わった気がする……。

回りを見ると、皆一様に疲れた表情になっているが、髪にメツシユを入れた女子——ゼノヴィアとアーシア、木場は衝撃を受けたような表情になった。

「コカビエルの言葉、本当なのか？^{あるし}主が、死んだ……？」

ゼノヴィアが激しく動揺しながらそう漏らした。

そうだ！コカビエルの野郎、魔王と神は死んだって言っていたんだ！状況が変わりすぎて気にする余裕がなかった！

遅れて俺たちにも困惑が広がりはじめると、崩れた校舎の壁から誰かが出てくる。

見てみると、先ほど吹っ飛ばされたローブの男性だった。ちらりと黒髪のが見えたが、顔はしつかり確認できなかった。

ローブの男性は懐からタバコ箱を取り出し、その内の一本を口にくわえて魔力で火をつける。って、学校でタバコ吸うんじゃないやねえ！

俺がその言葉を発しようとする、それを遮るようにゼノヴィアがその男性に詰め寄り、そのまま胸ぐらを掴む。

「おまえ、さっきの話は本当なのか!? 私が信じてきた主は死んでしまっあるしているのか!」
冷静さを欠いているゼノヴィアに、ローブの男性は紫煙がゼノヴィアにかからないように吐き出すと、隠そうともせず断言した。

「ああ、聖書の神はとつくの昔に死んでる」

「——ッ!」

ゼノヴィアは目を見開いて驚愕の表情を浮かべると、そのまま膝から崩れ落ちた。

「嘘だ……嘘だ……」

そんなゼノヴィアを見て、ローブの男性はタバコをくわえ直し、俺たちには近づきながら声を掛けてきた。

「まあ、何だ。とりあえず無事で何よりだ。って、大丈夫か、そこのお二人さん」

男性の声を聞いて俺はアジアと木場に目を向けた。二人もゼノヴィアと同じように狼狽え、瞳が揺らいでいる。アジアは全身を震わせるほどの衝撃を受けてしまっている。

ローブの男性はアジアと木場、ゼノヴィアを一瞥すると、俺たちに言った。

「戦争と二天龍との戦いで魔王様だけでなく、聖書の神も死んじまった。もしかしたら、その聖魔剣もそのせいで生まれたのかもな……」

木場はその言葉で手に握る聖魔剣を見つめる。神様もないからあの剣が生まれた

のか……………？

俺たちの中に大きな衝撃が生まれているが、ローブの男性はまだ続ける。

「まあ、セイクリッド・ギア 神器 システムのバグ的なもんなのは間違いないだろう。で、おまえはその真実を知ってどうする？」

ローブの男性はそう言いながらゼノヴィアに目を向ける。俺たちに背を向けるように膝をつきながら俯き、表情を見ることは出来ない。

だが、ゼノヴィアは覇気のない声で答えた。

「どうする？ だと……………？ どうしようもないさ……………。今まで信じてきたものが、なかったんだぞ……………？ これから何を信じて生きていけば……………」

戦っている最中や初めて会ったときからは想像出来ないほど弱々しい声だった。俺たちがかける言葉を探していると、ローブの男性はタバコを携帯灰皿に押し込み、ゼノヴィアの正面にまわった。

「お嬢ちゃん、顔を上げな」

「……………」

男性の言葉に少しだけ顔を上げるゼノヴィア。ここからだと言った表情は見えないが、涙を浮かべていることだろう。

男性は片膝をつき、ゼノヴィアと視線を合わせると言った。

「信じるものはこれから探していけばいい。おまえは若いからな、まだどうにかなるだろう」

男性はそう言うが、ゼノヴィアは何も返さない。今の言葉をただの他人事だと流されてしまったらそれまでだが、今のゼノヴィアにはそれは出来ないだろう。

「信じるものを探す、か。確かに、今の私にはうってつけの罰かもしれないな……」
「罰って、おまえな。見聞を広めるのも大事なことだ。おまえは世界を見て回ってこい。それぐらいなら出来るだろう」

「ふっ。それも悪くない、かもな」

ゼノヴィアの言葉に少しだけ生気が戻ったような気がする。ローブの男性はフードの下で笑みを浮かべると立ち上がり、こちらに目を向けた。

「おまえらもよく頑張ったな。そんじや、俺は行くぜ」

そう言うのとローブの男性は踵を返して歩きだそうとする。すると、その男性を部長が呼び止めた。

「待って………ください」

「何だ？」

男性は頭だけこちらを向く。すると、部長は姿勢を正すと男性に頭を下げた。

「助けていただき、ありがとうございます。このお礼は必ず………」

「……………」

ローブの男性は黙ってこちらを向くと俺の視界から消えた！ 転移したわけでもなく、ただ高速で移動したのか!?

俺が驚愕していると、気配を感じて部長のほうを向く。そこには――、
「……………」

黙って部長の頭を撫でるローブの男性の姿が。

すごい優しい笑みを浮かべているように見えるが、部長と何か関係が？

部長もそのヒトに黙って撫でられており、抵抗することもない。

男性は部長を撫でるのを止めると、フードの下で再び笑った。

「ま、とりあえずはこれでいいさ。礼は出世払いで頼む」

男性はそう言うのと再び消える。俺たちが周囲を見回していると、学校の屋上からその

男性の声が聞こえてきた。

「さて、また会おう！」

男性が右手を上げながらそう叫ぶと、転移の光に包まれて消えていった。

何か、嵐のようなヒトだったな。妙にフレンドリーでいて、大人びているというか
……………。

俺たちの町で突然始まった戦いは、突然現れた二人の乱入者の力で全員無事に終了し

たのだった。

俺、ジャックはアジトのベンチで座り込んでいた。さすがに今回の戦闘は疲れた。さすがはコカビエルだが、あの『白パニシング・ドラゴンい龍』についても調査しておきたいな……。

俺がそんなことを思っていると、アジトに入ってくる数人の悪魔。クリスから聞いた別任務の連中だろう。

「おまえら、何をしにきたんだ？」

前を通りすぎようとした悪魔に訊くと、

「魔王様から直々の極秘任務です。いくらあなたであつても、言うことはできません」

「そうか。まあ、成功はしたんだろう？」

「はい。問題なく」

悪魔はそう言うのと足早に転移室に入っていった。

「隊長！お怪我はありませんか？ありましたら私に言ってください！」

悪魔たちがいなくなったことを見計らって、元氣そうな様子のアリサが俺に駆け寄ってくる。指には緑色の指輪がはまっている。

「ハーフの悪魔にも神セイクリッド・ギア器は宿るって、相当皮肉だよな……………」

「そうですか？ 私はありがたいですけどね。怪我で病院のお世話にならないのは大きいです」

アリサはそう言いながら指輪を撫でる。アリサは人間と悪魔のハーフだ。だからセイクリッド・ギア神器、聖母の微笑みを宿している。

旧魔王派は純血主義者がほとんどのため、前にいた部隊では除け者にされていたように、俺の隊に来た頃はだいぶ暗いやつだった。

俺の隊にそんなやつはおらず、むしろ人手不足だったのでだいぶ助かっているしかわいがっているのが本音だ。

俺はアリサを手招きする。ニコニコ顔で近づいてきたアリサに俺もニコニコ顔で返し、頭にアイアンクローをくらわせる！

「ギヤアアアアアアツ！」

「覚えておけと言ったはずだが？」

「そ、そうでしたあああああつ！」

俺がアリサにアイアンクローをかましているのを見ながら、クリスが豪快に笑う。

「アハハハハッ！ アリサ、おまえ、バカだなあ！」

「ク、クリスさん！ 笑ってないで助けてくださいいいいたたたたつ！」

「だ、そうですが、リーダー。どうしますか?」

「救援要請は却下。おまえは部屋で休め」

「了解! それでは、お疲れさまでした!」

「お疲れさん」

「クリスさああああんっ!」

泣きじやくるアリサを無視してクリスは部屋に戻っていく。あいつ、パツと見た感じはがさつそうなのに、結構しつかりしてるからな。俺としては理想の部下だ。

クリスが部屋に戻っていったことを確認すると、本を読んでいたジルが本を閉じて口を開く。

「それでは、私も失礼します。リーダー、あまりやり過ぎないでくださいね」

「わかってるさ。加減はしてる」

「どこがですかあああ!?!」

「では、お疲れさまでした」

「お疲れさん」

「ジルさああああんっ! 見捨てないでえええええ!」

アリサの叫びは虚しくアジトに響き渡り、ジルは部屋に戻っていく。クリスとジルが部屋に戻ったことを確認すると、俺はアリサを解放する。

「あううう……………」

アリサは頭を押さえながらうずくまるが、俺はそんなアリサに言う。

「で、アリサ。一つ頼まれてくれるか？」

「はい？」

涙目になりながら顔を上げるアリサ。俺は彼女の前で自分の上着に手をかける。するとアリサは顔を真っ赤にしながら視線をそらす。

「ちよ!? た、隊長! わ、私……………」

「どうかしたのか？」

俺は構わずに上着をめくり、腹を見せる。腹には大きなアザが出来てしまっている。

『パニシング・ドラゴン』
「白い龍」の一撃を防いだはいいが、余波でアザが出来てしまったのだ。まさか、ここ

までとは思わなかった。

「アリサ、治療頼む。いいのもらっちゃった」

「え? ああ! 治療ですね! わかりました!」

アリサが照れ隠しのように手早く治療を開始する。アリサの指輪から放たれる緑色の光が俺の患部に当たる。その光は暖かいもので、みるみる痛みが引いていく。

痛みが完全に引くと俺は上着をもとに戻し、アリサに礼を言う。

「ありがとうな、おかげで痛みは引いた」

「は、はい！いつでも言ってください！何でも治してみせますから！」

「そうか、ならまた何かあったら頼むかな。今日は休め。また忙しくなるだろうからな」
「わかりました！お疲れさまでしたー！」

アリサは笑顔になりながら部屋に戻っていく。とりあえず、皆戻ったか。

俺は溜め息を吐き、タバコを取り出して口にくわえる。指先に火を起こしてタバコに着火し、紫煙を吐き出した。

そのうち、クリスとアリサを見捨てるか、裏切ることになるのか……。仕事とはいえ、少々辛いかもな……。

俺が再び紫煙を吐き出すと、ここに近づいてくる気配が一つ。俺はそちらを向きながらその誰かに言う。

「ジル、どうかしたか？」

「いいや、考え事をしていそうだったからな。見にきたただけだ」

「そうか。顔に出てたか？」

「私ならわかる程度には、な」

ジルだ。部下としてではなく、同僚として声をかけていることがわかる。

ジルは俺の隣に腰を降ろし、言葉が続けた。

「あの二人の事を考えていたのだろう？私も最近考えてしまうからな……」

「ああ。あいつらを見殺しには出来ないかもしれない」

「確かに、あの二人は気がいいからな。言ってしまうえば、殺すには惜しい人材だ」

「……何が言いたい」

俺が訊くと、ジルは妖艶な笑みを浮かべて俺の瞳を見つめてくる。

「全ての決着がつくとき、あの二人を『新魔王派』に引き込むつもりだ。最悪、内部協力者として減刑してもらおう。というのはどうだ？」

「なるほど、それはいいかもな……」

俺はそう返しながら紫煙を吐き出す。ジルは俺よりも仕事に馴れているな。誰が送り込んだのやら……。

俺がそれを考えているとジルは立ち上がり、部下としての口調で俺に言う。

「リーダー、もう時間も時間ですから、お休みになってください」

「ああ、そうする」

俺の返事を聞いてジルは部屋に戻っていき、俺はそれを見送りながらタバコを携帯灰皿に押し込み、部屋を目指して歩き出す。

ジルの提案、それなら二人を助けられるかもしれないが、その前に俺が死んだらそれも言っていられないか……。

俺は自分の部屋のベッドに倒れるように寝転び、それを考えるのは後にしようと思

い、眠気に身を任せて目を閉じた……。

停止教室のヴァンパイア

mission 01 行動開始

「暑い暑い」

アジトの日陰でだらしなく伸びてアリサがぼやく。格好も旧魔王派規定のローブではなく、とてもラフなものになっており、大胆に覗かせる太ももが眩しい。

そう思う俺もズボンこそシヤカパンだが、上は紺色のタンクトップだ。

コカビエルとの決着からしばらく経ち、季節は夏の始めとなり、時刻も昼過ぎ。この時期の俺たちは少し涼しい格好を心がけている。

冥界ならもう少しマシなんだろうが、生憎ここは人間界、季節は悪魔でもどうしようもない。

奥から出てきたジルは、間拔けに伸びるアリサを見て溜め息を吐き、その隣に腰をかけると手元に魔方陣を展開、そこから冷気を放ち始める。

「あゝゝゝ、気持ちいいゝゝゝ」

表情を緩めながらアリサはそう言うが、ジルは特に気にすることなく俺に訊いてく

る。

「リーダー、その傷は消さないのですか？」

「あ？ああ、これか……………」

俺は左肩の傷に軽く触れながら、少し考える。

この傷はコカビエルとの因縁の証みたいなものだ。だが、そのコカビエルとの決着はついた。もう消してしまっても問題はないか……………」

「そうだな。まあ、タイミングを見て消すさ」

俺が苦笑しながら返すと、ジルは「そうですか」と返して器用に片手で本を読み始める。

クリスは今頃体を動かしているのだろう。あいつは魔力を持ちながら体も鍛える珍しい悪魔だ。俺も時々付き合っている。

夏の始めは毎年こんな感じだ。その年にどんな大きな作戦があるかと気にせず、俺たちはこれを貫き通してきた。

俺はアリサとジルを一瞥すると、先日の連絡を思い出した。

『ジャック、あなたたちの思惑通り、三竦みのトップ会談が行われるようです』

「そうですか、それでその日時はいつ頃です?」

『もう少し先ですが、いつでも動けるように準備だけは怠らないようにしなさい。あなたたちはその町に潜伏する唯一の部隊なのですから』

「わかっています。こちらはいつでも大丈夫ですので、連絡をお待ちしております」

『ええ、では、また連絡します』

「了解しました」

何て事があったが、俺たちは気にすることもなくのんびりと過ごしている。

俺がポケットと座っていると、外から汗だくでクリスが戻ってくる。相変わず、すごい体しているな。二メートル近い身長で筋肉隆々、道でぶつかったら無意識に謝りそうだ。

俺が視線を向けたことに気づいたのか、クリスが俺に笑みを見せながら近づいてくる。

「リーダー、どうですか?外で動くのも気分がいいですよ?」

「いや、辞めとく。いい汗かけそうだが、今はそんな気分じゃない。てか、こっちにくるな!暑苦しい!」

「な、なんですと!?!リーダーにはこの汗の素晴らしさがわかると思っていたのに!」

「わからなくはないが、シャワーを浴びてこい!その方が気分もいいだろう!」

「それもそうですね。シャワー浴びてきます!」

なぜか俺の言葉にシヨックを受けた様子だったが、クリスは特に引きずる様子もなくシャワー室に走っていく。あいつ、本当に暑さを知らないのか?

俺が首をかしげると、ジルが言ってくる。

「本部からの連絡も最近ありませんね」

「確かに、ギリギリまで連絡しないつもりなのかもしれないな」

俺とジルが真剣な話をしていると、アリサが口を挟んでくる。

「本部のヒトたちは、私たちに裏切り者がいると思っっているんですかね? 結構重要拠点ですよ?」

「……………」

アリサの言葉に俺とジルは一瞬黙りこむが、すぐに口を開く。

「まあ、警戒しておいて損はないだろう。成功するかどうかは別として、次の作戦はかなり重要なものになることは間違いない」

「そうですね。下手をすれば、私たちが終わるかもしれません」

「だ、大丈夫……………ですよね?」

俺とジルの言葉に不安そうになるアリサ。ジルは微笑みながらアリサを優しく撫でる。

「大丈夫よ。最悪の場合に備えて逃げる準備もしておくから」

「あはは………、抜かりありませんね………」

アリサの表情が少しだけいつもものに戻ると、俺は最近起こった出来事を確認する。

「それにしても、最近この町の動きは凄まじいな。墮天使総督アザゼルにセラフのミカエル、相当入り込んで来てるぞ」

俺の言葉にジルが続く。

「リアス・グレモリーの眷族も増えたようです。例のデュランダル使い、そしてハーフ吸血鬼の少女、この吸血鬼のほうの神セイクリッド・ギア 器はなかなか面白いものですね」

「視界に映ったモノの時間を止める、だったか。あまり使えなさそうだがな」

「リーダーなら、写らない速度で動けますからね」

「ああ」

俺は頷くが、心の中で溜め息を吐いた。

あのデュランダル使いの女子、悪魔に転生したのだ。見聞を広めるとは言ったが、まさか人間辞めるとは………。

俺のそれを知らないアリサが口を開く。

「でもですよ？万が一映ってしまつたら、完全にアウトですよな？」

「セイクリッド・ギア神 器 程度で止められるほど俺は弱くないがな」

「それもそうですね」

アリサの言葉も一理あるが、映らなければいいのだ。映ってしまったら、その時はその時だな。

俺がそんな事を考えていると、俺たちの前に連絡用魔方陣が展開された！

「「ッー」」

俺たちは素早く立ち上がり姿勢を正す。

それと同時に音声だけであるがカテレアからの指令が飛ばされてきた。

『本日、三竦みのトップ会談が行われます。あなたたちはその襲撃に参加しなさい。私もこれからそちらに向かいます。到着次第詳しい作戦を伝えます。いつでも行けるように準備を整えておきなさい！』

「「ハッー」」

俺たちは応答すると連絡用魔方陣が消える。カテレア自ら出てくるとはな………意外だ。

俺はジルに目で合図を送り、ジルは頷くと腕輪に手を伸ばす。アリサが怪しまないように俺は指示を出す。

「アリサ、装備の点検と転移魔方阵に魔力流しておけ。ジルは結界に穴がないか最終確認だ。クリス！聞こえてるか！」

「はい！お待たせしました！」

俺が呼ぶと髪を湿らせたままのクリスが奥から戻ってくる。俺は頷いてクリスに伝える。

「カテレア様がここにくる。失礼のないように身だしなみを整えておけ。二人もだぞ！いいな！」

「「わかりました！」」

「よし、行け！」

俺たちは持ち場に別れ、それぞれの準備に入る。俺はローブと銃剣を取りに、アリサは転移魔方阵の準備に、ジルは結界の確認に、クリスは着替えと武装を取りに。

それぞれがバラバラに散り、装備を整えた俺はジルに声をかける。

「ジル、どうだ？」

「結界も問題ありません。後は何事もないと祈るだけです」

「了解だ。結界の確認が済んだらおまえも着替えてこい。流星にこの格好だと怒られるからな」

「わかっていますよ」

ジルの連絡は既に済んでいるようだ。後は、兄さんたちが警戒する事、俺とジルはギリギリになったらもう一度連絡するだけだな。

俺は深く息を吐き、カテレア到着を汗を流しながら待ち続けるのだった。

その日の夜中。アジトの転移室。

俺たちは規定のローブに身を包み、転移魔方阵の前に待機していた。

「わ、私、カテレア様に会うのは初めてです！」

少し興奮した様子のアリサに俺は言う。

「俺は隊長として時々会うが、まあ、下手な事を言わなければ問題ないさ」

俺が素晴らしい終えると転移魔方阵が光輝き、一気に弾ける。光が止むとそこにいたのは、

「ジャック、お久しぶりですね」

妖艶な笑みを浮かべる女性。胸元を大きく開け、深いスリットの入ったドレスに身を包んでいる。

俺たち四人は跪き、カテレアに頭を下げる。俺は頭を下げながら、隊を代表して言う。

「カテレア様、お待ちしておりました。我々の準備は完了しております」

「ええ、そのようですね。頭をおあげなさい」

俺たちはその言葉を受けて顔をあげてカテレアと視線を合わせる。

「では、早速作戦を説明しましょう」

カテレアがそう言うのと再び転移魔方阵が起動し、そこから黒いローブに身を包んだ大量の人間——魔術師——が現れた。

カテレアはそれを確認すると俺たちに言ってきた。

「私たちは『禍カオス・プリゲドの団』に協力することに決めました。これはそれを憎き新魔王派に伝える場でもあります。彼らは今回の協力者である魔術師たちです。これから転移してくるので、誰か一人はここに残ってください」

「ジル、おまえはここで魔方阵の制御をしてくれ」

「わかりました、リーダー」

俺はジルと別れることにした。下手に一緒に行つてどつちも戦死となつたら潜入した意味がなくなるからだ。

「残念ながら、ここにいる魔術師にも、あなたたちにも細かな作戦を伝えることは出来ません。理由はわかりますね？」

カテレアのわざとらしい質問に俺は頷き、あえて口にする。

「裏切り者を見つけることが出来ていない以上、仕方ありません。我々は我々の仕事に集中します」

「わかっているのなら、いいです。一人は万が一に備えてここの防御をお願いします」

「クリス、頼む」

「わかりました！任せてください！」

防御はクリスの仕事だ。一応トラップは仕掛けてあるが、完璧な防御なんてものは絶対にあり得ない。様々な状況に素早く対応出来るようにしておかなければならない。

「さて、ではジャックともう一人は私と共にこの町の学園を目指します。ジャックと私は突入しますが、あなたは万が一に備えて退却用の転移魔方陣をお願いします」

「わ、わかりました！お任せください！」

アリスは緊張しながらもカテレアに返す。こいつが俺とカテレアの生命線つてのは、少々怖いかな。

俺は内心そう思いながら頷き、カテレアに訊く。

「作戦は今にでも始められますが、いかがなさいますか？」

「ええ、すぐに始めましょう。移動しますよ！」

「ハッ！」

俺とアリサはカテレアに戻すと、歩き出したカテレアの後ろについて歩き始める。同時にジルに目で合図し、今の情報を伝えてもらうように頼む。ジルは小さく頷き、魔方阵に意識を戻した。

俺の横を歩くアリサの表情は固いが、瞳にはやる気が満ちている。空回りしなければいいが……。

俺は様々な心配をしながらも、三竦みトップ会談への襲撃作戦を開始するために行動を開始したのだった。

mission02 作戦開始

駒王学園で行われる三大勢力のトップ会談に俺——兵藤一誠は部長たちと共に参加することになってしまった。

理由はコカピエルとの戦いに巻き込まれたからだ。当事者である部長から意見を聞くということになっており、一応俺は座っているだけになりそうだ。

小難しい話が進んでいき、ついに部長の出番となった。

「さて、リアス。そろそろ、先日的事件について話してもらおうかな」

「はい、ルシファー様」

お兄さんであるサーゼクス様に促され、部長と会長、朱乃さんが立ち上がり、この間の戦いの一部始終を話し始めた。それに聞き入る三大勢力の面々。

部長は冷静に淡々と事件の概要を話してはいるが、その手は極度の緊張からか、少しだけ震えていた。

発言を間違えればここで何かが起こるかもしれない。いくら部長でもこの場の空気は辛いものだろう。

報告を受けた各陣営のトップは溜め息を吐く者、顔をしかめる者、笑う者——と反応

は様々だ。

「――以上が、私、リアス・グレモリーと、その眷族悪魔が関与した事件の報告です」
すべてを言い終えた部長は、サーゼクス様の「ご苦労、座つてくれたまえ」という一言でようやく着席する。

「ありがとう、リアスちゃん☆」

現レヴィアタン様であるセラフォル様もウインクを部長に送る。

「さて、アザゼル。この報告を受けて、堕天使総督の意見を聞きたい」

サーゼクス様の問いに全員の視線が黒髪の大総督に集中する。

アザゼルは不敵な笑みを浮かべて話し始めた。

「先日的事件は我々『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが単独で起こしたものだ。奴の処理はその悪魔にやられたようだが、回収のために白龍皇を送った。その後、虫の息だったあいつを軍法会議のもと『地獄の最下層』で永久冷凍の刑にした。もう出てこれねえよ」

天界のトップであるミカエルさんが嘆息しながら言う。

「説明としては最低の部類ですが、あなた個人が戦争を起こしたくないことは知っています。それに関しては本当なのでしょうか？」

「ああ、戦争に興味はない。それよりもサーゼクス、一つ訊いていいか？」

アザゼルが突然サーゼクス様に話題をふった。サーゼクス様が頷くとアザゼルは言葉が続ける。

「そのコカビエルを撃破したとかいう奴、何者だ？」

「どういう意味だ？」

「コカビエルと一対一で勝負して互角以上なんて、おまえら魔王かその眷族ぐらいだろう。だが、そいつは一介の悪魔なんだろう？」

「ああ、少々強引に入ったようだが……、詳しくは調査中だ」

確かに、あのヒトは外を固めていた会長たちに気づかれないように入ってきていた。味方なら、もっと堂々と入ってきてても良かったと思うけど……。

「まあ、それはいい。で、何者だ？ 現在行方不明とかいう『切り裂き魔』の野郎か？」

アザゼルはちらりとミカエルさんの隣に座る金髪の女性天使（チヨー美人だ！）に目を向けた。その女性の天使は少しだけ顔を赤くしているような……。

俺がそう思っていると、サーゼクス様が言う。

「彼は、キミが自分で言った通り行方不明だ。どこにいるかはこちらも把握出来ていない」

「妹のピンチに駆けつけたってわけじゃないのか？」

「悪いが、彼が生きていようと、死んでいようと、今回の事件は知らない筈だ」

アザゼルとサーゼクス様は淡々と話していく。その『切り裂き魔』って、コカビエルも言っていたような……。

周りに気づかれないうちに小さく首をかしげると、アザゼルがそれに気づいたの口を開く。

『切り裂き魔』、本名はロイ・グレモリー。俺たちが戦争している間、墮天使、天使の両方から嫌われた野郎だ。目の前で笑いながら仲間を斬られちゃ、そりゃ嫌いにもなる」

アザゼルが説明してくれたが、それに異を唱えたのはレヴィアタン様だった。

「アザゼル！それは見間違いいよ！ロイは戦いで笑ったことはないわ！」

初めて会った時とはまったく違う厳しい声音。部長と会長も驚いた様子だ。

アザゼルはレヴィアタン様の怒鳴りを無視するように言った。

「まあ、そう怒るなつて。それは建前で、嫌われた本当の理由は、あの野郎がガブリエルの——」

「アザゼル、話を戻しましょう」

アザゼルの憎しみを込めた言葉を遮ってミカエルさんが言う。見ると横の女性天使さんの顔が真っ赤になっていた。もしかして、あのヒトがガブリエルっていう天使なのか！美人なわけだ！

俺が勝手に納得していると、アザゼルは咳払いをして話を戻す。

「悪い、それじゃ、単刀直入に言うぞ。和平を結ぼうぜ？そっちももとよりそのつもりだったんだろ？」

和平つてことは、平和を共に願うつてことだよな？

アザゼルの一言に会場にいた全員が驚愕の表情となる。確かに、睨みあっていた三大勢力のトップがそんな発言をすればこうなるだろう。実際に俺も驚いているしな！てか、俺つて歴史的瞬間に立ち会ってない？

三竦みのトップ会談が始まってしばらく経ち、俺、ジャックとアリサ、カテレアは学園から少し離れた位置にある森に陣取っていた。

「カテレア様、いつ仕掛けるのですか？」

俺が訊くと、カテレアは「まだです」と返して魔方陣を展開する。どこかと連絡を取っているようだ。

俺はアリサに声をかける。

「アリサ、作戦通り、指示がなくても俺かカテレア様のどちらかが死亡したら生きている方を即転移させる。多分だが、俺が死ぬと思うがな………」

「そ、そんな事言わないでくださいよ！絶対にお二人で戻ってきてください！」

アリサは精一杯強がるように言う。待つ者の苦勞つてのはよく分からないからな
……………。

「ああ、そうだな」

俺は笑みながらそう返し、乱暴に頭を撫でてやる。アリサも少しだけ落ち着いた表情になるが、その瞬間にカテレアが俺を呼ぶ。

「ジャック、和平交渉が始まりました。こちらにも始めましょう」

「了解！アリサ、行ってくる」

「はいー」

俺はアリサを撫でるのを止め、カテレアの横につく。これから学園のもっと近くに転移するのだ。

俺はアリサに笑みを向けると、カテレアが展開した転移魔方陣に乗る。ここで一旦別れ、アリサは後方支援の班と合流するのだ。

アリサが俺に強がるように笑みを浮かべたことを確認したと同時に光が強くなつていき、ついにアリサが見えなくなった……………。

光が晴れると、そこはどこかの部屋のようだった。

目の前にはゲーム機を弄る紙袋を被った謎の女の子。俺たちの登場で動かなくなっ
てしまった。格好から推測したが、女であっているよな？

俺の疑問を知るよしもないカテレアは、その女の子が声を出すまえに魔力の縄で拘束
した！

「ひいっ！」

情けない声をかけると出す女の子だが、それを気にせずカテレアは俺に言う。

「この転生悪魔の神セイクリッド・ギア 器、『フォービトゥン・パロール・ビュイ停 止 世界の邪眼』を強制的に禁手バランス・ブレイク 化させます。そうし

て、この周辺を固める三竦みの連中を止め、会談を行っているトップ陣を直接狙います」
「なるほど、裏切りを警戒するわけです」

俺はそう言いながら手頃な位置にあった椅子を女の子の前に置き、無理やりその女の
子を縛りつける。じたばた暴れて抵抗してくるが、その程度、小さい頃のリアスに比べ
ればかわいいものだ。

なんて思っているうちに拘束完了。俺が頷くとカテレアは魔方陣を展開、それを女の
子の目に当てた。その瞬間、凄まじい閃光と共に俺を奇妙な感覚を襲うが、特に何かあ
るわけでもなく、問題はない。

俺が体を見ているとカテレアは言う。

「私たちなら問題はありません。あとは彼女たちに任せましょう」

カテレアは転移魔方阵を展開、そこからローブに身を包んだ数人の女性——魔女が現れる。

そいつらは手筈通りと言わんばかりに部屋を陣取り、窓に防御を術式を張って割れないようにし始める。

俺はそれを横目で確認しながらカテレアに訊く。

「カテレア様、次の行動は？」

「魔法使いの部隊を投入して様子を見ます。ある程度経ったら、私たちも会場に突入する手筈です」

「了解しました」

俺が返事をするのとカテレアと共に部屋を出る。建物は木造で、手入れは行き届いているが古い建物に見える。だが、何かするのに不都合はなさそうだ。

俺が警戒しながら歩いていると、カテレアが足を止める。

俺もそれに合わせて止まると、カテレアは俺の方を向いて訊いてくる。

「ジャック、この作戦、うまく進むと思いますか？」

「私はあなた方が考えた作戦を実行するだけです。うまくいくかは私たちがどう動くか

で決まるだけです」

俺がそう返すとカテレアは俺の頬に手を触れる。俺は驚きながらも動じることなく、カテレアの次の行動を待つ。

「あなたは、ただ進むだけです……」

「そうやって戦争も生き残りましたから」

少し不安げな瞳のカテレア。何を考えているかはわからないが、俺は即答でそう返した。

カテレアは不安の色を消すと、なぜか優しさを感じさせる不敵な笑みを浮かべて俺に言う。

「なら、今回もお互い生き残りましょう。やることは戦争の頃と変わりません」

「はい。私も夢半ばで死ぬつもりはありません」

「そうね」

カテレアはそれを言うのと深く息を吐き、俺の頬から手を離れた。本当に何だったのだろうか……。

俺がそんな疑問を抱いていると外から爆音が響いてくる。魔法使いの部隊が派手にやっっているようだ。

その爆音を聞きながら、カテレアは静かに呟く。

「さあ、私たちの戦争を始めましょう……」

カテレアの言葉に俺は頷き、深く息を吐きながら異空間に収納していた銃剣を取り出す。

俺がやることはただ一つ。

兄さんたちを生かして、三竦みの和平を成立させる！

mission03 突入

俺——ジャックとカテレアが待機すること数分。

俺とカテレアの視線の先では大量の魔術師たちが、たった一人の男によつて蹂躪されていた。

白い軌跡を残しながら高速で動き回るそれは、先日俺が交戦した『パニシング・ドラゴン白い龍』、アルビオンド。

俺はアルビオンの動きを目で追いながらカテレアの指示を待つ。カテレアはただ魔術師が殺られていくところを見ていただけだ。

すると、カテレアが口を開いた。

「さて、行きましようか。転移する先は敵陣の真ん中になります。準備はいいですね？」
「いつでも……………」

俺はそう返しながら深く息を吐く。

行く先には確実に兄さんがいる。最悪、兄さんに銃を向けなければならなくなる。兄さんなら避けてくれると信じてはいるが、少し不安だ。

俺の胸中を知らないカテレアは俺たちを囲むように転移魔方陣を展開し始める。光

が強くなっていき、視界がふさがれていった――。

リアス部長とイツセーくんが、敵に利用されてしまった僕たちの仲間――ギヤスパークンを助けに向かった直後、僕たちの前に転移魔方陣が現れた。

それを見たアザゼルは笑い、サーゼクス様は苦虫を噛み潰したような表情をされた。

「――レヴィアタンの魔方陣」

サーゼクス様はそう呟かれたが、僕は自分の耳を疑った。僕の知るレヴィアタン様の魔方陣ではないのだ。

僕の疑問に答えるように僕の隣に立つゼノヴィアが言った。

「ヴァチカンの書物で見たことがあるぞ。――あれは旧レヴィアタンの魔方陣だ」
なるほど、冥界の僻地に追われたという旧魔王のものということか。

魔方陣の光が弾け、そこから現れたのは一人の女性と……………、

「なっ!?!」

ゼノヴィアが驚愕の声を漏らした。当たり前だろう、女性と共に現れたのは、特徴的

な二丁の銃剣を手にする男性。そう、コカビエルを撃破したあのヒトだったのだから！
その男性は僕たちを一瞥すると興味なさげに視線を外した。

僕たちの驚愕と警戒をよそに女性が言う。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

不敵な物言い、女性はサーゼクス様にあいさつをする。

「先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン。これはどういうことだ？」

サーゼクス様はそう言われる。やはり、旧魔王の一族！

女性——カテレア・レヴィアタンは挑戦的な笑みを浮かべて言う。

「旧魔王派は『禍カオス・トリゲードの団』に協力することに決めました」

『禍カオス・トリゲードの団』！先ほどアザゼルが言っていたテロリストのことか！和平が結ばれようと

している今に限って、いや、今だからこそ仕掛けてきたのか！

「カテレア、それは言葉の通りと受け取っていいのだな？」

「その通りです。今回の攻撃も我々が受け持っています」

「——クーデターか」

旧魔王派による反乱、しかもテロリストにも手を貸している。

「カテレア、なぜだ？」

「我々はあなたと逆の考えに至っただけです。神も魔王もいないのならば、この世界を

変革すべきだと……………」

「オフィスの野郎はそこまで考えているか？そうとは思えないんだが」

口を挟んだのはアザゼルだ。オフィスというのは『禍カオス・ブリゲードの団』のトップに君臨するドラゴンの名前だ。それも先ほど口にしていた。

「彼は力の象徴としての役を担ってもらうだけです。彼の力で一度世界を滅ぼし、もう一度構築します」

こんなことが起こるなんて。外の魔術師たちも、そしてあの男性も賛同者というわけだ。各勢力のはぐれ者たちが集まっているとなると、墮天使や天使のなかにも反逆者が出ていることになる。

和平がそんなに嫌なのか……………？サーゼクス様は皮肉げに笑う。

「各勢力の反逆者を集めて、自分たちだけの世界、自分たちが支配する新しい世界を欲したわけか……………」

そして、そのトップとなるのがオフィス。神すらも恐れた二天龍よりも強いと言われるドラゴン。

「カテレアちゃん！どうしてこんな！」

セラフオール様の叫びにカテレアは憎々しげに睨みを見せる。

「私からレヴィアタンの座を奪ってにおいて、ぬけぬけと！私こそが魔王に相応しかった

！」

「カテレアちゃん……………」

「セラフオール、安心なさい。この場であなたを殺して、私がレヴィアタンを名乗ります。あなたたちの時代は終わるのです」

今の発言に男性はちらりとカテレアを見るが、すぐに視線を前に戻した。何か引つかかることでもあったのだろうか？

警戒を最大にする僕たちをよそに、一人だけ愉快そうに笑む人物がいた。

「くっ……………。くっくっくっくっく」

ただ一人だけ、悪童らしい邪悪な笑みを見せていた。

「アザゼル、何がおかしいのです？」

カテレアは怒りを隠そうともせず、声の主、アザゼルの睨む。

「おまえら、こぞつて世界の変革かよ」

「そうです。この世界は——」

「腐敗している？おいおい、今時流行らないぜ？」

腹を抱えて笑い始めるアザゼル。カテレアは目元を引きつらせ、男性は黙ってアザゼルの言葉の続きを待っている様子だ。

「アザゼル、あなたもあなたですよ。今の世界に満足など……………」

「言ってる。おまえらは陳腐で酷すぎる。なのにそういう奴らに限って強いんだよな。レヴィアタンの末裔、おまえのセリフ、真っ先に死ぬ敵役のそれだぜ？」

「アザゼル！あなたはどこまで私たちを愚弄する！」

カテレアは激怒し、全身から魔力のオーラを迸らせる。男性は落ち着いた様子で息を吐き、殺気を濃密にしていく。

カテレアもあの男性もやる気のようにだ。

「おまえら、手を出すなよ？カテレアは俺が殺る」

アザゼルも薄暗いオーラを放ちながら立ち上がった。

「……カテレア、降るつもりはないのだな？」

サーゼクス様の最後通告にカテレアは首を横に振った。

「ええ、あなたはいい魔王でした。けれど、最高の魔王ではない。だから、私たちは新しい魔王を目指します」

「そうか。残念だ」

その確認を見ると、アザゼルは窓際の壁を吹き飛ばした！同時に十二もの黒い翼を展開して宣言した。

「旧魔王レヴィアタンの末裔。『終末の怪物』の一匹。相手としては不足はない！」

「望むところよ！堕ちた天使の総督！」

アザゼルとカテレアはこの場から飛び立ち、校庭のはるか上空で攻防を繰り広げ始めた。

一人残された男性は懐からタバコを取りだし、一本を口にくわえた。

「やれやれ、あのヒトはすぐに熱くなる。悪い癖だ」

他人事のように言いながらタバコに火をつけ、一度紫煙を吐き出した。再びタバコをくわえた瞬間、ゼノヴィアがデュランダルで斬りかかった！

大上段から振り下ろされた一撃を、男性は指に挟んで受け止めた!?

「なに!？」

「おまえさん、動きが単調だな!」

そう言いながらゼノヴィアを蹴り飛ばす男性。僕が加勢しようとする、先ほど開けられた穴に向かって跳躍。穴から飛び出した瞬間に銃剣の銃口をサーゼクス様に向けられた！

そこから放たれる二発の魔力弾。サーゼクス様に吸い込まれるように進むそれは、サーゼクス様の横に控えていたグレイフィアさんが魔方阵で防御する。

男性は一瞬だけ笑みを浮かべると、そのまま重力に身を任せて落下していく。僕は立ち上がったゼノヴィアと頷きあうとその男性を追って飛び降りた。

俺——ジャックは地面に着地を決めて、先ほどの事を思い出していた。

カテレアがセラを殺すと言った時はヤバかったが、どうにか堪えることが出来た。兄さんの暗殺失敗の流れを作ること出来た。あとは……………。

俺は先ほど飛び降りた穴に目を向けると、そこから二人の騎士ナイトが飛び出してきた。やはり、来るだろうな。

俺はタバコを携帯灰皿に押し込み、銃剣を両剣モードに、そこから二刀流モードに切り替える。それと同時に聖魔剣の少年が落下のエネルギーをのせた突きを放ってくる！

俺は校舎から離れるように転がってそれを避けると、回避先に待ち受けていた少女が持つデュランダルが振り下ろされてくる！

それを剣をクロスするようにしてそれを受け、その少女に物申す。

「見聞を広めろとは言ったが、悪魔になるとはな」

「少々やけくそ気味だったが、後悔はしていない！」

力を込めて俺を押しきろうとしてくるが、俺は無防備な腹に蹴りを入れる。

一瞬力が抜けた瞬間にデュランダルを押し返し、そこに上段から一撃！入れようとし

たら聖魔劍の少年が背後から斬りかかってきた！

いい速度、だが！

俺は上段に振り上げていた劍をそのまま背中に回して聖魔劍を防ぎ、一瞬だけ全身から魔力を解放。その風圧で二人を吹き飛ばす！

吹き飛ばされた二人はうまく体勢を整えると、俺を睨んでくる。

「どうした？リアス・グレモリーの『騎士』！その程度か？」

俺が挑発するように両手を広げながら言うと、聖魔劍の少年が俺に言ってくる。

「あなたは、あの時から旧魔王派に与していたんですか!? だとしたら、なぜ僕たちを助けたんです！」

確かに、それは疑問に思うだろうが、下手な事を言うと言兄さんの信用に関わってくるからな……………。

「あの後にオフアーを受けてな。ちやうど現魔王にも不満が溜まっていたもんだから、乗らない選択肢はないだろ？」

俺の回答に二人は苦虫を噛み潰したような表情になる。命の恩人が敵になっているんだ、当然か……………。

俺は劍の引き金を引いて銃劍モードに、そして俺を挟むように立つ二人に一丁ずつ銃劍を向けて引き金を引きまくる！

音もなく放たれる魔力弾を二人は騎士特有のスピードで避けていくが、俺にはまだ遅く見えるな！

俺は二人の動きを読むようにして射撃、放たれた魔力弾は――、

「ぐっ！」

「がっ」

「ほーら、直撃だ。この先、生き残れないぞ？」

見事に二人の足を撃ち抜いてみせた。

足を撃ち抜かれて倒れる二人。俺はそんな二人をさらに挑発するが、『騎士』自慢の足がやられたのだ。今さら戦力としてカウントしなくてもいいだろう。

俺が深く息を吐くと、上空で戦っていたカテレアのオーラが急激に膨れ上がった！おそらく、オーフィスの蛇を使ったのだろう。

オーフィスの力を圧縮したそれを飲み込めば力が格段に増す。一気に決めるつもりだよ。

俺がそう思った矢先、横合いから飛んできた何者かにアザゼルが殴り飛ばされた！

俺はアザゼルを殴り飛ばしたそいつを見て目を見開いた。アザゼルを殴ったその人物は――、

「アルビオン……………」

アザゼルの腹心である筈の白龍皇——アルピオンだった。

mission 04 退却

俺、ジャックが驚愕しながらアルビオンを見てみると、先ほど殴り飛ばしたアザゼルを追って一見廃墟の校舎に向かう。

一見廃墟と言っても、先ほど俺とカテレアが転移した建物だがな。

アルビオンを追ってカテレアも移動しようとする、俺に頷いてきた。

俺が頷き返すとカテレアはアルビオンを追っていく。

「それじゃ、また会おう！」

俺は倒れる『騎士』^{ナイト}の二人を一瞥すると、カテレアの後を追って走り出す。そういえば、リアスたちはどこに行っただ？

俺がそんな事を気にしていたが、それよりも気になることが一つ。例の時間停止が解除されているのだ。これでは周りの連中が動き出してしまっているだろう。

俺は撤退のタイミングを考えながら、カテレアとアルビオンを追った。

追い付くと、いつの間にか着地していたアルビオンとカテレアが、アザゼルとリアス、

リアスの『^{ポーン}兵士』であり、現赤龍帝である少年。そして、その少年の背中に隠れる先ほどの少女を睨み付けていた。

兜を収納したアルビオンは素顔を晒しているが、ダークカラーの強い銀髪的青年だったようだ。ライバルである赤龍帝を見ても大して興味なさそうではあるが……。

俺は二人に駆け寄り、カテレアの横につく。

「あ、あなたは!?!」

「久しぶりだな、リアス・グレモリー」

俺を見て目を見開きながら驚愕するリアスに適当に返す。

すると、アザゼルが自嘲するように俺たちに言う。

「まったく、俺もサーゼクスもやきが回ったもんだ。お互い身内がこれとはな………」

アルビオンがまさかこちら側だとは思わなかった。俺にも知らせてくれないとは、対応しようがないだろうが!

俺が胸中で愚痴っていると、カテレアがアルビオンを見ながら言う。

「彼はジャック。彼もコカビエルを倒した後にスカウトしました。彼とヴァーリのおかげで、今回の下準備が十分にできました。アザゼル、ヴァーリの戦いを望む本質を理解しておきながら、放置しておくなど、あなたらしくない。結果、自分の首を絞めることとなりましたね」

それを聞いて苦笑するアザゼル。俺が静観していると、アルビオンが自身の胸に手を当てながら言った。

「俺の本名はヴァーリ。——ヴァーリ・ルシファーだ」

「ッ!？」

俺とリアスはシンクロしたように驚愕しながらアルビオン——ヴァーリを見る。ルシファーって、まさか、ルシファーにも末裔が!?

俺たちが驚愕していると、改めて説明するようにヴァーリは口を開く。

「死んだ先代の魔王ルシファーの血を引く者なんだ。けど、俺は旧魔王の孫である父と人間の母との混血児。セイクリッド・ギア 神器をもって生まれたのもそのためだ。偶然だけだな」

ヴァーリはそう言いながらルシファーの血を引く者特有の黒い翼を展開してみた。今の話は本当のようだ。

「こちら側とはいえ、冗談みたいな存在だな、おまえさん」

「実際、冗談のような存在だよ。こんなことを敵に説明するのも癪しゃくだな」

俺の言葉にアザゼルが返してくれた。マジで最強なんじゃないのか、こいつ……………。

俺がヴァーリを見ながらそう思うが、同時に落ち着きを取り戻すとカテレアが言う。

「覚悟を決めてもらいましょうか、アザゼル」

それを聞いたアザゼルは愉快そうに笑うと懐から一本の短剣を取り出した。

「それは——」

俺とカテレアは訝しげにそれを見てみるとアザゼルが言う。

「俺は、シエムハザがいなけりや何も出来ない神セイクリッド・ギア器マニアだ。——だが、そのおかげ

で自作もすることもある。基本的には屑鉄しか出来ない。本セイクリッド・ギア当に神器を開発した神はすごいが、同時に甘い。数々のバグを残したまま死んじまつたんだからな。ま、だからこそおもしろいんだけどよ」

「安心なさい。新世界に神器そのものは絶対に作らない。なくても世界は十分に機能します。——いずれは北欧のオーデインにも動いてもらい世界を変動させなくてはなりません」
それを聞いたアザゼルはニンマリと口の端をつり上げると吐き捨てる。

「それを聞いてますますおまえらの目的に反吐へどが出る思いだ。新世界を作る!? オーデインに全部かつさらわれるつもりかよ。というよりもな、俺の楽しみを奪う奴は——消えてなくなれ」

言うやいなや、アザゼルの持つ短剣が変形し始める! パーツがわかれて光が噴き出す。

同時に俺たちを悪寒が襲った! これは、確実にヤバイことになる!

「ツ! まさか、あなたは!」

「カテレア様! お下がりがりください!」

驚愕するカテレアの盾になるように前に出る。同時にアザゼルは力のある言葉を発した！

「バランス・ブレイカー禁手化……………ッ！」

一瞬の閃光が辺りを包み込む。光が止むと、そこにいたのはドラゴンを思わせる黄金の全身鎧を身につけたアザゼルだった！

アザゼルは十二枚の翼を展開して手元に巨大な光の槍を作り出す。

「これが俺の傑作人工セイクリッド・ギアダウン・フオー・ドラゴン・スピア神器、『墮天龍の閃光槍』、その擬似的な禁手状態――

――『墮天龍の鎧』だ」

鎧から感じるオーラは本当にドラゴンのものであり、コカビエル以上のものを感じられる！

俺が冷や汗が頬を伝うのを感じていると、ヴァーリが笑った。

「ハハハ！ さすがだな、アザゼルは！」

「ヴァーリ、おまえには山ほど説教があるが、それは後だ。『赤い龍』と仲良くやってな」

アザゼルの言葉にヴァーリは肩をすくめるだけだ。それにしても……………、

「その鎧。かなりの力を持った奴をベースにしているな。龍王クラスか？」

俺の問いにアザゼルは頷く。

「ああ、『ギガンテイス・ドラゴン黄金龍君』ファープニルを封じてある。とりあえず、実験は成功つてところだ」

五大龍王の一匹か。二天龍の次に強いとされる五匹のドラゴンの内の一匹を使ったなら、それは強力なものになるだろう。

「で、どうする？俺は二人同時に相手してもいいぜ？」

俺とカテレアを見ながら手招きするアザゼル。俺は後ろにいるカテレアに一言言おうとするが、

「私を、なめるなッ！」

その前にカテレアが突っ込んで行ってしまった！

アザゼルとカテレアが交差する一瞬のうちにカテレアは光の槍で一閃されてしまう！

なぜ真正面から突っ込んでいくのか、俺にはわからん！

俺が怒り覚えていると、アザゼルの一撃の余波が地面を削りながら俺の真横を通り過ぎていく。

「——ただではやられません！」

光の一撃を受けた影響なのか、体のいたるところから煙を噴き出すカテレア。それでも彼女は自身の腕を触手のようにしてアザゼルの左腕に巻きつけた！同時に体に紋様

を浮かび上がらせる。あれは、自爆用の術式か！

「カテレア様！」

俺はとっさにカテレアの名を叫ぶ。カテレアは苦しそうに笑むと、触手を剥がそうとしているアザゼルに告げる。

「アザゼル！せめて、あなたを道連れにさせてもらいますよ！これは私の命を使った特別製、あなたでも斬ることはできません！」

「確かに、安直ではあるが確実な手段だな！」

かなり危険な状態である筈なのに余裕そうなアザゼル。彼は触手と自身の左腕を交互に見ると肩をすくめる。そして――、

バシユツ！

触手ではなく自身の左腕を切り落とした！アザゼルの左腕から血が噴き出すが、切り落とされた腕は塵となって消える。

「自分の腕を!?!」

驚くカテレアにアザゼルは光の槍を投げ放つ！その一撃は吸い込まれるようにカテレアの腹部に突き刺さった。

「片腕ぐらい、くれてやるよ」

カテレアの体から自爆用の術式が消え、そのまま彼女は塵となっていく。悪魔であの

密度の光をくらったのだ、魔王の血を引いているとはいえ、消滅は避けられない。……俺も刺されたような気がするがな！

カテレアの消滅と同時にアザゼルの鎧は解除される。アザゼルは左腕ではなく、短剣に戻った鎧を見て舌打ちをした。

「チツ。これが限界か。まだ改良の余地があるな。……核の宝玉が無事ならどうにかなるか。もう少し付き合ってもらおうぜ」

そう言いながら短剣の宝玉にキスをするアザゼル。

俺はそれを見ながらヴァーリに訊く。

「ヴァーリ・ルシファア。俺はカテレア様の最後の命令の通り、ここで引かせてもらう。そっちはどうする？」

「俺はまだやらせてもらおうさ。今のライバルを知っておきたいのでね」

「そうか……」

俺が返事をすると同時に俺を転移魔方陣が囲む。

「総督、見事だった。だが、次は殺す」

俺が適当な事を言うのと、アザゼルは笑う。

「ハハハ！それこそ真っ先にやられる敵役のセリフだぜ？」

「フツ。それもそうかもな……」

俺がそう言うと同時に転移の光が強くなっていき、俺の視界を奪っていった。

視界が回復すると、俺の前で――

「た、隊長……………」

アリサが目には涙を溜めていた。俺は出来るだけ無念の表情を顔に張り付けながらアリサに言う。

「すまん、守りきれなかった……………」

俺が俯くように言うと、アリサは何度も首を横に振る。

「隊長が帰って来ただけでもありがたいです。もし、お二人が死んでしまったら……………」
今にも泣き出しそうなアリサに近づき、優しく抱き寄せる。

「とりあえず、俺は無事だ。だから泣くのは後にしろ。とりあえずこの町から逃げろ。それが最後の命令だからな」

「は、はい！」

俺から離れたアリサは目元と頬を赤くしながら頷く。

俺とアリサはカテレアの指示通りにアジトに戻り、今回の事をクリスとジルに報告。

二人は落ち着いた様子で頷き、俺たちは本部へ戻るための作業の入ったのだった。

あれから三十分程。

無事に和平調停を終えた僕——サーゼクスは帰還しようとしていたアザゼルとミカエルを呼び止め、口外しないことを条件にロイのことと彼女のことを伝えていた。

「——以上だ。よろしく頼む」

「わかったよ。まったく、そういうのは早めに言っておいてくれよ。危うく殺すところだったぞ」

「私もわかりました。あなたも大胆な事をしますね」

「こうでもしないと、旧魔王派に先手を打たれてばかりになってしまうからな」

僕の言葉に二人は苦笑する。自分の弟を文字通り、敵地の真ん中に送り込もうとし、その弟はそれを快諾する。端から見れば正気の沙汰ではないだろう。

「それじゃ、俺は帰るぞ」

「ああ、すまないな、呼び止めてしまった」

「いいさ、俺のつかえていたものが取れたからな」

「私も失礼します。お互いこれから忙しくなりそうですね」

「ヴァルハラへの連絡、よろしく頼む」

「お任せください。神への報告は我々の役目です」

僕たちはそのやり取りを最後にその場で別れ、それぞれ待たせている部下たちの元に向かった。

俺——兵藤一誠の前で、負傷した木場とゼノヴィアがアーシアに治療されていた。幸いなことに重症というわけではなく、問題はなさそうだ。だが、二人の表情は暗い。

「まさか、あの時の男性が裏切り者だったなんて……」

部長もショックを受けた様子でそう呟いた。あんな命懸けで助けてくれたヒトが裏切っていたなんて、俺も信じることが出来ない。本気ではなかったヴァーリにもギリギリ

り食らいつくのがやつとで逃がしてしまつたし、俺もまだまだ弱いな……………。

俺が少し沈んだ雰囲気になっていると、治療を終えた木場がアジアにお礼を言いながら立ち上がる。

「イツセーくん」

「どうかしたか？」

俺が訊くと、いつになく熱いものを瞳に宿しながら木場が言う。

「お互い、もつと強くなろう。越えないといけないヒトがいるからね」

「当たり前だ！」

俺と木場は決意に新たにお互いの右拳をぶつける。そうだ、弱いのもつと強くなればいい！そうしないと、皆を守れないからな！

「なら、私もそれに交ぜてもらおう。私も強くならなければいけないからな」

そこに俺たちを真似たのか、横合いからゼノヴィアも拳をぶつけてきた。

それを見ていた部長が微笑む。

「なら、頑張りましたよ。今まで以上に、ね？」

「「はい！」」

俺たち三人は笑顔で返事をする。俺だけでなく、皆で強くなる。そうだな、その方が面白そうだ！

無事に本部に戻ってきた俺は、隊のメンバーと別れてあるヒトに会いに来ていた。

そのヒトがいる部屋の扉をノックし、許可を得てから入室する。

「シャルバ・ベルゼブ様、お呼びでしょうか」

俺の前には厳格そうな男性。先代ベルゼブ様の血を引く悪魔だ。こいつが次の俺の上司になると思われる。

「報告は先ほど聞いた。ご苦労だったな」

「ありがとうございます。ですが——」

俺は再び無念の表情を見せて言葉を続けようとする、シャルバはそれを遮るように言う。

「ジャック、貴様は強い。だが、我々程ではない。アザゼルとカテレアの戦いに参戦できないのは当然だ」

「……………」

俺は無言でシャルバの次の言葉を待つ。すると、シャルバは意外なことを口にした。

「とりあえず、しばらく貴様の隊は待機だ。休んでいる」

「シャルバ様！失礼ながら我々はまだ——」

「これはカテレアからの頼みなのだ」

「カテレア様の？」

俺が首をかしげるとシャルバは頷き、言葉を続けた。

『彼らが戻ってきたならしつかり休ませて欲しい。彼らには相当の無理をさせている』
だそうだ」

「……………了解しました。失礼します」

俺はカテレアの言葉の意味を考えながら礼をして部屋を退出する。

まさか、こんなことになるとは。疑われているのか……………？いや、だったら、あの場で捕らえられるか……………。

俺はとりあえず、この休暇の間はおとなしくしていようと決め、待機させているあいつらのところに戻る。

まあ、しつかり休ませてもらうか。何があってもすぐに動けるように、いつでも逃げ出せるように……………。

体育館裏のホーリー

mission 01 決戦に向けて

俺——ジャックと俺の部下たちは休暇を終えても本部に留まっていた。

駒王町近くに構えていたアジトは撤収の時に処理を終えているし、そもそもあの町にもう用はない。なので、俺たちは本部に居るしかないのだ。

その本部の連中は作戦を変えて、魔王本人ではなく、その親族を狙ってテロを起こすようになっていた。

現にグラシャラボラス家の次期当主が暗殺されてしまったのだ。俺やジルまで話に来てくれないと対応しきれん！

俺は愚痴りながらシャルバの横に待機している。ジルたちは別室待機だ。

俺たちは俺の予想通りにこいつの部下となり、基本的に俺はこいつの側を離れられない。情報はジルが送ってくれていると信じるしかない。

俺がそんな事を思っていると、シャルバが書類を確認しながら険しい表情になる。

「シャルバ様、いかがされましたか？」

「ジャック、これを見ろ」

シャルバは俺に書類を渡してくる。俺はそれを受け取るとざっと目を通す。

「ディオドラ・アスタロトがレーティングゲームで『蛇』を使用……………!あのバカが……………ッ!」

俺が憎たらしそうに言うのと、シャルバは頷く。俺が書類を返すとシャルバが言う。

「これで我々の計画がバレた可能性もある」

「どうされます、このまま続行ですか」

俺がわざとらしく訊くと、シャルバは不敵に笑って俺に言う。

「ああ、今さら止めん。この程度は想定範囲内だ」

シャルバはそう言うが、それを裏切り者に言っていることは想定範囲内なのか？

俺はそう思ったが、「了解しました」と返してそのまま訊く。

「仕掛けるのはどのタイミングでしょうか？」

「それも決定している。ディオドラの小僧とリアス・グレモリーのゲームの時だ。今回は忌まわしい現ルシファーの妹を殺す!ディオドラもその妹の『僧侶』レビヨツプを欲しがっているからな」

「……………またあいつらですか」

俺は心の中で溜め息を吐きながらそう呟いた。今年に入ってからリアスと会う回数が増えてきたきたな……………。

「作戦は三日後。貴様は隊に戻って準備を進めておけ、いいな? 『英雄派』への連絡は済んでいるが、詳しくは当日まで言えん。理由はわかるな?」

「もちろんです。では、失礼します」

俺はシャルバに礼をして退室する。英雄派、セイクリッド・ギア神器などの異能を持った人間のみで構成された『カオス・ブリゲード禍の団』の派閥の一つか……………。

俺はそれを思い返しながら腕輪のスイッチを押して兄さんに通信を送る。

『ロイ、どうかしたか?』

『リアスとディオドラ・アスタロトのゲームの時に仕掛ける。何か作戦があるようだが、それはいまだに不明。それと、ディオドラはこちらと繋がっているから警戒しておいてくれ』

『……………ツ! そうか。アスタロト家、アジユカの所の次期当主が……………』

『ああ、その通りだ』

『そうか、助かるよ。その時に戻るんだろう?』

『ああ、シャルバは今回で決めるつもりだ。本人は認めないが、かなり焦ってきているからな。三竦みの和平から広がっている他の神話勢力との協力態勢。それが完璧になる前に仕掛けたいんだろ』

『そうか、わかった。備えておこう』

『じゃ、切るぞ?』

『また頼むよ』

『次があったら、その時が最後だと思いがな』

その言葉を最後にスイッチを押して通信を切る。兄さん、ディオドラの話をした時に結構ショックを受けた感じの声になっていたな。

まあ、当たり前か、アジユカ様の親族が裏切っていたんだからな。

俺は次の作戦がどんなものかを予想しながら歩き、隊が待機している部屋に到着する。

「あ、隊長! お帰りなさい!」

「アリサ、元気そうだな」

「はい! 元気が取り柄ですから!」

隊に当てられた部屋に入ると、アリサが真っ先に俺に気づいて声をかけてきた。

俺はそれを適当に返して空いていた椅子に座る。ジルは読んでいた本から目はずし、クリスが奥から現れる。少し髪が湿つているところを見ると、またシャワーを浴びていたのだろう。

俺は全員が揃ったことを確認すると、全員に伝える。

「さて、次の作戦が決まった。三日後だ」

俺の言葉に三人は頷き、今日の日付を確認する。カテレアが死んでから約二ヶ月。あの時は夏の始めだったが、今は秋の始めか……。

俺はそんな事を考えていたが、浅く息を吐いて切り替える。

「目標はリアス・グレモリー。容姿は言わなくてもわかるな？」

「はい」

「ならいい。作戦には英雄派の支援があるらしいが、細かくは当日になってからわかる。ようはいつも通りだ」

俺が皮肉げに言うと、アリサは苦笑し、クリスは溜め息を吐き、ジルは小さく微笑む。「さて、三日あるからな、各々準備を整えておけよ？俺は少し休む。最近働けばなしだったからな」

俺が言うと三人は揃って苦笑した。本当に、シャルバは人使いが、特に俺の扱いが荒い。たまには休ませて欲しいし、他の奴でもできそうなものもかなりあったから、余計に面倒だった。

俺は席を立ち、部屋に備え付けられている二段ベッドの下の段に倒れこむ。ちなみに、俺の上はクリスだ。いびきがうるさいが、もう慣れた。ちなみに女性陣は二人用の二段ベッドがある。まあ、目の前だな。

時間は人間界でいう深夜に当たる。いくら悪魔でも眠いものは眠いのだ。

俺は眠気に任せて目を閉じた……………。

何時間寝たのだろうか。俺は近づいてくる気配を感じて目を覚ました。

俺が目を開けて気配のした方に目を向けると、寝間着姿のジルが視界に入る。彼女は俺が起きたことを確認すると、ゆっくりと近づいてきながら人差し指を立てて静かにするよう伝えてきた。

俺はそれに頷いて上体をゆっくりと起こし、十分近づいたところで声を小さめにして訊く。

「で、二人はどんな感じだ？」

「ああ、大丈夫だろう。こいつらは旧魔王よりもおまえを信頼している。おまえが『投降しろ』と命じれば折れるぐらいにな」

「そうか、悪いな、面倒を押しつけちゃって」

「いいさ、面倒は嫌いじゃない」

ジルはそう言うのと笑み、俺に顔を近づけてきた。俺は少し顔を後ろに下げて距離をとるが、構わずにジルは言う。

「まあ、とにかくだ。お互い最後の作戦は死なずに終わらせよう。ここで死んだら笑い者だ」

「ああ、わかってるさ」

「ならいい」

ジルはそう言うのと二段ベッドに戻っていく。次の作戦で俺とジルのやってきた全てが決まる。今まで完璧とは言えなかったが、終わり良ければ——とも言うからな。

それに、アリサとクリスの運命も次の作戦で決まるわけか……………。

俺は三日後の作戦のことを考えながら再び目を閉じる。どちらにせよ、俺は俺のやるべきことをやるだけだな……………。

柄にもなく真面目なことを考えていたが、やはり襲ってくる眠気には勝てず、俺の意識はすぐに闇に落ちていったのだった。

mission02 覇龍

あれから三日後。

俺たちは本部の転移室でシャルバから作戦を聞かされていた。

「これから作戦を始める。分担は——」

作戦をざっくり説明すると、まずデイトラとリアスがフィールドに転移してきたら俺の隊を含めた数十人がそこに転移、そのまま攻撃。

他の隊は他の場所でゲームを観戦に来ていた神話のトップ陣を攻撃。

そして、あるタイミングで全員で一旦離脱するらしいが、そのタイミングは実際にそれが起こるときに伝えるとのこと。

いつものことだが、ざっくりとしすぎだな。兄さんに伝えることも特にないぞ………。

俺が小さく溜め息を吐くと、シャルバが言う。

「では、作戦を始める！ 諸君の奮闘を期待する！」

『ハッ！』

俺たちは勢いよく返事をする、転移用魔方陣が起動し光を放ち始める。

俺はちらりとジルを見て小さく頷くと、ジルも微笑しながら頷き返す。

俺とジルは打ち合わせ通りにクリスとアリサを新魔王派に引き込む、もしくは投降させる。作戦中にそんな隙があるかわからないけどな。

俺がそんな事を考えているうちに俺たちは魔方陣の光に包まれ、戦場に転移した。

……………で、

「こ、これはちよつとヤバくないですか!？」

「リーダー、どうします! 殺されますよ!？」

俺の耳にアリサとクリスの動揺の声が聞こえてくる。それと同時に爆音なんかも聞こえてきている。

俺たちは転移して早々に殺されかけていた。

俺たちが相手をしているのは、北欧神話の主神——オーディンだ。それが強いものなんのって、一撃目で攻撃隊の半分くらい消し飛んだからな!

一応、俺と俺の隊のメンバーの特徴は直前に伝えたから大丈夫だとは思いたいけど、多分知らずに攻撃してきているだろ！

「とりあえず、ここには攻撃が来ていない。流石の主神でも魔法力は無限じゃない筈だ。バテたら一気に仕掛けるぞ」

「了解！」

「了解です！」

ジルとクリス、アリスはいつもの通りに返事をしてきた。俺は物陰から顔を出す。

オーデインが攻撃しているのは俺たち四人がいない方向ばかりだ。先程は知らずにやっているとと思ったが、案外俺たちの位置はわかっているのかもしれない。

俺がそう思い始めると、オーデインの背後にある神殿から天に向かって光の柱が飛び出してきた！その柱はゆっくりと倒れていき、当たった全てのものを蒸発させていく………。

聖なるオーラを感じたところを見ると、聖剣の一撃、だったらあのデュランダル使いだろう。

俺がそう目星をつけると、俺の耳元に連絡用の魔方陣が展開された。警戒しながら耳を傾けると、そこから聞こえてきたのはシャルバの声だ。

『ジャック、聞こえているか？』

「はい。少々厳しい状況ですが、無事です」

『ならば、貴様は隊から離れて神殿の奥に來い。そこで私と共にリアス・グレモリーを討つ！』

「隊と別れて、ですか？」

『ああ、貴様だけで来るんだ。隊の連中はオーデインに特攻させる。目的達成のために犠牲はつきものだろう？』

「……………わかりました」

俺が返事をするのと連絡用魔方陣が消える。そして、真横でそれを聞いていたアリサとクリスの表情が暗くなっており、ジルだけは呆れと侮蔑を感じる表情になっていた。まあ、こいつらの忠誠心を折るためにわざと聞かせたんだがな。

俺は嘆息しながら三人に指示を出す。

「聞いた通りだ。俺はこれからシャルバ様の援護に向かう。おまえらは——」

俺は三人の顔を見て、安心させるように笑みを浮かべて言葉を続ける。

「何としても生き残れ。特攻はしなくていい」

「え？」

アリサは意外そうに声を漏らす。基本的に命令に忠実な俺が命令を無視したのだ、きつと驚いているのだろう。

「だから、何としても生き残れ。ここで死んでも意味はない」

俺はそう言うのと翼を展開する。あとは飛び立って神殿に向かうだけだ。

俺はジルを見ながら言う。

「ジル、例のやつ、頼んだぞ」

「ええ、任せてください。二人は死なせませんよ」

「おまえが言うなら大丈夫だろうな。アリサ、クリス、おまえらはジルの指示に従え。最悪、投降すれば死なずには済むさ……」

「た、隊長はどうするんですか!? シャルバ様の近くでは、投降することは——」

「ああ、ジャックおれは死ぬだろうな。だが、おまえらが無事ならそれでいいさ」

アリサの声を遮るように俺は言った。アリサは泣きそうになるが、俺は構わずに翼を動かして体を浮かせる。

「それじゃ、死ぬなよ!」

「隊長!」

アリサの叫びを無視して俺は物陰から飛び出した! あとはジルに任せるしかない。

俺はこつちを終わらせる!

オーデインの攻撃に巻き込まれないように飛んだため、少し時間がかかったが、俺は神殿にたどり着いた。入れそうな場所を探すが、なかなか見つからないな。

俺は神殿の外壁に二丁の銃剣の銃口を向け、同時に射撃する！

二つの銃口から放たれた魔力弾は絡み合うように直進し、一つの魔力弾になると外壁に直撃、大爆発した！外壁には大きめの穴が開いている。

俺はその穴から神殿に飛び込むと――、

「きゅ、旧魔王派の増援か!? た、助けてくれ!」

無様に床に仰向けに倒れこむ青年――ディオドラはふらつきながら立ち上がり、俺に懇願してくる。

部屋を見ると、リアスとその眷族たちもいた。ディオドラは俺の登場に喜んでいるが、リアスたちは逆に警戒をしながら俺を見てくる。

「遅かったな、ジャック。ちようど一人消した所だ」

俺の登場に驚かないのはなぜか宙に浮いているシャルバだけだ。余裕そうな笑みを浮かべて俺にそう言うてきた。待てよ、一人消したってことは、リアスの眷属が誰か殺されたのか!?

俺は驚愕を表に出さないようにシャルバに訊く。

「忌まわしい魔王の血族が二人、どちらを先に？」

「ディオドラからだ。もう用はない」

「わかりました」

俺は銃口をゆつくりとディオドラに向け、

「え？」

引き金を引いた。銃口から吐き出された魔力弾はまっすぐディオドラの眉間に突き刺さり、直撃を受けたディオドラは床に崩れ落ちる。

「哀れだな。おまえも俺たちの敵、新魔王の血族だろう」

俺はそう吐き捨てた。あとは、シャルバを倒してリアスたちを逃がすだけだが………。

「さて、サーゼクスの妹君。貴公にも死んでいただく。理由は、もうわかるな？」

シャルバが冷たく言い放つ。殺らせるつもりはないが、ギリギリまでリアスたちの敵を演じないとな。

「貴公を殺したところで作戦は終了。結果から言って今回は私たちの負けだ。想定外のこと起こりすぎたな……。だが、失敗は生かしてこそだ。クルゼレイは死んだが問題ない」

クルゼレイってのは旧アスモデウスの血族だ。なんか、知らないうちに死んでいたよ
うだ。誰が殺したかはわからないがな。

「直接現魔王に決闘も申し込まずにその血族から殺すなんて卑劣だわ!」

「それでいい。まずは現魔王の家族から殺す。絶望を与えなければ意味はない」

「――外道っ! 何よりもアーシアを殺した罪! 絶対に許されないわッ!」

リアスは激昂しながら紅のオーラを迸られる! が、兄からしてみればまだまだかわい
いものだ。母さんとか兄さんとか、マジで怖いからな。

「アーシア? アーシア?」

赤い鎧を纏っている赤龍帝の少年がふらふらと歩きながら誰かを探し始める。

あいつ、いつの間にか禁手バランズ・ブレイク化できるようになっていたんだな。

「アーシア? どこに行っただよ? ほら、帰るぞ? 家に帰るんだ……」

何か、見てられないぞ。そのアーシアって子を相当かわいがっていたようだ。

「……………許さない。許さないッ! 斬るっ! 斬り殺してやるっ!」

デュランダル使いがもう一本の聖剣も使った二刀流でシャルバに斬りかかる! まっ
たく、仕事しますかね!

俺はそれに素早く反応してシャルバの前に行く、その二刀を銃剣の刃で受け止めた
! そしてその二刀を弾き飛ばすと腹に蹴りをくらわせる!

ドオオンッ！

床に勢いよく叩きつけられるデュランダルの使い。二本の聖剣も手元から離れて床に突き刺さった。

「……………アーシアを返せ……………。アーシアは……………私の……………友達なんだ……………」

それでも立ち上がり、聖剣を取りに行こうとする。俺は銃口を聖剣に向けて発砲。聖剣をさらに遠くに弾き飛ばす。

俺がそれを済ませると、シャルバが赤龍帝の少年に向かって言った。

「下劣なる転生悪魔と汚物同然のドラゴン。まったくもって、グレモリーの姫君は趣味が悪い。その赤い汚物。あの娘は次元の彼方に消えていった。すでに体は消失しているだろう。——死んだ、ということだ」

それを聞いた赤龍帝の少年はシャルバに視線を向ける。無表情で、じつとシャルバを見続けている様は不気味にも見える。

『リアス・グレモリー、いますぐこの場を離れろ。死にたくなければ退去したほうがいい』

『……………』
ブーステッド・ギア

赤龍帝の籠手の宝玉から声が発せられた。これは『赤い龍』の声か？それにしても、退去して、何が起こるんだよ……………。

『その悪魔、シャルバといったか？』

ウエルシュ・ドラゴン

赤龍帝の少年はおぼつかない足取りでこちらに向かつてくる。

『おまえは』

俺たちのほぼ真下に来たとき、心身を底冷えさせるような無感情の『赤ウエルシュ・ドラゴンい龍』の聲が少年の口から発せられる。

『選択を間違えた』

その時、少年から血のような赤いオーラが解き放たれた！神殿内全域を照らす勢いで放たれるそれは、かなり危険なものだということとはすぐにわかる。

俺とシャルバが警戒を最大にしていると、少年の口から呪詛のような呪文が発せられる。

その声は少年のものだけではない、老若男女、様々な声が混じった不気味なものだ。

『我、目覚めるは……』

〔始まったよ〕〔始まってしまふのね〕

『覇の理を神より奪いし二天龍なり……』

〔いつだってそうでした〕〔そうじゃな、いつだってそうじゃった〕

『無限を喰い、夢幻を憂う……』

〔世界が求めるのは〕〔世界が否定するのは〕

『我、赤き龍の霸王と成りて……』

「いっただって力でした」「いっただって愛だった」

【何度でも滅びを選択するのだな！】

少年の鎧に鋭角なフォルムが増えていき、巨大な翼まで生え始めた。両手足から爪と思われるものが伸び、兜からは角まで生える。まるで、ドラゴンだ……………。

全身の宝玉から絶叫のような声が発せられた！

「「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう——」」

『Juggernaut Drive!!』

ゴオオオオオオオオ……………。

少年の放つオーラで近くの床が、柱が、壁が、天井が破壊されていく！これは、ヤバイ！

「ぐぎやあああああああツツ！」

人の言葉ではない、まるで獣のような叫びを発し、その場で四つん這いになると翼を飛ばたかせる。そして、俺たちの視界から消えた！

俺はとっさにその場を飛び退くと、

「ぬうううううっ！」

シャルバの悲鳴が聞こえてくる。少年がシャルバの肩に食らいついていた！兜が変形して口のようなものが生まれているようだ。

俺はちらりとリアスたちを見ながら言う。

「おまえら、さっさと逃げろ。巻き込まれたら死ぬぞ」

「え？」

俺の言葉にリアスは少し驚きながら声を漏らしたが、俺はシャルバの方に目を向ける。

「ぐおっ！」

シャルバの苦痛の声。ちょうど右腕を切断されたらしく、肩の肉を食いちぎられる形で解放されていた。俺は反撃しようとするシャルバを無理やり回収して先ほど開けた穴から飛び出して逃げる！

「ジャック!？」

「あれは危険です！一旦距離を取ります！」

俺たちを追って赤龍帝が神殿から飛び出してきた。これでリアスたちは安全だな。俺は知らないが、リアスが無事なら今はそれで構わない！

俺は地面をスライドしながら着地、シャルバを下ろして二人で赤龍帝を睨む。すると、赤龍帝が口を開きそこからレーザーを発射してきた！

「チッ！」

俺とシャルバは舌打ちしながら左右に別れるようにして避けるが、赤龍帝はシャルバ

俺が回避運動をした瞬間、俺の視界は一瞬で赤く染まり、俺の意識は暗転した――。

mission03 任務完了

俺——ジャックは目を覚ました。覚醒したばかりで視界がぼやけて何も見えないが、多分もとから暗いのだろう。夜目が効く悪魔なのに、真っ暗だ。

壁に背を預けて座り込むような態勢になっている俺は体を動かそうとするが、左肩に激痛が走ったためにそれを一旦断念した。そして、耳を澄ますと謎の歌が聞こえてきた。

とある町の隅っこで

おっぱい大好きドラゴン笑っていた

嵐の日でもおっぱい押すと元気になれる☆

——なんだこれは……………!?

——

「うーん。あれ？」

俺、兵藤一誠が目を覚ました時、バラス、ブレイカー 禁 手の鎧が解かれていた。号泣する部長や朱乃さんに抱きつかれて、何事かと思つた。

よく覚えていないが、木場が言うには俺は暴走し、シャルバとあのローブの男性を倒したそうだ。まったく覚えてないな……。

つて、ゼノヴィアがアーシアを抱えている!? な、なんで!?

「ヴァーリが助けてくれたんだ」

木場がヴァーリを指さす。ヴァーリもいたのか……。何でここに? てかなぜ笑っている?!

理由を聞いてみればヴァーリがここに来たのは偶然が重なった結果なのだという。

何がともあれ、アーシアが無事でよかった!

俺が体を起こすとヴァーリが話しかけてくる。

「兵藤一誠。無事だったようだな」

「ああ。なんだか、世話になっちまったようだな」

「たまにはいいだろう。それよりも、空中を見ている」

「?」

俺は疑問符を浮かべながらフィールドの白い空を見上げる。すると――。

バチッ！バチッ！

空間に巨大な穴が開いていく。そして、そこから何かが現れる。

「あれは――」

俺たちはその何かを見て口が開きっぱなしになる。ヴァーリは口元をゆるくにやけさせながら言う。

「よく見ておけ、あれが俺が見たかったもの『真なる赤神龍帝』グレートレッドだ。俺たちはあれを確認するためにここに来た。いつか、俺はあれを倒したいんでね」

見たことがないほどヴァーリはまっすぐな瞳でそう言った。あのとてつもなく巨大な真紅のドラゴンがヴァーリの目標――。

こいつも越えたい目標のために頑張っているんだな。テロリストだけど……………。

ヴァーリの目標を聞いて、案外悪い奴でもないと思つた矢先、俺の耳に聞き馴染みのない声が聞こえてきた。

「グレートレッド、久しい」

「ッ！」

俺はハツとしながらその声の主を探す。視線の先には黒い髪に黒いワンピースを着た少女が立っていた。

「誰だ、あの娘……？さっきまでいなかったよな？」

ヴァーリが苦笑しながら答える。

「彼女、と言うべきかはわからないが、あの娘がオーフィス。ウロボロスだ。『禍カオス・ブリゲードの団』のトップでもある」

マジっすか!?!あの娘が親玉！何でこんなところに!?!

オーフィスはグレートレッドに指鉄砲の構えでバンツと撃ちだす格好をした。

「我は、静寂を手にする」

すると今度は羽ばたき音と巨大なものが落ちてきたときのような音が響き渡った！

そちらを見ると、駒王学園の教師になったアザゼル先生いつもの様子のサーゼクス様、それと俺が夏休みにお世話になった元龍王のタンニーンのおっさんが現れたようだった！

アザゼル先生が俺を見て笑う。

「おー、イツセー。元に戻れたようだな。今回ばかりは俺も怖かったが、案外どうにかなるもんだな。で、どうだったよ、あの歌は？」

「夢はいいですけど、やっぱり酷くないですか!?!」

「そうかい？セラフォルも僕も頑張って考えたんだけどね」

何てことをおっしやるサーゼクス様！本当に魔王の皆様はノリが軽いよ！ちよつと

前に聞いたロイってヒトは真面目だって聞いたぞ！前に朱乃さんから――、

『現魔王様の兄弟や姉妹の方はしつかり者が多いのですわ。現魔王様のオフの時のノリが軽すぎてそうならざるを得なかったとも言われています』

って聞いた！出来れば信じたくなかったけど、もうどうしようもないな！

俺がそんな事を思い出していると、アザゼル先生とヴァーリか話していた。

「クルゼレイの方も死んだか」

「ああ、サーゼクスが片付けた。これで旧魔王派も終わりだろう。現に退却する奴らと降伏する奴らが出てきているからな」

後半からはオーフィスに言った感じだったが、あの娘は驚く様子もなくただ一言、

「それもまた一つの結末」

とだけ言って踵を返す。

「我は帰る」

しかし、テロリストのトップを前にしてやる気満々だったタンニーンのおっさんが翼を広げて呼び止める。

「待て！オーフィス！」

けど、オーフィスは不気味な笑みを浮かべるだけだった。

「タンニーン。龍王が再び集まりつつある。――楽しくなるぞ」

ヒュッ！

空気が振動したかと思えばオーフィスが消えた！あの一瞬でどっかに行ったのか！

それを見ていたアザゼル先生とタンニーンのおっさんが嘆息する。

「俺たちも退散しよう」

ヴァーリもうしろに控えていた背広の男性が作り出した次元の裂け目に入ろうとしていた。毎回退くのは早いな！

「兵藤一誠——俺を倒したいか？」

「ああ。けど、倒したいのはおまえだけじゃない。俺にも越えたい目標がたくさんあるからな」

「俺もだよ。俺にも倒したいものがある。おかしいな。赤龍帝と白龍皇が戦わずに違う目的を持つなんて。俺とキミはおかしいのかもしれないな。だが、いずれは」

俺は拳をヴァーリに向けた。

「ああ、決着つけようぜ」

「その時までには、もっと強くなってくれよ」

ヴァーリはそう言いながら俺の拳に拳をぶつける。

そのやり取りを終えるとヴァーリたちは裂け目に入っていく。

追えばよかったのにつて思った。けど、気まぐれかもしれないけど、あいつはアーシアを助けてくれたんだ。

決着はいつか、必ず。さて、俺も強くないとな。

俺たちが一応の決着で安心しながら息を吐いていると、
バアアアンツ！

激しい爆発音と衝撃が俺たちを襲った！俺たちが再び警戒しながらその音がした方を見てみると、そこには――、

「げほっ！げほっ！あー、強くやりすぎたな」

ローブの汚れを払うコカビエルを倒したあの男性。フードがとれて黒い髪を後頭部にまとめているのがわかる。今まで生き埋めになっていて、自分に被った土を銃剣を使つて吹き飛ばした様子だ。

木場が聖魔剣を、ゼノヴィアがデユランダルを取り出して構える。

二人はすぐには飛び出さずに警戒しながら男性を見ている。二人は一度あのヒトに負けている。消耗している状態でやるのは無理があるだろう。

ローブの男性はタバコを取り出して吸い始める。こちらに気づいている筈なのに、特に気にした様子はない。

ローブの男性が紫煙を吐き出しながら俺に言う。

「タバコの味がするのは生きてる証拠だ。まったく、死にかけたぞ……」

愚痴のような感覚で言ってきたけど、あのヒトは敵なんだから倒しにいつて当然だろ！まあ、暴走していたわけだけど……。

ローブの男性はまだ続ける。

「それに、何ださっきの歌は？俺が頑張っているうちにずいぶん楽しんでたようだな、おまえも、セラも」

今度はサーゼクス様への愚痴のようだ。結構溜まっていらつしやる？てか、セラって誰だ？部長は何かに気づいたような表情になっているけど……。

サーゼクス様は苦笑しながらもローブの男性に言う。

「あはは……、あれも仕事のうちなんだけどね」

「仕事って、もつと有意義なことをしろよ……。グレイフィアさんもよく許したもんだ……」

サーゼクス様とローブの男性の会話はとても親しい者同士のような軽い内容だ。あのヒト、敵、だよな？

俺たちがお互いの顔を見合わせていると、サーゼクス様がローブの男性に近づいていく。ローブの男性は銃剣を異空間にしまうとサーゼクス様に近づいていく。

そして、二人の距離が手が届くほどになるとローブの男性が跪いた。

「さて、ご苦労だったね。これで任務は完了だ、ロイ」

『え?』

サーゼクス様の言葉を聞いて俺たちは間拔けな声を出してしまった。

サーゼクス様は構わずにローブの男性の右腕についている腕輪に魔力を送る。

パリン……………。

儂い音をたてながら腕輪が砕け散ると、ローブの男性は深く息を吐きながら立ち上がる。すると、髪の色が黒から紅に変わった!?

「あー、やっと終わった……………」

だるそうに伸びをした男性は俺たちに笑みを向けるとサーゼクス様と一緒にこちらに歩みよりながら軽い感じで右手をあげて言ってきた。

「さて、挨拶しておくか……………」

挨拶しようとしていた男性に部長が駆け寄ってそのまま抱きついた!

「ロイお兄様あああつ!」

「おわ?!いきなりだなおい!」

ロイと呼ばれた男性は慣れた様子で部長を抱き止める。あ、あのヒトがロイさんなのか!?!何か、イメージと違って乗りが軽い……………。

その男性は苦笑しながらも自身の胸に顔を埋める部長の頭を撫でる。それを真横で

見ていたサーゼクス様が――

「リーア！その勢いで僕にもハグを！」

と言うが、部長は少しだけサーゼクス様を見るとすぐにそっぽを向いてロイさんを抱きしめる。

それを受けたサーゼクス様はたそがれるように遠くを見ながら呟く。

「リーアはロイが大好きだからね……………、仕方ないね……………」

ロイさんは苦笑しながら部長に言う。

「あー、リアス、すごい見られてるぞ？意外な一面を見ちまったって感じの顔されてるぞ

……………」

「……………」

部長は黙って顔を赤くしながら男性から離れる。

その男性は少し溜め息を吐くと俺たちに言った。

「さて、もうわかってると思うが、俺はロイ、ロイ・グレモリーだ。妹が世話になってるな」

やっぱり、このヒトが部長のもう一人のお兄さんなのかあああつ！

そこで俺は再び限界を迎え、気を失ってしまった……………。

俺——ジャックじゃない、ロイの目の前で赤龍帝の少年が気絶した。なぜだ、俺が自己紹介したからか………？

「イツセーさん！しつかりしてください！」

その少年を金髪の少女が膝枕して介抱していた。その横では聖魔剣使いの少年とデュランダル使いの少女が俺を睨んでくる。やれやれ、誰が誰やら………。

「とりあえず、運んでやるか……。いいか、兄さん？」

「ああ。積もる話はあると思うが、それは後にしよう」

とりあえず、気まずい空気を切るように赤龍帝の少年を運ぶことに。とりあえず、俺も病院行こう、左肩がいてえ……。

こうして、俺は一応の帰還をすることができた。あとは、アリサとクリスがどうなったかを調べるだけだ。

Return life 01 帰宅と自己紹介

「そうか、あいつら投降したか」

「ああ、この写真の二人は確認できた」

俺——ロイはあの作戦の後に一旦病院へ送られ、そのまま一日だけ入院。無事に退院した足で魔王領の兄さんの執務である部屋を訪れていた。アリサとクリスのその後を調べてもらうためだ。

話を聞いた限りでは二人とも無事のように、今は留置場にいるようだ。

それにしても……………。

「悩み事かい？」

「あ？顔に出てたか……、よく任務達成できたもんだ」

俺は自分の顔に触れながら苦笑した。少し気が抜けているみたいだな。

「ジル、じゃわからぬか。俺ともう一人潜入した奴がいたはずだ。何者だ？」

俺が訊くと兄さんは苦笑しながら言う。

「ああ、教えたいんだが、向こうが黙っていて欲しいと……………」

「なんだそれ…………。向こうは俺を知っているんだろ？」

「いや、知らない筈だ。それを条件に黙っていてくれとアジユカから言われたんだ」

「アジユカ様から…………」

アジユカ様がそう言うのなら、あまり調べないでおくか。向こうはこれからも極秘の任務をしていくのかもしれない。

「けど、そのうち会える筈だ。その時に直接聞くといい」

「お互い顔はわかるが、自信はないな」

俺は再び苦笑する。任務が終わってもまだまだ苦労は多そうだな。

「で、あの赤龍帝——兵藤一誠だったか？あいつ、大丈夫なのか？」

俺は話題を変えて兄さんに訊いてみた。あの少年、思いつきり倒れたからな。それに
ジャガーノート・ドライブ
 『覇 龍』とかいう一種の暴走をしたんだ。何かしら後遺症が残らなければいいが

…………。

兄さんは少し俯き気味に俺に言ってくる。

「まだ目を覚まさないようだ。アザゼルは『もう少しすれば目が覚める』とは言っていたが……………」

「先は長くない、か？」

「ああ……………」

俺と兄さんはお互い黙りこんでしまった。

兵藤一誠がおこなった『ジャガーノート・ドライブ 覇 龍』は、聞く話だと生命エネルギーを大量に使うものらしい。悪魔は寿命が長いが、あの暴れ方だと、それを相当消費した筈だ。

俺は息を吐いて話題を変える。

「とりあえず、俺はリアスの眷族と会ってみるか。色々と言わないといけないしな」

「そうか。それと、もうすぐリアスの体育祭だ。見に行くのかい？」

「そうだな。まあ、行けたらな」

俺は適当に返しておく。あの年の妹の体育祭を見に行くというのも少し抵抗を覚えるのだが、兄さんは行く気満々のようだ。

「それじゃ、俺は帰る。母さんたちにも会いに行かないと」

「うん、そうするといい。しばらくキミには休暇をあげるよ」

「くれなきや勝手に休むがな」

俺は半目になりながら兄さんに言った。兄さんは「そう言わないでくれ」と言いながら笑うが、俺たち的にはいつもの会話だ。

俺は執務室から出ようとしたが、そこであることを思い出した。

「兄さん、一ついいか？」

「なんだい？」

「クレーリア・ベリアル。誰かわかるか？」

「……………いいや」

「そうか」

俺はその会話を終えて今度こそ執務室を出る。

兄さんが返すのに少し間があった。あれは、何か知ってはいるが教えられないみたい
な感じだな。なら、無駄に詮索しないでおこう。

俺はそんな事を思いながら転移室に直行、そのままグレモリー城に転移した。

……………。
グレモリー城。昔と変わらない作りの転移室に俺は到着した。さて、母さんたちは

俺が転移室から出ようとすると部屋のドアが開かれ、そこから見慣れた銀髪の女性が
入ってきた。

「義姉^{ねえ}さん、久しぶりですね」

「ロイ様、お久しぶりです。任務ご苦労様でした」

「ありがとうございます。母さんと父さんは？」

「こちらでお待ちです」

俺はいつもの様子の義姉さんに安心しながらその後が続く。屋敷もたいして変わっていないようだ。

歩くこと数分、俺はある部屋の前で止められた。義姉さんが扉をノックして「ロイ様をお連れしました」と告げると「入ってくれ」と返ってくる。

義姉さんはそこで一礼すると下がっていき、残された俺は部屋に入る。入ってみると、そこには――、

「お帰りなさい、ロイ」

「お帰り、ロイ」

母さんと父さんが正面に座っており、俺に笑みを向けてきていた。二人とも変わっていないようにで安心した。

「ただいま帰りました、母さん、父さん」

俺は笑みを浮かべて二人に返す。そして、

「初めてまじると言うべきか？リアスの眷属諸君」

部屋の横に並ぶように立っていたリアスたちに声をかけた。見たことはあるが、名前

がわからないからな。『騎士』の二人は軽く睨んできているような気がするが、気にするほどでもないか。

俺は咳払いをして改めて彼らに自己紹介をする。

「さて、知ってると思うが俺はロイ・グレモリーだ。話はリアスから聞いてはいると思う」

「はい、お兄様。少しだけならお話しました」

「そうか、ならそつちの紹介も頼む。顔はわかるが名前がさっぱりなんだ」

「わかりました。朱乃、お願い」

「わかりましたわ、部長」

リアスの一言を受け、黒髪ポニーテールの女子が一步前に出る。

「初めまして、リアス・グレモリー様の『女王』、姫島朱乃と申します」

次に前に出たのは聖魔剣使いの少年。

「リアス・グレモリー様の『騎士』、木場祐斗と申します。その節はお世話になりました」

「………うん、悪かったな。足を撃つちまって」

「それを言うなら私もだ」

そう言いながら前に出たのは髪にメッシュを入れたデュランダル使いの少女。

「私は『騎士』のゼノヴィアだ。よろしく頼む」

「ああ、おまえも悪かったな」

一応だが謝っておく。出来るだけ威力を落としたり、後遺症が残らないように狙ったが、謝罪は大事だ。

俺たちがそんなやり取りをしていると、次に前に出てきたのは白い髪が特徴の中学生と思われる小柄の女子だ。

「…………『戦車』の塔城小猫です。…………私は皆さんと同じで高校生です」

口をへの字に曲げながらの一言。なぜか心を読まれていたようだ。高校生にしては、ちよつと小さすぎないか？

俺がそんなことを思っていたが、構わずに次の子が前にでる。次は金髪の女の子だ。

「リアス部長の『僧侶』、アーシア・アルジエントと申します。よろしくお願いします」
礼儀正しく深々と礼をしてくるアーシアさん。なんだろう、アリサに似たような雰囲気がある。

最後に前に出てきたのは段ボール箱、段ボール箱!?

「何で、段ボール箱? いや、まあ、え?」

俺が困惑しているとその箱が喋り出す。

「ほ、僕はリアス・グレモリー様の『僧侶』、ギヤスパ・ヴラディですう! よろしくお願ひしますっ!」

「自己紹介するなら出てこいよ、まったく」

俺が嘆息しながら段ボール箱を持ち上げてみると、中にいたのは金髪で赤い瞳が特徴の女の子だ。すごい泣きそうな顔になっている。

「……………」

「……………悪い」

とりあえず謝って段ボール箱を被せてやる。今の子、俺がいつかに縛り付けた奴じゃないか。いないなと思ったら段ボール箱の中にいたのか。

「それで、あとは赤龍帝か」

「はい、その通りです」

俺の確認にリアスは頷いた。それにしても、

「リアス、女子ばかりだな。男子が『兵士』と『騎士』だけって……………」

「お兄様、ギヤスパーも男ですよ?」

「え?」

俺は間拔けな声を漏らした。え?あれで、男なの?

俺は確認するために段ボール箱を持ち上げる。

「……………ふえ」

「……………」

再び泣かれそうになったのですぐさま段ボール箱を被せた。まじで男なのか？

「まあ、なんだ。眷属にどうこう言わないでおくさ」

「はい」

リアスの眷族の男子は赤龍帝で変態、聖魔剣使いのイケメン、そして、段ボール箱に入った男の娘。なんだろう、リアスの趣味がわからない……………。

俺は少しでも困惑していたが、とりあえず言っておく。

「そんじゃ、これからよろしく頼む」

俺は軽い感じで右手を挙げた。母さんは注意しないというか、もう諦めたというか、そんな感じだ。

『よろしくお願ひします』

こうして、俺たちの自己紹介は終了。

「では、俺は一旦部屋に戻って少し休ませてもらいます」

俺は母さんと父さんにそう伝えてから退室、部屋に戻る。任務中は安心して寝れないせいで本当に疲れたからな。いい加減すっかりと休みたい。

グレモリー城の廊下を歩いていると、義姉さんと義姉さんにくつついて歩く男の子を発見した。

「義姉さん、その子は？」

「この子は——」

「ミリキヤス・グレモリーです！」

義姉さんが言おうとした矢先に男の子が自分で名乗った。

感じる魔力のオーラが兄さんのものに似ているってことは、そういうことか。

「俺の甥っ子ですか？」

「はい、その通りです」

「義姉さんが母親で？」

「はい」

「へへ」

俺はミリキヤスの頭を撫でながら言う。

「知っているかはわからないが、ロイだ。よろしくな」

「はい！ロイお兄様！」

「お兄様なんて年じゃないさ。ミリキヤスのお父さんとだいたい同じ年だからな、叔父

さんでいいさ」

「そうですか？でもお兄様のほうがしつくりきます」

「じゃ、どっちでもいいさ」

「はい！」

「元気で何よりだ。兄さんと義姉さんの子か。……これから大変だろうな。」

「それでは、俺は部屋に戻りますね」

「わかりました。ごゆっくりお休みください」

「はい。ミリキヤス、またな」

「はい！またお会いしましょう」

こうして、自分の部屋に移動する。その後は何事もなく部屋に到着した俺はそのままベッドに倒れこんだが、すぐにベッドからおりて部屋のソファーに横になる。

ベッドの感覚が柔らかすぎて逆に落ち着かなかった。

十年近く寝ていない自分のベッドは少々寝ずらい事実には少しショックを受けたが、俺はソファーに寝転んで目を閉じる。これでも十分に寝れるからな。

こうして、俺はようやく帰宅することができた。

これからやることもたくさんあるだろうがな……………。

Return life02 久しぶりのオフ

俺——ロイが屋敷に戻ってからさらに二日。

俺は屋敷を離れて人間界の駒王学園に来ていた。といつても、格好もラフなもので任務ではなく休暇できているのだ。

来ているのは俺だけではなく、兄さんと父さんも来てはいるが今は別行動をしている。というよりは、二人して盛り上がっていて、一緒にいて恥ずかしい。

俺は体育祭で盛り上がる学校の敷地内を歩きながら、少しでも見やすそうな場所を探す。前にも来たが、やっぱり広いなこの学校。

俺が周囲を見渡しながら歩いていると、正面から体操服姿の短めの黒髪にメガネをかけた女の子が歩いてくる。かなり周囲を警戒しているようで、かなり大人びた雰囲気ではあるが、誰かはおもうわかる。

俺はその女の子に軽く右手を挙げながら声をかける。

「ソーナ、久しぶりだな」

「……………ッ！ロイ様ですか、お久しぶりです」

一瞬体をビクツとさせて驚かれたが、俺は構わずに続ける。

「誰か探しているっていうよりは逃げていてるって感じか？誰から逃げていてるかは、だいたい察しがつくけどな」

「……………お姉様はどこにいるかわかりますか？」

やはり、セラから逃げているようだ。あいつはまじでシスコンだからな。体操服姿のソーナに会ったら、興奮して大変なことになりそうだ。

俺は首を横に振りながら答える。

「悪いな、セラは一緒じゃないんだ。あいつのことだから来てはいると思うんだが……………」

俺は周囲を見渡す。人が多すぎて姿はわからないが、セラはどこかに……………。

俺はある一点に目が行った。普通の格好の親やついてきた兄弟姉妹に紛れて謎のコスプレ少女がチラチラ見えるのだ。

俺がじつと見ていると、その少女が俺とソーナに気づいたのか笑みを浮かべて大きく手を振りながらこちらに走ってくる。

「ロイロイロイロ！ソーナちやああああん！」

「ソーナ、俺が抑えておくからおまえは仕事行け。久しぶりに戯れとくさ」

「あまりやりすぎないようにお願いします」

「わかってるさ。ほら、さっさと行った」

ソーナは「ありがとうございます」と言つて足早にその場を去つていき、俺にセラが抱きついてきた！

「ロイツ！」

「おつと！久しぶりだな、セラ」

「もう！昨日とかに会いに来てくれてもよかつたんじゃない？」

頬を膨らませて不機嫌そうに言つてくるセラ。俺は苦笑しながら返す。

「ちよつとは休ませてくれよ」

「それもそうだけど……」

俺から離れる様子はなく、俺の胸に顔を埋めるセラ。

「ロイの匂い……ロイの匂い……」

ボソボソと何か言いながら鼻息を荒くするセラ。まあ、久しぶりな再会で喜ぶのはわかるけどな。

俺は優しくセラの頭を撫でる。

「とりあえず、話は後でのんびりしようぜ。今は——」

俺はちらりと校庭の方に目を向ける。先程まで寝込んでいたであろう兵藤一誠がアーシアと二人三脚を走ろうとしていた。

「応援してやろう。そのために来たんだからな」

「それもそうね☆」

俺のオフはこうして過ぎていった。まあ、平和なのはいいことだと思う。せつかく十年かけて勝ち取ったんだからな……………。

その日の夜、冥界グレモリー城。

夕飯を済ませた俺は自分の部屋に戻ってきていた。兵藤一誠にも声をかけたかったが、あの後アーシアとどこかに行ってしまったのでまた今度にした。

それはそれとして、

「♪♪♪」

「セラ、何でここに？」

セラが待ち構えていた。鼻歌混じりで笑っているあたり、俺が戻ってくる時間を把握していたに違いない。

俺の質問にセラは笑みを絶やさずに言う。

「何でって、ロイが言ったんじゃない☆『話は後でのんびり』ってね☆」

「あー、そう言えば」

俺はその事を思い出しながらベッドの端に腰を降ろす。すると、セラが俺と対面するように膝の上に座ってきた。服越しとはいえセラの太ももと尻の感覚が伝わってくるのだが……………。

「あの、セラ？」

「いいから、動かないで」

上半身ぐらいしか動かせないが、俺は特に何かすることはなくセラの言うとおりにする。

俺はまっすぐとセラの目を見てみると、セラは顔を真っ赤にして目をそらして体をモジモジさせ始める。そんな事されたら色々ヤバイんだが……………！

俺が俺と戦っているとセラが大きく息を吐いて「よし！」と呟くと覚悟を決めたような表情になる。

「ロイ、いいかしら？」

「うん？」

俺が切り替えてセラを見ると、セラの両手で後頭部を押さえつけられ、そのままセラとキスをする！

「んぐツ!？」

驚愕する俺をよそにセラの舌が俺の舌と絡みついて湿った音をたて始める。

俺とセラの唇が離れると、セラは熱っぽく火照ったような表情で俺を見てくる。

その表情を見た瞬間、俺の中の何かが崩れかける。

俺はセラの両肩に手をやり、お互いの体の位置を換えるようにしてベッドに押し倒す。

「セラ……………いいんだな……………」

ギリギリ残っていた理性でセラに訊くと、セラはゆつくりと頷く。

「いいよ、ロイの好きにして……………」

その一言で、俺を支えていた何かが完全に崩れ去った。

その晩、俺とセラは体を重ねた。お互いの想いを再確認するように、無くした時間を取り戻すように……………。

次の日の朝？

いや、何時に寝たのかもわからないから次の日といふべきなのかわからん。

俺は俺の腕の中で眠っているセラの寝顔を眺める。心底安心しきっているような、油断しきっている表情だ。簡単に言うとは、すごいかわいい。

俺が微笑して頭を撫でてやろうと腕を動かすとセラが重そうに目に開ける。

「うーん……………」

「ああ、悪い。起こしちゃったか？」

「いいえ、大丈夫よ」

セラは眠そうに目を擦りながら笑う。俺は改めて頭を撫でてやるとセラが頬を赤くしながらも笑みを崩さずに言う。

「もう、もっと優しくしてよ。私、魔王だけど女なのよ？」

「悪いな、加減は苦手なんだ」

俺は一応だが謝っておく。あの状況で手加減は出来なかった。次があったら気を付けよう。

それを聞いたセラが言う。

「それじゃあ、謝ったついでにお願い聞いてくれないかしら？」

「責任なら全力でとるぞ」

「そうじゃなくて！いえ、それもだけど……………」

「で、なんだ？」

顔を真っ赤にしながら俯くセラに訊く。するとセラは体を起こして手元に魔方陣を展開、そこからチェスの駒を取り出した。

それはそれとして、その……胸とかその先端が丸見え何だが……今さらだな。

俺はそんな事を思いながら体を起こす。同時にセラが言う。

「ロイ、私の眷属になつてくれないかしら？」

「俺は構わないが、父さんたちに一応の確認はしとく。俺の立場が面倒だからな」

「それなのよね。私は結婚したいのに！」

不機嫌そうに言うセラ。俺もそうしたいが、現実には難しいもので、現ルシファーと現レヴィアタンが義理の兄妹になつてしまうというのは厳しいそうだ。

そんなわけで俺とセラはなかなかゴールインできないでいる。そこでセラは俺を眷属にしようとしたわけだ。

それもそれでどうこう言われそうだが、セラのことだ、無理を通したのだろう。

俺がそんな予想をたてていると、セラは俺の頬にキスをしてベッドから降りる。そして、魔力で素早く服を着た。

その格好が魔女っ子なのはセラの趣味だ。任務の前から好きだったからな。

「それじゃあ、また後でね☆待つてるわ☆」

「ああ、すぐに行く」

セラは頷くと転移魔方陣でいきなり消えた。あれでも魔王、仕事が多いのだろう。俺は父さんたちに『決定事項』を言いに行くために魔力で服を着て二人がいるであろう部屋に向かう。まあ、あの二人のことだから大丈夫だとは思うがな。

数分後、魔王領のレヴィアタン執務室。

俺はセラが展開した魔方陣の上に立って目を閉じていた。

あれから父さんたちに話をしたが、二人して、

「ロイの自由にしなさい」

と満面の笑みで言ってきた。なので、俺は好きにすることにしたわけだ。あの二人、あの様子から察するに俺が何を言うかわかっていたようだ。

俺はなんて事を思ったが、セラの眩きで思考を切り上げた。

「うーん、おかしいわね？」

「どうかしたか？」

俺が訊くと、セラは『騎士』^{ナイト}の駒を手に取りながら首をかしげていた。

「反応はするけど、眷属にできないのよね……………」

「……………セラ、あれじゃないか。駒価値に合ってないのな」

「そうかもしれないけれど、あとは『兵士』^{ボーン}が三個だけよ？」

「たいして変わらないか……………」

「ええ」

俺とセラはお互い首をかしげた。俺がセラの眷族になれないとなると、セラが何をしでかすかわからない。

俺は嘆息しながらもセラに言う。

「なあ、セラ、一つ頼みを聞いてくれないか？」

「あら、何かしら？」

「俺を——」

—

俺——兵藤一誠はいつもの通り放課後のオカルト研究部の部室に来ていた。

本場の事を言うと、オカルト研究部は表向きの活動で裏では悪魔稼業をしているのだ。まあ、今は部活動の時間なんだけどな。

さて、現実逃避はこのくらいにして、俺たちは目を丸くして驚いていた。俺たちの眼前には、

「さて、何だかんだで教師になったロイだ。よろしく頼む」

スポーツウェアに身を包んだロイさんが軽く挨拶をしてきていた。見た感じだと、体育教師？

「見ればわかると思うが、科目は体育だ。実際に始めるのは来週からだけどな」

軽い感じで続けるロイさん。まさか、このヒトまで教師になるとは……………。

俺たちが黙っているとアザゼル先生が言う。

「まさか、『切り裂き魔』と同じ職場になるとはな……………。人生わからん」

「その呼び方は辞めろ、あんまり好きじゃない」

「そうか？まあ、確かに呼びにくいかもな」

「だろ？だつたら辞めろ」

「確かにそれが合理的だ。——だが断るッ！」

「何だ?!?この『閃光と暗黒の——』」

「だああああああああつ!?それは言うんじゃねえ!」

「なら辞めろ、いいな?」

「チツ!」

な、何かまったくついていけない会話が繰り広げられている。戦争の頃からロイさんは嫌われていったって聞いたし、このお二人にも何か因縁があるのかもしれない。

ロイさんが置いてきぼりの俺たちに改めて言う。

「まあ、これからよろしく頼むぜ。何かあったら言ってくれ、鍛えてやるよ」

『よろしくお願ひします!』

ロイさんの最後の言葉に俺は少し興奮を覚えた!このヒトが鍛えてくれるなら、俺たちはもつと強くなれる!

こうして、俺たちの学園生活はより賑やかになって過ぎていくのだった。

リアスたちにあいさつを済ませたすぐ後。

「そういえば、ロイ」

「アザゼル、今さら何か用か？」

「いや、話があるだけだ。部屋を変えるぞ」

俺はアザゼルに呼ばれて部屋を移動した。その部屋で俺とアザゼルは対一で向かい合うように座る。

「それで、ディオドラについてだが……………」

「生きて捕まったろ？」

「ああ。リアスたちからは眉間を撃ち抜かれたと聞いたんだが……………」

俺はあの任務から持ちっぱなしの銃剣を異空間から取り出してアザゼルに見せる。

「一応、バレないように非殺傷モードで撃った。端からは即死するように見えるからな」

「便利なもんだな……………」

「だろ？だが、これはやらんぞ。存外気に入ってるんだ」

「そうか……………」

残念そうに言うアザゼル。少し興味があつたようだ。俺は銃剣をしまつてから言葉を続ける。

「旧魔王派は終わったが、まだまだ敵は多いな……………」

「ああ、今のところ一番危険なのは英雄派だ。だが、今広げている各神話勢力との協力体

制。それをよしとしない奴もいるだろうからな。だからここに来たんだろ？」
「わかったか？」

俺はわざとらしく笑いながら言う。アザゼルは溜め息を吐いて頭に手をやった。

「本当、おまえもサーゼクスも妹に甘すぎるぞ」

「ここには妹たちがいるからな、守りたいさ」

「そうかい、まあ、頑張れよ」

「お互いにな」

こうして、俺の教師生活が始まることになる。リアスとリアスの眷族たちを鍛えながらやるのは面倒だとは思うが、これは大事なことだ。

俺は自分にそう言い聞かせて部屋を後にする。これからも頑張らないとな！

幕間編①

Extra life 01 面倒事

俺——ロイが教師になりたての頃。

これからのことに様々な予感を感じている矢先にそれは起こった。

「おっぱい！」

「触らせろ！」

「キヤアアアアアッ！」

女子生徒の服を弾けとぼしていく一誠へんたいの群れ。次々と女子生徒に襲いかかっている。

「はあ……、こういう面倒はごめんなんだがな……」

俺は嘆息しながらも近くにいた一誠を殴り飛ばす！

快音と共に一誠は吹き飛ばされていき、その他数人の一誠を巻き込みながら霞のように消えていく。巻き込まれた一誠も同じように消えていった。

「何なんだ、これ……」

俺は拳と消えた一誠たちがいた方を交互に見る。確実に殴った感覚はあったから幻の類いではなさそう。だが、なんで一誠が大量発生しているんだ？

俺はそれを感じたが正面に目を向ける。一誠の増援が複数、何人いやがるんだよ……。

俺は再び溜め息を吐き、一誠たちを蹴散らしていく！戦争経験者を舐めんよ！

数分後。

「数だけが多いな、面倒くせえ……」

「ロイ様、怒るのもわかりませんが落ち着いてください」

「そうは言ってもな、ソーナ。俺は面倒が嫌いなんだ」

「そうでしたね……」

俺は生徒会室で軽く休憩していた。中には少し前に紹介してもらった生徒会の面々。全員疲弊した様子で肩で息をしている。

長い黒髪が特徴の『女王』^{クイーン}、真羅椿姫^{つばき}が言う。

「増殖した兵藤一誠くんが女子生徒の制服を次々と弾け飛ばしています。数は不明で

す」

「俺だけでもぎつと五十は片付けたが、これは多すぎるぞ。少なくとも二百はいるな」

俺の言葉に、任務中のレストランで見た『兵士』^{ポーン}である少年、匙元士郎くんが驚く。

「この短時間でぎつと五十つて！俺たち生徒会全員でも三十ぐらいですよ!!」

「ああ、面倒だが、コツコツ片付けてまわった」

「マジですか……………」

匙の言葉を流して俺は言う。

「さて、原因をリアスに聞きに行くか。匙、行けるか？」

「え？あ、はい！」

男である俺と匙で動きだそうとするが、扉に手をかけた瞬間に気配を感じた俺たちは

扉を押さえる！

ダンダンダンツ！

「開けるー！」

「おっぱいの匂いがするぞ！」

「ここだ！こつちだ！」

外から一誠たちの声。何かヤバイ事を言っているが、今は押さええないとな！

「匙！踏ん張れ！負けたら終わりだぞ！」

「わかつてますよ！」

二人して踏ん張り、男数人分の腕力と張り合う！だが、ちよつと辛いな！多勢に無勢だ！

俺がそんなことを感じていると、それにボーイッシュな女子、戦車の由良翼紗つばさが加勢してくれろ！

「とりあえず、ここは私と元士郎で押さえます！先生はリアス先輩たちの方に！」

「了解だ！離すぞ？いいな！」

「はい！」

二人が返事をしたら、俺は頷いてから手を離す。

「うおおおおつ！」

「はあああああつ！」

俺が手を離すと、二人が叫びながら踏ん張り始めた。

俺はそれを確認しながらソーナに言う。

「そんじや、リアスたちに対策を聞きに行つてくる。おまえらほうまく籠城しておけよ？いいな？」

「わかりました。桃、憐耶れや、簡単で構いません、結界をお願いします」

「はこ」

ソーナの言葉に二人の『僧侶』^{ベシヨップ}が領き、結界を展開する。扉の方では『騎士』^{ナイト}の巡巴柄^{ともえ}、もう一人の『兵士』^{ボーン}、仁村留流子^{るるこ}が参加していた。

俺は生徒会室の窓を開けて下を確認する。一誠たちはいない、今なら行けそうだ。

「そんじゃ、後でな」

俺はそう言い残して窓から飛び降りる。全身のバネを使って着地を決めて周囲を警戒。大丈夫そうだ。

俺は新校舎から旧校舎を目指して駆け出した。

走ること数分。

俺の耳元に連絡用の魔方陣が展開された。俺は足を止めずに耳だけかたむける。

『お兄様、聞こえますか？』

「ああ、聞こえる。今そっちに向かっているところだ」

『わかりました。こちらで作戦を開始するので合流してください』

「わかった。まあ、終わらせてくれてもいいがな」

『お兄様、緊急事態なのですから、できるだけ急いでください!』
「わかったわかった。怒るなっ」

俺はそう言っつて連絡用の魔方陣を消して速度をあげていった。

さらに走ること数分。遠い……………、旧校舎遠い……………。

俺がこつちに来たことを後悔していると旧校舎の周辺に一誠たちが群がっていた。

よく見ると、リアスたちが釣竿を片手に一誠たちを一本釣りしていた。餌は、エロ本か何かだな。

俺は首をかしげながら近くの木に背を預けて作戦の経過を確認する。

「……………」

「……………」

ドゴンツ!

「がはっ!?!」

俺が背を預けた木に隠れていた一誠を無言で殴り倒す。これでまた一人つと。

俺がそれを済ませると同時にリアスたちが引っ込んだ。俺はその隙に旧校舎に入る

うとするが、ほぼ時間をおかずに、なぜかバニーガール姿の朱乃が出てきた。

「イツセーくーん！おっばいですわよー！」

俺は突然の発言に硬直した。それから回復した瞬間に、

「「「「おっばい！」「」」」」

どこからか大量の一誠が現れた！どこに隠れてやがった!?

驚愕している間に俺は一誠たちの波に飲まれて朱乃の方に運ばれていく。

一誠たち突然の朱乃の距離がある程度縮まったところで彼女はSっぽい笑みを浮かべて手を空に向けてる。

「雷よっ！」

カツ！ドオオオオオオオオオオンツ！

稲光と共に雷が降り注いできた！こ、これはヤバイかもな！

俺がそう思った瞬間、俺と一誠たちを雷が包み込んだ！

「ギヤアアアアツ！」

一誠たちは当たった瞬間に消えるが、俺はそれが出来ないため最後まで痺れるはめになった！

その後、数回に渡って俺は痺れることになった！

「申し訳ございません！」

「いや、いいさ。避けれなかった俺にも非はある」

俺は旧校舎、オカルト研究部の部室で謝られていた。髪の毛が爆発しているがな。

俺は頭をかいて髪を元に戻しながらアザゼルに言う。

「で、次はなんだ？何かあるんだろ？」

「ああ。次はリアスに——」

「バニーガールをさせたらおまえの首をはねる」

俺は銃剣の刃をアザゼルの首に突きつけて言った。さすがのアザゼルもこれには焦りながら言う。

「やらねえよ！おまえに何されるかわかったもんじゃないやねでからな！」

「ならいい……………」

俺は銃剣を異空間に戻しながらそう言った。ついでにアザゼルに訊く。

「で、あの一誠どもはなんだ？」

「あれはドツペルゲンガーだ。試しに作ったらあんなことになった」

悪びれた様子もなくアザゼルはそう言った。こいつ、一回死なないとダメな気がする

んだが……………。

俺は嘆息しながら次の作戦を決行させたのだった。

数分後。俺は作戦を許可したことに深く後悔していた。

俺の視線の先には悪役の格好をしたアザゼルと、奴に捕まったお姫様の格好をしたりアスの姿。

アザゼルが提示した作戦がこれだ。

リアスを人質にして助けに来た奴を狩る！

まさしく悪役の作戦だ。これが思いつくなら最初からやって欲しかった。

俺はそう思ったが同時にこうも思った。

「最低な作戦だ」

「……………最低な作戦です」

俺と小猫が異口同音で言った。妹が人質って、考えてみると最低だよな。

俺がそんな事を思っているうちにドツベルゲンガーたちは次々と狩られていくが、校

舎とか校庭への被害もとんでもないことになってきた。

それにしても、ドツペルゲンガーたちは必死だ。一誠がリアスをどう思っているかは別として、あいつらは本気でリアスを助けようとしている。

その時、最後に残ったドツペルゲンガーが叫んだ。

「何としても、部長を助けるんだ！」

ドツペルゲンガーも、その大元も、存外いい奴かもな……。

俺は銃剣を取り出して一気に駆け出す！それと同時にアザゼルがドツペルゲンガーに向けて放ったビームを当たるギリギリで弾き返す！

俺に続いて駆け出していた一誠がドツペルゲンガーの手を取って立ち上がらせる。

俺はそんな二人を守るように立ちながらアザゼルを睨む。

「考えてみれば、悪いのは八割おまえだよな？アザゼル」

「あの、残り二割は？」

「おまえのその性格だ！」

後ろにいる一誠のぼやきに振り向きながら返して、アザゼルに視線を戻す。

「ロイ、テメエ、裏切るのか!？」

「騙して悪いが、俺はリアスたちの味方だ。行くぞ一誠！」

「はいー!」

俺たち三人は駆け出し、アザゼルを指す。

「舐めるな!」

アザゼルはビームを連射してくるが、俺は余裕でそれを避けていく。一誠たちが当たりそうになると木場とゼノヴァアをはじめとしたリアスの眷族たちがフォローしていた。

どンドン距離を詰めていく俺たちに、アザゼルは焦りながらも黒い翼を展開、上空へと逃げようとする!

俺は素早く真下に回り込むと一誠の方を向いて両手を重ねて腰より下へ。俺が頷くと一誠も頷き返してさらに加速してくる!

俺の両手に足をかけた瞬間、俺は全力で一誠を上空へと放つ!

「行ってこいつ!」

「はいっ!」

勢いよく飛んでいった一誠は勢いを殺すことなくアザゼルを少し強引に捕まえた!

「ここ、この俺が!?!こんなところで!ギャアアアアッ!」

断末魔のような叫びが学園にこだました。

「チツ。大勢で俺をいじめやがって」

顔に絆創膏ばんそうこうをたくさん張ったアザゼルが毒づく。

「元はと言えばおまえのせいだろうが！いいか!?俺は面倒が嫌いなんだ！」

俺が語気を強めにそう言った。アザゼルは静かに唸るだけだ。

最終的に最後のドツペルゲンガーはアザゼルをボコボコにした後に消滅してしまつた。だが、その表情は満足げなものであり、一誠は敬礼で彼を見送っていた。

で、今回の事件は女子生徒たちの記憶を消すことで無事に解決……………、

「いや、完全に消すと障害が残っちゃうからな、ドツペルゲンガーの部分だけを消した。つまり、女子たちは裸にされたことは覚えてるぞ」

アザゼルは思い出したように言った。それは、つまり……………。

俺は窓から外を見る。視線の先には殺気を放つ大量の女子生徒たちが殺到してきていた！

「一誠、ちよつといいか？」

「なんですか？」

まだ外を見ていなかった一誠を手招きし、俺の横に来させる。そして、無理やり体を掴みながら窓を全開にした！

「このままだと帰れないからな。あとの面倒はおまえに任せる」

「え？ちよっ!?!マジですか!?!」

「ああ。それじゃ、逝ってこい！」

「ギャアアアアッ!?!」

俺は一誠を投げ飛ばして女子たちの中央へ。殺気立つ女子たちに囲まれた一誠は、ここにも聞こえる声で、

「マ、マジかよ!?!夢ならさめ——！」

何かを言い残そうとして女子たちに飲まれて見えなくなつた。

俺たちは一誠という尊い犠牲に感謝しながら、各々手早く帰り支度を整え、そのまま帰宅したのだった。

放課後のラグナロク

lif e 0 1 テロリスト狩り

俺——ロイが教師になってからは兵藤一誠の家に世話になっている。一応家を用意してもらおうと思っただが、一誠が気を利かせてくれたのだ。

そんなわけで俺はありがたく兵藤家にお世話になっているのだが、この家はやたらと大きい。現に俺は、地下一階にいた。

『ふはははは！ ついに貴様の最後だ！ 乳龍帝よ！』

『何を！ この乳龍帝が貴様ら闇の軍団に負けるはずがない！』

見るからに悪人の言葉に赤い鎧を纏った一誠にそっくりの少年が返す。正確にはそっくりではなく、加工で一誠の顔を役者に当てているんだがな。

地下一階の大広間で『乳龍帝おっぱいドラゴン』を観賞していた。俺の回りにはリアスとその眷族一同、転生天使のイリナ、墮天使総督のアザゼルがおり、全員で見ているわけだ。

ちなみに、転生天使とは転生悪魔の天使版だ。悪魔がチエスなのに対してトランプがモチーフになっているとのこと。

……で、俺はそのおっぱいドラゴンを見ていて一つ思ったことがある。

まずは意外とクオリティが高いこと。ストーリーも簡単なもの（いわゆる勧善懲悪）
になっているため子供に受けそうであり、王道と言えば王道だ。

そして、もうひとつは――、

『おっぱいドラゴン！来たわよ！』

リアスことスイツチ姫だ。もちろんそれも役者ではあるが、見ていて少し胸に引つか
かるものがある。それは、

『おおっ！スイツチ姫！これで勝てる！』

おっぱいドラゴンがスイツチ姫の胸に触れる。すると、おっぱいドラゴンの鎧が赤く
輝き、パワーを取り戻した様子だ。

「味方側にスイツチ姫がいてだな、おっぱいドラゴンがピンチになると駆けつけてあんな
感じに助けるんだ。そうすることで、おっぱいドラゴンは無敵のヒーローになる！つ
て感じだな」

どや顔をしながら解説するアザゼル。俺とリアスは同時にハリセンを取り出して振
りかぶり、

спан！

スパアアアアンツ！

た。

「イツセーくんつたら、そうやってリアスさんたちを口説いたのね!? 墮ちちやう! 私、墮天使になつちやううううつ!」

イリナが天使の羽を点滅させていた。戦争中のガブリエルもあんな感じになつていたな。確か、天使が墮天しそうになるとあんなことになるんだつたな。

「ミカエル直属の部下なら大歓迎だ。VIP待遇にしてやるよ」

「いやあああつ! ミカエル様、お助けくださいあああいつ!」

涙目になりながら天に祈りを捧げている。

「なんか、戦争中を思い出すな」

「そうなのですか?」

「ああ。まあ、色々あつてな。あの時は――」

「ロイ、ストツプだ! それ以上は言わせん!」

アザゼルがイリナへの勧誘を中断して俺の口を押さえてきた。

俺は鼻で息をしながらアザゼルを睨んでいると朱乃が一誠に絡んでいた。それを見たアーシアやリアスが不機嫌そうにしている。

俺はそれを無視してアザゼルの手を外して小声で言う。

「いきなり何しやがる! ビビるだろうが!」

「それを言わせるわけにはいかないんだよ！主にイリナとイツセーのためにな！」
「は？」

俺が間抜けな顔をするアザゼルが続ける。

「今のイリナに言ったらマジで堕ちる。イツセーに言ったら後が面倒だぞ？」

「あー、なるほど」

一誠は今さらだが変態だ。俺がガブリエルの胸を揉んだ話をしたら、無駄に食いついてきそうだ。

俺たちが話しているうちに一誠たちの話も終わったようで、とりあえず、今日は解散となった。

ある日の放課後。

俺は部室でコーヒーを飲みながらリアスたちと話をしていた。

「修学旅行か、面白そうだな」

「ロイ先生も行くんですよね？」

「ああ、そうなるだろうな」

もうすぐ一誠たち二年生組は修学旅行だ。行き先は京都、俺も教員として引率することになる。だが、その学校はハードスケジュールだ。修学旅行が終わるとすぐに学園祭だ。準備は始めておかないとな。

「で？去年は何をやったんだ？」

「去年は本物を使ってお化け屋敷をやりました」

「ちよつと待て、本物を使ったのか？」

「はい」

俺はリアスの言葉で頭を右手で抱える。妹が自由すぎる……、本物を使うってズルくないか？

「まあ、何だ。今年は新しい何かをやってみたらどうだ？」

俺の提案にリアスたちが頷くと俺たちのケータイが同時に鳴る。俺たちは顔を見合わせて頷く。

リアスは息を整えて表情を引き締めると眷族たちに言う。

「——行きましよう」

町にある廃工場。俺たちが使っていたものとは別のものだ。

すでに日が落ちていて、空が暗くなり始めている。薄暗い工場内に気配が複数。殺気を放ちながらリアスたちを無視して俺を睨んできている。

「——ジャック、いや、ロイ・グレモリー。我々は裏切りを許さない」
「許してくれと言った記憶はないがな」

俺は銃剣を取り出して不敵に笑む。リアスが俺の横に立って冷たい声音で訊く。

『カオス・トリゲード禍の団』——英雄派ね？ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。この町を任せられている上級悪魔よ」

「ああ、存じ上げておりますとも。我々は目的は貴様たち悪魔を浄化し、町を救うことだからな」

俺たちをゴミを見るように見てくる。やはり、英雄派の構成員。最近こいつらによるテロが増えてきているな。

俺たちの後ろに控えていた一誠パラス・ブレイカーが禁手となつて前に出た。それに聖魔剣を持った木場が続く。ゼノヴィアも一誠からアスカロンという聖剣を受け取つてそれを構える。

俺は銃剣を構えながら三人の少し後方、小猫とイリナ、ギヤスパーと共に中衛を務める。まあ、正確には遊撃として様々こなさないといけないがな。そして、アーシア、リ

アス、朱乃が後方からの支援に徹する。

敵は俺たちが陣をとつたことを確認すると、黒いコートを着た男性が手から白い炎を出現させる。

「また神セイクリッド・ギア 器 持ちか、面倒だな」

英雄派はそのほとんどが神セイクリッド・ギア 器 所有者だ。これの相手が面倒極まりない。

そして、そんな彼を囲むように黒い異形が現れる。いわゆるザコ敵だ。実際にそこまで脅威ではない。

炎を出現させた男が行動を起こそうとした瞬間に一誠が突撃した！俺はそれを援護するように滅びの弾丸を連続で放つ！

音もなく放たれた弾丸は黒い異形に突き刺さっていき、直撃した異形は霞のように消えていく。

炎を出す男はうまく横に転がって一誠の攻撃を避けていたが、俺はその男が態勢を整える隙に弾丸を放つと、それが直撃する瞬間に消えた！いや、影に飲み込まれたのか！？奥にいたサングラスと男が笑みを浮かべている。やったのはあいつのようだ。

木場がその男に斬りかかるが、聖魔剣の刀身が影に飲まれた！次の瞬間、木場自身の影から刀身が勢いよく飛び出した！木場はそれを避けて距離をとる。

「テクニクタイプか、面倒だな」

影で飲み込んだものが影から飛び出してくるってことは、俺の弾丸も出てくるわけだろ？ つまり……………。

俺は少し集中して弾丸の魔力を感じとり、影から飛び出してきた瞬間に弾丸を当てて撃墜する。

「ゼノヴィア、後衛の防御に回れ！ 雑魚は俺が殺る！」

「わかった！」

俺とゼノヴィアは素早く持ち場を交代して俺は雑魚掃除を始める。黒い異形と一定の距離をとりながら銃撃して数を減らしていく。

俺の視界の端で民族衣装の男が青い光の弓を構えて、今にも光の矢をこちらに放とうとしていた！

俺は左手の銃剣で雑魚を迎撃しつつ、右手の銃剣で民族衣装の男性に牽制射撃を行う。

いくら俺たちでも悪魔である以上光は苦手だ。

「イリナさん！ あいつの相手をお願いするわ！ 天使ならある程度大丈夫でしょ!!」

「はい！ 悪魔ほどのダメージは受けません！」

リアスの指示を受けたイリナはそう言いながら民族衣装の男性に攻撃していった。俺が言おうとしたらリアスが代わりに指示をだしてくれたな。

俺は妹のちよつとした成長を見ながら雑魚掃除に集中し、ペースをあげていく。相変わらず、数だけはいないな。

なんて思っていると俺の影から氷の槍が飛び出してくる！俺はそれを余裕で避けて影に向かって銃撃してみるが、弾丸が飲み込まれただけで何も起きない。ダメージを与えるためには撃ち返すだけでは足りないようだ。

俺は雑魚を射撃しながら一誠に叫ぶ。

「一誠、雑魚を一気に屠る！俺によこせ！」

「はい！」

一誠が素早く俺の横について右肩に手をのせる。同時に俺にオーラが高まった！

「ありがとよッ！」

礼を言いながら右手の銃剣から弾丸を放つ！放たれた弾丸は速度こそ遅いが縦横無尽に廃工場内を飛び回って雑魚たちを次々と撃ち抜いていく！同時に木場が影使いに斬りかかっていた！

その聖魔剣が俺の影から飛び出してくるが、俺はそれを避けて残しておいた譲渡分を乗せた弾丸を影に撃ち込む！

「祐斗！影の中の弾丸を斬って！」

「ッ！はい！」

リアスの指示に木場は素早く反応して聖魔剣で影の中を斬った！すると、ドオオオオンッ！

「ぐわっ!!」

爆発音と悲鳴。見ると影使いがボロボロになっていた。

「ビンゴだ。影の中で攻撃が弾けるとダメージは通るようだな」

俺はリアスにサムズアップをするとリアスは不敵に笑む。兄妹だからな、このぐらいの作戦なら話さなくてもわかる。

俺がサムズアップをしているとどこからか緑色の光の矢が飛んでくるが、まだ真横にいた一誠がそれを弾きおとした。

「まだいるか。まだ影の能力が消えてないな」

「そちらは私がやろう。小猫、付いてこい。相手の気は探れるな?」

「……………はい、ゼノヴィア先輩」

ゼノヴィアと小猫がそちらの対応に動き始める。同時に一誠が炎使いに詰め寄ろうとしていた！炎使いが両手から巨大な炎を塊を放とうとしている！

「ギヤスパーツ！止めてみせろっ！」

「はいいいっ！」

俺の言葉への返事と共にギヤスパアの両目が怪しく光り、炎使いの男を止めた！よ

し、成功！

止まった男の顔面に一誠の拳が鈍い音と共に突き刺さる！そして、少し時間を置いてから、

「ツ!?があああああつ!」

炎使いの男が吹き飛ばされた!後は青い光使いだが……、

「ふー!終わったわ!」

イリナに捕縛されており、気を失っているようだ。俺たちが伏兵がないか警戒していると、

「……ぬおおおおおつ!」

影使いの男がフラフラと立ち上がりながら絶叫した!途端に男の体を黒いモヤが包んでいく。それはさらに広がって工場内を包み込もうとしている。

……これは、ヤバイな!

俺は即そう判断して影使いの男に弾丸を放つ!弾丸は男の眉間を撃ち抜いて後ろの壁にめり込んだ!だが、

「ぬおおおおおつ!」

男の叫びがさらに強くなっていく!直撃したどころか貫通したはずなのに効いていない!?

俺が再び攻撃しようとする、男は転移用と思われる魔方阵に囲まれる。悪魔とも墮天使、天使とも違う、オリジナルのものだ。

魔方阵から一瞬の閃光が放たれ、その光が止むと、その男がそこから消え去っていた。

「終わった、か」

俺たちは戦闘体制を解いて一息ついていた。俺はテロリストのあと処理をリアスたちに任せて一足先に廃工場から出てタバコで一服させてもらっていた。

廃工場の外壁に背を預けて紫煙を吐き出す。あの影使いが見せたあれは、何か危険なものを感じた。やつらの狙いは……なんだ？ セイクリッド・ギア 神器使いをぶつけてきて、決戦を仕

掛けてこない。まるで、当たるかもわからない賭けをさせているような。——まさか!?!
俺の頭に最悪のシナリオが浮かんだ。 セイクリッド・ギア 神器使いを俺たちにぶつけて バランス・ブレイカー 禁手に

させるつもりか!?!いや、いくらなんでもそれは……。

俺は思考を切り上げて再び紫煙を吐き出すと夜空を見上げる。やはり、空は星がある方がキレイだ。

俺はそんなことを思った自分に苦笑しながら、タバコを携帯灰皿に押し込んでリアスたちの元に戻る。すると、全員が少し驚愕を感じているような表情になっている。

「どうかしたか？」

俺が訊くとリアスが答える。

「最後にあの男が見せたものは、もしかしたら禁手バランスポレイブ化の兆候だったのかもしれませんが」

「おまえらもそう思ったか……」

俺の一言に全員が頷くと、俺は続ける。

「だが、あくまで予想だ。詳しくは今度アザゼルに訊いてみようぜ？ おまえらでもそこまで予想できたんだ、あいつならもつと知ってるだろう」

「そうですね」

こうして、俺たちは無事に部室に戻ったのだが、朱乃の「イツセーくんとデート」発言で修羅場になりかけた。朱乃は多分、この状況を楽しんでいるな……。

life 02 主神訪日

テロリストとの戦いから一日経ったとある休日。

俺——ロイは兵藤宅のリビングでコーヒーを飲んでいた。それはそれとして、

「おまえら、尾行なら辞めておけよ」

『ッ!?!』

玄関のほうに忍び足をしていた朱乃以外のオカルト研究部女子に警告した。

先ほど一誠と朱乃はデートのために出掛けたため、その二人を尾行、あるいは妨害しようとしているのだろう。

「デートぐらいのんびりさせてやれよ。気になるなら今度連れていってもらえ」

俺は嘆息気味にそう言つてコーヒーに口をつける。女子たちが何も言つてこないが、領きあうと玄関のほうに向かつてしまった。警告の意味はなかったか……。

数時間後。

俺は玄関前で困惑していた。原因は俺の前にいるヒトたちだ。リアスたちはいい、問題は、

「バラキエル、なんでおまえが……」

「アザゼルから聞いていないのか？」

見るからにガタイのいい男性墮天使——バラキエルが増えていることだ。アザゼルの野郎、何も言っていないかったぞ！

「いや、聞いてないが……」

俺が首を横に振るとバラキエルの後ろから長いひげが特徴の爺さんとスーツ姿の銀髪の女性が現れる。爺さんの方には見覚えがあった。

「オーディンの爺さんっ!?なんでここに!?!」

久しぶりに間抜けな声を出してしまった。ひげの爺さんは北欧神話の主神であるオーディンだったのだ!なんでこんな大都市にいるんだ!?!

俺が困惑しているとその銀髪の女性が言う。

「細かくお話をしたいので、あがらせてもらってよろしいでしょうか?」

「あ、ああ。それもそうだな」

こうして、俺たちは兵藤宅最上階のVIPルームに移動することになった。

「改めて、訪日したぞい」

オーデインは楽しそうに笑いながらそう言った。話を聞いた限りだと、日本に用事があり、ついでにここに来たようだ。正確には、警備が厳重でそれなりに安全なこの町に身を寄せたの方が正しいだろう。

それはそれとして、帰ってきてから朱乃の機嫌がよろしくないな。バラキエルを嫌っているというか、避けているようだ。バラキエルもバラキエルで視線を合わせようとしていない。二人の間に何が……………。

「どうぞ、お茶です」

そんな朱乃に代わってリアスがオーデインに対応していた。

「かまわんでいいぞい。しかし、相変わらずデカいのう。そっちもデカいのう」

リアスと朱乃の胸を見ながらそんな事を言うオーデイン。そういえば、セラからオーデインはセクハラ親父って聞いていたんだった。触ったら、外交がどうなるうが触った腕を落とす。

俺がオーデインを冷たく睨んでいると、銀髪の女性がどこからか取り出したハリセン

でオーデインの頭を叩く。

「もう！オーデインさまったら、いやらしい目線を送っちゃダメです！こちらは魔王サーゼクス様の妹君、もつという実の兄の目の前ですよ！」

オーデインは頭を擦りながら半眼になっていた。あいつ、慣れてるな。いつもこんな感じなのか……………。

「まったく、堅いのお。あんなグラマーなら胸も見たくもなるわい。と、こやつはわしのお付きのヴァルキリー。名は——」

「ロスヴァイセと申します。日本にいる間、お世話になります」

銀髪の女性——ロスヴァイセが自己紹介をした。年はリアスと同じ、いや、少し上くらいか？見た目のわりに仕事ができそうな雰囲気を感じる。

「彼氏いない歴〓年齢の生娘ヴァルキリーじゃ」

オーデインがいやらしい顔で追加情報をくれた。それを聞いたロスヴァイセは酷く狼狽える。

「そ、それは関係ないじゃないですかあああつ！わ、私だって、好きで彼氏ができなかったわけじゃないんですからね！好きで処女なわけじゃないなああああいつ！」

その場に崩れ落ちて床を叩き始める。なんか、年相応に見えてきた。

俺はロスヴァイセの肩に手を置いてうんうん頷きながら声をかける。

「そつちも苦労してるんだな」

「わ、わかりますか!」

「ああ。昔はあれをやれこれをやれ、あつちに行けこつちに來いつて感じで大変だったからな」

「……………今は?」

「割りと平和に生きてる。そのうちおまえにも余裕ができるさ」

「そう、ですかね?」

「ああ」

俺なりにフオローを入れておいた。俺と落ちていた様子のロスヴァイセを見ていたアザゼルが苦笑しながらも口を開く。

「爺さんが日本にいる間、俺たちで護衛をすることになっている。バラキエルは墮天使側のバックアップ要員で、ロイ、おまえは悪魔側のバックアップ要員だ。よろしく頼むぜ」

「了解だ。いきなりで面倒だが……………」

俺は溜め息混じりにそう返す。だが、リアスたちも手伝ってくれるだろうから大丈夫だとは思う。

「それにしてもアザゼル坊。バランス・ブレイク禁手化は希有な現象と聞いたんじゃが?」

——ッ！

オーデインの突然の発言に俺たちは驚いた。いきなりその話になるとは思ってもいなかった。やはり、あの影使いのあれは禁手バランス・ブレイク化の兆候だったのか！やはり、あの時仕留めきれなかったのは辛いな。

俺が後悔の念を感じているうちにアザゼルが話を進める。

「ああ、レアだぜ。だが、どつかのバカがてつとり早く、恐ろしく強引な方法をしてやがるのさ」

「なんだ、その強引な方法ってのは」

俺が訊くとアザゼルは答える。

「おまえらの予想通りだよ。神器セイクリッド・ギア所有者を強敵にぶつけて禁手バランス・ブレイカーに至らせる。

至たる、もしくは至りかけたら即回収する。それを繰り返しているんだよ」

「人道的とかそんな話じゃないな。百死んでも一当たれば良しって感じか？」

「そういうことだ」

俺は溜め息を吐く。さすがはテロリスト、人道的とかは問題ないってことか。

「禁手バランス・ブレイカーに至った奴を増やして何をするつもりだ？各勢力に仕掛けるにしても、その方法だとそこまで数は揃わないだろ？」

「それは調査中だ」

俺とアザゼルが真剣に話している間にも普通にお茶を飲んでいた。まあ、この爺さんなら数きても問題ないだろう。神滅具ロンギヌスなら話は別だがな。

真剣な顔をしていたアザゼルは咳払いをするとオーデインに訊いた。

「それはここでもうどう言っても仕方ない。爺さん、どこか行きたいところはありますか？」

オーデインはその言葉を受けていやらしい表情になり五指をわしやわしやさせる。

「おっぱいパブに行きたいのぉ！」

「ハツハツ、見るところが違いますな主神どの！よっしや、いつちよそこまで行きますか！」

俺んところの若い娘つこどもがVIP用の店を開いたんだよ。そこに招待しちゃうぜ

！」

「うほほほほっ！さっすが、アザゼル坊じゃ！わかつとるのぉ！」

「よっしや、ついてこいエロジジイ！おいでませ、和の国日本だ！」

「たまらんのー、たまらんのー！」

二人が勝手に盛り上がっていると、アザゼルが俺の首根つこを掴んで引きずり始めた！え？ちよ!?なぜだ!?

「アザゼル！なんで俺を引きずってやがる！俺は休日をのんびり満喫したいんだが！」

見るとリアスたちは俺を助けようか助けなしかで迷っている様だ。そこは迷わずに助けてもらいたい、リアスたちにも予定があるのだろう。

俺は開き直って語気を強めにアザゼルに言う。

「あー！わかったよ！行けばいいんだろ、行けばよー！こうなったら付き合ってやるよ！」
「そうこないとな！おまえも遊びを知れ！」

俺たち三人がそんな事をやっていると、見かねたのかロスヴァイセが追ってくる。俺は助けてもらえるかと期待したが、ロスヴァイセの口から出た言葉は――、

「わ、私もついていきます！」

だった！なんでそうなる！てか、これから行く場所わかって言っているんだよな!?

俺が引きずられながら困惑していると、オーデインが嘆息気味に言う。

「おまえは残つとれ。アザゼルとこやつがおれば問題あるまい。この家で待機しておればいいぞい」

「ダメです！行きます！」

そんなやり取りをしながら、俺は引きずられ続けたのだった。

……………で、

「はあ……………」

俺とロスヴァイセはほぼ同時に溜め息を吐いた。俺たちの視線の先にはグラマーな女性墮天使と戯れるアザゼルとオーデインの姿。楽しそうでなによりだ。

俺は声をかけてくる女性墮天使を適当に流して飲み物だけもらう。本当、なんでここに来ちまったのかな。

横に目をやればロスヴァイセは顔を真つ赤にしながら目を泳がせている。こんな所に来たのは初めてで、どこに目をやればいいか迷っているようだ。

一応、俺の横につかせてはいる。そうすれば俺に女性墮天使が群がってこないからだ。

俺は懐からタバコを取り出して一本を口にくわえる。そして、いつものように火をつけようとしたら――、

「ストツプです！」

俺がくわえていたタバコをロスヴァイセが奪い取る。そのまま半分折って近くのゴミ箱に捨てる。

「何しやがる……………」

俺が軽く怒気を込めて言うと、ロスヴァイセは説教するように言い返してきた。

「いいですか？タバコは体に悪いんです！ニコチンをはじめ、危険な物質が――」

「はいはい。最低限吸う場所は考えてるさ。副流煙のほうをリアスたちに吸わせたくな
いからな」

「そこは評価しますが、それがわかっていながら吸わないでください！」

やれやれ、面倒だな。タバコを控えろって、今さらな気がするが、まあ、気づかいは感謝するか……………」

俺はタバコを吸うことを諦めて飲み物をいただく。アルコールも体に悪いと思うが、
気にしだしたらきりが無い。

「まったく、面倒なことになったな……………」

奥で遊んでいるアザゼルとオーデインを見ながら俺は漏らす。それに続くように口
スヴァイセも小声で、「本当、忙しいです」と漏らした。

存外、こいつとは気が合うかもしれないな。

俺は苦笑しながらそんな事を思い、もう一杯飲み物に口をつけた。

これから、今まで以上に面倒なことになりそうだな……………」

life 03 悪神襲来

俺——ロイとリアスたちがオーデインの護衛を開始してから数日。

毎日のように日本を観光するオーデインに終始振り回され、全員がいつになく疲労を感じていた。

今はスレイプニルという八本足の巨大な空飛ぶ軍馬が引く馬車に乗るオーデインを護衛中だ。リアスたちはオーデインと一緒に馬車に乗り込んで軽く休憩していることだろう。

その馬車と軍馬を囲むようにして、俺、木場、イリナ、バラキエルがその横を飛びながら周辺を警戒している。

「日本のヤマトナデシコはいいのお！ゲイシャガール最高じゃー！」

外にも聞こえるほどの声量で言うオーデイン。こっちの苦労も知らないで……………。

俺は大きく溜め息を吐いた。護衛として外を固めるだけならまだ楽だ。キャバクラに行けば毎度のように俺だけが店の中まで連れていかれ、遊園地に行けばあちこちに連れ回される。

本当に疲れる……………。日本を楽しみすぎだろ、この爺さん……………。

俺は眠気を覚ますように思いっきり自分の両頬を叩く。頬がヒリヒリするが、目は覚めた。そのためをやったからな。まあ、いつも通り何かあるとは思えんが……………。

俺が少し気を抜いた矢先、

ヒヒイイイイイイッ!

突然馬が鳴き出した。何かを警戒するように周囲を見渡している。そして、突然馬の進行方向に現れた謎の男性を発見した。

何か心配があつたわけでもなく、突然そこに現れたのだ。その男性は目付きが悪いが顔は整っており、黒いローブを身に付けている。

馬車から飛び出してきロスヴァイセがその男性を見て心底驚いた表情になり、アザゼルは舌打ちをしている。

どこかで見たことがあるような……、聞いたことがあるというか……………。

俺が首をかしげていると、男性はマントを広げて口の端を吊り上げて高らかにしゃべりだした。

「はっじめまして、諸君！我こそは北欧の悪神！ロキだ！」

そうか、悪神ロキか。聞いたことはあつたが、あんな痛い奴だとは思わなかつた。なんだ、あのマントといい「はっじめまして」とか、格好つけたいのか？目立ちたいのか？

俺はそれは口に出さずにロキに訊く。

「これはロキ殿。何かご用ですか？この馬車にはオーデイン殿が乗られておりますが、それはご存知で？」

「いやなに、我らが主神殿が我ら以外の神話体系に接触していくのが耐え難い苦痛だね。邪魔をしに来たのだ」

悪意を隠す気もなくそう告げてきた。

俺は口調を戻しながらロキを睨む。

「堂々と言ってくれるな、ロキ。そう言う自分が接触しているって自覚はあるのか？」

俺が皮肉げに言うのとロキは楽しそうに笑う。

「他の神話体系を滅ぼすのならば良いのだ。和平が納得できないのだよ。我々の領域に土足で踏み込み、そこへ聖書を広げたのはそちらなのだからな」

「……それを俺に言うなよ。ミカエルか、死んだ聖書の神にでも言え」

俺が返すと馬車から出てきたオーデインにロキが言う。

「どちらにしても、主神オーデイン自ら極東の神々と和議するのが問題だ。これでは『神々の黄昏』が成就できないではないか。——ユグドラシルの情報と交換条件で得たものは何なのだ」

「その前に、おまえは『禍の団』と繋がっているのか？つて、律儀に答えてくれるとは

思わない。てか、どうせ繋がってないんだろ？」

「ああ、そうだと。己の意志で参上している」

「OKだ。たく、面倒なことになりやがったな……………」

俺が再び溜め息を吐くと、オーデインが足元に魔方陣を展開。それに乗って前に出る。

「まったくじゃ。どうにも、頭の固い者がまだいるのが現状じゃ。こういう阿呆まで登場するのではな」

オーデインはあごのひげを擦りながらそう言った。

「ロキ様！これは越権行為です！しかるべき公正な場で——」

「一介の戦乙女ごときが我が邪魔をしないでくれたまえ。オーデインに訊いているのだ。まだこのようなことを続けるおつもりなのか？」

「そうじゃよ。その方が今よりも何倍も楽しいからの。日本の神道を知りたくての。あちらもユグドラシルに興味を持っていたようだな。和議を果たしたらお互いに大使を招く予定じゃよ」

オーデインの回答にロキは苦笑した。

「……………認識した。なんと愚かなことか。——ここで黄昏を行おうではないか」

ふいに俺たちを悪寒が襲った。ロキが凄まじい敵意を放ち始めたのだ。悪とはいえ

神様、舐めてかかると死ぬな。

俺は異空間から銃剣を取り出してロキに確認する。

「抗戦の宣言と受け取っていいんだな？」

俺の最終確認にロキは不敵に笑み。

「いかようにも」

ドガアアアアアアアンツ！

突如、ロキに波動が襲いかかった！

それを放った者を見ると、ゼノヴィアだった。デュランダルから大質量のオーラを放ったようだ。

「ゼノヴィア、先手必勝と言うが、あの様子だと効いてないぞ」

俺は何事もなさそうに宙に浮くロキを睨む。さすがは神様だな。

「聖剣か。いい威力だが、神を相手にするにはまだまだだ」

木場が聖魔剣、イリナが光の剣を生成して身構える。

それを見ていたロキが笑う。

「ふははっ！無駄だ！これでも神なんでね、たかが悪魔や天使の攻撃ではな」

ロキが左手を前にゆっくりと突き出す。その手には圧倒的なプレッシャーが集まっ

ていく！

俺はその場を飛び出して右の銃剣でロキに斬りかかる！ロキは左手に込めたオーラでそれを受け止めた！

「ほう！なかなか良い動きをするな！」

「それはどうもっ！」

俺は適当に返しながら一旦距離を取りながら左の銃剣の銃口を向けて連続で滅びの弾丸を放つ！が、ロキが展開した魔方陣に阻まれた！

北欧の術式！厄介だな！

俺は連続で射撃してロキを牽制し、その隙に禁^{バランス・ブレイカー}手となった一誠が殴りに向かう！

ロキは防御を止めて接近してきた一誠に対処する。一誠の渾身の拳を軽やかに避けて蹴りをくらわせていた。

俺は銃剣を両剣モードに変えて刃を滅びの魔力で覆う。そしてそれをブーメランのように全力で投げた！

高速回転しながら飛んでいくそれをロキは余裕で避け、不敵に笑む。両剣はとんでもない方向まで飛んでいってしまった。

俺が舌打ちをしていると、リアスと朱乃も馬車から出てくる。二人ともオーラを纏って臨戦態勢だ。

「紅の髪。グレモリー家……だったか？その男とその娘は魔王の血筋か。墮天使幹

部が二人、天使が一匹、悪魔がたくさん、赤龍帝も付属。ずいぶん厳重な警備だな」
「その厳重な警備にして正解だったわい」

オーデインの一言にロキは頷き、不敵な笑みをいつそう深めた。
「よろしい、ならば呼ぼう」

言うど、マントを広げ、高らかに叫ぶ。

「出てこいッ！我が愛しき息子よッ！」

ロキの叫びから一拍空けて、宙に歪みが生じる。

何かを呼び出したようだな。何が出てくることやら……。

その空間の歪みから出てきたのは灰色の狼だ。十メートルぐらいはありそうだな。

俺はそれを確認しながら、頬を流れる嫌な汗を意識してしまう。あれから感じるプレッシャーは、ヤバイ！関わったらアウトの部類のものだ！

狼が俺たちを順番に睨む。睨まれた瞬間に全身を悪寒が走った。ロキ以上のプレッシャーに心臓を鷲掴みにされたような感覚を持つてしまう。

「いかん、そいつには手をだすな！イッセー、ロイ、距離を取れ！」

アザゼルが珍しく焦ったような表情になっている。いや、もう、あれが何かはわかる。

「アザゼル、あれは神喰^{フェンリル}狼だよな？」

「ああ、間違いない………」

ろされた！

「ッ！」

俺はそれを紙一重で避ける！耳元を風切り音が通りすぎ、全身に鳥肌がたった！一瞬でも反応が遅れたら死んでいたな！

フェンリルが再び攻撃を放とうとした瞬間に横合いから飛んで来た一誠に殴り飛ばされた！

「一誠、いい反応だ！」

「はい！ありがとうござい——」(ごぶっ)

一誠が突然血を吐いた。見ると腹部に風穴が空いている!?フェンリルに目を向ければ、爪の先が血で湿っている。

「一誠！」

俺はあわてて近づき、そのまま肩を貸す。血が出過ぎだな、このままだと危険なのは見ればわかる。

「アーシア、回復だ！急げ！」

「は、はい！」

アーシアが手元に緑色の回復オーラを集めてこちらに放とうとしている。ちょうど来てくれたゼノヴィアと木場に一誠を任せ、俺は盾になるように前に出る。

「赤龍帝、そしてその男、一瞬とはいえフェンリルの動きに対応したな。恐るべきことだ。いまのうちに始末しておこう」

ロキは再びフェンリルに指示を送る。どうする！避けたら一誠たちが危険で、避けなければ俺が死ぬ……。選択の余地はない……………！

俺は両手に滅びの直刀を生成して二刀流の構えを取り、フェンリルを睨む。どうにかして一誠の回復までの時間を稼ぐ。死にかけても、最悪生きていればアーシアがどうかしてくれる！

俺が飛び出そうとすると、ロキにアザゼルとバラキエルが仕掛ける！だが、二人の攻撃は俺の攻撃を防いだものと同じ魔方陣で防がれている。

やはり、あの術式が厄介だ！神クラスなだけあって固い！北欧はそこるところがこつちよりも進んでいるからな！余計にそう思えて仕方ない！

「だったら、同じ術式で！」

ロスヴァイセがロキのものとよく似た魔方陣を何重にも展開して魔法攻撃を放つていく！まさしくフルバーストだ！

俺は勝手に興奮していたが、ロキはそれさえも余裕で防いでしまう。やはりダメなのか！

「では、こちらの番だな」

ロキが手を薙ごうとし、それにあわせてフェンリルが俺に向けて殺気を放ってくる。無感情な薄暗い双眸が俺を捉えて離そうとしない。

俺はそれを真正面から受けながら殺気を押し返す。すごい怖いけど、どうにかなるレベルだ。

俺が覚悟を決めて飛び出そうとした瞬間、俺たちの視界に光が一閃流れていく。それは高速でフェンリルの横を通過していき――。

「Half Dimension！」

謎の音声と共にフェンリルを中心に空間が大きく歪んでいく。フェンリルもその歪みに捕らわれ、動きを封じられる。が、すぐに歪みを噛み砕いて脱出した。

俺たちとフェンリルの間に白銀が降りてくる。

「兵藤一誠、無事か？」

「ヴァーリ……」

俺たちの前に現れたのはヴァーリだ！ さっきの攻撃はあいつがやったのか！

だが、白龍皇の技をあつかりと噛み砕くとは、さすがはフェンリルだ。敵ながらそこは評価したい。

「おいおい、おっぱいドラゴンは致命傷かい？ ったく、強いんだか、弱いんだか、わからねえ奴だぜい！」

ヴァーリーの横に金色の雲に乗った青年がつく。確か、美猴だったか、孫悟空の末裔だったな。って、なんでこいつが？

「今度は白龍皇か！」

ロキはヴァーリーの登場に嬉々として笑む。

「初めまして、悪の神ロキ殿。俺はヴァーリー、ご存知の通り白龍皇だ。——貴殿を屠りに来た」

ヴァーリーの宣戦布告にロキはいつそう強く笑む。

「二天龍を見られて満足した。——今日は一旦引き下がろう！」

ロキはフェンリルを自身のもとまで下がらせるとマントを翻した。すると、空間が大きく歪み始める。

「この国の神々との会談の日！またお邪魔させてもらおう！オーディン！次こそは——」

「格好つけているところ悪いが……」

俺はロキの言葉を遮り、ロキに訊く。

「おまえさん、ブーメランって知ってるか？」

「なに？」

「いや、簡単なもんだ。投げたら、『戻ってくる』んだよ」

「まさかつ!？」

ロキはハツとして振り返るがもう遅い!

ロキにフェンリルの死角から飛んで来たそれは、まっすぐロキの元に向かい。そして、

ズバツ!

「ツ!？」

ロキの右腕を断ち切った! 勢いよく戻ってきたそれ——両剣をキャッチし、その勢いでついた血を飛ばす。

「き、貴様ああああツ!!」

「ほらほら、とつとと帰れ。男に二言はないだろう?」

「チツ! オーデインだけではない、貴様を殺す! 待っているよ!」

ロキは忌々しそうに言い捨て、フェンリルに斬れた右腕を回収させると空間の歪みに入っていった。

とにかく、凌げたようだ……………。

俺はホツと息を吐いたが、一誠は失血で気を失ってしまったようだ。

俺たちは慌てながら一誠の介抱をし、ヴァーリたちと地上に降りたのだった。

l i f e 0 4 共闘宣言

どうにかロキを撤退させた俺たちは、深夜の駒王学園近くの公園に来ていた。

俺たちは公園の真ん中に集まりながら、ヴァーリの言葉に耳を傾ける。

「オーデインの会談を成功させるにはロキを撃退しなければいけないのだろうか？」

ヴァーリは俺たちを見渡すと、遠慮なしに言う。

「このメンバーでは無理だろうな。しかも英雄派の活動のせいで冥界も天界もヴァルハラも大騒ぎだ。こちら人材を割くわけにもいかない」

確かに、ヴァーリの言うとおりで。俺たちだけではロキとフェンリルの撃破は難しいし、増援も期待できない。

すると、失血で倒れた一誠と、一誠を治療していたアーシアと小猫が馬車から出てきた。ヴァーリは彼らを見ながら苦笑する。

「……………で、ヴァーリ。おまえならロキを倒せるって言いたいのか？」

俺が訊くとヴァーリは肩をすくめる。

「残念ながら、今の俺でもロキとフェンリルを同時には相手にできない」

『今の』、か。そのうち一人でもやれるようになるつもりらしいな。

「だが――」

ヴァーリは一誠を見ながら言葉が続ける。

「二天龍が手を組めば話は別だ」

『――っ！』

その提案に俺たちは驚きを隠せなかった！ヴァーリの仲間は当然のようにしているが、いきなり聞かされたら驚きもするぞ！

驚く俺たちをよそにヴァーリは続ける。

「今回の一戦、俺は兵藤一誠と共に戦ってもいいと言っている」

翌日、兵藤宅の地下一階の大広間に昨日ロキと戦った俺たち、急に集まってもらったソーナとその眷族、そしてヴァーリチームが集まっていた。

一誠の家にヴァーリたちがいるってのは何とも言えないが、今は緊急事態だ、仕方ない。

オーデインとロスヴァイセは別室で本国と連絡中らしい。その二人を待たずに俺た

ちは話し始める。

まず確認したのは、俺たちが会谈終了までオーデインを守ることになったこと。

次に確認したのは増援が望めないことだ。英雄派による攻撃を警戒しているため、下手に戦力を割けないとのことだ。

神を相手にしなければならぬ今回は、少なからず犠牲が出てしまいうだろう。せめて、その犠牲を減らすための作戦を練っている最中だ。

「まずは、ヴァーリ。俺たちと協力する理由は？」

ホワイトボードの前に立つアザゼルがヴァーリに訊く。

確かに俺も気になることだが、こいつなら、

「ロキとフェンリルと戦ってみただけだ。美猴たちも了承済みだ。これでは不服か？」

そう言うと思ったよ。こいつは戦闘狂、戦う理由なんてそれで充分なのだろう。

それを聞いたアザゼルは怪訝そうに眉根を寄せる。

「まあ、不服だな。だが、戦力として欲しいのは確かだ。おまえの性格上、英雄派とは繋がっていないんだらう？」

「ああ、彼らとはお互い不干渉ということになっている。俺はそちらと組まなくてもロキとフェンリルと戦うつもりだ。——その場合はそちらを巻き込んででも参戦させて

もらう」

「組むなら俺たちと一緒に戦い、組まないなら俺たちを無視してやるってことか。できれば前者がいいがな。」

「兄さんも結構悩んでいる様子だったな。前魔王のルシファアの血を引くおまえの申し出を無視することはできないと判断したらしい。まあ、俺個人としては、申し出てくれた以上、協力してもらうのがいいとは思っている」

「納得できないことのほうが多いですがね」

リアスはあまり乗り気ではない。だが、兄さんの、魔王の意志ならばと我慢しているのだろう。ソーナも同様な感じで不満顔だ。リアスとソーナの眷族も文句ありげだが渋々応じているように見える。

「アザゼルがヴァーリをじつと見ながら言う。」

「何か企んでいるんだろうな」

「さてね」

「怪しい行動をすれば、誰でもおまえを刺せることしておけば問題ないだろうな」

「そんなことをするつもりは毛頭ないが、かかってくるならば、ただでは刺されないさ」
ヴァーリの言葉にアザゼルは苦笑する。

「……………それに関しては一旦置いておく。さて、話をロキ対策のほうに戻すぞ。それは

ある者に訊く予定だ」

「五大龍王の一角、『スリーピング・ドラゴン終末の大龍』ミドガルズオルムか？確かにあいつなら……」

「確かに、順当だが、俺たちの声に応えるだろうか？」

ヴァーリーの質問はもつともだ。ミドガルズオルムは北歐の海の底で常に眠っているのだ。大きいわりに怠け者というドラゴンだが、龍王としてカウントされている。

その質問にアザゼルが答える。

「二天龍、龍王——ファーフニル、ヴリトラ、タンニーンドラゴン・ゲートの力で龍門を開く。そこから

意識だけを呼び出せば、簡単な質問に答えてくれるだろうよ」

「お、俺もですか？」

ヴリトラの神セイクリッド・ギア器を宿している匙が不安そうに手を挙げた。確かに、周りが化物す

ぎて気が引けるかもしれないな。

「あくまで要素のひとつとして来てもらうだけだ。細かいところは俺とタンニーン、二天龍に任せてくれて構わん。とりあえず、タンニーンに連絡が付くまで待つていてくれ。俺はシエムハザと対策について話してくる。おまえらはそれまで待機。バラキエル、付いてきてくれ」

「了解だ」

アザゼルとバラキエルが大広間から出ていった。

残された俺たちとヴァーリチームの間には、何ともいえない空気が流れている。

「赤龍帝！」

美猴がその空気を切り裂くように手を挙げる。

「な、なんだよ」

驚きながら訊く一誠に、美猴はイタズラっぽく笑いながら言う。

「この下にある屋内プールに入っているかい？」

「……………こいつ、バカだろ？」

溜め息を吐く俺の横からリアスが前に出て美猴に指を突きつける。

「ちよつと。ここは私と赤龍帝である兵藤一誠の家よ。勝手な振る舞いは許されないわ」

「ここって、リアスと一誠の家でいいのか？まあ、部屋を間借りしている俺が言えた義理ではないか……………。てか、リアス、美猴が嫌いなのか？態度がキツイぞ。基本的同士だから仕方ないと思うがな。」

「まーまー、いいじゃねえか、スイッチ姫——」

ベチンッ！

リアスが美猴の頭を思いっきり叩いた！結構いい音したぞ！

美猴は頭を押さえながら涙目で俺に言う。

「いつてええええつ！ちよつと！妹が暴力を振るつたぞ！これを見て、兄としてどう思うよ？」

「あ？スイツチ姫って呼び出したのはおまえだろ？リアスはそれを気にしてるんだ。ストレス発散に使われていると思って我慢しろ」

「俺のストレスが大変なことになりそうなんだけど!?」

「それをロキとフェンリルにぶつければいいだろが」

「それを妹に言つてやれよ！」

「リアス是我慢弱いからな。昔、かくれんぼで——」

「お、お兄様！それは言わないでください！」

リアスがとっさに俺の口を押さえる。一応、怒りの矛先をずらせたか。まったく、面倒をかけさせる。

「こ、これが失われた最後のエクスカリバーなんですわ！はー、すごい！」

「ええ。ヴァーリが情報を得まして、私の家に伝わる伝承と照らし合わせて見つけたのですよ。場所は秘密です」

声のする方を見てみると、イリナとアーサーという背広の青年がエクスカリバーについて話していた。イリナの性格はこんな時に便利だよな。

その横では、木場とゼノヴィアが警戒しながらもその二人の会話に耳を傾けていた。

「……………」

「……………にゃん♪」

部屋の端では小猫と、S級はぐれ悪魔である黒い着物を着崩した猫耳女性——黒歌が対峙している。対峙といっても、小猫が睨み、黒歌がそれを軽く受け流しているだけだ。ギヤスパーは小猫の後ろに隠れて震えている。

まったく、はぐれを逃がすとは情けない。当時の討伐隊は何をやっていたのやら……………。それよりもギヤスパー、そこは守ってやれ。

そこに一誠が近づいて両者の間に入っていった。あれで一応は大丈夫だろう。

各々がヴァーリチームと親睦を深めて逝くなかで、俺はリアスに口を押さえられながら溜め息を吐き、こう思った。

久しぶりに、タバコ吸いてえな。

l i f e 0 5 作戦確認

会議の翌日な朝。

俺——ロイとリアスたち、ソーナたちは再び地下の大広間に集まっていた。学校がある日なのだが俺たちはそれを休み、学校には俺たちを模した使い魔を送る予定だ。

ロキとの決戦が間近に迫り、少しでも体を休めないとならない。本人たちは残念がっていたが、これは仕方ないことだ。

アザゼルがぶつぶつと何かを言いながら部屋に入ってくる。一緒に入ってきたロスヴァイセの手には豪華な装飾が施された小さなハンマー。それを大事そうに持っている。

「オーデインの爺さんからのプレゼントだよ。——ミヨルニルのレプリカだ。ったく、あのクソジジイ、マジでこれを隠してやがった」

あの会議の後に一誠たちがミドガルズオルムから仕入れてきた情報を元に、俺たちは対策を進めている。あのハンマーもそこから用意したのだろう。あの感じだと、無理してオーデインから借りたようだ。

「伝説の武器のレプリカとは、いいもん借りれたな」

俺の一言にアザゼルは頷く。

「北欧の雷神トールが持つ伝説の武器。レプリカとはあえ、神の雷が宿っていることには変わりない」

「はい、オーデイン様はこのミョルニルのレプリカを赤龍帝さんにお貸しするそうです。どうぞ」

一誠はそれを恐る恐る受けとると、興味深そうに見つめている。

「オーラを流してみてください」

ロスヴァイセの指示で一誠はミョルニルに魔力を送り込む。すると、ハンマーが大きくなっていく！

一誠の身の丈を越すほどの大きさとなり、一誠は支えきれずにそれを床に落とす。俺は落下の振動に耐えながらミョルニルを見る。大きすぎる、修正が必要だ。

「一誠、オーラを抑えろ。少しはマシになる筈だ」

持ち上げようと必死になっている一誠にそう告げる。一誠は返事をしながら頷き、少しずつオーラを抑えていく。それに合わせてミョルニルも小さくなっていった。

ちょうど、両手で持てるほどの大きさだな。あれぐらいならどうにかなるだろう。

俺が頷いていると、一誠は言う。

「ロイさん！小さくはなりましたが、めっちゃ重いんですけどー！」

「そこは禁^{フランス・ブレイカー} 手になればどうにかなるだろう。とりあえず、一旦ストップだ」

一誠はミヨルニルから手を離すと、その大きさが元のものに戻っていく。

それを確認したアザゼルが言う。

「レプリカとはいえ、かなり本物に近い力を持っている。本来なら神にしか使えないが、色々と調節して悪魔でも使えるように変更した。一時的なものだが、十分だろ」

「それと、練習でも下手に振り回すなよ？もしも雷が出たら、この町が消し飛ぶ」

「マジっすか!?!うわー、怖い!」

今さら一誠はビビり始めた。本番は手加減なしでそれを扱うことになるから気をつけてほしい。ロキもろともこつちまで消し飛びたくないからな。

一誠にミヨルニルの譲渡を終えるとヴァーリチームも合流する。それを確認したアザゼルは咳払いをして俺たち全員に言う。

「さて、作戦を確認する。まず、会場で奴が来るのを待ち、そこからシトリー眷族の力でおまえたちをロキとフェンリルごと違う場所に転移させる。転移先はとある採石場跡地だ。存分に暴れる。ロキには二天龍を、フェンリルにはそれ以外の全員をぶつける。フェンリルには『グレイプニル』という鎖を使って捕縛する。グレイプニルはダークエルフの長老に強化してもらっているから詳しくは後だ。それと、当日にはタンニーンが参戦してくれるそうだ」

最後にいい情報があったな。タンニーン、ドラゴンを絶滅から守るために悪魔に転生した元龍王。そいつが参戦してくれるとは、ありがたいな。

「最後に、匙」

アザゼルに呼ばれて匙は首をかしげる。

「なんですか？」

「おまえも作戦で重要だ。ヴリトラの神セイクリッド・ギア器があるしな」

アザゼルの一言に匙は目玉が飛び出るほど驚いていた。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ！お、俺もですか!?て、てつきり会長たちと転移させるだけかと……………」

「ああ。おまえは現場でのサポートだ。ヴリトラの力はそれなりに優れているからな。二天龍の支援をやってもraithたい」

「サポート、支援……………」

「そのためにはちよつとトレーニングが必要だな。試したいこともある。ソーナ、こいつを借りるぞ」

「よろしいですが、どちらへ？」

ソーナの質問にアザゼルは楽しげに笑いながら返す。

「冥界の墮天使領——グリゴリの研究施設まで連れて行く」

あんな楽しそうなアザゼルは見たことがない。これは、大変なことになりそうだな。

「そんなわけで、行くぞ匙」

アザゼルは逃げようとした匙の襟首を掴んで、そのまま魔方阵を展開した。

「マジかよ!? た、助けてえええええっ! 兵藤おおおっ! ロイせんせえええいっ!
会長おおおっ!」

俺はおまえを忘れない。魔方阵の光に包まれていく匙を、俺は惜しむように手を振って見送った。

会議が終了すると、俺は一誠の自室にお邪魔してミヨルニルの練習に付き合っていた。万が一の暴発に備えて俺とリアスが横で見やっっているのだ。

「どうだ、いけそうか?」

「はいッ! 鎧を着ればどうにか……………」

少しだけ魔力を込めたミュルニルを持ちながらイツセーが言う。それなら問題はな

いか。

俺が頷くと同時に魔方陣が展開され、そこからグレイフィア義姉ねえさんが現れる。手には書類の山だ。

「お嬢様、ロイ様。グレイプニルに関する書類です。当日、戦場に直接鎖が送り届けられることになっております」

「ありがとうございます、グレイフィア」

「ありがとうございます、義姉さん」

リアスが書類を受け取り、俺はそれを除きこむ。ぺらぺらとページがめくられていき、少しではあるが理解できた。

すると、一誠がミユルニルを置いて、恐る恐るリアスと義姉さんに話しかけた。

「あ、あの。部長とグレイフィアさんがいるので、ちよつと訊きたいんですが……」

「なんででしょう?」

「え、えつと……」

一誠は遠慮がちに義姉さんに訊く。

「朱乃さんについてです。どうしてお父さんと仲が悪いんですか?俺、バラキエルさんがそこまで悪いヒトには見えないんですが……」

俺は首をかしげ、リアスと義姉さんはお互い目を合わせる。そのあと、リアスが口を

開いた。

「……………悲しい記憶よ」

「……………」

話を聞き終えた俺と一誠は何ともいえない空気に包まれてた。

朱乃の母親はバラキエルを恨む連中に目の前で殺されてしまった。そのせいで朱乃は墮天使にいいイメージを持たなくなり、父親であるバラキエルを避けている。

それから数年。独りで各地をさまよっているところをリアスに拾われ、現在に至る。そして、リアスの『女王』^{クイーン}となったことや、一誠の加入を皮切りに昔に比べてだいぶ明るくなってきてたと……………。

俺は一人、自分の部屋のベッドに横になり、天井を見上げる。

俺が考えても仕方のないことだが、朱乃は本当にバラキエルを嫌っているのか？本心は本人にしかわからないが、朱乃は……………。

俺は溜め息を吐きながら体を横に向ける。本当に、これは俺が考えても仕方のないことだ。それに、わかつたところで俺にどうこうできるものではない。できるとした

ら、一誠ぐらいだろう。

俺はそう結論つけると一度大きく溜め息を吐き、目を閉じる。

ロキとの決戦は間近だ。朱乃には悪いが戦闘に集中しなければならない。

誰も死なせないために。全員で学校に通うために……。

l i f e 0 6 悪神迎撃

「おっぱいメイド喫茶——」

「却下」

一誠の意見を俺とリアスは同時に否定する。

決戦を間近に控えた俺たちは学園祭の出し物を考えていた。正確にはリアスたちが考え、俺がいけるかの合否を出すのだ。

「一誠、おまえな。もっと健全なものを考えろ。その前に、リアスたちの胸を赤の他人に見せていいのか？」

「——ッ！そ、それは、そうですね」

衝撃を受けた様子で動揺する一誠。こいつの変態度は相当なものだ。

俺は額を押さえながら溜め息を吐く。こいつが俺たちの切り札つてのが何ともいえないというか、情けないというか……………。

一誠は一度息を吐いて真剣な顔になる。珍しいその表情を見てみると、ぼそりと漏らす。

「…………オカ研の女子で誰が一番人気か、とか？」

その一言で女子たちが顔を見合わせる。

「二大お姉様のどちらが人気か気になりますう」

ギヤスパーが小声でそう漏らすと、その二大お姉様であるリアスと朱乃が顔を見合わせていた。

「私が一番に決まってるわ」

リアスと朱乃の声が重なった。そして二人は睨み合いを始めてしまう。二人とも笑っているが迫力のあるオーラを放っている。

「あら、部長。何かおっしゃいました？」

「朱乃こそ、聞き捨てならないことを口にしなかったかしら？」

朱乃の様子が何となく戻っている感じがする。バラキエルが来てからは『関わらないでくれオーラ』というものを放っていたが、それが薄れた感じか。

なんてことを思っている矢先からリアスと朱乃が口喧嘩を始めてしまう。これで修学旅行までに決めるつてのは無理かもしれないな。

俺は再び溜め息を吐き、珍しく静観していたアザゼルを見る。当のアザゼルは窓の外の夕暮れを見て、ぼそりと呟いた。

「……………黄昏か」

それを聞いた俺たちの表情が引き締まる。あと数時間で決戦だ。

俺たちの耳に部活終了のチャイムが届く。

「神々の黄昏にはまだ早い。——おまえら、気張っていくぞ」

『はい！』

「ああ」

アザゼルの言葉にリアスたちは気合いを入れるように、俺はいつもの通りに返事をした。

数時間後、決戦の時。すでに日は落ちて夜となっている。

俺たちはオーデインと日本の神たちが会議を行うという、都内の高層高級ホテルの屋上にいた。

高所で遮るものがないためか、風が強く吹き付けてくる。

俺は風下の位置に立ち、懐からタバコを取り出して口にくわえる。そして周囲を見渡

「油断も隙もありません！」

「……………クソツッ！」

どこからか現れたロスヴァイセにタバコを奪われた。こいつ、俺が吸おうとする度に奪いやがって！戦闘前に一服ぐらいさせろって！

「ロスヴァイセ、たまには吸わせてくれ。戦闘前のリラックス、いや、ルーティーンなんだ」

「それでもダメです！私が近くにいる限りは吸わせません！」

こいつ、早く帰ってくんないかな。俺のリラックス方法がひとつ潰されているんだが……………。

俺は溜め息を吐きながら再び懐から『それ』を取り出して口にくわえる。それを見たロスヴァイセが額に青筋をたてながら奪おうとした瞬間――。

ガリッ！

「えっ？」

ロスヴァイセは間抜けな表情になる。それはそうだろう。俺は『それ』を噛み砕いたのだから。

俺はどや顔をしながら『それ』の入れ物を懐から取り出してロスヴァイセに見せる。

ロスヴァイセはそれを奪い取りながらそれを凝視する。

「……………ココア、シガレット?」

「タバコじゃないぜ。お菓子だぜ」

俺が取り出したのは『ココアシガレット』だ。ようするに、タバコそつくりのお菓子だな。あんまりこういうのは好きじゃないが、ロスヴァイセをからかうためだけに買った。

「あなたはあああッ!」

「まあまあ、落ち着けて」

ココアシガレットの箱を握りつぶした拳を震わせながら、俺を睨んでくるロスヴァイセ。俺はそれを適当に流しながら周囲を見渡す。

屋上の周辺には匙以外のソーナの眷族たち。上空にはタンニーン。アザゼルは会議に参加するんで、その代わりにバラキエルが参戦する、と。リアスたちも問題なく、ヴァーリたちもいるな。

俺は腕時計を確認する。

「そろそろだな」

何事もなければ会議が始まった筈だ。で、ロキの野郎は…………。

「小細工なしとは、恐れ入るな」

「ああ、まったくだ」

俺とヴァーリはほぼ同時に苦笑した。一誠はまだ気づいていないようだな。

バチツ！バチツ！

ホテル上空の空間が歪み、大きな穴が開いていく。

そこからはロキとフェンリルが現れた。ロキの右腕はついている。神様だけあつてあのあとにどうにか繋いだようだ。

「目標確認。作戦開始」

バラキエルが小型の通信機からそう言うと、ホテル一帯を包むように巨大な結界魔方阵が展開される。ソーナたちが俺たちを転移させるための魔方阵を展開したのだ。

ロキはそれを感知するが、不敵に笑むだけでなにかしてくることはなかった。

俺たちは転移の光に包まれていった。

光が止むと、そこは古い採石場跡地だった。予定通りに転移できたようだ。

リアスたちはいる。バラキエルもいる。ヴァーリチームもいる。ロスヴァイセは俺の目の前にいる。無事に全員転移できたようだ。

俺はそれを確認すると、ロキとフェンリルに視線を移す。

「たいした度胸だ。逃げないとはな」

俺が挑発するように言うと、ロキは笑う。

「逃げる必要はない。どうせ抵抗されるのだったら、ここで始末してその上であのホテルに戻ればいいだけだ。遅いか早いかの問題でしかない。会談をしてもしなくてもオーデインには退場していただく。それに、おまえを殺すと言った筈だ」

ロキはそう言いながら俺を睨んでくる。俺は不敵に笑いながら軽く肩をすくめてやる。

「貴殿は危険な考えにとらわれているな」

バラキエルがそう言う。

「危険な考え方を持ったのはそちらが先だ。各神話の協力などと……。元はと言えば、貴様ら三大勢力が手を取り合ったことから、すべてが歪みだしたのだ」

「もういい、言葉は既に意味を持たない。やるしかないぜ？」

俺は確認するようにバラキエルに言う。それを聞いたバラキエルは頷き、手に雷光をまとわせ始めた。俺も銃剣を取り出して銃口をロキに向ける。

それと同時に一誠とヴァーリが閃光と共に鎧を身に纏った。これでこちらの準備はできた。

ロキの前に立つ二天龍を見てあいつは歓喜の表情を浮かべる。

「これは素晴らしい！二天龍がこのロキを倒すべく共同するというのがか！こんなに胸が高鳴ることはないぞッ！」

ヴァーリが最初に仕掛けた！高速でジグザグに動いてロキとの間合いを積めていく！一誠はそれに合わせて突撃した！

「赤と白の競演ッ！こんな戦いができるのはおそらく我が初めてだろうッ！」

ロキは嬉々としながらそれを受け入れた！イカれてるだらいつ！二天龍と真つ向勝負つてか！

俺たちは巻き込まれないように物陰に待避し、戦いの様子を見る。

ヴァーリの手元に北欧のものと思われる魔方陣が展開される。そして、

「まずは初手だ」

バアアアアアアアアアアアアッ！

一気に掃射した！一誠が巻き込まれそうになるが、ギリギリ退避できたようだ。てか、採石場の三分の一が飲み込まれたぞ！？なんて規模だよ！

攻撃が止むと、そこには底の見えない穴が生まれていた。一点集中にしたんだろが、それでもこの威力か。恐ろしい奴だ。

俺がヴァーリの強さに感心していると、煙の中からロキが現れる。ローブが所々破れているが、本人は無傷なようだ。

一誠はミヨルニルを構えて一気に殴りにいくが、あつさり避けられた。

ミヨルニルを取り出した瞬間にロキは表情を引きつらせたが、すぐに余裕そうなもの

に戻る。

それよりも、肝心の雷が出てなかったな。出る気配すらしなかったぞ。

「残念だ。ミヨルニルは力強く、そして純粋な心の持ち主にしか扱えない。貴殿には邪よこしまな心があるのだろう。だから、雷が生まれないのだ。本来ならば、重さすらも無く、羽のように軽いと聞くぞ?」

邪な心か。一誠に扱える筈がないな! オーデインはなんであいつに託したんだ!?

「さて、こちらも仕掛けようか!」

ロキは宣言すると共に指をならす。今まで様子を見ていたフェンリルが動きだそうとする。

「神を殺す牙。それを持つ我が僕しもべフェンリル。おまえたちが勝てるというのならばかかってくるがいいッ!」

ロキが指示を出した瞬間、俺は手を挙げる。

「にゃん♪」

黒歌がそれを確認してから笑むと、彼女の周囲に魔方陣が展開される。そして、そこから巨大な鎖——グレイプニルが出現する。それを各々で掴み、フェンリルに投げつける!

「グレイプニルの対策など、とうの昔に——」

l i f e 0 7 決戦中盤

新たに現れた二匹の狼、いや、あれは！

「フェンリルだと!?こんな時に増援つて、空気読めよ!」

その二匹のフェンリルの登場に驚いていたリアスたちが変わって俺が声を出した。ヴァーリリだけは楽しそうにしているがな。

ロキは新たに現れたフェンリル二匹を従えながら言う。

「ヤルンヴィドに住まう巨人族の女を狼に変えて交わらせた。親よりもスペックは劣るが、牙は健在だ。十分に神、貴様らを葬れるだろう」

フェンリルの子供か。情報がないものに対策はできないが、どうせぶっつけ本番なんだ、やるしかないか!

俺が覚悟を決めた矢先、ロキがフェンリルに指示を飛ばす。

「さあ、スコルとハティよ!父を捕らえたのはあの者たちだ!その牙と爪で食らい千切るがいいっ!」

ロキの指示を受けた二匹が音もなく動きだし、一匹は俺とリアスたちの方に、一匹はヴァーリリチームの方に分かれて向かってくる!

「おまえら、やるしかねえぞ！」

『はい！』

俺は二挺の銃剣の銃口をフェンリルに向け、フルオートで弾丸をばらまく！フェンリルは右に左に避けながら減速する気配はない！

「チツ！避けてくるよな！」

俺は銃剣のグリップを撃鉄の方に曲げる。銃剣は光を放ちながら直接剣へと変わった。

つい先日見つけたパターンだ。グリップを曲げてみたら変わった。

俺は左手の剣を逆手持ちにし、木場とゼノヴィアに声をかける。

「木場、ゼノヴィア、イリナ！仕掛けるぞ！リアスたちは援護だ！」

「わかりました！」

「任せろ！」

「はい！」

「わかりました！朱乃、アーシア、あなたたちは私と支援を！小猫と隙を見て攻撃に参加して！ギャスパーは体をコウモリにしてフェンリルの視界を奪って！」

『はい！』

俺、木場、ゼノヴィア、イリナが同時に飛び出して子フェンリルに挑んでいく！一撃

でもくらえば死ぬかもしれない。すべて避けるしかない！

「ハアー！」

木場が真つ先に仕掛け、子フェンリルに斬りかかる。高速から放たれた一撃はフェンリルを捉えるが、少し浅かったようで横腹に小さな傷ができただけのようなのだ。

「ならば、これで！」

ゼノヴィアがデュランダルから大質量のオーラを子フェンリルに向けて放つ！フェンリルはその軌道を見切り、余裕で避けるが、

「オラッ！」

「えいっ！」

余裕際に生まれた小さな隙をついて俺とイリナが斬りかかる！俺とイリナの攻撃は腹部に大きな傷をつけるが、致命傷には遠い！

俺たちは素早く後ろに飛び退く。すると子フェンリルが風ぎ払うように爪を振ってきた！俺たちに当たることはなかったが、掠めただけの地面に切り傷が生まれた！

直撃はアウトかと思つたが、掠めただけでアウトだな！考えを訂正しなければ………。

吸血鬼の能力でコウモリとなったギヤスパーがフェンリルの視界を少しだけ奪う。俺はその隙に素早く剣を銃剣に戻して再びフルオートで連続発射。フェンリルは再び

それを避けようとするが、その瞬間――、

ドコンッ！

凄まじい打撃音が響き渡る。見ると、子フェンリルに先ほどできた傷を扶るように小猫がパンチを放っていた！

小猫には猫耳と尻尾と思われるものが生えている。小猫は猫又、もつというねこしようと猫？と呼ばれる一族であり、仙術というものを使うことができる。仙術は体の中を流れる魔力とは違うオーラのようなものを扱う技や術のことだ。

小猫の攻撃で驚くように目を見開くが、素早くその場を飛び退いた。少し息が荒くなっているように見えるな。

小猫が俺たちの方に近づき、ホツと息を吐く。

「で、どんな感じだ？」

「少しではありますが、気の流れを狂わせました。いくらフェンリルでも回復には時間がかかるとは思いますが、少しは楽ができるかな……」

正直、あんなのと真つ向勝負はしたくない。命が足りないとかではなく、魔力が足りない。削りきる前にこつちが魔力切れで倒れる可能性が高い。

だが、それは一人で挑んだ時の話だ。今はリアスたちがいるわけだから、どうにか

なるだろう。

俺が深く息を吐き、再び銃口を向けようとすると子フェンリルが俺たちのいない方向に駆け出した。木場たちは警戒して身構えるが、俺は全力で子フェンリルを追う！

あいつが向かった方向には……………！

負傷しているにも関わらず、脅威的な速度で子フェンリルは戦場を駆け抜け、そこに向かう。

俺は銃口を向けて三点バーストで弾丸を放っていくが、子フェンリルは被弾しながらもそこに到着してしまった。

親フェンリルを捕らえるグレイプニルを前にして、子フェンリルは小さく唸る。そして、一気にグレイプニルにかじりつき、傷から血を吹き出しながら強引にグレイプニルを引きちぎった！

クソツ！間に合わなかったか……………！

俺は素早く減速して集中、そして一気に横に飛び退いた！一瞬後、俺がいた所の地面が抉りとられた！親フェンリルの一撃か！子供とは桁違いじゃねえか！

俺は驚愕しながらも周囲を見渡す。親フェンリルは神速で接近し、ロキに攻撃を放とうとしていたヴァーリに噛みついた！

「ふはははははっ！白龍皇を噛み砕いたぞ！」

ロキが哄笑をあげる。あの野郎、真っ先にヴァーリを狙いやがったな!

俺は舌打ちをしながらカバーに入ろうとするが、俺の行く手を子フェンリルが阻む。木場とゼノヴィアが俺の横に駆けつけてくれるが、状況が一気に最悪になっちゃった! 焦る俺たちに追い討ちをかけるようにロキは言う。

「ついでだ。こいつらの相手もしてもらおうか」

ロキの影が広がり、そこから五匹の巨大な蛇のようなものが現れる。いや、あれはドラゴンか!?

「ミドガルズオルムも量産していたかッ!」

タンニーンが憎々しげに叫ぶ。まさか、龍王を量産したのか!? さっきから状況が好転しないな、クソッ!

子フェンリルが待避した矢先、その量産型ミドガルズオルムが一斉に火を放ってくる!

俺たちは素早く待避してそれを避け、俺は銃口を量産型に向ける。少しばかり貫通力が必要だな。

俺は浅く息を吐きながら左右で一発ずつ弾丸を放つ。その弾丸は二匹の量産型の細長い腹部を撃ち抜き、血を吹き出させる。

よし、効いてる。量産型にはすぐに対処できそうだ。

俺はそう判断して視線を子フェンリルに向ける。リアスたちとヴァーリチームの面々はうまくやっているようだ。これだけサポートがいるならあれをやるな。

「タンニーン！量産型は任せる！」

「わかった！おまえは子フェンリルをどうにかしろ！」

「言われなくても！」

俺は走りながら二挺の銃剣に魔力を込めていく。それを行いながら全員に聞こえるように叫ぶ！

「おまえら！子フェンリルの動きを止めるッ！一撃で決める！」

「お兄様！大丈夫なのですか!?!」

リアスが心配そうに聞いてくるが、俺は自信満々に頷いてやる。まあ、半分懸けのよなものだからな。

「わかりました。皆、やるわよ！」

『はい！』

再びコウモリとなったギヤスパがフェンリルの視界を奪い、ゼノヴィアがオーラを飛ばす！

子フェンリルはそれを避けようとすると、木場がそいつの足元に大量の聖魔剣が出現させて一時的に足を止める。ゼノヴィアが放ったオーラがフェンリルを直撃し、子フェ

ンリルは煙に包まれた！

俺はその隙に気配をできるだけ消し、一気に子フェンリルの懐に飛び込む！大量の魔力を込めた右手の銃剣をまっすぐ右の眼球に突き立てる！

眼球を貫かれた子フェンリルは苦しそうに暴れ始めるが、俺は必死にしがみついで引き金に指をかける。

「——ッ！」

歯を食い縛りながら引き金を絞り、銃口から滅びの弾丸が吹き出された！その反動で俺は吹き飛ばされ、子フェンリルから離れることになった。

俺は空中で翼を展開して態勢を整え、地面に着地する。

俺は長く息を吐き、右目から大量の血を流す子フェンリルに目を向けながら言う。

「俺は滅びを兄さんほど器用に動かせないし、リアスほど派手でもない。だが——」
俺は言葉を区切り、右手で指を鳴らす。その瞬間——。

グシャ……………！

肉を貫くような不気味な音が周囲に響き渡る。

俺は不敵に笑みながら子フェンリルを見る。そいつからは、眉間から紅の刃が飛び出している。

「——確実に殺すって意味だけなら、俺が一番かもな」

グシャグシャグシャグシャグシャグシャ!

俺が言い切ると同時に、数十本の滅びの刃が頭蓋骨と皮膚を突き破っていく! 血や脳の一部を消し飛ばしているのか、刃からは大量の煙が放たれている。

子フェンリルはびくびくと痙攣しながら地面に倒れ、動かなくなった。

「まずは一匹……」

俺はフツと息を吐き、もう一匹の方に目を向けようとする、親フェンリルにくわえられたヴァーリのほうから強烈なオーラが発せられていた! そのオーラで軽い地震のようになる。これは、採石場全体が揺れてやがる!

ヴァーリの方に目を向けると、黒歌が展開したと思われる転移魔方陣に囲まれ、今にも消えてしまいそうになっていた! あいつ、何をやる気だ!?

俺が聞く暇もなく、ヴァーリと親フェンリルはどこかに消えてしまった……。

グレイプニルも持っていったのか? なら、大丈夫だと思いたい……。

俺がそう判断すると、俺に大量の火炎が殺到してきた! 俺は跳躍するようにしてそれ avoidance、空中でも殺到してくる火炎を体を捻りながら避けて物陰に待避する。

量産型ミドガルズオルムが邪魔だ! もう一匹の子フェンリルを殺りたいのに、ここで無駄な魔力を使うことになりそうだな。

俺は左手の銃剣に魔力を込めながら駆け出し、右手の銃剣で弾丸を放っていく! 量産

型たちはくらつても怯むことはないが、俺に注意が向いた隙にタンニーンの火炎が襲いかかる！それに合わせるようにロスヴァイセの魔術砲撃が突き刺さっていく！

俺はロスヴァイセの横につき、左手の銃剣の魔力を一旦逃がす。そして二挺撃ちで貫通力をあげた弾丸で量産型に攻撃をくわえていく。今度はしっかり効いているようだ。

だが――。

「クソツ！硬いな！量産型とはいえ龍王つてことか!？」

「ですが、確実に効いてはいます！このまま………」

「押しきるぞツ！」

俺、ロスヴァイセ、タンニーンは弾幕をさらに濃くしていき、量産型にダメージを蓄積させていく。

俺は銃剣を両剣に変え、ロスヴァイセとタンニーンに目で合図を送る。二人はそれを受けて小さく頷くと、ほんの少しだけ弾幕が薄くする。

俺はそれを確認して一気に駆け出し、弾幕をすり抜けながら量産型にすれ違い様に斬りつけていく！

一匹二匹と斬り、両剣を二刀流に変えてペースを上げていく！返り血を全身で浴びながら乱舞の如く斬りまくる！

そして、五匹すべてを斬り終えてロスヴァイセの横に戻る。すると、ロスヴァイセは

俺の体を見ながら驚愕した。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ。俺の血じゃない」

俺は戦争の時のように返り血で全身真っ赤になってしまった。知らない奴が見たら動揺するだろうな。

俺が息を吐くと、一誠が朱乃の方に向かって飛び出していた。

俺はハツとしながら一誠の行き先を見ると、朱乃が膝をつき、それを子フェンリルが狙っているところだった!

無防備な一誠の背中をロキが狙い撃とうするが、

「やらせるか!」

「その通りです!」

「当たり前だ!」

俺たち三人でロキに攻撃を放つ!ロキはそれを防ぎながら、こちらにも攻撃をしてきた!俺たちは散るようにしてそれを避けていくが、俺にだけ集中してないか!?

俺は必死に攻撃を避けていき、隙を見つけてはこちらも攻撃していく!ロキの野郎、楽しんでやがるな!右腕の仕返しのももりか!?

俺は必死になって避け、物陰に隠れるとロキの攻撃が止んだ。俺は怪訝に思つて顔を

出すと、ロキは興味深そうに一誠のほうに目を向けていた。当の一誠は困惑気味に誰かを探しているようだ。

俺が警戒しながらも体を出すと、一誠が困惑の表情のまま俺に訊いてくる。

「ロイ先生！『乳神様』って、なんですか!？」

「……………知るかあああああああッ！」

戦場には似合わない絶叫が、この戦場で響き渡った。

l i f e 0 8 決着

「ロイ先生！『乳神様』って、なんですか!？」

「……………知るかあああああああッ!」

戦場には似合わない絶叫が、この戦場で響き渡った。

乳神様だ?! そんなふざけた名前の神なんて聞いたことはないぞ!

俺は困惑しながらもアーシアに叫ぶ!

「アーシア! 一誠を回復しろ! これは、致命傷だぞ!」

「イツセーさん! しつかりしてください!」

アーシアが一誠の頭部に回復の光を飛ばす。その光は優しく一誠の頭を包み込んだ。

あれで大丈夫だな。

「違うんです! 確かに朱乃さんのおっぱいが自分の乳の精霊だつて!」

一誠が真面目な顔で弁明するが、逆にバラキエルが睨み付ける。当のバラキエルは朱乃を庇ってフェンリルの爪に斬られたらしく、アーシアの回復のおかげで大丈夫そうだが、服には血がついている。

そのバラキエルは傷が開くことをお構い無しに一誠を睨む。

「貴様……！……うちの娘がそんなわけのわからないものだと言うのか……！……」
体に雷光を走らせて完全にぶちギレているようだ。

再び一誠の頭部に回復の光が届く。今度こそ大丈夫の筈だ。

「ですから！……本当に聞こえたんです！」

「クソツツ！……ダメなのか……！……一誠、おまえのことは忘れないからな」

俺が悔しがるようにそう言うと、今度はドライグの声が俺たちの耳に届く。

『い、いや、皆聞いてくれ。確かに俺にも乳の精霊の声が聞こえる……。残念だが、こいつは異世界の神の使いを呼び寄せたらしい』

ドライグの言葉に俺たちは絶句する。開いた口が塞がらないとはまさにこのことと言わんばかりの状況だ。

「ダメだ……！……ドライグまで……！」

俺がかろうじて言葉を発つすると、それを聞いた全員が首を縦に振る。

『うおおおおおんっ！……どうせおっぱいドラゴンの声なんて誰も信じちゃくれないんだ！俺は悪くないぞ！相棒が、相棒がああああ！』

それを見て泣き叫ぶドライグ。あいつも心労が絶えないようだ。

「はあ……！……、どうすんだよこの空気。仕切り直すにはもう手遅れだよな……！」

溜め息を吐きながらロキとフェンリルを見る。二人もどうするか迷っている様子だ。

今のうちに溜めておくか……。

俺は左手の銃剣を異空間にしまい、右手の銃剣にゆつくりと魔力を込めていく。バラたら速攻で仕掛けてくるんだろうが、今は一誠に注意が向けられているからな。

俺が慣れない作業を行っていると、突然一誠の鎧の宝玉が輝き始め、ミヨルニルからは強烈な波動を感じられるようになった！一誠やヴァーリを越えているぞ!!

「覚えのない神格の波動を感じるな。異世界の……乳神？今回の赤龍帝は不思議がいっぱいだな！」

ロキは仕切り直すようにマントを広げ、再び影を拡大させていく。そこからは再び五匹の量産型ミドガルズオルムが出現した！

クソツツ！面倒な奴が増えたな！消耗戦とかそんなレベルを越えてきたぞ！

俺が舌打ちをした瞬間、黒い炎が地面から巻き起こり、ロキと子フェンリル、量産型ミドガルズオルムを包み込んだ！

黒い炎、今度はなんだよ!?

「——ッ！このオーラ、ヴリトラか!?!」

タンニーンが叫ぶ。

ヴリトラってことは、匙か！あいつ、何か大変なことになっているんだが!?!

地面に現れた巨大な魔方陣。そこから黒い炎がドラゴンの形となって生み出されて

くる。

それを見ていた俺の耳に叫びが届く。

「ロイさん！」

「今度は尻神か!?!いい加減にしろよ！」

「違います!あれは匙で、ヴリトラ系の神セイレッドキア器をすべてくつつけたそうです！」

「な、なるほど。なかなか無茶をするもんだな、グリゴリの連中……」

「俺が匙が暴走しないように話しかけます!ミヨルニルを当てるので隙を作ってくださいー」

「任せろ。一発ぶんなら溜めてある」

俺は右手の銃剣を見る。銃口から滅びのオーラが漏れでて、小さな雷のようになって銃剣を這っている。

「なんだ、この炎は!?!動けん!力も吸われているのか!?!」

ロキが狼狽えながら黒い炎を振り払おうとしている。子フェンリルも量産型ミドガルズオルムも暴れているが、脱出はかなわないようだ。

俺はロキに銃口を向け、ロスヴァイセに叫ぶ!

「おまえらも合わせろ!一気に入くぞ!」

『はい!』

俺の叫びに全員が賛同し、攻撃の準備を開始する。

「オーディン様の敵は全部倒します！」

真つ先に仕掛けたのはロスヴァイセだ。一気に魔方阵を展開して魔術攻撃を縦横無尽に放つ！

身動きがとれない子フェンリルと量産型ミドガルズオルムにそれらは容赦なく突き刺さっていく、連続で爆発を発生させていく！

一誠が雷を宿らせたミヨルニルを構え、ロキに飛び出していく！ロキはそれを迎撃しようとするが、俺はゆつくりと息を吐き、ロキに銃口を向ける。

「無視は困るな……………」

俺はぼそりと呟き、滅びの弾丸を放つ！反動で体が後ろに吹き飛ばされかけるが、足を踏ん張ってそれに耐える！

後ろにスライドしながらも弾丸の行き先を見る。ロキは目を見開きながらこちらに手を向けてオーラを放ってくる！弾丸はまっすぐロキに向かい、腹部に直撃する！

ロキの放ったオーラを、俺は横にきりもみ回転しながら回避したが、俺がいたところで爆発が起こって吹き飛ばされた！

俺は地面を何度か転がったところで無理やり勢いを殺す。ロキの方は撃たれた腹を押さえながら俺を睨むが、大事なことを忘れているな……………。

俺は口元を笑ませながらあごである場所をさす。一誠がミヨルニルを今にも振り下ろそうとしていた！

ロキは慌てながらも黒い炎を振り払って一気に上昇する。一誠の攻撃を避けられたところで判断したのか、ロキは不敵な笑みを浮かべるが、そこに――。

ビガガガガガカガガガガツ！

特大の雷光が放たれた！そちらを見ると、朱乃とバラキエルが手を取り合っている。一誠が何かしたようだが、うまくいったようだな。

「な……何をした！」

煙を上げながらまだ逃げようとするロキ。

「言った筈だ！無視は困るってな！」

俺は叫びながら指を鳴らす。その瞬間、ロキの腹を貫くように一本の滅びの刃が飛び出した！

ロキは血を吐きながら再び落下してくる。追い討ちをかけるように黒い炎が再びロキを拘束する！

一誠はロキに狙いをすまし、一気にミヨルニルを振り上げ――。

「俺式ミヨルニルだあああああッ！」

ミヨルニルが完璧な軌道でロキの頭部に打ち込まれた！

その瞬間、凄まじい量の雷が発生した！その雷はロキだけでなく、子フェンリルと量産型ミドガルズオルムを巻き込み、採石場全体を照らした……………。

「……………終わった、か」

俺はロキたちが動かなくなったことを確認しながらそう漏らした。それにしても――

「ずいぶんポロボロになってしまいましたね……………」

「だな」

ロスヴァイセが俺の横に来ながらそんな事を言っていた。ロスヴァイセは先ほどロキに色々と封印を施していたのだが、それはもう済んだようだ。

「やれやれ、ヴァーリチームはどっかに行っちゃったし、処理まで手伝ってんだ、面倒くせえ」

俺は頭をかきながら隠す気もなく愚痴をこぼす。ロスヴァイセはそれを聞いて苦笑していたが、ある場所に目を向けていた。

俺もそちらに目を向けると、一誠がバラキエルに肩を貸しながら何かを話しているよ

うだ。その横にいる朱乃は顔を赤くしているが、何を話しているのやら……………。

俺は横目でロスヴァイセを見ると、背中を向けて懐からタバコを取り出す。それをくわえて手早く火を――。

「やらせません！」

「はあ……………」

つけようとしたら再び奪われた。俺は溜め息を吐きながら再び周囲を見渡す。視界いっぱいには広がるのはボロボロの採石場だ。

「とりあえず、もと通りにしないといけないんだよな」

「……………頑張りましょう！」

ロスヴァイセは励ますようにそう言う。

「ならタバコの一本くらい吸わせろ！」

その言葉を口に出すことはなく、その代わりに、

「俺は面倒が嫌いなんだがな……………」

そう呟いた。ロスヴァイセの苦笑を無視しながら歩みを進める。さつさと終わらせて休ませてもらいますか。

余談だが、この戦後処理は次の日の朝までやることになった。これの大半を引き起こしたヴァーリの野郎はどこに行きやがった！

l i f e 0 9 置き土産

俺たちがどうにかロキを退け、オーデインの会談も無事に終わった。そのオーデインはもう帰ってたがな。

俺たちはそんなことを気にすることなく、部室でいつものように過ごしていた。

「あー、もうすぐ修学旅行だ」

オカ研の部室でだらけながら一誠が言う。確かに、もうすぐ修学旅行になる。俺も何か買っておいたほうがいいかもしれないな。

なんて事を思いながら朱乃が淹れてくれた紅茶に口をつける。

ヴァーリたちは親フェンリルと共にどこかに消えたそうだ。それはそれで問題になったが、ロキからフェンリル対策を聞き出せば問題なしという方向で落ち着いたらいい。

俺は小さく溜め息を吐いた。ヴァーリチームの事を考えてではない、オーデインが残していった大問題のせいだ。

「もう、終わりだわー!」

部室の中央で悲鳴をあげるロスヴァイセ。目から大量の涙を流している。

「うううううっ！酷い！オーデイン様だったら、酷い！私を置いていくなんて！」

オーデインはロスヴァイセのことを置いて帰りやがった。今頃気づいてはいるんだろうが、一向に迎えにはこないし、何か連絡があつたというわけでもない。

「これ、リストラよね！あんなにがんばったのに置いていかれるなんて！どうせ、私なんて、私なんてえええええっ！」

若干やけくそになっているロスヴァイセ。そんな彼女の肩にリアスが手を置いた。

「もう、泣かないでロスヴァイセ。この学園で働けるようにしておいたから」

「……グスン。ほ、本当に？」

「ええ、希望通り、女性教諭ってことでいいのよね？生徒ではなくて？」

「もちろんです……。私、これでも飛び級で学び舎を卒業しているもの。教諭として教えられます」

リアスたちと大して年は変わらないと思っていたが、案外できる奴のようだ。

「私、この国でやっていけるのかしら……。？かといって国に戻っても怒られるでしょうし、そのまま左遷されそうだし……。っ！うう……。せっかく安定した生活が送れそうなお職に就けたのに！」

かなり落ち込んでいるようだ。俺としても帰ってほしかったんだがな。おかげでのんびりタバコが吸えん。

俺が再び溜め息を吐いていると、リアスが何かの書類をロスヴァイセに見せた。

「ロスヴァイセ、このプランはどうかしら？いま冥界に来ると、こんな特典やあんな特典が付くのよ？」

流れのまま書類に目を通したロスヴァイセの表情が驚愕に変わる。

「ウソ！保険金がこんなに……。こっちは掛け捨てじゃない！」

「そうなの。さらにそんなサービスもこんなシステムもお得だと思わない？」

「すごいです！あ、悪魔ってこんなに貰えるんですか……。つ！基本賃金が違うわ！ヴァルハラと比べても好条件ばかりです！」

り、リアスが、俺の妹が、保険屋の人みたいになっている！悪魔的に言えばさすがと言えそうですが、話がいきなりすぎないか!?

俺の胸中を知らないリアスはロスヴァイセへの交渉を続ける。

「ちなみに私のところに来るとこういうものを得られるわ」

「グ、グレモリーといえば、魔王輩出の名門。特産品の売り上げもとても良いと聞いてます」

「そうよ。そのお仕事に手を出してもいいし。グレモリーはより良い人材を募集しているのよ」

勧誘を続けるリアス。すると、突然ポケットから紅い駒を取り出した。なるほど、そ

ういうことか。

「——そんなわけで、私の眷族にならない？あなたの魔術と『戦車』^{ルック}の特性が合わされば、動ける魔術砲台要員になれると思うの」

「リアス、眷族にするのはおまえの自由だが、駒は一つで足りるのか？俺から見ても、ロスヴァイセはなかなか強いぞ」

俺の懸念にリアスは不敵に笑む。

「きつと大丈夫ですわ、お兄様。先日、未使用の駒は主の成長によって変質するという報告がありましたから」

アジユカ様の遊び心というやつか。あのヒトは本当にわからないヒトだからな。俺の銃剣を設計したのもあのヒトらしいし。

「それで、どうするの？ロスヴァイセ」

リアスがロスヴァイセに視線を戻して訊く。ロスヴァイセはゆっくりと息を吐くとリアスに答えた。

「……どこか運命を感じます。私の勝手な空想ですけど、それでもあなたたちと初めて会ったときから、こうなるのが決まっていたのかもかもしれませんね」

ロスヴァイセはリアスが差し出した悪魔^{イヴルピリス}の駒を受け取った。その瞬間、まばゆい閃光が部室を包み込み、それが止んだ頃にはロスヴァイセの背中からは悪魔の翼が生えてい

た。

ロスヴァイセは自分の背中から生える悪魔の翼を確認すると、一度咳払いをして俺たちに一礼する。

「皆さん、悪魔に転生しました、元ヴァルキリーのロスヴァイセです。こちらのほうが将来の安心度も高いので、悪魔になってみました。どうぞ、よろしくお願い致します」

若干ながら、感情がこもっていないような……。てか、洗脳でもされたみたいな表情になっているんだが!?

「ま、いいんじゃないか？私も破れかぶれだったしな」

ゼノヴィアは気にする様子もなく紅茶を飲んでいた。そういえば、こいつもやけくそだったな！

『よろしくお願いします！』

「まあ、よろしく頼む」

オカ研の全員は快く迎え入れた。俺は控えめに迎え入れる。俺の禁煙はもう少し続きそうだな……………。

「うふふふふふふふ。オーデイン様？次にお会いしましたら、絶対に許しませんからね？」

不気味に笑うロスヴァイセ。迫力を感じるオーラをまとっている。オーデイン、女の

恨みは怖いぞ！

それはそれとして、これでリアスの眷族は全員か。『兵士』^{ポーン}八つは一誠に使つたらしいからな。

俺がそんなことを思っていると、一誠が訊いてくる。

「ロイ先生。先生は眷族探しはしないんですか？」

「ん？ああ、そうだな。俺はそもそもゲームに参加する気がない。それに、仕事も基本的に一人でやるが多かったからな。それに——」

「それに？」

「万が一、俺の眷族がはぐれになったら他の奴に迷惑だからな。もちろん俺が責任を取って殺すが、その時に、一思いに殺れるかがわからん」

俺は真剣にそう返した。共に死線を潜ってきた奴を殺すこと、昔の俺なら殺れたかもしれないが、今の俺はどうなんだろうな……。

俺の言葉に部屋に重い空気が流れ始めるが、俺は咳払いをして話を戻す。

「ま、本音を言っちゃえば、眷族持つことが面倒なんだ。無駄に仕事が増えるからな」

俺は苦笑しながらもそう言った。それを聞いたリアスはやっぱりかという表情で額に手をやり、一誠たちは少しじと目になりながら俺を見てきている。

そんなわけで話が終わると、朱乃が一誠に弁当箱を差し出した。

「これ、余り物だけど、良かったらどうぞ」

中身は肉じゃがが。一誠はそれを指で掴んで口に放り込む。すげえうまそうに食べてるな。

「おいしいです！なんだろう、何か、安心する味がします！」

へー、いわゆるお袋の味ってやつか？俺も一口貫おうかな？……いや、あれは余りますと言いながら一誠のために作ったのかもしれない。ここは様子見だな。

朱乃から箸を受け取って一氣にがつつく一誠。それを見た朱乃は嬉しそうに微笑んでいる。

「良かった、イツセーくんに喜んでもらって。——つと、口に」

朱乃はそう言いながら一誠に顔を近づけ、一瞬だけ唇同士を触れさせるって、キスじゃねえか！

朱乃は頬を赤くしながら優しく笑う。

「うふふ。いちおう、ファーストキスになるのかしら」

やつぱりか。一誠はこれから大変だな！現にリアスたちに睨まれているからな！

「イツセー？」

「イツセーさん？」

「……………先輩？」

「うん、説明してもらおう」

リアスとアーシアは笑顔で、小猫とゼノヴィアは少し怖い形相で一誠に迫っていく。

一誠は慌てながらも俺たちオカ研男組のほうに目を向けてくる。

「木場、ギヤスパー、ロイ先生！助けてくださいあああああいつ！」

それを受けた木場は肩をすくめ、ギヤスパーは足早に段ボール箱に待避。俺も満面の笑顔をつくりながら、ゆっくりと視線をそらす。

「甲斐性の見せ所だ。気張れ」

「ちよつと、待つてくださいいよーそりやないでしょ!？」

逃げようとしていた一誠はリアスたちに捕まり、そのまま問いただされていく。毎日が前日より騒がしくなっていく。

本当、こいつらといると退屈しないな——。

幕間編②

Extra life 01 義姉訪日

修学旅行を間近に控えたある休日。朝っぱらからリアスが落ち着かない様子だった。

「大変だわ」

何て眩きながら自分の部屋と一階を何度も往復している。行ったら掃除して、戻ってきたら身だしなみを整えて、また掃除に行つてを繰り返していた。

「ロイ先生、部長、どうかしたんですか？」

一誠が俺に訊いてくる。俺はコーヒーに口をつけてから答える。

「今日はな、義姉ねえさんが来るんだよ」

「ねーさん？ああ、グレイフィアさんのことですか？」

「ああ、その通り」

俺は一つ頷くと、ちやうど部屋から戻ってきたリアスに言う。

「リアス、気にしすぎだろ？そこまで義姉さんだつて怖くないし」

「お兄様は知らないのですよ。オフの時のお義姉様の怖さを……」

顔を少し青くしながら言うリアス。俺的にはそこまででもないんだがな。むしろ優

しかったような気がするんだが……。

俺は苦笑しながらもコーヒーをもう一口。

「部長にも苦手な人がいるんだな」

ゼノヴィアが領きながらそう言う。まあ、次期当主である義妹と、そんな縛りが無い義弟では扱いが違うのも無理ないか。そういう意味では、俺は義姉さんの本当の怖さを知らないのかもしれない。

俺はコーヒーを飲み終えると、再び部屋を見に行っていたリアスに言う。

「これ以上何が出てくるんだよ。ドンと構えておけばいいんじゃないのか？」

「そうも言うてはいられません。お茶の用意もしておかなければいけません。イツセー、あなたもきちんとしていてちょうだい。あなたのこともチェックするでしょうから」

「お、俺もですか？えっと、どうしてですか……？」

リアスに襟元を直されながら一誠が訊く。リアスは顔を真っ赤ながら答えた。

「あなたは……ほら、と、特別だから……」

「まあ、しつかりしておいて損はないと思うぜ？無駄にどうこう言われるのは面倒だからな」

「そう言うお兄様もしつかりなさってください！」

俺たちがあーだこーだ話していると、玄関のチャイムが鳴った。リアスは慌てた様子で玄関へと向かい、残された俺たちは領きあってからゆっくり玄関に向かう。

開かれた玄関から現れたのは、セレブな衣装に身を包んだ義姉さんだった。相変わらず、綺麗なヒトだな。

それはそれとして、玄関まえにリムジンが止まっているんだが、あれで来たのか？ 変に目立ちそうだな。

義姉さんは俺たちに視線を向け、

「ごきげんよう、皆さん」

相変わらずの気品溢れる微笑を浮かべてあいさつをしてくれた。そして、義姉さんの視線が俺とリアスのほうに移る。

「お久しぶりです、義姉さん」

「ええ、久しぶりですね、ロイ」

「ごきげんよう、リアス」

「ごきげんよう、お義姉様」

俺はいつも通りにあいさつしたが、リアスの表情が固い。かなり緊張しているようだ。

「お久しぶりございますな、姫様、ロイ殿」

第三者の声。俺とリアスがそちらに視線を向けると、そこには頭部は龍で、体が鹿っぽく、全身を紅の鱗に覆われた謎の生物がいた！……と、一誠たちは思っている筈だ。俺はもちろん知っている。

その謎の生物は一誠に頭を下げる。

「これは赤龍帝殿。お初にお目にかかる。私はサーゼクス様にお仕えする兵士——炎駒と申す者です。以後、お見知りおきを」

「は、はあ、こちらこそ、よろしくお願ひします！」

一誠は戸惑いながらも元氣にあいさつを返す。小さく疑問府を浮かべる一誠に簡単に解説を行う。

「一誠、こいつは炎駒。おまえにもわかりやすく言えば、麒麟きりんだな。伝説上の生き物で幸運を運ぶと言われている神聖な生き物だ」

それを眷族にできた兄さんは本当に何者なんだろうな？

俺はその疑問は飲み込んだ。兄さんが本当に何者なのか、考え始めてたらきりがない。

リアスは炎駒の頬を優しく撫でながら、少しだけ緊張がほぐれたようでも頬を緩めていた。

「それではグレイファイア様、私はこれにて持ち場に戻ります」

「ええ。ここまでありがとうございます。炎駒。私一人でも良かったのですが……」
「何をおっしゃいます。我が偉大なる『女王^{クイーン}』にして、主の奥方であるグレイフィア様が正式に訪問なされるのに護衛もなしでは……。と申しましても私がいなくても問題はないと思いますが。赤龍帝殿のお屋敷に幸運を少しでも運べれば幸いだと思い、馳せ参じたところもあります」

やはり、魔王の妻ってだけで大変なんだな。義姉さんの護衛だったら俺に声をかけてくれても良かったのに。

俺はそんなことを口にしたらシスコン疑惑をかけられそうなので止めておく。実際に俺はシスコンではない！

「炎駒、少しでも寄ってあげばいいのに」

リアスは少しは寂しげに言うが、炎駒は安心させるように笑う。

「ハハハ、そのお言葉だけで十分ですぞ。私もサーゼクス様の眷族として、役目の多い身。冥界に戻り、それを果たさなければなりません。それではこれにて。皆々様と再びお会いすることを願っております」

炎駒はそう言い残して紅い霧となって消えた。

「私が冥界にいた頃、炎駒は話し相手になつてくれていたの。よく背に乗せてもらったわ」

リアスは微笑みながら懐かしむように言う。俺がはぐれ討伐とかの任務に出ているときは他の奴に任せてたからな。

俺は微笑しながら、いまだに懐かしさに浸っているリアスの肩を軽く叩いてやる。リアスはビクツツと体を震わせると再び緊張の面持ちになった。

義姉さんがそれを見て頷くと、俺たちに訊いてくる。

「さて、あいさつは手短に。それではお家にあがらせてもらってもよろしいのかしら？」
こうして、俺たちは義姉さんをもてなすこととなった。それにしても、リアスは緊張しすぎだと思ふんだが――。

Extra life 02 魔王訪日

「そう、リアスとロイが迷惑をかけてなくて安心したわ」

「いえ、そんな、リアスお姉様のおかげで私はここにいられるのです」

「ロイ様にも、コカビエルの一件で助けていただきましたから」

アーシアと朱乃が義姉^{ねえ}さんと談笑している。

俺もいつもの通りに座ってはいるんだが、横のリアスの表情が相変わらず固い。

今この場には兵藤家にお世話になっている全員が揃っている。兵藤夫妻は外出中ではあるがな。

「リアスは少々わがままですから、眷族の皆さんにご迷惑をおかけしているのではないかと心配だったのです」

「そんなことはありませんわ。リアスは私たちの中心になって、皆の面倒をよく見ているのですよ」

朱乃が満面の笑みでフォローを入れる。朱乃とリアスと付き合いはそれなりに長いようで、多分俺と入れ替わりじやないだろうか。

「良いお友達、良い後輩に恵まれて、リアスは幸せ者ね」

義姉さんが微笑む。義姉さんが本当に嬉しいときに見せる笑顔なのを俺は見逃さなかつた。

俺は横で微笑していると、義姉さんが俺にも視線を向ける。

「ロイもあまり迷惑をかけていけないようです。あなたはどこか抜けていますから」

「抜けているって、あんまり自覚はないですけどね」

俺は苦笑しながら頬をかく。こつちに来てからはあんまり迷惑をかけていないとは思ってから、大丈夫だろう。

俺はなんて事を思ったが、義姉さんは視線を少し厳しくした。

「ロイ、聞きましたよ？あなた、タバコを吸っているそうですね？」

「え？ああ、はい。潜入任務に出ればらくした頃から……」

「タバコは体に悪いのよ？任務も終わったのだから、もっと体を大事にしてください」

「善処します」

俺は小さく溜め息を吐く。ロスヴァイセだけでなく、義姉さんからも注意されてしまった。これは、本格的に禁煙するべきか……。

義姉さんはそれを聞いて少し不満げであるが頷くと、その厳しい視線をリアスに向ける。

「リアスは……………あとは殿方かしらね」

その発言をした瞬間、室内の空気が様変わりする。先ほどまで和んでいたものが、一気に張り詰めたものになったのだ。

「ま、まさか……………そういうことなのですか……………う？」

先ほどまで微笑んでいたアーシアの表情が緊迫したものになり、

「……………そうよね、グレイフィア様が正式にここへいらつしやるということはそういうことも含まれるわよね」

朱乃の笑みがプレツシャー滲ませ始め、

「……………いつか来るとは思っていましたか」

基本的に無表情の小猫の表情も険しいものへと変わる。

ゼノヴィア、イリナ、一誠だけはわかっていないようで疑問符を浮かべている。

ロスヴァイセがいれば何かコメントすると思うが、あいつは買い物に行っている。あいつもこれから兵藤家にお世話になるのだ。

リアスが顔を真っ赤にしながら義姉さんに言う。

「お義姉様！その件でここへいらしたのですか？そ、それは自然に事を進めるといふことで私にすべてを任せてくださると思っていましたのに！」

「あら、リアス。私もお義母様もそのようなことは一言も口にしていなくてよ？一度、身

の上のことを破談させたのだから、私たちを安心させるのは次期当主たるあなたの務めではないのかしら？」

義姉さんの淡々とした口調にリアスも強くは出られない様子だ。義姉さんを下手に怒らせたくないと思っているのだろう。

破談になった身の上話つてのは少し聞いたな。確か、フェニックス家の三男——ライザー・フェニックスとの婚約を破談にさせたそうさ。一誠が式場に殴り込んで。

俺は特に気にしていないが、これはなかなか大きな事件であり、周囲からも『グレモリーのわがまま姫が婚約を破談させた』と陰口を叩かれているそうさ。

考えてみれば、俺とヴィンセントが義理の兄弟になつていたかもしれないのか。……それはそれで嫌だな。あいつとは、親友として付き合つていきたい。

俺は一人そんなことを考えていたのだが、義姉さんの言葉で意識を前に戻す。

「悪魔はただでさえ、出生率が危ぶまれています。特に名家の血を絶やすわけにはいかないのです。いずれ、あなたたちにも次世代の子の親になつてもらいたい。お義父様とお義母様、そして私とあのヒトの願いでもあるのよ」

義姉さんは真剣な顔で俺とリアスに言ってきた。俺としては時間の問題なのだが、細かくは話さないでおこう。

義姉さんは表情を緩和させて苦笑する。

「と言つても、私もあの一件に関わっているものね。あなたを助けてしまった。それ以前に——私とあの人もなんだかんで自由な恋愛をってしまったのだから。当時、立場で言えば、あなた以上に複雑だったわ」

「あの時は大変でしたね……………」

俺は懐かしむように漏らす。義姉さんを追ってきた連中を殺害して、義姉さんに殺氣向けられて、ヴィンセントに絡まれて、まあ、最後のひとは楽しかったけどな。

「ロイには迷惑をかけましたね」

「当時の任務は亡命支援とかが多かったですから、大丈夫でしたよ」

俺と義姉さんが二人で話していると、朱乃が反応した。

「ロイ様も関わっていたのですか!?!では、劇に登場するあの方は——」

「——ロイ先生が元になっていたんですね」

朱乃に続いて小猫も反応した。そういえば、あの話、劇になっていたな。——見たことはないが。

てか、当事者が見ても「だよな」としか思えないんだよな。

義姉さんは気恥ずかしそうにしながら咳払いをひとつして、表情を改める。

「私たちの一件もあるものだから、どうしてもあなたに想いを乗せてしまうの。私はあなたに立派な上級悪魔のレディになって欲しいのよ。次期当主としての自覚を強く

持つてもらいたいわ。そのためにいろいろと改善しないといけない部分が多分にあるわね。自分の――」

義姉さんはリアスへの説教を始めてしまった。このヒト、こうなると長いのは相変わらずだな。

リアスは言い返す隙を見つけないで、一方的に説教されている。次期当主として気品を大事にしているとはいえ、リアスもまだまだ子供、怒られるとシユンとしてしまうのだ。ここは昔から変わらないな。

俺は妹の変わらないところを見て苦笑していると、義姉さんが俺に視線を向ける。

「ロイもロイよ。あなたにも都合があるとはいえ、同世代で身を固めていないのはあなたを含めてごく僅かよ？もう少しあの子を大事にしなさい。時々、突然会いたい会いたいと叫ぶのだから」

「あはは、また発作ですか……………」

俺は再び苦笑してセラのことを思い出す。小さい頃はしばらく会えないだけで泣き出していたそうだが、それがまた出てきたようだ。

今の話を聞いたリアス以外の面々は首を傾げているが、俺は構わずに続け――、

「ロイロイロイロイッ！」

「くべらっ!?!」

俺は突如背後から体当たりをくらって前のめりに倒れた！机に頭から突っ込むのつて、結構痛いんだぜ？地味に左肩に衝撃が響いて痛いんだが……。

俺は体を起こそうとするが、なんか変な態勢になっているためか全然動けない。

そんな俺の耳に聞き馴染んだ声が届く。

「あはは、まるで昔を見ているようだよ」

「兄さん、見てないで助けてくれ」

俺は声だけで相手を判別して声をかけた。それと、

「セラも退いてくれ。それと、抱きつくなら正面から来てくれ」

「はい」

俺の背中に張り付いていたヒトにも退いてもらい、俺は姿勢を元に戻す。体を軽く飛ばし、左肩を一回回してみる。問題はなさそうだ。

俺はそれを確認して、今きたのであろう二人に少し怒気を込めながら訊く。

「で、兄さん、セラ。何しに来た」

俺の視線の先には兄さんとセラが並んで立っている。いつの間に入り込んだのか、話に集中しすぎて気がつかなかった。

兄さんは特に気にすることなく、手に持っていた袋から何かを取り出す。

「さて、挨拶は手短にしようか。ごきげんよう、皆。お土産を持ってきたんだ。私がプロ

デユースしたリアスの写真集、『スイッチ姫と呼ばれた娘〜リーアたん成長編〜』。幼少の頃から日本のハイスクールに入学するまでの成長記録なのだよ」

と言いながら写真集を配り始める兄さん。俺はそれを受け取って目を通していく。

俺が面倒を見ていた頃から、任務に出た後の中学生の頃など、様々な写真が貼られている。

当のリアスは顔を真っ赤にしながら写真集を回収していた。それはそれとして、

「セラは何で来たんだ？今日は会議があるとか言っていたと思っただが？」

「ここから参加するからいいのよ！私は最近不足している栄養分ロイを補給しに来たのよ」
☆

セラは横チヨキしながら何てことを言う。こいつ、大丈夫だろうか？

俺は溜め息を吐いて立ち上がり、後ろに誰もいないところに移動する。セラと面と向かいあい、両腕を広げる。

「よっしゃ、ドンとこい！」

「それじゃあ、改めて——」

セラはゆっくりと重心を落として足に力を入れていく。そして、

「ロイロイロイロイッ！」

「だっしやあつ！」

俺に飛びついてきた！俺は今度は踏ん張って衝撃に耐える！無事に耐えようと、セラの頭を撫でてやる。

「ロイの臭いロイの臭いロイの臭い——」

ぼそぼそと何かを言いながら鼻で肺一杯に空気を取り込んでいる。何か、最近会うたびにこれをするんだよな……。

こんなことをしているためか、兄さんと義姉さん、リアス以外の面々が驚愕の表情を浮かべている。

「あー、言つてなかったな。俺はセラの、現レヴィアタンの恋人なんだ」

『え？！』

それを知った面々は口をぽかんとさせながらリアスに視線を送る。

リアスは当然と言うように頷き、奥にいた兄さんは義姉さんに頬を引つ張られながらも頷いていた。その義姉さんもしつかりと頷いている。

『ええええええええええつ！』

この広い家に、衝撃（？）の事実を知った面々の叫びが響き渡った。

本当に、こいつらは元気だな。

Extra life 03 魔王集結

「……………で？」

じゃれあいを終えた俺は、義姉ねえさんと共に兄さんとセラに正座をさせていた。

義姉さんが二人を厳しく睨みながら言う。

「サーゼクス、今日は会議があつたはずでしょう？ 抜け出てきたのかしら？」

「ハハハ！ 僕もここから会議に参加しようと思つてね。僕とセラの映像をリアルタイムに送れば問題——」

スパンツ！

義姉さんが取り出したハリセンが兄さんの脳天を捉えた。だが、兄さんは特に気にすることなく続けた。

「——ないだろう？ 現にそろそろ……………」

兄さんが言うやいなや、テーブルの上に小さい魔方陣が二つ展開された。映像と一緒
に音声を飛ばすタイプのものだ。

その魔方陣から二人の男性の姿が映しだされた。一人は妖しい雰囲気雰囲気の男性。もう一人はやる気のなさそうな男性だ。

『サーゼクス、セラフォルー、聞こえているか?』

「ああ、聞こえている。問題ないよ、アジユカ」

兄さんが仕事モードの口調で返事をした。だが正座は崩さない、義姉さんが崩させない。

アジユカ様はそれが見えていたのか苦笑する。

『まったく、俺は会議室でやると言っただがな』

「すいません、自由な兄と恋人で……」

俺は頭を下げながらアジユカ様に謝る。義姉さんの手前、ここはしっかりやっておかなければいけない。

俺の謝罪を受けたアジユカ様は気にした様子もなく笑む。

『いいや、キミが気にすることではないさ。サーゼクスのそれはもはや癖のようなものだろう?』

「アジユカはよく知っているな」

義姉さんに頬を引っ張られながら言う兄さん。目にはうつつすらと涙が溜まっている。

アジユカ様はそれを見ながら再び苦笑すると、リアスや一誠たちに目を向けて挨拶をした。

『初めまして、アジユカ・ベルゼブブだ。諸々の技術開発の最高顧問をしている。よろし

く頼む』

アジユカ様の挨拶に、リアスたちは少し緊張気味になっていた。

アジユカ様は続ける。

『そして、この面倒くささそうにしているのがファルビウム・アスモデウス。軍事担当だ』
『……………どうも』

見た目のやる気のなさと同じように覇気のない声だ。俺も面倒は嫌いだ、ここまでではない。

『ごきげんよう、ベルゼブブ様、アスモデウス様』

俺たちも改めて挨拶をした。

「ちよつと、ファルビー！リアスちゃんの眷族の皆さんとロイが相手なんだから、きちんと挨拶しないとダメなのよ！」

後ろからセラの声が飛ぶ。ノリが軽いのにそこんところ厳しいからな。自分には甘いの。本当、自分には甘いのに……………。

大事なことから二回言わせてもらったが、ファルビウム様は相変わらずこんな感じなんだな。

「ファルビウム様は眷族探しにやる気を出しすぎて燃え尽きた。ようは生き急ぎすぎた悪魔の典型的な例だ。おまえはそうならないように気を付けろよ？俺も気を付けてる

からな」

俺は少し心配そうにしている一誠に小声でそう伝えた。一誠は小さく頷きながら苦笑する。

「それと、あんな感じだが、セラは外交担当だったりする」

「ブイ！各国への交渉は私に任せてね☆」

俺の言葉が聞こえていたのか、セラは横チョコキしながら言ってきた。かわいいのはいが、こいつ、時々ぶつ飛んだことを言い出すからな、心配だ。

まあ、ほとんど兄さんが一人で頑張ってくれているから、今のところは問題ないがな。『それでサーゼクス。何が起こるんだ？』

アジュカ様が興味深そうに兄さんに訊く。兄さんは微笑みながら立ち上がり、リアスと一誠の前に少し足を引きずるように移動した。そして口を開く。

「実はリアスにグレモリー家の例の儀式をあの遺跡で受けてもらおうと思っ
ていてね。グレイフィアがここに訪れたのもそれが目的でもある」

「『『おおう』』」

俺とセラ、アジュカ様、ファルビウム様が同時に笑んだ。義姉さんが来ることは聞いていたが、なるほど、あれをやることを伝えに来たんだな。

勝手に安心していた俺たちに、リアスは不満そうに片眉を上げる。

「ルシファー様、それはどうということなのでしょうか？ 遺跡とは先祖代々重要としてきたあの場所でしょうか？」

リアスの問いに兄さんは頷く。

「うむ。グレモリーの者はある程度の年に達するとその遺跡にて、通過儀礼をおこなうのだ。——親愛なる者と共に。意味はわかるね、リアス？」

その言葉を受けたリアスは顔を真っ赤にしていた。セラはむしろドンとこい！と言わんばかりだったな。

「あの遺跡、懐かしいな。兄さんたち以来か？」

「そうだね。ロイとセラフォールが先だったから」

「本当。あの時は、久しぶりにお義母様を怖いと思ったわ……………」

「それは同感ね……………」

俺たち経験者組が懐かしんでいると、アジュカ様が言う。

『確かに、それは会議より重大だな』

『おめでとー、先に祝っておくよ』

ファルビウム様はやる気のない声援を送る。この人、もつとシャキツとしてもらいたいな。

何事かよくわかっていない一誠と、顔を真っ赤にしているリアスに、義姉さんが改め

て言う。

「そういうことなのです、リアス。これが言付けなのよ。私たちを安心させて欲しいというのは儀式をおこなってもらうことなのです。拒否は認めません。それぐらいの安堵を私たちに与えてくれないといけないわ。——うちの人とセラフオールが余計な方々まで引き寄せてしまったけれど。サーゼクス、わかつているわよね？ 帰ったら、再教育ですよ？」

「ついでにセラもお願ひします。ロイ分？とかいうのは後で補給させておきますので」「わかりました。では、サーゼクス、セラフォル、行くわよ？」

義姉さんに襟首を捕まれて退場していく二人。しばらくは大丈夫だろう。

「まあ、なんだ。そういうことだから、リアス、一誠、頑張れよ！」

「お、俺が参加するんですか？ その大事そうな儀式に？」

「ああ。だって、おまえ。リアスの親愛——」

「お兄様！ 言わないでください！」

大事なことを伝えようとしたらリアスに口を塞がれる。まあ、これはリアス自身が伝えることだな。悪いことをした。

それにしても、義姉さんだけじゃなく魔王様全員が来たり、リアスに儀式の通達をしたり、今日は退屈しないな、本当。

俺が溜め息を吐くと、

「見てください！細かな生活用品は全部百均で揃えたんです！日本には百円均一のお店があつて、素晴らしい限りです！安いって最高ですね！」

魔王様全員が去った矢先に買い物を終えたロスヴァイセが帰つて来た。買い物は百均で済ませたようだ。まあ、節約は大事だからな。

Extra life 04 我らサタレンジャー!

リアスと一誠の儀式当日。

当事者である二人よりも前に俺は会場となる遺跡に来ていた。正確には、俺だけではなく義姉ねえさんと四大魔王様全員の計六人だがな。

と、冷静に言ってはみたものの、どうしてこうなったのやら……………。

「さて、みんなに来てもらったのには理由わけがある」

兄さんが真面目な顔でそう言うが、兄さんのことだ、変なことを考えているに違いない。

俺が半目になりながら兄さんを見る。義姉さんも溜め息を吐きながら言葉の続きを待っている。

「今回、みんなには儀式の監督役を任せたいんだ」

「……………それだけか?」

俺は意外に思いながら訊く。兄さんは頷くが、イタズラっぽい笑みを浮かべると何かを取り出した。

見た感じだと、戦隊もののコスプレスーツのように思えるが、まさか——!

「まさか、それを着るとか言わないよな!？」

「うん、ロイは察しが良くて助かるよ」

マジかよ! いい年こいてコスプレしなきゃならないのか!? セラには言えないが、恥ずかしくないのか!？」

俺はその言葉を飲み込んで溜め息を吐いた。義姉さんは少し顔を赤くして羞恥心と戦っているようだ。

「ロイ、たまにはいいじゃない☆こういうこともしておくべきよ☆」

「ああ、ロイくんには厳しい任務を頼んでばかりだ。たまには息抜きをしたらどうだ?」「俺はどうでもいいけどねー」

ファルビウム様以外からは勧められたが、息抜きか……。

俺は再び溜め息を吐き、兄さんに言う。

「……………了解です。義姉さんはどうしますか?」

「……………わ、わかりました。私だけがやらないわけにはいきません」

「よし、決まりだ! みんな、受け取ってくれ!」

俺と義姉さんが折れたことを確認した兄さんはコスプレスーツを配り始める。

赤が兄さん、青がアジユカ様、緑がファルビウム様、ピンクがセラ、黄が義姉さん、そ

して――、

「俺は黒か。好きな色ではあるが……」

「そう言うと思ってるね。黒にしたんだ」

笑顔の兄さんがそう言う。俺のことをよく知っているな、まったく。

それはそれとして、

「これを着てリアスたちの前に出るのか？ さすがに、引かれると思うぞ」

「だ、大丈夫だ！ きつとリアスは気づかない！」

兄さんは強がるように言う。いくらリアスでも、気づかと思う、てか気づいてくれな
いとそれはそれで困る。

コスプレスーツを受け取った俺たちに兄さんは言う。

「さて、早速着替えてくれ。これから準備をしなければならない」

「準備って、着替える前でもいいだろ？」

「いいや、着替えてからでないとできないものなんだ」

「……………よくわからないが、わかった」

そんな訳で、男女に別れて着替えタイムとなった。

着替えを終えた俺たちは遺跡の入り口を前にして兄さんの前に並ぶ。俺たちの前に立つ兄さんはノリノリで言う。

「さて、準備といたったけど、これからやることは——」

言葉を切った兄さんは謎のポーズを決める！

「みんなにはポーズを覚えてもらう！」

「……………はあ……………」

俺と義姉さんは何度目かの溜め息を吐いた。俺と義姉さん以外は存外ノリノリそう
だ。マスクで表情はわからないがな。

「ミリキヤスと一緒に考えたんだ！さあ、しっかり覚えてくれよ！」

「あの子ったら……………」

謎のハイテンションの兄さんと、息子が関わっていると知って額を押さえる義姉さ
ん。きつと青筋が立っててキレているか、顔を真っ赤にして恥ずがっているのだろう。

「ま、甥っ子が考えてくれたんならやるしかないか。で、俺のポーズはどんなんだ？」

「ふふふ。では、いくぞ！」

……………まできたら吹っ切ろう。俺の黒歴史とかになるだろうが、今は考えたら駄目だ
な。

俺とセラの時とか、兄さんと義姉さんの時とかは真面目な感じだったのに、母さんた

ちは何を考えているのやら――。

俺――兵藤一誠と部長が転移してきたのは、グレモリー領の山岳地帯にある遺跡だった。格好はいつもの学園の制服だ。

ここに来たのは俺と部長だけ、他のみんなは留守番だ。ロイ先生だけは今日一日見えないけど、どこかで俺たちを見ているのかもしれない。

「事を急に進めて、この子に嫌われたらどうするのよ………」

俺の隣で深い溜め息を吐く部長。何て声をかければいいのか分からないが、サーゼクス様は通過儀礼っておっしゃっていたし、何かさせられるのかな？

「部長、大丈夫です。俺がついていきますから、大船に――」

「とうー！」

俺がカツコつけようとした時、謎の声が耳に届く！声の主を探して見上げてみると――

空高くで何かキラリと光った。あれは、人か？まさか、敵襲!?

俺は部長の盾になるように前にでて籠手を出現させる。それと同時にその誰かが落下してきた！何か、戦隊ものの衣装に身を包んでいるんですけど!?!しかも六人！

そいつらは華麗に着地すると、ポーズを決める！

ドオオオオオオオオオンッ！

彼らの後ろで謎の派手な爆発とカラフルな煙が上がる！妙にこった演出だな！

「な、何者?」

部長も当然のように警戒していた。いや、いきなり現れた謎の集団は誰だって警戒しますよ！

真ん中の赤い衣装の人がキレキレの動きでポーズを決め、叫ぶ！

「我こそは謎の魔王——」

スパン！

黄色の人がハリセンで赤い人を殴った。……って、今の声は！

「すまんすまん。改めて！我らは魔王戦隊サタレンジャー！私はリーダーのサタンレッツ

ドー！」

「同じくサタンブルーー！」

「めんどいけど、サタングリーン」

「レヴィア——」

スパンツ!

何かを言いかけたピンクの人を黒い人がハリセンで殴った!黄色の人よりもいい音
しましたけど!?

「サ、サタンピンクよ☆」

ピンクの人がちよつと痛そうに頭を押さえながらポーズを決める。だ、大丈夫だろう
か……………。

「……………はあ、えーと、サタンイエローです」

「サタンブラック!」

黒い人のポーズは戦隊じゃなくて仮面○イダーブラツ○です!間違えてますよ多分
!

それはそれとして、この人たちって、明らかに四大魔王様じゃねえかつ!何やってい
るんですかこの人たち!

「まったく。ピンク、ブラック、ポーズは合わせてくれ」

「何よ!こつちの方がかわいいわよ!」

「俺はやりたいたいようにやるだけだ」

な、何か今にもブラックが裏切りそうなんですけど!?!いや、多分ロイ先生だから大丈夫

「それで、試練とは？」

部長は何事もなく話を戻す。部長も部長でずれているような気がします……………。

「ぶ、部長、あれを見なかつたんですか？」

「落ち着いてイツセー。悪霊は倒すべきだわ」

「それはそうですけど！あー、もういいです！」

わかりましたよ！このノリについていけばいいんでしょ!?もう、魔王の皆様ノリすぎですよ！まあ、それはロイ先生にも言えることですけどね！

「我々は各試練を受け持つ！グレモリーを受け継ぐ若き二人よ！見事、三つの試練を超えてみせるのだ！それでは、我々は一足先に各セクションで待っているぞ！フハハハハハ！」

レッドが素早く遺跡に入っていく、それに残りの五人が続いていく！

残された俺と部長は何とも言えない空気になってしまった。とりあえず、その先には魔王様が待っているんですね。

「さて、イツセー！行きましよう！私とイツセーがどれだけ深い仲か彼らに見せてあげましよう！」

何だかんだで気合いのスイッチが入ったようだ。俺も頑張らないと！

Extra life 05 儀式

俺——サタンブラックとサタンピンクは第一の試練を行う部屋でリアスたちを待ち構えていた。

「遅いな。まあ、急いでいるわけでもないが」

「のんびり来てくれてもいいじゃない☆リアスちゃんも緊張しているのよ☆」

上機嫌そうなサタンピンクが言う。確かに急いでやることでもないし、覚悟を決めてからのんびりと来てくれもいいか。

俺は頷くと、気配を感じて部屋の入り口に目を向ける。

—

俺——兵藤一誠と部長は開けた部屋に到着した。

そこにはピンクとブラックの姿が！と言っても、レヴィアタン様とロイ先生だよね。

ブラックは俺たちに視線を向けるとぼそりと言う。

「遅かったじゃないか……………」

「いや、何でそんなに弱々しい声なんですか？」

「細かいことはいいのよ☆さあ、試練よ試練！」

ピンクはブラックを適当に流して話を続ける。ロイ先生もオフの時はふざけるんだな。普段は真面目だし、長年任務に行っていたからなのかな？

それはそれとして、いったい何をするんだ？ロイ先生と戦うなんてことはないですね？

俺が緊張していると、ブラックが指をならして何かを出現させる。あれは、音響装置？

「さて、早速だが二人にはダンスをしてもらおう。抜群の相性を見せてみる！」

「二人とも、頑張るのよ☆」

二人は言いきると同時に音響装置のスイッチを押し、優雅な音楽が流れ始めた！ダンス!?!本当にいきなりですね！

「イツセー、いくわよ！」

「え、あ、はい！」

部長が差し出した手を取り、曲に合わせて踊り始める。

よくわからないけど、やるしかない！

「存外やるものだな。母さんの教育が行き届いている」

「当たり前よ。夏休みの頃からやっていたらしいから」

俺とピンクは踊る一誠とリアスを見ながらそう漏らす。

あの甘えん坊な妹が、想い人とこの儀式をやっているとすると、何かくるものがあるな。俺も年か……………。

俺がそんなことを思っているうちに音楽が終わり、リアスと一誠は終わりの挨拶を交わす。目立ったミスもなし、大丈夫そうだな。

俺とピンクは二人に拍手を送る。

「予想通り、二人とも息ぴったりね☆」

「ああ、この調子なら大丈夫そうだ。先に行け二人とも。また後で会おう」

俺とピンクの合格の言葉を受けた二人は、ホッとしたように笑うと第二の試練に向か

う。この先はテーブルマナーと筆記問題だったな。リアスはともかく一誠は大丈夫だろうか……………」

「ふう、安心ね」

「だな」

俺たちはマスクを外して息を吐く。本当、この格好はキツイものがある。

俺は頭をかきながらセラに言う。

「まったく、見ていて思ったが、時間が流れるのは早いもんだな」

「本当ね。私たちがやったのはリアスちゃんが生まれるよりもずっと前だもの、そう思っただけよ」

「セラ……………」

「何かしら?」

俺はセラを正面に捉え、少し照れ臭く思いながら口を開く。

「俺の想いはずっと変わらない。俺はおまえが好きだ」

「——ッ!?!」

セラは驚きながら顔を真っ赤にして勢いよく俺に背中を向ける。両手を頬にやりながら体をモジモジさせ始めた。

俺も頬をかいてはつが悪そうに言う。

「俺が言いたかったことはこれだけだ。悪いな、驚かしちまって」

「だ、大丈夫よ。それよりもロイ」

「なんだ？」

俺が訊くとセラはこちらを振り向くと黙って目をつむる。これは、まさか……………。

「……………」

俺はゆつくりと息を吐き、セラの頬に右手を添える。そして俺も目をつむりながら――

「――」

チュ。

優しく口付けをする。俺からやるなんていつ以来だろうか。基本的にセラの方からぐいぐいくるからな。

ゆつくりと唇を離して目を開ける。

「ふふっ」

「何か、照れ臭いな」

二人して笑いながら見つめあう。するといきなりセラが抱きついてくる！

離さないと言わんばかりにギュツと力を入れてきているが、痛いわけでもなく、むしろ優しさを感じる。

俺はセラを抱き締め返し、優しく頭を撫でてやる。もうしばらくこの空気を満喫して

「いたいが、今は――」

「さて、そろそろ行くとするか。今は第三の試練に行つた頃だろ」

「むう、もう少しこうしていたいけど、今日の主役はリアスちゃんたちだものね。今は我慢するわ」

「よっしゃ、そんじゃ行くか」

俺とセラは遺跡の奥地を目指して転移する。リアスたちはどうしているかな？

――

「そんなことが……」

「ええ」

俺、一誠は部長と共に第二の試練、テーブルマナーを終わってからサーゼクス様とグレイフィアさんの馴れ初めを聞いていた。一通り話してもらい、次の話題に。

「もうひとつ訊きたいことがあるんですけど」

「ロイお兄様とレヴィアアタン様について、かしら？」

「はい」

俺はロイさんとレヴィアタン様の関係を先日まで知らなかった。いや、あの様子だと朱乃さんたちも知らされていなかったのかもしれない。

「二人は幼なじみで、幼い頃からよく会っていたそうよ。けれど、その当時はロイお兄様はあまりレヴィアタン様を、当時はセラフォル・シトリー様だけれど、あまり好きではなかったと言っていたわ。レヴィアタン様のテンションは幼い頃からだったそうだから」

レヴィアタン様、昔からあんな感じだったのか。それが何で急に恋人に？

俺の疑問が顔に出ていたのか、部長は続ける。

「二人の仲が進展したのは三勢力の戦争の時。ロイお兄様がコカビエルと戦った後だそうよ」

「その時って、レヴィアタン様もその場にいたとかですか？」

「ええ、正確に言うと、ロイお兄様はレヴィアタン様を、当時のセラフォル・シトリー様を助けるためにコカビエルと戦ったそうなの」

「そうなんですか!?!ロイ先生って、意外と熱い男だったんですか!?!」

「それはわからないけれど、その戦いでロイお兄様は右目を潰されてしまったのよ。左肩は支障のない程度に治ったそうだけれど」

右目を犠牲にしても好きなヒトを助けたって、それはそれで劇になっても良かったんじゃないのだろうか。

まあ、ロイ先生が拒否したのかもかもしれないか。あのヒトのことだし。

俺は改めてロイ先生のすごさを感じたが、逆にこうも思った。

「現魔王様の恋人を敵勢力に送り込むって、なかなかすごいこと考えますね」

「ロイお兄様は昔は新魔王派のエージェントとして仕事をしていたの。ある意味で言えば、一番旧魔王派を知っていたのがロイお兄様だったのかもしいわ」

それでもかなりの無茶をするんだな。まあ、当時は状況が状況だったのかもしいわけど。

すると、一通り話し終えた部長が少し落ち込むような病になった。

「私は、お兄様方とお義姉様^{ねえ}を敬愛し、尊敬しているわ。けれどね、同時に感じてしまうの。魔王として現悪魔を引っ張るサーゼクスお兄様と、それと支えるグレイフィアお義姉様。そして、影ながら誰にも知られることなく現悪魔政府を支えたロイお兄様。そんな三人に比べて、私はダメな妹なのではないか？ っ。本当に次期当主でいいのかとさえ思ってしまったこともあるわ」

部長はいつもその三人と自分を比べていたのか。上の皆さんが様々な形で活躍していくなかで、劣等感を抱いてしまったのかもしいわ。

誰だって悩みはある。いつも優雅に振る舞っても、部長だって女の子なんだ。なんでそれを知ってちながら悩みを抱えていることに気づけなかったんだ。

俺は部長の前に回り込んで目をあわせながら言う。

「部長の悩み事……俺にはどうてい想像もつかないものだと思います。けど、俺は部長がダメだって思ったことは一度もありません。部長がいなかったら、俺はずっと前に墮天使に殺されていて、こんな最高の日々を送ることなんてできなかつたです。部長は俺にとつて最高の女性です。俺、一生ついていきますから、一緒にいろんなものを超えていきましょう！」

これか俺にできる精一杯だ。激励とは、呼べないと思う。でも、少しでも力になれたなら、俺はそれでいい。

部長は先程と違い、優しい笑みを浮かべる。

「イツセー、ありがとう。私、あなたがいてくれるなら、突き進んでいけると感じてしまいわ。超えていきましょう。——共に、これからも、ずっと」

部長が見せてくれる笑顔が俺の力になります！部長が笑ってくれるから俺は頑張れるんです！

「……けれど、まだ部長なのね……」

「何か言いました？」

「いいえ、何でもないわ。行きましょう！次が最後よ！」

「はい！」

進む部長に俺は続く。部長が何を言ったのかはわからなかったけれど、ここからも頑張らないと！

——

「兄さん、少しいいか？」

「どうかしたかい？」

「『あれ』だが、俺にやらせてくれないか？」

「急にどうしたんだい？」

「俺は、兄さんたちほど一誠のことを知れてないからな。妹を任せられるのか試したい。だから——」

「——力をぶつけてみたい。と」

「ああ。いいか？」

「任せるよ。どちらにしろう、僕かキミのどちらかがやることだ。今回はキミに譲るさ」
「悪いな」

「気にしないでくれ。だが、加減はしてくれよ？ 鎧があるから大丈夫だとは思うが、怪我をさせたら大変だからね」
「わかってるさ」

Extra life 06 ブラックVS赤龍帝

俺——兵藤一誠と部長は第三の試練をクリアして遺跡の奥を目指していた。

まっすぐ通路を進んでいくと、前方から光が——。そこから出ていくと、天井がなくなり、冥界特有の紫色の空が広がっていた。

これって、コロシウムってやつかな？円形の建造物で見物席と武舞台もある。俺と部長は見物席の一角から出てきたようだ。

武舞台の中央には、腕を組んだブラックが仁王立ちしている。こちらに目を向けると、腕を解いて俺たちを手招きしてきた。

俺と部長は頷きあつて武舞台に降りていく。

「二人とも、よくやってくれた。だが、兵藤一誠、おまえにはもうひとつ試練がある」
ブラックはそう言うのと、両手に紅の直刀を作り出した！

「——この俺を越えてみろッ！」

ブラックはそう言いながらさらにオーラを解放する！この人、マジで俺のことを殺そうとしていないか!?

俺は驚愕しながらも助けを乞うように部長に目を向けると、

「ふふふ！サタンブラック！あなたが何者か知らないけれど、私のイツセーは赤龍帝よ！悪神ロキをも倒したドラゴンを相手にするなんていい覚悟だわ」

部長！この人、ロイ先生です！確かにロキは倒しましたけど、目の前のこの人と眷族のみんながいたから倒せたんです！この人と単独で戦うって、なんの処刑宣告ですか！？「相手は赤龍帝。それがわかっていると、存外怯えよりも高揚感の方が大きいな。これはあの時以来か……」

あの時って多分、いや絶対にコカピエルとの戦いのこと言ってますよね！？鎧を着ていればともかく、この人それまでに俺を倒しに来るでしょ!?

俺はこのの成り行きに慌てながらも周囲を見渡す。よく見ると、見物席の一角にサタレンジャーが陣取っていた。俺が助けを求めようとすると――、

「よそ見とは、舐められたものだな」

「――ッ！」

俺は放たれた殺気に反応してその場を飛び退く！その一瞬あとに俺のいた場所に深い切り傷が生まれていた！

見ると、ブラックが直刀を振り下ろしたような態勢になっている。オーラを斬撃みたくに飛ばしてきたのか!?

「どうした、鎧を纏わないと死ぬぞ?」

ロイさんはそう言いながら連続で斬撃を飛ばしてくる！三日月のような滅びの塊は、円を描くように高速回転しながらこちらに飛んでくる！

「ぎやああああああつー！」

俺は叫びながら逃げ回る！

こうなったらやるだけやってやるよ！ドライグ！

『待ちくたびれたぞ！』

俺は鎧を纏うためのカウントをスタートする！それに構わず斬撃を飛ばそうとするが、その時――、

「ブラック！ストップだ！」

「――ッ！」

レッドが叫び、ブラックがとつさにオーラを散らすとレッドに目を向ける。今度はいつたいたんだ？

「ブラック、知らないのか？こういう時は、攻撃しないのがお約束だ」

「……………そ、そうなのか？」

ブラックは肩をすくめながら俺に視線を戻し、大きく息を吐いた。一気に殺気が薄まったような気がする。とりあえず、待つてくれるのか？

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』

音声と共に俺を赤いオーラが鎧の形になっていく！

ブリストッド・ギア・スケイルメイル
「赤龍帝の鎧！サタンブラック！容赦はしませんよ！」

「そうこなくちや面白くない！」

かくして、俺はロイ先生と戦うことになってしまったのだった。

戦闘開始から十分程。

「はあ……………はあ……………」

俺は息を切らしていた。

「楽に終われるか。願ったりだ」

まだまだ元気そうなブラックがぼそりと漏らす。

あの人の本気ってどれくらいなんだ!?殴りに行っても全部読まれているみたい
に避けられちゃうし、ドラゴンショットは全部斬られちゃうし、どうやって攻めれば
いいんだ!?

ロイさんの滅びはサーゼクス様や部長より弱いって聞いたけど、本当なのかも
疑わしい!防いでくれると思った鎧がすっかり斬れたよ!加減してくれているのか
肉体には

届かなかったけどな。

だいぶ強くなったと思っていたけど、まだまだってことか。

「気張りなさい、今の段階でロイくんここまで戦えるんだ、将来有望な証拠だよ」

「……………ZZZZZZZZ……………」

「頑張れイツセーくん！応援しているよ！」

「ブラックー！頑張ってー！」

ベルゼブブ様とサーゼクス様は応援してくれて、アスモデウス様は爆睡、レヴィアタ様は当然のようにブラックを応援していた。

俺は息を整え、飛び出こんだ勢いで右ストレートを――、

「一気に接近して右ストレートってところか？分かりやすいな」

――ッ!?

よ、読まれてる!?!表情から読むのは兎があるから無理なはず、適当なこと言っただけを混乱させようとしているのか？

だったら、接近した勢いのまま蹴りを――、

「今度は蹴りか。少しは学んだらどうだ？」

……………適当じゃない。あの人、完璧に読んできている。けど、どうやって……………?!

「――まさか!」

「何か分かったんですか!？」

あごに手をやって何かを考えていた部長が何かに気づいたようだ! 逆転できなくても、せめて一矢報いたい!

俺が期待していると、部長の口から出て言葉は――、

「あなた、バアル家の者ね!」

だった! そういえばブラックの正体に気づいていなかったんです! けど、それも間違えてますよ! いや、もしかしたら、無意識のうちにお兄様方がコスプレをしているという考えを捨てているのかもしれない。

すると、今度はレッドの声が届く。

「イツセーくん! そんな調子でいいのかい! 彼を倒すぐらいの気概を見せてくれないと、リアスを任せられないな!」

ごもつともですけど、ロイ先生を倒せるのつてあなたたちぐらいですよね! 今の俺には少し荷が重いです!

こうなったら、タンニーンのおっさん! 使わせてもらうぜ!

俺は大きく息を吸い――、

「お? 今度は何をするつもりだ」

そんなに見たいなら見せてやるよ!

腹の中に小さな火種を作り、それを一気に増加させて一気に火炎として――、
「火を吐くか？まあ、ドラゴンなら当然か」

読まれているけど無視して発射！俺の口から大火力の炎をプレスをブラック目掛けて吐き出した！

名付けて『炎の息』フレイムレックス！まんま過ぎるかな？

名前は置いておいて、これなら広範囲を一気に攻められる！これならどうだ！

「やれやれ、舐められたもんだな……………」

ブラックは左手の直刀を消し、右手の直刀に魔力を込めていく。直刀がみるみる大きくなつていき、ブラックの身の丈ほどの大きさになる！いわゆる大剣つてやつか！

ブラックはそれを横風ぎに振り抜いた！風圧と共に滅びのオーラが広範囲に放たれ、一瞬にして炎を相殺された！

ブラックは大剣を直刀に戻しながら右肩に担ぐ。

『相棒、決めるなら一撃に全てを懸ける。まったく、あの時同様、未恐ろしい奴だ』
あの時つて、おまえ、ロイ先生を知ってるのかよ？

『ああ、俺とアルビオンが三勢力と戦ったとき、危うく目を潰されるところだった』
ロイ先生、昔から無茶するんですね。じゃない、どうすれば勝てるんだよ!!

『厳しいな。まったく、こいつよりも強いのが少なくとも四人とは、恐れ入る。だが、逆

に言えば奴はまだ弱い方ということだな』

あれで弱い方ってのは聞きたくなかったかな！

『奴の滅びは現ルシファーやリアス嬢ほど強くはない。だが、その分を他のもので補っているようだ。反射神経や直感などは二人よりも上かもしれん。あとは向こうが接近戦主体なら、こちらは遠距離から攻めるしかないが——』

俺も遠距離戦はできないからな。あんまり意味ないか……。どうすればいい……………！

悩む俺にイエローが手招きをしてきていた。な、何事ですか？

見てみると、イエローの隣には部長のお姿が。

「呼ばれているぞ、さっさと行け」

「え？あ、はい」

兜を収納しながらグレイフィアさんに駆け寄る。

「なんででしょうか？」

「一誠さん。リアスのお乳を触りなさい」

——ッ！

イエローの一言に俺は鼻血を吹き出し、部長の顔が真っ赤になった！そりゃそうなりますっつて！

「……………やりたきややれ。容赦はせん」

明らかな怒気を含んだブラックの言葉が俺に届く。ロイ先生、マジでキレてませんか!?

不安が顔に出ていたのか、グレイファイアさんが言う。

「大丈夫です。何かあれば、私が止めますから」

グレイファイアさんが簡易試着室を出現させて俺と部長を放り込んだ!

—

俺——ブラックの前で一誠とリアスが簡易試着室に投げ込まれる。

俺は黙ってそれを見ながら直刀に魔力を込めていく。次の一撃、容赦はせん。

俺がイラつきながら待っていると——、

「きたきたきたきたきたきたきた!」

一誠の叫びと赤い閃光が簡易試着室から漏れ始める。そして一誠が飛び出してきた!

Extra life 07 儀式終了

「……………あれ？」

気がつくと、俺——兵藤一誠の目の前には部長の顔があつた。後頭部には柔らかい感覚、これは、膝枕をされているようだ。

「大丈夫？怪我はしていないようだけれど、イツセーったら、あのあとに気を失つてしまったのよ？」

「だ、大丈夫です！」

俺は体を起こして回りを見渡す。サタレンジャーは見当たらないな。

「彼らなら消えたわ。突然ね」

俺の様子を見ていた部長が言う。そうか、倒したつてわけじゃなさそうだ。

『相棒、あの男、先程のドラゴンショットを斬つてみせたぞ。あれで一介の悪魔とは、恐れ入る。だが、ま、あの男とあそこまでやれたんだ、おまえも成長したということだな』

あれを斬つたのか……………。ロイ先生つて、本当に何者なんだ？素直に剣を使った方が強いのでは……………。

「二人ともよくやったね」

サーゼクス様の声だ。そちらに目を向けると、いつものサーゼクス様とメイド服のグレイフィアさん、頬が真っ赤に腫れているロイ先生が現れた。

「ロイお兄様、何があつたのですか？」

「いや、ちよつとやり過ぎた」

「いや、ちよつとやり過ぎた」

俺は頬を撫でながらそう言った。

一誠のドラゴンショットを斬つたまではいいが、その後無意識のうちに一誠本人も斬りに行ってしまった。

そこにすつ飛んできた義姉ねえさんに殴り飛ばされ、そのまま回収された。

まったく、これだから加減は苦手だ。

俺は溜め息を吐きながらリアスと一誠に言う。

「さて、兄さんから結果の報告をしてもらおう。二度は言わないと思うからしつかり聞け

よ？」

俺の言葉を受けた二人は姿勢を正して兄さんと向き合う。そして、兄さんは二人に近づいて優しく肩に手を置いた。

「よくやった。二人とも合格だ」

その一言を受けた二人は顔を見合わせて笑った。

「これで旦那様と奥方様もご安心されることでしょう」

義姉さんがそう言う。素早く切り替えてメイドモードつてわけだ。

「一誠、悪いな。いきなり儀式に巻き込まれて」

「い、いえ！そ、そんな！結果的に——ッ！」

「結果的に——なんだ？」

俺は出来るだけの笑みを顔に貼り付けながら一誠に続きを訊く。一誠は顔を青くしながら首を何度も横に振り口を開く。

「いえ、何でもありません！」

「……………それはそれとして、リアスを頼むぞ」

「はいー」

俺が真剣に訊くと、一誠も真剣な表情で返してきた。なら、大丈夫だろう。

「おめでとう、リアスちゃん！」

横から現れたセラがリアスに飛びつき、そのまま頭を撫で回す。リアスは顔を赤くしながらも嬉しそうだ。セラも嬉しそうだしな。

「……あー、やっと終わった」

ファルビウム様が溜め息混じりに現れる。仕事をしてきているのなら、とりあえずはいいか。

次に現れたのはアジユカ様だ。一誠の左腕の籠手をマジマジと見つめている。

「少し、キミの悪魔の駒を見てもいいかな？」

アジユカ様は返答を待たずに小さな魔方陣を展開、一誠の胸の前でそれを動かしている。く。

「なるほど、おもしろいことをしようとしているじゃないか。神セイクリッド・ギア 器の中に潜っているね。勧めたのはアザゼルか」

楽しそうに笑っている。ちょっと見ただけでわかるって流石だな。

「これはおもしろい——」

その後も、アジユカ様の小難しい話がしばらく続いた。すると、

「ゲームの時には発動しないが、実戦向きに駒にひと工夫してみよう。ゲームでも使えたらおもしろいが、そこは対戦相手次第だな。——身内が迷惑をかけたからね、これぐらいの礼はさせてくれ」

「い、いいんですか!？」

身内のつてのは、ディオドラの野郎のことだろう。あいつ、牢獄でうなされているぜ、多分。

そんなことを思ったが、俺は疑問を口にしてみる。

「俺には入っていませんが、駒の隠し要素についていくつあるんですか?」

「眷族を持たないキミからの質問とは、だが、答えは教えられないな。隠し要素はユーザーが見つけてこそだろう?」

「確かに、そうですね?」

俺は首をかしげながらもそう言った。この人の考えていることを全て把握するのは不可能だ。

俺の質問に続いて、一誠が俺に質問してくる。

「ロイ先生。あのブラックはどうやって俺の動きを読んだんですかね?」

「ん? ああ、あれか。簡単なことだ。鎧装着型の禁^{パランス・ブレイカー}手はオーラが出過ぎる。それに注意してやれば、ある程度動きを読める」

俺の言葉に一誠は口の端を引きつかせた。衝撃の事実だったのかもしれない。

俺は言葉を続ける。

「片目がないからな、そのおかげでオーラの流れに敏感なのかもしれん」

一誠は頷きながら溜め息を吐いた。そんなことをしているうちにアジユカ様の作業も終了した様子だ。

「さて、あくまで俺は切っ掛けをやっただけだ。これからどう成長するかはキミ次第だな」

ようするに、頑張れと。まあ、何かあったら付き合ってやりますか。

「さて、帰るか。俺はある『ゲーム』を運営していてね。長い時間抜けていると支障が出たりする」

「アジユカ、例の一件か？それとも趣味か？」

兄さんの問いにアジユカ様は口の端を吊り上げて笑った。

「趣味は大事にしたいものだ。そうだ、赤龍帝くん、ロイ・グレモリーくん。キミたちも参加してみないか？なーに、ケータイひとつで参加可能だ」

何か、嫌な予感がするから、

「遠慮しておきます」

俺と一誠は異口同音で返した。それを受けたアジユカ様は苦笑する。

「それは残念だ。また会える日を楽しみにするよ。——革新したまえ」

アジユカ様は転移魔方陣を一瞬にして展開するとそのまま消える。ファルビウム様もいつの間にか消えていたようだ。

「さて、屋敷でパーティーを催す予定だ。リアスの眷属たちもすでに呼び寄せてあるんだよ」

相変わらず、パーティーとなると仕事が早いな。

「そんじゃ、俺は一足先に屋敷に——」

「行く前にロイ分を補給なのよ☆」

「またかよ!？」

俺はセラに飛び付かれ、再び頬擦りされる。もう慣れたが、人目は気にして欲しいもんだ。

俺はその態勢で転移魔方陣を展開した。

「そ、そんじゃ、待ってるからな!」

「後でね〜」

俺とセラは手を振りながら魔方陣の光に包まれていった。

転移が完了し、俺はセラを引き剥がす。途端にセラは不機嫌な表情になる。

「ちよつと、何するのよ!」

「今はパーティーだ。終わったら、またのんびり相手してやるよ」

俺はセラの頭を撫でてやる。セラは少し頬を膨らませていたが、すぐに笑顔になる。

「本当！なら、我慢しないとね☆」

「そういうことだ、会場に行くぞ」

「おー！」

こうして、盛大に行われたパーティーを、俺とセラは主役そつちのけで楽しんだ。

そして、パーティー終了後。俺は一晩中セラの相手をする事になった。

だが、久しぶりに会ったのだからいいだろう。俺がずっと一緒にいると誓った、俺の最愛のヒトなのだから――。

Extra life 08 傍迷惑は趣味

俺——ロイは気配を殺しながら校内を歩き回っていた。俺の前方にはこそこそしなから歩くアザゼル。俺はあいつを尾行しているのだ。

ここ最近、あいつが突然いなくなることも少し遅れて現れることが多いため、その理由を探るためだ。今のところは問題ない。

それにしても、アザゼルはどこに行こうとしてやがる。この先にはプールの用具庫しかないぞ。

俺は首をかしげながらもアザゼルの尾行していく。すると、アザゼルは周囲を警戒しながらもプールの用具庫に入ってしまった。

プールの用具庫に何が……。

俺は少し待ってからプールの用具庫に潜入する。アザゼルに一言申してやろうと思っただが、中には誰もいない!?

「あの野郎……ッ！どこ行きやがった!？」

思わず一人で愚痴ってしまったが、本当にどこに行った! 出入口は一つしかないし、窓も人が通れるほど大きなものはない。出てきていれば、すぐに気づくはずだ。

俺は用具庫の中を見渡す。何か手掛かりは——、
「あった」

まず気づかないであろう場所に何かのボタンらしきものを発見した。俺は警戒しながらもそのボタンを押す。すると、床の一部がスライドして地下に続く階段が現れた。俺はゆっくりとその階段を覗きこむ。電気はきているようで照明はついている。

「はあ………つたく、面倒だな」

俺は溜め息を吐きながら地下に向かう。多分だが、この先にアザゼルの野郎がいるんだろう。

進むこと数分。

「なんだこれ、ふざけてんのか」

俺の前にはアダムスキー型のUFOが鎮座していた。中に続くと思われる階段はしごが下から伸びている。

俺は再び溜め息を吐き、UFOの中に入ってみる。アザゼルがいるかどうかは別として、興味が湧いたからだ。

俺が乗り込んだ瞬間、階段はしごが収納されて入り口が閉じてしまった！

「マジかよ……………」

俺は苦笑した。ここまで来たら降りられないし、アザゼルがいることがほぼ確定したからだ。

体を襲う浮遊感を感じながら、俺はUFOの操縦席を指指して歩き始めた。

「アザゼル、見つけたぞ」

「よっ！おまえも乗り込んでいたとは、気づかなかったぜ！」

操縦席に座り、妙にテンションの高い白衣姿のアザゼルが前方の画面から目を外さずに言った。操縦に集中しているようだ。

俺は背後からアザゼルに近づき、その画面を覗きこむ。周囲の景色が映されているようだ。

「外装もそうだが、存外、内装もしつかり作ってあるんだな」

「ああ。やるからには手抜きはしない。失敗して痛い目を見るのは俺だからな」

「そう思うなら、初めからやらないで欲しいがな」

「そう言うなよ。たまには趣味に没頭させろ」

アザゼルはそう言いながら操縦していく。結構慣れた様子なのを見ると、しつかりと練習をしていたようだ。

俺も黙って画面を見てみると、そこに一誠とアーシア、イリナ、ゼノヴィアが映る。

「アザゼル、一誠たちがいるぞ。気づいてはいるようだな」

「そうみたいだな」

俺とアザゼルはそう言いながら、こちらを指さしている一誠を見た。

「……………なあ、ロイ」

「なんだ？」

「イタズラしていいか？」

「いいぜ。——って言うと思うか！」

俺は素早く銃剣を取り出してアザゼルに斬りかかろうとするが、アザゼルが急にUFOを斜めにしたせいで俺は態勢を崩して床を滑る。アザゼルはベルトをしているように影響はなさそうだ。そんなことを確認しているうちにUFOの態勢が水平に戻る。

俺が態勢を整えた矢先にアザゼルが何かのスイッチを押した！すると、ビーム的な何かが発射される音が聞こえ、その後に誰かの叫び声が聞こえてきた！

「アザゼル！何をしやがった！」

「イツセーに攻撃したのさ！どうなるかはわからないがな！」

アザゼルはそう言いながら別のスイッチを押す。すると、UFOが自動操縦になったのかアザゼルが席を立った。

「さて、少しだけ相手してやるよ。だが、手は抜いてくれよ？死んじまうからな」

「了解、半殺しに留めてやるよ。その考えを叩き直す！」

「さあ！来い！」

こうして、俺とアザゼルは真つ正面から激突することになった！

数十分後。

「はあ……………はあ……………」

「ぜえ……………ぜえ……………」

俺とアザゼルは肩で息をしていた。場所がよければもつと楽なんだがな。

俺がそう思った理由は簡単だ。ここはアザゼルが作ったUFOの中。つまり、アザゼルのとつて有利な形で戦うことができるのだ。いきなり壁や天井から砲台が出てきたり、急に斜めになったり、想像以上にやりにくい。

銃剣から弾丸を撃つてもいいんだが、万が一に外れてUFOに致命的なダメージが入ってしまうと、俺も死ぬかもしれない。

俺が次の一手を考えていると、突然UFOが揺れた！アザゼルは驚きながら画面を確認する。俺も一旦銃剣をしまつてその画面を覗きこむ。そこにはデュランダルを構えるゼノヴィアと、光の槍を構えるイリナ、そして段ボールが置いてある。あれ、ギヤスパーだよな？それはともかく、

「あいつら、報復に来てんじやねえか！だから止めとけって言っただんだ！」

「知るかよ！ロイ、おまえはその席につけ！外の砲台を動かせる！」

「くそっ！面倒なことになりやがったな！」

俺は愚痴りながらも席につき、とりあえずスイッチを押してみる。すると、ゼノヴィアに向かってビームが発射された！だが、ゼノヴィアはそれを余裕で避けてみせる。

俺はボタンの横にあるレバーを動かして照準を合わせて攻撃していくが、全て照準からずれた場所に着弾する！おかげで当たる気配がない！

「アザゼル！もつと当てやすいのはないのか！？当たる気配がないぞ！」

「急ピッチで作ったせいでそこら辺は適当なんだ！どうにかしろ！」

「おまえな！なんで大事なところが適当なんだよ！どうにもならないぞ！」

「それは悪かったな！」

俺とアザゼルが言いたいながらも攻撃と回避を分担して行う。そんな中、俺が放った一撃が、照準から大きくずれて――、

ドカンッ！

「ギャアアアアアアアアアッ!?」

段ボール箱に直撃した! やべ、ギヤスパー、悪い!

俺が心の中で謝った瞬間、今まで以上の衝撃と振動が俺たちを襲った!

「しまった、直撃した! ロイ、歯を食いしばれ! 落ちるぞ!」

「ふざけんよ! このくそ野郎がああああああつ!」

俺はアザゼルに愚痴りながらも踏ん張る。くそ、こんなことになるんだったら放置しておけば良かったよ!

俺が後悔していると、再び激しい衝撃に襲われ、今度は意識を持っていかれてしまった……………。

「――に――さま! お兄――ま! お兄様! 大丈夫ですか!」

「あ、ああ。すごい頭痛いけどな……………」

リアスの声に起こされ、俺は体を起こす。視線の先には壊れたUFOが転がっている。

「アザゼルの野郎はどうなった？」

「部屋に拘束しています。イツセーを治してもらわないといけませんから」

「一誠がどうかしたのか？」

俺が訊くと、その一誠が奥から駆け寄ってくる。輝くほどの笑顔を作りながら……………」

「ロイ先生！ご無事でなによりです！」

「あ、ああ。心配かけて悪いな」

「いえいえ、話を聞く限りでは、僕のために頑張ってくれていたんですよね？ありがとうございます」

「ん？おい、リアス。一誠の一人称って、俺だったよな？だが、今、こいつ——」

「はい。僕と言いましたわ」

リアスはそう言うのと不安な表情になり、口を開いた。

「お兄様、イツセーは真面目になってしまったんです」

「真面目になった……………だと」

俺は驚きながら一誠を見る。相変わらずのニコニコ顔だ。なんか、気持ち悪いな……。

真面目になるのはいいことかもしれないが、リアス的には嫌なのだろう。そうでなければあんな不安な表情にはならない。

俺が首をかき上げていると、旧校舎の方から木場が駆け寄ってくる。

「部長、ロイ先生。アザゼル先生が吐きました。戻すほうもどうにかなりそうです」

「そう！それは良かったわ！」

「何かよくわからんが、了解だ。一誠も戻るぞ」

「はいー！」

こうして、真面目な一誠を連れて一旦旧校舎に戻る。

そして、

『出してええええええつ！』

謎のカプセルに一誠を放り込んだ。アザゼル曰く、

「ドツペルゲンガーのスケベなデータを投射する」

そうだな。どうなるかはわからないが、これしか手が見つからなかったとのこと。

「で、大丈夫なんだろうな？余計におかしく、いや、今回はまともになるか？それはそれで大変だがな、色々な意味で」

「大丈夫だって！俺を信じ——」

『無理です』

「無理だな」

胸を張って主張するアザゼルに全員が冷たい視線を送る。一誠はいまだにカプセルから出ようと暴れているようだ。

それに構わずアザゼルはスイッチに手を伸ばし、一気に押し込んだ！そして——

ドツゴオオオオオオオンツ！

大爆発した！俺たちはとっさに物陰に退避したが

部屋の中がメチャクチャになってるじゃねえか！

「おい、アザゼル！何が信じるだ！爆発してんじゃねえか！」

「あれ、おかしいな？」

当のアザゼルは首をかしげているが、マジでふざけんなよ！

俺がアザゼルを怒鳴っていると、カプセルが開く。そこには——。

「オパパパ、オツパイヤイヤインツ！」

謎の絶叫を上げる一誠の姿が！

「余計にぶつ壊れてんじやねえか！どうすんだよこれ！」

「俺は知らん！あばよ！」

「逃げんなこらああああああつ！」

俺は逃げ出したアザゼルを追う！あの野郎、全力全開で一発殴らせろっ！

一誠が戻ったのは次の日になってからだだった。

家でリアスに抱かれながら寝たら治っていたそうさ。

「なあ、木場」

「なんでしようか？」

「最近、リアスがわからん」

「ははは、僕もです……………」

偶然にも遭遇した俺と木場とそんな会話をしていた。巻き込まれる側の苦労は同じような奴にしかわからないだろう。

「木場！見てくれよこれって、ロイ先生!？」

「よー、一誠。その手に持っているもんは没収させてもらうぜ？」

「これは譲れません！」

「おまえも逃げんじゃねえよ！」

エロ本を抱えて逃げる一誠を追う。あいつはああでないと調子狂うかもな。

修学旅行は。パンデモニウム

life 01 修学旅行開始

俺、ロイは冥界のある場所に来ていた。

「ロイ♪ロイ♪」

「はぁ……………おまえな……………」

セラの執務室だ。再び発作がでたこのことで呼び出された。室内は俺とセラの二人きりだ。

俺の胸に顔を埋め、いつも通りに頬擦りしてくるセラ。俺は彼女の頭を撫でながら言う。

「もう少し我慢はできないのか？ 毎度呼ばれると俺の仕事にも支障が出るんだが」

「十年近く我慢してたんだから、甘えてもいいじゃない！」

「十年いけたなら一週間もいけるだろ」

俺は小さく溜め息を漏らす。構わず頭を撫で続ける。これを止めたらセラに睨まれる。ま、かわいく上目遣いだが。

俺の溜め息が聞こえたのか、少し体を離して俺を少し涙目で睨んでくる。

「もう！いいじゃない！いいじゃない！甘えさせてよおお！」

両腕をばたつかせながら言うセラ。駄々をこね始めてしまった。

俺は肩をすくめてセラに言う。

「わかった。好きなだけ甘えてくれていいから、先に仕事を終わらせてくれ」

「仕事といえ、今度、京都の妖怪のみんなと強力体制をとることになったの」

「そうなのか、頑張れよ」

「うん！頑張る！それでね、私、京都に行くの」

「……………で？」

「時間があればだけど、デートしない？」

突然の申し出に俺は一瞬だけ間拔けな表情になるが、すぐに引き締めてセラに言う。

「それはいいが、そんな余裕あるのか？」

「会議の前なら問題ないわ☆」

「おまえはな。俺のことを訊いたんだが」

「……………変装すれば？」

「どうやって？」

セラはその発言を受けて不敵に笑む。

「年齢を変えればいいのよ！ロイは外見年齢二十五なんだから、ソーナちゃんと同じぐ

らいにすれば大丈夫よ！」

「悪魔の年齢変更をこんな形で使うことになるとは……………」

俺は本日何度目かの溜め息を吐く。それに構わずセラが言う。

「それなら大丈夫でしょ？」

「リアスとソーナへの説明はおまえからしてくれよ？俺は面倒だから」

「それって、つまり？」

「わかったよ。久しぶりにデートしようぜ？」

「やったー！ロイとデートできる☆」

セラは満面の笑顔を作りながら飛び付いてくる！セラって、抜けているようでしつかりしているんだよな。何か、俺が確実に油断しているときに攻めてくる。

俺は再び溜め息を吐き、抱きついているセラの頭を撫でる。生徒だけでなく、セラの面倒も見なければいけなくなつたか。まあ、こういう面倒なら大歓迎か……………。

そんな事があつたが、ようやく修学旅行当日。

悪魔が寺に入れるようになる特殊なカードを用意してもらい、俺たちは現在新幹線に乗っている。

窓の外をポケットと見ながら周囲の声に耳を傾ける。

生徒たちの和気あいあいとした会話が聞こえ、こっちの気持ちも自然の高ぶっているのがわかる。

現に、俺の横では――、

「いやー、楽しみだぜ！舞子が、京都料理が俺を待っている！」

「仕事してくださいよ！仕事！何をしに行くとおもっているんですか!？」

「息抜きは大事だぜ？そんなに堅いから彼氏ができないとは思わないのか？」

「そ、それは関係ないじゃないですかああああつ！」

アザゼルとロスヴァイセの口論が聞こえてきた。

俺は溜め息を吐きながらアザゼルに言う。

「アザゼル、あんまり弄^{いじ}つてやるなよ。これから楽しい修学旅行だ。到着前にそいつがダウンされても困る」

でない俺のデートができないからな。

その言葉は飲み込んで、窓の外を見ながら目に涙を溜めているロスヴァイセにも声をかける。

「ロスヴァイセもだ。あんまり真^まに受けるなよ。アザゼルはふざけて言っているだけだ」

「何だよ、そこは追い討ちじゃないのか？」

「俺はおまえほどガキじゃないんだよ」

俺はそれだけ言うのと肘掛けに肘を置いて頬杖をつく。少し寝ておこう。体力を温存しないとたないかもしれない。

『まもなく、京都に到着致します』

アナウンスで目を覚ます。やはり、寝ればあつという間だな。

俺は座ったまま伸びをし、アザゼルとロスヴァイセの方に目を向ける。アザゼルは俺と同様に寝ていたようで、大きくあくびをし、ロスヴァイセは修学旅行のしおりを読み返していた。

とりあえず、到着したら『京都サーゼクスホテル』に向かわなければならぬ。悪魔の影響力が京都にも伸びていたようだ。

そんなことを思いながら京都駅に降り立つ。

「さすが京都。駅も広いな」

「ここで迷子になる子がないか心配です」

「大丈夫だつて、あいつらはそこまで子供じゃない」

俺たち教師三人はそんなことを話していると、

「きゃー！痴漢！」

「ん？」

「何事ですか！」

女性の悲鳴にそれぞれ反応する。見ると、その痴漢をしたと思われる男性が取り押さえられていた。

「京都も物騒だな。注意事項に追加しておこう」

「そうですね。何かあってからでは遅いです」

「おまえら、真面目だな」

俺とロスヴァイセを見ながらアザゼルが漏らす。必要最低限の仕事はするさ。この後抜けるからな。

そんなわけでホテルのホールに生徒と教師が集合していた。

生徒たちはホールの床に座り、その前に俺たち教師陣が立つ。

「さて、これから各自の部屋の鍵を渡す。そこに荷物を置いたら午後五時半まで自由時間だ。それと、駅で見たやつもいると思うが、変質者はどこにでもいる。班員とはぐれないように気を付けるように。最後に、時間厳守だ。遅れたら、問答無用で指導させてもらうからそのつもりで。するこつちも面倒だから、本当に頼むぜ？」

『は、はい！』

俺の言葉に生徒たちが少し強張ったような表情で返事をした。俺、怖がられているようだ。ロスヴァイセは『ちゃん』付けて呼ばれるくらい親しまれているというのに。

そして、各自に部屋の鍵を渡していく。そして、一誠の番になる。

「一誠、おまえはこれだ」

「あの、これは？」

「部屋の鍵だ。見ればわかるだろ？」

「そうですね」

明らかに他の部屋のものとは違う形の鍵を渡す。一誠の部屋は狭いしボロい、いわゆるハズレ部屋だ。万が一の時に備えての会議室を兼ねている。

細かい説明はロスヴァイセがしてくれるはずだ。俺はこれから忙しい。

「そんじゃ、せっかくの修学旅行だ。精一杯楽しんでこい」

「はいー！」

一誠は元気に返事をする。友人たちと合流して部屋に向かっていく。さて、俺もやりますか。

数分後の京都駅。

「あ、いたー！こっちこっちー！」

「待たせたな」

俺はセラと合流していた。お互いラフな格好をして、現地の人にしか見えないように気を配っている。

今の俺は高校三年ぐらいの外見年齢をしている。髪はいつも通りに後頭部で一本にまとめ、右目は魔力を使って碧くしている。

話題を戻してセラとのデートだな。

「で、どこから行くつもりだ？あんまり遠くには行けないが」

「任せなさい！予定は決めてあるわ！」

「了解。任せるぜ」

こうして、俺とセラはのんびりとデートをすることになったのだった。

セラとのデートを開始して数時間。二人でのんびりと寺を回り、休憩のために入った茶屋で談笑していると俺のケータイが鳴る。一誠からのようだ。

俺はセラに断りを入れて一旦席を外し、人目を気にしながらケータイに出る。

「一誠、どうかしたか？」

『ロイ先生、俺たちって許可を貰っているんですけど？』

「ああ。あの許可証を貰ったろ？あれが証拠だ」

『はい。持っていますけど、その……………』

「なんだ、はつきり言え」

『…………妖怪に襲撃されました』

「なんだと？」

『妖怪に襲われたんです！』

一誠の言葉に俺を眉を寄せた。許可証がある限り話は通っているはずなのに、襲撃された？一誠が入ってはいけけない場所まで行っちゃったってわけでもなさほうだ。なら、なんで……………？

「とりあえず、すぐにその場を離れろ。詳しくはこつちで確認する。それと、リアスたちにはまだ連絡するな。一日目で問題があつたと知つたら、あいつらが心配して学校生活どころじゃなくなる」

『わかりました。とりあえず、戻ります』

「ああ、気を付けろよ」

俺はケータイを切つて席に戻ると、セラが険しい表情になっていた。あれは、仕事モードの時にする顔だ。

俺がセラの向かいの席に座り口を開く。

「どうやら、お互い問題ありみたいだな。一誠が襲撃されたそうだ」

「こつちも問題発生よ。詳しくは確認できたら話すわ」

「了解。デートはまた今度だな」

「そうね。けど——」

そこでせつかくのは言葉を切り、テーブルに手をついて体を乗り出してくる。そして

「チュ……………」

優しく唇同士が触れあった。

離れるセラの顔を見ながら俺は苦笑すると、セラは満面の笑みを浮かべる。

「これで我慢するわ。今度またのんびりデートしましょう？」

「ああ。おまえがきっちり仕事してくれればな」

「任せなさい。それじゃ、また後でね」

「またな」

俺とセラのデートは中断となってしまった。

どうやら、こつちに来てても面倒事は絶えないようだ。

l i f e 0 2 夕食会

俺——ロイは外見年齢を元に戻してジャージに着替えると、非常階段の踊り場に向かった。

隠れてタバコを吸うわけでもなく、仕事をサボっているわけでもない。ここにも仕事をしに来ているのだ。

——つと、来たようだな。

「ゲエツ?!ロイ先生ツ?!」

「来たか、一誠。これは警告だ。今のうちに引き返せ。おまえじゃ俺には勝てん。いいか、俺は面倒が嫌いなんだ」

階段から降りてきた一誠に、俺はそう告げた。一誠は目を見開いて驚いていたが、すぐに表情を引き締めた。

俺はここで一誠が覗きに行くのを阻止しなければならぬ。最初はロスヴァイセが行こうとしていたが、こいつを女性が相手するのは少々厄介だ。だから、面倒だったが俺が代わった。

俺は変わらず睨んでいたが、一誠は覚悟を決めたように言う。

「いくらロイ先生でもこれは譲れません。——俺は女風呂を覗きます」
「たいした度胸だ。だったら、力づくで通ってみろ！」

俺は手首をスナップさせて脱力するように構え、対する一誠は籠手を出現させて強張った様子で拳を構えた。

お互いの拳が届かない距離から様子を探り、俺は笑いながら一誠を見る。

「どうした？ビビっているわけでもないだろ。入浴時間終了までこうやって睨みあっているか？」

「——ッ！おりやああああッ！」

俺の言葉に焦ったのか、一誠が飛び蹴りを放ってきた。俺は溜め息を吐き、一誠が前に突き出した足を下に払い落として態勢を崩した瞬間に一誠の首を掴む！

少し苦しそうな表情になるが、それを無視して一誠を壁に叩きつける！

「ガッ！」

一誠がうめき声を上げるが、再び無視して腕を極め、再び壁に叩きつける。それでも脱出しようともがく一誠に言う。

「残念だが、この下には生徒会も待機している。突破は無理だ」

「くそ！少しは見逃してくださいよ！同じ男でしょ!？」

「同じ男として言うが、裸を見るならお互い同意の上でだな——」

「それは彼女がいる人の意見です！いない俺には貴重なものなんですよ！」

「相変わらず、自覚なしか」

「何か言いましたか!?!」

「いいや」

時々、リアスが「部長」と呼ばれて悲しげな表情になることがある。多分だが、こいつがいつまでたつても名前前で呼んでくれないからだろう。あいつは、一誠のことを――

俺は拘束の力を緩めずに一誠に続ける。

「とりあえず、欲を溜めとけ。彼女ができたら解放すればいい」

「それもそれでどうかと思いますよ!?!」

「うるせえな！そういうことだから、とりあえず気を失ってもらおうぞ」

「ちよっ!?!それはヤバイです!」

俺が首を極めようとするのと下から誰かが昇ってくる気配を感じた。一誠の拘束を緩めずにそちらに目を向けると――

「おまえら、楽しそうでなりよりだが、下まで聞こえたぞ」

アザゼルだった。呆れたような目で俺たちを見てきている。

「マジか」

「マジですか!？」

俺は軽く返し、一誠は驚きながら返した。今の会話を聞かっていたのか。まあ、別にどうってことでもない。

俺たちのリアクションを受けたアザゼルは苦笑しながら続ける。

「俺とおまえらに呼び出しがかかった。近くの料亭に来てくれだときさ」

「よ、呼び出しですか………つ? い、一体、誰から?」

極められながら一誠が訊くと、俺を見ながらアザゼルは口元を笑ました。

「そいつの彼女——魔王少女様だよ」

俺とリアスの眷属たち、イリナはホテルを抜け出してアザゼルの先導で料亭に到着していた。

「料亭の大楽。ここにセラがね………」

俺は腕を組ながら息を吐いた。ここも結構高級料亭だと思っただが………。

中に通され、和風な雰囲気の通路を抜けると個室が現れる。俺が戸を開けると——

1、

「ハーロー！ロイ、それに皆！皆とはこの間以来ね☆」

着物姿のセラが座っていた。髪も服に合わせて結ってある。俺は少しその姿に見とれていたが、咳払いをしてセラに言う。

「で、どうかしたのか？急な呼び出しとはな」

「話をする前に、座って座って」

セラに急かされるまま俺たちは座る。それと、今さらだが、

「匙たちもいたのか」

「どうせ俺たちはおまけですよ……」

「いや、その、悪いな。日本語は難しい」

俺は苦笑しながら謝る。何てことをしながら運ばれてきた料理に手をつけていく。なかなか美味いな。

「それで、何かわかったのか」

俺は単刀直入にセラに訊いた。セラは箸を置いて少し表情を陰らせる。

「どうにも、大変なことになっているみたいなのよ」

「大変なことってのは？」

「京都に住む妖怪の報告では、この地の妖怪を束ねていた九尾の御大将が行方不明らし

いの」

「だから、一誠たちが襲われたのか」

俺は一人で納得していた。一誠も横でなるほど頷いている。

そんな状況では、よそ者である一誠たちが狙われるのは当然といえば当然だ。俺はセラがいたから大丈夫だったのかもしれない。

アザゼルは酒をあおると言う。

「十中八九、関与しているのは『禍の団』カオス・ブリゲードだろうな」

「十中八九？十割だろ。タイミングを見ればな」

俺は右足だけ三角座りの時のようにし、そこに右腕を預ける。楽な座りかたになったところで言葉を続ける。

「まったく、どこでも面倒事は起こるもんだな。テロリストどもが……」

俺がそう吐き捨てると、セラは口を開く。

「どちらにしても、まだ公にはおわやけできないわね。なんとかして私たちだけで事を収束しなければならぬの。妖怪の方々も連携してくれるそうよ」

「了解。まったく、ロイじゃないが、京都に来てまでこうなるとは、面倒だな」

「ああ、まったく面倒だ」

アザゼルと俺が毒づいた。修学旅行の時ぐらい平和に過ごさせてくれよ。まったく

……。

「あの、俺たちは……………」

一誠が恐る恐る手を挙げながら訊いてきた。俺は苦笑しながら一誠に言う。

「とりあえず、俺たちが動くから旅行を楽しめ」

「え、でも……………」

遠慮がちの一誠にさらに言う。

「何かあつたら頼るさ。だが、貴重な修学旅行だからな、楽しい記憶を増やしとけよ」

「そういうこつた、俺たちに任せとけ」

アザゼルが続き、ようやく一誠は頷いた。

こいつ、すぐに手伝いたがるからな。少しは普通の高校生として過ごしてもらいたい。

「そういうことだから、皆は京都を楽しんでね。私も楽しんじゃう！」

「おまえは仕事しろ」

俺はセラにツツコミを入れながら苦笑する。まったく、こいつが一番楽しもうとしているのだろ。

ともかく、リアスたちにはまだ連絡しない方向でいこう。あいつらにも面倒をかけさせたくない。

まあ、一誠たちにも面倒をかけさせないように頑張るしかないがな。

l i f e 0 3 妖怪の町へ

俺——ロイはホテルの学園本部に指定された部屋でまつたりしていた。アザゼルは妖怪たちに話をつけに行っているため、俺がここを任されたのだ。

それにしても、

「……………平和だな」

あくびの後に本音が漏れてしまったが、本当に平和だ。生徒たちからの緊急の連絡もなく、本部にいる俺は退屈でたまらない。まあ、横には同じくロスヴァイセがいるわけだから、

「ロイ先生、気を緩めてはいけません！いつ何が起こるかわからないのですから、常に警戒しておいてください！」

「警戒つて、敵が攻めてくるわけじゃないんだから、そこまで固くなくてもいいだろう？なあ、先生？」

「気を引き締めておくことは大事ですよ」

ロスヴァイセとは別の教師にふつたが、真面目に返されてしまった。まあ、気を緩め過ぎか。

俺は一度大きく伸びをすると、ケータイが鳴る。すぐに見てみるとアザゼルからのメッセージだった。

『話をついた。イツセーたちと合流してくれ。向こうの姫様が謝りたいそうだ』

とだけ書いてある。どうやら、どうにかなったようだ。

同じくメッセージを見ていたロスヴァイセと頷きあうと、俺は横の先生に声をかける。

「仕事のようです。行ってきます」

「私も同行します。ロイ先生だけでは不安ですから」

「わかりました。こちらは任せてください」

先生の返事を受けながら俺とロスヴァイセは本部を出る。そしてロスヴァイセに確認した。

「この時間だと、一誠の班は銀閣寺か金閣寺だったな。どっちに行く？」

「金閣寺に先回りしましょう。入れ違えたら大変です」

「だな」

こうして、俺とロスヴァイセは二人で金閣寺を目指すことになった。道中のバスで妙に視線を感じたが、気にすることでもないか。若干ロスヴァイセの顔が赤かった気もした。がな。

金閣寺に到着。俺とロスヴァイセは一誠たちを探して走り出すが、ある異変に気づく。

「観光客全員が寝てやがるな。妖怪側から何かしたのか？」

「わかりませんが、急ぎましょう！」

走ること数分、俺とロスヴァイセの視線の先には一触即発の雰囲気の一誠たちと狐の妖怪——ようこ妖狐の姿が！

俺は両者の間に割り込むようにして駆け込み、一誠たちに言った。

「おまえら、ストツプだ」

「ロイ先生！どうしてここに？」

驚く一誠に俺は返す。

「誤解が解けた。向こうの姫様が謝りたいそうだ」

アザゼルからのメッセージをそのまま伝える。一誠たちは少し困惑しながらも構えを解いてくれた。

俺も息を吐き、妖狐の女性に目を向けた。俺の視線を受けた妖狐の女性は前に出ると

深く頭を下げる。

「私は九尾の君に仕える狐の妖あやしでございます。先日は申し訳ございませんでした。我が姫君もあなた方に謝罪したいと申されておりますので、どうか私たちについてきてくださいませ」

疑問符を浮かべる一誠たち。おそらく、どこに行くのか訊きたいのだろう。その疑問を口にする前に妖狐の女性が言う。

「我ら京の妖怪が住む——裏の都です。魔王様と墮天使の総督殿も先にそちらにいらつしゃっております」

俺たちが足を踏み入れたのは、冥界とも違う雰囲気の場所だった。

江戸時代を思わせる建物が軒のきを連ね、扉や窓から面妖めんような生き物が顔を覗かせている。

金閣寺近くの人気のない場所に設置されていた鳥居を潜くぐったらこれだ。

ここに住む妖怪たちが俺たちに好奇の視線を向けてきている。それを感じながらも俺たちは姫様がいるという場所を目指して足を進める。通りにある灯火ともしびが奥まで点々

と続いている。

「うきやきやきや」

「……………」

「すみません」

提灯に目と口をつけたような妖怪が絡んできたが、睨んで黙らせる。いちいち相手にしていたらキリがない。

今のやり取りを見ていた妖狐の女性が謝ってくる。

「すみません。ここの妖怪たちはイタズラ好きで……。害をなす者はいないと思います
が……………」

「まあ、妖怪の世界だからな。ああいうのもいるもんだろ」

俺が返すと一誠が訊く。

「こことて、やっぱり妖怪の世界なんですか？」

その問いに妖狐の女性が答える。

「はい、ここは京都に住む妖怪が身を置く場所です。悪魔の方々がレーティングゲームで使うフィールド空間に近い方法で作り出したものだと思ってください。私たちはうらやましい街、裏京都などと呼んでおります。むろん、表の京都に住む妖怪もおります
が」

裏京都か。冥界程ではないにしろ、ここもそれなりに広そうだな。

妖狐の女性から説明を受けながら歩くこと数分。俺たちは家屋の立ち並ぶ場所を抜け、小さな川を挟んで林に入る。そこをさらに進むと巨大な赤い鳥居が現れた。

その奥にはデカイ屋敷、古さと威厳を感じさせる佇まいを感じる。

——つと、鳥居の先にアザゼルとセラがいるな。セラは相変わらず着物姿だ。気に入ったのかもしれないな。

「お、来たか」

「皆、待ってたわよ☆」

妖怪の世界でも二人は変わらないようだ。まあ、それが二人らしいといえそうなのだが。

それはそれとして、二人に挟まれるように金髪の少女が立っていた。戦国時代の姫が着ているような動きにくいであろう豪華な着物に身を包んでいる。見た感じ、あの子が姫か？

「九重様、皆様をお連れいたしました」

妖狐の女性はそれだけ報告すると、ドロンと炎を出現させて消えてしまった。いわゆる狐火つてやつだな。

九重の呼ばれた姫は一本木前に出ると俺たちに、正確には一誠たちに目を向けて口を

開いた。

「私は表と裏の京都に住む妖怪を束ねる者——八坂やさかの娘、九重と申す」

自己紹介をしたあと、深く頭を下げる。

「先日は申し訳なかつた。お主たちを事情も知らずに襲つてしまった。どうか、許して欲しい」

それを受けた一誠は困り顔で頬をかいていた。

「ま、いいんじゃないか。せつかくの京都を堪能できれば私はそれでいい」

「そうね。許す心も天使には必要だわ」

「はい。平和が一番です」

ゼノヴィア、イリナ、アーシアが言う。それを受けた一誠は小さく息を吐くと口を開く。

「てな感じらしいんで、俺も別にもういいって。顔をあげてくれよ」

「し、しかし……………」

九重は一誠たちが思っている以上に気にしているようだ。一誠はそれを察したのか、片ひざをつき、九重と視線を合わせて言う。

「九重でいいかな？なあ、九重、お母さんのこと心配なんだろう？」

「と、当然じゃ」

「なら、あんなふうの間違えて襲撃してしまうこともあるさ。もちろん、それは問題になつたり、相手を不快にさせてしまつたりしまう。でも、九重は謝つた。間違つたと思つたから俺たちに謝つたんだよな？」

「もちろんだとも」

一誠は九重の肩に手を置き笑顔で続ける。

「それなら俺たちは咎めたりしないよ」

九重はその言葉を聞くと、顔を真っ赤に染めてもじもじしながらつぶやく。

「……ありがとう」

一誠は頷くと立ち上がる。そんな一誠に言う。

「さすが子供たちの味方だな。扱いに慣れてる」

「確かに、さすがはおっぱいドラゴンだな」

「さすがおっぱいドラゴンだ」

「はい、さすがです！感動しました！」

「見事な子供の味方よね」

「ちよ!?!皆で茶化さないでくださいよ！これでも精一杯なんですから！」

頬を赤くしながら照れる一誠にロスヴァイセが言う。

「ちよつと見直しました。教師として鼻が高いです」

少しだけ一誠の評価が上がったようだ。どれだけ低いかはわからないが、百均とかについて語れば上がる気がするがな。とりあえず頑張れ。

「ま、負けていられないわ！こんなところまでおっばいドラゴンの布教だなんて！『ミラクル☆レヴィアたん』の主演として負けていられないんだから！」

セラが対抗意識を燃やし始めた。俺はいつだってセラの味方だけだな。

俺たちがそんなことを話していると、九重が照れながら言う。

「……咎がある身で悪いのじゃが………どうか！母上を助けるために力を貸してほしい！」

少女の悲痛な叫びが、俺たちの耳に届いた。

life 04 探し人

京都を束ねる妖怪である九尾の妖狐——八坂やさかが須弥山しゆみせんの帝釈天たいしやくてんの使者との会談に向かったきりに行方不明となった。

必死の搜索が行われたが八坂本人が見つかることはなく、見つかったのは瀕死の状態だった護衛の烏天狗のみ。

その烏天狗が息を引き取る直前、八坂が拐われたことを告げたらしい。

京都にいる怪しい奴を徹底的に捜し、一誠たちを襲撃してしまつたそうだ。そのの誤解はセラとアザゼルがどうにかしてくれただけなそうだがな。

「……なんだか、えらいことになってますね」

一通りの話を聞いた一誠が漏らす。俺たちは屋敷に上がらせてもらい、大広間の上座には九重くのうが座っている。

「ロキの時もそうだが、各勢力が手を取り合おうとすると狙われやすくなっちゃう。今回の敵は『禍カオス、トリゲードの団』、つまりテロリストってわけだ」

俺がざつと解説してやる。ただですら面倒な状況だつてのに、テロリストまで来るとはな。本当、面倒なことになった……。

俺は溜め息を吐き、九重の両脇にいる妖狐の女性と山伏姿やまぶしの天狗の爺さんに目を向け
る。

天狗の爺さんは天狗族の長おきであり、九尾の一族と天狗の一族は親交が深く、あの人も八坂や九重のことを心配しているそうだ。

「総督殿、魔王殿、どうにか八坂姫を助けることはできんのじやろうか？ 我らならばいくらでも力をお貸し申す」

天狗の爺さんがそう言う。それなら人手に困るなんてことはなさそうだ。

天狗の爺さんがおもむろに一枚の絵画を見せてくれた。巫女装束の金髪きんぱつの女性、かなり美人の部類に入るだろう。

何て思ったらセラがさりげなく睨にらんできたので視線を絵画から外す。

「ここに描かれておりますのが八坂姫でございます」

だよな。いきなり関係のない人の絵は見せないだろうし、そんなふざけている時間も余裕もない。横の一誠の鼻の下がなんとなく伸びている気がするが、今は無視だ。

「八坂姫を拐さらった奴らがいまだにこの京都にいるのは確実だ」

アザゼルがそう言った。それに続いて俺も口を開く。

「九尾の狐は京都に住む妖怪だけじゃなく、この地を流れる気も統括とうかくしているんだ。京都自体が大きな力場ちからばたつてのは割と有名かもな。で、九尾が死んだり、何の用意もなくこ

の地を離れると、何かしら異変が起きる。まだ何もなっていないことは、八坂は無事で、まだ京都にいる可能性が高いってことだな」

「そういうことだ。で、セラフォル、悪魔側のスタッフの動きはどうなっている？」「つぶさにやらせているわ。京都に詳しいスタッフにも動いてもらっているし」

アザゼルはセラの言葉に頷くと一誠たちに視線を向ける。

「おまえたちにも動いてもらうことになるかもしれない。人手が足りなさすぎるからな。特におまえたちは強者との戦いに慣れているから、英雄派との戦闘になったら力を貸してもらおうことになるだろう。悪いが最悪の事態を想定しておいてくれ。あと、これは木場とシトリー眷属には俺とロイから連絡しておく。それまでは旅行を満喫していいが、いざというときは頼むぞ」

『はい！』

アザゼルの言葉に一誠たちが頷く。結局、こうなっちゃうのか。こいつらには迷惑かけちゃうな。

九重が手をつき、深く頭を下げる。それに妖狐の女性と天狗の爺さんよ続く。

「……どうかお願いじゃ。母上を……母上を助けるのに力を貸してくれ……。いや、貸してください。お願いします」

あんな小さな子供が頭を下げて、声を震わせている。あんなにしつかりはしている

が、まだ母親に甘えたい年頃なんだろう。

英雄派、よくわからん理由であんな子供を泣かせるとは、許せねえ……………！

俺が小さな怒りを燃やしていると、なぜか一誠が八坂の絵を見ながら鼻血を吹き出していた。絵を見た感じ、八坂はかなりの巨乳だ。もしかしたら、一誠は変なご褒美を想像したのかもしれない。

「一誠、おまえ、たまには自重しやがれッ！」

「ぐ、ぐめんなさああああいつ！」

広い屋敷に俺と一誠の叫びが響き渡る。どうしてこいつは、こう、バカなんだろうか……………。

その日の夜。

ホテルに戻ってきた俺は木場たちへの連絡を済ませ、妙な気配を感じた一誠の部屋に向かっていた。

「一誠、入るぞ」

俺は一応声をかけてから部屋に入る。だが、誰もいないようだ。

俺が首をかしげて部屋を出ようとすると、
ガタツ！

部屋の押し入れが動いた。俺が触れたわけでもなく、何か触れたわけでもない。つてことは、中に誰かいるのか？

俺はゆっくりと押し入れに手をかけ、一気に開ける！

「「あ……………」」

「……………」

中にはイリナ、アーシア、ゼノヴィア、そして気絶している一誠がいた。

俺は笑みを浮かべながら三人に言う。

「おまえら、俺は面倒が嫌いだってのは知っているな？ どうする、今から自主的に部屋に戻るか？ それとも俺に引きずられて部屋に——」

「「すいませんでしたっ！ すぐに戻りますっ！」」

三人は足早に部屋に戻っていく。まったく、これだから若者は……………。

なんてことを思いながら、一誠を押し入れから引きずり出してそのまま布団を被せる。

これから面倒になるつてのに、まったく面倒なことさせやがって……………。

俺は溜め息混じりに一誠の部屋から出ると、そのまま部屋に戻る。

相部屋のアザゼルは今ごろ何をしていることやら……。

l i f e 0 5 出 現

九重くのうから話を聞いた次の日。

俺、アザゼル、ロスヴァイセは嵐山周辺の搜索をおこなっていた。

三人で別行動を取り、怪しい場所や気配を探ったが、何かが見つかることもなく、無駄な時間が流れてしまった。

合流した俺たちは各々報告を済ませると、俺は溜め息を吐く。

「やっぱり見つかからないもんだな」

「そう言うなよ、ロイ。簡単に見つかったら苦労しないって」

「そうですよ。探し物は根気が大切です！」

「確かに婚期は大切だな」

「うっ！そ、それは今関係ないじゃないですかあああああつ！」

アザゼルの言葉にロスヴァイセが狼狽える。まったく、この二人は成長しないな。

俺は涙目のロスヴァイセの肩に手を置きながら言う。

「だから、あんまり真まに受けるよ。アザゼルもストレスが溜たままってやがるのさ」

「ストレスが溜たままりまくりだぜ、まったくよ！とりあえず、あの店で休憩といこうぜ？」

ちよつと疲れた」

アザゼルは視線の先にある店を指差しながら言った。俺は頷き、ロスヴァイセに言う。

「ほら、すっかりしろ。これからまた忙しくなるんだからよ」

「うう……。私だって、私だって……」

いまだに涙目のロスヴァイセ。これはしばらく引きずりそうだな。

それからしばらくその店で湯豆腐を食べていると、そこに一誠たちが現れた。

「あれ、ロイ先生？どうしてこんなところに？」

「一誠か、そつちは楽しそうで何よりだ。こつちは——」

「色々調査中だよ。今は休憩だけだな」

アザゼルが俺の言葉を遮るように言うと、日本酒の入った杯をあおる。

それを見た一誠が言う。

「アザゼル先生！教師が昼酒はいかんでしよう」

「言っても聞かないんだよな」

「そうなんですよ！生徒の手前、しっかりしてくださいと言っているのですが……」

ロスヴァイセが額に青筋を立てながら言う。アザゼルはそれを軽く無視して日本酒をあおると、ロスヴァイセに言う。

「そうは言うがな、ロスヴァイセ。ちつたあ、要領よくいかないだよ、彼氏はできないぜ？」

アザゼルの発言を聞いた途端に、ロスヴァイセが我慢の限界を迎えたようでもテーブルを叩きながら立ち上がる。

「か、か、彼氏は関係ないでしょう！バカにしないでください！もう、あなたが飲むぐらゐなら私が！」

ロスヴァイセがアザゼルの杯を奪い取り、そのまま日本酒をあおる。見事な飲みっぷりだ。

「ぶはー。……だいたいれすね、あなたたちはふだんからたいどがダメなんれすよ……」

「おい、ロスヴァイセ、まさか……」

「一杯で酔っぱらいやがったのか？」

呂律が回っていない様子るれつのロスヴァイセを見て、アザゼルと俺は驚愕の表情を浮かべ

た。

俺たちのことなぞお構いなしに二杯目をあおるロスヴァイセ。完全に目が座つてやる。

完璧に酔つぱらつた様子のロスヴァイセが俺とアザゼルに絡んでくる。

「わらしはよつぱらつてきやしないのれすよ。だいたいれすね、私はおーでいんのクソジジイのおつききをしてきることから、おさけにつきあつていたりしてれすね——」

うわ、面倒くせえ。アルコールが入つた途端に愚痴が溢れ始めたぞ。こいつも苦勞しているんだな。

俺は黙つてロスヴァイセの愚痴を聞きながら溜め息を吐く。苦勞はわかるが、こんな面倒は勘弁してもらいたい。

「——わたしなんか、おーでいんのクソジジイのかいごヴァルキリーだなんていわれてれすね、やすいおきゆうきんでジジイのせわをしてたんれすよ？そのせいで、そのせいで！かれしはできないし、かれしはできないし、かれしはできないんれすよおおおお！うおおおおおん！」

号泣し始めちまつたよ、まつたく。

俺はロスヴァイセの背中を優しく擦さすつてやりながら言う。

「わかつたから、おまえの愚痴に付き合つてやるよ。ほら、話してみろ」

俺がそう言うのとロスヴァイセは急に明るい表情になった。

「ほんとうれすか？ロイせんせー、いがいにいいところあるじゃないですか。てんいんさーん、おさけ、もうじゅっぽんつかでー」

また飲むつもりのような。これは、面倒事に自分から首を突っ込んでしまったか。まさか、ここまで酒癖が悪いとはな。セラもここまでじゃ……いや、こんぐらいかもしれないな。

「アザゼル、一誠たちも、ここは俺にまかせて先に行け！」

「ロ、ロイ先生!?なんか死んじやいそうなんですけど!?」

「ここは任せませー！」

ツツコミをいれてくれる一誠をよそに、アザゼルは足早に去っていく。それを見て困惑気味に俺を見てくる一誠に俺は頷いてみせた。一誠たちは軽く頭を下げながら店から出ていく。

俺がロスヴァイセに視線を戻すと、すでに空になった酒瓶が二本!?

ロスヴァイセが俺を肩を組むようにして捕まえると、満面の笑みで、

「ひやくえんシヨップ、サイコーれすよ!アハハハハ!」

なんて叫んできやがった!もうやだこいつ!アザゼル、やっぱり戻ってきてくれえええええええつ!

数分後。

「えへへ、ひやくえんシヨップ」

酔い潰れて寝言を言うロスヴァイセに着ていたパーカーを被せてやる。よだれとかで汚れないかとか、そんな心配をしている場合じゃない。

「はあ……まったく、面倒なことになりやがった」

俺は溜め息を吐きながらそう漏らした。理由は簡単、この店には店員を含めて誰もいないからだ。気持ち悪い霧に包まれたと思ったらこれだ。どうなつてやがる。

俺は簡単な結界でロスヴァイセを包み込んでやり、店の外に出る。外にも誰もいないどころか、空の色が白い。まるでレーティングゲームのフィールドだな。

俺が警戒しながら周囲を見渡していると、

「さて、噂の切り裂き魔とやらはお主か？」

「——ッ！誰だ！」

俺は声のした方向に目を向けると、そこには——、

「いやなに、怪しい者ではない。ただのテロリスト、というやつだ」

身の丈程の太刀を背中に背負った男が立っていた。腰ぐらい程まで長い黒い髪を侍のようにまとめており、格好も侍のようだ。

俺は銃剣を取り出しながらその男に言う。

「ただのテロリストを俺たちは怪しい奴って呼ぶんだ。知らなかったか？」

「む？そんであつたな。呼ばれる側になると自覚が薄くなってしまうものよ」

あごに手をやりながら苦笑する男。だが、隙は見つからない。何となく、口調まで昔っぼいな。

俺は男を睨みながら訊く。

「で、おまえは何者だ？いまさら『ただの通りすがりだ』じゃ済まないぜ？」

俺の言葉に男は不敵に笑む。

「そうさな、名乗っておくか。『禍カオス・ブリゲードの団』、英雄派、佐々木小次郎と申す。まあ、名乗っ

てはおるが、岩流ではなく我流だな」

「佐々木小次郎……宮本武蔵とどつかの島で決闘をしたっていうあれか」

「あれと呼ばれるのは気になるが、それが一番分かりやすいだろうさ」

「で、何のようだ？」

俺が改めて訊くと小次郎は太刀をゆっくりと引き抜くと曇りのない刃があらわとなり、小次郎は構えをとる。すると、先程までの声音とはうってかわり、迫力ある声で俺

に訊く。

「強者が目の前にいる。これ以外の理由があるか？」

「確かに、それもそうかもな……………」

俺は銃剣を二刀流モードにして構える。俺がこの調子なら、一誠やアザゼルの方も敵と遭遇しているんだろうな。

俺はゆっくりと息を吐き、そして――、

「はあっ！」

一気に懐に飛び込んで突きを放った！

小次郎は焦った様子もなく太刀でそれを受け流し、俺の背後をとると、そのまま太刀を降り下ろしてくる！

俺は剣を背中に回してそれを防ぐと、前に転がり少し距離をとる。

こいつ、強いっ！

今の一瞬でそう確信した俺は再び構え、小次郎を睨む。小次郎は不敵に笑みながら俺を見据えている。

「まるで獣よな。眼光だけで殺すつもりか？」

「それで殺れたらどんだけ楽だろうな」

俺は軽くそう返し、再び正面から斬りかかる！小次郎も口の端を愉快そうに歪めると

それ受け入れてくる！

その激突を皮切りに、俺と小次郎は文字通りの一進一退の攻防を展開していく！

俺の突きが受け流され、小次郎の横風ぎを右の剣で受け止めてカウンターを狙っている！

お互いの攻撃がぶつかりあいながら散っていく火花と金属同士がぶつかり合う甲高い音が周辺を支配する。

俺の二刀による大上段からの一撃を小次郎が受け止めるところでつばぜり合いになる。

「いやはや、なかなか愉快なものよー」

「楽しそうでありよりだが、俺はおまえの楽しみに付き合っているほど暇じゃねえんだよー」

俺は一気に力を込めて小次郎を押し飛ばし、左の剣を投げつけた！

小次郎は一瞬驚いたように目を見開くがすぐに不敵な笑みを浮かべると、俺が投げつけた剣をはるか上空まで弾き飛ばした。

俺はその隙に一刀流で小次郎に斬りかかっていく！小次郎は素早く太刀を戻して再びのつばぜり合いになった。

「刀を捨てるとは、恐れ入る……………」

「おまえみたいに一本だけで勝負しているわけじゃねえからなー」

そう言うのと、俺と小次郎は再び斬りあつていく!

俺が大上段から振り下ろせばそれを止められ、代わりと言わんばかりに放つてきた突きをギリギリで受け流す!

すると、小次郎が後ろに飛び退いた。

俺が首をかしげると、小次郎が構えを変えた。太刀を地面と水平に持ち、まるで俺に背中を見せるように立つ。

「佐々木小次郎と言われて、お主は何を思い浮かべる?」

小次郎からの突然の問いに俺は考える。

佐々木小次郎といえ、それは確か——ッ!

『つばめがえ燕返し』かッ!」

「ご名答。ならば見せよう、我が秘剣——」

小次郎がまさに技を放とうとした時だ。

「もう、誰れすか?人が気分良く寝ているところを、ガンガンギャンギャンキンキンと、うるさいんれすよ!」

先ほどの店から千鳥足のロスヴァイセが出てきた。まだ酔いは抜けていないようだ。俺のパーカーを大事そうに羽織っている。

俺はすぐさま意識を小次郎に戻したが、あいつは苦笑しながら息を吐き、構えを解い

た。

「まさか、女人がいたとは、少々興が削がれたな」

小次郎はそう言うのと落下してきた剣を俺の方に弾き飛ばしてきた。チツ、バレていたか。

俺が戻ってきた剣をキャッチすると小次郎は言う。

「では、また後ほど続きといこう。案ずるな、すぐに機会は訪れるさ」

「おい、おまえら、何をするつもりだ？」

「それは——」

小次郎が何かを言おうとすると、突然俺たちを振動が襲った！

「ウエ!？」

「あのバカが!」

転びそうになっていたロスヴァイセを支えてやる。再び小次郎のいた場所に視線を向けると、

「うむ、あちらでも何かあったようだ。ではな」

そう言つて渡月橋とぎつきはしのほうに走つていつてしまった。俺もすぐさま追おうとするが、
「あゝ、待つてくらはいいいいっ!」

腰にロスヴァイセが抱きついてきて走り出せなくなってしまった。

「ああ、くそっ！」

俺は短く吐き捨てながら銃剣をしまい、ロスヴァイセをお姫様抱つこの要領で持ち上げるとそのまま小次郎を追って駆け出した！

で、渡月橋に到着したが、なんか荒れ放題になってしまっている。

ロスヴァイセは顔を赤くしながらも俺にしつかりくつきながら寝ている。人に抱えられながら寝るって、こいつ、なかなかやるな！

俺が視線を前に向けると、小次郎の横に立つ嫌な気配を感じる槍を持った青年が笑みを浮かべながら言う。

「我々は今夜この京都という力場と九尾の御大将を使い、二条城で大きな実験をする！ぜひとも制止するために我らの祭りに参加してくれ！」

青年が言うのと、霧が濃くなってきた。一気に体を包み込むまでの濃さになるとアザゼルの叫びが聞こえてきた。

「おまえら、武装を解除しろ！空間が元に戻るぞ！」

アザゼルの言葉を受けたが、武器は何もないんだよな。

.....。

一拍あけて霧が晴れると、そこは何ともない渡月橋周辺だった。さっきのはやはり別空間だったようだ。

それにしても、実験とか言っていたが、あいつら何をするつもりだ？

「ロイ、一旦戻るぞ。セラフォルーにも連絡しなきゃならない」

「あ、ああ。わかった」

「えへへ」

いまだに寝ているロスヴァイセ。まったく、緊急事態だつていうのによ。

俺は溜め息を吐くと、ロスヴァイセを抱えたままホテルに戻ったのだった。

l i f e 0 6 作戦確認

就寝時間を間近にして、一誠の部屋に俺、リアス眷属とイリナ、ソーナ眷属、アザゼル、セラが集まっていた。

これから大事な話し合いをするのだが、正直言っちゃまうと狭い。ざっと八畳の場所に十人以上があるんだから当たり前ではあるがな。

ゼノヴィアとイリナは押し入れの中から参加しており、あんなに酔っぱらっていた口スヴァイセは顔を真っ青にしながら参加している。酔い覚ましの薬を調合して飲んだそうだが、しばらく体調が優れないらしい。

それはそれとして、俺を見るたびに顔を赤くしないでもらいたい。あの時のパーカーも洗ってから返すと言いつい出したし、お姫様抱っこしたことは言わないでくれとも言われたしな。

アザゼルが室内の全員を見渡して口を開く。部屋の中央には京都の全体図が敷いてある。

「では、作戦を伝える。現在は二条城と京都駅に非常警戒態勢を敷いた。今もこの地区のスタッフ総動員で怪しい輩を探してる。京都の妖怪にも協力して貰ってな。今のと

ころ英雄派は動きを見せていないが、二条城に不穏な気が流れていることが計測できている」

木場がアザゼルに訊く。

「不穏な気、ですか？」

「ああ、京都つてのは古来、陰陽道、風水に基づいて創られた術式都市だ。それゆえ、いわゆるパワースポットが多い。それらから二条城に気が流れているんだよ」

「ど、どうなるんですか？」

匙がジビリながらの質問に俺が答える。

「ろくでもないことが起こることは確実だな。実験とか言つてやがったし、それを止めてみるとも言つてきやがった」

「ロイの言うとおりで。それを踏まえて作戦を伝える」

アザゼルの言葉に全員が頷く。それを確認したアザゼルが改めて口を開く。

「まずシトリー眷属。おまえたちは京都駅周辺で待機。このホテルを守るのもおまえたちの仕事だ。いちおう、このホテルは結界を張っているため、最悪の事態だけは避けられるだろう。それでも何かあったらシトリー眷属が対処してくれ」

『はいー』

アザゼルの指示にソーナの眷属たちが返事をする。

「次にグレモリー眷属とイリナ、ロイ。いつも悪いが、おまえたちはオフェンスだ。この後、二条城に向かってもらう。正直、相手の戦力が未知数な分、危険な賭けになるかもしれないが、最優先は八坂やさかの姫の救出だ。それなできたらソツコーで逃げろ。八坂の姫がいなければあいつらの実験は出来なくなる可能性が高い。……まあ、虚言の可能性もあるが、あの男、曹操そうそうの言動からしたら本当だろう」

曹操、英雄派のトップであり、最強の神滅具ロンギヌスである黄昏の聖槍トウルー・ロンギヌスの持ち主か。あの時の樂しそうに宣言した青年だな。

「戦力的には不安、それにフェニックスの涙も三つしか確保できなかった。各地でテロが起こりすぎているせいで需要が大変なことになっているそうだ」

俺の言葉に少し不安そうになる一同。何が起きるのかわからないのに、フェニックスの涙が決定的に不足している状況だ。厳しい戦いになることは間違いない。

俺はいちおう、最後にいい知らせってやつを追加しておく。

「まあ、代わりと言っちゃまったらなんだが、増援は来てくれるそうだ。そいつは俺よりもマジで別次元に強いから安心してくれていい」

「ロイ先生よりも別次元って、何者なんですか？」

俺の追加情報に一誠が質問してくる。だが、

「それはまだ言えないな。万が一、敵に心を読む的な能力持ちがいたら大変だ」

「な、なるほど」

一誠が頷くと、アザゼルがフェニックスの涙を支給する。

「てなわけで、フェニックスの涙はグレモリー眷属に一つ、シトリー眷属に一つ、ロイにも一つだ。使いどころを間違えるなよ？」

『はい！』

「わかつてるさ。使わないに越したことはないがな」

俺はそう漏らしながらフェニックスの涙を銃剣同様の異空間にしまう。

アザゼルが匙に視線を移す。

「匙、悪いがおまえもオフェンスに参加してくれ」

「俺もつすか!？」

匙は自分を指差しながら驚いていた。が、すぐに理由を理解できたのかアザゼルに訊く。

「……龍王、ですか？」

「ああ、そうだ。おまえのヴリトラ——龍王形態は使える。ロキ戦のようにサポートしてやってくれ」

「そ、それはいいんですけど、あれって下手したら暴走するんですけど………」

「そこはイツセーが何とかしてくれる筈だ。最悪ロイが殴って止めてくれるだろうよ」

途端に不安そうになる匙。そんな匙を一誠が励ます。

「匙、任せとけよ！しつかり繋ぎ止めるからさ！」

「最悪、死ぬほど痛い、そこは頑張ってくれ」

俺の言葉を受けた匙が一誠に掴みかかりながら言う。

「兵藤！本当に頼むぞ！ロイ先生にKOされて戦線離脱はしたくない！」

「だから任せろって！」

やれやれ、元気なことだな。

俺が一度咳払いをすると、一誠と匙が姿勢を正す。

「京都の外にはセラの指揮で包囲網が構築されている。ここで英雄派をやるだけ削る

つもりだ。だろ？」

「ええ☆外の指揮は任せてね☆」

いつも通り明るく言うセラ。まあ、こいつにかかればだいたいの敵はどうにかなるだろう。

「それと、ソーナには連絡した。あっちもあっちで動いてくれるそうだ」

俺が言うと、一誠が手を挙げる。

「ロイ先生、部長たちは？」

「ああ、ちよつとタイミング悪かったみたいだ。リアスたちはグレモリー領にいる」

「何かあったんですか？」

一誠の質問に俺は頷く。

「グレモリー領のとある都市部で暴動が起きたらしくてな、その対応に出ているらしい」

俺の言葉に一誠が心配そうな表情になるが、アザゼルが苦笑しながら言う。

「旧魔王派の一部が起こした暴動だ。『禍カオスの団ブリゲード』に直接関与したものじゃないさ。それでも暴れているらしくてな、あいつらが出ていったわけだ。将来自分の領土になる場所だからな、仕方ないさ」

「それに、義姉ねえさんと母さんも対処に動いているから大丈夫さ。あの二人、マジで強いからな……………」

『あまがみ亜麻髪マダム・ザ・エクステンションの絶滅ベにがみ淑女ルイーン・プリンセス』、『ぎんぼつ銀髪クイーン・オブ・デイバウアの殲滅クイーン・オブ・デイバウア女王』が揃ったのね☆
 なんか、敵がかわいそうになってきたわ……………」

「セラ、声がマジだぞ……………」

「あはは……………」

二人して恐怖を誤魔化すように笑っていると、一誠が言う。

「グレモリー家の人たち、二つ名が物騒すぎませんか!? 『切り裂き魔パイ』だの絶滅だの、殲滅だのって！」

「……おまえも将来大変だな」

アザゼルが一誠の肩に手を置きながら頷いていた。だが、一誠はよくわかっていない様子だ。

アザゼルはそんな一誠に構わずに続ける。

「つと、だいぶ脱線しちまったな。作戦は以上だ。俺も上空で待機しているから、一時間後までにポジションについておいてくれ。怪しい者を発見したら、即連絡だ。——最後に、絶対に死ぬな。帰るまでが修学旅行だからな」

『はい!』

「任せとけ」

こうして、俺たちの作戦会議は終了、各々待機となった。

会議が終わった直後。俺とセラはホテルから出てのんびりと夜風に当たっていた。

「ロイ、死なないでね」

「ああ、わかってるさ」

行動開始前だからあんまりのんびりもしてられないがな。

俺は息を吐き、夜空を見上げる。星が綺麗だが、これから戦闘か。戦闘前のタバコは吸わない、横にセラがいるからな。

「もう、のんびりロイとデートもできなかったわね」

「そうだな。まあ、そのうちまた来ようぜ？」

「それもそうね」

お互い笑みを浮かべながら見つめあっていると、

「キヤアアアアアッ！」

突然の悲鳴が耳に届いた！場所はかなり近い、目の前の角を曲がったところだな！

「ロイ、行くわよ！何かあったみたい！」

「わかってるさ！」

その悲鳴の主がいると思われる場所に到着すると、

「お、おっぱいを、おっぱいを！」

痴漢をしたと思われる男性が数人の男性に取り押さえられていた。

俺とセラは同時に溜め息を吐いた。慌てて損したぜ。

「戻りましょう。何事もなくて良かったわ」

「それはそうだな」

言い切った矢先に、俺の背中に小石か何か当たったような感覚を感じた。同時に足がふらついてしまい、体を支えるように壁に手をつく。

「ロイ？大丈夫？」

セラが心配そうに顔を覗きこんできた。だが、俺は無意識の内にセラの胸に視線がいつてしまう。な、なんだこれ、視線を外せないとかじゃなく、むしろ――、

「ロイ？」

無性にセラの胸を、おっぱいを――触りたい！

疑問符を浮かべるセラの胸にゆつくりと手が伸びていく。動いているのは自分の手の筈なのに、まるで他人事のように思ってしまうのはなぜだろう。

俺の体が無意識の内に動いてしまっただけが、まさに触れようとした瞬間にハツとして手を引っ込める。

俺は自分の手を押さえながらセラに言う。

「だ、大丈夫だ。ちよつと疲れてるみたいだから休んでくる」

「わかったわ。ギリギリまで一緒にいてあげる」

「ありがとうな」

「これぐらい朝飯前よ☆」

こうして、俺は謎の衝動に襲われながらも、セラに支えられながら体力を温存するた

めに部屋に戻ったのだった。

l i f e 0 7 作戦開始

「ロイ、セラフォルー。おまえら、ずいぶん元気そうだな」

休憩を終えた俺と、一緒にいてくれたセラがロビーに戻ってきて早速アザゼルが半目になりながらそう言ってきた。

「ふふふ、何でかは教えてあげないわ☆」

「まあ、色々あつてな……………」

俺はあの後自分の部屋に戻ったのだが、無性にセラのおっぱいに触りたい衝動を抑えられず、セラを抱き枕に仮眠とるふりしてがつつり触ってしまったのだ。

セラも嬉しそうにそれを受け入れてくれたが、ちよつと驚かれた。その後恍惚とした表情をされたが、軽くキスをするまでに自重した。……………ことを後悔している自分がいる。

「とりあえず、作戦に支障はないな？」

「ああ、問題ない」

「大丈夫よ☆」

アザゼルの確認に俺たちは頷く。謎の衝動はどうか収まった。が、いつ爆発するか

わからないのは不安かもしれないが、今はそれどころじゃない。

俺はセラと別れ、一誠たちのもとに向かう。さっさと切り替えないとな。

「ロイ先生、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

一誠の質問に頷きながら答える。多少ダメでも、八坂^{やさか}だけは助け出さないとならないからな。

俺は咳払いをして時計を確認、会議終了からきっかり一時間だ。

「よし、おまえら、行くぞー！」

『はいー！』

一誠たちの返事と共に作戦は開始される。目的地は二条城、英雄派の野郎どもが待つ場所だ。

ホテルを出た俺たちは京都駅のバス停に来ていた。

ここからバスで二条城を目指す予定だ。一誠たちは冬服の制服を着ており、ゼノヴィアとイリナは教会の戦闘服も下に着ているそうだ。いざという時は脱いで戦うのだから。

俺は上下とも黒のスポーツウエアだ。少し寒いが動きやすいからな。それで、ロスヴァイセは――、

「うっふ………」

口を手で押さえて吐き気と戦っていた。体調は回復しきれなかったようだ。そのロスヴァイセはヴァルキリー時代からの鎧に身を包んでいる。

それはそれとして、鎧越しにもわかるロスヴァイセの胸に目がついてしまうのだが、気にすることでもないか。

俺がロスヴァイセの胸にチラチラ視線を送っていると、

「赤龍帝！ 私も行くぞー！」

九重が一誠の背中に飛び乗った！ この子は裏京都で待機しているはずだったんだが！？

俺同様に驚愕しながらも一誠が訊く。

「九重!? 待っていろって言われなかったのか!？」

「言われた。じゃが！ 母上は私が………私が救いたいじゃ！ 頼む！ 私も連れていってくれ！」

九重の気持ちが変わらないわけではない。何かしらの切っ掛けになるかもしれないが、ここからは危険すぎる。

俺はそう判断して九重を剥がそうと手を伸ばすと、俺たちの足下に薄い霧が立ち込め

てくる。

ぬるりとした気持ち悪い感覚の霧、これは昼間のものと同じだ！確か、『絶デイメンション・ロスト霧』とかいう神滅具ロンギヌスのひとつ！

この現象を把握したとき、対処する暇も、手段もなく俺たちは霧に覆われた。

気がつくとき、そこは見知らぬ場所だった。

「ここは、北野天満宮ですね。……………うつぶ」

横にいたロスヴァイセが吐き気混じりに解説してくれた。北野天満宮、二条城の北西ぐらゐの位置だった筈だ。

改めて周囲を見渡してみると、俺とロスヴァイセ以外誰もいない。昼のように別空間に転移させられたようだ。

二人きりになると、妙にロスヴァイセのことを意識しちまうな。どうしたもんか……………。

俺は気をそらすようにケータイを取りだし、一誠に連絡する。

三回の呼び出し音の後、一誠が出た。

『ロイ先生！これって——』

「先手を打たれたな。こっちは北野天満宮だ。そっちは？」

『京都駅の地下ホームです。九重も一緒にいます。それ以外の皆とはバラバラですけど……』

「わかった。とりあえず、おまえは木場に連絡しろ。俺はアザゼルに連絡してみる」
『わかりました。集合場所は二条城でいいですよね？』

一誠の確認に俺は頷き、懐に入れていた地図を出す。

「ああ、いちいち拾いに行っていたら時間がかかっちゃう。現地で落ち合おう」
『はい、後で会いましょう』

一誠はそう言うのとケータイを切る。俺はそのままアザゼルに連絡してみるが繋がらない。連絡用の魔方陣を展開してみるがそちらもダメだ。

俺は溜め息を吐き、周囲を見渡してロスヴァイセに言う。

「とりあえず、二条城を指すぞ。一誠たちを待たせるわけにはいかない」

「はい。行きましょう」

ロスヴァイセが頷いて歩きだそうとすると、

「ぎゃー！」

「ぐぎゃー！」

「ぎぎゃー！」

どこからか現れた、見たこともない生物に取り囲まれていた。

俺は銃剣を取りだし、ロスヴァイセが魔方陣を展開する。

「ロスヴァイセ、援護を頼む」

「わかりました。——来ます！」

ロスヴァイセの忠告と共にその異形の生き物が飛びかかってくる！

俺は銃口を飛びかかってきた生き物に向け、一気に引き金を引く。滅びの弾丸が直撃した生き物は霞のように消えていく。

俺は一気に生き物の群れの中央まで踏み込むと、両腕を広げて引き金ひき、その場で独楽のように回転する！

近づこうとした生き物は刃に斬られ、距離をとった生き物は滅びの弾丸の餌食になっていく。

俺は回転を止め、近づいてきた生き物に刃を突きつけ、弾丸に多めの魔力を込めてから引き金をひく！

威力を増した弾丸は生き物を貫通した後、他の生き物も貫いていく。

俺は生き物を切り捨てながらロスヴァイセに言う。

「あれが一誠たちが言っていたアンチモンスタールか。見た目の割に、存外脆いな」

「そうですが、油断は禁物です！」

ロスヴァイセがそう言いながら無数の魔方陣を展開、魔法攻撃でアンチモンスターを風ぎはらつていく！だが、顔色が悪い！

「ロスヴァイセ、あんまり無理するなよ。俺が片付けっから」

「そんなわけには、うつぷ……………」

ロスヴァイセが再び込み上げた吐き気を抑えていると、

「ぎぎぎやー！」

その背後から飛びかかるアンチモンスターが！

「ロスヴァイセ、動くなー！」

俺はすぐさま銃口をロスヴァイセの背後に向け、再び引き金をひく！

「えっ？」

ロスヴァイセは自分が撃たれると思ったのか驚愕の表情を浮かべるが、弾丸が顔の横を通りすぎて背後にいたアンチモンスターを吹き飛ばしたことを確認して、一転してホッと息を吐いていた。

「ロイ先生！そこは『避ける！』とか『危ない！』でいいと思います！」

「そんなこと言ってる暇があったら俺が何とかするよ！」

俺はそう言いながら右の銃剣でアンチモンスターを突き殺し、背後に向けて左の銃剣を向けて引き金をひきまくりアンチモンスターを蹴散らす。これで、だいたい片付いた

な。

俺は周囲を見渡しながらそう言うのと、

「やはりアンチモンスタ―では荷が重いかったか」

「そのようだな。だが、多少は消耗したはずだ。潰すぞー！」

俺とロスヴァイセの前に二人の男が現れた。英雄派の制服を着ているってことは、

「敵だな」

「そのようですね」

俺とロスヴァイセは再び構える。英雄派の男たちも構えると、俺から見て右手側の男の右腕に籠手が装着され、左手側の男の近くに氷の鳥が出現した。

セイクリッド・ギア
「神器、まあ、当たり前か」

「右の方のあれはトウワイイス・クリティカル龍の手。左の方のものは、わかりませんが、サポートよりのものだ

と思います」

ロスヴァイセがわかる限りで情報をくれた。左はともかく右は厄介だな。

俺は銃剣を剣モードに変えながらロスヴァイセに言う。

「ロスヴァイセ、あの鳥遣いは任せる」

「わかりました」

俺が右に歩くと籠手をつけた男があわせるように歩く。あちらも、あの男が俺とやる

気のような。

俺が飛び込もうとすると、籠手の宝玉が輝き始め、

「バランス・ブレイク禁手化ッ！」

男の叫びと共に光が弾け飛ぶと、そこには全身鎧フルートアーマーに身を包んだ男が立っていた。

くそ！ バランス・ブレイカー禁手できるのかよ！面倒だな！

俺は口には出さずに愚痴ると、男が一直線に突っ込んでくる！男はその勢いのまま拳を放ってくるが、俺はスウエーしてそれを避ける。

次に上段回し蹴りをしてきたが、態勢を低くしてそれを避け、無防備な膝の裏を斬りつける！

「がっ！」

膝を斬られ態勢を崩した瞬間、今度は鎧が薄い肩の付け根に刃を突きつける！

男は刺された勢いで両膝をつき、兜越しに俺を睨んでくる。俺はまっすぐ睨み返ししながら右手を剣から離して直刀を生成、そして、

「恨みたけりや恨め」

直刀で首をはね飛ばした。どんなに鎧が堅くても、必ず装甲が薄い部分がある。そこを打てば、生身でも鎧装着型の禁手バランス・ブレイカー手を倒せる。動きはオーラを見ればわかるからな。

ロスヴァイセの方に目をやれば、そちらも終わった様子で息を吐いていた。俺は懐からタバコを取り出して火をつける。

久しぶりに紫煙を吐き出し、睨んできているロスヴァイセに言う。

「たまには一服させてくれ。最近吸ってないんだからさ。昼に愚痴に付き合ってたんだろ?」

「ぐぬぬぬ!それを言われてしまうと、わかりました!今回は見逃します!」

「ありがとよ」

俺は礼を言いながら紫煙を吐き出し、ちらりとロスヴァイセの胸に目をやる。意外とあるんだな。セラよりも大きいか?

俺はそんなことを考えた途端、再び無性に胸が触りたくなってきてしまった!だが、この場にいる女はロスヴァイセだけ、触れるわけがない!

俺は自分を落ち着かせるように再び紫煙を吐き出すが、全然落ち着かねえ!

俺はタバコを携帯灰皿に押し込むと大股でロスヴァイセに歩み寄り、両肩に手を置く。

「え?ど、どうしたんですか?」

ロスヴァイセが顔を赤くしながら慌てるように言ってきたが、それを無視して、

「ロスヴァイセ、悪い。もう我慢できん!」

「えい！」

俺はロスヴァイセの鎧の隙間をすり抜けるように手を伸ばし、そのままおっぱいに触れる！うん！セラ以上に指が埋まるぞ！

俺はわしやわしやと五指を動かして、ロスヴァイセのおっぱいの感覚を堪能する。

驚愕して硬直していたロスヴァイセから時々漏れる甘い声がさらに俺を攻撃してくる！や、やばい、鼻血吹きそうだ……。

俺がそう思った瞬間、

「キヤアアアアアッ！」

ロスヴァイセの悲鳴と共に拳が放たれた！もちろんロスヴァイセのおっぱいを堪能していた俺は回避なんてできることはなく、

「くぼあああああつ！」

豪快に吹っ飛ばされた！だが、後悔はしていない！これは名誉の負傷だ！

一誠、おまえのおっぱいに対する思い、俺にもわかったぞ！

l i f e 0 8 接 触

英雄派の構成員とアンチモンスターを蹴散らしながら、俺——兵藤一誠は二条城前の駅ホームにたどり着いた。

そのまま二条城の東大手門に向かうと、他のメンバーも集まっていた。俺が最後のようだ。

「わりい、遅れ——」

「ぐぼあつ！」

「はあ………はあ………」

謝りながら近づいたら、ロイ先生がロスヴァイセさんに殴られていた。ロイ先生の両方の頬が真っ赤になっている辺り、何回か殴られているのかもしれない。

そうなる過程を見ていたであろうメンバーは、何とも言えない複雑な表情になっている。

俺と九重^{くのう}が顔を見合わせていると、

「ロスヴァイセ、もう一回だけでいい！頼む！」

「嫌ですよ！いきなりどうしたんですか!？」

綺麗な一礼をして頼むロイ先生。ロスヴァイセさんは顔を真っ赤にしながら怒りを隠そうともせず続ける。

「さつきからことあるごとに『おっぱいを触わせろ』って、レヴィアタン様に怒られますよ!？」

「セラはセラ、おまえにはおまえの良さがあるんだよ! わからないのか!？」

「胸に関してはわかりたくありません!」

ど、どうしてしまったんだ、ロイ先生は。おっぱいを触らせろって、普段どころかどんな状況でも絶対に言わないようなセリフを何の躊躇いもなく……。

俺は首をかしげながらも皆の状態を確認する。服とかは破けているけど、目立った怪我はしていないようだ。

「がはっ!」

再び殴られたロイ先生を除いて。本当にどうしたんだろう。

それはそれとして、ゼノヴィアのデユランダルが装飾された鞘に入っていることに気がついた。攻撃的なオーラが漏れていないし、異空間にしまわなくても大丈夫なようだ。

あれが、例のデユランダルのオーラを抑える術ってやつなのか。

俺は横目でロイ先生とロスヴァイセさんを見ながら木場に訊く。

「それで、ロスヴァイセさんとロイ先生は……」

「よくわからないけど、ロイ先生がロスヴァイセさんの胸を触ったらしいんだ。戦闘中の偶然ではなくて、故意に」

木場も困惑した様子だ。本当にどうすればいいのか。これだと戦闘どころじゃない。

「あーもう！いい加減にしてください！」

ロスヴァイセさんの叫び。それと同時に響き渡る打撃音。ロスヴァイセさんの渾身の拳がロイ先生に突き刺さったようだ。

吹っ飛ばされるロイ先生を眺めていると、俺の足下に何かが転がってきた。これは、赤い宝玉？

俺がその宝玉を拾い上げると、ドライグが何かに気づく。

『これは……』

「どうした、ドライグ？」

俺は皆にも伝わるように声を出す。何かの形で力になってくれそうだからだ。
俺たちの横では、

「ハッ！俺は、何を……？」

「知りません！」

「あぶなっ!?!」

ロイ先生がロスヴァイセさんの拳を回避していた。表情は本当に焦っているものだ。先程までの謎の潔いさぎよさは感じられない。

『相棒、これはおまえから飛び出していった可能性だ』

な、なんだって！セイクリッド・ギア 神器の中に潜り、先代の残留思念に渡された箱。その中身が、この宝玉なのか!?

「ちよつと待て！俺が何をした!?!」

「今さら知らないふりですか!?!ふざけないでください!」

「だから危ないって!」

ロイ先生とロスヴァイセさんの攻防を無視して俺はドライグに訊く。

「で、どんな感じだ?」

『……………』

急に黙りこむドライグ。何か危険なものでも見つけてしまったのだろうか。

「ドライグ、教えてくれ」

『あ、ああ。よく聞け。箱の中身、おまえの可能性は……様々な人間と一人の悪魔の体を使って旅をしていたようだ。あ、相手の、ち、乳に触れながら』

「な、なんだって……………?じゃ、じゃあ、最近頻発していた痴漢騒ぎやロイ先生がおっぱいを触ろうとしていたのって……………」

『俺たちのせいだな』

俺が気まずそうにロイ先生の方を見ると、

「わかったから！悪かったって！だから勘弁してくれ！」

「許しません！」

いまだにロスヴァイセさんから逃げて回っていた。ロイ先生なら取り押さえられると思うけど、そこはロスヴァイセさんを気遣っているのかもしれない。

「とりあえず、どんな塩梅あんばいだ？」

『まだわからんな。力は高まっているのはわかるが。しかし、胸を触って力を高めるとは、これでいいのか、おまえの可能性は……………』

「言うな！俺だつてリアクションに困つてんだよ！」

俺がドライブグとあーだこーだ言い合っていると、ふいに俺の肩に手が置かれた。

「一誠……………」

俺の背後にはボロボロのロイ先生が。ロスヴァイセさんは肩で息をしながらも落ちていた様子だ。今の話を聞いていたのかもしれない。

それはともかく、

「ロイ先生、ごめんなさい！」

「後で覚えてろよ。アーシア、ちょっと頼まれてくれ」

「あ、はい！今やります！」

素直に謝ったら死刑宣告が返ってきた！こ、これは覚悟を決めておかないとダメかもしれない。

とりあえず、ロイ先生のダメージをアジアが回復させると、鈍い音と共に巨大な門が開いていく。

回復が終わったロイ先生が吐き捨てる。

「つたく、こんな演出まで用意しやがるとは、舐めやがって」

さっきのこともあったから、余計にキレている様子だ。だが、ロイ先生は自分を落着かせるように息を吐き、俺たちを見渡して頷く。俺たち頷き返すと、二条城の敷地へと歩を進めた。

「僕が倒した刺客は本丸御殿で曹操が待っていると書いていました」

俺——ロイは木場の言葉に頷くが、それ以外のことを考えてしまう。

ロスヴァイセの胸を触ったって、俺はどうしちまったんだ？本能を理性で抑えるのは慣れてるが、やはり修行不足か？いかん、何をしたのかうろ覚えになってる。

俺は首を振り思考を切り替える。ここからは死線になる。一瞬の油断が命取りだ。

二条城の敷地内を進み、二の丸庭園を抜け、本丸御殿を囲む水堀が見えてくる。そして本丸御殿に続く櫓門やぐらもんを潜る。

そして、到着したのは日本家屋が立ち並ぶ場所だった。庭園から何まで本物そっくりだ。

一誠たちが英雄派の気配を探っているが、俺は庭園の一カ所に視線を送る。

「演出まで行き届いているな、小悪党が………」

「そう言われると、この空間を用意したかがあります」

俺の言葉に返しながら、その男は姿を現す。

「俺たちの中でも下位から中堅の使い手でも、バランス・プレイヤー禁手使いを倒すとは、やはり驚異的だ」

槍を手を持った青年——曹操がそう言う。あいつが英雄派のトップであり、最強の神滅具、『黄昏の聖槍』の使い手。

曹操に続いて構成員と思われる複数人の影が建物から現れる。そいつらを一瞥すると、あの男、小次郎に目が止まった。小次郎もそれに気づいて不敵な笑みを浮かべる。

それにしても、あいっただけ浮いているな。英雄派の制服ではなく袴かみしもとかいう侍の服に手甲を付けている。

「母上ー！」

九重が叫んだ。九重の視線を先にはあの絵画で見た女性が佇んでいた。あの人が八坂やさかのようだ。

「母上！九重です！お目覚めください！」

九重の声に八坂は反応しない。瞳も陰つており、感情というものを感じられない。

九重は曹操たちを睨みつける。

「貴様ら！母上に何をした！」

「少しばかり我々の実験に協力してもらうだけですよ、小さな姫君」

曹操はそう言うと、槍の石突きで地面を軽く叩く。その瞬間、

「う……………う、うああああああつ！」

八坂が悲鳴をあげはじめ、様子が激ていく！体が光り輝き、その姿が変貌していく！
 どんどん大きくなり、九本の尻尾も膨れあがっていく！

オオオオオオオオオオッ！

夜空に響く九尾の咆哮。俺たちの眼前に巨大な狐の怪物が現れた！フェンリルと同じぐらいの大きさだな。

フェンリルもフェンリルでヤバイと感じたが、こっちもこっちで危険な臭いがプンプンするぞー！

「曹操！おまえ、何をするつもりだ!？」

曹操は槍の柄で肩を叩きながら答える。

「簡単なことですよ、ロイ殿。この都市の九尾の力を使い、この空間にグレートレッドを呼び寄せる。本来なら龍王を使ったのですが、それはさすがに無理でしたので、代用させていただきました」

「グレートレッドを呼び寄せてどうする？ オーフイスが邪魔だと思っっているとは聞いたが、おまえらじゃ殺せねえよ」

「確かに、我々のボスはグレートレッドを排除しようと考えていますが、確かに我々では殺せない。だから、とりあえず調べてみようと思っただけですよ。謎の多いあのドラゴン、その謎がひとつでも解ければ大収穫だ。『龍喰者』ドラゴン・イーターがどれぐらいの影響を与えるか、とからです」

なんだ、龍喰者？ドラゴン・イーター聞いたことないな。龍殺しの神ドラゴン・スレイヤーの神器か？

聞いたことのない単語に俺は首をかしげるが、ひとつだけ曹操に言う。

「よくわからねえが、ろくでもないことになるのは確かだな。ここで止める………ッ
！」

俺の言葉と共に、ゼノヴィアがデュランダルを曹操に向ける。今さらだが、デュランダルがずいぶん変わっているな。鞆がついたのか？まあ、話には聞いていたがな。

デュランダルの鞆の各部分が部位がスライドしていき、変形していく。

鞆のスライドした部分から聖なるオーラが噴出し、刀身を覆い尽くすと、極太の刃と化していく！

見ないうちにずいぶん変わったな。デュランダルのオーラが無駄なく攻撃に回されている。横にいる俺たちには被害なしだ。

「ロイ先生の言うとおりだ。あいつらは危険だ、ここで屠る」

ゼノヴィアの宣戦布告に木場も続く。

「確かに、ゼノヴィアに同意だね。彼らは危険だ」

「同じくー！」

イリナも応じながら光の剣を作り出す。

「学園の皆とダチのためだ！ヴリトラ、行くぞ！」

匙の言葉と共に、腕、足、肩に黒い蛇が出現し、体を這いだした。全身に黒い蛇をまよわせる匙の足下から黒い大蛇も姿を現す。

よく見たら左瞳が赤くなっており、まるで蛇の目のようになっている。

なかなかのプレッシャー。アザゼル、なかなか無茶をしたようだな。

匙の足下から現れた大蛇はとぐろを巻き、そして低い声音で匙に訊く。

『我が分身よ。獲物はどれだ？あの聖槍か？それとも狐か？どれでもよいぞ』

ヴリトラの意識が回復してやがるのか。匙の意識が持つていかれないことを祈るとりあえず、あいつの能力は相手を捕らえるものが多い。八坂の相手を頼むか。

俺がそう判断した矢先、ゼノヴィアがデュランダルのおーらを解放しながら天高く掲げていた！天を突く勢いで十五メートルをゆうに越える聖なるおーらの刀身が発生している！

「ゼノヴィア、おまえ、何をするつもりだ!?!」

「いやなに、少しばかりこのデュランダルを試そうと思つてな。とりあえず初手だッ!」
ゼノヴィアはそう言いながらデュランダルを振り下ろした！巨木が横倒しになるように、デュランダルの一撃が曹操たちに向かっていく！

その一撃は曹操たちだけでなく、本丸御殿の家屋を丸ごと吹き飛ばし、遙か前方の風景まで飲み込んでいく！

俺たちはそれを見ながら足を踏ん張る！下手に動いたら消し飛びかねない！

攻撃が終わると、眼前には崩壊した本丸御殿と奥の町並みが。なんて攻撃力だ！俺の全力を軽く越えてるぞ!?

「ふー」

ゼノヴィアは一仕事終えたように額の汗を拭っていた。

「ゼノヴィア、飛ばしすぎだ。後でバテるぞ」

「開幕の一撃は必要だろうか？」

「やれやれ……」

そういうえば、ロキの時も似たようなことをしていたような。まったく、こいつに言葉は届かないか。

「安心してくれ、加減はしてある」

加減してこれって、全力はどうなるんだよ。まったく、もう少しテクニクのことも考えて欲しいな。まあ、その話は後だな。

「デュランダルとエクスカリバーの同化、想像以上のパワーだな」

「何ですかそれ!？」

一誠が驚いていると、イリナが挙手して解説を始める。

「簡単には言うけど、デュランダルの刀身にエクスカリバーを被せたの。エクスカリバーで覆うことでオーラの漏れを防いで、二つの聖剣の相乗効果で破壊力も底上げされているのよ!」

「デュランダルの強すぎるオーラをエクスカリバーで抑え、いざつてときはそれを解放

できるってことだ。わかったか？」

「は、はい！何とか……………」

俺がさらに簡単にまとめて一誠に教えた。本当にわかったのだろうか。

「なるほど、二つの聖剣を一つに、か。なかなか面白いことを考えるものよな」

突然の声。だが、この声は——

「佐々木小次郎！」

「おうさ。よい一撃であつたが、少々遅いな。避ける暇があつたぞ」

俺が吐き捨てるように名を呼ぶと、小次郎は当然のように頷きながら言った。

その言葉が合図になつたのか、地面から英雄派のメンバーが出てくる。体は薄い霧で覆われている。見た目は無傷、あの霧で防いだようだ。

とりあえず、ここからが本番ってことだな。

l i f e 0 9 それぞれの敵

地面から出てきた英雄派の面々。

曹操は服についた土を払い、あごに手をやりながら笑む。

「いやー、いいね♪」

本気で楽しそうな一言だ。こいつ、今の状況を心底楽しんでいやがる。

「よく旧魔王派の連中はキミたちをバカにしたものだね。まあ、ロイ殿がそうけしかけたのかもしれませんが……」

「いや、それはない。あいつらは下から来る奴が見えていなかっただけだ。ヴァーリに見放されるわけだよ」

「そうですか。それはそれとして、実験を始めよう」

曹操は清々しくそう言うのと、槍の石突きで地面を叩く。すると、九尾の御大将が輝きだした！

「九尾の狐を使い、グレートレッドを呼び寄せる。ゲオルグ！」

「了解」

制服にローブを羽織った青年、ゲオルグが様々な魔方陣を展開して高速で動かし始め

「了解つと。さーて、外でも連合軍とやりあっているし、彼らがどこまでやれるかわからないところもある。——ジャンヌ、ヘラクレス」

「はいはい」

「おう！」

曹操の呼び声に金髪の女性と、二メートルはあろうかという巨体の男が前に出る。

「彼らは英雄の意志——魂を引き継いだ者たちだ。ジークフリート、おまえはどれとやる？」

曹操の問いにジークフリートと呼ばれた白髪の青年が剣を抜き放ち、その切っ先を木場とゼノヴィアに向ける。

それを見たジャンヌとヘラクレスは顔を笑ませる。

「じゃあ、私は天使ちゃんにしようかな。かわいい顔してるし」

「俺はそっちの銀髪の姉ちゃんだな。随分、機嫌悪そうだけだよ！」

「放つておいてください！」

ヘラクレスの言葉にロスヴァイセが返す。言葉には隠そうともしない怒気が含まれている。さっきのあれを引きずっているようだ。

それは置いておいて、俺の相手は、

「うむ、お主の相手は拙者だ。もとより曹操殿にも話してある」

「ああ。面倒だからな、ここで終わらせる！匙、おまえは九尾の御大将だ！一誠は俺が戻るまで曹操をどうにかしろ！」

「はいっ！」

一誠と匙は返事と共にその場から離れていく。これで、それぞれの相手は決まったな。

俺の言葉を受けた小次郎が不敵に笑む。

『俺が戻るまで』——か。それは拙者を倒せるという絶対的な自信からくるものか？

「まあ、それでも言わないと一誠が困るだろうからな」

「そうか」

俺は銃剣を再び剣モードにして二刀流に構え、小次郎も太刀を引き抜いて構える。

「あの時は要らぬ邪魔が入ったのでな。今回は拙者の全力をお見せしよう」

睨みあう俺と小次郎。お互いの隙を伺い、静寂が訪れる。そして——、

オオオオオオオオオオオッ！

ジャアアアアアアアアッ！

龍王となった匙と御大将が激突した！

それと同時に俺と小次郎は飛び出した！お互いの間合いに入った瞬間、得物同士がぶ

つかり合い激しく火花を散らす！

お互いの突き、袈裟斬りを払いながら一撃を入れる隙を探していく。だが、こいつ、昼よりも動きがいい！

お互いの全力で放った剣撃が激突し、つばぜり合いになる。

「おまえ、昼は手を抜いてやがったのか！」

「いやなに、あの時も全力だったが、昼の自分を越えているだけよ」

——ッ！

たかが数時間で昼よりも強くなっているのか!? こいつ、本当に人間か!?

俺は驚愕しながらも剣に力を込めていき、無理やり押しきり太刀を上に乗く!

小次郎は太刀を手放さなかったが、生まれた僅かな隙を突こうとするが、とつさに放ったであろう柄頭が俺の眼前に迫ってきていた!

俺は舌打ちをしながらもスウエーしてそれを避け、蹴りを放つが、小次郎は後ろに飛び退いて避ける。

やつぱ、こいつやりずれえ! 人間って鍛えるところまでなるのか!?

俺は驚愕しながらも剣を握り直すと、ジークフリートの方から強力なプレッシャーが放たれる!

小次郎は笑むとそちらに目を向ける。俺もつられるようにそちらに目を向けると、

「僕の『龍トウライス・クリタイカルの手』の垂種の禁手、『阿修羅カオスエツジと魔龍アスラ・レウイッジの宴』だ。腕の数だけ力が増す

のが能力だけど、僕には十分すぎるものだ」

阿修羅のように六本の腕を生やしたジークフリートが木場とゼノヴィアを睨んでいた。あいつ、バランス・ブレイク禁手化できたのか。

俺が小次郎に視線を戻すと、今度はジャンヌの声が耳に届く！

「お姉さんの能力は『フレッド・フラックスミス聖劍創造』よ。どんな聖劍でも創れるのよ？でも、これだと本物には勝てないわ。けど、バランス・ブレイク禁手化♪」

ジャンヌの楽しそうな声。見るとジャンヌの背後には聖なるオーラを放つ巨大なドラゴンが現れていた！

「これが『ステイク・ビクティム・ドラグーン断罪の聖龍』。ジークくん同様の亜種よ」

あっちもバランス・ブレイク禁手化かよ！このままだと、あっちもヤバイか。

俺が周りの心配をしていると、今度は狂喜を感じさせる笑い声が聞こえてきた！

「ハツハツハーツ！いいねえ！いい塩梅の魔法攻撃だ！」

ロスヴァイセのフルバーストをくらったヘラクレスだ！あいつ、効いてないのか！？
ヘラクレスが拳を振るとその度に爆発が起こる！あれがあいつの能力か！

「俺の能力は攻撃と同時に相手を爆破させる『バリエント・ドットネーション巨人の悪戯』だツ！このまま爆発シヨーをしてもいいんだがよオ。流利的にやっておかないとな！バランス・ブレイク禁手化ウウウツ！」

ヘラクレスが叫ぶと、その巨体が輝き始める！腕や背中から肉厚の何かが形成されて

いく！あれは、ミサイルか!?

「これが俺の禁手バランス・ブレイカーツ！『超人による悪意の波動』デトネイション・マイティ・コメットだアアアアアツ！」

ヘラクレレスはそのミサイルをロスヴァイセに向けて一斉に放つていく！それを察したロスヴァイセはこの場から離れるように退避していく。

ロスヴァイセには悪いが、あいつの能力は周囲への被害が出すぎちまう。やるならここから離れてもらわないとならない。

ヘラクレレスはそれを理解してなおロスヴァイセを追いかけていく。

俺は改めて小次郎に目を向ける。奴は対してやることもなさそうに太刀を肩に担いでいた。

「おまえは神セイクリッド・ギア器を使わないのか？」

俺の質問だ。英雄派の構成員の大半は神セイクリッド・ギア器使いだ。だが、目の前のこいつは使う気配がない。

小次郎は少し笑むと口を開く。

「使わないのではない。そもそも持っていないのだ。拙者の武器はこの太刀と己の技のみ……」

太刀の切っ先を天に向けながらそう言う小次郎。そして、再び構えて宣言した。

「拙者はこの二つのみでどこまで行けるのかを試したい。英雄派にいるのもそのため

よ。ロイ・グレモリー殿、改めて始めよう。拙者はお主を越えねばならぬ！」

一切の曇りが無い瞳。あいつは自分の思いをぶちまけたようだな。なら——、
「俺にも守らなきやならないものがある。それは譲れねえし、譲る気もねえ。だから——」

俺も剣を握り直し、まっすぐと小次郎を睨む。

「おまえを——殺すッ！」

俺と小次郎は同時に飛び出し、お互いの得物を激突させた！

l i f e l o 脅威の英雄

俺と小次郎の得物同士がぶつかり合い、甲高い金属音が耳元で鳴り響く。

そして、再び始まったのはお互いの剣撃の読みあい、撃ち合いだ。

俺の袈裟斬りを避け、小次郎は突きを放ってくる。それを右の剣で反らして左の剣を振り下ろせば、いつの間にか引き戻されていた太刀で防がれる。

金属が擦れあう嫌な音を聞きながら、俺は後ろに飛び退いて小次郎を睨む。

小次郎は口元に薄く笑みを浮かべると再び構える。俺も深く息を吐き、柄を握り直す。

片方を投げて注意を逸らすのも、落下した剣を当てるのも無理。真正面から行っても受け流されるか、つばぜり合いになる。だったら――！

俺はジグザグの軌道で動き出す！フェイントを織り混ぜ、いつ仕掛けるかを惑わす。久しぶりの全速力だが、小次郎はこちらを目で追ってきている！

俺は一気に小次郎の背中を取るよう加速し、肉薄した瞬間に剣を振り下ろす！目で追えても反応しきれていないな！

俺がこの一撃は入ると確信していたが、

「舐めるなあッ！」

小次郎が体を縦軸回転。遠心力を乗せた一太刀を俺に放ってきた！

俺は一刀でそれを止め、もう一刀を構わずに振り下ろす！が、小次郎はうまく体を捌いて避けて見せた！

俺が追撃しようとしたが、小次郎はすばやく後ろに飛び退く。頬には汗、相当焦ったようだ。

小次郎は汗を拭いながら太刀を肩に担ぐ。

「いやはや、反応が遅れてしまったわ。力勝負は苦手なのだがな」

「弱点を晒すか。舐められたもんだ」

俺が肩をすくめながら言うと、小次郎も不敵に笑む。

「弱点が知られても、そこを突かせなければ良いのだ。……それが難しいのだがな」

小次郎は苦笑するように言った。確かに、こいつと力比べの状況にすることは難しいだろう。

俺は左の剣を逆手持ちにし、改めて突撃するために足に力を込めていく。

一気に接近して叩き斬るッ！

やる事が決まればあとは簡単だ。それを実行するのみ！

俺はその場を飛び出して小次郎の元に向かう！真正面からの接近に小次郎は一瞬目

を見開いたが、すぐに構える。

小次郎の間合いに入り、小次郎が水平に太刀を振ろうとした瞬間、俺はその場を跳躍する！

俺の足を刃の銀光が通り過ぎていき、驚愕する小次郎の上も通り過ぎた瞬間に体を捻り、右の剣に落下のエネルギーも乗せた一撃を放つ！

小次郎は小さな舌打ちをすると体を反転、俺の一撃を受け止めた！同時に足が地についてつばぜり合いになる。

甲高い金属音が二条城に響き渡るが、それを無視して剣を押し込んでいく。

いい反応だが、まだだ！

俺は剣を押し込みながら左の剣を逆袈裟に振り上げる！

小次郎は押しきられる覚悟で後ろに下がろうとするが、遅いな！

左手に何かを斬った感覚。だが、浅いか！

後ろに飛び退く小次郎。腰から肩にかけて袴かみしもが斬れており、血が滲んでいる。

小次郎は荒くしなった息を落ち着かせるように努めているが、休ませるかよ！

俺は左の剣をブーメランのように投げつけ、同時に駆け出す！

小次郎は慣れた様子で投げつけた剣を上に弾きあげ、俺との接触到に備える。が、俺は再び跳躍。今度は頭の上を通りすぎるのではなく、もつと上までだ。

俺は打ち上げられた剣を回収、先ほど以上の落下のエネルギーを乗せた二刀を振り下ろすが、小次郎は素直にその場を飛び退いて回避する！

俺は飛び退いた小次郎を追撃するために一気に間合いを詰めて斬り込んでいく！

再びの斬りあい。激しく火花を散らせながら俺と小次郎は競り合う。だが、疲労が出てきたのか、小次郎の動きが鈍くなってきている！

俺はバツ字に剣撃を放ち小次郎を怯ませると、一気に踏み込みながら突きを放った！

小次郎は太刀の刀身でそれを受けながら勢いを殺し、殺しきれなかった勢いを受けて十歩分後ろに下がる。

小次郎は地面をスライドするように勢いを殺し、息を吐いた。

「なりふり構わず、か。今さらだが、お主は勝つためには手段を選ばない者だったのだな」

「戦争経験すりや、嫌でもこうなるもんだ」

俺も軽く息を整える。そろそろ決めて、誰かの援護に行かないとな。

俺が再び構えると、小次郎は再び不敵に笑む。こいつ、常に余裕は崩さないってことか。

「ならば、それを正面から打ち負かすまでよ」

「なに？」

俺が聞き返すと、小次郎が構えを変える。

昼に見せたものと同じだ。重心を低く、太刀を地面と水平に、俺に背中を見せるほどの無防備な構え。

一気に踏み込んで斬ろうとも思ったが、第六感がそれをさせない。下手に近づけば、殺られる……っ！

俺が防御の構えを取ろうとした瞬間、

「我が秘剣——『燕返し』ツ！」

小次郎が技名を告げる。俺の頭部に向けた一撃、左肩に向けた一撃、脇腹に向けた一撃、それらがほぼ、いやまったく同時に放たれる！

「——ツ！」

俺は反射的に後ろに下がりながら頭部と脇腹に向けられた一撃を受けたが、同時に左肩を激痛が襲いかかった！

「チツ！」

俺は舌打ちをしながら後ろに飛び退く。また左肩か……。くそ、いてえ……………！

俺は歯を食い縛って痛みに耐えながら、左肩を押さえて小次郎を睨む。

小次郎は不敵に笑むかと思いきや、驚愕の表情を浮かべていた。

「頭部と腹部を守る」ことで肩を捨て、刹那の時間で半歩下がることで腕の切断は避けた、

か。いい判断だ」

「それは、ありがたいが。どんなトリックだ？」

「トリック？そんなものはない。ただ素早く太刀を三度振ったまだよ。だが、少々疲れるのでな、そう何度も使えるものでもない」

——ッ！

ただ素早く振っただけ!? たったそれだけで同じタイミングで三連撃がとんできたのか!?

俺が驚愕していると、

「イリナさん!」

アーシアの悲鳴混じりの叫びが聞こえた!

「あら? こちらはまだやってるんだ?」

声の方に目を向けると、ジャンヌが血まみれのイリナを抱えていた。

「ま、彼らよりはやるんじゃないの?」

次はジークフリートの声。奴は六本の腕で木場とゼノヴィアを抱えている。

「俺がそちの奴とやれば良かったぜ」

ヘラクレスが何かをこちらに放り投げってきた。俺はとっさにそれを受け止めたが、それは銀髪を血に濡らしたロスヴァイセだった。

くそ……っ！やられちゃったのか………！！

見れば、鎧を纏った一誠も膝をついている。あいつはまだやれる気のようにだが、限界が近いようだ。

『グオオオオオオンッ！』

ヴリトラの咆哮。見ると、ヴリトラが御大将の尻尾に縛られて苦痛の声を漏らしていた。

俺は怒りを押さえるために歯を食い縛り、曹操たちを睨む。

曹操が柄で肩を叩きながら言う。

「悪いな、赤龍帝、ロイ殿。どうやら、ファイナーレだ。あなた方は確かに強い。けれど、英雄には勝てない。悪魔や堕天使、ドラゴン、妖怪が手を結ぶというのなら、英雄として立ち上がらないときさ。人間が魔王やドラゴンを倒すのは人間なのは自然なこと。それが俺たちの行動原理さ。そして、ロイ殿、あなたにはここで死んでいただく」

曹操がそう言うのと、イリナを放り投げたジャンヌ、木場とゼノヴィアをその場に置いたジークフリート、首を鳴らすヘラクレスが俺の方に来る。が、小次郎は不満そうに後ろに下がった。あいつ、俺と一対一で勝負でもしたいのか？

俺は息を吐き、自分を落ち着かせるとロスヴァイセを寝かせる。

俺はロスヴァイセや一誠たちから離れていく。左肩から絶え間なく血が出ているが、

今はそれどころじゃねえ。

俺が足を止めると、相手の三人は俺を囲むように陣取る。

何だろうな、戦争の頃を思い出す。ああ、そうか、コカビエルの時に以来か、ここま
で俺がキレてるのは……………。

俺は両手の剣を異空間にしまい、両手に滅びの直刀を生成する。左腕に力が入らなくな
ってきたなら、軽いこつちのほうがやり易いだろう。

「来な……………」

俺が呟くと共にジークフリートが飛び出して斬りかかってくる！

一本を右で、もう一本を左で受けると残りの四本も振られてくる。

俺は羽を展開して各所に刃を形成、それで残りの四本を受け止める！

「なにつ!？」

「舐めるなっ!」

驚愕するジークフリートを全力で蹴り飛ばすと、ジャンヌが操る聖龍の尻尾が振り下
ろされる！

俺はそれをバック宙でそれを避け、尻尾に直刀を突き刺して動きを封じ、

「らあっ!」

「くっ!」

聖龍にまたがるジャンヌに斬りかかるが、生み出した聖剣で受け止められた！

つばぜり合いをしていたジャンヌは無理やりそれを打ち切ると、聖龍を乗り捨ててその場を退避。すると、

「だっしやああああああっ！」

ヘラクレスがミサイルを放ってくる！

俺は直刀を回転させるように投げつけ、ミサイルを迎撃、撃ち漏らしたミサイルはしつかりと避けていく！

ミサイルを避けきって着地をすると、

『お……い』

謎の音が耳に届く。俺が警戒していると、英雄派の三人も周囲を警戒しているようだ。

『……ば……』

……？「ば」って何だ？

俺と三人が首をかしている、その言葉が耳に届く。

『す……い、お……ば……』

……は……

『大変なおっばい』

「『は？』」

俺と三人の反応が見事にシンクロした。って、何だ今のは！声は、一誠の方からか！

「一誠、どうし——」

「『おっばい！おっばい！おっばい！』」

一誠を中心にして陣形がくまれている!?何だあれ！変な人(?)が一杯いるんだが!?何か、ひとつだけ俺と背格好が似たものがある気が……。

「『おっばい、おっばい、おっばい、おっばい、おっばい、おっばい』」

そんな事はどうでもいい！これはヒドすぎる！

多分これを見ている奴全員がそう思ったはずだ。じゃなきやおかしいって！

「…………おっばいゾンビか」

「うむ。世界は広いな」

曹操と小次郎まで変なことを言い出した!?いや、確かにそう見えるが！

俺が心の中でツツコミを入れてみると、そのおっばいゾンビが何か魔方陣みたいになり始める。

するとイツセーが何か覚悟を決めた表情になる。あいつ、何をするつもりだ!?

「^{サモン}召喚おっばい！」

その声と共に魔方陣的な何かからまばゆい輝きを放ち始め?!そのまま光が強くなっ

ていき、二秒ほど経ち光が止むと、そこには、

「な、何事!? ここは!? イッセーじゃないの! それにロイお兄様!? その肩はどうなさったのですか!? それよりもどうして私はここに!? しよ、召喚されたの!? え? え!」

リアスがいた。着替えていたのか下着姿だ。

……どうしてこうなった。英雄派の連中も反応に困っているぞ。

突然の事の連続に俺たちが啞然としていると、

「な、なんなの!? 光が私を包んでいくわ!」

リアスが光り始めた! どういうことだ!? まったく、わけがわからん!

って、よく見たら光ってるのはリアスじゃなくてリアスの胸か! じゃなくて!

「一誠! 説明しろ! どういうことだ!」

「ロイ先生! 今は静かにしてください!」

お、おうスゲエ迫力だ。戦闘中にあれを出して欲しかったな。

俺が一誠の迫力に圧されるように黙りこむと、一誠が兜を収納してリアスに向けて微

笑む。

「イッセー?」

リアスはなんとも言えない顔してるが、一誠は正面から言う。

「部長! 乳をつつかせてください!」

「ッ!?!」

俺とリアスはその発言に——絶句した。

「よくわからないわ。よくわからないけれど、わかったわ!」

「いや、何でだ!?!」

「ロイ先生!ですから!」

「だああああ!わかったよ!」

俺はしばらく静観（見てはいない）を決め込むことにした。今のうちに体力回復をしたいが、血が足りねえかも。

「いきます!」

おうおう、やれやれ。だが、後で説教させてもらうおう。あいつ、リアスの胸を何だと思っついていやがる!

「……あふん……」

リアスの吐息が聞こえた。その瞬間俺の視界の端に閃光が映る!

「こ、これは!あ、あああああ!」

リアスの声に反応して振り向くと、リアスが光を放ちながら天に昇っていった。

一誠は手を合わせてるし、後で説教じゃなくてポコポコにしてやる!

「なんだったんだ、あれは?」

曹操が言うこともその通りだ。てかその反応が普通だ。すると突然、一誠が凄まじいオーラを放ち始めた。

l i f e l l 増援到着

突然凄まじいオーラを放ち始めた一誠が叫ぶ！

英雄派のメンバーは何かを察して曹操の元に戻っていく。

「モードチェンジッ！『龍牙ウエルシュ・ブラスター・ビシヨツクの僧侶』ッ！」

一誠が足を踏ん張ると、肩から背中にかけてオーラが集まり、何かを形成していく。形成されたのはバツクパツクとキャノン砲だった。静かにだが、キャノン砲にオーラが集まっていく。

「なんだあれ、すげえな……」

俺はぼそりと漏らす。あんなものをくらつちまったら、跡形もなく消し飛ぶぞ。

曹操もそれを察してか、額に汗を流している。そして、

「吹っ飛べエエエエッ！ドラゴンブラスタアアアアアアアアッ！」

一誠のキャノン砲から極大の一発が放射された！足を踏ん張ったはずの一誠が少しづつ後ろに押され始めている！

その一発はまっすぐ英雄派の方に進んでいく。

「おもしろえ、受けてやるぜ！」

ヘラクレスが前に立ちほだかり、一誠の一発を受け止めようとするが――。
 「受けるなッ！避けるッ！」

曹操が叫びながら槍の石突きでヘラクレスを吹き飛ばす！同時に英雄派のメンバーは全員回避行動に移った。

的を失った一発は遙か彼方まで飛んでいき、空間全体を震わせる大爆発と共に町を吹き飛ばした！

なんてバカげた威力だよ！町が消し飛んだぞ？！

名前からして『僧侶』^{レビヨップ}の魔力強化なのか？それにしたって、強すぎる気もするが……。

俺が思考をまとめる前に一誠が再び叫ぶ！

「モードチェンジ！『ウエルシュ・ソニックブースト・ナイト龍星の騎士』ッ！」

一誠はドラゴンの翼を展開し、曹操に向けて突撃する！背中のブーストラしきものが増えており、速度がいつにも増して速いッ！

「まだまだッ！装甲パーッ！」

一誠の叫びと共に鎧の各部が弾け飛んでいき、一気に軽装になった！そして速度はさらに上がる！

今度は防御を捨てた速度特化か！『ナイト騎士』の速度強化の恩恵だな！

テンション上がりっぱなし俺を差し置いて、一誠は曹操に体当たりをかまし、そのま
ま飛び去っていく！

あいつ、急にパワーアップしやがったな。まあ、喜ばしいことだ。そんで、『僧侶』
『騎士』とくれば、次は――、

「モードチェンジッ！ 『龍剛』の『戦車』ッ！」

一気に接近戦に突入した瞬間、一誠の鎧が肉厚なものに変わる。見るからに攻撃と防
御特化、『戦車』の特性だな。

一誠は肉厚となった籠手で曹操を殴り付ける！ 凄まじい速度で曹操は地面に叩きつ
けられ、大量の粉塵が巻き起こる。

空中でも一瞬の攻防を終えた一誠はゆっくりと着地する。同時に鎧が元の状態に戻
り、一誠は膝をついた。

パワーアップしたはいいが、加減ができていないな。そこは慣れとしか言えないかも
しれないか。

血を流しながら立ち上がった曹操が、そんな一誠を見て言う。

「ルールを逸脱したキミだけの特性……………」。

「イリーガル・ムーブだな」

それを聞いて首をかしげる一誠。そのうち、専門用語を覚えておかないとな。
「チェスの用語だ。不正な手、ようはズルだ」

「なるほど……。ん？どうした、ドライグ？」

俺の説明を聞いた一誠は、今度はドライグから話を聞いているようだ。

そして、ひとつ頷くと口元を笑ましながら言う。

「イリーガル・ムーブに、ポセイドン様が持つている槍、トリアンナか。いいね。じゃあ、こいつは赤龍帝イリーガルムーブトリアンナの三叉成槍とでも名付けようかな」

それっぽく名付ける一誠。それはそれとして、

「ア、アーシア、回復頼めるか？いい加減、血が足りなくなりそうだ……」

「は、はい！」

負傷した他のメンバーの回復完了を見計らってアーシアに声をかける。アーシアは少し慌てた様子で俺に回復のオーラを飛ばしてくれた。

それと同時に空間を振るわせる音が鳴り響く。空間が裂ける時特有の独特な音だ。

音の元を見上げれば、空間に穴が開きそうになっていた！

こ、これは、グレートレッドが出てきちゃうのか!?これだと何のために頑張ったのかわからなくなるぞ!?

「始まったようだ」

曹操が血を拭いながら言う。やはりグレートレッドがここに来るのか!?

俺たちの困惑をよそに曹操が皮肉げに言う。

「あの魔方阵、そして今の赤龍帝の新しいパワーが呼び寄せたのかもしれないな」

「よし、『龍喰者』の準備に取りかか——」

ゲオルグが何かを口にしようとした時、疑問を感じたように空間の穴に目を向けた。曹操もつられるようにそちらに目を向けて口を開く。

「これは、グレートレッドではない？この鬨気………ッ！」

空間の裂け目から姿を現したのは、十数メートルほどの、蛇のような体のドラゴンだった！

ようやくか、待ちくたびれたぞ………。

俺はホツと息を吐き、曹操は驚愕するように叫んだ！

「——『ミスチパス・ドラゴン西海龍童』、玉龍かッ」

ウーロン増援の到着だ！まったくと、来ないかと思つたぞ！もちろん増援は五大龍王の一角、玉龍だけではない。現に、曹操の視線は玉龍の背中に向けられている。

そこには小さな人影がひとつ。その人影は玉龍の背から飛び降りた！その人影は高さななかつたかのように着地する。

「『妖』の気流、『霸』の気流。それらによって、この都に漂う妖美な気質がうねっておつたわ」

ウーロン玉龍の背中から飛び降りた人影は年老いた男性であり、その男性はこちらに近づいてく

る。

背丈は幼稚園の年長児ほどであり、全身に金色に輝く体毛を生やした猿のような妖怪だ。

その男性が煙管キセルを吹かしながら、不敵に笑みを浮かべる。

「久しい限りじやい。聖槍のくそ坊主。でかくなつたのおく」

曹操はそれを聞いて目を細めて笑った。

「これはこれは。闘戦勝仏殿。あなたが来られるとは」

「坊主、悪戯がすぎるぜ。せつかく天帝の使者としてやつてたのに邪魔とはのお。神格化した英雄もいれば異形たちの『毒』になるやつもおる。のう、曹操」

「毒、ですか。あなたに称されるなら自慢できるものだ」

曹操が敬意を払っている。まあ、相手が相手だから仕方ないか。

「ロイ先生、あのじいさんは？」

イツセーが聞いてきた。そういうえば説明していなかったな。

「ヴァーリチームに美猴つていたろ？よくリアスと喧嘩する孫悟空の」

「はい」

「そのの先々先々代つて言えいいのか？まあ、手っ取り早く言うとお初代だ」

「てことは、あのじいさんが西遊記の!!」

「そういうことだな」

俺が解説を終えたところで初代孫悟空がこちらに声をかける。

「赤龍帝の坊や。よー頑張ったのお。悪魔の若造はもうちと頑張れい。まだ若いじゃろ
うが。ま、あとは儂とウーロンに任せい。ウーロン、お前は九尾を頼むぜい」

初代孫悟空の発言にとうのウーロンは、

『龍使いが荒いぜまったく！ただですら入るのに白龍皇の仲間の魔女っ子の力を借りた
のによ！っーか！ヴリトラじゃねえか！どれくらいぶりだ？』

なんか、イメージと違ってうるさいな。もつとタンニンみたいなのを想像してい
た。

『変わらずだな』

ドライグが俺にも聞こえる声でそう言うってことは、昔からそうなんだろ。

「あとで色々と食わせてやる」

初代はそう言つて煙管を吹かした。

『あとでたらふく食わせてもらうぞ！オラオラオラ！オイラは強エエエぞ！』

文句を言いながらもやってくれるあたり流石だ。

「手っ取り早く曹操の子孫にお仕置きせんとなあ」

初代が言った瞬間ジークフリートが飛び出した！

「お猿の大將！あの孫悟空なら相手にとって不足は——」

「伸びよ、棒よ」

初代の眩きと共に持っていた伸びた棒が急激に伸びていき、そのままジークフリートを吹っ飛ばした！

ジークフリートを一発で瓦礫の中に。もう俺たちがやることはないな、この状況だと。

「儂にとつては不足じゃったようだの。若い魔劍使い」

いやはやまったたく強いな。そこにウーロンの悲鳴が聞こえてくる。

『この狐強えぞ！おい！』

尻尾に捕まってるのか。そして相変わらずうるさい。

「気張れい」

嘆息しながら初代が言うが、

『オイラは龍王の中じゃ一番の若手なんだぞ！まだピチピチでい！』

「よく言うわな。その若手が一番に引退なんぞしおつてからに。若さで乗り切れい」

『……………わかつたよ、がんばりたい！』

いいのか？そんなもんで。でも、まあ、いいコンビだな。

そこでゲオルグが八坂姫を拘束していた魔方陣を解き、そのまま初代に手を向けた。目的を初代迎撃に変えたようだ。

「捕縛する霧よ！」

初代を霧が包むが、

「天道、雷鳴をもつて龍のアギトへと括り通す。地へ這え」

初代が呪文と思われる言葉を呟き棒で地面を叩くと、一瞬にして霧が霧散した。言った通り、次元が違うな。

「まだまだあまいのう。その赤龍帝のように対話したらどうじゃ？」

さりげなく一誠を誉めたな。一誠もなんか嬉しそうだ。

「槍よー！」

今度は初代に聖槍が伸びてくるが、初代は指先だけでそれを止めた！

「鋭さはよし。じゃがそれだけじゃな」

曹操もそれを聞いて少し動揺してるな。

「曹操、ここまでにしよう。このままだと負ける」

ジークフリートが瓦礫から出てきて曹操に言う。

「退却だな。確かにこれ以上は」

曹操の一言に英雄派は反応して集合する。

「ここまでにしておくよ。では再び見えよう」

逃がすかよ！俺は直刀を生成しようとするが、一誠がオーラを溜めて籠手にキャノンを作りだす。

「いいぜ、坊や。手伝ってやるわい」

初代がイツセーの鎧を軽く叩く。するとイツセーからオーラが噴き出てきた。でもあれなら行けそうだな。だったら俺は手を出さないが、

「一誠、集中しろ！一発勝負だ！」

「はいッ！いくぜ、こいつは京都の土産だ！」

一誠の籠手のキャノンからオーラの弾丸を放つ！

「しゃらくせえ！」

へラクレスが前に出て盾になろうとするが、

「曲がれええ！」

一誠の叫びと共にオーラの弾丸がへラクレスを避けるように曲がり曹操の顔面に直撃した！

「目が…赤龍帝えええ！」

曹操が怒りに任せてこちらに槍を向けて何か唱え始める。

「槍よ！神を射貫く真なる聖槍よ！我が内に眠る霸王の理想を吸いあげ——」

「曹操ストップだ！ 『トウルース・イデア覇輝』を見せるのは早い！」

ジークフリートの言葉に曹操はある程度落ち着いたようだ。息を荒くする曹操に変わってジークフリートが続ける。

「退却だよ。外も限界だろう」

曹操が左目でイツセーを捉える。右目を駄目にしたな。

「わかっているさ。初代殿、ロイ殿、そして赤龍帝……否、兵藤一誠。ここいらで退却させてもらうよ」

俺は空気だな。まあ、別にいいか。

ある程度落ち着いた曹操は言う。

「兵藤一誠、強くなれ。ヴァーリよりも。そうしたら、この槍の真の力を見せてあげよう」

それだけを言い残して奴らは、英雄派は消えた。一瞬目があった小次郎は、楽しそうに笑っていた。

英雄派は強い。特に曹操は中でも強い以上に、なにか不気味な感じがした。

そして、小次郎。あいつは英雄派にすることに何か違和感を感じた。理由はわからないが、強い奴と戦いたいならヴァーリチームにいてもいいと思うんだが……。あいつにも何か別の目的が？

俺は珍しく敵の事情を考えていたが、すぐに次の問題解決のための手を考え始めるために、そこ思考を切り上げたのだった。

l i f e 1 2 解決

曹操たち英雄派が退いてくれたのはいいが、まだ問題が残っている。

『あー、しんど。ヴリトラいなきや、辛かった……』

玉龍クワロンが大きく息を吐きながら地面に降り立つ。匙は氣を失っており、アーシアに治療されていた。そして、俺たちの視線の先には動きを止めた九尾の御大将。

曹操たちがいなくなっても元に戻らず、瞳も陰ったままだった。

「母上！母上！」

『……………』

九重くのうが泣きながら呼びかけるが、反応がない。

「さて、どうしたもんかいの。仙術で解いてもいいんじやが、ここではちも時間がかかるのお」

初代も煙管キセルを吹かして考えている様子だ。仙術の類いが使えない俺にはできることがないな……………。

俺がため息を吐くと、初代が一誠の方に目を向ける。

「赤い坊や。おまえさん、女の胸の内を聴ける能力があつたよなあ？」

話には聞いていたが、なんてもん身につけてんだよ……。てか、初代もよく知っていたな。

「え、ええ、ありますけど」

「そうか、儂が協力するんでな、その小さなお嬢ちゃんと九尾の姫さんに術をかけてくれんか？」

「いいですけど、もう魔力が…」

なるほど、魔力不足か。なら、

「初代様、俺の魔力も使えますか？」

「おう、ほれこれでいけるじゃろ」

一誠と俺を魔法陣的なものが囲む。これで大丈夫だろ。

「おし。一誠、頼む」

「はい！…いくぜ！乳語バイリンガル翻訳！」

一誠が使う魔力を俺が肩代わりして発動させる。謎の空間が発生し、九重と御大将を包み込む。

それを見た初代が棒で地面を叩くと、一誠の作った空間を上書きするように新たに空間が発生した。

「これで心に直接語りかけられるはずだぜえ。小さなお嬢ちゃん、心の中でお母ちゃんに語りかけてみな」

初代が言うのと九重がうなずき、ゆっくりと瞑目した。

それから数秒が経つと、九重と御大将を光が包んだ。そのまま光を発しながら御大将が徐々に小さくなっていく。

そして光が止むとそこには人間形態に戻った御大将、八坂やさかがいた。

無事に戻れたようだ。

「……………は？」

八坂はフラフラと体がおぼつかない様子だ。まだ意識がしつかりてないようだな。

「母上！母上！」

九重が八坂に飛びついた。八坂はやさしく九重を抱き、頭をなでる。

「どうしたのじゃ、九重。いつまで経つても泣き虫じゃな」

やれやれ、これで解決か。英雄派にやられた木場たちも大丈夫そうだ。

「ま、何はともあれ、解決じゃい」

こうして、救出作戦はいろいろとあったが無事成功したのだった。

「ところで一誠」

「な、なんですか？」

魔力切れで息を荒くしている一誠に気になったことを言う。

「おまえ、よくあの魔力弾を曲げられたな」

「ああ、あれですか。あれは、ちよつとロイ先生の真似を……」

「俺の真似？」

俺が自分を指差しながら訊くと、一誠は頷く。

「ロキと戦う前に英雄派と戦った時に、工場の雑魚敵を片付けるときにやったじゃないですか」

「あの時か」

一誠はあれを真似たと。一度見たあれだけでやるとは、なかなかやるな。今度は兄さんのを見せてやりたいな。

「まあ、とりあえずお疲れさん。戻るぞ」

「はい……………っ！」

こうして、俺たちはホテルに戻るのだった。

そして、ホテルに戻ってきて早速、

「救護班！コイツらを看てやってくれ！ケガはともかく魔力と体力の消耗が激しい！俺は後でいいから！」

俺が指示を出し、皆が動いてくれる。忙しく動き回る救護班の動きを見ていると電話がかかってきた。

「もしもし、こちら、ロイ」

『ロイお兄様！さっきのは何だったんですか!?!それよりも、そつちで一体何があったのです!?!』

連絡してきたのはリアスだった。ろくに画面見ないで出たから気づかなかったよ。

「さっきのはよくわからん。こつちではテロリストと一戦やった。だが心配すんな、みんな無事だ」

『それはよかった。ではなくて！とりあえず、帰ってきたらじつくり訊かせてもらいます!』

ブチッ!

勢いよく電話がきられた。俺たち、間違はなく説教コースだが、大丈夫だろうか。俺が帰ってからの心配をしていると、再び電話がかかってきた。

今度は相手の名前を見てから電話に出る。

「どうした、ソーナ。こっちは何とか終わったぞ」

『それは聞きました。お電話した理由は別の理由です』

ソーナの一言を受けて、俺は額に嫌な汗を流す。

そんな俺にソーナが静かな声音で告げる。

『お姉様と楽しんでいたようですね。お話は、帰ってきたらじっくり訊かせてもらいます』

ブチッ……………。

……………やれやれ、面倒なことになっちまったな。

とりあえず、なにか適当な言い訳を考えながら、明日の修学旅行最終日のことも考え

—。

「ロイ?」

「ん? ああ、セラか。ただいまっ」と

背後から声をかけてきたセラに、思考を切り上げて振り向き、軽く右手を挙げて答え

る。

セラはニコニコと笑いながら言う。

「お帰りなさい。話はロスヴァイセちゃんから聞いたわ」

……………あ。

「いや、ちよつと待っていてくれ！あれには深い訳がだな！」

「それも含めて全部聞いたわよ。ふふふ、溜まっているなら言ってくれば良かったのに……………」

なにか勘違いしたようなことを言うセラ。た、溜まっている？

「セ、セラ？な、何を——」

俺が訊こうとした矢先、セラが俺の首根っこを捕まえてズルズルと引きずっていく。

俺は驚愕をよそに改めてセラに訊く。

「セラ!?マジで何するつもりだ!」

「ふふふ、疲れているところ悪いけれど、じつくりとお話を聞かせてもらおうわ。あと、色々と処理もしてあげる……………」

謎の迫力を放ちながら言うセラ。お、俺、どうなっちまうんだ!?

俺——兵藤一誠は、修学旅行最終日のお土産屋巡りを終え、帰りの新幹線に乗るため、京都駅に来ていた。

そこには九重と八坂さんは駅のホームまで見送りに来てくれていた。

「赤龍帝」

「イツセーでいいよ」

俺のことを呼んだ九重にそう言うと、九重は顔を真っ赤にしてもじもじしながら訊いてくる。

「……………イツセー。ま、また、京都に来てくれるか?」

「ああ、また来るよ」

俺が頷くと発車の音がホームに鳴り響く。九重が俺に叫ぶ。

「必ずじゃぞ!九重はいつだっておまえを待つ!」

「ああ、次は皆で来る。今度は裏京都も案内してくれよ?」

「うむ!」

それを確認すると、八坂さんがおっしやる。

「皆々様、本当にすまなかつた。礼を言う。これからレヴィアタン殿、闘戦勝とうせんしょうぶつ仏殿と会谈するつもりじゃ。良い方向を共に歩んでいきたいと思うておる。あのような輩によつて、この京都が恐怖に包まれぬよう、協力態勢を敷くつもりじゃ」

「ああ、頼むぜ、御大将」

アザゼル先生が笑顔でそう言い、八坂さんと握手を交わした。そこに、妙に機嫌が良く、肌がツヤツヤしているレヴィアタン様が手を重ねる。

「うふふ、皆は先に帰っていてね☆私はこのあと八坂さんと猿のおじいちゃんとお楽しみ京都を堪能してくるわ☆」

レヴィアタン様が楽しげなのはいいんだけど、

「ロイ、おまえ、大丈夫か？」

「あ、ああ……、新幹線で寝させてもらうから問題ない。女の恐怖を初めて実感したよ……」

アザゼル先生が目の下にくまができてくるロイ先生を心配していた。明らかに寝ていないとかそんな感じだ。

それを見ていたレヴィアタン様が言う。

「ふふふ、昨日は楽しかったわね」

「そうだな……」

ロイ先生が感情の籠っていない声で返す。昨日、あの後にも色々あったようだ。やり取りを終えた俺たちは新幹線に乗車する。

ホームで九重が俺に叫んだ。

「ありがとう、イツセー！皆！また会おう！」

手を振る九重に俺たちも手を振る。

新幹線の扉が閉まり、新幹線がゆっかりと速度を上げていく。九重はギリギリまで手を振り続けている。

短いけど、色々とありすぎたな。たくさんの思い出もできた。

また来よう。九重や八坂さんに会うために——。今度は部長や皆も連れて——。

その時、俺はあることを思い出した！

「しまった！八坂さんのおっぱい見せてもらうの忘れてたあああああつー！」

「くっ！お、おっぱいだと！」

叫ぶ俺の横でロイ先生が苦しんでいた。あのヒト、本当に何があったんだ!?

—

新幹線で爆睡できたため、ある程度回復した俺、ロイと一誠たちは無事に帰宅できたんだが、帰宅して早々にリアスに怒られていた。俺も含めて正座させられている。

「グレモリー領で事件があったとはいえ、何で知らせてくれなかったの?」

「は、はい」

一誠も無駄な抵抗をしないな。しても助けないし、面倒だ。それにしても何で朱乃副部長と小猫もご立腹なんだ?

「こちらから電話したときに、相談してくれればよかったのに」

「……そうです。水くさいです」

一誠の奴め、電話させていたのか。その時に言ってくればってことだな。

「で、でも、皆さん無事で帰ってきたのですから……」

そこでギヤスパーが助け船を出してくれたが、ここでアザゼルが爆弾投下した。

「まあ、向こうで新しい女を作っていたからな」

「ちよ、アザゼル先生!?!」

「事実だろうが。今度は九尾の娘だ」

「つたく、人聞き悪いな、アザゼル先生は!」

「だがな、イツセー。あの感じじゃ、きっと美人になるぞ」

アザゼルの追撃に一誠はたじろぎながら返す。

「そ、そうかもしれませんけど、小さい子への趣味はありません!」

その発言と同時に重い打撃音が部屋に響く。一誠に突然の暴力が襲いかかったのだ。一誠は腹部を押さえて殴ってきた小猫を見つめる。

殴られた理由は、まあ、小猫だからだろう。

「ロイ先生……」

小猫が俺を睨んでくる。おお怖い怖い。てか小猫、今、俺の心を読んだのか? いや、まさかな……。

その後も話は続き、一誠のパワーアップについての話になったことを皮切りに話がどんどん脱線していったんだが、アザゼルが突然思い出したように声をだした。

「そういや、学園祭前にフェニックス家の娘が転校してくるそうだぜ?」

「あ、そういえば」

アザゼルの一言に俺も思い出した。完全に忘れていた。

「レイヴェルがですか!?! マジっすか!?!」

「マジで」

驚愕する一誠に、俺とアザゼルは異口同音で答える。ついでに追加の情報も伝える。

「確か一年だったか？小猫とギヤスパーと同じだな」

「猫と鳥、か。大丈夫か？」

「……どうでもいいです」

アザゼルと俺の一言に小猫は不機嫌そうだ。

「にしても、何で急に？」

一誠が訊いてくるが、アザゼルがスゲエいやらしい顔してるぞ。それにしても、

「リアスたちも大変だな」

「「「「「………」」」」」

俺の一言に女子一同が黙り込む。

俺は咳払いをして話題を変える。

「そろそろ学園祭があるが、その前に、わかっているな」

「はい、ロイお兄様。みんな、サイオラークとのゲームもあるわ。そちらの準備にも取り

かかりましょう」

「「「「「はいー」」」」」

リアスの言葉にみんなが返事をする。

俺は参加しないが、できる範囲で手伝っていかか。

にしても、奴らが言っていた『龍喰者』ドラゴン・イーターってのは何なんだ？一応俺とアザゼルの意

見は『神器か神滅具』ってことになったが、警戒しておいて損はないか。

その後、ソーナ宅にも呼ばれたんだが、

「言い訳はありますか？」

「すいません」

俺は正座をしてソーナに怒られていた。セラはまだ京都だ。

ソーナがため息を吐きながら言う。

「またお姉様のわがままなのはわかってはいますが、いちいち受けないでください」

「まあ、そう言うなよ」

「……………」

「スイマセン」

ソーナの無言の迫力に負けて俺は謝る。どうしてソーナはこんなに怖いのだろうか。

それからもソーナの説教は続き、ようやく終わったのは数時間後だった。そして、帰ったら帰ったで、

「ロイお兄様。ソーナの家で何を？」

「……はあ………」

リアスに訊かれたが、今は答えたくない。疲れたしこのまま部屋に戻るか。俺が足早と部屋に戻ろうとすると、リアスに肩を捕まれる。

「逃がしませんよ。しっかりあの時に一言連絡しなかつた理由聞かせてください。お兄様から何も聞いてませんかね」

いい笑顔で言うリアス。俺が寝れるのはもう少し後のようだ。

そうして、リアスからも（ソーナよりはマシだったが）説教くらったので一言。
——もうやだ！この妹たち！

とりあえず、これで修学旅行最終日の長い夜も終わりを迎えたのだった。

幕間編③

Extra life 01 意外な客

修学旅行から帰ってきた俺——ロイは休日をのんびりと過ごしていると、不意にインターホンが鳴った。

俺は足早に玄関へと向かい、それに対応する。

「はーい、どちら様？」

「ご、ご機嫌よう」

金色の髪を頭の両端でドリルのような縦ロールをした女の子が玄関の前に立っていた。白いワンピースを着ている。

この娘は、確か……………。

「ご機嫌よう、キミはレイヴェル・フェニックスだな」

「は、はい。あの、あなたは？」

俺を見て首をかしげるレイヴェル。俺は咳払いをして改めて名乗る。

「ロイ・グレモリーだ。ヴィンセントから話を聞いていないか？」

「あなたがロイ様なのですね！お話は伺っております！」

急にテンションが上がったレイヴェル。ヴィンセント、どんな話をしたんだよ。

俺はかつての相棒に訊きたいことを思いながらレイヴェルに言う。

「町を見に来たのか？ だったら、おい！ リアス！ お客さんだ！」

「ロイお兄様、お呼びですか？ あら、レイヴェル。ご機嫌よう」

家からリアスが顔を出してあいさつする。レイヴェルもそれに返す。まったく、来るなら言っておいて欲しかったぜ。

俺が息を吐いていると、レイヴェルが恥ずかしそうにしながら口を開く。

「実は、兄のことについてご相談がありました……………」

どうやら、町の見学は後回しになりそうだ。

レイヴェルを家に上げて、俺たちはリビングに集合した。少々長くなりそうだから。
な。

朱乃がレイヴェルにお茶を出していた。

「ライザーについて？」

リアスが訊くと、対面に座るレイヴェルが頷く。

「はい。兄があの一事件以来、ふさぎ込んでしまったのはお耳に届いていると思うのですが……………」

あれか、一誠が婚約パーティーに殴り込んでリアスを連れ出したって話。任務から帰って来て早々に聞いたな。その話の延長線上の話のようだ。

まあ、その殴り込まれたライザー・フェニックスは初めての敗北と、リアスを連れていかれたことが相当ショックなことであつたらしく、酷くふさぎ込んでしまったのと。

リアスとレイヴェルの会話を聞きながら、俺はため息を吐いた。

ライザーよ、そこは頑張ろうぜ？男なら挫折なんていやってほど味わうことになるんだからよ……………」

「ライザーか。話には聞いているが……………」

「どういう人なの？」

「えーと、フェニックス家の方で……………」

面識がないと思われるゼノヴィアとイリナにアジアが説明していた。

「上級悪魔の世界は複雑ですね。けれど、貴族社会に憧れます。玉の輿こしに乗れないかしら」

何やら企むロスヴァイセ。修学旅行の一件で一時期無視され続けていたが、どうにか

話をしてある程度まで仲を修復した。

「妹自らの訪問……。本当に困っているのかも」

もう少ししたら同じ学校に通うことになる小猫は心配していた。若干顔が不機嫌なのは気のせいだろうか。

それはそれとして、レイヴェルは色々なところで解決策を探していくうちに『リアス様のところに行ったらどうか?』という意見を多数受け取ったそうだ。

「それで、どうして私のところへ?」

リアスの質問にレイヴェルはハツキリと答える。

「兄を立ち直らせるためには、リアス様の眷属が持つ『根性』を習ったほうがいいのでは?と、判断したのですわ」

リアスと一誠は間抜けな顔になるが、俺を含めた数人が一誠を見ながら苦笑する。根性か、確かにそれは一誠の管轄だろう。その判断は正しい。

一誠はその視線を受け止めながらレイヴェルに言う。

「そういうことなら俺に任せろ。何とかしてやるよ」

その発言の後、一誠は頬をかきながら続ける。

「俺が最終的にやっちゃまったことだから、立ち直らせるのもやらなきゃいけないと思うんだ。『根性』だろ?任せてくれ。根性と言えば俺だ」

「まあ、おまえはいい意味でも悪い意味でも根性の塊だからな」

俺の笑い混じりの一言に一誠は自信ありげに頷いて続ける。

「はい！俺にいい考えがあるんです！」

珍しく作戦を立てたようだ。まあ、修学旅行の時も俺やアザゼルがいない時に臨時の王として頑張っていたらしいし、期待させてもらおう。

レイヴェルはそれを聞いて明るい表情を浮かべるが、一度咳払いをして一誠に言う。

「し、仕方ありませんわね。それではイツセー様に頼んで差し上げてよ？せいぜい上級悪魔のために励んでくださいな。……………い、いちおうお礼を言っておきますわ」

多分だが、レイヴェルも一誠に惚れているな。リアス、これから大変になるぞ……………。

俺の心配をよそに、リアスは息を吐いて頷いた。

「わかったわ。イツセーを中心に、ライザー立ち直り作戦ね」

「なら、面倒だが俺も動くかね」

俺の一言にリアスは首をかしげる。

「ロイお兄様もですか？今回は私たちだけでも……………」

「リアス、言っただけだが、俺はヴィンセント・フェニックス、つまりライザーの兄と親友なんだ。その親友の妹が直接頼みに来たんだから、少しは手伝わせるよ」

俺の言葉にリアスは一瞬意外そうな表情を浮かべる。

「もしかして、ライザーと私の婚約話って……」

「そうかもしれないから、責任とらせろ」

俺はそう言つてリアスに頷いてみせる。本当に、もしかしたら俺とヴィンセントのせいでその話が出たかもしれないからな。

俺のリアスのやり取りを見ていたレイヴェルが言う。

「それでは、ロイ様にもお願いいたします。どうか、私の兄を……」

「ああ、任せとけよ」

こうして、俺たちはライザー・フェニックスを立ち直らせるために行動することになったのだった。

後日、俺たちいつものメンバーはフェニックス城に来ていた。城の大きさとしてグレモリー家のものと同じくらい。要するにデカイ。

城門が重い音を立てながら開いていき、俺たちは中に進んでいく。

庭園を抜けて、居住区と思われる場所に出た。豪華な造りの扉の前にドレス姿のレイヴェルと使用人数人、そして、

「よっ！ロイ！久しぶりだなあ！」

「ヴァインセント!? おまえ、何だつてこんなところによ！」

『何だつて』つておまえな！ここは俺の家でもあるんだぞ！親友が来るなら休憩時間を使つて顔を出すぐらいするつて！」

金髪ロン毛の男性——ヴァインセント・フェニックスもいた。あいつ、メディア系の仕事で幹部しているつて聞いたんだが!?

勝手に話す俺とヴァインセントを見て、リアスたちはポカンとしていた。

それに気づいたヴァインセントが咳払いをする。

「これは失礼。ヴァインセント・フェニックスです。以後、お見知りおきを」

「なんか気持ち悪いぞ、おまえ」

「うるせえ！やることはやっておかないと、後で母さんたちがうるさいんだよ！」

「おまえも大変だな……………」

俺とヴァインセントが盛り上がる中、レイヴェルが言う。

「あ、改めまして。ご機嫌よう、ようこそフェニックス家へ」

「ご機嫌よう、レイヴェル。ライザーはこの区画に住んでいたわよね？」

「ヴィンセント、話が進んでるぞ」

「あ、ああ、そうだな。聞いてやってくれ」

俺は意識をレイヴェルに戻すと、レイヴェルの先導で中を進んでいく。

それにしても、広い家だ。高そうな絵画や像があちこちに飾られている。

進むこと数分。俺たちは火の鳥らしきレリーフが刻まれた扉の前に到着した。

「ここか？」

「ああ。ここに愚弟ぐていがいる。叩き直してやってくれ」

俺の問いにヴィンセントが頷くとレイヴェルが扉をノックする。

「お兄様、お客様ですわよ」

「ライザー、たまには顔だしたらどうだ？」

「レイヴェルと兄上ですか？申し訳ありませんが、今日は誰とも会いたくないのです。

とても嫌な夢を見たのです」

それを聞いたレイヴェルとヴィンセントはため息を吐いた。しかし、レイヴェルは気を取り直して告げる。

「——リアス様ですわ」

一拍開けて、中から何かを落とす音が響いてきた。

『——っ！……………り、リアスだと……………？』

酷く狼狽したような声だ。リアスが来たのは予想外だったのだろう。

リアスが扉の前に立ち、言葉を投げかける。

「ライザー。私よ」

『……今さら何をしに来た？俺を笑いにでも来たのか？それとも、赤龍帝との仲睦まじい話を聞かせに来たのか？』

通常のものごどの程度かわからないが、声のトーンは低いように思える。それどころか、恨めしいと思っているような声音だ。

「……少し、お話をしましょう。顔を見せてちょうだい」

リアスがそう言うが、ライザーの返答は、

『断るッ！振った男に何を話すと言うんだ！それに、俺はあの時のことを思い出したくない！』

これは重症だな。開ける気配はおろか、話を聞く気配もない。

「やれやれ、仕方ない。開けてくれないのなら、面倒だが、こじ開けるまでだ」

俺が漏らすとすかさずヴィンセントが、

「修理代はおまえ個人に請求するからな」

「わかってるよ。おまえら、ちよつと下がっててくれ」

俺は全員を下がらせるように言って扉の前に移動、リアスが下がる前に扉の向こうに

向かつて叫んだ。

「ライザー！扉から離れなさい！」

『いきなり何を言い出すんだ？外で何を——』

「いくぜ！」

俺は扉に向かつて後ろ回し蹴りを叩き込む！凄まじい音と共に扉が開け放たれるが、

「ぶぎやあああああッ！」

扉の前にいたのかライザーも吹っ飛ばされていた。フェニックスだから死にはしないだろう。

俺は開け放たれた扉から中に入る。

「い、いきなり何をっ！それよりも貴様は誰だ!？」

「髪もボサボサでだらしねえ格好だな、まったく」

「悪いな、こんな弟で」

俺の言葉に、俺に続いて入ってきたヴィンセントが返す。

そのヴィンセントにライザーが訊く。

「兄上！こいつは——」

「俺の親友のロイ・グレモリーだが？前に話してやっただろ？」

それを聞いたライザーは驚いたように俺を見てくる。

そして、急に立ち上がって俺の肩に勢いよく手を置いてくる。

「あ、あなたがロイ様だったのですね！お話は兄上から聞いております！」

「あ、ああ。よろしくな」

「よろしくお願いします！」

俺が手をどけながら言うと、ライザーも勢いよく頭を下げた。俺は困惑気味にヴィンセントを見ると、

「おまえの武勇伝を色々と話してやったんだ。レヴィアタン様を助けたとか、現ルシファー様とその女王様クイーンの出てくる劇にも出てる。つてな」

「あの任務はおまえも関わっていただろうが。その話は？」

「はあ？あんなこっぴょうずかしい話できるかっての」

「そうかよ」

俺とヴィンセントが話していると、リアスたちも部屋に入ってくる。

ライザーもそれを確認し、一誠を見た瞬間にライザーは、

「ひいひいひいひいっ！」

情けない声を出して天蓋てんが付きのベッドに逃げ込んだ。

俺とヴィンセントはため息を吐き、ライザーに言う。

「ライザー・フェニックス。今さらだが、おまえは完全に包囲されているぞ」

「そうだぞ、ライザー。おまえ、本人から話を聞きたいって言ってただろ？ちようどいいじゃねえか」

「そうなのか？いいぜ、話してやるよ。だからさつきと出てこい」

ライザーは俺たちの言葉を受けてベッドから出てくる。

「わ、わかりました。着替えてまいります」

怯えながらも奥の部屋に入っていった。とりあえず、第一ステップはクリアか？

そんなことを思った俺にヴィンセントが言ってくる。

「あんな感じだが、悪い奴じゃないんだ。よろしく頼む」

「まあ、任せとけ。一誠に考えがあるらしいからな」

「着替えてまいりました。お話はどこでいたしましょうか？」

スーツに着替えてきたライザー。そのスーツもちやらく着崩しているが、今はどうでもいいことか。

なんとなく元気になっているような気がするが、いや、必死に一誠と視線を合わせないようにしているのか。

「そんじゃ、とりあえず外に出るか。新鮮な空気を吸いに行くぞ」

「わかりました」

こうして、俺たちのライザー立ち直り作戦の第一ステップは完了した。

あとは、一誠の考えたプランを実行に移すだけだ。

Extra life 02 いざ、山へ

ライザーを外に連れ出した俺——ロイと一誠たちは、一誠が呼んだという『協力者』を待っていた。

「早速ですが、お話を——」

「まあ、待って。一誠、そろそろか？」

「はい。そろそろ………あ！来ました！」

一誠が空の彼方を指差す。その方向には大きな影がひとつ。それが近づいているためか、徐々に大きくなってきている。

その大きな影はドラゴンであり、大きな地響きを立てながら庭に降り立った。

「この間ぶりだな、おまえたち」

大きなドラゴン、タンニーンが俺たちにあいさつをする。

俺がいつもの調子で返そうとすると、

「タ、タ、タ、タタタタタンニーンツ!? どどど、どうしてここに!？」

ライザーが叫びながら俺の後ろに隠れた。俺は嘆息しながらライザーをぶん投げタンニーンの目の前に。

ガタガタと震えるライザーを見ながらタンニーンは言う。

「ライザー・フェニックスか。レーティングゲームの試合をいくつか見たことがある。将来有望と注目していたのだが、いささか問題があるようだ」

一誠が前に出てタンニーンに事の顛末てんまつを説明する。タンニーンは「情けない」と一言漏らしてライザーに目を向けた。

「つまり、根性を身につけさせたいわけか」

「そうなんだ。だからさ、山に行こうと思つたんだ。俺とライザーさんの荷物は揃えてある」

「準備がいいな」

「俺にはこれしか思いつかなかつたんだ。てなわけで、部長。俺はこのヒトを連れて山に行きます」

それが一誠の作戦だ。細かいことは考えずに行き当たりばつたりで鍛える。

俺がうんうん頷いていると、ライザーが突然炎の翼を広げる！

「い、いやだあああああつ！」

そのまま逃げようとした瞬間、俺とヴァインセントが飛び出して脚を掴む！

ヴァインセントがライザーに怒鳴る！

「ライザー！おまえ、いい加減にしろ！俺たちにどれだけ迷惑をかけるつもりだ!?レイ

ヴェルが出向いてまで頼んだんだぞ！兄として恥ずかしくないのか!？」
「そうだぞ！兄なら妹にいらぬ心配をかけさせるな！」

俺もヴェインセントに続いて怒鳴ると、ライザーが歯を食い縛りながら頷いた。

俺とヴェインセントは手を離し、ライザーはゆっくりと着地して炎の翼を消した。

俺たちが格好よく決めたと思った矢先、リアスが俺に言う。

「ロイお兄様。失礼ですが、それはヒトの事を言えないと思います」

「リアス、それは言わないでくれよ………」

俺がうなだれていると、タンニーンが訊いてくる。

「行くのは兵藤一誠とライザー・フェニックスだけか？」

「いや、俺も行く」

『え?』

俺の一言に周りのメンバーが驚く。何も言っていなかったからな。てか、さつき決めた。
た。

「それはいいが、装備はどうするのだ？」

「大丈夫だ。用意してある」

俺は魔方陣を展開してそこから荷物を取り出すと、サムズアップをタンニーンに送る。

「ならば、乗れ。すぐに出発するぞ」

「はい！」

「くそ……………。やるしかないか……………」

「おう」

一誠が自分の荷物を抱えて飛び乗り、ライザーが渋々荷物を担いで一誠に続く。俺も返事をして荷物を担いで背中に飛び乗る。その前に、

「ヴィンセント、いつものあれ、忘れてたな」

「おう、ライザーのことを頼んだ。今度、飲みにも行こうぜ」

「そうだな。お互い忙しいが、そのうち声をかけるさ」

「待つてるぜ」

拳同士をぶつけてお互い笑む。やるのは久しぶりだな。

さて、やることもやったし、さっさと行きますかね。

俺がタンニーンの背中に飛び乗り、まさに出発しようとした瞬間、

「私も付いていきますわ！」

レイヴェルが俺たちに声をかけてきた。瞳には絶対に引かないという決意を感じ取れる。だが、山は危険だからだ。男だけならともかく、そこに女子がいるとなると、色々と負担が増える来もする。

悩み俺たちにレイヴェルがだめ押しをするように言ってくる。

「兄を……一緒に立ち直らせたのです！」

あの娘は絶対に引かないな。ヴィンセント、いい妹を持ったな。

俺はため息を吐き、困惑している一誠に言う。

「了解だ。なんかあつたら、俺たちでフォローしてやろう」

「そうですね。レイヴェル、一緒に行こう」

俺たちの返答に、レイヴェルは嬉しそうに頷くと魔力で服装を変える。よくテレビで見る探検家が着ている服、サファリジャケットつていうやつだな。

「ロイ！そんじゃ、ライザーとレイヴェルを頼んだぜ！」

「おう！しつかり引率してやるよ！」

俺はヴィンセントに返すと、妙におとなしいライザーに目を向ける。

「つ、つい流れに乗ってしまったが、ド、ド、ドラゴンに乗っているのか……。いや！考えるな！考えるな！」

ライザーもライザーなりに頑張っているようだ。この調子なら、復調はすぐかもしれないな。

そんなことを思っているうちにタンニーンは飛び立つ。俺たちはタンニーンにしがみつくが、レイヴェルは一誠にしがみついていた。

「よし、タンニーン。どこに行くんだ？」

出発して早々にタンニーンに訊くと、タンニーンは少し楽しそうな声で答えた。

「俺の領地だ」

「うわー、すっげー」

横の一誠が呆気にと取られながらもそう漏らした。

俺たちの視界には峡谷を飛び交うドラゴンたちの姿が映っている。

俺も初めて目にしたが、これがドラゴンの巣か。切り立った崖の各所に穴が開いていて、そこからドラゴンが飛び出したり、顔を出したり、その穴に入っていくドラゴンもいる。

俺たちは崖の一角、どうにか人が立てる場所に降ろされた。

あちこちからドラゴンが俺たちを見てきているが、人型の悪魔が珍しいのかもしれないな。

俺たちがそれぞれ周囲を見渡していると、タンニーンが口を開く。

「ここが俺の領民が住むドラゴンの巣だ。この住居は俺たちの一部に過ぎないが、おまえたちが生活できるのはこの辺りが限界だろう。それにここに住む者たちは意志疎通に言葉が扱えるドラゴンの種族だしな」

タンニーンが説明してくれた。つまり、もつと険しい場所もあるってことだな。そつちのドラゴンはあんまり頭が良くないと見るべきか？

俺が首をかしげる横ではライザーが顔を青くしていた。

そこに二匹の大型ドラゴンが姿を現す。

「お呼びですか？」

蒼い鱗のドラゴンと水色の鱗のドラゴンだ。

「うむ、この二匹は俺の配下の高位ドラゴンだ。ライザー・フェニックスをこいつらに頼もうと思っいてな」

タンニーンはそう言うのと二匹に説明を始める。

「了解です」

「マジOKつす」

二匹は二つ返事で応じてくれた。蒼い鱗のドラゴンが妙に軽かった気がするが………。

「ライザー・フェニックス」

タンニーンがライザーを呼ぶと一言告げた。

「このドラゴンの峡谷近辺でおまえの心身を一から叩き直す！」

「……………うう、なんてこった」

ライザーは首を横に振りながら顔を両手で覆っていた。いい加減、覚悟を決めてもらいたいな。多少無理をしても、不死身だから大丈夫だろう。

「兵藤一誠、ロイ・グレモリー、おまえたちもついでに鍛えていけ。まずは走り込みだな」
タンニーンが俺と一誠に目を向けながら言ってきた。

まあ、俺も鍛えないといけないからな……………。

俺は一人でそう思いながら、登山装備に着替えたのだった。

「ドラゴン！ドラゴン！ほら、ライザーも声出せッ！」

「ド、ドラゴン！ドラゴンッ！」

山の雪原地帯でライザーと俺はドラゴンに追い回されていた。一誠は少し先行するようには走っている。もう少しペースを上げていいが、今回はライザーに合わせている。

かれこれ三十分程走っているが、あんまり疲れないな。もっとペース上げるか？

俺はそんなことを考えながら走り続ける。ライザーは踏み慣れない雪に足をとられて何度も転びそうになっていた。その度に俺が支えてやってあるんだがな。

「ライザー殿。もっとペースを上げてください。ロイ殿の足を引つ張っておりますぞ」

レイヴェルを背中に乗せて俺たちの横を飛ぶ水色の鱗の『氷雪龍』フリーズ・ドラゴンが声をかけながら氷のブレスを吐いてくる。一瞬でも遅れれば、氷付けになるだろう。

「お兄様！これぐらいで音を上げてどうしますのー！」

レイヴェルも厳しく檄げきを飛ばしていた。俺たちの前方では蒼い鱗の『蒼雷龍』スフライト・ドラゴンと喋りながら並走する一誠がいる。まだまだ余裕そうだ。

「平和だな」

「どこがですか!？」

走りながら呟くとキレのいい突っ込みが返ってくる。

なんだ、ライザーもまだまだ余裕そうだ。

一時間程走り、俺たちは軽く休憩していた。俺と一誠は水分を補給し、ライザーは肩で息をしながら倒れていた。

「……………し、死ぬ……………」

声も絶え絶えになってる。俺たちはまだ余裕だけどな。

「走り始めて一時間か。存外短く感じたな」

「確かに、あつという間ですな」

俺と一誠が余裕で喋っていると、ライザーが愚痴る。

「山にこもって修行など、本来野蛮人がすることだ！ロイ様はともかく、なぜ俺まで！」
「愚痴るなつて。悪魔だつて鍛えりや強くなるんだからよ」

「そうですよ。多少は泥臭いこともやつておいたほうがいいですつて」

「だがな、俺は血と才能を重んじる上級悪魔なんだぞ!?そんな俺が、なぜ、なぜだ……………
?」

なんか真剣に考え始めてしまったので、俺は時計を確認するふりをして二人に言う。

「よし、そろそろ次行くぞ」

「はい！」

「ぐ、やってやる……………!」

一誠は元氣よく返事をし、ライザーは空元氣のように立ち上がる。根性つけさせるならギリギリまで追い込まないとな。

こうして、ライザー立ち直り作戦第二段階。山籠りがスタートしたのだった。

Extra life 03 見せろ、根性！

山に籠って三日程。

「よつとー」

「ひ、ひいいいいいいっ！」

俺とライザーは吹雪の中ドラゴンに追いかけて回されていた。俺は回避、ライザーは逃走って感じだな。

俺は次々放たれるブレスを避けていき、ライザーは直撃すれすれで逃げ回っているが、あつちの限界が近そうだな。

一誠は吹雪がしのげる場所でレイヴエルと話しているし、ここからなら聞こえないだろう。

俺は再びブレスを避け、ライザーに声をかける。

「ライザー、暇か？」

「暇に見えますでしようか!？」

そう言いながら逃げ回るライザー。初日に比べればだいぶ余裕が出てきたようだ。

俺は苦笑しながら続ける。

「まあ、聞けって。この近くに温泉があるんだ」

「そうですか！それがなにか!？」

「今日、リアスたちが入りに来るらしい」

「なんですと!？」

ライザーが驚きながらもこちらに目を向ける。その瞬間、ドラゴンのブレスが放たれた。それはまっすぐライザーの元に向かい、

「ギアアアアアアアッ!？」

大爆発とともに吹き飛ばされた！まあ、不死身のフェニックスだから死にはしないはずだ。

俺は白目を剥いて気絶したライザーを担ぎ、一旦一誠たちと合流したのだった。

一誠も今の話を聞いた頃だろうな。

レイヴェルから部長たちが温泉に入りに来ると聞いた日の夜。俺、兵藤一誠は洞窟の

寝袋の中で寝れないでいた。

——温泉！部長たちが入る！

それを知ってしまっただけで、思考がピンク色になっている！しかも、話によれば、部長だけじゃなく、朱乃さんたちも来るようだ！

ライザーの更正もいいが、男なら覗かないという選択肢はない！そうと決まれば、即行動だ！

まずは、ロイ先生とライザーが寝ているかの確認だ。ロイ先生はともかく、ライザーが妙に静かな気がするけど……………。

俺がそつとライザーの寝袋を確認すると、そこには！

「あのくそつたれが！」

ライザーの寝袋には下手くそな顔が描かれた偽物が入っていた！あの野郎も知ってやがったのか！

「皆の裸を見せてたまるものかよッ！」

俺は怒りに燃えながら禁ハランス・ブレイカー手の鎧を纏い、洞窟から飛び出していった。

全速力で飛ぶこと数分。

俺は夜空に揺れる炎を見つけた。あそこか!

「ライザアアアアアッ!」

「チツ!バレたか!」

「温泉を覗くつもりなんだろ!?!やらせると思つかよ!」

「覗いて何が悪い!温泉に女が入るなら、それを覗くのが男というものだ!」

「それが貴族のすることかあああああつ!」

許せん!このスケベ野郎が!皆の乳は俺が守つてやる!

俺はその覚悟の元、ライザーに向かって突撃していった!

雪山での空中決戦を始めて十数分。

「ゼーはー」

「ゼーゼー」

俺とライザーは疲れきっていた。不死身相手に持久戦はキツいな……。引きこもっていた癖に!まあ、ここまで粘れる理由はわかる。何としても部長たちの乳を見た

いと思う、スケベ根性ってやつだろう！

「……………随分強くなつたじゃないか。こちらに有利な空中戦でここまでやれるとはな。まったく、末恐ろしい奴だ！」

ライザーが息を切らしながらそう言う。こうなつたら、モードチェンジして一気に……………。

俺がそう思慮した矢先、突如ライザーが急速降下していった！俺が下に目をやると、すぐ近くには温泉があり、そこには見覚えのある人影が！

しまった！戦っていて温泉に近づきすぎたことに気がつかなかつた！

俺もすぐさま追いかけるが、なかなか追いつけない！このままだと、部長たちの乳が見られちまう！

俺が焦りながら追うと、ライザーが先に温泉に突っ込んでいった!?!あのヒトも焦りすぎだろ!?

俺もすぐさま温泉に着地して、ライザーを睨もうとするが、

「イツセー?」

こ、この声は!?

俺は声に反応してそちらに目を向けると、こちらに背を向けるように温泉に浸かっている部長のお姿が！背中姿も美しいです！いや、今はライザーをどうにかしないと！

俺がライザーの方に目を向けると、

「あ、ああ、リアス、リアスの……………」

めっちゃや鼻息を荒くして興奮している様子だった!この野郎、見やがったな!

俺が怒りに拳を震わせていると、部長が嘆息気味に言う。

「ライザーもいるのね。まったく、何をしにここに来ているのよ……………」

あ、あんまり気にしていない?ライザーもいるのに?いや、俺もいたらいけない気もするけどさ……………」

「いい?二人とも。私はね、面倒が嫌いなもの」

……………あれ?部長って、こんな事言うヒトだったつけ?

俺と同じ事を思ったのか、ライザーも首をかしげていた。

部長が体にタオルを巻くとゆっくりと立ち上がり、『白濁した右目』で俺たちを睨んでくる。

ま、まさか……………まさかっ!?

俺が冷や汗を頬に伝わっていると、

「なあ、一誠、ライザー。寢床を抜け出して覗きとは、いい度胸じゃねえか」

部長の声で、部長の笑顔で恐ろしいことを言われた!同時に部長が二挺の銃剣を取り出す!

「ぶ、部長じゃなくて、ロ、ロ、ロ、ロイ先生!」

「そ、そそそ、そんなバカな!」

俺たちが狼狽していると、部長、じゃなくてロイ先生が自分の体を見ながら言う。

「騙して悪いが、アザゼルからあるものをくすねてな。それを使うと男が女に、女が男になるんだ。何かやらかす前に没収したんだが、まさか自分に使うことになるとはな」

「ロイ先生!せ、せめて説教は元に戻ってからお願いします!」

「あら? 私の体は嫌い?」

「いえ! そんなわけ——違う、このヒトは部長じゃない! 部長じゃない!」

急にいつもの部長の声音に戻すロイ先生! くそ! 思わず答えそうになっちまったよ!

横のライザーは完全に固まっている。相当シヨックだったようだ!

すると、ロイ先生が光輝き始め、その光が止むと、そこにジャージ姿のロイ先生が立っていた。温泉で濡らさないためか、ズボンを捲し上げられている。

元に戻ったロイ先生が笑みながら言う。

「さて、そんじゃ、説教だ。今夜は寝かせないぜ?」

「気持ち悪いことを言わないでください!」

ロイ先生の笑顔の一言に俺とライザーは異口同音で返した!

くそー！この調子だとレイヴェルもグルで、今回の部長たちの訪問はデマか！

俺が歯を食い縛って悔しがっていると、俺の心を読んだようにロイ先生が言う。

「あ、因みにだが。リアスたちは温泉には来ているぞ。ここじゃないけどな」

「なん……………だど？」

ロイ先生の言葉に俺はそう漏らして絶句した。ライザーも同様だ。

ロイ先生が右手の銃剣を肩に担ぎながら次げる。

「だが、それを知ったところで無意味だ。おまえらはここで果てるんだから……………」

「くそー！ライザー……………さん！こうなったらロイ先生を倒しますよ！」

「やってやる！やればいいんだろうっ！同じ悪魔だ！俺にだってやれるはずだ！」

俺とライザーがやる気になったことを確認すると、左の銃剣で手招きする。

「来な」

「うおおおおおおおっ！」

俺とライザーは同時にロイ先生に向かって突撃した！これは、絶対に負けられない戦

いだ！

リアス・グレモリーとその眷属、イリナ、レイヴェルはタンニーンの領土にある温泉に来ていた。

(だ、大丈夫でしょうか………)

そのなかでレイヴェル・フェニックスは、一人だけ不安そうな表情になっていた。その原因はロイであり、

『今日、リアスたちが温泉に来るってことを一誠に伝えてくれ。俺はライザーに伝える』
『あの、そのようなことをしたら………』

『十中八九、覗きに行くはずだ』

『でしたら嫌です!』

『安心しろ、俺が止めてやるから。ライザーは多分それで立ち直る』

『ほ、本当ですか?』

『ああ、俺を信じろ』

というやり取りをしていたのだ。そのせいでレイヴェルはせつかくの温泉を楽しめていない。

そんなレイヴェルの様子に気づいてか、リアスが声をかける。

「レイヴェル、どうかしたの?」

「リアス様、少し悩み事です」

「悩み事?よかつたら相談に乗るわよ?」

「はい。その、実は——」

レイヴェルは少し恥じらいながら事の顛末をリアスに説明した。それを聞いたリアスは「もう、お兄様つたら」と、ため息を吐きながら漏らし、レイヴェルに笑みを浮かべながら言う。

「お兄様が言ったのなら大丈夫よ。少し抜けているところがあるのも事実よ。けど、約束は絶対に守るヒトだもの」

「そう、でしょうか?」

レイヴェルの聞き返しにリアスが頷こうとすると、

『ギアアアアアアッ!』

どこからか、聞き覚えのある男二人の叫びが山に響き渡る。話を知らないメンバーは警戒するが、リアスが「大丈夫よ」と声をかけて落ち着かせる。そしてレイヴェルに笑みを向けながら、

「ね?」

と一言だけ言った。その時のリアスの表情にレイヴェルからも自然と笑みがこぼれ、

同時に安心していた。

「はい。兄も大丈夫そうです」

「お互い、兄に振り回されっぱなしね」

「そうですが、とてもいいヒトたちですわ」

二人がお互いの兄について語らいながら、夜は更けていった。

—

「はあ……………」

「おまえ、大丈夫か？」

俺——ロイは冥界のバーのカウンターに突っ伏していた。横の席にはヴィンセントが座っている。

無事にライザーを立ち直らせることには成功した。やはり、スケベ根性の持ち主には女を使うに限る。が、男としての何かを失った気がする。

「はあ……………何であんなことしちゃったのかな……………」

ため息を吐きながら言う。もし、過去に戻れるのなら、俺は過去の自分をぶん殴りたい。

そんな俺の肩に手を置きながらヴィンセントが言う。

「ま、ライザーが立ち直らせてくれたんだ。今日は俺のおごりだ！ばんばん飲め！明日も仕事だから呑まれない程度に飲みまくれ！」

「ああ、そうさせてもらう」

久しぶりに親友と語らいながら俺は酒をあおっていく。二日酔いにならない程度に、それでいて今日のことを忘れられる程度に飲むかね。

そんな都合のいい程度なんてあるのか？

次の日。案の定二日酔いになっていた。

「ああ、くそ……………。昨日の自分を恨むぞ」

ライザーを立ち直らせたのに、色々と失敗続きな気がする。まあ、結果オーライってことでいいか。

二日酔いの頭痛と戦いながら、水分を補給し、バナナを食べる。リアスたちからはダイエツトでもしているのかと疑われたが、そんなものもあつたな。

俺はそんなことを思いながら、いつものように職場に向かう。
今日は何事もないように頑張らないとな。

Extra life 04 ハルマゲドン再び 開会式編

ライザー立ち直り作戦を成功させてすぐのことだ。

俺——ロイは一誠を探して走り回っていた。下校時間のせいでどこにいるのかわからん。校内にはいなかったから、いるとしたら外なんだよな。

「くそ……ッ！どこにいやがる」

俺はそう吐き捨てながら歩を進め、校舎の角から顔を出すと、目にアザゼルから書類を受け取ろうとしている一誠の姿が飛び込んできた！

俺は角から飛び出しながらナイフを生成、それを勢いよく投げつける！

「わっ!?!」

一誠が書類を取ろうと伸ばしていた手を素早く引つ込め、驚愕の眼差しを俺に向けてきた。

ナイフはそのまま飛んでいくと奥の木に突き刺さり、ナ塵になって消えた。

俺は一誠に駆け寄りながら叫ぶ。

「アザゼルッ！一誠は俺たちの側だ！手を出すな！」

「そうだぞ！ イッセーくんはこちら側の者だ！」

いつの間にか並走してきた紅髪の男性もそう叫んでいる。って、

「兄さん!? なにやってんだ!?!」

驚愕する俺をよそにアザゼルは舌打ちをする。

「チツ！ 魔王様まで現れやがったか！ さらばっ！」

アザゼルは悪役じみた捨てセリフを吐くと素早く撤回していく。まったく、引き際を見極めることに関してはプロなんだからよ！

俺と兄さんは一誠の横につき、同時に息を吐いた。

「……………油断を隙もない男だ。危うくおとうと義弟を墮天使の選手にされるところだった」

「まったく。大事なことは先に伝えといてくれよ。昨日のうちに言えただろうが」

「まあまあ、そう言わないでくれ。サプライズというやつだよ」

俺の愚痴に兄さんが軽く返してくる。そのサプライズのせいで危うかったんだがな。俺たちの突然の登場に驚いていた一誠が俺たちに訊く。

「あ、あの、ロイ先生、サーゼクス様。な、何事なのでしようか？」

一誠の問いに俺と兄さんは頷きあい、

「そうだな。とりあえず、話はあとだ」

「うむ、リアスの眷属が集まったら説明しよう」

と、いうわけで、俺たちはリアスたちと合流して一誠の家に向かったのだった。

『三大勢力の運動会——ッ!?!』

兵藤宅のゲストルームで、リアスたちは間拔けな声を出した。

説明した兄さんは優雅に紅茶を飲むと頷く。

「うむ。実は三大勢力での親睦会ということ、スポーツに興じようという話になったのだよ。それで、スポーツ大会ならぬ運動会を開催することになったのだ」

「アザゼルが一誠を誘ったのも、多分これのためだな。あいつ、やるからには絶対に勝ちたいんだろうよ」

俺がため息を吐きながら言う。こういう大事なことは、もっと早めに伝えておいて欲しかった。

「私もさつき天界から連絡が……」

転生天使であるイリナが挙手しながら言う。ギリギリ連絡は天界もかよ……。三大勢力の連絡網はどうなってるんだ？まあ、伝わっているならいいか。

俺はそんなことを思いながらリアスたちに言う。

「で、おまえらには悪魔側の選手として参加して欲しいんだ。これは大事な異文化交流だからな、俺たちにとっても悪い話じゃないと思うぜ？」

俺の発言にリアスたちは「おもしろそう」とかなんとか言っており、好印象の様子だ。毎回命懸けの戦いよりは、少しはマシなはずだ。

これで三大勢力の関係も強化されれば、少しは対テロリストへの動きも迅速になるかもな。

俺と兄さんはリアスに目を向ける。俺たちの視線を受けたリアスは立ち上がり、俺たちに言う。

「了解しましたわ。私たちがよろしければ喜んで参加させていただきます！」

やる気十分なようだ。

こうして、俺たちは三大勢力が開催する運動会に参加することになった。何事も起こらなければいいんだが……。

運動会の花火の破裂音が聞こえる。

俺が来ているのは三大勢力が運動会に使う会場だ。もちろん、やるのはそんじよそこの場所ではなく、レーティングゲームのフィールド技術を応用した広めの空間だ。

それにしても、イリナ以外の天使を見るのは久しぶりな気がするな。天使にいい思い出がない気もするが、今は気にしないことにする。

因みにだが、悪魔は赤、天使は白、堕天使は黒のジャージが支給されており、選手全員がそれに着替えて集合している。

俺はリアスたちと別れ、今は、

「こんなに集まると、やっぱり壮観ね☆」

「だな」

赤いジャージに身を包んだセラと歩いていた。ジャージ姿のセラも新鮮でいいもんだな。

俺はジャージの袖を肘程まで折りながらセラに言う。

「まさか、三大勢力がこんな形で争うことになるとはな。長生きするもんだ」

「ふふ、私の目標は達成なのかしらね？」

「これが続けられれば、達成って言えるんじゃないか？」

「それもそうね」

だいぶ昔に話したことを思い出しながら俺とセラが喋っていると、突然声をかけられた。

「レヴィアタン様、ロイ様、お久しぶりです」

声の主は高貴な雰囲気を持つている男性だ。頭の上には天使の輪が浮いている。

「あら、ミカエルちゃん。お久しぶり〜」

「久しぶりだな、ミカエル。俺がジャックだった頃以来か？」

「はい、そのはずです」

天界のトップ、ミカエルだった。朗らかな笑みを浮かべている。

俺はタメ口で行かせてもらう。なんか、最近、相手にもよるが敬語を使うべきか悩む

んだよな……………。

そんな悩みを知らないミカエルは言う。

「今日はお互い、正々堂々と楽しみましょう」

「ええ、もちろんよ☆やるからには勝つけどね☆」

「ああ、やるからには勝ちたいな」

セラと俺が自信満々に返すと、ミカエルも変わらない笑顔で頷いた。殺しあいにならないことを本当に祈る。

「ミカエル様あ。開会式が始まりそ——」

突然の声が途切れた。そちらに目を向ければ、ウエーブのかかったプロンドで、なんとなくおっとりした雰囲気的女性天使。って、こいつは……………。

「ガブリエル……………」

セラがジト目で睨みながら名前を口にした。曰く『最強の女天使』、曰く『天界一の美女』。そう、あのガブリエルだ。色々あつて俺が胸にダイブしたあのヒト。意外と悪魔の中でも人気があると聞いたことがある。

ガブリエルはあの時のことをいまだに気にしているようで、俺と視線が合わないように目を泳がせながらゆつくりとミカエルの後ろに隠れた。

ミカエルは苦笑しながらも俺に謝る。

「申し訳ありません。ガブリエルはいまだにあの時のことを気にしているのです」

「いや、仕方ないって。俺も時々思っていたたたたつ！」

俺の発言の途中で、セラが脇腹を全力でつねってくる！セラもその事を気にしているんだつた！考えてみれば、セラがガブリエルをライバル視しているのは、そのせいもあるのかもしれない！

俺は脇腹をつねられながら、流れる涙を抑えてガブリエルに声をかける。

「その、あの時は悪かったな。本当、うん」

「……………気にしていません」

……どこが？そんな上目遣いで顔を真っ赤にして胸を隠しながら言われても説得力が――。

「いたたたたたたっ！」

ガブリエルに声をかけたせいなのか、再び力を込めてくるセラ。まったく、俺はセラ一筋なのによ！

俺の内心を知らないセラが固い笑顔で前の二人に言う。

「ミカエルちゃん、ガブリエル。そろそろ開会式でしょ？戻らなくていいの？」

セラの言葉にミカエルはあごに手をやり、失念している様子だ。

「そうですね。それではまた後程」

「それでは、また……………」

ミカエルに続いてガブリエルもどこかに行ってしまった。それに合わせてセラも手を離してくれた。

俺は頬を擦りながらセラに言う。

「まったく、いきなり何するんだよ。痛いっての！」

「ロイが鼻の下伸ばしているからよ！もう！」

頬を膨らませてご立腹の様子だ。こうなると面倒なんだよな……………。

俺は話題を切り替えるようにセラに言う。

「ほら、開会式だろ、さっさと行こうぜ？」

「話題をすり替えられた気がするけど、それもそうね、行きましょう」

セラが返事をする、集合のアナウンスが流れ始める。いい加減行かないとな。

開会式は無事に終わり、俺たちはそのまま応援スペースに移動する。

それにしても、さつきしおりを確認してみたが、妙に日本式だった気がするんだよな。ま、影響はされているんだろうが。

悪魔の応援スペースに到着すると、兄さんが前に出て演説をやるうとしていた。向こうから怒号やら「終末を彼らに！」とか聞こえているんだが、大丈夫だよな？

俺は心配をしながらも兄さんの言葉に耳を傾ける。

「天界もグリゴリも元氣いっぱいだよ。我々の負けぬように競い合おう。交流会と
いって手を抜いても失礼だ。——各々本気でやるように」

兄さんは爽やかな笑みで言葉を締める。

『ハルマゲドーンッ!』

兄さんの言葉に周りの悪魔たちが叫ぶ! 掛け声からして、危険な匂いしかしないが、本当に大丈夫だよな!?

俺は嫌な予感を感じながら深く息を吐く。面倒事だけはゴメンだからな、そうならないことを切実に祈る。

Extra life 05

個人種目① パン食い競争

混沌の様相を見せると思われた運動会は今のところ問題なく進行していた。

最初こそハラハラしていたが、存外、他の勢力も平和的に進めたかったのかもしれない。

俺——ロイはそんな事を思いながらヴィンセントに手伝ってもらってストレッチを行っていた。そろそろ俺の出番のはずだ。

前屈をする俺の背中を押しながらヴィンセントが言う。

「それにしても、この年で運動会をすることになるとはな」

「まったくくだ。長生きするもんだなっ」と！

俺も返事をしながら前屈を止めて立ち上がり、応援席前方に目をやる。

『ふれー、ふれー、あ・く・ま☆』

チアガール姿のセラが、同じくチアガール姿の女性悪魔と隊列を組んでパフォーマンスをしていた。魔法少女や執務服以外のセラを見るのも久しぶりだな。

俺が軽く見惚れていると、

『パン食い競争に参加の選手は指定の場所に集合してください』
ちようどアナウンスが流れた。さて、行きますか。

俺が移動を開始しようとする、

『ロイー！頑張ってね☆』

セラがメガホンをこちらに向けてウインクをしながら声援を送ってくれた。

俺は笑みながら軽く右手を挙げて応えると、そのままウインセントに右拳を突き出す。ウインセントも笑みを浮かべてそこに左拳をぶつけてくる。

「頑張ってこいよー」

「ああ。勝ってくるさ」

さて、頑張ってきますか！

俺はウインセントと別れ、指定の場所に足を運んだ。

選手が集合する場所に到着すると、俺に声をかけてくる奴がいた。

「よっ！おまえもこれか？奇遇だな」

「アザゼルまでいやがるのか。これは面倒なことになりそうだな」

「ああ。簡単には勝たせないぜ？」

アザゼルだ。好戦的な笑みを浮かべて俺を挑発してくる。

俺は苦笑しながらアザゼルに言う。

「まあ、お互い死なない程度に頑張ろうぜ？怪我だけはしたくないんでな」

「わかつてるさ。俺もセラフォルーやサーゼクスに叱られたくはない」

アザゼルと談笑しながら列に並ぶ。俺とアザゼルは列の先頭、つまり第一レースだ。

開始早々に決戦つてことだな。

何てことを思っているうちに入場が始まり、

「ロイー！頑張つてねー！」

「ロイお兄様！頑張つて下さい！」

「ロイ先生！フアイトです！」

「ロイ、絶対に勝てよ！」

セラ、リアス、一誠、兄さんからの応援が俺の耳に届いた。

「マイマスター！頑張つて下さい！」

「アザゼル様！我々に勝利を！」

「アザゼル！負けるなよ！」

グリゴリからの声援も聞こえてきた。なんだこれ、俺とアザゼルの一騎打ちみたいなき感じになっているんだが……。

少しの不安を感じながら俺たちはスタート位置まで移動を完了、その場で待機となった。

『パン食い競争スタートの前に、簡単なルールを説明させていただきます』

移動が完了した俺たちの耳に審判役の男性悪魔の放送が届いた。どうやら、何かあるようだ。

『まず第一に、パンを一度くわえたら落としてはならないこと。落とした場合は失格となってしまう』

なるほど、食らいついたら離すなっことだな。

『第二に、妨害はなしです。暴力はなしでいきますよ』

妨害する前提で決められたルールとか怖すぎるだろ!?

『第三に――』

突然審判の声が途切れた。何だ、変更事項でも見つかったのか？

パン食い競争に参加する俺たちが首を傾げていると審判が続けた。

『第三に、吐かないでくださいね？……以上です！』

審判はそう言うともマイクの電源を切った！

ちよつと待て！『吐かないでくださいね？』って何だ!? パン食っていきなり走ったら吐くかも的なやつなのか!?

周りの選手にも困惑が広がっていく！

『それではパン食い競争を始めます。第一レースのランナーはポジションについてください』

俺たちの疑問は解消されることはなく、競技が始まろうとしていた。こうなりややくそだ! やつてやんよ!

心の中でそう決めて俺はクラウチングスタートの態勢に入る。アザゼルを含めた他の選手もそんな感じだ。

『位置について、よーい………ドン!』

掛け声と同時に俺たちは走り出した! スタートダッシュは割りりと成功! だが、アザゼルが食らいついて来てやがる!

スタートで抜き出した俺とアザゼルは一位を争いながらパンの元まで走っていく! 前方に紐で吊られたパンを発見、ダッシュの勢いを極力殺さず、かつパンをくわえられるようにスピードを調節してパンに飛び付く!

俺とアザゼルはほぼ同時にパンをくわえて着地した。普通だったら一番苦戦しそう

なところをあつさりクリアできたな。だが、それはアザゼルも同じ事か！

俺とアザゼルは再び走り出そうとしたが、同時に片ひぎをついた。

な…なにこれ…まず、くさっ！

食ってから若干の時間差で俺を襲ったのは強烈なまでの臭みだった！本当になんだこれは!?や、やばい、足がガクガクしてきたし涙も出てきた…。横を見るとアザゼルも同様のようだ。

俺とアザゼルか悶えていると他の選手もパンに食い付き、そして崩れ落ちていった。

『あーっと、ついに第一レースの選手全員がパンの餌食となったああああっ！』

なぜかテンション高めの実況が悶え苦しむ俺たちの頭に響いた。やばい、大音量なだけなのにダメージが…。

実況は耳を塞ぎ始めた俺たちに構わずに続ける。

『そのはずパンは冥界の様々な調味料をブレンドすることで作り出した特殊はクリームが入っています！そんなクリームパンの効果は絶大のようだああああああっ！』

これがクリームパンなわけあるか！そう言い返したいが、口から落としたり失格になっちまう…！くそっ！行くしかねえのか…。

俺は這うようにしてゴールを目指し始めた。ただパンをくわえただけなのに入院間違いなしのダメージを受けてるんだが、もうどうしようもない。

アザゼルも負けじと這いながらゴールを目指す。

他の選手は失神したのか微動だにしない。俺もあんなれば楽になれる気がする……。そんな考えが脳裏をよぎったが、歯を食い縛って意識を保とうとするが、食い縛ったせいで再びさっきの臭みに襲われて悶え苦しんだ！

その間にアザゼルが俺を抜いて一位になってしまっていた。くそ！逃がすかああああつ！

俺は再び歯を食い縛り立ち上がる！再び強烈な臭みに襲われるが、耐えるしかない！『おおっ！ロイ選手が立ち上がったああああああつ！必死に歯を食い縛り、涙をためながら立ち上がりましたああああああつ！』

俺はふらつく足を懸命に踏ん張って一歩ずつ前に踏み出していく。少しずつだがアザゼルに追い付き、少しだけ前に出れた。もうちよい、もうちよいでゴールだ！

そう思うと同時に背後から何かが迫ってきていた。目だけで横を見るとアザゼルだった！あいつも目に涙をためながら立ち上がり、俺との距離を詰めてきていたのだ！『アザゼル選手がロイ選手に追いついたあああああつ！これはどちらが勝つのかかわらないぞおおおつ！』

……。実況が俺たちを煽ってくるが、マジでそれどころじゃない……。視界がぼやけてきた

「ロイ！ 負けないでえええええ！」

「ロイお兄様！ もう少しです！」

「ロイさん！ 頑張れええええ！」

みんなが俺に声援を送ってくれていた。それさえも聞き取りずらいんだが、もう頑張るしかねえな……！

俺は一步、また一步とゴールに迫っていく。同時にアザゼルも前に踏み出し、ラストスパートに入っていた！

あと十五歩もあればゴールだっ！

そう思った矢先、俺は崩れ落ちた。あ、足が動かなくなってきた。このパン、もはや兵器の類いだぞ……。

アザゼルは俺よりも三步程前に出てから崩れ落ちた。あつちも限界か……。

俺は腕の力だけで前に進み、アザゼルを追う。アザゼルは動かなかつたが、俺が追い付くと同時に再び前進をし始めた。

数分後、二人の男の意地の張り合いが、俺たちの意識が落ちると同時に幕を閉じた。

「ロ——だーじよーぶ?!?ロイ、大丈夫!?!」

聞き覚えのある声を聞いて俺の意識が戻った。

「セラ? あれ、レースは?」

後頭部に感じる独特の柔らかさを堪能しながら訊くと、セラは笑顔で俺の頭を撫でてきた。

「あなたの勝ちよ。あなたよりも先にアザゼルが意識を失ってパンを落としたの。全員失格ってことで最後まで残ったあなたの勝ちになったわ」

「それは、良かった……」

俺は安心したところでセラに訊く。

「で、何で俺は膝枕されてんだ?」

「ふふ、勝ったご褒美よ♪」

「そうか。なら、もう少しだけ休ませてくれ……」

「ええ、借り物競争の集合が始まったら声をかけるわ」

「……頼む」

俺はそう言って不安を感じながらも意識を暗闇に落としていった。
この運動会、まだ何かあるぞ………。

Extra life 06 個人種目② 借りもの競争

「ロイ！召集がかかったわよ！」

「あ、ああ。悪いな……………」

セラに頭を叩かれて起こされた俺——ロイはゆっくりと体を起こす。かなり休ませてもらえたな。

俺が周囲を見渡すと、三大勢力の選手たちの空気が妙にピリピリしているような気がするが……………」

「セラ、何かあったのか？」

「いいえ。障害物競争で魔物が暴れただけよ」

「なるほどな……………」

俺はそう返しながら心の中でため息を吐いた。魔物が暴れりや、緊張感も高まるだろうよ。

俺は立ち上がり、セラに礼を言う。

「とりあえず、ありがとうな。また世話になるかもしれないが……………」

「何回でもいらっしやい！待ってるわよ☆」

座りながら横チヨキするセラ。また俺が倒れる前提で発言しているんだが、セラに自覚はないんだろうな。

とりあえず、またあのパンを食わされることがなければそれでいいか。

集合場所に到着すると、先に一誠が到着していた。

一誠が俺に気づくと心配そうな表情で駆け寄ってくる。

「ロイ先生ーだ、大丈夫ですか？」

「ああ。ちよつと頭がいてえが、問題ないはずだ」

と、強がってはみたが、今にも倒れそうだ。もう少し休ませてもらいたかったな。

なんてことを思った矢先に競技がスタート。今回の出番は中盤のため、初見殺しのトランプには対策できる。まあ、見た感じだと普通そうだ。

俺がホツと息を吐いていると俺の番になる。今さらだが、一誠も俺と同じレースだったようだ。

『位置について、よーい………ドン！』

合図に合わせてダッシュ！と同時に胃から何かが上がってくる………！

「うっふ………」

吐き気に襲われた俺は一気に減速、そのまま最下位になってしまった。意外とダメージが残っているみたいだ………。

そんな俺を実況が煽ってくる。

『おーつと！パン食い競争唯一のゴール者となったロイ選手が置いていかれているぞーつ！これは先程のダメージが残っているようだ！』

それどころじゃねえっての！レースが終わったら一回吐いた方がいいかもしれないな。

って、ゴールしたの俺だけかよ!?俺が頑張った意味は！、

俺は必死に足を動かしてお題の入った封筒を拾う。他の選手を見てみるが、お題が難しいのか苦戦をしている様子だ。

「うっふ………」

俺は他の選手だけでなく、吐き気と戦いながら封筒を開けて中身を確認する。

俺のお題は『銀髪の女性』だ。それなら義姉ねえさんか。その義姉さんはどこにいるんだ？

俺はキョロキョロと周囲を見渡すがまったく見つからない。あのヒトのことだから裏の仕事をしているのかもしれないな。

俺は必死に目を凝らし銀髪的女性を探す。すると、ある女性が俺の視界に映る。そう
だ、あいつも銀髪だったな。

俺がその女性の元まで走ろうとすると、

『兵藤一誠選手がゴオオオオオルツ！ぶつちぎりの一位でゴールだあああああッ！』
興奮した様子の実況が頭に響いた。一誠が頑張っているつてのに、俺がリタイアなん
て笑えねえ。俺も頑張らないとな……………！

俺は覚悟を決めてその女性に一気に駆け寄る！その女性は俺が目の前に来たことに
驚いていたが、俺はお題の紙を見せながらその女性に頼む。

「ロスヴァイセ、ちょっと付き合ってくれ」

「わ、私ですか!?わ、わかりました」

俺はロスヴァイセの手を引いてゴールを目指す。だが、他の選手の方が一步速いか。

「ロスヴァイセ、悪いな」

「え?」

俺はロスヴァイセに先に謝っておき、彼女の返事を待たずにお姫様抱っこをした。

「え?え!!」

急に抱えられたロスヴァイセは驚愕するが、顔を真っ赤にしながら抵抗はしなかつ
た。いや、急すぎてできないのかもしれない。

俺はそのまま一気に加速してゴールに突っ込む！

『ロイ・グレモリー選手、二着でゴールだ！序盤の遅れを一気に巻き返したぞおおおおッ！』

叫ぶ実況を無視して、俺は出来るだけの笑顔でロスヴァイセを見る。

「ロスヴァイセ、ありがとうな」

「は、はい……………」

ロスヴァイセの顔を赤くしながら頷いた瞬間、急に足に力が入らなくなった。

「——ッ！」

「きゃっ！」

俺はロスヴァイセを抱えたままうつ伏せに倒れこんでしまう。ちやうどロスヴァイセに覆い被さるような形になってしまった。

俺はどうか離れようとするが、体に力が入らない！てか、お姫様抱っこの態勢から転けたからなのか、ロスヴァイセの胸が俺の体に密着しているんだが!? ジャージ越しでも柔らかさが伝わってくる。……………って、俺は何を考えてんだ!?

「わ、悪い！すぐに退くから、待っててくれ！」

俺が謝りながら動こうとするが、相変わらず力が入らない。

この際ロスヴァイセに吹っ飛ばしてもらおうように頼もうとすると、

「ロ、ロイ先生……。あ、案外大^{だい}だ——じゃなくて早く退いてください！」

何を言おうとした!? てか、退きたくても退けないんだよ!

俺がそれを伝えようとするよ、

「何やってているのよおおおおッ!」

「ギヤアアアアアッ!」

横つ腹を誰かに蹴り飛ばされた! 空中で何回転もしながら地面に叩きつけられる!

「グハッ!」

地面に叩きつけられ、俺が蹴られた横つ腹を押さえていると、再びの音が聞こえる。

「ロイ! まったく、何をしているのよ!」

声の主はご立腹のセラだ。立ち上がったロスヴァイセの横で腕を組ながら俺を睨ん

できていた。

俺は腹を擦りながら立ち上がり、セラに説明する。

「なんか、急に力が抜けちまったんだよ。変な気持ちはねえ」

「……………本当に?」

「本当だつて! そこは信じてくれよ!」

セラは息を吐くと組んでいた腕を解いた。

「わかったわ、とりあえず戻りましょう。ロスヴァイセちゃんも」

「了解」

「わ、わかりました」

こうして、俺たちは応援席に戻ることになった。その途中で俺は一誠が落としたと思われるお題の紙を見つけた。

それを拾い上げて見てみると、そこには『シスコン』とだけ書かれている。

一誠が連れてゴールしたのは兄さんだ。

俺はそれを確認をしたと同時に納得した。シスコンね、そりや兄さんに行くよな。

この事実を俺は墓場まで持っていく覚悟を決める。こんなことで一誠と兄さんの仲を引き裂きたくないからな。まあ、今さら引き裂かれるようなものではないか。

余談だが、俺はこの後、思い出したようにトイレに直行して出すもの出してスッキリしてきた。これで次の競技は大丈夫なはずだ。

こうして、俺の参加する個人種目は全て終了し、残るは団体種目だけとなった。

個人戦ならともかく、これからの競技は団体戦。どんなことが起こるのかはだいたい想像がつく。

怪我人が出過ぎないことを祈りながら、俺は応援席に戻ったのだった。

Extra life 07 団体種目 玉入れ 騎馬戦

各陣営全員参加の団体種目。その一つ目が玉入れだ。

背の高い棒の先端にかごが付けられており、そこに各陣営カラーの玉を投げ込んでいくものだ。

選手たちが位置につき、開始の合図を待つ。

そんな中、俺——ロイは周囲を見渡していた。各陣営の選手たちが殺気立っている気がする。これは波乱の予感だな。

『それでは、玉入れ競技のスタートです！』

アナウンスと共に俺は赤い玉を拾い上げてかごに放り込んでいく！俺に続くように一誠やリアスも玉を投げようもすると——、

「悪魔どもに光を投げろオオオッ！」

怒号と共に天使陣営から光の玉が飛んで来る！それは地面に当たると同時に大爆発を起こし、近くの墮天使と悪魔を負傷させていく。

「あの時の恨みっ！」

それに反撃するように墮天使陣営からも光の玉が投げつけられた！天使と悪魔を巻

き込みながら大爆発をする。

「ハルマゲドンじゃっ!」

「こんちくしょうがああああっ!」

負けじと悪魔陣営からも攻撃が放たれていく! って、これ、玉入れだよな!?! 投げているのは玉だけど!

『皆さん、攻撃しないでくださいッ! 消滅してしまいます! ほら、そこ! 槍を投げるんじゃないよ! それだと槍投げ競技になっちゃうだろう! てか、攻撃を止めなさい! バカか、てめえら! バカなのか!』

実況もやけくそのような雰囲気になり始めていた。やつぱりこうなるんだな!

俺が回避に専念し始めると、セラの声が届く。

「ロイ! あなたは護衛について! 私が玉を投げるわ!」

「了解だ! つたく、面倒なことになりやがったな!」

俺は銃剣を取り出して光の玉や槍を弾いていく。後ろではセラとリアスたちが玉を投げ入れている。

そんな俺の視界にある二人が映り込んだ。

「よー、ミカエル。ここで会ったが万年めってやつだな」

「ふふふ、いつぞやの戦役時のような目つきですね。邪悪極まりない」

アザゼルとミカエルだ！アザゼルの顔色は若干悪く見えるが、あのパンのダメーじが残っているようだ。

それはともかく、あいづら睨みあいながら一触即発って感じだな！

「ああ、あの時を思い出すぜ。てめえ、よくもあのレポートを発表しやがったな」

そう言いながらミカエルに玉を投げるアザゼル。それはヒトじやなくてかごに投げるものだ。

それを避けたミカエルはあごに手をやりながら意味深に笑む。

「ああ、あれのことですか。『セイクリッド・ギアぼくが考えた最強の神器資料集』ってタイトルでした

ね。イラスト付きで長々と設定が書かれていて、ついピラとして撒いてしまいました

ね。ぜひとも皆さんに見ていただきたかったです。——『ブレイザー・シャイニング・オー閃光と暗黒と

ダークネス・ブレード龍絶剣』でしたっけ？あれ、しゅういつ秀逸でしたよ」

「ぶっ！あ、あれか……！あれは面白かったぜ……！」

「ロイ、てめえ!!」

思わず吹き出した俺をアザゼルが睨んでくる。俺は声を震わせながらアザゼルに言う。

「コカビエルの一件で入院中は暇だったからな。セラと一緒に暇潰しに読ませてもらっ
たぜ」

「なかなかいいと思っただわよ☆」

後ろからセラの声。聞こえていたようだ。

そんな俺たちの方にも玉を投げてくるアザゼル。俺はそれを避けながら言う。

「ま、童心を捨てないことは大事だと思っぜ？ やり過ぎはどうかと思っげな。『閃光とブレイザー！」

シャイニング・オーダインクネクス・ブレードとく
暗 黒と 龍 絶 剣 総督』」

俺の言葉にアザゼルは顔を真っ赤にしながら玉を投げてくる。再びそれを避ける。

「なんでおまえがそれを知っているんだよ!？」

「コカビエルの野郎が、戦場で暴れるおまえを見て言っただよ。その長つたらしい呼び名をな!」

「あのやろおおおおうツ!」

アザゼルはコキユートスにいるコカビエルに叫ぶ。絶対に届かないだろうが、叫ばずにはいられなかったんだろう。

俺はアザゼルの投げてくる玉を避けていると、対峙する朱乃とバラキエルの姿が映った。久しぶりの親子の対面だが、大丈夫だろうか？

俺の心配をよそに、朱乃が瞳を潤ませながらバラキエルに懇願した。

「……父様! 私たちを助けて!」

いつもとは違う年相応の表情だ。あれは素なのか、それとも演技なのか……。

考える俺をよそに、娘からの頼みを聞かせれたバラキエルは、
「……………うう、うおおおおつ！」

叫びながら赤い玉をかごに放り込んでいく！これは助かるな！

喜ぶ俺の横でアザゼルは驚く！

「バラキエル!?おまえ、なんてことを！黒い玉を投げろつて！」

「すまん、アザゼル！娘が！朱乃が！これも娘のためなのだアアアアアッ！」

バラキエルは総督の言葉よりも娘への想いを取った！朱乃、愛されているな！

「うふふ」

当の朱乃は嬉しそうにバラキエルと一緒に玉を投げていた。たぶん、さっきの表情は演技ではあるが、言葉は本物なんだろう。父親と競技と参加できて楽しそうだ。

「……………三大勢力も大概ですね」

ロスヴァイセがため息混じりに呟いていると、背後の墮天使が槍を投げようとしている！ロスヴァイセは気づいていないようだ！

「ロスヴァイセッ！」

「え？」

俺は槍が投げられる前にロスヴァイセに飛び付き、そのまま俺が下になるように一緒に倒れこんだ。

槍は俺たちの体の上を通り過ぎていき、近くに置いてあった段ボール箱を吹き飛ばした！

「ギャアアアアアッ！」

吹っ飛んでいく段ボールヴァンパイアことギヤスパー！あいつ、また段ボールに入っていたのかよ!?! ったく、いい加減、人混みに慣れろよ！それはともかく、

「大丈夫だったか!?!」

「は、はい……………」

俺が体を離させながら訊くと、ロスヴァイセは顔を真っ赤にしながら頷く。急に飛びついちまったから驚かれたか。

そんなことを考えた俺にセラからの指示が飛ぶ！

「ロイ、防御が薄いわ！早く戻って！」

「了解だ！ロスヴァイセ、気をつけろよ」

「わ、わかりました！」

俺はロスヴァイセの返事を聞くと、そのままセラのの護衛に戻ったのだった。

玉入れが無事(?)に終わり、そのまま次の競技である騎馬戦に移る。

各陣営の選手が馬を組み、騎手を乗せる。さっきの玉入れのせいでテンションがおかしくなり始めている選手たちが睨みあっている。

「ロイ先生。下でよかったですか?」

「ああ。怪我したくないからな」

俺は今回、一誠を騎手にした騎馬の先頭を務める。後方の二人は木場とゼノヴィアだ。ギヤスパーは先程の玉入れでダウンした。

リアスの方は、リアスを騎手にして朱乃を先頭にして、ロスヴァイセと小猫を後方にしていた。

『それでは騎馬戦スタートです!』

アナウンスと共に各陣営の騎馬が飛び出していく!

「おりゃあああつ!死ね、天使どもおおおつ!」

「天使を舐めるなあああああつ!」

「天使も墮天使も滅べえええええつ！」

各陣営、光と魔力を放ちながらの総力戦となった！まあ、こうなるよな！

「ロ、ロイ先生、どうしましょう!？」

「落ち着けて。このチームの『王』^{キング}はおまえだ。周りをよく見て、冷静に対応していけ。指示は聞いてやるさ」

俺は落ち着かせるように一誠に言うが、内心ハラハラしている。視線の先を飛び交う光の槍とか魔力の炎とかの流れ弾が怖すぎるからな！

「ふんっ！天使や墮天使には負けん！」

そんなものどこ吹く風と言わんばかりに、豪快に天使、墮天使を吹き飛ばしているのは、紫色の瞳が特徴の大王家の次期当主サイラオーグ・バアルだ。ちなみに俺の母方の従兄弟に当たるヒトだったりする。

『皆さーん、ここで戦争の続きを始めないでください！再現されます！戦争が見事に再現されますからね！やめろって言うてんだろおおっ！ひゃっはーっ！』

実況も絶叫しながら煽ってくる！存外ノリノリだな！

「おー、イツセー！ってロイもいやがるのか。まあ、それはいい」

「げえ！アザゼル先生!?!ロイ先生、逃げましょう！」

「ん？了解つと」

俺たちが反転して逃げようとする、アザゼルが回り込んでくる。

「待て待て、話をしに来ただけだ。決着は後でだな」

俺たちは警戒しながらも、アザゼルの言葉に応じる。アザゼルはそれを確認すると一誠に何かを耳打ちした。

「てなわけで、頼むぜ」

アザゼルはそう言っただけで離れていく。俺は後ろを向いて一誠に訊く。

「一誠、何を言われた」

「一誠は一瞬だけ俺と目を合わせるが、すぐに正面に向き直って俺に指示を飛ばす！

「ロイ先生！全速前進です！」

「了解だ！行くぞ、木場！ゼノヴィア！」

「はい！」

「ああ！」

馬を務める俺たち三人は一誠の指示で進撃を始める！進行方向には女性天使と墮天使の集団。ま、まさか……?!?!?

「一誠、まさか、おまえ!?!」

「このまま突っ込んでください！」

「ああ、くそっ！後で説教だなこりゃ！」

俺は覚悟を決めて前進を続ける。さっき一誠の指示は聞いてやるって言った自分を恨むぞ！

俺の後悔を知らない一誠はすれ違いざまに女性騎手に触れていく！そして、格好つけたポーズをしながら魔力を解放される！

「——洋服・破壊！」

一誠が触れた女性の服が弾け飛び、全裸となっていく！やっぱりこうなるよな！

「きやああああああつ！」

「いやああああああつ！」

天使、墮天使の騎手たちが悲鳴を上げて体を腕で隠していく。

後頭部に何かの液体が落ちたような感覚。こ、これはまさか……………。

「一誠、鼻血が出ているなら止める。かかっている」

「す、すいません！でも、止めるのは無理です！」

「ああ、くそ……………！」

男性天使が墮天の危機を示す翼の点滅を起こしていくなか、俺はそう漏らし、視線を感じてそちらに目を向ける。

「……………！」

笑顔のセラが俺を睨んできている。目がまったく笑っていない。まったく、面倒なこ

とになりやがったな……………。

俺が目を閉じて天を扇いでいると、アザゼルの声が届く。

「絶景かな、絶景かなってな！ イッセー、次はあいつだ！」

俺が目を開けてアザゼルの指差す方を見てみると、そこにはガブリエルの姿が！

「一誠！ あいつは止めとけ！ 痛い目にあう！ 主に俺が後で大変なことになる！」

「ロイ先生、今は俺が『王』^{キング}なんですよ？ —— 突撃iiiiiiiiッ！」

「このくそ野郎がああああああつ！」

一誠の言葉に俺は言い返せずにそのまま突撃していく。こいつ、いい王^{キング}にならねえぞ！

「ロイ先生！ これ、大丈夫なんですか!？」

「知るか！」

「ああ、なんてことだ！ アーメン！」

「俺も祈れるもんなら祈りてえよ！」

俺と木場、ゼノヴィアがどうこう言い合いながら突撃していくと、ふとガブリエルと目があつた。

その瞬間、顔を赤くしたガブリエルが人差し指と中指の間にダーツ針のように小さい光の槍を作り出した。そして、そのまま見た目同様にダーツのように飛ばしてくる！

「いってッー」

高速で飛んできたダーツは俺のふくらはぎを掠めるように当たり、俺は一瞬の激痛に足がつんのめってしまふ！先頭が急に減速すれば、それに続く後ろのメンバーがどうなるのかはわかりきっている。転倒だ。

「うわっ!?!」

「くっ!?!」

木場とゼノヴィアはうまく受け身を取るが、

「うそーんっ!?!」

騎手を務めていた一誠がそのまま落下してくる！そして、そのまま転んだ俺の後頭部に頭から落下してきた！

「ぐおおおおお……………!?!」

「なんて日だ、くそ……………!?!」

頭を押さえて悶える一誠と後頭部を擦りながら吐き捨てる俺。本当に何なんだよ今日日は！

こうして、騎馬戦は混沌を極めながら進行していき、怪我人続出のなか終了したのだった。

余談だが、俺はこの後、急遽設定された休憩時間（という名の怪我人治療時間）中に

セラにこつぴどく叱られることになった。

今度から一誠の指示には従わないようにしましょう。俺の身がもたん。

Extra life 08 決戦 バトンリレー

三大勢力合同運動会もついに最終競技のバトンリレーとなった。

『各チーム選拔選手が各ポジションに待機しております。さあ、長らく競い合ってきた運動会もついに最終競技となりました！』

アナウンスが今日最後というわけで、気力を振り絞って会場を盛り上げていく。得点も存外拮抗しており、このバトンリレーで勝敗が決まることだろう。

で、それはいいんだが……………。

「何で俺がアンカーを任されるんだよ……………」

「ま、お互い頑張ろうぜ」

いつの間にか俺が悪魔側のアンカーになってしまっていた。墮天使側のアンカーはアザゼルだ。

別にそれはいい。パン食い競争でも戦ったからな。で、本当の問題は、

「……………がんばりましょうね」

天使側のアンカーがガブリエルのことだ。相変わらず、顔を赤くしながら俺と視線が合わないようにしている。

まったく、面倒なことになりやがったな。

俺はその場で三回軽くジャンプをして、体の緊張をほぐす。負けた瞬間にまた説教はごめんだからな。

『さあ、最終決戦スタートです！』

俺の心配をよそにリレーがスタートした！それと同時に軽快なBGMが流れ始め、第一走者が飛びだしていく！悪魔側の第一走は木場だ。あいつの足ならぶつちぎりで行けるはずだ。

俺が安心していると、その木場に墮天使側の選手が光の槍を投げつける！木場は軽やかにそれを避けるが、いきなり何してやがるんだ!?

「アザゼル、あれはどうなんだ？」

「見えんなー」

俺の問いがはぐらかされた。まったく酷い総督だな！

それでもリレーは続き、第二走者にバトンが渡る。悪魔側の第二走者は一誠であり、既に鎧を纏っていた一誠は一気に飛び出す！

それに続くのが墮天使側の選手だ。特撮作品の悪役のような格好をした男、確かアルマロスだったか。どこからか取り出した斧を振り回しながら一誠を追いかけ回している。

「あいつ、鎧脱げばいいのにな………」

「趣味は大事なものだ。覚えておいて損はないぞ」

俺の言葉にアザゼルが返す。趣味は大事だつてことはわかるが、あそこまでやるか？俺が首をかしげる中でバトンは第三走者に渡る。

悪魔側第三走者は兄さんだ。兄さんはバトンを受け取ると久しぶりに見る全力疾走を始める！相変わらず速えッ！

「娘の！朱乃の前で負けられのだ！」

「四大セラフ『神の炎』たるこのウリエルが魔王に負けるなど許されないのだッ！」

雷光を体にまとわせるバラキエルと、極大の聖なる炎を全身から迸らせるセラフのウリエルだ！二人の爆走は兄さんに負けていない！

と、兄さんが突っ込んでくるな！

俺はリードを開始して距離を稼ぎ始める。

「ロイ、頼んだぞ！」

「任せとけよ！」

俺は流れるような動きでバトンを受け取り、一気に加速していく！猛スピードでゴールを目指していると、背後から謎の気配を感じてそちらに目を向ける。

「こんな時のために完成させた秘密兵器じゃい！」

背後から猛追してくるアザゼル！その手には光と闇が入り交じった剣が握られてい
る！

「てめえらが散々煽った『閃光と暗黒の龍絶剣』だッ！」

アザゼルはそう言つてその剣を振り回していく！一撃一撃がグラウンドを深く抉り
取つていく！

俺が必死に逃げ回っていると、各陣営からの驚愕の声が届いた。

「なに!?完成していたのか!?!」

「あれが噂に聞いた『閃光と暗黒の龍絶剣』か!」

なんて聞いてる場合じゃなくなつてきた！アザゼルがドンドン距離を詰めてきてい
る！

俺は銃剣を取り出してアザゼルに射撃していく！が、アザゼルは放たれた弾丸を

『閃光と暗黒の龍絶剣』で弾いていく！

そして、ついにアザゼルの一撃が俺の間近に迫つてきた！俺はそれを避けるが、空
振つた一撃がグラウンドを大きく抉る！直撃はアウトだな！

「俺を殺す気か!?!俺たち一応だが同業者で、これ運動会だろ!?!」

「戦争じゃああああつ！悪魔と天使には負けん！俺がナンバーワンだ!」

くそっ！アザゼルのテンションがおかしなことになってやがる！張り切りすぎて思

考が飛んじまったか!?

俺とアザゼルはゴールの数十メートル手前で対峙し、そのまま戦闘に突入してしまっ
た!

『おーっと!アザゼル総督とロイ選手が対決だーっ!』

実況が煽つてきやがる!これじゃあ、退くに退けねえじゃねえかよ!

俺がアザゼルの一撃を放った避けると、奴は謎の迫力を放ちながら言う。

「ロイイイツ!おまえを倒してからゴールしてやるう!セラフオールには後で謝つてお
くから問題ねえ!」

「——ッ!セラの前で格好悪い姿は晒せねえな!」

俺はそう返しながらアザゼルに斬りかかるが、しつかり受け止められる!もう、こい
つムカつくのに地味に強いんだからよ!

俺とアザゼルがつばぜり合っていると、俺たちの横をガブリエルがそそくさと走つて
いってしまった。

俺は舌打ちをしてアザゼルを蹴り飛ばし、ガブリエルを追って走り出す。だが、地味
に広げられた差が大きい!このままだと先にゴールされちまうか!

俺が焦っていると、

「ロイイイツ!逃げがさねえぞおおおッ!」

アザゼルが叫びながら俺に突っ込んでくる！そして俺に突きを放とうとしていた！

俺は素早く反転、銃剣をクロスしてその一撃を受け止める！すさまじい衝撃に襲われた俺は銃剣を明後日の方向に弾き飛ばされ、そのまま吹っ飛ばされていく。その方向にはガブリエル。……………なんだこれ、デジャブ？嫌な予感しかしねえんだが!!

俺は急いで勢いを殺そうとするが、もう遅すぎだ。今から勢いを殺してもガブリエルに激突しちゃう！

「ガブリエルッ！避けてくれえええええっ！」

「えっ？」

俺の叫びを受けたガブリエルは、足を止めてその場で振り向いてきた。あ、終わった……………。

俺は勢いそのままガブリエルと激突。そのまま二人同時にゴールに突っ込んだのだっ
た。



俺、兵藤一誠は走り終えて息を整えていた。グリゴリの幹部さんはまともなヒトがいないよ。アルマロスさんは横で「グリゴリイイイイイイツ！」って叫びまくってたし。それはそれとして、アザゼル先生に吹っ飛ばされたロイ先生がガブリエルさんにダイブしたんだけど……。当のお二人は砂塵に包まれて姿が見えなくなっているけどさ。『あーっと！天使チームと悪魔チームがほぼ同時にゴールしたぞ！これはどちらが先にゴールしたのか、ビデオ判定に移らせてもらいます！』

そんな中、アナウンスが流れる。確かに、あの感じだどどつちが先かはわからないよな。

俺たちが結果を待っていると、砂塵が晴れていく。

「——ッ！」

砂塵が晴れた瞬間、会場が静寂に包まれた。俺たちの視界には、

「……………」

「……………」

ガブリエルさんの胸に手を埋めているロイ先生の姿が映った。

ガブリエルさんは顔を耳まで真っ赤にして動けなくなっており、羽が白黒に点滅していた。

つまり、ロイ先生は……………！

『あの変態野郎があああああああああつ！』

会場全体から放たれる怒号！それと同時に大量の光の槍や魔力弾などがロイ先生に殺到する！

ロイ先生は慌てながらもガブリエルさんをお姫様抱っこしてその場を退避した！先程までロイ先生がいた場所で大爆発が起こる！

会場の皆さんの怒りもその通りだろう！ロイ先生はガブリエルさんの胸、おっぱいを触ったのだから！羨まし……じゃなくてけしからん！

俺が怒りで拳を震わせていると、アナウンスが流れる。

『誰かあの野郎をぶん殴れ！最初に殴った奴のいる勢力が勝ちだ！』

「おい!?ちよつと、待———」

『任せとけッ!』

アナウンスに会場の皆さんが応えてロイ先生に攻撃していく！何か聞こえた気がするけど気のせいだ！

俺は鎧のオーラを一層強くしてロイ先生に肉薄していく！

「ロイせんせええええいっ！一発殴らせてくださいッ!」

「ふざけんな！せめてガブリエルを避難させてくれよ!」

ロイ先生の発言と同時に攻撃が止んだ。ロイ先生は周囲を見渡してガブリエルさんをその場に降ろす。

ガブリエルさんは恥ずかしそうに顔を赤くして、おっぱいを隠すように腕をやりながら立ち上がり、少しづつロイ先生から離れていく。奥で待機していた女性天使に囲まれ、そこで皆さんに介抱されているようだ。

俺たちはそれを確認すると頷き合い、

『死ねええええええッ!』

一丸となつてロイ先生に挑んでいく!ロイ先生は諦めたように息を吐いてその場を逃げ出した!

俺たちが追いかけてようもしたその時、特大の氷の塊がロイ先生に降りそそいだのだつた。

数秒後。

「クソツ！ 寄つてたかつて俺をイジメやがつて！」

「反省の色がないわね？ もう一発行きましようか？」

『いけいけ！』

「はっ！」

「ぐっ！」

縄で縛られたロイ先生がレヴィアタン様に殴られる。誰もレヴィアタン様を止めようとしなない、むしろ煽っているぐらいだ。部長は額に手をやってため息を吐いていた。

あの氷の塊を落としたのはレヴィアタン様で、ロイ先生はそれを避けきれずに撃沈。そのままお縄となった。

一応、悪魔の勝ちでいいのかな？

俺はそんなことを思っていたが、ロイ先生を殴るレヴィアタン様を止めようとしたのか、サーゼクス様が声をかける。

「セラフオール、その辺に——」

「サーゼクスちゃんは黙っていて！あの時はあの時、今は今なのよ！」

「どうしてこうなるんだよ……………」

ロイ先生はそう言うため息を吐く。ん？待てよ。

「サーゼクス様、戦争中に何かあつたんですか？」

「ああ、知らないヒトもいるかもしれないね。ロイは戦争中にもガブリエルの胸にダイブしたんだよ。あの時はコカビエルに弾かれたんだ」

「なんで今言うんだよ!？」

ロイ先生が抗議するが、時すでに遅く、周りから殺気のこもった視線を送られていた。それを受けたロイ先生は縮こまる。

「とにかく、後は私がこつてり絞つておくから、皆は閉会式に戻つてね☆」

レヴィアタン様の迫力ある笑みに、俺たちは頷くしかなかった。

かくして、三大勢力の運動会は大きな問題を起しながらも悪魔チームの優勝という形で閉会となった。終わる頃には各陣営のヒトたちの間には一体感が生まれ、勝敗関係なく満足げな様子だった。

「だ、誰か、た、助け——」

「あら、こんなところにいたのね。捕まえた☆」

何か聞こえた気がするけど無視をすることにした。

ちなみに、ガブリエル様はどうか落ち着きを取り戻したようで墮天はしなかつたそうだ。

後日、ロイ先生にガブリエルさんのおっぱいの触り心地を訊いてみたら、

「もうおっぱいはごめんだあああああつ！」

と叫んで逃げられてしまった。レヴィアタン様に相当絞られたようだ。

完全に余談だが、この運動会は「来年も開催しよう」という話が進んでいるとかいないとか。

でも、できることならもつと平和的なものをお願いしたいです！

学園祭のライオンハート

life01 ゲームに向けて

修学旅行、山ごもり、運動会と何とか無事に乗り切った俺——ロイは文化祭に向けた職員会議に参加していた。

レイヴェルも無事に入學し、様子を見に行ったらしい一誠からは「大丈夫そうですよ」と言われたのでそう信じたい。

「パンフレットにですな——」

「それだとコストが——」

「しかし——」

この学園、意外と外国からの生徒が多いため、その親族に向けたパンフレットをどうするかを話し合っているのだ。日本語は難しいからな。

俺がどうするか悩んでいる表情をしていると、突然アザゼルが立ち上がり、露骨にだるそうな声で言う。

「少し体調が優れないので抜けさせてもらいます」

「え、ああ、無理をなさらずに……」

アザゼルの言葉を真まに受けてしまった教師の言葉を聞いて、アザゼルは「ご心配、ありがとうございます」と言つて部屋を出ていく。あの野郎、マジでどつかに行きやがったぞ。

俺はチラリとロスヴァイセに目を向けて頷き合う。仕方ない、面倒だがあいつの分も頑張りますか。

明くる日のこと。

リアスが一誠を連れてシトリー領の病院に行つてしまった。理由はある女性へのお見舞いだ。

その女性というのはミスラ・バアルという方で、サイラオーグの母親だ。

ある程度の話は任務から戻つて聞かされたが、なかなか酷いものだった。

まず、俺たち兄妹が持つ『滅びの魔力』はそもそもバアル家の特色ということ。俺たちは母親であるヴェネラナ・グレモリー（旧姓バアル）から継いだのだ。

次に、バアル家の次期当主であるサイラオーグにはそれが継がれなかったこと。もつ

というと魔力も無いに等しいそうさ。

血と才能を重んじるバル家の者たちはそんなサイラオーグと彼を産んだミスラさんを面汚しと蔑んだ。結果、二人はバル領の片田舎に移り住んだそうさ。バル家的には、そんな一族の面汚しの二人を外に出したかなつかんだらう。

それでも二人は、自分たち慕ってくれる一部の者たちと支えあつて生活していたらしいが、ミスラさんがある病気にかかってしまったのだ。深い眠りにつき、やがて衰弱死してしまうという不治の病。

サイラオーグはそんな母親を心配しつつも止まることはなく、鍛えぬいた心と体で滅びを受け継いだ腹違いの弟を倒し、次期当主まで上り詰めたのだ。

それを知って一誠がどう思うかはわからないが、試合に影響しなければいいんだが……。てか、大切な時にいないな、俺。いれば何かしてやれたかもしれない。連れ出すのは慣れているからな。まあ、それはそれで大問題になっていただろうが。

次は日のこと。

俺はリアスたちがよく使う床と天井、壁の全てが白い練習フィールドに来ていた。

「はあっ!」

「甘いッ!」

一誠のブローを避けて魔力を込めた蹴りを放つ! 鎧の堅い感覚だけが足を伝ってくる。この鎧、堅くなってきたている気がするな。

「おらあっ!」

「うるせえッ!」

かけ声を共に放たれた蹴りを避け、滅びの直刀で斬りかかり、鎧に傷をつける。

一誠は後ろに飛び退いて火炎を吐いてきた! 滅びの直刀を大剣に変えてオーラを飛ばして相殺、その瞬間に一誠が突っ込んでくる!

俺はその場から真上に跳躍して一誠のタックルを避け、直刀を投げつける! 一誠は素早くドラゴンショットを撃ちそれを撃墜してみた。

俺はゆっくと着地し、一誠に言う。

「だいたい動きになってきたな。鎧のオーラもだいたい安定してきているように見える。例のモードチェンジはしないのか？」

「やってもあなたには意味ないでしょ！」

「オーラが安定したと言ったが動きは読めるからな。モードチェンジしたら、その動きを余計に気にするだけだ」

「ですよね……………」

モードチェンジしても、鎧を纏っていれば動きを読める。たいして問題はないはずだ。

俺は息を吐いて次の相手に声をかける。

「よし、木場。おまえの番だ」

「はい」

木場が聖魔剣を創りだして構える。俺としては、木場との模擬戦の方がやってる気になる。

俺が構えを作った矢先、木場が高速で動き出してフェイント混ぜながら俺を翻弄してくる！右に行ったり左に行ったり器用なやつだな。

俺はなんて事を思いながら背後から迫ってきた刃を直刀を背に回して受けとけ、そのまま弾く！

勢いよく反転して斬りかかり、木場とのつばぜり合いに持っていく！

「おまえは速いが力不足だ！今さらどうにかしろとは言わないが、こうなつた時の対処法を考えとけ！」

「くっ！」

一気に木場を押しきつて斬りにいくが、木場は持ち前のスピードでそれを避ける。俺はその木場を追撃し、走りながら斬り合っていく！

木場のセンスと『騎士』との相性が相まって、模擬戦をやる度に巧くなっている！

俺が斬ろうとした瞬間に木場はその場を飛び退き、聖魔剣を聖剣に変えた。そしてその聖剣を地面に突き刺すと叫ぶ！

「フランス・ブレイク禁手化！」

それと同時に、木場の周辺の地面から、あいつをぐるりと囲むように聖剣が出現し、同時にドラゴンを模した兜を被つた甲冑の姿をした何かも大量に生み出されていく。

俺はそれを見て呟く。

『ソドトバース魔剣創造』じゃなくて『フレッド・ブラックスマイス聖剣創造』の禁手か！

「はい。亜種ですが、これが僕のもうひとつの禁手、『グロリーイ・ドラグ・トルーパー双覇の龍騎士団』です」

「なるほど、おもしれえ！」

俺は二刀流の構えを取り、騎士団との戦闘に備える。そして、

「行きますッ!」

「来いッ!」

木場の合図で騎士たちが一齐にこちらに殺到してくる!俺は手にしていた二刀をブーメランのように投げつけて隊列に穴を開けると素早く二刀を生成しなおして突撃する!

木場と同じ速度で斬りかかってくる騎士たちを斬り倒し、再び木場とつばぜり合いになった!その瞬間、まだ倒れていなかった騎士たちが背後から迫ってくる!

俺は木場と競り合う手の力を抜かずに翼を展開。そこに刃を生成して背後の騎士を迎撃していく!

さすがに読んでいなかったのか、木場は一瞬目を見開いた。その隙が命取りつてな!俺は一気に木場を押しきると足払いをかけて転倒させ、直刀の切っ先を突きつける。

「とりあえず、終わりでもいいか?」

俺の問いに木場が頷くと、俺は直刀を消して木場に手を差し出す。木場はその手を取ったら立ち上がりさせてやる。

「あの騎士団、速さは申し分ないが、技量がまだまだだな。数で押すならもつと必要になるぜ?」

「やはりそうですか」

「ああ。だが、自分を囿にして背後から攻めさせるのはいいと思うぜ。本人がやられたら終わりだけだな」

「……………」

俺の言葉に返す言葉が見つからないのか、それとも疲れたのか無言の木場。そんな木場の肩に手を置きながら言う。

「だが、何かしら使えるはずだ。色々試してみろ」

「はい」

木場は頷くと、とりあえずの休憩時間になった。

「一誠のモードチェンジは使いどころだな。間違えたら負けるぞ」

「そうなんですよね。消耗が大きすぎて……………」

「連携は必須だな」

「そこに僕やゼノヴィアがいればフォローに入れるけど、ゲームのルールによってはそ

うはいかなくなるからね」

俺たちはあーだこーだ話していた。一誠の新しい力はすさまじいの一言だが、その分消耗も激しいそう。その穴をどう埋めるか、まだまだ課題は多い。

「まあ、実戦なら俺もフォローに入れるが、今回は応援ぐらいしかできないからな」

俺たちが悩んでいると、俺たちのサポートをしてくれていたレイヴェルが言う。ちなみに、レイヴェルも兵藤宅に寝泊まりしている。

「あの、その砲撃特化の『僧侶』^{レシヨツプ}ですが、譲渡の力を飛ばすことはできないのでしょうか？」

「……………」

レイヴェルの言葉に俺たちは一瞬黙りこんでしまったが、

「いいいね！」

「なるほど、それはおもしろえな！」

三人して笑顔で返した。本当にできるかは別として、やはり第三者からの意見は新鮮でいいもんだな。

「それができたら戦略が広がるな。一気にラッシュもいけるし、相手への揺さぶりにもなる」

「そうですね。遠距離からの譲渡が可能なら、前衛が下がらずに戦闘を続けられます。

もう少し練り込む必要がありますが、おもしろい試みです」

「おおおおつ！すごい！これならチーム戦でも活躍できそうだ！レイヴェル、ありがとうな！」

テンションの上がった一誠からの礼に、レイヴェルは顔を赤くしながら「これぐらい当然です！」と返していた。

さて、それができるようになったとしても、

「後は特別ルールとか、フィールドの問題だな。使えても一対一の状況だと意味がない」
「そこは当日にならないとわかりませんかからね」

「少なくとも長期戦にはならないだろう。会場はアガレス領の空中都市アグレアスだ。あそこはヒトが入るぞ」

「確かに、アグレアスは冥界でも人気の観光地ですからね」

木場が冷静に返してくる。レーティングゲームはあくまでエンターテイメントだ。フアン呼び込むために会場が決まり、ルールが設定される。ルールによつてはチーム戦ができなくなる可能性もある。

「リアス様とサイラオーグ様はプロ前置きの若手ではありますが、人気はプロと変わりはありません。今回の一戦も大きく注目されていますわ」

レイヴェルが付け加えてくれる。アグレアスなら、その人気に応えられるだろう。

俺はゲームに参加したこともなければ、じつくりと見たことがない。今度のんびり見
てみるかな。

俺が横でなんて事を考えていると、一誠が言う。

「レイヴェル、いいアドバイスだったぜ。さっそく試して——」

「今日はここまでよ」

背後から聞き慣れた第三者の声。振り向けばそこにリアスがいた。

一誠はリアスの突然の登場に驚いていたが、次の言葉で別の驚きが変わる。

「明日は記者会見だもの。あまり練習ばかりしていると、明日酷い状態で記者の前に出
ることになるわ」

「ぎ、記者会見……ですか?」

「ええ」

一誠はリアスの返事の間抜けな表情になりながら、

「ええええええええええっ!」

驚愕の叫びを発した。報道相は大事だぞ、リアス。

俺はそう思いながら小さくため息を吐いたのだった。

l i f e 0 2 相談

一誠と模擬戦を行った次の日。

俺——ロイは冥界グレモリー領の高級ホテルに来ていた。

リアスたちのインタビュウを見学しにきたのだ。そんなわけで、俺は記者たちの後ろの壁に寄りかかっていた。

サイラオーグとその眷属たちは既に会場入りしており、リアスたちの入場を待つかたちになっている。サイラオーグが無意識に放っている闘気をビリビリと感じる。記者たちは気づいていないがな。

それはそれとして、今のうちに一服しに行けばよかった。

俺がそんなことを思った矢先に進行役のヒトの声が届く。

『お着きになられたようです。グレモリー眷属の皆さんの登場です』

拍手の嵐が巻き起こり、リアスたちがスタジオに入ってくる。リアスと朱乃を始めとしたメンバーは落ち着いた様子だが、一誠とアジアの表情は固く、ギヤスパーに関しては涙目だ。大丈夫だろうか。

『両眷属の皆さんがそらったところで、記者会見を始めたいと思います』

俺の心配をよそに、記者はが始まったのだった。

ゲームの概要、日取りが改めて通達され、その後に『王』^{キング}であるリアスとサイラオーグが意気込みを語っていく。

二人とも堂々としており、妹の成長をまた違う形で感じる事ができた。まあ、まだまだ甘いところが目立つがな。

サイラオーグには会ったことはなかったが、なかなかすごい奴つてのはわかった。絶対的な自信と、それを納得させる迫力を持っている。

その後、それぞれの眷属たちへのインタビューも始まり、一誠に質問がとんだ。

『兵藤一誠さん。今回もリアス姫の胸をつつくのでしょうか？ つつくとしたら、どの場面？』

……………アホか。

俺は記者の質問にため息を吐いた。『おっぱいドラゴン』のせいもあるが、まさか堂々とこんな質問がとぶことになるとは……………。

「……………え、えーと……………」

質問を受けた一誠は顔を引きつらせてそれだけ絞り出した。それでも記者の質問は続く。

『特撮番組同様、リアス姫のお乳をつつくとパワーアップするという情報を得ています。

それによつて何度も危機を乗り越えたと聞いているのですが?』

その情報は筒抜けなんだな。間違いではないが、リアスの兄としてあれはどうかと思う。

一誠は言葉に困っていたが、何か返そうと思つたのか口を開く。

「えーとですね。ぶ、ぶ、ぶちよ、じゃなくて」

一誠はリアスのことをいつものように「部長」と呼ぼうとしたらしいが、緊張で噛んでしまったのか、場所を考えて呼び方を変えようとしたのか、変な言葉を口にしてしまった。

それに記者が食いつく。

『ぶちゆう!?!いま、ぶちゆうと言おうとしてませんでしたか!?!それって、つまり、吸うんですか!?!』

そして一齐にたかれるフラッシュ。記者たちもざわつきだした。

まったく、また変な噂が流れちまうな。

俺は一誠の発言と記者たちの反応に頭を抱えた。ダメだ、変な奴しかいねえ。

俺は変に絡まれないうちに会場を後にした。明日の朝刊が楽しみだ。

その日の夜。

「……………で、どうした？」

「いや、あの、少しいいですか？」

珍しく俺の部屋に客が来ていた。少し元気がなさそうな様子の一誠だ。

「とりあえず入れよ。廊下で立ち話もなんだ」

「はい、失礼します」

この部屋に誰かを入れるなんて初めてかもしれないな。

なんて思いつつ、一誠を部屋の中に。俺の部屋を見渡した一誠が言う。

「なんか、最低限のものしかありませんね」

「まあ、ほとんど寝るためだけの場所だからな。変に物を置きすぎても片付けが面倒だ」

俺の部屋にはテーブル一つと椅子が二脚。滅多に使わないコーヒードリップもその

テーブルに置いてある。後はベッドぐらいか。……って、本当に何もねえな。

とりあえず一誠と向かい合うように席につき、一誠が座ったことを確認して訊く。
「で、こんな時間にどうかしたか？リアスは？」

一誠とリアス、アーシアは基本的に一緒に寝ているのだ。それでも手を出さない一誠の精神力は素直にすごいと思う。

俺の質問に一誠が表情を暗くする。

「その、部長を怒らせて、いや、泣かせてしまいました……」

「泣かせたって、それは後だ。で？」

「部屋に入れなくなりました」

だったらなんで俺の部屋に？とも思ったが、それは置いておき、さらに説明を求める。

「リアスはなんで泣いたんだ？」

「部長とサウナで会ったんですけど、その時に色々とありまして……」

「何があったかは別として、何か言われたか？」

「『あなたにとって、私は何』と……」

「で、おまえはどう返した」

「部長は部長ですって、返しました」

俺は小さくため息を吐く。こいつ、絶望的に鈍いのか、それとも何かトラウマでも抱

えているのか……………」

「一誠、おまえはリアスのことをどう思うよ」

「ぶ、部長は俺にとつて最高の『王』^{キング}だと——」

「違う、そうじゃない」

俺の遮りに一誠は驚き、黙りこむ。

俺は改めて一誠に訊く。

「一誠、おまえは『一人の男として』リアスをどう思う」

俺の質問に一誠は答ええない。いや、答えは決まっているのだろうが、口にできないと言うべきか……………」

俺はため息を吐き、厳しい声音で一誠に言う。

「これに即答できないようじゃ、おまえにリアスを預けられない。兄さんや父さんがおまえをどう思っているかはわからないか、今のおまえを認めるわけにはいかない」

俺の言葉を受けた一誠は飛び出そうなほど目を見開いた。俺が励ましてくれるか、何かしらヒントをくれるかと思っていたのかもしれない。

俺は続ける。

「おまえに何があつたのか、俺は知らねえ。だが、いつまでも過去に縛られているようじゃ、そいつに未来はない。そいつと共に歩もうとする奴の未来もなくなりかねない」

一誠は怯えるように小さく体を震わせている。何か思い出してしまったようだ。相
当なトラウマを抱えているな。

俺は一誠の肩に手を置いておき、言葉が続ける。

「おまえに何かあったのかはわからない、だからおまえを助けられない。自分で乗り越
えるか、その『何か』を知っている誰かに助けてもらわないとな」

一誠は俺を見る。普通からは想像できない弱々しい目だ。

俺はその目をしっかりと見ながら言う。

「何かしてやりたいが、俺には無理だ。すまねえ」

「……………いえ、大丈夫です。ありがとうございました」

一誠はそう言って立ち上がり、部屋を出ていった。少し追い詰めすぎたような気もす
るが、下手に頼られても何もしてやれない。一思いに突き放してやった方がいいと判断
した。

俺はため息を吐き、背もたれに体を預けて天井を見上げる。

一誠に何かあったのか、俺は知らない。知っているとしたらアーシアや朱乃たちだろ
う。あいつらに頑張ってもらえない。

次の日の朝。

「……………」

「……………」

空気が重い。その原因は一誠とリアスなわけだが、一誠に関しては俺のせいだ、許せ。俺が心の中で謝っていると、小声で小猫が訊いてくる。

「……………あの、ロイ先生」

「(ん?)」

「……………部長とイツセー先輩に何かあったんですか?」

「昨日何かあったらしいが、詳しくは聞いていないな」

「……………そうですか」

小猫は心配そうにリアスと一誠をチラリと見た。ゲーム前にこんな調子で大丈夫だろうか。

その日の放課後。

アザゼルを中心としたゲーム前のミーティングが行うことになった。リアスの機嫌はいまだに悪く、一誠の雰囲気も朝と比べればましではあるが、いつもと比べて暗い。

「ミーティング前に一つ言っておくことがある。ちよいと厄介なことになりそうだな」
「どういうことですか？」

木場が訊くとアザゼルは続ける。

「英雄派の連中が禁バランス・プレイヤー手について研究し、その結果を出していることは知っているな

？」
禁バランス・プレイヤー手に至るまで強者にぶつけ続けるといふ荒業をやったんだったな。

「あいつらはそれを色々な場所に流し始めているとのことだ」

その方法を改良したのか？それって、かなりヤバイことになるんじゃないのか？

俺と同じ事を考えたのか、メンバーの表情が固くなる。

アザゼルはそれを見ると、言葉が続ける。

「それがどういいう結果を生むか。わかるだろ」

「悪魔が全員いい奴でもないからな。理不尽な思いをしてる眷属も多いだろうからな」

だから俺のはぐれ狩りという仕事をしていたわけだからな。

俺の言葉にアザゼルが続く。

「そんな奴らが圧倒的な力を手に入ればどうなるか」

アザゼルが言葉を切ると、全員がシンと静まりかえる。

「使う、だろうな。復讐や報復に」

俺が続きを口にすると、

「怖い、ですね」

一誠が呟き、アザゼルが頷く。

「確かに怖いことだ。これから起きていくことは英雄派にとってはひとつの成果なんだろうな。いつ暴動が起きてもおかしくない」

「してやられたな。人間のおそろしきってやつを改めて思い知ったぜ」

俺が返すがどうなっていくのやら。これから面倒なことになりそうだな。

にしても空気が重い。アザゼルに目で合図し話を戻す。

「とりあえず、今はサイラオーグとのゲームだな」

「そうだったな、ロイ。そんなじゃ話を戻すぜ」

その後、ようやくゲームのミーティングになり、話が続いていく。

ある程度ミーティングが進み、俺が締めという言葉に入る。

「今回のゲームは冥界中で注目されている。記者会見だけであの盛り上がりだからな、冥界の住人は次の世代の悪魔の活躍を見たがっている」

「もちろんだが、現トップランカーたちも注目しているだろう。今から対策が練られ、デビューするころにはそれが完成しているはずだ。だが、今までそんな事があつたか？なかったはずだ。トップランカーたちはおまえたちを自分たちに届きうる脅威と判断したのさ。おもしろいじゃないか」

アザゼルは愉快そうに笑う。確かに、そのうち現トップランカーとゲームで競うリアスな姿は想像しただけでも興奮する。

「変えてやれ、レーティングゲームを。いい加減世代交代しないとつまらねえからな」俺とアザゼルの言葉に全員がやる気の表情になる。

それを見たアザゼルが頷き、再び笑んだ。それを合図にミーティングは終了となり、俺たち教師組は仕事に戻るのだった

life03 アグレアスへ

ゲーム当日。

「すげーよな、本当に島が浮いてんだから」

だいぶ調子が戻った様子の一誠が言う。視線の先には空中都市アグレアス。アジユカ様とその眷属が絶賛調査中の、旧魔王が残した謎の島だ。

それにしても、一誠が大丈夫そうで安心した。独りでだいぶ考え込んでいたようだが、一誠のトラウマを知る朱乃たちがフォローしてくれたそうだ。さっき朱乃たちに礼は言っておいた。

話を戻して今回の会場について。

今回の会場となるアグレアスはアガレス領になっている。最初はグレモリー領にしようって話だったが、バアル領にしろという意見があがり、そのまま泥仕合のような言い合いが続いたらしく、中央管理職的立場のアガレスがどうにか落ち着かせてくれたのだ。

まあ、血を重んじるとかどうとか、そのせいでクーデターが起きたというのに、学ばない奴が多いというか、頭が堅い奴ばっかというか……。

俺は面倒な思考を切り上げて外の景色に目をやる。

俺たちはアグレアスに行けるゴンドラに乗っている。そこからの景色はまさしく絶景であり、一見の価値がある。実際アグレアスから流れ落ちる滝とか、綺麗ではあるがな。

俺が景色を見てみると、アザゼルの言葉が耳に届く。

「おまえらに言っておく。注目されているだけあつてテロに狙われる可能性があるが、今回は心配ないと思うぞ」

「何を根拠に言っているんだ？」

俺が訊くと、アザゼルが頬をかく。

「ヴァーリから、個人的に連絡が届いてな」

『——っ！』

アザゼルの言葉に驚く一同。ここでヴァーリの名前が出てくるとはな。

俺たちに構わずアザゼルは続ける。

「あの野郎、短くこう伝えてきやがった。『今回のゲームは俺も注目している。邪魔はさせないさ』——だとさ」

その伝言に俺は頷く。

「なるほどな、いくら曹操でもヴァーリの相手はしたくないだろう。まあ、万が一来たと

しても、俺が止める」

俺の一言にリアスが少し不安げに言う。

「お兄様、今回の試合は……………」

「悪いな、リアス。今回は応援もできないかもしれない。だが、俺は信じてるぞ」

俺がそれを伝えると、ゴンドラがアグレアスに到着。そのまま出迎えのリムジンを目指して、スタッフと協力して人混みを掻き分けていく。別れるにしても、ゲーム開始まで七時間ほど、時間を持て余すとかいうレベルじゃない。

そんなわけでしばらくはリアスたちのボディガード的なことをする。人混みを掻き分けたり、壁になったりだな。

そんなこんなでどうにかリムジンに乗り込む。

「お待ちしておりましたわ」

中にはレイヴェルが待機しており、準備を進めてくれていた。ヴァインセント、おまえの妹すごいぞ。

俺は親友の妹を見てそんなことを思ったが、発進したリムジンの後方に窓越しに目を見る。マスコミの車が追ってきてやがるな。

「おまえら、個別にマネージャーつけた方がいいぞ。一誠とリアスは特にな。今回のゲーム、勝とうが負けようが認知度は上がる。毎度こんなんじや、義姉さんだけじゃ

フォローしきれなくなる」

「確かに、ロイの言うとおりだ。そうだ、レイヴェル。おまえがイツセーのマネージャーになつたらどうだ？」

真面目な俺の横でアザゼルがいやらしく笑いながら言った。その瞬間、アザゼルの頭部をハリセンが捉える！

スパン！という気味のいい音と共に、アザゼルは頭を押さえる。

「な、何すんだ、朱乃！」

「うふふ、ちよつとデリケートな時期でもあるので、そういうのは控えてくださいな。ね、部長」

涙目のアザゼルに朱乃は冷静に返し、リアスにウィンクした。

「……………」

当のリアスは恥ずかしそうに頬を赤くしながら口を尖らせる。レイヴェルも空気を読んで特にリアクションをしない。

リアスの調子も良さそうだ、一誠との会話は少し固い気がするがな。こつちも朱乃たちがフォローしてくれたそうだ。リアスの『女王』への感謝の念が絶えないな。

そんなやり取りをしてあるうちに、リムジンは会場となる巨大なドーム、『アグレアス・ドーム』を目前にしていた。

観光地として知られるアグレアスの中で、特にアーティストの公演を行う場所、それがアグレアス・ドームだ。今回はゲームに使うがな。

俺たちはそのアグレアス・ドームの横にある高層高級ホテルに移動していた。リアスたちはしばらくはこの待機部屋で待機となり、俺もそれぐらいのタイミングで別れる予定だ。

ボーイの先導で待機部屋を目指す俺たち。俺たちが進む通路の向こうから、不穏な雰囲気と肌をピリピリと刺すような冷たいオーラを放つ集団が歩いてきた。

顔が見えないほど深くフードを被り、足元も見えないほど長いローブを着こんだ集団と、その中央にいる司祭服の何か。

一誠たちはその中央の何かを見て絶句していた。それもそうだろう、その何かの顔は骸骨なのだから。

その骸骨の頭にはミトラという司祭が被る帽子が乗っており、手には杖も携えている。

そいつは俺たちを眼前にして足を止め、目玉のない眼孔の奥を光らせる。

《これはこれは、紅髪のグレモリーではないか。そして、墮天使の総督》

魔法か何かで発せられたその声を聞いた俺とアザゼルは、業務的に笑みながら言う。

「これは、地獄の底である冥府に住まう、死を司る神ハーデス殿ではありませんか」

グリム・リッツバー

「死 神をそんなに引き連れて上がってきましたか。しかし、悪魔と墮天使を何よりも嫌うあなたが来るとはな」

そう、この骸骨は冥府の神——ハーデスだ。嫌なオーラを放ってやがるな。

《フアフアフア………、言うてくれるものだな、コウモリとカラスめが。最近上で何かとうるさいのでな、視察をとな》

「骸骨ジジイ、ギリシヤ側のなかであんただけが勢力間の協定に否定的なようだな」

アザゼルの言葉に、ハーデスは怖いほど冷静に返してくる。

《だとしたらどうする？この年寄りもロキのように屠^{ほぶ}るか？》

そのやり取りのあと、ハーデスを囲む死神どもが殺気を放ってくるが、

「かわいいもんだな、死^{グリム・リッツバー} 神」

俺は反射的に死神どもを睨みながら殺気で返してしまった。いけねえな、殺気を殺気で返しちまうのは俺の悪い癖だ。

アザゼルが俺の肩に手を置き、俺が殺気を止めたと同時にハーデスに言う。

「オーデインのエロジジイのように寛容^{かんよう}になれって話だ。黒い噂^{うわさ}が絶えないんだよ、あ

んたの周囲は」

《フアフアフア……、カラスとコウモリの群れがうるさいのでな、防音対策をしたくなる》

まったく、もっと友好的になれつての。最悪こいつと一戦交えるとか、死んでもゴメンだ。今の俺じゃ、どう頑張っても勝てねえ。

《まあよい。今日は楽しみにさせてもらおうか。せいぜい死なぬようにな。今宵は貴様たちの魂を連れにきたわけではないのでな》

それだけを言い残してハーデスは俺たちの横を通り過ぎていく。

俺がため息を吐くと、アザゼルが語気を強めに言う。

「ロイ、ムカつくのはわかるが少しは抑えろ。面倒は嫌いなんだろう？」

「ああ、悪いな。どうも、あいづらは好きになれん」

「わからなくもねえがな」

俺たちが話していると、ロスヴァイセが言う。

「魂を掴まれる感覚というのは、まさに今の事を言うのでしようね。生きた心地がしませんでした」

魂を見透かされるような感覚と言うべきか、なかなか言葉で表すのは難しいが嫌な感覚だ。死を司るだけはある。

「アザゼル先生、ロイ先生、今の骸骨さんは………？」

一誠の問いだ。こいつにはしつかり勉強してもらわないとな。

「さつき言った通り、死を司る冥府の神、ハーデスだ」

俺が言うと、空気から解放されたようにアザゼルは首を鳴らし、一誠に言う。

「あいつ、各神話の主要人の中でもトップクラスの實力者だ。絶対に敵対するなよ？ま、俺の真横に、そいつに面と向かって殺気をとばしたバカがいるがな」

「だから、おまえには謝っただろうが」

横目で俺に言ってきたので適当に返しておく。

「ハーデス自身は悪いやつじゃないんだが、他の神話を毛嫌いしててな。人間には普通に接する神様だよ。俺たちは嫌いだがな」

「ああ、好きになれん」

俺とアザゼルがハーデスについてどうこう言っていると、

「あっ！オーデイン様！」

突然、ロスヴァイセが廊下の奥を指差した。その方向にはオーデインの爺さん。新し
いお付きのヴァルキリーを連れている。

オーデインはロスヴァイセを発見すると、「これはマズい！」と叫んでその場から逃げ出した。

ロスヴァイセ素早くヴァルキリーの鎧を身に纏い、オーデインを追って駆け出す！

「ここで会ったが百年目！待てえええええつ！このクソジジイイイイイツ！」

行つちまったよ、まったく。

俺はため息を吐き、リアスたちに言う。

「俺が追いかけるから、おまえらは待機部屋に行つとけ。後で追いつく」

「お願いします」

「やれやれ、面倒をかけさせやがって」

俺はロスヴァイセを追って駆け出した。

数分後。

「ロイ先生！離してくださいッ！」

「気持ちわかるが落ち着け！殴ったってどうにもならねえだろ！」

「それもそうですが、殴らないと気がすみません！」

俺はロスヴァイセを羽交い締めにして押さえていた。ロスヴァイセは構わずにじたばた暴れ、オーデインは追い詰められた壁際を背にしながら焦り、新しいお付きのヴァルキリーもどうするか困っている様子だ。

「ぐぬぬぬぬっ！」

「暴れるなつて！ほら、部屋に行くぞ！リアスたちが待つてる！」

俺は必死にロスヴァイセを押しやるが、地味に『戦車』のパワーで押され始める。はつきり言うのと、辛い。

俺の苦勞を知らないオーデインが言う。

「ええい！胸も触らせたこともない生娘ヴァルキリーじやろうが！」

なぜかロスヴァイセを煽った！なに考えてんだこの爺さん!?

俺が驚いていると、ロスヴァイセが一気におとなしくなり、顔を真っ赤にして俺をチラと見る。

……………あ。

「そういえば、触っ——」

「——つて、言わないでくださいッ！」

素早く俺を振りほどいたロスヴァイセの拳が迫る！俺はそれをギリギリで避け、体勢を整える。

一連のやり取りを見ていたオーデインが漏らす。

「なんじゃ、つまらんのお。もうくつついておったか」

「くつついてねえ！」

「く、くつついてません！」

俺とロスヴァイセはオーデインに怒鳴るように返す。俺はセラ一筋なんだよ！

俺は息を吐いて、ロスヴァイセに言う。

「とりあえず戻るぞ。リアスたちが待つてる」

「わかりました！次こそは逃がしませんからね！」

ロスヴァイセはそう言い残し、俺に続いて歩きだす。後ろから盛大なため息が聞こえたが、俺たちは無視した。

「ところで、ロイ先生」

「ん？」

「待機部屋は、どこなんですか？」

「……………どこだろうな」

「はあ!？」

こうして、俺たちは仲よく迷子となり、心配して様子を見に来てくれた木場に連れられて待機部屋にたどり着いた。

そこで少しだけ休ませてもらい、俺は警備につくために部屋を後にしたのだった。

life 04 切り裂き魔VS聖槍

「ふうー……………」

ため息と一緒にタバコの紫煙を吐き出しながら、俺——ロイは周囲に気を配る。

警備に参加してからざっと七時間。リアスたちのゲームが始まってから二時間程。

俺の背後にあるアグレアス・ドームからは絶えず歓声が聞こえてくる。

「ふうー……………」

短く紫煙を吐き、タバコを携帯灰皿に押し込む。これを何度繰り返したか、数えるのもバカらしくなってきた。退屈だ、いや、いいことではあるがな。

俺は時計を確認する。リアスたちのゲームのルールが何かはわからないが、『短期決戦』なら、そろそろミドルゲーム——中盤戦の終わりぐらいか。

次のタバコを取りだし、口にくわえて火をつける。再び紫煙を吐き出すと、紫煙とは別の煙、いや濃い霧が頭にかかった。

気持ちの悪い霧に体を包まれ、それが晴れるころにはアグレアス・ドームの前にいた。いや、アグレアス・ドームと言ったら違うな、あの疑似京都と同じ作りもの……………。

ってことは、つまりそういうことか。

俺は紫煙を吐き、目の前に立つ右目に眼帯をつけた青年を見る。

「……………つたく、まさか来るとはな」

「今回はあなたに用がありませんね」

目の前に立つ青年、曹操が槍で肩を叩きながら言う。

俺はタバコを携帯灰皿に押し込み、その代わりに銃剣を取りだし、銃口を曹操に向ける。

その瞬間、俺の真横に白い閃光と共に何か降り立った。

「言っただけだ、邪魔をするなど」

鎧を身にまとったヴァーリだ！こいつも本当に来やがった！

「ヴァーリ、マジで来たのか……………」

「ああ、自分で言ったことだからな」

驚く俺をよそに、ヴァーリは冷静に返してヴァーリは構える。俺も続くように構え、曹操を睨む。

「やれやれ、来てしまったのなら仕方ないか」

曹操は息を吐くと、槍の石突きで地面を叩く。すると、どこからか大量のアンチモンスターがわき出てきた。俺とヴァーリを囲み、不気味な唸り声をあげている。

「色々出てきたが、ヴァーリ、他のメンバーはどうした？」

「ここに飛び込めたのは俺だけだ。あいつらは周囲を固めているところだろう」

「逆に言えば、曹操は一人、いや、ゲオルグもどこかにいるのか」

「そうだろうな」

ヴァーリは頷くと、俺に言ってくる。

「俺はゲオルグを叩く。そうすれば、この空間も解除されるからな」

「任せた。ゲオルグってか、結界系の神滅具ロンギヌスを相手にできないからな」

「任せろ」

ヴァーリはそう言うや否や、高速で動きだしてアンチモンスターを蹴散らしながらどこかに行ってしまう。

俺は息を吐き、曹操に言う。

「まったく、俺は面倒が嫌いなのによ。何をしに来た」

「あなたと手合わせしたくなっただけですよ。小次郎には悪いと思いましたが、あなたと戦ってみたくなくなった」

「変な奴に興味を持たれるな。なんかうぜえ」

「そうですか？ですが、私も急いでいますので、ゲオルグが見つかる前に始めましょうか」

曹操はそう言うと、器用に槍を回して構えを取る。

静寂が俺と曹操の間を支配し、それを破るのは……………。

「——ッ！」

もちろん俺だ。俺は弾丸を放ちながら高速で飛び出し、一気に曹操との距離を詰めていく！

曹操はそれを読んでいたかのように、全ての弾丸を弾き、突っ込んでくる俺に合わせて突きを放ってきた！

俺は右の銃剣でそれを反らし、左の銃剣で斬ろうとすると、曹操は素早くその場を飛び退く。

空を切った左の銃剣の銃口を曹操に向け、引き金を引く。放たれた弾丸はまっすぐ曹操に向かうが、槍で弾かれて俺の足元に着弾、小さく地面を抉る。

やはり、遠距離攻撃には対策済みか。

俺は銃剣を変形させ、二刀流の構えに変える。

それを見た曹操は、待っていたと言わんばかりに笑むと槍を握り直す。

俺は短く息を吐き、一気に飛び出す！

一気に肉薄した俺に、曹操は槍を右から横風ぎに振り抜いてくる！俺はそれを右の剣で受け止めると、そのまま上に弾きあげて左の剣で斬りにいくが、素早く戻された槍に阻まれる。

ぶつかり合う剣の刃と槍の柄が激しく火花を散らし、俺と曹操は睨みあう。

「その目、やはりダメだったようだな」

「ええ。フェニックスの涙はありましたが、これは己への戒めとして残しておきました。代案は考えています」

「そりゃ、怖いな！」

俺はそう言いながら曹操を押し返し、そのまま至近距離での攻防となった！

鎧のような防御手段のない俺だと、聖槍のオーラを掠めただけでも重症になる。本体とオーラの間合いを計り、確実に避けていかなければならない！

俺は冷や汗を流しながら、曹操の攻撃を捌き、こちらも攻撃を打ち込んでいく！一瞬の油断が命取りになるな！

曹操の振り下ろしを、俺は頭上で剣をクロスするようにして受けると、爪先に滅びの刃を生成して曹操に蹴りを放つ！

曹操は目を見開きながら、それを避けるために後ろに跳ぼうとするが、俺はギリギリで刃を伸ばして距離を稼ぐ！すると、

「チツ……………」

曹操は舌打ちをして、大袈裟に後ろに飛び退く。見ると、腹の右には血が滲んでいた。少し浅かったが、当たったようだな。

俺は不敵に笑み、曹操に言う。

「やりにくいが、殺れなくはないな。悪いが、ここで死んでもらうぜ？」

「まだ死ぬわけにはいかないな……………」

曹操は静かに、それでいて力強く言う、槍が纏う聖なるオーラが大きくなる。ここからが本気のようなだ。

俺は剣の柄頭を合わせて両剣モードに、そしてそれを投げつける！

高速回転しながら飛ぶそれを、曹操は余裕で避けてこちらに突貫してくる！俺は両手に直刀を生成してそれを迎え撃つ！

聖槍が残すオーラの残光と、俺の直刀が残す紅の残光が火花を散らしながら激突していく！どこをどう打ち込んでも捌かれ、俺も当たりそうなものだけ素早く捌いていく！

俺が左の直刀で突きを放つと、曹操はそれを弾かずに、俺の背中を取るように避けた！

曹操がその隙を見逃すわけもなく、俺の背中に聖槍を突き刺そうとする！

俺は翼を展開し、そこに刃を生成、無理やり聖槍の一撃を止める！

曹操は驚きながらも聖槍のオーラを解放、俺に浴びせようとしてきていた！

俺は直刀を大剣に変更、そのままオーラを纏わせて地面を殴りつける！

砂塵と共に微量の滅びが宙を舞い、曹操を下がらせることには成功したが、一応その

場を飛び退く。その瞬間、俺のいた場所に聖なるオーラが放たれ、地面が抉りとられた！

危ねえ、あと少しで消し炭になるところだった……。

俺は少し荒れた息を整え、聖なるオーラを頼りに曹操の場所を特定し、そちらに目を向ける。

曹操も肩で息をしているようだ。戦闘時間こそ短い、ここまで疲れる戦闘もないな。

俺は息を吐き、曹操に言う。

「つたく、本当に面倒な奴だな。こっちは当たっただけでアウトだったのによ」

「異形からも恐れられたあなたに言われるのなら、それは本当なのでしょうね。一応、褒められていると受け取っておきます」

「面倒だな……」

俺が呟くと、曹操の後方から両刃剣が戻ってくるが、それも読んでいたかように避けられた。やはり、ロキみたいにはいかないか。

俺は両刃剣をキャッチし、改めて二刀流の構えを取る。

俺が曹操を睨むと、曹操はやる気を失ったように槍を肩に担ぐ。

「もう少しやりたいところですが、そろそろゲオルグが見つかったころでしょう」

それを合図にしたように、ゲオルグが短距離転移で曹操の横に現れる。ローブがボロボロになっており、肩で息をするほど消耗しきっているようだ。相当暴れたらしいな。

ゲオルグを追うように現れたヴァーリも俺の横につく。目立ったダメージはなさそうだ。そこまで心配はしていなかったがな。

「やれやれ、アンチモンスターが倍は必要だったな」

「いや。数は関係ないよ、彼には……………」

曹操が言うと、ゲオルグは苦笑しながら頷く。

俺は構えを解かずに曹操に言う。

「で、まだやるか？俺は構わないが」

「俺もだ。おまえとも戦いたいからな、曹操」

俺とヴァーリの視線を受けた曹操は苦笑し、首を横に振る。

「いえ、先程も言いましたが、ここまでです。今日は退かせてもらいます」

曹操が言うや否や、俺たちを霧が包み始める。

俺たちを転移させるつもりか！逃がすかよッ！

俺とヴァーリが飛び出すと、曹操が聖槍をかざして閃光を溢れさせる！

俺とヴァーリは閃光による目眩まし、聖なるオーラによるダメージで一気に減速する。てか、これ以上近くに行ったら、体が耐えられずに消し飛んじまう！

閃光と霧が晴れると、そこは風景は変わらないアグレアス・ドーム前だった。変わったことがあるとしたら、歓声が聞こえるってぐらいか。

で、ヴァーリは白い閃光となって、どこかを目指して急速に離脱していった！今いけば、追いつけるかもしれないねえな！

俺が翼を展開、飛び出そうとすると、

「ロイ、待て！」

突然の制止の声に、俺は驚きながらも声の主に目を向ける。

「アザゼル、どうしてだ!?今いけば……………」

「まあ、待てって。次は敵とは限らねえだろ?」

「次こそ敵かもしれないねえだろうが!あー、くそ!」

どこかずれているアザゼルに愚痴りつつ、俺はヴァーリが消えた方向に目をやる。もう見えなくなってるな。

アザゼルのには助けてくれたという恩を、見逃すという恩で返すつもりかもしれないが、バカじゃないのか!?

俺はため息を吐き、怒気を込めてアザゼルに言う。

「あのな、あいつはテロリストだぞ?!助けてもらったとはいえ、敵だつてことに変わりはない!」

「どーせ、すぐに会うことになるさ。そんな予感がするんだよ」

「つたく。で、ゲームはどうなった？」

俺は気分と共に話題を変える。気になっていたことだしな。

「リアスたちが勝ったよ、ギリギリだったがな。イツセーは新しい力に目覚めた」
「そうか」

俺は返事をしながらタバコを取りだし、それをくわえて火をつける。

俺が紫煙を吸い込んだ矢先、

「あと、イツセーがリアスに告白したぞ」

何てことを言っつけてきやがった！

「ゴホッ!!ゲエホッ!」

思わず紫煙を吸い込みすぎて、途端にむせかえる。あいつ、告白したのか!?こんな大舞台でやらなくてもいいだろうが!

俺は涙ぐむ目を擦りながら、アザゼルに言う。

「マジかよ、ちよつと見に行けば良かったな……………」

「ま、そのうちちゃんとやるだろうよ。その時に何か言っつてやれ」

「ああ、そうするよ」

俺は返事をしながら改めて紫煙を吸い、ゆっくりと吐き出す。やれやれ、明日の新聞

が楽しみだな。

何てことを思いつつ、俺は治療中と思われるリアスたちとは別に帰路につくことにした。

曹操とヴァーリ、次はいつ会うことになるんだろうな。

l i f e 0 5 場所は大事

リアスとサイラオーグたちのゲームが終わり、待ちに待った学園祭となった。

俺——ロイは模擬店で勝った焼きそばをすすりながら、旧校舎の一階の奥にある部屋に来ていた。一誠に伝言があるからだ。

「で、おまえ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です」

なぜか頬が赤く腫れている一誠を心配しながら、焼きそばをすする。存外いい出来ばえだ、美味しい。

俺は一気に焼きそばを平らげ、一誠に言う。

「それでだ。話つてのは、サイラオーグについてだ」

「サイラオーグさんに何かあったんですか!？」

サイラオーグの名前が出たことで急に真剣になる一誠。こいつ的に言わせれば、サイラオーグは憧れの存在なんだろう。次も勝てるかと訊いたら、「無理」と即答された。

俺は咳払いをして、一誠に言う。

「ああ、サイラオーグと繋がっていた上層部の連中、一斉に手を引きやがった」

「……………そんな」

急に元気がなくなる一誠。自分が勝ったせいで、とか考えているんだろう。

サイラオグは己の夢の実現のために、様々な悪魔とパイプを持っていた。だが、今回の敗北でそれを全て失った。

「一誠、忘れるな。悪魔は実力が全てであり、負けた奴の利用価値はない。それを未練なく、あつさり捨てられる。そういうのが昔から生きる悪魔であり、悪魔の形のひとつだ」
「あんなに立派に戦ったのに……………」

「悔やむなよ。あいつと殴りあつたおまえが心配なんて、やつちやいけないことだ。そのうちおまえもそこに飛び込むことになるんだ、腹くくつとけ」

「次期当主の座は？」

「そつちは問題ない。実力も世論もある、そう簡単には揺るがないさ」

それを聞いた一誠はホツと息を吐く。ようやく安心したようだ。

俺が一通り話終え、リアスについて訊こうと口を開く。

「一誠、ところで——」

「おー、イツセー。ここにいたのか」

それを遮るようにアザゼルが入ってきた。こいつがいたら訊くに訊けねえな。

俺はため息を吐き、アザゼルに言う。

「まったく、相変わらず気配を感じなかったぞ」

「ま、そこは年の功つてやつだ。イツセーを借りるぞ」

「わかった。一誠、後でな」

「え？あ、はい！」

俺は一誠の返事を聞いて部屋を後にする。次は新校舎だ。ソーナに軽く話をしたい。

しばらく歩き、新校舎に到着。各クラスの出し物を横目に見ながら、生徒会室に入る。

「すまん、邪魔するぞ」

「ロイ先生、お疲れ様です」

書類を確認していたと思われるソーナが顔をあげる。ソーナは基本的に俺を『様』で呼ぶが、学校生活では『先生』呼びだ。オフの時ぐらいいは『お義兄様』と呼んでもらいたい。

それを口には出さず、俺はソーナに返す。

「お疲れさんつと。聞いたぜ、そっちは旗とりをしたんだつてな」

そうなのだ。ソーナもリアスたちと同じ日にゲームを行っており、相手はシーグヴァイラ・アガレスというソーナと同年代の女子悪魔だ。眼鏡をかけているし、少し固いところもあり、雰囲気は結構似ていると思う。

ソーナが表情を固くしながら言う。

「大変でしたし、評価もあまり良かったとは……………」

「匙、暴走したんだってな。つたく、焦りすぎなんだよ」

「彼を止めるのも、私の役割なのですが……………」

「それもそうだが、何で『王』同士の決闘をしたがるんだ？盛り上がるが、結構リスクい
だろう？」

「……………」

立て続けの言葉に、ソーナは黙りこんでしまう。俺は息を吐いて話題を変える。

「ま、それはそれだ。これから頑張っていけばいい。話は変わるが、いつになったら『お
義兄様』って呼んでくれるんだ？」

「……………へ？」

俺の言葉にソーナは間の抜けた表情になる。まあ、その表情を見せてくれるだけで信
頼はされているんだろうな。

俺は改めて言う。

「だから、いつになったら『お義兄様』って呼んでくれるんだ？」

「な、な、何を言い出すんですか!？」

珍しく慌てる、いや照れるソーナ。こういうところは変わらないな。いじるとすぐに
冷静さを欠く。

俺は続ける。

「だってよ、昔は『おにーたま!』とか言ってくれてたのによ。今じゃ『様』だの『先生』だぜ? オフの時ぐらい『お義兄様』ってさ」

「そそそ、それはあれです! お姉様と結婚なさってから……」

「それがかなり先になりそうだから言っただが、まあ、いいか」

俺はそう言いながら扉の方に目を向ける。ソーナがつられるようにそちらに目を向けると、目を見開く。薄く扉が開いており、そこから室内を覗く目が複数。

俺はフツと鼻で笑い、ソーナに言う。

「たまにはキャラじゃないことをしてみろもんだな」

「ロイ様……!」

「あばよっ!」

俺は逃げるように軽く手を挙げ、さっさと部屋を出ていく。

部屋を出た瞬間に覗きこんでいた生徒会のメンバーと目があつたが、軽くウインクだけやって逃げた。

後ろから「あ、あなた、何をしていますのですか!」とか、「いえ、報告に来たら会長と先生が——」なんて聞こえてきたが、あえてスルーした。面倒だからな。

その後、無事に学園祭も終わり、俺はある予感がしてオカ研の部室に来ていた。正確には、部室の扉を薄く開けて中を覗いている。覗いておいてなんだが、さっきの生徒会のメンバーの気持ちかわかる気がする。

中にはリアスと一誠だけであり、告白にはもってこいの場所だろう。何を言っているかはわからないがな。

「ロイ先生、何をされているんですか？」

俺に近づいてくる気配がひとつ。そこらに目を向けると、そこにはアジアがいた。

俺はアジアにジェスチャーで静かにするように伝え、手招きする。アジアは頷いてこちらに来ると、俺と同様に中を覗きこむ。

「はうっ！リアスお姉様とイツセイさんか！」

「おっと、まだ行くなよ？様子見だ」

「はい！」

アジアは顔を真っ赤にしながら頷く。

その後、覗く部員が増えていき、家庭科室に料理をしに行ったレイヴエル以外の部員が勢揃いしてしまった。

そんな矢先、リアスと一誠がキスをしようとし始める！

「む！イツセーとリアス部長がキスを！」

「ちよっ！ゼノヴィア、押すな！」

口に出したがもう遅く、扉がギイイと音を立てながら開いていく。何にいた二人とバツチリ目があった。

「とりあえず、おめでとさん！」

俺は笑みながら二人に言うど、

「何をしているんですか!？」

異口同音で返してきた。うん、息びったりだな。それはそれとして、俺は笑みを絶やさずに弁明する。

「妹とその想い人が二人つきり、覗くなという方が無理だろ」

「……………」

俺の言葉に二人は完全に固まった。言い過ぎたか？

俺がなんてことを思っているど、

「皆様、ケーキを焼いてきましたわ！」

レイヴェルが大きなケーキを持って入室してきた。ある意味いいタイミングだな。レイヴェルは俺たちを見渡すと、俺に訊いてくる。

「あのく、この状況は、いったい……………」

「ま、気にするな」

「気になりますわ!」

俺とレイヴェルがそんなやり取りしていると、リアスが突然叫んだ。

「こうなったのもイツセーのせいよ!何もここで告白しなくても!」

「え!俺のせいですか!」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「そういうことだ、諦めろ、一誠」

「そ、そんなあああああ!」

イツセーの叫びと共に今日は幕切れ——。

「つと、訊いていなかった」

「どうかしたんですか?」

俺は一誠の目をまっすぐ見据えながら、再び訊く。

「一誠、おまえにとつて、リアスは何だ?」

一誠は何か気づき、一瞬ハツとした表情になると笑みながら返してきた。

『リアス』は俺にとって、最高の女性です！」

「ふっ、ハハハハハッ！やっぱり最高だよ！イツセー！」

俺は爆笑しながらもイツセーの横に立つリアスを見る。顔を真っ赤にして頭から煙を吹いているが、リアスが選んだ男だ、信賴できるだろうよ。

「つて、あれ？ロイ先生、今………」

「あ？イツセーって呼んだが、何か問題あるか？」

「いいえ！そんなわけではないです！」

俺の呼び方の変化に喜びながら、イツセーは照れ臭そうに笑う。まったく、最初から素直になれば良かったのによ！

こうして、今度こそ学園祭は幕を閉じた。

こいつが未来の義弟^{おとうと}、か。楽しみなだな。

幕間編④

Extra life 01 人魚を求めて

とある休日。

「……暑い」

俺——ロイは一人つきりで、大量の汗を流しながら白い砂浜に立ち尽くしていた。休日ではあるが休暇ではなく、仕事をしに来たのだ。

本来なら、リアスたちかソーナたちの仕事なのだが、リアスはグレモリー領に現れた『リアスたちの偽物』を退治をしに向かい、ソーナたちは予定が空いていなかったそうだ。

そんなわけで、暇をしていた俺に白羽の矢が立つちまったわけだ。こうして何もせず汗を流しているんだが、個人的にはその『偽物』つてのに興味があつたんだがな。仕方ない。

てか、日本は秋だつてのにこっちは真夏とか、こんな調子じゃ体調崩すぜ……………。

「はあ……………」

俺はため息を吐きながら仕事だと割り切り、ある人物に会うために移動を開始した。

歩くこと数分。

俺は先程の砂浜から離れ、波打ち際の岩礁に来ていた。

俺は周囲を見渡しながら歩き、目的の人物と思われる女性を発見した。

鮮やかな緑色の長髪の美人だが、性別とは別に俺とは決定的に違うものがある。彼女の下半身が魚のようになっていた。つまり、俺の目の前には『人魚』がいる。

まあ、マジの魚に人間の手足が生えただけの人魚もいるが、出来ることならそんな化け物には会いたくない。

俺はその人魚に声をかける。

「よっ。あんたが保護を求めているヒトだな？」

俺の問いかけに、人魚は髪を弄りながら恥ずかしそうに頷く。

俺も頷き返し、自己紹介する。

「俺はロイ、ロイ・グレモリーだ。話は聞いているぜ」

「わ、私はリリティファ・ウエパルです。は、はじめまして……」

リリティファが見た目通りのかわいらしい声で自己紹介をしてくれた。よし、情報通りだな。

ちなみに、ウエパル家は断絶したはずの一族だ。ソロモン七ななしちゅうかたはしら二柱の悪魔たちは、三大勢力の戦争や二天龍との戦い、そして旧魔王派とのいざこざのせいで大いぶ数を減らし、今では『元七二柱』なんて呼ばれているのだ。

魔王様たちは、その断絶したと思われていた一族の生き残りは発見しだい接触、場合によっては保護することを人間界に住む悪魔のルールとしている。今回は保護を求めたので助けようとしているわけだ。

ある意味、俺に白羽の矢が立って当たり前だな。完全に俺向きの任務だ。

俺は魔方阵でマニュアルを取りだし、メモを取る準備をしてリリティファに言う。

「それじゃ、いくつか質問させてもらおうぜ」

「は、」

リリティファの返事を聞き、俺は質問を始める。内容としては、今までどうやって暮らしてきたのか。現悪魔業界をどう思っているか。生活面での不満、不便はあるのか。など、簡単なものだ。

そして、俺が最後に『現在、不安なこと』を訊いたとき、リリティファが表情を曇ら

せる。これは、問題ありのようだ。

「リリティファ、素直に言ってくれ。出来る限りの対処はさせてもらおう」

俺ができるだけ優しい声で言うと、リリティファはもじもじしながら口を開く。

「…………え、えつと……………実は……………怖いヒトに脅されてまして……………」

脅されている。……………これは、面倒の予感だ。

俺がそんな事を思ってしまったからなのか、周囲に黒い霧のようなものに覆われてしまった。

この霧、魔力で作りに出しているようだ。微量だが、魔力を感じとれる。

霧の魔力を感じて、リリティファは怯えて小さく震えだした。

俺が周囲を警戒していると、不気味にきしむ音が周りに木霊する。こだま

『見つけたぞ、ウエパルの人魚』

不気味な声と共に現れたのは、大型の帆船だ。海賊——いや、それにしてはボロボロすぎるから幽霊船か。

その幽霊船は岩礁に停留する。

「我こそはキャプテン・グラッグ！」

船首に身を乗り出し、声高々と吼えたのは海賊風の格好をした怪人だった！ なんとなくだが、チョウチンアンコウみたいな顔してやがるな。左目に眼帯、手にはサーベル

を持つている。

問題なのはそこではなく、船の帆に描かれているものだ。帆にはよくある骸骨ではなく、魔方阵が描かれている。あの魔方阵、確か……………」

「フォルネウス家の魔方阵。リリティファ、おまえも苦労していそうだな」

「は、はい」

俺の言葉にリリティファは頷く。怖いヒトつてのは、あのチョウチンアンコウか。

フォルネウスも元七二柱に連なる上級悪魔だが、名前がわからないからチョウチンアンコウでいいよな？ 怪人タイプが悪魔に会うのも久しぶりだ。

俺がそんなことを思っていると、チョウチンアンコウが下僕を引き連れ、堂々とも申しってくる。

「ここが我がフォルネウス家の領域と知つての狼藉か!? 反応からすると、我らと同じ悪魔だな？」

それを知つてもチョウチンアンコウの態度は変わらない。だが、部下からの一言で表情を変えた。

「キャプテン！ この魔力の質は上級悪魔のものですよ！」

それを聞いて俺の髪を見てくるチョウチンアンコウ。赤く光る目を細めた。

「紅の髪……………グレモリーか。これは失礼した。私はフォルネウス家のグラッグ・フォ

ルネウス」

グレモリーの名は効果バツグンだ。おっと、俺も名乗り返さないとな。

「俺はロイ・グレモリーだ。あんまり知られていないがな……」

俺は後頭部をかきながら言う。フォルネウスは後半を無視して「フン」と鼻息をあげた。

「ふむ。なるほど。だが、そちらの人魚は私が搜索していた者なのだ。話し込んでいるなか申し訳ないが、引き渡してもらえぬだろうか。今日こそはその者を我が眷属に迎えようと思うのだ。ぐふふふふ」

こっちは大事な仕事中だったので、その物言いととはな。そして、下品な笑い。下心丸出しだな。イツセーがいたら、どんな顔をするかな？

「……………怖いです」

リリティアアが俺の背中に隠れる。かなり脅されていたようだな。

俺はリリティアアを庇いつつ、チヨウチンアンコウに言う。

「フォルネウス家は語学に秀でてしていると聞いていたが、何事にも例外はあるようだな。なんで俺に仕事が回ってきたのか、理解できたぜ」

俺はわざとらしくため息を吐く。あんな奴に保護させたら、絶対に大変なことになる。

それにしても、こんなところで仕事はやれているのか？ 近くの島民相手に契約してまわっているのかもしれないが、もしかしたら海賊らしく剥奪とかをしているの可能性も……。

俺の態度が気に入らなかつたのか、チョウチンアンコウは歯をむき出しにする。

「お、おのれ……！……！言わせておけば！ 他人様ひとさまの縄張りに土足で踏み込んでその態度とは……！……！」

あー、面倒くせえ。さっさと終わらせてアイス食いてえのによ……。

俺が額の汗を拭うと、取り巻きの悪魔がチョウチンアンコウに進言する。

「キャプテン！ ちよつと調べてみたんですけど、あ、あの方、グレモリーの中でも『謎の多く』、『影の薄い』ロイ・グレモリーですよ！」

「……………」

俺はその下僕悪魔の言葉にショックを受け、無言で口の端を引きつかせた。

『謎が多い』とか『影が薄い』とか言うなよ！ 結構気にしてるんだからよ！

「そして、『乳龍帝&スイツチ姫と七人の愉快な仲間たち+α』の『+α』ツス！」

なんか大変なことになってやがるっ!? なんだその長つたらしい呼び名は！ 『七人』がリアスの眷属で『+α』が俺とイリナか!? てか『+α』で片付けられたっ！

チョウチンアンコウはうんざりした態度で言う。

「その『脇役』が私の獲物を横取りしようというわけか」

その言葉で、俺の中の何かが切れた。

「誰が脇役だ！こちとら必死にやっているんだよ！」

俺が怒気を込めながら言うと、チョウチンアンコウが叫んだ！

「そのウエパール家の者は私が先に目をつけたのだ！」

「知ったことか！リリティファは連れていく！俺が何としてでも守る！」

俺とグラッグが睨み合っている時だ。

ザッパーン！と、海が大きく水柱を立てた！今度は何だよ！って、何かが飛び出してきた！これ以上問題を増やさないでくれ！

海中から飛び出してきた何かは、空中で何回転もしてから岩礁に降り立った。

現れたのは頭に王冠、手には三叉の矛を持った、ふんどし姿のヒゲオヤジだ。

「海で喧嘩はいかああああんっつ！」

この一帯に響き渡るほどの大声を張り上げた！くそっ！耳が、耳があああああつ！

「何者だ！」

チョウチンアンコウが指を突きつけると、ふんどしヒゲオヤジは手に持った矛を器用にくるくると回して豪快に笑った！

「ふははははははははっ！天にゼウス、冥府にハーデス！誰が呼んだか、海の帝王！そう

ないかつ！」

やれやれ、ここまで来たら引けないか。まあ、こつちも引く気はない！

「上等だ！脇役、舐めんなよっ！」

俺は答えるように右拳をグラッグに突き出しながら叫んだ！

「……………私、どうなるんでしようか？」

俺の後ろから不安そうな声が聞こえてきたので、俺は振り向いて笑みを浮かべ、リリテイファにだけ聞こえるように言った。

「安心しろ。あんたは俺が守るし、あんな奴に負けねえよ」

こうして、俺とグラッグの一戦が始まるうとしていた。

Extra life 02 人魚のために

そんなこんなで海の上。

俺——ロイは小型のヨットの上でタバコを吸いながら、前方の海賊船を睨んでゲーム開始を待っていた。

俺たちのゲームを仲を取り持つポセイドンは、でかい亀の上に乗る、リリティファもその横に座っていた。

本当、どうしてこうなっちゃったのか……………。

俺は紫煙と同時にため息を吐き、ゲームの開始を待っていると、ポセイドンが声高々と説明を始める。

「このポセイドンが合図をしたら戦闘開始だ！ルールは簡単！全滅したほうの負け！殺し合いにならぬよう、その辺はだけは気をつけいっ！」

全滅つて、俺が倒れたら負けってことだよな……………。本当、面倒なことになりやがったな……………。

俺は再び紫煙を吐き出し、銃剣を取り出した。少しぐらい、体をほぐしておけば良かったな。

俺はなんてことを思いながら軽く伸びをする。ストレッチは大事だが、何もかも面倒になってきた……………。

ポケットとしている俺に、チヨウチンアンコウが言う。

「グレモリー家の脇役！我が眷属は海上でのバトルに秀でた猛者揃いよ！怖くなったら帰ってもいいのだぞ！ぐはははははは！」

不敵に高笑いするチヨウチンアンコウ。俺は紫煙を吐き出し、そいつに言う。

「チヨウチンアンコウ、あまり舐めるなよ？こう見えても、戦争は経験しているんだ。戦いには慣れてる」

「チヨウチンアンコウ言うな！私はキャプテン・グラッグだ！そして、勝つのは我々だ！」

チヨウチンアンコウはそう言いながら部下たちに何か指示を出していく。いいよな、仲間がいるって。な、なんか切なくなってきた……………！

その思いを振り切るように紫煙を吐き出し、タバコを携帯灰皿に押し込んだ瞬間、
「はじめーいっー！」

ポセイドンが大声を張り上げて合図した！同時に海賊船の大砲が火を吹き、弾が発射された！弾は近くの海面に着弾、大きな水しぶきをあげる！

「……………つたく、大砲を積んでやがるのか！面倒だな！」

俺は愚痴りながら翼を展開、ヨットを乗り捨てて一気に飛び出す！俺を撃墜しようも大砲の弾が放たれるが、遅いし的外れだ！

大砲の弾を避けながら、俺は銃剣の引き金を引く！滅びの弾丸が次々と放たれ、船体に小さな穴を開けていく。

十発ほど撃ち込むところで射撃を止め、指を鳴らす。すると、船体を貫くように滅びの刃が何本も生えてくる！

フェンリルにやったものの応用だ。生物でなくても、十分なダメージを与えられる。現に、帆柱が折れ、海賊旗もポロポロになつていく。

「ぬがあああつ！私のフライング・ダッチマン号があああつ！」

「キャプテン！次から次への刃が、ギヤア!？」

次々と生える滅びの刃に、チョウチンアンコウたちは軽くパニックとなつていた。が、チョウチンアンコウの号令で落ち着きを取り戻していく。

「おまえたち、落ち着くのだ！海賊は狼狽えない！」

滅びの刃が出尽くしたところで、チョウチンアンコウは上空の俺にサーベルの切っ先を向けて叫ぶ。

「おまえたち、奴を落とせ！」

「水よ！蛇となって奴を咬め！」

剣士風の下僕Aから蛇の形をした水の波動が放たれ、俺に向かってくる！

俺は銃剣でそれを斬り伏せ、非殺傷モードでその下僕を射撃。下僕はそれを避けられずに眉間に直撃、気絶した。

「いでよ、烈風の魔獣！」

魔法使い風の下僕Bは自分の影から魔物を召喚し、俺に攻撃するように命じてくるが………。

「遅い！」

俺は一気に落下しながら射撃。魔物と下僕Bを無力化し、船上のちょうど中央に降り立つ。

残った下僕たちが俺に攻撃しようとするが、一瞬躊躇う。理由は簡単、俺は船上のほぼ中央、万が一撃てば必ず同士討ちになる位置を陣取ったのだ。

俺は二挺の銃剣を前後左右に撃ちまくる！放たれた弾丸は全弾敵に直撃し、次々と撃破していく！

そして、

「ギイツ!?!」

ラストの一人を倒したところで、銃剣で十字を作るように構えを――。

立ったまま寝ていた！亀の上で器用に立ちながら寝てやがる！つ、疲れてんのか？俺が困惑していると、チヨウチンアンコウが言う。

「神が見ていないので隙ありということだ！」

チヨウチンアンコウが何て言っているが、さつさとリリティファを助けるか。

俺がそう決めて一気に飛び出そうと構えた瞬間……。

「おっと、動くな！動いたらこの人魚がエロいめにあうぞー！」

何て言いながら、いやらしい眼でリリティファを見るチヨウチンアンコウ。本当に下品な野郎だ。でも、下手に動いたらリリティファが色々とされちまう。さて、どうしたもんか。

俺が思慮していると、俺の足に何か巻き付いた。見てみると、それは巨大なイカの足。つまり、クラーケンの足だ。クラーケンは俺を巻きつけた足を高く挙げる。

俺は体を逆さまにしながらも、銃口を亜空間にしまいながら歯を食い縛り、次に起こることに備えた！

その瞬間、クラーケンは俺を海面に叩きつける！

高所から勢いよく海面に叩きつけられる、言えば簡単だが、着水姿勢もままならないこの状況ではめっちゃ痛いっ！

そこから、三度同じように叩きつけられ、俺の全身は赤くなり始めた。すごいヒリヒ

この状況からの逆転はまだまだ狙える。だが、助きたいヒトが助かりたいと思っていなければ、どう頑張っても助けられない。

「わ、私は——」

「ええい！ 貴様は黙っている！ この人魚は私の眷属となるのだ！ クラーケン！」

チヨウチンアンコウの指示を聞いたクラーケンは、再び俺を海面に叩きつけ始めた！ 縦だけではなく、横にも振り回して勢いをつけ、執拗に海面に叩きつけ続ける！

再びリリティファの前に俺を移動させるクラーケン。本当、地味に痛いな……。

俺は痛みの表情を出さないように気にしながら、リリティファに笑みを向けた。

「なあ、リリティファはどうしたいんだ？」

「貴様！ まだ言うか！」

グラツグが再びクラーケンに指示を出そうとした瞬間、リリティファが叫んだ！

「わ、私は！ 自由に生きたいです！ こんなヒトに会うことがない、平和な場所で暮らしたいです！」

リリティファの叫び、確かに聞いたぞ！

「その言葉、待ってたぜっ！」

俺は素早く直刀を生成、リリティファを拘束している足に斬撃を飛ばして切断、彼女を解放する！

「しまったー！」

グラツグが驚愕しているが、その隙が命取りだ！

ブレードを大剣に変更し、そこにオーラを溜めていき、突きを放つ要領で解放する！
「二昨日来やがれ、くそつたれがッ！」

紅のオーラを至近距離で食らったグラツグとクラークンは――。

「ぎゃあああああつー！」

『……………ッ！』

一発で撃沈。クラークンは少しずつ海に沈み始めた。――が、そこで問題が起こった。クラークンが俺を離さなかったのだ！ヤバイ！このままだと一緒に沈む！

そう思った時にはもう遅く。俺たちは完全に沈んでしまった！

水中でどうにかクラークンの足を斬ろうとするが、水の抵抗のせいで満足に勢いがつけられず、さつき大技をしてしまった影響で切れ味が悪い！

ヤバイ……………もう……………意識が……………。

消えかける俺の視界に、こちらに手を伸ばす誰かの姿が映った……………。

「だ——じよ——す——」

誰かの声が聞こえる。聞き覚えがあるし、さつきまで聞いていた声だ。

「大丈夫ですか！」

俺はゆつくりと目を開き、その誰かを確認する。

緑色の髪をした女性、リリティファだ。彼女は身を乗り出して俺の顔を覗きこんでいた。

俺は笑みを浮かべて、彼女に言う。

「ああ、久しぶりに死にかけてたけどな……」

俺はゆつくりと体を起こして、周囲を確認する。

先程のヨットの上的のようだ。グラッグとクラーケンを確認できない。沈んだようだ。

まあ、あいづらなら大丈夫だろう。

「にしても、どうやって俺を助けたんだ？」

俺が訊くと、リリティファは顔を真っ赤にしながらもじもじとし始めた。なんだ？何か恥ずかしいことでもあったのか？

俺が首を傾げていると、リリティファが口を開いた。

「その……私が口移しで……酸素を……」

「……………えと、ありがとうな」

リリティファの言葉を聞いて、俺は苦笑した。まさか、リリティファを助けるつもりが、彼女に助けられることになるとは……………。

「で、ポセイドンは？」

「ロイ様に巻きついていたクラークの足を切り落としたのはポセイドン様です。私だけではどうにもできませんでした……………」

なるほど、あのヒトもあのヒトなりに助けてくれたんだな。

一通り話を聞いた俺は、改めてリリティファに問う。

「で、これからどうする？ 要望があるなら、できるだけの配慮をさせてもらうが」

俺が訊くと、リリティファは再び恥ずかしそうにもじもじし始めた。だが、彼女のこの反応にはもう慣れた。

リリティファは大きく深呼吸をすると、口を開く。

「でしたら——」

こうして、俺の仕事は無事に完了した。

リリテイファの要望、それは『グレモリー領の湖に住みたい』というものだった。

とても簡単な願いではあったが、それが了承された時の喜ぶ顔は、多分忘れることはないだろう。

いや、昔から助けてきたヒトたちの笑顔は、絶対に忘れられないものだったな……………。

「……………で、リアス。偽物って何者だったんだ？」

「それが、正体はヴァーリチームだったんです。どうやらクロウ・クルワツハを捜索していたところ、魔龍で困っているグレモリー領の村に行き着き、そのまましばらくお世話になったらしく、その一宿一飯の恩を返すためにイツセーと私の姿を借りたそうです」
「そうか、存外いい奴らなのかもな」

Extra life 03 面倒からは逃げられない

ある日の放課後。

才力研の部室に珍しく客が来ていた。その客は駒王学園初等部の制服に身を包んだ元気そうな男の子。若干生意気そうな目つきだが、男の子なんてだいたいこんなもんだろう。

その男の子は緊張しながらも、元気はつらつにあいさつをしてくれる。

「は、はじめまして！俺、ほでりゆきひこ火照幸彦つていいいます！駒王学園初等部六年！ソーナ・シトリーさんのご紹介でグレモリーさんのご厄介になります！よろしくお願いします！」
元気に頭の下げる幸彦。初等部からの客なんて、俺が来てから初めてじゃないか？俺は会話のテンポを切らないようにその疑問を飲み込み、話の流れを見守ることにした。

「ええ、ソーナから話は聞いているわ」

朗らかに対応するリアス。すると、イツセーが俺に訊いてきた。

「今、会長の本名を言いましたよね？それって、俺たちのことを知ってるってことですか？」

一般生徒は俺たちが悪魔だということを知らない。ソーナも『支取蒼那』と名乗って人間界では活動しているのだ。

俺はひとつ頷いて、イツセーに返した。

「幸彦は、霊剣、神剣の類たぐいを収集、それらを保管する一族だ。俺らのことは、知っていてもおかしくない」

「初等部にもその手の関係者がいるんですね」

「まあ、探せばいるもんだな。俺もざっくりとしか知らないが……」

ざっくりと、と言ったのには訳がある。俺が基本的にはその手の『異能関係者』とは極力関わらないでいるのだ。

その理由つてのは、ここはあくまでもリアスの縄張りだからだ。俺はそこにいる客分に近い。ここで何かをする人たちは基本的にリアスに相談することが多く、会う機会がないからだ。

一応、名前ぐらいは把握しているが、そこまで重要じゃないって思っているのも大きい。

「火照幸彦くん、ソーナから聞いた話だと、いわゆる『デビュー』がしたくてここを訪ねてきたのよね？」

リアスからの問いに、幸彦は頷く。

「俺の家、十二歳になると、通過儀礼として実戦をします。その実戦の相手というのが異形の者——妖怪だったり、悪魔だったりするんです。兄や姉も俺と同じ歳の頃にはその儀礼をやったんですけど、なぜかうちの両親は俺の番になって消極的になりました……。俺だけはやらないって言いだして……ッ！」

歳の割に口調が丁寧だと思ったが、その言葉にはかなりの怒気を感じることが出来る。これは、相当溜まってるな。

「で、幸彦の兄と姉は神職か何かになっているんだな？」

俺が訊くと、幸彦は頷いた。

「はい。兄も姉も立派に働いております。ただ……」

そこまで言うのと、不満顔で口を尖らせる幸彦。

「俺、末っ子なので、家からも『世間様にご迷惑をかけなければ好き勝手に生きていいよ』とほつぱり出させまして……。通過儀礼もお金がかかるからやらないと言われたんです……。俺の時だけでもいいって、酷いと思いませんか？いくら上の兄姉が優秀だからって……酷いっス！」

言葉使いが年相応な感じになってきたな。

だが、俺もいきなり『好きに生きろ』なんて言われたら混乱するだろうな。

また、実際に『自由にしろ』と言われて自由に生きてるんだが……。

なんてことを思っていると、幸彦くんが持ってきた竹刀袋が目についた。

「幸彦、その竹刀袋はなんだ？」

「あ、これですか？」

幸彦はそう言いながら、竹刀袋を取り払った。

その中に入っていたのは一本の刀剣だ。なんとなく古代の刀剣っぽい感じがするが、ひとつ気になることがあった。

あの剣からは、異様なオーラを放っていた。そう、聖剣とか聖槍とかに近い、悪魔的には絶対に食らいたくないタイプのオーラだ。

「これは神霊剣『十束剣』とつかのつるぎです。いわゆる聖剣の類なんですよ」

なるほど、日本製の聖剣か。嫌なオーラを感じたわけだ。俺が頷いていると、その剣を見て協会三姉妹が反応する。

「なるほど、聖剣サムライボーイだな」

「それ、日本語が変よ、ゼノヴィア」

「おサムライさんを見るのは初めてです！」

ゼノヴィアがよくわからない言葉を使い、それにイリナがツツコミ、アジアは感動していた。外国育ちのアジアには新鮮かもな。ところで、なんだ、聖剣サムライボーイって。

「日本の聖剣といえ、あまのむらぐものつるぎ天叢雲剣が有名どころか？」

「ええ、そうですね」

俺と朱乃がなんてことを言っていると、幸彦が言った。

「叢雲ですか？ 噂だと、何かの事件に巻き込まれて真つ二つに折れたらしいです。修復するために関係者が奔走しているそうっす」

折れた!? マジか！ エクスカリバーもそうだが、伝説の聖剣って、簡単に折れるものなのか!?

俺は内心の同様を隠して、幸彦に訊く。

「十束剣も割りと有名だが、そんな物をキミに持たせて良かったのか？」

「はい。なんでも『悪用したり、盗まれなきや問題なし』って父母に言われました。仮にそうなくても自己責任なので、命懸けでどうにかしろってことみたいですよ」

なんか、自由な一族だな。結構大事な物だよな、あれ。もつと嚴重に保管した方がいいんじゃないのか……………?」

心の中で困惑していると、ロスヴァイセがリアスに訊いた。

「結局、火照幸彦くんの依頼である『通過儀礼』はどうするのですか？」

ナイスタイミングだ、ロスヴァイセ。かなり依頼の話から脱線してしまっていた。

てか、依頼ってことは何かしらの対価をもらうってことだ。こんな小学生から何かも

らうつてのも酷なもんだな。

「お礼ならうちの靈劍やらで良かったら差し上げますよ。さすがに十束劍はあげられませんが」

なんて軽く言つた幸彦！そんなあつさりど靈劍をあげていいのか!?

リアスはその返事をうけて、あごに手をやりながら、首を少し傾けていた。

「うーん、お礼はきつちりといただくつもりだけれど、肝心のその通過儀礼とやらをどうやって果たそうか、少し考えないといけないわね」

確かに。異形の者との戦闘が通過儀礼つてことは、ここにいる誰かと幸彦が戦うつてことだ。だが……。

「リアスたちの誰かと言われても、幸彦には荷が重いな。多分だが、実戦は初めてだろ？」

俺が訊くと、幸彦くんは素直に頷いた。それを見てオカ研は皆して困り顔になる。

仕方がないことだろう。俺含めてリアスたちは修羅場を潜りすぎなのだ。一人一人が強すぎる。失礼だが、幸彦くんでは相手にならない。

「……………アーシアに頼むか？」

俺が迷いながらアーシアに視線を向ける。

「はううっ！わ、私が聖劍使いの方のお相手を、ですか!？」

仰天するアーシア。彼女には悪いが、本当にそれしか思い浮かばなかった。

ゼノヴィアがうんうんと頷きながらアーシアの肩に手を置いた。

「アーシア、これも若い剣士のためだ。私たちが相手ではあの子も自信を失うだろう。年上としての力の見せどころだ。なに、フリをすればいいだけだと思うぞ」

「確かにアーシアさんとなら、良い通過儀礼になるかもしれないわね！ああ、アーシアさんの自己犠牲の精神は主もきつとお喜びなつてくださるわ！安心して！危なくなつたら、私とゼノヴィアが助太刀するから！」

「ああ！任せておけ！」

何故かやる気のゼノヴィアとイリナ。言われたらアーシアはハラハラと当惑しながら涙目になっていた。な、なんか、悪いことをした気分だ……。

「俺が全力で手加減してやるってのは？」

俺が助け船を出したが、リアスがそれを制してきた。

「これは私たちへの依頼です。お兄様にもお手伝いを頼むと思いますが、出来るだけ私たちだけで何とか——」

リアスがそこまで言った瞬間、部室の扉が開け放たれた！

「話は聞いたぜ！俺に任せておけ！」

意気揚々と登場したのは白衣姿のアザゼルだ。見たことがないほど輝いた顔をして

いる。てか、俺でも気配が探れなかったぞ！気配遮断能力が高まっているな！

アザゼルはさすがかと部室に入ると、力強く言ってきた。

「俺にいい考えがある！」

「「却下」」

半眼の俺、リアス、朱乃が異口同音で即否定した。こいつが何かするといいいことが起こらない！てか、関わった俺たちが痛い目にしかあわない！

「どうせ、また酷いものでも作ったんじゃないですか？」

イツセーが溜め息をつきながら訊く。

アザゼルはその言葉を待っていたかのような表情になると、何かを取り出した。

「見ろ！これぞ『アザゼルクエスト』の企画書だ！悪魔サイドのゲームワールド技術を使って、ロールプレイングな空間を制作中なんだよ！悪魔の技術者も嬉々として参加しててな。サーゼクス経由でアジユカ・ベルゼブ側の関係者から技術提供もしてもらっている！」

イツセーはその企画書を受け取り、パラパラと読み進めていっていた。

今の説明を聞いた感じだと、プレイヤーがレーティングゲームの空間を使用して、冒險することか？

それだけ聞けば楽しそうだが、アザゼルが関わっている以上、絶対にろくなことにな

らないだろう。

てか、兄さんもしれっと協力しないでくれよ！俺たちに被害がくるんだからよ！

アザゼルは企画書をもうひとつ取り出して幸彦に差し出した。幸彦はその中を見て、顔を明るくさせている！食いついちまったようだ！

「わっ！いいですね、これ！すっごい楽しそう！魔物とも戦えるんですよ？」

「もちろんだ！仲間と共に旅をして、悪の龍王を倒す体験型RPGだからな！」

「俺！これで通過儀礼を果たしたいと思います！皆さん！どうか、これに参加させてください！」

すっごい輝いた表情してやがる。純粹無垢な眼で企画書を読みまくっているし、これはやるしかない感じだな。

アザゼルが幸彦の肩に手を置いて訊く。

「では、少年！後日、このゲームをプレイということでもいいかな？」

「はい！お願いします！」

「よし！仲間にしたい三人分の職業をこの企画書から選んでくれ！こっちで手配するからな！」

「はい！うわー、仲間かー！戦士に魔法使いに僧侶に……」

ハハハ……はあ……。また企画書を読み始めちゃったし、話が勝手に進んじまっ

ている。ま、いいか。ここまで来たらやらなきやダメなんだろうし、こうなったら………!

「てなわけで、イツセー。おまえが中心になれ」

「ええ、イツセー。任せたわ」

俺とリアスはそう言つて、同時に溜め息をついた。イツセーを生け贄にして、俺たちは助かろうつて腹積もりだ。

「えええええっ!?!マジっスか!またですか!?!」

俺たちの言葉にはイツセーは仰天しているが、これはもうお約束的なものであり、俺はこんな面倒は嫌だ。

こうして、アザゼルが開発したというゲームに、イツセーは強制参加となったのだ。た。

多分、これで俺が参加することはないはずだ。ま、がんばれ、イツセー!

後日、俺がそのゲームに参加することになることを、その時の俺は知るよしもなかった。

Extra life 04 レベリングという名の作業

次の休日。

俺——ロイは一人、転移室に来ていた。正確には来させられたのほう正しいがな。

理由はもうわかっていると思うが、あの『アザゼルクエスト』に参加するためだ。アザゼル曰く、幸彦が選んだジョブに俺が合致したとのこと。

イツセーを生け贄にしたつもりが、まさかこんな形で関わることになるとはな。面倒なことになっちまったもんだ。

なんて思っている、俺の前にある転移魔方陣が輝きだした。どうやら、お仕事開始の時間ようだ。さて、面倒だが、頑張りますかねっと。

俺は軽い感じで覚悟を決めて、転移魔方陣に乗り、光に包まれた。

光が晴れると、そこは緑広がる草原だった。なかなか広いな、地平線まで見渡せるぞ。

「ロイ先生！なんでロイ先生が!？」

俺の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと、そこには制服姿のイツセーとシスター服姿のアーシア、ライト・アーマー軽 鎧に帯刀という姿の幸彦がいた。

『一人目のメンバーは、戦士のロイだ!』

どこからかアザゼルの野郎の声が聞こえた。どこにもいないし、多分別室でニヤニヤしながら、観察しているのだろう。

てか、銃剣使いの戦士っているのか? まあ、直刀を使えばいいか……。

「まあ、なんだ。戦士、ロイ・グレモリーだ。面倒だが、よろしく頼むぜ」
軽く右手を挙げて二人に言う。

「よろしくお願ひします!」

幸彦が元気よく礼をしてくれた。冒険するなら元気でないとな。

『次に魔法使い!』

アザゼルの声と共に、転移魔方陣が展開され輝きだした。

魔法使いいdar? オカ研メンバーでそれっぽいのは朱乃か、ロスヴァイセか、はたまたリアスか。

なんて思慮していた俺は、すぐにその考えの甘さを痛感した!

「はーい!魔法使いのレヴィアたんでーす☆」

現れたのはセラだったからだ!何やってんだ!?!仕事は!?

俺が目を丸くして固まっていると、セラは俺に飛び付いてきた！

「ロイイイイイイイッ！」

「ごうはっ！」

突然飛び付いてきたセラに反応できず、そのまま押し倒される俺。すると、

『ロイは500のダメージを受けた』

アザゼルがそんなことを言ってきた！セラの体当たりが地味に強い気がするんだが
!?

驚愕しながらも、俺の胸に顔を埋めてくるセラの頭を撫でる。やれやれ、これは、退屈しないだろうな。

俺は一度セラに退いてもらい立ち上がると、小さく溜め息を吐いた。すると、再び転移魔方陣が展開される。

『最後は……………これだ！』

アザゼルが言い終わると同時に、魔方陣が輝き、そこから現れたのは！

「フハハハハ！私は遊び人ことサタンレッドだ！」

「……………」

俺とイツセーは最後に現れたヒトを見て、目を見開いたまま固まってしまった。当たり前だろう、現れたのがサタンレッドの格好をした兄さんだったからだ！

また、サタンレンジャーか！って、何やってんだよ!? セラといい、兄さんといい、仕事はどうしたんだ!? 眷属に任せてきたのか!? てか『遊び人』!? なんか、アザゼルの人選がベストすぎるだろ！

「幸彦！遊び人って、なんでだ？何で選んだ?！」

「いやー、冒険に遊びも大事かなって」

なんて返してくる幸彦！確かに息抜きは大事だ！だが、こう、他になかったのか!?

「回復職がない気がするんだけど……」

イツセーが幸彦さんに不安げにそう言うが、

「なんか、こう勢いで押すことも大事だと思うんです!」

幸彦くんは右手でガッツポーズをしながら、そう言った。

俺はイツセーに言う。

「このパーティだったら、楽勝でクリア出来ると思うぞ。てか、出来なかつたら難易度の問題だ。それに、最悪アーシアがいるから大丈夫だろ」

俺がそう言うのと、アザゼルが告げてくる。

『おっと、アーシアとイツセーは万が一のデバックカード。あまり頼りにするなよ? まあ、幸彦くんに危険があつたら、回復してやるぐらいならいいがな』

なるほど、イツセーとアーシアはあまり頼りに出来ない。頼ることがあるかも分か

らないがな。

俺たちがそんなことを話していると、

「あら、サタンレッドじゃないの☆」

「ふふふ、そういうキミこそ、マジカル☆レヴィアたんじやないか。今日はよろしく頼む。今日の私は遊び人なのだ！」

「私は魔法使いよ☆うふふ、お互い楽しそうなゲームにお呼ばれされちゃったものね☆私、アジユカちゃんのゲームにとっても参加してみたかったのよね！」

「全くその通りだ。アジユカの技術もすごいが、ここまでのものを作り上げるアザゼルもなかなかのものだ」

楽しげに話す魔王二人組！

最強の遊び人と最強の魔法使いって、俺の出る幕ないよな。戦士だけど後ろにいろいろことなのか？面倒は嫌いだ、それはそれで切なくなるぞ………！！

『よし、パーティが全員揃ったな。軽く説明するぞ』

さすがはアザゼル。このメンツを揃えただけはある。一切気にしていない。てか、どうやってこの二人を呼びやがったんだ！義姉さんとソーナの目を掻い潜って、どうやって二人を呼びやがったんだ！？

『説明は簡単だ。今日一日この空間を冒険してくれ。敵を倒してレベルを上げて、最終

的に龍王を倒せばゲームクリアだ!』

なんて、説明をしてくるが、俺たちに倒される龍王が哀れに思えてくるぞ……………。

『ちなみに、初期レベルだが、このゲームのシステムに当てはめると、幸彦さんのレベルが5としたら、戦士は4500、魔法使いと遊び人は5000ぐらいだ。まあ、システムがまだ完成していないから、適当なんだがな』

なるほど、なるほど。俺は4500ね。普通、レベルマックスって99とかじゃないのか?そこは完成していないから問題ないってか?

それを気にしてか、イツセーが叫ぶ。

「全員が別次元すぎますって!なんでですか!?幸彦くんを除いても、最低で4500って!クリア後の隠しボスも一撃で倒せるんじゃないですか!何を求めて旅をしているんですか、このご一行はあああああつ!」

イツセーの叫びは虚しく草原に響き渡った。元気がいいもんだねえ……………。

『さあ、勇者一行よ!龍王を倒して世界に平和をもたらしてくれ!』

アザゼルはイツセーの叫びを無視すると、それっぽいことを言っ、旅を開始させようとしていた。オープニング的な曲が……………。

『アザゼルメグル、アザゼルメグル、アザゼルクエ——』

「黙らっしゃい!」

なんか、やってはいけないことをした気がするが、こうなったら自棄だ！とことんやってやる！やればいいんだろう！？」

「勇者よ、今日は共に冒険をしよう！」

「龍王なんて滅ぼしてしまいましょ☆」

「やるからにはノーコンティニューでクリアしてやろうぜ！」

遊び人のサタンレッド、魔法使いのセラ、そして、戦士の俺の順に勇者の幸彦に語りかけると、この子もその気になったのか、十束剣とつかのつるぎを抜き放つと、切っ先を天に向けた。「はい！俺、勇者として今日は頑張ります！」

勇者の気合いも十分！イッサーは何となくやる気がないようだが、ここまで来たんだ、最後まで付き合ってもらおう。

こうして、俺たち四人（内二人が魔王）の旅が始まったのだった。

広大な草原を歩き始めて数分。

『スライムが現れた』

アザゼルの声と同時に魔方阵が展開され、ゲル状の生き物が複数体出現した。魔物はこうやって出現するのか。最初はスライムつてのは、お馴染みだよな。

俺がゲームシステムに感心していると、幸彦が十束剣とつかのつるぎを抜き放つて、スライムに向かつていった！

「とおっ！」

ズバッ！つと幸彦の剣がスライムを切り裂いた！

『スライムに20のダメージを与えた。スライムを倒した』

ダメージまで言ってくれるのか、ありがたいような、迷惑なような。てか、今ので20つて、セラの体当たりどんだけ強かったんだよ！

それはともかく、幸彦、なかなかいい動きするな。これは将来楽しみだな。

俺がそちらにも感心していると、セラが一步前に出てスティックを突きだした！

「やるわね、勇者くん！私も負けてられないわ！くらいなさい、ファイヤーショット！」
セラのスティックの先端が輝いた瞬間、俺は咄嗟に幸彦の前に移動し盾を展開、衝撃に備えた！防御の態勢に入った瞬間！

グゴオオオオオオンツ！

俺たちの前方で、この空間を揺らすほどの衝撃と地獄の業火が巻き起こった！盾越しにでも伝わる熱気！なんてもん撃ってんだよ！

炎が止んだことを確認して、盾を消して周囲を見渡す。先程まであったキレイな草原が焦土と化していた！スライム一匹に何てことをしてやがる！

『スライムに6300万のダメージを与えた。スライムを倒した』

アザゼルは冷静にそう言っただけだった！あまりやらないからわからないが、ゲームでそんなダメージを叩き出すキャラなんかいないよ！てか、セラはスライムに恨みでもあるのか？！

「うむ、さすがは魔法使いだ。序盤の魔法でも十分にスライムを倒してくれる」

何てことを言う兄さん。そう言う兄さんも残ったスライムの前に立った。

「私も負けていけない！遊び人として芸を見せようじゃないか！」

手元から滅びの球体をいくつも作り出していく。球体は縦横無尽に動き回り、スライムの方へと向かっていった。

「ここに取り出したのは、謎の球体。これをジャグラーのように回していき、敵に当てていく。すると……」

ギョパンツ！

滅びの球体がスライムを消し飛ばした！

「はい、不思議！敵は手品によって、キレイさっぱり消えてしまいました！」

「何がキレイさっぱりだよ！完全消滅じゃねえか！アザゼルもダメージを言わねえぞ！」

測定不能ってか!？」

『ああ、これは、なんと云えばいいか……』

「知るかあああつ！」

俺が何てことを叫んでいると、残っていたスライムが俺に体当たりをしてきた。

ポフツ……。

『戦士は1のダメージを受けた』

まあ、1だよな。実感的には1もくらってないような気がするけど、システム上、仕方ないよね。

溜め息をつきながら直刀を生成、そしてスライムに構えた。

「俺に斬れないものはない!」

と、言いながらスライムに斬りかかる!

ズバツ!

『スライムに5900万のダメージを与えた。スライムを倒した』

うん、だよな。俺でも万までいくよね。

パンパカパン!

突然、軽快なファンファーレが鳴り響いた!俺とイツセーは、何事かと警戒している
と、アザゼルが告げてきた。

『レベルアアアアップ!』

今までに比べて異常にテンションが高いアザゼル。どうやら、レベルアップのようだ。

『魔法使いと遊び人、戦士のレベルが上がった!魔法使いと遊び人のレベルは5001に、戦士は4501になった!』

スライムだけで俺たちのレベルが上がった!?ここは幸彦じゃないのか!?俺たちでもそれぞれ1上がったんだから、幸彦くんは10とかいつてるんじゃないや……。

『レベルアップ終わり!』

え、終わり?レベル上がったの俺たちだけなのか!?どうなってんだよこのゲーム!クソゲー臭しかしねえぞ!

「皆さんお強いんですね!自分の力量の無さを痛感します」

幸彦が若干気落ちしてしまった!やり過ぎたか?幸彦もなかなかいい線いってると思ったけどな。てか、周りが強すぎるだけだ。

初戦闘はそんな感じだったが、その後の戦闘も幸彦の初々しい攻撃と俺たち三人の圧倒的な攻撃で即終わらせ、予想通りサクサクと進んでいった。

ある程度進んだところで、幸彦くんの休憩のために、村に寄ることにしたのだが……。

「ここはカラ村だぞ」

手にデュランダルを持った少女、ゼノヴィアが村の入口に立っていた。いや、何でだよ。

同じ事を思ったのか、イツセーがゼノヴィアに訊いた。

「ゼノヴィア！お、おまえ、村人役なのか？」

「ここはカラ村だぞ。と常に言えとアザゼル先生から命じられているから、ここはカラ村だぞ、といい続けるだけだ。ここはカラ村だぞ」

つまり、ゼノヴィアはゲームでいうところのNPCってやつなのか。デュランダルを持った村人がいるって、この村は平和そうだな。

とりあえず、ゼノヴィアの横を通りすぎて村に入ってみる。木造のゲームっぽい建物がいくつも並び、質素な服装の村人が歩き回っている。

このエキストラの皆さんはどこからか集めてきたのか疑問が付きないが、今は散策だな。

「村の様子も本格的だなあ。俺、武器が欲しいっす！」

幸彦は楽しげに走り回り、剣のマークがついた看板の店に入っていた。俺たちも後を追って歩き始める。

お金は十分にある。モンスターを倒すとその場でコインに変化したんだ。ゲームのシステムもしっかりしているようだ。金が手に入らないバグとかあったら詰んでいた。

俺たちが歩いていると、セラが言う。

「それにしても、楽しそうね。あの子」

「ああ、子供は元気が一番だ。自由できるうちに自由にやっておかないと、大人になつたら忙しくなつちまうからな」

「それもそうだね。今度はミリキヤスとグレイフィアを連れて参加してみようかな？」

「それは楽しそうだ。義姉ねえさんが参加してくれるかは別だけど」

「ふふ、今度はロイとのんびりやってみたいわね」

「はは、確かに」

「できれば、そこに私たちの子供も……」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないわ」

よく聞こえなかったが、セラの顔はその時を楽しみにしている表情になっていた。そのうちオフでももらつてのんびりするか。

俺たちが話している横で、イツセーとアーシアの会話も聞こえてきた。

「イツセーさん。今度、オカルト研究部の皆さんでピクニックに行きませんか？」

「いいなそれ！つて、どうしたんだ、急に？」

「いえ、皆さんと草原を歩いていると、不思議とそう思ったんです」

「なるほど、それじゃ、今度リアスに訊いてみようぜ」

「はい！」

俺たち年長者三人は、その会話を聞いてほっこりしていたりする。

なんてことをしながらゆっくりと歩いていると、武器屋から幸彦くんが顔を出した。

「皆さん！お早く！お店の人が待ってるっす！」

「はいよ！」

「今いくわ☆」

「すまない、少し話し込んでしまったな」

俺たちは駆け出し、武器屋に入ってしまった。

……で、入って驚いたのだが。

「店員は木場か」

「はい。アザゼル先生から、『おまえなら、どんな聖剣でも魔剣でも用意できるだろ？』と

言われました」

若干苦笑しながらそう言う木場。こいつも苦労しているようだ。

頼めば聖魔剣も創ってくれそうだが、その手の適性とか因子がない俺たちに扱えるの

かどうか。

「私は氷の魔剣が欲しいかも☆武闘派の魔法使いもいいわよね♪」

「では、私は炎の魔剣を。最近体を動かせていなくてね、攻撃力不足に悩んでいるんだ」
何て言いながら魔剣を頼む二人。二人はそんなもの要らないと思うんだけどな。さて、俺は――。

何て思いながら店内を見渡す。あんまりめぼしいものはねえかな……。

俺は木場に言う。

「一番いい装備を頼む」

こうして、装備を整えた俺たちは、再びフィールドに出てモンスターを蹂躪していった。

因みに、俺がもらった魔剣は西洋剣を思わせる属性無しの切れ味重視のものだ。腰の後ろに回した鞘にいられて帯刀している。重さもほどよく、振りやすい。

そんなこんなで洞窟に来たわけだが、一番気をつけなければならぬのは、兄さんとセラの攻撃魔法だ。火力がありすぎて洞窟が崩落しかねない。

「こんなに小さい滅びの球体を作るのは久しぶりだ」

パチンコ玉サイズの球体でモンスターを消し飛ばす兄さん。

「加減がちよつと難しいかも☆」

首をかしげながら敵を凍りつかせるセラ。それでもモンスターを蹂躪できるのは流石だな。

「俺は気にせずにいけるがな！つと」

などと言いつつ、先程買った魔剣と滅びの直刀の二刀流で敵を蹴散らす。兄さんたち程の派手さが無い分、こういう時には俺の方が立ち回りやすいんだよな。

途中、宝箱から薬草のような何かも回収したが、このメンバーならノーダメージでいけるだろうから要らないと思う。まあ、なくて困るものでもないからいいがな。

洞窟をさらに奥に進むと、少し開けた場所に出た。ゲームならここでボス戦となりそうな場所だ。

久々のような気がするアザゼルの声が洞窟に響いた。

『リザードマンが現れた』

どうやら、敵のようだ。リザードマンってことはトカゲ系の魔物か？何て思っている
と、

ズウウン、ズウウン。

地鳴りをさせながら奥から現れたのは巨大なモンスター。大きな腕に、大きな脚、そして大きな翼！まさにドラゴンだ！って、こいつは!?

「……り、リザードマン……だぞ」

恥ずかしそうにそう漏らしたのは巨大なドラゴンだ。だが、俺たちにはそのドラゴンに見覚えがあった！共闘したこともあるんだ、忘れるわけねえだろ！

「タンニーン!?!」

「タンニーンのおっさん!?!」

俺とイツセーは同時に驚愕の声を出した！元龍王であり、

最上級悪魔のタンニーンが、何でこんなところに!?!

「タンニーン、何でこんなところにいるんだよ?」

俺が訊いてみると、タンニーンは答えた。

「ロイ・グレモリー、兵藤一誠もいるのか。久しぶりだな。いやなに、アザゼル総督から依頼を受けてな。一人の少年を男にするために力を貸してくれと。だが、ここに赴いたら……このような役をしろと言われたのだ」

このゲーム、豪華すぎるだろ！パーティメンバーが魔王二人、ボスの一体が元龍王つて、本当にすごいな！これからタンニーンと戦うのか？さすがに面倒だな……。

俺がため息を吐きながら魔剣を抜き放ち、いつものように構えようとすると、アザゼルの声が俺を制してきた。

『おつと……こは勇者だけで挑む大事なイベントだ！他の者は手出しするなよ!』

「何だよ、早く言えよ………」

「まあまあ、ここは勇者くんに頑張ってもらいましょう」

「セラに言われるとな……。わかったよ。幸彦、頑張ってこい！」

俺は渋々後ろに下がりがりながら幸彦に檄をとばす！

「はい！任せてくださいい！」

幸彦も元気に返事をして、タンニーンに挑んでいった！

こうして、勇者VS元龍王というカードが決まったのだった。

Extra life 05 ゲーム終了

「……………」

魂が抜けたようにガックリとしている幸彦。あれから一時間にわたってタンニーンと戦ったため限界を迎えたようだ。

手加減してもらったとはいえ、タンニーン相手に一時間粘ったのだ、将来有望だな。

俺は幸彦をおぶって兄さんたちと洞窟を脱出した。幸彦くんは目を覚まさなかつたが、俺たちは冒険を続行、ラスボスの龍王がいるという『龍王の塔』を目指す。

戦闘は魔王二人に任せて、俺は幸彦くんをおぶったまま回避を優先させてもらうかな。二人とも楽しそうだから問題ないだろう。

山を登ること数分。ようやく石造りの塔にたどり着いた。

幸彦は目を覚まさないが、魔王二人の圧倒的な強さで戦闘は楽できている。

雑魚を蹴散らしながら塔を登ることさらに数分。再び開けた場所に出た。これは、また戦闘だろうな。

「よくぞ来た！」

そこで俺たちを出迎えたのは三人の悪魔と一人の天使。

「我らは龍王様に仕える四天王なり！」

などと言って現れたのは、天使の羽を生やしたイリナ、ヴァルキリーの鎧姿のロスヴァイセ、制服姿の小猫、そして、段ボール箱だった。多分だが、段ボール箱の中にはギヤスパーが入っているんだろう。

俺がポケットとそんなことを考えていると、イリナがノリノリに名乗ってきた。

「ふふふ！よくぞここまで来たわね！私は四天王の一人、愛と希望の天使イリーナー！」

「私は四天王の一人、魔神ヴァルキリーのロスヴァーです。時給5000円で雇われました」

「……同じく四天王の一人、百獣の女王ヘブンキャットです。ちなみに私たちの役の名前はアザゼル先生がつけました」

「あうあうあうあう……。ぼ、僕も四天王らしくて、闇夜の吸血鬼段ボール箱です！」

四天王の全員がオカ研のメンバーじゃねえか！俺もあっちだったらもつと楽できただろうな……………。

てか、アザゼルのネーミングセンスはどうにかならないのか？愛と希望の天使って、

悪役じゃなくてヒロインとかの二つ名だろ。ギヤスパーに限っては段ボール箱だし、あの意味怖いけどな。

「さあ、勇者よ！龍王様と戦うには我らを倒さないと——って、あらら、勇者くん気絶しているの？」

張り切っていたイリナが、幸彦を見て首をかしげていた。幸彦くん、まだ目を覚ましてないんだよな。

一旦幸彦をイツセーに預け、魔剣を抜き放つ。

「天使、ヴァルキリー、猫又に吸血鬼。相手に不足はないな」

やる気十分で俺が構えると、四天王が警戒し始める。

「ロイ先生が相手で、最悪の場合は後ろの魔王様の相手をしなければならぬですね。50000円では割りに合いません！」

ロスヴァイセがそう言うが、気にするところそこなの？相変わらず、そこところは細かいようだ。

『あ、そこも勇者一人にやらせてくれ』

今まで忘れていたように言うアザゼル。そういえば、途中からアウンスがなかったような……。てか、飽き始めているような声音だったぞ！

しかし、そう言われては仕方ない。プレイヤーである以上、ゲームマスターは絶対だ

し。

魔剣を鞘に戻し、イツセーに預けた幸彦くんの頬をペチペチと軽く叩く。

「おーい、幸彦ー。ラストダンジョンだぞー。四天王だつてさ、おまえの出番だ」

「……………あう、……………あ、あれ？」

おつ、目を覚ましたか。傷は貯まりに貯まっていた薬草で完治させていたから、そこは問題ないはずだ。スタミナはわからないが。

幸彦はフラフラしながら剣を握り、涙目になりながら四天王に挑んでいった。もちろん、四天王も加減してくれているだろう。てか、加減してくれていないと、幸彦くんが無事じゃ済まない。

「うわーん！異形の者がこんなに強いのはかりだなんて知らなかったっすううううっ
！」

泣き叫ぶ幸彦くん。異形の者が全員こんな化け物なら、世の中もつと大変なことになると思うぞ。

三十分後。

「……………」

に頼まれたんですよ！なんで、そこにセラフォル様がいらっしゃるのですか!?!」

「いえーい☆サジくん、おひさ☆今日は魔法使い役で来ているのよん☆」

「ちなみに、その遊び人こと戦隊ヒーロー、サタンレッドは兄さん。つまりサーゼクス様だ」

俺が追加情報を伝えると、兄さんもノリノリで匙に指を突きつけた！

「邪悪な龍王め！退治に来たぞ！」

それを聞いた匙は先ほど以上に目が飛び出して仰天する。

「ええええええっ!?!そ、それはちよつと！アザゼル先生から聞いていた話と違うというか！違いすぎるといいうか！無理ゲーじゃん！俺の方が無理ゲーじゃん！」

だよな。俺が匙の立場だったら迷わずに逃げる。だって、セラと兄さん、いつにもななくやる気満々なんだからよ！

「勇者が倒れたいま、私と魔法使い、戦士だけで龍王を倒さなければならぬ！そうだろう、二人とも！」

「ええ、そうね、サタンレッド！勇者の弔い合戦よ！覚悟なさい、龍王！」

「そういうことだ。龍王、俺たちでおまえを攻略させてもらおう！」

俺たちの言葉を聞いて匙は涙目になっていたが、黒い炎と大蛇を出現させて、やけくそになっていた！

「ちくしよおおおおおっ！こうなったらセラフォルム様が止まらないって、俺でもわかるもんよおっ！それなら玉砕覚悟でとことんやってやる！」

匙はそう叫ぶと、黒炎をほとぼしらせて『ヴリトラ・プロモーション龍王変化』で巨大なドラゴンとなった！

「セラ、兄さん。超協力プレーで、クリアしてやろうぜ！」

「ああ！」

「ええ☆」

俺たちは駆け出し、ヴリトラに挑んでいった！

ヴリトラからの黒炎を時には兄さんが滅びの球体で消し飛ばし、時にはセラが凍らせていく。

俺は隙を見つけて斬撃を飛ばすが、匙はしっかりとヴリトラと連携しているのか、うまく避けていく！おかげで塔がボロボロになっていった！

崩れかけた塔の中で暴れる俺たちだったが、ヴリトラが天井を吹き飛ばして上空に飛び立った！

翼を展開して飛ぶのもいいが、ここまで使わずに来たものを使うことに抵抗があるんだよな……。

俺が策を考えていると、セラの持つ氷の魔剣に目がついた。

「セラ、それ貸せ！」

「これね？はい！」

俺は無属性の魔剣を順手で持ち、投げ渡された氷の魔剣を左手で逆手持ちする。

「兄さん、援護頼むぜ！」

「わかった！」

兄さんはヴリトラからの攻撃を相殺していき、ついでに牽制もしてくれていた。

「よっしゃ、行くぜ！」

俺はそう言うのと氷の魔剣に魔力を込めて勢いよく振り上げる！

すると、氷の魔剣から放たれたオーラがヴリトラの黒炎を凍りつかせ、同時にヴリトラに続く氷の道を作り出した！それに直撃したヴリトラも拘束されて動けなくなっている！

「これで決める！」

『キメワザ！』

突然アザゼルがそんなことを言ってきたが、構わず勢いよくその氷の道を登っている、途中でスケートのように滑って加速していく！

「はっ！」

その勢いのまま、ヴリトラに突撃し、二刀でバツ字に斬り裂いた！

『グギャアアアアアアアッ！』

ヴリトラは断末魔を放ちながら塔に落下していき、床を砕きながらさらに下へ落ちていく。

俺も氷の道が砕ける前に素早く塔まで戻り、二人にハイタッチをした。すると、

『ゲームクリアアアアアッ!』

アザゼルの叫びがフィールドに響き渡った! とりあえず、俺たちの勝ちだな。

俺たちが肩の力を抜いた瞬間、塔がガラガラと音をたてながら崩れ始めた。

「少々やり過ぎたか? 塔がもたなそうだ」

「そのようだね。二人とも脱出だ!」

「ええ、全員駆け足!」

「エイ! エイ! オー!」

俺と兄さんは、なぜかリズムよくそう返して、走りだした! ま、脱出イベントがあっても面白いかな。

二分後。

俺たちは無事に脱出に成功したのだが、そこにいたのは幸彦をおぶったイツセーとほ

こりまみれのアーシア。そして……、

「これはどういうことですか？」

怒りで肩を震わせるソーナと義姉ねえさんだった。

この二人、いつの間にこのフィールドに？

何てことを思っている俺をよそに、セラと兄さんは怯えだしていた。

「こ、これはだな。アザゼルからゲームの誘いを受けて……」

「そ、そうなのよ、ソーナちゃん！一人の男の子を勇者にしていくっていう大事なお仕事なのよ！」

二人はそう言い訳したが、ソーナと義姉さんがそれに納得するわけもなく。魔王二人は襟首を掴まれて引きづられていった。

「お話は魔王の城で聞きます。仕事を放棄してのゲームだなんて許し難がたいことです」

「お姉様、今日はじっくりと今後について話し合しましょう」

おおう、怖い怖い。

俺が他人事で見ていると、セラと兄さんが言った。

「ロイはなんで怒らないのよ！ロイだって参加してたのにいいいいっ！」

「確かに！これはあれか！義弟おとうとびいきというやつか！」

二人は俺を道連れにしようとしたらしいが、ソーナと義姉さんの返答は……………。

「ロイはあくまで、これが仕事です」

「ロイ様はあくまで、これがお仕事です」

だった。まあ、俺はこれを仕事としてやってたからな。ゲームを楽しんではいけないぜ？……………多分な。

「「そ、そんな」」

魔王二人がそう言うと同時に、転移魔方陣が展開され、四人は消えていった。

それに続くようにアザゼルと第三者の声が聞こえてきた。

『こんなところで何をしているのですか、アザゼル！』

『おわっ！シエムハザじゃねえか！副総督がこんなところに何のようだよ！』

『それはこっちのセリフです！このようなゲームを作っているなんて、私に一切説明がありませんでしたよ！またグリゴリの資金をつぎ込んだのですか！？怪しげなロボットといい、無駄なUFOといい、この謎のゲームといい、あなたは どうしてこんなことばかり！』

どうやら、あっちも問題ありのようだ。てか、内緒でこんなもん作ってたのかよ。

「ゲームオーバー……………ってやつかな？」

俺が何てことを言っているとゲームは終了となり、俺は強制転移によつてフィールド

を後にした。

あとになってわかったことだが、『アザゼルクエスト』はその後にも開発が進んでいるそう
うだ。

しかし、アザゼルは担当から外され、開発は他の幹部が引き継いだそうだ。

因みに、その時アザゼルは、

「俺の夢は、永遠に不滅だあああああつ！」

と全力で叫んだそうだ。多分だが、あいつは死んでも反省をしないだろう。

そして、兄さんとセラの参加を教えたのはリアスだったそうだ。陰から俺たちのこと
を見ていたらしく、事情を知るとすぐにソーナと義姉さんに連絡したそうだ。

肝心の依頼人——幸彦は、軽くトラウマになりそうなことを経験しながらも、これか
らもこの業界で頑張っていくことを決めたそうだ。彼の十年後が楽しみだな。

「よう、ロイ！今度はハンティングゲーム『ドラゴナイトハンター・G』を製作するんだ
！テストプレイヤーになってくれ！」

「へえ〜。それは、面白そうだな……………」

アザゼルから聞いた話だと、この時の俺の表情は、見たことがないほど不気味な笑顔だったそうだ。

Extra life 06 魔法少女？魔王少女だろ？

とある休日。

「行きたい行きたい行きたいいいいいいい！」

「お姉様、今回は我慢してください！」

「やだあああああああ！」

俺——ロイはセラとソーナの姉妹喧嘩を見させられていた。

ソーナから話があると聞かされて来てみれば、こんな感じだった。

俺はため息を吐き、セラに訊く。

「なあ、そんなにすごいのか？その『ミルクィ』っての」

「ロイも見ればきつとわかるわ！素晴らしい作品なのよ！」

不機嫌顔で言うセラ。

セラは時々、魔法少女のような格好をしているのだが、その元のアニメが『ミルクィ』
というのだ。

ちなみに、セラは基本的にリアスたちと大して変わらない年齢の姿をしているため、
一部のヒト（主にイツセー）からは『魔王少女』と呼ばれていたりする。

俺が呆れ気味に言う。

「……………で、そのミルキーを実写映画にするから、そのオーディションに参加したいと……………」

「さっきからそう言ってるじゃない!」

セラが来週に迫ったオーディションを前にしてワクワク状態となり、ソーナがそれを察知、俺と協力して辞退してもらおうとしているわけだ。

ただですらセラは忙しく、『禍の団』カオス・ブリゲードに所属するはぐれ魔法使いに狙われていることもあり、俺としても見えている危険に飛び込んで欲しくない。

俺たちの考えを知りもしないセラは叫ぶ。

「行かしてくれなかったら、もうお仕事しないいいいいいい!」

「ッ!」

セラの叫びに反応して、俺とソーナは小声で話し始める。

「(どうするよ。セラのことだから本当に仕事しなくなるぞ)」

「(それは厄介です。どうしてお姉様は……………)」

俺たちが困っていると、セラがさらに爆弾を投下してくる。

「書類選考は通ったのよ!」

「……………はあ!?!」

俺とソーナは同時に間の抜けた声を出してセラに目を向ける。セラは不機嫌そうに頬を膨らませながら、目でドヤ顔をしている。

いつもなら「かわいい」とかで済ませるが、今回ばかりはそうはいかない。準備が良すぎなんだよ……………」

俺は諦めたようにため息を吐き、ソーナに言う。

「ソーナ、この際おまえも参加しろ。それでセラを守れ」

「……………え!?!」

「いや、だから——」

「聞いていましたし、聞こえていました! な、なぜですか!?!」

さすがに困惑するソーナ。こんな顔を真っ赤にしているソーナは結構珍しいな。

俺は咳払いをしてソーナに言う。

「オーデイションに参加するってことは、それだけでセラが何をやるかわかったもんじゃない。だから、ブレーキ役になれ」

「……………」

ソーナは困惑しながら目を泳がせる。かなり考えているようだ。

しばらく考えたソーナは、覚悟を決めたように口を開く。

「わ、わかりました……………! 私がどうかしてみせます!」

「その言葉、待ってたのよ☆もうソーさんと眷属の皆の書類は送ってあって、みんな審査は通っているのよ☆」

セラはそう言うのと、魔方陣を出現させてそこから何かを取り出し、俺たちに見せびらかしてくる。これは、フリフリな衣装……………?」

俺が首をかしげている横で、ソーナは顔面蒼白となつて小さく震え始めた。

「これがソーさんの衣装よ☆私とは色違いになつてるの☆」

それを見たソーナは目に涙を溜めながら震える声を出す。

「ロ、ロイ様……………わ、私は……………」

俺はソーナの肩に手を置きながら提案する。

「まあ、なんだ。リアスたちにも手伝ってもらおうぜ?」

「……………は、はい」

「そう言うと思つて、リアスちゃんと眷属の皆の分の書類も送つてあるのよ☆」

震えながら頷くソーナとドヤ顔のセラ。ソーナには後でフォローしてやらないとダメだな……………。セラには軽く説教しないとダメかもしれない。

俺は息を吐き、衣装を受け取つたソーナを連れて退出しようとする、急に服の袖を引つ張られた。

俺が疑問符を浮かべながら振り向くと、満面の笑みのセラが俺を見つめてきていた。

「まだなんかあるのか？」

俺が訊くとセラは頷き、俺に何かを見せつけてくる。また衣装を取り出したようだ。今度は碧あおいラインが入った黒いロングコート。サイズから見ても男ものだ。

「こっちはロイの分よ☆主役のミルクィ役だけじゃなくて、『ヒーロー役』のオーディションもおこなわれるの☆………ね？」

ウインクしながら「ね？」じゃねえよ！これはあれか！俺も参加しろってことなのか！?

俺が口の端を引くつかせていると、セラがトドメと言わんばかりに告げてくる。

「ロイの書類も通ったから、よろしくね☆」

こ、これは面倒なことになったな………。

「——てなわけで、リアス頼む」

「リアス、私からもお願い」

ところかわつて兵藤宅のVIPルーム。

俺とソーナはセラを連れてここに移動し、リアスたちに頭を下げていた。

俺たちは緊張しながらリアスの答えを待っていると、リアスは大きく息を吐いた。

「ロイお兄様、ソーナも顔をあげて。わかりました。私もオーディションに参加するわ」

「本当か!ありがとう、本当にありがとう!」

「……リアス。ありがとう……」

俺は心の底からの感謝の言葉をリアスに送り、ソーナも目元をうるうるさせながらリアスに礼を言っていた。

「百合百合だわ!ソーさんとリアスちゃんの百合百合だわ☆」

セラにはいい加減自重してほしい。

そんなことを思っているとイツセーが訊いてきた。

「……で、俺たちもですか?聞いた感じだとその『ヒーロー役』ってのもやるんですよね?」

「ああ。俺と木場、イツセー、匙。この四人はそっちに参加だ」

そう答えると、三人が大きく狼狽えた。

「俺たちが参加する意味ってあるんですか!?!」

「悪魔になってから、本当に退屈しないね……」

「俺も？何で……？」

三人がそれぞれリアクションをしているが、すでに決まったことだ。

俺は改めて三人に言う。

「セラのこれは今に始まったことじゃないからな。……本当にすまん」

俺は三人に頭を下げた。

「ロイ先生、わかりました！俺たちも俺たちなりに頑張ってみます！」

イツセーが胸を『ドン』と叩きながらそう宣言してくれた。本当に頼もしいやつだ。

「イツセーくんだけにやらせられないね。僕も参加させていただきます」

木場がイツセーに続いて言ってくれた。

「こうなったらやけくそです！行けるところまで行ってやりますよ！」

匙も答えてくれた。

俺は顔を上げて笑顔を作ると三人に言う。

「おまえら、本当にありがとうな」

こうして、俺たちは『魔法少女ミルキー』の『ヒーロー役』のオーディションに参加することになったのだった。

そんなこんなでオーディション当日。

俺たちは都内のある高層ビルのホールに集まっていた。

ホールにはオーディションに参加する女の子、もしくは男の子がたくさんいる。番号を記したプレートを衣服につけている少年少女がざっと三百人だ。女の子の方が多いな。

そこまではいいのだが、問題は年齢だ。見た感じだと、周りは小学校高学年から中学生くらいが中心だ。で、俺たちは俺とセラ、ロスヴァイセを除いたら高校生だ。と、言ってもロスヴァイセも年齢だけで言えば高校生ぐらいなのだが……。

それにしても、周りからの視線が痛い。明らかに俺たちをバカにしたようなものも感じる。

「…………これは己との戦いね」

フリフリな魔法少女の衣装に身を包んだリアスがそう呟いた。

兄としてはかわいいと思うが、年齢的にはかなり無茶しているようにしか見えない。まあ、二十歳に近い魔法少女も有りだと思っぜ？

現に俺も白いアンダーシャツに、その上から例の黒に碧いラインの入ったロングコートを着ている。ズボンにはシャカパンだ。で、腰のホルスターにはいつもの銃剣を突っ込んでいる。

にしても、もう少しコスプレして来てもいいと思うんだけどな。コスプレしてるの俺たちだけで……。

「まあ、今日はがんばりましょう、リアス。うふふ」

若干楽しげに朱乃副部長は巫女服姿だ。なんか普通のと違って露出が多い気がするんだがな。

「……………こ、このような姿、実家の者に見られたら私は死ぬしかないわ…………」

魔法少女衣装のソーナが全身を震わせながら開口一番にそう呟いた。胸元に大きなリボンをつけたプリティな衣装だ。結構似合っていると思うがな。

「ぐはっ！」

匙が突然鼻血を吹き出して倒れやがった！

「おい、どうした!」

俺は慌てて匙を抱える。過呼吸気味になってるが、なんか幸せそうな顔だ。

「か、会長の魔法少女……。も、萌える……。萌え死ぬ……。ロ、ロイ先生……。お、俺、死んでもいいです……」

そう言えば匙はソーナラブだったな!ソーナの魔法少女姿が、こいつの好みのドストライクだったようだ!

「メ、メガネっ子の魔法少女……。か、会長が俺を殺しに来てます……」

「がんばれよ!俺だって、妹たちのコスプレ見て存外いいなって思ったけどさ!」

「な、ななな、なにを言っているんですか!?!」

俺の言葉が聞こえていたようで、リアスとソーナが顔を真っ赤にしながら狼狽えていた。

ちなみに、倒れている匙もコスプレしている。こっちは白色に黒ラインのロングコートに右腕に『黒い龍脈』アフソーフション・ライン。

イツセーが黒に赤ラインのロングコートに左腕には『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギア。

木場が黒に白ラインのロングコートに模造の刀剣を腰に帯刀している。男は全員ロングコートだな。

「せ、先輩……。ロイ先生……」

そんな事を思っていると、俺たちの前に魔法少女姿のギヤスパーが現れた！なんでギヤスパーまで魔法少女姿なんだよ！おまえは男だろうが！

「ギヤスパー、おまえ、男だよな？」

俺が訊くとギヤスパーは頷き、こう返してきた。

「……レ、レヴィアタン様が僕の方まで書類を出していたそうで……。つ、通過しちゃつていたんですう……」

マジカ!? セラのやつ、何してんだよ！ てか、男のこいつを通過させる上の連中の頭がよくわからん！

くそ、どうしてこうなった！

生徒会の面々も合流していき、後は審査員を待つだけかと思いきや……。

「……悪魔さんによ？」

……何だ、「によ？」って言ったのか？ 俺の背後を気配もなくいつの間にか取った何か
が「によ」と言っただぞ。

俺はゆっくりと振り向き、その何かを確認する。

巨木のごとき太さの上腕、サイズが合っていないマジカルな衣装と、それを張り裂こうとしている厚い胸板。フリフリのスカートからは女性の腰回りよりも太い足が姿を現しており、頭部には猫耳……。

俺は顔を引きつかせながら、横にいるイツセーに訊いた。

「イツセー、何だ、この、世紀末覇者みたいな猫又は……」

「ミルたんです。俺のお得意様ですよ」

「あー、おまえのお得意様ね……」

イツセーのお得意様か。で、何でこの漢おとこはこんなところにいるんだよ……。

「ミルたんはミルキーの大ファンなんです。たぶん、今回のオーディションにはミルキー役で参加を……」

イツセーがそこまで言うと、ミルたんは殺気を放つ純粹無垢な瞳で俺を睨んできた。ヤバイ、コカビエル以上の何かを感じる！

「悪魔さんのお知り合いかによ？初めまして、ミルたんだによ」

と言いなながら丁寧^{ていねい}に礼をしてくれるミルたん。存外いいやつなのか……？

「初めまして、こいつがお世話になってるようで……。今後もよろしくお願いします。あなたもヒーロー役のオーディションに？」

俺が訊くと、ミルたんは顔を上げ、俺を睨んできた！

やべえ、マジでやべえ！俺、ここで殺されるんじゃないのか!?

と、思っていたら、ミルたんは彫りの深い顔を笑ませた。

「悪魔のお兄さんは冗談がうまいによ。ミルたんは魔法少女になるために来たによ」

「あなたは魔法つてよりも拳法の方が似合ってますよ」

何て言いながら俺は今回のオーディションの基準に頭を抱えていた。だって、男の娘とか漢おとことか、明らかに基準がおかしいって！

そんなことを考えていると、会場がざわつきだした。何かかと思えば、映画の関係者らしき数人が会場に入ってきたようだ。

ひと昔前のプロデューサーのように肩にセーターを羽織った業界人的な男性プロデューサーと思われる人物が俺たちに言ってきた。

「はい、皆さーん。今日はお集まりいただきありがとうございますとーごさいまーす」

そう言った男性の横には帽子、サングラス、チョビヒゲという出で立ちの怖そうな雰囲気きふきの男性とロン毛の線の細い男性の二人が並んだ。

プロデューサー風の男性がマイクを使って俺たちに言ってきた。

「私は『劇場版魔法少女ミルキー』のプロデューサー、酒井です。そちらの帽子を被った方が監督の遠山監督、その隣にいる髪の長い方が脚本家の東海林しやうじ先生！」

「……………」

「どーも」

無言の監督と軽い脚本家。

「見て見て、ロイ！魔法少女モノと特撮モノに定評のある遠山監督と東海林先生よ！」

セラが大興奮しながら俺の腕に抱きつきながら言ってきた。どうやら、その方面では有名人のようだ。あと、服越しとはいえ胸が当たっているんだが……………。

プロデューサーが続ける。

「遠山監督や東海林先生と共に今日は映画に出演するキャストを選んでいきます。しくよろしく」

な、なんか軽い。とりあえず、この人たちが選考員つてことでいいんだよね？

『よろしくお願ひします』

オーディション参加者の全員があいさつをした。

……………と、監督が眉間にしわを寄せて、会場にいる俺たちをマジマジと見ているようだ。監督はうんうんと頷くとプロデューサーに耳打ちをしていた。

「ふんふん。なるほどなるほど」

プロデューサーは相づちを入れると、書類と照らし合わせながら俺たちのほうを見てきているようだ。

「えーと、いきなりですが、今回の一次試験の結果がいまここで決まりました」

早っ!? 周りからも「ええっ!?!」と驚愕の声をあげていた。いきなりだな……………。

で、最初に発表されたのは女子たちで、受かったのはリアスたち、ソーナたち、セラ、そしてミルたんとは民間人が数人。

「ロイ・グレモリーさん。兵藤一誠さん。木場裕斗さん。匙元士郎さん——」
「どうやら、俺たちも大丈夫だったようだ。」

「以上です！監督はフィーリングを大切にされる方なので、すみませんがこれにて一次試験終了です！」

『ええええええええつ！』

不満と驚きの声をあげる女の子たちと男の子たち。

「ええええええええつ!?こんな格好で!?!」

同様に驚くりアスとソーナ。ここまで来たら腹を括れ。

まあ、俺も受かるとは思わなかったよ。もつとこう、厳しいものを想像していたんだがな……。

「やったー☆やつぱり、わかる人にはわかってしまうのね!」

大はしやぎのセラ。本当に、どうしてこうなったのかね。

「それでは、ヒーロー役のオーディションを先に行います！合格者は移動してください！」

早速、俺たちの番のようだ。ここまで来たんだ、行くしかねえか……………。

Extra life 07 オーディション終了

なぜか一次審査を突破した、俺——ロイとイツセー、木場、匙、そしてその他一般参加の子供たちは、二次試験の会場と思われる広い目の部屋に集められていた。

気配を探ってみたが、セラたちがここを覗いていないようだ。まあ、下手に動いて失格にはなりたくないのだろう。

俺たちはパイプ椅子に座り、選考員三人とスタッフ数名が座った長テーブルの席に視線を向けていた。てか、俺が先頭列の中央とか、嫌でも注目される位置なんだが……。

それにしても、合格者二五人の約半数がコスプレ姿だ。選考基準がわからん。プロデューサーが言う。

「えー、合格おめでとうございます。皆さんの合格理由は我々の映画に対するコンセプトとマッチしていたのです。そうですね、東海林先生？」

振られた先生はロン毛を手で払いながら、キザっぽく言ってくる。

「その通り。僕と監督は今回、今までにないミルクキーを作りたいと思ってるんだ。そして、そのミルクキーを引き立てるスパイスには、この中の誰かの力が必要だと考えた！ 僕らはキミたちの誰かと新しいミルクキーを作り上げたいんだよ。ね、監督？」

振られた監督は不機嫌そうに腕を組み、チョビヒゲをの口元を動かした。

「いいね〜」

………え、終わったのか？「いいね〜」だけ？いやいや、意味わからん。何がどう良かったんだよ。

俺がそんなことを思っている間に、二次試験の『面接』が開始された。

呼ばれた少年が立ち上がり、質問に答えながら自分をアピールしていく。皆、趣味とか特技とか、そんな感じのことを言っていき、ついに俺たちの番になってしまった。

プロデューサー「では、あなたの特技は？」

木場「最近ではケーキ作りですね。特にチーズケーキが得意です。それと剣術程度でしたらそれなりに」

監督「いいね〜」

プロデューサー「今回のヒーロー役のオーディションに参加した理由は？」

イツセー「えと、ある人の影響で原作が好きでして、やれるんだったらやりたいなど」
プロデューサー「ところでその籠手は？」

イツセー「はい！これは、俺の相棒です！」

監督「いいね〜」

プロデューサー「あなたも籠手をつけているのですね。つて、それ籠手なんですか？」
匙「籠手と言えば籠手ですけど、先程の彼に比べたら変な感じですけどね」

プロデューサー「それはキミの相棒？」

匙「もちろんですよ！俺の右腕で、生涯のパートナーです！」

監督「いいね〜」

プロデューサー「あなたは籠手をつけていないんですね……」

ロイ「いや、つけているのが普通みたいに言わないでくれよ……」

プロデューサー「これは失礼。では、あなたの特技は？」

ロイ「斬ったり、撃ったり……だな」

プロデューサー「あの、他には？」

ロイ「強^しい^いて言えば、色々なところに潜り込むことも得意だ。面倒は嫌いだがな」

監督「いいね〜」

——と、木場以外明らかにおかしい感じになってしまっていた。周りからの視線が痛いのは今に始まったことじゃないから無視だ！

「今日は何とも個性的な少年（？）ばかりですね〜」

「いいねえ」

プロデューサーと監督は何かの病気だとしか考えられない。いくらなんでもおかしいだろ？今考えてみると俺の返答ってかなりヤバイぞ。

「それでは、合格者を発表いたします」

そんなこんなで二次試験も終了。

俺、イツセー、木場、匙、を含んだ数名が合格。三次試験へと駒を進めることとなり、女子のグループが終わるまで待機となった。

で、俺たちは案内された待機場所から抜け出して女子のグループを覗き見ていた。妹の青春の一ページだ、見ておきたい。

そう意気込んで来たのはいいんだが、問題は女子のグループに参加している彼（？）

だ。

「ミルさんの魔法力を見せてあげるによ」

そう、ミルさんだ。彼はそう言うのと余っていたパイプ椅子を持ち上げた。すると、全身の筋肉が盛り上がり始める！腕が、背中が、いつそう隆起して膨れ上がっていくなかで、ミルさんはパイプ椅子を易々と折り曲げ、ひしゃげ、形を変えていった！

ベキン！バキツ！

映画のオーディションでは聞くことがないであろう音が会場に響き渡った！

な、何やってんだ、あいつ！

会場の女子たちと外の俺たちは驚きながらもミルさんから視線を外せないでいた。

そんなことお構い無しにミルさんはパイプ椅子を圧縮し続けていく！しだいに小さく形を変えたパイプ椅子は、ミルさんの両手に収まる程の大きさになっていた。

ぎゆううううう……つ。

最後におむすびを力強く握るようにして形を整えた。ミルさんの手の中には圧縮され続けたパイプ椅子だったもの、いびつな鉄の球体が収まっていた。

ミルさんは満面の笑みでそれをスタツフに見せつける。

「パイプ椅子を鉄球に変える魔法によ。魔法力、感じてくれたかによ？」

あれが魔法力なわけあるか！ただの怪力、筋力だ！何なんだよ本当に！

「ミルさんの希望は癒し系によ」

何をどう癒すってんだ!? 壊すだけだろ!? 何もかも真っ黒に焼き尽くすだけだろ!? てか、他の参加者が怖がつてるじゃねえかよ!

「いいね!」

監督が俺たちの時とは段違いのリアクションを見せた! ダメだ、早くどうにかしないと……。

「じゃあ、次はリアス・グレモリーさん」

お、キタキタ。我らがリアスの番だな。さて、どんなことをするのかねっと。って、リアスのやつ顔を真っ赤にして体を震えてあるんだが、何かあるのか?

見れば、ソーナも体を震わせていた。何だろう、二次試験まで進むなんて思いもしていなくて、セラと変な約束でもしたのか?

俺が疑問符を浮かべていると、リアスが意を決して立ち上がった。

そして、深呼吸をひとつして、声色までかわいくして叫んだ!

「魔法少女リーア! きらめく魔法で極悪怪人をまとめて滅殺しちゃうぞ☆」

「ぐはっ!」

「「ロイ先生!」」

俺は鼻血を吹き出して倒れた! な、なんだ、今の形容しがたい破壊力は!? 兄さんと父

さんの気持ちかなんとなく理解できぞ……………!!

俺がそんなことを考えていると、イツセーが言ってきた。

「ロ、ロイ先生!だ、大丈夫ですか!?!」

「く、くぞ……………あんなリアス、初めて見た。小さい頃でもあんなことしているところ、見たことねえぞ……………」

「ロイ先生つて、やっぱリシス——」

「匙くん、それ以上はいけないよ……………」

横では匙と木場がそんなやり取りをしていた。

俺は立ち上がり、テツシユを鼻に詰めて会場に視線を戻す。

すると、ソーナが、

「魔法少女ソーナ!まばゆい魔法で凶悪怪人をたくさん消滅させちゃうもん☆」

リアス同様にかわいらしい声音で叫んでいた!

それを見た、セラと匙は鼻血を噴き出して悶絶していた。

結局、向こうも俺たちの関係者は全員合格。そして、ミルたんも合格し、俺たち全員で三次試験へと進むことになったのだった。

てなわけで、無事に二次試験も合格した俺たちは、バスで三次試験の会場に移動していた。

「……死にたいわ」

「……ええ、私もです」

バスの中で項垂うなだれているリアスとソーナ。その二人をそれぞれの眷属が励ましていた。いやはや、仲が良いことで、お兄ちゃん、嬉しいぜ！

そんなことを思っているうちに到着したのは港近くの廃工場だ。ここで演技力をチェックすることのこと。

それにしても、試験に本番でも使えそうな撮影現場を使うってのも贅沢なもんだな。何てことを思っていると、物陰から黒いローブを着込んだ女性が複数人現れた。

彼女たちは俺たち、特にセラに殺気を放ちながら俺たちの眼前に立つ。

タイミングと彼女たちから感じるオーラからして魔法使い。つまり――。

俺がそこまで考えると同時に、彼女たちのリーダー格と思われる女性が告げてきた。

「私たちは『禍カオス・フリゲードの団』の一派、『ニルレム』に属する魔法使いだ。我らは魔法使いを侮

辱せし魔王レヴィアタンに抗議をしにきた」

「……………だよな。まあ、来るとは思っていたが、ここまで堂々と来るとはな。ここだと一般人も多いってのによ。つつても、テロリストにそんなもん関係ねえか。」

「おや？ドツキリ？」

プロデューサーは間抜けな顔で的是なことを口にしていった。一般人からしてみればそうなるよな。で、その一般人を巻き込みたくねえから……。

「セラ、頼む」

「任せて☆」

セラはそう言うと言指先に魔力を貯めて魔方阵を展開、それを飛ばして一般人に当てていった。当てられた人たちはパタリと倒れ、眠り込んでいく。

「巻き込んだらかわいそうだから、眠らせたのよ☆」

俺はセラに頷いてリアスたちに指示を出す。

「リアス、ソーナ。おまえらで寝てる人たちを守れ。あっちの相手は俺たちがやる」

「わかりましたわ」

「ついでにお姉様も押さえておきます」

リアスとソーナが頷いたことを確認して、俺は男子三人に言う。

「よっし、男子チーム！行くぜ！」

『はい!』

俺たちは同時に飛び出して魔女を狙いにいくと、俺たちの横を何かが通り過ぎていき、数人の魔女を吹き飛ばした!

見ると、それは金属の塊だ。あり得ないぐらい圧縮されてボールみたいになっているが、多分そこら辺に置いてあったドラム缶だったのだろう。そして、この場にそれほどのパワーを持っているのは……。

「悪魔さん、お手伝いするによ」

ミルたん。彼はセラの睡眠魔力が効かなかったようで、平然と俺たちの横についていた。

「それは心強い。改めて、行くぜ!」

『は、はい!』

気にせず続けた俺に、三人は驚きながらも返事を返して再び飛び出した!

「貴様らには用はない! 邪魔をするな!」

魔女はそう言いながらこちらに魔法で攻撃してくるが、

「ミルキイイイイイ・スパイラルウウウ・ボオオオオムアアツ!」

ミルたんがその全てを拳で破壊し、

「ミルキイイイイイ・サンダアアア・クラッシュアアアツ!」

アスファルトを抉るほどの蹴りで魔女を数人まとめて弾き飛ばした！

「なんだ、こいつは!？」

「新手の冥界生物か!？」

魔女たちも混乱しているようだ。俺たちはその隙に近づいて……。

「オラツ！」

俺は魔力を込めたボディーブローを打ち込み、一人を無力化。

「はあッ！」

木場自慢のスピードで翻弄し、刃を潰した聖魔剣を上段から振り下ろして一人を斬り伏せた。

「あらよつとー!」

匙はラインで魔女を拘束し、魔法力を奪っていく。

『ドレス・ブレイク洋服破壊』!』

「きゃあああああああつ!」

イツセーは魔女を丸裸にして鼻血を垂らしていた。

「イツセー、こういうときぐらい自重しろ!」

と、言いながらイツセーに軽くチョップを決める!チラツと全裸の魔女を見てしまったのだが、その瞬間に凄まじい殺気を感じたんだぞ……………。

まあいい。とりあえず、あと五人！

俺がそれを確認したと同時にセラの声が聞こえた。

「ロイ！皆、下がって！」

『ッ！』

俺たちはセラからの指示に従い、一気に後方に下がった。すると、リアスとソーナが全身をプルプルと震わせながら前に出る。

リアスが目元に涙を溜めながらややくそ気味に叫んだ。

「グレモリースティイイックー！」

胸の飾りからかわいらしいエフェクトを放ちながら、魔法のスティックが出現した！

「シトリースティイイックー！」

ソーナも同じように羞恥心と戦いながら魔法のスティックを出現させた！

セラも同様にスティックを取り出して、リアスとソーナ、そしてその眷属女子たちに掛け声をかけた。

「さあ、行くわよ、皆！レヴィアビイイイムッ！」

「リーア・シャイニング・ラブ・ファイヤアアアッ！」

「ソーナ・ライトニング・アクア・ジャスティイイイスッ！」

セラを中心とした強烈な攻撃、そして眷属たちからの追撃で、撮影現場で大爆発が起

こった！

しれっとリアスとソーナが攻撃する瞬間に、かわいらしい星マークとかハートマークが撒き散らされていたんだが!?

「きゃあああああああつ!」

魔女たちは回避も防御も出来ずに直撃、倒れていった。よし、戦闘終了つと……。

俺が帰り支度に入ろうとすると、

「キアアアアアアアツ!」

後ろから女子チームの悲鳴が聞こえてきた。何か起こったのかを確認しようと振り向こうとすると……。

「ん?なに?」

「お兄様!振り返らないでください!後で大変なことになります!」

「うん?ああ、わかった」

リアスに制止され、俺は再び前を見るようにする。すると、

「ぎあああああつ!」

激しい爆発と共に、イツセーと匙の断末魔が撮影現場に響き渡った。

多分だが、女子チームの大半が何かの影響で裸になり、それを見た二人が制裁にあつたのだろう。

すると、俺の肩に手が置かれる。

「……………ロイ。さつき、見たわよね？」

壊れたロボットののように『ギギギギ』と音を立てながら振り向くと、そこには笑顔のセラがいた。が、目が笑っていない。

「イヤー、ナンノコトカナー」

俺が棒読みで返すと、セラが肩に置いた手を首に回し、俺を引きずり始める。

「ふふふ、またお話が必要みたいね……………」

「か、勘弁してくれ！リアス、ソーナー！助けてくれ！」

「今日はもう帰らせていただきます……………」

「お姉様をよろしくお願いします……………」

物陰から、二人の疲れきった声音の返事が帰って来た。

あはは……………だよな……………。

俺は諦めるように息を吐き、いつも通りに抵抗せず、されるがままにすることにした。こうして、波乱のミルキーオーデーションは幕を閉じたのだった。

余談だが、オーディションは破算となり、あの場にいたスタッフ含めた一般人たちからは記憶を消させてもらった。

「もう少しで、もう少しで、ミルキーに……………」

「ま、次に期待しようぜ？」

「お断りですっ！」

落ち込むセラを励ましていたら、リアスとソーナから手厳しいことを言われてしまった。結構楽しかったけどな。

それにしても……………」

「ミルたん、いったい何者だ？」

ミルたんはあの後、音もなくいなくなっていた。実力は申し分ないと思うが、素性が一切わからん。不思議な奴だったな。

俺と同じ事を思ったのか、セラが言う。

「ミルたんだったわね。あのヒト、私と同じかそれ以上のミルキーパワーを有した魔法っ子なのよ。ロイ、どうかしら？ 私、まだ駒が余っているのよね」

何て言ってきたので。

「セラの好きにすればいいだろう？ ま、あいつが未来の同業者つても面白そうだ」

と、返しておいたのだが、内心ではミルたんの底知れない何かに恐怖している俺なの

だ
っ
た。

「も、もう限界ですううう」

ついに燃え尽きたギヤスパ。少しやり過ぎたか？

「ま、ノルマはクリアだな」

俺は息を吐き、今日の朝練はお開きとなった。

その日の深夜。兵藤宅VIPルームにて。

俺たちはある理由で訪ねてきた兄さん、義姉^{ねえ}さん、アザゼルを迎え入れていた。

リアスの眷属も全員揃っており、全員固い表情になっていた。

全員を一瞥しながら兄さんが言う。

「イツセーくん、木場くん、朱乃くんの三名に昇格の推薦が発せられる」

おー、昇格か。それはめでたいな。

説明しておく、イツセーたちを始めとした転生悪魔は、最初は下級悪魔だ。そこか

らレーティングゲームなどで名を挙げることで昇格試験に挑戦、それに合格すれば中級悪魔になれる。

で、イツセーたちはその昇格試験に参加できるのだ。

そんな三人にリアスが心底嬉しそうに笑みながら言う。

「昇格推薦おめでとう、イツセー、朱乃、祐斗。あなたたちは自慢の眷属だわ」

「ま、他のメンバーにもそのうちくると思うぜ？ 実力でいえば上級クラスだからな」

俺の言葉に兄さんは頷き、付け加える。

「三人には上級悪魔相当の昇格が妥当なのだが、昇格のシステム上、中級悪魔の試験を受けてもらいたかったんだ」

上のヒトたちは頭が固いからな。融通が利かなかったか。

それはそれとして、いい加減応えてもらわなければ……………。

木場と朱乃が立ち上がり、一歩前に出ると、兄さんに一礼した。

「リアス・グレモリー眷属の『騎士』^{ナイト}として、謹んでお受けいたします」

「私もグレモリー眷属の『女王』^{クイーン}として、お受けいたします」

二人がしっかりと応えたが、イツセーが驚いた顔で固まっていた。

そんなイツセーに兄さんは声をかける。

「イツセーくんはどうだろうか？」

それを受けたイツセーは慌てて立ち上がり、深々と頭を下げる。

「もちろん、お受けいたします！リ……部長にと応えられて俺も満足です！」

兄さんの前で遠慮したのか、リアスを「部長」と呼ぶイツセー。俺は前に「気にするな」と言っておいたからいいが、兄さんにはまだだったか。

それを気にしたのか、兄さんが言う。

「おやおや、イツセーくん。私の手前でもリアスのことは名前で呼んでくれてかまわないよ」

「いえ、しかし………」

かしくまるイツセーに、兄さんは嬉々として言う。

「ハハハ、むしろ呼んでくれたまえ！私も嬉しいし、見ていて幸せな気持ちになれる」

「サ、サーゼクスお兄様！茶化ささないでください！」

リアスは顔を真っ赤にしながら怒るが、俺を含めて『かわいい』としか思われていないさそうだな。

「いいではないか。なあ、グレイファイア」

義姉さんに振る。相変わらずクールな表情で義姉さんは続ける。

「この場の雰囲気ならば差し支えないかと」

義姉さんの言葉に二人とも黙り込んでしまった。

「よしよし。それならば——」

「義兄上あにうえと呼べとか言わないでくれよ」

「……………」

「言うつもりだったのかよ！そのうちで良いだろ！」

「ロイ様の言う通りです」

俺のツツコミに義姉さんも続いてくれた。兄さん、やはりどこかずれていると言うか、急ぎすぎると言うか……………」

兄さんは渋々頷きながら言う。

「…そ、そうだな。性急すぎるのがグレモリー男子の…」

「俺は性急じゃないぜ」

俺がそう返すと、兄さんは意外そうな顔をする。

「そうなのかい？私やお母様の前でセラフオールに告白したというのに」

「……………ッ！今さらそれを言うのかよ!？」

「もしかすると、ロイの方が性急じゃないか。やはりグレモリー男子は性急すぎるのが悪い癖だ」

「……………」

俺は絶句し、ちらりとリアスたちに目を向ける。少し驚いたような、軽蔑したような、

なんとも言えない表情だ。

アザゼルが一瞬だけ同情するような目を俺に向けると、すぐに視線をイツセーたちに戻して口を開く。

「てなわけで、試験は来週だ。それが一番近い試験日だからな」

アザゼルもそれなりに性急だと思うんだが、別に気にすることでもないか。

アザゼルの言葉に木場は眉を寄せながら言う。

「来週ですか。急ですね……………」

木場が続くように、朱乃が思い出しながら言う。

「中級悪魔の試験って、確か、レポート作成と筆記と実技でしたわよね？実技はともかく、レポートと筆記試験は大丈夫かしら」

木場と朱乃副部長の言葉にイツセーは不安そうな表情になった。

「木場と朱乃は筆記に関しては何問題ないと思うぞ。レポートは——何を書くんですか？」

俺が義姉さんに訊くと説明を始める。

いかんせんこつちを離れてた時期が長かったからな。その離れてた時に内容が変わっていると、アドバイスしようにも何にも言えん。

「砕いて説明しますと『中級悪魔になってから何をしたいか』をテーマにして『これまで

「得たもの」と絡めて書いていくのがポピュラーですね」

なるほどね。昔と大分変わってるな。レポートなんてあったか？

「人間界の試験みたいですね」

「イツセーが言ったことにアザゼルが反応し兄さんに訊く。

「ま、做ってんだろ？」

「転生悪魔は人間が多い。そのため、人間界の試験を做わせてもらい作成している」
なるほどね。確かに転生悪魔は人間が多いからな。

俺は立ち上がりながら言う。

「何はともあれ、レポートはどうせ試験日が締め切りだろうから、それを最優先だな」

その言葉にアザゼルが続く。

「何するかも知らなかった奴が言うなよ、まあその通りだがな。だがイツセー！」

「は、はい？」

アザゼルに指差されたイツセーは驚いてるが、指差されて当たり前だよな。

「お前はレポートだけじゃなく筆記試験のために勉強だ！基礎はできてるからな、応用問題もできるようにしろ！周りの奴も手伝ってやれ！」

「任せなさい、イツセー」

「僕も再確認したいから一緒にやろう」

「あらあら、私も一緒にやりますわ」

いい友情だな。ヴィンセントの奴は元気だろうか……………。

俺がイツセーたちを見ながらそう思っていると、イツセーが訊いてくる。

「実技はどうしましょう?」

「……………」

黙りこんだ俺、兄さん、義姉さん、アザゼルを見て、イツセーがさらに訊いてくる。

「え?俺、変なこと訊きましたか?」

「いや、変じやないが……………大丈夫だろ」

俺が言うが、イツセーは不安そうに返してくる。

「でも、俺的に一番稼げそうなどころなんですけど……………」

「だから大丈夫だって。ぶつつけ本番にしとけ。木場と朱乃もだ。実技はいいからレ

ポートに集中しろ」

「はい」

俺の言葉に二人とも返事をしてくれるが、イツセーは相変わらずわかってないよう
で、首をかしげていた。

するとイツセーがゆっくり手をあげて質問する。

「あのー、もし落ちたらどうなるんですか?やはり推薦取り下げですか?」

それに兄さんは答える。

「いいや、そんなことはないよ。一度挙げられた推薦はよほどの事がなければ取り下がらないよ」

それを聞いてイツセーは少し安心したような表情になった。それを見て兄さんは続ける。

「それに私はイツセーくんが合格すると確信している。不安を感じているかもしれないが、問題ないのではないかな」

イツセーはそれを聞いて、ようやく自信が出てきたようだ。

「はい！俺、がんばります！」

その話の後、ロスヴァイセが一旦ヴァルハラに戻るといふ話になったが、その時にロスヴァイセが言った「テストは作ってありますのでご心配なく」に、再びイツセーが不安そうな表情になってしまった。

イツセーの奴は、今日はいつにも増してコロコロ表情が変わるな。

すると、兄さんがレイヴェルに言う。

「レイヴェル、例の件を承諾してくれるだろうか？」

「もちろんですわ、サーゼクス様！」

レイヴェルが快諾したが、イツセーがわかってないのか、「例の件ってなんですか？」と兄さんに訊く。

「レイヴェルにイツセーくんのアシスタントいわゆる『マネージャー』を頼もうと思っ
ていてね」

あー、そういえば、そんな事を言っていたような言っていなかったような……。

うろ覚えの俺をよそに、兄さんは続ける。

「これからイツセーくんは忙しくなるだろう。グレイフィアだけではまかなえきれない部分もある。それならば冥界に精通し、人間界でも勉強中のレイヴェルをマネージャーに推薦したのだよ」

確かにこれからイツセーは特に大変だろうからな。マネージャーとかはいた方がいいだろう。

俺がそう思っていると兄さんは続ける。

「さっそくで悪いのだが、レイヴェル。中級悪魔の試験についてサポートしてあげてほ
しー」

兄さんの言葉にレイヴェルは立ち上がり、自信満々に手をあげた。

「わかりました。このレイヴェル・フェニックスめにお任せくださいませ！さっそく必

要になりそうな資料を集めてきますわ！」

そう言うのとすぐに部屋を飛び出していった。

「レイヴェルにとつちや、将来の自分にも大きな意味を持つからな」

アザゼルが言うが確かにその通りだな。

リアスに聞いた感じだと、フェニックスの親御さんはそのうちレイヴェルをイツセーの眷属にしたいんだろうし。

「小猫も、油断しているとイツセー取られちゃうぜ？」

俺ががらにもなく小猫を煽ってみるが、

「……………」

ノーリアクションだった。いつもなら何かしら反応すると思うんだが……………。

やっぱり、慣れないことはやらないほうがいいか。

「?」

それはそれとして、小猫の反応にイツセーたちも不思議そうにしていた。

俺たちは変な不安を感じながら、今日はここで解散となったのだった。

life 02 訪問者

あれから数日。

最近、どうにも調子の悪い小猫にあることがわかった。

「猫又の発情期ってことか」

話を聞いたアザゼルが開口一番にそう言った。

転生悪魔は元の種族の特徴を残して悪魔になる。

話題の小猫は元が妖怪——猫又であるため、発情期というやつに突入してしまったよ
うなのだ。その矛先は気に入っている異性、つまりイツセーだ。

そこである疑問がひとつ。

「発情期って、体が成熟してから突入するもんだろ？小猫はまだ、な？」

「ああ、小猫はまだ小さい」

俺とアザゼルはそんな事を口にしていた。

「あ、一応だが、イツセー。胸のことじゃないからな」

「わかってますよ！まだ小猫ちゃんは小柄ってことですよね!？」

俺の一言にイツセーは顔を赤くしながら返してきた。リアスと朱乃の胸を見ていた

くせに、よく言うぜ。

アザゼルがイツセーに説明する。

「人間同様、出産は母胎に大きな負担がかかる。今の小猫が妊娠し、出産するとなると、母子共に耐えられずに死ぬ可能性が高い」

アザゼルの言う通りだ。だが、小猫は発情期に突入してしまったわけだ。なぜだ………？

俺はその疑問を口にする。

「今の小猫なら、本能でそれをわかっているはずだ。だったら、発情期はしばらく来ないはずなんだが………」

「ここに住んでいる女としてはわからなくもないですわね」

そう言ったのは朱乃だ。朱乃の発言にみんなが反応し、視線を向ける。

「きつと小猫ちゃんはいつせーくんとリアスを見て『私も負けられない』、『次は私だ』と強く思ってしまったのでしょうかね」

なるほどね。それなら何となくです合点がいくな。

「私とイツセーの影響で発情期に入ってしまったのかしら………」

朱乃の言葉にリアスが少し動揺しているようだ。

アザゼルがこの何とも言えない空気を察したのか口を開く。

「何はともあれ、発情期を無理矢理抑えても、今度は発情期が来なくなるかもしれない」
「確かにアザゼルの言う通りだ。体が成熟しても発情期が来ないんじや、小猫が子孫を残さなくなるかもしれん。というわけだ、イツセー」

「は、はい！」

「お前は小猫が落ち着くまで耐えろ。万年発情期のお前にはキツいかもしれないが何とでも耐えろ。小猫を死なせたくないだろ？」

「わ、わかりました！小猫ちゃんのためにもがんばります！」

「無事に耐えてくれたら私がご褒美あげるわ。ね？」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、本当よ」

「だったら俺、ご褒美のためにも頑張ります！」

俺の言葉よりリアスの言葉に強く反応したな。

そのまま二人とも見つめ合い、黙ってしまった。

「おらおら、バカップルが暑苦しいぞ」

アザゼルの言葉に二人とも顔を真っ赤にしていた。

「まったく、二人きりの時にやれよ。なあ、みんな？」

「いいえ、見ていて安心します」

「いいえ、見てて安心するわ！」

「いや、見ていて安心できる」

アザゼルの呟きに、アーシア、イリナ、ゼノヴィアが同時にそう返してきた。

「浮気へのポイントがまたひとつ高まりましたわ」

朱乃もどこか楽しげな様子で返し、

「ライザーお兄様に見せたら悶死しそうですね」

レイヴェルはライザーを大事にしてやれ！ヴィンセントにまた相談されちまう！

そんなリアス眷属女性チームを見てアザゼルが息を吐きながら口を開く。

「……たくよ、いい女に恵まれてんな、イツセーは。それとついでに連絡だ。朱乃、バラ

キエルは承諾した。俺もそれでいいと思っっている。あとはお前次第だ」

「そうですね。わかりました。近くに必ず」

何か朱乃が覚悟を感じる目になった。何を決めたのかは置いておいて、俺は応援させてもらうか。

それを聞いてアザゼルは頷いた。

「わかった。他のみんなにも連絡がある」

「ん？なんだアザゼル。聞いてないぞ」

「ああ、ちよいと急に決まったことだな。明日この家に訪問者を呼ぶ予定だ。リアスと

ロイに了解を取りたい」

「で、誰が来るんだ？」

俺が訊くと、アザゼルはいつになく真剣な顔になった。

「お前らはその訪問者に殺意を向ける、そうなってもおかしくない」

「殺意ってお前な。誰だ？ ヴァーリチームか？」

「ロイ、半分正解だ」

俺の質問にアザゼルが答えてくれたが、半分つてのはなんだ？ ヴァーリチームには、俺たちが知らないメンバーがいるのか？

「ヴァーリはテロリストですもの。戦う準備はするわ。けれど殺意を向ける程でもないと思うのだけど、京都でもイツセーたちを助けて助けてくれたみたいだし、私個人の見解では、英雄派ほどの危険性はないと思うわ」

「俺も同じくだ。警戒は最大に行うがな」

俺とリアスの意見は一致していたようだな。ここで違うと面倒な話し合いになるかもしれないからな、良かった。

俺たちの意見を聞いてアザゼルは頬をかいた。

「今言つてもしょうがない部分もあつてな。明日の朝まで待つてくれ。それでわかる。俺の願いはその訪問者に攻撃を加えないでほしい。それだけだ。うまくやれば今の情

勢が変化するかもしれない。俺も明日の朝一にまた来る。だからこそ、頼む」

そう言ってアザゼルは頭を下げる。

それほどの相手が来るのか一体誰が、いや、何が来るんだ………？

今日はここで解散となり、その明日に備えて、俺たちは早めに眠りにつくのだった。

次の日の朝。

さっそくインターホンがなり、俺たちは玄関に出迎えに行つた。

玄関を開けてみると、俺たちの目の前にはゴスロリ衣装の女の子が立っている。つて、こいつは!?

「久しい。ドライグ」

「オ、オ、オ、オーフィス!?!」

イツセーが驚いているが、それはそうだろう。俺たちの目の前には、テロリスト——
『カオス・ブリゲード』のトップである、オーフィスがいるのだ!

この場にいる全員が戦闘態勢に入るなか、アザゼルが割って入る。

「ほらほらほら！昨夜言つたろ！誰が来ても攻撃は無しだ！てかやつても倒せねえよ！」

「そんなことはわかつてる！だがアザゼル、どういいうつもりだ！」

「そうよ！どういいうつもりなの！そのドラゴンはテロリストの親玉なのよ！それなのにどうして同盟にとって重要な場所になっているこの町の、この家に！ここを警備している者たちも騙したってことよね！？どうして！」

俺とリアスが声を荒げるが当たり前だろうこれは——。

「協定違反もいいところだぞ！これじゃなに言われても何も言い返せねえ！各勢力の協力を誰よりも訴えていたあんたが——」

そこで俺はある結論が出た。リアスも同じく事を考えていたのか口を開く。

「協力態勢を誰よりも説いていたあなたですものね。オーフィスの訪問にそれがかかっていると判断したってことね？」

俺もそう思ったところだ。

今までの事を考えても、アザゼルが今さら裏切るわけないだろう。

なんだかんだ言つても、アザゼルは面倒見がいいからな。

「ああ、すまん、リアス、ロイ。俺はこいつをここに招き入れるために現在進行で色々

な奴を騙している。だが、こいつの願いは、もしかしたら『禍の団』カオス・ブリゲードの存在を揺るがすほどのものになるかもしれないんだ。無駄な血を流さないために、それが必要だと俺は判断した。改めて頼む。こいつの話だけでも聞いてやってくれないだろうか？」

アザゼルが昨日に続き、また頭を下げる。こいつがここまでするなら何か大きな意味があるのだろう。

みんなが同じ事を思ってくれたのか、戦闘態勢を解いてくれたが、俺は横目でイリナを見てから言う。

「アザゼル、後でしつかり説明してもらおうぞ」

立场上、一番複雑なのは多分イリナだ。彼女はミカエル、つまり今の天界トップの部下である御使ブレイブ・セイントいのAだからな。

「ああ、わかっている。すまん」

「もうなっちまったことは仕方ないさ。で、どうすりゃいいんだ？ 上にあげてお茶でも出すか？ それよりも、こいつだけなのか？ ヴァーリチームは？」

俺が訊くと、玄関前に魔方陣が出現する。

そこから現れたのは、とんがり帽子にマントというベタな魔法使いの格好をした女の子と一匹の犬、いや狼か？

あの女の子はイツセーが京都で会ったというルフエイというアーサの妹だろう。

問題は狼の方だ。あの狼から感じるプレッシャーは忘れられないな。

おそらく、あれはフェンリルだろう。そういえば、フェンリルがヴァーリチームに行つたなんて報告があつたような……………。

「ごきげんよう、皆さん。ルフエイ・ペンドラゴンです。京都ではお世話になりました。こちらはフェンリルちゃんです」

「ご丁寧にあいさつをしてくれるルフエイ。見た感じ、かなりフェンリルに懐かれていようだ。てかフェンリル『ちゃん』ってどうなんだ。

さらにもうひとつ魔方阵が展開され、そこから今度は猫耳を生やした女性が出てきた。と思つた矢先にイツセーに抱きつく。

「おひさく。赤龍帝ちゃん！」

現れたのは小猫の姉、黒歌だった。

「お前かよー！ どういう組み合わせだ！」

イツセーが抱きつかれながら文句を言ってるが、黒歌は聞いていない様子で無視をする、

すると、オーフィスがイツセーを真っ直ぐ見つめ、一言だけ漏らした。

「話、したい」

アザゼルもそれを聞いて念を押ししてくる。

「お茶してやれ。このために俺は他の勢力を騙しまくってだからな。これがバレて悪い方向に進んだら、俺の首が本当の意味で飛ぶんだよ」

はいはい、わかっているよ。ここまで来ればヤケクソだ。お茶でも何でもやってやるよ。

いつものVIPルームに集まった異様とも取れるメンバー。

リアス眷属（小猫とそれに着いてくれているギヤスパ、北欧に行ったロスヴァイセ意外）、イリナ、レイヴェル、アザゼル、俺、そしてヴァーリチームのルフエイ、黒歌、フェンリル、最後にオフィスという何も知らない奴が聞いたらぶっ倒れそうな集まりだ。

「お茶ですわ」

朱乃が警戒しつつもヴァーリチームとオフィスにお茶を淹れる。

ルフェイはそれを飲み、黒歌はお菓子を食っていた。フェンリルはルフェイの近くで寝むっている。

こいつら、緊張感ゼロだな。こっちは感覚を研ぎ澄ましてしるつてのに。

俺たちの横ではイツセーも不安そうにしているし、オーフィスは黙ってイツセーを見ているし、どうしたものか……。

すると、イツセーが無理矢理笑顔を作って話しかける。

「そ、それで、俺に用ってなんでしようか？」

がんばれイツセー、お前の一言にこの場にいるメンバーの命が懸かっている。

それに、下手をしたら嫌なほうで歴史に名が残すことになるかもしれないぞ。

俺が心の中でイツセーを応援していると、オーフィスが口を開く。

「ドライグ、天龍をやめる？」

駄目だな。俺たちじゃフォロー出来ない話題だ、これは。

「いや……言っている意味が」

イツセーもよくわかってない感じだ。それでもオーフィスは続ける。

「宿主の人間、今までと違う成長してる。とても不思議、今までの天龍と違う。ヴァーリも同じ。とても不思議」

イツセーだけでなく、俺らも訳わからない感じになってきているが、オーフィスは続

ける。

「曹操との戦い、バアルとの戦い。ドライグ、紅になった。初めて。我が知っている限り、初めてのこと」

イツセーのパワーアップも筒抜けなのか。次に曹操と戦う時が怖いな。徹底的に対策してくるぞ……。

俺がそう考えているなか、オーフィスはさらに続ける。

「だから、訊きたい。ドライグ、何になる？」

イツセーが話についていけない様子になると、ドライグが気を利かせてくれたのか左腕に籠手が出現すると、俺たちにも聞こえるように声を発した。

『わからんよ、オーフィス。こいつが何になりたいかなんてな。だが、面白い成長をしようとしているのは確かだ』

このままドライグに任せるかね。イツセーもそう思ったのか黙りこんだ。

その後も^{ドライグ}天龍と^{オーフィス}龍神の会話が進んでいったのだが、突然オーフィスがあることを言った。

「ドライグ、乳龍帝になる？ドライグ、乳を司るドラゴンになる？」

最近繊細なドライグはそれを聞き、いきなり過呼吸ぎみになる。

『うう……こいつにまでそんなことを……。うつ！意識が途切れそうだ！カウンセラーを！カウンセラーを呼んでくれ！』

イツセーは懐から薬を出して籠手の宝玉に振りかけた。

「ドライグ、落ち着け！ほら、薬だ！」

その薬の効果があつたのか少しずつドライグの呼吸が落ち着いていく。

『す、すまない。やはり効くなあ……。』

ドライグが軽く薬漬けになつてるんだが大丈夫なのか？もつと相棒を大切にしてみよ、イツセー。

そのやり取りを見ていたのに無視し、オーフィスは続ける。

「我、見ていたい。ドライグ、この所有者、もつと見たい」

オーフィスはそう言つてイツセーをじつと見る。

それを確認したアザゼルが息を吐き、イツセーの肩に手を置いた。

「てなわけだから、しばらくこいつを置いてやつてくれないか？理由があるかまではわからないが、見ているだけなら問題ないだろ？」

それを聞いてイツセーは静かに驚く。

当たり前だ。テロリストの親玉を家に置いてくれつて言われているわけだからな。

イツセーは助けを乞うように俺とリアスを見てくるが、

「イツセーがいいなら、それでいいさ」

「ええ、警戒は最大にさせてもらうけれどね」

「そういうわけだから俺たちは呑むぜ、アザゼル」

イツセーには悪いが、これでテロリストどもが瓦解する糸口を掴めるかもしれないからな。

俺とリアスの意見を聞いたイツセーは、意を決して口を開く。

「わかりました。俺もOKですよ。試験が近いからその邪魔だけはしないでくれるなら」

イツセーも許可してくれたところでアザゼルが喋り出す。

「毎度悪いな、イツセー。大切な試験前だったのに、お前に負担を増やしちまって。だがこれはチャンスなんだ。うまくいけば、各勢力を襲う脅威が緩和されるかもしれない」

出来ればそうなってほしいが、何かあるかもしれないな。

アザゼルはオーフィスたちに言う。

「俺が言えた義理じゃないが、オーフィス、黒歌、こいつらに迷惑かけるなよ」
ルフエイには言わないあたり、あの娘は大丈夫だとわかつてる感じだな。

で、肝心の言われた二人は、

「わかった」

「適当にくつろいでるにゃん♪」

適当に返事をしていた。本当に大丈夫なのか………？

すると、ルフェイがイツセーに何かを突きだした。

あれはサイン色紙か？

「この間のバアル戦！感動しました！できればサインください！」

そういえば、あの娘こイツセーのファンらしいな。京都でもあの調子だったらしい。

「へいへい」

イツセーも適当に返事をしながらも、しっかりとサインに応じる。

そういうわけで、しばらくオフィスとヴァーリチームの二人と一匹を預かることになったのだった。

まったく、面倒なことになりやがったな………。

life03 いざ、試験へ

衝撃のオフィス訪問から数日。

俺——ロイは試験勉強中のイツセーたちと別れ、兵藤宅の地下にある室内プールに来ていた。

俺の視線の先には、プールでボール遊びをしているヴァーリチームの二人と一匹がいる。まったく緊張感がない。

「ルフエイちゃん！パス！」

「はい！フェンリルちゃん！」

「……………」

ボフ……………。

しあさつての方向にボールを飛ばすフェンリル。そんなフェンリルに黒歌が吼える。

「ちよつと、フェンリルちゃん！どこ飛ばしてるにや！」

「あはは、大丈夫ですか？フェンリルちゃん」

ルフエイは苦笑しながらフェンリルを撫でていた。

そのフェンリルは……………。

「……………」
特にリアクションはしない。

見た感じ、二人はノリノリだが、フェンリルだけ乗り気ではないようだ。家から出るなど言いつけてはあるが、ルフェイはともかく黒歌がな……。あいつ、なにするかわからん。

俺は警戒を最大にして、その二人と一匹の監視を続行するのだった。

その日の夜。

自分の部屋に戻ろうと階段を上がっていると、

「
」

誰かの怒鳴り声と上機嫌そうな声が聞こえた。

俺はその二つの声の主がいると思われる階で止まり、その部屋を目指して廊下に出ると、前から黒歌が歩いてきた。

黒歌は俺を見ると笑みを浮かべ、立ち止まる。俺も対峙するように立ち止まった。

「おまえ、奥で何かしたのか？」

「別に、何もしてないにや」

ふざけたようでありながら隙がない。ヴァーリチームには変な奴が多いと聞いたが、その通りなんだろうな。

俺がじつと睨んでいると、黒歌が言う。

「どうかしたのかにや？もしかして——」

不意に黒歌が俺に近づき、耳元で言ってくる。

「私に興味でもある？」

「——ッ！」

俺はとっさに黒歌を押し飛ばし、距離を取った。黒歌は華麗にその勢いを殺してイタズラっぽく笑んだ。

ここ、こいつ、いきなり何を言い出すんだよ!?

俺は身構えながら語気を強めて黒歌に言う。

「いきなり何しやがる！」

「いやね、天龍の血つてのもありだけど、現魔王の血もありかになんてやっつてね」

こいつ、何が言いたいんだ！確か、イツセーに子供どうこうの話をしたらしいが、多分その延長線上の話なんだろうが、俺をからかっているようにしか見えん！

俺は息を吐き、冷静を装いながら黒歌に返す。

「悪いが、俺には決めたヒトがいるんな。おまえには興味なしだ」

「それじゃ、そのヒトがいなかったら？」

「どうなんだろうな？セラと出会わずに来ていたら——、」

「俺はこの場にいねえよ」

「ふーん」

真面目に返した俺に、軽く返す黒歌。こいつ、聞く気ねえだろ……………。

黒歌はペロリと舌をだし「ま、冗談にや♪」と言って、俺の横を通りすぎていく。本当に何がしたいんだよ！

俺が一人で怒りでプルプルしていると、小猫の部屋からイツセーとレイヴェルが出てくる。

「ロイ先生！大丈夫ですか？何か怒鳴り声が聞こえましたけど……………」

「ああ、大丈夫だ。年甲斐もなくキレちゃった」

「あの黒猫さんはイタズラ好きなのですね」

レイヴェルが冷静に言うのと、小猫の部屋から小猫が顔を出す。

「……………ごめんなさい。私の姉様が迷惑をかけてしまつて」

「いや、気にすんな。おまえは安静に——」

そこまで言うのと、俺はあることに気づく。心なしか、小猫の顔色がいい気がするのだ。俺は横のイツセーに訊く。

「イツセー、小猫の様子が戻っている気がするんだが」

「はい。黒歌が何かしたのか、急に治ったそうです」

イツセーも困惑気味に返してきた。

よくわからないが、治ったのならいいか。

「ま、治ったんなら問題ないだろ。とりあえず、小猫はもう少し安静にしてろ。で、イツセーたちは早めに寝ろ」

「はい」

「わかりましたわ」

とりあえず、俺の一言で解散となったのだが、黒歌の奴、何がしたいんだかまったくわからん。

とりあえずだが、イツセーの心配事が減ったんならいいか。

ついに来た試験当日。

イツセーたち参加組を転移魔法で会場まで送り、俺たち非参加組は近くのホテルに終わるまで待機することになっている。

理由は簡単、イツセーたちは有名すぎるからだ。

ただですら番組で人気だと言うのにこの間のゲーム中に告白したことによってさらに拍車がかかってしまったそうさ。

元とはいえ、婚約者だったライザー・フェニックスのところにも取材が殺到しているそうさ。ま、ヴェインセントがメディア系の幹部をしているから、やり易いつてもあるかもしれないな。

俺がそんな事を思慮していると、イツセーが誰かを探すようにキョロキョロしていた。

「どうした、イツセー？」

「いえ、ギヤスパーがいないなと思ひまして」

「ギヤスパーか。詳しくはアザゼルに聞け」

俺はアザゼルを親指で指差しながら言う。

それに気づいたアザゼルは早速説明を始める。

「はいはい、ギヤスパーは今朝早くに『一人で』グリゴリの施設に向かった」

「ひ、一人で！あいつが!？」

「ああ、バアル戦の後にな、泣きついてきたんだ」

『もう守られるばかりは嫌なんです！先輩みたいに強くなりたいんです！』

「——だとき」

アザゼルに説明させてから俺も続く。

「臆病な性格のギヤスパーが一人で行くと決めた。相当な覚悟を持って行っただら。

今頃あいつも頑張っているはずだ」

俺たちの話を聞いてどこか嬉しそうな顔をしたイツセー。そのままオフィスタち

に目を向けた。

何を言いたいのかわかなくわかった俺は、訊かれる前に言っておく。

「イツセー、安心しろ。あいつらは俺たちと一緒に行動する」

「はい、なら安心です」

イツセーの返事を聞いたアザゼルが言う。

「それと試験が終わったらオフィスを連れてサーゼクスたちのところに行く。オー

フィスはイツセーが行くなら一緒に行くと言っているからな。お前らも行くことになる」

まあ、タイミングとしてはいいかもな。そろそろ話しておいたほうがいいだろう。俺は苦笑しながら言う。

「これで終われば、一気にテロリスト全滅かもな」

「ああ、そうなったら、ヴァーリには感謝しないとな」

俺とアザゼルの会話を聞いていたのか、イツセーが訊いてくる。

「ヴァーリは何を考えてるんでしようか？」

それを言われたアザゼルは目を細めながら言う。

「隠そうとしたのかもな。脅威から」

脅威、か。オーフィスを狙うやつは多いからな。身内の英雄からも狙われることもあるだろう。

何かを考え込むイツセーに釘を刺すように言う。

「イツセー、深く考えるのは後だ。今はやることがあるだろう」

「わかつてます。試験頑張ります！」

イツセーの言葉を聞き、転移させようとした時、リアスが待ったをかけてくる。

「ロイお兄様、少し待ってください」

「ん？ああ、わかった」

一旦転移を中止したところで、リアスがイツセーに近づき頬にキスをした。するとイツセーが意を決したように言う。

「リアス！俺が試験に合格したらデートしてください！」

おお！イツセーがデートの誘いをしやがった！まったく、成長したもんだな。

それにリアスは、とても嬉しそうに笑顔で答える。

「ええ。デートしましょう。約束よ。待つてるから」

良かった。これでグレモリー家は安泰だ。

それを見ていたアザゼルが半目になりながら言う。

「前にも言ったかもしれんが二人きりの時にやれ」

「ま、いいじゃねえか、アザゼル。俺としても、見ていて安心できる」

アザゼルの言葉に俺が返すが、それが聞こえていた二人は顔を真っ赤にしているた。いい加減慣れてもらいたいな。

「そんなわけで、行つてきます！」

照れ隠しをするようにイツセーが言ったので、俺は転移を再開。

イツセーたちを無事に送れたところで、俺たちも待機場所のホテルに転移するのだつた。

イツセーたちを送り出し、俺たちは集合場所のホテルで試験終了を待っていた。

念のため、ヴァーリチームには変装をさせ、フェンリルはルフエイの影の中に入らせた。オーフィスは誰も顔を知らないためそのままの状態だ。

それにしてもそろそろ終わってもいい頃だと思うんだがな。

俺がそう思った矢先、連絡用の魔方陣が展開される。

「アザゼル！来たぞ！」

「へいへい」

「つて、また昼酒かよ！」

俺が相変わらず昼酒を飲んでいるアザゼルに物申ししていると、魔方陣から映像が投影され、イツセーの顔が映る。

映像のイツセーが困惑気味に俺たちに言ってくる。

『アザゼル先生！ロイ先生！実技なんですけど……』

俺がにやけながら答える。

「圧勝だっただろ？」

『は、はい』

「やれやれ、言つたろ？そつちの三人は上級悪魔クラスだつて。その試験に参加するのは、高くても中級悪魔の上クラスだぞ？負ける方がおかしいぜ」

『知りませんでした。俺たち、そんなに強くなつてたんですね』

「イツセー、おまえは自分が弱いとか思つてるかもしれないが、今までの相手が強すぎるだけだ。今のお前らは十分に強いよ。そのうち全員が上級悪魔クラスになるだろうな」

「ここまで言うと、映像の向こうのイツセーは不思議そうな顔をしている。」

「どうした？まだ聞きたいこともあるか？」

『あのく、アザゼル先生は？』

「また昼酒だよ。まったくいいご身分だ」

「うるせー」

「こんな感じだ、わかつたか？」

『アツハイ』

イツセーの返事に、アザゼルが軽くキレながら体を乗り出して叫ぶ。

「何が、『アツハイ』だ！イツセー！」

「アザゼル、うるせえ！耳元で叫ぶな！」

「なんだとロイ！たまにはいいじゃねえか！」

アザゼルはそこで一旦息を吐き、落ち着きを取り戻す。

「にしても、よくこれだけのメンツと巡り合ったもんだよ、お前の惚れた女は『にしても』じゃねえよ。また、確かにスゴいがな」

俺たちの言葉にイツセーが自信満々の表情で言う。

『はい、リアスは最高の女性です！』

なるほど、なるほど。いい愛情を見させてもらった。

「おい、リアス。イツセーが『リアスは最大の女性です！』だとさ」

「……………」

リアスはそれを聞いて顔を真っ赤にする。まったく慣れるよ、いい加減さ。

『ちよ!?ロイ先生！リアスもいるんですか!?!』

「ああ、いるぜ。にしても顔真っ赤にしてるぞ、リアスのやつ」

俺がイツセーとリアスを煽っていると、アザゼルが突然声を出す。

「お前らお熱いこったな！クソ！涙が出てくるぜ！俺は独り身を極めつかな、ちくしよ
う！」

調子狂うなまったく。

俺は気を取り直して続ける。

「アザゼルがさつきリアスに言っただけだ。リアス自身がそこまで強くなることもないってな」

それを聞いたイツセーも思うことがあるのか、あごに手をやって考え込んでしまうが、俺は続ける。

「リアスの持つ一番の武器は、巡り合わせの良さなのかもな。眷属の豊富さだけでいったら、もう上級悪魔の比じゃない。これは生まれもつてのものだからな、これからも続くはずだぜ？ こういうのは」

「俺的に言わせてもらえば、もはや奇跡、いや、それをとうり越してイカれてるレベルだな」

アザゼルも言うが、イカれてるレベルね、確かにその通りかもな。

「とりあえず試験は終わつたろ？ センターにある転移魔方陣でこつちに来い。とりあえず打ち上げといこう」

『はい！ 向かいます！』

そこで連絡用魔方陣が消え、投影されていたイツセーの顔も消える。

ま、あいつらのことだからしつかり受かるだろうな。後は中間テストだ。木場と朱乃はともかく、イツセーが心配だ。一段落したら勉強見てやろうかな。俺もそこまででき

ないがな。

俺はそう思いながらイツセーたちの帰りを待とうとしたのだが、
「くそ！何で俺には出会いがないんだあああああ！」

アザゼルがいつかのロスヴァイセみたいになっている

が、面倒だから無視でいこう。

life04 英雄襲来

その後、無事に到着したイツセーたちと食事をしていたんだが、イツセーがアザゼルにある話題を振った。

「アザゼル先生、一つ思ったんですけど俺の『ジャガーノート・ドライフ覇 龍』みたいなのは他にもあるんですか?」

「ああ、できる。強力なドラゴンを封じたものでやれば『ジャガーノート・ドライフ覇 龍』だが、強力な魔物を封じたものだと『ブレイクダウン・ザ・ピースト覇 獣』ってのがある。まあ、お前らの『ジャガーノート・ドライフ覇 龍』の方が強力だからな、使うやつはいないさ。力は劣るが代償が同じだ」

実際使うやつなんていないだろ、あんなヤバイもん。

俺ももし使えるって言われても、絶対に使わねえぞ……。

そこでまたイツセーに疑問が生まれたのか、アザゼルに訊く。

「アザゼル先生、サイラオグさんのレグルスは神滅具ロンギヌスですよね?」

「そうだ。あれは本来『レグルス・ネメア獅子王の戦斧』だ。今さらどうした?」

「いえ、神滅具ロンギヌスつて、発見したらすぐに報告が決められてるんですよ?でも、バアル側は報告しなかった。それって同盟違反では?」

「イツセー、所謂^{いわゆる}ところの政治^{せい}つてやつだ。あのゲームの後、大王派の連中は相当追及^おき
れている」

アザゼルが返すが、またイツセーは訊く。

『黄昏の聖槍』の『覇輝』^{トウルース・イデア}つていうのは？ やつぱり『覇龍』^{ジャガーノートドライブ}的な何かですか？

「イツセー、あの槍にはな、『聖書に記されし神の遺志』みたいなもんが封じられてるんだ」

それを聞いてイツセーはまた何かを考え込んでいるようだ。

最近脳ミソフル回転だな、イツセー。

「なんで神が神を殺せるものを作り、それを残したのか。それは誰にもわかっていない。どちらにしても聖槍があったから『神滅具』^{ロンギヌス}が定義され、今のところ十三種類あるわけだ」

「この調子じゃ、そのうち増えるだろうな」

アザゼルに続いて俺の考えも言っておく。

「だろうな。だから神^{セイクリッド・ギア}器研究は面白いんだよ」

「はいはい」

そのやりとりを終えても話は続いていったんだが、そこにアーシアも参戦し話は広がっていった。

どうやらアザゼルは、そのうちアジアに魔物を使役させたいようだ。

俺もそれには賛成だし、楽しみだ。他のメンバーの強化プランも固まってきているよ
うだし、俺も負けてられないな。ま、世代交代つてもありか……………。

俺がそう思った瞬間、全身を嫌な感覚が包み込んだ。

一瞬で転移させられたような、アグレアス・ドームで感じたものと似た感覚……………。

「アザゼル、これは……………」

「ああ、だろいな」

俺とアザゼルが確認していると、黒歌が変装をときながら呟く。

「本命が来ちゃうなんてね。ヴァーリたちはまかれたようにや」

本命？よくわからんが、ゲオルグがいるのは確かだ。そして、ゲオルグについてい
るのは、おそらく……………。

俺が思慮しながら銃剣を取り出すと同時に、俺たちを霧が包み込んでいった。

俺たちはホテルのレストランを飛び出し、周囲を警戒する。

係員を含めて誰もいない。状況が京都やアグレアスと同じ、どう考えても、敵襲だろう。

俺たちは警戒しながらホテル内を進み、ロビーに到着する。

まったく人気がないことに変わりないが、その近くに備えられた黒いソファに堂々と座る二人の男性の姿を確認した！

その瞬間、俺たちの方向に火炎玉が飛んでくる！狙いはアシアとイリナか！

俺が素早く二人の前に出て迎撃しようと構えた矢先、突如火炎が飛散する。

オフィスが俺よりも前に出て火炎を打ち消したのだ。

助けてくれた、のか……………？

「た、助かったぜ……………」

「あ、ありがとうございます」

「……………」

俺とアシアは礼を言うが、オフィスは反応しない。

俺は視線をソファに戻す。

見覚えのある学生服にローブを羽織った青年——ゲオルグと、学生服の上から漢服を着た青年——曹操もこちらを見据えている。

曹操は聖槍で肩を叩きながら、俺たちに向けて言う。

「久しいな、赤龍帝、アザゼル総督、ロイ殿。いきなりのあいさつをさせてもらった」
 「曹操……！行く先々で出てきやがって！」

俺はそう吐き捨てるなか、あることに気づく。

奴の右目の傷がなくなっているのだ。アグレアスで戦ったときは眼帯をつけていたが、代案ってやつをやったのか？

俺がその疑問を感じていると、突然、曹操が拍手をする。

「前回のバアル戦、いい試合だったじゃないか。とある事情で生では見れなかったが、
バランス・プレイヤー

禁手 同士の殴り合い。戦闘が好きならば聞いただけで達してしまいそうな戦いだ。改めて賛辞を送ろう。グレモリー眷属、若手悪魔ナンバーワンおめでとう。いい眷属だな、リアス・グレモリー」

「テロリストの幹部に褒めてもらえるなんて、光栄なのかしら？複雑なところね。ごきげんよう、曹操」

曹操の言葉に、皮肉げに笑みながら返すリアス。

「ああ、ごきげんよう。京都では一応会ったが、あれは何とも言えないからな。初めまして、と言っておこうかな。あのときは驚いたが。なかなか刺激的だった」

「言わないで！思い出しただけでも恥ずかしいのだから！」

やはり、あれはリアスからしてみれば黒歴史ってやつなんだな。実際に見ていた俺と

しても、コメントに困るからな。

「それで、またこんなフィールドを作つてまで俺たちを転移させた理由は？ろくでもないことは確かだと思うが……」

俺が訊くと、曹操は視線をオーフィスに向ける。

「やあ、オーフィス。ヴァーリとどこかに出かけたと思つたら、こつちにいるとは。少々虚を突かれたよ」

それを聞いてオーフィスの前に黒歌が立つ。

「にやはは、それはこつちもにや。ヴァーリのほうに向かったと思つただけどね」

「あちらには別部隊を送つた。今頃、そちらの相手をしているんじゃないかな」

するとルフエイが笑顔で挙手すると、一度咳払いをすると説明をし始める。

それと同時にフェンリルも影から出て来て曹操たちを睨む。

「えーとですね。事の発端は二つありました。一つ目はオーフィス様が赤龍帝さんに大変ご興味をお持ちだったこと。それを知つたヴァーリ様が独自のルートで出会いの場を提供されたのです」

それは前に聞いた。おかげでこんな面倒なことになつている気がするんだがな。

ルフエイは続ける。

「二つ目は、オーフィス様を陰で付け狙つている方がいるという情報があつたので、いぶ

りだすことにしたのです。運が良ければ、オーフィス様を囿役にして私たちのチームの障害となる方々とも対決できる。つまりですね」

ルフェイは曹操たちに指を突きつける。

「そちらの方々がオーフィス様と私たちを狙っているので、一気にお片付けしようとしたのです。オーフィス様に危険がないように、ヴァーリ様のほうに美猴様が変化した偽物のオーフィス様を連れて、本物は赤龍帝さんのお家にお連れしたのです」

やはり、曹操たちはオーフィスを狙っているようだ。それにしても、その曹操が本物の方に来てしまっているが、どうするつもりだ？

俺が考えを巡らせている間に曹操が口を開く。

「ヴァーリのことだ、オーフィスをむやみやたらと連れ回すわけもないと踏んでいた。そこでオーフィスが赤龍帝と白龍皇に興味を抱いていることを知っていたから、もしやと思つて二手に別れて俺はこっちに来てみたらこれだ。それで、このような形でご対面を果たしたわけだ」

それを聞いて、横のイツセーはわかつてない感じだった。ざっくり言うとならヴァーリの予想が外れたつてことだな。

オーフィスが口を開く。

「曹操、我を狙う？」

首をかしげて訊くオーフィス。

「ああ、オーフィス。俺たちにはオーフィスが必要だが、今のあなたは必要ではないと判断した」

「わからない。けど、我、曹操には負けない」

「その通りだ。でもちよつとやってみるか」

曹操がそう言うと言うと槍の先端が開き光の刃が現れる。相変わらず、寒気がする神々しさ、俺たち悪魔にとって必殺の光か……………。

俺が頬に冷や汗を流した瞬間、曹操が消える！

それを確認した俺は反射的にオーフィスの元に飛び出し、

ガキイイイインツ！

曹操の一撃を銃剣で挟むようにして受け止めた！

激しい金属音と火花が散るなか、曹操が言ってくる。

「やはり、あなたがいるとやりたいことができなくなりますね。オーフィスならこの槍を受けたところで問題はないと思いますよ？」

「確かに、そうだろうな。どんな攻撃も、無限を削りきることはできねえ」

俺はチラリとオーフィスを目をやり、曹操に面と向かって言う。

「だが、こんな女の子の姿をした奴が目の前で刺されるつてのは、見たくないんでな！」

俺は一気に曹操を押し切り、追撃として剣撃を放つが、曹操は後ろに飛び退いて避ける。

俺は銃口を曹操に向け、一気に引き金を引くが、放たれた滅びの弾丸は槍であつさり弾かれた。

一発くらわずには、根本的に速度が足りてねえか。

俺はそう思いながら息を吐くと、視界の端に魔方陣の輝きが映る。そちらに目を向けてみると、黒歌がにんまり笑いながら言った。

「にやはは、余興をしてくれている間に繋がったにや。——いくよ、ルフエイ。そろそろあいつを呼んでやらにやーダメっしょ♪」

展開された魔方陣の中央にフェンリルが立つと、魔方陣の輝きがいつそう強くなっていき、弾ける！

光が止むと、そこにはフェンリルではなく、ダークカラーが強い銀髪の青年——ヴァーリが立っていた！

フェンリルとヴァーリの入れ替え転移をやったようだ。この短時間でやるとは、器用なやつらだな。

「ご苦労だった、二人とも。面と向かって会うのは久しぶりだな、曹操」

「ヴァーリか、これはまた驚きだ」

ルフェイが杖で円を描きながら言う。

「フェンリルちゃんを入れ替わりによる転移法でヴァーリ様をこちらに呼びました」

ヴァーリの突然の登場に驚いていたイツセーが、それを聞いて頷く。

それを無視して、ヴァーリがルフェイに続いて口を開く。

「フェンリルには向こうのメンバーと英雄派と戦ってもらっている。念のため保険をつけておいて正解だったな。それにしても、曹操とゲオルグの二人だけか」

それを聞いて曹操は不敵に笑った。

「いや、二人で十分と思っただけだよ」

「強気なものだな。例の『龍喰者』^{ドラゴン・イーター}がいるからか？英雄派が作り出したのか、それとも

見つけでもした龍殺し^{ドラゴンスレイヤー}に特化した神器^{センクリッド・ギア}か何かだろう？」

ヴァーリと俺、アザゼルの意見が一致しているようだ。

だが、曹操は首を横に振る。

「それは違うさ、ヴァーリ。『龍喰者』^{ドラゴン・イーター}はある存在に付けたコードネームみたいなもの

さ。すでに作られていた。あれに」

ゲオルグがそれを聞いて曹操に訊く。

「曹操、いいのか？」

「ああ、傾合いだ。無限の龍神に二天龍がいる。これ以上ない組み合わせだ」

「了解だ」

すると、口の端を吊り上げたゲオルグがロビー全体に巨大な魔方陣を出現させた。
ズオオオオオオ………。

ホテル全体に激しい揺れが襲う。そしてドス黒く禍々しいオーラが魔方陣から発生していく。

イヤなプレッシャーを感じるな。何が来やがるんだよ！

俺が警戒心を最大にしてしていると、魔方陣から何かが少しずつ何が出てくる。

頭部、胴体、黒い羽に十字架。いや正確には十字架に磔磔になっている何か。

体を強烈に締め付けられていそうな拘束具、それにも何か文字が浮かんでいる。目にも拘束具がつけられ、隙間から血涙が流れている。

そして下半身も出てきたが、そこには鱗があった。京都で会った玉龍ウーロンのように長細い姿。

上半身は墮天使、下半身はドラゴン。全身には異常に太い釘が無数に打ち込まれていた。

拘束具をつけられた磔の墮天使ドラゴン。とかイツセーは思っているのだろうか、

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ………』

磔の墮天使ドラゴンの口から不気味な声が発せられ、ロビーに響き渡る。様々な負の

感情を感じる声音だ。聞いているだけでも嫌な気分になる。

すると曹操が詩を詠むように口を開く。

「曰く『神の毒』。曰く『神の悪意』。エデンにいた者に知恵の実を食わせた禁忌の存在。今は亡き聖書の神の呪いがまだ渦巻く原初の罪。『サマエル』。蛇とドラゴンを嫌った神の呪いを一身に受けた天使であり、ドラゴンだ。存在を抹消されたドラゴン」

『!?!』

サマエル……だと?!なんでこいつが!?

俺と同じ事を思ったのか、イツセー以外の全員が驚愕の表情になった。

「アザゼル、サマエルってことはこいつが………」

「ああ、ロイ。その通りだ」

「なんなんですか、あれ………」

俺とアザゼルが確認していると、イツセーが訊いてきた。

それにアザゼルが答える。

「アダムとイブは知っているな? その二人に知恵の実を食わせたのがあれだ。そのせいで聖書の神は極度のドラゴン嫌いになった。その神の悪意、毒、呪いをすべて受けた存在。神の負の感情は本来あり得ないことだ。ゆえにそれだけでも猛毒。ドラゴン以外にも影響が出る上にドラゴンが絶滅してもおかしくないことから、コキュートスのさら

に深くに封じられたはずのもの。あいつにかけられた神の呪いは究極の龍殺し。それだけにこいつの存在自体が凶悪な龍殺ドラゴンスレイヤーしなんだよ！」

「ハーデスはなにを考えてやがる！まさか……………」

アザゼルと俺は同時に一番最悪の結果を想像した。

冥府の神がテロリストに手を貸す。あの骸骨神のことだ。やりかねねえ！

俺とアザゼルを見て、曹操が笑った。

「そう、ハーデス殿と交渉した結果、何重もの制限を設けた上で召喚を許可してもらったのさ」

「…………野郎！ふざけやがって…………ツ！」

「ゼウスが協力態勢に入ったのが、そんなに気にくわなかったかよ！」

俺たちが吐き捨てる中、曹操が再び口を開く。

「というわけで、彼はドラゴンを確実に殺せる。龍殺ドラゴンスレイヤーしの聖剣なんて、比べるに値しないほどだ」

「それを使ってどうするつもりだ!?まさかオフィスを……………」

アザゼルの問いに曹操は口の端を吊り上げ指を鳴らす。

「喰らえ…………」

曹操の声を合図に、俺たちの横を何かを通りすぎた。

サマエルが舌を延ばしたのだ。狙いは俺たちは後方にいたオーフィス。確認しようと振り返った瞬間、俺たちは絶句した。

サマエルの舌が、オーフィスを完全に包み込んでいたのだ……。

l i f e 0 5 脅威の聖槍

「喰らえ……」

曹操の声を合図に、俺たちの横を何かが通りすぎた。

サマエルが舌を延ばしたのだ。狙いは俺たちは後方にいたオーフィス。

確認しようと振り返った瞬間、俺たちは絶句した。

サマエルの舌が、オーフィスを完全に包み込んでいたのだ……。

突然すぎて反応しきれなかったが、明らかにいいことにはならないよな！

「おい、オーフィス！返事しろ！」

それを察したイツセーが叫ぶが、オーフィスの反応がない。聞こえていないのか、返

す余裕がないのか。できれば前者であつて欲しいが……。

俺は滅びの直刀でオーフィスを包み込む塊に斬りかかる！

——が、逆に塊に触れた直刀が消失し、刀身が半分以上なくなった直刀だけが手元

に残った。

「何がどうなつてやがる！手応えがなかったぞ?！」

俺が吐き捨てる、木場が塊ではなく、サマエルから伸びる舌に斬りかかるが、結果

は同じだった。

攻撃そのものを消し去っていやがるのか？

俺たちが対応に困っていると、

『Half Dimension!』

ヴァーリが背中中の光翼——『白龍皇の光翼』を出現させると、音声と共にヴァーリ

の周囲が歪んでいき、あらゆるものが半分になっていく。

イツセーたちから聞いた『物を半分にする』能力だろう。木とかに使えば長さが半分になるって能力らしいのだが、サマエルの舌にも黒い塊にも効果が見られない。

「これならどうだ？」

ヴァーリは効果無しと見ると魔力攻撃に切り替えて攻撃していくが、こちらも効いてない。

これは固いかじやなくて、攻撃自体が通っていない感じだな。

ゴクンゴクン……………。

不気味な音を立てながら塊に繋がる舌が盛り上がり、サマエルの口元に運ばれていく。見た感じ、オーフィスから何かを吸いだしているのか？曹操も「喰らえ」なんて言っていたしな。

それを見たイツセーは鎧を纏い、塊に殴りかかろうとする！

「イツセー、よせー！言っただろうが！こいつは最凶の龍殺ドラゴンスレイヤーしだ！おまえが触ったらどうなるか、おまえでもわかるだろ!？」

俺の制止の声にイツセーが叫ぶ。

「そんなこと言ったって、オーフィスを助けないと大変なことになるんでしよう!？」

イツセーの横からゼノヴィアが飛び出し、デュランダルのオーラをサマエルに向けて放つ！が、それを予期していたように、曹操が余裕で振り払った。

「開幕からいい攻撃をしてくれるが、二度はいかないさ」

チツチツと指を横に振る曹操。

まあ、初見殺しは一度までだよな。タイミングは悪くなかったが…………。

ヴァーリも白い閃光と共に鎧を纏う。

「相手はサマエルか。その上、上位神滅具ロンギヌス所有者が二人。不足はない」

ヴァーリの一言に黒歌とルフェイも戦闘の構えをとる。

俺たちもそれに倣うように戦闘態勢を整え、アザゼルもファープニルの黄金の鎧を身に纏った。

舌にも塊にも攻撃ができねえなら、本体をやるしかねえ！オーフィスを奪われるのは危険すぎる！

「レイヴェルは下がってくれ。大事な客分だ、死なせるわけにはいかない」

俺の頼みにレイヴェルは頷き、後方に下がってくれた。ここで死なせたら、俺もヴィンセントに会わせる顔がねえ。

その後、改めて俺たちが戦闘態勢を取ったのを見て、曹操は笑っていた。

「このメンバーだと本気でいかなければ危ないな。ハーデスからは一度しかサマエルの許可は貰っていないんだ。ここで決めれないと、計画が頓挫する。ゲオルグ！サマエルの制御を頼む。俺がこいつらの相手をする」

ゲオルグはサマエルの制御をしながら言う。

「一人でやれるのか？」

「やってみるよ。できなければこの槍を持つ資格なんてないにも等しい」

そう言った瞬間、曹操の聖槍が光を放つ。

バランス・ブレイク
「禁手化」

曹操が眩いた瞬間、神々しく輝く輪後光が曹操の背後に現れ、曹操を囲むようにボウリングの球ほどの大きさの七つの球体が空中に出現した。

静かな禁手化^{バランス・ブレイク}だった。イツセーとかヴァーリのはオーラが弾けて鎧を纏うのに対し、こいつのは静か^{バランス・ブレイク}でいて、槍も大きく変化しないシンプルなものだ。

曹操が一步前に出ると球体も合わせて動く。

「これが俺の『黄昏の聖槍』^{トウル・ロングヌス}の禁手^{バランス・ブレイカー}、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』^{ポーラナイト・ロンギヌス・チャクラヴァルティン}だ。と言つても

未完成だけどね」

それを聞いてアザゼルが叫ぶ。

「亜種か！その聖槍バランス・ブレイカーの禁手は『真冥白夜の聖槍トウル！ロンギヌス・ゲッターデメルンゲ』だったはずだ！くれったれが！あの七つの球体は俺にもわからん！」

なんだと！？あいつも亜種なのか！？面倒だな、これは……………！
するとヴァーリが口を開く。

「気をつけろ。あの禁手バランス・ブレイカーは『七宝』と呼ばれる力を有していて、一つ一つに別の能力が付加されている」

それを聞いてイツセーが困惑気味に応える。

「七つ！？二つとか三つじゃなくてか！？」

「ああ、七つだ。と言っても俺も三つしか知らないがな。一応言っておくか、『攻撃力重視』と『浮遊能力』、それと『分身を作る』ものだ」

「とりあえず、それがわかれば何とかやれなくはないか。他の四つは、わかってからじゃなきや何とも言えないがな」

ヴァーリの情報に感謝しながら俺が返す。

何もわからないじゃ、余計にキツかっただろうからな。

すると曹操が手を前に突き出した。一つの球体が反応し曹操の手の前に移動する。

「七宝が一つ。チャッカラタナ 輪 宝」

曹操が呟いたとき、球体が消えた！いや、これは……………！

「ゼノヴィア！避ける！」

「——ッ!?!」

俺の叫びにゼノヴィアは驚愕しながらも回避しようとする、

ガシャンッ！

凄まじい破壊音がロビーに響き渡る。ゼノヴィアのエクス・デランダルが破壊されたのだ！

あの球体、一撃でエクス・デランダルを破壊しやがった!?!そして、

「いぶっ」

同時にゼノヴィアの腹を貫きやがった！ゼノヴィアが大量の血を流しながら崩れ落ちる。

くそ！あの速度で来るとなると、どうにもならねえな！

曹操が球体を手元に戻しながら言う。

「まずは一つ。その持つ能力は武器破壊。これに逆らえるのは相当の手練れのみだ。ついでに腹を貫いておいた。今のが見えないようだと、俺には勝てないな」

俺たちはその言葉を聞き、散開した。

「アーシア！ゼノヴィアの回復を！速く！」

リアスの指示を聞いたアーシアはハツとして、ゼノヴィアに駆け寄った。

その瞬間、イツセーと木場が曹操に飛びかかっていく！

くそ！仲間やられたからって焦りすぎだよまったく！

二人の攻撃を軽々とさばいた曹操は再び球体を手元に寄せた。

「女イツテイラタナ宝」

その球体はリアスと朱乃、そして俺のほうに向かってくる。俺は二人のカバーに入るために前に出て球体に攻撃しようとした瞬間、

「弾けるー！」

曹操の言葉に反応した球体は輝きを発し、俺たち三人を包み込む。

「くっー！」

「こんなものでー！」

「しゃらくせえー！」

俺たちは攻撃を放つが、俺はすぐに違和感を覚えた。俺しか攻撃してないのだ。

その攻撃も球体に避けられているわけだが、リアスと朱乃は何で攻撃しなかったんだ

？

俺が疑問と共に振り向くと、二人とも自分の手を怪訝に見ているだけだ。二人は手を

突き出すが何も出ない。まさか……………!

「その能力は女性が持つ異能を一定時間封じる。これも相当の手練れでなければ逆らえない。これで三人」

それを聞いて俺たちは驚いた!何だその能力は!冗談キツイぞ!?てか何で女性だけなんだ?じゃねえ!今、アジアにそれをされたら完全にアウトじゃねえか!

曹操が突然高笑いをする。あの表情は、完全に戦いを楽しんでいるものだ。

「この限られた空間でサマエルとゲオルグを防衛しつつキミたち全員を倒す!最高難度のミッションだ!だが——」

曹操の言葉を遮るように黒歌とルフェイが手にオーラを集めていき、ゲオルグとサマエルのほうを狙う。

だが、そこにも曹操の球体が向かう。

「ちよこざいにゃん!」

黒歌が空いている手で球体を迎撃しようとしているが、
「馬^{アツサラタネ}宝、それは相手を任意の場所に転移させるものだ」

曹操の言葉と共に二人は転移させられてしまい、攻撃の矛先をゼノヴィアとアジアのほうにずらされてしまった!今まさに放とうとしていた攻撃を、突然止めることなどできず、そのまま発射されてしまう!

「ふざけんな！ 『龍星の騎士』！」

ウエルシュ・ソニックフーリスト・ナイト

イツセーがモードチェンジをしながら高速で飛び出し、どうにか間に入れたが、ドドドドドドドドオオオオオン！

爆発がイツセーを包み込んだ！

『戦車』へのモードチェンジが間に合わなかったな。防御が低いまままでくだったのか………。

二人の攻撃をもらにくらったイツセーは、血を吐いて倒れこむ。

曹操はそのイツセーを嘲笑するように見ていた。

「キミの弱点はわかりきっている。駒の変更にタイムラグがあることだ。そこをつけば、数手でキミを詰められるよ」

それを聞いたイツセーは、悔しそうに曹操を睨むことしかできない。ダメージが大きすぎる………！

アーシアが回復しようとしているが、

「アーシア、回復は後でいい！ゼノヴィアを頼む」

「イツセーさん！しかし！」

そう言ってアーシアを止める。その瞬間、

「ヴァーリ！合わせろ！」

「俺は単独でやりたいんだがな……」

アザゼルが光の槍を構え、ヴァーリは魔力を拳に込め、曹操に打ち込んでいく！

「墮天使総督と白龍皇そして競演！これを御せれば俺はもつと高みを目指せるな！」

曹操はそれを嬉々として受け入れ全ての攻撃を避けていく。

こいつホントに人間なのか!? 軽く超上の存在を越えてるじゃねえかよ！

「鎧装着型の禁 バランス・ブレイカー 手の弱点は、オーラが迸りすぎることだ！そのオーラを注視すれば、

どこから攻撃が来るか把握できる！」

二人の攻撃を避けながら解説をしてくる。俺もできるが、あんな二人同時は無理だぞ

!? それを喋りながらとか、あいつ、ずいぶん余裕じゃねえか!

イェウイル・アイ「邪 視を ご 存じかな? 眼に宿る力のことだ! 俺は失った眼にそれを移植してね!」

そう言うのと曹操が視線を下に向けた。その瞬間、アザゼルの足元が石化していく。

「メデューサの眼か!」

見たものを石に変える能力を持ったモンスターの眼! 代案つてのはあれのことか!
また面倒なもんを移植しやがったな!

ドズン!

鈍い音と共に鎧を貫通した聖槍が、アザゼルの腹部に突き刺さった。

「ぐはっ!……なんだ、こいつの強さは!」

アザゼルは血を吐きながら崩れ落ちた。

「あなたの弱点はその人工セイクリッド・ギア神器にあなたの力を反映しきれていないことです」

「アザゼル！おのれ！曹操オオオオオオオッ！」

ヴァーリが怒りながら極大の魔力の塊を撃ちだした！

そこに再び球体が飛来してくる。

「マニラタナ珠寶、これの能力は攻撃を受け流すこと。どんなに強力な攻撃でも、受け流す術ならある」

曹操がそう言うと、ヴァーリの魔力弾が球体の前方に発生した渦に吸い込まれた。

すると今度は小猫の前方に渦が発生した！

曹操の言う通りならつまり……………ッ！

俺が反応し小猫の元に向かっていく！その間に渦からヴァーリの魔力弾が放たれてしまう！

「バカ、なんで避けないの！白音！」

黒歌が小猫の前に立ち盾になるが、

「やらせるかよー！」

その黒歌の前に俺が立ち、銃剣で魔力弾を叩き斬る！

ま、間に合ったか……………。俺はホッと息を吐くが、右手の銃剣を落としてしまう。

「ね、姉様？」

「あ、危なかったにや。つて、大丈夫!？」

「だ、大丈夫だ……………」

だらりと下がる右腕。まったく感覚がない。繋がっているだけまだマシか……………。さすが、ヴァーリの一撃だ。重すぎる……………。

なんで黒歌を助けようとしたのかは疑問だらけだが、今は……………!

「予定外だったが、これでロイ殿も詰み……………」

曹操が冷静に告げてくる。

「俺の攻撃で仲間をやろうとしてくれたな……………ッ!」

ヴァーリは更に怒りでオーラが高まっていく! 切っ掛けはアザゼルと黒歌つてところか。俺は完全にやられたがな。

「キミは仲間想いすぎる。そこにいる赤龍帝のようだ。二天龍もずいぶんヤワくなったものだ」

「では、これならどうだ! 我、目覚めるは——」

ヴァーリの奴、『ジャガーノート・ドライブ覇龍』を使うのか!?

それを察知した曹操が叫ぶ!

「ゲオルグ! 今だ!」

「わかってている！ サマエルよー！」

ゲオルグが魔方陣を展開させるとサマエルの右手の拘束具が外れ、自由になる！

『オオオオオオオオオオ』

その叫びと共にサマエルの右手がヴァーリに向けられる！

その瞬間ヴァーリを何かが包み込んだ！ まるでオーフィスを包み込んだ塊みたいだ。

『オオオオオオオオオオ』

再びサマエルが叫ぶと黒い塊が弾け飛んだ！

「ゴハッ！」

その中からボロボロになったヴァーリが出てくる。そのままヴァーリは倒れこみ、立ち上がれなくなってしまう。

あの白龍皇をあつさりと……。サマエルをどうにかしないとどうにもならねえが、それを曹操がさせてくれねえだろうな。

俺が考えを巡らせていると曹操は息を吐いた。

「どうだ、ヴァーリ？ 神の毒の味は？ ここで『ジャガーノート・ドライブ 覇 龍』を使わせるわけにはいかない

のでね、これでカンベンしてくれ。俺は弱つちい人間だから、弱点攻撃しかできないんだ」

「……………曹操！」

憎々しげに曹操を睨むヴァーリ。

「オーフィスもサマエルには何もできない。サマエルはオーフィスにも効く。俺たちの読みは当たっていたということだ」

曹操は槍を肩でとんとんとやりながら言ってくる。

今もオーフィスを包む黒い塊。まだ何かを吸いだしている様子だ。

「これであと何人だ？ 木場祐斗、塔城小猫、ミカエルの天使、そしてルフエイと黒歌と言ったところか……」

俺以外はどうすればいいかわかっていない感じだが、片手じゃどうにもならねえ………！

すると、アーシアが俺の元に駆け寄って来ようとするが、曹操がそれを見逃さずに球体を放とうとする！

その瞬間、木場が飛び出して曹操に斬り込んでいく！

聖槍で聖魔剣を受け止める曹操。

「あなたは強すぎる！しかし、一太刀入れたいのが剣士としての心情だ！」

「いい剣だ。将来ジークフリートにも届くだろう。相性だけで言えば、ロイ殿とキミが無難に俺と戦えるだろう。だが、成長途中の今のキミでは俺には勝てないさ」

曹操が言うとう聖槍を風呂払い、それを木場が避ける。木場ら聖魔剣を聖剣に変え、騎

士団を出現させた。

「新しい禁バランス・ブレイカー 手か！ぜひ見せてくれ！いいデータになる！」

曹操はそれを球体を縦横無尽に動かして迎え撃つ。まるで兄さんの滅びの球体みたいだ！

全ての騎士を破壊した曹操は嘆息する。

「——これ以上やる意味はないな。その禁バランス・ブレイカー 手は弱点が多すぎる。だがいい技だ。高めるといい」

それを聞いた木場は怒りの形相になっていた。

今の言葉は仲間を守るために戦う奴にこれ以上ない屈辱になっただろう。だが、治つた……。

「助かった、アーシア」

「は、はい！」

俺の殺気のコもった声に、アーシアは少し怯えながら頷く。

俺は落とした銃剣を拾い、すぐさま二刀流モードに変更、左の剣を逆手持ちに持ち替えながら曹操を睨みつける。

それを受けた曹操は再び笑む。

「やはり、あなたとも戦っておかなければなりませんね」

「ああ。おまえらは、ここで殺す……………！」

京都ぶりの感覚。ああ、ここまで仲間をやられて、こけにもされたんだ、キレねえわけがねえだろ……………！

l i f e 0 6 切り裂き魔VS聖槍 再び

俺——ロイは二刀流の構えを取り、曹操は笑みながら槍を構え直す。

俺はゆつくりと息を吐き、そして、

「……………ッ！」

一気に飛び出して曹操に肉薄する！

勢いのまま右の剣で突きを放ち、曹操がそれを横に弾いて石突きで俺を殴りかかってくる！

俺はそれをスウエーして避け、足払いをかける。曹操は大きく跳躍してそれを避ける

と、

「象宝」
ハツテイラタナ

そう言いながら足元に球体を移動させた。球体は曹操を乗せると、そのまま空中を動き回る。

あれが浮遊能力の球体か、あとは分身と威力のみ！

俺は翼を展開して曹操に再び接近し、大量の火花を散らしながらの攻防を繰り広げて

いく！

少しでも体勢を崩せれば球体から落下してそれで終わりだが、曹操とあいつが操る球体がそれを許してくれない！

俺が大振りに二剣を振った瞬間、曹操が視界から消えた!?

俺はとっさに気配とオーラを探り、素早くその場を飛び退く。

その瞬間、聖なるオーラが俺のいた場所を通り過ぎていった。

あ、あぶねえ。直撃したら消し飛んでいた。つて、前もこんな感じだったな。

俺は視界に曹操を捉え、曹操は聖槍で肩を叩いていた。

曹操の横には球体が浮いており、おそらくだが、あれで自分を転移させたのだろう。

まったくの予備動作なしでくるおかげで対応がしにくい。もっと球体にも注意し

ねえと……………。

俺は息を吐き、二刀を握り直す。

球体と聖槍、どちらにも注意しつつ、接近して一撃を入れる。難しいが、やるしかねえ

！

俺は一気に加速、曹操に接近しようとするが、奴は再び消える！

俺は瞬間的に先程の球体のオーラを察知し、方向転換、転移先に先回りするように突

貫する！

曹操の転移完了と同時に斬りかかり、それを受け止めた曹操とつばぜり合いになる！

「早速合わせてくるとは、流石ですね！」

「さっさと終わらせて、オーフィスを助けなさいといけねえからな！」

曹操を一気に押し切り、蹴りを放つ！

曹操はその蹴りを槍の柄で防ぐが、蹴られた勢いで浮かせる球体から離れ、落下していく。

俺は急降下しながら曹操に突きを放つが、再び転移で避けられた。

ム力つくが、腕は確かだ。もう少し速度を上げねえと捉えきれない……………！

再び球体の上に戻った曹操は、また球体を手元に寄せて俺の接近に備える。

俺は高度を曹操に合わせ、少し離れた位置を取る。他の球体は木場やルフエイたちを警戒するように浮かんでいた。

俺が一気に飛び出そうと構えると、曹操の手元の球体が俺に向かってくる。そして、一気に弾けた！

弾けた球体は、人の形をした何かを複数生み出した。これが分身を生み出すとかいう

やつか！

ガハハハ
「居士宝」

曹操がそう呟く。名前はでもいいが、曹操の姿が見えねえ。

俺は二刀の柄頭を合わせて両剣モードに切り替え、ブーメランのように投げつける。

高速回転して飛んでいく両剣は分身をまとめて切り刻み、そのまま奥にいた曹操を――

「隙だらけですよっ！」

「――ッ！」

いつの間にか俺の背後を取っていた曹操。俺は目を見開きながら振り向く。

まるでスローモーションのように曹操の放った突きが迫ってくる。

俺が半身をとりながらスウエーに移行する。その瞬間、鼻の先を高速で聖槍が通り過ぎていった！

「チッ！」

俺は舌打ちをしながら滅びを込めた回し蹴りを放ち、曹操を牽制。転移で避けた曹操は槍で肩を叩く。

今の一撃、死ぬかと思っただぞ……………。

頬を流れる脂汗を拭い、俺は曹操を睨む。

あとは威力重視だが、どれがどれなのかわからん。

俺は無駄な思考を切り上げ、戻ってきた両刃剣をキャッチ、二刀モードに戻すと再び曹操に接近していく。

曹操は何かをするわけでもなく、今度は正面から受けようと構える。

——が、そんな馬鹿正直に正面からいくわけねえだろうが。

俺は途中で加速と減速、カーブを織り交せて隙をうかがう。

曹操は俺の動きを目で追ってきているが、俺は手元から魔力弾を一発放つ。

高速で曹操に向かうそれを受け流そうと球体が動き出し、魔力弾が渦に飲み込まれようとした瞬間、

「弾けるッ！」

俺が叫び、魔力弾は激しい閃光を放ちながら弾けた！

事前に仕込んでいた俺は目を閉じて問題なかったが、他の連中が大変なことになっていそうだな。だが、

俺は一気に曹操に接近。目が眩んでいる曹操に斬りかかる！

取った……………！

俺は直感的にそう思った矢先、曹操が聖槍から聖なるオーラを放って全方位に攻撃をしてきた！

俺は小さく舌打ちをしながらも全身に魔力を流してダメージを軽減できるようにすると、減速なしで曹操に突っ込む！

聖なるオーラで身を焼きながらも俺が二刀を振ると、曹操がそれを受け止めた！同時に聖なるオーラがと閃光が止む。

つばぜり合いながら俺と曹操は睨みあう。

「瞬間的に魔力が上がれば、場所は探れますよ」

「本当に面倒だな……………」

俺は押し切るように力を込めようとすると、曹操が転移で逃げる。

球体の場所を探り、再びそこに向かうおうとすると、別の球体が槍のように変ながら俺に急接近してきた！

俺はその球体を二刀で受け止め、弾き返すと、そこに聖なるオーラが飛ばされてくる。

俺はそれを避け、一気に曹操に接近。今度はつばぜり合いではなく、至近距離での戦闘となった！

曹操の突きや風ぎを捌きつつ、俺も剣撃を放って攻撃していくが、まったく当たる気配がない。

攻撃を展開しながら曹操が言う。

「先程のは武器破壊のものでしたが、やはりあなたほどになるとダメでしたか……………」
「知るかッ！」

俺は大きく二刀を振って曹操を牽制し、一旦距離をとる。まあ、あの球体がある限り、間合いはすぐに詰められるんだがな。

やはり、隙を見てサマエルをやらねえとダメか……………。

俺がそう思慮しながらチラリとサマエルに目を向ける。相変わらず、オーフィスから何かを吸い出しているようだ。

俺は深く息を吐き、曹操に目をやる。向こうも汗を流しているが、余裕そうに笑みを浮かべていた。

リアスたちにサマエルを叩いてもらいたいが、それが受け流されて俺に飛んで来るとも面倒だ。だからって、俺一人ではどうにかできるかは微妙だな。

俺は息を整え、再び曹操に突撃する！再びフェイントを織り交せて接近し、背後から斬りかかる！

曹操はそれを読んでいたように聖槍で防ごうとするが、俺はそこで再び高速で動きだし、曹操の正面をとった！

驚愕しながら一瞬だけ固まった曹操に全力の突きを放ち、心臓を貫きに行く！だが、曹操が素早く戻した聖槍の柄で防がれ、曹操が弾き飛ばされたただけだ。

俺は急降下し、転移される前に曹操に斬りかかった！曹操は舌打ちをしながら俺の攻撃を受けとめ、そのまま弾き飛ばす。

弾かれた俺は体勢を整え、球体を使ってゆつくりとボールの床に降り立った曹操を睨み、再び突撃。落下と加速の勢いを乗せて、二刀を大上段から振り下ろす！

曹操が聖槍でそれを防いだ瞬間、激しい金属音と共に曹操が片ひざをついたが、俺の

劍に小さなヒビが入った！

今まで無理させっぱなしだからな、そろそろ限界か！

俺は舌打ちをしながら一気に決めにいこうとすると、曹操は聖なるオーラを放ち、俺を牽制する。

至近距離で不意打ちでくらってしまえば、今の俺では耐えきれない！

俺は素早くその場を飛び退き、床に足をつける。やはり、足がついているほうが落ち着くな。

俺と曹操は肩で息をしながら睨みあい、次の一手を考える。

だが、どうすればこいつを倒せるかわからん！球体がどれかわかればもつと楽になるが、どれも感じるオーラは同じで見当も付かない。

俺は深く息を吐き、二刀を握り直す。すると、曹操は風ぎ払いを放てるように構えた。

あそこまで露骨に構えるとなると、あつちは決めにくるということだ。そして、あれが本当に風ぎ払いを放つかは別問題。

俺が曹操の動きに警戒していると、いきなり曹操が目の前に移動してきた！いや、違う、これは……………！

「俺を転移させたのかッ?!」

「ゴ名答ッ！」

曹操はそう言いながら風ぎ払ってくる！

俺は二刀でそれを受け止めた瞬間、剣が砕け散ると同時に想像を絶する衝撃に襲われ、一瞬意識が飛びかけて視界が歪む……………。

俺がそれを自覚した瞬間、床を深く抉るほどの衝撃と共に吹き飛ばされ、ホールの壁に背中から激突する！

「かはッ！」

肺の空気を吐き出しながら、意識を無理やり覚醒させられ、俺はホールの床に倒れこむ。

りよ、両腕の感覚がねえ……………。繋がってはいるが、しばらく動かせねえぞ……………。

「将軍宝」
バリナーヤカラタナ

勝利を確信した曹操がそう漏らすと、聖槍にへばりつくようにくっついていた球体が剥がれる。あれが、威力重視ってやつなのか……………。

曹操は倒れる俺を一瞥すると、ゲオルグに訊く。

「どれだけ取れた？」

「…………四分の三強ほどだろうな。これ以上はサマエルを繋ぎ止められないな」

ゲオルグの後方では、サマエルを呼び出した魔方陣の輝きが失われつつあった。時間制限付きだったってことか……………。

ゲオルグの報告に曹操は頷く。

「上出来だ。十分だよ」

曹操が指を鳴らす。するとオーフィスを包んでいた塊が消えた。その瞬間にサマエルは魔方陣に沈んでいく。

『オオオオオオオオオ……』

苦悶の声を発しながら、サマエルは魔方陣に消えていく。

塊から解放されたオーフィスはパツと見ただけで変化はないが、何をされた……………？

するとオーフィスが曹操を見る。

「力、奪われた。これが目的？」

それを聞いて驚く俺たち。曹操は愉快そうに笑い、頷いた。

「そうだ。オーフィス。あなたが俺たちの思い通りに動いてはくれないだろう。だから俺たちはあることを思いついた」

曹操は槍の切っ先を天に向けた。

「新しい『ウロボロス』を創り出す」

血を吐きながらアザゼルが言う。

「……………そうか！サマエルを使ったのはそのため！オーフィスの力を削るためか！」

「その通りですよ、総督。我々は都合のいいウロボロスが欲しかった。正直グレートレッドなんてどうでも良くなってね。そこで俺たちは『無限を倒せるのか』という英雄派の超常の存在に挑む理念も試すことができた」

「こんな形で無限を消し去るとはな……」

「いえ、ロイ殿。消し去るとはまた違う。やはり、力を集めるにはオーフィスのような存在が必要だ。だが考えが読めない龍神を傀儡にするには不向きだ」

「……………人間らしい、実に人間らしい、回りくどい考え方だ」

「お褒めいただき光栄の至りです。墮天使の総督殿。……………俺は人間ですよ」

俺とアザゼルの言葉に笑みを見せる曹操。

新しいオーフィスを作る。物騒だな、本当……………。

ゲオルグが満身創痍の俺たちを見る。

「ヴァーリと兵藤一誠をやるなら今だと思うけど？」

「それもそうだが最近もつたいたいと思えてなあ。データとしてはかなり希少な存在だし……………」

そこで曹操は輪後光と球体を消失させ、踵を返す。

「やっぱり止めだ。ゲオルグ、オーフィスの力はどこに転送される予定だ？」

「本部の研究施設に流れるようにしてある」

「そうか、俺は先に戻る」

俺はフラフラになりながら立ち上がり、笑う膝を懸命に踏ん張って曹操に訊く。

「曹操、なぜ殺らない？あの力を使えば俺たちを簡単に全滅させられたら？」

少しでも情報が欲しいのでね。少しでも、こいつのことを知れば、何かしら対策できるだろ。

曹操は一旦立ち止まり言った。

「誰も殺さずに御す。という縛りをしていた。では納得出来なですかね？あれはまだ調整が必要でしてね。データを取れたかったこともあります」

「舐めきつてくれるな」

「それでもないですよ、ロイ殿。ヴァーリもよくやることです。それに少なくとも貴方は殺そうとしましたから」

そこで曹操はイツセーに指を指す。

「兵藤一誠。何年かかってもいい。俺と戦えるようになってくれ。神セイクリッド・ギア器の究極戦が出来るのはキミとヴァーリを含めて数人しかいないだろう。いつだって英雄が挑むのは魔王か伝説のドラゴンだ」

イツセーはそれを聞いて戦意をたぎらせていた。

曹操はゲオルグに言う。

「ゲオルグ、^{グリム・リツバー}死 神の一行をお呼びしてくれ。ハーデスは今のオーフィスをご所望だからな。それと、さっきの入れ替え転移できるか？ジークフリートと俺にやってくれ。あとは彼に任せる」

「見ただけだからできるかわからないが、やってみよう」

「流石、伝説の悪魔——メフィスト・フェレスと契約した。ゲオルグ・ファウスト博士の子孫だ」

「先祖が偉大すぎてプレッシャーを感じるけども。あと、さっき入った情報なのだが」

ゲオルグが紙切れを曹操に渡し、それを見た曹操も目が細くなっていく。

「恩をこうやってかえすのが『旧魔王』のやり方か。わかっではいたが」

何があったかはよくわからんが、『旧魔王』ってことは面倒なことなんだろうな。

するとゲオルグが何処かに転移した。

「ゲオルグはホテルの外に出た。俺とジークフリートの入れ替え転移の準備をしている」

ルフェイと黒歌がやったあれか……………。

「ヴァーリチーム、グレモリーチーム。ひとつゲームといこう。もうすぐここにはハーデスの命令で死神の一行がオーフィスを回収にやってくる。そこにジークフリートも参加させよう。キミたちが無事脱出できるかがゲームの肝だ。二天龍には生き残って

ほしいが、それを仲間に強制する気はないのでね」

そう言うのと曹操も去っていった。

……ゲームだと……？ふざけるなよ……！

俺たちは敗北を噛み締めながら、脱出のための行動を開始した。

l i f e 0 7 現状確認

あれからしばらく経ち、アーシアの治療してもらった俺——ロイと木場は、曹操が言った通りに出現した死神一行を偵察していた。今は駐車場の偵察だ。

「中々の数だな」

「はい。これを突破するのは厳しいと思います」

「とにかく、一旦戻るぞ。作戦を練らねえと」

「わかりました」

ある程度の偵察を済ませたところで、俺たちは下手に手を出さずにリアスたちが待機している部屋まで戻ることにした。

「……………ハーデスの野郎、本格的に動き出したってわけか！」

俺たちの報告と今の状況を見たアザゼルが憎々しげに吐き捨てる。

現在、俺たちは六十階建てのホテルの真ん中、三十階に移動し、その階をルフエイの

防御結界で覆うことで陣地としていた。

曹操の攻撃で負傷したメンバーの怪我は完治している。ただ一人ヴァーリはサマエルの呪いに今も苦しんでいるようだ。

ルフェイ曰く『呪いの魔法を使ったが大した効果がなく、処置はやれるだけやったのでしばらくしたら解ける』とのことだ。

ヴァーリであれだ。もし、イツセーがくらつていたら、間違いなく死んでいたと思う。アーシアは回復の力を連続で使ったため、仮眠をとらせている。

アザゼル曰く、この空間は『デイメンション・ロスト 絶霧』の禁手、『デイメンション・クリエイト 霧の中の理想郷』で創られたもの、だそうだ。

ホテルと駐車場、その近辺の風景ごと創りだす。聞いただけではすごい規模に思えるが、京都では二条城とそれを中心とした町を創っていたからか、まだ小規模に思える。

今動けるメンバーが集まっている部屋で、ルフェイが嘆息していた。

「本部から正式に通達が来たようです。まとめますと『ヴァーリチームはクーデターを企て、オーフィスを騙して組織を自分のものにしようとしたところを英雄派が阻止、オーフィスはこの時救出。ヴァーリチームは発見次第始末せよ』だそうです」

あいつらの言えば向こうのオーフィスが本物で、こつちのは偽物つてことになっているんだろ。手が早いな。

「そういうことになったか。オーフィスを英雄派から守ろうとして、願いを叶えようとしたヴァーリチームの末路がこれとは。難儀だな」

俺は息を吐きながら言った。

ヴァーリチームはもう『裏切り者』になったわけだ。

今まで好き勝手やってたからこうなったのかもしれないが、今は英雄派をどうにかしないとな。

ルフエイはガツクリきたようになされた。

「私たちは世界の謎を調べたり、伝説の強者を探したり、オーフィス様の願いを叶えたりしていただけなんですけどね。グレートレッドさんの秘密に始まり、滅んだ文明、異世界のことを調べたりしていました。時々組織テの仕事もこなしました」

「冒険家みたいだな」

イツセーの呟きにルフエイが反応する。

「はい、毎日が大冒険ですよ!」

こいつら、色々やっていたんだな。やっていることは暇人がやるレベルな気がするが………。

俺がそう思っていると、ルフエイが続ける。

「ヴァーリ様の探求心は総督様の影響だと思えます」

それを聞いたアザゼルは息を吐いて目元を細めていた。なんとなく、イタズラ小僧の話を聞く父親の顔をしているように思える。

「それにしても総督様、最近ロンギヌスは神滅具祭りですね。『黒刃の狗神』ケイニス・リユカオンの方はお元気ですか？」

それを訊かれたアザゼルは天井を見上げる。

「スラッシュユドック狗神か。あいつには別任務に当たらせている。そつちも厄介な事件だ。それにあいつ、ヴァーリのことが嫌いであ

「はい、お話はうかがっております」

ルフエイはクスクスと笑っているが、俺はイリナに話題を振る。

「ところでイリナ、理論上二番目に強い神滅具、『ロンギヌス煌天雷獄』ゼニス・テンベストの持ち主——ジョーカーは

どうしているんだ？」

イリナは首をひねりながら答える。

「デュリオ様ですか？ 確か各地を放浪しながら、美味しいもの巡りをしていると……」

……………は？

それを聞いた俺は間の抜けた表情になる。

「仮にもセラフ候補にも選ばれるかもしれない転生天使の才児だろ！ 天界の切り札ジョーカーだろうが！ ミカエルとかガブリエルは何してるんだよ!？」

「そ、それを私に言われても」

俺の言葉にイリナも困り気味に返してくる。

「なんで各勢力（悪魔含め）の上の連中は、こう、大事などこかが抜けてやがるんだ！
「そのヒトも強いんですか？」

イツセーの質問にアザゼル、ではなくルフエイが答える。

「ヴァーリ様の戦いたい方リストの上位に載っているほどです。教会最強のエクソシストだそうですよ」

その一言にイツセーは驚いているが、その間にゼノヴィアが追加情報をくれる。

「デュリオ・ジエズアルド、教会でも有名だった。会ったことはなかったが、凶悪な魔物や上級悪魔を専門に駆り出されていたよ」

まあ、ロンギヌス神滅具所有者だからな。強いだろうよ。

アザゼルが口を開く。

「ロンギヌス神滅具とは『トゥルー・ロンギヌス黄昏の聖槍』を始めとした――」

長くなりそうだから聞き流そう。細かく聞かれたら困るが、最低限のことは知っているしな。

そこでアザゼルが何かに気付いたような顔になる。

「どうしたアザゼル、何か策でも浮かんだか？」

「いや、俺は現世のロンギヌス神滅具所有者の共通点を見つけたぞ！どいつもこいつも考えている

ことがまるでわからん！これは後でメモだな、くそつたれ！」

少しでも期待した俺が、いや俺たちがバカだったよ。

俺たちが呆れた顔をしているなかでアザゼルが続ける。

「それともう一つ、共通点を見つけた。神滅具ロンギヌスの使い方が従来通りじゃない。ほとんどの連中が今までの所有者と違う面で力を高めている。現代っ子だからか？……いや、しかし」

アザゼルの独り言が始まってしまった。

そこにオフィスが戻ってきた。さつき、

『この階層を見て回る』

とだけ言ってどこかに行つたオフィス。それがようやく帰つてきたのだ。

「で、どうだ、オフィス」

俺がオフィスを訊く。

「弱まった。今の我、全盛期の二天龍より二回り『強い』」

「随分と……弱くなったな」

「いやいや、十分に強い、てか強すぎるでしょ！」

俺の言葉にイツセーが突つ込みを入れてくる。にしても、全盛期の二天龍より二回り強いぐらいか。

「まあ、全勢力最強の存在だからな」

それを聞いてイツセーは黙りこんでしまったが、すぐに持ち直してオフィスを訊く。

「オフィスを、訊きたいことがあるんだ。なんで、あのときアジアとイリナ、ついでに俺を助けてくれたんだ？」

それを聞いてオフィスが口を開く。

「紅茶、くれた。トランプ、した。あと、近くにいた」

紅茶とトランプって、いつのことだ？ 黒歌たちの監視のせいであんまり関わってなかったからな。

「そ、それだけで？」

イツセーの言葉にオフィスは頷くだけだ。

もしかしたらこいつ悪いやつじゃないのでは………？

俺がそんなことを思っているなか、イリナがオフィスの前に出た。

「ありがとうございます、オフィスさん！」

そういうばイリナはまだ礼を言っていないかったな。

するとアザゼルがあごに手をやっていた。何となく、なに考えているかはわかるが、「二天龍の二回り強いぐらいか。妙だな。曹操は今のオフィスを絞りかすと言わんば

かりだったが、正直これだけの力が残っていれば十分ともいえる」

「アザゼルの言う通りだ。死神やジークフリートがいてもオーフィスにそれだけの力があれば突破できる。」

するとオーフィスが拳手しながら言う。

「曹操、多分、気づいてない。我、サマエルに力取られる間、我の力、蛇にして別空間に逃がした。それ回収してきた。だから強い」

あの間にそんなことをしていたのか……………。

「英雄派の連中はオーフィスを舐めすぎたな」

俺の言葉を尻目にオーフィスが指先に黒い蛇を巻きつけて出現させていた。

「力、こうやって蛇に変えた。それ、回収した。でも、ここからは出られない。我捕らえる何かがある」

それを聞いて笑みを浮かべていたアザゼルが息を吐いた。

「ま、死神が来たってことは、ある程度オーフィスが抵抗することを想定していたんだろ。オーフィスは今、有限だ。あちらはサマエル以外にオーフィス封じの策があるんだろうさ」

アザゼルに続いて俺がルフエイと黒歌に訊く。

「二人は空間に関する魔法に秀でていたよな。どうにかして外に助けを呼べないか？も

しくは何人かここから抜け出させることができないか？」

「あることはありますが……………」

「ちよつと厳しいと思うにや。さつき一回やつちやつてるから強固になつてるだろうし、私とルフエイのことも知ってるだろうし、出来てルフエイと一緒に二人だけで一回きりにや」

「何でルフエイと？」

今のを聞いてイツセーが訊く。

「術者も一緒のほうが強力なのができるにや」

黒歌が当然のこつのように答える。

「この状況でオーフィスを逃がすのはキツイだろうしな」

「確かにな、ロイ。オーフィスの話だと、この空間はオーフィスを捕らえる特別な結界のようだ。オーフィスを逃がしたければ結界を破壊して共に脱出しかない。それに死神は想像以上に危険だからな。あいつらの鎌は生命力を刈り取る。生命力を回復中のイツセーが下手に攻撃を受けると死ぬぞ。それに、オーフィスも有限だからな。斬られまくると弱つてしまうだろう。こいつの力がこれ以上流失したら、問題が余計に大きくなる。つまり、オーフィスは死守しなければならぬわけだ」

死神の鎌には本当に気を付けないとな。

それは当たらなければいいとして、問題は誰を外に出すかだが、

「イリナ、お前は先に脱出して兄さんや天界に今回のことを伝えてくれ」

「で、でも！先に出るのはレイヴェルさんのほうが……」

「そのレイヴェルが自分は後でいいって言っただよ。相手は確実にオーフィスとイッセーたち二天龍を殺しにくる。こっちのオーフィスは何としても守らないといけない。ハーデスが何するかわからんからな」

俺の言葉にイリナは何か言いたげだったが、言葉を飲み込んで頷いてくれた。

仲間想いのこいつのことだから、最後まで戦いたいんだろうが、自分の役目を理解してくれたようだ。

そこにアザゼルが続く。

「護衛としてゼノヴィアを連れていけ。エクス・デュランダルはダメになったが、デュランダルだけならまだいけるだろ。結界の外にやつらの構成員か死神がいるだろうか
らな」

「……………護衛か」

目を細めるゼノヴィア。

さっきアザゼルが言った通り、エクス・デュランダルは破壊されてしまった。これではゼノヴィアが本来の力で戦えない。

それを理解しているゼノヴィアの表情は悔しそうなものだった。

「護衛も立派な任務だ。それに、天界の研究も結論を出す頃だ。それも打診してこい。ついでにデュランダルの修理もな。これからも戦いはあるだろうからな。そつちに備えてくれ」

アザゼルの言葉にゼノヴィアは頷いた。

てなわけで、ルフエイとイリナ、ゼノヴィアが脱出し、この状況を外部に伝えることになった。

ルフエイが転移魔方陣を構築するためにその三人は別室に行くことになったんだが、その前にルフエイがイリナに聖なるオーラを放つ一本の剣を手渡した。

「こ、これはー」

驚くイリナにルフエイは微笑む。この剣は確か……………。

「これを、エクスカリバー・ルーラーの聖剣を持っていてください。兄から預かって来たものです。タイミングが掴めずに今になってしまいました」

「いいのか？」

ゼノヴィアが訊くのルフエイは頷く。

「はい、フェンリルちゃんを手に入れましたから。デュランダルの修理に使ってください」

それを聞いてイリナは深く頭を下げた。

「あ、ありがとうございます！ごいいます！英雄の血を引く方は怖い人ばかりだと思つてましたけど、いい人もいるんですね！」

「恐縮です。兄と共に変人とは言われますけど」

そのやり取りをしたあと、転移魔方陣構築のために部屋を移動した。

全てのエクスカリバーとデュランダルを一つにするのか。どうなることやら……。

そこでアザゼルが膝を叩いた。

「さて、グレモリー兄妹。脱出作戦を練るぞ。オフィスを連れて全員で脱出するのが目的だ」

「ええ」

「おう！」

こうして一旦解散となった。

一通りプランがまとまったところで、俺は別室で休憩していた。作戦の立案はアザゼルのほうが得意だからな。細かいところはリアスとアザゼルに任せる。

俺は懐からタバコ箱を取りだし、そこから取り出した一本を口にくわえ、火をつける。俺は紫煙を吐き出して壁に体を預けると、部屋の入口に目を向ける。

「……………で、何か用か？」

「別に、ここに休みに来ただけにゃん」

イタズラっぽい笑みを浮かべながら入口に立つ黒歌。

あいつが部屋に入ってくるまで心配が感じられなかったが、仙術の応用なのだろう。

俺は部屋の椅子に腰かけた黒歌に訊く。

「おまえ、小猫を助けようとしたよな」

「たまたまにゃん」

名前を叫んでいたが、それをたまたまね……………。

俺は続ける。

「おまえ、小猫のこと、気にしているだろ？」

「さーてね。ご想像にお任せするにゃん」

適当に返してくる黒歌。いちおうだが、こいつ『はぐれ悪魔』なんだよな。

俺と黒歌の間に嫌な沈黙が訪れる。別に、前の『現魔王の血』発言のことを気にしているわけでもないんだがな……………。

俺は紫煙を吐き出し、黒歌に言う。

「前の主のこと、調べさせてもらった」

「そう。で、どう思ったの？」

急に真剣になる黒歌。まあ、変わったのは表情だけかもしれないがな。

「能力向上のために、かなり無茶なことをしていたらしいな。眷属だけじゃなく、その身内にまで」

黒歌は主を殺してはぐれになった。だが、何十人というはぐれを見てきた俺から言わせてみれば、何か違和感を覚える。

なんとさえばいいかわからないが、力を持ちすぎて暴走しただけには思えない。なにか、暴走しないための最後の支えがあるように思える。

それは、まず間違いなく小猫だろう。

「おまえ、小猫のことを守りたいんだろ？」

「その根拠は？」

真剣に訊いてくる黒歌に、俺はイタズラっぽく笑みながら返す。

「俺にも妹がいるからだ」

黒歌は一瞬間の抜けた顔になるが、すぐにおかしそうに笑う。

「にやははは、ふざけてるにや?」

「俺はいつでも真剣だが?」

「あら、そうなの?」

「ああ」

俺は頷きながら紫煙を吐き出し、携帯灰皿に灰を落として再びくわえようとすると、

「隙ありにやん」

「ああ!?!」

黒歌に奪われ、そのまま吸われてしまった。が、黒歌はすぐにむせる。

「けほけほっ!よくこんなもの吸えるわね……………」

「ま、リラックスにはちょうどいいさ」

俺はそう言いながら携帯灰皿を差し出し、黒歌はそこにタバコを押し込んだ。

すると、不意に顔を近づけてくる黒歌。俺が何かを言う前に押し飛ばそうとすると、小さいながら優しい声で、

「さっきはあんがとね……………」

とだけ言ってきた。さっきつてのは、あのヴァーリの一撃を止めた時か。

俺が何かを言い返そうとすると、黒歌はそれを待たずに部屋を出ていった。
あいつ、本当に何がしたいんだ………？

l i f e 0 8 脱出作戦開始

あの後、俺——ロイが部屋に戻り、そこに朱乃も呼んで一通り作戦を練り終えた俺たちは、動けるメンバーを部屋に集めた。

全員が集まったことを確認したアザゼルが説明を始める。

「さて、まずはどうすればこの空間から出れるかだが、方法としては三つだ。一つ目は術者、つまりゲオルグが自ら解除すること。これは京都でやっていたことだな。二つ目は強制的に出入りすること。こっちは今からやろうとしていることだ。最後に三つ目は単純明快。術者を倒すか、結界を支えている中心を破壊することだ。その作戦を伝える前に、ルフエイ場所を頼む」

「はい。総督」

ルフエイが返事をする、ホテルの見取り図を置く。そこに目印になるもの（今回は紙の鶴だ）を複数置いていき、外部に『目』を作り出すとのことだ。

その後も魔術文字を書いたり、呪文を唱えたり、灰をまいたりなどの手順を踏んでいき術式を完成させる。

俺はあんまり詳しくないからよくわからんが、リアスや朱乃が興味深そうに眺めてい

た。

ルフェイが手を見取り図に向けると鶴が動きだし、魔術文字が光り、灰が動いて紋様を描いていく。

そこまでするとルフェイが口を開く。

「駐車場に一つ、屋上に一つ、二階ホールに一つの計三つですね。それらは尾をくわえたウロボロスの形の像です」

ルフェイはその像を紙に描き、アザゼルに渡して俺にも見せてくれる。

アザゼルが続ける。

「三つとは随分大がかりだ。力を削ったオフィスを封じる前提で作ったんだろな。それでルフェイ、死神はどんな感じだ？」

「はい、総督。どの結界装置にも死神の方々が集結しています。というか、この階層以外にはたくさんいらっしやっています。駐車場が一番多そうですね。曹操様はいませんが、ジークフリート様がいらっしやっていますし、ゲオルグ様は駐車場にいらっしやいますね」

ルフェイの言葉に俺が呟く。

「てことは、駐車場の装置が一番重要ってことだな。そいつを壊せばいいが……」

「お兄様、アザゼル、先程の作戦通りに行きましょう」

それを聞いて俺とアザゼルは頷く。

「ああ、にしてもイツセー。お前が惚れた女は誰よりもお前を理解しているようだぜ？」アザゼルが苦笑しながら言うが、まったくその通りだよ。

イツセーはわかってない感じだが、朱乃が耳打ちする。

それを聞いてイツセーには仰天していたが、さっき聞いた俺も驚いた。

尊敬の眼差しをリアスに送っているイツセー。俺はそんなイツセーの肩に手を置く。

「俺だつて驚いたんだぜ？まったく。リアスはお前に夢中だよ。ソーナとは違う方向の戦術だろ」

それを聞いてイツセーは何回も頷いてきた。

「さて、皆、集まって」

リアスの声かけに全員がリアスに注目する。

「さあ、私の大事な眷属たち。さっさと突破しましょう。作戦を説明するわ！」

俺たちの説明が終わった後、駐車場が一望できる部屋に移動したときだ。小猫のイツセーへの逆プロポーズ騒ぎがあつたが、珍しく甲斐性を発揮したイツセーがどうにか沈めてくれた。

「――術式、組み終わりました」

そんな中でも準備を進めていたルフェイの言葉を受けて、リアスがイツセーに合図を送る。

それを受けてイツセーが叫ぶ。

『ウエルス・ブラスター・ビシヨツブ龍牙の僧侶』！』

その叫びと共に赤いオーラがイツセーの背中に集まり、バツクパツクとキャノンが生み出される。イツセーはそのキャノンを上下に向けてさらに叫ぶ。

「行きますー！」

作戦は簡単だ。屋上と二階ホールの装置をまとめて吹き飛ばす。砲撃力の高いイツセーだからできる作戦だ。

ドウウウウ……。

イツセーのバツクパツクが静かに鳴動してオーラを集めていく。それが溜まりきつたところで、

皆が返事をして、前衛の俺、アザゼル、リアス、木場、朱乃は翼を広げ飛び出していく！

今回、イツセーは後衛で援護砲撃をもらうことになっている。アーシアは回復の光を矢として放つてもらい、黒歌は防御結界を張り、小猫はその護衛、手が足りないため、ヴァーリも無理しない程度に頑張ってもらおう。オーフィスも後衛組と一緒にいらっている。

俺たち前衛組は前に出てきた死神の一団とそのまま激突する！

一人また一人と斬っていくわけだが、こいつら弱くね？

俺がそんな事を思った直後、

ドツゴオオオオオオオオオオン！

突然の爆発と煙で視界が奪われる！すぐさま、煙から飛び出し、近くにいたアザゼルの声に訊く。

「アザゼル！今の誰の攻撃だ!？」

「多分オーフィスだろ！ちよつと待ってる！行ってくる！」

そう言っただけで後衛組の方に飛んで行った。

俺は前衛チームの安否を確認する。

「とにかく、おまえら無事か！」

「私は大丈夫です！」

「こちらもですわ！」

「同じくです！」

「了解、作戦続行だ！行くぜ！」

リアス、朱乃、木場の返事を受けた俺は領き、再び死神の群れに斬り込んでいく！
こうして俺たちの脱出作戦が始まったのだった。

俺たちはあれからもしばらく戦い続けていた。

バチツ！バチツ！

時折聞こえるこの音は、おそらく、先程のイツセーの砲撃やオフィスの攻撃でこの空間にダメージを与えている証拠だろう。

それでも、この結界が健在なのは装置が無事だからということとゲオルグが無事だか

らだ。

なんてことを考えつつ、死神を直刀で斬り伏せていく。

見れば、他のメンバーも余裕そうだった。

一応、下級死神でも中級悪魔並みには強いんだがな。

そこで前衛に参加したイツセーが、リアスと朱乃に力を譲渡、その二人がまた強力な攻撃を繰り出していった。

すると、イツセーの方にジークフリートと死神一行が出現する。

あれは、援護に行きますかね。イツセーを死なせるわけにはいかねえ。

俺はそう決めるとイツセーの方に向かう。途中で死神が邪魔してくるが、すれ違い様に斬っていく。

するとジークフリートの声が聞こえてきた。

「……今のキミでも十分すぎるほどの強者だよ」

もしかしてイツセーのやつ、会話の流れで『曹操には負けたがな』的なこと言ったのか？

「だから言つたら。回りが強すぎるだけだつて」

そう言いながら俺はイツセーの横に並び、言葉を続ける。

「サイラオーグや曹操と戦っていれば、この程度の死神じゃ何人来ても問題ないだろ」

「そうだけ、イツセー。ま、俺たちもだがな」

アザゼルも下りてきて俺の横に並ぶ。

俺たち仲良く曹操に負けたが、こいつら程度になら負ける気がしない。

《死神を舐めてもらっては困ります》

どこからともなく聞こえた声。その声の主と思われる不穏な気配を感じてそちらを見てみると、空間が歪みだしそこから何かが出てこようとしていた。

そこから現れたのは、装飾されたローブに道化師が被つていそうな仮面をつけ、黒い刀身の鎌を持った死神だった。

気配でわかる。こいつは最上級の死神だ……………。

「貴様は！」

アザゼルもわかったのか、驚いていた。

するとその死神が俺たちにお辞儀をしてくる。

《初めまして、墮天使の総督殿、そして魔王の眷属殿。私はハーデス様に仕える死神の一人。プルートと申します》

「なるほど、最上級死神のプルートね。伝説にも残っている奴を寄越すとは、ハーデスの

野郎……………」

「まったく、やってくれるもんだな！」

俺たちがそれぞれ喋っていると、プルートの話始める。

《あなた方はテロリストの首領オーフィスと結託し、同盟勢力を影から崩そうとしました。それは万死に値します。同盟を訴えたあなたがこのようなことをするとは》

あちらはそういう『大義名分』でやっているんだな。

俺はともかく、アザゼルはそれを聞いてぶちギレている様子だ。

「なるほど。そういう理由で俺たちを消すつもりか！ そのためにテロリストどもと戦っていた俺たちに襲いかかったと！ どこまで話が済んでいるんだ！」

《いずれはそんな理由付けもいらなくなりませんが、今回は一応ということで理由を付けさせていただいただけです。さて、私はあなた方に後れを取るほど弱くないですよ》

「そういうが、プルートさんよ。単に嫌がらせしたいだけだろ？」

《ええ、そうともいいますね。死神にとってあなた方は目障りですので》

「……………舐めてくれるもんだな」

《舐めてはおりません。真剣です。それでは偽物ということになったオーフィスをいただきます》

フッ！

奴が高速で動くが、俺はそれに反応し近づけ刀で受け止める！

ギイイイイイ！

直刀と鎌の激突で空間が大きく揺れる！

俺は一旦プルートと距離を取る。

「ロイ！ 助太刀は——！」

「いや、いらねえ。その人工セイクリッド・ギア神器も本調子じゃないだろ？」

《一人で私と？ 舐めてくれますね》

「舐めてはおりません。真剣です」

挑発ついでにさつき言われたことをそのままの言葉で返してみた。

『そのようなことを舐めていると言うのですよ！』

若干キレているが無視してイツセーにも言う。

「イツセーも来るなよ。こいつは俺が殺る」

そう言つて俺は奴に突つ込む！

ギイイイイイン！

俺の剣撃をプルートが受け止め、再びつばぜり合いになるが、そのまま強引にプルートを上に押していく。

イツセーたちから十分距離を取ったところでつばぜり合いを止め、一気に高速の攻防を繰り返す！

俺とプルートの一撃が激闘するたびに空間が震え、「バチッ！バチッ！」と今にも空間

が破れそうな嫌な音が耳に届いてくる！

プルートの大上段からの振り下ろしを半身で避け、空振って体勢を崩したプルートに滅びを込めた蹴りを放つ！

《グッ！》

苦悶の声と共に吹き飛ばされるプルート。

俺は直刀を逆手に持ち替えると、そのまま投げ槍のように投げつける！

プルートは素早く体勢を整えて直刀を上弾き飛ばすが、俺は高速で動き出して弾かれた直刀を回収。そのまま魔力を込めていき、落下の勢いを乗せて大上段から一気に振り下ろした！

ギイイイインツ！

とつさに防いだプルートの鎌と激突し、甲高い金属音が空間に響き渡る！

俺は歯を食い縛って一気に押し込もうとするが、プルートも負けじと押し返そうとしてくる！

くそ！こういうときにパワー不足を痛感させられる！

激しく火花を散らしながらつばぜり合いをしていくなかで、俺は直感刀を消して爪先に刃を生成、プルートに蹴りを放つ！

「つつあー！」

《ぬうつ!?!》

押さえていたものがなくなり、大きく体勢の崩れたプルートの腹に蹴りが直撃する！
俺は刃から滅びを流し込みながら一気に振り抜く！

空気を切り裂きながら吹っ飛んでいくプルート。追撃として直刀を投げつけ、同時に俺も飛び出す！

体勢を整えて直刀を弾こうと鎌を振るプルート。だが、その前に直刀を回収し、鎌の一撃を避けて斬りかかる！

《ぐう!》

再び苦悶の声を出すプルート。あまり斬っているという感覚がないのは、死神は骨ばかりだからだろう。

俺は息を吐き直刀を握り直すと、突然発生した霧から大量の死神が現れ、イツセーたちを囲む。

質より量に作戦を変えてきたようだ。

俺が小さく舌打ちをすると、プルートが斬りかかってくる。

《よそ見とは、隙だらけですよ!》

「あるわけねえだろが……」

俺はそれを体捌きで避け、その後の連撃もすべて避けていく。こちらら隻眼だつての

に、動きが読みやすいぞ。

俺がプルートの一撃を受け止めた瞬間、イツセーの叫びが聞こえてきた。

「口、ロイ先生！大変です！」

「どうした、イツセー！誰かやられたか!？」

「いや、そうじゃなくて！何か、先輩方がリアスの胸を次のステージに進ませようって

言ってきてるんです！」

「……………知るか！」

イツセーの言葉で、アザゼルは狂気すら感じる嬉しそうな顔をしていた。

《随分余裕そうですねっ!》

プルートはそう言いながら上段から斬りかかってくる。

「っ！」

俺はそれを体捌きで避けるが、

今のは危なかった……………。今度からはイツセーの言葉に反応するタイミングを考えよう。

俺はそう思いつつ、プルートと斬り合っていく。

俺とプルートが激しく激闘していると、視界の端に紅の光が視界に映る。

「キタキタキター！ついにリアスの胸が第三フェーズになったぞ！これぞまさしく乳力にゆうパワー」

だあああああッ！」

アザゼルが場違いなほど騒いでいた。やっぱり、プルートの相手はあいつに任せればよかつたよ。すると、

ズドオオオオオオオオオオ！

イツセーの砲撃が放たれた！あれで三発目だぞ！大丈夫なのか!?!てか、今ので死神の三分の一が消えた！だが、もう限界なんじや……。

ビイイイイイイイ！

するとリアスの胸から紅の光が出てイツセーに当たる。すると、イツセーのオーラが回復した!?

「さしずめ『クリムゾン・バスト・プリンセス紅髪の魔乳姫』だな！そして今のは『おっぱいビーム』または『おっぱい

バツテリー』だ！」

アザゼルの言葉に、再び俺の中で何かがキレた……………。

《な、なんだ貴様もオーラが高まったぞ!》

「うるせえ……………」

俺はそのまま直刀でプルートに斬りかかる！

奴は鎌で受けようとするが、俺の一撃はプルートの柄を切り裂き、プルートの仮面を壊した！

《ぐあああ……》

仮面が壊れ、元の骸骨顔を拝むことができた。

「なんだよロイ！出来るなら最初から——」

「黙ってる……」

「ちよ!?!ロイ、どうしたんだよ!?!」

「ヒトの妹の二つ名を、胸に変な名前を……」

「そ、そんなこと?!」

驚愕するアザゼルに、俺は怒気を込めて怒鳴る。

「『そんなこと』だ?!俺のはいいぜ、堕天使の誰かにもらったものだからな!リアスのは母さんのものをもらったものなんだぞ!後、リアスの胸にそんな変な名前をつけるな!リアスのことも考えてやれ!わかってんのか!」

「まったくよ!お前、若干シスコンとマザコンが入ってんぞ!」

「アザゼル……」

俺が静かに直刀の切っ先を向けながら睨むと、アザゼルは慌てて言葉を発する。

「わかった!わかったから!取り消すから!さっきのも今のも取り消すから!」

俺とアザゼルがこんなやり取りをしている間にもイツセーの砲撃は続いていた。

「とにかく二人を守れ。ブルートは俺が殺る……」

「わ、わかった！いくぞ、お前ら！」

『は、はい！』

アザゼルの号令に恐々としながら返事をする面々。

少し、怒りすぎたか？

俺はそんなことを思いつつ、プルートとの戦鬪を激化させていったのだった。

l i f e 0 9 脱出

あれからも俺——ロイはブルートは戦っていたんだが、その後も続いたイツセーの砲撃でそれどころではなくなってしまうた。

すると、ブルートが俺から距離を取り、ジークフリートたちのほうに着地する。それを確認して俺もイツセーたちのほうに着地する。

それと同時に気付いたことがある。

リアスの胸が小さくなっている！

いや、今までそこを気にしたことは無かったんだが、ここまで小さくなると、少し考えるものがある。まるで小猫みたいだ。

ゴンッ！

後衛のいるところからコンクリート片が飛んできたんだが、それを避けてジークフリートたちに言う。

「とりあえず、ゲオルグ、ジークフリート、チエックメイトだな」

俺は直刀の切っ先を奴らに向ける。

「……………バカげた攻撃力だな。赤龍帝」

そう言いながら肩で息をするゲオルグ。

例の装置はまだ健在あり、それはゲオルグがありつたけを魔法力を防御に使つたからだろう。

このまま押ししていけば勝てるか……。

さすがのジークフリートも少し焦りの表情になってきていた。それを確認したその時、

バチツ！バチツ！

この空間に聞き覚えのある音が響いた。空間に穴が空くときに聞くこの音、上を見ると空間に穴が空き始めていた。

まさかこのタイミングで増援か！状況的に来ても向こう側だろうが、今来るのか!?

俺は困惑しながらもジークフリートたちの方を見るが、あちらも予想外の出来事なのか怪訝そうにその穴を見ていた。

そして穴から軽^{ライト・アーマー}鎧にマントという出で立ちの男が出てきた。

あいつは……!あの顔は顔は忘れるはずがねえ!

その男は俺たちとジークフリートの間に降り立つ。

「久しいな、赤龍帝、ヴァーリ。そして『ジャック』いや、ロイ・グレモリー!!」

横にいたイツセー、後衛のヴァーリと睨んで、その後に殺気のこもった目で俺を睨ん

できた。

「シャルバか。久しぶりだな……………」

俺も憎々しげに言うが二度と会いたくなくなかったよ。生きてたのか、まったく。するとジークフリートが前に出る。

「シャルバ、報告は受けていたけど、本当に独断で動いているとはね」

「貴公らには世話になった。礼を言おう。おかげで傷も癒えた。『蛇』を失い、多少パワーダウンしてしまったがな」

「それで、ここに来た理由は？」

「なーに、宣戦布告をと思ってるね」

シャルバが言うのと醜悪な笑みを浮かべてマントを翻すと…………そこに一人の少年が出てきた。

虚ろな瞳に感情を感じない表情。見た感じだと、操られているようだな。

その少年を見てジークフリートとゲオルグが驚愕していた。

「レオナルド！」

「シャルバ、その子をなぜここに？いや、なぜ貴様と一緒にいるのだ!?連れ出してきたのか!？」

レオナルドって誰だったか……………。報告を聞いた限り、確か『アナライゼーション・メーカー魔獣創造』の持ち

主だったはずだ。

俺が思い出そうと必死の中で、シャルバは大胆不敵に言い放った。

「少し協力してもらおうと思っただよ。……………こんな風にね！」

ブウウウン！

シャルバが手元に小型魔方阵を展開させ、レオナルドとか言う少年に近づける。

魔方阵の悪魔文字が高速で動き始めると、途端にレオナルドが叫んだ！

「うわあああああああああ！」

絶叫しながら苦悶の表情を浮かべる！

それと同時にフィールド全体を包むほどの影が広がり始める。

あの野郎！何をすする気だ！

空中に浮き始めたシャルバが哄笑をあげる。

「ふははははは！『魔アナイアレイション・メーカー獣 創造』とはとても素晴らしい！しかも彼はアンチモンスターを

作るのに特化していると言うではないか！英雄派の行動を調べあげ彼を拉致してきたのだよ！抵抗してきた奴らは殺してしまっただがね！それでは作ってもらおうか！現悪魔どもを滅ぼせるだけの怪物を！」

ズオオオオオオオ……………。

影から何かが生まれてくる。影を大きく波立たせて巨大なものが頭部から姿を現し

ていく！

デカイ頭、デカイ胴体、太い腕、それを支える圧倒的な脚！

少年の影から生まれてきたもの……。それは、

『ゴガアアアアア！』

鼓膜が破れそうなほどの咆哮を上げる超巨大なモンスターだった！

デカイ、何もかもがデカすぎるだろこれは!?

レオナルドって少年が、この百メートル以上のデカブツを何体も生み出したのか！

すると、そのモンスターたちの足元に巨大な転移魔方陣が出現した！

シャルバはそれを見て哄笑しながら叫んだ！

「ふはははは！今からこの魔獣たちを冥界に転移させて、暴れてもらう予定なのだよ！」

魔方陣が輝き、そのモンスターどもが転移の光に包まれていく！

このままだと、ヤバイ！

「とめろおおおおおおおおおおッ！」

俺とアザゼルの指示で全員が攻撃していくが効果無しか！

俺が直刀を大剣に変え、魔力を込めていこうとした瞬間、

ドオオオオン！

俺を魔力弾が襲った！

それはどうにか避けたが、追撃するようにその後も魔力弾が飛んでくる！

リアスたちに攻撃がいかないように離れ、魔力弾を打ち出してくる奴を睨む！

「ジャックウウウツ！貴様がいなければあああああッ！」

「くそ！シャルバ、テメエ！」

俺はそのままシャルバと戦闘をしていくなか、モンスターが完了してしまおう！それを確認すると、シャルバはオーフィスのほうに手を向ける。すると、オーフィスの体に悪魔文字を表した螺旋状の魔力が浮かび、オーフィスを縄のように縛る。

シャルバ邪悪に笑みながら、そのオーフィスに近づいていく。

あいつ、オーフィスも狙いなのか！

「情報通りだ！今のオーフィスなら私でも捕らえられると！パワーダウンした私に再び『蛇』を与えてもらおうか！」

「やらせるかよ！」

俺は奴を追うが、シャルバは言い放った！

「これは呪いだ！私自身が毒となつて冥界を覆い尽くしてやる！私を拒絶したものなどに用はない！このシャルバ・ベルゼブブ、最後の力を持って、魔獣たちと共にこの冥界を滅ぼす！」

……………狂つてやがる！復讐に憑かれやがって！

シャルバはイツセーに指を突きつける！

「貴殿が大切にしている冥界の子供も我が呪いで全滅だよ、赤龍帝！苦しめ！もがけ！ふはははは！傑作だな！階級関係なく平等に死んでいく！これがお前たちの宣う『差別のない冥界』なのだろう？ふははははは！」

なんて野郎だ！イカれてやがる！

俺が舌打ちをしていると、フィールドの崩壊が急速に進みはじめる。あのデカブツの出現がトドメになったようだ。

俺がそんな事を考えていると黒歌が叫ぶ！

「もう限界にやん！今なら転移も可能だろうから、ここからおさらばするよ！」

それを聞いて素早く黒歌の元に集合するが、

「ふははははは！」

オーフィスも捕らえたシャルバはただ笑っていた。

どうにかしたいが、あのデカブツどもをどうにかしないとイケない！てか、次元の狭間じゃまともに行動できねえ！

「俺、オーフィスを救います。ついでにシャルバもぶつ倒します」

イツセーが笑顔で告げてくる。

「だったら僕も！」

「私も戦いますわ!」

木場と朱乃がそう言うがイツセーは首を横に振る。

「いや、俺だけで十分だ。皆はあの魔獣どものことを伝えてくれ。この鎧があれば次元の狭間でも活動できるはずだ。今シャルバを見逃すことも、オーフィスを誰かに渡すわけにもいきません」

イツセー、お前は本当にお人好しだよ……。

「もう限界にやん!今転移しないとチャンスはないわ!」

黒歌がそう叫ぶと、限界を迎えたヴァーリに肩を貸すアザゼルが言う。

「イツセー!後で龍ドラゴン・ゲート門を開き、お前とオーフィスを召喚するつもりだ!それでいいんだな?」

アザゼルの言葉にイツセーは頷く。

「イツセー!」

そして、リアスも話しかける。

「必ず私のところに戻ってきなさい」

「ええ、必ず戻ります!」

それを告げてイツセーは飛び出していった。それと同時に俺たちを転移の光に包まれていく。

イツセー、死ぬなよ……………!!

あれから無事転移は成功。

先程俺は兄さんたちに今の状況を伝えた。

そして、今はアザゼルがイツセーたちの召喚の準備を始めているところだ。

タイニーンに協力を仰ぎ、中級悪魔の昇格試験センターの転移魔方陣を借りて龍門^{ドラゴン・ゲート}

の魔方陣を展開させていく。

あのデカブツたちは現在進行形で進撃してきている。

同盟関係の勢力から救援部隊が派遣されているようだ。だが神クラスが動けない。

曹操が、聖槍の存在が邪魔すぎる!あのととき、刺し違い覚悟で殺ればよかったのか?

いや、過ぎたことは考えてもしかたねえ。今は……………!!

「よし、繋がった!」

アザゼルが叫んだ！魔方阵が輝き、その閃光がフロア全体を包みこんでいく。強烈な光を手で遮り、止むのを待った。

そして光が止んだ瞬間出現したのは、紅い八つの『兵士』^{ポーン}の駒だけだった……………。

「バカ野郎が……………！」

それを見て、俺は壁を殴る。乾いた音がフロアに響いた。

それに続くように、状況を理解できてしまった誰かの嗚咽が聞こえてくる。

駒だけが帰ってくる。これは、その駒を使われた者の『死』を意味する。

つまり俺たちはイツセーを失った……………。

補習授業のヒーローズ

lif e 0 1 首都防衛戦

あの脱出作戦から二日。俺たちはグレモリー城にいた。

シャルバの外法により生みだされたデカブツたちは、シャルバの思惑通りに冥界の重要拠点や都市部に進撃を開始していた。

足が速い奴は今日中、遅い奴でも明日には都市部に到達してしまうはずだ。

さらに厄介なのは、奴らは進撃しながら小型のモンスターを生み出していることだ。こちらは一体一体が人間より少し大きいぐらいだが数が多く、被害を大きくしている。

奴らが通った場所には何も残らない。そう言うしかないほど酷い状況だ。

その魔獣たちの中で一番大きいのが魔王領の首都『リリス』を目指している奴だ。これを冥界政府は『超獣鬼』と呼称し、その他の十二体を『豪獣鬼』と呼称した。

昨夜、『豪獣鬼』の迎撃に最上級悪魔とその眷属が、『超獣鬼』の迎撃にレーティン

グゲーム王者——デイハウザー・ベリアルとその眷属が出たが、一時的な足止めしかできなかった。

その事実が余計に民衆の不安を煽ることになってしまった。

そして、それに加えて旧魔王派が各地でクーデターを起こしている。この状況はあいづら的には計画通りであり、そちらの対処にも人員を割きいてしまっている。

さらにこの混乱に乗じて上級悪魔の眷属も暴れだしていると報告を聞いた。前に言ったように、主への復讐さをしているのだろうとすぐに考えられた。こちらにも人員を割きいてしまっている。

この状況を裏で手引きしたのは冥府の神ハーデスなのだろうが、英雄派の連中の動きにも警戒しなければならぬ。

冥府も英雄派も何をしてくるかわからない以上、神や魔王を下手に前線に出せない。ハーデスがいつ死グريم・リツバー 神を超越すかもわからない。

兄さんが中心となり、民衆の避難を最優先させているため大きな死傷者が出ていないことだけが幸いと言える。

「……………くそ」

俺は一人、リアスの部屋を前にしてそう漏らした。

リアスたちがイツセーの死を知ってしまったから、言い方が悪いが、まるで『抜け殻』のようになってしまった。大丈夫なのは、かなり無理をしている木場ぐらいだろうか……………。

俺は時々リアスたちをどうにか励ましてやろうとは思ったが、できなかつた。いや、

どう励ませばいいかわからなかった。

前世でも今世でも、俺はヒトの死に関わりすぎている。つまり、「受け入れろ」という言葉しか思い浮かばなかったのだ。

すまねえ、冷たい兄で……………。

俺は口には出さず、リアスに謝りながら別のフロアに移動しようとする——、

「ロイ様」

「ソーナか……………」

ソーナがリアスに会いに来ていた。

俺は息を吐き、リアスに聞こえないように小声で話す。

「すまねえ。こんな時に使えないな、俺は……………」

「ロイ様の言葉に耳を傾けないのなら、私でも——」

「いや、そうじゃねえ……………」

俺は首を横に振り、ソーナの言葉を遮る。

「それは、どういうことでしょうか？」

「俺は兄失格だ。こんな時に『受け入れろ』って言葉しか思い浮かばねえ……………」

「——ッ！」

俺の言葉にソーナは一瞬驚愕の表情を浮かべるが、小さく咳払いをして言う。

「私もこんな時になんと声をかければいいのか、わかりません。リアスの気持ちはリアスにしかわかりませんから」

ソーナはそう言うとりアスの部屋の扉を、その奥にいるであろうリアスを見つめ、言葉が続ける。

「けれど、ここで終わるほどリアスは弱くないと信じています」

断言するように言うソーナ。そう、だな。今は、リアスたちが立ち直つてくれると信じるしかない。

俺にもやらなきやならねえことがある……………。

俺が息を吐くと、ソーナが薄く笑いながら言った。

「念のため、こういうときにうってつけの相手をお呼びしておきました」

「……………本当、何から何まですまねえ」

俺はソーナに礼を言いながら、俺の仕事、『首都リリスの防衛、都民の避難誘導』のため、移動するのだった。

冥界の首都リリス。

転移魔方陣で即移動した俺は、高層ビルの屋上にいた。

いつもなら気持ちよく感じる冥界の風が、妙に気持ち悪く感じるのは、『超獣鬼』ジャバウオックの影響なんだろうか……………。

その風に乗って聞こえる爆発音。旧魔王派か、英雄派の連中が派手にやっているようだ。

俺は深く息を吐き、両手に直刀を生成する。銃剣は曹操の一撃で砕け散ってしまったからな。

さて、殺るか。

俺は屋上から飛び降り、重力に任せながら落下。高層ビルの半分ほどまで落下すると、悪魔の翼を展開、一気に加速し敵を探すために飛び立った。

数十秒後。

敵と思われる複数の人影を発見。怯えながらの避難ではなく、警戒しながら物陰をこ

そこそと移動していた。

そいつらが大きめの通りに出た瞬間、俺はそいつらの前に降り立つ。

俺を見た瞬間、そいつらは驚愕すると共に殺気立ち始める。

「き、貴様は!？」

「ジャック、いや、ロイ・グレモリーか!」

「裏切り者が!ここで死ねッ!」

そう言いながら連続で魔力弾を放ってくる悪魔。

こいつら、旧魔王派か。ピーピーうるせえな……………。

俺は飛んできた魔力弾を体捌きだけで全てを避け、そいつらを睨みつける。

「……………今の俺は機嫌が悪い。理不尽に思うだろうが、この際言っちゃっていいだろう?」

「黙れッ!」

遠距離は無理と判断したのか、一人の悪魔が手に魔力を込めながら飛び出して来る。

そいつのストレートを避け、直刀で腕をとばし、勢いのまま首をはねる。

肉を断ち切る感覚が腕に伝わり、帰り血が少しかかる。ああ、戦争の時を思い出す。

力なく地面に突っ伏した悪魔の死体を一瞥し、残った悪魔どもに言う。

「降伏は許さん。最期まで抵抗してみろ、叩き斬るがな……………」

体から紅のオーラを発しながら直刀を握り直し、切っ先を悪魔どもに向ける。久しぶりに、『切り裂き魔』復活といくか……………！

数時間後。

「……………」

俺は無言で自分の体を確認する。

五体満足。怪我は擦り傷程度。行動に問題なし。だが、

「気持ち悪いな……………」

額を拭いながらそう漏らした。

いつかみたいに、全身血まみれだ。まあ、全部返り血だけだな……………。この見た目のせいで、避難誘導しようとしたら、様々なヒトから怖がられた。

あれから何十人かの悪魔と英雄派と思われる奴を斬ってきたが、肝心の曹操と小次郎は見当たらなかった。

あいつらを倒しておかねえと、今後面倒なことになりそうだ。

俺がそう思慮していると、近くの上空に龍王となった匙を確認できた。あっちのほうは、まだ行っていなかったな。

俺は悪魔の翼を展開、そちらを目指した。

僕——木場祐斗は、部長たちを連れてアジユカ様にお会いした後、その足で首都リリスに来ていた。

アジユカ様のおっしゃったことを信じるのであれば、イツセーくんは魂だけの形で生きており、見つけることができればどうにかなるとのことだ。

途中、ジークフリートとも遭遇したけど、部長たちと共にどうにか倒すことはできた。そして、僕たちとは別れて行動していたメンバー（ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセさん、ギヤスパークン）と合流し、龍王となった匙くんの姿が見えた場所を目指していた。

そこに降り立つと、僕たちの視界には大きく破壊された道路や建物だった。

「グレモリー眷属！」

聞き覚えのある声に引かれそちらに目を向けると、タイヤが外れた一台のバスを守るようにして囲むシトリー眷属の姿があった。バスの中には大勢の子供たちが乗っている。

「状況は？」

部長が巡^{めぐり}さんに問う。

「このバスの先導中に英雄派に出くわしまして……。バスは攻撃を受けて機能を停止してしまったのでここで応戦するしかなくて……。会長と、副会長と、元ちゃんが………っ！」

涙交じりにそれを言う巡さん。匙くんがどうしたっていうんだ!?

「あれを！」

ロスヴァイセさんが右手側を指差す。シヨップが立ち並ぶ歩道で、英雄派のヘラクレスが匙くんの喉元を掴んでいた!

匙くんは体中が血だらけとなっており、意識も失いかけている様子だ。その近くには倒れるソーナ会長と、ジャンヌと戦っている真羅副会長の姿が目に入った。

ヘラクレスはつまらなそうに匙くんを放り捨てると、倒れているソーナ会長の背中を踏みつける。

「ぐうっ！」

悲鳴をあげるソーナ会長！……倒れた女性を踏みつけるなんて、やり方が許せない！

ヘラクレスは嘲笑い吐き捨てるように言う。

「大公アガレスに勝ったっていうから期待してたのによ。こんなもんかよ」

「ふざけないでッ！子供の乗ったバスを執拗に狙ってきたくせに！」

真羅副会長が涙を流しながら激昂していた。普段、会長よりもクールな真羅副会長がそこまで表情を露わにするなんて……。

その理由は、ヘラクレスが子供たちの乗っているあのバスを狙ったから……？そんな卑劣なことをして、会長と匙くんを……！

僕が内心で怒りを爆発させようとしていると、ジャンヌが嘆息する。

「私はやめておけばって言ったけど？まあ、止めることもしなかったけれどっ！」

ジャンヌが周囲に聖剣を発生させ、副会長の足場を破壊する！

体勢を崩した副会長のもとにジャンヌが斬りかかる！

僕は瞬時に飛び出し、抜刀したグラムでその一撃を防ぐ！

「いい加減にしてくれないかな」

僕が低い声音で告げると、ジャンヌはグラムを見て仰天する。

「……………グラム!?まさか、ジークフリートが!」

「ああ、僕たちが倒した。グラムは僕を主あるじに選んだらしい」

ジークフリートが使っていた魔剣『グラム』『バルムンク』『ノートウング』『デイルヴィング』『ダインスレイブ』が僕を主あるじと認めてきた。

いつなにが起ころるか、本当にわからないよ。

「へっ!こんな奴らに負けるなんて、あいつもたかが知れていたってわけだ」

ヘラクレスはそう嘲笑う。……………彼らに仲間意識みたいなのは薄いのかもしい。

「じゃ、おまえもその程度ってことだな……………」

「——ッ!」

突然聞こえた第三者の低い声。

背後からの声に驚き、ヘラクレスが勢いよく振り向く。そして——、

グシャ!

紅の残光が走り、バツ字に体を斬られたヘラクレス!そのままその誰かに蹴り飛ばされて向かいの建物に突っ込んでいった。

その誰かは体中を血で真っ赤に染めており、表情はどこまでも冷たいものだ。

「ロ、ロイお兄様……………」

部長が困惑するようにその誰かの名前を呼んだ。そう、その血まみれの誰かはロイさんだったのだ。

ロイさんが顔の額を拭いながら言う。

「俺の血じゃねえから大丈夫だ」

大丈夫に見えないのですが、怪我をしているようには見えない。

ロイさんは続ける。

「ゲオルグ、だったな？この都市まちにいた英雄派はあらかた片付けたはずだが、確認したか………？」

ゲオルグは既に確認を終えていたのか、苦虫を噛んだような表情になる。

『あらかた』って、一体何人を斬ってきたんですか………』

僕たちが驚愕していると、ロイさんはこちらに目を向けて言う。

「さっさと子供を逃がせ。ここからは見せられねえ」

静かに紅のオーラを発しながら、ロイさんはゲオルグとジャンヌを交互に睨む。

二人が体を強張らせていると、ゼノヴィアとイリナさんが前に出る。

「ロイ先生、悪いが私も参加させてもらおう。せつかくデュランダルを鍛え直したんだ、暴れさせないとダメだろう」

ゼノヴィアはそう言うと、修復されたエクス・デュランダルを構える。

七本のエクスカリバーとデュランダルのハイブリッド、スペックは凄まじいものがあるだろう。

「私もいいものをもらって来たんだから！」

イリナさんが帯剣していた剣を抜き放つ。

今まで気づかなかったけど、あれは聖魔剣だ！

ロイさんもさすがに驚いていた。血まみれの顔で目だけを見開かれると、その、怖いんですが……。

現にバスの子供たちも怖がってしまっている。

それに構わずイリナさんは続ける。

「木場くんが天界に提供してくれた聖魔剣から作り出した量産型なの！これは試作品なんだけどね！」

なるだか、あの時の聖魔剣がこんな形で帰ってくるなんて、成長した子供が帰って来たように思える。

ロイさんは言う。

「まあ、それはいい。で、どっちだ？」

ロイさんは滅びの剣の切っ先をジャンヌとゲオルグの順に向ける。

横に並んだゼノヴィアは迷うことなくジャンヌに切っ先を向ける。

「ジークフリートに借りがあったんだが、木場や部長たちが倒してしまったのなら、仕方がない。——イリナの借りを返すでしょう」

ゼノヴィアの発言にイリナさんも同意する。

「そうよそうよ！あのときの借りを返すわ！」

イリナさんはそう言うのと、ロイさんとゼノヴィアを真似て聖魔剣の切っ先をジャンヌに向けた。

「あらあら、じゃあ、私も参戦していいかしら？手は多いほうがいいわ」

朱乃さんも相手をするようだ。相手が相手だ、油断はしないほうがいいだろう。二人だけだと不安というわけではないが、後衛がいたほうがいいだろう。

朱乃さんは両手のブレスレットを金色に輝かせると、背に六枚の墮天使の翼を出現させた。

アザゼル先生が用意したと思われるあのブレスレットで、朱乃さんは墮天使としての力を最大限発揮できるようになる。

ロイ先生が感嘆の息を吐き、ジャンヌの相手をする三人に言う。

「それじゃ、任せる。俺はゲオルグを殺るさ」

ジャンヌはジリジリと距離を離していき、背後に聖剣によって作られたドラゴンが出現させた。

手早く禁手^{パランス・フレイク}化を済ませたジャンヌはその背に乗り、三人に言う。

「私の相手は悪魔に天使、墮天使だなんて！私はモテモテね！」

ドラゴンは背に主^{あるじ}を乗せると、近くにある高層ビルの壁を高速で駆け上がり始めた。

ゼノヴィア、イリナさん、朱乃さんはジャンヌを追いかけて空中に飛び出していた。

ロイさんはそれを見送るとゲオルグに言う。

「で、いちおう英雄派の連中に聞いたが、なんだったけな……。ああ、そうだ。おまえらはあのデカブツを見に来たんだったな」

デカブツ——『超獣鬼』^{ジャバウオック}のことだろう。けど、どうしてバスを……。

僕たちの疑問に答えたのはロイさんだった。

「バスを狙ったのは、ついでか。いや——」

ロイさんは向かいのビルに目を向けると、

「この野郎がっ！舐めやがって！」

斬られた体から血を流すヘラクレスが瓦礫をどかしながら現れた。

ロイさんは嘆息して興味なさそうに言う。

「あいつが煽ったか。無抵抗の子供を狙うとは……。英雄？笑わせる……」

ロイさんが肩をすくめながら皮肉げに言うと、ヘラクレスは吼える！

「だったらおまえが戦え！子供を狙われたくねえだろ!？」

ロイさんは息を吐き、ヘラクレスに向き合う。

「いいぜ、かかってこい。『あいつ』の前にいい準備運動だ」

『あいつ』、京都で戦った小次郎のことだろう。

それを聞いたヘラクレスはこめかみに青筋を立て、ギチギチと拳を握る。

対するロイさんは静かに滅びの剣を握り直した。

僕たちの前で、ロイさんとヘラクレスの戦いが始まろうとしていた。

life02 ミサイルカーニバル

僕——木場祐斗の前で、怒りの感情を隠そうともしないヘラクレスと、ただ静かに紅のオーラを発するロイさんが睨みあっていた。

まったく動かないロイさんに、ヘラクレスが哄笑をあげる。

「へっ！大口叩いておいて、俺の神セイクリッド・ギア器ビびって動けねえか！小次郎からは『舐めてかかるな』とか言われたが、俺にかかれば造作もねえよ！」

ヘラクレスが飛び出し、オーラを込めた拳を振るう！

まっすぐ放たれた拳はロイさんに吸い込まれるように直撃した!?

盛大な爆音と共に爆煙がロイさんとヘラクレスを包み込む。

今の一撃、直撃したのか!?!ロイさんの防御力では耐えられない、いや、避けられたはずだ!?

僕たちの驚愕を払拭するように声が響く。

「……………で、どこを狙っている」

「——ッ！」

ヘラクレスは驚愕しながら声の主に目を向ける。そこには無傷のロイさんの姿が！

「な、なんでそこに居やがる！さつき殴ったのは………！」

驚愕するヘラクレスにロイさんは言う。

「おまえが殴ったのは残像とそこに仕込んだ直刀だ。それはそれとして、隙だらけだったぞ。おまえ、本当なら一回死んでる」

ロイさんがそう言った刹那、ヘラクレスの体に幾重もの切り傷が生まれた！時間差でダメージが発生したのか！

ヘラクレスはそれを意に返すことなく、青筋を立てる。

「テメエ、わざと止めを差さなかつたな！舐めやつて！」

ヘラクレスは再び飛び出すと、先程よりもオーラを込めた拳を、今度は路面に連続で繰り出す！すると、路面を走るようにロイさんに向かって大爆発が起こった！

ロイさんはそれを跳躍して避け、翼を展開して滞空する。

冷たい目でヘラクレスを見下ろすロイさん。ヘラクレスはあのヒトを見ながら舌打ちをした。

「どうした！逃げてばっかりかよ！」

ヘラクレスの挑発を無視して、ロイさんはあごに手をやりながら呟く。

「おまえの場合、その拳だけ注意すればいいだけだ。一定の間合いを保ち、ヒットアンドアウェイでやればいい」

ロイさんが言うと、ヘラクレスはさらにイラついた様子で全身を輝かせる！あれは、
禁手化だ！全身からミサイルを放つ、まさに人間武器庫！

ロイさんは特に気にした様子もなく、手に持つ剣の刀身を軽く撫でる。

「だったらこれで木っ端微塵だアアアアアアアッ！」

ヘラクレスの叫びと共に大量のミサイルが放たれる！それに対してロイさんは、

「フッ！」

短く息を吐きながら剣を投げた！投げた瞬間に次の剣を生み出し、次々と放っていく

！

投げられた剣の全てがミサイルに当たり、空中で連続した爆発が発生する！

全てのミサイルを撃墜され、ヘラクレスは焦りの表情を浮かべる。その瞬間、ロイさんが動いた！

高速でヘラクレスに接近、背後に回り込むと剣を大上段から振り下ろす！

ヘラクレスは、速度に対応しきれていない！

ズバッ！

肉が斬れる音が響く。ロイさんがヘラクレスの背中を袈裟懸けに切り裂いたのだ。

「——ッ——」

ヘラクレスは苦悶の表情になりながら振り向き様に拳を振るう。だが、ロイさんは余

裕でそれを避け、距離を取った。

距離を取ったロイさんに再びミサイルが放たれるが、ロイさんは剣を構えてその段幕に高速で突撃した！

次々とミサイルをは切り裂かれ、時間をおいてから爆発する。

ロイさんが速すぎて、ミサイルの爆発にラグが発生しているようだ。

時折、こちらにミサイルが飛んできそうになるが、ロイさんはそれらを最優先で処理していき、再びミサイルを全て切り裂いてみせた。

ロイさんが心底残念そうに息を吐いた。

「はあ……………。おまえ、火力だけか？よくそんなんでも英雄を名乗れるな」

「な、なんだと……………ッ！」

怒るヘラクレスだが、ミサイルの撃ちすぎたのか、息が荒い。

ロイさんはそれを見ながら言う。

「どちらにしろ、おまえの負けは決まっているんだがな……………」

ロイさんの言葉に僕たちは疑問符を浮かべる。

確かに、このままいけばロイさんが勝つだろう。だが、さすがに油断のしすぎではないのだろうか。

ロイさんは続ける。

「どんなにタフだろうが、火力があるろうが——」

ロイさんはヘラクレスを、いや、ヘラクレスにつけた傷を指差す。

「血がなけりや、動けねえからな」

——ッ！

ロイさんの狙いはそれなのか。多少時間はかかるだろうけど、確実に敵を倒せる方法。

夏休みに僕たちとソーナ会長がレーティングゲームをした際、イツセーくんをリタイアまでに追い込んだ作戦だ！

だが、ヘラクレスはそれを鼻で笑う。

「だったら、ぶっ倒れる前にぶっ飛ばしてやるよ！」

装填を済ませたミサイルを再び放つヘラクレス。ロイさんはそれらを切り裂きながら上空に移動していく。

ヘラクレスはもはや意地だけでロイさんを倒そうとしているように見える。そして、ロイさんはヘラクレスの全てを封じて倒そうとしている。

ロイさんはある程度の上空まで移動すると、突然翼を消した！

重力に任せて落下するロイさん！迎撃をするつもりはないようだ！

そんなロイさんに、ミサイルは容赦なく殺到する。そして、ミサイルが当たりそうに

も多くの血を流している。

ロイさんがボロボロになった路面に足をつけながら言う。

「ミサイルも脅威じゃねえな……………」

剣を肩に担ぎ、ヘラクレスを睨む。

ロイさんに睨まれたヘラクレスの表情が、ついに恐怖と絶望を感じるものに変わる。

しかし、懐に手を入れて何かを取り出した。

——ピストル型の注射器とフェニックスの涙だった。

まさか……………！

「ロイさん！ 気をつけてください！ 『カオス・ブレイク魔人化』をするつもりです！」

「なんだその、『カオスなんとか』って……………」

首をかしげるロイさん。あのヒトはあれの力を知らない！

あれは——！

僕が警告しようとした矢先、ヘラクレスはフェニックスの涙を頭からかぶり、注射器を首もとに突き刺してしまった！

ヘラクレスの体の至るところがボコボコと音を立てながら隆起していき、両足がまるで有機的なロケットのように代わり、火を吹く！

その勢いでヘラクレスの体は宙に浮き、体から生えるミサイルの数もさらに多くなっ

ていく！

あれは、セイクリッド・ギア 神器に使うドーピングのようなものだ！ジークフリートもあれを使い、僕たちを苦しませてくれた！

ヘラクレスは顔中の血管が浮かび上がらせながら、険しい表情となる。ジークフリートと同じだ、このままでは……………！

僕たちが助太刀に動こうとすると、ロイさんはそれを手で制する。

ロイさんは剣にさらに魔力を込めていき、紅の刀身がさらに濃く、いや、黒くなっていく……………。

ヘラクレスが苦しそうに叫ぶ！

『デメエら、全員塵になりやがれエエエエエツッ！』

そして放たれる大量のミサイル！もう十や二十ではきかない数だ！

ロイは剣を右脇に構え、そのミサイルによる段幕に突撃していった！ヘラクレスは上空にいる、翼を展開させずに行くつもりなのか？！

僕たちが困惑していると、ロイさんは跳躍し、自分に接近してくるミサイルの上に乗った！

そのミサイルを足場に再び跳躍、次のミサイルへ跳び、そして、再び次のミサイルへ、次のミサイルへと高速で跳び移っていく！

ロイさんに踏まれたミサイルは進路をずらされ、建物や路面に激闘、次々と爆発していった！

ミサイルを足場に高速で飛び出していったロイさんは、ついにヘラクレスの眼前にまで迫る！

『ちくしよおおおおおおおおおおおつ！』

ヘラクレスは右拳を引き、肘からジェット噴射のように火を吹き出させると、泣き叫びながら凄まじい速度で拳を放った！

その拳はロイさんに向かっていくが、

「フンッ！」

ロイさんは剣でそれを上で弾きあげてみせた！そして、ヘラクレスが無防備になった一瞬の隙に剣の刃にさらに魔力を込める。

僕がそれを確認した刹那、

グシャ！

肉が裂ける音が響き渡る。

ヘラクレスは自分の体に袈裟懸けにつけられた今まで以上に深い切り傷、いや、肉を削り取られたような傷から大量の血を吹き出し、そのまま落下していく。

ロイさんは少し遅れて着地し、絶望しきった表情で倒れるヘラクレスを一瞥する。

「英雄つてのは、自分で名乗るもんじゃねえよ……………」

ロイさんは返り血を拭いながらそう漏らすと、剣の切っ先をゲオルグに向ける。

あれが、部長の兄であり、戦争を生き抜いたヒト。今さらだけど、その事実を痛感させられた……………。

敵となったものをどこまでも追い詰め、二度と立ち上がらないように心を含めて殺す。

戦時中もこの様子だとしたら、天使や墮天使から恐怖の対象として見られて当然だろう。

僕たちの視界の先で、返り血で全身を紅く染めるロイさんの姿は、まるで僕たちの知るヒトとは全く違うヒトのように見えてしまった……………。

life03 謎の力

俺——ロイがヘラクレスを倒し、朱乃たちがジャンヌと戦っているなか、この場に残ったゲオルグを睨む。

まあ、曹操と小次郎がいつ現れるかわからないから、油断もできねえ。

遠目で朱乃たちが戦っている場所を見ると、極大の雷光と聖なるオーラが飛び交っているのがわかった。向こうは激闘を繰り広げているようだ。

で、問題はゲオルグだが、無傷のリアスたちと治療を済ませたソーナたち、そして俺がいるから、苦戦をしてもどうにかなるだろう。

ゲオルグは倒れるヘラクレスを一瞥し、苦笑する。

「強い。これが戦争を生き抜いた悪魔か。小次郎は、よくこんな奴と正面から戦えたものだ………」

確かに、あいつ何者なんだよ。いちおう考えはあるが、勝てるかは半分博打だ。

俺がそう思慮していると、ゲオルグは続ける。

「グレモリー眷属も力を増している。この調子では、そちらの猫又やヴァンパイアも情報通りにはいかないか」

小猫とギヤスパーを見るゲオルグ。二人はまだまだこれからだが、成長が楽しみですしようがない。きつと強くなるぞ。

俺がそんな期待をしていると、ギヤスパーの表情が青ざめていることに気づく。

「ギヤスパー、どうかしたの？」

リアスとそれに気づいたように、怪訝そうにしていたが、ギヤスパーは表情を崩していき、涙を流し始める。

どこか怪我でもしたか？いや、流れ弾も全て処理したはずだ……………。

「すみません、皆さん。……………僕……………僕！グリゴリの施設に行っても……………強くなれなかつたんです！」

……………そうか、ダメだったか。だが、まずは強くなりたいって気持ちが大事だと思うぞ。

俺はゲオルグに警戒しながら、嗚咽を漏らすギヤスパーの言葉に耳を傾ける。

「皆さんのお役に立ちたかったから……………強くなりたかったのに！『今のまま』では、これ以上は強くなれないって！」

その場に崩れ落ちるギヤスパー。だが、『今のまま』だったら、何か足りないってことだ。禁^{バランス・ブレイカー}手に至るためには、劇的な変化が必要になる……………。劇的な変化……………。

俺が考えを巡らせていると、ゲオルグはギヤスパーを見てつまらなそうに息を吐く。「亡き赤龍帝も、この後輩の姿を見たら浮かばれないだろう」

その一言を受けたギヤスパーは、きよとんとした様子で周辺を見渡す。景色とリアスたち、ソーナたちを見て、弱々しく言葉を発する。

そうか、劇的な変化か……………！

「……………イツセー先輩は……………？イツセー先輩がいないのは、あの大きな怪物を止めにいっているからじゃないんですか……………？」

「ギヤスパー、イツセーは——」

リアスが真相を伝えようとするが、俺はリアスに視線を送って首を横に振る。リアスもそれを確認して口を閉じた。

俺たち兄妹のやり取りに気づいていないゲオルグは口もとを笑ましてギヤスパーに話し始めた。

「赤龍帝は俺たち『禍カオス・ブリゲードの団』と戦い、戦死した。俺たちもその場にいたわけではないから詳しくはわからないが、死んだことは確かだ」

おかげで俺もキレているわけなんだが、妙にリアスたちが落ち着いているように見える。何かいい知らせがあったのかもしれない。

それを伝えないことをリアスの眷属たちも気づいたようで、一様に口を閉ざしてい

る。

俺たちのやりたいこともわかってくれていると助かるが……………。

ゲオルグの言葉は続き、それを耳にしたギヤスパアの表情は死んでいく。仲間の絶望しきった表情つてのは見ていて辛い、今は耐えるしかない。

「悔やむことはない。いかに赤龍帝であろうと、サマエルの呪いには勝てない」

ゲオルグはそう告げると、軽く笑う。

「……………イツセー先輩が……………死んだ?」

呆然とするギヤスパアの頬を涙が伝っていく。全身が震え、視線もおぼろげになっている。あいつの尊敬するイツセーの死を受けて、あいつの思考は絶望に染まっているはずだ。顔を伏して、沈黙し続ける。

少し前のリアスたちみたいになっているギヤスパアに、耐えきれなくなった小猫が近寄ろうとしたときだ——。

ギヤスパアはふらついた体を起こし、少しずつ顔をあげていく。

ギヤスパアの表情からは一切の感情を感じない、生気の抜けきった状態だった。だが、俺の第六感が告げている……………。

あいつは、危険だ……………!

ギヤスパアは小さく口を開き、呪詛のように一言だけ呟いた。

《——死ね》

その瞬間——。

まばたきもする暇もない一瞬でこの区域すべてが暗黒に包まれた。まるで、電気のポイントがいた部屋の明かりを一気に消されたように、景色がわからないほど真つ暗になった。

だが、その中でも確認できたことが一つ。

ギヤスパアの体から、この一帯を包み込んだ暗黒がにじみ出てきているのだ。

「……………なんだ、これは……………ツ！」

突然の現象にゲオルグは驚き、周囲を見渡す。

それに倣うわけではないが、俺も周囲を見渡す。一面が暗黒一色であり、ヒト以外何も無い。

なんとなく、あのM.S. 神様に会った場所を思い出してしまった。

それはそれとして、

「バラス・ブレイカー」
「禁 手とは違う、暴走でもない。なんなんだよ、これ。桁違いだぞ……………」

俺はぼそりと漏らす。何か起こることは予定通りだ。だが、予想をはるかに越えてきた！

暗黒の領域の中央で、さらに深い闇に包まれた人型の何か、ゲオルグに近づいてい

く。首は明々後日の方向に折れ曲がり、肩を痙攣させ、足を引きずりながら一歩ずつ、確実にゲオルグに詰めよっていく。

その双眸は赤く、不気味に鈍く輝いていた。

《コロシテヤル……ッ！オマエラ全員、殺シ尽クシテヤル……ッ！》

ギヤスパアの声じゃねえ！まるで、呪詛だと怨念だと、ヤバイもん全てを孕んだような声だ！

俺は困惑しながら、本気でリアスを心配しながら言う。

「切っ掛けがあれば何かが起こると思っただが、ここまでとはな……。リアス、ギヤスパアに失礼だが、こいつ、何者だ……。？」

「……ヴァンパイアの名門ヴラディ家がギヤスパアを蔑ろにしたのは、これを知っていたから……。？恐怖から……。城から離れさせた……。？」

リアスは声を震わせながらそう漏らす。

黒い怪物となったギヤスパアが、手と思われる部位を前に突き出す。

ゲオルグが反応して魔方陣を展開するが、その魔方陣が闇に食われていく。

「……ッ！なんだ、これは！魔法でも、セイクリッド・ギア神器でもない！どうやって、我が魔方陣を打ち消した!!」

ギヤスパアの行動に驚愕するゲオルグは、距離を取って攻撃魔方陣を展開。そこから

あらゆる属性、魔法術式が入り乱れたフルバーストをギヤスパーに放つ！あれを食らえば、さすがに大ダメージになる！

暗黒の世界にいくつもの赤い目が出現し、妖しく輝いた。

刹那、撃ちだされた攻撃魔法が全て停止した。

停止の邪眼のようだが、いつもと規模がまるで違う！視界外のものまで止めやがったぞ！

停止した魔法が闇に喰われていく……………。

ゲオルグの表情から余裕が消え失せ、恐怖に彩られていく。

歩みを再開するギヤスパー。生き物とは思えない存在感と動きでゲオルグに近づいていく。

ゲオルグは霧を操り、ギヤスパーを包み込もうとする！だが、闇はそれさえも喰らい尽くしてしまう！

《……………喰う……………くう……………クウ……………喰ってヤツた……………おマエの霧モ魔法も……………全部……………》

本当にギヤスパーなんだよな……………？言動がまったく違うぞ……………。

神滅具ロンギナスを完全に封じきり、魔法も効かない。ゲオルグが、まったく相手になっていない！

ギヤスパー、こいつ、何になっちまうんだ!? 悪魔でもドラゴンでも、ヴァンパイアなのかさえわからねえ!

ゲオルグは必死に抵抗をしていくが、全てが停止され、闇に喰われていく。

ゲオルグの周囲の闇がうごめき、獣のような何かが形作られていく。狼のようであったり、ドラゴンのようであったりするが、口が二つあったり、目が一つだったり、どれも正しい形しているわけではない。

それらの生物がゲオルグを囲み、不気味な唸り声をあげる。

あれも、ギヤスパーが作り出したのか……………?

「くっ! 霧が、魔法が効かぬ! なんだ、こいつは! いったい、なんだというんだ!」

ゲオルグの表情からは絶望しか感じない。この戦い、いや蹂躪ももうすぐ終わるだろう。

「これが、ギヤーくんの本当の力……………」

呆然と眺める小猫を口からそれだけを絞りだした。友達の変化に困惑している様子だ。

「……は、退くしかない……………」

ゲオルグは抵抗を諦め、逃げの一手に出るために転移魔方陣を展開した!

野郎、逃げる気か! まあ、俺でも逃げるしかねえけどな!

俺が阻止するために飛びだそうとした矢先、ゲオルグの体に黒い炎が絡みついた！
あれは、匙か！

俺は匙の方に目を向ける。治療を済ませて意識が回復した様子の匙はゲオルグを睨み付けていた。

「……逃がさねえよ。おまえら、俺のダチをやったんだ。——ただで済むわけねえだろ！」

ドスの利いた声音で匙が言うと、ゲオルグを捕らえる黒い炎が大蛇のようなシルエツトを作りながら、怨嗟の呪法でゲオルグを捕らえ続ける。

黒き龍王の炎。捕らえたものの命を吸い尽くし、体を焼き尽くすまで絡みつくと囁かれている。

ゲオルグは懐からフェニックスの涙を取り出す、それさえも黒炎が飲み込んでいく。

「……………ヴリトラの……………呪いか……………ッ！」

声を絞り出すゲオルグ。追い詰めたと思っていた男からの反撃、か。

完全に動きを封じられたゲオルグに、闇から生み出された獣たちが襲いかかってくる。

俺たちを散々苦しめてきた霧使いは、静かに闇に喰われていった……………。

闇が晴れ、元の首都リリスの風景に戻ったとき、ギヤスパーは路面に横たわっていた。ゲオルグはいない。完全に闇に喰われたか……………。

俺はギヤスパーに近づき、顔を覗きこむが、すやすやと寝息を立てているだけだ。さっきので消耗しすぎたのか、今は寝ているが、本当に、何だったんだろうか……………。

俺の横に来たりアスが気かを優しく抱き寄せて髪をそつと撫でる。

「……………この子について、ヴァンパイアに訊かなくちゃならないことができたわね。けれど、ヴラディ家が質問に答えてくれるかはわからないわ……………」

ヴァンパイアは悪魔を、いや、ヴァンパイア以外を嫌う。話を聞いてもらえないのは当然なのかもしれない。

ロスヴァイセが口を開く。

「ヴァルハラに戻ったとき、興味深い話を聞きました。——なんでも、とある吸血鬼の名家に神滅具ロンギヌス所有者が生まれ、吸血鬼同士で争いが勃発してしまつた、と」

なかなか物騒なときなつてきたな。これは、また面倒事の予感だ。

俺がため息を吐くと、背後から気配を感じた！

「あらら、ヘラクレスがやられてしまったようね。ゲオルグも……………？これはまいったわ」

現れたのはジャンヌだ！満身創痍の様子だが、小さな男の子を脇に抱えている！

「待て！ジャンヌ！」

「子供を人質にするなんて、卑怯よ！」

「……………やられましたわね。逃げ遅れた親子連れがいたなんて」

ゼノヴィア、イリナ、朱乃が苦渋に満ちた表情で合流した。

察するに、ジャンヌはあの子供を人質にして逃げてきたようだな。

対峙する俺たちとジャンヌ。ジャンヌは手に持つ聖剣の切っ先を子供の首もとに突きつける。

悪魔の俺が言えた義理じゃねえが……………。

「卑怯だな。英雄が聞いて呆れるぜ」

ジャンヌはそれを聞いておかしそうに笑う。

「悪魔が言うものではないのかしら？——とりあえず、曹操と小次郎を呼ばせてもらうわ。あなたたち、強すぎるのよ」

「その子、怖いだろうが、しばらく我慢してくれ。必ず助ける」

俺は怖がっているであろう男の子に声をかける。

俺としては、小次郎から来てくれるのはありがたい。が、曹操まで来られると辛いものがあるな……………」

すると、男の子は存外平気そうに答えた。

「ううん。ぜんぜんこわくないよ。おっぱいドラゴンがもうすぐきてくれるんだ」

一切の怯えも不安もない、安心しきった表情だ。最近の子供って、肝が座ってんな……………」

男の子は続ける。

「ゆめのなかでやくそくしたんだ。おっきなモンスターをみてこわいっておもってねていたら、ゆめのなかにでてきてくれたんだよ」

夢？ イツセーが夢に出てきたのか……………」？

男の子は元気そうに語る。

「もうすぐいくから、ないちゃダメだつて。まほうのじゅもんをとらえたら、かならずもどつてきてくれるつていったんだよ！」

男の子は人差し指を突き出し、宙に円を描いていく。

「こーやって、えんをかいて、まんなかをゆびでおすの！ ずむずむいやーんつて、これをやればかならずもどつてきてくれるつて！ みんなもおなじゆめをみたんだよ！」

皆、同じ夢を見た？ イッセーの夢を子供たちが……？

疑問の尽きない俺たちの前で子供は空に向けて歌を歌いだした。

「とあるくにのみつこに、おっぱいだいすきドラゴンすんでいる〜♪」

その時だ。俺たちが待ち焦がれた、あいつのオーラを感じ取れた。

そうだ、おまえが簡単に死ぬわけねえよな。そうだろ、イッセー！

英雄の帰還が、間近に迫ってきていた！

l i f e 0 4 圧倒的な力

俺たちがジャンヌを睨みつけていると、ここに近づいてくる気配が一つ。

これは、俺たちが待ち焦がれたあいつの！

俺が一人、笑みを浮かべていると、その気配の主は俺たちとジャンヌの間に割り込むようにして降り立った！

「兵藤一誠！ дайまいま帰還致しました！」

大声でそう叫びながら到着したのは、死んだはずのイツセーだ！ 何でかはともなく、生きていたのか！ で、オフィスも一緒なんだな。オフィスはイツセーに並ぶように横に着地していた。

俺はホツと息を吐いているが、リアスたちは突然のことだったからかキョトンとしていた。

な、なんか反応してやったほうがいいよな……………？

俺は苦笑しながらも声をかけようとする、イツセーが笑みを引きつらせながら口を開く。

「えーと、おっばい！ グレートレッドに乗って帰ってきましたー！」

何を言ってるんだ……、こいつ……。

俺が口もとを引きつらせていると、

「イツセー!」

「イツセーさん!」

「「「イツセーくん!」」」

「イツセー先輩!」

「兵藤くん!」

「兵藤、生きてたのかよ!」

俺以外の面々が一齐に名前を呼んだ!こいつら、『イツセー!おっぱい』って思っているだろ!?

俺はため息を吐き、イツセーに言う。

「ま、とりあえず無事で——」

「ロイ先生!?!血まみれじゃないですか!?!」

「俺の血じゃねえ」

またこのやり取りか。まあ、いきなり会って血まみれじゃ、そう思っただけか……。それはそれとして。

俺はちらりと木場に視線を送り、小さく頷く。木場が頷き返した瞬間に二人同時に駆

け出す！

イツセーの登場に間の抜けた表情になっていたジャンヌは、俺たちの接近に気づくの無駄な時間を費やしている！

「しまっ——！」

「遅いッ！」

「隙だらけだよ！」

再び男の子の首に聖剣を突きつけようとするが、もう遅い！

俺がその聖剣を弾き飛ばし、木場が男の子を回収。そのままジャンヌを袈裟懸けに叩き斬る！

「そ、そんな……………」

大量に血を流しながら、仰向けに倒れるジャンヌ。これで、終わりだな。英雄派もだいぶ減ってきた。

俺たちは元の場所に戻り、木場が抱えていた男の子を降ろす。

「イツセー、ナイスタイミングだったぞ。人質を助けられた」

俺はサムズアップをしながらイツセーにそう言った。イツセーはよくわかっていない様子だったが、「人質」の言葉と男の子を見て、ある程度察してくれたようだ。

「……………で、説明を頼む」

俺がイツセーに言うと、イツセーは頷いて説明を始めた。

「えーと、まずは――」

話を要約すると、

「サマエルの毒で体はダメになったが、オフィスの力を借りて、グレートレッドの体の一部で体を再生させた、と」

俺は冷静に言うが、横のロスヴァイセは間の抜けた表情になっていた。

そのロスヴァイセが言う。

「生きているとは思いましたが、まさか、そんな方法で助かっているとは……………予想の範疇を越えていたというか……………」

確かに、なかなかぶっ飛んではいるな。まあ、一番驚いているのはイツセー自身のよ
うな気もしなくもないが……………。

俺があごに手をやりながらそんな事を思っていると、イツセーが遠慮がちに言う。

「それはいいんですけど、その、ロイ先生？」

「ん？」

「いつまで血まみれなんですか？」

俺はその一言で改めて体を見る。服と肌も血まみれだ。後でシャワーでも浴びよう。

「ま、後でシャワーでも——」

「今落としてください」

ソーナとロスヴァイセはそう言うと、俺の頭上に魔方陣を展開、そこから大量の水を流してきた！

バシャン！

「……………」

頭から水を被った俺。なかなかの水圧で魔力を込められていたからか、あっさりと血は落ちたが……………、

「へ……………へ……………へックションッ！」

盛大なくしやみをした！いきなり水は辛いつて！冷たいし、痛いしで風邪ひいちまうだろうが！

俺が腕を組むように体を擦りながら、ソーナとロスヴァイセに抗議の視線を送るが、二人には無視されてしまう。

俺たちがそんな事をやっていると、どこからか第三者の声が発せられた。

「まさか、グレートレッドと共にキミが現れるなんてね」

声の主がいるほうに目を向けてみると、そこには曹操が立っていた。

曹操は槍を手に持ち、倒れるジャンヌとヘラクレスを見て目を細める。

「……………わずかな間で超えられたというのか。ジークフリートも、ヘラクレスも、ジャンヌも『魔人化』カオス・ブレイクを使ったはずなのだが……………」

ぶつぶつと何かを言いながら、やられた仲間よりもその理由を心配しているようだ。

曹操の登場に全員の意識が戦闘に戻る。こいつの強さを知っているからな。だが、あいつがいない。どこだ？

俺は曹操を警戒しながらも小次郎の気配を探る。だが、近くにはいないようで、気配を感じとることはできない。

曹操は異質なものを見るような視線をイツセーに送る。

「サマエルの毒を塗った矢を受けたと聞いていたが、それを受けたとなれば、キミの助かる可能性はゼロだった。それを自力で帰還するなど……………っ！」

また一人でぶつぶつと言っていてやがる。とりあえず、すぐに仕掛けてくるってわけでもなさそうだ。

イツセーは曹操を警戒しながらもリアスに言う。

「リアス、俺をもう一度、あなたの眷属にしてください」

リアスは懐から紅い『兵士』^{ポイン}の駒が八つ。イツセーに入っていたものだ。

リアスが駒をイツセーに向けると、それに応えるように輝き始めると、静かにイツセーの体の中に入っていった。

そして、二人は優しくキスをすると、抱きしめあう。二度と放さないと言うように、二度と離れないと言うように……………。

俺はそれを横目に確認しながら、嫌な気配を感じ取れた。そう、この気配は……………。「お二人さん、熱々のところ悪いが、新手だ」

俺は気配のしたほうに目を向けると、黒いもやのようなものが発生し、そこから鎌を持ち、道化師のような仮面をつけたローブの何かが現れた。

最上級 死 ^{グリム・リッパ} 神……………プルートのだ。

リアスたちもプルートの登場に驚きながらも再び戦闘態勢を取る。

プルートがどこからか不気味な声を発する。

《先日ぶりですね、皆様》

「またおまえか。ハーデスの野郎」

そのうち、滅ぼしてやらねえと……………。

その言葉は飲み込んだ。言ってしまうと、後で何を言われるかわからない。

俺は続ける。

「……………で、今回は何をしにきやがった」

《ハーデス様のご命令で、オーフィスが出現したら、何がなんでも奪取してこいと》

プルートの視線がイツセーの隣に立つオーフィスに注がれる。ハーデスの野郎、まだ諦めていなかったのかよ！

俺が直刀を生成しながら前に出ようとすると、

「プルートの相手は俺がしよう」

再び響く誰かの声。まあ、聞き覚えはあるがな。

俺たちと曹操、プルートの間に光の翼と共に舞い降りてきたのは、純白の鎧を纏ったヴァーリだ！

「帰ってきたか、兵藤一誠」

「ヴァーリッ！」

イツセーの復活にあわせて次々と現れるな。ま、プルートをヴァーリがやってくれるのなら、俺は休んで体力温存といこう。次が控えているからな。

ヴァーリがプルートに言う。

「あのホテルの疑似空間の借りをどこかにぶつけたくてな。だが、ハーデスはアザゼルたちに、英雄派はグレモリー眷属とロイ・グレモリーがやってしまったんでな。だから、

残った候補はおまえだけなんだよ、プルート」

大胆不敵に告げるヴァーリ。表情はいつもと変わらないようだが、言葉に若干の怒気を感じられる。

ヴァーリ、かなりストレスが溜まりまくっているな。

プルートが鎌をくるくると回してヴァーリに構える。

《ハーデス様の元にフェンリルを送ったそうですね。先ほど、連絡が届きましたものです。神をも殺せるあの牙は脅威です。——忌々しい牽制をいただいたものです》

「そのためのフェンリルだからな」

《神との戦いを念頭に置いた考え方ですね》

「あれぐらいの交渉道具がないと、神仏を正面から相手にはできないからな」

《まあいいでしょう。しかし、真なる魔王ルシファアの血を受け継ぎ、白龍皇であるあなたの倒せば、私の魂は至高の頂きに達することができそうです》

それを受けたヴァーリは、兜をもとの状態に戻すと言う。

「兵藤一誠は天龍の歴代所有者を説き伏せたようだが、俺は違う」

ヴァーリが言うや否や、特大のオーラを纏い始める！あいつ、いきなり手加減なしの

フルスロットルかよ!?

「歴代所有者の意識を完全に封じた『ジャガーノート・ドライフ覇龍』のもうひとつの姿を見せてやろう」

光翼が広がり、大量の魔力を放出させていく。純白の鎧が神々しい光に包まれていく。

そして、ヴァーリは力ある言葉を発していく！

「我、目覚めるは——律リッの絶対を闇に堕とす白龍皇なり——無限の破滅と黎明れいめいの夢を穿ちて覇道を往く——我、無垢むくなる龍の皇帝と成りて——」

ヴァーリの鎧の形状が変わっていき、白銀の閃光を放ち始めた。

「「「「「汝を白銀の幻想と魔道の極致へと従えよう「「「「」

『ジャガーノット Juggernaut オーバー Over ドライブ Drive!!!』

そこに現れたのは、白銀の鎧に包まれた極大のオーラを解き放つ、別次元の存在だった。周囲にあつた車や公共物が何もしていないというのに潰れていく。

ヴァーリ、やはり化け物だな……………！

ただ見ているだけで冷や汗を流す俺をよそに、ヴァーリが言う。

『エンピレオ・ジャガーノット・オーバードライブ白銀の極 覇 龍』、俺だけの強化形態。この力、とくとその身に刻めツ！」

プルートは怯んだ様子もなく、残像を残しながら高速で動き回り、赤い刀身の鎌を振るう！

速いッ！だが、俺でも見えるということ、ヴァーリには遅く見えているはずだ。

俺はヴァーリなら避けるだろうとふみ、そのままプルートの動きを目で追っていく。

プルートの体が半分になり、さらに半分にと体積を減らしていく。

《このようなことが……このような力が……ツ！》

プルートも信じられないように叫ぶが、ヴァーリは容赦なく言い放った。

「――滅べ」

目で見えなくなるほど圧縮されたプルートの叫びは聞こえることがなくなった。そして、最後に空中で震動が生まれたと同時に、プルートは完全に消滅した……。

最上級死神にしては呆気なく、微塵の欠片も残さずに消えていった。

l i f e 0 5 悪魔と侍

白銀の鎧から通常の鎧に戻ったヴァーリはかなり消耗したのか、肩で息をしていた。最上級死神を完封で倒しやがった。こいつ、どこまで強くなるつもりなんだ……………？

リアスたちも目の前の男の前に言葉を失っていた。

「……………恐ろしいな、二天龍は」

そう言いながら、曹操が近づいてくる。

「やはり、あの時『ジャガーノート・ドライブ覇龍』を使わせなくて正解だったな……………」

曹操なりの賛辞が送られたヴァーリは息を吐く。

『ジャガーノート・ドライブ覇龍』は破壊という一点に優れているが、代償が大きすぎる。今の形態はその代償をできるだけ省いたものだ。それに、まだ伸びしろもある。曹操、仕留められるときに仕留めなかったのは、おまえの失点だ」

ヴァーリの言葉を受けた曹操はイツセーに視線を移す。

「兵藤一誠、キミは何者だ？」

突然の問いに首をかしげるイツセー。何者かと訊かれても、イツセーはイツセーだし

な……………。

答えないイッサーに曹操は言う。

「自力でここまで帰ってこられたキミは形容しがたい存在だ。天龍どころか、真龍、龍神に当てはまるわけでもない……………。だからこそ、キミはいつたい——」

「おっぱいドラゴンでいいじゃねえか」

いい加減面倒になったのか、イッサーはそう断じた。曹操は一瞬間の抜けた表情になるが、すぐに苦笑して頷いた。

「……………なるほど、そうだな。わかりやすいね」

それだけを確認すると、曹操は聖槍をこちらに向けてくる。

「さて、どうしようか。俺と遊んでくれるのは兵藤一誠か、それともヴァーリか、もしくはロイ殿が。または全員で来るか？ いや、さすがにそれは無理だな」

挑発的に言う曹操。確かに、ここにいるメンバー全員でかかればやれるだろう。さっきのヴァーリを見れば、余計だろう。もう一度使えればの話だが……………。

俺がそう思慮していると、

「では、ロイ殿の相手は拙者せつしゃがしよう」

突然響いた第三者の声。この声、ようやく出て来やがったか！

俺は声の主を睨むように視線を送る。視線の先では、見るからに侍と思わせる格好

に、身の丈にもなる太刀を背負った男性が不敵に笑んでいた。

「待っていたぞ、小次郎………！」

「おう、待たせたな」

侍——小次郎は笑みを崩さずに言うのと、倒れる仲間たちを見て瞑目した。

「やれやれ、あれほど油断するなと申したのに………」

倒れた仲間への苦言を言うとは、若干とはいえ、仲間意識があるということか？

俺は一步前に出つつ、リアスたちに言う。

「おまえら、邪魔しないでくれよ。ようやく見つけたんでな」

「ロイお兄様!?ここは全員で——」

「リアス・グレモリー、であつたな」

リアスの声を遮ったのは小次郎だ。目を細めてリアスを睨みつけながら、続ける。

「女であるお主にはわからぬと思うが、男とは元来そういうものよ」

「ああ、そういうもんだ」

俺はそう言いながら右手に直刀を生成、一步ずつ小次郎に近づいていき、言葉を続ける。

「理屈とか、そんなもんは関係ねえ」

「一度、好敵手と認めた者と出会ってしまえば………」

俺と小次郎がお互いの間合いに入ったとき、

「一対一の勝負がしたくなる」

俺と小次郎の声が重なった。存外、こいつとは馬が会うかもな。だが、こいつは敵だ
.....。

俺は小さく振り向きながらリアスたちに言う。

「だから、邪魔はしないでくれ。曹操はイツセーに任せる」

「はい！」

「わかりました。必ず、勝ってください」

イツセーはやる気をみなぎらせながら返し、リアスは心配そうに返してくれた。なら、問題は無い。

俺は小さく笑みを浮かべ、小次郎に視線を戻す。俺の視線を受けた小次郎は構えを取った。

「さて、これが最後の手合わせかもしれないな」

「ああ、ここで最後にしたいもんだな」

俺も構えを取り、ゆっくりと息を吐くと小次郎が表情を引き締める。

『カオス・リーグ』
「禍の団」英雄派、佐々木小次郎」

俺は突然の名乗りに一瞬驚いたが、すぐに意を察してそれに返す。

『紅髪クリムゾンの切り裂き魔』、ロイ・グレモリー』

一瞬の静寂。そして……………、

「ぐや——」

「押し——」

「——参るッ！」

俺と小次郎は同時に刀を振り、得物を激突させる！激しく火花を散らしながらお互いの得物が激突したわけだが、小次郎の太刀は消滅せずに形を保っている！

俺はそれをまるで突然のように受け入れると、そのままラツシュに入る！小次郎も見えるように剣撃の速度を上げていく！本当に人間なのかを疑う速度だ！

お互いに次の一手を読み合い、防ぎながらも同時に打ち込んでいく！一瞬の判断、反応が遅れば確実に一撃をもらってしまおうだろう！

小次郎の突きを直刀で受け流し、そのまま首を取りに行くが、小次郎が刃を返して太刀を振り抜いてくる！

俺は刹那的にそれを察知、攻撃を中止してそれを防ぐ！

再び火花を散らすお互いの得物。

つばぜり合いながら、俺と小次郎の視線が交差する。こいつの目、本気で楽しんでる奴のそれだ。だが……………！

俺は一気に押し返し、小次郎の太刀の刀身を左手で掴む！太刀の動きを制限し、直刀で渾身の突きを放とうとした瞬間、

「ふんッ！」

小次郎が太刀の柄頭を叩いてスライドさせ、俺の左手の平に傷をつくる！不意打ちでそれをしてきたことで俺の体制は崩れ、その隙を見逃さずに太刀の一振りが放たれるが、無理やり体を捻ってそれを避け、追撃を警戒してその場を飛び退く。

俺は左手の平についた傷を一瞬眺め、小次郎に視線を戻す。傷からは血が出ているが、そこまで大量というわけでも、深いわけでもない。

小次郎は刀身についた血を空振りして飛ばし、再び構える。

俺も改めて直刀を構え、流す魔力を少し多めにする。奴の太刀、どういう理屈かはわからないが滅びが通じない。刀鍛冶がいい仕事をしたのか、それとも小次郎自身が何かをしたのか、根本的に俺の滅びが弱すぎるのか。それを確かめるためだ。

俺は深く息を吐き、そして飛び出す！小次郎もそれに反応するように足を踏ん張り、俺との衝突に備える。

そして、お互いの一撃が放たれた！

ガキイイン……………！

夢い金属音が響き渡る。

「……………マジかよー」

俺は毒を吐きながら素早くその場を飛び退くと、俺のいた場所に銀光が振り下ろされた！

俺は手に握る物を見ると、直刀の刀身がキレイに折れて、いや、斬られていた！

魔力で作った物を斬るって、いったい何なんだ……………！

俺は驚愕しながらも小次郎を睨む。小次郎は息を吐きながら、笑みを浮かべる。

「一刀に全てを懸ける。そうすれば、斬れぬものはない」

一刀に全てを懸ける、か。無駄に手数が多すぎるってことか……………？いや、違うな……………。

俺は直刀を修復し、小次郎を睨みながら苦笑する。

「何となく、俺に足りないものが見えた気がするな」

「ほう、それは？」

俺は息を吐きながら正眼に直刀を構え、小次郎に返す。

「全てを懸ける『覚悟』ってやつだ。昔、一度だけそれをしたことがあったが、毎度やっているつもりで、それつきりだったんだな」

コカビエルと初めて戦ったあの時、文字通り俺は死ぬ覚悟で戦った。あれから何度も戦ううちにそれを感じなくなっていたのは、慣れなんじゃなくてしていなかっただけ

だったようだ……………。

俺の言葉を受け、小次郎の表情が今まで以上に引き締まる。ようやく本気というべきか、それとも、俺の言葉で吹っ切れさせちまったのか……………。

小次郎は迫力のある声で宣言する！

「では、次の技で仕舞いとしよう！」

「ああ、次で決める！」

俺は応えるように体から静かにオーラを放ち、その全てを直刀に集中させていく。

次の一撃以降は考えない。何としても次で決める。決めきれなかったら、終わりだ……………！

俺と小次郎はジリジリと間合いを計り、必中の距離を探る。得物のリーチは向こうが上だが、速度ならこちらが若干上だろう。それでも防がれるのは、小次郎の勘と技が巧いからだ。

回避も防御もできないタイミングで、次の一撃を放つしかない……………！
極限まで集中し、お互いの間合いを計り終えた瞬間、小次郎が叫んだ！

「秘剣——『燕返し』ツ！」

京都の時と同様、まったく同時に三つの剣撃が向かってくる！

あの時、俺は防御と回避を念頭に動いた。その結果があれだ。なら……………！

俺は防御も回避もせず、三つの劍撃をギリギリまで引き付けると、一気に小次郎の懐に飛び込み直刀を袈裟懸けに振り降ろす！

「フッ！」

「——ッ！」

斬った勢いで小次郎の背後まで行く俺。手に確かに斬った感覚。

俺は数歩前に歩き、後ろを振り向く。

「がはッ！」

体を深々と斬られ、血を吐く小次郎。持っていた太刀を落とす、俺のほうを向いてくる。

そして、苦しそうに笑みを浮かべ、

「見事だ………」

と、一言だけ呟き、背中から倒れた。その表情は満足げであり、今の結果を受け入れ、俺を恨むこともない。

俺は直刀で空を切り、刃についた血を消失させる。

「……………」

俺は無言で倒れた小次郎を見つめ、瞑目。

「佐々木小次郎、討ち取ったり……………」

そう漏らし、俺もぶっ倒れた。もう、限界……………。

俺は荒れた息を整えていると、リアスの心配の声が聞こえた。

「ロイお兄様！大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫だ……………。ちよつと、張り切りすぎた」

俺は上体を起こし、リアスに笑みを向けてやる。それと同時に気づいたことがひとつ。

リアスの胸が、少し小さくなっている……………ツ！ま、まさか、例のビームを撃つたのか!？」

「リ、リアス。もしかして、また……………」

「使いましたが、それがなにか?」

リ、リアスウウウツ!?何言っているんだ!?もしかして、胸を変なことに使われるのに慣れちゃったのか!？」

俺が驚愕していると、上空から木場が降りてきた。

「部長、ロイさん。申し訳ありません。曹操とゲオルグを逃がしました」

「……………とりあえず、イツセーも勝つたのか?」

「はい」

俺の問いに頷く木場。なら、安心だ。

こうして、首都リリスの各地で起こった旧魔王派による反乱と英雄派による攻撃は鎮
庄。そして、各地で進撃していたデカブツたちの殲滅も成功し、冥界壊滅の危機は、ど
うにか回避されたのだった。

life 06 少しの変化

あれから数日。

いつも通りの教師仕事を終えた俺——ロイは、いつも通りにオカ研の部室に来ていた。

そして、アザゼルから重大なことを伝えられたところだ。

「総督を更迭、か。ま、そうだよな」

アザゼルが総督を辞職したのだ。俺たちを無断でオフィスに会わせたことへの責任を取ったとかなんとか。

アザゼルは耳をほじりながら嘆息する。

『ま、そうだよな』って、ずいぶんと軽いな。仕方ねえだろ。うるさい連中に黙ってオフィスなんざを連れて来たんだからよ」

「で、おまえの肩書きはどうなった？」

俺が訊くと、あれからは考え込むように首をひねる。

「うーん、この地域の『監督』ってところだな。グリゴリだと『特別技術顧問』って感じになってる」

監督で技術顧問か。なんか……………」

「……………変わったような、変わらないような」

イツセーが苦笑しやがらそう漏らした。俺も同じ事を考えていたところだ。

「ま、そういうことだ。今の総督はシエムハザになった。副総督はバラキエルだ。あー、さっぱりした！こう堅苦しいのは頭の堅い連中の方がお似合いだ。これで安心して趣味に没頭できる」

なんか、見たことがないほど開放的な表情をしているんだが!?!こいつが余計に自由にやりだしたら、俺やロスヴアイセだけじゃ止められねえぞ！

などと思いつつ、俺は魔方陣から封筒を取り出す。

「話を変えるが、昇格試験の結果が出た。そんなわけで、監督、頼んだ」

そう言いながらアザゼルに封筒を渡す。

「監督呼ぶな。いきなりからかいやがって」

アザゼルは愚痴りながら封筒を受け取り、中から書類を取り出す。まあ、アザゼルは既に結果を聞いていると思うがな。

顔だけ驚くイツセーをよそに、アザゼルは発表する。

「まず、木場。合格だ。おめでどう」

「ありがとうございます」

木場は書類を受け取り頭を下げる。

「次に朱乃お前も合格だ。バラキエルに言ったら男泣きしてたぞ」

「もう、お父様つたら。ありがとうございます」

顔を赤くしながら書類を受け取る朱乃。

そしてラスト一枚、イツセーのものになった。

「最後にイツセー」

「は、はい！」

名前を呼ばれ緊張気味に返事をしたイツセー。イツセーは何とも言えない表情をしていた。

やってみて可もなく不可もなくって感じだったんだろうな。

そんなイツセーのことを知ってか知らずか、アザゼルは早々に告げる。

「お前も合格だ。おめでとさん」

「……………や、やったああああ！」

イツセーは万歳をしながら大声を上げていた。

一応アザゼルが言っていないことを伝えておこう。

「で、三人とも。正式な授与式は後日連絡があるから気を付けろよ」

「は、はい！」

「わかりました」

「わかりましたわ」

「ならOKだ。それとイツセー」

俺はイツセーに指を突きつける。

「な、何でしょうか？」

「お前の復活劇はもう上役の語り草になつてる。現魔王派の対立派閥はお前に畏怖し始めてるぐらいだ」

「な、なんでですか？」

「殺しても死なないからだよ。最強の龍ドラゴンスレイヤー殺しても死なず、グレートレッドの力を借りて体を新しく作って自力で次元の狭間から帰還したんだぞ」

「そうだぞイツセー！お前どんだけだよ！本っ当におかしいぞ？もはや存在がな」

言われてるイツセーはわかってない感じになつてるが仕方ないか。ま、中級悪魔だが頭ぶが少し、なあ？

それはそれとして、デカブツこと『超獣鬼』ジャバウオックはイツセーと義姉ねえさんたち『ルシファー眷属』、そして偶然現れたグレートレッドが倒したことになる。だが、実際はイツセーとグレートレッドが一時的に合体して倒したらしい。

この事は一般の悪魔には知らされていないことだ。要らん混乱が生まれそうだから

な。

俺がそういう思っていると、アザゼルが話を続けていた。

「ここまで来たらあれだ。世界中にいる悪い奴はお前が倒せ。そしたら俺たちが楽できる」

「確かに、俺は面倒は嫌いなんでな」

俺たちの意見を聞いたイツセーはすごくイヤそうな顔をしていた。

仕方ないだろう、イツセーの夢は平和にハーレムを作ることだからな。ま、もう出来ているような気もするがな。

「ところでアザゼル先生、ロイ先生。英雄派のその後は？」

イツセーの質問に俺が答える。

「気になるか？ハーデスや旧魔王派の横やりがあつてか、正規メンバーのほとんどがやられた。拠点への襲撃も止んだし、俺が殺したと思つていたヘラクレス、ジャンヌ、小次郎を含めた何人かを生け捕りにできた。英雄派は終わったようなもんだな」

「それに曹操たち神滅具ロンギヌス所有者たちが負つた傷はフェニックスの涙や『聖母の微笑み』トワライエトヒリシゲでも完治するようなものじゃない。だが天界では神滅具ロンギヌスの消失は確認できてないため、生存している可能性が高い」

俺に続いてアザゼルも答えてくれたが、何とも言えんな。

あいつらの事だから生きてるんだらうが。

俺はあいつらが生きているとどこかで確信していた。理由はわからないがそんな気がする。

アザゼルはどこか合点がいかない表情をしている。

「奪われた、つてことはないのかしら？ 強力な神滅具ロンギヌスを狙う輩も多いでしょう？ あの集

団は内部抗争も激しそうですもの」

リアスの意見を聞いたアザゼルは頷いていた。

「まあ、そうなるよな。そうだとしたら俺が考える最悪のシナリオが今後起きないことを願うばかりなんだが……」

アザゼルの奴、スゲエ険しい顔しているな。

また戦争はゴメンだぜ。本当に、生き残れるかわからん。

俺が途中で心配しているとアザゼルが苦笑し始める。

「ま、あいつらの失点はお前らに手を出したことだな。よく言うだろ触らぬ『神』に祟りなしってな」

「この場合は触らぬ『悪魔』に祟りなしじゃないか？」

俺の訂正にイツセーが嘸みつく。

「腫れ物のように言わないでくださいよ！」

「だがなイツセー！お前ら、そのうち伝説になるんじゃないか？奴らにケンカを売ったら生きて帰れないってな！」

アザゼルがふざけて言っているんだろうが、マジでそうなりそうで怖い。ま、俺もその一員かもしれないが。

「ま、その伝説になつてくれれば、俺も楽ができる」

それを聞いたりアスは嘆息していた。

「私たちは悪霊や怨霊ではないのですから、変な風に言わないでください」

「けれど、実際襲われたら、やっちゃうしかありませんわ」

朱乃がイヤな笑みを浮かべていた。

あの笑顔はあれだ。Sっ気が強い奴の笑みだ。

朱乃の笑みを知つてか知らずか、アザゼルは続ける。

「だかな、『禍カオス・ブリグドの団』はまだ活動している。特に大きかった旧魔王派と英雄派は潰れたが、他にも小さい派閥はいくつかあるからな。そいつらが出てくるかもしれない」

魔法使いの派閥とかもあつたな。そいつらもイツセーたちを狙うか……………。

俺はそんな事を考えつつ部屋の隅を見る。

「だが、元ボスがこっちにいるからなあ」

俺が言うといツセーたちもそっちを見る。

視線の先にはボケーっとしてゐるオーフィスがいた。

イツセーと目が合うとオーフィスは口を開いた。

「我、ドライグと友達」

そういうえば、イツセーがそんな事を言っていたな。

「俺は兵藤一誠って名前があるんだよ。友達はイツセーって呼ぶんだ」

「わかった。イツセー」

即答で返すオーフィス。本当、イツセーは懐かれているようだな。

リアスたちがしようとする事を見様見真似でやったりしているし、イツセーが言った通り、純粋なんだろう。

「俺の呼び方はそれでよし」

呼ばれかたは解決したらしいが念のために言っておくか。

「イツセー。オーフィスは眷属にできないからなわかってるな?」

「はい、オーフィスはここにいないことになってるからですよね」

「ああ、元とはいえ、テロリストの親玉だったやつだからな。今も封印を何重にも掛けて強すぎるドラゴン程度にしてあるぐらいだ。それに神格クラスは転生出来ないからな。半神のヴァルキリーはいけたが」

俺が解説を終えると木場が口を開いた。

「彼らに奪われたオーフィスの力がどうなるか、それが気になりますね」

確かにそうだ。英雄派がその力を使って新たなオーフィスを作りそれを傀儡にしよ
うとしていたらしいが、その英雄派が潰れたわけだからな。

「それは意見がわかれてるところだ。だが、何かしらやつてるってことは一致している。
そのうち会うだろうから覚悟を決めとけ」

俺の発言でイツセーはうなだれていたが、リアスが話題を変える。

「それも大事だけれど当面の目的は三つね。一つはギヤスパーのこと」

それを言われたギヤスパーはあわあわしていたが、例の話だろう。一人でゲオルグを
倒したあの力……………」

「今まで事情が重なって静観していたんだけど、いい加減『ヴラディ家』に、いえヴァン
パイヤの一族にコンタクトを取るわ。ギヤスパーの力をきちんと把握しないと」

「す、すいません」

それを聞いてギヤスパーは恐縮していたが他にも色々ありそうだな。

俺は嘆息するように言う。

「また面倒に巻き込まれそうだがな……………」

「ヴァンパイヤも内部でもめているからな。要らない戦いに巻き込まれるかもだが」

「……」迷惑おかけします……………」

俺とアザゼルの眩きにギヤスパーが謝る。別にギヤスパーが謝ることもないと思うんだが、あまり深くは言及しないでおこう。

そして、リアスたちの話題は魔法使いとの契約に変わる。

魔法使いとの契約は悪魔にとつても、その魔法使いにとつても有益なものになる。一応、俺も契約はしているが、まあ、あまり気にすることでもないな。

俺が一人、そんな事を考えているとアザゼルが大きめのアタツシケースを取り出した。

「アザゼル、なんだそれ？」

「ふふふつ。ロイ、おまえへのプレゼントだ」

アザゼルは邪悪に笑いながらそう言うと、アタツシケースを開けて中身を見せてくれる。

「——ッ！これは！」

「お兄様、どうかなさいましたか？」

「ああ、これは……………」

俺はその中身を持ち上げ、感覚を確かめる。少し軽いがこの重さ、形、まさに……………！

「銃剣じゃねえか！曹操に砕かれたやつだ！直った、いや、新しく作ったのか?!」

俺が興奮気味に言うのとアザゼルは頷き、説明を始める。

「ロイが案外気に入っていたと聞いたんでな。アジュカから設計図をもらって作ってみた。ついでに構造を単純にしたり、素材の合金をいじったり、いろいろと改良してみたんだ」

俺は二挺の銃剣をまじまじと見つめながら、変形させて剣モードにしてみる。うん、手にフィットする。

そんな俺にアザゼルが言う。

「両剣モード、だったか？それはオミットした。使わないだろ？」

「ああ、あったから使っていただけだからな。無くても問題ない」

剣モードから銃剣モードに戻し、セーフティーをかけて引き金を引く。『カチツ』と心地いい音が耳に届いた。

アザゼルは続ける。

「それと、どっちのモードでも刃に魔力を込められるようにしておいた。魔力量や形状変化をすれば、いろいろとできるだろうよ」

「こいつはいい！最高だ！」

いつになく生き生きとしている俺に、イッセーが訊いてくる。

「ロイ先生って、それがなくても、いや、ないほうが強い気がするんですけど……」

「そうか？まあ、なしで戦うことも多かったからな」

「なんで使っているんですか？」

俺は右手に直刀を生成し、左手の銃剣の刃に魔力を込める。

「直刀だと、柄の部分を作るのに無駄に魔力をくうが、銃剣なら刃だけで済むからな。少しだけだが燃費がいい」

「なるほど……………」

「それに——」

「それに？」

俺はドヤ顔をしながらイツセーに言う。

「なんかかっこよくね？」

「……………そうですね……………」

周りから珍しく軽蔑するような、呆れたような視線が向けられる。

「こ、こいつら、ロマンってやつがわからねえのか!？」

「ま、割りともなロイにだって、少しはおかしなところもあるってことだな」

『なるほど』

アザゼルのまともに頷く面々。お、俺が変な奴だと思われているのか!？」

「『なるほど』じゃねえよ！俺はどこもおかしくねエエエエエエッ！」

俺の叫びがむなしく旧校舎に響き渡る。だが、こうやってふざけられるだけで、リア
スたちが楽しそうに俺は満足かな。

幕間編⑤

Extra life 01 甥っ子訪日

冥界での『魔獣騒動』と呼ばれるようになったあの戦いから数日。ある休日の早朝、兵藤宅に珍しい客が来ていた。

「お久しぶりです、皆さん。ミリキヤス・グレモリーです」

リュックを背負った紅髪の少年、俺の甥っ子であるミリキヤスだ。

礼儀正しく会釈して笑顔での訪問だった。

リビングで兵藤夫妻にあいさつを済ませると、そのままVIPルームに移動する。

それにしても、あいさつから立ち振る舞いまで、気品溢れる動きだな。俺があれくらい頃って、セラとやんちゃして怒られまくっていた気がする。

朱乃がお茶を出し、ミリキヤスに訊く。

「はい、紅茶ですわ。お砂糖は？ 確か、角砂糖二つでしたわよね？」

「はい、いただきます、朱乃姉様^{ねえ}」

さすがにストレートは飲まないようだ。そこはまたまだ子供だなんてことでいいとして、朱乃は「姉様」呼びなんだな。

VIPルームに集まったのはいつものオカ研メンバーだ。別の場所に住む木場とギヤスパ（この二人は一緒に住んでいる）もすぐさま駆けつけてくれた。

ミリキヤスは俺たちに囲まれながらも緊張した様子もなく、俺とリアスに目配せをし
てくる。俺たちが頷いて返すと、ミリキヤスが口を開いた。

「今日は見学がしたくて、リアス姉様と眷属の皆さんのもとに来ました」

「見学、ですか？」

問い返すイツセーに、ミリキヤスは一步前に出て笑顔で言う。

「はい！人間界での悪魔のあり方が見たくて参りました！」

リアスが立ち上がり、ミリキヤスの後ろに回ると肩に手を置いた。

「と、いうことなのよ。ミリキヤスもいずれ眷属を作って人間との契約を取らないとい
けなくなるわ。そのことはこの子も十分わかってるのだけれど、実際に人間界で暮ら
す悪魔の姿を見たいと言ってきたのよ。ね、そうよね？」

「はい！冥界でも有名な皆さんの生活を間近で見たいです！」

俺も立ち上がり、ミリキヤスの横につく。

「そういうことだ。これから数日、ここで一緒に生活することになる。俺もミリキヤス
の護衛として行動するから、ついでにおまえらの仕事っぷりを見させてもらおうぞ」

「よろしくお願ひします」

『よろしくお願ひします』

ミリキヤスのあいさつに快く返す面々。あつちからしても、拒否する理由もないだろう。それに、俺たちの大事な甥っ子なわけだしな。

その後、改めて眷属の自己紹介をおこない、ミリキヤスの見学会が始まったのだった。

「よし、じゃあ、千本ノックするぞー」

深夜の河川敷。草野球用のグラウンドでゼノヴィアがバットを振るっていた。

「はい、コーチー！」

ゼノヴィアの打ったボールを嬉々としてキャッチしていくのは野球帽にユニフォーム姿の青年。ゼノヴィアのお得意様だそうだ。

俺とミリキヤスはゼノヴィアの仕事風景を見学していた。ミリキヤスが誰の見学に行こうか考えていると、ちょうど良くゼノヴィアに依頼が入ったのだ。で、護衛の俺もついてきた。

聞いた限りでは、ゼノヴィアの仕事は全体的に運動系が多いそうだ。時には工事の手伝いまでしているそうだ。

「がんばってくださいーい！」

俺とミリキャスの横ではチアガール姿のアーシアが声援を送っていた。あの野球青年は『応援してくれるチアガール』も要求してきたらしいのだ。なので、手が空いていたアーシアがやることになった。

ポンポンを両手に持ち、白い息をあげながら応援していた。もう冬場で冷えてくるといふのに、健気だ。

アーシアの普段の仕事はトランプの相手やコスプレ撮影などだそうだ。小猫もそんな感じらしい。

朱乃は会社の社長や奥様などのセレブを相手にした悩み相談などをおこない、木場は働く女性相手に似たようなことを、ギヤスパーはパソコンを使つての仕事が多く、ロスヴァイセは主婦に呼ばれることが多く、節約術を教えているそうだ。

リアスへの、正確には上級悪魔への仕事というものはあまりなく、それこそ危険の伴う魔物退治や掘り出し物の解呪などだ。そっち系の仕事への見学はさせるつもりはないが、一応、行つたときのこととは視野にはいれている。

そして、イツセーの仕事は……なんと言うべきか、変人からの依頼が多い。ミルたん

のようなヒトからの依頼ばかりだそうだ。

「おーし！次は二万本ノックだー！」

「はいいい、いいい、コーチイイイイッ！」

気合の入ったゼノヴィアは調子を出して無茶ぶりをふっかけたが、野球青年はへばりながらも笑顔でOKしていた。無理させるなよ………？

「いいなあ………。僕もこういう風に眷属のヒトには楽しく仕事をしてほしいです」

ミリキヤスはゼノヴィアの仕事を覚えてそう漏らす。確かに、ゼノヴィアは楽しそうに依頼をこなしている。

「ミリキヤスはどんな眷属が欲しいんだ？」

「まだ考え中です。目標はありますけど」

「またまだ考え中か。まあ、まだ先のことだ。ゆっくりと考えていけばいいだろう。」

「目標つてのは、やっぱり兄さんの眷属か？」

「はい。リアス姉様の眷属の皆さんも素晴らしいと思いますが、父様の眷属も素晴らしい方々です」

ミリキヤスは笑みを浮かべながら返してきた。兄さんの眷属つて、マジもんの化物揃いだ。それが目標つてことは、なかなかハードルが高そうだな。

ミリキヤスが首をかしげて訊いてくる。

「ロイ兄様は眷属を探さないのですか？」

「うん？まあ、そうだな。今さらって感じがあるし、第一、俺は一人で何かするってことが多かったからな」

「お話は聞いています。母様も助かったと言っていました」

「……………俺が必要だったのかはわからないがな」

俺は苦笑しながらも小声で漏らした。

その頃から昔は一人で行動し、一人でどうにかすることのほうが多かった。考えてみれば、転生悪魔制度が始まる前からそうだったんだな。時間の流れってのは早いもんだ。

何て事を思っていると、視界の端に黒いゴスロリ衣装の少女が映る。オーフィスだ。

あいつも暇だったことについてきたのだ。俺としてはミリキヤスと一緒にいさせらるってのはどうかと思っただが、オーフィスにも色々と学んで欲しいってことで連れてきた。

オーフィスも兵藤宅に住んでおり、よくイツセーたちの後ろについて回って、やることとなすこと真似をするようになった。

時々俺の後ろにもついてくることがあるのだが、別に何かするってわけでもないのと一緒に菓子を食べたり、テレビを見たりしている。

オーフィスはグラウンドの隅でアーシアの使い魔——ラッセー（『蒼雷龍』の子供）（スフライト・ドラゴン）とキヤッチボールをしていた。

「我、ラッセーを鍛える」

「ガー」

オーフィスの言葉に応えるラッセー。あいつ、将来龍王クラスになるんじゃないか……。

「ま、がんばれ」

「……………」

「ラッセーくんもがんばってくださいーい！」

「ガー」

俺を無視してアーシアの応援に反応するラッセー。ドラゴンの子供はどの種族であつても女性には甘い。だが、逆に男嫌いなのだ。無視されて当然だな……………。

そんなオーフィスとラッセーをミリキヤスは訝しげに見つめていた。

俺は変な詮索をされる前に口を開く。

「あの女の子はタンニーン（スフライト・ドラゴン）の親類だそうだ。術で人間に化けて人間界の暮らしを学んでいるんだとさ」

その場凌ぎでしかないが、そう設定させてもらった。タンニーンには悪いが、そうし

ておけば後が楽なんだ。

「そうだったのですか。僕と同じですね！」

信じてくれたミリキヤスの純粋な瞳と笑顔が俺を攻撃してくるが、ここは耐えるしかないッ！

俺が歯を食い縛って何て事を思っていると、ミリキヤスが不意に漏らす。

「イツセー兄様、僕のことを『ミリキヤス』と呼んでくれるでしょうか……」

「突然だな。ま、後で言ってみたらどうだ？」

ミリキヤス的には、リアスを呼び捨てをしているイツセーにも、自分を呼び捨てで呼んで欲しいのだろう。いつまでも「様」付けだと、堅い感じと距離感があるように思えるからな。

俺の返事を受け、ミリキヤスは笑顔で返事をした。

「はい！何事も挑戦です！」

「挑戦って言っても、イツセーはすんなり受け入れると思うけどな」

あいつは変態だが気遣いはできる方だ。グレモリー家の次期次期当主としてだけでなく、魔王の息子であるミリキヤスの今後を考えれば、気安く接してくれる存在は必要になるとすぐに気づくはずだ。

この子の一生には、必ず政治が絡んでくるのだから……。

「ま、何事も急がず焦らずやればいいさ……………」

俺がそう言いながら頭でも撫でてやろうと手を伸ばした瞬間、俺はすぐに手を引つ込めた。

な、なんだ……………今、寒気がしたぞ……………。誰かに見られているのか？こんな誰も出歩かないような時間に？

周囲を見渡してみるが、誰もいない。夜目が効く悪魔でも見えないうことは、隠れているのか、さっさと逃げたのか…………。

ゼノヴィアも何かを感じたようで周囲を見渡し、オーフィスもキヨロキヨロとしている。アーシアとミリキヤス、野球青年の三人は気づいていないようだ。

「あの、どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

ミリキヤスの問いに俺はそう返しながら今度こそ頭を撫でてやる。

同時にまた嫌な視線を感じたが、邪悪なものや殺気を感じないのでとりあえず放置する。

「えへへ♪」

くすぐったそうに笑うミリキヤス。……………俺も子供欲しくなってきたわ。

俺が表情を緩めながらミリキヤスを撫でていると、近づいてくる気配がひとつ。怪し

いものではない。

「ゼノヴィアーっ！アーシアさん！スポーツ飲料を買ってきたわー！」

気配の主は買い物袋片手に駆けつけたイリナだった。天使なので直接は手伝えないが、差し入れを持ってくるなどして手伝ってくれているとのこと。

「おっ、『自称』天使さまかの差し入れだぞ」

『自称』じゃないもん！本物だもん！ロイ先生ならわかりますよね!？」

イリナの言葉に、俺は気まずそうに視線をそらす。

本音を言ってしまうと、「私は天使です！」と堂々と言ったり、よくわからない行動をしたりしているため、イリナはあまり天使っぽく見えない。

「ロ、ロイ先生!?!な、何か言ってくださいいよー!」

「ほら見ろ。ロイ先生だっと思って思っているじゃないか」

「うるさいわね！本物ったら本物なのよー!」

俺たちの攻撃に頬を膨らませるイリナ。本当、あの二人は見ていて退屈しないというか、空気が和むというか……………。

こうして、不可解な気配を感じながらも、その日のミリキヤスの見学会は終わりを告げたのだった。

Extra life 02 眷属集結

明くる日、俺たちは兵藤宅地下にあるトレーニングルームに来ていた。

イツセーが鎧を纏い、木場は模擬戦用に強度を落とした魔剣、ギヤスパーも二人の後方に構えていた。

そんな三人を相手するのは、ジャージ姿のミリキヤスだ。子供ながらも勇ましい表情で三人と対峙していた。

リアスの提案で、ミリキヤスとの交流を深めるということで、なぜか模擬戦をするこ
とになったそうだ。

まあ、ミリキヤスも『根性』や『修行する悪魔』にも関心があるらしいから、ちよ
うどいい機会だったんだと思う。俺も鍛えないとな……………。

何て事を思いつつ、俺はイツセーたちとミリキヤスに目配せをし、四人が頷き返した
ことを確認する。

「それでは、始めッ！」

俺の号令のもと、模擬戦が始まった！

開始と同時に動いたのはミリキヤスだ。子供とは思えない速度で飛び出した！手元

に紅いオーラをまとわせ、いくつかのフェイントを入れてから魔力を解き放った！

ミリキヤスの放った滅びの魔力は力強く、鎧姿のイツセーは迷わずに回避、木場は魔剣で防いだ瞬間――。

バシユツ！

削りきる独特の音と共に木場の魔剣の刀身が消滅した！

模擬用とはいえ魔剣を一瞬で消し飛ばすとは、恐れ入る…………。

それを見ていたリアス以外のオカ研メンバーも驚きの表情を顔に出していた。

俺もミリキヤスを感じしながら見ていると、再び飛び出して魔力を散弾式に撃ち放った！

本来、滅びの魔力は当たれば勝ちのようなものだ。まあ、リアスの場合は当たらず、俺の場合は効かないことや防がれることが多い。

イツセーもそれは重々承知しているようで、対抗するように散弾式に魔力（イツセー的に言えばドラゴンショット）を撃ち放った！

だが、ミリキヤスの放った滅びの弾はいきなり軌道を変えてイツセーの魔力弾を回避、イツセーに迫っていく！

まるで兄さんのやつみたいだ！あの年であれだとしたら、将来どうなるか楽しみだ！俺が何て事を思っていると、ついに滅びの弾がイツセーの鎧をかすめる。

バシユツ!

再び響く削りきった時の音。イツセーの鎧の肩部分が削りとられたのだ!

一応、俺の直刀でも斬れなくはないが、あそこまで綺麗に削り取るとは、鎧がなかったら肩がなくなっていたぞ!?

さすが、兄さんと義姉^{ねえ}さんの息子だ。ミリキヤスがイツセーと同じぐらいになる頃、いつたいどこまで強くなっているんだ………?

イツセーはちらりと俺とリアスの方に視線を送ってくる。ようやく気づいたようだ、目の前の少年の強さに………。

俺たちは笑みを浮かべて頷き、イツセーも勢いよく頷き返す。

「グレモリー男子の根性! 叩き込みますよ!」

イツセーが拳を突き出して宣言すると、ミリキヤスは満面の笑みを浮かべる。

「はい! よろしくお願いします!」

こうして、ミリキヤスとの模擬戦はどんどん激しくなっていたのだった。

三十分後。

「はあ……はあ……はあ……」

息をあげて床に座り込むミリキヤス。かなり疲れているようだ。

あの三人を相手に三十分。何回も転ばされようが立ち上がり、向かっていつていた。普通なら泣いたり、気絶したりしてもおかしくないと思うが、立派だったな。

どこぞの聖剣サムライボーイを思い出しながら、俺はミリキヤスにタオルを手渡す。

「よく諦めずに相手したな。立派だったぞ」

「あ、ありがとうございます……」

息を整えながら頭をごしごしと擦り、笑みを浮かべるミリキヤス。笑顔が眩しいぜ。

イツセーもリアスからタオルを受けとると、顔を洗いに退室していった。すげえニヤしていたが、今の模擬戦がかなり楽しかったようだ。朱乃もイツセーについていた。

俺はミリキヤスの立たせてやり、リアスたちのほうに戻る。

「ミリキヤス、よく頑張ったわね」

「ありがとうございます！」

ある程度回復したミリキヤスが笑みを浮かべ、リアスに礼を言うと言葉を続ける。

「皆さん、お強いですね。僕もまだまだです」

「ま、これからだ。頑張つて修行して、イツセーたちに『ぎやふん』と言わせてやれ」
「はい！今度はロイ兄様とも模擬戦がしたいです！」

しれつと俺との一戦を、ご所望のミリキヤス。勝てるとは思いますが、怪我をさせないかが心配だ。

「また今度な。今はゆっくり休め」

そう言いながらミリキヤスの頭を撫でてやる。

「えへへ〜♪」

ミリキヤスがくすぐつたそうに笑っていると、

「おや、ロイ殿もミリキヤス様には甘いようですね」

突然聞こえた第三者の声。聞いたことがあるような、ないような……………。

俺が首をかき上げながらトレーニングルームの入り口に目を向けると、羽織を着た日本人の男性が笑みを浮かべていた。その後ろには逆立ったオレンジ色の髪の巨漢の男性と凝った紅色のローブに身を包む男性、って。

「ルシファー眷属が揃いも揃って何やってんだ？」

「まあまあそう言うな！こつちにも色々あるんだよ！」

オレンジ髪の巨漢の男性が豪快に笑う。

それにローブの男性がツツコミを入れる。

「セカンド、失礼でしょう。お久しぶりですロイ殿。先日、『魔獣騒動』のおり、『皆で集まってどこかに行こう』ということになり、ここに参りました」

セカンドと呼ばれたオレンジ髪の巨漢の男性は構わず笑う。

「ハハハハッ！そういうことだ！」

俺はため息を吐き、状況が飲み込めていないリアスと朱乃以外のメンバーに目を向け、リアスに視線を送る。

リアスが頷いて咳払いをすると、羽織を着た男性から自己紹介を始める。

「私はサーゼクス様唯一の『騎士』、^{ナイト}沖田総司と申します」

「沖田総司って、あの新撰組の!?!」

イリナの驚きの声に沖田は頷き、言葉が続ける。

「はい。当時、病で戦線を離脱してしまっただけ、死の病を回避するため、様々な儀式をおこなったら、サーゼクス様を呼び出してしまったのですよ。なぜか黒猫の格好をされていましたね」

「兄さんのコスプレ癖は昔からだ。あんまり気にするな」

「……………はい」

俺の追加情報にイツセーが頷く。イツセーもサタンレンジャーの件でそれを知っているからな。

ちなみにだが、沖田は木場の師匠でもあり、『騎士ナイト』の駒を二つとも消費して眷属にしたそうだ。

次に前に出たのはローブの男性だ。

「私はマグレガー・メイザース。サーゼクス様唯一の『僧侶ベシヨッフ』になります」

「『黄金ゴールドの夜明け団』創立者の一人で、七二柱の本を翻訳したことで有名、か？」

俺は言葉が疑問系になってしまった。視線の先のイツセーがまったくわかっていない表情になっており、話についてこれていないのだ。

メイザースが笑みながらイツセーに言う。

「ふふつ、すごい魔法使いという認識でOKです」

「『僧侶ベシヨッフ』二つ消費の時点で、すごいとかいうレベルじゃないけどな」

メイザースの言葉に一応ツツコミを入れておく。

最後に前に出たのはオレンジ髪ルージュの巨漢の男性だ。

「俺はサーゼクスの旦那の『戦車ルーク』が一人！スルト・セカンド様だ！ガハハハハッ！」

見た目通りの豪快さだ。リアスも苦笑しながら紹介を始める。

「北欧神話に登場する炎の巨人スルトのコピー体なの。ラグナロクの折、巨人の大隊を引き連れて世界樹ユグドラシルに火をつけると予言されているあのスルトのね」

北欧神話と言われたらロキだとフェンリルだのイメージが大きいけどな。

で、その北歐神話の巨人スルトのコピー、クローン体って感じだな。

「北歐の神様がコピーしたはいいが、暴走して手がつけられなくなること放り出されんだと。で、兄さんに拾われた。その時に『戦車』の『変異の駒』を使つて眷属に。セカンドって名前はコピー体だからってことだな」

ちなみに、『変異の駒』ってのは『悪魔の駒』のバグのようなものだ。それを使えば、駒価値をある程度無視して眷属にできる。リアスはギヤスパーに使つたそうだな」

「ま、魔王のキャラも濃ければ眷属のキャラも濃いつてことだな」
俺が締めくくるようにそう言うといッサーが頷く。一部例外はあるが、実際はそんなもんだらう。

すると、リアスが誰かを探すように周囲を見渡す。

「ベオウルフは？やはり、今回は三人だけなの？」

それを聞いた三人は一瞬きよんとすると、思い出したようにセカンドが口を開く。

「あー、あいつは——」

セカンドがそこまで言いかけると、トレーニングルームの扉が開け放たれる。

この場にいる全員の視線を受け、背広を着た茶髪の男性が肩で息をしていた。

「や、やつと——」

「あいつはベオウルフ。兄さんの『兵士』の一人だ。もう一人はいつかに会った炎駒だ

な。覚えてるか？」

「はい。前に少しだけお会いしましたね」

「そう、そいつだ。そんなわけで、紹介終わり！で、おまえら何を——」

「ちよ、ちよつと待って！俺の紹介それだけ！」

俺が話を変えようとする、ベオウルフがそれを遮ってくる。

俺はため息を吐き、ベオウルフに言う。

「兄さんと勝負してボロ負けしたとか。ご先祖は邪龍を退治したとか。兄さんと勝負してボロ負けしたってことしか言うことがない」

「二回！二回言っていますよ！俺のイメージがマイナススタートになります！」

「と、また、こんな感じにいじられ役だからな。イツセーも何か言ってやれ」

「え、えーと、よろしくお願いします」

「おう！よろしく頼むぜ、若君！」

困惑気味のイツセーと、さっきのことを気にした様子もないベオウルフのあいさつが済むと、沖田が咳払いをして訊いてくる。

「ところで、サーゼクス様はこちらにお越しになられていませんか？」

「いえ、私は見ていないけれど……」

「俺もだ。何かあったのか？」

それを聞いたルシファー眷属の四人は顔を見合わせて頷きあうと、沖田が話を始めた。

「実は――」

久しぶりに兄さんとミリキヤスが親子の時間を楽しんでいるときのことだそうだ。

『今度、休日が取れそうだ。ミリキヤス、私とサタンレッドで遊ぼうか?』

サタンレンジャーのリーダーサタンレッドとして、その格好でミリキヤスと遊ぶことを何よりの楽しみにしていたそうだ。

ミリキヤスはこう返す。

『いえ、父様。今度の休日はリアス姉様とロイ兄様のもとに行きます! イツセー兄様と皆さんのもとの日本での悪魔の暮らしを見学したいのです!』

兄さんはとても喜び、愛息子の意欲を高く褒めた。

そこまでは良かった、問題はここからだそうだ。

兄さんはあることを訊く。

『うむ、それはとても有意義なことだ。ところでミリキヤス。サタンレッドとおっぱいドラゴン、どちらが好きかな?』

『どちらかというとおっぱいドラゴンです!』

『……………』

元気に答えるミリキヤスト、笑顔で固まる兄さんの姿が目には浮かんだ。

そして、兄さんは何を思ったのか質問を変えた。

『サタンレンジャーでは、誰が一番好きかい？』

『うーん、ブラックでしょうか？あの武器がカッコいいです！』

『……………』

困りながらも答えるミリキヤスト、笑顔で固まったまま魂が抜ける兄さんの姿が目には浮かんだ。

ミリキヤストはサタンレンジャーの正体に気づいていなかったらしく（いつもは兄さんが呼んで来てくれると思っていると思っていたそうだが）、そう答えてしまったとのこと。

で、兄さんの眷属である四人は、ミリキヤストの見学会と同時に頻繁に姿を消すようになった兄さんを探しに来たそうなのだ。

もしかして、あの時の視線って……………。

俺がある結論にたどり着くと同時に、再び嫌な視線を感じた。イツセーもそれを感じたようで部屋の中を見渡していた。

俺も周囲を見渡していると、それに気づいた。

少しだけ開かれたトレーニングルームの扉から、特撮ヒーローの格好をした誰かが俺とイツセーのことを見つめてきていた！

あれは、サタンレッド！やはり、あの河川敷で視線の正体は兄さんだったのか！

「……………ミリキヤス……………サタンレッドよりもおっぱいドラゴン。サタンレッドよりもサタンブラックのほうが好きなんだね……………」

その声と存在感は悲哀に満ちていた！くそ、兄さんの前で頭を撫でようとすれば、そりや見つめてくるよな！

サタンレッドの正体を知っているリアスが言う。

「きつと、ミリキヤスを取られたと思っっているのですね……………」

「……………いい迷惑だ……………ッ！」

俺は小声でそう漏らした。

兄さん、オフの時間を使って俺やイツセーがミリキヤスと楽しく話しているところを見ていたのか。な、なんか切なくなってきたぞ！

セカンドが兄さんに近づき、進言する。

「旦那、これは雌雄を決するしかありませんぜ？ミリキヤス坊つちやまを奪われちまう」「ちよ!?!何言つて——」

「マスター、ここが決め所かもしれない。父の威厳というものを見せるしかないか」と

「メイザースまで!?!俺はやらないぞ！死にたくねえ！」

「俺もですよ！勝てる気がしませんって！」

「よくわかりませんが、ロイ兄様！イツセー兄様！がんばってください！」

ミリキヤスの応援を聞いた兄さんが、いつそう悲壮感を強くして部屋に入ってくる！それと同時に飛び出して魔力のこもった拳を放ってきた！

「とおっ！」

「あぶなっ!?!」

俺はバク転の要領でそれを避け、一気に飛び退いて距離を取る。兄さんは俺を見据えながら拳を構えた。

場所を考えて、魔力を放つってことはしてこなさそうだ。だったら、俺もやらないほうがいいか……。

「あー、くそーやればいいんだろ!?!」たく、「面倒なことになりやがったな！」

俺も愚痴りながらも素手で構えを取り、兄さんを睨む。

こうして、なぜか兄弟で勝負をすることになってしまったのだった。

誰か、助けてくれエエエエエツッ！

Extra life03 一番強いのは……………

お互い対峙しながら拳をかまえる俺とサタン^兄レット^さ。魔力なしでも化物じみて強いのに、何でこうなるんだよ……………。

俺がため息を吐くように小さく息を吐くと、兄さんが飛び出してくる！

俺も少し遅れて飛び出して兄さんに接近する！

先に攻撃を放ったのは兄さんだ。顔面に向かってまっすぐ拳を放ってきた！

俺はそれを首をかしげるようにしてギリギリで避け、その腕を掴んで背負い投げのよう
うに投げ飛ばす！

兄さんは勢いよく投げ飛ばされるが、うまく受け身を取ってダメージを軽減、素早く
立ち上がって構える。

「相変わらず、切り替えが早いね」

「それでもなきや、やってられないっての！」

俺はそう言いながら兄さんに接近、兄さんの腹にブローを放つ！兄さんはそれをガードして勢いよく俺の足を払う。

体を横にしながら一瞬だけ俺を襲う浮遊感。背中から床に落ちる瞬間に俺の腹に衝

撃が走る！

「かはッ！」

兄さんが殴ってきたのだ！こいつ、容赦ねえな！

俺は床に叩きつけられながらも蹴りを放って兄さんの顔面を蹴り抜く！

「ッ！」

兄さんは吹っ飛ばされ、蹴られた頬を撫でる。

「容赦ないね！」

「あつたり前だろうが！」

俺は立ち上がり、腹を擦る。マジで殴りやがって、いてえつての！

俺と兄さんは同時に駆け出し、同時に拳を放つ！放たれたお互いの拳が激突、鈍痛が拳を襲う。

「ッ！」

俺と兄さんは拳を引つ込め、同時に上段蹴りを放って再び激突させた！

くそ、妙に気があうな！

俺は素早く足を下げて拳を放つと、兄さんはそれを受け流してキャッチ、小手投げの要領で俺を投げる！

投げられる瞬間にわざと勢いをつけることで俺は一回転して着地、逆に兄さんの腕を

掴んで自分のほうに引き寄せてラリアットを当てる！

「クッ！」

勢いよくラリアットをくらった兄さんは後頭部から床に叩きつけられる。俺は深追いはせず、一旦距離を取る。兄さんは後頭部をさすりながら立ち上がった。

「まったく。兄さんと喧嘩なんていつぶりだ？」

「あまり記憶にないかな。なりそうな時に限ってセラフオルーが近くにいたからね」

「確かにそうだったな。やっても勝てる気がしなかったってこともある。だが、今は………！」

「ああ、今は………！」

再び同時に駆け出し、拳を握る。

「負けられねえ！」

「負けられない！」

同時に拳が放たれ、クロスカウンターでお互いの顔面を捉えた！

「——ッ！」

そのまま拳を引っ込めて今度は同時にボディブローを放つ！お互いノーガードでそれを受けた！

「——ッ！」

お互い声にならない悲鳴をあげながら、俺は兄さんの後頭部を掴み、頭を振りかぶる。

「口、ロイ、まさか!」

「歯を食い縛れ!」

警告と同時に歯を食い縛り、一気に頭を振り抜く! ヘッドバッドを兄さんの顔面に叩き込んだのだ!

ゴンツ!

「くくくツ!」

鈍い音と共に鈍痛が走り、二人して数歩後ずさって頭を抱えながら悶絶した! くつそ、いてえ!

俺たちは頭を振って切り替えると再び構え、迫力を放ちながら拳を握りしめる。ここからが本番だ……。

「あなたたち、何をしているの……?」

テンションの上がってきた俺たちの耳に突如届いた第三者の声。だが、聞き覚えがある声だ。

俺と兄さんは壊れたロボットののような音を立てながらその声の主を見る。

そこにいたのは……!

「もう一度訊くわ。何をしているの?」

完全にキレた様子の義姉さんだ！表情同様の怒気のこもった声で訊いてきている。ルシファー眷属一同も硬直している。

俺は構えをとき、義姉さんに言う。

「色々とありまして、久しぶりに兄弟喧嘩を」

「兄弟喧嘩……理由は？」

俺はちらりと兄さんに視線を向けたが、完全に硬直していた。

俺は息を吐き、義姉さんに言う。

「どっちがミリキヤスになつかれているか、ですー」

開き直って言うと、義姉さんはため息を吐いて兄さんに訊く。

「本当に、それ以外の理由はないのですね？」

「あ、ああ。その通りだ」

義姉さんは兄さんを見て、再びため息を吐く。

「喧嘩は誰にでもありますが、それはわかっております。しかし、サーゼクス様。オフを利用してそのような格好でこの町に来ているとは……納得のいくご説明をお願いします」

俺なら何て説明しようか……。変装、いや、それならもつと違う格好にする。

俺が言い訳をあれやこれやと考えているなか、兄さんが義姉さんの前に出ると、何の

躊躇いもなくひざまずいた。

「すまない、私が悪かった」

——屈した!?

に、兄さん！そこは魔王なんだからなんか、こう、言えよ！

俺が殴られた頬をさすつっていると、ミリキヤスが満面の笑みで一言。

「母様が一番強いです」

その一言に兄さん以外の全員が大きく頷いていた。

兄さんを連行する義姉さんを見おくることに。

「それでは皆様、引き続きミリキヤス様のことをよろしく願います。ミリキヤス様、あさつての帰還までにご迷惑をかけませんように。いいですね？」

「はい！」

元氣よく返すミリキヤスに、義姉さんはようやく微笑む。とても優しく、まさに母親といった表情だ。

転移魔方陣の光に包まれ、消えていく義姉さんと兄さんを見送り、残ったのはルシファー眷属だけだ。

こつちはしばらくしたら帰るそうで、ホテルをとつて日本を満喫するそうだ。

俺たちはミリキヤスと時間いっぱい楽しく過ごすことになった。

一緒に日本食を食べたり、デパートに行ったり、百貨に行くこともあった。俺、イツセー、木場、ギヤスパー、ミリキヤスの男チーム五人で風呂にも入った。

そんなこんなで別れの朝。

ルシファー眷属も玄関前に迎えに来ていた。

「あつという間だったが、まあ、楽しい時間はなんとやらつてやつだ」

「そうですね、ミリキヤス、忘れ物はしていないわね？」

「はい！大丈夫です！」

俺とリアスであれやこれやミリキヤスに言っていた。すると、俺の後頭部に何かが激突した！

「イタツ!？」

「あ」

反応したのはイツセーとセカンドだ。俺は後頭部をさすりながら振り向く。俺の視線の前には、飛行艇のラジコン? いや、これは……………。

俺は逃げようとしたその飛行艇を捕まえ、イツセーに言う。

『『スキーズブラズニル』とかいうやつだったか? 魔法の帆船で、主のオーラを糧にして成長する不思議なもんだ』

「おうよ。そいつを若の使い魔にしてもらおうってな」

セカンドの言葉にイツセーは驚く。

「この飛行船を使い魔に、ですか?」

「ああ、おまえがよければくれてやるよ。おまえだつてがんばっているんだからよ、こんぐらいのものももらつておいて当然だろうぜ」

「ぜひ!俺、使い魔がいなかったものですから……………」

「……………」

俺は気まずそうに視線を外す。

つ、使い魔、ね。悪魔にとつちや大事だよな、多分……………。

イツセーが訊いてくる。

「ところで、ロイ先生に使い魔っているんですか？」

「俺が使い魔を飛ばすところ、見たことあるか？」

「いいえ」

「そういうことだ」

「え!？」

驚くイツセーに簡単に説明する。

「まあ、なんだ。昔は捕まえようとも思ったんだが、任務は基本的には自分の足で探すし、使い魔を尾行されて場所がばれるって事態になりたくなくなかったから……」

「つまり？」

「いてもいなくても大差ないって判断した」

本当に、俺は使い魔を持っていない。探す気もない。おかげで「この使い魔がいればこいつもいる！」みたいな事を避けられているからな。

俺は咳払いをして、イツセーに言う。

「それよりも、待っているぞ」

「え？あ、はい！」

イツセーがセカンドに礼を言ってミリキヤスの前に。

ついに、ミリキヤスとの別れの時間となってしまうた。

「お世話になりました。すごく楽しかったです！また、遊びに来てもいいですか？」
『もちろん！』

ミリキヤスの問いに全員が笑顔で答える。それを見たミリキヤスもかわいらしい満面の笑みを浮かべる。

「また来なさい。皆、ミリキヤスのことを弟のように思っているわ」

「そうだぞ、ミリキヤス。家族なんだから、いつでも気軽に遊びに来て！」

俺はそう言うといっせーを手招きする。

「どうかしましたか？」

「ミリキヤスからお願いがあるんだと」

「ミリキヤス様から、ですか？」

やっぱり、言えていなかったのか。ま、色々忙しいかったからな。

俺はミリキヤスに頷いてやり、退いてやる。

ミリキヤスも意を決するように息を吐き、いっせーに言った。

「いっせー兄様、僕のことにはミリキヤスと呼んでください」

それを受けたいっせーは一瞬驚いた表情になるが、すぐに笑みを浮かべてミリキヤスにサムズアップを送る。

「ああ、ミリキヤス！いつでも遊びに来て！」

「はい！また遊んでください！」

ミリキヤスも満面の笑みを浮かべて頷く。その笑顔は、滞在中に見せたどの笑顔よりも輝いて見えた。

「それでは、皆さん、またお会いする日を楽しみにしてます」

ミリキヤスは最後に礼儀正しく頭を下げ、丁寧な別れの言葉を言つてルシファア眷属と共に去つていく。

リアスたちの弟で、俺的には息子のような少年——ミリキヤス・グレモリー。色々と想定外のことも多かつたが、あの子が楽しめたのならそれでいいか。

こうして、ちよつとした波乱もあつたミリキヤスの見学会は幕を閉じたのだつた。

Extra life 04 慰安旅行に行こう！

とある日の放課後。

職員会議を終えた教師チームはそのままオカ研に直行。そして、オカ研部室に来たアザゼルが開口一番に言う。

「よし、伊豆に行くぞ。この間の魔獣騒動、あれの慰安旅行だ」

こいつが唐突に何か言うことは珍しくない。それしたつてずいぶんと今さらな気がするが、ま、いいかもな。

リアスが目を通していた書類を置いて言う。

「いいわね、日程は？」

「え？リアス的にアリなんですか？」

即答したリアスにイツセーが訊いた。確かに、いつもなら渋るところなんだろうが、今回のリアスは違うようだ。

「ええ、皆に英気を養ってもらおうプランを私も立てようとしていたわ。大きな事件が立て続けに起きて、皆の疲れも溜まってきていると思っていたらから」

「俺もOKだ。たまにはのんびりしようぜ」

俺たち兄妹の意見を聞いたアザゼルは頷いてイツセーたちを見渡すように言う。

「そうそう、その通りだ。若いおまえらがあれだけの修羅場をくぐれば体や心に傷がついていても不思議じゃない。——そこで旅行だ！次の週末にどうだ？こういうのは早めがいい。なーに、手配はすぐに済むからな」

急な展開についてこれていない部員一同はリアスに視線を送る。判断を任せようだ。

俺もリアスに視線を送り、一度頷いてやる。さつきも言った通り、俺はOKだ。

リアスも大きく一度頷き、笑顔で言う。

「ええ、わかったわ。では、次の土日は伊豆に行きましょう」

こうして、俺たちは伊豆に一泊二日のプチ旅行をすることになったのだった。

そんなわけで次の土曜日。

天気は快晴、いい旅行日和だろう。

俺たちは夜のうちに準備を整え、午前十時に兵藤宅の前で集合となった。

……………で、

「車の運転なんて、いつぶりだろうな」

俺は赤いワゴン車の運転席でそんな事をぼやいていた。移動は基本的には魔方陣だったわけだし、アザゼルがいきなり「車で行くぞー!」なんて言ったもんだからこうなつたわけだが……………。

俺は青一色の謎のスポーツカーが止まっている兵藤家前にゆっくりと停車させる。なんか、ドリフトをしたようなブレーキ痕が残っているんだが……………。

そんな疑問を思いながらサイドブレーキをかけ、エンジンを止めてワゴン車から降りる。

そんな俺にイツセーが訊いてくる。

「ロイ先生、その車は?」

「人数的に大きめの車は必要だからな、用意した」

「なるほど」

イツセーはそう言うと、スポーツカーとワゴン車を見比べ、次にサングラスをかけたアザゼルと私服姿の俺を見比べる。そして、

「俺!ロイ先生の車に乗りたいです!」

突然のイツセーの申し出に続くようにゼノヴィア以外のメンバーが頷いた。

「おいおい、おまえら、俺のドライブテクニクに不安でもあるのか？」

アザゼルが不満げにそう漏らすと、イツセーが正直に言う。

「あるに決まっていますよ！ロイ先生のほうが絶対に安全運転を心がけてくれます！」

「確かに、命を預かるわけだからな。慎重にもなるさ」

「ほら、やっぱり！俺はこっちに乗りたいです！」

俺の言葉を受けて俺の横につくイツセー。どんだけアザゼルを信用していないんだよ……………。

見ると、ゼノヴィア以外のメンバーが俺のほうに寄っていることに気づいた。下手に近づいてスポーツカーに引きずり込まれたくないんだろう。

だが、ワゴン車の定員は俺を除いて八人。単純計算で四人はスポーツカーに乗ることになる。

リアスがなつたら、最悪ロスヴァイセに運転を任せて俺があつちにいけばいいが、それ以外はかわいそうだが頑張ってもらおうしかない。

「とりあえず、じゃんけんでもしたらどうだ？」

俺は嘆息気味にそう進言した。リアスたちは嫌々ながらそれに頷き、円をつくる。

『じゃんけん——！』

さて、ハズレを引くのは誰だ!

……まあ、こうなるとは思ったよ。

俺はなんて事を思いながら運転席に座り、後ろに目を向ける。

こっちのメンバーはリアス、朱乃、アーシア、小猫、イリナ、レイヴェル、木場、口スヴァイセだ。

向こうはイツセー、ギヤスパー、ゼノヴィア、オフィスという色物メンバー。

「失礼します」

「おうよ」

助手席にロスヴァイセが座り、全員がシートベルトをつけたことを確認して発進させる。ま、急ぎでもないんだ、のんびりまったりと行かせてもらおう。

出発してから二時間半ほど。

「お、海が見えてきたぞ」

「本当ですね、いつ見ても綺麗です」

俺の言葉にロスヴァイセが頷き、海を眺めていた。俺運転に集中しやがらも窓を開け、潮風を堪能する。

後ろのメンバーも窓を開けて潮の香りを堪能していた。

それにしても、スポーツカーの方は大学なんだろうか。途中でドライブインに入ったが、イツセーとギヤスパーが死にかけていたぞ。アザゼルの運転も酷いもので、『安全運転』の『あ』の字もなかった。いや、場所によってはあったが、基本なかった。

車は山を登るべく、街道を進んでいく。どんどん山中に入り込み、道も細くなってきた。気をつけないと。

伊豆の山に入って一時間程。

濃霧の先に目的地の旅館が姿を現した。山のど真ん中にあるその旅館は、古風でどこか懐かしさを感じる、親しみやすそうな雰囲気をつけていた。

皆で協力して荷物を降ろし、それぞれの荷物を持って旅館の入り口を目指す。何だろ

う、嫌な予感がする……………。

俺が先頭に立ち、旅館の入り口の戸を開けた瞬間、

「お邪魔し——」

「ロイイイイイイツ！」

「ぐぼはっ!？」

突然俺に体当たりをかましてくる女性が一人！俺は吹っ飛ばされて背中から地面に叩きつけられる。

その女性は俺の胸に顔を埋めながら、鼻をひくひくさせて臭いを堪能していた。

「セ、セラ!? 何でこんなところに!？」

「えへ♪来ちゃった☆」

その女性は俺の恋人——セラだった！相変わらずの魔法少女姿だ。

俺が困惑していると、旅館から女性が現れる。

その女性が俺たちを見て不気味に笑う。

「いつひっひっ、伊豆の山んなかにようこそおいでくださいました。ここは悪魔さんや墮天使さんにごひいきしてもらっている秘境ですぞい。私はこの旅館の女将をしておりますゆえ」

な、なるほど、やまんば山姥ってやつか。それはそれとして、セラは相変わらずしがみついて

きている。

「ロイ〜♪ロイ〜♪」

「わかったから、とりあえず退いてくれ」

「いやーだー」

俺が剥がそうとしたら余計に強くしがみついてくる。ダメだこりや。

俺が諦めていると、さらにもう一人女性が姿を現した。

「セラフオール、ロイが困っているわ、離れなさい」

「むー、はーい」

素直にそのヒトの指示を聞くセラ。俺が服の汚れを払いながら立ち上がると、今度は腕に絡み付いてくる。めっちゃ胸が当たっているんだが、それはそれとして、そのもう一人の女性というのは――。

「義姉さん！来ていたんですか!?!」

そう、義姉さんだ！オフをもらったのか、メイド服ではなく私服姿だった。

義姉さんは笑みを浮かべながら言う。

「ええ、オフをいただいたの。ロイがいるとはいえ、学生たちの旅行は色々危険でしょうから、引率として参加しようと思ったのよ」

義姉さんはそう言うのとセラに目を向けてため息を吐いた。

「どこからか聞きつけた恋人も来てしまっているようだから……」

「えへ☆」

舌をペロツと出してとぼけるセラ。本当、どこから聞きつけたのか……。

俺たちへの言葉を終えた義姉さんはリアスの正面に言つて一言告げた。

「リアス、まさか、旅先でハメを外そうなどと思つてはいなかったでしょうね?」

半眼でそういう義姉さん。リアスは露骨に「ギクツ!」と体を反応させて強張らせる。

……：……：凶星だったようだ。横の朱乃も諦めたように肩を落としていた。

義姉さんはその反応を見て続ける。

「高校生が旅行の名目で想いを完遂させるなど、百年早いですね。まずは殿方と普段の生活で成就させなさい。旅行で盛り上がるのはそれからでも遅くありません」

「私たちは問題ないわね☆」

「ああ、そう……：……：だな」

リアスたちには悪いが、セラはやる気満々のようだ。俺、のんびりできるのか……：……：?
?

アザゼルが義姉さんの肩に手を置く。

「まあまあ。たまには無礼講つてことでいいじゃねえか。おまえも日頃の疲れを取れつて」

義姉さんはアザゼルの手を取り、中に引っ張っていかうとする。

「いい機会です。あなたにも話さなければいけないことが山のようにありました。それらの反省と今後を話し合いましたよ」

「お、おい！マジか！俺は今日色々やる予定があるんだぞ！」

「サーゼクスに悪影響なので、摘みます」

「摘まれる!?おい、助けて！ロイ！おまえなら——」

助けを求めてくるアザゼルを無視して、俺とセラは話を進める。

「ロイ、さっそく部屋に行きましょう☆せつかくのオフなんだもの、のんびりしないとね☆」

「そうだな。のんびりするか」

「ええ☆」

「無視すんなコラアアアアアアッ！」

俺は満面の笑みを浮かべて連れていかれるアザゼルを見送り、リアスたちにも視線を向ける。

「おまえたちも楽しめよ。俺はセラの相手をしなきゃならないみたいだが……………」

「そうよ、楽しんでね☆私も楽しんでやうから☆グへへへへ」

俺を見つめながら不気味に笑うセラ。俺、大丈夫だろうか……………。

こうして、俺たちの慰安旅行は様々な形で始まったのだった。

Extra life 05 慰安旅行つてかデート

何だかんだあり、俺——ロイはリアスたちと別れてセラと部屋に向かう。

最初は男女で別れて部屋に入る予定だったのだが、そこから離れてセラと一緒に過ごすことにしたのだ。せっかく来てくれたんだからこのぐらいいいだろう。

部屋はいわゆる和洋室つてやつで、部屋の広さを見れば二人で過ごすには十分だろう。とりあえず、寝るときは布団だな。

部屋をざつと見てみたが、温泉とマッサージ機もあった。テレビもそこら辺の家よりは大きいものだろう。

「存外充実しているな。最低限のものしかないかと思つてたんだが」

「うふふ、そうね☆私はロイがいればどこでもいいけどね☆」

セラが楽しそうに笑う。まあ、俺もセラがいればどこでも楽しめそうだけだな。相当地でもなければ……。

「さて、さつそく着替えちゃいましょうか！」

セラはそう言うなり勢いよく服を脱ぎ捨てた！キレイで健康的な肌、ほどよく肉のついた足、そして外見年齢の割に大きめの胸があらわとなる！つて、ノーブラだったのか

!?

俺はとつきに顔をそむける！セラとはそういう事をしたが、あの時は心の準備が出来ていた！だが、不意打ちは辛い！

俺は顔を赤くしながら横目でセラを見ながら言う。

「セ、セラ！その、もう少し羞恥心をだな……………」

「あら、ロイしかないんだから、いいじゃない☆」

裸のままその場で一回転して横チヨキをするセラ。それに合わせて胸が『ぶるん！』と揺れる！くそ！修学旅行からやたらと女性の胸に目がいつちまうのは何でだ!?

俺が自分の変化に困惑していると、セラが抱きついてくる！

服越しとはいえ、セラの胸の感触があああッ！

「ほくらく、ロイも脱いで。一緒に着替えましょう☆」

硬直する俺の服を脱がしにかかるセラ！俺はまともに抵抗できずに上着を剥がされ、そのまま上半身裸になる！

セラはまじまじと俺の体を見つめ、よだれをたらしながら再び抱きついてくる！

今度はダイレクトかよ!?!なんか、胸の柔らかさとは違う『コリッ』とした感覚まで肌を感じとりやがる！くそ！このままだと理性がもたん！

「こうやっていると安心するわ」

俺も安心できるが、それ以上に色々ヤバイ。

俺はぎこちなく腕を動かし、セラの頭を撫でる。

「セ、セラ、着替えたいから離れてくれないか……」

「えー、もうちよつとこのままでいさせて☆ね？」

「……………わかった」

俺はため息を吐いて諦め、セラを抱きしめ返してやろうとするが、今度は尻に目がいつてしまう！今はかわいらしい下着に隠れているが、あの中にはセラの綺麗な尻があると思うと、どうすればいいんだ！って、俺、こんなに奴だったのか!?

俺は行き場に迷う手をプルプルと振るわせながら、完全に硬直した。ヤバイ、俺、おかしい。昔はこんなこと思わなかったぞ！

俺の状態を知らないセラは顔をあげ、笑みを浮かべる。

「よし、着替えましょう☆確か、浴衣がここに……………」

セラは俺から離れて浴衣を取りに部屋奥へ消えていく……………。

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」

俺はハツとしながら息を整え、左胸に手を当てる。いつも以上に心拍が早い。かなり緊張したな……………。顔を胸に埋めていた以上、セラも気づいているかもしれない。

「何を意識しているんだ、俺は。いつも通りでいいじゃねえか」

俺が自分にそう言い聞かせていると、

「ロイ、どうかしら☆」

奥から浴衣姿のセラが現れ、かわいくポーズを決める。か、かわいい！いつもと違うギヤツプつてのを痛感するな！

俺は平静を装い、いつも通りに頷いてやる。

「ああ、似合ってるぞ。俺も着替えるか」

「ロイも似合うと思うわ☆」

「どうだろうな？」

俺はそう返しながら部屋の奥に入り、置いてあつた浴衣に着替えようと手を伸ばす。

「……………セラ、何やってんだ？」

「覗きよ☆ロイの着替えを見物しようと思つて☆」

部屋の入り口から顔をだし、俺を見つめてくるセラ。気づかれないと思つたのだろうか？

「引つ込んでくれ。気になって着替えられない」

「……………」

無言で涙目で俺を見つめてくるセラ。引つ込む気は毛頭ないようだ。

俺はため息を吐き、浴衣を手取る。

「わかったよ、襲いかかるなよ？」

「うん！任せなさい☆」

やれやれ、大丈夫だろうか……………。

夕飯前、無事に着替えを済ませた俺は――。

「どう、気持ちいい？」

「ああ、大丈夫だ……………」

セラと混浴して、その流れで背中を流してもらっていた。

なぜこの旅館には混浴があり、しれつと貸しきりをなる手はずが整っているんだろうか……………。

セラは丁寧に洗ってくれるのは助かるが、ずっと胸が当たっているんだが！

色々大変なことになっている俺に、セラが言う。

「ロイとお風呂なんて、久しぶりね」

「てか、こうやって二人でのんびりすることが久しぶりだと思っただが……………」

「確かにそうね☆」

なんて会話をしながら、セラは背中をごしごしと擦つてくれた。

「ロイ、髪切らないの?」

「どうした、急に……」

俺が振り向きながら訊く。俺は髪を肩くらいまで伸ばしており、いつも後頭部で一纏めにしている。

セラは俺の髪に触れながら言う。

「いえ、邪魔じゃないのかなって」

俺はセラを見ながら笑みを浮かべて言う。

「そうか? まあ、そのうち切るさ」

「ふふ、そのときは私が切るわ」

「……遠慮しておく」

「な、なんでよ!」

驚くセラに俺は言う。

「セラ、不器用だろ? 変な切られ方されたら敵わん」

「た、確かにそうね」

セラはそう言いながらお湯をかけ、背中洗いを終える。で、俺のと同時にセラにもつ

いていた泡も落ちたため、セラの胸が、乳首が丸見えとなる！

俺は勢いよく正面に向き直ると、セラが抱きついてくる！

くっそ！またセラの胸の感触が！

俺が再び固まっていると、セラが耳元で言う。

「今度は私の背中を流して？」

いつになく官能的な声に俺は生唾を飲み込み、ゆつくりと頷く。

「ふふ、ありがとう」

セラはそう言うのとフツと耳に息を吹き掛けてきた！俺が体をビクツと反応させると、セラは可笑しそう小さく笑う。

またからかわれた。やっぱり、セラには勝てないな……………。

俺とセラは場所を交換し、セラは邪魔にならないように髪を結う。

俺は泡立てを行い、十分にそれが出来たらセラに訊く。

「そんじゃ、いくぞっ？」

「お願いしまーす☆」

俺は出来る限りの優しく背中をごしごと洗ってやる。

それにしても、やっぱりセラの背中中は小さいな。色々と背負っているとはいえ、女つてことか。

俺はそんな事を思いながらお湯をかけ、泡を落としてやる。

「おし、完了だ」

「ありがとう、ロイ。せつかくなんだし、暖まりましょう」

「まあ、温泉だからな」

二人で寄り添うように湯船に浸かる。あゝ、暖まる。

俺が安心するように息を吐いていると、セラが寄りかかってくる。

「どうかしたか？」

「いいえ、ただ何となくよ」

セラはそう言うのと俺の腕に絡んでくる。俺は特に気にすることなく、セラに言っておく。

「一応言うが、俺は死なないからな」

「え？」

セラは少し驚きながらも俺を見る。俺はセラの目を見つめながら言う。

「色々あったが、俺は死なない。セラを残して死ねないさ」

何となくだが、セラはイツセーの死の話聞いて不安を感じたのかもしれない。イツセーと同じ戦場に行くことが多い俺を心配しているんだろう。

俺はセラは頬を撫で、安心させるように笑みを浮かべる。

セラは頷くと満面の笑みを浮かべた。

「ええ、私はロイを信じるわ」

「ああ」

俺も頷き返し、セラと見つめ合う。

セラが信じてくれるのなら、俺は戦える。

俺とセラはゆつくりと顔を近づけ、唇を重ねる。一瞬触れただけだが、やはり一番落ち着く。

顔を離れたセラは、ニコニコと笑いながら恥ずかしそうに顔をそむける。

「なんだ、いきなり恥ずかしくなったか？」

「だって、いきなりなんだもん……………」

俺は苦笑して壁にかけてある時計を確認、湯船から出る。

「そろそろ夕飯の時間だ。上がるうぜ？」

「そうね☆ご飯楽しみ☆」

俺たちは並んで風呂から上がり、浴衣を着て部屋に戻ろうと歩き出す。

夕飯中。

俺とセラ、あと義姉ねえさんの三人で食べることになった。

それはいい。むしろセラと義姉さんが楽しそうに話す姿は見ていて楽しいからな。
だが――、

「ロイ、聞いているの?」

「聞こえてますから離れてください」

「そうよ、義姉さ〜ん、ロイは私のもものよ〜」

義姉さんとセラが近い。実際に肩同士が当たっているしな。

さつきから話が盛り上がって酒を飲んでいたし、二人して酔ったのかもしれない。

義姉さんが俺の頭を持ち、『ゴキッ!』という音と共に無理矢理顔を向かい合うようにすると、艶っぽい表情で俺の顎を指で撫でてくる。

「確かにロイはセラフォルーのものだけど、この間ミリキャスがお世話になったから、その時の話を聞かせてもらえないかしら?」

「は、はい……………」

義姉さんは酔うと少しお茶目になる（兄さん談）ので、こういうものなんだろう。

俺は首の痛みに耐えながら頷き、この間の話を始める。

「そうですね。どこから話を――」

その日の深夜。

「うふふ〜♪ロイ〜♪」

ほろ酔いで上機嫌なセラ。俺の話聞いた義姉さんは温泉に入りに行った。夕飯中に放置されていたせいなのか、いつも以上に絡んでくる。

布団の準備を終え、床に座って休んでいた俺の膝の上に対面するように座ってきており、寝る前だからか髪も下ろしている。

それはいいが、浴衣がはだけて、その、胸とその先端が見えているし、柔らかい尻肉の感覚が！

俺は崩れかける理性を支えながら、優しくセラの頭を撫でてやる。

セラは気持ちよさそうに笑っていたが、急に俺の手を取り、それを自分の胸に誘導した！

いきなり過ぎたことと俺も若干酔っていたこともあり、無抵抗のままセラの胸に手が

せ、体をモジモジさせて俺を見つめてくる。

「ロイ、い……」

「セラ、もう、抑えられん……！」

俺はセラの返事を聞く前に彼女を抱えると、そのまま俺が上から覆い被さるように布団の上に降ろす。

布団に寝かさされたセラは潤んだ瞳で俺を見つめ、小さく頷く。

「私も、早く来てえ……」

「言われなくても！今夜は寝かさねえからな！」

俺は浴衣を脱ぎ捨て、そのままセラに襲いかかる！

「きゃっ！んん……ッ！ら、らめえ……」

こうして、慰安旅行の夜は更けていったのだった……。

次の日の朝。

「にゅふふ〜♪」

満面の笑みを浮かべて俺にくつついてくるセラ。まじで一晩中やることになるとは……………。

若干の疲労を感じながら、俺はセラの髪を撫でる。

「まったく、元気だな」

「それが取り柄ですもの☆」

どや顔のセラ。かわいい！

俺は体を起こし、時間を確認する。出発まで時間があるな……………。

俺は再び寝転び、セラを抱きしめる。

セラは特に抵抗することもなく、俺を抱きしめ返してきた。

「まだ時間もあるし、もう少し寝てようぜ」

「そうね。ちよつと疲れたわ……………」

「悪いな。手加減は苦手なんだ……………」

「もう……………！」

セラは笑いながら俺の胸を軽く叩く。かわいいもんだ。

俺はいきなり襲ってきた眠気に押され、ゆつくりとまぶたを閉じていく……………。

「おやすみ、セラ……………」

「おやすみなさい……………」

眠り際、セラとキスをする。本当、セラといると落ち着ける……………。

数時間後。

「さて、仕事サボんなよ?」

「わかっているわよ☆任せなさい☆」

俺とセラは別れのあいさつをしていた。セラはこのまま直接冥界に戻り、俺たちは車で駒王町に戻る。義姉さんはすでに戻ったそうだ。

それはいいとして――、

『……………』

「木場、昨日何かあったのか?」

「色々あったらしいです」

リアスたち女子チームの機嫌が悪い。木場は何か知っていそうだが、言うつもりはな
いらしい。

そういえば、夜中に変な魔力を感じたような……………。

俺は首をかしげながら荷物を車に積み込んでいき、出発の準備を整える。

「さて、また今度な」

「またね☆皆も元気で☆」

セラは横チヨキをしながらそう言うと、転移魔方陣を展開して消えていった……………。
俺はそれを確認して頷き、リアスたちに言う。

「さて、帰りますか!」

『はい』

慰安旅行はこうして幕を閉じる。いやー、珍しくアザゼルの提案が成功したな! やつて正解だったぜ!

Extra life 06 京都からの客

とある休日。

俺を含めたオカ研メンバーは、兵藤宅の地下にある転移室に来ていた。いきなりだが、お客さんが来るそうさ。

名前を聞いたときは懐かしさを感じてしまった。まあ、何カ月か前に会ったことのある人物だ。

そう思い返していると、魔方陣が輝き、そこから赤い鳥居が出現し始めた。やつぱり来るときは鳥居なんだな。向こうの連中らしいっちゃらしいが……。

俺が心の中でそんなことを考えているなか、鳥居から現れたのは――。

「久しぶりじゃな！八坂の娘、九重くのうの登場じゃ！」

元気よく登場したのは巫女服姿の金髪少女、九重だ。ピンと立った獣耳と、もふもふした尻尾を揺らしていた。

初めてあの娘こと会ったのは修学旅行の時か。それ以来会っていなかったが、元気そう
で何よりだ。

少し遅れて九重のお付きのヒトと思われる同じく巫女服姿の妖狐ようこが二人現れた。

九重たちの到着を確認したイツセーが言う。

「よう、九重。ここじゃなんだから、上に行こうか」

「うむ！お邪魔させていただく！」

幸彦くんやミリキヤスの時も思ったが、やっぱり子供は元気が一番だな。

そんなわけで、九重とそのお付きの二人をVIPルームまで案内する。着いた途端に付きの二人は「ドロン！」と煙と共に去ってしまったが、京都でもそんな感じだったので今さら気にしない。

VIPルームに到着後、リアスが改めて九重にあいさつをする。

「ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。京都では私の眷属と、お兄様がお世話になりました」

リアスは初対面だったな。あの時、京都には来ていたが、あれはノーカウントにしてやろう。それはそれとして、リアス含めた一、三年は全員初対面か。

リアスのあいさつに九重は丁寧に頭を下げて応えた。

「こちらこそ、お初にお目にかかります。九重と申します。今後とも、何とぞよろしく頼みます」

姫はあいさつを済ませると、リアスの全身をマジマジと見ていた。

リアスもそれに気がついて自分の体を確認しているが、俺から見てもいつも通りだと

思うが……。

途端に姫は興奮した様子ではしやぎ出した。

「おおつ、お噂以上に美しいお方じゃ！ さすがは正妻殿じゃな！」

確かに、兄の俺から見てもリアスは美人だと思うぜ？ てか、今のセリフ、よく本人を前にしてストレートに言えたな。

リアスは少し困惑しながら、九重に聞いた。

「大変光栄なお褒めの言葉だけれど、せ、正妻殿……？」

リアス的にはその呼び方が気になった様子だ。

姫は大いに頷き、続けた。

「うむーイツセーの主様で想い人だと聞いておりますぞ！ となれば、私にとっては正妻殿ということになるのじゃ。母上にも正妻殿を立ててこそ、天龍の——」

姫がそこまで言いかけると、再び「ドロン！」と付き人の妖狐が現れて姫の口をふさいだ。

「九重様。それはまだ早すぎますぞ！」

「まずは印象操作です！ 正妻殿とその兄上様、そして側室の方々と仲良くならねば『京都・天龍御子千年計画』がパーでございます！」

姫もそれを聞いてうんうんと頷いていた。

「なあ、何だ。その、何とか千年計画って？」

俺はわざと踏み込んで訊いてみると、付き人の二人は「おほほほほ」とわざとらしく笑いながら誤魔化して再び消えた。

何だろう、イツセーの近くにいると退屈しないというか、休みがないというか……。まあ、今はいいか。

「とりあえず、九重。お久しぶりだな。京都では世話になった」

「うむ、ロイ殿もお久しぶりじゃな！」

先程の話なぞなかったかのように応えてくる九重。俺がため口なのは気にしていないようだ。

「ところで、イツセー。龍の社を建てたいそうじゃな？しかし、悪魔ゆえにその方法が知らぬと聞いた！しかし、皆のもの、安心せい！九尾の狐、八坂やさかの娘たるこの九重が来たからにはもう心配せずともよい！私が一から教えてしんぜよう！」

それが今回の名目か。九重が前からこつちに来たいと愚図っていたこと、そしてイツセーたちが『オーフィスのお社』を作りたいと思ったことで、今回の訪問が決まったわけだ。

九重もオーフィスを見ながら訊いてきた。

「イツセーではなく、その龍の女人の社を建てるのじゃな？」

オーフィスはそれを聞いて首をかしげているが、いきなり名乗られても面倒だ。立場上、オーフィスはここにいないことになっているんだし。イツセーだとボ口を出しそうで怖い！

俺がオーフィスを見る九重の視界に入り込むようにしてから言う。

「ああ、あの娘は……『フィス』って名前なんだ。イツセーの縁でここで預かってあるんだが、なんでも名のあるドラゴンの血縁らしくてな。だったらお社があつてもいいんじゃないかってことになったんだ。だよな、皆？」

『は、はい！』

とつさにオーフィスのことをフィスって紹介しちまったが、問題ないだろうか……。

俺は姫に聞こえないように、イツセーに小声で言う。

「九重が滞在している間、オーフィスをフィスって呼んでくれ。変なところでボ口を出すなよ？」

「(わ、わかりました！)」

「何を話しておるのじゃ？」

九重が俺とイツセーが二人だけで喋っていることを不信に思ったのか、そう訊いてくるがイツセーがとつさに返す。

「いや、その、ロイ先生とお社をどこに建てようかって話してたんだ！」

「ああ、確か屋上にスペースがあったはずだから、とりあえずそこでいいだろ」

俺たちがそう言うと、九重は頷いた。

「そうかの？それでは、場所を見せていただこう！」

こうして、俺たちは屋上に移動した。

リアスの話だと夏休み前に改築を行い、兵藤宅をここまでの大きさにしたそうだ。おかげで部屋が余りまくっている。実際、俺の両脇の部屋は空きで、半分物置状態になっているほどだ。その余っていた物置に俺が住みついているんだがな。

で、そんな兵藤宅の屋上は空中庭園となっており、花壇や小さい野菜畑がある。お茶をするためのスペースもあり、休日になると必ずと言っていいほど誰かがいる。実際、誰かを探しているときにここに来れば、すぐに見つけられる。

その屋上の少し空いたスペース。そこにお社を建てるつもりなので、九重とそこを確認していた。

「どうかな？」

イツセーが訊くと、九重はにんまりと笑ってピースサインをした。

「うむ！まあ、これぐらいの空きがあるのなら小さな社は建てられるじゃろう！よし！
祀る者もわかり、場所も把握したところでさっそく工具と材料じゃな！」

姫が二回手を叩くと、「ドロン！」と煙と共に妖狐が出現して、姫に木箱を渡した。

光沢があり、なかなか綺麗な模様と雰囲気の木箱だ。九重が中を確認するように箱を開けると、中にはノミやカンナ、木槌、ノコギリといった大工道具が数種類入っていた。「これは我が都に伝わる由緒ある工具じゃ。これを用いて材料を切つて削つて社を建てようぞー！」

なるほど、これで作業するんだな。だが……。

「九重、これはちよつと、悪魔が持つには神聖な物過ぎるといふか、これで作業するのは辛いと言ふか……。」

俺が悪魔的には危険なオーラを発している工具を指差しながら申し訳なく言うと、九重は少し当惑気味になった。

「なんと。そこまで思考が至つておらなんだ……。うーん、私は持てるのじゃが……。そういえば、我が同胞でもこれらを持てる者は限られておつたな」

九重はそう言つて軽く持ち上げているが、悪魔の俺たちには無理だと思う。俺が魔力である程度中和したとしても、数分使えるかどうかだ。

てか、こういう時のアドバイザー、アザゼルはどこに行つた！今日は一度も見ていないし、連絡もつかんぞ。

「朱乃、アザゼルがどこにいるかわかるか？」

俺が訊いてみると、朱乃は大きく溜め息をついた。

「アザゼル先生なら『第316回墮天使幹部麻雀大会』に参加するとかでいませんわ。………まったく、うちの父親まで巻き込んで麻雀大会だなんて………っ！」

呆れ口調の朱乃。316回って、和平が結ばれる前からやっていたみたいだな。まさか、あのコカビエルも!?

俺の疑問もよそに、ロスヴァイセが言う。

「これらの工具について、以前の同僚に訊いてみます。私の故郷には神事の工具について詳しい部署もありましたから」

ロスヴァイセはそう言うなり小型の連絡用の魔方陣を展開していた。

さすがはヴァルキリー、誰よりも神事を間近で見ってきたであろうことはある！

ロスヴァイセは二三やり取りをすると魔方陣を消して、俺たちに言ってきた。

「元同僚に専用の術式を教えてもらいました。軍手にその術をかければ、これはの工具ぐらいなら一日手にしても平気になるようです」

それを聞いた俺は笑顔でロスヴァイセに礼を言う。

「ありがとうな、ロスヴァイセ。おかげで工具は問題なしだ」

「こ、これぐらいなら、当然です！」

顔を赤くしながら照れるロスヴァイセ。こういうものへの耐性がないんだな………。

俺が苦笑していると、九重が笑みを浮かべながら言う。

「ロイ殿も女性にはお優しいのですな。セラフォル殿と仲が良いことも頷けるのじゃ」

俺とロスヴァイセのやり取りを見て、姫がそう言ってきたのだが、ここで疑問が一つ。「セラと何かあつたのか？」

「いやなに、あの後、セラフォル殿は京都を観光していったのじゃが、行き先々で『次はロイとく』と言っておつたとそうですぞ」

「なるほど。まあ、話は後で訊こう。九重、次は何だ？」

「うむ！では次は材料じゃ！木材を調達に行くぞ！」

『おー！』

俺を含めた何人かのノリがいいメンバー（イツセー、アーシア、イリナ、ゼノヴィア）が九重に合わせて声を出した。たまにはこういうのもありだろう。

こうして、俺たちは手分けして材料調達をすることになった。

Extra life 07 たまには作るのもいい

材料集めのメンバーは俺——ロイとリアス、イツセー、ゼノヴィア、そして九重だ。転移魔方陣で移動時間を短縮して、一気に森の真ん中に来たわけだが……。

生い茂る山の木々はかなり樹齢を重ねているように見え、一本一本が巨大で、力強いものばかりだ。そんな木々に囲まれている俺たちはそれらに圧倒されていた。

木々だけじゃなく、山全体から静寂で霊的な雰囲気を感じる。人の手が入っていないようで、悪魔としての第六感が不思議と刺激される場所だ。

「到着したが、目的地はここであっているか？」

俺が確認すると、姫は頷きながら一歩前に出た。

「うむ、さすがロイ殿。寸分違わぬ場所に出られましたぞ。この山の神にはすでに話が済んでおりますゆえ、樹齢の永い杉を一本いたたくことになっております」

それなら話が早い。急な話だったのに、対応してくれてありがたいな。

「樹齢を重ねた立派な杉なのに、木材にしているのかな」

森を進むなか、イツセーがそんな事を口にした。こいつ的には『杉に精神がある』と思っ
思っているんだと思う。日本の八百万やおよろずの考えってやつなんだろう。

そんなイツセーに九重が答える。

「安心せい、イツセー。なんでも先日为天災で真つ二つになつてしまつた杉があるそうなのじゃ。それを今回いたただける運びとなつておる」

だよな。俺たちが使えるのはその傷んでしまつた杉というわけだ。

それを確認して、その杉のもとまで移動した俺たち。そこには、確かに真ん中あたりから見事に折れてしまつた巨大な杉があつた。

「この杉は齡よわい400年と聞く。折れた先だけをいただき、残つた部分はそのまゝにして欲しいとのことじゃ」

400年！俺もそれくらいなら生きているが、なかなか見事なもんだ！

ゼノヴィアが折れた杉に手を添える。

「うん。あとはこれを運ぶだけか。私はてつきりこの山の巨木をデュランダルで伐るものだと思つていた」

俺はため息を吐き、言葉を漏らす。

「豪快すぎだ。俺がこつちに呼ばれた理由が何となくわかつたよ」

「む、それはどういうことだ。ロイ先生」

「ゼノヴィアがやつたら無駄に周りの木を傷つけそうだつてことだ」

「な、なんだつて！」

俺の言葉に露骨に驚くゼノヴィア。まったく、今回は下手に伐りまくれないってのに……。

「とりあえず、作業開始ね」

俺とゼノヴィアがくだらないことで言いあっていると、リアスの指示が入り、作業が始まった。

まずは九重が山と杉への感謝の儀式を済ませる。

次にイツセーが鎧を纏って折れた巨木を運び、俺とゼノヴィアで今回用に用意されていた特殊儀礼済みの刀剣で大体で切り分けていく。

そしてリアスが展開した転移魔方陣にそれを放り込んでいくが、俺は様子を見て、自分で転移魔方陣を展開して、木材を転移させていく。

転移先は兵藤宅の地下。そこでは日曜大工組が待機しており、そこで杉を加工してくれているのだろう。

屋上でもブロック基礎組がお社の土台を組んでいると思う。

この手の作業には専門知識が必要だが、それは九重の付き人でもあった妖狐ようこが手伝ってくれているとのことなので、こっちも安心して木材確保をしていける。

俺が作業している横で、リアスと姫が少しずつ距離を縮めていったようで、お互いを名前で呼ぶことになっていった。

「ロイ殿は、側近の方を作らないのですか？」

「姫が何か思ったのか、俺に訊いてきた。」

「側近？ ああ、第二夫人とかそういうやつか」

「うむ」

「姫は頷くと一旦作業の手を止めて俺の答えを待っているようだ。」

「俺も一旦作業の手を止め、あごに手をやって少し考える。」

「今までセラ以外の女性と深く関わることもなかったし、俺から関わろうとも思っていないからな……………」

「あんまり考えていないな。セラの相手で手一杯だ」

「そうなのかの？ 因みにじやが、気になるお方はいるのかの？」

「それを訊かれた瞬間、なぜかロスヴァイセが脳裏をよぎったのだが、単純に身近な仕事仲間だからなのかもしれない。」

「まあ、京都で色々と迷惑をかけちゃったらしいからな、そのせいもあるかもしれない。」

「……………どうだろうな」

「俺は曖昧に返して、再び作業に戻ろうとしたが、九重が再び訊いてきた。」

「ところで、ロイ殿。セラフォール殿とはどのように出会ったのかの？」

「恋する乙女の好奇心なのか、グイグイ訊いてくるな、この姫様は。」

「セラと初めて会ったのは、子供の頃にシトリの屋敷に呼ばれた時だな。最初はテンション高くて苦手だったんだが、なんだかんだ言っただけのことには気にしていたわけだしな。まな、よく言う『一目惚れ』ってやつだ。で、告白したのは三竦みの戦争中だ。コカビエルに左目を潰されたすぐ後だな」

「なるほど、ロイ先生とレヴィアタン様は幼馴染みというわけか。どこぞの『自称』天使なイツセーの『自称』幼馴染みも見習ったほうが良い」

ゼノヴィアも作業をしながら話を聞いていたようで、相づちを入れてきた。その自称呼ばわりされているのはイリナだろうな。

「お兄様、いつまでも喋っていきなさい。休憩することも大事ですが、こちらの作業が滞ると、後続の作業も止まってしまいます」

「スマン。さて、ペース上げていきますかー」

ある程度休憩できたので俺は袖を捲まくし上げ、最初よりもペースを上げて作業を進めていった。

一通りの作業が終わった深夜。

皆は上でゲーム大会をしているそうだが、俺は年が年なので自重して、俺は一人で余っている木材であるものを作っていた。もちろん、付き人の妖狐さんに手伝ってもらった。

「こんな感じか？」

「はい。初めてとは思えない出来です」

「それはどうも。スマンね、付き合ってもらっちゃって」

「いえ、これも九重様も為ですので」

「そっか、まあ、ありがとうな」

「はい。では、これにて」

妖狐さんはそう言うと「ドロン！」と再び消えていった。

とりあえず、寝るか。なんか、疲れた。

俺が徹夜で作業をした日の昼。

切り出したおいた木材を組み合わせて、小さめのお社を組み上げていく。

切り出しと加工の精度がしっかりしていたのか、図面の通りに組むだけでお社が出来上がっていった。そして、形となったお社を固まった土台の上のせて固定する。

「いちおう、完成か？」

俺がフーつと息を吐いて出来を確認する。俺的には木造の立派なお社に見える。

『おおっ！』

皆で拍手をしながら声を出していた。

「鳥居も届いたぞ」

転移魔方陣からゼノヴィアが朱色しゆいろの鳥居を持ってきた。ヒト一人が通れるくらいの小さいものだ。それをお社の前に設置し、同じく届いたしめ縄もかけていく。

「昨夜、ロイ様を作ったものです」

姫の付き人の妖狐ようこが、俺が徹夜で作ったそれをお社の前に設置した。

「お賽銭箱じゃないですか！ロイ先生が作ったんですか!？」

それを見たイツセーが驚きながら言ったが、失礼なやつだな。

俺はあくびを噛み殺し、イツセーに言う。

「俺をバカにするなよ。こちとら徹夜で作業してたんだ。後半からくっそ眠かったぞ

……」

俺は目を擦りながらそう言うど、

『ありがとうございませす！』

皆から礼を言われた。これだけで頑張った甲斐かいたな。

そんなこんなで形になっていくお礼周り。そして、最後に飾るのは、一对の狛犬ならぬ龍の像だった。片方が赤く、もう片方が白い。

「これは、二天龍を模したのかな？」

イツセーの問いにリアスが答えた。

「ええ、像が何がいいってフィスに訊いたら、ドラゴンの赤いのと白いのがいいって言うものですから」

オーフィスが興味津々の二天龍に倣なつたようだ。

俺が後ろで頷きながら納得していると、オーフィスがペチペチと赤い龍の像を叩いていた。首をかしげているから、もしかしたら彼女の想像と違ったのかもしれない。

「グレードレッド？倒す」

「疑問符を浮かべながら、ペチペチやらないでくれよ！それ、俺やドライグのことらしいから！俺を倒さないでえええつ！」

イツセーはそう叫んでオーフィスを止めていた。

その後、九重が簡単な神事を執りおこなない、ついにお社も完成となった。お社の段差に鎮座するオーフィス。どこか嬉しそうだ。

九重が言う。

「神事をかなり簡略化したけど、これで、いいと思うのじゃ。本格的に済ませて完成させるとなると、神聖な力が高まりすぎて、悪魔であるお主らに悪影響が出るかもしれぬからな」

九重の言う通りだ。悪魔である俺たちが身近にいる以上、神聖な力が強すぎると体調を崩しそうだ。だが、神事を簡略化してくれたおかげでそこまで気持ち悪いものを感じない。

朱乃が何かを思いついたように口を開いた。

「うふふ、じゃあ、完成記念に皆でフィスちゃんにお願いをしてみましようか？」
なるほど、それは面白い。

てなわけで、俺たちでオーフィスに願うことに。

アジアの願い

「世界が平和でありますように」

「平和……世界の平和、どこからが平和になる……？」

なかなか深い答えを出してくれるものだ。

小猫の願い

「……………イツセー先輩のスケベがほどほどになりますように」

「来世に期待」

その来世は一万年後か、十万年後か。俺みたいに二度目が来るのだろうか？

ゼノヴィアの願い

「女子力を高めたい」

「エクス・デュランダルを極める」

それは女子力じゃない、ただの戦闘力だ！

朱乃の願い

「お料理がもう少し上手になれば嬉しうですわ」

「我もうれしい」

時々食わせてもらっている俺も嬉しいな。朱乃の料理、めっちゃ美味しいからな。

レイヴェルの願い

「背がもう少しだけ欲しいですわ」

「牛乳を毎日飲む」

それはただの生活のアドバイスだと思っぞ！他に何かないのか!?

イリナの願い

「クリスチャンの私が願ってもいいものかしら……」

「ミカエルより我のほうが強い」

強者が正義ってか！なんか違う気がするぞ!?

木場の願い

「えーと、悪魔の仕事がたくさん舞い込みますように」

「……ZZZZZZZZ……」

寝ている……だと……。真面目な願いはスルーか!?

ギヤスパアの願い

「え、えっと、もっと男子力をつけたいですう」

「ミルたん」

によ!?なぜオーフィスがミルたんを知っているんだ!?

九重の願い

「願いはたくさんあるが、京都が平和であれば問題なしじゃ!」

「お社をありがとう」

二人とも、いい子だなあ。俺の小さい頃とは大違いだ。

リアスの願い

「アーシアほど規模は大きくないけれど、この町にいる皆が平和であるなら、いいのではないかしら」

「町の平和は我が守る」

オーフィスが本気を出したら誰も勝てないって!

ロスヴァイセの願い

「リアスさんの後に言いにくいのですが、彼氏かお金が欲しいです」

「……………」

な、何か、オーフィスが無言で俺を見つめてくるんだけど、俺の顔になにかついているのか？

「あの〜？」

「近くにいますかも」

「ほ、本当にですか!？」

オーフィスの言葉を聞いたロスヴァイセは少し興奮気味に周囲を見渡す。

それにしても、オーフィスはなんで俺を見たんだ？

俺の願い

——と、訊かれても難しいな。

俺はしばらく真剣に考えて願いを口にする。

「……………とりあえず、何十年後か、何百年後かわからないが、そのうちできるであろう俺の子供を抱きたいね」

「……………体を大事に」

オーフィスから真剣な顔で言われてしまった。まな、できるだけ無理はしないようにするか。

俺の願いの次はイツセーだ。だが、こいつのことだ……………。

「どうせスケベな願いだろうがな」

「な！ロイ先生、俺をバカにしないでください！俺の願いは『皆と平和に生きたい！』です！」

おー、意外としつかりした願いだ。何か、イツセーに失礼なことを言ってしまった気がする。

すると、オフィスがイツセーに正面から言った。

「大丈夫、我、イツセーのことをいつだって見守っている。いつだって助ける。イツセーは我の友達」

それは心強い。さつきは無理はしないようにって考えたが、最悪イツセーたちだけでも助けるつもりだ。まあ、オフィスが助けてくれるなら大丈夫だろう。

などなど、俺たちがお社完成の余韻に浸っていると、そこに現れる人影がひとつ。「ふいー。徹夜明けの日差しは辛いもんだぜ……………」

アザゼルだ。どうやら、麻雀マージャン大会は徹夜に突入していたようだ。

「遅かったな。で、大会はどうだった？」

俺が訊くと、アザゼルは悔しそうに言った。

「バラキエルの優勝だよ。まったく、今まではあいつがビリとかだったのによ。喧嘩し

ていた親子が和解するところも違うのか？俺も子供が欲しくなってきたぜ」

それを聞いた朱乃は呆れていたが、どこか嬉しそうでもあった。

てか、俺とアザゼルの願いが被っている！俺は真面目に願ったのに、アザゼルはどこか適当な感じだ！そんな理由で子供を作って良いのかよ！だが、アザゼルのことだ、理由はどうであれ子供ができたら溺愛しそうだけだな！

「さて、俺は昼寝でもするかね。徹夜明けの作業は辛いんだ」

俺がそう言うとりアスが軽く礼をしてきた。

「お兄様、お賽銭箱をありがとうございました」

「おう、壊すなよ？」

俺はそう言って踵を返し、屋上の出入口に向かっていくと……。

カッ！ドオオオオオオオオンッ！

背後から突然の閃光と爆発音が聞こえてきた！俺はあくびをしながら振り向いてみる——。

「ガガガガガガガガガッ！」

「ギャギャギャギャギャギャッ！」

イツセーとアザゼルが突如降り注いだ雷に痺れていた。何だ、天罰か？

「？」

オーフィスも首をかしげて不思議そうにしている。

ま、どっちにしろ俺には関係のないことだ。とりあえず、寝よう。

俺はそう決めると改めて屋上から降りていったのだった。

九重が京都に帰る日。

お社建造という名目も終え、一泊した九重がついに帰ることになった。

俺たちは地下の転移室に見送りに来ている。

風呂敷で包んだお土産を九重とお付きの妖狐に持たせ、準備も整った。

「ありがとう、九重」

「九重、また来なさいね」

「またな、九重。なかなか楽しかったぜ」

イツセー、リアス、俺で別れのあいさつを済ませる。姫も名残惜しそうにしながらも、

「うむ、大変楽しい時間であった！お世話になりました」

と、元気に振る舞ってくれた。

最後にオーフェイスが一步前に出て九重に言った。

「また我と遊んでくれると嬉しい」

それを聞いた九重は満面の笑みを浮かべた。

「うむ！私とフェイス殿はお友達じゃ！また、遊ぼう！」

オーフェイスにまた友達が増えたな。それはいいことだ。

京都の姫、九重。これからちよくちよくこつちに来そうだ。てか、そのうちこつちに
住むことになりそうだな。

進路指導のウイザード

life 01 契約

冥界での戦い——『魔獣騒動』からしばらく経った日の早朝。

俺はある気配を感じて目を覚ました。部屋の外に、誰がいる…………。

俺は静かにベッドから出ると一挺だけ銃剣を取り出し、扉の横につく。同時にゆつくりと扉が開かれ、気配の主が部屋に入ってくる。

「動くな」

「にゃ？」

そいつのこめかみに銃剣を突きつけると、そいつはわざとらしく間の抜けた表情で俺に視線を向ける。

俺はそいつを見ながらため息を吐き、そして訊いた。

「……………で、黒歌。何をしに来た」

「何をつて、白音の様子を見に来ただけにゃ。あの子が私から術を習いたいって言ったもんだから」

「言葉が足りなかったか？俺の部屋に、何をしに来た」

引き金に指をかけ、怒気を込めながら再び訊く。

黒歌は両手を挙げながら笑みを絶やさずに言う。

「まあまあ、あの時に助けられなかったじゃない？ そのお礼をしに来たのにや」

誘うように自分の体を撫でる黒歌を無視し、俺は無言で黒歌を睨みつけて質問を続ける。

「他のヴァーリチームはどうした？」

俺の返しに黒歌はため息を吐き、うんざりそうに言う。

「少しは興味持ってもいいんじゃないか？ ま、いいにや。今回はルフエイちゃんしかいないにや。いちおう、敵地みたいなものだし」

最低限のメンバーで来たようだ。いつか来たときに転移魔方陣のマーキングをしていたようだ。常に見張っていたわけではなかったし、俺がいない隙にやったのだろう。

黒歌が続ける。

「それと、アザゼルから許可はもらっているから問題ないにや。たまにしか来ないけどね」

「あいつ、また勝手なことを……………」

俺は呆れ気味にため息を吐く。てか、これは俺に話すことではないだろう……………。

俺は銃剣をしまい、黒歌に言う。

「とりあえず、リアスに相談しろ。ここはあいつの領地だからな。それと、リアスの許可が出たら小猫のことは頼んだ。悪魔らしくギブアンドテイクだ」

「OKにゃ♪」

こうして、俺のストレス要因がまた増えることになった。今年に入ってから、面倒しか起きないな……………。

ある日の放課後。

俺は職員会議を終えていつも通り部室に来ていた。

全員が集めたことを確認してリアスが話始める。

「今日集まってもらったのは他でもないの。今日から魔法使いとの契約期間に入っているわ」

魔法使いとの契約か、古来より魔法使いと悪魔は深い関係がある。その関係ってのが、

「魔法使いが悪魔と契約する理由は大きく三つ。一つ目は用心棒として、二つ目は悪魔の技術、知識を得るため、最後は己のステータスにするためよ。魔法使いと契約することとは上級悪魔及びその眷属の義務の一つになっているわ」

軽く解説しておく、一つ目は有事の際の抑止力がほしいから。二つ目は悪魔経由でアイテムが欲しいから。三つ目はリアスが言った通りだ。

「まさか、魔法使いに呼び出される側になるとは、人生とはおもしろいものだ」

ゼノヴィアが複雑そうな顔で言っていた。

ゼノヴィアは教会側の人間だったからな仕方ないことだろ。

「まあ、異能に携わる人間なら普通は呼び寄せる側だ。それで呼び出される側は悪魔とか魔物だろうからな。だから契約は大事にしとけよ。一回やっちまうと簡単には反故にはできません。契約したらしたできちんと仕事しろ。だからって変な奴と契約したら評判に関わるからな相手はしっかり選べ。悪魔的にはビジネスだ。普通の契約と魔法使いとの契約、しっかり両立してこそ一人前だ」

『はいー！』

俺が言ったことに皆が返事をしたところでリアスが時計を確認していた。

「そろそろ時間ね。魔法使いの協会のトップが連絡をくださるの。きちんとしていてね」

俺も念のために服装を正してっと。

その瞬間部屋の床に魔法陣が出現する。

「メフィスト・フェレスの紋様」

木場がそう言うが正解だ。

メフィスト・フェレス、英雄派のゲオルグの先祖——ファウストと契約した悪魔。

俺がそんな事を思い出していると、魔法陣が椅子に優雅に座った中年男性を映し出す。

赤色と青色が入り乱れた頭髮に、右目が赤、左目が青のオッドアイが特徴の強面の男性。その男性はニツコリと笑った。

『リアスちゃん、ロイクくんも。久しいねえ』

相変わらずの軽い声音だ。イツセーたちも意外そうな顔をしている。

リアスが先に挨拶に応じる。

「お久しぶりです、メフィスト・フェレス様」

『いやー、お母さんに似て美しくなるねえ』

「ありがとうございます」

次は俺だな。

「お久しぶりです。メフィスト様」

『うん、ロイクくんも久しぶり。契約のために連絡したら任務でないって返されたときは驚いたけど、無事に帰還できたみたいで安心したよ』

「ご心配ありがとうございます」

俺のあいさつもすんだところでリアスが紹介を始める。

「こちらの方が『番外の悪魔』エキストラフェーモにして、魔法使いの協会の理事でもあらせられるメフィスト・フェレス様よ」

『どうも、メフィスト・フェレスです。詳しくは関連書物でご確認ください』
いきなりメタいなこのヒトは……………。

俺はいきなりのことについてこれていないイツセーに追加情報を伝える。

「因みにイツセー。メフィスト様はタンニーンクイーンの『王』キングだったりする」

「ほ、本当ですか!」

『そうだよー。タンニーンくんには「女王」の駒をあげたんだ。ま、僕はゲームには参加しないし、冥界の事件にも首を突っ込まないから、基本的には自由にさせてるんだけどねえ』

するとレイヴェルがイツセーに何かを耳打ちしていた。

その内容が聞こえていたのか、メフィスト様が口を開く。

『そうそう、その通りだよ。僕は昔の魔王たちがだいつ嫌いだったからねえ。今の魔王

の皆は大好きさ。僕のやっつてることを容認してくれるからね。アジュカくんとは思想の違いがあるけど嫌いつてわけでもない』

じやなきやこんなこと出来ないと思うんだがな。

「ところでメフィスト様。ソーナたちとはお話しましたか？」

『残念ながら後になってしまったよ。なんでも新しい眷属を迎えてからお話をしたいと言われたからね。キミたちが先になったんだ。サイラオーグくんとシーグヴァイラちゃんとは話したけどね』

「ソーナに新しい眷属か。話は聞いてます」

ソーナの眷属に新しく『騎士』^{ナイト}と『戦車』^{ルーク}が加わるとのことだ。さらに訊こうとした

ら詳しくは今度つて言われた。

『それにしてもキミたち『若手四王』^{ルーキーズ・フォー}は大人気だよ。早く話をさせろつて下に突っつかれて仕方なかったんだ』

リアス、ソーナ、サイラオーグ、シーグヴァイラの若手四人がそんな風に呼ばれてるらしいな。

俺がそんな事を考えているとアザゼルが部屋に入ってきた。

「わりいわりい、俺だけ会議が長引いてな。お、メフィストじゃねえかよ！」

魔方阵の映像を見てすぐさま笑顔になるアザゼル。メフィスト様はそれに手をあげ

て答えた。

『やーやーアザゼル。久しぶりだねえ。先に話をさせてもらっていたよ』

「そっちも大変そうだな。今度飲まないか？いいのが手に入ったんだ」

「お知り合いですか？」

仲良さそうに話している二人にイツセーが訊く。

「まあな、長い付き合いだ。昔グリゴリが独自に接触させてもらった」

『グリゴリの情報網は役に立ったよ。今でもお世話になっているしね』

「お互い様さ、メフィスト。グリゴリ的にも魔法使いの協会とのパイプを持っていて損はなかったわけだしな」

アザゼルとメフィスト様はそこから二人で話し込んでしまった。

その後話が一段落したのか、ようやく本題に入ることになった。

『長くなってしまうって悪かったね。それでは魔法使いの詳細データを送るよ』

メフィスト様がそう言ったので俺は後ろに下がる。

そんな俺を見てイツセーが訊いてくる。

「ロイ先生、何で下がるんですか？」

「すぐにわかる」

俺が言った瞬間、宙に魔方陣が展開され、そこから書類が大量に降ってくる。

「な!？」

「な、わかつただろう?」

俺は苦笑しながらイツセーにいい、降ってきた書類を皆で集め仕分けしていくわけだ。一人分だけならまだしも、リアスを含めた眷属全員分だから余計に多い。

イツセーは作業しながらも不思議そうに一枚の書面を凝視していた。

「イツセー、今じゃこれが主流だ。まずは書類選考。しっかりと選べよ」

「は、はい!」

その後、無事に仕分けを終えた。

一番多かったのがリアス。二番目がロスヴァイセ。三番目はアーシア。そこからは、イツセー、木場、朱乃、ゼノヴィア、小猫、ギヤスパ、の順だった。

「まあこうなるよな。リアスは『王』だから。ロスヴァイセはヴァルキリーだから。アーシアは回復の神セクリッド・ギア器があるから。イツセーは赤龍帝だから。木場は聖魔剣があるから。朱乃はバラキエルの娘だから。ゼノヴィアのデュランダル使いだから。小猫と

ギヤスパーが少ないのは二人ともまだまだ成長中だからだろ」

「ロイの言う通りだな。だが、この書類の大半は雑兵もいいところだろ」

アザゼルが散々なことを言っているが、

『アザゼルの言う通りさ。大半は雑兵だよ』

メフィスト様もそう言うことはそうなんだろうな。また、最初はこんなもんか
……………。

『赤龍帝くんの指名率が思いのほか伸びなかったねえ。とは言っても多いほうだけど
さ』

「魔法使いの連中はステータスも重視するが、体裁をそれ以上に気にするからな。イツ
セーは俗すぎると判断したのかもな」

アザゼルが言ったことにイツセーは何か言いたげだったが我慢していた。

どうせ、おっぱいドラゴンが流行る冥界がおかしいと思っただろ。

『そんなわけで今回のはそれで全部だよ。めぼしい子がいたら連絡してくれるとありが
たいねえ』

メフィスト様の発言にイツセーは疑問符を浮かべていた。

「今回つてことはまたあるんですか？」

イツセーの質問にリアスが答える。

「それはそうよ。今回で決まるとは限らないし、契約しても魔法使いは悪魔のように長生きではないのよ。今回のでいい相手がいなければまた書類を送ってもらえばいいのよ。契約相手が亡くなったら、また新規契約することになるわ」

俺はそこに追加情報をおくる。

「期間限定の契約もあるし、途中で解約つてこともあつたりする」

それを聞いてまた何か考えて始めるイツセー。するとメフィスト様が俺にも話しかけてきた。

『それで、ロイくんの契約の相手だけど……………』

「……………嫌な予感がするんですけど」

俺が冷や汗を流していると、メフィスト様は笑む。

『あの娘こからきているよ』

「……………ですよね」

俺はため息を吐き、俺に契約を持ちかけてくる魔法使いのことを思い出していた。

あいつと初めて契約したのは十五年ぐらい前か。あいつの親からの代変わりつて感じだったんだ。まあ、それまでは良かったが、なんか当たりが強いな……………。

イツセーが訊いてくる。

「あの、何かあつたんですか？」

「……………」

俺が黙りこんでいるとメフィスト様が代わりに口を開く。

『その娘は極端に言うくとロイクんに惚れているんだ。ロイクんが眷属を探していたとしたら、真つ先にアタククしていただろうね』

「俺は眷属を持つつもりはありません」

俺とメフィスト様で話しているとリアスが訊いてきた。

「お兄様、その方と一体なにがあつたのですか？」

「別に何もしてはいないが、なんか気に入られたんだ」

『俗に言う一目惚れだね。何となく、セラフォルーちゃんに似ていたような……………』

「そうなのですか？」

怪訝そうに俺を見るリアス。俺は再びため息を吐いてリアスに言う。

「外見つてよりはテンションだ。やたらと高い。魔法使いなのに高い」

『でも、腕は確かだから断るに断れないんだよね』

俺のように無名な悪魔だと、あまりヒトが寄つてこない。協会のほうも全員のことを把握しきれているわけでもなく、先日まで行方不明だった俺はまさにそれだ。

それなのに、彼女は俺に契約を持ちかけてきた。ならば、答えてやろう。

「まあ、延長つてことでお願ひします」

『わかった。書類を送るよ』

「お願いします」

俺は礼をしてメフィスト様に頼んだ。メフィスト様は頷き、俺の手元に書類を送ってくれた。

リアスとイツセーがそれを覗きこんでくる。

「お兄様、この方がですか……………」

「め、めっちゃ美人じゃないですか!？」

二人して驚きながらも書類の写真を凝視していた。

書類の写真には二十代後半ほどの青みがかった黒髪の女性が映っており、なぜかウインクをしていた。

「変わらねえな……………」

俺は眩きながら銃剣を取り出して親指の指先を軽く切って出血させ、所定の場所に血印をつける。すると、書類が燃え上がって消えた。

『よしつと、さすがに手慣れてるね』

「慣れてますからね」

俺が言うのとメフィスト様は頷き、今度はレイヴェルに目を向けた。

『その子はフェニックス家の者かな?』

「は、はい。レイヴェル・フェニックスと申しますわ」

丁寧挨拶をするレイヴェル。

それを確認したメフィスト様はあごに手でさすりながら言い始める。

『これは極秘の情報なのだけれどね。どうにも「はぐれ魔法使い」が「禍カオス・ブリゲードの団」の魔法使いの残党と手を組んでフェニックスの関係者に接触する事例が相次いでいるんだよ』

部屋の空気が引き締まる。いきなりだが、イヤな予感しかないな。面倒事は勘弁してもほしいぜ。

俺が指先を一度舐め、メフィスト様に訊く。

「ですがメフィスト様、フェニックスの涙の流出はもう無くなったはずでは」

『いや、闇のマーケットでフェニックス産ではない涙が流れているんだよ』

『ッ!?!』

それを聞いて全員が驚いていると、メフィスト様が懐を探って小瓶を取り出した。

『これだよ。どうやっているかはわからないけど、事実フェニックス関係者に何かしら接触している。それでそこのお嬢さんも狙われているかもしれないから、気をつけてくれ』

それを聞いたレイヴェル嬢は表情を陰らせていた。

いきなり不安になるようなことを言われれば、そうなって当然か。

「俺もグリゴリでどうなっているか調べさせる。なーに心配すんな。お前には王子様がいるからな。それに結界もある。大丈夫だよ」

アザゼルがイツセーの肩を叩きながらそう言った。

俺はアーシアに止血してもらいながら言う。

「最近『禍カオス・ブリゲードの団』の残党をまとめあげようとしている奴がいるらしい。まだ詳しくは調査中らしいから何とも言えないがな」

俺の発言でまた重い空気になってしまった。

言うタイミング間違えたようだ。

すると、メフィスト様が一度咳払いをして話を始める。

『話がそれて申し訳なかったね。ということ、うちの魔法使いをよろしく頼むよ。それじゃ良い契約をー』

そう言うのと魔方陣が消え、何の脈絡もなく話が終わった。

とりあえず、フェニックスの件には警戒しておこう。

契約については相談ぐらいになら乗ってやるかな。いちおう、先輩としてな。

l i f e 0 2 慣らし運転は大事

リアスたちは魔法使いの書類選考に四苦八苦しながら、いつものように悪魔の仕事をこなしながらもトレーニングを欠かさずにおこなっていた。

今回はイツセー、木場、イリナ、ゼノヴィア、俺とそれ以外という形でチームを分け、それぞれで模擬戦をおこなう。

俺もジャージ姿でそれに参加して、新しい銃剣を手に馴染ませていた。

それはそれとして、

「木場、ジークフリートから奪ってという魔剣群、いきなり慣れた調子で使うじゃねえか！」

「なかなか難しいですけどねッ！」

二刀流の剣モードの銃剣と聖魔剣でつばぜり合いながらそんな話を話していた。

木場がジークフリートから奪ったという魔剣には様々な効果が付与されており、いきなり足元が凍ったり体を切り裂く風が起こったりする。

まあ、使わせる隙を与えなければいいんだけどな！

俺は木場を蹴り飛ばし、刀身に魔力を込めていく。刀身が紅に、さらに黒く変色して

いく。

俺はそれをさらに形状変化させ、鞭のように振るう！

黒い軌跡を残しながら木場に振るわれたそれはあつさり避けられ、一気に接近を許すが空いていた剣で放たれた一撃を受け止めた。

鞭にしていた刀身の先を尖らせ、それを槍のように鋭く動かして背後から突きにいくが、木場はそれを察知して退避、距離を取った。

うん、なかなか使いやすいかもな。

刀身を元に戻してモードを銃剣に変更、木場に弾丸を放つ！

木場は自慢の神速で弾丸を全て避けていくが何発が掠めているようで、着ていたジャージが破けている。

木場は聖魔剣を聖剣に変え、騎士団を生み出して俺に放ってくる！

俺は射撃のレートを上げて騎士たちを次々と撃破していき、撃ち損ねた騎士からの攻撃は体捌きで避けてゼロ距離で弾丸を叩き込む。やっていて木場が見当たらなくなつたが、どこにいった？

俺は疑問符を浮かべたが、すぐに発見した。一人だけ若干ながら動きがいい騎士がいるのだ。

俺はその騎士に的を絞り、他の騎士たちは無視する。すると、その動きのいい騎士を

守るように騎士たちが動き出した。

となると、あれが本物か……………」

俺は弾丸に込める魔力を多めにし、貫通力を上げる。そして再び連射していき、騎士たちを撃破していく。

そして、動きのいい騎士を守る騎士が全滅させ、トドメの弾丸を『背後に』放つ！

「——ッ！」

俺の背後に回っていた誰かが息を飲んだ。

俺は振り向きながら斬りかかり、その刃を首もとギリギリで止めた。

俺は不敵に笑う。俺の視界には体制を崩して刃を突きつけられた木場の姿が映っている。

「騎士に紛れ込んだと思わせて自分は幻術で隠れる、か。悪くない。聖なるオーラが多くて細かい魔力の流れは見にくかったからな」

「いつ気がつきましたか？」

俺たちが戦闘態勢を解きながら話していく。

「あの動きのいい騎士を見つけたぐらいに『何かある』ってのを感じて、全滅前ぐらいに幻術に気づいた」

「なるほど……………」

「ま、イツセーならかかってたかもな。あいつ、オーラの関知は苦手だし」
「そうかもかもしれませんね」

俺たちが苦笑しながらイツセーを見ると、イツセーはイリナ、ゼノヴィアと話し込んでいた。エクス・デュランダルについて色々と話しているのかもしれない。

「さて、俺は休憩がてらリアスたちの様子でも見てくるかな。おまえらもやり過ぎんなよ?」

『はい』

俺の言葉に各々が返し、再びミーティングを開いていた。俺はその行動に感心しながらも、リアスたちの元を目指して歩き出した。

一人で歩いている最中、俺はあることを考えていた。

最近、リアスは『必殺技』ってやつを考えているらしく、なんでも破壊の一点に特化した滅びを撃ち出すというものらしい。

兄さんはテクニック、リアスはパワーか。俺は何に特化させるかな……………。

俺は手元に直刀を生成、それを眺めながらそんな事を考えていた。

俺が何も使わずに出来ることなんて、刀を作って斬るだけだ。それに特化させる？……………そうしたら銃剣で遠距離をカバーする意味がなくなっちゃうわけだが、この際それもあかりか？

俺が歩きながらあごに手をやり、小さく唸っていると前から聞き馴染んだ声が聞こえた。

「あ、ロイ様！そちらは一段落ついたのでですか？」

「ん？ああ、ちよつと休憩だ」

「ロイ様、お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな」

俺は軽く右手を挙げ、声をかけてきたアーシアと丁寧な礼をしてきたルフエイに応えた。

その横ではオフィスとラッセーが喋っていた。まあ、端から見ればオフィスの一人喋りなんだがな。

アーシアの横でルフエイと何かを話していた様子のロスヴァイセが訊いてくる。

「ロイ先生、何か悩み事ですか？」

「……………わかるか？」

「なんとなくですけど、顔に出ていた気がします」

俺は無言で自分の顔に触れる。付き合いの短いロスヴァイセに気づかれるって、相当だぞ……………。

俺は頬をかいて遠慮がちに言う。

「悩みって言われれば、そうかもな。まあ、そのうち答えが出るさ」
「ならいいのですが……………」

ロスヴァイセは若干不満げにそう返すとルフエイと話しはじめ、アーシアはオフィースとラツセーの会話に混じっていた。

顔に出やすくなっちゃったのか、これは大事だ。また任務とかでどっかに潜入した時にトラブルになるかもしれない。

俺が再び顔に触れていると、小猫とギヤスパーに座禅を組ませている黒歌がこちらに手招きしてきた。

俺が周囲を見渡しても、ここにいて暇をしているのは俺だけだ。つまり、俺を呼んだ？

俺が確認するように自分を指差すと黒歌は頷く。

あー、くそ。黒歌は苦手なんだよな。あの現魔王の血どうこうのくだりのせいだと思

う。

俺は黒歌に近づき、不満げに訊く。

「何のようだ？」

俺が不満げなことに気づいた黒歌はにんまり笑う。

「にやはは、今さー、白音とギヤーくん^{セイクリッド・ギア}に心のなかを空っぽにしてもらってんの」

小猫だけでなくギヤスパーもやっているのは、自分の力を探るためだ。神器に

潜っていると言っている。まだ成果は出ていないようだが……。

小猫は仙術の基本らしい自然との一体化を促すためだそうだ。

「そんなわけで、ちょっと協力してよ」

「つつても、何を——」

俺が訊こうとした瞬間、黒歌が俺の手を取って自分の力を胸に押し当てようとする！

それを察した俺は掴まれた腕に力を入れ、ギリギリで耐えるとそのまま引き戻す。

お互いに引かず耐えるように腕をプルプルと震わせていると、それを感じ取ったの

か小猫が目を見開いて非難の表情を浮かべた。

「ね、姉様！ロイ先生から離れてください！そのヒトに何かあったら、部長に会わせる顔

がなくなり——」

スパンツ！

小猫が言い切る前に黒歌がハリセンで頭を叩いた。割りとか減をしたのか、小猫はあまり痛そうではない。

黒歌が手を離し、小猫に言う。

「はい、失格にや。この程度で気を乱して修行を解くようではまだまだ半人前もいいところね、白音？」

「……………は、はい」

黒歌の注意に小猫は悔しげに返事をしたが、頭を振って気を取り直して再び座禅を組んだ。

……………座禅、か。

「黒歌、俺もやってみていいか」

「……………どうしたにや、いきなり」

俺の言葉に珍しく狼狽える黒歌。俺は構わずに続ける。

「たまには普段やらないこともしてみらもんだろ？何か新しい発見があるかもしれん」
「まあ、やってみればいいにや。心を無にして精神統一にや」

「わかつてるさ」

俺は小猫たちの横に並ぶように座禅を組み、目を閉じた。

心を無にして、集中……………。

とても懐かしく、嫌な事を思い出していた。

『ば、化け物が!』

『来るな!来るなあああッ!?!』

『お前、人を殺して、何も感じないのか………?』

最近思い出すこともなかった前世むかしの記憶。

俺ロイが俺ロイでなかった頃の、戦殺すうことしか知らなかった頃の記憶。

前世むかしも今も、俺は戦殺すつてばかりだった。違うことがあるとすれば、今の俺には守りたいヒトたちがいること。

だが、誰かを守るためには誰かを倒こらさなければならぬ。そういう意味では、やっていくことは変わっていない。

『おまえは、命をなんだと思つてやがる……………!』

なんて事を言つて死んだ奴もいた。

『きつと、主しゅの指導しゅどきがあります』

なんて事をほざく奴もいた。

『あなたは、人間なの……………?』

なんて事を訊いてくる奴もいた。

心があつて思いやりがあるのが人間だと言うのなら、あぜの頃せの俺が人間であつたのか

と訊かれれば、答えは否だろう。

戦いに言葉はいらない。そもそも意味なんてないから。

戦いに痛みはいらない。そうすれば死も怖くなくなるから。

『イカれてる……………。あの野郎「殺しを楽しんで」いやがる!!』

そんなわけねえ!俺は……………俺は……………!

戦いに心はいらない。そうすれば抵抗なく殺やれるから。

楽しんで殺すことなんて、一度もなかった……………。

スツパアアアアアンツ!!!

「いつてエエエエエツ?!」

突然後頭部を襲った鋭い痛みで俺は我に返った。

ただならぬ気配を感じて振り向くと、黒歌がハリセンでポンポンと自分の手のひらを軽く叩きながら笑みを浮かべて俺を睨んできていた。

「座禅をするっていったのはそっちよね? 何で寝ちやうかな?」

「……………寝てたか?」

「ええ、それはぐっすり」と

俺は後頭部を擦りながら黒歌に謝る。

「悪い、どうも疲れていたみたいだ」

「疲れているなら休みなさい。無理して体を壊したらただのバカよ」

珍しい真面目に怒る黒歌。相当キレているようだ。

黒歌は続ける。

「白音もギャーくんももう止めて家に戻ったわ。あんたがまだやっているようだから付き合っただけなのに、なんで寝るかな!？」

「だから、疲れ——」

「あー、もういい！こっちまで疲れる！」

いつもの「にや」がないと、こころも普通に見えるものなのか。

俺は時計を確認する。座禅を開始して一時間ぐらいか。

俺は立ち上がり、黒歌に礼を言う。

「時間を取らせて悪かったな。俺も上がる」

「さっさと休みなさい。寝れないなら一緒に寝てあげるけど？」

「断る」

俺の即答に黒歌は「ま、そう言うと思ったにや」と返して転移していった。

やれやれ、寝ちまうとは情けねえ……。てか、俺は何を考えていたんだっけ？
……………ダメだ、思い出せん。

俺は諦めるようにため息を吐くと黒歌に続くように転移、兵藤宅に戻ったのだった。

ロイが座禅をした日の深夜。

「……………」

黒歌は一人、あの時の事を思い出していた。

ロイが唐突に始めた座禅。最初こそ適当に流しつつ、妹である白音とその友人であるギヤスパーの事を見てやるつもりだった。

だが、ロイは異常なまでに集中し、二人以上に心を無にしていた。いや、正確には心を『殺して』いた。

長年の経験などは関係なしに『元から出来ていた』ように自然にやって見せたのだ。そして、白音たちが去ったあとにそれが起こった。

ロイから発せられるオーラがどこまでも冷たくなり、黒歌に今までないほどの恐怖を覚えさせたのだ。

そこで無理やり座禅を切り上げさせた。それと同時にそのオーラは消え、ロイは元の調子に戻った。

(……………あいつ、何なの……………?)

黒歌が思ったことはそれだった。

本人はリアスや兄よりも弱いと言うが、あれを感じてしまえばそれが本当なのかもわからない。

(もしかしたら、結構ヤバイ奴に手を出したかも……………)

赤龍帝への白音の初々しい反応は見ていて楽しいし、応援もしてやりたい。

(白音の邪魔はしたくないけど、強い子供が欲しい)

黒歌のロイへの唐突な言葉の裏にはそんな事情もある。彼の持つ『滅び』を継げば、きつと——。

だが、その男性が持つ『何か』が黒歌を悩ませた。

そして、しばらく考えると、

(ま、何かあったらその時か……………)

そう結論して、疲れを癒すために眠りについたのだった。

l i f e 0 3 深夜の会談

ある日の深夜。

俺たちはオカルト研究部の部室にいた。ようやく連絡のついた吸血鬼と会談をするためだ。

この場にいるのは、リアスと眷属全員、ソーナとその『女王』^{クイーン}真羅副生徒会長、アザゼル、イリナ、そして見慣れぬシスターが一人。

目鼻立ちがはっきりしている北欧的な顔立ちの二十代後半のシスター。

そのシスターがこの場にいる全員へ挨拶をする。

「挨拶が遅れました。この地域の天界スタッフを統括しておりますグリゼルダ・クアルタと申します。今後とも何とぞよろしくお願いできたら幸いです」

「私の上司様です！」

イリナが追加情報をくれるがグリゼルダと言えば、

「確か、ガブリエルの『Q』^{クイーン}だったな。女性エクソシストの中じゃ五指に入ると聞いている」

「恐れ入ります。ガブリエル様もお世話になっていたようですし……」

と、言いながら俺を軽く睨んでくるグリゼルダ。四大セラフであるガブリエルの『Q』^{クイーン}で、そのガブリエルがハートのスーツ（セラフによってスーツが違う）なこともあり『クイン・オブ・ハート』と呼ばれているそうだ。

俺を睨んできた理由はそのせいだろう。ガブリエル本人はまだ気にしているんだろうな……………。

第一印象は優しそうな女性だが室内で一人だけ彼女を見てビクビクしている奴がいた。

「あらあら？ゼノヴィアったら、顔色が悪いわね？」

イリナが言う通り、ゼノヴィアの様子がおかしい。

事実ゼノヴィアはグリゼルダを極力視界に入れないようにしている。

そのゼノヴィアの顔をグリゼルダが両手で押さえ込む。

「ゼノヴィア？私と顔を合わせるのがそんなに嫌なのかしら？」

「ち、違う。た、ただ……」

「ただ？」

「で、電話に出なくてごめんなさい」

ゼノヴィアの謝罪を受けてグリゼルダは手を離す。

「よく出来ました。せっかく番号を教え合ったのだから、連絡ぐらいよこしなさい。食

事ぐらい出来るでしょう」

「ど、どうせ小言ばかりだろうし」

「当たり前です。また一緒に管轄区域になったのだから心配ぐらいします」

何か姉妹の会話を見ているようだ。

にしてもゼノヴィアにも苦手な相手がいたのか……。

そんな発見をしながら、俺たちは吸血鬼を待つことになったのだった。

それから更に夜は更けていき、外は静まりかえり、皆も静かにし始めた頃。外から異様な冷たさを感じ取った。

この場にいる全員がそれを把握したようで旧校舎の入り口のある方向を見ていた。

リアスが立ち上がる。

「来たようね。相変わらず吸血鬼の気配は凍ったように静かだわ」

そう言うとりアスは木場に目で合図を送る。それを受けて木場は立ち上がり一礼してから部屋を出る。

吸血鬼は初めて来た場所には招待されないと入れない。

吸血鬼は鏡に映らなず、影もない。

吸血鬼は流水（川など）を渡れず、ニンニクを嫌う。

吸血鬼は十字架、聖水に弱い。

吸血鬼は自分の棺で眠らないと自己の回復が出来ない。

これが純血の吸血鬼の特徴だ。

ハーフのギヤスパーは鏡に映るし、影もある。川も渡れるし、ニンニクは現在克服中。そして段ボールでも眠るなどの違いがある。これはおそらく人間の血が濃いからだとして解釈している。

そんなわけで木場は吸血鬼を招待しに行ったわけだ。

イツセーたち眷属はリアスの傍らに並び、真羅副生徒会長はソーナの背後に、イリナもグリゼルダの背後に、朱乃は給仕係として台車の前に移動。俺とアザゼルは堂々と座っている。

問題のギヤスパーはというと、

「……………」

複雑な表情をしていた。自分を迫害した奴らに会うわけだから、心中オダヤカではないだろう。ギヤスパーの家の者ではないらしいが、表情同様かなり緊張しているんだろ

う。

二分ほど待つとドアがノックされる。

「お客様をお連れしました」

木場の応対で扉を開き、客を招き入れる。

姿を現したのは中世のお姫様が着るようなドレスに身を包んだ人形のような少女だった。

作られたような美しさがある人間味の感じられない怪しい雰囲気を漂わせている。金色の髪に真っ赤な双眸をしているが、それ以上に気になるのが生気を一切感じられない肌の色合いだ。

見た目はイツセーたちと同じ年頃に見える。だが、吸血鬼も悪魔同様に見た目を変えられるからな、年齢は何とも言えない。

そして何より影がない。まさしく純血の吸血鬼だな。

その少女の背後にはスーツ姿の男女、ボディーガードかなにかだろう。

吸血鬼のボディーガードもまた吸血鬼なんだろうな。

俺がそんな事を考えていると少女が口を開く。

「ごきげんよう、三大勢力の皆様。特に魔王様の弟君に妹君お二人、そして墮天使の前総督様とお会い出来るなんて光栄の至りです」

リアスに促され、リアスの対面の席に少女が座ることになったが、座る前に少女は名乗る。

「私はエルメンヒルデ・カルンスタイン。エルメとお呼びください」

いかにも高貴そうな名前の響きだな。

アザゼルがあごに手をやる。

「カルンスタイン。確か吸血鬼二大派閥の一つ、カーミラ派の中でも最上位クラスの家だ。久しぶりだな、純血で高位のヴァンパイアに会うのは……」

カーミラ派か。

吸血鬼のやっていることは悪魔と似ているがかなりの違いがある。

お互い教会を敵にしていた時も共闘はせずに悪魔と吸血鬼は極力不干渉をしていた。それは様々な勢力と和平を結んだ今もだ。

そんな吸血鬼も一枚岩ではない。簡単に言うとな男尊主義のツエペシュ派、女尊主義のカーミラ派の二つに分かれているのだ。それがアザゼルの言った二大派閥ってわけだ。分かれたのは数百年前の話だが、それは今も続いている。

今日来た彼女はそのカーミラ派の吸血鬼というわけだ。

そんな彼女にリアスが質問を始める。

「エルメンヒルデ、いきなりで悪いのだけど、私たちに会いに来た理由を聞かせてもら

「えないかしら？今まで接触を避けてきたあなたたちが私たちの元に来た理由は？」

エルメンヒルデは一度だけ頷くと口を開いた。

「ギヤスパール・ヴラデイのお力を借りたいのです」

——ッ!?

俺たちは声にもそそり出さなかったが全員が驚いていた。

ここまで直球にギヤスパールを狙ってくるとは思ってもしなかったからだ。

やはり例のゲオルグを倒したとかいう力が狙いか？

俺たちがそんな疑問を頭によぎらせていた時、アザゼルがエルメンヒルデに訊く。

「率直な質問に率直な答え。すまんが説明してもらおう。吸血鬼の世界に何が起きた

？」

アザゼルの問いにエルメンヒルデが答える。

「我々吸血鬼の世界でとある出来事が根底の価値観を崩すほどのものになってきているのです。ご存じかもしれませんが、ロンギヌス神滅具を持つものがツエペシユ側のハーフから出てしまったのです」

「そういうばそんな事聞かされたような気が……………」

とにかくそれが絡んで来るってことは、絶対に面倒事だな。

アザゼルが訊く。

「それでツエペシユ側の神滅具は何だ？」

「……………『幽世セフィロト・グラールの聖杯』です」

エルメンヒルデの答えにアザゼルは目元を厳しくして、
それもそうだろう。その神滅具ロンギヌスは……………、

「よりにもよって、『聖遺物レリック』の一つか」

アザゼルがため息混じりにそう言った。

『聖遺物レリック』ってのは字のごとく先人たちが残した聖なる道具だ。ちなみに曹操の使っていた聖槍もそうだったりする。

アザゼルが続ける。

「聖杯ってのは伝説が多い。だがその『幽世セフィロト・グラールの聖杯』はただの聖杯じゃない。神滅具ロンギヌスであり、生命の理を覆しかねない代物だ。エルメンヒルデといったか、吸血鬼がそれで何を求める？」

「絶対に死なない身体。吸血鬼の持つ弱点を無くした『決して滅びない体』をツエペシユの者たちは得ているのです。いえ、正確には『滅びにくい体』でしょうか。聖杯の力はまだ不完全のようですから」

「だつたらまだいいか。まだ滅ぼせるつまり殺せるならどうにかなる。」

俺がそんな事を考えているとエルメンヒルデは続ける。

「何も弱点のない存在になろうとしていているのです。誇りを捨てるだけならまだしも、あの者たちはこちら側を襲撃してきたのです。これらの行為を許すつもりはございません。同じ吸血鬼として肅清するつもりです」

エルメンヒルデの瞳は憎悪の色を強く帯びていた。

つまり、

「カーミラ側の吸血鬼としての生き方を否定して、襲ってきたツエペシユ側のやり方が気に入らないつもりでことか。ま、気持ちはわかるが」

俺が言うどエルメンヒルデは頷く。

「はい、その通りです。そして私たちの目的は……」

エルメンヒルデはギヤスパーに視線を向ける。

「そちらにいらつしやるギヤスパー・ヴラディの力を借りて、ツエペシユの暴挙を食い止めることです」

つまりギヤスパーを抗争に使うから貸せと……。

リアスは冷静に訊く。

「それは、ギヤスパーがヴラディ家の……ツエペシユ側の吸血鬼であることに関係あるのかしら？」

いつも通りに言っているように感じるが、リアスは内心少しずつキレ始めてるな。

グレモリー家でも特に情愛の深いリアスの事だ。自分の眷属を突然貸せ。なんて言われたらキレルよな。

それでも怒りを抑えてあちらの真意を聞き出そうとしている。

リアス、見ないうちに成長したもんだな。

リアスの問いにエルメンヒルデは意味深な笑みを見せた。

「それもあります、リアス・グレモリー様。けれど私どもが欲しているのは、ギヤスパ・ヴラデイの力です。眠っていた力が目覚めたと小耳に挟んだものですから」

こいつら、どこどこで知ったんだ？ イッセーは見たことがない、上位神滅具の
ロンギヌス
 『絶霧』を倒せるほどの謎の力。おそらくその力を聖杯の持ち主にぶつける気なの
 だろう。

エルメンヒルデは続ける。

「私どもは吸血鬼の争いを吸血鬼の力で解決しようと思つていますわ。そのためにギヤスパ・ヴラデイのお力をお借りしたいのです」

出来れば吸血鬼の問題には首を突っ込みたくないが、ここまで来たら無理だな。

下手したらツエペシユ側からもギヤスパを貸せ。いや『返せ』と言ってくるかもしれない。

リアスは改めてエルメンヒルデに訊く。

「あの力は何？あなたたちはそれを知っているの？」

俺たちのにはそれが一番大事な事だったんだけどな。

今はそれどころじゃなくなり始めてるが……………。

「ごく稀に本来吸血鬼が持つ異能から逸脱した能力を有する者が生まれてくることです。今世においてはハーフの者に多く見られております。ギヤスパー・ヴラデイもその一人かと。くわしい資料は有しておりません。しかし、ツエペシユ側には手がかりがあるかもしれませんわ」

吸血鬼的にもギヤスパーの力はよくわからんと。今しれつと、詳しく知りたければヴラデイ家に行けつて言われていたよな気がするな。

エルメンヒルデは続ける。

「問題の聖杯について。所有者はもちろん忌み子、ハーフではありますが、名はヴァレリー・ツエペシユ。ツエペシユ家そのものから生まれたのです」

その名前を聞いてギヤスパーは泣きそうな顔になっていた。

「ヴァレリーが？う、嘘です！ヴァレリーは僕みたいに神セイクリッド・ギア器を持って生まれてはいま

せんでした！」

あの臆病なギヤスパーがここまで熱くなるとは……………。ヴァレリー・ツエペシユか。ギヤスパーにとって大事なヒトなのか？

エルメンヒルデは答える。

「何かの切っ掛けで力が発現する。これはあなたもご存じでしょう？ ヴアレリー……彼女も近年覚醒したものと思われれます」

イツセーも今年になって目覚めたらしいからな。そういうのには個人差があるらしい。前にアザゼルに聞いた通りならそのはずだ。

アザゼルは腕を組みながら話始める。

「俺たちや天界が観測する前に隠蔽されたと思っていいだろうな。どうしようもないな。聖なる力を嫌う吸血鬼が『レリック聖遺物』を捨ても預けもしないで自分たちのもとに置いておくなんてよ」

「私もそう思います」

アザゼルの言葉にエルメンヒルデも応じた。

エルメンヒルデは再びギヤスパーに視線を向ける。ギヤスパーは今度はしつかり視線を交わしていた。

「ギヤスパー・ヴラデイ、あなたは自分を追放したヴラデイ家に……ツエペシュに恨みはないのかしら？ 今のあなたの力ならそれが可能ではないかと思うのだけれど」

「ほ、僕はここにいられるだけで十分です。部長たちと一緒にいられば……」

「……………雑種」

ギヤスパアの言葉を遮るようにエルメンヒルデは言った。それを聞いたギヤスパアは徐々に表情が曇り始めた。それを確認したエルメンヒルデは続ける。

「混じりもの、忌み子、もどき、あなたがいかように呼ばれていたのかしら？感情を共有できたのはツエペシユ家のハーフ、ヴァレリーだけ、でしたわね？ツエペシユ側のハーフが一時的に集められて幽閉される城の中で助け合って生きていたと聞いておりますわ。ヴァレリーを止めたいとは思いませんか？」

言わせておけばこいつら！ギヤスパアの傷ををえぐり返しやがって………！！
俺の怒りが溜まりまくっているなかで、黙っていたグリゼルダが口を開く。

「あなた方はハーフの子たちを忌み嫌いますけれど、もともと人間に子を宿らせたのは吸血鬼の勝手な振る舞いでしょう？悔しい思いをしながらも憂いに対処してきたのは、我々教会です。出来れば、趣味で人間と交わらないでもらいたいものです」

やわらかい物腰ながらも言葉には毒たっぷりだ。

流石『クイーン・オブ・ハート』、伊達に女性エクソシストトップクラスじゃないな！
グリゼルダの発言にエルメンヒルデは小さく笑む。

「それは申し訳ございませんでしたわ。けれども人間を狩るのが吸血鬼の本質。悪魔や天使も同じだと思っておりますか？我々異形の者は形は違えど人間を糧にせねば生きられぬ『弱者』ではありませんか」

確かに俺たち悪魔は正義じゃない。理不尽な取り引きで下僕にされる奴も多いのもまた事実だ。そういう奴を狩るのが仕事だったんだよな……………」。

俺としては上手くやれば共存できると思っっているが、エルメンヒルデの場合は完璧に狩りの対象として割り切ってる。

吸血鬼的にはこれが普通なのだ。

純血の吸血鬼にとってしてみれば世界にいるのは、純血の吸血鬼かそれ以外の二種類だけ。

これだから吸血鬼は嫌なんだよ。

エルメンヒルデは後ろのボディガードの吸血鬼を呼び何かを取り出させた。

「手ぶらで来たわけではありませんわ。書面を用意しました」

その書面をアザゼルと俺に見えるように渡してくる。

こいつは……………ふざけやがって……………!

俺はそんな内心を抑えるために一度息を吐く。

「カーミラ側の和平協議について、か……………」

『……………ッ!?!』

俺の言葉にイツセーたちは驚いていた。

俺は平静を装ってエルメンヒルデに言う。

「今日のこれは外交、つまりおまえらは特使としてここに来たということか」

俺の確認にエルメンヒルデは答える。

「はい、我らが女王カーミラ様は墮天使の総督様や教会の方々と長年にわたる争いの歴史を憂いて、休戦を提示したいと申しております」

むこうは冷静に言ってくるが横にいるアザゼルは額に青筋立てている。俺は何とか抑えるようにしているがそろそろ無理かもしれねえ……………。

そんなアザゼルが言う。

「順番が逆だ、お嬢さん。普通は書面が先で話は後だろうが。これじゃまるで力を貸さなければ、和平に応じないと言っているようなもんだ」

「色々な勢力と和平を結んできた俺たちがこれに応じないと他の勢力への説得力が薄くなる。『相手を選んでやっているのか』なんて思われても仕方ない。しかも停戦ではなく、休戦だからな。こっちの弱味をわかっていらっしやる」

アザゼルに続いて俺も皮肉げに言った。

吸血鬼がここまで嫌な連中とは思わなかったよ……………。

これに応じないとリアスの今後や兄さん、セラの信用にまで影響が出ちゃう……………！
リアスが怒りに打ち震えているがソーナが手を握りなだめていた。

エルメンヒルデは俺たちの様子を嬉しそうに見ていた。

「ご安心下さい。吸血鬼の問題は吸血鬼で解決いたしますわ。ギヤスパ・ヴラディを貸していただければ、あとは何もいりませんわ。和平のテーブルにつくお約束とヴラディ家への橋渡しを私どもが行いましょう」

それを聞いてたまらずイツセーが口を開く。

「待てよ。仮に——」

「仮にギヤスパを貸したとして返してくれる保証は？ 戦力が足りていないなら俺たちが動くことも考えるが？ 仲介や加勢程度ならいけるぞ」

イツセーが何かを言おうとした瞬間に俺が割って入る。今イツセーを喋らせるわけにはいかない。余計に向こうのペースになっちまうかもしれないからな。

俺の発言にエルメンヒルデは首を横に振った。

「あくまで我々の決着は我々の手で行います。アドバイザーぐらいでしたら、いかようにも」

「いちいちムカつく野郎だな。……だが今の発言、逆に言えばアドバイザーとしてなら行けるってことだな？」

最後にエルメンヒルデは俺たちを見渡してから立ち上がる。

「以上ですわ。今夜はお目通り出来て幸いでした。何よりも根城に招き入れて下さり感謝いたしますわ。リアス・グレモリー様」

エルメンヒルデのわざとらしい微笑にリアスは瞳に怒りをたぎらせていた。

「今日は貴重な会談が出来てよかったわ。あなたたちのことがよくわかったものね」

「それではごきげんよう。この地に従者を置いていきます。何かありましたらその者に

……では、よいご報告をお待ちしております」

リアスの嫌味をもともせず、彼女たちは旧校舎を後にしたのだった。

それから十分程が経った頃。

ゼノヴィアがテーブルを叩いた。

「相変わらず、吸血鬼は好きになれない……」

ゼノヴィアの奴はよく我慢したよ。会談中敵意を出さまくっていたからな。

グリゼルダが言う。

「昔のあなたなら斬りかかっていたところですね。よく我慢しました。成長しました

ね」

グリゼルダに褒められてゼノヴィアは頬を赤く染めていた。

ホントに今後も吸血鬼は好きになれないかもな。ギヤスパーは色々あるけどいい奴だからいいが。

各々が緊張をほぐすなか中でソーナがリアスに言う。

「どうするのですか？協定を無視するわけにはいかないでしょう。ギヤスパークンを送り出すことになったら、最悪彼を失うかもしれないかもしれません」

それを聞いたギヤスパーは複雑極まりない顔をしていた。

それもそうだろう。ギヤスパー一人で吸血鬼の半分が休戦協定のテーブルにつくのだ。

拒否したいが出来ない。一番嫌な状況だ。

そんな中、ギヤスパーか震える口調で吐き出した。

「ぼ、僕、行きます」

………気弱なこいつがここまで決意に満ちた瞳を出来るとはな。

俺が感心しているとギヤスパーは続ける。

「吸血鬼の世界に戻る気はありませんし、ここが僕にとつてのホームです。で、でも、ヴァレリーを助けて！彼女のおかげで皆さんに会えて幸せになりました。それなの

に彼女だけ辛い目に遭っていると思うと……きつと理不尽な扱いを受けていると思うんです！」

そのままギヤスパーはリアスに告げる。

「僕、ヴァレリーを助けたいです！そして絶対に死にません！ヴァレリーを救ってここに戻ってきます！」

ギヤスパー……。ここまで男だとは思わなかったよ。格好は女だが、やっぱりイツセーの後輩だな。

ギヤスパーの決意を聞いてリアスも立ち上がる。

「行くわ、私。今度こそヴラディ家とテーブルを囲むつもりよ。まずは私が行ってあちらの現状を確認してくるわ。ギヤスパーの派遣はそれからでも遅くはないと思うの」

リアスの瞳にも決意の色が見えた。

自分の眷属にあそこまで言われたらそうなるよな。逆にならない方がおかしいと思うぜ。

「行くにしてもメンバーは最小限でだな。下手に向こうを刺激しかねないってことと、最悪の事態に備えての増援として待機も必要だ」

「ええ、お兄様。祐斗を連れていくつもりです。いいわね、祐斗？」

「はい、お任せください」

木場と一緒になら安心だな。

それを聞いてアザゼルが言う。

「俺も行こう。俺はカーミラに会って来る。んでもって何人かは向こうでも動けるように話をつける。土産も持って行くつもりだ。リアスはヴラデイ家に直接行ったほうがいい。リアスがカーミラ側に顔を出したら、警戒が強くなるだろうからな」

流石はアザゼル、ただでは転ばないな。

こつち側の何人かが動ければ、ギヤスパアの危険回避とともにヴァレリーとかいう子も助けられる確率が上がる。

「妥当だな。天界関係者だと警戒されて話をさせてもらえないだろうし、アザゼルならセイクリッド・ギア神器についても詳しい、それだけでも交渉の武器になるからな」

俺の言葉にアザゼルが頷き、イリナたち天界組に言った。

「そういうわけだ。イリナ、シスター・グリゼルダ、このことはミカエルに伝えておくれ」

グリゼルダは頷く。

「わかりました。こちらもジョーカーを切るつもりだとミカエル様もおっしゃっておりますし、最悪の結果だけは避けたいものです」

今の言葉に俺とアザゼルは軽く驚いた。

「そんな簡単に切つていいのか？ いやまあ、今回は相手が相手だ」

「ああ、聖杯と吸血鬼。多分ろくでもないことになる。俺は最低限の犠牲で済むようにしたいんだがな」

「そうならないために暇人ジョーカーは存分に使えとのご意志です」

「ジョーカーは相変わらずおいしいもの巡りしてんのか」

「……………はい」

俺の質問にグリゼルダが間を開けて答えてくれたが、……………そうか、相変わらずなのか。

「アザゼル、一応言っておくが俺は残しておくぞ。念のためな」

「ああ、頼む。何かあれば連絡する」

そんなわけで、リアスと木場、アザゼルが吸血鬼のもとに、あとはこの町で待機つてことになった。そして、向こうで何かあればすぐさま合流すると。

何もなければいいが、こういう場合は何か起こるからな。

犠牲なしで解決出来ればいいんだが……………。

ま、俺たちが出来るのは降りかかる火の粉を払うだけだな。

こうして、吸血鬼との会談は終了したのだった。

life 04 安全だった場所

あつという間にリアスたちが出発する日になった。

吸血鬼の王国に行くには、まず魔方陣でルーマニアに、そこから小型ジェット、さらに車で進んでようやく到着という長い道のりなわけだ。

荷物を持ち兵藤宅地下の転移魔方陣に集合したリアスたちは向こうで一度別れ、アザゼルはカーミラの元に、リアスたちはヴラデイ家に向かうことになっていく。

俺が向こうでの予定を確認していると、リアスはギヤスパーのことを抱きしめた。

「あなたのことは私が守ってあげるから、心配ないわ」

「はい、部長」

ギヤスパーもそれに甘えていた。

イツセーからの嫉妬のオーラがすごいんだが、あれぐらいは許してやれよ……。

俺がため息を吐いていると、アザゼルが俺、ソーナ、ロスヴァイセに笑みを向けてきた。

「そんじゃ、学校のほうは頼むぜ♪」

「忙しいから早く帰ってこい」

「忙しいので早く帰ってきてください」

「んだよ、つれない反応だな」

俺たちの異口同音の返答にアザゼルは不満げな感じに返してくるが、年末はどこであろうが大変なんだよ。俺が行かない理由もそこら辺にあったりする。

それにアザゼルの事だ。向こうで外遊なんてこともあり得る。

「そんじゃお前ら。例のフェニックス関係者を狙っているって連中も不気味だ。気をつけろよ」

『はい！』

みんなの返事を確認してから俺にも言ってくる。

「ロイも頼むぞ。最悪こっちでも戦うことになるかもしれないからな」

「わかっているさ。そうならないことを祈るが……」

アザゼルはそれを聞くと頷き、今度はアシアとオフィスを呼んだ。

「それとアシア、例のだが、あとはおまえ次第だ。オフィスも頼むぞ？」

「はい、が、頑張ります」

「我、アシアのこと、きちんと見る」

アザゼルの言葉に顔を赤くして頷くアシアといつも通りの無表情で頷くオフィス。ス。

確か、いつかに言っていたアーシアの強化プランの話か。何かあるようだが、どちらにしろオーフィスがいれば何とかかなりそうだが……………。

その後も最終確認を終えてついに出発することになった。

最後にリアスとイツセーが話し、手を握り合っていた。

相変わらずお暑いねえ、まったく。

リアスたちが魔方陣につき、俺と朱乃で魔方陣の確認もしたあと、室内に転移の光が広がった。

数秒後その光が止んだとき、リアスたちはいなかった。

三人とも、武運を祈るぜ。

それからさらに数日が経った。

俺は向こうからの連絡を待ちながら、いつも通りに教師として頑張っている。

今は授業をするためにグラウンドに移動しているところだ。

………にしても何か嫌な予感がするんだよな。

俺がそう思った瞬間、俺の前方にフードを被った二人組が現れた。………気配的には

魔法使い。

俺は相手に確認するよりも早く奴らの懐に突っ込む！

相手はわかつている。こいつらはぐれ魔法使いだよなッ！

「なっ!?!」

俺のダツシユに反応しきれていない二人だが、俺は構わずにそのダツシユの勢いのまま顔を殴る！

「ぐあああー!」

俺の拳をもろにくらった一人は吹っ飛んでいき、地面に三回バウンドしてよつやく止まる。

もう一人のほうは俺が振り向き様に、

「らあっ!」

顔面に回し蹴りをいれる！

その一撃であごを撃ち抜かれ、脳が揺らいで意識が飛びそうになったそいつを、再び全力で殴り飛ばす！

そいつは吹っ飛ばされた勢いで先ほど殴った奴と激突した。
「く、くそ！やはり強い……………ッ！」

「魔力を使わずにこれだからな。……………退くぞ！」
体を二人はそう言うのと転移の光に包まれた。

いつもなら追撃しているところだが、今はそうも言っていられねえ！奴らは必ずレイヴェルに接触してくるはず！

俺は即決し、レイヴェルのいる新校舎に走りだした！

走りながら俺は考えていた。

こいつらはどうやってこの町に張られている結界を抜けたのか。

考えられるのはこの町のスタッフが操られ、解除コードを奪われた。もうひとつは、あまり考えたくないが、スタッフの誰かが裏切ったのか……………。

……………今は考えても仕方ねえ……………。今はレイヴェルの保護が最優先だ！

俺はそう纏めると走る速度を上げたのだった。

やはり、はぐれ魔法使いは校舎の中にも何人かいるようだ。生徒たちが慌てて階段を降りてきている。

俺は生徒たちとは逆に階段を駆け上がり、廊下を生徒たちとぶつからないように走り

抜けて行く。そして、あっという間にレイヴェルや小猫たちのいる教室に到着、扉を開けて中に飛び込む！

「何!？」

「は、速すぎる!下の連中は何をして……」

こつちにも魔法使いが二人。それに対峙するように小猫とギヤスパーがレイヴェルの盾になるように構えていた。

俺は刹那でそれを確認、敵一人の懐に飛び込み腹部に膝蹴りを決め、体がくの字に曲がったらアツパーカットで顎を撃ち抜く!

「ロイ様!」

「待たせたな!」

レイヴェルに答えると二人目が魔法力を込めた手をこちらに向けてきた。俺は素早く踏み込み、逆にその手を掴んで小手投げの要領で投げ飛ばし、倒れ込むように勢いを付け、腹部に肘を撃ち込む!何かが砕けたような鈍い音が教室に響く。

撃ち込まれた魔法使いは悶絶しながら腹部を押さえ、気を失った。

とりあえず、二人とも無力化はできたか……。話は後でじっくり聞かせてもらう。どうやって結界を抜けたのかを重点的にな。

俺は息を吐き、三人に視線を向ける。

「で、無事か。三人とも？」

「大丈夫です」

「大丈夫ですわ」

「なら、よかつた」

俺が安心してホッと息を吐くと、

「キヤッ！」

『ッ!?!』

突然女子生徒の悲鳴が耳に届いた！

俺たちは反射的にその悲鳴がした方に目を向ける。

「あなた方は油断大敵という言葉は知っていますか？」

一人の女子生徒がローブに身を包み、フードを被った男の人質になっていた！この魔法使い、いつの間に現れた!?!人間の気配なんて……いやこの気配は——。

「ここまですればどうしてほしいかわかりますね？」

男は感情を感じさせない声で訊いてきた。

どうにかしてあの娘を助けてやりたいが、こいつからは隙が感じられない。くそ！

「わかりますね？」

男が急かすように言い、魔力のこもった手を女子生徒に向ける。それを見て、俺たち

は構えを解いた。

すると俺たちの体を魔力で作ったであろう縄で拘束する。

「ご協力ありがとうございます。ではあなた方四人には来ていただきましょうか」

男がそう言うのと女子生徒を解放した。

そして俺たち四人、さつき倒した二人、フードの男は転移の光に包まれた。

くそ、わりい、アザゼル。守りきれなかった……………。情けねえな……………。

俺は転移の光の中で、自分の無力さを痛感していた。

転移させられた先はよくわからない白一色の部屋。

相変わらず俺は縛られており、よく見たらその縄が床に突き刺さって固定されている。そして、あの三人がいない!?

俺がその事に驚いていると、例のフードの男が話しかけてくる。

「すみません。あのような方法で」

俺は答えずにフードの男を、この『悪魔』を睨み付ける。

俺に睨まれたその男はため息を吐く。

「やれやれ、敵と話す舌は持たないと言ったところですか」

何かこいつ、言っていることの割に感情を感じられないな……………」

俺が視線を外さずにいると、男が念を押すように言う。

「一応言っておきますと、我々は彼らに危害を加えることはしませんよ」

「……………」

俺は黙って集中する。集中したのはこの縄を切るためじゃない。ここがどこかもあるからに戦うのはかえって自分の首を締めることになる。それにここでこいつと戦ったらレイヴェルたちを危険にさらすことになるからだ。

集中したのはこいつのオーラを感じるため。オーラによつてはどの家の悪魔かわかるはずだからな。

「聞いていますか？」

男はそう言うが俺は黙っている。

「まあいいです。あなたとは個人的に話しかけたただけですよ。だからわざわざ転移先を変えたのです」

深くオーラは感じられたが、どこかで感じたことがある。いや正確にはこれに極めて近いオーラを感じたことがあるが……………誰だったか。それが出てこない。

とりあえず何か聞き出してみるか……………。

俺はそう決めると口を開く。

「話がしたいって言ったのか？俺はお前に話すことなんてないだろ？」

「あなたではそうかもしれないませんが、私にはあるのですよ」

「やれやれ。……………で、何だ？」

どうせ町の境界とか兄さんたちの動きはどうなんだとかなんだろうがな。

俺が来るであろう質問を予測し、どう返すかを思慮していると男が意外な事を口にした。

「あなたが引き受けた任務についてです」

……………何でとつくに終わった、もつと言うとその後の決着のついたものを聞きたいんだこいつ。

俺はそう思いながら話始める。

「旧魔王派の連中は——」

「いえ、それではありません」

だが、すぐさま俺の言葉は遮られた。そして、それと同時に俺はこいつがわからなくなつた。

こいつは『カオス・ブリゲード禍の団』のメンバーのはずなのに聞きたいことはこれじゃない？旧魔王

派についてとかが知りたいのではないのか？ だったら、こいつは一体何が知りたいんだ？

俺が頭の中でそんな疑問を浮かべていると男は続ける。

「私が知りたいのは、『グレイフィア・ルキフグスの亡命』についてです」

そう言われた瞬間俺の疑問の全てが繋がった。

こいつのオーラは、そうか！ なんて忘れていたんだ……ッ！

俺は自分の記憶力を責めながら男に返す。

「そんな昔のこと、ほとんど覚えていないさ……」

男はそれを聞いて右手をあげてやっていた。

「そうですか？ では質問を変えます。あの任務の後、グレイフィア・ルキフグスは『後悔』を感じていましたか？」

「感じていたら、現ルシファアの眷属にならないと思うが？」

俺は即答で返す。

「……………」

「……………」

その回答の後、お互いに口を閉ざし、しばらくの静寂が俺たちを包み込んだ。

男がため息を吐いてそれを破り、そのまま口を開いた。

「わかりました。まあ、予想通りではありませんでしたが……………」

男はそう言うのと俺に近づいてきた。

「少し調べさせてもらいますよ」

俺の胸元に魔方陣を当て動かしていく。

何か調べられているな。くそ、逃げようにも縄のせいで動けん！いや、そもそも下手に動いたら小猫たちが危険だよな……………！

そう考えた俺は無駄に抵抗せずにいた。

そんな俺に、男が魔方陣を消して言ってくる。

「ご協力ありがとうございます。では、あの三人の元に移動しましょうか」

男がそう言うとは一旦離れてから転移魔方陣を展開する。するとすぐに俺と奴は転移の光に包まれた。

life 05 流れに任せて

転移の光が止み、視界が回復するとまた白一色の部屋だった。

警戒しながらも部屋を見渡すと、いなくなっていた例の三人を発見した。だがギヤスパーは倒れている!?

「おまえら、何があつた!おまえ、何もしないと発言していなかったか!」

「まったく彼らは制御がしにくいですね。申し訳ございません。こちらの不手際です」
奴はすぐさま謝ってくるが言葉に心が感じられないな。

いや、相手はテロリスト、それが当たり前だよな。

俺が睨みつけている中、拘束していた縄が解除され、変わりに手錠のように両手首を縛る縄がかけられた。後ろ手じゃなくて前なだけマシか。これならどうにか振り回せる。

俺が手を開いたり閉じたりしていると、男は手で三人のほうを指す。動いていいってわけか……………。

俺は警戒しながらもすぐさま三人の元に移動する。いちおう合流は出来たが、ここがどこだかわからないうえに手が自由じゃない以上、下手に暴れられない。

俺がそう思慮していると、男が口を開いた。

「あなた方にお話があります。着いてきて下さい」

男がそう言うのと奥の壁が縦にスライドして奥に大きな部屋のようなものが見えるようになった。

俺たちはそれを確認すると目を合わせ頷きあつた。

今は下手に抵抗しないほうがいい、相手に合わせるべきだ。

俺たちはそう決めると何かあつたときに俺がすぐに動けるように小猫にギヤスパーをおぶらせ、後ろからついて来るように指示を出してから歩き出した。

俺たちが部屋に入ると壁が閉まり戻れなくなつた。

「こちらです」

男の指示で俺たちは部屋の奥に進む。

そこからバカみたいに広い部屋を進むこと数分。

何かの培養カプセルが見えてきた。それも一個や二個ではなく、十数個あるのである。中には人の形をした何かが入っていた。

俺たちがそれを懐疑な目で見てみると男が口を開いた。

「これはフェニックス関係者を調べて作り上げた『クローン』です。そして偽の涙の製造元です。これを使って涙を量産し闇のマーケットに流していました。と言つても今は機能を停止させていますが……………」

それを聞いた瞬間、俺たちは目はそのカプセルに釘付けになった。正確には、何も言えず見ることにしかできなくなったと言つた方が正しいだろう。

これが偽の涙の真実だと……………ッ!?

「そんな……………何で……………」

レイヴェルはそれを聞いてへたりこみ涙を流していた。

それもそうだろう。フェニックスの力がこんな形で利用されているなんて俺を含めて誰も思いもしなかった。

俺は男を睨み、小猫はただ啞然としていた……………。

クローンを見せられた後、再び移動することになった。俺は泣いているレイヴェルを立ち上がらせる。

するとカプセルのすぐ後ろの壁がまたスライドした。それを確認すると男が手で行けと合図してくる。そのまま進むと、また白一色の部屋に到着した。

今回ののは随分広いな。これぐらいなら好きに暴れられそうだな。

俺たちは部屋の中央ほどまで進むと、俺たちがさつきまでいた部屋の壁が閉まり見えなくなる。すると左前方五メートルに転移魔方陣が展開され光だした。

その光が止むとそこにいたのは、

「ロイ様、三人もご無事ですか？」

「ソーナ!? 何でここに!?! ……いや、何でかはわかる」

ソーナと匙、リアス眷属とイリナだった。助けに来てくれたのか。 ……また迷惑をかけちゃったな。

「ここは次元の狭間に作った『工場』なのですよ。悪魔のゲームフィールド技術の応用で作りました」

フードの男が口を開いた。イツセーたちは警戒して男を見ていた。

男は続ける。

「彼らをお返ししましょう」

ローブの男が言ってきたが、俺たちは警戒して動かないでいた。だが、男は何もしてこない。そこで俺たちは警戒しつつもイツセーたちの方に移動した。

「イツセー様……………」

レイヴェルがイツセーを見つめて瞳を潤ませていた。

「レイヴェル、何かされたか？ あいつらフェニックスのことを探っていると聞いたから……」

イツセーの一言にレイヴェルは黙りこみ体を震わせていた。

「俺は魔方陣で軽く調べられたが、そつちは？」

「こちらと同じです。ただギャーくんが私たちを守ろうとして……」

俺たちが話していると男が言う。

「彼に関しては申し訳ない、こちらの落ち度です。彼が立ち向かってきたもので配下の者がつい手を出してしまったようです。それ以外は丁寧に扱いました」

それを聞いてリアス眷属全員のオーラが高まった。

このオーラは怒りによるものだな。後輩にこんなことされたら誰でもキレるか……。現に、俺もさっきの件を含めて限界が近い。

そんな俺たちをソーナは手で制して口を開く。

「あなたが今回の黒幕ですか？」

「ええ、そうです」

男はソーナの問いに即答した。

今度は俺が訊く。さっきは何にも聞けなかったからな。

「おまえは『禍カオス・ブリゲードの団』なのか？ そうだとしても襲撃の理由はなんなんだ？」

「ええ、『禍カオス・ブリゲードの団』をさせてもらっています。そして今回の襲撃の理由はいくつかありまして。まず一つ目は彼らの好奇心です。もともとここに所属していた者たち……」

「その者たちとはぐれ魔法使いの集団は手を組んでいた、でしょう？ 先ほど私たちが戦ったのはそんな彼らの混成チームでした」

「彼らは比較的頻繁に交流していたようですから」

「今回の襲撃は協会が出したという若手悪魔の評価に関連しますか？ 先ほどの集団戦で私たちの力に関して大変な関心を抱いていました」

「私が説明しなくてもいいぐらいですね」

ソーナと男が話していくが、簡単に言うと、今回はあいつら——はぐれ魔法使いの好奇心で襲ってきた、と。なるほど、身勝手な連中だ。

てか、『先ほど戦った』って、どこかで派手にやって来たのか？

俺の疑問をよそに男が言う。

「若手が多いため自制が効きにくいところがあつたのですよ」

「まあ、お前らの二大派閥が無くなって、そいつらの意見が通りやすかった。てのもあるだろ？」

「ええ、私が一部指揮しているのですがなかなか大変でして。今回の襲撃は彼らのわが

ままを叶えた形でした。上からも『好きにやらせてみる』と言われていましたから」

こいつよりもさらに上の立場の奴がいるのか、一体どんな奴だ………？

「そして二つ目はこれです」

男がそう言うのと俺たちが通ってきた部屋がまた見えるように壁がスライドする。

ここからでも培養カプセルが見える距離だ。

レイヴェルがその部屋から目を逸らした。確かに何度も見たい物ではないよな………。

「フェニックスの涙の製造方法はなかなか面倒でしょね。純血のフェニックスの者が、特殊な魔方陣の中で特殊な杯を使い、その杯の水に自らの涙を落とすのです。ここまでならどうにか出来るのですが、その時心を無にしなければならぬのですよ。感情がこもっていたらそれはただの涙です。そうなると脅してやらせたらそれはもう助かりたいが一心でやる自分のための涙になってしまい意味がない。なのでフェニックスのクローンを作り涙を量産することにしました」

さつき俺たちが聞かされたことを再び話し始める。

「と言ってもここは廃棄する予定なので、もう機能は停止させています」

「そしてここで作ったものを闇のマーケットに流して資金を集める。フェニックス関係者に接触したのはその精度をあげるためですね？」

「ご理解が早くて助かります。シトリー家次期当主。どうやら魔法使いの研究でも限界があるようでしたので、最終手段としてフェニックス関係者に接触していたのです。そして純血の者でないといけないこともあるようでしたので、レイヴェル・フェニックスを連れ去ることにしたようです。心配しないでください。彼女の体には何もしていませんから」

男はそう言うが、こいつら、レイヴェルの心を傷つけまくりやがって！いい加減にしろよ……………！

「酷い……………酷いよ……………どうして」

レイヴェルは再び涙を流していた。

裏のルートで涙を手に入れていたが、それが止められてからはこんな方法で独自に研究していやがった。こいつらは、フェニックスの力を道具としか見ていない……………。

男はレイヴェルの涙を気にすることなく淡々と言う。

「ギヤスパーク・ヴラディの情報は予想外の収穫でした」

相変わらず、こいつの言葉には心を感じない。こんなことを話したら多少興奮とかが言葉に混じると思うのだが……………。

男はローブを翻して改まる。

「さて、次が最後の理由です。あなた方と戦いたいと願う者がいるのでお相手をして

「ええ、そのまさかですよ」

男がそう言うと巨大な魔方陣が展開された。

『ついで』だと?ここまで好き勝手やって、レイヴエルだけじゃなくあの学園の生徒の心を傷つけたのが、『ついで』……………?

俺が怒りを込めるように紅のオーラを纏い、手を拘束する手錠を消滅させる。

あの魔方陣は見たことがある。よくドラゴンを呼ぶのに使うやつだ……………。

『ドラゴン・ゲート』
『龍門』?」

匙が呟いた。

そうだ、そんな名前だったな。イツセーを呼び出そうとして駒だけが帰って来たあれ。……………何か、嫌なものを思い出してしまった……………。

その『ドラゴン・ゲート』
『龍門』は深い緑色を放ち始める。

俺が知る限り、深緑を司るのは……………!!

「深緑を司るドラゴン……………まさか!?!」

「ええ、そのまさかですよ」

ローブの男がそう言うと『ドラゴン・ゲート』
『龍門』の輝きが増していき、ついに弾けた!

グオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

その瞬間、この空間全体を震わせる程の咆哮が響き渡った。

life 06 戦力強化の代償

グオオオオオオオオ！

この空間を震わせる程の咆哮を放ったのは、浅黒い鱗をした二足歩行のドラゴンだった。

銀色の瞳に太い手足、鋭い爪と牙と角、そして大きな翼と尾を持ったこれぞドラゴンと言った感じの見た目だ。

「……………『大罪の暴龍』クワイム・フォース・ドラゴン グレンデル」

ローブの男はそう呟くとグレンデルも口を開く。

『グハハハハ。久しぶりに龍ドラゴン 門ゲートなんてものを潜ったぞ！さーて俺の相手はどいつだ？ いるんだろう？俺好みのくそ強え野郎がよ！』

グレンデルの登場に絶句しているイツセーたち。

「バカな！グレンデルはとっくの昔に滅ぼされたはずだ！」

俺が叫ぶと匙の影から人間サイズの黒い蛇——ヴリトラが現れる。

『ああ、初代ベオウルフによって完膚なきまでに滅ぼされたはず。だが——』
ヴリトラもそう言いながらグレンデルを睨む。その滅ぼされたという奴が目の前にい

るわけだからな。

そのグレンデルがヴリトラとイツセーに視線を配らせる。

『こいつはまたおもしろえ。天龍の赤い方とヴリトラか！なんだその格好は？』

興味深そうに目を細めていた。

「二天龍はすでに滅ぼされ、セイクリッド・ギア神器に封印されていますよ」

ローブの男の言葉にグレンデルは哄笑をあげた。

『グハハハハ！んだよ、おめえらもやられたのかよ！ざまあねえな！なーにが、天龍だ！』

滅びやがってよ！だが、目覚めにはいい相手だ！』

グレンデルはそう言うと言を広げ姿勢を低くした。

「やるしかないな。おまえら、構えろ！」

「で、でも、ロイ先生。伝説のドラゴンと戦うの初めてです！」

「私もだ。ロキ戦でもどきやフェンリルの子供たちとはやったが………こいつは龍王クラスかそれ以上だ！」

「それでもやるしかねえ。イツセー！鎧を纏え！」

俺がイツセーに急かすように言うと、イツセーは籠手を見て悔しそうに言う。

「そうしたいんですけど丁度ドライグが寝てる時間なんです！」

「なに？」

参ったな、丁度か……………。

現在ドライグはイツセーの復活のために力を使いすぎてしまい、眠ってしまいう時間が多くなっているのだ。そして、今が丁度その眠っている時間というわけだ。

「それは困りました。本題の一つがあなたとグレンデルの戦いましたから」

男がそう言ってくるがこつちとしてもイツセーが戦えないのはキツいな。

「イツセー、ドライグに声をかけてみてくれ」

「はい。ドライグ、ドライグ？ちよつとヤバそうだから起きてくれ。おい、ドライグ！頼むよー！」

しばらくイツセーの様子を見ると、

「ドライグ？おい、どうした!？」

お！反応ありか？

俺が期待して待っていると、それを裏切るように宝玉から声が聞こえてきた。

『……………お兄ちゃんは誰?』

……………今なんて言った？イツセーに向かって誰だと？

「ド、ドライグさん?」

イツセーも困惑しながら再度問いかける。

『うん、僕はドライグ。ドラゴンの子供なの』

「……………」

それを聞いて俺とイツセーは間の抜けた表情で固まってしまった。

……………どうしてこうなった!? いや待てよ……………。

「もしかしたら……………」

「何かわかったんですか!」

言いかけた俺にイツセーが訊いてきたので、仮定である事を強調しながら言う。

「あくまで俺の予想だが、前からドライグはイツセーのおっぱい関連のことで精神的にまいってたる? プラスでお前の復活のために力を使ってしまった。そのせいで軽く壊れたのかもしれない」

「ちょ! ロイ先生!? 壊れたとか言わないでくださいよ!」

「……………単にイツセー先輩のおっぱい関連のもので疲れきって壊れてしまったのでは」

小猫も俺に続いて言う。その発言とともにドライグが震えた声音になった。

『おっぱい……………こわいよ……………』

「ほら見ろ、怖いって言っているぞ」

「そ、そんな!? ドライグくん! おっぱいは怖くない! おっぱいはいいものだ!」

イツセーがドライグを落ち着かせようと頑張っているが、余計にドライグの声は震えだした。

『ずむずむいやーんって、心の奥にまでずーっと残ってるの……』

これは駄目だ、どうにもならん。とりあえずドラゴンのことはドラゴンにだな。
「ヴリトラ、どうにかならないか？」

俺が訊くとヴリトラは答えた。

『もう一体、龍王がいればどうにかできるやもしれん』

「……龍王がもう一体か」

『おい！俺はまだ戦えないのか？というよりドライグの野郎どうなってやがる？』
グレンデルが何か言ってきたので先に言っておこう。

「グレンデル！」

『何だ！お前がやるのか？』

「いや！——作戦タイム！」

『認める！』

そりやどーも、即答で認めてくれたよあいつ。まあ、あいつ的にもドライグと戦いた
いんだろう。

俺は警戒しながら考える。

もう一体龍王が必要か。………だったら頼らせてもらおう。

俺は考えがまとまるとアジアに視線を送る。

「アーシア、例のあれ、行けるか？」

「は、はい！お任せください！」

俺の質問に自信満々に答えてくれるアーシア。なら大丈夫だろう。

「ロイ様、あれをやらせるのですね」

「ああ、ソーナ。その通りだ」

俺たちが話を進めていくなかでイツセーはわかってない感じだが、アーシアはそんなイツセーをよそに呪文を唱え始めた。すると彼女の前方に金色の魔方陣が出現した。

「我が呼び声に応えたまえ、黄金の王よ。地を這い、我が褒美を受けよ」

アーシアの呪文を受けて、魔方陣の光が強くなった。すると再び龍^{ドラゴン・ゲート}門が展開され

る。この金色の光、忘れるはずがない！

「お出てください！『黄金龍君』！ファープニルさん！」

アーシアが呪文を唱え終わると、黄金の魔方陣から金色の鱗を持つ四足歩行のドラゴンが出てくる。翼がないぶんグレンデルより小さく見えるが、実際はグレンデルと同じぐらいの大きさだ。

アーシアが呼び出したドラゴン、五大龍王の一角ファープニル。前まではアザゼルが契約して人工^{セイクリッド・ギア}神器にしていたやつだ。あの金色の光を忘れないのはそのためだ。

イツセーが驚いているので解説するかね。

「イツセー、アザゼルはもう前線を引いた身だ。それに伴ってファープニルとの契約も解除した。ただ、そのまま返すのも何だからってことでアーシアとの契約を促したってわけだ」

「な、なるほど」

「俺はその契約にあんまり関わってなかったら心配してたが、先日契約成功と言われて安心したよ。オーフィスの加護を受けられたのも納得だ」

「……………オーフィスの加護ですか？ああ！アザゼル先生が別れ際に言ってたー！」

「そう、それだ。アザゼル曰くオーフィスが無自覚にやっていたらしい。そのおかげで運勢とかドラゴンとの相性が底上げされていたとのことだ。ちなみにイリナも加護を受けてるぞ」

「この間もショッピングセンターのくじ引きで二等が当たったわー！」

イリナはそういいながら右手でサムズアップをしてくるが二等ってまた微妙な……………。

俺は続ける。

「ちなみにイツセーお前は加護ってよりも憑かれてるに近い。どんな神でも祓いられない業を背負ったな……………」

俺の一言でイツセーはなんか複雑な表情になってしまった。

「そういえばアーシア、契約したってことは対価が必要だったんじゃないか？俺は詳しくは知らないが一体何を？」

「そ、そうなんですか!?!アーシア、一体何を対価に？」

リアスに訊いてもはぐらかされ、アザゼルからは「本人に聞け」と返されたわけで俺は詳しく知らないのだ。

というわけで聞いてみたわけだが、アーシアは恥ずかしさ全開の表情になってしまった。それでもアーシアは口を開く。

「——ッです」

「!?」

俺もイツセーもしっかり聞き取れなかった。もう一度訊く。

「すまん、今なんて言った？」

するとアーシアが顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「パンツです!」

「……………はああああ!?!」

俺とイツセーは同時に声を出した。パ、パンツだと!?

言葉の真意を確かめるようにファープニルを見てみると、角に何か布がくるまっている!それをさらによく見てみると……………。あれは、パンツだ。女物のパンツだ

……………。

俺とイツセーがまた固まっているとファープニルが口を開いた。

『お宝、おパンティー、いただきました。俺様、おパンティー、うれしい』

……………駄目だこりゃ。どうしてこう、強いやつは変なのが多いんだ！

「アザゼルは確か貴重な道具とかだったよな!?なのになのでパンツなんだよ！」

俺がファープニルに訊くが、こいつは無視してアーシアに視線を向けている。

そんなアーシアは恥ずかしさに耐えながら訊く。

「ファープニルさん！ドライグさんの精神が弱まっているんです！どうか助けてあげることとはできないんですか!?!」

『……………できるよ』

頷くファープニル。とりあえず仕事はしてくれようだ。なら助かる。

「本当ですか!?!お願いします！ドライグさんを元に戻してください！」

『お宝、ちよーだい』

デスヨネー。まあ、こうなるとは思ってたがな！

「わ、わかりました。対価ですわ……………」

アーシアは恥ずかしさに耐えながらポシエットから水色のパンツを取り出した。

何か目を背けたくなってきたよ！こんなことになるなら他の龍王クラスに頼めばよ

かったんじゃないか!?

俺がそんな事を考えていると、アーシアが取り出した物を見てゼノヴィアとイリナが叫ぶ!

「あれはアーシアのお気に入りのものだぞ!」

「アーシアさん、まさかそれを!?!」

アーシアのお気に入りに入りなんだな。あまり見ないようにしよう。

「やめろ、アーシア! アーシアがそこまでする必要は……。おい! 龍王! 何でおパンティーが欲しいんだよ!?!」

イツセーが問うがフアーブニルは顔色ひとつ変えずに言い放つ。

『おパンティー、お宝』

「だあああ! わからねえ! おいヴリトラ! こいつを説得してくれ!」

俺がヴリトラに頼むがその返答は、

『知らん』

その一言だけだった! 心の底から関わりたくないって声音だったぞ!

俺がヴリトラに何か言ってやろうとすると、今度はゼノヴィアが叫ぶ!

「待て! だったら私のを!」

そんなゼノヴィアをイリナが止める。

「ゼノヴィア忘れたの!? その戦闘服って下にパンツ穿いていないじゃないの!」
「だったら、私の戦闘服じゃ不服か!」

教会トリオの友情が凄まじい! いわゆる自己犠牲の精神ってやつなのか!
だが、ファープニルはアジアを見ながら言う。

『俺様、金髪美少女のおパンティーがいい。パンツシスターのお宝欲しい』

「誰がパンツシスターだ!!」

俺とイツセーは同時にファープニルの頭を叩いた。全く動じないけどな!
するとグレンデルが待ちくたびれたように口を開く。

『おい! まだなのか?』

「もう少しだから待っててくれ! 今大事なところなんだ!」

『お、おう』

グレンデルは即領き、

『んなわけねえだろうがああああッ!』

顔をあげると同時に火球を飛ばしてきた!

俺は銃剣を一挺取り出し、滅びの刃を鞭のように振るって火球を両断、さらに細切れにしていく。

火球は俺たちの元に到達する頃にはバラバラになりすぎて火の粉のようになる。だ

め押しとしてソーナ得意の水の魔力でそれらも消火した。

俺はグレンデルを睨む。

「だから、待つてろつて言ってるだろうが！もう少しなんだよ！」

『いや、もう待てねえ！待たせてえなら、誰かさんが暇潰しをしてくれねえとな！』
グレンデルは俺に挑発的な視線を向けてくる。どうやら、俺がご所望のようだ。

俺は二挺目の銃剣を取り出して前に出る。

「いいぜ、時間を潰させてやるよ」

『お？おまえが来るのか？悪魔ちゃんよ！』

「ああ、やってやる」

グレンデルに近付き、挑発するように笑みを浮かべる。

すると、後ろから心配するソーナの声か。

「ロイ様、相手は邪龍です。あまり無理をなさらずに……………」

俺は軽く振り向きながら頷く。

「わかってるさ。だが、誰かがやらないといけない。それに——」

俺は再びグレンデルに目を向け、不敵に笑む。

「別に倒してしまっても構わないだろう？」

『は！てめえごときが俺様を倒す？笑わせるなよ！』

グレンデルは姿勢を低くして突撃の体制をつくり、俺も銃剣の銃口をグレンデルに向ける。

さて、死ぬ気で時間を稼がせてもらおうぞ！

l i f e 0 7 ロイVSグレンデル

俺——ロイとグレンデルは睨みあい、お互いの出かたをうかがう。

相手は初見の邪龍だ。何をしてくるか、わかったもんじやない。

だが、邪龍についてはいくらか聞いたことがある。グレンデルの鱗はドラゴンの中でも最硬クラス、強さも龍王と同等かそれ以上。勝てるかは、はつきり言って微妙だろう。

俺がそれを思い返した瞬間、グレンデルが飛び出してくる！あの体格にしては速い！だが、遅い！

間合いを瞬時に詰めたグレンデルは爪を振り下ろしてくる！

俺はそれを横に飛び退くようにして避け、腕に貫通性を上げた弾丸を撃ち込む！

……が、鱗に当たった瞬間に火花が散らせて弾かれてしまった！

やはり、もつと弾丸の一点に魔力を集中させないと駄目だな！

俺は着地と同時に弾丸を生成し直す。弾全体を強めるのではなく、弾道部分のさらに先端に魔力込めていく。

俺がそれを済ませ、放とうとした矢先にグレンデルの尻尾が横風ぎに振るわれた！

それを跳躍するようにして避け、胴体に弾丸を放つ！

二挺の銃剣から放たれた滅びの弾丸は黒い軌跡を残しながらグレンデルに向かっていき、鱗を貫いた。

今度はしつかりと通り、貫通さずに体内に潜り込んだ。

よし、これならいけるな……………。

『痛くも痒くもねえ、虫でも止まったか?!』

グレンデルは挑発するように言ってくる。まあ、そう言うと思ったがな。

まずは背中に二発だな。

再び弾丸を生成、今度はこちらから仕掛ける。

グレンデルに接近しながら二挺連続で発砲。先程の銃弾でたいした脅威でもない判断したのか、それを避けもせずに俺に突っ込んでくる。

六発の弾丸が右肩に食いついた。

グレンデルが突撃の勢いで放ってきた拳の下をスライディングするように潜り抜け、腹部に五発叩き込む。

すれ違いざま、グレンデルの尻尾が振り下ろされたが、刹那的に翼を展開して低空飛行で横に飛んで避ける。

そのまま上空に飛び上がり、弾丸を生成。グレンデルを見下ろすように睨む。

グレンデルが嘲笑うように言う。

『はー！さっきから逃げてばっかりかよ！もつと強^{つゝえ}え攻撃はねえのか!?』

俺はため息を吐き、グレンデルに言う。

「つたく、元氣な野郎だな……………」

言うや否や、眼球を狙い弾丸を発射。グレンデルはそれを察したのか右腕でガードした。まあ、中に入ったのなら問題ない。

だが、生成するのに少し時間がかかるな。いつもみたいに連発できねえ。

俺が次の一手を思慮していると、グレンデルが腹部を膨らませる。火炎を吐く気だな……………！

俺は後ろに下がって距離を取り、迎撃の用意をする。阻止するために下手に接近して『フェイントだ！間抜けが！』とかなったら死ぬ。一発で体を潰されちまう。

同時にグレンデルが火炎を吐き出す！先ほどのものと比べ物にならない火力！

俺は銃剣を二挺が平行に並ぶように構え、弾丸に魔力を込めていく。今回は単発じゃねえ、波動砲のように一気にぶっ放す！

魔力の充填が完了した瞬間、引き金を引き絞って発射。上空にいたためか、反動で後ろに吹っ飛ばされた！

炎と滅びが正面から衝突し、同時にはせて相殺された！それを確認しつつ、翼を動かして体勢を整える。

『またまだいくぜエエエエエツ!』

叫びと共に爆煙を突つ切り、グレンデルが拳を放ってくる!

俺は翼を動かして急降下して避け、再び弾丸を放とうとするが、

「くそが!」

肝心な時に限って動作不良が起きてしまった。引き金を引いても弾丸が出ねえ! さつき波動砲が原因だよな!

勢いよく着地した俺は素早くその場を飛び退く。同時にグレンデルの踏みつけが床に突き刺さった!

あ、あぶねえ。くらったらアウトだった……。

再び引き金を引く。今度はしっかりと弾が放たれ、グレンデルの左足にめり込んだ。

銃剣の中身を消滅させてしまったのかと心配したが、問題ないようだ。

俺はホツと息を吐き、グレンデルを睨む。グレンデルは俺を見ながらイライラしているようで、それを隠そうともせずに叫んでくる。

『てめえ! 真つ正直から勝負しやがれよ! 全然楽しめねえじゃねえか!』

「やれやれ、俺は時間潰しじゃなかったのか? まあ、俺も倒すつもりだがな」

『だつたらもつと来いよ! つまらねえ、つまらねえ!』

子供が駄々をこねるように地団駄を踏んで言うグレンデル。

俺は楽しむつもりがないし、イツセーの準備が出来たら一気に終わらせる気ではないか。まだか、イツセー！

俺はちらりとイツセーのほうに視線を送る。籠手にファープニルとヴリトラから放たれた光を当てている。あれは………もうすぐでいいのか？

俺が視線をグレンデルに戻すと、奴は笑う。

『ドライグはまだなのかよ!? いい加減悪魔ちゃんには飽き飽きだぜ!』

イツセーはファープニルとヴリトラを急かし始めた。光はいつそう強くなるが、もう少しかかりそうだな。

それを確認したのか、グレンデルが邪悪に笑って腹部を膨らませた。

また火炎か! だったら相殺してやるよ!

俺が銃剣に魔力を込めようとすると、グレンデルは体の向きを変え、

『ストレス発散に死ねッ!』

ソーナたちのほうに三発の火球を吐き出しやがった!

俺がフォローに動こうとすると、

「くっ!」

「やらせませんわっ!」

ロスヴァイセが防御魔法の魔方陣を何重にも展開、朱乃が先日使えるようになったと

いう『雷光龍』（雷光が東洋の龍のようになったもの）でロスヴァイセが受け止めた火炎を相殺。

「——水よ」

青いオーラを纏ったソーナが生み出した水がイツセーたちを覆い、その余波からメンバーたちを守る。

いい動きだが、火球はあと二つある！

「俺たちもやりましょうかね！ファープニル！」

匙が黒炎の魔方陣を展開、そこに火球を捕らえると、

「霧散しろ！」

ヴリトラの力で火球の威力を殺していく。そして、十分に威力が弱まったところに、

『アーシアたん、守る』

ファープニルが金色のオーラを放って完全に相殺した。龍王のコンビネーションだが、ヴリトラはともかくファープニルがな。………残念だ。

そして、最後の一発はイリナとゼノヴィアが、

「切り刻む！」

デュランダルのお鞘になっっているエクスカリバーの特性である天閃の力（速度強化）と破壊の力（威力強化）を使い火球を両断、そのまま細切れにしていく。だが、まだ完全

に殺してきれていない！

「最後は私ね！」

イリナが量産型聖魔剣を氷属性に変え、その残ったものを凍りつけにした。

ど、どうにかなったか……。あー、心配した……。

俺はホツと息を吐くと殺気を込めてグレンデルを睨む。

あいつは『ストレス発散に死ね』と言った。つまり、あまり意味がなくても殺しをおこなうということだ。

『そつちも奴らもやるじゃねえか！いいねえ、悪魔ちゃんも盛り上がってきたじゃねえか！』

グレンデルは俺が殺気立ったことに歓喜していた。こいつ、多少はビビるなりして欲しかったが、邪龍は頭のネジが足りていないって聞いたことがあるからな、無駄な考えだったか。

俺は音もなく飛び出してグレンデルの右目に銃口をねじ込み、弾丸を放つ！同時に離脱して次の一手を準備していく。

『ぐおっ!』

グレンデルは突然のことに反応できず、間の抜けた表情になるが、自分の右目の辺りを拭い、狂喜を感じさせる笑みを浮かべる。

『いつてええええなっ！やればできるじゃねえかよ、悪魔ちゃんよおおおっ！』
叫ぶグレンデルを無視し、俺が再び弾丸を生成しようとする、俺の横に立つ男が一人。

「ロイ先生、お待たせしました！」

鎧を纏ったイツセーだ。ドライグがようやくお目覚めしたようだ。

俺は頷き、イツセーに言う。

「遅いつての。つたく、もう終わるぞ？」

『はあ!?何がもう終わるだ！これからだろうが！』

イツセーの参戦にテンションが上がるグレンデル。えっと、何発撃ち込んだっけか……。

俺が思い出そうと唸っていると、グレンデルの足を黒い影のようなものが包み込もうとしていた。

俺とイツセーはその闇の発生源に目を向けた。

そこにはギヤスパーがいた。赤い両目を妖しく輝かせ全身をだらりとしている。

ギヤスパーはそのままグレンデルに向かおうとしている。

あれは、あの時に見せたギヤスパーの力……。

不気味なオーラを放ち闇がこの空間を飲み込もうとしている。

『なんだありや。まあいい。あれもやっていいってことだな！強えクソガキがまだいやるのか！いい時代だ！』

グレンデルはこの状況すら嬉々として受け入れ、ギヤスパーに突撃しようも体勢を低くして構える。ギヤスパーをこれ以上やらせるわけないだろが！

イツセーも同じ事を考えたのか、グレンデルの標的を変えようと動き出そうとした瞬間、

「いえ、グレンデル。そこまでにしてください。実験は成功していたようです。木場祐斗もいればよかったですけど……」

今まで静観していまローブの男が制止の言葉を投げた。

それを聞いたグレンデルは不満な叫びをあげる。

『止めんなよ止めんなよ……こつからだ！こつから！潰しあわせてくれよ！今度こそ思う存分、喰って、喰われて、壊して、壊されて、ぶつ殺すんだよ！』

ここまで戦意にまみれた奴は見たことがねえ。敵味方関係なく殺気を振り撒く凶暴なドラゴン。間違いなくここで殺したほうがいいだろう。

俺のその判断は変わることはなく、グレンデルに撃ち込んだ弾丸の魔力を探る。

「グレンデル、ここまでだ。てか、とつくの前に終わっている」

『だから、てめえは何を言ってるんだよ！』

俺の言葉にグレンデルが嘯みつくが、それを無視して俺は続ける。

「弾が一発でも入っていけば問題ないが、多いに越したことはない」

俺は右手の銃剣をしまい、そのまま軽く右手を挙げる。

「——死ね」

挙げた手の指を鳴らした。その瞬間、

グシャ……………！

何かが肉を貫く音がこの空間に響いた。グレンデルの腹から数本の黒い刃が飛び出している。

『な、なん——』

グシャ……………！

グレンデルが何かを言う前に右肩から大量の黒い刃が飛び出してくる。

グシャ……………！グシャ……………！グシャ……………！グシャ……………！

次々と止むことなく黒い刃が飛び出し、グレンデルの体を貫いていく。

体のあちこちから大量の青い血を吹き出し、倒れかけるグレンデル。だが、

グシャ……………！グシャ……………！グシャ……………！

飛び出した刃がそれをさせない。倒れさせないように連続で刃が飛び出していく。

そして、最後に――

ビシャツ!

頭を吹き飛ばすように大量の刃が飛び出し、グレンデルの頭部が原型をとどめないほどグシャグシャになった。頭の右半分が貫かれた勢いでフードの男の前まで吹き飛ばされていく。

残されたグレンデルの体は頭部を失ったため断末摩をあげることなく膝から崩れ落ち、そのままうつ伏せに倒れこむ。ビクビクと痙攣しているが、派手に動くことはなさそうだ。

俺はそれを確認すると深く息を吐く。

「あー、終わった。存外どうにかなるもんだな……………」

「お、俺の出番は……………?」

「知るか」

こうして、俺は苦戦しながらもグレンデルを撃破したのだった。

l i f e 0 8 男の正体

グレンデルを倒した俺——ロイはフードの男を睨みつける。

男は中身がスクランブルエッグのようになったグレンデルの頭部の右半分を見るとため息を吐き、俺に視線を送ってきた。

「流石、義兄上あにうえです。やはり、グレンデルでは勝てませんか……………」
『——ッ!?!』

男の言葉にソーナたちは目を見開いて驚き、俺を見つめてくる。

俺はそれを感じながらも男に言う。

「…………俺に義弟おとうとがいるとは知らなかったが、おまえ、何者だ?」

俺の問いに男はフードを取り払い、素顔を見せて答えた。

フードが取り払われると、そこにあつたのは銀髪ねえの青年の顔だった。そして、俺の思
い浮かべていたヒトの面影を感じさせる。

「皆様、初めまして。私はルキフグス。ユーグリット・ルキフグスです」

…………やはり、奴から感じたオーラの質はあのヒト——グレイフィア義姉ねえさんに似て
いた。義姉さんと同じルキフグスの一族だったのか……………。

俺はユーグリットに訊く。

「……………で、『禍おまえらの団』のボスは誰だ？」

「それはいずれわかりますよ」

ユーグリットは目を細めながら答えた。

その言葉にソーナは何かを得心した様子で言う。

「……………なるほど、この町に侵入し、魔法使いを招き入れたのはあなたですね？グレイファイア様と同質のオーラを有する者であれば、結界を通過できてもおかしくはないのかもしれない」

なんてガバガバな結界だ……………。これから心配になるぞ……………。

俺が一人、的を外れなことを考えていると、ユーグリットが冷淡な声音になった。

「姉に、グレモリーの従僕に成り下がったグレイファイア・ルキフグスに伝えておいてください。——あなたがルキフグスの役目を放棄して自由に生きるのであれば、私にもその権利はある、と」

ユーグリットはそれだけを告げると、グレンデルの頭部の右半分と共に転移魔方陣の光に包まれて消えていった……………。

ユーグリット、あいつの上にいるのは誰だ……………？ここまで大掛かりなことをする旧魔王の残党なんてほとんどいないはずだ。なら、別の誰かだよ……………。

俺があごに手をやって思考を巡らせていると、フィールドの端々が崩れ始めた。

すると、謎の力を使ったギヤスパーは再び倒れてしまった。今度こそ限界のようだ。

「とにかく脱出だ！ソーナ、朱乃、転移の準備頼む！」

「はい！」

「わかりましたわー！」

二人は返事をする、俺たちを囲むように転移魔方陣を展開し始める。ギヤスパーは小猫が回収していた。

すると、レイヴエルが手元に小型魔方陣を発生させて培養カプセルのほうに放つていく。その魔方陣はカプセルに当たると、一度輝いてから消えた。

「……せめて、これぐらいはさせてもらいますわ」

「そうか今のは……、」

「そんじゃ、俺もやっておくか」

俺も小型魔方陣をカプセルに飛ばす。

これでマーキング完了だ。

ソーナと朱乃がそれを確認すると俺たちは転移の光に包まれる。

………兄さん、これは今までにないほど面倒なことになりそうだぞ………。

あの後すぐさま脱出に成功した俺たちは駅の中にいた。

なぜ駅の中にいるかというところ、あの空間から出ると駅の悪魔専用ホームだったのだ。拉致されている間に時間の感覚がおかしくなっていたのか、数時間しか経っていないと思つたのもう朝日が登り始めていた。

まあ、偽フェニックスの涙のカプセルは回収出来なかったが、俺とレイヴェルでマキング魔方陣をつけたからそのうち回収出来るだろう。

俺がそんな事を考えているとレイヴェルが駆け寄ってくる。

「ロイ様！ よろしいですか？」

「レイヴェルか、どうかしたか？」

「調べられた時の魔方陣、覚えていらつしやいますか？」

「ああ」

レイヴェルは俺が頷くと一枚の紙を見せてくる。それには一つの魔方陣が描かれていた。

「この魔方陣であつていいのでしょうか？」

あの時のか。ユーグリットにやられたから違うものかもって思ったが、意外に同じだったようだ。

「ああ、大丈夫だ。覚えていたのか？ 抜かりないねえ」

「ふふ、当たり前です。このレイヴェル・フェニックス、ただでは起き上がりませんわ！
それではイツー様の所に行ってきますわ！」

どこかに走っていくレイヴェル。先ほどまで泣いていたのが嘘のように、瞳には自信が満ち溢れていた。……………あの子は立派になるな。

俺がそう考えていると、

「レイヴェル！ 無事か!？」

そんなレイヴェルの兄が来ていた。

「ライザー遅いぞ。もう終わった」

「何ですと!？」

ライザーは驚いているが実際終わっているしな……………。

と言つても、何だかんだで来てくれるとは妹思いな奴だ。

いい兄さんがいるな、レイヴェルは。俺もいるけどさ。

……………これからどうなるんだ？ なあ、兄さん、義姉さん……………。

あれから数日。

俺は自室でセラと連絡を取っていた。映像に映るセラの顔はいつになく不安そうだなかなか口を開かない彼女に変わり、俺から話題を切り出す。

「……で、俺はどうなる？」

『あなたの元部下の二人と、アジユカちゃんが送り込んだヒトに話を聞いて、あなたがユーグリットと接触した可能性は低いと判断されたわ』

あいつらにも話を聞いたのか。まあ、ある意味こういう時に活躍してもらわないとな。

俺が黙って続きを待っているとセラが言う。

『それで、あなたには任務をお願いすることになったわ』

「……………」『ユーグリットの捕縛、もしくは殺害』、だろ？」

『……………ええ』

俺は息を吐いた。要は身の潔白を自力で証明してみせろってことだ。

だが、それが結果的に義姉さんのためになるっていうのなら、多少の危険は軽いもんだな。

「了解。久しぶりの任務になるが、任せとけ」

『お願いね。それと、また腕輪をつけてもらうことになったわ』

「今度は連絡用じゃなくて『監視用』だろ？」

俺の返しにセラは頷くと腕輪が送られてきた。

『今回は位置情報が送られる仕組みよ。通信もできるようになっていてるから』

俺は無言で腕輪をつけ、感触を確かめる。相変わらずサイズピッタリだ。十年間つけていたのだから、懐かしさを感じる。

俺が昔の任務を思い返していると、腕輪が透明になって見えなくなった。

『教師をしているってことで、いちおうの配慮よ。大丈夫？キツくない？』

「ああ、問題ない。すまないな、色々追加させちまって……………」

俺が謝るとセラは小さく笑い、最後に言う。

『ロイ、一日でも早くユーグリットを捕らえて。グレイファイアさんのためにも……………』

義姉さんはグレモリー城に軟禁されているそうだ。それを考えると、俺はまだマシなほうなんだ……………。

なら、義姉さんのためにも頑張らねえと……………！！

「ああ、任せとけよ」

俺の言葉にセラは頷くと「じゃあな」と一言伝えて連絡用魔方陣を解除する。

俺は透明になった腕輪を撫でると再び姿を現した。

………これをつけていると、嫌でも頭が任務モードになる。昔から染み付いた、癖のようなものか………。

俺はそんな事を思いながら背もたれに寄りかかり、天井を見上げる。

ユーグリット、俺は何としてもおまえを捕らえる………ッ！

俺は一人、自室で静かに覚悟を決めたのだった——。

幕間編⑥

E x t r a l i f e 0 1 なんか、忍者になった

.....

リアスたちが魔法使いとの契約のために忙しくしているある日の深夜。

寝ていた俺——ロイは何か気配を感じて目を覚ました。

悪魔でも寝つく時間に兵藤宅から出ていく気配が二つ、いや、三つか……。

リアスたちはもう寝ているだろうし、兵藤夫妻も寝ている。出ていく可能性があるとしたら、あいつらか！

俺は素早くベッドから降り、魔力で服を寝巻き姿から動きやすいものに変える。夜中なので、全体的に黒い感じにしたが、いつものことか。

そんな事を思いつつ、気配を殺して部屋の窓から飛び降り、兵藤宅から出ていったやつらの追跡に動き出した。

消えてしまいそうな気配を懸命に探つて追跡すること数分。俺は町外れの廃墟に行き着いた。

はぐれ悪魔がいそうな怪しい雰囲気の場所だ。旧魔王派にいたときの拠点を思い出す。

ここら辺であいつらの気配が消えたんだが、中にいるって事なのか？

抜き足差し足で廃墟に入る。所々から漏れる月明かりで明るいが、奥の方は真っ暗だ。まあ、夜目が効く悪魔だからたいして問題はない。

警戒しながらゆつくり進むこと数分。前方に両開きの扉が現れた。

ここまで扉みたいなのはなかったし、かといつて曲がり角もなかった。本当にあいつらはここにいるのか？

扉の前に立ち、中の様子を探ろうと隙間を探す。

扉は完全に閉まっているようで、隙間が見つからないし、中からの音も聞こえない。もしかして扉に見える壁か？

俺がどうするか悩んでいると、誰かが廃墟に入ってくる気配を感じた。

戦闘をするにしても、この町にいる以上、何かの関係者なことは間違いない。下手に問題を起こさないほうがいいだろう。

戦闘がダメなら、隠ればいいか。って、やっていることが潜入任務の時のそれだな……。

俺はため息を吐きながら天井まで跳び、張り巡らされている鉄骨に張りついた。結構キツイが、今は耐えるしかないな。

心配を殺してその誰かを待つ。

「黒歌さん、うまく撒けましたかね？」

「いいにや！いいにや！バレてもどうにかなるにや！」

「我、これが最近の楽しみ」

なんて、暖気のんきに言いながら現れたのはヴァーリチームのルフエイ、黒歌、そしてオカ研のマスコットことオフィスだった！

俺が先ほどから言っている『あいつら』は彼女たちのことだ。

てか、黒歌、バレてもどうにかなるって、イツセーならともかく、俺はそこまで甘くないぞ？

とりあえず、後で三人には説教するとして、どうするか。こいつらが誰かとここで接触しているのなら、その相手は確かめておかなければならない。

俺が天井で踏ん張りながら考えていると、黒歌が例の扉の前に立ち、身を寄せた。

「芋」

何の前触れもなく黒歌がそんな事を言うと、扉が重々しい音をたてながらゆっくりと開いていく。

『芋』の一言で開く扉って、どうなんだろうか……。

俺が呆れていると三人はその扉の奥へと進んでいった。

三人が扉の奥に消え、再び扉が閉まったところで俺は飛び降り、閉めきられた扉を確認する。

相変わらず完璧に閉まってやがるな。黒歌のやつ、一体誰に『芋』なんて言っただんだ？

俺は黒歌がしたように扉に身を寄せてみる。すると、中から声が聞こえてきた。

『合言葉、山』

……えっと、合言葉だろ？それって、まさか……。

俺は迷いながらも、その言葉を言う。

「……………芋？」

『……………よし、入りたまえ』

しばらくの間があつたが開けてくれるようだ。

再び重々しい音と共に開く扉。俺は警戒しながらその奥を見ると、そこは本で見た古めの日本家屋のような風景が広がっていた。俺がいるのがいわゆる土間ってところで、

一段高いところが『居間』ってやつだったか？で、その居間にいるのが……………。

「にやはははは……………。撒くどころか、先回りされてたみたいにや」

「本当にすみません」

「にんにん」

俺を見て苦笑する黒歌、素直に謝ってくるルフエイ、謎のポーズをするオーフィス。

そして、

「まさか、あなたが噂に聞くロイ殿でござるか？貴殿も『修行』のために、ここに来たの
でござるか？」

謎の白い服と頭巾を被った誰か。声的には男だと思いが、なんだ『ござる』って。

「俺はロイだが、あんたは？」

俺が名乗りながら訊くと、その男性は頭巾を取りながら白い翼を展開した。

……………ん？ま、待て、白い翼だど!?

「拙者はメタトロンでござる」

「……………は？」

思わず声に出してしまったが本当に『は？』だよ！メタトロンって、セラフの一人じゃ
ねえか!?

「あ、メタトロン？このことをミカエルは知っているんだよね？」

若干当惑しながらそう訊いた。

メタトロンはセラフだ。ミカエルやガブリエルほどではないにしろ、大事な立場にいる。つまり、義姉ねえさんがここで変なことをしているようなものだ。

俺の心配をよそに、メタトロンは言った。

「うむ、ミカエル様からもしつかり励むようにと言われております」

「何やってんだよ、おまえらも、あいつも……」

俺が呆れながらそう漏らすと、黒歌が訊いてきた。

「まあまあ、せっかく来たんだからやっていけば？」

「やる？ 何をだ」

俺が聞き返すと黒歌は真剣な顔でこう言ってきた。

「『忍術』にや」

「……………は？」

「『は？』じゃないわよ。その顔、信じていないわね！」

黒歌の言葉を無視して俺は心の中で後悔していた。

これは明らかに面倒なものだ。このままだと、賽銭箱を作ったときのように徹夜することになる。

俺が断ろうとした矢先に背後から気配を感じた。ゆっくりと振り向いてみると、

「おやおや、騒がしいと思えば、また弟子志願かの？」

そこにいたのは和服を着た初老の男性。手にはコンビ二袋をぶら下げている。メタトロンがその男性を見て、姿勢を正した。

「その通りでございます、マスター。黒歌殿がお連れしたのでござる」

「いや、待て。俺は――」

「ほう、弟子志願とな」

俺の言葉を遮った男性はあごに手をやりながら若干当惑していた。

「とりあえず、お上がりください。お話はそれからです」

「アツハイ」

流れのまま俺は居間にかかることになってしまった。

……………早く帰りたい。

俺がそんな事を思っていることを知らない男性は自己紹介を始める。

「はじめまして。私は伊賀流忍術を伝える者、百地丹紋と申します。あなたは？」

ここで返さなかったら失礼なのは明白だ。いちおうだが返しておかないとな。

「ドーモ、タンモン＝サン。ロイです」

やる気のなさが滲にじみ出ているが、しっかり頭を下げて礼をする。本音を言っ

まうと、本当は帰りたいんだよ！

「つて、イガリユウ？ ニンジャにも派閥があるんですか？」

「帰りたい気持ちを抑えながら頭を上げて俺が訊くと、丹紋さんは領いた。」

「ええ、私たち伊賀者はお金による契約を重視した忍です。一人の君主に付き従う甲賀こうが流とは逆ですね」

「アツハイ」

いきなり『イガ』だの『コウガ』だの言われてもわからん。いちおう聞いておくけどさ……。

それにしても、リアスも連れてくれば良かったか？ あいつ、確かこんな好きだったはずだ。去年の修学旅行で行った京都ではスゴいはしゃいでいたって朱乃から聞いたぞ。

セラとのデートでも京都を回ったが、あのときは問題が起こって中断しちまったし、今度はしつかりやりたいもんだ。

「ところでロイ殿はいかにしてここに来たのでござるか？」

丹紋さんとの話が落ち着いたところでメタトロンが訊いてきた。

俺は黒歌たちを指差しながら言う。

「その三人を追いかけてきたんだ。途中で気配が消えたんだが、あとは勘で追跡した」俺がそう言うのと黒歌が苦笑する。

「つけられてることは途中でわかったんだけどねえ。まさか、ここまで追ってくるとは思わなかったにや」

本当、あそこで諦めておけば良かったよ。

ため息を吐く俺をよそに丹紋さんが言う。

「黒歌殿を尾行とは、なかなかやりますな」

なんか、認められてる!? 忍者に認められるのはいいことなのか？

疑問を浮かべる俺に丹紋さんが言う。

「ロイ殿、せっかくいらっしやったのです。少しやつてみませんか？」

このヒト、存外フレンドリーだ。この人の弟子は多いのかもしれない。

俺は丹紋さんの厚意こういを無視するわけにもいかず、表情には出ないように渋々頷く。

「まあ、せっかく来たのでやらせていただきます」

こうして、俺は何だかんだで丹紋さんの弟子になったのだった。

Extra life 02 忍者は人気者

丹紋たんもんさんの弟子になってしまった俺——ロイは黒い忍装束というニンジャの装備に着替え、廃墟の一階にあるホール跡に移動していた。

俺の横には同じく忍装束の黒歌、ルフエイ、オーフィス、メタトロンが立っている。着てみて思ったが、この格好、思っている以上に動きやすい。さすがはニンジャの正式装備だ。

黒歌が言ってくる。

「どうかにや？ 忍の格好は？」

「ああ、動きやすいな。だが、おまえは露出しすぎだ」

俺は黒歌を指差しながら言った。

黒歌以外のメンバーはいたって普通のニンジャの格好なのだが、黒歌だけはやたらと露出が多い。

「あれ？ 意外に私のことを見てるのかにや？」

イタズラっぽい笑みを浮かべて黒歌は言ってくるが、

「あ？ 見ているわけねえだろが。俺はセラ一筋だ」

俺は即答でそう返す。女性に興味がないわけではないが、少なからず黒歌だけはない。

「そんな事言っちゃって、溜まっているんじゃないかにや〜?」

「……………黒歌。あと一時間でいい、黙ってるろ」

俺と黒歌が口論していると、丹紋さんがそれを制してきた。

「お二人とも、お静かに」

「はい」

「はいにや〜!」

俺と黒歌は一旦口論を止め、丹紋さんの方に向き直った。

「それでは、メタトロン殿。あれを配ってくれ」

「はい。皆さん、これを」

メタトロンが俺たちに渡してきたのは、いわゆる手裏剣というやつだ。

俺は手裏剣をつまみ上げて様々な角度から見してみる。こんな十字みたいな刃物を投げるのか、こんなものがまっすぐ飛ぶのか?

疑問符を浮かべながら手裏剣を見ていると丹紋さんが言う。

「まあ、簡単なところで、手裏剣はこうですな」

丹紋さんは手に持った手裏剣を手際よく投げっていく!その全てが人型の急所に

突き刺さった！

おおっ！さすがはニンジャ！

それは別として、俺もこれをやるのか。うまくできるのか？投げナイフならまだしも、今回は手裏剣。……まあ、やるだけやってやるか！

俺がやけくそで覚悟を決めたところで丹紋さんが言った。

「では、早速あなた方にも——」

丹紋さんがそう言いかけたところで建物の外から盛大な爆発音が聞こえてきた！

いきなりなんだよ！やってやろうと思ってたのによ！

俺は心の中で愚痴りながら黒歌たちと目を見合わせる。二人とも疑問符を浮かべていたが、丹紋さんとメタトロンは覚えがあるようで嘆息していた。

とりあえず、警戒しながら廃墟の外に出ると、

「「グーッ！」」

謎の声を出している全身黒タイツの戦闘員が俺たちの目に飛び込んできた！

な、なんだあの格好は！新手のニンジャか！？

俺がさらに警戒心を高めていると、その戦闘員たちが左右にはけて道を開けた。その道を堂々と歩いてくるのは……。

「グハハハハハッ！NINJAよ、今日こそはグリーイイイイイゴリーイイイイの軍

門に降ってもらうぞっ！」

聞き覚えのある豪快な笑い声が辺りに響き渡った。今、俺たちの眼前には、鎧、兜、マントということ出で立ちの男性がいる。

眼帯にヒゲ、手には斧と盾。ちよつと昔の特撮ヒーロー番組の悪役を思わせる格好をしたイツサーとは別ベクトルの変態だ。

こいつに会うのは、運動会以来か……………。

「グハハハハハッ！ ついでに貴様の命ももらい受けよう、N I N J A 天使メタトロオオオオオンッ！」

「アルマロスッ！ また貴殿か！」

メタトロロンも刀を抜き放って変態——堕天使幹部アルマロスと対峙する。

「当然だ！ 貴様は我が偉大なる組織グレイイイイイイゴリイイイイイと因縁の者ッ！ 今日こそ決着をつけようぞッ！」

そういうえば、二人はノアの箱船、もつと言うと大洪水の頃からの因縁があるんだっとな。

すると、不意に俺とアルマロスの目があってしまった。

「アイエエエエエ！ ロイがN I N J A! ? N I N J A ナンデ! ?」

謎のテンションで無駄に驚いてくれた。なんだ、『アイエエエエエ』って。

アルマロスは一度咳払いをして俺に言ってきた。

「ぬうつ！ 貴様もNINJAを狙っておるのだな!？」

いや、全くの偶然でこうなってるんだけどな。黒歌を追いかけてきたら、こんな変な奴と出会うとは、今日は厄日だ。

「別に俺は——」

「まあ、良い！ 今度こそ、NINJAは我々がいたでいて行くぞおおおおおつ！」

俺が説明をしようとする、それを遮るように斧を俺たちに向けながらそう宣言してくるアルマロス。

絶対に面倒なことになるよな……。本当に帰りたいたい……。

やる気なしの俺を無視してアルマロスは続ける。

「今宵は我がグリゴリ自慢の怪人を連れてきたぞ！」

アルマロスはそう言う指を鳴らした。

まだ何か来るのかよ、面倒だな。てか、こんなやつが連れてくる怪人とか、どんなのが来るんだ？

俺が面倒くさいオーラを隠そうともせずにポケットしているとアルマロスながらも叫んだ。

「まずはこいつだッ！ いでよ、雪男怪人ッ！」

雪男つて、あの白いゴリラ的なあれか？

俺がそんなものを想像しているなか現れたのは――。

「フツ。まさか、この僕がNINJAの相手とは、まったくエレガントではないね」

ニヒルな笑みを浮かべた、Gの刻印がある白いタキシードを着た白髪のイケメンだった。

そうだ、忘れてた。雪男つてやたらとイケメンが多いんだよな。イツセーが見たら血涙を流しながら殺気を放つはずだ。

「さらにもう一体はこれだっ！我がグリゴリの改造手術を受けて誕生した、河童怪人だあああっ！」

今度は河童かよ！雪男と来たら、雪女じゃないのか!?

俺が少しだけガツクリしていると、現れたのは――。

緑色の肌、頭部の皿、鳥のようなくちばし、亀のような甲羅を背負ったまさに河童と呼ばれる生物だった！

少しイメージと違うのは両サイドが尖ったサングラスをかけているくらいか。それと、腹部にGの刻印がある。

「フツ。まさか、この俺がこの町に帰ってくる何てな」

自嘲的に笑う河童。今の発言を聞いた限りではこの町の出身か？

「河童、おまえ何者だ？」

俺が素直に訊いてみると河童が答える。

「俺はサラマンダー・富田！前はこの町の外れにある池に住んでいた者さ！そういうあなたは？」

河童の富田か。——ん？サラマンダーって炎の妖精だったような。……細かい事を気にしたら負けか。

俺は思考を切り上げ、簡単に名乗る。

「俺か？俺はロイ・グレモリーだ」

俺が名乗ると、富田は少し驚いた表情になった。

「グレモリー？あなた、リアスさんの家族かい？」

「ん？ああ。リアスは俺の妹だ」

俺が答えると、富田はさらに訊いてくる。

「あなたの知り合いに『小猫』という子は？」

「………いるが、それがどうした？」

「あの子に、『好きなヒト』はできましたか？」

優しい声音で訊いてくる富田。なんか、小猫に思い入れがあるようだな。だが、それは俺が言うことじゃない。

俺はわざとらしく肩をすくめ、富田に言う。

「それは本人から聞け。俺は何も言わないさ」

「そうか、そうだよな。俺としたことが、当たり前前のことを言われちゃった」

俺たちはそこまで言うと同時に構える。

「あなたに恨みはないが、グリゴリ怪人としてあなたを倒します！」

「俺もおまえに恨みはないが、やらせてもらう！」

俺がようやくやる気になったところで、俺たちの間に割り込んでくる影がひとつ。

「ストツプにゃん♪」

黒歌だ。いきなり俺の前に立って構えを取った。

「なんか、白音の関係者みたいだから私がやるわ」

「ほう、噂に聞いた小猫ちゃんのお姉さんか。誰が相手だろうと、俺は容赦はしないぜ

？」

富田はそう返すと黒歌に対して構える。

「ある程度の事情は知っているようね。これ以上は無粋にや。習いたての忍法をお見舞

いするにゃー！」

「おもしろいっ！」

黒歌はそう言うのと印を結び、富田も飛び出していく！

だ……………？

俺が首をかしげているなか、視線の先でも、

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

アルマロスがメタトロンに一方的に攻撃されていた。あのよくわからんやられ声はどうにかならないのか？

俺が手持ちぶさたにしていると、前方に転移魔方陣が出現した。暇をしていたので見ると、紋様はルシファアのものだった。——うん？ルシファア!?

俺は目を見開いて驚きながらも出てくる相手を待っていると、そこから出現したのは

「NINJAがここにいと情報を得たぞ！」

「アイエエエエエエ!?! ニーサン!?! ニーサンナンデ!?!」

サタンレッドの格好をしたニーサンだった！なぜここに！てか、どこでニンジャの情報を知った!?

俺が間抜けな顔と声を出して驚愕していると、その後方からも魔方陣が出現し、そこ

から義姉さんが現れた！義姉さんはソツコーで兄さんを取り押さえる！

「ほら、帰りますよ。というよりもいい加減にしないと怒るわよ、サーゼクス！」

「待ってくれ、グレイフィア！冥界にもNINJAが必要なのだ！だから、頼——」

なにかを言い残す前に強制送還された兄さん。一瞬の出来事だったな。

俺はため息を吐きながら周りを見渡す。みんな、死闘を演じているが楽しそうだ。たぶんだが、こいつらニンジャが好きなんだな。ある意味、意見がひとつで嬉しいよ。

一連の出来事を見てため息をつく丹紋さん。

「ふむ……。天使やら堕天使やら悪魔やら、忍者もけつたいですな」

「なんか、申し訳ない」

そんな丹紋さんに俺は謝る。

だが、丹紋さんは優しく笑みながら言う。

「いえいえ、では、修行を続けますよ？」

「はい」

「我也やる」

俺、ルフエイ、オーフィスの三人は黒歌対富田。メタトロン対アルマロスの激闘を置き去りにして忍術の続きを行うことになった。

後日。俺が自室でのんびりしていると、

「お兄様！これはどういうことですか！」

リアスが乱暴にドアを開け放って部屋に入ってきた。

「こんな時間にどうした？」

俺が訊くとリアスは悪魔の雑誌を見せてきた。

俺がそれを受け取って読み進めていくと、あるページに目が止まる。そこには丹紋さんが載っており、長々とインタビューされていた。

「丹紋さんじゃねえか！あのヒト、冥界でも活動を始めたのか！なにになに——」

俺が勝手に興奮しながら黙って読み進めていると、リアスが詰め寄りながら言う。俺が黙る。

「ここに書いてあります！『ロイ・グレモリーくん忍術を教えたのですが、飲み込みが良くて教えていたこちらでも面白かったです』と。お兄様、N I N J Aの弟子だったのですか!？」

あー、なるほど。そういうことな。

俺は苦笑しながらリアスに言う。

「一回だけ修行したな。なかなか面白かったぞ」

俺がそう返すと、リアスは体をプルプルと震わせながら怒鳴る。

「どうして私も誘ってくれなかったのですか!？」

「だって、リアスたち寝てたし……」

「それは、そうですか……」

俺の返しに言葉が詰まるリアス。結構ショックだったようだ。

俺はそんなリアスにフォローを入れる。

「ま、何か機会があったら紹介してやるよ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

リアスは満面の笑みを浮かべて礼をすると部屋から出ていった。

やれやれ、ニンジャに関わると面倒事になるな。まあ、退屈はしなかったけどな。

こうして、様々なヒトを巻き込んだ忍術騒動はとりあえずの幕引きとなったのだ
た。

課外授業のデイウォーカー

life 01 次の舞台へ

リアスたちがルーマニアに発ち、ユーグリットの襲撃からしばらく経ったある日。

俺——ロイを含めたオカ研メンバー、ソーナと真羅、シスター・グリゼルダと見慣れない金髪にグリーンの瞳の青年——ジョーカー・デュリオが兵藤宅のVIPルームに一堂に会していた。

吸血鬼のカーミラ派の本拠地にいるアザゼルから直通の回線が開かれている。

魔方陣の映像越しに訊く。

「それで、アザゼル。何があった？」

『ああ、どうやらツエペシユ側で大きな動きが、簡単に言うところ「クーデター」が起きたようだ。リアスと木場はそれに巻き込まれた可能性が高い、というよりも拘束されているだろう。こつちから連絡がつかん』

それを聞いた朱乃が小型の連絡用魔方陣を展開するが繋がらないのかすぐに切っていた。

それにしても——、

「クーデター、か……」

「あうう……そ、そんな……」

俺の眩くと同時にギヤスパーは顔を強張らせていた。

俺はギヤスパーを気にしつつも話を続ける。

「それで……どういう状況だ？」

『カーミラ側の幹部によると、ツエペシユ側のトップが入れ替わった、とのことだ』

それを聞いてこの場にいる全員が顔を強張らせた。

トップが入れ替わった、それはつまり……、

「クーデターは終わったのか。はつきり言って早すぎるだろ？まだクーデター中ならわかるが……」

俺が本心駄々もれになっているがアザゼルは続ける。

『現在ツエペシユ側の大元の王は首都から退避したとのことだ』

「事が鮮やかすぎるな。やはり『禍カオス・ブリゲードの団』の介入があつたのか？」

滅んだはずの邪龍を蘇らせたのは生命の理ことわりに触れることのできる聖杯の可能性が高いと報告が来ていた。

現在『禍カオス・ブリゲードの団』と吸血鬼は繋がっているというのが各勢力の公式見解になっている。

『ああ、だろうな。どの勢力も一枚岩じゃない。聖杯の噂を聞きつけた『禍カオス・ブリゲードの団』の連

中は、現政権に不満のある連中と繋がり、じわじわと侵食していったんだろう」
 「それに気づいても救援は頼まなかったんだろ？」

俺が答えがわかりきっている質問をする。

『そうだ。自分たちを至高と考え、誇りとやらを重んじた結果だろう。死んでも助けを求めたくもなかった。それとも聖杯を隠そうとした。そんなところだな。というわけで俺はツエペシユの本拠地に向かう予定だ。だから——』

「『おまえたちも来い』、だろ？」

俺がアザゼルの言葉を先読みで言うのとアザゼルは嘆息しながら頷いた。

『その通りだ、ロイ。結果的にいつも通りになるんだな。だが、戦力をこちらに集中も出来ないからな………』

「だったら、いつも通りに俺とイツセーたち、イリナでいいだろ。こつちにはジョーカー

と『刃 狗』がいれば十分だ」

『刃 狗』スラッシュ・ドッグてのは神滅具、『黒刃の狗神』ロンギヌス ケイニス・リユカオンの持ち主だ。色々と縁があつてアザゼルと出会

い、今は裏方として俺たちを支えてくれてくれているらしい。

俺の提案にアザゼルは驚いた表情になっていた。

俺は首をかしげながら訊く。

「どうした？」

『ロイ、おまえ、動けるのか?』

「それなら問題ない。ユীগリットを捕らえるか殺せって任務が下ったからな」

俺の返しにアザゼルは再び嘆息し、愚痴るように言う。

『上の連中は、まだおまえが「禍の団」カオス・リゲートと繋がっている、もしくは任務時の虚偽報告をしたと疑っているのか』

「そんなとこだ。俺の元部下からも話を効いているそうだ。まあ、細かいところはセラたちが頑張ってくれたらしいがな。後の報告とかが面倒だが、俺は動けるぞ」

『ならいいが、先に言っておくとこつちにはヴァーリチームがいる。その事は頭に入れておいてくれ』

アザゼルの一言に俺はある疑問が生まれた。

何でヴァーリが吸血鬼の王国にいる。聖杯がらみか、それとも復活した邪龍を追っていたのか。最近ルフェイや黒歌を見ないと思つたら、そういうわけが……。

俺が考え込んでいるとソーナが手を挙げた。

「いい機会です。ロイ様、うちの新人二人を連れていってもらえないでしょうか?」

ソーナの眷属の新人二人か、あの襲撃の後に紹介されたな。

深い紫色の髪に金色の瞳が特徴のハーフ死神グリーム・リッパ（父が最上級死神のオルクスだそうだ）であるベンニアと、灰色の髪を伸ばして目ともが見えない大柄の男性のルー・ガ

ルー（俺を含めた面々からは『ルガール』と呼ばれている）だそうだ。

前者が『騎士』、後者が『戦車』に該当する。

俺がそれを思い出しながら領き、アザゼルに言う。

「ベンニアとルガールだったな。悪魔としての経験を積ませたいのか？いつもなら止めるところだが、ルガールの力は特に必要になってきそうだしな。アザゼル、二人追加だ」

『わかった。それとレイヴェル、お前は残れ。客分のお前を危険地帯に連れてこさせるわけにはいかない。わかってくれるな？』

アザゼルの言葉にレイヴェルは頷いた。

「はい。こちらはお任せください」

聞き分けのいい子で助かるな。文句の一つ言ってくると思つたが…………。

『詳しくはお前らがこつちに来てから話す。準備が出来たらすぐに来てくれカーミラ側に受け入れ用の魔方陣を展開する。状況開始だ』

『はい！』

「了解だ」

全員が応じてそれぞれの準備に動き出した。

あれから一時間ほどが経ち出発する時間となった。集合場所はもちろん兵藤宅の転移魔方陣だ。

今回は直接カーミラの領土に行けるようにアザゼルが交渉してくれたらしく、すぐに向こうに行くことができる。今回だけの特例として許されたそうだ。

ちなみに、俺たちは防寒着を来ている。向こうはこつち以上に寒いそうだからこれが正解だろう。

そして各々が最終確認を済ませたことを確認すると朱乃が転移魔方陣を操作する。その瞬間、魔方陣の光が強まり、俺たちを包み込んでいった。

転移の光が止み視界が回復すると、そこは広い空間だった。

「よう、来たか」

聞き覚えのある声に反応して振り向くと、そこにはいつもの様子のアザゼルがいた。「さつそくで悪いが移動するぞ。詳しい話は車内です。エルメンヒルデ、案内を頼む」アザゼルがそう言うのと、傍らから姿を現したのは先日会談した吸血鬼の少女だった。「かしこまりました。皆様、よくぞお越しになられました。手前どもはギヤスパ・ヴラディだけでよかったです……」

俺たちを邪魔者のように見てくるエルメンヒルデ。相変わらず言葉の刺がすごいな。多分、みんなも同じような事を考えてると思うぞ。

エルメンヒルデはそんな俺たちの心中を知らずに話を進める。

「到着早々で申し訳ございませんけれど、車まで案内いたしましょう」

その言葉を言い終えると同時に転移してきた部屋を抜け、階段を上がっていく。どうやら、ここは地下だったようま。にしても寒いな。防寒着を着てるのにスゲエ寒いぞ。階段を上りきり石造りの建物内を歩いていき、ついに外に出た。

——深夜の街に雪化粧。いいものだな。

だいたい同じ季節を巡る日本とルーマニアだが、こっちはもう雪が降っているのか。

……この寒さなら納得だけだな。

俺たちの前にいるエルメンヒルデはそんな寒さでも息が白くない。純血の吸血鬼だからだろう。その証拠にハーフのギヤスパーは、

「さ、寒いですう……」

ぶるぶると震えて白い息を吐いていた。吸血鬼のハーフと純血の差って分かりやすいな。

「わあ……」

アーシアが感嘆の息を漏らしていた。彼女の視線の先には、城下町とそれの中央にある立派な城だ。教会育ちのアーシアにはこんな景色も新鮮なんだろうな。

そんな城下町をよく見たら近代的な建物もいくつかあることがわかる。ある程度外の文化も取り入れてはいるようだ。

アーシアとは対象的にゼノヴィアは冷静に呟いた。

「あれが吸血鬼の本部か。昔は尻尾も掴めなかつたのに、悪魔になってから来られるなんてね」

それだけ各勢力の関係図が変貌したってことだな。

俺たちは領地の端にある監視塔に転移していたようだ。

俺たちはそれだけ確認すると塔を抜け出て、用意されていたワゴン車に分かれて乗り

込む。運転はアザゼルと俺だ。細かい話は魔方陣を介して運転しながら聞く。
「……………悪魔の趣味はわかりませんわ」

エルメンヒルデをはじめとした吸血鬼がルガールを見て、一様に嫌悪と畏怖の表情をしていた。ルガールの種族のせいだな。

そんなことがあつたが俺たちは出発する。

同時に魔方陣の映像越しにアザゼルが説明を始める。

『情報によると今回のクーデターでツエペシユの新しいトップはヴァレリー・ツエペシユになった』

「男尊のツエペシユのトップがハーフの女性になったのか……………。どうせ『禍カオス・ブリゲードの団』がそう仕組んだんだろうが」

俺の発言にアザゼルが返す。

『まあ、そうだろうな。「禍カオス・ブリゲードの団」と手を組んでいるのはツエペシユの反政府グループだ。現政権への不満と聖杯の恩恵に目が眩み、テロリストの言葉に乗っかちまったんだろうさ。カーミラに攻撃したのもそいつらだ』

「それで、ツエペシユのほうからカーミラに援助要請があつたのか。カーミラ的にもツエペシユの王に貸しを作るのは願つたり叶つたりだらうな」

『ああ、後は通信の通りだ。流石に俺だけじゃ出来ることも限られてくるからな。リア

またちを迎えに行くのも含めて、お前たちを召喚したってことだ』

アザゼルはそう言うど髪をかきながら続ける。

『どうにも荒事になりそうだ。まずは話し合いをするつもりだが、戦闘することも頭に入れておいてくれ。カーミラ側もクーデター沈静に参戦するっていうからな。報復の相手がわかつたんで、あいつらもやる気だ。すでにカーミラのエージェントが配置され始めている。俺たちはそのど真ん中に飛び込むことになる。最悪の場合は中央突破しなければならぬ。……あの野郎が関わっているのなら、ろくでもないことになる』

『あの野郎』。アザゼルが珍しく憎々しげに言ったそれが余計に不安を掻き立ててくる。

イツセーが息を吐いてからアザゼルに言う。

『この手のイベントには毎回遭遇しているんで、覚悟してきていますよ』

それを聞いて、映像に映る向こうの車内のメンバーは頷いた。

「頼もしいやら、申し訳ないやら。なんか複雑だな、アザゼル」

『だな。ま、俺たちはリアスたちと合流してあわよくばヴァレリーを連れ出せばいい。

あとは吸血鬼が勝手にやってくれるだろう』

『ヴァレリーは僕が……ッ！』

それを聞いたギヤスパーは決意を新たにしていたが、俺は映像越しにそんなギヤス

パーに言う。

「ギヤスパー、あんまり気負うなよ。先輩や先生を頼れ」

『ロイ先生……。はい！』

会った当初はいつも怯えていたあいつがここまで男を見せてくれるとは、嬉しいもんだな。

俺がリアスの眷属の成長に喜んでいるなか、車はカーミラとツエペシユの領土を繋ぐ橋を抜け、さらに進んでいくのだった。

l i f e 0 2 謁見

あれから車で二時間ほど移動し、今度はカーミラ側が用意してくれていたゴンドラでツエペシユ側に移動する。

そのゴンドラの中で最初はイリナとゼノヴィアが低レベルの口喧嘩をしていたが、イツセーの一言で話題が変わった。

「ロイ先生、シトリー出資の学校が建てられるって知っていましたか？」

「イツセー、逆に知らないと思うか？」

イツセーの問いに俺は答えてため息を吐いた。前にセラから聞かされたが、耳にタコができるとはあの事だろう。

現在、ソーナの夢である『誰でも通えるレーティングゲームの学校』の第一号が建てられているそうなのだ。

俺の返しにイツセーは少し同情的な顔になる。

「それもそうですね……」

「そういえばロスヴァイセ。確か教師にならないかってオフアーされたんだろ？どうするんだ？」

聞いた話だが、ロスヴァイセはその学校の教師にならないかと誘われたそうなのだ。ロスヴァイセは俺の問いに難しそうに眉を寄せた。

「まだ考え中です。断る理由もなかったものですから。教員になって、ヒトにものを教えることが楽しいと思えているのも事実ですからね。今度、その学校が建ったら見学に行こうと思っています。そのためにも今回は穏便に済めばいいのですが」

俺も見学に行きたいが、今はなかなか面倒な立場だからな。行けるかは微妙なところか。さっさと任務を終わらせて絶対に見に行くがな……………。

「皆で無事に帰還できたら、今度その学校を見に行きましようか」

イツセーがそう言うとロスヴァイセも笑顔で頷いていた。

こういう話題にすぐさま反応して来そうなアザゼルは、

「なるほど、では冥府は——」

《まあ、クソ親父とハーデス様の考えることなんざ——》

「——で、ルガールのほうもそちらの業界はどうなんだ？」

「……………今回の騒ぎは静観を決め込んだようだ」

「そうか。確かにおまえさんの——」

小難しい会話をしていた。気になるが、このタイミングで入っていくと話が詰まってしまうそうだからやめておこう。

その後もゴンドラ内で各々がリラックスを心掛ける。緊張のし過ぎては体に悪いからな。

もうすぐ到着というときにアザゼルが話しかけてくる。

「ロイ、いいか」

「何だ？」

「向こうに到着したらルガルとベンニアには別行動をさせる。町の偵察と脱出ルー
トの確保をしてもらう予定だ」

アザゼルはそう言うといッサーに目を向けた。

俺は頷き、アザゼルに返す。

「わかった。いッサーには俺からも言っておく」

「ああ、頼んだ」

正直言うといッサーに別行動させるのは心配だが、ここは二人を信じるとしよう。万が一の時に備えておかないとな。

ゴンドラに揺られること三十分。

山をいくつか越えて、ついにツエペシユ側のゴンドラ乗り場に到着した。

到着早々俺たちの前に吸血鬼が数名現れる。そいつらは俺たちを確認すると訊いてきた。

「アザゼル元総督とロイ・グレモリー様、そしてグレモリー眷属の皆様ですね？我らはツエペシユ派の者です」

俺たちは無言で頷く。それを確認した吸血鬼は紳士的に招き入れる姿勢で述べた。

「こちらへどうぞ。リアス・グレモリー様はツエペシユ本城でお待ちです」

クーデター後なのに随分あっさり通してくれるんだな。

それにしても、リアスたちはツエペシユ本城にいるのか……。ヴラディ家から移されたんだろうな。

俺がそんなことを考えながら早速移動し始める。

ゴンドラ乗り場を出るとそこには豪華な装飾が施された馬車が止まっていた。これで城まで直行って事だろう。

するとイツサーがキョロキョロし始めた。

俺はすぐさまイツサーに近づいて小声で話す。

「ルガールとベンニーアは別行動だ。いざつてときの脱出ルートの確保に行つて貰つてる」

イツセーはそれを聞くと驚きながらも無言で小さく頷いた。

まあ、音もなく仲間二人が消えてたら困惑するよな。ゴンドラの中で話しておけば良かったな。

二人がいない事に吸血鬼たちも気づいたようで戸惑いの声上がり、上に報告していたが、客分である俺たちの方が優先されたらしく、渋々馬車に乗るように促してきた。

俺たちも頷き合い、馬車に乗り込んでいく。

ようやく目的地か。遠かったな……………。

とりあえずリアスたちは無事だろうか？ルガールとベンニーアのことも心配だ。

俺はそんなことを考えながら馬車に揺られるのだった。

城までの道中窓から町の様子を見ていたが、クーデターがあつたとは思えないほど静かで住民たちの様子も普通だった。

アザゼルが言う。

「おそらく、住民に知られないよう最低限の行動でクーデターを成功させたんだろう。となるとだ。謀反を起こした連中は内政の深くまで話をつけていたと見える。聖杯を餌にしたんだろうな」

住民に知られないようにクーデターを起こし、成功させたのか……。今回の戦いは今までとは違う意味で面倒そうだな。

俺がそんなことを考えているうちに馬車は町を抜けて城に入ろうとしていた。

巨大な正門の壁が上に上がり、馬車が入城を果たす。

城の大きさはグレモリーのものと同じぐらいにでかい。石造りの古めかしい感じであり、独特のオーラを城全体から醸し出していた。

馬車の降り口で下車し、俺たちは城の中を進んでいく。

そして明らかに玉座に続くという感じの両開きと思われる扉だ。そしてこういう扉のお約束のように見事なレリーフが刻まれている。

「()でしばしお待ち下さい」

案内をしてくれた執事が告げる。

それから数分ほど扉の前で待つ俺たちの耳に、たかが数日ぶりなのに懐かしく感じる声が聞こえてきた。

「イツセー！皆！」

その声に反応して全員がその声の主の方を見るとそこにはメイドに付き添われたりアスとその後方に木場がいた。

誰よりも先にイツセーが近づきいていった。

「リアス！無事でしたか？」

イツセーの質問にリアスは笑顔で頷いていた。とりあえず無事なようでも何よりだ。

「なんとかね。……クーデターのことは察知したようね。アザゼル」

アザゼルは頷き、そして訊く。

「何か起こるだろうなと思ってこいつらを召喚して、ここまで連れてきた。文句はないだろ？」

「そうね。私もどうにかして呼ぼうと思っていたから。ただ、この城に軟禁されていて、動けない状況だったのよ。けど、王にお招きいただいた割に今の今まで謁見はなかったわ。そうこうしているうちに先程『お客様が来たからついてきてほしい』と言われて……ここに来たというわけ」

クーデター中もリアスたちに何かあったってわけでもなさそうだ。

俺は木場に確認する。

「木場、何もなかったみたいだな」

「はい。拍子抜けするほどでした。僕にも部長にも火の粉はかかりませんでしたよ。こ

ちらに手を出すほど暇ではなかったのかもしれない。今までは、ですが」

木場はそう言う。扉の方を見る。

客分全員とまとめて謁見する気なのだな。

扉の両脇にいた古い鎧に剣という、王に仕える騎士のような格好をした兵士たちが俺たちを確認すると言う。

「では、新たな王への謁見を——」

そう言う。と彼らは扉を開けていく。重々しい音を響かせながら、扉が開かれた。

アザゼルが最初に入り、少し遅れて俺が、そのあとにリアスたちの順番で入室する。

広い室内。下に敷かれた絨毯は真っ赤で、扉のレリーフと同じデザインの刺繍が金色に輝いていた。

絨毯の先の一段高いところに玉座が置かれていた。

その玉座に座っているのは若い女性。その玉座から少し離れた位置に見た目は若い男性も列席している。男性の方はまったく生気を感じない。つまりは純血の吸血鬼というわけだ。

この広い室内には今確認した二人以外にも兵士数名と中性の貴族を思わせる服を着た者も数名、つまり部屋の大さに比べてここにいてる人数は少ない。

こういうときは色んなやつが集まって、俺たちを囲んで色々と言ってくる。

思ったんだがな。ここまで少ないと静かでないな。

と言つても、ここにいるのはクーデターに参加して立場が約束された連中だろうがな。

『禍の団』の連中が協力したんだろう。他の勢力と距離をおく吸血鬼の根城だからこそ、邪魔が入らずにここまで出来たんだな。

俺はそこまで考えると、玉座の目の前だったので姿勢を直す。

玉座に座っているのは砂色の色合いが強いブロンドを一本に束ねた女性だ。シンプルなデザインのドレスに身を包み、やさしそうな微笑みを浮かべていた。

年はリアスと同じか少し上のように見える。彼女からは血の通った美しさを感じた。彼女がハーフだからこそなのだろう。いつも通りなら第一印象はここで終わっているのだが、今回だけは少し切なさを感じた。

彼女の赤い瞳は虚ろで輝きを失っていたからだ。

ただそれだけのことなのに彼女から感じる儂さがそうさせたのだと思う。そんな彼女が挨拶をくれる。

「ごきげんよう、皆様。私はヴァレリー・ツエペシユと申します」

ヴァレリーはそう言いながら微笑むが先程感じた儂さをより強くさせるだけだ。

「あ、えーと、一応ツエペシユの現当主——王様をすることになりました。以後お見知

りおきを」

声音はとても軽やかなものだ。だが視線は臆気で俺たちの誰にも正確に捉えていない。ただ一人だけ、見知ったヒトにだけ視線を定める。

「ギヤスパー、大きくなつたわね」

ギヤスパーに話しかけるが当のギヤスパーは悲壮な表情を浮かべていたが、無理矢理笑顔を作りヴァレリーに返す。

「ヴァレリー……。会いたかつたよ」

「私もよ。とても会いたかつたわ。もう少し近くに寄つてちょうだい」

ギヤスパーはそう言われてヴァレリーに近づいていく。それを兵士も側近も止めようとしなかつた。

ヴァレリーはギヤスパーを抱き寄せると一言漏らす。

「……元氣そうで良かつた」

「うん。悪魔になつちやつたけど、僕は元氣だよ」

「ええ、そのことは聞いてるわ。あちらでは大変お世話になつたそうね」

「うん。友達や先輩もできたんだ。もう一人じゃないよ」

ギヤスパーの視線がイツセーたちの方に向けられる。ヴァレリーもイツセーたちを見て微笑んだ。

「まあ……ギヤスパーのお友達なのですね。……あら」

ヴァレリーは突然誰もいない方向を見る。

すると聞いたこともない言語で誰かに話しかけていた。

悪魔の能力の一つである言語翻訳が機能しない。つまり、どの言葉でもない何かを彼女は話しているということだ。アザゼルが聖杯関係のことでそんなことを言っていたな。

俺がそんなことを考えていると突然ヴァレリーが顔を輝かせた。

「そう、そうよね。私もそう思うわ。え？……けれど、それはまだ……」

「……。本当？そうよねえ……」

誰もいない空間と話続けるヴァレリーにギヤスパーは戸惑いの表情となっていた。

アザゼルが呟く。

「……おまえたち、あれを真つ正面から捉えるな。聖杯に引つ張られる。教会出身のやつは視線を外しておけ」

それを即理解したアーシア、ゼノヴィア、イリナは視線を床に移していた。

俺がアザゼルに確認をとる。

「あれが聖杯を使いすぎた時に出るっていう副作用とか言うやつか？」

「そういうことだ。詳しくは後で説明する」

パンパンと手を鳴らされた。音の発生源はヴァレリーの近くにいた見た目は若い男性吸血鬼だ。

「ヴァレリーその方々とばかり話しては失礼ですよ？きちんと王として振る舞わなければなりません」

「そうでした」

ヴァレリーは笑顔で相づちを打ち続ける。

「うふふ、ごめんなさい、皆さん。でも、私が女王様である以上、平和な吸血鬼の社会が作れそうなの。楽しむよね。ギヤスパーもここに住めるわ。誰もあなたや私を虐めることなんてしないもの」

今の発言はどう考えても本心からではなく、いいように騙されているとわかるものだった。

彼女は心も神セイクリッド・ギア器もクーデターに利用されたんだろう。

「……………ヴァレリー……………」

ギヤスパーは彼女を見てただただ涙を流していた。

アザゼルが若い男性吸血鬼を睨んだ。

「よくもまあここまで仕組んだものだ。それを俺たち堂々と見せるたあ趣味が悪すぎ

だ。お前さん、この娘を使って何がしたい？見たところ今回の首謀者はお前さんなんだろう？」

それを聞いた男性吸血鬼は醜悪な笑みを浮かべた。

「首謀者といえば、そうなのでしようね。おつとご挨拶がまだでした。私はツエペシユ王家、王位継承第五位マリウス・ツエペシユと申します。暫定政府の宰相兼セイクリッド・ギア神器研究最高顧問を任されております。どちらかというと後者のほうが本職なのですが……叔父上に頼まれてましてね。一時的に宰相となっております。いちおう、ヴァレリーの兄でして、ツエペシユの将来を憂いたかわいい妹が王としてどう吸血鬼の世界を変えていくのか、そばで見守りたいのですよ」

こいつがヴァレリー・ツエペシユの兄、ね。今の発言は間違いなく嘘だろうから、本心は、本当の目的は何だ？やはり弱点のない完璧な生物になりたいのか？

「……こつちがカーミラ側と接触しているのは知っているな？ここまで招き入れて良かったのか？」

俺の質問にマリウスは肩をすくめてから答える。

「新政府は相手が誰であろうと友好的に交渉をしていくというスローガンを……。半分冗談ですが。正直な話、私は政治など、興味はあまりありません。それはクーデターに乗った私の同士に任せるだけです。ただ、今回はヴァレリー女王があなた方に会

いたいとおつしやつたものですし、私もあなた方に興味があったのですよ。何せ協力者からよくお噂を伺っているものですから」

そこまで聞くと次はアザゼルが質問をする。

「それはこの際置いておく。主犯のお前さんに訊こう。なぜクーデターを起こした？あの野郎の立案か？」

核心に迫ろうとするアザゼルの発言に吸血鬼たちがどよめくが、マリウスだけは平然として答えた。

「私は聖杯が好き勝手にできる環境を整えているだけです。ヴァレリーの聖杯は興味の尽きない代物でして、色々試させているのですよ。本当にそれだけでしてね。なので邪魔者には退陣してもらいました。あの野郎とは、あの方を指しているのでしょうか……今回の行動は我々が起こしたことです」

……こんな野郎のために国の内部が滅茶苦茶になってるのか。

ヴァレリーはそれを聞いても笑顔を崩さなかった。完全に彼女の心まで操っているようだな……………。

今の発言で貴族と思われる吸血鬼たちもざわついた。

「マリウス殿下、それは今ここで話すべきことではありませんぞ！」

「……ここは仮にも謁見の間です！ ぎ、暫定の宰相といえど、それ以上のことは謹んでい

ただきたい！」

「相手はグリゴリの元総督と魔王の弟君、グレモリー家の次期当主なのですから、今の発言を総意と取られてしまうと我々の立場がありませぬ！」

回りの連中が慌ててたしなめようとしているが当のマリウスは、

「これは失敬。早く宰相の任を解いてもらいたいぐらいです」

と言つて苦笑いをすると共に皮肉を言つていた。

そんな態度の男一人に誰も強く言つていかない。この状況を見るに、やはり主犯はあいつ……。

イツセーたちも嫌悪の感情をマリウスに向けていた。

「……ヴァレリー・ツェペシユは解放できないというのね？」

リアスがそう訊くが、マリウスはただ一言、

「当然です」

と返すだけだった。

「話し合いは無駄だよ、リアス部長」

今まで見たことのない程冷たい表情のゼノヴィアがデュランダルを取り出そうとしていた。

「ゼノヴィアやめろ。相手は『仮にも』宰相だ」

俺が止めようと発言すると共に若干の皮肉を挟んでおく。

マリウスはそんな俺たちを見て平然と笑みを浮かべるだけだった。

「怖いですね。では、ボディガードをご紹介しましょうか。私が強気になれる要因のひとつをね」

マリウスはそう言うのと指を鳴らす。その瞬間俺たちを悪寒が襲った！

『——ッ！』

巨大な何かに、それこそ二天龍との戦いで感じたような圧倒的なまでのプレッシャーが放たれたのだ。

俺たち全員がそのプレッシャーを放つ存在に視線を向ける。

そこには黒いコートを着た長身の男性が一人、柱に背を預けていた。

金と黒が入り乱れた髪、右目は金で左目が黒のオッドアイが特徴の男性だ。

その男は俺たちを一瞥したあと視線を床に落とした。

その瞬間、俺たちを襲ったプレッシャーを感じなくなる。

「明らかに一人だけ次元が違うな。感じ的には吸血鬼じゃない。ドラゴンか何かだろ、あれ……」

俺の言葉に返すやっはいない。それほどまでに今のプレッシャーが強烈だったのだ。

俺たちが何も言うことが出来ないなかマリウスが再度パンパンと手を鳴らした。

「今日はここまでにしましょうか。お部屋ををご用意しています。皆様もしばしご滞在ください。それとヴァンダイ家の当主様もこの城の地下室に滞在しておりますのでお会いになるとよろしいでしょう」

謁見はその言葉と共に終わりを迎え、俺たちは退室を余儀なくされた。

マリウス・ツエペシュ……。あいつが今回の首謀者でヤバイ奴ってのはわかった。

黒ずくめの男を視線に捉えつつ、俺たちは王の間を後にしたのだった――。

l i f e 0 3 黒幕

謁見が強制終了となり、俺たちはあちらが用意したという部屋に案内されていた。さっきのやり取りから全員が機嫌を悪そうにしている。

アザゼルが言う。

「……吸血鬼とは思えない異端の男だな」

それに俺とリアスが頷き、リアスが言う。

「誇りや血筋より己の欲望を満たすために動いている吸血鬼なんてそういないわ」

俺も頷き、リアスに続く。

「だからこそやりにくい。ああいう奴つてのは種族の掟とかを全力で無視してくるからな。クーデターもそこから始まったんだろう。それに乗ったのがあの部屋にいた連中つてわけだ。マリウスは自分の欲望のために、マリウスに乗った連中は聖杯による強化、現政府への不満解消の二つができた。そこにあの黒づくめの男だ。マリウスは政府内部へのパイプと強力な武力の両方を持っていたわけだ。そりゃクーデターも成功するわな」

リアスと俺の意見にアザゼルが続く。

「ロイの言う通りだが、それらの切っ掛けは『奴』なんだろう……。鎖国している国だからこそ可能な腐った貴族とテロリストどもの宴だったわけだ」

鎖国中の国のお家騒動にテロリストが関わり、それに首を突っ込んだ俺たちか。

……ますます面倒だな。

廊下を進みながらイツセーが訊いてくる。

「本来のツエペシユの当主——王様は今どこにいるんですか？」

俺も知らない情報だったためアザゼルとリアスの方に視線を送る。

するとリアスが頷き、答えてくれた。

「瀕死の重症を負い、現在はこの領土から退避しているそうよ」

瀕死の重症、か。まあ、あんな化け物ボディガードがいればそうなるよな。俺でも

あんな奴がいきなり来たら、何かない限り逃げを第一に考えるぞ。

「ツエペシユの王側はカーミラ以外に助けを呼んでいないんですか？」

イツセーが再び訊く。今度はアザゼルが嘆くように息を吐いてから答える。

「ああ、呼んでいないだろう。『禍カオス・ブリゲードの団』が裏で関わっている以上、他の勢力も介入し

ようと根強く交渉しているようだが、今のところそれは叶っていない。俺たちはあくま

で『特例』で迎え入れられたわけだ」

相変わらずバカな連中だな。ここまでなったらプライドもクソもないと思うのだが。

俺も小さくため息を吐き、話題を変える。

「ところでアザゼル。ヴァレリーのあの言葉はやっぱりあれか？」

俺の質問にアザゼルは目元を厳しくしながら答えた。

「ああ、彼女はあの世の亡者どもと話してしまっていた」

「……やはりか」

俺が納得して返すとイツセーがアザゼルに訊く。

「亡者って地獄の……冥府とか冥界に行ったヒトたちの魂ですか？」

今の会話だけだとそう思うだろうが、確か少し違うんだつたな。

アザゼルが続ける。

「人間のものもあれば、それ以外の異形のものも……混在し過ぎて元が何なのか、今が
どいう状態なのか、それすらもわからない存在と話していたんだよ」

「よ、よくわからないんですけど……」

「そのよくわからないものと話していたと思えばいい。……聖杯を酷使したせいで相当
な精神汚染が進んでいるな」

精神汚染か。表情と言動からして、

「ヤバイってのは見ればわかるがな」

「私もすぐにわかったわ。ヴァレリー・ツエペシユは心、感情を曖昧なものにしている、

と」

俺とリアスが言う。

「……ヴァレリーにいったい何が……」

ギヤスパーも表情を曇らせていた。一番ショックを受けているのはギヤスパーだろう。ヴァレリーを見たときからずっと泣きそうな顔をしていた。

泣くのを我慢出来るようになったあたり成長したんだな。会ったばかりの頃だったら泣いていただろう。

アザゼルが言う。

「……聖杯だ。生命の理に触れ、命とは、魂とはどういうものか、セイクリッド・ギア神 器を使えばそれだけその『作り』を強制的に知ることになる。命の情報量つてのは果てしなく膨大だ。聖杯を使うたびにその情報を取り込んでしまうのさ。自身の心に、魂にな。……無数の他者の意識が流れ込み、浸食してきてみる。……壊れて当然だ」

魂の浸食つてのはイツセーが『ジャガーノート・ドラゴ覇 龍』を使った時に聞こえた前任者の残留思念みたいなもんか。その前任者の残留思念が力を暴走させて現所有者の命を削るみたいなことを前に聞いたぞ。

ヴァレリーはそれよりも強烈なものに強制的に何度も触れさせられてしまっているというわけか。

「アザゼル、今の彼女は……………」

「普通の状態じゃない。亡者が話しかけてくるのもその特性の一端だ。奴らと楽しげに話してしまっている時点で精神汚染は致命的な領域に突入している。マリウスはヴァレリーに相当無茶をさせたな。邪龍の復活なんて大規模で大胆かつ乱用も極まりない」
致命的な領域か……………。聖杯を使ってグレンデルとかを復活させたんだとしたら、マリウスはヴァレリーに相当な無茶をさせたんだろう。それで心が壊れちゃった……………。
沈む空気の中、俺はアザゼルに訊く。

「それで……………助ける方法は？」

今回はそのヴァレリーを助けるためにここまで来たんだ。訊いておかなくてはいざというときに何も出来ない。

俺の質問にアザゼルは顎に手をやり思慮している様子だった。

「そうだな。まずは聖杯の活動自体を——」

アザゼルはそこまで言うとう口をつぐんだ。同時に俺も廊下の先に視線を送る。

アザゼルも前から歩いてくる誰かに気づいたようだ。

銀髪の年齢は四十代ほどの男性だ。そして兄さんと色だけが違う魔王の衣装をしていた。

「おはよっ……いつあ、奇遇だな♪」

そいつもこちらに気づき、無邪気な笑みを浮かべながら話しかけてきた。

「……………やっぱり、テメエなのか！」

アザゼルはそいつを睨みつけていたが、俺はそいつを見た瞬間に体に衝撃が走った！
だってこいつは……………ッ！

「んほほ！おつ久しぶり♪アザゼルのおっちゃん、それに『紅髪クリムゾンの斬り裂リッパき魔』ことロイちゃん！二人とも戦争以来かな？」

俺は軽く固まっていたがリアスの一言で復活する。

「……………お兄様、誰なのですか？」

そうか、リアスは知らないんだったな。

俺は動揺を隠しながらリアスに言う。

「……………リゼヴィムって言えばわかるな？いやグレモリーであれば知っていて当然のはずだ」

「ッ!!……………ウソ……………でしょ？」

リアスはそれを聞いて声を震わせるほど驚いていた。俺とリアス、アザゼル以外は疑問符を浮かべている状態だ。

そこでアザゼルが紹介を始める。

「……………いつのクソツたれな顔は忘れられねえよ。なあ、『リリン』、いや、リゼヴィム・

『ッ!?!』

アザゼルの一言が本日何度目かの驚愕が全員を襲う。

当たり前と言えそうなのだがな、こいつがユーグリットが言っていた新たなボスってことか。

問題はこいつが憎悪で動いているかどうかなのだが――。

「兄さんとアジユカ様に並ぶ悪魔――超越者の一人」

超越者つてのはかつての戦争で、他の悪魔とは次元が違う強さの者の呼び名だ。その超越者が当時の兄さん、サーゼクス・グレモリーとアジユカ・アスタロト様、そして目の前の男、リゼヴィム・リヴァン・ルシファアの三名だ。

アザゼルが忌々しそうに言う。

「こいつが姿をくらましてから、サーゼクスとアジユカが悪魔を引っ張ってきた。ま、こいつは前魔王一派の中心の一角だった。平和、種の存続を願うサーゼクスどもとは話が合う道理はねえよ」

「悪魔の内戦中に姿を消した男が、何故今頃になって……何をするつもりだ?」

俺の問いかけにリゼヴィムは愉快そうに笑った。

「うひゃひゃひゃ、ま、やりたいことができたから帰って来たっつーわけよ。元気にしてた? 昔の君はもつとこう……イカれてた感じで好きだったのに」

イカれてたつてところは血をかぶって笑ったせいなので否定しにくいがいちいちムカつく野郎だ。

リゼヴィムが愉快そうに笑みながら訊いてくる。

「とにかくお兄ちゃんは元気かな？」

「……………兄さんに何か用か？」

「ないわけじゃねーな。同じルシファー名乗ってんだしい。でも、どうでもいいっちゃーどうでもいいんだけどね。そのうち会うだろうからよろしく言つといてよ。」

「……………ッ！」

今の言葉で俺とリアスは眉間にシワを寄せた。

「ま、シャルバくんや他の前魔王の血族みたいに怨恨とかで動いているわけじゃねえさ。悪魔の政治なんざ、サーゼクスくんたちで十分だろうし？俺は俺で別のやりたいことを、この組織を使つて実行したいだけなんだよ。」

アザゼルはこめかみに血管を浮き出させながら憎々しげに言う。

「……………ここでおまえをぶん殴つてそれを邪魔をするつてもアリなんだが……………ここは中立の国だからな。勝手に手を出すわけにはいかないか。どうせ表面上正体を偽つてVIP扱いを受けているんだろう？」

アザゼルの問いにリゼヴィムはいっそう不快な笑いを発す。

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。そうそう、その通り。俺はマリウスくんの研究と革命の出資者でね。今の暫定政権にとつては国賓扱いなのですよ。ここでやってもいいよ？もちろん負けるつもりもねえけど？」

リゼヴィムの言葉を受けたからなのか、奴の背後から黒いドレスを着た小さな女の子が現れた。

いつからリゼヴィムの後ろにいたんだ？

俺がそんな疑問を考えると一つ気づいたことがある。

——オーフィスに似ている。

俺がそれに気がついた瞬間、リゼヴィムが自慢するように話始める。

「奪ったオーフィスの力を使って生み出した我が組織のマスコットガール……リリスちゃんだ。よろしくね♪俺のママンの名前をつけてみたのよ。いいでしょー」

やはりそうか、あの少女が奪われたオーフィスの力……まさかあんな姿になっているとは。

「……………」

無言で無表情、見ているこっちが困るタイプの女の子だな。

リゼヴィムがリリスと呼ばれた女の子の頭を撫でながら言う。

「この子、ちっこいけど、腐ってもオーフィスちゃんなんでめっちゃ強いよ？僕ちゃんの

専属ボディガードでもあるの。ユーグリットが留守の時はこの子が守ってくれま
す！おじさん、感激！」

少女から感じる圧倒的なプレッシャー。さっきの黒ずくめの男同様、戦いたくないタ
イプのプレッシャーだ。

この城、悪魔といい堕天使といいドラゴンといい、色々と集まりすぎだろ。

「んじや、俺はマリウスくんに話があるのでこの辺で失礼させてもらおうよ？ここでは平
和に過ごしましょうね。ここはヴァンパイアくんのお家なのですよ」

リゼヴィムはそう言いながら俺たちの横を通り過ぎていく。

俺たちがそれを見ているしかないなか、アザゼルが言う。

「リゼヴィム、ヴァーリがおまえを狙っているぞ」

「そーいやー、俺たちの孫息子くんをグリゴリが育ててくれたんだったな」

リゼヴィムが振り返り、アザゼルに訊く。

「強くなつたん？まあ、あいつの父親よりは強かつたけどさ」

「いづれ、お前の首も取れるさ」

それを聞いてもリゼヴィムは笑みを崩さず、むしろ余計に楽しそうな表情になつてい
た。

「わーお、おじいちゃんとしてはむせび泣きそうだわ」

そう言うのと今度はイツセーに視線を移す。

「グレートレッドとオーフィスの力を有する唯一の存在……。ねえ、うち来ない？」
「行くわけねえだろ！」

リゼヴィムの言葉に即答で返すイツセー。それでもリゼヴィムは笑みを崩さず、俺に視線を向けてきた。

「じゃあ、ロイちゃんは何？昔から結構気になって——」
「行くわけねえだろが……………」

俺は殺気を込めてリゼヴィムを睨む。

リゼヴィムはそれを意に返さず、愉快そうに笑うだけだ。

「あーら、そりゃ残念♪カーミラと結託してクーデター返しをするならいつでもいいぜえ♪期待してっから」

最後までふざけた口調のリゼヴィム。

——と、盛大な破砕音が廊下に響き渡る。

アザゼルが壁を拳で破壊していた。こいつにしては珍しく、我慢の限界だったよう
だ。

「……………ヴァーリ、おまえの気持ちちが理解できて仕方ないよ」

この城、本当に化け物だらけだな……………。

そんなことがあつたが、俺たちは用意された部屋に移動し、そのまま地下室にいます。このギヤスパアの父親に会いに行くことになったのだつた。

l i f e 0 4 お茶会

部屋に案内されてからしばらくすると、リアスとギヤスパーはヴァレリーが面会した
いとこのことで連れていかれ、アザゼルはマリウスの息がかかった上役の吸血鬼に連れて
いかれた。

リアスとギヤスパーは純粹に話し相手として、アザゼルは神セイクリッド・ギア 器 研究の第一人者と
してだろう。

で、部屋で待機していたそれ以外のメンバーは、ようやくギヤスパーの父親との面会
が許されたので話を聞きに行くことになったわけだ。

この城のメイドの案内でギヤスパーの父親がいるという地下室に続く階段を下りて
いく。

しばらく下ったあとで広い空間に出た。まるで留置場のように複数の扉がある。そ
の空間の中でメイドは迷うことなく一つの扉の前に移動した。

「ここがヴァレリー家当主様がおられる客室でございます」

客室というにはあまりにかけ離れた場所だが、牢屋とかよりはマシか。

メイドが扉をノックをすると「お客様がお見えです」と中にいる報告し、施錠された

扉を開きいて中に入るように促してくる。

俺たちは頷きあい入室する。

部屋の中は外と比べると随分と豪華で、天井にはシャンデリア、家具も全てが高級そうだ。

これは牢屋というよりは超高級ホテルの一室だな。

中のソファに座る人物が俺たちを確認すると立ち上がった。

金髪の三十代男性だ。父親らしく、なんとなくだがギヤスパーに面影がある。

俺と朱乃が一步前に出て挨拶をする。

「はじめまして、ロイ・グレモリーです」

「私はリアス・グレモリー様の『女王』^{クイーン} 姫島朱乃と申します。彼らもリアス・グレモリー様の眷属ですわ」

リアスがいけないときは朱乃がリアス眷属のトップだ。朱乃は失礼のないように振る舞った。

男性は頷くとソファに座るように促してくれた。

「どうぞ、お座りください。……『アレ』いえ、ギヤスパーについて話をしに来たのですね？」

こちらの用件がわかっているのは助かるな。無駄な話をせずに済む。

俺と朱乃がソファに座り、イツセーたちがその後ろに並ぶように立つ。

男性は純血の吸血鬼らしく生気を感じさせない肌の色をして、光に照らされても影が出ていなかった。

その男性が口を開く。

「すでにリアス様とは話をしましてね。お互いに『アレ』の情報を交換しあいました。今後『アレ』の処遇を巡ってグレモリーとヴラディでどうしたらいいのか話し合いを進めるなかで私がこの城に召喚されました……：……：情けない話ですが、ここに幽閉されたわけですよ。こんなにも静かにクーデターが起こっていたとは想像もしていなかったものでしてね。私が幽閉されたことで、マリウス殿下側が息子にリアス様をこの城に連れてくるよう命じたようです」

話の内容の割には落ち着いた口調で、今の状況にたいして動揺している様子もない。逆に受け入れているようにさえ見える。

それにしても、

『アレ』、ですか……：……：」

俺はこのヒトはさつきからギヤスパーのことを『アレ』呼ばわりしているのが気になり訊いてみた。

「アレは……：ギヤスパーは悪魔として機能しているのですね。リアス様からそれを聞

き、正直驚きました」

「ギヤスパアの母親はやはり……………」

「ええ、すでに亡くなっております。アレを産んだ直後に」

「難産だったと？」

俺のそう質問した。出産は母子ともに負担がかかるものだ。実際に母さんがリアスを産むときは大変そうだった。

俺の質問を聞いたギヤスパアの父親は初めて表情を変えた。目元を細め、眉根を寄せた。

「……………いえ、ショック死です」

ショック死したのか……………。出産の時に何かあったってことか？

俺の疑問に答えるようにギヤスパアの父親は恐ろしげに話を続ける。

「彼女の腹から産まれたのは——禍々しいオーラに包まれた何か別のモノでした」

「何か…………？」

このヒトの言葉の意味がよく理解できてないが、一つだけ言えるのは……………このヒトが知っているギヤスパアと俺たちが知るギヤスパアでは決定的な違いがある。それだけだ。

父親は絞り出すように続ける。

「……………生まれるとき、恐ろしげなアレは……………人の形をしていなかったのです。黒くうごめく不気味な物体が腹から出てきた。形容しがたい何かが母体より生まれ出た。何かもわからないものが自分に宿っていた。アレの母親はそれを目の当たりにして精神に異常をきたし、そのまま死に至ったのです」

黒くうごめく何か……………。最近覚醒したギヤスパアの力も黒い闇だったな。生まれた時からあれを使えたが、使えなくなつた。じゃあ、なんで今になつて……………。

思考を巡らせるなか、父親は続ける。

「その場に居合わせた産婆を含めた数人が数日のうちに次々と変死しました。……………おそらく呪殺、でしょうね」

「まさか産まれたてのギヤスパアが呪いを？」

「ええ、無意識のうちに振り撒いた呪いなのでしよう。産まれて数時間ののちに通常の赤ん坊の姿に変化したのですが、もうそのときには母親はショック死した後でした」

「ギヤスパークくんはそれを知っているのですか？」

ここまでの話を聞いて朱乃が訊くが、父親は首を横に振つた。

「いえ、知らせてはいません。いたずらに刺激したら真の姿に戻つてしまうかもしれないので……………。このことを知らない者たちは時間停止の神セイクリッド・ギア器を気味悪がっております

りましたが、真相を知るものはそんな時間停止よりもアレの正体のほうがよほど畏怖す

べきものでした」

父親はそこまで言うのと口元を隠し、重々しく言葉を発した。

「……グレモリーの皆さん、我々はアレを吸血鬼としてもハーフとしても認識できないのですよ……。異物の存在としか、識別できないのです。アレをハーフとして扱ったことも正しかったかどうかさえ、わからないのです。そして正体もわからぬまま私たちはアレを外部に出してしまっただけ……」

困惑の表情の父親に後ろにいたイツセーが言う。

「昔はあいつがどうだったのかわかりません。けど、今ギヤスパーは悪魔です。俺の後輩です。たとえ、体が闇に塗れようとも……仲間ですから」

小猫もイツセーに続く。

「……ギヤークンは大事な友達です。初めて出来た、同い年のお友達なんです」

いつもギヤスパーと一緒にいる小猫だからこそその言葉だな。

父親が一言訊く。

「あなた方はアレの正体をご覧になられたのでしょうか？」

ゲオルグを倒した時とグレンデルに隙を作ってくれたときだな。確かにあの時はヤバイと感じたが、あいつは大雪な仲間だからな。

俺たちは頷き、それを見た父親は苦笑していた。

「……やはり、リアス様の兄君とグレモリー眷属なのですな。リアス様にも同様のことを問い、同様のことを言われました」

『人間でもなく、吸血鬼でもないのなら、ギヤスパーは悪魔です。何せ、私がこの手で悪魔に転生させたのですから。正体がなんであれ、あの子はグレモリー眷属の悪魔ですわ』

リアスはそう告げたという。

リアス、お前は自慢の妹だよ……。

父親は小さく笑みを作りながらこう漏らす。

「我々には理解しがたい感情ですが、なるほど。あの力を見た上でそうおっしゃられるのなら、アレはあなた方に救われたと思っていいのでしょうか」

それからギヤスパーの父親との会話は続いたのだが、最終的にわかったのはヴラデイ家はギヤスパーを歓迎していないことだ。リアスとの会談もおそらくギヤスパーを正式にグレモリーに預けるためのものだろう。

つまり、ギヤスパーの居場所はここじゃないということだ。

会談を終えた俺たちが地下室から出たところでメイドが会釈して報告を告げる。

「兵藤一誠様、塔城小猫様、ロイ・グレモリー様、ヴァレリー陛下がお呼びでございます」
今度はイツセーと小猫、なぜか俺も呼ばれた。本当になんでだ……？

呼ばれた俺たちは視線を合わせて頷きあい、ヴァレリーの元へと向かうことになった。

俺たちが通されたのは城の上階の室内庭園だった。

一切窓がないが、人工的な明かりで色彩鮮やかな花と流れる水を照らしていた。

庭園の中央にはテーブルが置かれ、リアスとギヤスパー、ヴァレリーが座っていた。メイドに通された俺たちも空いた席についた。

横から感じる不気味なプレッシャー。王の間にいた黒ずくめの男——最強の邪龍
クレセント・サークル・ドラゴン
『三日月の暗黒龍』クロウ・クルワツハが壁に寄りかかりながらこちらに視線を送っていた。

「……………」

無言でこちらを一瞥すると目をつむった。

これだと、下手なことではできねえな……………。

俺が小さくため息を吐き、ヴァレリーに視線を送った。相変わらず目が虚ろであり、微笑を浮かべていた。

俺たちにも紅茶が出されると、ヴァレリーが言う。

「リアス様から日本での事を訊かせていただいたの。日本はとても平和な国だそうですね、兵藤一誠さん」

突然話題を振られたイツセーは一瞬迷うと、失礼がないようにと考えたのか敬語で返した。

「え、ええ。日本は美味しい料理や楽しいものがたくさんありますよ。ヴァレリー………陛下」

それを聞いたヴァレリーはクスクスとおかしそうに笑う。

「敬語はやめてください、兵藤一誠さん。リアス様にも普通に接してくれるようお願いしているのよ。ヴァレリーと呼んでくださいね」

「ええ、ぜひそうなさい、イツセー」

ヴァレリーにリアスも続き、イツセーは頷いた。

「はい、わかりました、ヴァレリー」

「うふふ、ありがとう」

儂げな笑みを浮かべるヴァレリー。彼女が今までどんな環境にいたのか、なんとなくだが察してしまえる………。

ヴァレリーは小猫にも問う。

「塔城小猫さんは美味しいお菓子をたくさん知っているのでしょう？日本にはどうい
うものがあるのかしら」

「えーと、私が好きなのは——」

そこから他愛もない会話が続いていった。

話の内容は何気ないものばかりだが、ヴァレリーにとっては何もかもが新鮮なよう
で、様々な質問が飛んでいた。

リアスたちの話を聞きながら、俺は手持ち無沙汰となっていた。ため息やあくびを嚙
み殺し、時々相づちを入れる。

——それにしても、何で俺は呼ばれたんだ？

俺がそう思った矢先、ヴァレリーが俺に話題を振ってくる。

「ロイ様、手を出してもらってもいいでしょうか？」

「あ、ああ」

いきなりの発言に俺は若干困惑しながらもヴァレリーに向かってゆっくりと右手を
突き出した。ヴァレリーは両手で俺の右手を包み込むと目を閉じる。

俺が疑問符を浮かべているとヴァレリーが口を開く。

「あなたには、何かが憑いているのかもしれない……」

ヴァレリーはそう言うのと目を開き、部屋の片隅に視線を送った。

「あのヒトたちのような……………」

「……………」

俺は冷や汗を流しながら無言で目を泳がせる。ヴァレリーが言っているのは亡者たちのことだ。それが、俺にも憑いている……………？

リアスたちも困惑するなか、ヴァレリーがその何かと話し始める。

「……………そうよね。やっぱり……………。でも……………」

俺が次の言葉を待っていることを察してか、ヴァレリーは再び俺たちにもわかる言葉を発する。

「過去を受け入れ、自分を見失わないことです。あなたが信じる皆様のためにも、あなたを信じる皆様のためにも……………」

『過去を受け入れ、自分を見失わない』、か。よくわからんが、肝に命じておこう。

俺は頷き、少し雑に礼を言う。

「ご忠告どうも。まあ、気をつけるさ」

「はい。お気をつけて」

ヴァレリーは笑みながら頷くと俺の手を離してくれた。

生命の理ことわりに触れることのできる聖杯。それを所有するヒトからの言葉。近いうちに何かありそうだな……………。

俺が手を引つ込めながらそんなことを思慮していると、突然ギヤスパーが話を戻した。

「ヴァレリー！今は忙しいかもしれないけど、お暇がいただけたら、ううん、僕が迎えに来るよ！そしたら、『二人で』日本を見て回ろう！」

いつになくハイテンションのギヤスパー。もしかして、

「妬いたか？」

俺がイタズラっぽく言うと、ギヤスパーが顔を赤くして狼狽えた。なんだ、凶星か。俺が笑みを崩さずに追撃をしてやろうとすると、

「ロイ先生、ギヤークくんは人生初のデートのお誘いをしているんです。冷やかし禁止です」

小猫からツツコミが入った。

「だがな、小猫。こう、年下が頑張っていると弄りたくなるんだよ」

「口、ロイ先生！そ、そんなことをするヒトだったんですかあっ?！」

ギヤスパーが顔を赤くしたまま言ってくる。ま、やっていて楽しいし、見ていて安心できるからな。

一連の流れを見ていたイツセーとリアスは苦笑し、ヴァレリーは――、

「うふふ。そうね、ギヤスパーと二人でお外を歩くのは楽しいでしょうね」

先ほどとはまったく違う、瞳を輝やかせた彼女本来の笑みを見せてくれた。ギヤスパ―なら、この娘は助けられるかもしれないな。

俺はギヤスパ―に視線を送り、ぼつちり目が合ったところでヴァレリーに視線を流した。

——もう一息だ、もつと押せ。

俺のちよつとした応援が伝わったのか、ギヤスパ―が口を開こうとすると——、「何か楽しいことでもあったかな」

くそムカつく第三者の声が庭園に響いた。俺も再び思考を真剣なものに戻す。

狙ったかのようなタイミングで入ってきたのはマリウスだった。作った微笑を隠そうともせず、こちらに歩み寄ってくる。

ヴァレリーの瞳に戻った輝きが失われ、彼女は不自然な笑みで答える。

「マリウスお兄様。皆様とお話をしていたのです」

マリウスは改めて俺たちにあいさつをしてくる。

「これはどうも。失礼します。ヴァレリーがお客様と面会されていると聞いて、顔だけでもと………」

「お忙しいなか、お気遣いありがとうございます。別の機会でもよろしかつたと思いますが………」

俺は軽く睨みつけながら敬語でマリウスに言うが、奴は苦笑しながら返してきた。

「いえいえ、お客様がお休みのところにお邪魔するというのは失礼だと思つた次第です。お邪魔でしたかな?」

俺はため息を吐き、マリウスに言う。

「だいたいは話し終えたところです。私たちもそろそろ戻ろうかと——」

「あ、あの!」

「何かな?」

俺の言葉を遮つたのはギヤスパード。何かを決意した表情でマリウスに言う。

「ヴァレリーを解放してもらえませんか? 僕ができることがあるのなら、なんでもします。だから! どうか、ヴァレリーをこれ以上、苦しめないで……」

よく言えたな、ギヤスパード。昔のこいつを知っている俺としては、最近の成長には目を見張るものがある。想像しにくいが、存外いい男になるかもしれないな。

マリウスはしばし考えると、不気味なほどニツコリと微笑んで答えた。

「わかりました。解放しましょう」

—— ツ! 乗りやがった! 聖杯を手放すつもりはないだろうに、ヴァレリーは解放するつてののか?! いや、『解放』つてことは、まさか……。

俺が一つの仮説を立てているなか、マリウスは続ける。

「ただし、少しだけ時間をください。女王がいきなり降りるのも体裁が悪いので、『準備』をしなければなりません」

マリウスの言った『準備』という言葉が妙に引つ掛かった。こいつが本当にヴァレリーを解放することはまずないだろう。ならば、一体何から『解放』するのか。………そんなもの、ほとんど決まっているじゃねえか………！

俺、リアス、イツセー、小猫が表情を険しくしているなか、それに気づいていないギヤスパーがマリウスに頭を下げた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「いいえ、いいのですよ。ふふふ」

意味深な笑みを浮かべるマリウス。その横で手を取り合って喜ぶギヤスパーとヴァレリー。

俺たちを襲う不吉な予感。できれば当たって欲しくないが、このまま行けば確実に――

マリウスの次の手を予想できても、クロウ・クルワツハがいる限り何もできない。せめてアザゼルが戻ってくれば………。

俺は何もできない歯がゆさを痛感しながら、ヴァレリーとのお茶会は終わりとなったのだった。

l i f e 0 5 視察

「存外普通だな。ハハハ」

俺——ロイは眼前に広がるヨーロッパ風の町並みを眺め、開口一番にそう言った。

俺、イツセー、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセの六人は深夜の城下町を『視察』という名目で下見に来ている。

あのお茶会から二日、文字通り何もなかった。暇でしよがなかつたので、俺が声をかけてふらつと町を見て回ることにしたのだ。

ここにいないメンバーが何をしているかというところ、アザゼルは一度も戻ってこず、どこにいてもはつきりしない。

リアスと朱乃はギヤスパアの父親と話をしに行き、木場はその二人の護衛。

ギヤスパアと小猫はヴァレリーと連日お茶会をしている。ヴァレリーの自由時間はかなり多く、暇をしているそうなのだ。

クーデター後なのにも関わらずそれとは、ここまで露骨な傀儡政治もなかなかないだろう。

マリウスと言っていた『解放』も気になるが、もう一つ大事なものが、ヴァレリーの

言葉――、

『過去を受け入れ、自分を見失わないことです。あなたが信じる皆様のためにも、あなたを信じる皆様のためにも……』

この二日色々と考えてみたが、『過去を受け入れる』つてのは、前世の俺を受け入れるつてことで、『自分を見失わない』つてのは今の俺を見失わないつて解釈でいいのか？ 前世と今じゃ、俺の在り方なんて真逆もいいところだぞ……。

俺は小さくため息を吐く。まあ、そのうち答えは出るか。……今はヴァレリーが優先だな。

俺が考え込んでいるうちに繁華街に到着していた。

店の看板を見る限り、服屋から雑貨屋まで色々ありそうだな。飲食店は……あるよ。うだ。人間から吸血鬼に変わった者は血以外の食事もできるそうだから、そこは気にしているのだろう。純血は、血以外は受け付けられないかもしれない。

ギヤスパーも基本的に普通の食事だ。血は苦手らしいが、時々輸血用の血液を飲んでいる。

それにしても……、

「浮いてるな、俺たち」

辺りを見渡しながらそう漏らす。行き交うヒトたちからの視線を感じて落ち着かな

い。

イリナが肩をすくめる。

「城下町とはいえ、閉鎖された世界ですからね。やっぱり、空気が違うんじゃないでしょうか？」

ゼノヴィアが頷く。

「そういえばそうだな。教会で育った者が任務先の外国で最初にぶつかるのは異文化の壁だ」

ゼノヴィアの言葉に俺は駒王町に潜入していた時のことを思い出し、苦笑した。

「確かに、おまえら浮いてたな。いや、町中にローブ姿つてのは嫌でも目立つか」

「……………」

俺の言葉に二人は驚きながら俺を見てくる。そういえば、話していなかったな。

俺は咳払いをして二人に言う。

「おまえら二人が町に来たとき、俺と部下の二人で尾行したんだ。増築される前のイツセー宅に入っついていたり、よくわからん絵画を買っていたよな？」

「……………」

二人は目を見合わせ、驚きを隠そうともしない。

俺はイツセーとアーシアに言う。

「その時にイツセーとアーシアの二人ともすれ違ったんだが、わかったか？」

「え!？」

「わ、わからなかったです」

イツセーは驚き、アーシアは小さく言葉を漏らす。ま、あの頃の二人は悪魔になってすぐだっただろうし、仕方ないだろう。

「ついでに、レストランでの密会も見ていた。楽しそうで何よりだったよ。なあ、イツセー。公衆の面前で、よくあんなことを……………」

「あ、あれも聞いていたんですか!?!どの辺りから!?!」

「匙の『ソーナ会長と——』の辺りから」

「最初っからじゃないですか……………!?!」

イツセーは赤面した顔を隠すように両手で覆った。考えてみれば、あの時は『バカ』としか思っていなかった奴が、リアスの恋人なんだよな。人生わからん。

俺たちがそんな話題で盛り上がって（ロスヴァイセだけついてこれずに困って）いると、ゼノヴィアが息を吐いた。

俺もその意味を察して肩をすくめると、ゼノヴィアが口を開いた。

「尾行の話をしたせいかな、余計に気になってしまうな」

ゼノヴィアの言った通り、俺たちはつけられている。正確には城から派遣された奴か

ら監視されているのだ。出てくるときに言われていたとはいえ、もつと気配を殺してもらいたい。

「ま、俺たちが何かしらのトラブルを起こさないか不安なんだろう」

俺はそう言った。城の連中からしてみれば、俺たちはこの国に起きていることを知っているわけだし、外でそれを暴露したら何があるかわからない。監視されて当然だろう。

俺は露店を興味深そうに見るロスヴァイセに気づく。先ほどまで完全に放置していたからやっているのかもしれない。

「ロスヴァイセまで来るとは思わなかったぞ。存外、おまえも暇だったか?」

俺が訊くと、ロスヴァイセは首を横に振って胸を張った。

「暇ではありません。私は教師であり、イツセーくんたちは生徒なんです。これは言わば引率ですよ。ロイ先生だけだと不安なので私も同行したんです」

と、いかにも仕事ですめなことを言った矢先、目を輝かせながら露店や店のショーウィンドウに視線を送っていた。

「……………むむむ、何やら面白そうなお店……………」

なんだかんだ言いながら、一番楽しんでるのはこいつかもな……………。

「やはり、デイスカウトショップはなさそうですね……………。吸血鬼の世界でも流行っ

てもいいと思うのですが……………」

先ほどのテンションから一転して、ロスヴァイセは嘆くように息を吐いた。

デイスカウトショップ——百均に命を懸けるロスヴァイセらしい感想だが、他に何かないのかよ……………」

本日何度目かのため息を吐き、俺も露店のほうに視線をやると、

「……………」

じーつと露店に出ている商品を見つめる少女の姿が映った。

イツセーたちも気づいたらしく驚いている。なんでこんなところにいるんだ？確か、リリスって名前だったな。

リリスは赤いドラゴンの形をしたアクセサリーを見ている様子だ。

「……………えーと、お嬢さん、どれが欲しいんですかな？」

店主も無言で商品を見つめるリリスに困っている様子を見ただ。

俺は周囲の気配を探るが、リゼヴィムの気配は感じられない。つまり、リリスは一人か。待てよ、確か——、

『ユーグリットが留守の時はこの子が守ってくれます！おじさん、感激！』

リゼヴィムはなんてことを言っていた。そのリリスがここにいるってことは、今リゼ

ヴァイムを護衛しているのは……………。

俺の脳裏に銀髪の男がよぎったが、今はあの店主を助けてやろう。なんか、かわいそうに思えてきた。

俺はイツセーたちに「待っててくれ」と伝えてリリースの横につくと、腰を落として視線を合わせる。

「これ、欲しいのか？」

リリースが見つめるアクセサリーを指差して訊く。同時にリリースも俺に気づいたように顔をじつと見てきた。

「……………」

無言で反応なし。確かに、これは対応に困るな。

俺は小さく息を吐き、店主に言う。

「これ貰おうか。いくらだ？つて、書いてあるな」

アクセサリーの横の値札の額を店主に払い、アクセサリーを購入。それをリリースに渡す。

「じゃあな」

俺はそう言い残して足早にその場を去ろうとする。これ以上接触したら、あとで何を言われるかわからん。

——が、突然俺の服が引つ張られた。見れば、リリースが俺の服をつかんでいた。

「……………なんだ」

俺が短く問うと、リリースは無表情で言う。

「……………おなか、へった」

目の前でパクパクと料理を口に運んでいくリリース。

俺たちはこの子を利用して仕方なく料理屋に入っていた。

テーブルに並ぶルーマニア料理。それだけでなく、多国籍な料理が楽しめるようだった。まあ、転生悪魔同様、吸血鬼になった人間も世界各地、様々などころにいるだろうからな。

時々見た目だけであまりうまくない料理もあるのだが、リリースはそれさえもたいらげている。
ていく。

「……………うまいのか？」

俺が苦笑混じりに訊く。

「……………わからない」

相変わらぬの無表情で答えるリリス。口元はソースやら食べかすやらで大変なことになってきているが……。

俺はため息を吐き、ハンカチで少し乱暴にそれを拭いてやる。

「もう少し綺麗に食べろ」

俺が言うが、リリスはそれをまったく聞いていないようでもまた口元を汚しながら食べていく。

俺がため息を吐くと料理の不味さにショックを受けた様子のゼノヴィアがフォークを置き、リリスを見ながら言う。

「これがオーフィスの分身だとはね。………色々とチャンスか？」

確かに、この子から情報を聞きたり、このまま連れ去るのなら今がチャンスだろう。だが――。

俺はリリスの口元を拭いてやり、肩をすくめる。

「やめとけ。今は監視されているし、こいつは対外的には『オーフィス』だ。こいつを連れ去ったら、何を言われるかわからん。こうやって食事をしているのもセーフなのかアウトなのか、微妙なところだ」

そもそも連れ去ろうとして抵抗されたら、俺たちは間違いなく死ぬ。こうやって自由にさせているのは、リリスが負けることはないとわかりきっているから。奴らにはそん

な余裕があるんだろう。

そんなわけで、食事程度にしてこれ以上は下手に関わらず、観察しているわけだ。食事が落ち着いたのか、フォークを置いたリリスは突然イツセーを嗅ぎ出した。

くんくんと鼻を動かし、イツセーの体を嗅いでいる。

シャワーには入っていたから臭いは大丈夫なはずなんだが、イツセーから変な臭いでもするの？

当のイツセーを含めた俺たちが疑問符を浮かべていると、リリスは言葉少なに言う。

「……………リリスとおなじにおいする」

無表情に首をかしげるリリス。なんとなくオーフィスに似ているな。

「オーフィスの臭いが移ったんじゃないか？よく膝に乗せてるだろ？」

「もしかしたら、そうかもしれない」

俺の問いにイツセーは頷く。

最近『イツセーの膝の上争奪戦』なるものが起こっており、小猫、レイヴェル、ギヤスパー、オーフィスがイツセーの膝の上に座ろうと必死なのだ。臭いというのも、その時に移ったのかもしれない。

俺たちが勝手に答えにたどり着こうとしていると、リリスはこう漏らした。

「……………なつかしいにおいもする。あかい、おおきくて、あかいドラゴンのにおい」

赤くて大きなドラゴンって、グレートレッドのことだよな。

今のイツセーの体はグレートレッドの体を借りて作られたものだ。臭いがしても不思議じゃない。だが、オーフィスほどグレートレッドを気にしている様子はなさそう
だ。

オーフィスの分身だからグレートレッドのことが気になるのか……………。

俺は少し驚きながらもリリスも口元を拭いてやる。

イツセーが気を取り直してリリスに自己紹介を始めた。

「俺は兵藤一誠だ。こっちはアーシア、そっちはゼノヴィア、イリナ、んで、ロスヴァイセさん」

「——で、俺はロイ・グレモリーだ。よろしく」

できるだけ笑顔で言った俺に続き、アーシアたちも「よろしく」と笑顔で対応した。

「……………ひょうどう、いつせい……………ひょうどう……………いつせい……………」

イツセーの名前を口にするリリス。若干覚えづらかったようだ。

「イツセーでいいよ」

それを察したイツセーがフレンドリーに言うが、

「……………」

リリスは無言になっしまった。オーフィスはここで『イツセー』って呼んだんだよな。

オフィスよりも感情の起伏が、いや、そもそも感情がないのかもしれない……。俺が悲哀の眼差しをリリースに向けるが、彼女はそれに気づくことなく、席を立ってしまった。

「帰るのか？」

俺が訊くと、リリースは振り返ることなく、

「……………リゼヴィム、まもる、リリースのやくめ」

と述べるだけだった。

俺たちは顔を合わせ、手早く食事を済ませる。

——感情もなく、与えられた仕事だけを淡々とこなす。

あそこまではないにしろ、前世の俺って仕事中はあんな感じだったのかもな……………。

俺がそんなことを思っているなか、俺たちは城への帰路についたのだった。

life 06 始まる儀式

外出していた俺たちが戻ってくると、アザゼルも戻ってきていたようで他のメンバーと話し込んでいた。

「帰って来たな。で、町はどうだった？」

アザゼルの質問に俺——ロイが答える。

「馬車の窓から見たまんまだったよ。静かなもんだ」

「だろうな」

するとギヤスパーが興奮気味にアザゼルに話しかける。

「アザゼル先生、聞いてください！マリウスさんが、ヴァレリーを『解放』してくれると約束してくれたんです！良かったですよ。これでヴァレリーを日本に連れていってあげられます！」

ギヤスパーの言葉を聞いてアザゼルは、俺たちのほうを見る。

「……話せ、何があった」

アザゼルが訊くとリアスが話始めた。

「面会の時、ギヤスパーがヴァレリーを解放するように頼んだの。そうしたら、マリウス

がそれを承諾したのよ………」

それを聞いたアザゼルは俺、リアス、朱乃、イツセーを部屋の隅に集める。

ギヤスパーに聞こえないようにするためだ。

集合するとアザゼルが小声で話し始める。

「わかつていると思うが、解放つてのは………」

「(はい、やつぱり、よくないことですよね……)」

イツセーの呟きにアザゼルは頷く。

「(抜き取るつもりだろう、聖杯を。墮天使の技術も流失している。抜き取る技術があつても何らかおかしくないさ。何せ奴らのバックは『禍の団』カオス・ブリゲードときているからな)」

抜き取る、か。

宿主セイクリッド・ギアから神器セイクリッドを抜き取ると宿主は確実に死ぬ。マリウスのいう解放つてのはつま

り――。

「(あの時マリウスは『解放』と言った。あれから二日、そろそろ『準備』つてやつが整った頃だろう。だったらすぐさま行動を起こすはずだ。どうにかしてギヤスパーに伝えて、ヴァレリーを連れて逃げるが得策だな。脱出ルートはベンニーアたちが用意してくれているんだからな)」

俺の意見に話を聞いていた全員が頷いた。

今からでも行動に移ればいいんだが……。

とりあえず話はここまですべてにして、部屋の隅から皆の元に戻り話題を変える。

「ところでアザゼルはここ二日間、何してたんだ？」

「……………ハーフヴァンパイアの神セイクリッド・ギア器について調べていたんだ。どうにも最近、セイクリッド・ギア神器を持って産まれてくるハーフが多いらしい。理由はわからんが」

ハーフの神セイクリッド・ギア器所有者か。ギヤスパークやヴァレリーもそうだが、少しずつ増えているのか。

アザゼルは続ける。

「問題は吸血鬼側の研究者が神セイクリッド・ギア器に関する知識に明るくないということだ。マリウスのように独学で調べ上げようとする者もいるようだが、それでもレベルが低い。そこで色々伝えてきた」

アザゼルの言葉に俺が問う。

「よかつたのか？この時期に下手に技術提供したら、それはそれで利用される。てか吸血鬼相手によくできたな。そういうの嫌いそうだが……………」

アザゼルは苦笑しながら返してくる。

「それもそうなんだが、俺と話した連中はクーデターが起こる前から研究に没頭していた。誇りうんぬんよりも俺の話に耳を傾けていたぞ。聖杯に関してはマリウスが当

たっていたようだからな、彼らには謀反の気はなかったんだろう。だから最低限の情報は提供した。この国も神セイクリッド・ギア器で危機に瀕しているからな」

「まさかここにも禁バランス・ブレイカー手の情報が？」

俺の質問にアザゼルは首を縦に振った。

「ああ、そういうことだ。逃げるために使うならまだしも、力に魅せられ暴走することが問題だ。むこうもそれがわかっていたらしく、それに関しても対策を教えてきた。グリゴリからの派遣も約束したよ。どこも似たような問題を抱えてるな」

それを聞いて全員が苦笑していた。

そこで俺が訊く。

「それでアザゼル。聖杯に関しては何かわかったか？」

アザゼルは悔しそうな表情で言う。

「いや、ダメだった。聖杯はマリウスが独占しているそうだ。少しでも調べられれば対処もしやすかったんだが……」

やっぱりダメだったか……。

するとイツセーが俺に質問してくる。

「冥界は……サーゼクス様のところは今回の件はどうなんですか？報告はされたんですよね」

俺はそれを聞いて思い出していた。

初めてだった。俺の連絡にセラが何も言わなかった。言えなかったのほう为正しいかもしれないが……………。

「一応はしたが、今のところ返信が来ていない。ただですらユーグリットのせいで混乱していたのに、間髪入れずに今度はリゼヴィムだ。あつちは大変なんだろう。兄さんもセラも身動き取れなくなっている。悪魔にとつて『ルシファー』はそれだけ特別な存在だ。リゼヴィムは前ルシファーの実際の息子だ。そいつが行動を起こした。それだけでまた旧魔王派が動き出してもおかしくない」

俺の言葉に全員がしんと静まりかえってしまった。

ようやく掴めそうな平和がまた遠ざかっていく。そんな感覚が俺にもある。こいつらもこいつらなりにそんな事を考えているんだろう……………。

すると突然俺たちを不思議な感覚——結界に包まれたときと同じ感覚が襲った。だが嫌な感じではない。見知ったオーラを感じられたからだ

すると天井にシトリーの魔方陣が浮かび、そこから逆さまに何者かが頭を出してき
た。

今まで別行動していたベンニーアだ。

《どうも。外とここを繋げるのに時間がかかりやしたが、何とかなってよかったですぜ》

俺たちとは別行動で頑張ってくれていたからな、この部屋に張ったのは直接ここに移動するためか。一応脱出ルートの確保はできたみたいだな。

そうこうしていると天井から何かが降ってくる。

「きゃっ！」

そんな可愛らしい声を出したのはエルメンヒルデだ。着地に失敗し尻餅をついていた。ルガルとベンニアは慣れた様子で着地していたが……。

着地に失敗して腰をさすっていたエルメンヒルデは俺たちが見ているのに気づき、すぐに立ち上がると咳払いをして改まった。

「ごきげんよう、皆様。お元気そうで何よりですわ」

いつかと同じように高圧的だが、さっきの出来事のせいで迫力に欠けると思ってしまった。

「エルメンヒルデ、この国に潜入していたのか」

俺の言葉にエルメンヒルデは頷く。

「当然です。町で城へのルートを工員と決めかねているときにそのベンニアさんと裏路地でお会いできたものですから。——お知らせすることがありますわ」

エルメンヒルデは改まると真剣な表情で伝えてきた。

「——間もなく、マリウス・ツエペシユ一派は聖杯を用いた一連の行動を最終段階に移

行すると密告がありました」

——ッ！

それを聞いてギヤスパアの顔が引きつる。

「最終段階……まさか」

驚くアザゼルにエルメンヒルデが言う。

「ヴァレリー・ツエペシユから聖杯を抜き出して、この国を完全に制圧するようです。聖杯の力を高めて、この城下町の住民すべてを作り替える計画を発動させるそうですわ」

聖杯の力で住民全員を作り替える？

俺はあごに手をやり、エルメンヒルデに問う。

「それで作り替えたとして、それはもう吸血鬼と呼べるのか？」

俺の言葉にエルメンヒルデは嫌悪の表情を浮かべていた。

「おぞましい限りです。我々は町に侵入しているカーミラの者はツエペシユ派の政府側と共に反政府派を打倒するつもりです」

なるほど、あつちも動くわけか。

ギヤスパアはこの事実を聞いて曇った表情となっていた。

「あの、聖杯を抜き出されたら、ヴァレリーは……」

「——死ぬ。奴らは最初から抜き取るつもりだったんだらう。所有者が死ねば次の宿

主のもとに行つてしまふ。そうならないようにするには、宿主が死ぬ前に抜き出して手元に置くしかない」

アザゼルからハツキリ告げられた言葉でギヤスパーは崩れ落ちた。

「……そ、そんな。マリウスさんは……」

ポロポロと涙をこぼすギヤスパーをリアスが優しく抱いた。

「あそこまでの卑劣漢もそうはいないものよね。——不愉快極まりないわ」

リアスの瞳は怒りの色に満ちていた。

「こうなつたら、力づくでヴァレリーを——」

イツセーが息巻いて言葉を発した瞬間、窓から強烈な光が差し込んだ。

吸血鬼の国に日が射すことはない。日光の光は吸血鬼にとつて猛毒だからだ。——

「これは、魔方阵の光！」

俺たちはすぐさま外の様子を見る。

巨大な光の壁が城を覆うように発生していた。

これはつまり——。

「先を越されたな。カーミラ側の動きが察知されているぞ」

「オリジナルの紋様が刻まれているが、神滅具ロンギヌスを抜き取るときに描くもので間違いない

！」

「だったら――」

『行動開始だ』と言おうとした矢先にエルメンヒルデに遮られる。

「吸血鬼の問題は吸血鬼が解決します。あなた方は脱出してください」

俺はその言葉に嘆息した。

「おまえな、この状況でも手を出すなど？」

「はい、そうです」

エルメンヒルデは強気に笑むが一度瞑目して言葉が続ける。

「――と言いたいのですが、我らが女王カーミラがあなた方の援助をお認めになられましたわ」

不満そうな声音だが、ここまで来たら認めるとかいう問題じゃないだろ…………。

「ま、俺たちは『ギヤスパアの補佐』をするだけだ。それでいいんだろ？」

どうせ俺たちが派手にやったら色々と言ってきそうだから表向きはそう言うておく。

それにエルメンヒルデは頷いた。

「…………その通りです。それではごきげんよう。お手数ですが、外と繋げてください」

ベンニアに転移を頼むエルメンヒルデにイツセーが訊く。

「案外、あつさり任せるんだな？」

「あなた方の実力は買っていますので」

それにエルメンヒルデは皮肉げに返した瞬間、転移魔方陣に『落ちていった』。

「きやあああ——」

魔方陣の先からも悲鳴が聞こえるんだが……。

俺が何とも言えない表情をして魔方陣を眺めているとベンニアは舌を出しながら言う。

《繋げた先もどつかの天井ですぜ》

「あんまりいじめんなよ？」

俺とベンニアのやり取りを他所に、ギヤスパーが強い瞳で訴える。

「——救います。僕、ヴァレリーを救いたい！皆さん！どうか、力を貸してください！」

あのギヤスパーがここまで男の顔をするとはな。まあ、答えは決まっている。

全員がそれに頷き、それぞれがギヤスパーに覚悟の言葉を言つてギヤスパーを鼓舞していくなか、俺、アザゼル、ロスヴァイセの年長組はこんなことを話していた。

「あれこそ若さだな。なあ、アザゼル？」

「ほんと、若いつていいねえ。なあ、ロスヴァイセ先生」

「私もお二人と比べると若いのですが、頑張らせていただきます！」

これで全員の意見がまとまったな。

俺は咳払いをして全員に言う。

「そんじや、オカルト研究部フルメンバー、生徒会新人二名、そして教師三名。出陣だ！俺たち悪魔の力、見せてやろうぜ！」

『おおっ！』

俺の言葉に全員が勢いよく返事をした。

さあ、出撃だ！

——と、息巻いたはいいが、作戦というものは大切だ。

俺たちは客室に結界を張り、作戦を確認していた。

例の魔方阵を堂々と展開した以上、城の中でも外でも臨戦態勢になっているはず。そしてこの部屋にも攻撃が飛んできてもおかしくないため、念のために結界を張ってから確認しているわけだ。

さつきから爆音とかが聞こえてはいるんだがな。

アザゼルはそんな爆音を気にせずに懐から一枚の図面を床に広げる。

「くすねてきた城の見取り図だ。これを見る。城の地下深くに広大な空間が存在する。階層は五つ。ツェペシュ派は大事な儀式を一番下の階層でおこなっていたようだ。聖杯の取り出しもおそらく……」

「そんで、そこに『禍カオス・ブリゲードの団』もいるわけか」

俺の言葉にアザゼルは頷く。

「クーデターに関与している上役やその近衛兵たちもここにいるだろう。んで、俺たちの目的地もこことなる」

アザゼルが見取り図の最下層にあたる場所を指差しながら言った。そして木場が見取り図に印をつけていく。

「この二日間で城に待機している兵士の活動範囲はだいたい把握しました。『いちおう』地下まで、できるだけ兵士と遭遇しないルートは用意できそうです。『いちおう』というのはこの非常事態で配置が変わっていると思うからです」

忙しいなか木場にやらせてしまったが、流石は木場だ。仕事が早い。

木場が不敵に笑みながら続けた。

「どちらにしても、地下で必然的に強敵と遭遇するのは僕たちということですね」
そういうことだな。いつもこんなだから慣れてるけどさ。

イツセーも同じことを思ったのか頭をポリポリかいていた。

「俺たち、こういうのばかりですね」

「そう言うなよイツセー。そのおかげで五段飛ばしぐらいで成長を遂げているわけなんだしよ」

「そ、それもそうですけど……」

俺とイツセーのやり取りがそこで終わったことを確認したアザゼルが告げる。

「今回の目的は聖杯の抜き出しを阻止すること。最悪の場合はマリウスを捕縛する。マリウス以外は………できるだけ生き残らせる。テロリストどもは問答無用で始末していい。それは俺が許す。危なくなったら、ヴァレリーと聖杯だけでも取り戻して逃げの一手だ」

もとよりそのつもりだ。あの黒ずくめの男——クロウ・クルワツハ、最強の邪龍を相手にするほどの余裕も戦力もない。

「ぼ、僕はヴァレリーを取り戻します!」

ギヤスパーが立ち上がり、気合いの一声。

それに全員がいい笑顔となった。

『もちろん!』

異口同音で意見が一致した。さて、やることもルートも決まった。あとは行動あるの

み！

全員が立ち上がり、客室を勢いよく飛び出した――。

l i f e 0 7 地下を目指して

俺たちはあれから特に戦闘をすることなく、無事に地下への階段を下りていた。

外の戦闘はなかなか激しいらしく、城の壁が所々破壊されていた。さすがに地下までは影響はないだろうから、それはあまり気にしなくてもいいだろう。

そんなことを思いつつ階段を下りていくと最初の階層に出る。

天井の光で奥まで見えるが、広い部屋の約半分を鎧を着込んだ吸血鬼の兵士たちで埋め尽くされていた。全員が手に得物を持ち、赤い双眸を輝かせている。

数はざっと見ても百は越えている。この部屋、なかなか広いな。大の男が百人入ってもまだ余裕あるぞ。

アザゼルが手元に光の槍を作り出しながら言う。

「さて、誰がいく？ 結構な数だ。これからのことを考えると無駄に消耗したくはない」「アザゼルは下で仕事があるからな、下がってろ」

俺が前に出て銃剣を取り出して構えるが、俺よりも前に出る影が二つ。

「……問題ない」

《ま、こいつはあつしらが》

ルガールとベンニアーだ。確かにこの二人なら十分かもな。

「それじゃ、任せる」

俺はそう言つて構えを解いて下がると、ベンニアーは異空間から身の丈以上に長い鎌を取り出した。

《それじゃ、いきやすぜ》

緊張感に欠ける声音でそう言いながらベンニアーは飛び出していく！

まるでアイススケートをするかのように床を滑り吸血鬼の一団に斬り込んでいく。

残像を残しながら高速で動き回る、グリム・リッパ死 神 特有の動きだ。

《ほらほら死神っ娘のお通りですぜ》

ベンニアーは軽い口調でさらに速度を上げていき、超高速で生じた残像で吸血鬼たちを翻弄、奴らはそれを見切れずに一方的に攻撃されている形だ。

木場がベンニアーの動きを見て感嘆の息を漏らす。

「……あの残像は目で捉えられるけど、超高速の末に生じたものだ。捕まえるのは容易くない動きだよ」

リアス自慢の『騎士』ナイトに言わせる辺りすごいんだろうな。俺にはしつかり見えている。

てか、見えなきや恥ずかしいわ。

《死にやすぜ……あつしの姿を見た者は皆死んじまいやすぜ》

ベンニアはそう言いながら吸血鬼を切り刻んでいくが、パツと見ただけでは怪我もしていないのに斬られた吸血鬼が次々と倒れていく。倒れてた吸血鬼はまるで魂を抜かれたように動かなくなつた。

「あれが噂に聞く死神デスサイズの鎌か。斬られても怪我はしないが魂を持っていかれる。死神の技量によつてその持つていける魂の量は変わるらしいが……。あの様子だとベンニアの実力はなかなかのもんだな」

いつぞやに俺たちを襲撃してきた死神ご一行も持つていたんだが誰も斬られなかつたからな。本当は怖い武器なんだよな。

「本人の資質と『騎士ナイト』の駒との相性が抜群だな。よく見とけよ」

俺はゼノヴィアを横目で見ながら言う。

ゼノヴィアは不服そうな顔をしていたが俺が言う前からすっかり見ていたがな。

俺がこんなことを言った理由は簡単だ。つい先日、木場から、

『どうにかしてゼノヴィアにテクニクニクの重要性を教えたいんです！力を貸してください！』

と、キャラにもなく必死に訴えられたからだ。

俺がそんなことを思っているなか、ルガルがコートを脱ぎ捨てた。シャツの上からでもわかるいい鍛え方をしていると思える肉厚の身体だ。

「……………いくぞう」

ルガールがそう一言呟くと彼の体の節々が脈動し、隆起していく。肉体の変化に服は耐えきれずにミチミチと音を立てて破れていった。

ルガールの口に鋭い牙が生えそろい、獣のように口全体が突き出していく。爪が鋭利に伸びていき、全身に灰色の体毛が出現していった。

オオオオオオオオオオ！

室内に獣の咆哮が響き渡る。今のを聞いた者はすぐさま彼が何なのか理解できるだろう。そうルガールは――、

「狼男だ?!」

「くっ！悪魔に転生した奴がいたというのか!」

吸血鬼たちが言う通り『狼男』だ。

ルガールは首をコキコキ鳴らしながら言う。

『俺もシトリの者としてやらせてもらおう』

そう言うなりルガールは高速で飛び出していき、吸血鬼を紙くずのように引き裂いていく。

「さすが、狼男だ。吸血鬼とやり慣れてる」

「ロイ先生、どういう意味ですか?」

俺の眩きにイツセーが質問してくる。

俺はルガールたちの動きから目を離さずにイツセーに返す。

「吸血鬼と狼男は古くから争い、お互いを天敵として認識してるからな。だからルガールは吸血鬼とやり慣れてるんだよ」

俺がそう言うのとイツセーは納得してくれたのか頷いた。

俺が説明しているなかでもルガールは一方的に吸血鬼を惨殺していく。逆に吸血鬼の攻撃はどれもダメージになっていない。

『ルガールの兄ちゃんはその狼男じゃありませんぜ』

ベンニーアが攻撃をしながら言う。

ベンニーアの言葉を合図にルガールの両腕に紋様が浮かび上がる。魔法の術式に似た紋様から炎が生まれルガールの腕を包み込んでいく。そして炎に包まれた腕で吸血鬼を殴りつけていく。

かすめただけで吸血鬼の体を燃え上がらせ、鎧を溶かしていった。

それを見て驚くイツセーにベンニーア吸血鬼を切り伏せながら解説を入れる。

《高名な魔女と、灰色の毛並みで有名な狼男一族の間に生まれたハイブリッドつーチートウルフガイですぜ》

『チートウルフガイ』って、その呼び方はどうなんだ？

俺はルガールに目を向けるが、戦闘に集中しているのか、それともベンニアの軽口に慣れているのか、特に気にする様子もなく吸血鬼を殴り倒していた。

「ソーナったら、いい『戦車』を見つけたものね」

リアスもルガールの特徴に舌を巻いていた。実際、ルガールのほうがベンニアより多く吸血鬼を殺しているようだ。

ルガールは狼男の俊敏性と『戦車』の圧倒的な火力。ベンニアは死グリム・リズバ神としての技量と『騎士』の速度。どちらも好相性のようだ。

まったく頼もしい限りだな。リアスとソーナがゲームをやったら、これは面白くなりそうだ。

俺がそう考えていると俺たちの後方、つまり上の階から複数の足音が聞こえてくる。全員がそれを察知していた。オーラの質からして、敵の増援だな。

『行け。ここは俺とベンニアに任せてもらう』

ルガールが吸血鬼を引き裂きながら言った。

「任せていいのね？」

リアスの言葉にベンニアが鎌を振りながら答える。

《そのために派遣された面がありますぞ。新人コンビは能力のお披露目と主役のための足止めが適任なんでさ》

『さっさと悪魔の力に慣れろということだろう。我が主はスパルタだ』

ベンニアとルガルはそう言いながら攻撃を繰り返していく。

俺たちは領きあい次の階段へと走り抜ける。

到着したら全員を先に行かせて俺は振り向き、吸血鬼を倒し続ける二人に言う。

「ここは任せだぞ！新入りコンビ！」

ベンニアとルガルは親指を立てる。

もう言葉はいらないな。

俺はそれを確認すると、リアスたちに追いつくために足早に階段を駆け下りた。

上の階をルガルとベンニアに任せて階段を下りていくなか、ゼノヴィアが呟く。

「……シトリの戦力増強は凄まじいな。ゲームをしたら次はかなり食い込まれるんじゃないか？」

俺が言う。

「ソーナのほうが眷属のバランスは上だな。火力重視じゃこれから大変だぞ。リアス」
リアスが息を吐いた。

「わかっています。私はソーナをなめたことなんて一度だつてありはしません」
それはそうだろうな。ソーナは兄の俺よりも長くリアスと一緒にいる。お互いのことは知りつくしているだろう。

階段を下りていくと再び開けた空間に出た。

第二階層にいたのは――。

「来た来た。主どのがおっしゃった通りだ」

「うむ、噂のグレモリー眷属」

「強化された我々にとってはいいい相手になりそうだ」

上の階の連中と比べると格上の雰囲気醸し出している吸血鬼三人。鎧などは身につけず、普通の衣服を着ている。

「クーデター派の上役の直属の戦士だろう。純血ではないだろうが、吸血鬼の特性を色濃く持つ戦士だ」

アザゼルが解説してくれる。

さて、いい加減働きますかね。

俺がそう思って前に出ていこうとすると、俺よりも速く二つの影が飛び出していっ

た。

「お先に」

「失礼します!」

ゼノヴィアとイリナのコンビだ。

二人は瞬時に敵との距離を詰め聖剣と量産聖魔剣を交錯させて吸血鬼の戦士に斬り込んでいく。

イリナが使っている量産聖魔剣は、木場が天界に提供した聖魔剣をもとに作られたものだ。量産と言っても聖魔剣なので十分強力だ。

「くっ! 聖剣か!」

吸血鬼もそれに気がついたのか、身体を霧に変えて攻撃を避ける。だが二人の攻撃はそれだけでは終わらず、そのまま聖なる波動も飛ばしていった。

後方にいた吸血鬼の男が身体をコウモリに変えてそれを避けた。

「伸びろっ!」

ゼノヴィアが二撃目とばかりにデュランダルの刀身を鞭状に変えて、吸血鬼を切りつけた。

「ぬわっ!」

その吸血鬼はそれを受けるがあまり効果が通っていないようだ。あれが聖杯による

強化の影響と見るべきだろう。

あのままやればそのうち倒せるだろうが、今は時間がない。

下にクロウ・クルワツハがいる以上、イツセーと龍ドラゴンスレイヤー殺しの魔剣——グラムを使える

木場は絶対に行かせなければならぬ。だったら——。

「俺が相手をする」と伝えるために口を開こうとすると、小猫が前に出た。

「……………」は私に任せてください」

小猫はそう言うなり目を閉じ、深く息をし始める。

なんだろう、さつきから出番を取られまくっている気が……………。

俺がみんなにバレないように小さくため息を吐いていると、小猫は続ける。

「……………姉様に教えてもらったものがお役に立ちそうです」

次第に小猫の体に淡い白い光が集まり始める。

その光が膨れ上がり大きくなっていき、何かを形作り始めた。

そして光が収まるとそこにいたのは……………黒歌に似た女性だった。

白い着物を着て、猫耳、二又の尻尾、つまり——。

「小猫、なんだそれ……………」

困惑気味の俺の質問に大きくなった小猫が答えた。

『近隣に存在する自然の気を集めて、自身の闘気と同調させることで強制的に成長させ

ました』

声は完全に小猫のもの。それはいいが、なるほど、強制的な成長か……………。

『白音モードと私は呼んでいます』

小猫が自身の胸に手をあてながら言った。

『白音モード』か。よく黒歌が呼ぶ昔の名前、いや、小猫の本名と言うべきものだな。

——にしても、色々な意味でデカイ。身長だけでなく、胸も……………。イツセーが喜びそうだ。てか、鼻の下が伸びている。

そんなイツセーを気にすることなく、小猫が右手を横にすると、その先に大きな車輪が出現した。

その車輪は白い炎に包まれていく。

『——火車。猫又が操る能力のひとつです』

『火車』か。確か死者をあの世に誘う妖怪、猫又のもうひとつの姿と言われていたな。死体から起き上がって吸血鬼になったあいつらには効果抜群だろう。

小猫は宙にいくつもの火車を出現させると、それを吸血鬼たちに放っていく！

火車は勢いよく回転しながら高速で吸血鬼たちに迫っていく！

「見知らぬ技だが、この程度！」

吸血鬼は不敵に笑いながら余裕で避けるが、火車は吸血鬼を追い続け、ついに捉えた

!

その瞬間、吸血鬼を白い炎が包み込む！

「う、うわあああ！」

絶叫をあげながらその吸血鬼は灰になった。一撃で灰になるって、恐ろしい技だな。

俺が関心しているなか、吸血鬼は驚愕の表情をあらわにした。

「な、なぜだ!?!我らは炎すら寄せ付けない体を手に入れたはずだ!?!」

弱点を克服したと思っただらこれだ。そりゃ驚くな。

小猫は無慈悲に言う。

『無駄です。その炎は死者を燃やし尽くすまで決して消えることはありません。仙術の応用により取り込んだ自然の気を浄化の力に変えていますから。弱点どころではありません。あなたたちの存在理由そのものから作り替えない限り、炎はあなたたちを燃やしていきます』

匙のヴリトラの炎の真逆ってことか。匙は呪い殺し、小猫は清めて消し去る。考えてみると、匙の炎も結構怖いな……………。

俺の中で駒王町に残る匙の評価が若干上がるなか、吸血鬼が回避を諦めたのか、小猫に接近していく!!

「さうなれば、攻めるまでだ!」

小猫は殴りかかられても避けようもしない。そして、その拳が小猫に触れた瞬間――灰になった！

『……今の私は浄化の力そのものです。触れただけで消えてしまいますよ？』

触れただけでアウト。浄化つてすごいんだな。

俺は感嘆の息を吐きながらイツセーに言う、

「すごいが、おまえは触れないほうがいいかもな。触れた瞬間に消し飛びかねないぞ？」

「そ、そうかもしれないですね……………」

若干テンションが下がるイツセー。今すぐにもあの胸にダイブしたいんだろう。

俺は小猫に視線を戻し、彼女に言う。

「――だが、あの力なら、邪龍相手でも通用しそうだな」

「ちくしよおおおおお！」

俺の言葉をかき消すように断末魔を発しながら、最後の一人となった吸血鬼も消し飛んだ。

片付いたのを確認して息を吐く小猫。かなり疲労しているようだ。

そんな彼女にイツセーが近づいていくと、小猫は体をもじもじさせながら頬を赤く染めて言う。

『……………イツセー先輩。……………おつきくなりました』

「た、確かに……大きく変わったな」

イツセーが小猫の体を、特に胸を見ているように見える。

小猫は上目遣いでイツセーに言う。

『この状態はあまり長いこと維持できないんです』

小猫がそう言い終わると同時に彼女を包んでいた光が止み、体が元の大きさに戻ってしまった。途端に力が抜けたように崩れ落ちた。

「……ふえ」

意識を失う前にリアスが小猫を抱き留める。

「お疲れ様、小猫」

頭を撫でるリアス。

しかし、最近こいつらの成長は目を見張るものがある。リアスが本格的にレーティンゲームに参戦したら、業界が盛り上がりそうだな。

「初めての实戦で一気に消耗しちまったんだろう。少し休ませてやれ」

アザゼルの言葉にイツセーが頷き、小猫をおんぶする。

俺たちはまったくと言っていいほど消耗していない。このまま一気に駆け降りる！

俺たちは頷きあい、さらに下を目指して走り出した。

life 08 ロイVSグレンデル 再び

俺——兵藤一誠は小猫ちゃんをおんぶしながら階段を駆け下りていた。

さつき見せてくれた『白音モード』。将来小猫ちゃんがあんな綺麗なヒトになると思うと、俺は嬉しいです！

俺の横を走るロイ先生はさつきから小声で——、

「(なんで胸に目がいつちまうかな……? 他に見るものがあるだろうか……。修学旅行からこんな調子だよ……)」

と、ぶつぶつ呟いていた。

お、俺が小猫ちゃんの胸を見て喜んでいたことが気になったのかもしれない。

ロイ先生はリアスが『スイッチ姫』と呼ばれたり、胸が俺のパワーアップに関わっていることを気にしているから、余計なのかもしれない。

けど、『修学旅行から』って、なんのことだろう? 俺としては修学旅行の時に大きな迷惑をかけてしまった記憶しかないけど……。

俺がそんな事を考えていると、いきなりロイ先生の表情が険しくなり、殺気立ち始めた。

俺が疑問符を浮かべた瞬間、階段の先から邪悪なオーラを感じ取った。この気配、ロイ先生が真つ先に気づいたことも頷ける。

俺たちがその階層にたどり着いた瞬間、そのオーラの主が哄笑をあげた。

『グハハハハハハッ！この間ぶりだなあ、悪魔に

ちやあああああんっ！』

黒い鱗、銀色の双眸。巨大なドラゴン！

「グレンデル……………ッ！」

ロイ先生が邪龍——グレンデルを睨みつける。あの時頭を吹き飛ばされたのに、びんぴんしていやがる！

『そうだぜえ、おまえらをぶっ殺したくてたまらねえグレンデル様だぜえええっ！』
相変わらずの悪意を全身から波動を放つてくれていた。

ロイ先生がゼノヴィアに問う。

「ゼノヴィア、確かエクス・カリバーはおまえの許可があれば俺でも振れるんだよな？」
確か、できたはずだ。サイラオーグさんとのゲームでロスヴァイセさんに渡して
いた。

ゼノヴィアが頷く。

「ああ、時間制限つきだができる。それを訊いてどうするつもりなんだ？」

ゼノヴィアがロイ先生に聞き返すと、ロイ先生はグレンデルの後ろ、下に続く階段の入り口を銃剣で差した。

「こいつは俺が受け持つ。おまえらは行け」

ロイ先生の進言にアザゼル先生が驚愕しながら返す。

「ロイ！おまえ、この下にはもう一つ階層があるんだぞ?!ここでおまえが抜けるのは――」

「グレンデルを抑えられるのは俺かアザゼル、イツセーぐらいだ。アザゼルには仕事があるし、イツセーたちにはクロウ・クルワツハの相手をしてもらわないといけねえ。だったら、俺が残るさ」

ロイ先生はそう言うと、両手の銃剣の銃口をグレンデルに向ける。あの時と同じように倒すつもりだろう。だったら、なぜゼノヴィアにエクス・カリバーの話を……?」

俺が疑問符を浮かべるなか、ロイ先生は続ける。

「今回は手早く済ませたんでな、火力が欲しい。デュランダルの制御が難しくなると思うが、『破壊』と『擬態』、ついでに『夢幻』をくれ」

「私も残ればいいんじゃないのか?」

ゼノヴィアがまっとうなことを言う。

ロイ先生とゼノヴィアの二人で戦えばそれでいいはずだ。

だが、ロイ先生は申し訳なきように言う。

「悪いが、足手まといだ。それに、下にできるだけ数をやりたいんでね」

ゼノヴィアはその一言に眉を寄せて悔しように息を吐き、エクス・デュランダルの靴を変形させる。

切っ先から刀身の半分の部分が変形し、ゴツい一本の聖剣になった。

すると、ロスヴァイセさんがロイ先生の手に向かの魔方陣を描く。

「この術式で聖なるオーラを中和できます。短時間だけですから、あまり過信しすぎないでください」

「ありがとうな」

ロスヴァイセさんはロイ先生にお礼を言われ、少し頬を赤くしていた。

ロイ先生は銃剣を異空間にしまい、術式のかげられた右手で三種類の特性が混じったエクス・カリバーを握った。

準備を整えたロイ先生に対してグレンデルが吠える！

『悪魔ちゃん、舐めてんのか？ ああ!?! 俺様が通すわけねえだろうが！ここで全員ぶつ殺すんだよ！』

ロイ先生はグレンデルに構うことなく、エクス・カリバーを大上段に構えると一気に振り下ろした！

破壊の力を乗せたのか、俺たちを大量の砂煙を包み込む！さ、先が見えないんですけど!?

「走れッ！」

『——ッ！』

ロイ先生の指示に俺たちは反射的に反応して一気に駆け出す！程なくして砂煙から全員が脱出したのだが、俺たちは驚愕した！

『くそが！うざってえ！どれが本物だ！』

グレンデルが足元にいたロイ先生を踏み潰そうとしたが、その直前にロイ先生は霞のように消える。

てか、俺の横を俺が走ってる!?!俺だけじゃない、リアスが、木場が、朱乃さんが、この場にいた全員が何人もいる!?

まさか、『夢幻』の力で作られた幻なのか?! 『夢幻』を要求したのはこれが狙い！

グレンデルは縦横無尽に逃げ回る幻の中から本物を探すように時には拳を放ち、時には尻尾を振るうが、どれも本物を捉えることはない。

グレンデルが舌打ちをしながらオーラの関知をしようしたのか、一瞬だけ動きを止めた瞬間、ロイ先生『たち』が襲いかかる！

ロイ先生たちの『破壊』の力を乗せた猛攻で大小様々な切り傷が生まれていき、体の

あちこちから不気味な青い血が吹き出していく！

そして――、

『ぐおおおおおおおおお！』

グレンデルの叫び声！見ると、左目から大量の血が吹き出していた！ロイ先生たちの銃剣の銃口からは魔力が煙のように漏れ出ている。また目潰しをしたようだ！

俺が階段にたどり着いた瞬間、ロイ先生たちが一カ所々に集まり、重なりあつていく。そして、最後には本物一人だけになった。一人になったロイ先生がこちらに視線を送ってくる。

「任せたぞ………」

一人になったロイ先生が俺たちに背中を向けながらそう言うのと、俺たちの幻が全て消える。

見ると、俺たち全員が無傷で通りすぎる事ができたようだ！足に自信のないアーシアはゼノヴィアに担がれていたみたいだ。

俺たちはそのまま全速力で階段を駆け下りていく。この下には、おそらくクロウ・クルワツハがいる。俺たちで勝てるかはわからないけど、ロイ先生のためにも頑張るしかない！

『くそが………ッ!』

グレンデルは悪態をつき、俺を睨みつけてくる。

俺も息を整え、いつかと同じように頭を吹き飛ばそうとすると、

『同じ殺され方するわけねえだろうがああああああああッ!』

グレンデルは叫びながら、銃弾のめり込んだ左目に指を突っ込んだ!そのまま『ぐちゃぐちゃ』と嫌な音を響かせながら左目の中を探り、何かを引き抜くとそれを投げ捨てた。

乾いた音と共に銃弾が床に落ち、転がっていく。

「自分の目を抉るとは、恐ろしい奴だな………」

俺は思わず苦笑してしまいが、すぐに切り替えてエクス・カリバーを握り直す。

グレンデルが左目から垂れる血を舌で舐めとり、狂喜的に笑む。

『グハハハハハハッ! ドライグには逃げられちまったが、てめえを殺して追いかければいいだけだよ! 下にはクロウの旦那がいるんだからよ! 俺が行くころには終わっ

ちまつているかもしれねえけどな！」

「おまえに殺されるほど俺も弱くねえし、イツセーたちも弱くねえよッ！」

俺は言い切ると同時に銃弾を放つ！黒い軌跡を残して飛ぶそれを、グレンデルは体を大きく動かして避けた。

『ようは当らなきやいいんだろお？簡単じゃねえか！』

確かに、中から食い破るためには弾丸を中に通さなければならぬ。それができないのなら――。

俺は銃剣を剣モードに変え、逆手持ちにしながら刀身に魔力を込めていく。刀身が紅の魔力に包まれ、さらに魔力を込めていくと黒い魔力が刀身の包んだ。

俺はさらに魔力をコントロールして刃のみに魔力を集中。刃のみが黒く染まり、腹や峰は紅に戻る。

黒と紅のツートーンカラーの剣を見て、グレンデルは笑う。

『へえ、剣か！いいぜ、へし折ってやる！』

グレンデルの挑発は無視し、俺はゆっくりと息を吐いた。そして――
フッ！

音を置き去りにして一気に飛び出す！

グレンデルは目では追えていないが、接近していく俺に的確に攻撃してくる！だが――

「遅い！」

『——ッ！』

グレンデルの攻撃はどれも遅く、見てからでも避けられる。そして、隙だらけのグレンデルに『破壊』の力を乗せたエクス・カリバーの一撃を放ち、ドラゴン最硬クロスの鱗を無理やり砕き、滅びの刃で出来立ての傷を抉るように斬りつけていく！

グレンデルが払おうとすれば的確に避け、反撃。火を吐こうとすれば一気に退避。決して欲張らず、一撃離脱を心がける。

『くそが！ハエか、てめえは!?』

「どっちかと言うとコウモリだ！間違えるな！」

『うるせえ！』

俺はそう言い返すと、グレンデルは火を吐こうと腹を膨らませ、口から炎を溢れ出して今にも発射しようとする！

俺は慌てることなく『擬態』の力でエクス・カリバーを鎖鎌に変え、鎖の先についた重りをグレンデルの口に目掛けて投げつける！

『あ?!』

グレンデルは間の抜けた声を出す、その瞬間に奴の口に鎖が巻き付き、口を無理や

り閉じさせる！

一瞬間を置いて――、

ボン……………！

こもった爆発音が耳に届いた。

エクス・カリバーを剣に戻し、グレンデルの口を開かせると、

『はっ！』

炎の代わりに血を吐いた。離れた位置からでも肉の焼けた臭いが鼻に届き、俺の表情を険しくさせる。

口の中で炎が暴発したようだ。まあ、発射間近の口を塞がれば、ああもなるだろう。

『あちいじゃねえかこの野郎があああああッ！』

グレンデルが半狂乱になりながら俺に向かって飛び出してくる！俺が横に飛ぶと、俺のいた場所にグレンデルの拳がめり込んだ。

初めてやったときは恐ろしかったが、冷静に対処すればそれほどでもねえか……………。

その後には放たれる連打も全て避け、再び反撃をしていく。集中的に狙っている両手首からは絶え間なく青い血が流れ出ている。

時々それが飛んできて俺の体を汚すが、いつも通りなので特に気にすることはない。

グレンデルの大振りな攻撃を避けて後ろに跳躍すると、奴はほぼノーモーションで火炎を吐いてきた！

俺は一瞬目を見開いて驚くが、すぐさま『破壊』の力を乗せたオーラを飛ばしてそれを相殺しようとする——。

『らあああああッ！』

グレンデルが自分の炎を突っ切って俺に肉薄してくる！

俺は飛ばさなかった破壊のオーラをさらに溜めながら右脇に構え、グレンデルが拳を放つのを待つ。

グレンデルの拳が放たれ、俺に迫ってくる。

まだ、もっと引き付ける。

グレンデルの拳がさらに迫り、当たると確信した奴の表情が歪む。

———今だなッ！

俺が不敵に笑むと、俺の『目の前で』俺が殴り飛ばされた———ように見えた。

グレンデルの表情が驚愕に変わる。殴ったはずなのにその感触がなければ当たり前だ。殴られた俺は空中で霞のように消えた。

グレンデルの表情が怒りに歪む。今殴ったのは幻だと気づいたようだ。

———だが、もう遅い。

俺は一気に『破壊』オーラを解放、『幻の俺』を殴ったグレンデルの腕の、ボロボロになった手首に振り下ろした。

瞬間、手に確かな手応えを感じた。

グレンデルの手首が宙を舞い、床に落下。手から流れ出る血が血溜まりを作る。

俺が短く息を吐いた矢先にはグレンデルの踏みつけが放たれる。俺は神速でそれを避けると、その一撃が床にヒビを入れた。

『——チツ！』

グレンデルは切り落とされた手首を見ながら舌打ちをする。

だが、その表情に怯えはなく、むしろ楽しんでるようだ。死ぬことすらも嬉々として受け入れる。聞いてはいたが、本当に面倒な相手だな。

俺はため息を吐くと、グレンデルが嬉々として笑む。

『いいじゃねえか、悪魔ちゃんよお！この前と違って積極的じゃねえか！いいぜ、こつちもガンガン行くぜええええええええええ！』

グレンデルは大量に血をぶちまけながらこちらに突貫してくる！

やはり、頭を吹き飛ばさねえとダメか……………っ！

俺は剣を銃剣に戻し、魔力弾を生成しながら再び構えを取る。

撃ち込んだ瞬間に刃を発生させねえと、また抉り出させる。一気に削るしかねえ！

俺は駆け出し、グレンデルに接近していく！

グレンデルを乱打を掻い潜り、弾丸を撃ち込んで滅びの刃で貫き、できた傷を『擬態』で変化させた『破壊』の力を乗せたエクス・カリバーで決る。

その度にグレンデルは悶絶するが、痛みの絶叫がすぐさま笑いに変わり、大量に吹き出る血などお構い無しに暴れまわる。

頭に一発でも入れば勝ちなのだが、手首から先がない右腕を盾代わりにして防いできやがる。致命傷がまったく狙えねえ。

やっついていて、こっちもおかしくなりそうだ……………。

数分か、それとも数十分か、時間の感覚がなくなりそうなほど俺はグレンデルと削りあっていく――。

「はあ……………はあ……………」

『はあ……………ハハハ……………いいねえ……………！』

グレンデルを削り続け、俺も息が絶え絶えになっていった。エクス・カリバーを杖代わりに使い、刀身も体も青い血がベトベトだ。魔力もかつかつになってきやがった……………。

グレンデルは俺の攻撃を受け続け、右腕がただついているだけの肉塊になっており、片ひぎをつけていた。それでも狂喜的な笑みを崩さない。

リアスたちは、大丈夫だろうか……………。

もはやその思いが俺を支えている気がする。

邪龍相手に粘り続ける。できれば、ここで最後にしてもらいたいもんだ……………。床や天井もヒビだらけであり、いつ崩れてもおかしくはない。

「いい加減終わらせる……………ッ！」

『いいぜえ、悪魔ちゃんにも飽きたところだあ』

俺はグレンデルの言葉に耳を傾けずに銃剣を剣に変え、ありったけの魔力を込める。エクス・カリバーは『破壊』の一撃に全てを懸ける……………ッ！

剣からはどす黒い、エクス・カリバーからは俺が持つには相応しくないほどの攻撃的なオーラを放ち始める。

「はあ……………はあ——ッ！」

俺は息を整え翼を展開、一気に天井近くまで飛び上がる！

『バカが！いい的だぜええええええええつ！』

グレンデルは腹を膨らませると広範囲に火炎を放ってきた！

避けるのも飽き飽きだ、押し切るっ！

火炎を避けることはせず、両手に握る二刀を大上段に構える。

「死ねえええええええええつ！」

叫びながら二刀を振り下ろし、滅びと聖のオーラを解き放つ！

魔の黒いオーラと聖なるオーラ、相反するふたつの濁流がグレンデルの火炎を突破して本体を飲み込み、奴の声にならない断末魔が俺の耳に届いた。

同時に床が崩れ、白目を剥いたグレンデルが下に落下していく。下にはリアスたちがいる。それに、グレンデルにとどめを指さねえと……………。

俺はグレンデルを追うように、底が見えない暗闇に落ちていった——。

l i f e 0 9 最下層へ

俺——兵藤一誠を含めたグレモリー眷属、アザゼル先生は待ち構えていた最強の邪龍と呼ばれるクロウ・クルワツハを相手にド派手な戦闘をおこなっていた。

いくら攻めても倒れないクロウ・クルワツハに、アザゼル先生がフアーブニルから受け取った（代償にアーシアのスク水が失われた）『タスラム』というクロウ・クルワツハと同じ神話体系の必中の魔弾のレプリカを使い、一気に倒そうとしたのだが、それでも大きなダメージを与えることはできなかった。

俺たちが次の一手を模索しているなか、突然部屋が揺れ始めた！

俺たちが驚愕しながらも踏ん張るなか、天井が崩れ始め、瓦礫が大量に落下してくる！

俺たちがそれを避けるなり壊すなりしていると、それに紛れて大きな影が落下してきた。

——あれは、グレンデル！白目を剥いて脱力した様子で落下してきている！

クロウ・クルワツハも少しだけだが驚いた様子で小さく目を見開く。同時にグレンデルが床に落下、大量の砂ぼこりが宙を舞った。同時に小さな影が落下してくる。

間を置いて砂ぼこりが晴れると、そこには――、
「はあ……………はあ……………つ……………はあ……………」

返り血で体を青く染め、息も絶え絶えになっているロイ先生が立っていた！杖代わり
にしているエクス・カリバーに青い血がこびりついているけど、大きな怪我はしてい
なそうさだ！

俺たちが喜んでいるなか、ロイ先生は白目を剥くグレンデルを憎々しげに睨むとその
眼球に銃口をねじ込み、何回も引き金を引いた。

銃弾を撃ち込まれる度にグレンデルの体はビクビクと反応するが、目を覚ますことは
ない。

ロイ先生は銃口を引き抜くとグレンデルから離れ、ぼそりと、

「――二度と立ち上がるな」

そう呟いた。

その瞬間、グレンデルの頭部から魔力が溢れ始め――。

ビシヤ！

グレンデルの頭部から、その原型がわからなくなるほどの大量の滅びの刃が飛び出
した！

脳だったものが辺り一面に飛び散り、床に汚れを作る。

相手は邪龍。慈悲も容赦もいらないとドライグも言っていたし、倒れてもあそこまでしないとすぐに立ち上がるのだろう。

ロイ先生はゼノヴィアに謝りながらエクス・カリバーを返し、彼女も何とも言えない表情でそれを受け取っていた。

あとは、クロウ・クルワツハをどうにかするだけだ！

俺はゼノヴィアに血まみれのエクス・カリバーを返し、クロウ・クルワツハに目を向ける。

クロウ・クルワツハは特にダメージを受けた様子もなく、俺に視線を向けてきていた。「グレンデルを倒したか。おまえにも参加してもらいたいな」

俺は息を吐く。

「リアスたちを手伝いたいのが、休ませろ。連戦はキツイんだよ……………」

俺は後ろに下がり、目を覚ましたがまだ快復しきっていない様子の小猫とギヤス

パー、アーシアが入っている障壁の中に逃れる。少し休まないと、魔力と集中力がもたねえ……………。

クロウ・クルワツハは興味をなくしたように俺から視線を外し、何かを感じ取ったの
か上を見上げた。

それと同時に俺も強力なオーラを感じとり、天井にあいた穴から上の階層の入り口を
見上げる。

その瞬間、白い閃光が俺たちとクロウ・クルワツハの間に割り込むように降り立つ！
白い閃光——鎧姿のヴァーリはクロウ・クルワツハを睨む。

「おまえがクロウ・クルワツハか」
「ああ、そうだ。現白龍皇」

それから無言で睨み合う両者。二人からは凄まじいまでのプレッシャーが放たれて
いた。

アザゼルが言う。

「ヴァーリ！遅えじゃねえか。カーミラの領地から俺よりも先に出たのに、なぜここま
で遅れた？」

確かにヴァーリの速度ならもつと早く俺たちと合流していてもおかしくない。

ヴァーリが言う。

「いろいろとね。途中で妨害されていたのさ。あの男……ユーグリット・ルキフグスにな」

———そうか。ユーグリットもここにいるのか。だからヴァーリも遅れたと。どうにかして捕らえたいが、今の体力じゃ無理だ……………。

アザゼルは再度問う。

「美猴たちは？」

「……はぐれ魔法使いの集団『魔女の夜』^{ヘクセン・ナハト}だったか？そこに属している聖十字架の使い手に捕まってな。あいつらはそいつの相手をしている」

「聖遺物^{レリック}が聞いて呆れるな。神滅具^{ロンギヌス}の聖遺物^{レリック}は全部『禍^{カオス}の団^{ブリゲード}』^{カオス・ブリゲード}に^{カオス・ブリゲード}関与しちまっているじゃねえか、聖書の神よ！」

アザゼルがそう吐き捨てているが、俺も同感だ。

俺たち『邪なるもの』に対してだけならまだしも、全勢力の（割りと）いい奴にまで振るわれてるわけだからな。

とりあえず、そのひとつである聖杯ぐらいは回収しておきたいな。ヴァレリーの身柄ごと。

俺がそんなことを考えているとヴァーリがイッサーに訊く。

「キミはクロウ・クルワツハと戦ってみてどう思った？」

「簡単に言うとは、化け物だな」

「その通り、現時点ではキミよりも遥か格上の存在だろう。と言つても、俺にも勝算があるようにないとも言える」

あのヴァーリがそんなことを言うとは、クロウ・クルワツハがどんだけすごいかはオーラからわかつてはいたが、大胆不敵なあいつがそう言うのは以外に思つてしまつた。

ヴァーリは続ける。

「——だが、俺はこの先にいるはずであろう者によろがあつてな。できるだけ、消耗をしたくないんだ。……このドラゴンを追い求めていたんだが、それはそれだ。今はどうしてもこの先に行かなければならない。そこでだ」

何となくヴァーリの次のセリフがわかつたぞ。それはおそろく——、

「共同戦線か？」

「嫌か？」

どうやらイツセーも気がついていたようだ。

イツセーが即頷く。

「いや、悪くねえ。ギャー助の身内を助けるのにも苦戦しててよ。俺もこれ以上は無駄に消耗したくないのが本音だ」

それを聞いてヴァーリは笑った。

「交渉成立だな。ふつ、ロキ戦以来か」

ロキか。もうあの頃が懐かしく思えるな……………。

俺が感傷に浸っているとアザゼルが言う。

「こいつらでダメならどうしようもねえ。ここは二人に任せて俺たちは回復するべきだ」

「それで頼む。もたねえ……………」

「手伝いところだけれど、逆に邪魔になってしまいそうね」

俺が申し訳なく、リアスが渋々といった様子で頷き、後ろに下がる。

そして、イツセーとヴァーリが同時に飛び出していった！

およそ十分。二天龍と邪龍の戦いは、邪龍優勢の流れになっていた。

ヴァーリとイツセーの即席の連携では動きにむらがあり、クロウ・クルワツハはそれを見逃さず、二人の猛攻を捌ききっていた。

「……………頃合いか。これまでのようだ」

突然クロウ・クルワツハが息を吐き、構えを解いた。

俺たちが驚くなか、ヴァーリが訊く。

「やめるのか？」

「最低でも三十分は稼げと言われただけだ。——次に会うときは本気でやりあいたい

ものだ」

クロウ・クルワツハはそう言うのと、踵を返して近くの壁に寄りかかった。同時にみなぎっていた戦意も消え失せたようだ。

奴の発言を鵜のみにするとしたら、タイムアップなのか……………？

俺が嫌な汗を流しているなか、俺たちは足早に立ち去っていく。

クロウ・クルワツハは妨害も追撃もすることなく、なぜかギヤスパーに視線を送っていた。

二天龍であるイツセーとヴァーリではなく、吸血鬼のギヤスパーを見ている？ 今回の重要人物だからか、それとも何か引つかかるものでもあるのか？

俺はその疑問をすぐに捨て去り、先程の十分である程度回復した足を動かして最下層を目指す。

この階段の先にヴァレリーとマリウス、そしてリゼヴィムがいるはずだ。

ギヤスパーのためにヴァレリーを助けて、マリウスを捕らえる。そして、兄さんたちのためにリゼヴィムが何かをする前に止める！

life10 殺す者 殺される者

クロウ・クルワツハに見逃され、階段を下りていく俺たち。

ああ、くそ！魔力を消耗しすぎたな。魔力とエクス・カリバーの同時使用がここまで堪えるとは計算外だった！銃剣を重いと感じたのは初めてだ！

俺が小さく舌打ちをしていると、

「ヴァレリー、もうすぐだよ！」

いつの間にかギヤスパーが先頭を走っていた。この先にヴァレリーがいることを感じ取っているのかもしれない。

そのまま階段を下りると、装飾の凝った石造りの大きな扉が現れた。ここが最下層への入り口だな。

俺たちは頷きあい、豪快に扉を開け放つて中に入る。

中は祭儀場のようで、儀式に使うであろう怪しげな像や書物の棚が部屋のあちこちに置かれている。

「……ギヤ……ギヤスパー……？」

ヴァレリーの声が聞こえ、全員がそちらに顔を向けた。

そこには床に巨大な魔方陣と、その中央に置かれた寝台に寝かされたヴァレリーの姿が目に入った。

すでに魔方陣の怪しい輝きがヴァレリーを包み込んでいた。

ヴァレリーの表情は苦痛にまみれたものだ。

「ヴァレリイイイイイ！」

叫ぶギヤスパーが近づこうとするが、障壁に阻まれ近寄ることは許されなかった。

ギヤスパーは魔方陣の中にいるマリウスを視線に捉えた。

「やめて！やめてくださいいい！もうこれ以上、ヴァレリーをいじめないで！解放してあげてええええ！」

ギヤスパーの叫びにマリウスは嫌らしい笑みを見せた。

「ええ、だから『解放』してあげようとしていいるのですよ。ほーら、もうすぐ彼女の心身を蝕んでいた聖杯が取り出されますよー」

「いやあああああああああああ！」

いつそう高い絶叫がヴァレリーから発せられ、体から何かが出てこようとしていた。

「なるっ！」

「くっ！」

「斬れないか！」

俺、木場、ゼノヴィアの三人で魔方阵に斬りかかるが、ビクくもしない。てか、魔力が足りねえ！刃を長時間維持できねえぞ！

歯を食い縛り、無理やり刃に魔力を込めていく横でイツセーも魔方阵を殴っているが、効果なしだ。

そんな俺たちを見てマリウスは嫌な笑みを浮かべたまま言う。

「下手な攻撃はやめてくださいね。下手すると聖杯も、聖杯の所有者も無事では済みません。元総督殿に案があつたとしても無駄です。私は誰よりもこの聖杯に触れ、調べてきました。抜き出し方も誰よりも熟知しているのですよ」

アザゼルが手元に魔方阵を展開させて、マリウスが使っている術式を調べていたが、すぐに舌打ちをした。

「くっ！このプロテクトコードは……聖書の神のものだ！なぜ、俺も知らないコードをおまえが知っている!? これもリゼヴィムからの情報提供なのか!?!」

アザゼルの疑問にマリウスは笑う。

「彼らからはいろいろなものを提供してもらいました。おかげで聖杯の研究は飛躍的に進み、滅んだ邪悪な魔物たちも復活させることができました。どうやらヴァレリーの聖杯は弱点を薄めることに特化していたようです」

吸血鬼だけじゃなく、邪龍の弱点軽減もされているのか。

マリウスが術式の操作を止める。

「ふふふ、無事完了致しました」

魔方陣がいつそう強く輝き、その光がヴァレリーを包み込む。

このままだと、ヤバイ！

「俺がドラゴンショットで！」

イツセーが構えるが俺とリアスがそれを制する！

「止せ、イツセー！下手したらこの王国が吹き飛びかねええ！」

「下手に強力な攻撃をすれば術式が暴走してどうなるか……本当に王国が吹き飛びかねないわ！」

「で、でも……こんなのは二度と！」

イツセーの言葉で俺は思い出し、横目でアーシアを見る。

俺が任務についていた頃。アーシアも一度 セイクリッド・ギア 神 器を抜かれ、死んでいる。イツセー

はそのときのことを……。

イツセーは攻撃の矛先を定められずにいた。そんななか、ヴァレリーの体から小さな杯が現れた。

金色に輝く小さな杯——。あれが、聖杯なのか……。

「……………ああ……………」

ヴァレリーは神セイクリッド・ギア器を取り出され、寝台にぐったりと横たわり、完全に生気を失っていた。

マリウスがヴァレリーから取り出した聖杯を取り上げ、頭上に掲げる。

「これが……神滅具『幽世の聖杯』。しかも禁バランス・ブレイカー手の発動条件も揃った代物です」

魔方阵が役目を終えたことで消滅し、障壁もなくなる。ギヤスパーが涙を目に浮かべながらヴァレリーに駆け寄る。

「妙だ。神滅具ロンギヌスの取り出しにしては……」

アザゼルが何かを考えているうちにギヤスパーがヴァレリーを抱きかかえ、最期の話をしていった。

「最期に……あなたに会えた……。私のたった一人の友達……。家族……。……ねえ、

ギヤスパー……」

「……何？」

ヴァレリーは天井を見上げる。いや、彼女はその先にあるものを見たかったんだろう。

「……お日さま……見たかったわ……。皆で……。ピクニックに行けたら……。どんなに……」

「……見れるよ。僕が連れて行ってあげるから。ピクニックも行くこうね」

この状況に耐えられなくなったアーシアがイツセーに抱きつき、ふるふると悲しそうに震えていた。

……前に聞いたリアスたちとアーシアの出会い。イツセーは目の前でアーシアを失った。それをギヤスパーも味わうことになってしまった。

ヴァレリーはギヤスパーの頬をひとなですると、ギヤスパーの胸元に手を添えた。

「ここに……もう一人のあなたがいるの……。最期にお願いしなくちゃ……」

ヴァレリーは今にも消えてしまいそうな声で言う。

「……あなたともお話したかったわ……。……あなたも、ギヤスパーなのだから、皆とお話しなきゃダメよ……。……あなたを許してくれる居場所はここにあるのだから……」

ヴァレリーの手が——力を失い下に落ちる。

「……皆と仲良くできますように……」

それが最期だった。それが彼女の最期の言葉だった。

「……………つつ」

ギヤスパーは首を何度も振り、ヴァレリーの体を抱きしめる。

……この光景を見て不快に手をパチパチと鳴らす者がいた。

マリウスが聖杯を片手に笑みを浮かべていた。

ギャー助の恩人であるヴァレリーを助けられず、ヴァレリーを死なせてしまった俺たちの耳に、マリウスの拍手が聞こえた。

マリウスが聖杯を片手に笑みを浮かべていた。

マリウスがロイ先生に不敵に言う。

「ロイ・グレモリー様、あなたの滅びの力を私に撃つてください」

それを聞いたロイ先生は黙りこみ、顔を俯ける。

「……おや？そんなにシヨックでしたか？ハーフ風情を救えなかったことが」

——マリウスの野郎！言わせておけば！

ロイ先生が動かない中、代わりにリアスが前に出ようとする。

その瞬間、俺たちは異常なまでに冷たいオーラを感じ取った！

そのオーラの主は——ロイ先生!?

そのロイ先生が口を開く。

「……………久しぶりだよ……………ここまで誰かを殺したくてたまらないって思ったのは

……」

『——ッ！』

今まで聞いたことのないほど、低く冷たい声のロイ先生にリアス含めて全員が驚いていた。

「なんつったつつけ？ 『滅びの力を撃ってください』 だったか？」

「ええ、そう言ったのですよ」

ロイ先生の言葉にマリウスは動じることなく、不敵に笑みながら返した。

「いいぜ。……だが二撃目はない。……一撃で終わらせてやる——ッ！」

ロイ先生は怒気を込めてそう言うと、全身からどす黒いオーラを放ち始めた！ コカビエルに潰され、普段は白濁している左目の瞳が黒と紅が入り混じった色に染まっている！

仲間の俺たちでもヤバイと感じるほどの魔力！ さっきまで消耗しきっていたのに、どこにこんな力が——！

俺たちが驚くなか、ロイ先生が一挺だけ銃剣をしまい、残した銃剣に魔力を込めていく。

全身から放たれたどす黒いオーラをが銃剣に吸い込まれるように集まり、バチバチと銃剣が悲鳴をあげ始める！

ロイ先生はそれに構うことなく銃口をマリウスに向け、その引き金を引いた！

反動で体が後ろに持つていかれそうになるが、それをうまく逃がして体勢を整える。

通常の時とは比べ物にならないオーラの塊が吐き出され、床を削り取りながらマリウスに向かつて飛んでいく！

マリウスは防ぐことも避けることもなく、それを真正面から受けた！

そこでいつもとは違うことが起きた。

まず一つは銃剣が耐えきれずに破裂したこと。とつさにロイ先生が顔を守り、その盾になった腕に大量の破片が突き刺さり、服に大きな赤い染みをつくった。

そしてもう一つは、ロイ先生の放った一撃はマリウスを包み込み、そこにとどまっていることだ。

黒い塊の中で滅びのオーラが暴れまわり、中にいる者——マリウスに遅いかかっているのだろう。

ロイ先生は腕に刺さった大量の破片を一瞥すると、マリウスを包み込んだ塊に手を向け、その手を閉じた。

すると、マリウスを包み込んだ塊が一気に小さくなり、ついには見えなくなってしまうった！

マリウスの体は完全に消えてなくなり、聖杯だけは無傷で宙に浮いている。

マリウスの体だけを消し飛ばしたってことなのか。——これで終わった？

俺たちが困惑するなか、ロイ先生は腕を下げると、そこから垂れる血を気にすることもなく、奥で様子を見ていた吸血鬼たちに言う。

「それで誇り高き純血の吸血鬼ども。どうする？……まだやるか？」

ロイ先生の一言に震えながら、いかにも偉そうな格好をした一人の吸血鬼が口を開いた。

「な、なぜだ!?なぜ聖杯を持つマリウス殿が!？」

「体と魂を同時に、完全に消し飛ばした。聖杯があっても、魂がなきゃどうにもならねえだろ」

ロイ先生の見下したような言葉に、その偉そうな吸血鬼が返す。

「なぜわからない!?我らと同じ純血の貴族であるならば理解できるはずだ!貴様らも我々も人間を糧に生きてきた!我々は人間を食料と考えている!家畜を支配するため力を求めて何が悪い!わかるはずだ!貴族とそれ以外の者の差が!」

吸血鬼の一言にロイ先生は息を吐いた。

「…………おまえらと同じに考えてほしくはねえんだがな。そもそも俺は貴族なんていいもんじゃねえよ。見ての通り、この手を汚しまくってるだけのただの——」

ロイ先生はそこで一旦言葉を切り、銃剣を握っていた血まみれの手を強く握り、瞑目

すると天井を仰いだ。

「『過去を受け入れろ』か。昔の俺はただの『殺人鬼』でしかねえのによ」
いつかにヴァレリーから告げられた言葉を反復するロイ先生。
けど、その言葉はどこか切なく、虚しさを感じる声音だった。

ヴァレリー、おまえの言葉、何となくだがやってみたぞ……。

——だが、まだ何か、何かが足りねえ。

「あとは任せる」

ロイ先生は息を吐いてそう言うのと、全身から放つていたオーラが収まり、左目も元の白濁したものに戻った。そして、その目である一点を見た。

俺たちもつられるようにロイ先生が見つめる場所を見る。

そこにいたのは全身から黒いオーラを生み出しているギヤスパードだった。

その黒いオーラは徐々に室内を覆おうとしている。

のろのろと立ち上がったギヤスパードはこの世のものとは思えない危険な輝きを放つ双眸を吸血鬼の上役に向けていた。

その黒い何かは少しずつ人間の形を崩していき、獣のような形になっていく――。

両腕は長く太くなり、鋭い爪が伸び、背中が隆起していくつもの羽が生え、足が逆関節となっていく。

頭部もドラゴンを思わせるように形成されていき、鋭い牙が生え、角が生え、真つ赤な双眸が怪しく輝く。

《ゴオオオオオオオオオオオオオオオ！》

獣の咆哮が響き渡ると同時に室内を完全に闇が包み込んだ。

俺たちの目の前にいるのは闇のオーラを全身から放つ見たこともない、全長五メートルはある巨大な生物だった。

あれがギヤスパードの真の姿なのか？

俺たちはただ震えて見ていることしかできない。

ヴァーリーは腕を組み静観し、ロイ先生もいつの間にか後ろに下がってきて、同じく静観を決め込んでいた。

「……………この現象は……………」

アザゼル先生もこの有様に眉根を寄せていた。

「これは！」

「なんだというのだ!?!」

吸血鬼の上役はロイ先生の一撃に続き、こんなものを見せられ、恐れおののいていた。すると、その様子を見ていたロイ先生が煽るように口を開いた。

「どうした? 自慢の純血の力でどうにかしねえのか?」

「そ、そうだ! 我々は聖杯で強化されている! ハーフごとき、次のステージに進んだ我々の敵では——」

バグンツと一人の吸血鬼が、足元の闇から生まれたワニのようなものに飲み込まれた。

《次のステージが……………何だって?》

ギヤスパードだったものがケラケラと笑いながら言う。

それを合図に部屋のあちこちから見たこともない生物が誕生していった。

その光景に身震いしていく吸血鬼たち。だが一人の男が怒りに顔を歪めて身体から虫や獣を生み出していく。

「その手の芸当は貴様だけのものではない！たかが、闇に包まれた——」
啖呵を切った男性を滑空してきた鳥形の魔物が連れ去られていく。

運ばれた先で魔物に囲まれて——。

「や、やめろおおおおお——」

抵抗むなしく一方的に喰われていった。

………なんだよ、これ。ギヤスパーがやっているのか？

これがギヤスパーの真の力、真の姿なのか………。

全身の震えが止まらない俺だったが、闇の魔物はさらに増えていき、吸血鬼たちを追い詰めていく。

魔物は俺たちには危害を加える素振りだけは見せない。

「ひいひいひい——」

「そ、そんな！我らの力が！」

「な、なんなのだ!?!」

「貴様はいつたい、なんだというのだ!?!」

吸血鬼たちは必死に抵抗するが、魔物が際限なく生まれて向かっていった。

《なぜ、うまく吸血鬼の能力が発動できないのかわかるか？おまえたちが聖杯で強化された力を停止させているからだ》

「能力の停止か。えげつねえな」

ロイ先生が呑気に呟いているが、まったく同感ですよ！能力の停止ってそんな凶悪なことまでできるのか!?

ついに吸血鬼たちは足を取られ、変化ができないように全身を闇にからめ捕られてしまった。

「くっ！卑しいもどきがああぁー！」

「ち、近づくな！わ、私たちには高貴な血が……貴様には到底想像もつかない歴史と伝統を持って——」

《いいよ、喰らい尽くせ》

その合図と共に吸血鬼の上役は闇の魔物に食い尽くされていく。

あまりの光景にアーシアは目をつむり、耳を押さえていた。

「や、やめろおとおお！やめてくれええええ！」

そんななか、闇の奥から最後の一人の断末魔が室内に響き渡った。

l i f e l l 闇の正体

闇のフィールドが解け、室内がもとの祭儀場に戻った。

結果的にクーデターに荷担した吸血鬼は全員死んでしまった（まあ、一人は俺が殺^やつたわけだが）。

この室内に残っているのは俺たちと、闇の魔物になったギヤスパードだけだ。

アザゼルは一通り状況を確認するとヴァレリーのもとに駆け寄り、小型の魔方阵を展開して彼女を調べ始めた。

俺はアーシアに腕の治療をしてもらいながらアザゼルに訊く。

「おい、どうした」

「……………どうにも、引つかかってな」

確かにさつきからアザゼルは術式の結果を怪しがってはいた。とりあえず静かになつたので調べるつもりなんだろう。

彼女の体を一通り調べ終えたアザゼルが手を止める。

「……………なるほど、俺の疑問は解消できそうだ」

「と、言うこと？」

俺がアザゼルに問うと、アザゼルはヴァレリーを指さした。

「この娘の聖杯、元々から亜種のようなだぞ。本来一つのはずの聖杯が、まだ存在している。つまりこの娘の体にはもう一つの聖杯が残っている。おかしいと思っただ。神滅具ロンギヌスの抜き出しにはあまりに静かだな。俺の研究にでもっと派手なものになると結論づいている」

『——ッ!?』

アザゼルの発言に俺を含めた全員が驚く！

それもそうだろう、神滅具ロンギヌスそのものが亜種なのだ。曹操のように禁手バランス・ブレイカーの亜種ならまだ見たり聞いたりしたことはあるが、存在そのものが亜種はさすがに初めてだ。

「通常一つしかない神滅具ロンギヌスが二つ。——つまり二つで一つと数える神滅具ロンギヌスってことか？」

「ああ、ロイの言うとおりだ。まあ、詳しくは調べてみてからだかな。本当に今世の神滅具所有者はわからん」

『おおっ』

それを聞いた全員が安堵の息を漏らした。

「とりあえずヴァレリーは無事なんだな？ だったら、さっさと目を覚ましてやろう」

「そうだな、聖杯をこちらへ。とりあえず、それを戻す」

宙に浮きつばなしだった聖杯を手に取り、アザゼルに手渡す。アザゼルは受けとると一つ頷き、聖杯を戻す作業を始めた。

精神汚染が酷かったのは聖杯が二つあったからなのかもな。

そんなことを考えながら闇の魔物のままのギヤスパーを見る。

ギヤスパーはヴァレリーへ聖杯を戻す作業をただ見守っていた。

俺が訊く。

「……………とりあえず、ギヤスパー、戻らないのか？……………ギヤスパーでいいんだよな？」

《僕はギヤスパーだよ。ただ、ギヤスパーであり、ギヤスパーでないとも言える。この少年が母体にいたときに宿ったのは、バロールの断片化された意識の一部》

「な、何!？」

それを聞いて俺とアザゼルは驚きの声をあげ、アザゼルに限っては作業の手を止めて顔を引きつらせていた。

「バロールって、あのケルト神話の魔神か!？」

「……………いや、確かにギヤスパーの神セイクリッド・ギア器は『停止世界の邪眼』だ。何か関係があつても

——

俺は引き続き驚き、アザゼルは一人で分析を始めていた。

「あ、あの。ギヤー助の神セイクリッド・ギア器とその神様は関係あるんですか？」

イツセーが訊いてくる。それにアザゼルは興奮気味に答えた。

「バロールは邪眼の持ち主として一番有名な神だ。あのクロウ・クルワツハを操った神としても知られている。そのバロールの眼にならつてギヤスパセイクリッド・ギアの神セイクリッド・ギア器は命名されたと聞く。……だが、本当にバロールが宿るなど、信じられん。さっきのタスラムが反応しなかったのはレプリカだったからか？」

《だから、バロールの意識の断片さ。神性はすでに失われて、魔の力だけが残った。本来バロールはすでに滅ぼされたからね。僕はバロールであつて、バロールでない。『ギヤスパセイクリッド・ギア・ヴラデー』さ。神器とはおもしろいものだよ。ドラゴンから、魔物、そして魔神の力さえも宿らせることができる。聖書の神は本当に恐るべき存在だったんだろうね》

「なるほど〜」

アザゼルは今のを聞いて理解したようだ。俺は——とりあえずこいつがスゴいってことはわかった。専門的なことはよくわからん。

そこで一つの疑問が生まれた。

「そう言えば、俺が旧魔王派にいたところにイツセーの『ジャガーノート・ドライブ覇龍』と戦った、いや襲われた？まあ、今はどっちでもいい。そのときに明らかに体を止められたんだが、あれは？」

《あれは、彼と僕の視界が繋がったからなんだ》

ギヤスパーがそう言うといツセーが「おわっ！」と驚いたように声を出した。

「イツセーどうした？」

「いえ、何か視線が急に高く。自分で自分を見ていたもので……………」

「視線が繋がったつてのはそういうことか」

《そういうことだよ》

それにしても、こうやって話しているうちにギヤスパーのこの姿にも慣れてきたな。

「ほ、本当にギヤスパーなのか？」

「なんだか、おつきくなっちゃって……………怖かったわ」

ゼノヴィアとイリナも慣れたのか、ギヤスパーに近づいていった。

ギヤスパーはそんな二人に反応せずにヴァレリーへ足を進める。

横たわる彼女の頬をギヤスパーは変貌した手でやさしく撫でた。

《僕はなぜかこの少女を救わないといけないと感じた。強く、強くね。それはどう一人の僕が感じている恩義とは別の感情だ。……………これは感謝？僕にはよくわからないけれど、おそらく、彼女は聖杯の力を覚醒する前に無意識のうちに使っていたのかもしれない。僕のもととなったパロールの意識の断片、それを聖杯の力で呼び出して……………僕を作り上げた……………？》

「このギヤスパーを生み出したのは幼い頃のヴァレリーだと言うのか？リアスがギヤスパーを眷属にできたのはバロールがすでに神性を失っていたからこそか。だが——」

アザゼルがその後もぶつぶつと独り言を言っているが、ギヤスパーは構わず続ける。

『この状態は神セキリッドギア器とバロールの融合によって生み出されたものだ。禁フォービドゥン・インヴェイドバロールザ・ビスト手バランス・ブレイカーであり、そうでないとも言える。そうだね。「禁夜と真闇たりて翳の朔獣」と名付けておこうか』

……自分で名付けんのか。まあ、それはいい。問題はこの力はもう——。

俺は確認をとるようにアザゼルの訊く。

「アザゼル。これは神滅具ロンギヌスと呼んだほうがいいだろ。順番的に、十四番目の神滅具か？」

「ああ、そうなるだろうな。まあ、それも詳しくはグリゴリに帰ってからだ」

アザゼルがそう言ったときだ。闇の獣になっていたギヤスパーの闇が晴れ始める。

《もう限界みたいだ。あとは皆に任せて、僕は少し眠らせてもらうよ》

闇が晴れていき、少しずつもとのギヤスパーに戻っていくなかでもう一人の仲間——闇ギヤスパーが笑みながら話を続けた。

《オカルト研究部の皆、僕は全てを闇に染める存在だ。けれど、あなたたちには絶対に危害を加えないと約束する。もう一人の僕を通して、ずっとみていたからね》

闇ギヤスパーが俺たちを見渡す。

《リアス部長、朱乃さん、小猫ちゃん、裕斗先輩、アーシア先輩、ゼノヴィア先輩、イリナ先輩、レイヴェルさん、ロスヴァイセさん、アザゼル先生、ロイ先生、そして赤龍帝……イツセー先輩。僕の大事な仲間だから——》

それだけを伝えると完全に闇が消失し、ギヤスパはその場に崩れ落ち、気絶してしまつた。

そのギヤスパをリアスが抱き締めた。リアスの目元には涙が浮かんでいる。

「……わかつているわ。あなたが誰であろうとかまわさない。あなたは私の眷属だもの。ねえ、ギヤスパ……」

それを聞いた全員が頷きながら、泣きそうになっていた。

俺もホツと息を吐き、アザゼルに訊く。

「それで、終わったか?」

「ああ、問題ない。これで目を覚ますはずなんだが……」

アザゼルがそう言うのと、まばゆい閃光を放ちながら聖杯がヴァレリーのなかに戻っていく。

それからしばらく様子を見ていたが、彼女はいつこうに目を覚まさない。

アザゼルが再び彼女を調べ始める。

「……おかしいな。息はある。意識だけが戻らない……?何が足りないんだ?」

ヴァレリーがなぜ目を覚まさないのかアザゼルが考えを巡らせていると、室内に第三者の音が響き渡った。

「あー、もしかしたら、これも戻さなきや意識は戻らないかもねえ」

そいつ登場にヴァーリは憤怒の表情を浮かべた。

「会いたかつたぞ、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー！」

俺たちの前に姿を現したのは、リゼヴィムの野郎だった！

リゼヴィムのそばに聖杯らしき杯が一つ、宙に浮いていた。——あれはまさか！

杯を見て目を見開く俺たちをよそに、リゼヴィムは口元を笑まして話を続ける。

「ヴァレリーちゃんが持つ亜種の聖杯は——全部で三つだ。三つでワンセットつー

規格外の亜種神滅具ロンギヌスなのよん。すでに一つ、俺たちが抜き出してねえ。マリウスく

んは聖杯が複数あることさえ、気づかなかつたようだけど。聖杯研究者だなんて聞いて

呆れるぜ！」

——三つでワンセットの神滅具ロンギヌス!? しかも一つはあいつの手のなかなか

か!?

ゲラゲラと笑うリゼヴィムが改めてヴァーリに軽快にあいさつをし始める。

「んちゃ♪うっひよひよーっ! リゼヴィムおじいちゃんだよー? ここから愉快なお遊戯

タイムになりまーす。良い子の皆はおじさんの話に注目してね☆」

リゼヴィムはそう宣言して醜悪な笑みを浮かべた。

life 12 悪意の始まり

聖杯をそばに浮かせているリゼヴィム、そして奴の横にはリリスがいた。

リゼヴィムの登場をうけ、ヴァーリの表情は今まで見たことがないほど怒りに彩られ、俺も警戒のために銃剣を取りだす。

ヴァーリを見て、リゼヴィムが哄笑をあげる。

「うひゃひゃひゃひゃつーきやわい孫にそんな眼をされちゃうとおじいちゃん嬉しくてイツちやいそうだよ！だですら、さっきのロイちゃんの殺気で興奮してんだから！」

俺で興奮しないでいただきたいね。にしてもどうするかな。銃剣を出したはいいが、リリスがいる以上下手に攻撃できねえ……………。

俺が考えているなかイツセーがアザゼルに訊く。

「アザゼル先生、ヴァーリとあの人に何があつたんですか？」

イツセーの質問にアザゼルが表情を険しくしながら答える。

「……………奴は自分の息子、つまりヴァーリの父親に『ヴァーリを迫害しろ』と命じたんだよ」

——ッ！こいつ、自分の孫を虐待しろって言ったのか!?イカれてやがる……………!!

リゼヴェイムはそれを聞いて口を尖らせた。

「聞き捨てならないにやー。俺はバカ息子に『怖いならいじめろよ』ってアドバイスをしてあげただけなんだぜ？ま、魔王の血筋で白龍皇なんてのが生まれたら、あのビビりなバカ息子の豆腐メンタルじゃ耐えきれないだろうさ」

俺は前世含めて親になったことはないが——子供の才能に恐怖する、か。それ以上の愛情つてやつを持ってなかつたのか……………？

「結局、ヴァーリきゅんはお父さんの仕打ちに耐えられずに家出しちつやたけどねん♪グリゴリでアザゼルくんに育てられてもらったんだってねえ。よかつたねえー、アザゼルおじさんは面倒見がいいもんねー」

アザゼルも憎々しげにリゼヴェイムを睨んでいた。

ヴァーリが問う。

「……………くだらん。それよりあの男はどうした？」

「ん？あー、パパのその後？うひゃひゃひゃひゃつ、俺が殺しちやつたよ！ビビりなんだもん。見てていらついちやつてさ。つい弾みで殺しちやつたんだ☆あんれー、シヨツクだった？怒つちやつたー？」

「別に。俺も消そうとしていただけだからな。——ただ、俺はうれしいよ」

ヴァーリは全身のオーラを膨らませた。

「俺は貴様を一番殺したかったからな……ッ。貴様は『明けの明星』と称された魔王ルシファーを名乗っていい存在ではない！」

ヴァーリの鎧がいつそう輝いていく。

リゼヴィムはそれを見てもただうれしそうに笑うだけだ。

「……いいじゃん。チョーいい目つきだ。いい育て方してんよ、アザゼルちん。あの泣き虫少年がこれとはうれしいねえ」

ヴァーリが今にも飛び出しそうになるが、アザゼルが壁になつてそれを制していた。

アザゼルはそれで忙しそうなので俺が訊く。

「その聖杯で何をする気だ？ 邪龍を復活させて何がしたい？」

単刀直入に訊いてみた。こいつの場合は回りくどく訊くよりはそっちのほうが簡単に言つてくれそうだからな。

なぜ今まで行方不明だったこいつが今動き出したのか。こいつがトップの新生カオス・ソリゲド『禍の団』の目的は――。

リゼヴィムは俺の質問に高々と返す。

「うひゃひゃひゃひゃ、聞きたいの？ いいよ、特別にお話してあげよう。――今から数ヶ月前のことだ。とある出来事がこの世界にもたらされた。――俺たちが知らない異世界の存在だ。こいつは昔から議論されていたわけだが、ついにその存在が確認さ

れたわけだねー」

——異世界の存在？まあ、ある意味で俺はその異世界の住民だが、詳しくは知らん。俺をこつちに送ってくれたM s. 神様が、こつちでいうどの神話体系なのか知らねえし、興味ねえ。

俺がリゼヴィムにバレないうちに思考を切り上げ、奴の言葉の意味を考える。

俺がこつちに来てから接触した異世界の何か——。

『ロイ先生！「乳神様」って、なんですか!?!』

「——ッ！」

俺とアザゼルはほぼ同時にイツセーを見る！

そのイツセーはよくわかっていない感じで自分を指差していたが、間違いなくあれのことだろう！

そんな俺たちを見てリゼヴィムが続ける。

「二人なら理解できるよねー？そう、悪神ロキが攻めてきたときだ」

リゼヴィムはそう言うといツセーを指さした。

「おまえさんがそれをやっちゃったのさ、おっぱいドラゴンくん♪おまえは、異世界の神である『乳神』とかいうのに接触した」

——やはり、あの謎の神様のことか！
リゼヴィムはさらに続ける。

「その神はな、この世界のあらゆる神話体系とは関連を持たない未知の神様だったんだぜ？まったく知らない世界のわけのわからなねえ神様がこの世界に接触を持った。一部の研究者の間じゃ、こいつは革命的な出来事さ」

「未知の世界に、未知の神様。——それで、どうするつもりだ？」

俺の質問にリゼヴィムはさらにテンションを上げながら答える。

「そう！それでな、俺は思ったわけよ！——攻め込んでみようぜ？つてな！」

——攻め込む？今、攻め込むと言ったのか！？

今の一言で全員の認識が一気に変わり、表情が一層険しいものになる。

警戒しながらリゼヴィムの次の言葉に耳を傾ける。

「でもでも、それは叶わない。なぜなら、こちらの世界の次元を守護するとしてもないドラゴンがいるから。——もうお分かりだね？そう！グレートレッドさんです！」

そこまで喋られたら、こいつが何をしたいのかはわかってしまう。

俺はリゼヴィムを睨みつけながら口を開く。

「つまりおまえは、グレートレッドを倒して異世界に攻め込みたいってことだな？」

俺の発言にリゼヴィムはパチパチと拍手をしながら満面の笑みを浮かべた。

「はい！だあああいせええいあああい！満点だよ！さすがは『紅髪クリムゾン・キラの斬り裂き魔クリムゾン・リップバー』！いや、『紅髪クリムゾン・キラの殺人鬼』と呼んだほうがいいのかな？かな？どう？うち来ない？」

リゼヴィムの質問に、殺気を込めた視線で返す。

リゼヴィムは肩をすくめ、わざとらしく残念がるように息を吐いた。

「だが、グレートレッドを倒すのはいくらおまえや邪龍、そのリリスがいても無理だ。諦めて——斬られる」

「確かに俺たちじや無理。サマエル使おうにもハーデスじいさんが邪魔してきそうだし、改造邪龍軍団にも影響が出てやる前に全滅しそう。となると、一つしかないねえ。

——黙示録の一節を再現しようぜってよ？」

黙示録の再現……？黙示録に出てくるグレートレッド以外の怪物——

「……………『666』トライヘキサ」

俺が絞り出すように言ったその言葉。それを聞いたリゼヴィムはまた満面の笑みを浮かべる。

「もおう！俺の言うことが無くなっちゃうじゃん！ま、話しがいがあっていいけど。そうさ、黙示録に記された伝説の生物は何もグレートレッドだけじゃねえんだよ。——

『アポカリプティック・ビースト黙示録の皇獣』666、聖書の神に存在が示唆されたあの子がいればどうにかなると

思わないかね？」

「獣の数字——スリーシックス666が不吉の数字と呼ばれる大元になった怪物。だがそいつがどこにいるかは誰も知らねえはずだ！」

俺の言葉にリゼヴィムは俺を小バカにした表情で言う。

「残ねええん、不正解。誰も知らない？それがねえ俺たち見つけちゃったのよ。聖杯を使って生命の理に潜った結果、忘れ去られた世界の果てで見つけちゃったのよねー。だからね、どうにも誰かが先に見つけて嚴重に封印を施していたんだよねえ。誰だと思っかねえねえ、誰だと思っかねえ？」

リゼヴィムの質問に俺は考える。俺が知るなかでそんな化け物を封印できる可能性がもつとも高く、それを絶対に口外しない存在——。

「——まさか、聖書の神……ッ！」

「大！正！解！何でロイチちゃんはわかるのさ？せっかくおじさんが教えてあげようと思っただのに！案外頭がいいのかな？それとも勘がいいのかな？まあいいや、聖書の神の死亡理由が案外それかもしれないのよねえ。何せ、施してあつた封印術式、マジで凶悪かつ禁止級のやつばっかだったわけだし。あんなのしたあとに戦争すりや、聖書の神が消滅してもおかしくねえって」

やはりか。俺が知るなかでそんな伝説級の怪物を封印する絶対的な力を持ち、絶対に口外しないのは聖書の神しかない。死んでいれば口外もくそもねえ。

アザゼルが何かに気づいたようにヴァレリーが横たわっている寝台の辺りに視線を送った。

「マリウスが使った術式はその封印術式から再現したのか!」

リゼヴィムは大きく頷いた。

「はい!アザゼルくんにワンポイント!その通りだぜ!現在進行形で封印を解除中だ!聖槍があればもつと楽になるんだらうけど——ま、聖杯と聖十字架の協力で事は順調つすわ」

聖遺物レリックがそつちでも使われてんのか。まったく悪用されてばかりだな。

俺が小さくため息を吐くと、リゼヴィムは意気揚々と宣言する。

「つーことで俺らは、トライヘキサ666くんを復活させて、グレートレッドを撃破、撃滅、撃退して、

復活邪龍くん軍団とトライヘキサ666を引き連れて異世界に殴り込みかけんのよ!あっちの世界を蹂躪する!考えただけでもイッちゃいそうになるなあ。俺が異世界の大魔王になれるかもしれないねえんだよ?いいじゃん!いいじゃん!」

「くだらねえな、リゼヴィム。他所よそ様に迷惑かける前に——おまえを斬る!」

俺はそう言つてオーラを再び解放する!空になったと思つていたが、マリウスを撃つたときになんか力が溢れ始めたんだよな。

リゼヴィムが俺の声真似をして続ける。

『くだらねえな』とか言わないで欲しいなあ。ねえ、忘れてない？俺たちは悪魔、『悪』で『魔』の存在なんだよ？じゃあやることは一つ！気に入らない奴をぶつ殺す！ただそれだけだろお！』

全員がそれを聞いてリゼヴィムを睨みつける。

それを見てリゼヴィムは笑った。

「嫌だねー！それは悪魔の眼じゃねえ。そいつは『正義』の眼だ。ヒーロー様の眼だ。救えないねえー。特に赤龍帝の坊主、自分が何かわかつてんのか？おまえさんはドラゴンで悪魔なんだぜ？」

イツセーはそれを聞いて更にオーラが高まる。リゼヴィムの言葉を挑発と受け取ったんだろう。

俺たちが臨戦態勢に入ったのを確認してリゼヴィムが言う。

「いいぜ、来いよ。孫のお友達は歓迎しなくちゃな」

リゼヴィムはそう言いながら挑発するように手招きをしてくる。

「言ってる！聖杯だけは返してもらおうぜ！」

リゼヴィムに真っ先に飛び出したのはイツセーだ。

———つて見てる場合じゃねえだろ！

「イツセー待て！リゼヴィムの能力は———」

俺の制止の声に構わずにイツセーはドラゴンショットを放った!

そのまま真っ直ぐリゼヴィムに向かうドラゴンショットだったが、リゼヴィムに当たった瞬間あっさりと霧散した。

やはり、ダメか………ッ!

「——なっ!?! どういうことだ!?!」

イツセーは驚くが当たり前だろう。今の一撃はまさしく会心の一発だった。だが、結果はさっきの通りだ。

イツセーの疑問に俺が答える。

「……イツセー、覚えとけ。リゼヴィムの能力は現在悪魔唯一の『セイクリッド・ギア・キャンセラ神器無効化』だ。

言葉の通り、奴には^{セイクリッド・ギア}神器のあらゆる能力が効かねえ」

「——ッ!?!」

今の説明でリアスたち全員が驚愕していた。

当たり前だろう。リゼヴィムの能力上、現在リアス眷属の主力であるイツセーと木場は戦力にならないということなのだから。

そのリアスたちの表情を見てリゼヴィムは醜悪な笑みを浮かべた。

「サーゼクスくんの眷属がなぜ非^{セイクリッド・ギア}神器所有者で構成されているか? 理由は色々あるけど、そのなかで一番大きな意図は、俺と直接対決したときに役に立たねーからなん

だよ？ご理解できたかな？おかげで聖杯にも触れられないんだけどさ！」

リゼヴィムはそう言うのと手元の空間を歪ませ、聖杯を異空間にしまつてしまう。

「……そういうことだ、イツセー。だから、リゼヴィムは俺が殺る！」

俺は銃口をリゼヴィムに向け発砲するが、弾丸はリリスにあつさり^やと防がれてしまつた。

「…………やはり、その子と引き離さないと駄目か」

俺はそう言いながらいつたんオーラを抑える。無駄に消耗しないようにしねえと。

リゼヴィムには神セイクリッド・ギア器は効かず、それ以外はリリスが防ぐ。

うまく引き剥がせたとして、リゼヴィムと一対一は——キツいな。兄さんたちならいけると思う。てか兄さんにリゼヴィムを任せて、俺たち全員でリリスを足止めすればいけるはず。

——無い物ねだりしても仕方ねえ。さて、どうするか。

俺たちが色々と考えているのを見て、リゼヴィムは愉快そうに笑い、何度も頷いていた。

「ま、余興はこれぐらいにして、見せたいものがあるのよ」

リゼヴィムはそう言う^とと一度指を鳴らす。すると、室内に立体映像が出現した。

「これは、城下町か？」

俺がそう呟くと、リゼヴィムは今まで以上に機嫌よさそうに言う。

「うーん、惜しい！正確にはカーミラ側の城下町でございます！」

なるほど、カーミラ側の城下町か。一見何も変わったことはないが…………。

リゼヴィムは続ける。

「これから起こるのは楽しい楽しいライブですぞ。俺が今から指を鳴らすと——

」

と言いながら指を鳴らすリゼヴィム。

「——大変なことが起こりますよ。予想できます？はい！ロイちゃん！」

「……………破壊活動か何かだろ？」

「うーん、またまた惜しい！ちよつと違うんだよね」

「いちいち俺に振りやがって！——答える俺も俺か？」

俺が心の中で毒づくが、映像には何も起こらない。

リゼヴィムも首を傾げて映像を見ていた。

「ちよーつと待ってね。うん、そろそろかなあ。あ、ほら！」

リゼヴィムは子供が面白いものを見つけたときのようなテンションで映像の一部を

指し示す。

映像をよく見ると、黒く大きなものがちらほらと飛び回っていた。そしてその数がド

ンドン増えていく!

あれは——ドラゴン?何か、かなりの数がいるように見えるんだが………!!

リゼヴィムはそれを見てはしやぎだした。

「謎の黒いドラゴンが大量に出現しました!ここからあの子たちが大暴れしちゃいます!おつ!さつそく火を噴いた!いいねえ!いいねえ!そうこなくちやねえ!」

「リゼヴィム!おまえ、何をした!」

城下町を襲うドラゴンの映像をバックに俺が訊く。だがリゼヴィムは醜悪に笑うだけだ。

「ロイちゃん、逆にどう思うよ?俺が考えたことをほとんど理解し、答えたキミにならわかるんじゃない?」

「……………くそ!めんどくせえ。だが考えろ。一番あり得そうな可能性。リゼヴィムが考えそうな可能性を——」

俺はそこで、一つの一歩あり得て欲しくない結論にいたった。

「カーミラにも聖杯による強化をされた奴がいたのか……?じゃあ、あのドラゴンは——吸血鬼?」

俺の困惑混じりの回答にリゼヴィムは今までの会話でも見たことがないぐらいの満面の笑みを浮かべ、拍手を送ってくる。

「大正解だ！ やっぱりうち来ない？ ねえねえ来ない？ 今は返事しないでいいや！ ほら、吸血鬼が起こしたことは吸血鬼がつて言つてたじゃん？ だから町を壊すのも吸血鬼が—— 『元』吸血鬼がいいかなーつて思つたわけよ。てなわけで、邪龍になつてもらいました！」

やはりか！ こいつらしい、実にこいつらしい胸くそわりい手段だ。

だが、それがわかつたところでどうする。カーミラ側の兵士はほとんどこつちに来ていて、向こうに戦闘要員はほとんどいないはず……。しかも外からの援助を極端に嫌う吸血鬼だ。このままだと——全滅する！

俺が最悪の想定をした瞬間、俺たちを大きな揺れが襲つた。

今のは地震じゃねえ。今のは爆発からくるもの……………。

「リゼヴィム、まさか！ こつちの連中も邪龍になるようにしていたのか！」

リゼヴィムは嫌な笑みを浮かべた。

「その通り。こつちの強化吸血鬼も邪龍くんになつて大暴れしていると思ひます♪ てかしてるね！ この揺れはしてるよね！」

くそ、こつちもかよ！ いいよ切羽せっぽつまつてきたな！

リゼヴィムはもう一つ立体映像を展開し、ツエペシユ側の城下町の様子も映し出す。

「……………何てこつた……………」

俺は映像を眺めながら再び怒りが溜まり始めていた。
力のないヒトたちが一方的に虐殺される光景。そんなものを見せられて頭にこない
奴はいねえだろ……………！

そんな俺を他所にリゼヴィムは続ける。

「この調子なら壊滅も時間の問題かなあ？」

「リゼヴィム……………ツ！」

俺が今までにないほど殺気を放ちながらリゼヴィムを睨むが、奴はそれを受けて肩を
すくめるだけであり、再び指を鳴らす。

すると、俺たちの足元に転移型魔方陣が展開された。

「気になるようだし、見に行こっか」

リゼヴィムがそう言うなり、俺たちは転移の光に包まれたのだった——。

l i f e l 3 心なき殺人鬼

転移の光が止み、視界が回復すると——そこは夜の城下町だった。俺たちは町を一望できる塔の頂上に飛ばされたようだ。

そこから見えるのは、空中を飛び回り火炎を吐き出す邪龍たちの姿。ここままだと、壊滅は時間の問題だ……………。

俺は怒りを抑えるように歯を食い縛り、上空のリゼヴィムを睨み、横のヴァーリはリゼヴィムに怒鳴る。

「リゼヴィムッ！」

「やつほー、ヴァーリきゅん♪お祖父ちゃんが遊んであげるぞい☆肩たたきしてくれると嬉しいな！」

空を飛びリゼヴィムはリリスを脇に抱えてこちらに手を振ってきていた。ヴァーリは光翼を展開し、リゼヴィムのほうに飛び出していく

「おい、ヴァーリ！」

アザゼルが制止の声をあげるが、ヴァーリはそれを無視してリゼヴィムとの戦いを始めてしまう！

殺したい相手の挑発でいつもの冷静さを欠いてやがる！

「アザゼル！悪いが俺もリゼヴィムに行くぞ！下手したらヴァーリが殺されかねねえ！」

俺が翼を展開させながら言うと、アザゼルは小さく舌打ちをしてから頷く、

「チツ！人手が欲しいところだが、ヴァーリを頼む！」

「ああ！」

俺が飛び出そうとすると、リアスが俺を呼び止める。

「お兄様！フェニックスの涙を——」

俺は懐に手をいれるリアスを手で制し、強がるように笑みを浮かべてリアスに言う。

「リアス、それは住民に使ってやれ。俺は大丈夫だ」

リアスにはそう言うが、相手は格上もいところの化け物だ。最悪おれは——。

「ロイ、東門の地下にシエルターがある！そこに住民を避難させておくから、終わったらすぐに来い！」

思考を切り上げてアザゼルの言葉に頷き、空中で戦うヴァーリとリゼヴィムのほうに向かう！

俺がリゼヴィムに向かって飛び出していく中で、ヴァーリがリゼヴィムに蹴り飛ばされ下の建物に叩きつけられた。

ヴァーリをあつさり蹴り飛ばすとは、腐つても超越者つてことか………！

左手に保持していた銃剣の銃口をリゼヴィムに向け、フルオートで連射。手に魔力を溜め、ヴァーリに追撃を放とうとしていたリゼヴィムを牽制する。

リゼヴィムはそれを察知し、ヴァーリに放とうとしていた魔力をこちらに放つてきた！

リゼヴィムの一撃はあつかりと銃弾を飲み込み消滅させると、その勢いのまま俺に向かつてくる！

「——ッ！」

突撃の勢いを殺さず、体を捻ってギリギリでそれを避ける。銃剣の刃に魔力を込め、大上段から振り下ろす！

リゼヴィムは空いている手に魔力を込め、手刀を作つてそれを受け止めた！

リゼヴィムは嬉々としながら言う。

「んく♪セイクリッド・ギア 神 器が絡まない攻撃はひやひやするねえ！」

リゼヴィムは腕を振り抜いて銃剣を押し返し、そのまま突きを放つてくる！

「チッ！」

舌打ちをしながら右手に長刀を生成、その一撃を受け流してそのまま斬りかかる！

リゼヴィムの腕は伸びきつて戻せていない！これは——入る！

俺の確信にも似たそれは、リゼヴィムが抱える女の子——リリースによつて長刀もろとも粉碎された。

凄い破壊音が耳に届き、俺は目を見開かせながら驚愕した。

脇に抱えられた体制から一撃入れてくるのかよ……ッ！

リゼヴィムが手刀を振り抜こうとすると、下から魔力の塊が上昇してくる！

「——まだだ！」

ヴァーリがようやく復活したようで、こちらに向かつて急上昇してきていた！

俺は素早くその場を待避、その瞬間にヴァーリの放った一撃はリゼヴィムに直撃。奴

に大ダメージを与える！

——「これはなく、イツセーのドラゴンショット同様に霧散してしまった。」

『セイクリッド・ギア・キャンセラー神器無効化』の能力が厄介だ。ヴァーリを戦力にカウントできねえ！

銃剣を変形させて剣モードに移行、長刀との二刀流の構えを取り、ヴァーリと肉弾戦を繰り広げるリゼヴィムに突貫する！

瞬時に間合いを詰めリゼヴィムに剣撃を放っていくが、リゼヴィムは俺とヴァーリのラッシュを的確に避け、反撃の一撃を放ってくる！

反撃をギリギリで避けつつ斬りかかってくるが、いつも通りとはいかない。

横がむしやらにリゼヴィムに拳を放っていくヴァーリが『邪魔』だ！先ほど同様、い

つもの冷静さを欠いているこいつに連携を求めることが自体がお門違いか！

ついにヴァーリが顔を殴り飛ばされ、俺も腹を蹴り抜かれた！

「——かはッ！」

体をくの字に曲げ、肺の空気を吐き出しながら吹き飛ばされた！

翼を動かして無理やり姿勢を制御。家屋への激突を避ける。

剣を銃剣に戻し、リゼヴィムに発砲。吐き出された滅びの弾丸がまっすぐ突き進んでいくが、リゼヴィムの手刀に弾かれる。

ダメ元で撃ち続けながら間合いを詰めていき、長刀に魔力をさらに込める。

ここまで力の差があるとどうにもならねえ。一撃にすべてを懸ける——ッ！

魔力を溜め終えた瞬間、射撃を止めて一気に間合いを詰める！

リゼヴィムが魔力弾を放ってくるが、縦横無尽に動き回って全てを避け、長刀を右肩に担ぐように構えを取り、間合いに入った瞬間に上体の捻りを加えて一気に振り抜く！

今の俺の全力。これがダメなら——。

「舐められたもんだね〜」

パリン……………。

「——ッ！」

リゼヴィムが軽口を叩きながら手刀でそれを粉碎。砕け散る夢い音が俺の耳に届い

た。

その矢先、視界が一瞬霞んだ。ま、まずい……。魔力が――。
砕け散った長刀が霧散。それと同時に左肩に激痛が走った！

「ぐ……………」

霞んだ視界が痛みにより再び鮮明になる。

リゼヴィムの抜き手の一撃が肩を抉っていた…………。

それを視認した瞬間、一気に左腕から力が抜け、保持していた銃剣がこぼれ落ちる。

それをすぐさま拾いに向かい、リゼヴィムとの間合いをあける。

右手で地面に落ちた銃剣を拾い上げ、剣モードに切り替える。右拳で左肩を押さえながら荒れた息を整える。

「はぁ……………はぁ……………」

息を整えながら、思考を巡らせる。

銃剣を使うおうにも魔力がない。斬りにいったとしても、魔力切れで動きが悪い。どうする――！

俺がそう思慮したとき、リゼヴィムが地面に降り立つと同時にリリースをこちらに放つてくる。

「リリースちゃん。重い一撃、頼みます！」

「ッ！」

俺はすぐさま回避行動に移ろうとするが、もう遅かった。

リリスが見た目はかわいらしい動作で拳を放くる！その一撃は俺の腹部を的確に捉え――。

グシャッ！

「ッ！」

何かが潰れる音と共に異常なまでの衝撃が全身を駆け巡り、大量の血を吐くと同時に吹き飛ばされた。

数えることがバカに思えるほどの建物をぶち抜いていき、水切りの石のように地面を跳ねながら再び壁に背中から激突。それでもようやくやく止まる。

………城壁かなにかまで吹き飛ばされたか………？

壁に軽くめり込んでいる体を無理やり動かそうとするが――、

「ッ！」

全身に激痛が走り、うつ伏せに崩れ落ちる。これは、命にかかわるもの以外の全身の骨が折れてやがるのか………？ 剣も落とすしちまったみたいだ………。

うつ伏せに倒れたまま、いつになく荒れた息を整えようとする。だが、息をするたびに胸が、肺がいてえ………。

息をするたびに表情を苦痛で歪ませていると、

「ゴボー！」

息の代わり血を吐いてしまった。

肺に骨が刺さってやがる……………。

なぜか冷静でいられる自分に驚きながら、霞む視界に映る銀髪の男を睨む。

「お、生きてる？リリスちゃんが加減してくれたのかな？動けない？死にそう？なら結構」

身動きの取れない俺の近くに、銀髪の男——リゼヴィムが降り立った。

ヴァーリチーム、黒歌はツエペシユ領に突如として現れた邪龍を蹴散らしながらリーダーを探していた。

チーム全員で相手をしていた聖十字架の使い手は邪龍の出現と共に撤退していた。

ならば、リーダーと合流し、現状を確認したほうがいいだろう。チームの面々もそれ

を承知し、それぞれが町に散った。

邪龍が大量に出現したせい、か仙術による探知の効きが悪く、文字通り足で探していた。

(やれやれ、どうしたもんかにな)

ヒトがいない事をいいことに盛大にため息を吐く。この際どこかにいる白音を探してもいいかとも思いついて始めた。

「……………ん？」

黒歌の耳に遠くから何かが崩れる音が届く。その音は少しずつ近づいてきており、黒歌が警戒態勢に入った瞬間――

「――え？」

黒歌の目の前にあつた建物を爆音に似た音と共に粉碎し、紅髪の男性――ロイが飛び出してきたのだ。彼は黒歌に気づくことなくそのまま吹き飛ばされていく。

黒歌は間の抜けた表情になっていたが、彼女の足元にロイが使っていた剣が落下した音を合図に表情を引き締める。

彼の強さはある程度理解している。そんな彼が、いったい誰を相手にすれば――

思考した矢先、黒歌のはるか上空を一つの気配が通り過ぎていく。ヴァーリに似てい

るが、彼とは根本的に違う邪悪な気配。

その瞬間に理解する。おそらく相手はヴァーリの祖父、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーだ。それならば彼が負けることもあるだろう。

問題は、そのリゼヴィムがロイのほうに向かっていることだ。このまま行けば、彼は確実に殺させるだろう。

足元に落ちた剣を拾い上げ、思考する。

(助けに行つたつてどうにもならないし、私も殺されるかもしれない)

『そのヒトに何かあつたら、部長に会わせる顔が——』
いつかに妹に言われた言葉が脳裏によぎる。

彼が死んだら、彼の周りにいたヒトたちが泣くだろう。そこには妹も含まれる。それに——。

「大事な種の持ち主だし、ここで恩を売っておきますか」

自分に言い聞かせるようにそれを口にし、ロイが飛ばされた方向に駆け出した。その震える手を、できるだけ気にしないように——。

血まみれで倒れるロイを見下ろし、リゼヴィムは笑む。

左腕はあげられなくなり、右腕も曲がってはいけないうままで曲がっている。両足は見た目は無事だが、骨にヒビが入っていることだろう。

完全優位の状態のリゼヴィムがロイに言う。

「ヴァーリきゆんはあれから全然出てこないし、ちよいと話そうや。ちなみにリリースちゃんは先に帰ってもらったから安心してね」

「おまえと……話すことなんか……ねえ……!」

息も絶え絶えの状態で返すロイにリゼヴィムが怒鳴る。

「いいから聞きなさいって!俺さ、ロイちゃんを見て一つ思ったことがあるんだよね」
倒れるロイに構わずリゼヴィムは笑顔をより一層強くして話し始めた。

「ロイちゃんさ。あんたは俺の『同類』だよ。今ある状況に満足してねえだろ?心のどっかではあんたも戦いを求めている。俺にはわかる!あんたの眼は確かに俺の大っ嫌いな正義の眼だ。だがあんたの眼だけには影が見えた。何が言いたいかわかる?本当のあんたは正義のために戦うような奴じゃない。あんたは俺らと同じ悪側の奴さ」

ロイはそれを聞いて小さく唸る。リゼヴィムが言っていることに反論したいが、今の彼にはその体力も、説得力もない。彼はつい先ほど、ただ殺すために力を振るってし

まったからだ。

「でもでも、あんたは正義の側に立つて戦ってる。何で？こつちに来たほうが楽しいよ？刺激的だよ？やっぱあれかい？家族や恋人は裏切れないってか？」

「おまえに、何がわかる？血の繋がった孫を、家族を何とも思わないお前に、何が——ゴッ！」

「おいおい……。無理してつと死ぬぞ？」

リゼヴィムは血を吐いたロイに息を吐いてそう言うのと、顔が真剣なものに変え言葉に迫力をこめ始める。

「私はなロイくん。キミに私たち側に来てほしいと思っっているんだよ」

「——ッ！」

ロイは口には出さないが驚いていた。いつもふざけていたリゼヴィムが急に真剣な顔を——魔王ルシファーとしての風格を放ち始めたことに。

「キミは私の考えを理解し、予測した。キミと私は似ているんだよ、考え方がね。別にいいじゃないか、殺したいから殺すことも、裏切ることも、キミは今に満足しているのかい？本当の自分を抑え、誰かのために戦う自分に」

「……………」

ロイは考えこむように黙りこみ、視線を泳がせる。

リゼヴィムはそんなロイを見ながら、だめ押しと言わんばかりに言った。

「私たちの元に来い！そうすればキミは自由に戦える。本当の悪魔として、キミが気に入らないものをその剣で斬り裂いていけばいい。強いものが弱いものを支配し、服従させる。気に入らない奴を殺す。私が目指しているのは異世界でそれを行うことだ。キミはそれに——私の夢に共に参加したくはないのか？未知の敵と何度も戦える。その戦いに。さあ、ロイ・グレモリーよ！」

ロイはそこまで聞くとりゼヴィムを見つめ、痛む体を無理やり立ち上がらせる。笑う膝を気力で支え、リゼヴィムに面と向かって言う。

「俺は………大きな勘違いしていたようだ………」

明らかに敬意を払うような声音になったロイに、リゼヴィムは祭儀場で見せた無邪気なものとは違う、冷静な喜びを感じる笑顔を見せた。

「そうか！わかってくれたか！」

リゼヴィムはそう言いながら倒れかけるロイの体を支え、そのまま抱擁した。

「それなら話が早い！すぐに治療を——」

「………ああ、ようやくわかったよ」

「……？」

疑問符を浮かべシドウの顔を覗き込むリゼヴィムに彼は、まったく感情を感じさせな

い声を発する。

「……………ヴァレリー、おまえの言葉の意味が」

ロイがそう言った瞬間、かつてないほどの魔力が彼の体から放たれる！

「——ッ！」

リゼヴィムは驚愕しながら後ろに飛び退き、ロイを睨む。

「……………貴様！何をする！」

「……………ああ、リゼヴィム、おまえの言うとおりだ。俺は正義側じゃない。俺は悪側だ。

おまえの話で目が覚めた」

シドウがそう言うのと体に黒いオーラを纏いはじめる。

「そう……………。俺は『クリムゾン・キラ紅髪の殺人鬼』……………。誰かを殺すことが当たり前、イカれ野郎

だ。なら——」

彼のその言葉と共に体を黒いオーラが包み込み始め、殺気を含めた一切の感情のない

顔でリゼヴィムを見る。

「——心なんていらぬ」

彼が最後にそう呟くと、彼の体は完全に黒いオーラに包み込まれ、表情がうかがえなくなる。同時に右腕がうごめき、『バキッ！』という音と共に元の向きに戻った。

リゼヴィムは驚愕しながら漏らす。

「これは、まるでサーゼクスではないか」

リゼヴィムの言うとおり、今のロイは黒いオーラに体を完全に包まれ、表情もわからなくなっている。

知っている者からしたら、今の彼は『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』の異名をとる、サーゼクス・ルシファアの全力と同じに思うだろう。

もつともロイの滅びでは地面が消し飛ぶほどのパワーはないのだが……………。

『……………』

ロイがリゼヴィムに視線を向けた瞬間、黒い軌跡を残しながら一瞬でリゼヴィムに肉薄する！

リゼヴィムは驚愕した。魔力が一切残っていなかったはずのロイから異常なまでの魔力が溢れ始め、今や——。

『……………』

「ッ！」

ロイが放った高速のストレートがリゼヴィムの腹部を捉える。だが、リゼヴィムはとつさに魔力を腹部に込めたため、貫通はしていない。だが、衝撃は確実に通っていた。勢いそのまま撃ち抜かれ、地面に足をつけたまま吹き飛ばされるリゼヴィム。彼はその体制のまま魔力を手に込め、拳ほどの大きさの魔力弾を連続でロイに向けて放つ！

ロイはそれを冷静に体捌きのみで避け、背後にあった建物に直撃、そのまま倒壊していく。

ロイはそれを気にすることなく、お返しと言わんばかりに指先から魔力弾を放った。リゼヴィムはそれを障壁で防ごうとするが、その瞬間に魔力弾が弾け大量の刃が散弾のようにリゼヴィムに降り注いだ！

とつさに障壁の範囲を広げてそれらを防ぐが、リゼヴィムの周辺の地面を抉り、大量の穴を開けていく。

リゼヴィムはそれを確認して冷や汗をかく。直撃すれば、自分があなると予想することは簡単だった。

彼の両腕は使い物にならないほどぼろぼろだった。なのに、なぜ彼は——

ロイは再び肉薄。リゼヴィムの顔面に渾身の右ストレートを放つ。

リゼヴィムはそれに肘で合わせ、正面から激突したロイの拳から何かが砕ける音が響く。

リゼヴィムは一瞬笑みを浮かべる。今の一撃は、確実に骨を砕いた感覚があったからだ。

——だが、ロイは素早く右腕を引き、再び顔面に拳を放つ！

「な——ッ！」

リゼヴィムは驚愕しながらもそれを避け、再び間合いをあける。

「貴様、一体——！」

驚くりゼヴィムに、ロイがゆっくりと右手を握りながら無感情な声音で言う。

『戦いに痛みはいらぬ。そうすれば死も怖くなくなる』

「——ッ！」

ロイの言葉にリゼヴィムは一層驚愕を強くする。

彼の言葉を鵜呑みにすれば、彼は『痛覚を無視』しているということだ。

痛みとは体からの警告である。それを無視しているということとは——。

ロイは左手をリゼヴィムに向け、そこから黒いオーラを解き放つ！

高速で放たれたオーラの濁流は、地面と空気を挟み取りながらまっすぐリゼヴィムに向かつていく！

リゼヴィムは小さく舌打ちをすると、それを跳躍して避ける。的を失ったオーラは直進していき、進路上の建物も挟りつつっていく。ある程度進んでいくと、オーラは霧散していった。

リゼヴィムがそれを確認したと同時に眼前にまさに拳を放とうとしているロイが現れ、一気に拳を振り抜いた！

リゼヴィムの顔を捉えた一撃は凄まじい快音を響かせ、空気を震わせる。

リゼヴィムが背中から近くの建物に激突。大量に舞った砂塵で姿が見えなくなった。ロイもゆつくりと降下し、地面に足をつける。同時に体の各所から血が吹き出るが、彼はそれを気にする様子もなく、リゼヴィムの気配を探る。

リゼヴィムが自信のオーラで風を起こして砂塵を吹き飛ばし、鼻血を拭つてロイを睨む。表情には若干の焦りがあつた。

リゼヴィムの先ほどの言葉は真実であり、ロイを引き込みたいのは事実だ。どうにか生け捕りにしたいがために、ある程度加減をしている。

——だが、このままいけばこちらが死ぬ。

リゼヴィムの脳裏にその考えがちらついた。このままロイの魔力切れを狙うのもいいが、ヴァーリがいつ戻ってくるかもわからない。

リゼヴィムがそう思慮した矢崎、視界の端にあるものが映つた。その瞬間、リゼヴィムの顔は今までにないほど邪悪な笑みを浮かべていた。

黒歌はロイを追うことを決めたことを後悔していた。

(な、なんで町の真ん中から端っこまで飛ばされるかな!?)

若干息を切らしながら走ることに数分。ようやくロイとリゼヴィムがいる城壁近くまでたどり着き――、

「――ッ!」

同時に驚愕した。

倒壊した建物と抉りとられた地面。地面に大量の穴があいている場所もある。

別次元の破壊の爪痕が残されたその一角に、彼の姿があった。

黒いオーラで全身を包み、敵がいる方向を見つめる誰か。いや、あのオーラは――

!

「……………ロイ・グレモリー」

ぼそりと彼の名を口にする。いつかに座禅をした時に感じた、どこまでも冷たいオーラを全身に纏っているのだ。こちらに気づいているはずなのに、興味がないように前だけを見続けている。

彼の持つ『何か』があればとしたら、彼が妹の近くにいるのは危険だ。

黒歌はそう判断したとき、全身の毛穴が開く感覚に襲われた! 強烈な殺気を全身に受けたのはすぐに判断できる。

突然放たれた殺気の出所を見ると——邪悪な笑みを浮かべたりゼヴィムがこちらに魔力を溜めた腕を向けていた。

気づいた時にはもう遅く、リゼヴィムの手から超高速の魔力弾が放たれた。

防御も回避も間に合わない。当たれば確実に——。

超高速で放たれたはずの魔力弾がゆっくりと進んでいるように見える。いや、魔力弾だけではない。自分の残された時間の全てがゆっくりと進んでいるのだ。

（ああ、やっぱり来なきや良かったな……………）

黒歌は後悔しながらも、小さく笑みを浮かべる。

（白音、ごめんね……………）

最期に浮かんだのは迷惑をかけてばかりの妹の顔。そして、妹の顔を思い浮かべて思ったのは——、

（私が死んだら、あの娘は泣いてくれるかな……………？）

黒歌にとつてただ一人の家族を置いていく後悔。

ようやくまた会えたのに、今度は二度と——。

すぐさま来るであろう衝撃を受け入れように目を閉じた。

凄まじい爆煙が黒歌を包み込み、彼女の存在を完全に消滅させた——。

「……………あれ？」

——はずだった。

なぜか無事で済んだことに驚くよりも先に、なぜ自分は——、

「はあ……………はあ……………」

「な、なんで……………？」

ロイに抱えられているのだ。かなり無理をしたのか、息が荒れている。

ロイは城壁に背中を預けるようにもたれ掛かり、黒歌はそんな彼の胸に顔を埋めるように抱えられて——正確には抱かれていた。

右腕でしっかり体を押さええられ、かなり密着している。

黒歌は自分の右足に生暖かい液体が垂れてきたことに気づく。

嫌な予感と共に黒歌がロイの左腕を見ると、黒歌の表情は一気に青ざめる。

「——ッ！」

ロイの左腕の肘から先——前腕にあたる部分がなくなり、そこからおびただしい量

の血が流れ出ているのである。

「あ、あんた……………」

黒歌が悲痛な目でロイを見るが、それを気にせずに彼は黒歌の背後に目を向ける。

黒歌がつけられるように後ろを向くと、視線の先でリゼヴィムが残念そうに息を吐いていた。

「ロイくん、どうしてそんな愚か者を守るのだね。『はぐれ悪魔』など、命はおろか片腕を犠牲にして守る価値もないだろう?」

リゼヴィムの言葉に黒歌は俯く。自分は罪人であり、責められるべき立場なのだ。

だが、ロイは左腕を無くしてまでそんな自分を守った。

ロイは息を吐き、リゼヴィムに言う。

「確かに……………ただの『はぐれ悪魔』なら、守る価値もねえよ……………」

「ならば——」

「だが——」

ロイはリゼヴィムの言葉を遮り、黒歌に向けて言うように口を開く。

「こいつは、黒歌は——俺の仲間だ」

ロイはそう言うのと黒歌を自分の後ろに隠すと、おぼつかない足取りでリゼヴィムに向かう。

一步踏み出すごとに左腕から大量の血が吹き出し、地面に大きな赤いしみをつくる。それでもロイは止まらず、リゼヴィムに言い放つ！

「なら、死んでも守るさ。それが今の俺の生き方なんだ！」

ロイの体から先ほどとは違う紅のオーラが放たれ、同時に彼は駆け出す。駆け寄りながら右手に紅い刀身の長刀を生成、勢いのままリゼヴィムに振り下ろす！

リゼヴィムはそれを今まで同様に手刀で受けようとしたが――

「――なっ！」

ロイの一閃はリゼヴィムの右腕を難なくはね飛ばした！

だが、ロイはそれを振り抜いた勢いで倒れ、そのまま動かなくなってしまう。

リゼヴィムは切り落とされた右腕を拾い上げると、魔力を使ってそれを繋ぎ合わせ、倒れるロイを見下ろす。

「……私にも届きうる力。下手をすればキミも超越者と呼ばれそうだな。キミをそちら側で野放しにしておくのは危険だな。だからこそ私はキミが欲しいわけだが……。少々力づくになってしまったが、後でじっくり話すでしょう」

リゼヴィムはそう言うのと微動だにしないロイに警戒しながら手を伸ばしていく。

黒歌が攻撃しようとした瞬間、白い閃光がリゼヴィムに襲いかかる！

リゼヴィムは後ろに飛び、白い閃光の正体を確認した。

「ヴァーリ、しつこいな！」

「リゼヴィム！まだだ！まだ終わっていない！」

ヴァーリは兜越しにリゼヴィムを睨み、攻撃に移ろうとする。

だがその瞬間、彼らの周辺を闇が染め上げた。

「これは、リアス・グレモリーの『僧侶』の！」

「ここまでか。ロイ・グレモリー、また会おう。その時には、その『甘さ』がなくなっていることを祈るよ」

リゼヴィムはそう告げるとどこかに飛びさっていく。

ヴァーリは大量の血を流して倒れるロイと、怪我をした様子はないが力なくへたりこんでいる黒歌を一瞥し、黒歌に怒鳴る。

「黒歌、そいつを介抱しろ！死んでしまうぞ！」

「——ッ！わかってるわよ！」

黒歌はヴァーリの言葉にハツとしながらロイのもとに駆け寄る。

ヴァーリはそれを見てひとつ頷き、リゼヴィムを追って飛び出していった。

黒歌にはそれを気にする余裕はなく、表情を引き締めてロイの体を調べ始める。

——何としても、彼を助けなければ。

l i f e l 4 新たな敵の名

「あー、もう！介抱しろって言われてもどうすればいいのよ!？」

黒歌は一人、怒りをぶつけるように叫んだ。

目の前には血まみれで顔色が悪いが、かろうじて息をして倒れているロイの姿がある。

仙術で自然治癒力を高めたとしても、その前に血が足りなくなる。

ならば止血するしかないが、こんな戦場に成り果てた場所にそれができる道具はない。そもそもそこまでの知識がない。

他にも手はいくつかあるが、下手にダメージを与える訳にはいかない。だが——思いつく限り、これしかない。

黒歌は息を吐いて集中し、魔力を操り始める。魔力を出血箇所を集め、そのまま氷に変換。傷口を凍らせて止血する。

外傷はこれでいいが、体の内側——骨や内臓はどうしようもない。フェニックスの涙が必要だ。

黒歌が次の手を思慮していると、そこに近づいてくる馴染みのある気配が二つと、感

じたことのない気配が一つ。後者の気配は感じたことがないが、二人と一緒にいるということは味方だろう。

それを感じた瞬間、黒歌はホツと息を吐く。彼らならどうにかできるはずだ。

アザゼルとリアスは、再びバロールの姿となったギヤスパーの先導で城壁の一角を指していた。

暴れまわっていた邪龍たちはほぼ殲滅され、リゼヴィムたちも撤退。住民たちの避難も完了している。

それらの確認を終えた彼らの表情はそれを感じさせないほど険しく、焦りの色が大きかった。

リアスが急かすように言う。

「ギヤスパー！お兄様は!?!」

《あそこだ!》

ギヤスパーが城壁近くの開けた場所を指差す。

アザゼルとリアスは頷きあい、加速。その場所に降り立ったと同時に二人の表情がより険しいものになる。

二人の視界には左腕の前腕がなくなり、血まみれで倒れるロイと、彼を必死に介抱する黒歌の姿が写っていた。一切動かないロイは、見るからに危険な状態であることは間違いない。

「お兄様、起きてください！お兄様！」

リアスは涙ながらに叫んで黒歌の横につき、懐からフェニックスの涙の入った小瓶を取りだして振りかける。

「お兄様、しっかり！」

全身から煙が吹き出し、傷が塞がっていく。だが、傷が治っても出した血が戻るわけではなく、ロイの顔色は悪い。

黒歌は両手をロイの胸にあて、そこから気を送り始める。傷が塞がれば、あとは自然治癒力を高めてやればどうにかなるだろう。

アザゼルが眉を寄せ、前腕がなくなったロイの左腕を見る。

「黒歌、何があつた……？」

アザゼルの問いに黒歌は歯を食い縛って押し黙り、ロイに気を当て続ける。

そんな彼女にリアスが怒鳴る。

「黒歌、答えなさい！お兄様に何があったの!？」

「——私のせいよ」

ロイの顔色がある程度よくなると、黒歌は短く漏らした。

黒歌はいつになく暗い声音で続ける。

「私があそこに行かなかつたら、彼はこんなことにはならなかつた。私なんかをかばわなければ……」

リアスとアザゼルは驚きながら倒れるロイを見る。

ロイが黒歌をかばった。曹操と戦ったときはその後ろにいる小猫を守るためというのが大きかったのだろうが、今回は——。

アザゼルは連絡用の魔方陣を展開、どこかに連絡を始める。

リアスは驚きながらもロイを見つめ、涙を流しながら嗚咽を漏らす。

黒歌は優しくロイの頬を撫で、

「いめんない……」

小さく漏らしたその言葉は、アザゼルにもリアスにも聞こえることはなかつた——
！。

俺——ロイが目を覚ますと、白い天井が視界に映った。

「……知らない天井だ」

回りを確認しようと鉛のように重い体を起こし、周囲を見渡す。だが、カーテンに仕切られていて確認ができなかった。ここどこだ？てか、どうなった？

思い出そうと頭を捻るが、急な頭痛に襲われて思考を切り上げざるを得なくなってしまう。ダメージが残っているのか………？

とりあえず病院かどこかだよな。

俺がそれを確認すると同時にドアが開いた音が聞こえ、次に『シャツ！』と勢いよくカーテンが開けられた。

そこには仕事服姿のセラが——。

「セラ………」

「ロイ………」

セラは俺を見て目に涙をためながら抱きついてくる。

俺が抱き締め返してやると、セラが声を震わせるながら言う。

「な、何でよ？何で無茶ばかりするの……………？」

セラはそう言つて泣きながら俺の体を強く抱き締める。

無茶、か。リゼヴィムと戦つたことは覚えているが、確かに無茶をしたな。

だが、なんで無事なんだ……………？

「……………」

「……………ロイ？」

黙つて考えこんでいると、セラが顔を上げて俺を見つめてくる。

俺は笑みを浮かべて「何でもない」と返し、セラに訊く。

「ここ冥界か？病院なのはわかるが」

「うん、『セラフォルー記念病院』。吸血鬼の王国の邪龍を一掃できたつて連絡があつて

すぐにアザゼルから——」

『病院に医者集めとけ！これからロイをそつちに送る！』

「——つて連絡がきたの」

なるほど、アザゼルが連絡をしてくれたのか。いかん、何がどうなったのか思い出せ

ねえ……………。

「で、向こうはどうなったんだ？」

「邪龍出現を確認してから無理矢理御使ブレイブ・セイントいが介入してどうか………」

「それで、俺はどんくらい寝てた？」

「三日間」

「……………三日間も……………」

俺が嘆息しながら言うと、セラが再び泣き出した。

俺は少し慌てながら言う。

「え、ちよつ、泣くなよ。俺はどうにか無事なんだし」

俺はできるだけだけ元気があるっぽく言うがセラは泣き止まない。

「心配したのよ？……………今度はホントに死んじゃうかもって」

そう言って俯いたセラの頭を撫でてやろうと左腕を上げたが――。

「――ツ！」

「ロイ？」

――え？な、なんで？リゼヴィムと戦って、リリースに吹っ飛ばされたのは覚えてい

る。だが――！

息が荒れ、呼吸が苦しくなることが体感できた。だが、それ以上に――！

「セラ、なんで俺の腕――!?」

――無くなっているんだ!?

叫ぶように発しようとしたその言葉は続かなかった。

急に視界が歪み、全身から力が抜けていく。

「ロイ!?——イー!——して!」

暗くなった視界に響くセラの声が、目の前にいるはずなのに、妙に遠くに感じた——

翌日。

「ロイ、大丈夫?」

「ああ、どうにか……………」

どうにか落ち着いた俺にセラが水を渡してくれた。あのあと、また死んだように眠ってしまったようだ。

目を覚ましてあら話を聞いて、左腕が無くなったのは黒歌をかばったからだと言われた。それを言われても、本当に思い出せなかつた。

「それで痛いところとか、苦しいところはない?」

「頭と左手の指先がちよつとな………」

俺は左手を見せるようにあげるが、セラは悲しそうにそれを見る。

手足が無くなってもその感覚が残ること、『ある』と脳が判断してしまうことがある。

『幻肢』と呼ばれるものだ。で、そこが痛い。

セラは優しく俺の頬を撫でる。

「治療法を考えないとね。悪魔に不可能はないわ」

「いきなり物騒なことを言うな。ま、とりあえず義手をつけるさ」

聞いた話では、アザゼルが俺に合わせて義手を制作してくれているそうだ。それが届けば、生活に不自由はないだろう。

「でも、あんまり無理はしないでね？」

「大丈夫だ。これ以上の無茶はしねえよ」

俺の言葉にセラは頷き、安心させるように笑みを浮かべた。

俺も同じように笑みながら頷き返し、なんかいい雰囲気になっていると――、

「邪魔するよ」

誰かが入ってきた。

二人して若干不満げに病室の入口に目を向けると、

「おや、本当に邪魔だったか？」

「アジユカ様!？」

「アジユカちゃん!？」

そこには苦笑するアジユカ様が立っていた。入ってくるまで全然気づかなかつたぞ……。

俺がセラの手を借りて体を起こし、姿勢を正そうとするとアジユカ様がそれを手で制する。

「少し話をしに來ただけだ。樂にしてくれて構わないよ」

「わかりました」

俺が樂な体制になると、アジユカ様がいきなり本題に入る。

「キミとリゼヴィムの会話が腕輪に記録されていてね。その腕輪は腕ごと吹き飛ばされてしまったから、送られてきた部分だけだ」

「……………」

「どうかしたのか?」

首をかしげる俺にアジユカ様が訊いてくる。

俺は失礼を承知で訊く。

「いえ、その会話の内容が思い出せないのです……………」

「……………」

俺の言葉にアジユカ様はたいして驚いた様子もなく、続ける。

「どちらにしても、キミがこちらに残ってくれて嬉しいよ。ありがとう」

なぜか礼を言ってくるアジユカ様。俺は再び思い出そうと首を捻る。

リゼヴィムと戦って、リリスに吹っ飛ばされて――、

『心なんていらぬ』

「――ッ！」

そうだ、俺はあの時前世むかしを認めちまった……。そうだ、俺はただの――。

それを思い出したことに気づいたのか、セラが俺の肩を撫でてくる。

「先に言うけど、私もその音声を聞いているからね」

「セラ、俺は――」

俺の言葉を遮るようにセラが俺の頬を撫でる。

俺がセラに目を向けると、彼女は笑みを浮かべる。

「前から言っているけど、『あなたが何者でも大好きだから』。あなたが昔になにをして

いようと、私は信じるから」

「……………ああ、そうだったな」

俺は苦笑し、セラの手に俺の左手を添えようとするが、当たっているはずの距離なのにその感覚がない。

早く慣れねえと、今後に支障が出そうだな。

俺は小さく息を吐くとセラもそれに気づき、俺の頭を撫でてきた。

それを見たアジユカ様が言ってくる。

「左手の感覚が残っているのか。うん——」

何かを思いついたようにアジユカ様は頷くと、突拍子のないことを言ってくる。

「ロイクん、髪を貰おうか」

「——は？」

「決まれば即実行だな」

間の抜けた顔になっている俺をよそに、アジユカ様はどこからかハサミを取り出した。

「あの……一体なにを……?」

「セラフォルー、ロイクんをしばらく押さえてくれ。なに、すぐに済む」

「任せなさい☆」

「あの、俺の話を——」

俺の話など聞いていないように二人は行動を始める。

まともには抵抗できない俺はなすすべなくセラに押さえつけられ、アジユカ様のハサミの餌食になってしまったのだった——。

「——で、なんでこんなことを？」

肩ほどまでであった髪がぱっかり切られ、短髪になってしまった。

そんな俺の髪を撫でながらセラが上機嫌な声音で言う。

「前もよかったけど、この爽やかな感じもいいわね☆」

「はいはい。——で、なんでこんなことを？」

俺が再び聞き返すと、アジユカ様が俺の切られた髪を魔方陣でどこかに送り飛ばしながら言う。

「あの髪を元に左腕を再生させる」

「——は？」

「もろもろ禁術を使ってもいいが、キミへの負担が大きくなるからね。ならば、少々周りがるさいかもしれないが、クローン技術を応用して『生きた義手』をつくることにした」

間の抜けた顔になる俺を無視して、アジユカ様がなぜか生き生きとした目でそんな事を口にした。

『生きた義手』、ねえ。別に俺はアザゼルの義手でも構わないんだが……………。

俺のその考えを読めたのか、アジユカ様が言う。

『滅びの魔力』は強力なものだ。現に武器がもたなかつただろう?」

「ええ、爆発しましたね」

壊れた銃剣を思い出しながら俺は頷く。

アジユカ様は続ける。

「重ねて訊くが、義手もそうなら困るだろう?」

「そうですね」

「うん」

「はい」

俺とアジユカ様はそれを機にお互い黙りこむ。完全にアジユカ様のペースだ。

そんな俺たちを見ながら、セラがアジユカに訊く。

「それはいつできるの?」

「初めてやることだからな、案外早くできるかもしれないし、遅くなるかもしれない」

「それまではアザゼルの義手でやりくりすればいいんですか?」

「そういうことだ」

アジユカ様は即頷く。そのわけのわからない義手をつくることは決定事項のようだ。俺が口元を引きつらせていると、アジユカ様が思い出したように言う。

「ああ、そうだ。リゼヴィムが組織名を名乗ったそうだ」

「——ッ！奴は何と」

俺が訊くと、アジユカ様が憎々しげに言う。

「——『クリフオート』だそうだ。生命の樹の逆を表す名前。セフィロトの名を持つ聖杯を使って悪をなす。あまりいいセンスとは言えないな」

アジユカ様はそれだけ告げると、「では、邪魔したね」と言つて退室した。

『クリフオート』——それが今回の敵。

俺が表情を引き締めているとセラが言う。

「それじゃ、私も行くわね」

「ああ、悪いな。忙しいってのに」

「いいのよ。とりあえず、今は安静にしていなさい」

「わかつているさ」

俺が頷くと、不意にセラが顔を近づけて——、

「……………」

「……………」

唇同士が優しく触れあった。ようはキスしたのだ。

まあ、いつものことなので驚きはしないが……………。

顔を離れたセラは優しく笑うと、「またね」と漏らして病室から出ていく。

義手の件はともかく——寝るか。

l i f e l 5 チーム結成

吸血鬼の国での戦いから一週間が過ぎた頃。

リゼヴィムが率いる『クリフォト』の目的を知った各神話体系の主神は、彼らの目的を過去最高の危機レベルと断定。

和平を結んだ勢力同士で対抗策の協議をすることも決まったそうだ。

俺——兵藤一誠を含めた遠征組は無事に帰還し、深夜の駒王学園旧校舎に集まっていた。

俺たちだけではない、生徒会メンバー、シスター・グリゼルダとジョーカー・デユリオ、サイラオーグさん、シーグヴァイラ・アガレス、初代孫悟空さん、ヴァーリチーム、そして黒髪の男性、スラッシュ・ドック 刃 狗こと幾瀬鳶雄さん、アザゼル先生が一同に会していた。

ロイ先生はいない。リゼヴィムとの戦闘で重症になってしまい、入院しているのだ。リアスが全員の顔を合わせたところで口を開こうとすると、突然部屋の扉が開け放たれた。

全員の視線がその扉に集まり、そこに立っていたのは——、「悪い、遅れた」

入院中のはずのロイ先生だった！俺たちはロイ先生の登場に驚いたが、あることに気づき、驚愕で目を見開いたまま固まってしまふ。

——左腕の肘から先がなくなり、服の袖が余っているのだ。

ロイ先生は俺たちの視線に気づいたのか、自分の左腕を見て苦笑した。

「ああ、これか？気にすんな、義手は頼んである」

「こいつらが気になっているのはそれだけじゃないと思うが、まあ、その件は任せろ」

ロイ先生とアザゼル先生は頷きあうとロイ先生は空いている席に腰をおろした。

ゆつくり休めたおかげで記憶の混濁もなくなったので、俺——ロイは駒王学園に来た方がいいんだが、やはりタイミングを考えれば良かったかもしれない。

俺がそんな事を考えながら着席すると、アザゼルが早速本題に入る。

「リゼヴィムの野郎が動きだしてくれたおかげで様々な勢力から過激な発言も出始めている。まあ、邪龍どもとテロを始めたんだそうもなる。それにリゼヴィムは前ルシ

「ファアの息子だ。そのことで余計に各勢力を刺激しちまっている」

俺は頷き、アザゼルの言葉に続く。

「今まで『禍カオス・ブリゲードの団』のテロは三大勢力で何とかしろ』って言っていた連中もようやく協力してくれそうだからな。まあ、グレートレッドと666トライヘキサが戦ったら、最悪全世界が崩壊しかねないから当たり前か」

『——ッ！』

俺が最後にポロつと言った情報で全員が言葉を失っなくなってしまった。

俺は苦笑しながらそんな面々に言う。

「おまえら、そんな顔するなよ。それを俺たちが止めるんだからよ」

アザゼルも苦笑しながら俺に続く。

「ロイ、あんまりプレッシャーをかけるなよ、まったく。まあ、そう言うことだ。各勢力の首脳からある提案がされている。簡単に言うくと、リゼヴィムの野郎どもと張り合えて、すぐさま現地に赴ける『対テロ組織のチーム』を発足する」

アザゼルが俺たちにそう言うが、つまりそういうことだな。

俺がひとつの確信を得ているなか、アザゼルが言う。

「そのチームは各勢力の自由が利いて、強い者ほど都合がいい。もうわかるな？ここにいるおまえたちだ。悪魔、天使、堕天使、吸血鬼、妖怪、ヴァルキリー、死グリム・リッパー神、獣人、

人間、そしてドラゴン。チームとしては破格といってもいいだろう。何よりも物凄く動きやすい」

確かに、改めて言われてみると各勢力や種族の強者が集まっているよな。

このメンバーなら何かあってもすぐに動けるだろうし、一人一人がそれなりに強い。アザゼルの意見に反対するものはいなかった。

「私は賛成よ。こんなときだからこそ力を合わせるべきよ」

リアスが言うといッサーたちリアス眷属全員が頷いた。

「問題ないでしょう。俺もリアスや兵藤一誠と共に戦わせてもらおう」

「異論はありません」

「こちらも。主に後方支援になりそうです」

サイラオグ、ソーナ、シーグヴァイラも同意した。

「俺もいいぜえ。年寄り一人より若いもんとやったほうが楽しい」

初代も賛成していた。これは心強いな。

俺が心中で喜んでいるなか、ジョーカー・デュリオが首を捻っていた。

「何か不満か？」

アザゼルが訊くとデュリオは口を開く。

「名前が必要じゃないかなーって思ったんです。『テロ対策チーム』じゃ、なんか堅い気

がして」

名前、か。俺にそこまでこだわりはないが、デュリオは気にするタイプのようなだ。

小猫がぼそりと呟く。

「『D D』」
デューデー

その呟きに全員の視線が小猫に集まった。小猫はそれに驚きながらも続ける。

「いえ、その何となくそう感じてしまつて……」

俺が訊く。

「その意味は？グレートレッドの『D×D』ドラゴン・オブ・ドラゴン的なものか？」

「いいえ、デビルだったり、ドラゴンだったり、墮天使の墮天——ダウンフォールとか」

俺の質問に小猫はしつかり答えてくれた。

俺は頷く。

「俺的にはグレートレッドを守るって意味でもいいと思うんだが？おまえらは？」

「俺は構わないぜ。つて、なんでおまえがまとめてんだよ！」

アザゼルからの苦情は無視して、言い出しつぺのデュリオに視線を送ると、

「変な名前でなければそれでいいです」

デュリオは即答で答えた。前言撤回、こいつに名前のおだわりはなさそうだ。

「若いもんに任せるわい」

初代は興味がないらしい。

「名前はいいと思いますけど、俺たちみたいなチームが動いて、嫌な顔をする勢力もいるのでは？」

イツセーは名前に賛成しながら質問する。

確かに俺たちの力を危険視、疑問視する輩も多そうだしな。

俺は息を吐き、イツセーに問う。

「それは仕方ないことさ。そうだな、イツセー。——おまえは守りたいものがあるか？」

俺の質問にイツセーはリアスたちを見て、意気込むように答える。

「はい！俺はリアスを、皆を守りたいです！」

「それでいいさ。守りたいものを守る、それだけでさ」

「は、はい」

イツセーは俺の一言に首を傾げながら返事をした。何となく俺の雰囲気が変わったことに気がついたのかもしれない。

それをアザゼルは複雑な表情で見ていた。

「どうした？何か変なことでも言ったか？」

「……いいや。だかな口イ、覚えといてくれ。おまえも守りたいもののために戦え。そ

れがおまえの正義でもある………だろ？」

アザゼルは何となくだが俺がイツセーに言った言葉の意味を理解していたようだ。

イツセーは俺のような『殺したいから殺す』なんて考えは持ってないし、持たないはずだ。

だが、アザゼルに言われなくてもわかってている。俺にも守りたいものがあるからな。

俺は不敵に笑みながらアザゼルに返す。

「そうだな。とりあえず、そのためにリゼヴィムを止める」

「そのいきだ。さて次はリーダーについてだが………ジョーカー、おまえがやれ」

「……………」

アザゼルの発言にデュリオは一瞬無言になるが、すぐさま持ち直してパニツクになりながらも反論する。

「え!?!じ、自分ですか!?!なぜに!?!ここはアザゼル元総督とか、初代孫悟空様とか、ロイさんでいいでしょ!?!てかやってくださいよ!」

デュリオはそういうのを振られると困るタイプなんだな。では、さっさと逃げ道を塞ぎにかかるかね。

まずアザゼルが言う。

「墮天使がリーダーってのは体裁的にまずい。どう見ても悪役イメージだからな。だが

天使なら、いいイメージで満載だ。しかもおまえは転生天使だろ？そのポイントも高い。ちなみに初代はサブリーダーなるんでな。おまえらがくるまえに話をつけておいた」

初代が続く。

「こういうもんは若いのが頭をやるのは当然じゃて。俺はケツ持ちとして機能させてもらおうかのう」

デユリオはそこまで聞くと俺に助けをこうように視線を向けてきた。

俺はそれを確認してから言う。

「アザゼルの言葉を借りるなら、悪魔も悪役イメージしかないからパスだ。てか、俺はユーグリッドを捕まえねえと、本格的に参加できん」

「……………え？どういうことですか？」

デユリオの問いに俺は言い聞かせるように返すを

「俺はユーグリッドの一件で疑われている。そんな奴が入れると思うか？まあ、ここにいられる時点でほとんど疑われてないようなもんだろうが……………」

「た、確かに……………だったら……………」

俺の意見でデユリオは逃げ道を塞がれたが、まだどうにかしようとして視線を泳がせる。するとグリゼルダがもの申した。

「デュリオ、これは大変名誉なことです。歴史に名を残せるかもしれないのですよ？ やっておきなさい。いえ、やりなさい。切り札を体現した役職にいる以上、やるべきです」

グリゼルダの言葉でついにデュリオが折れた。

「……あー、はい。わかりました。やりますです！」

リーダーの話はこれでOKだな。あとの問題は――。

「ヴァーリ」

アザゼルがヴァーリに話しかける。

「俺はリゼヴィムへの抑止力としておまえとおまえのチームを参加させるべきだと主張する。おまえたちへの不信感を払拭させるつもりだ」

確かにヴァーリたちは元とはいえ『禍カオス・ブリゲードの団』だったからな。入ってくれると助かるが、大丈夫なのか？ 現にシーグヴァイラが嫌そうな顔をしている。

俺の心配をよそにヴァーリはアルビオンに問う。

「どうする、宿敵と組むことに不満はないか？」

ヴァーリの問いにアルビオンが俺たちにも聞こえるように声を出す。

『かまわん。それよりも赤いの、千年前の戦いについて語ろう』

『俺もかまわん。なあ、白いの。いやー、昔話は楽しいなあ』

「……随分、仲がいいな」

ヴァーリが仲良く話す天龍に戸惑いながら言う。

それにアルビオンは元気よく答える。

『我らが揃えば怖いものはない!』

『ああ、何でもこい!俺たちは決して屈しない!』

『『ねー』』

何が「ねー」だ。赤い方に関しては薬漬けだったのによ!なんかウゼエ……………。

二天龍を交互に睨んでいると、アザゼルが困惑気味に言ってくる。

「ちよ、ロイ!?抑えろ!漏れてる!黒いオーラが出まくってるぞ!」

「ん?ああ、すまん。どうも蓋がバカになっちゃったみたいだ。ちよつとしたことでオーラが出るようになっちゃった。まあ、わからん奴が見たら何か迫力がスゴい程度だろ?」

俺の問いにアザゼルはため息を吐く。

「はあ。……………そんなんじゃ教師が務まるのか?」

「アザゼルにできて俺にできないことは神セイクリッドギア器ア関連と研究以外は特にねえ!——は

ず!」

「もういい……………」

二人して咳払いをして話題を戻す。

「それで、ヴァーリチームはテロ活動していたわけだが大丈夫なのか？ある意味今の俺よりも面倒な立ち位置だぞ？」

俺がアザゼルに問うと、アザゼルは頬をかきながら言った。

「オーデインのじいさんがそれを承知でヴァーリを養子にするんだとさ」

「なるほど、それなら他の神様も文句が言えないか。俺みたいに条件つきでの自由も許されるだろうな」

「そういうことだ。ヴァーリ、どうする？」

アザゼルの問いかけにヴァーリはしばし考えたのち、

「お互いに利益が出そうなら協力しよう。あとは独自にやらせてもらうさ」とだけ答えた。

その返答にアザゼルは笑った。

「それは合意と見ていいんだな？」

ヴァーリは返事はしないが、それが合意の意味なのだろう。

ヴァーリは黒歌とルフエイに視線を送る。

「二人は基本的にそちらに預ける。こちらでも必要になったら呼ばせてもらうが。黒歌、ルフエイ、ここは任せる」

「任せなさい」

黒歌はいつになく真剣な表情で頷くと、俺に視線を向けてくる。

俺が疑問符を浮かべていると、初代が口を開く。

「さての。若いもんで強くなりたい奴はおるかねえ」

「——っ。それはどういうことでしょうか」

リアスの質問に初代は答える。

「おまえさんたちを儂が一から鍛えるでな。——全員、最低でも上級悪魔、天使クラスになつてもらわんとこれを結成した意味がないぞい。ゆくゆくは最上級クラスになつてもらわねえ」

初代が鍛える！俺が『若いもん』含まれるかはさておいて、俺も頑張らねえと。

リゼヴィムと戦つたあの力、今度は『心を殺さずに』使えるようにならないと意味がねえからな。

俺が一人、覚悟を決めているとサイラオーグが訊く。

「それはつまり——神との戦いもあり得ると？」

サイラオーグの質問に初代は煙管キセルを回しながら頷いた。

「そういうことだ。お主らが思うてる以上に、この世界の覇権を狙う輩は多くてのう」

初代はそこまで言うと思味深な笑みを作つた。

「ま、今はリゼヴィム・リヴァン・ルシファーへの対処じやろうよい。常々、儂は神滅具ロンギヌスを持つているもんは生まれたときから課せられておると思うてるわい」

「……課せられている?」

イツセーの問いに初代は真っ直ぐに答えた。

「——神をも滅ぼす具現。儂は神滅具ロンギヌスの登場はシステムのバグなどではなく、世界の必然だと思っておる」

今、この場で対テロ組織——『D×D』が結成されたのである。

一通りの話が終わり、今日は解散となった。リアスたちオカ研メンバーと俺は残っていたのだが、黒歌に腕を引かれ、そのまま誰もいない部屋に連れ込まれた。

「——で、いきなりどうした?」

俺が訊くと、黒歌はいきなり頭を下げてきた。

俺が困惑していると黒歌がそのままの姿勢で口を開く。

「あのときは、ごめんなさい。私がいなければあなたの腕は——」

俺は黒歌の言葉を遮り、口を開く。

「気にするな。なんか、すごいことになってきたが……」

なんか、『生きた義手』をつくるなんてことになっているからな。

それを知らない黒歌は顔を上げ、真剣な眼差しで言ってくる。

「あなたには恩があるから、しっかりとそれを返させてもらおうわ」

「別に気にすることでもないが……」

俺としては体が勝手に動いた感じだったし、あのとき黒歌がいなければ、戻って来れなかったかもしれない。

そういう意味では黒歌に感謝しているんだが——、

俺の心中を知るよしもない黒歌は続ける。

「それでもよ。こっちは命助けられてんだから」

俺はため息を吐き、黒歌をまっすぐ見つめながらに言う。

「あのな、仲間を助けるのは当たり前だ。俺は片腕吹っ飛んだが、お互い無事だったんだ、それでいいだろう？」

「仲間って、あのときはまだ——」

どうせ「仲間じゃない」とか言いそうなのでそれを手で制して俺は言う。

「あのな、ロキ戦、曹操戦、その後の死神ご一行戦、それを一緒にくぐり抜けたのに、今さら『仲間じゃない』は通らないからな？俺は死んでも仲間は守る。そいつに仲間の自覚があるかどうかは別としてな」

「……………」

黒歌は一瞬おどろいたような表情になるが、にやけるように笑いながら言う。

「なーるほど、そうやって魔王様をおとしたのね？」

「は？セラとはお互い一目惚れだ。こんなセリフ、セラ以外に口にしたのは初めてかもしれねえ」

俺があごに手をやって考えこむ。リアスに「家族は守る」とかは言った気がするが、赤の他人には珍しいよな？

そんな俺を見て、黒歌が若干困惑気味に言う。

「……………あんた、よく恋人できたわね」

「どういう意味だ？」

俺がジト目で睨むと、黒歌は若干頬を赤くしながら笑み、「別に、何でもないにや」といつもの声音で返して部屋を出ていった。

なんなんだ、あいつは？——ッ！

俺がため息を吐くと、突如頭痛に襲われた。右手で軽く頭を押さえ、再びため息を吐

く。

かなり疲れが溜まっているみたいだな。早めに寝よう……。

こうして『D×D』発足の夜は更けていき、各々の新たな戦いに向けての準備が進んでいくのだった。

教員研修のヴァルキリー

l i f e 0 1 小さな大問題

俺——ロイが兵藤宅に世話になり初めて約三ヶ月。

地上六階地下三階（俺の部屋は五階にある）とただですら広い兵藤宅だが、ここ最近になつて新しい部屋が見つかったそうさ。

例えば、トレーニングルームと大浴場がある地下一階だが、そこに部屋が出現していたらしい。

この家はアジユカ様お抱えの建築家が設計したそうだから、いわゆる職人の遊び心というやつだろう。

ちなみにだが、その新しく見つかった部屋は黒歌とルフェイの二人が使うとのこと。

——と、珍しくこの家の事を考えているのは理由がある。とても簡単に言う
と、

「で、痛いところとかはない？」

——現実逃避していた。

若干時間を戻して説明すると、俺は誰もいない時間を狙って大浴場で一人風呂を堪能しようとしたら、そこに問答無用で黒歌が入ってきた。で、そのまま押しきられる形で一緒に入浴することになり、今は背中を流されているのだ。

俺は黒歌の体に視線がいかないように目をつむりながら言う。

「二人でも問題ねえから少し離れろ」

「なによ、せっかく背中流してあげてるのに」

「頼んでねえ」

「もしかして、照れてる？」

イタズラっぽく笑っているであろう黒歌の顔を思い浮かべ、俺は深くため息を吐く。

アザゼルが作っている義手は俺の戦闘に耐えられるようにするため、現在制作中。それで、明日には届けるとのこと。

日常生活用の見た目だけリアルな義手は届いているが、風呂の時ははずしている。なんか、接合部分に水が入ると気持ち悪いのだ。

今は、時々背中当たる柔らかい感触と、それとはまた違う固い感触のせいで何も言えなくなっていた。

黒歌のやつ、絶対にわざと当てているだろ………ッ！

抵抗しようとも思ったが、片腕ではつらいものがある。万が一にも組伏せられたら、脱出できない。

黒歌は兵藤宅に世話になってから、異常に俺に絡んでくる。時には問答無用で部屋に入つて来ることもあるほどだ。

まあ、恩がどうこう言っていたし、そのせいだろう。若干迷惑なのはもう気にしないことにした。

俺がそんな事を思っていると、泡を落とすためにお湯をかけられる。だがここでひとつ問題が――。

「あつつツ!?!」

「にや?」

なんか妙に熱かった!設定間違えやがっただろこいつ!?

俺は勢いよく飛び退き、タオルを腰に巻きながら黒歌を睨む。彼女は手に持つ桶を見ながらきよんとしていた。

こいつ、時々やかすんだよな!親切心はありがたいが、もつとしつかりしてほしい!この前もコーヒーぶちまけたし!

黒歌は桶を置き、片手を顔の前にやりながら「ごめん」の一言。

俺はいつものことと割りきって「気にするな」と返し、湯船に入つてため息を吐く。

黒歌もそれに続くように湯船に入ってくると、俺の右腕に抱きついてきた。

セラとはまた違う柔らかさが俺の腕を包み込み、若干ながら理性を攻めてくる。耐えるしかないがな！

「……………なあ」

「なに？」

「離れろ」

「嫌にゃ♪」

俺が横目で睨みながら怒気を込めて言うが、黒歌は受け流すように笑みながら否定してきた。

こういう時に小猫がいれば助かる、てか助けしてくれるんだが、あいにく今は二人きりだ

俺は諦めるようにため息を吐く。こんな姿をセラに見られたら、大変なことになるな。

黒歌が話しかけてくる。

「ところでさ」

「ん？」

「ユーグリッドって男の話、聞いた？」

「ああ、少しだけな」

俺がリゼヴィムと戦っている頃、イツセーはユーグリッドと戦っていたそうだ。そして、その時やつは『レプリカの赤龍帝の籠手』を、もつと言うとそれの禁手フランス・ブレイカーを使ってきたそうなのだ。

ユーグリッドと戦うときはそれを考慮しなければならない。禁手フランス・ブレイカーは鎧装着型のものだから、いつものオーラ検知ができるはずだ。問題は決定打だな……………。

俺が瞑目して対策を考慮していると、黒歌が突然離れた。一瞬間が空き、今度は俺の膝の上に柔らかい何かが乗っかってきた。

まさか、まじで……………？

俺が嫌な予感と共に恐る恐る目を開けると――、

「隙だらけにゃ♪」

「……………」

満面の笑みを浮かべる黒歌が、俺と向かい合うように膝の上に乗っていた。

俺が口元を引きつらせていると、黒歌が腕を俺の首にまわしてそのまま抱きついてくる。

「ッ!?!」

黒歌の豊満な胸が俺の胸板で押し潰され、むにゅんと形を歪ませる。こ、小猫、へ

ルプミイイイイイツ!

俺が体を強ばらせながら心中で叫んでいると、妙に体がポカポカし始めた。湯の効能ではない、もつと体の底から暖まるような……………。

目を閉じて集中してみると、黒歌からなんとなくオーラが流れてきていることに気づく。仙術の応用って奴なのか……………?」

「黒歌、ありがとうな」

俺が礼を言うと、黒歌はイタズラっぽく笑んでさらに体を密着させてくる。

「うふふこのまま襲っても——」

「それは断る。後が怖い」

「あ、そう。ま、それは次の機会にするにや。それじゃ、おやすみ」

黒歌は残念そうに言う俺から離れ、そのまま脱衣場に向かっていった。

「——はあ」

俺はようやくまともに呼吸ができた。

あ、危なかった。今度は負けるかと思った。毎度のようにこれだと身がもたねえよ……………。どうにか対策を練らねえと……………。

毎日繰り返し出される黒歌の攻撃への対策を考え、ポケットと天井をあおいでいると、再び膝に何か乗ってきた。

黒歌ではない、そこまで重くないからだ。だが、この家にこんな軽い奴いたか………?」

「ん?」

俺が視線を向けると、膝の上に黒歌と同じように向かい合う形で黒髪の女の子――
――オフィスが乗っていた。

な、なんでこの子が? 上でイツセーたちといはるはずじゃなかったか………?」

じつと俺を見つめてくるので、その疑問は飲み込んでとりあえず頭を撫でてやる。

特にリアクションはないが、なんとなく気持ち良さそうに見えるので継続的する。

その後三十分間。俺が軽くのぼせるまでオフィスの頭を撫でることになったの
だった。

その日の深夜。俺はセラと連絡を取っていた。

映像の向こうのセラが訊いてくる。

『ロイ、大丈夫?』

「ああ、問題ない。ちよつと長風呂しすぎた………」

俺は机に突っ伏して力の抜けた声で返した。オフィスをどかしてさつさと上

がっつまえばよかった……………。

『あら、珍しいわね。ロイってささつと済ませるタイプなののに』

「我が家のマスコットに捕まってな。出るに出られなくなった」

『それは、大変だったわね……………』

俺の言葉に同情的に言ってくるセラ。ああ、セラと話しているだけで癒される。最近ストレスばかりだったからだろうな。

俺は体を起こし、咳払いをして話題を戻す。

「それで、どうかしたのか？」

『うん、しっかり聞いてね？さっきの会議でね、一応あなたのテロ活動への関与はほぼ無
いって結論が出たの！』

テンション高めに言ってくるセラ。

俺は冷静に返す。

「ユーグリットは捕らえてないのに、何でまた」

『あなたとリゼヴィムの会話が録音されてたって聞いたでしょ？』

「ああ、アジユカ様が言っていた……………」

『そのときのリゼヴィムの発言から、ロイはリゼヴィム一派——「クリフト」と通じて
いなかった。リゼヴィムはあなたが欲しいって言っていたから、逆に今まで接触して

いなかったってことになったわけよ』

俺はため息を混じりにセラに言う。

「力説もいとこじやないか。だから一応か？」

『うん、今は極めて白に近いってだけ。しつかり無罪を証明するには――』

「ユーグリットを捕らえる。わかってるさ。グレイフィア義姉さんのためにもな」

『そういうこと。まあそれなりに制限は緩和されたから、報告義務はもう平気よ。ただ、また腕輪を送るわ。今度は簡単には壊れないから、安心して』

「了解だ」

俺が頷くと腕輪が送られてくる。日常生活用の義手の練習がてら右腕に腕輪をつ

ける。………よし、できた。

「つけたぞ」

『こつちでも確認つと。それじゃあ、またね』

「おう、またな」

俺がそう返して連絡用魔方陣を消すと、部屋のドアが三回ノックされた。

俺は首をかしげながら声をかける。

「どうぞで」

「し、失礼します」

「ロスヴァイセ?どうかしたか?」

俺の部屋に入ってきたのはロスヴァイセだった。珍しく俺の部屋を訪ねて来たわけだが、なんとなくいつもと様子が違うような……………。

「それで、何かようか?」

「は、はい!実は……………その……………」

「?」

いつも通りなら言いたいことをはつきりと喋るロスヴァイセが、こうも口ごもっていることに違和感を覚える。

俺が疑問符を浮かべているとロスヴァイセは覚悟を決めたように口を開いた。

「ロイ先生!一つお願いがあります!」

「お、おう。リアスの眷属なんだ。俺が出来る範囲で簡単なことだったらいいが、とりあえずお願いってのは?」

俺が問うとロスヴァイセは顔を俯けながら答える。

「わ、私の……………」

声小さすぎて『私の』しか聞き取れなかった。

俺は申し訳なく再度訊く。

「すまん。何て言った?」

俺の言葉にロスヴァイセは顔を真っ赤にしながら顔を上げ、開き直ったように口を開いた。

「わ、私の！彼氏になってください！」

『な、何ですってええええ!?!』

「うおっ！せ、セラ!?!って、まだ繋がっていたのかよ！」

ロスヴァイセに答えたのはセラだった！って、何でさつき通信を切ったはずのセラが答えるんだよ！

俺の心中を察してか、映像の向こうのセラがどや顔で言う。

『嫌な予感がしたのよ。それでロスヴァイセ、どういう意味かしら?』

いつもの「ちゃん」付けではなく、呼び捨てでロスヴァイセを呼び、映像越し彼女を睨むセラ。若干俺も睨まれているが、受け流すことにした。

それに動じながらもロスヴァイセは答える。

「えと、実は――

――ということなんです」

「つまり、ロスヴァイセのお祖母さんがくるから、俺に彼氏のふりをしてくれと?」

俺の確認にロスヴァイセは申し訳なきそうに頷く。

「は、はい」

「だ、そうだ。セラ、いいか？」

『……………ふりだけなのね？』

俺の問いに、セラはロスヴァイセを軽く睨みながら確認する。

「は、はい！お祖母ちゃんが帰るまでの間でいいんです！」

ロスヴァイセの訴えに、セラはしばらく考えたのち、しょうがないと言わんばかりにため息を吐いて口を開いた。

『……………わかったわ。ロイ、協力してあげて。リアスちゃんのためにも』

「確かに、俺が断ったらイツセーに行く気だろ？それはそれで面倒だ」

「じゃあ！」

「わかった、やってやるよ。彼氏のふりってやつを」

「あ、ありがとうございます！」

赤面しながら笑うロスヴァイセ。そのまま礼を言うと部屋を出て行ってしまった。

ああ、ストレス要因がまた増えてしまった……………。

俺がそんな事を思いながら遠いところを見ていると、

『ロイ？』

「ん？」

明らかに不機嫌なセラの声が聞こえた。

俺が映像に視線を戻すと――、

『あとで、お話ししましょうね？ロスヴァイセのことと、「黒猫」のことに關して……………』

「……………はい」

首をガツクリと落としながらため息を吐く俺。黒歌のことも筒抜けなんだな……………。

こうして、今日に限って俺の胃に穴が開きそうな出来事が連発したのだった。

l i f e 0 2 課題

ロスヴァイセの彼氏のふりをするようになった翌日。

あのあとが続いたセラとのお話は、お互い仕事があるということでも中断。ロスヴァイセとの問題が終わったら改めて、しっかりとお話すること。

その時のセラはとても綺麗な笑顔を浮かべていたが、それ以上に怖かった。

俺はそれを思い出しながらため息を吐き、とぼとぼと放課後の新校舎を歩き回っていると、図書室からロスヴァイセの気配を感じた。何かしらの魔術を使っているのか、独特のオーラを感じ取ったのだ。

まったく、白昼堂々となにやっているんだ？

注意のひとつでもしてやろうと図書室に入り、ロスヴァイセの姿を探す。広い図書室だが、部屋の一角で二冊の本を読みながら難しい顔をした彼女を発見した。

俺は額に手をやりながらため息を吐き、俺が近づいても気づく様子のないロスヴァイセの向かいの席に座る。

気づくまでどれくらいかかるかな？と、思いつつ待つこと数分。不意にロスヴァイセが顔をあげる。

「……………」

「よっ」

俺と目があつて間の抜けた顔になるロスヴァイセに、俺が軽く右手をあげてあいさつする。表情からして、本当に気づいていなかったようだ。

ロスヴァイセが困惑しながら訊いてくる。

「な、なにやつているんですか……………？」

「それはこつちのセリフなんだが、なにを読んでんだ？」

「えと、それは……………」

言いよどむロスヴァイセ。

俺が身を乗り出してその本の中身を確認する。

『また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角が——』

「——ッ！」

「だ、大丈夫ですか!？」

俺が頭痛に襲われてすぐに視線を本から外すと、ロスヴァイセはすぐに本を閉じる。悪魔が聖書やそれに関わるものを見たり、聞いたりすると頭痛に襲われるのだ。

ロスヴァイセ、なんで『ヨハネの黙示録』なんか読んでやがるんだよ……………! !

俺は痛む頭を押さえながら周りに生徒がいなかったかを確認してロスヴァイセに訊く。

「——で、なんで黙示録の、もつというスリーシックスと666の下りを確認していたんだ？まあ、奴らの狙いがそれだからってことだろうが……………」

「はい。その、まだ私が学生の頃に少しだけ調べたことがありまして、確認をしていたんです」

「少しだけだが暗めのトーンになったロスヴァイセ。あまり詮索しないほうが良さそうだ。」

「とりあえず、ヴァルキリー見習いの時に調べた、か。やはり向こうでも論文とかがあるんだろうな。」

俺は一度咳払いをして話題を変える。

「ロスヴァイセ、もつと自然に話せないのか？生徒たちの間で話題になってやがるぞ」

「……………本当ですか？」

「知らなかったのか……………」

俺はロスヴァイセの返答にため息を漏らす。

あれからというものの、俺とロスヴァイセが話すたびに彼女の声の上擦ったり、言いよんだり、見ていて違和感しかないのだ。

一部のその手の話が好きな生徒からは直球に聞かれたり、アザゼルからはいじるネタ

が増えたと言わんばかりの邪悪な笑みを向けられたりした。

俺はある程度だが女性と喋り慣れているが、ロスヴァイセは仕事以外ではあまり慣れていないのだろう。時々隙を見せる。

今度、ちゃんとリアスにも相談しておこう。フォローなしではつらくなってきた。

俺は再度ため息を吐き、「じゃあ、部室でな」と言つて図書室を後にする。

やれやれ、これから大変になりそうだな……………。

「——と、いうわけだ。何かあったらフォロー頼む」

「は、はあ……………」

部室に来て早速、リアスにロスヴァイセに関しての相談（黙示録の下りは省いた）したのだが、彼女からは困ったような返事が返ってきた。

まあ、いきなり「今、あいつの彼氏のふりをしているんだ」と言われて、そうですかと返せる奴は少ないだろう。

俺の予想とは裏腹に、リアスは苦笑混じりに言ってくる。

「お兄様、さすがに私は知っていますよ？ロスヴァイセの主なんですから」
「……………それもそうだな」

俺も苦笑しながら頬をかく。考えてみれば、ロスヴァイセの行動を『王』^{キング}であるリアスが知らないわけがないか。

自分の認識の甘さを恥しながら、リアスに言う。

「ま、何かあつたら頼む。ロスヴァイセがテンパるかもしれないからな」

「はい、わかっています」

リアスは笑顔で頷く。とりあえず、これで何かあつても大丈夫だろう。
俺はついでに訊く。

「で、次の部長はどうするんだ？そろそろ決めたほうがいいだろう？」

「ふふ、それももう決まっています。けれど、発表はもう少し先にしようと朱乃と決めたところですよ」

「そうか。じゃ、活動に戻るかね」

「はい」

もうすぐリアスたちは部活を引退することになる。イツセーたちは寂しいとか言うだろうが、リアスのことだ、適当に理由をつけて遊びに来るだろう。

部谷を出ていくリアスの背中を見送りながら、俺はそんな事を思っていた。

「……………」

同時にちよつとした頭痛と左手の痛みに襲われ、表情を歪ませる。

頭痛はともかく、左手は『幻肢痛』つてやつだな。どう治せばいいのかよくわからん。俺と同じく隻腕のアザゼルはなっていないようで、対策はそのうち見つけるとのこと。

俺は本日何度目かのため息を吐き、リアスを追って足を進めた。

とある休日。

グレモリー所有の修行空間に、リアスをはじめとしたグレモリー眷属、イリナ、シトリー眷属からは匙、その他のとしてはロイ、ヴァーリ、黒歌、ジョーカー・デュリオ、初代孫悟空が集っていた。

二天龍であるイツセーとヴァーリは初代が、匙はデュリオが、グレモリー眷属とイリナはロイが受け持っていた。

そして、今は――、

『ふうふうふう……』

各々のメニューをこなし、合流してから約一時間。全力状態の彼と対峙している。

黒い滅びのオーラを全身に纏い、深く息を吐いたロイに警戒を強める面々。

時を戻して一時間。集合したりアスたちを前にして、

「申し訳ないんだが、少し時間をくれないか？」

連携の確認をしたかつらリアスたちからしてもそれはありがたい申し出であり、断る理由はなかった。

ロイとしても、試したいことがあったので全力状態なのだ。

《はあああああッ！》

バロールの力を解放したギヤスパーが正面から飛び込み、連続で拳を振るっていく！

だが、ロイはそれを最小限の動きだけで全て避けていく。

そして、大振りに拳を放ったために隙だらけのギヤスパーの腹部に拳を打ち込んだ！

だが、拳が当たると瞬間にロイの体を覆っていたオーラが霧散する。

《――ッ！》

ロイの全力の拳を腹部にくらったギヤスパーはそのまま吹き飛ばされて、水切りの石のように床を跳ねる。

ロイは感覚を確かめるように自分の拳を見るが、そこに朱乃の放った雷光龍が向かってくる。

ロイはそれを避けると、その回避先を讀んでいた二つの影が飛び出していく。

「ゼノヴィア、行くわよ！」

「ああー！」

ゼノヴィアとイリナのコンビの接近に、ロイは再び全身にオーラを纏って備える。

同時に放たれた二人の高速の連撃を的確に避け、時には腕を使って弾いていく。

ようやく届いた戦闘用の義手。「どこまで耐えられるのかテストしてくれ」とアザゼルに言われていたロイは、壊れることを承知でそれをつけたまま戦闘を継続していた。

ロイの纏う滅びのオーラは、ゼノヴィアのエクス・デュランダル、イリナの量産型聖魔剣のそれぞれの聖なるオーラを完全に遮断し、本人にダメージを与えることはない。

ゼノヴィアの大上段からの振り下ろしを腕で受け、そのまま上に弾いて回し蹴りを放つが、再びオーラが霧散した。

ロイの生身の蹴りを避け、距離をとるゼノヴィア。

蹴りを放ったロイは難しい顔を見ると、再び全身にオーラを纏う。

相手をしてきた全員が一瞬だけ疑問符を浮かべる。

ロイは戦闘の初めからオーラを解いたり纏ったりと、無駄に消耗してしまいそうな行

動ばかりしているのだ。

そんな疑問をよそに、彼らは攻勢を強めていったのだった。

さらに三十分後。

「……………はあ……………はあ……………おまえら、悪かったな。はあ……………付き合わせちまつて……………」

「……………いえ、こちらこそ、ありがとうございました」

息を荒くしたロイが相手をしてくれたリアスたちに礼を言っていた。だが、言われた彼らも息を荒くしており、返答が返ってくるのにどうにも間が空いてしまう。

リアスたちはあれから何度も攻めていき、連携の幅も増やしていったのだが、最終的に決定打を与えるには至らなかった。

近接攻撃は的確に捌かれ、遠距離攻撃はほとんど避けられる。そして、少しでも隙を見せたら一撃をもらってしまふ。それが続いたのだ。

吸血鬼の国での戦いからロイはどこか変わり、一層強くなった。

彼らの共通見解だが、その理由はよくわかっていない。思いきつて訊いたこともある

そうだが、ロイは——、

「二皮剥けたかって言えばいいのか？まあ、まだ何枚か破りきれていないんだけどな………」

——と、若干声のトーンにを落として言うだけだった。

一通りの特訓を終え、今回の参加メンバーはミーティングをおこなっていた。

ちなみにだが、戦闘用の義手は外してある。戦闘が終わってしばらくしたらいきなり煙を吹き始めたのだ。

アザゼルに言われていた通りに手早く義手を外し、指定の魔方陣でグリゴリの施設に送った。俺の魔力にあわせ、向こうで少しずつ改良を加えていくそうだ。

皆からの報告を聞き終え、俺の番となる。

「やはりと言えればいいのか、あの状態は消耗が激しいな。約一時間半、か。もつと長期戦にも対応できるようにしねえと」

俺が言うと、リアスが小さく挙手する。

「ひとつ質問をよろしいですか？」

「ん？なんだ？」

俺が聞き返すと、リアスは口を開く。

「あの滅びを纏った状態ですが、途中で途切れるのはなぜですか？」

あれか。確かに気になるだろうな。

俺はため息を吐き、リアスたちに言う。

「極端な話、『あれ』になったら加減ができなくなるんだよ」

「模擬戦に加減は必要ありません」

リアスのちよつと怒り気味の言葉。端から見たら、殴る瞬間に力を抜いたように見えるのだろう。

俺は頬をかき、言葉を改める。

「いや、ちよつと言葉が違うな。『あれ』になると、『確実に相手を殺しちまう』」

「——ッ！それはどういう意味ですか？」

リアスは一瞬驚いたが、すぐに聞き返してくる。まあ、俺の全力について確認しておきたいんだろう。

俺は息を吐き、リアスに言う。

「『あれ』になると心がなくなる。感情なしで機械的に相手を殺しにいつちまうんだ。邪

龍が相手なら容赦なく殺れるんだが、戦闘中に一瞬でも相手に同情して不要な感情が出たら『あれ』は解けちまう。だが、万が一にも感情を忘れたら、たぶん機械から戻れなくなる」

「戻れなくなる、ですか？」

「ああ」

俺が頷くと、リアスたちの表情が一気に心配するものに変わる。たぶん、そんな危険なものも戦闘で使わせたくないか思っているんだろうな。

俺はリアスたちを安心させるように笑む。

「大丈夫だ、心を無くすつもりはねえよ。セラに泣かれちまうからな。まあ、今回のそれがわかったんだ。無駄な使用は控えることにするさ」

「そう、ですね」

リアスは無理やり納得するように頷いた。

だが、その『不要な感情』を持った状態で『あれ』になれねえと、連携とかに支障が出そうだな。

『過去を受け入れ、自分を見失わないことです』

いつかにヴァレリーに言われた言葉を思い出す。『あれ』になりながら自分を見失わない、か。意外と難しいぞ……………。

——と、そんな真面目な事を考えている俺の横では、

「……………」

デュリオが寝ていた。話では、ミーティングに在るだけで奇跡らしいので気にしてはなかつたが、失礼な奴だな。

俺がデュリオを見ながらため息を吐いていると、リアスが話題を変える。

「ソーナが建てた学校でおこなわれるオープンスクールを手伝うことは皆も知つているでしょうけど、実は今夜、兵藤家にお客様がいらつしやるの。その学校で特別授業をおこなう講師の方よ。急だけれど、兵藤家への訪問を決めたと連絡を受けているわ」

その話しは俺も聞いていた。表向きは俺も講師としてだが、正確には『ある事件』によるもの大きい。

話を戻して、そのお客様つてのがロスヴァイセのお祖母さんなんだろうな。

俺が確認するようにロスヴァイセに視線を送ると、目があつた彼女は頬を赤く染めながら顔を背けた。

俺がため息を吐いて視線を外すと、事情を知らない面々は、俺とロスヴァイセを交互に見ながら疑問符を浮かべていた。

事情を知るリアスと朱乃はそんなイッサーたちを見て苦笑していた。できるだけ内密につて事らしいので、まったく話しはされてはいないだろう。

まったく、面倒を引き受けちゃったな……………。

俺が再びため息を吐くと、

「ッ！」

突然走った痛み表情を歪ませる。

俺の異変を察して、リアスが心配そうに訊いてくる。

「お兄様、大丈夫ですか？」

「ああ、また左手だ」

肘までになった左腕を突き出しながら言う。正確には頭も痛いかな。

俺の言葉に反応したのは黒歌だった。いきなり俺の左側に座ると、左腕に手を添えてくる。そこから仙術による治療をしてきているのか、温かさと共に痛みが引いていく。

この左手の痛みは怪我ではない（そもそも痛む部位がない）ため、アーシアの回復では痛みが取れないのだ。なので、黒歌が気を使って痛みを和らげてくれる。

「ありがとうな、毎回毎回」

「ま、こんぐらいしかやることないしね。それでもお礼がしたいなら——」

黒歌はそう言うと、俺の左腕を引っ張って体制を崩させ、そのまま俺の頭を胸で抱いてくる！

着崩した着物の隙間に顔面から突っ込んだせいか、黒歌の胸の感覚がダイレクトにいいいいいいっ!

「——ッ!!?」

ハプニングには慣れているはずなのに、いきなり過ぎて完全に固まる俺に黒歌が言ってくる!

「初々しい反応ごちそうさまにや♪そんなじゃ、このまま——」
「……………ストツプです」

黒歌に待ったをかけたのは小猫だった。黒歌の腕を掴んで軽く血管が浮かぶほど力を入れている。

黒歌はそれに耐えながら、俺をいっこうに離そうとしない。

「なによ、白音だつて赤龍帝とニヤンニヤンしたいんでしょ? 私だつてこの男とニヤンニヤンしたいのよ♪」

「……………ダメです!」

「あ、一瞬考えてでしょ? エロエロにや。エロエロにや」

「ち、違います! 反応に困っただけです!」

「猫又はエロくてなんぼよ? ちっこい時にしかできないことをやればいいのよ♪」

「もう知りません! とりあえず、ロイ先生を離してください!」

「えー」

「は、離れる。息苦しくなってきた……………」

仲よく姉妹喧嘩をしているところ悪いが、口を挟む。

「え？あ、はい」

黒歌が力を緩めた隙に振りほどいて脱出。黒歌から離れて安全を確保したら深呼吸をして酸素を補給する。

がつつり掴まえやがつて、軽く極つていやがつたぞ……………。

「あのな、そういうのはイツセーが担当なんだよ！」

「え？いや、違いますよ!？」

俺の言葉にイツセーが戸惑いながら返してくるが、

「あ、そうなのかにや？ま、どうでもいいけど」

それを無視して反省している様子のない黒歌。次からは間合いに気をつけよう。

俺が真面目に反省しているなか、

「……………むにや、天界モンブラン食べ放題……………」

デュリオが平和な寝言を言っていた。まったく、おまえは幸せそうだな！

l i f e 0 3 厄介なヒト

特訓を終えた俺たちはVIPルームで来客をもてなす準備をしていた。ちなみに、ヒトが多すぎてもあれなので木場とギヤスパーは自宅（二人は一緒に住んでいる）で休んでもらっている。

準備を一通りし終えた俺は一階の居間に降りてきており、アーシアとレイヴェルが作ったお菓子をオフィスがつまみ食いをするという光景を観察していた。

「お客様がいらつしやいましたわ。地下の転移室まで行きましょう」

俺が一休みしていると、朱乃の呼びに来てくれた。俺は頷き、お菓子を作り終えた二人に声をかけて、地下へ移動し始めるのだった。

転移室に集合した俺たち。

黒歌とルフェイは自室で待機してもらっている。理由としては、これからの話題に黒歌が割り込んでくると面倒だということと、何かやらかすかもしれないからだ。ルフェイには悪いが、彼女の見張りを頼んだ。当たり前のことだが、オフィスにも隠れても

らっている。

不安要素はある程度解消されたことを再確認し、俺がホッと息を吐くと、転移室の床に北歐式の転移魔方陣が展開された。

それを確認した俺が言う。

「言っていないかったが、ここに来るのはロスヴァイセのお祖母さんだ。北欧でも魔法の使い手として有名なヒトだからな、失礼のないように頼む」

『はい』

俺の言葉に各々返事をしてくれたが、ロスヴァイセは緊張した面持ちになっていた。俺がその事を確認瞬間に転移の光が室内を照らし、一気に心配弾けた。

光が止みそこに現れたのは、紺色のローブを着た女性だった。顔を見ないと年寄りには見えないほど、キリツとした雰囲気をしている。

ロスヴァイセの祖母さんは俺たちを確認すると、一言告げた。

「はじめまして、日本の皆さん。その孫がお世話になっているようで」

ロスヴァイセに視線を送るお祖母さん。それを受けたロスヴァイセは口をへの字に曲げていた。

好きではないが、そこまで嫌いでもないって感じか？

ロスヴァイセの祖母さんは自己紹介を始める。

「私はゲンドウル。以後お見知りおきを」

そう言うとうゲンドウルさんは微笑を浮かべる。それを見た俺は勝手に納得していた。本当、この人はロスヴァイセのお祖母さんだな。

俺たちに見せた微笑した顔、ロスヴァイセにそっくりだった。

俺たちはゲンドウルさんを連れてVIPルームに移動し、お菓子を出してから簡単なあいさつを済ませた。

「というわけで、ゲンドウルさんは、今度冥界のアガレス領でおこなわれる魔法使いの集會に参加予定なのよ」

——と、リアスが説明をした。

前にセラから聞いた話では、有名な魔法使いたちがアガレス領に集まり、魔法についての話し合いをするらしい。ちなみに悪魔などの異形のもの以外が冥界に来ることは、ほぼと言っていいほどない。ただの魔法使いでは次元の壁を越えることができないからだ。それなのに、今度冥界のアガレス領で魔法使いの集會がある。それはかなりすごいことでもある。

話し合いの内容は、簡単に言うと古代の珍しい魔法や、禁術のたぐいについての話ばかりだそう。悪魔の研究員も参加することだ。

「これはオフレコだが、各勢力で古代の魔法や禁術を研究していた魔法使いが行方不明になっているらしい」

俺の追加情報にイッサーたちは険しい表情になった。

これが、俺がオープンスクールに行くことになった原因だ。万が一、そこで狙われても即座に対応できるようにある程度の戦力が欲しかったとのこと。

俺は続けて口を開く。

「はぐれが勝手に動いているのか、それともリゼヴィムが一枚噛んでいるのか、それは現在調査中とのことだ。どっちにしろ、魔法使いは一度集まって意見を交換したいんだとさ」

俺がそう言うと、ゲンドウルさんが話し始めた。

「これも外に出ていない情報なのだけれど、実は今回の集会で、研究テーマを——得意としている術を——一時的に封じる方向で話は進む予定なのです」

「術を……魔法の封印をするんですか？」

俺の問いにゲンドウルさんが頷く。

「己が生涯をかけて高めてきたものを悪用されるくらいならば、事件が治まるまで封じ

てしまったほうがマシということですよ」

確かに悪用されるぐらいなら一度封じたほうがいいかもな。禁術とか使われたらシャレにならない。

ゲンドウルさんは続ける。

「墮天使の組織——グリゴリはアンチマジックについても研究が盛んだと聞き及んでいます。なので術の封印は墮天使に一任するつもりですよ」

なるほど、グリゴリに頼むんだな。確かにあそこはアンチマジック研究も進んでいたはずだ。

ゲンドウルさんは続ける。

「己で封印したところで、拉致され催眠をかけられたら破られかねません。他の術者ではに施してもらっても、術を盗まれてしまうかもしれない。それならば、現状様々な勢力から信頼がある墮天使にとまったわけです」

アザゼルの野郎、前に「墮天使は悪役イメージが——」とかどうとか言っていたくせに、存外いいイメージも多いじゃねえか。

「——と、その封印をする前に意見交換をしようということになったのです。参加を拒否する術者もいますが……それでも貴重な話し合いになるでしょう。私も参加を表明したのです。それに、ソーナ・シトリーさんからも招待を受けておりますし」

リアスがそれに続く。

「そうなの。ゲンドウルさんは、魔法使いの集会と、ソーナの建てた学校での講演をおこなうために私たちのもとに来られたのよ。……そういえば、お兄様は知っていらしたんですか？ ソーナが学校を——」

「知っているさ。セラから耳にタコが出来るほど聞かされた」

リアスの言葉を遮り、うんざりしたように言った。周りからは同情の視線が送られてくるが、あまり気にしないことにした。

その後、今後の日程を確認し、全員が理解した。後で俺も行くことになっていた理由をセラに訊くとしよう。

それから会話は少しずつ碎けたものになっていった。

リアスが言う。

「ゲンドウルさんはヴァルキリーの一人としても数えられていたのよ」

「要領が悪いのだから、向いていないと散々言ったのですよ」

ゲンドウルさんが辛口にそう言う。ロスヴァイセは顔を赤くして目を伏せていた。

一度紅茶を飲んでから、ゲンドウルさんがロスヴァイセに問う。

「ロセ、私がここに来た理由の一つ。おまえならわかるね？」

ロスヴァイセは『ロセ』って呼ばれているのか。一応、彼氏（仮）だし、俺もそう呼んだほうがいいのか？

俺の疑問をよそに、ゲンドウルさんは続ける。

「ここには二人の男性がいますが、どっちだね？」

俺とイツセーを交互に見るゲンドウルさん。イツセーは首をかしげて若干困っていた。

ロスヴァイセは立ち上がり、一度深呼吸をしてから言った。

「紅髪の男性です。彼が私の彼氏、ロイ・グレモリーさんです」

ロスヴァイセの言葉に、事情を知らない面々が驚愕の表情を浮かべる。

ゲンドウルさんはそれを確認しながらも、俺の目を見ながら問う。

『グレモリー』ということとは？」

「はい。俺はリアスの兄になります」

俺は即答した。変に口ごもると怪しまれるからだ。

「ロセ、本当に彼が？」

「はい。真正正銘、私の彼氏です」

ゲンドウルさんはそれを聞くと、微笑しながら話し出す。

「私の心配は無駄に終わりそうね。最初に彼氏ができたとき、どこの馬の骨

と思いましたが、あなたなら」

俺はその一言にホツとしてロスヴァイセをちらりと見た。そのロスヴァイセは目が合うと顔を赤くしてそっぽ向いたが、いい加減慣れて欲しい。

ゲンドウルさんがロスヴァイセに訊く。

「それで、付き合ってどれくらいだい？」

「……………三ヶ月です！」

それだと俺がこつちに来てすぐに——いや、俺がこつちに来てすぐにロスヴァイセも来たんだったな。ロキと戦つてもう三ヶ月になるのか……………早いもんだな。

俺は心中でそんなことを思いながら、紅茶に口をつける。

「三ヶ月……………つまり、男女の関係を結んでいると思つていいんだね？」

「——ッ！」

俺はそれを聞いて紅茶を吹き出しかけた！だが、ギリギリで耐え、咳き込む。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「だ、大丈夫ですか!？」

ロスヴァイセは顔を真っ赤にしながら背中をさすってくれた。

この場面だけを知らない奴が見たら、本物のカップルだろうな。てかこのヒト直球すぎるだろ!？」

俺が心中でツツコミをいれていると、ゲンドウルさんは俺たちの様子を見て言う。

「その様子だとまだのようだね」

「ま、まだ結婚もしているわけでもないし……。だ、だいたい！私の貞操観念は、ばあちや……。お祖母さんが植え付けたものです！」

「私は嫁ぐ前に関係を持つなどは言つてない。変な男に引つかかつて無駄に体を許すんじゃないと言つたんだよ」

するとロスヴァイセは俺の腕を掴み、方言丸出しで叫んだ！

「わ、わたすだつて！男の子とエツチなことしてえさつ！」

「そつたら、さつさと身さ固めちまえばいいつて言つてんでしようが！」

両方とも方言全開になつてんじゃねえかよ！

この一連の流れを見ていた俺たちが気まずい雰囲気になつたことに気づいたのか、ゲンドウルさんは咳払いしてから続ける。

「——許可します」

ゲンドウルさんの一言にロスヴァイセは反応できていなかった。

「……………へ？」

「『へ？』じゃない。私は良しと言つたのです。これで好きな男性と想いを遂げられるの
だろう？ほら、今度は逢い引きでもしてみんさい」

「い、いや、でもー」

慌てるロスヴァイセに助け船を出す。

「そんな慌てることもないだろう。ゲンドウルさんは良しつて言ったんだ。それだけだろ？」

「いや、確かにそうですけど……」

ロスヴァイセはそう言うのと、顔を真っ赤にしながら俯いた。

「彼氏さんの言うとおりだよ。今度会うときは改めてその辺を訊くからね。おまえとー」

——彼氏さんからも、ね。今日はありがとうございました。私はこれで失礼します」

ゲンドウルさんはそう告げると、ソーナが用意したという宿泊施設に向かうため、この場をあとにする。

ゲンドウルさんが去ったことを確認した俺とロスヴァイセは、

「はあー」

盛大に溜め息を吐いた。

それはそれとして、ロスヴァイセが俺の腕を掴んだままなんだが……。

そのロスヴァイセは顔を真っ赤にしながらか俺の腕をぎゅつと掴み、身長のせいで若干上目遣いになりながら頼んでくる。

「……すみません。ちよつとの間なので、協力してください。……もう後には引くこ

とができないんです……………っ！」

なんか、勢い任せのやけくそに見えてきた。

だが、それと同時に、いつもはしない表情をするロスヴァイセのギャップに『かわいい』と思ってしまった俺がいた。

「——ッ！」

それを自覚した瞬間、全身に鳥肌が立った！な、なんかとてつもなく嫌な予感がするんだが……………。

額に冷や汗を流す俺だが、流れのままロスヴァイセとデートをすることになってしまったのだった。

——

ちょうどロイの全身に鳥肌が立つ数分前。

冥界某所で魔王二人が簡単な会議をしていた。

「——ッ！」

その途中、なにかを察したように彼女——セラフオルーが席を立つ。

「どうかしたのかい、セラフオルー？」

異変を察し、彼女を呼び止めたのはロイの兄——サーゼクスだ。

だが、セラフオルーは彼の言葉を無視して部屋から出ていこうとする。

「——つてどこに行く気だ!？」

「何でもないので、サーゼクスちゃん。ちょっとロイとお話をしに——」

顔は微笑しているが目がまったく笑っていないセラフオルーを見て、サーゼクスが素早く彼女の腕を掴むと、いつになく慌てながら彼女に言う。

「ま、待て!このタイミングで抜けられるのは困る!少しだけだが話は聞いている!だから落ち着け!落ち着いてくれ!」

「離してサーゼクスちゃん!離してええええええええええええ!」

セラフオルーは引き剥がそうと暴れるが、最終的に「また今度、じっくりすればいいわね………」と呟いてピタリと止まる。

サーゼクスはそんなセラフオルーを見て、顔を青くしながら、自分の弟——ロイの無事を祈るのだった。

冥界の魔王二人がこんなやり取りをしていることを、当のロイは知るよしもないが、セラフオルーの呟きのタイミングで全身に鳥肌が立ったのだった。

l i f e 0 4 デート

ゲンドウルさんの訪問があつた次の日の早朝。

俺はセラに連絡を取っていた。だが、

「あく、セラ?」

『……………』

「聞いている?」

『……………』

連絡開始から十分、無視され続けていた。映像の向こうにいる彼女の表情も拗ねているように見えるのは気のせいではないだろう。

理由はわかっているが、いちおう訊いておく。

「俺とロスヴァイセとデートに行くのそんなに嫌か?」

俺の問いに、セラはいつになく不機嫌な声音で返してきた。

『……………別に。あれを許可した時点でこうなるとは思っていたわよ……………』

予想通りの返答に俺はため息を吐き、決めていたことを口にする。

「それじゃ、今度デートしようぜ。休日があれば、だけどな」

『本当に！』

途端にテンションが上がるセラ。

まあ、ふりしているほうとデートに行つて、本命とはしないってのはかわいそうだ。セラだつて、たまには息抜きしたいだろうしな。

「ああ、本当だ。まあ、ユーグリッドを捕まえてからだがな」

『そうね、ちやちやつと捕まえちやいなさい！』

俺のデート発言でテンション上がりまくりのセラ。俺は対照的にため息を漏らした。

「了解だ。つて、どこにいるかもわかつてねえけどな……」

『それもそうだけど、早めにお願ひね☆』

「任せとけよ」

俺はセラのお願いに頷いて答え、連絡用魔方陣を切る。

さて、デート行くか……………。

時間は進んで正午頃。

生活用の義手をつけた俺は玄関で靴を履いていた。予定通り、ロスヴァイセとデートに行くためだ。

玄関にはリアスや朱乃のものとは違うロングブーツが置いてあった。

基本スーツかジャージ姿のロスヴァイセだが、あいつもこういうおしやれなものを持っているんだな。

俺がそんなことを考えていると、二階からロスヴァイセが降りてくる。

ロスヴァイセの服装は、タッチコートに短いフレアスカートという出で立ちだ。

俺は白いワイシャツの上に黒いコート（フード付き）を羽織り、ジーパンを履いている。こんな格好、久しぶりだな。

それにしても、あんな格好のロスヴァイセは新鮮だな。

俺が靴紐を結ぶ手を止め、彼女をじっと見ていると、ロスヴァイセは顔を赤くしていた。

「あ、あの……………どうですか？」

「ああ、スマン。似合ってるぞ」

俺が微笑しながら言うと、ロスヴァイセは余計に顔を赤くしてしまった。

「あー、とりあえず、行くか？」

「は、はい」

お互い靴を履きおえ、出発しようとする俺たちをリアスが呼び止めた。

「お兄様、ロスヴァイセ。夜までには帰ってきてください。冥界に行く前のミーティングがありますから」

「わかった」

「は、はい」

返事をする俺とロスヴァイセ。彼女のほうは緊張しているのか、若干歯切れが悪いようだ。

すると、リアスが苦笑する。

「黒歌が追いかけないよう、小猫が押さえていますから、安心してください」

「……………？なんであいつが追いかけてくるんだ？」

黒歌は俺の左腕が無くなったことに責任を感じているらしく、色々と面倒を見てくれるが、デートに首を突っ込むほどではないだろう。

俺が首をかしげて訊くと、リアスは一瞬驚き「いえ、気にしないでください」と苦笑した。

「……………」

横のロスヴァイセが複雑な表情をして俺を見てきていたが、俺は再び首をかしげて考

える。

「……………うん、わからん。」

俺は思考を切り上げ、リアスに確認する。

「まあ、夜までに帰ってくればいいんだろ？」

「はい。よろしくお願いします」

「わかった。それじゃ、いつてくる」

「い、いつてきまず」

俺たちはリアスにそう言うとき家を出た。

ロスヴァイセのまだ緊張している様子だ。やれやれ、大丈夫だよな？

兵藤卓を出発した俺とロスヴァイセは、二人で電車に乗っていた。なんでも、ロスヴァイセが東京に用があるらしいのだ。

駒王町を離れるのはどうかと思っただ、東京は日本の首都だ。駒王町並の結界が張られているから大丈夫だと思う。

それにしても――、

「……………モデルさんかな？」

「ホ、ホントだ。俳優さんかもよ？」

「あの人、めっちゃ美人じゃね!？」

「横の男が邪魔だな。たぶん連れだぜ?」

車内では俺とロスヴァイセに視線が集中していた。

まあ?、俺たちが並んで座っているためか、話題にしても話しかけるような輩はいない。

「……………ジャージやスーツだったら、こんなに目立たなかったのでしょうか…………」

ぼそりとロスヴァイセは呟いていた。

「どうだろうな。こういうのはどんな格好でもなると思うぜ?それになロスヴァイセ、おまえは自分で思っている以上に美人だと思う」

俺が素直に返すと、ロスヴァイセは頬を赤くしてしまった。

これ、何回目だ? いい加減慣れて欲しい。

それ以降は特に何かあったわけではなく、無事に目的地に到着した。

到着早々、ロスヴァイセは歓喜の表情を浮かべ、顔を輝かせながら震えていた。

「……………、(ここ)が夢にまで見た、女性向け百円均一の大型店………… 『ベラ』!」

『ベラ』? イタリア語で美しいとか、美女って意味だったな」

「はい! そのとおりです! このブランドはまさに女性向けのオシャレなアイテムばかり

をラインナップしているんです！百円とは思えない高機能で実用性の高い商品ばかりと有名なんです！……ああ、ほら！あのお皿なんて

とつてもオシヤレ！ああ、そっちの——」

俺を置いて一人で商品を見始めてしまった。女性はこうなると長いからなあ。セラとのデートで嫌ってほど痛感した。

「ロイ先生、見てください！あれもこれも全部百円です！」
興奮状態のロスヴァイセ。……元氣そうで何よりだ。

「ついつい一万円分も買ってしまいました。さすがは東京。さすがはベラです。恐るべし……」

お財布の中身を確認しながら唸るロスヴァイセ。

今、俺たちはカフェのテラス席で休憩中だ。

百均で一万円を使う。単純計算で百商品か？税込とかになつたら知らないが、どちらにしても買いきりすぎだな。さすがに持ちきれないので、先ほど配送業者に荷物を頼んできた。きっと明日には届くだろう。約百商品がどっさりど。……どこに置くつもりなんだ？

そんな心配をしている俺に、ロスヴァイセが話しかけてくる。

「…………つ、つまらなかつたですか？す、すいません、一人だけハイテンションになってしまつて……………」

俺が難しい顔をしていたのか、申し訳なさそうにロスヴァイセは漏らした。

「別に。見てて面白かつたし、いい気分転換になつた」

「だつたら、いいんですけど……………」

ロスヴァイセはカップコーヒーに口をつけたあとに言う。

「……………思えば、男性とのデートなんてこれが初めてです」

「俺なんかでよかつたのか？」

まあ、イツセーにはリアスやアーシアたちがいるから無理だろうし、木場は断りそうだし、アザゼルは忙しいだろうから難しいか。……………俺にはセラがいるんだが……………。

そんなことを考える俺をよそに、ロスヴァイセは照れくさそうに続けた。

「も、もし、誰かとデートに行くなら、私はロイ先生がよかつたんです。もしです！もしもの話ですよ！」

ロスヴァイセは顔を赤くしながらコーヒーを口にした。

だが突然息を吐いて表情を曇らせた。

「……………私は故郷ですつと勉強ばかりしていましたから……………。周囲のヴァルキリー候補

生たちは、ヴァルハラ英霊たちの話で盛り上がっていましたが……。私はその間にも机に向かつていました」

想像に難しくないな。ロスヴァイセだったらマジでそうなっていそうだ。

「青春を勉強に費やしたおかげでヴァルキリーになることはできましたが……。いま思えば、もう少し遊んでおけばよかったかななんて振り返ることもあります」

「何言ってるんだ。まだまだ若いじゃないか。リアスたちと一つか二つしか違わないし、今から青春を謳歌してもいいと思うぜ？」

実際こいつは教師やっているが、生徒でも通るぐらいに若いからな。

「置いてかれたとはいえオーディンの爺さんの付き人やってたんだからよ。自信持ててー！」

そんなことを言ってるロスヴァイセを励まそうとするが、逆に憂いのある表情になってしまった。

「私は、ロイ先生たちが思っているほど、大した者でもありません……」

ロスヴァイセはそう言うのと懐からワッペンを取り出した。

複雑な紋様が刻まれ、ルーン文字を円形に列ねた独特の形をしている。この紋様は昨日ゲンドウルさんが転移してくるときに展開した魔方陣に似てるな。

ロスヴァイセは続ける。

「これは、私の家に伝わる固有の……家紋みたいなものです。家の長子たる者は、これを代々受け継ぎ心と体に刻んで後世に繋げていきます。……私は、長子——長女でしたが、この紋様を……」

ロスヴァイセはそこで言葉を止め、トーンをさらに落としてぼそりと漏らす。
「……………受け継げなかつたんです」

北欧に住まう半神の一族はそれぞれの家で独自の魔法を作り、それを継承していつていると前に聞いた覚えがある。ロスヴァイセはそれを……………。

「……………私には兄弟がいまありませんでしたから、結局、紋章は遠縁の子が引き継ぐことになりました。その子にはすんなりと継承できて、周囲も私もなんとも言えない空気になってしまったことは今でも覚えてます。……相性が悪かつたんでしょうかね？今でも降霊術のセイズ式がいまだに馴染めないんですね。自分でも驚くぐらい攻撃魔法は習得できてしまつて……………。ルーン、ガンドル、セイズをバランスよく使いこなしてきた私の家系では、私は異端児なんです。一族が使っていないかつたものとばかり相性があつてしまったんですから……………。幸いヴァルキリーにはなれたのですが……………成績は現役時代の祖母と比べて散々なものでした……………」

落ち込み気味にロスヴァイセは告白してくれた。

ある意味俺たち、グレモリー三兄妹とサイラオーグみたいなもんなのかもな。

「ある意味で俺はお前がうらやましいよ」

「ロイ先生？」

「俺は確かに母さんから滅びを受け継いだ。……だが兄さんみたいにコントロールできるわけじゃないし、リアスみたいな火力もない。何もかも中途半端なんだよ、俺は。……出来ることは滅びを武器にして斬ったり撃ったりするだけ、本当にそれだけだ。だから俺はそれでいいとも思ってる。ロスヴァイセ」

「は、はい！」

俺に急に呼ばれたロスヴァイセは、驚きながら返事をした。

「誰だつて出来ること、出来ないことがしつかりある。よく言うだろう？『完璧な人間はない』つてさ。おまえは、おまえが出来ることを全力でやればいい。それだけだろ」

「……………そうですね。……………『完璧な人間はいない』……………ですか」

「まあ、俺たち悪魔だけだな……………」

「それもそうですね」

俺が小声で漏らした言葉に、ロスヴァイセは若干おかしそうに笑いながら頷く。

ロスヴァイセの調子が戻ってきたので、俺は話題を変えるように質問した。

「教師の仕事、楽しいだろ？」

「え？は、はい。誰かにモノを教えることがあんなにも楽しいとは思ってもないくて」

「俺もだ。誰かに教えること、誰かの助けになることがあんなに楽しいとはな」

実際、ロスヴァイセは生徒からの人気も高く、分かりやすいと評判だ。俺もある程度人気らしいが、ロスヴァイセとは対照的にスパルタだと評判だったりする。

「で、ソーナからのオフアー決めたのか？」

「まだ考え中です。とりあえず、今度学校に行きますし、それから考えようかなと……」
百聞一見にしかずっていうしな、そのほうが考えやすいだろう。

「悪魔の生は長いんだ。ゆっくり考えればいいさ」

「ええ、そうさせてもらいます」

ロスヴァイセはそう言うのと微笑んだ。やっぱりセラもロスヴァイセも笑っているほうがいいな。

俺は残り少なくなったコーヒーに口をつけ、一気に飲み干すと、言葉を続ける。

「相談なら乗るぜ？アザゼルへの愚痴でもいいし、また買い物でもいいし」

「では、また買い物に。祖母への言い訳にもなりますし」

また買い物か。こいつに映画を見るとかそういうのは考えなれないのだろうか。まあ、本人が楽しければいいか……。

「……………」

「あの、ロイ先生？」

ロスヴァイセが黙りこんだ俺に話しかける。俺は表情こそ変わらないが、静かに殺氣立っていた。

俺は振り向かずに後ろの席の男性に話しかける。

「盗み聞きとは、いい趣味だな。なあ？ ユーグリット」

「おや、バレていましたか」

俺の発言に俺たちの後ろの席にいた男性——ユーグリット・ルキフグスが返す。

お互い振り向かずに話を続ける。

「今日は義兄^{あにうえ}上会いに来たものではありません。リゼヴィム様からはよろしく伝えてくれと言われていますが、今回はロスヴァイセに用があるので」

「残念ながら、彼女はやらん。今は俺の彼女なんぞでな」

「私の目的が？」

訊いてくるユーグリットに、俺は不敵に笑みながら返す。

「あんたらの目的は『666』^{トライヘキサ}だ。ロスヴァイセ、おまえ、学生時代に『666』^{スリーシックス}に関して色々調べていたんだろ？」

「——っ！あの論文は破棄したはずです！」

ロスヴァイセは思い出したように言うが、何か書いたのか……………。

その破棄された論文つてのはよくわからんが、俺は怒気を込めてユーグリットに言

う。

「破棄されていようが見つける。おまえらがやりそうなことだな」

「あの論文を少しだけルームメイトに話しました。まさか！」

「ええ、少し記憶を探らせていただきました。断片しか拾えませんでした……」

ロスヴァイセはそれを聞いて立ち上がり左手をユーグリットに向けた。

「この外道！ここにあなたを——」

俺は、ロスヴァイセがユーグリットに向けた左手を右手で優しく掴む。

「ロスヴァイセ、落ち着け。周りを見ろ」

ロスヴァイセはそれを聞いてハツとしたように周囲を見渡した。

ここは普通の店のテラス席、周りの客からは奇異の視線が送られていた。

俺はロスヴァイセの右手を離し、立ち上がる。

「お騒がせてすみません。もう行きますので……」

俺とロスヴァイセは店から出ようと歩き出し、ユーグリットの横を通りすぎる。

俺たちとユーグリッドがすれ違った瞬間、奴は言う。

「彼女は無事です。人質にもしていませんよ。ただ——」

ユーグリットはそう言うのとロスヴァイセに、正確にはロスヴァイセの髪に手を伸ばすが、俺が左手でユーグリットの手を掴み力を込める。

「言つたはずだ。彼女はやらん」

「怖いですね。そんな機械の手で何が守れるのです?」

「機械の手だからこそ、やれることもあるんだよ」

ユーグリットはそれを聞くと、ロスヴァイセに視線を戻した。

「ロスヴァイセ、私はあなたの能力が欲しい。あなたは優秀ですよ。あなた自身が思っているよりも。——それにその銀の髪は美しい。まるで……」

ユーグリットが続きを言う前に、俺は一気に左手に力を込める。

ユーグリットの手から軋むような音が鳴るが、こいつは気にした様子もなく俺の手を振り払う。

「………ごきげんよう。義兄上、ロスヴァイセ。お二人とも、次に会うときには答えを出しておいてください」

ユーグリットはそう言い残して人混みの中に消えていった。

俺は煙を吹く義手に構うことなく、すぐさまリアスに連絡を取った。

l i f e 0 5 報告

兵藤宅に戻った俺——ロイとロスヴァイセ。

その後、リアス経由で話を聞いたオカ研メンバーがVIPルームに集まった。

「……迂闊だった。まさか東京に来るとは……」

俺は出発前に『首都東京なら大丈夫』と考えたことを悔やんでいた。

東京をはじめとした各国首脳都市には、三大勢力の和平の象徴である駒王町並の結界が張られている。

だが、ユーグリッドは白昼堂々とそこに現れた。

やはり、この町で済ませてもらうべきだったか？ いや、今回はロスヴァイセのために出掛けたんだ、彼女の願いを叶えないわけには……。だが、それが結果的にロスヴァイセを危険な目に合わせちゃった。

俺が頭の中で終わりが見えない議論をしているなか、イリナが言う。

「今までのテロリストとは一線を画すわね。彼らは人間界に影響を及ぼすことに躊躇いを持っていないもの」

イリナの言うとおりだ。クリフォートは今までの連中とは根本的に違う。今までの連

中は目的のものだけを集中的に狙ってきていた。だが、クリフォトは目的に辿り着くためなら何であろうと攻撃してくる。事実、吸血鬼の国もそれで壊滅的な打撃を受けた。

もしあそこでユーグリッドと戦闘になっていたら——考えただけでもゾツとする。あそこで戦ったら、数百人の犠牲者が出たはずだ。

……………やはり、迂闊だったのか……………？

そんな泥沼に入ってしまったって俺にリアスが言う。

「お兄様、彼らが東京に現れるなんて誰も予想できなかったことです。プライベートのタイミングで接触されるなんて——」

「想定外だった。それじゃ片付かない……………。この町並の結界が張られた場所に来る。……………それも予想しておくべきだった……………」

表情を険しくしながら考えがどうにもまとまらない俺の耳に、朱乃の一言が聞こえた。

「向こうもかなりのリスクを負ったはずですよ。一度やってしまえば、二度目はないと断言できます。あちらとしても余程のことがない限り、行動は起こせないはずですよ」

「だが奴はそのハイリスクを負ってまでロスヴァイセに接触した。理由はロスヴァイセが破棄したとかいう論文か……………。詳しくはアザゼルに訊いてみるしかないな。そろそろ定時連絡の時間だったはずだ。ロスヴァイセもそれでいいか」

「はい」

俺の問いにロスヴァイセは返事をしてくれるが、あれからずっと考え事をしているように難しい表情になっていた。

数分後、アザゼルから連絡が入った。今、アザゼルはグリゴリに神セクリッド・ギア器や異世界、クリフトについてなどの話し合いをしに行っている。だからこうして定時連絡の時間まで待つていたわけだ。

俺たちから一通りの話を聞いて、アザゼルはあごに手をやり目を細めた。

『ロイの次はロスヴァイセか……』

「ああ、トライヘキサ666の論文がどうか言っていたが……」

俺が言うと、アザゼルは何か納得したような表情になり、目を細めながら口を開く。

『最近頻発している、名うての魔法使いの行方不明騒ぎ。調べてみたんだが、全員がトライヘキサ666に関する研究をしていたようだ。特に一般的なモノとは違う方面から攻めてい

たって研究者だ。集会に参加する者にも何人かいるようだ』

「奴らはトライヘキサ666の情報を求めて、それっぽい術者を手当たり次第拉致しているって訳か？」

俺の確認にアザゼルは頷いた。

『黙示録の内容と聖書の神を知っていれば、ある程度封印に使われた術式が特定できる。』

一応クリフトでも解除困難なものが、少なくとも二十三あると想定されている。そこから逆算して666復活までの猶予がどれほど残っているのか協議中だ。復活させる気はサラサラないが、最悪のケースも想定しておかないといけないからな』

最悪のケース——グレートレッドと666の衝突。トライヘキサそれが実際に起きてしまえば、本当に世界が滅ぶかもしれない。

全員が同じことは考えたのか表情が固くなっていた。

そんな俺たちを見てアザゼルは笑った。

『深刻になるには早えよ。いちおう、おまえら以外にも「保険」は作る予定だ。今度、それに關しても詰めていかないといけないんだが、まあ、それはおいおいだな』

俺も全部の情報を知っているわけじゃないからわからんが、アザゼルが言った「保険」は俺じゃ想像も出来ないものなんだろうな。

『そういえば、さつき666トライヘキサに關して一般的なモノとは違うって言ったが、どういう意味だ？ やっぱ異説の『616』のほうか？』

『ロスヴァイセ、どうなんだ？』

ロスヴァイセは俺たちからの質問に口を開いた。

「ロイ先生の言うとおりです。私は異説である『616』のほうで研究していたんです。そちらの数字で各種関連のものと照らし合わせて、数式、術式を組み立てていきました」

『——っ。やはりか……。さつき言った拉致された術者たちの大半も616から調べていた者だったそうだ。グリゴリですら「616」は本来の解釈じゃないと信じていたほどだ。……やつらがこう動いたということは、666トライヘキサの封印は「616」をベースに？』

独りで話し始めてしまったアザゼル。俺もさつきはあんな感じだったのか。アザゼルみたいに声には出してなかったが……。

アザゼルは声に出していたことに気づいたようで、咳払いをしてからロスヴァイセに言う。

『とりあえず、ロスヴァイセ。おまえが書いたという論文を覚えている限り、文字に書いてこちらに回せ。こちらで調べてみる』

「……少し前から、書き起こしてありました」

ロスヴァイセはそう言うのと、レポート用紙の束を小型の転移魔方陣にのせ、ジャンプさせた。すると連絡用魔方陣に映るアザゼルの手元にレポート用紙の束が現れる。

レポートを受け取りながら、アザゼルはロスヴァイセに言う。

『しかし、おまえも大したもんだ。自然と祖母と同じものを調べていたなんてな。血は争えないというやつなんだろう』

俺はロスヴァイセが難しい顔をしている理由に気づいた。

クリフォトに狙われている魔法使い、それにロスヴァイセのお祖母さん——ゲン
ドウルさんも含まれているからだ。

「……………」

それからロスヴァイセは、複雑な表情を浮かべたまま何も話すことはなかった。

l i f e 0 6 学校へ

ソーナが目標としている「誰でも通えるレーティングゲームの学校」はアガレス領にある。

理由はいくつかあるが、一番大きな理由はソーナがセラの、つまり魔王の妹だからだ。俺やセラはソーナを応援はしているが、大きな支援は出来ていない。下手に動くとセラの政治目的と思われるってしまうからだ。

俺とリアスがグレモリーとして大きな支援が出来ないのもまた、兄さんが魔王だから。

同じく応援してくれているサイラオーグは、大王家の次期当主だから大きな支援は出さない。

本当に政治つてのは面倒だ。

それを知ったソーナは夢を捨てることも考えたらしい。セラに迷惑はかけられないと自分に言い聞かせて……………。

そんななか、ソーナに助け舟を出してくれたのがアガレス家現当主だったのだ。悪魔の中間管理職であるアガレス家は各方面からの信頼も厚く、周りからの風当たりもそこ

まで強いわけでもなかったようだ。

そんなわけで、誰でも通えるレーティングゲーム学校第一号がアガレス領に建てられた。

という事で、いつものオカ研メンバーと俺は土日を利用して、体験入学の手伝いをするためにアガレス領に来ている。

俺はいつもの生活用の義手をつけているが、すぐに戦闘用のものも取り出せるように異空間にしまつてある。

学校が建てられた場所はいつかにリアスとサイラオーグがゲームを、俺は曹操と一対一で勝負をした場所。空中都市アグレアスの近くにある町——アウロスだ。

冥界では農産業随一と称されるアガレス領。まさにそれを体現しているような町だ。この町は農業で生計を立てている住民が多いが、人口自体は多いとは言えない。レーティングゲームの聖地であるアグレアスからも近いため、端から見れば発展していそうだが、その観光用の町はこの反対側に位置しているため、滅多なことではヒトが来ないという。

つまり、観光名所の近くにある田舎町ってわけだ。

俺たちが転移してきたのは、そんな町の中心にある監視塔の最上階。窓からは緑溢れる町と、その町にいくつかある風車小屋、そしてゲームの聖地アグレアスが見える。

学校を建てる場所としては、中々いい環境だと思う。

転移魔方陣の前で待っていてくれた町の役員に連れられ、監視塔を降りていく。下で待っていたのは――。

「よう、兵藤」

匙だった。

グレモリーの次期当主のリアスが行くと聞いて、町長さんも顔を出そうとしたらしいが、俺とリアスが事前に「大仰な出迎えは無用です」と伝えたことと、例の魔法使いの集会の準備でも忙しいとのことと来ていない。

役員から匙に案内役がボタンタツチされ、俺たちは学校に向けて歩き出した。

どこことなくヨーロッパを思わせる石造りの家や畑、風車小屋、都会では感じることにできない、いい静けさがこの町にはあった。

匙が言う。

「いいところだろ？冥界の田舎町！けど、魔法使いの集会とかが毎年行われるくらいなの、いわゆる知るヒトぞ知る町だ。近くにレーティングゲームの大舞台アグレアスも一望できるし、環境は最適とさえ言える」

俺やリアスがいることを忘れてタメ口で喋る匙だが、それを指摘する者はいない。匙の生き生きとした表情を見ていると、それがとても些細なことに思えてしまう。

その後も他愛のない会話をしながら匙についていくこと十分ほど、町の南端に真新しい建物が現れた。

大きさとしては駒王学園には及ばないが、体育館と思われるものや運動場が見てとれ、その配置がなんとなく駒王学園に似ている。

校門に設置されている表札には『アウロス学園』と記されている。ソーナはこの町の名前を学校名にしたようだ。

まあ、シトリーとかの名前を出してしまうと、また上の連中がうるさいからな。

校門を潜り、本館に近づいていく。

運動場では、もう子供たちが走ったり、魔力を競い合っているようだ。ソーナやサイラオグの眷属が付き添っていることが遠目に確認できた。

それを眺めながら本館に入ると、ソーナが出迎えてくれた。

匙がソーナに伝える。

「会長、オカルト研究部の皆さんをお連れしました」

「サジ、ご苦労様でした。担当のところに戻ってくれてかまいません」

それを聞いた匙は足早に担当の場所に戻っていった。

どこことなく駒王学園に似ている本館からは、新築独特のにおいがする。

リアスが手を差し出し笑顔で一言告げる。

「改めて、おめでとう、ソーナ」

ソーナはリアスの手を握り、微笑む。

「ありがとう、リアス。まだ第一号で、開校も大分先だけれど、体験入学を実施できるまでには形にできました」

二人が握手を終えたと同時に俺も手を差し出し、笑みながらソーナに言う。

「俺からおめでとう。セラにも見せてやりたいもんだ」

「ありがとうございます」

ソーナは俺の手を握りながらいつも通りの口調で返してきた。だが、付き合いがそれなりにある俺は、なんとなく明るい声音がわかった。

「それでは、中を案内しましょう」

俺たちはソーナの先導で校内を歩くことになった。

見ていて思ったが、ここに来ている子供たちはだいたい十歳ほど、人間的に言うところの小学生ぐらいの子供が多い。

逆に言うところだけの子供学校に通うことを望んでいるわけだ。

それからしばらく歩いていくわけだが、時々イツセーとリアス（おっぱいドラゴンとスイッチ姫）を見て驚く親がいたが、二人とも手を振るだけにとどめていた。ここで握手だのサイン会だの始めたら、それこそ体験入学どころじゃないからな。

渡り廊下を越え体育館に入ると、聞き覚えのある力強い声が耳に届いた。

「いいか！パンチというのは腰をおとして、体全体から打ち出すように一直線に前へ突き出すのだ！」

『はい！』

体育館で子供たちに正拳突きを教えているサイラオーグの声だ。

子供たちもたどたどしくはあるが、元気にパンチを繰り出していた。

「ハッ！ハッ！ハッ！」

子供たちに指導していたサイラオーグが俺たちに気づき、構えを解いて、朗らかな笑みを見せてくれた。

「おおつ、リアス、ロイ様も」

サイラオーグが子供たちに言う。

「見ろ、おっぱいドラゴンたちだ」

サイラオーグの一言で子供たちが一斉にイツセーたちのほうに興味を注いだ。こうなると子供は止まらないからな。

俺は小さく息を吐き、レイヴェルに耳打ちをする。

「（とりあえず、レイヴェル。頼んだ）」

「（お任せください！イツセー様のマネージャーとしてのがんばりどころですわ！）」

その後、レイヴェルの指示のもと、即時イベントが行われた体育館だった。

急遽開始されたおっぱいドラゴンのイベントを抜け出し、俺はのんびりと校舎を見て回っていた。

子供たちは講師からの指導を受けて元氣よく、真剣に体を動かしていた。

魔力や魔法の基礎を教えているところがあつたが、魔力に乏しい子供たちが真剣な顔でそれらに向き合う姿に、

——俺もあのぐらいの年の頃はヤンチャしてたな。何て考えながら、ブラブラと歩いていると、

「ロイ様、こんなところに」

ソーナに見つかってしまった。いや、別にやましいことがあるわけではないのだが、いちおうソーナに案内されている最中にいなくなつたため、探させてしまったのだから。

「おう、イツセーたちのほうはいいのか？」

「はい。レイヴェルさんが指導しているので大丈夫かと」

俺の問いにソーナは頷く。レイヴェルの信頼は厚いようだ。まあ、あの娘はしつかりしているし、当たり前か。

「そうか。それにしてもいいところだ。子供たちも生き生きしてる。学校つてのはこうでないとな」

「この学校にはレーティングゲームだけでなく、すべての教育機関から入学を拒否された子供たちも来ています。能力が低いから、階級が低いから、そんな理由で入学ができない、そんな子供たちが………」

ソーナが声のトーンを落として言った。

ここにいる子供たちは学校に行きたいが何かしらの問題に直面した子たちだ。そんな子供たちが、わらにもすがる気持ちでこのアウロス学園に来たのだろう。

今の悪魔は、そのような者たちに容赦がない。救われる機会すらあたえられないのだ。ソーナはそれを変えようとがんばっている。

ソーナが窓から運動場を走り回る子供たちを見ながら言う。

「がんばります。まだスタートもしていませんが、あの子供たちのためにも、これからひとつひとつ壁を突破していきます」

言っていることがリアスみたいだが、それだけこの学園の設立に気合いが入っているのだろう。

俺はソーナを見ながら言う。

「そんじや、俺も手伝うさ。俺が出来ることは少ないが、義兄あにとして頑張りますか。で、いつになったら——」

「姉様と正式に結婚しましたら、そう呼ばせてもらいます」

俺の言葉を遮り、ソーナは厳しく言う。もう少し頭を柔らかくしてもいいんじゃないか？

俺が頬をかきながら苦笑していると、ソーナは続ける。

「それと、支援をしてくださるのはいれしいのですが、あまりやりすぎないでください」「わかってるよ。上の連中は頭が固いからな……」

ソーナはそれを聞くと腕時計で時間を確認し、「それでは」と一言告げてから再びどこかに行ってしまった。

おそらく講師の手伝いに行ったのだろうが、俺に関しては特に予定も無いので、またブラブラと歩くことにするのだった。

しばらくして、レーティングゲームのランキング一位、『エンペラー』ことデイハウザー・ベ

リアルが学校に来るといふ出来事があつたらしいが——。
「……………つ。何だかな……………」

俺は一人、中庭のベンチで頭を抱えていた。

本当、何だろうな。戦闘中は問題ないのに、それ以外るときに頭痛に襲われる。今度病院に行くか……。

それにしても『ベリアル』か。クレーリア・ベリアルについて、あれから関わらないでいたが、デイハウザーはどういう認識なんだろうな……………。やはり、報告のとおり、あの町にいた「聖剣使い」に滅せられたのか？

俺はいつかの任務のことを思い出しつつ、頭痛がおさまるのを待ったのだった。

待つこと数分。頭痛もおさまったので、また校舎を歩きまわっていた。

ある授業が子供たちが廊下に溢れるほどの盛況を見せていた。親御さんも立ち見で見学しているほどだ。

中を覗くと、ロスヴァイセが子供たちに囲まれていた。

ロスヴァイセは、ソーナとサイラオーグから「教師をやってくれないか？」言われていたし、あのデートの時にも言ったが、とりあえずという事でやっているのだろう。

俺は後ろから気配を感じて振り向く。

そこには銀髪の淑女——ゲンドウルさんがいた。

「ゲンドウルさん、お久しぶりです」

「あら、ロイさん。お久しぶりです。ロセがいつもお世話になっております」

お互いに頭を下げる俺とゲンドウルさん。

俺は顔を上げ、手を顔の前で振りながら言う。

「いえ、そんなことは……」

「聞きましたよ。あの子のわがままで買物に付き合わされたとか」

付き合わされたというか、それがデートだったんだけどな。ゲンドウルさん的には映画とかのほうがよかったのか？

苦笑する俺と、真剣な顔のゲンドウルさんの会話が聞こえていたのか、ロスヴァイセが俺たちに気づき、驚きの声を上げた。

「ロイ先生！ばあちゃ……お祖母さんも、見てたんですか」

ゲンドウルさんが教室に入っけいき、俺もつい流れで中に入ってしまった。

「ここで特別講師をする約束だからね。明日の集会前にいい気分転換にもなります」

言われてみれば、明日だったな、例の集会。その前にここで講義をするってわけだな。

すると、教室内に緑色のオーラに包まれた小さな妖精のようなものが出現し始めた。

妖精は羽ばたきながら、軽やかに教室内を飛び回り、教壇に着地する。

教壇にはゲンドウルさんが立ち、妖精をやさしくなでながらやさしい笑みを浮かべ、静かに口を開いた。

「魔法の起源——魔法がどういう風に生まれたか？皆さんはご存じかしら」

その問いに子供の一人が元氣よく挙手をして答える。

「占いや呪術だつて聞きました！」

ゲンドウルさんは笑顔で頷き、やさしく語りかける。

「その通りです。魔法は、占いやおまじないから誕生したのです。こんなことが知りた
い、あんなことになつたらいいな、あのヒトのために、他の誰かのために……たくさん
のヒトを助けられる方法が欲しいと願つた術者たちが作り上げたものなのです」

俺もついつい聞き入つてしまうほど、ゲンドウルさんの言葉はすんなりと耳に入つて
くる。

『あのヒトのために、他の誰かのために』、か。

「現代の魔法には確かに優劣があり、明らかな差があります。ですが、これだけはまず最
初に覚えておいてほしいのです。……どのような魔法でも必ず術者と他の誰かの役に
立ちます。この世に意味のない魔法なんてないのですから」

そのにつこりとしたやさしさ溢れる笑顔は、厳しそうなゲンドウルさんからは想像で
きないものだった。

『この世に意味のない魔法なんてない』。いい言葉だ。

それを聞いたロスヴァイセも少しだけ微笑んでいるように見えた。

『他の誰かの助けのために』。何か大切なものを、改めてゲンドウルさんから教えられた気がするな。

ゲンドウルさんの講義は続く。

「さて、このお話はここまでしておきましょう。では、突然ですけれど、妖精と仲良くなりたいてって思いヒトはどれくらいいるでしょう？」

「「「はいはいはいはい！」「」」」

一斉に手を挙げる子供たち。それに混ざって教室を覗いていたイツセーも手を挙げかけて、横の匙に止められていた。

その匙も名残惜しそうにしていたが、俺はゆっくり聞かせてもらうか。何か楽しそうだ。

そんなわけで、俺はゲンドウルさんの講義を楽しんだのだった。

l i f e 0 7 約 束

その日の深夜。

一通りの体験プログラムを終えた俺たちは、講師の面々との食事を済ませて自由時間になっていた。

俺たちが泊まるのは学生寮となる予定の建物だ。外装内装共に完成しているので、試しに使ってみてくれとのことだ。

そんなわけで、俺は学生寮に設置されている大浴場に来ていた。

「はあ……………」

俺は片腕（義手は外しているため）でシャンプーを泡立てながら、ため息を吐いた。

今日一日ほとんどのんびりしていたが、あ後はゲンドウルさんの講義の助手を、口スヴァイセと共にやることになったのだ。そこで妖精を追いかけたり、子供たちを構ったりと、結構楽しかったが、意外と疲れた。

十分に泡立てたので、頭をさしごしと洗っていく。垂れてきた泡が目に入ると大変なことになるので、一旦目を閉じる。

明日も基本的に自由だが、ちよつとした助手程度ならやっても平気だろう。

一度死んで、M s・神様に会って、その流れのままこの世界に送り飛ばされたわけだが、グレモリー家の次男として生まれた俺は恵まれたもんだな。血を重んじるものいいが、そのせいで可能性溢れる芽を潰してしまっている。

その可能性の芽を一つでも多く花にするためにソーナは頑張っているし、優秀な眷属はステータスにもなるため、一部の上級悪魔からは支持を受けている。悪魔も一枚岩ではないわけだ。

だからこそ、この学校には意味がある。需要が生まれる。上級に昇格した転生悪魔はその手のものにこだわらないから、強ければいい、優秀なら問題なし。ここで育ち、才能を開花させた生徒をゲームの世界に送り込める余地は十分ある。——ソーナとサイラオーグが確信に満ちた表情で先ほど語っていた。

ゲームに参加できなくても、何かの形で冥界に貢献できる人材を育てる意味でもそう
だ。

——夢を掴むための学校。

なら、俺はそれを守るために手を汚すことも、また体のどこかを失うことも躊躇わない。俺の力で子供たちの未来が守れるのなら、それで……………。

俺が覚悟を改めて、泡を流そうと左手をシャワーに伸ばすが——、

「……………あれ？こっちだったか？」

いっこうに見つからない。かなり体が前のめりになってるんだが、どこだ………？俺が手で探っていくなか、誰かが大浴場に入ってくる気配を感じた。

ここは男子風呂だから、イツセーか木場、ギヤスパ、匙、意外にサイラオーグって線もあるな。

俺は左手でシャワーを探しながら、その誰かに声をかける。

「すまん、ちよつと手伝ってくれ」

「……………は、はい！」

上擦った声が大浴場に響く。妙に高かった気もするが、気のせいだろう。

その誰かがこちらに寄って来てくれたが、この気配って——。

嫌な予感が脳裏によぎった瞬間、聞き馴染みのある声が聞こえた。

「いきますよっ！」

「ああ」

頭から湯をぶっかけられた。泡が落ち、目を開いてみると、そこにいたのは、

「ロ、ロスヴァイセ……………」

「は、はい」

ロスヴァイセだった！なんで男子風呂について、話は後にして、俺の目はロスヴァイセの肢体にいつてしまう！

いつもスーツかジャージ姿だからよくわからなかったが、彼女も結構いい体をしてるな！まるで芸術品みたいだって興奮してる場合じゃねえ！

俺は急いで視線を外し、ロスヴァイセに言う。

「こ、こっちは男子風呂だ！女子風呂はそっちの寮にあったはずだろ！」

「そ、そのはずだったので……女子寮のお風呂が故障してしまったとのことで、一時的に男子寮のお風呂に行ってくれと言われまして……。今なら誰も入っていないと聞いていたのですが……」

女子風呂が故障したから、誰もいないはずの男子風呂に行ってくれ、と。いや、入ってる！ガツツリ入ってるからな!?仕事での『報連相』は大事だろうが！

慌てても仕方ねえ。ロスヴァイセの事だ、すぐに出ていってくれるはず……。

思考を落ち着かせてそう思っていると、横からシャワーの音が聞こえてきた。ちらりと見てみると、ロスヴァイセは体を洗い始めていた。

いや、だから俺がいるんだが……。

「……時間もありませんから、素早く入ってしまおうと思います。あまり、じろじろ見ないでくださいね」

ロスヴァイセは恥ずかしそうにそう言いながら、体を洗っていた！

俺はしばらく前しか見ることができずに固まっていたが、俺もさっさと体を洗ってし

まおう。てか、左手は無かったんだった。しつかりしねえとな……………。

片腕でできる範囲で体を洗い、さっさと泡を流すとタオルを腰に巻き、行儀が悪いがそのまま湯船に浸かる。

俺が目やり場を考えると、誰かが湯船に浸かる音が聞こえてきた。

まさかと思いつながらちらりと見てみると、ロスヴァイセが湯船の少し離れたところにいた。

「め、冥界のお風呂も悪くないですね」

「あ、ああ……………そう……………だな」

突然のことすぎて変なところで言葉を切ってしまった。

俺は調子を戻すように話題を変える。

「魔法の授業、大盛況だったな」

「そ、そうですね。人手が足りないかと思いましたが、ロイ先生のおかげで助かりました」

「……………一人だけ、初歩の魔法が発現できない子がいたが、まあ、明日もあるんだ。ゆっくり教えてやろう」

「は、はい」

「…………………………」

「……………」

沈黙が痛い。普通の時なら何か話題を振るところだが、今は不意打ちの混浴状態。状況把握だけで精一杯だ！

この際やけだ。少しばかり踏み込んだことを訊かせてもらおう。

「なあ、なんで666を調べたんだけ？」

俺の問いに、ロスヴァイセはしばらく黙ってから口を開いた。

「ロイ先生もご存じでしょうけれど、666は伝承のみで発見には至っていませんでした。けれど、同じ黙示録に記されたグレートレッドは存在します。だから、調べてみた

くなつたんです。見つけることは到底無理なことでした。各神話体系の神々でも居場

所を特定できなかつたのですから、私なんかでは叶わぬものです。でも、666がどん

な存在なのか、それぐらいは知りたくて666や616という数字と、それに関連した

書物から調べて始めたんです」

ロスヴァイセの言うとおり、666は「いるかもしれない」程度の認識しかなかった

し、どこにいるかまでは誰も把握できなかった。

ロスヴァイセは苦笑する。

「……………答えなんて出なかつたんですけどね。……………ですが、解答できなかったあの計算、術式の組み方に彼らの欲する答えが隠されていたのかもしれない」

ユーグリッドがロスヴァイセを狙った理由はそこにあるのかもしれない。

ロスヴァイセはそこまで言うのと、ポツリと呟いた。

「ロイ先生。もし、私が彼らに利用されそうになったら……私を殺してくれませんか？」

「——」

俺はその告白を聞いて、真つ先に浮かんだ感情は『怒り』だった。

「ふざけんな。おまえが死ぬ必要はねえだろ」

俺はそう言いながらロスヴァイセを睨みつけるように見るが、彼女の目には決して引く気がない強い覚悟の色が映っていた。だが、その覚悟の瞳の裏には、薄くではあるが悲哀の色も映っている。

「私があのユーグリット・ルキフグスに捕らえられたら、きつと利用されて——」

「渡さねえ……」

俺は一気に距離を詰め、お湯の中でロスヴァイセの手を握り、言葉を続ける。

「あの野郎には渡さねえ。あいつがまた出てきたら、その時は——俺が殺る。何がなんでも、おまえを守ってやる」

「——」

ロスヴァイセは顔を赤くして驚いているが、俺は恥ずかしくなってきた。

何が「おまえを守ってやる」だよ！端から見たら告白じゃねえか！俺にはセラがいる

のにいいいいいいい！

心中でテンパリまくっている俺とは裏腹に、ロスヴァイセは少しだけ表情を和らげていた。

「ありがとうございます、ロイ先生。でも、私は——」

ロスヴァイセが何かを言いかけたところで、勢いよく浴場の扉が開かれる。

「ロイ先生！かくまってくだ——」

入ってきたのは服を着たままのイツセーだ。おそらく、イリナやゼノヴィアに追われているんだろう。

そのイツセーは入ってきた瞬間、俺とロスヴァイセの状況（男と女が風呂場で全裸で手を取り合っている）を見て、顔を真っ赤にしながら——、

「ご、ごゆっくりいいい！」

「ちよつと待てえええええええ！」

謎の発言と共に走っていったしまった！俺はロスヴァイセの手を離して身を乗り出し、イツセーを追いかけようとしたが、すぐに思いとどまった。

この状態で急に動いたら、適当に結んだ腰のタオルがとれる可能性がある。駄目だ、追いかけれねえ！

今の場面を目撃されたロスヴァイセも羞恥心からか顔を真っ赤にしているし、くそ！

イツセーめ、後で覚えていろよ……………!」

俺はため息を吐いて湯船に浸かり直し、ロスヴァイセに言う。

「と、とりあえず、上がってくれないか?俺は向こうむいてるから」

「は、はい。服を着たら声をかけます……………」

ロスヴァイセが大浴場から脱衣場に向かった瞬間、

「……………ッ!」

全身に鳥肌が立った!な、なんだ、超遠距離から殺気を飛ばされたような感覚。どこからか見られていたのか……………?」

俺は首をかしげながら気配を探るが、特に何かあるということでもなさそうなので、深くは考えないようにしてため息を吐いた。

こうして、様々なハプニングがありながら、体験入学一日目は終了したのだった。

冥界某都市の四大魔王会議室。

「……………」

セラフオールが何かを察したように立ち上がった。だが、目からハイライトが消えている。

「ん？セラフオールどうかしたのか。って、何があつた!？」

真つ先にそれに気づいたのはサーゼクスだ。彼もロイ並みにセラフオールとの付き合いが長いたため、すぐに気づくことができた。

「いえ、今度こそロイにお話を——」

感情を感じさせない不気味な声音で言うセラフオール。

そのまま部屋を出ていこうとする彼女の腕をサーゼクスが掴む。

「ま、待て！今抜けられるのも困る！待ってくれ！」

「サーゼクス、離して。今度という今度は許せない……」

このタイミングでロイを鳥肌が襲ったわけだが、ロイからは「殺気」として認知されてしまったわけだ。

いつもの「ちゃん」付けではないセラフオールに、相当の異変を察知したのだろうとサーゼクスは予測できた。だが、それでも彼は離さない。

それでも進もうとするセラフオールに、サーゼクスは黙って傍観していた二人に声をかけた。

「ファルビウム！アジュカ！手伝ってくれ！」

l i f e 0 8 招かれざる客

アウロス学園体験入学二日目の早朝。

起床して早々にとある問題が発生していた。

あの風呂騒動のあと、それぞれ二人で一部屋を割り当てられたのだが、俺はイツセーと相部屋だった。

そのイツセーとはじつくりお話をしてから就寝。そして起きてみると、なぜかレイヴェルとアーシアがイツセーに添い寝していたわけだ。

気配で気づきそうなものだが、少しばかり油断していたのかもしれない。はつきり言うのと、気づけなかった。

そんなわけで、イツセーから剥がした二人には正座をさせて、若干オーラを放ちながら睨む。

「――で、言い残すことはあるか？」

「ちよつ、ロイ先生!?二人をどうするつもりですか!？」

俺の冗談に本気でツツコミを入れるイツセー。

俺はそんなイツセーに笑みを向けながら言う。

「冗談だよ。で、どうしてあんなった」

俺が二人に視線を戻すと、レイヴェルが歯切れ悪く言う。

「……はい。実は、ゼノヴィア様とイリナ様がアーシア様を連れて何やら怪しげな話をしていたので、気になってあとをつけたのです。そうしたら——」

「——その三人が部屋に入ろうとされていて、なんやかんやでこうなつたと」
俺が確認を取るように言うと、二人は頷く。

「はい……」

「はあ……」

レイヴェルから話を聞いて、俺とイツセーはため息を吐いた。

あの二人は自重しろよ、まったく……。

「とりあえず、ゼノヴィアとイリナにはあとで話をしとくから、ここまでだ。そろそろ朝食だしな」

俺の一言で話は終わり、食堂に移動したのだった。

朝食後、俺たちはざっと状況を確認していた。

何でも、匙のヴリトラ、アーシアのファープニルがヴァーリの神セイクリッド・ギア器に潜ってしまった（むこうでは赤龍帝被害者の会なるものがあるらしく、イツセーが手に入れた新しい力を活かすためにもそれを説得中）。

サイラオグとその眷属は、午前中はデイハウザーの主演映画に出演のためにこれな
いとのこと。

そして最後に、それぞれの持ち場を確認して、今日の活動が開始された。

そんなわけで俺は木場、ゼノヴィアとともに『騎士』ナイトについての授業を実演込みで行っていた。

俺は『騎士』ナイトではないが、いちおう騎士なので参加しているわけだ。……俺が教えてるつてのも変な気分だがな。

ゼノヴィアは刀剣を片手に子供たちに力説する。

「いいか？ 剣は己を表す鏡のようなものだ。迷いがあれば、すぐに刃に出てしまう。常に平常心で剣を構えなければならない。それと、やられる前にやる。特に敵が話しかけてきた瞬間に問答無用で剣をぶつけるんだ！」

それとは対照的な木場の話が始まる。

「でも、力に頼り切つて剣を振るうのは危険だからね。騎士ナイトは何よりも技能を求

められる。そして、特性である速度。戦場を誰よりも駆け回って相手を翻弄する。隙を見つけて、的確に突く」

俺が締めくくるように、刀剣の切っ先を天に向けながら言う。

「二人のように一言で『騎士』^{ナイト}と言っても考え方がまるで違う。どっちが正解とか、不正解とかはない。自分が一番だと思ふことを出来る限りやる。そうすれば自分にとつての正解がわかるはずだ。ちなみに言っておくと、俺は木場よりだが、時には力で押す。何事もバランスが大事だと思っている」

子供たち全員が純粹無垢な目で俺たちを見つめ、興味津々という様子だ。

それから無事に『騎士』^{ナイト}の授業は終了し、俺はロスヴァイセの手伝いのために移動していた。

その時だ――。全身に嫌な寒気が走り、俺の第六感を刺激した。

その感覚の直後、冥界特有の紫色の空が、白く塗り替えられていく謎の怪現象が発生した。

突然のことに、俺や講師を含めた校内にいる全員が空を見上げていた。

こんなイベントは予定にない。そもそもやるはずがない。こんな無茶苦茶なことをするのは、奴らしかいない。

俺が思考を巡らせるなか、ロスヴァイセが声をかけてくる。

「ロイ先生！これは、まさか……………」

「わからんが、十中八九クリフトだろうな」

俺とロスヴァイセが意見を確認し終わると同時に、校内放送が学園中に響いた。

『グラウンドにいる体験入学生、父兄の方、講師、スタッフの皆さまは速やかに校内に入ってください。繰り返しします——』

緊急放送を聞いた俺とロスヴァイセは、嫌な予感がして仕方なかった。

オカ研、生徒会のメンバーが職員室に集まった。父兄と子供たちは、とりあえず体育館に集まってもらっていた。真羅の主導で情報を集めてもらっている。

俺は連絡用魔方陣で外への通信を試みるが、繋がらない。腕輪でも試してみるが、そちらも駄目だった。

「ダメだ、外に連絡できねえ。転移のほうはどうだ？」

転移型魔方阵を展開していた朱乃に訊いてみるが、彼女は息を吐いて言った。

「ダメですわ。遠くにジャンプできません」

連絡、転移、どちらもダメか。英雄派と戦っていたの時にもこんなことはあったが、また別空間に飛ばされたか？

猫耳を出して、気配を探っていた小猫が言う。

「……周囲の気を探りましたが、草も木も本物です」

俺はあごに手をやりながら言う。

「……となると、少なくともこの町ごと結界で覆われたって感じか」

そう漏らした俺の横で、ソーナが連絡用魔方阵を出しながら言った。

「アグレアスと町の集会場には繋がりました。映像を出します」

すると、職員室に立体映像が二つ浮かび上がった。一つはアグレアスにいるサイラオグ、もう一つは町の集会場にいるゲンドウルさんだ。

サイラオグが開口一番に言う。

『これはどうなっている？』

その疑問にゲンドウルさんが答えた。

『この地域一帯丸ごと、敵対勢力の結界に覆われたと考えていいでしょう。今、総動員で

各々使役している生物に結界の規模を確認させていますが、どうやらこの町とアグレアスを楕円形にすっぽり覆っている可能性が高いと報告を受けています』

予想通りではあったが、随分と大規模だな。

ゲンドウルさんは続ける。

『それに加えて、私たち術者は魔法の大半を封じられてしまっています。この通り』

ゲンドウルさんはそう言うと言額を見せた。そこには禍々しい輝きの魔方陣が描かれていた。

俺も確認のために一度直刀を作り出すが、長さ強度共に問題なし。俺に続くように全員がオーラを集めるなり、セイクリッド・ギア 神器を展開するなりしているが、そちらも問題なしのようだ。

お互いに頷き合い、ゲンドウルさんに言う。

「このようだと、そちらにいる魔法使い限定の封印のようです。ここまで大規模かつ緻密なことができるのはおそらく——邪龍」

『——っ！』

俺の一言に、リアスたちの表情が一層険しくなる。映像に映るゲンドウルさんは努めて冷静さを保ち、口を開いた。

『ええ、ロイさんの言うとおりです。このようなことができるのは、千以上の魔法を操つ

たという伝説の邪龍——『ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン魔源の禁龍』、アジ・ダハーカ。かの邪龍ならば、魔法使いを封じる術も知っているでしょう』

ゲンドウルさんの言葉に全員が絶句していた。伝説の邪龍の名前が出てきたんだ、当たり前だろう。

そして、そのアジ・ダハーカを復活させたのは、間違いなくクリフオト。

「しかし、規模があまりに……。いくら伝説の邪龍だろうと、名だたる魔法使いたちと共に広大な土地を丸ごと封じるなんて……」

イリナが疑問を口にした。確かに、いくら伝説の邪龍でも、大規模な結界と魔術師の封印を同時におこなうとなると、無理があるだろう。

俺はある仮定を口にした。

「前に報告で聞いたユীগリットが所持しているブリステッド・ギア赤龍帝の籠手のレプリカ。それによる強化があれば話は変わるだろう」

本物とほぼ同じ事ができるレプリカなら、できなくはないだろう。

ゲンドウルさんが息を吐いた。

『この一帯丸ごと囲う結界と、ここにいる魔法使いすべての術を縛る外法、どちらも増大させて発動したんでしょうね。レプリカとはいえ、相変わらず常識を逸した力を発揮しますね、神滅具ロンギヌスというのは』

まったくくだ。ユーグリットの野郎、イツセーの力まで悪用しやがるとは、早くどうにかしねえと……………!

俺の横ではイツセーも怒りをあらわにしていたが、すぐに何かを思い付いたような表情になると口を開いた。

「だったら俺が解呪法を増大させます!」

それを聞いた俺とソーナは首を横に振った。

「いい考えだが、カウンターの術式が用意されているはずだ」

「そのとおりです、イツセーくん。下手をすると大惨事になります」

相手は必ずカウンターの用意をしているはずだ。こちらが使用すれば、空間もろとも爆破なんて可能性もある。

むこうもブーステッド・ギアの特性をよく理解してやがる。やりにくいな。

そう思いながら、俺はひとつだけ安心できそうな予測を口にする。

「つつても、そう何度でも使えるものでもないだろ。所詮はレプリカだ。報告だと、使うだけでもかなりのコストが必要なようだからな。それにしたって、アジ・ダハーカの術を増大させるとは、そつちもかなり緻密な加減が必要だったはず。ユーグリットの野郎はブーステッド・ギアの扱い方を熟知してるようだ。ああ、イツセー、おまえが劣っているわけじゃねえ。おまえが異才なら、ユーグリットは鬼才って言うのか?それはともか

く、ルキフグスの名は伊達じゃないってわけだ」

そう、相手はルキフグス。グレイフィア義姉ねえさんの実の弟だ。

「相手の狙いはゲンドウルさんたちと、アグレアスの旧魔王時代の技術と見るべきか？」
俺の呟きにソーナが頷く。

「あのアグレアスには、旧魔王時代の技術が使われています。いまだ解明できていない部分もありますが、前ルシファアの息子である、リゼヴィム・リヴァン・ルシファアはあの島にある何かを狙っているのかもしれない」

『旧魔王時代の遺跡、あるいは兵器の類いでしょうか。それとも666スリーシックスに繋がる何かと
いうことかもしれません』

「異世界関連の物の可能性もあるな」

ゲンドウルさんと俺が何となく予想を立ててみたが、答えは出てこない。あの空中都市はよくわからねえからな。

「これだけ大規模な結界を張ったんですから、外の誰かが異常を察知しているのでは？」
イツセーから質問がくるが、俺は首を横に振る。

「それも想定済みだろう。こつちの一時間が結界の外だと一分とかになっているのかもしれない。それをするにしてもかなりの準備が必要なんだが、伝説の邪龍とレプリカブーステッド・ギアが合わされば、簡単だろう」

『ここまで大規模な術は確実に身を削りますね。ドラゴンだろうと、命が対価になってもおかしくありません』

「体が滅んでも聖杯で即復活できるだろうからな。そりや無茶するぜ」

俺とゲンドウルさんが話を進めていくなかで リアスが言う。

「英雄派の魔獣騒動から、各主要都市には様々な防壁術式が設置してあるけれど、まだここは——」

「アグレアスとここにはまだ防壁術式を張っていませんでした。アグレアスはレーティングゲームの聖地の一つで観光名所です。防壁術式を張るには一時的に機能を完全に止めなければなりません、ですから延期が続いていたんです。それが裏目に出てしまいました」

リアスに続いてソーナが言うと、俺もそれに続く。

「明らかに狙っているよな。もしかしたら政界かそれなりに階級が高い奴がクリフトに通じてるのかもしれない」

俺がそこまで言うと、全員の表情が固くなってしまった。裏切り者がいるかもと言っただから当たり前だ。

俺が対応を考えているなか、職員室に一人のスタッフが息を切らしながら入ってきた。

「……どうかしたか」

俺が訊いてみると、スタッフは息を整え、人差し指を上になさして答えた。

「——上空に映像が」

俺たちはそれを聞いて、一斉に校庭に向かい走り出した。

俺たちは一斉に校庭に飛び出した。

見上げると、花畑の爽やかな映像が空一面に広がり、悪魔文字で『しばしお待ちください』と記されてある。その映像を見ながら全員が構えるなかで、空からふざけた口調の音が聞こえてきた。

『え？もう始まってんの？マジで？ちよつと待つてよく。おじさん、まだお弁当全部食べてないって。いいから、出ろって？わかったわかった』

聞き覚えのあるムカつく声。今の声を聞いた全員が憎々しげに映像を見ていた。

花畑の映像が銀髪の中年男性の映像に切り替わる。

『んちゃ♪皆のアイドル、リゼヴィムおじさんです☆皆、はじめまして、あるいはお久しぶり！なんだが大変なことになっちゃっているだろうけど、説明なしではなんだから俺が直々に説明してあげようかなって思ったしだいす！ほら、こういうのを敵が説明す

るのはお約束じゃん？こちらが不利になっても種明かしをするのもお約束じゃん？」
相変わらずイライラする口調だ。

俺のフラストレーションが溜まるなか、リゼヴィムがムカつく声音のまま続ける。

『なんとなくわかつていると思うけど、実は、僕たち、その辺一帯丸ごと、結界で包囲しちやいました！いやー、いきなりのドッキリで申し訳ない！』

申し訳ないと言うわりには、罪悪感を感じている素振りを見せない。当たり前だ、あいつにとつてはそれが普通なんだからな。

『やってくれたのは、邪龍軍団のロードウンさん！初代英雄ヘラクレスにぶつ殺されちゃった黄金の果実の守り手さんだ！』

リゼヴィムの背後に巨大な木のドラゴン——『インソムニアック・ドラゴン宝樹の護封龍』、ロードウンが見える。

『例のごとく、『せい☆はい』で再生怪獣のように大復活させちゃったわけだけど、彼ら持つ強力な守護防壁、結界の類いは健在でねえ。いやはや、ユীগリットくんのレプリカロンギヌス神滅具も手伝って領土ひとつ覆っちゃいましたよ！ロンギヌス神滅具の力ってスゲーっ！』

リゼヴィムの横にユীগリットが現れる。その手には聖杯が握られていた。

「……………ツツ」

イツセーの横にいたギヤスパーが双眸を危険なほど輝かせて奥歯を噛んでいた。ギヤスパーにとつては、この映像は耐え難いものだろう。

『そして、その町に在る諸君！そこも結界で包囲したあげくに名だたる魔法使いの皆の魔法力も封じてしまいました。封じたのは、邪龍の中の邪龍！千の魔法を操るアジ・ダハーカさん！こちらの方法もお見事！もちろん、レプリカのブーステッド・ギアで強化済みです！』

リゼヴィムの背後に、もう一体の巨大な三つ首のドラゴンが現れる。あれがクロウ・クルワツハと同格と称されるドラゴン——アジ・ダハーカか。できれば相手したくないな。

リゼヴィムは嬉々として続ける。

『なお、外界から完全に時間ごと隔絶されているから、外に在る者たちには、気づかれな
いよん』

リゼヴィムはそう言うのと耳障りな笑いをあげ、肩をすくめた。

『なーんで、こんなことをしたかって？理由は、簡単♪そこに集まる魔法使いの皆が俺に協力してくれないなら、まとめて吹っ飛ばしちやおうつてね！あと、アグレアスの技術もちよいと盗ませてもらえると助かります！僕のパパたちが作り出したものどもーん。俺が相続してもいいものだと思わない？ねえ、思わない？』

拉致できねえなら、殺しちまおうつてことか。思考回路が子供のそれじゃねえかよ

………！

リゼヴィムは俺たちに指を突きつけてきた。

『うひゃひゃひゃひゃひゃ、そこに俺たちの打倒を企てて結成したっていう「D×D」の皆がいるんだろ？何、事前情報ぐらいいは得てるぜ。おもしろいから、勝負といこうぜ？量産型邪龍の大群と、伝説の邪龍さまがそちらと、あの空中都市に向かう。蹂躞するためだ。それを止めてみるよ。ねえ、止めてみてくれって』

リゼヴィムはそう言うのと指を鳴らす。その瞬間に町を囲うように紫色の巨大な火柱が天高く立ち上がり始めた。

「——紫の炎、『紫炎祭主インシネレート・アンセムによる磔台』か。また聖遺物レリックが相手なのか、まったくよ。見た感じだと、ぐるつと町を囲うように展開している感じだな。奴ら、誰一人として逃がす気はねえようだな」

俺がそう言うのと、リゼヴィムが楽しそうに手を振っていた。

『てなわけで、踏ん張ってくれよ！三時間後、行動開始だつ！うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！』

映像はそこで終わる。

最悪だ。ここは守るべきものが多すぎる。学園、子供たちとその父兄、そしてこの学園に賭けるソーナたちの思い。

だが、守りきつてやるよ。不幸の中の幸いというべきか、『D×D』の悪魔チームのほ

とんどこがここにいる。

——なら、守れるはず。

いや、何としても守らねえといけねえ………！！

l i f e 0 9 防衛戦開始

リゼヴィムが指定した三時間後というタイムリミットまで残り四十分ほど。

俺——ロイは作戦会議を終えると、義手を戦闘用のものに取り換え、一足先に地上に出て空を埋め尽くす邪龍の群れを睨んでいた。

これからあの数の邪龍を相手にしなければならぬ。吸血鬼の王国で出現したのは百体弱、だが今回は下手をすれば数千体。あの時とは規模がまるで違う。

俺がそんなことを考えていると、リアスたちも上がってきた。だが、一つ気になること——鎧を着た男性が数十人いるのだ。

「リアス、そのヒトたちは？」

「子供たちの父兄の方々です」

リアスの言葉を聞いてから改めて男性たちを見回す。全員が覚悟を決めた顔をしていた。

俺はリアスにただ頷き、リアスもそれを確認すると頷きみんなの方に戻っていった。それだけで十分だ。なぜ彼らが剣をとり、ここに来てくれたのか。理由なんて知れている。

時間まで二十分、俺たちの戦いが始まろうとしていた……………。

それから町を囲うように量産型邪龍は滞空し続けていた。

気合いたっぷりだった父兄の方々もそれを見て戦慄している様子だ。

俺たちは持ち場に散らばる前に、校庭で最終確認をしていた。

作戦を立案したソーナが一步前に出て言う。

「今から作戦通り、この学園を中心に八方に散らばってもらいます。基本的には二人一組で敵を迎え撃っていたいただきますが——」

視線を向けてきたソーナに俺は頷く。

「俺は単独だろ？ わかってるさ」

「お願いします」

俺たちはアウロス学園を中心に邪龍を迎え撃つ。基本的に前衛と後衛のチームが出るように、リアスとソーナ両眷属の混合チームが編成された。

俺だけは単独だ。理由としては、またリゼヴィム自身が俺に接触してくる可能性があるからだ。

アーシアはイツセーの船型使い魔——スキーズブラズニルこと『龍帝丸』に乗せて

戦場を飛び回ってもらい、その時に応じて回復オーラを飛ばしてもらおう。ロスヴァイセはその護衛として同行する。

俺たちが最終確認を済ませると、校庭に連絡用の魔方阵が展開された。魔法使いがよく使うものだ。

その魔方阵は紫色のゴスロリ衣装の若い女性を映し出した。ゴシック調の紫色の日傘をくるくると回していた。

『ごきげんよう、悪魔の皆さん。わたくし、「魔女の夜」の幹部をしているヴァルブルガと申しますのよん。以後、お見知りおきをん♪』

「ロンギヌス神滅具、『インシネレート・アンセム紫炎の祭主による磔台』の所有者か……」

俺の言葉にイツセーたちは言葉を失っていた。

ヴァルブルガはニツコリと笑いながら続ける。

『もうじき戦闘を開始する予定ですが、準備はよろしいのかしらん♪』

俺たちはヴァルブルガを睨むが、彼女はわざとらしく怖がるだけだ。

『いやーん、怖いですわねん。悪魔の皆さんが激おこですわ♪うふふ、楽しくなりそう』

彼女の声音は本当に楽しみにしているものだ。そしてその笑みもまたイカれた奴がするものだった。つまりこいつもイカれてるってわけだ。

『ロスヴァイセさんってどなたかしら？「ロイ・グレモリーと彼女だけは無事に連れてこい」って言われているのん』

ヴァルブルガの言葉を受け、全員が俺と俺の横にいたロスヴァイセに視線を集めてしまふ。俺はともかく、ロスヴァイセもあいつにバレてしまった。

俺は殺気を放ちながらヴァルブルガに告げる。

「リゼヴィムとユークリットに言つとけ、俺もロスヴァイセも行く気はないつてな」
「その通りです。私たちは戦います」

俺とロスヴァイセがそう告げるとヴァルブルガは『そうよねん♪』と返事がわかってきたように応じた。

ヴァルブルガはスカートの裾をあげ、別れのあいさつをした。

『では、皆さん。よいバトルをしましょうねん』

それだけ言うのと魔方阵は消失した。

俺はため息を吐き、吐き捨てるように言う。

「ああいう奴の考えることも心理もよくわかってるが、あれは、そうだな……これから殺す相手の顔を見て、殺す瞬間の喜びを強くするタイプだな。言葉が悪いが、反吐ヘドが出る、としか言えん」

リアスはヴァルブルガの登場に息を吐くと、一転して強気な笑みを浮かべた。

「用意はいいかしら？ さあ、私のかわいい眷属たち！ 相手は量産型の邪龍を引き連れたテロリストたちよ！ 今までも私たちはどれだけピンチをくぐり抜けてきたと思う？ これもまた窮地でしょうけど、死ぬことは許されないわ！」

リアスは一度言葉を区切り、堂々と言い放った。

「いつものように吹き飛ばしてあげましょうっ！」

『はい！』

リアス眷属とイリナが勇ましく返事をした。

ソーナも眷属たちに向かって言う。

「……私たちが敗れば、この学校は跡形もなく消え去るでしょう。壊されたあとにまた直せばいいという単純な話ではありません。——夢と希望がここに集まりました。それを壊させていい道理はありません。守りましょう。それがここを建てた私たちの戦いです」

『はい！』

ソーナ眷属が気合い十分に返事をしていた。

俺も父兄の方々に対して言う。

「いいか！ これは死戦だ！ だが死ぬことは絶対に許されない！ あんたたちは子供たちの未来を、夢を見届ける義務と責任がある！ だから絶対に死ぬな！ 這ってでも帰ってこい

破らせて撃破していく。

絶命した邪龍が次々と落ち、地面を揺らしていった。

その後もフルオートで弾幕を張りながら、それを抜けてきた邪龍を斬り裂いていく！
射撃と剣速を上げ、片っ端から邪龍を倒していくが、はつきり言うときりが無い。

俺がため息を吐くと、足元の影から三体の何かが飛び出し、邪龍に襲いかかっていた。ギヤスパーが学校で闇の獣を作りこつちに飛ばしてくれているようだ。

一応、人数的に少ない俺のところを優先と言われているようだが、そんなことは言っていないほど量の量だ。他の地区もかなりのものだろう。

俺は闇の獣に邪龍を任せ後ろに飛び、銃剣にオーラを込める。

「ギヤスパー、獣を退けろ！」

俺が叫ぶと、闇の獣が俺の後ろまで下がった。それを確認し、引き金を引く。

銃剣から極太の滅びのオーラが放たれ、次々と邪龍を飲み込んでいく！

オーラが止むと、邪龍の群れに大きな穴が開いていた。だが、その穴もすぐに埋まっていくな。

「ふうふう……」

俺は一度大きく息を吐き、直刀と銃剣を握り直す。

「——さて、次はどいつだ？」

邪龍を挑発するように切っ先を邪龍の群れに向けながら笑み、適当に相手を決めて、闇の獣を引き連れながら再び突撃した！

それから十分ほど。

俺とギヤスパーの獣で順調に邪龍を片付けているとき、ここまで届くほどの爆音が鳴り響いた。

音の方向に目を向けると、天を突くほどの巨大な紫色の火柱が発生していた。

ヴァルブルガが動き出したようだ。——あつちは北側、リアスとベンニアが担当だったはず！

耳に入れていたインカム代わりに魔力装置からソーナからの指示が届く。

『北側より、先ほどのヴァルブルガが襲来しました。リアスたちだけで相對するのは厳しいでしょう。一旦、防衛範囲を——』

ソーナの指示を最後まで聞こうとした矢先、上空からの火炎球が俺を襲う！

「チッ！」

俺は舌打ちしながらそれを避けるが、獣の一体が避けきれずに消し炭にされてしま

！

俺はそれにも舌打ちをしながら、放った本人がいる上空を睨む。

『よう、悪魔ちゃあああん。久しぶりだなっ!』

こちらを挑発するように、邪悪な笑みを浮かべた黒い鱗に包まれた人型のドラゴン——。

「グレンデル!」

『そうだ!俺様だ!』

グレンデルは口元をさらに釣り上げながら、銀色の双眸をギラギラとさせて俺を見下ろしてきた。

俺とグレンデル。ここまで来ると因縁だよな。

「すまねえが、しばらく連絡が出来ない。俺の分も誰かカバーしてくれ。俺はグレンデルを殺^やるっ!」

『ロイ様!——わかりました。グレンデルはお任せします』

「任せろ」

俺はソーナの言葉を聞き終えて頷くと、グレンデルが降下してきた。

「さあ。——決着だ」

『いいねえ。そうこなくつちやよっ!』

俺は両手の得物を握り直し、グレンデルは姿勢を低くして突撃の態勢に入る。

グレンデルとの三度目の殺し合い。今度こそ——殺す！

l i f e l 0 ロイVSグレンデル 決着

アウロスの特徴でもある風車小屋が立ち並ぶ区域。

『ラアアアアアッ！』

体に大小様々な切創、銃創が残され、そこから青い血を流すグレンデルが咆哮と共に放った拳。その一撃がその風車小屋に直撃し、崩壊した！

そして、瓦礫と大量に舞った砂塵に紛れ、細く、黒い軌跡を残す翼の生えた小さな影が飛び出してくる。

「だあああああッ！」

その翼の生えた小さな影——ロイも叫びながらも直刀でグレンデルに斬りかかる！

彼は怪我こそしていないが、返り血で体と髪が青く染まり、それに付着した砂塵で体の各所が汚れている。

ロイとグレンデル、一人と一体の殺し合いは二十分にも及び、戦場となった地区は壊滅と言つていい程の被害が出ていた。

お互いに決め手に欠けるなか——、

『ハハハッ！いいねえ！こうでなくっちゃよ！』

「このタフ野郎が！」

好戦的に笑むグレンデルと、それを見て吐き捨てるロイ。

聖杯による強化をされたグレンデルにロイの滅びの効果は薄く、一撃で頭を吹き飛ばそうにもそれを許すほどグレンデルも甘くない。それに加え、今回で三度目の戦闘。グレンデルはある程度ロイの癖を把握しているように攻撃していく。

先を読むように放たれるグレンデルの乱打を掻い潜り、ロイも一撃一撃を的確に入れていくが、その一撃を入れる度にグレンデルのギアが上がっていく！

より鋭く放たれるようになったグレンデルの乱打、それさえもロイは掻い潜っていくが、その頬を冷や汗が伝っていく。

ロイも滅びを纏えば決められるかもしれないが、これからどうなるかもわからないこの状況では、無駄な消耗は命取りになる。

——隙を見つけて、一撃で決める！

ロイはその隙を探すように立ち回るが、グレンデルは我武者羅にやっているようで、ロイの回避先を読んだ右拳が襲いかかる！

「——ッ！」

ロイは紙一重でそれを避け、グレンデルの右肘の内側に弾丸を撃ち込み、刃を食い破らせる。

その瞬間、グレンデルの右腕前腕がだらりと下がる。首の皮一枚で切断されなかったが、使い物にならないことは確実だった。

グレンデルは舌打ちしながら距離を取ると、右腕を眺め――、

『――まあ、こうすりゃいいだけだなあ!』

自分の右腕前腕を掴み、捻りながら引つ張る。

ブチブチと嫌な音をたてながら右腕前腕が千切れ、グレンデルがそれを振り回す。

千切られた前腕から大量の血が撒き散らされ、大小様々な血痕を自分の体やロイの足元に残していく。

そして、グレンデルが勢いよく前腕を振り下ろすと、地面が砕け、大量の砂塵が舞う。

ロイはその様子を見ながら表情を険しくしていた。

部位破壊をしたつもりが、グレンデルに武器を与えてしまった。

ロイは自分を落ち着かせるように、覚悟を決めるように深く息を吐く。同時に彼の体から黒いオーラが放たれ始めた。

グレンデルはそんなロイを見ながら狂喜的に笑む。

『いいねえ、リゼヴィムの野郎が言ってるやがった「本気」ってやつかあ?』

「……………」

グレンデルの挑発するような言葉を無視し、ロイは銃剣を異空間にしまう。それと同

時にさらにオーラが膨らみ、ロイを包み隠すように砂塵が舞う。

グレンデルは何かするわけでもなく、ただロイの様子をうかがっていた。

——全力で来るのなら、待ってやる。

頭のイカれた戦鬪狂のグレンデルは、ただ壊し合うことが生き甲斐だ。自分をぶつ壊せるのなら、自分でぶつ壊せるのなら、相手がどうであれそれでいい。

グレンデルが期待の眼差しで砂塵に包まれたロイを睨んでいると、突然砂塵が消し飛んだ！

グレンデルは表情を狂喜に歪め、それを見た。

『待ってたぜえ、それをよー！』

『ふうふうう……………』

黒い滅びを全身に纏ったロイの姿。彼は深く息を吐き、グレンデルに目を向けた。

グレンデルが体勢を低く構えた瞬間、ロイの姿が消えた！

『あ？！』

驚愕の表情を浮かべるグレンデル。だが、それはすぐに苦悶のものに変わる。

腹を抉られるような耐え難い、だが、待ち望んでいた激痛が全身を駆け巡ったのだ。

グレンデルが痛みの発生源である腹部に目を向けると、

『……………』

自分の腹に右腕を突っ込んでいるロイの姿があった。

ドラゴン最硬クラスの鱗を魔力を集中させた一撃で貫かれ、そこから一気に滅びの魔力が流し込まれているのだ！

『チッ！』

グレンデルは舌打ちをしながら左腕で持つ右腕前腕で殴りつけるが、ロイはそれを読み通りというように余裕で避け、グレンデルの顔の前まで跳躍していた。

グレンデルの鼻先に向けて右手を突き出し、そこからオーラを解き放つ！

グレンデルはとっさに首をかしげてそれを避けようとするが、解き放たれたオーラはグレンデルが想像した以上に極太で、強力だった！

滅びのオーラが掠めた左頬の肉が消し飛ばされ、歯と歯茎が剥き出しになる！

『——ッ！』

グレンデルはぎよつとしながらも火炎を吐き出し、目の前にいるロイを牽制。回避も防御もする素振りを見せないロイは火炎に包み込まれる！

だが——、

『——ガッ！』

構わずにそれを突っ切ったロイの拳が再び腹部を貫く！さらに滅びを流し込まれ、グレンデルの表情は再び苦悶の表情になった。

見た限りでは、ロイに火炎によるダメージはなく、グレンデルが一方的にやれている形になっていた。

グレンデルが再び払おうとするが、攻撃をされる前にロイがその場を飛び退いた。

グレンデルが血を吐き出した瞬間、ロイが黒い軌跡を残しながら飛び出す！

グレンデルは火炎を吐いてロイを迎撃するが、彼は先ほど同様に回避も防御もせずに入、勢いのままそれを突破した！

グレンデルはそれを読んでおり、飛び出してきたロイに右腕前腕を振り下ろす！

ロイはそれを避けきれずに直撃。爆音にも似た地面が砕け散る音と共に地面にめり込む。

それを見たグレンデルは今までのお返しと言わんばかりに、地団駄を踏むように何度もロイを踏みつける！

『どうした！そんなもんかよ、悪魔ちゃんよ！もつと俺様を——』

挑発しながらも踏み続けるグレンデルは違和感を覚える。踏みつけているはずなのに、その感覚がないのだ。

『——ッ！』

グレンデルは気配を感じて振り返ると、

『……………』

無言で両手を自分に向けるロイの姿があった。

それを視認した刹那、ロイの両手からオーラが解き放たれ、グレンデルの頭部の右半分を消し飛ばした！

グレンデルは体を仰け反らせ、痛みに耐えるように歯を食い縛りながらも笑みを浮かべる。

『いいじゃねえか！あく——』

体勢を戻してだが、先程までいたロイの姿がない。

彼を探すように周囲を見渡そうとした矢先、左膝を撃ち抜かれた！

左膝について周囲を見渡すと、

『あ!?!』

十人のロイが彼を様々な角度から狙い、両手にオーラを溜めていた。

大量のオーラを全身に纏っているためか、どれが本物なのかもわからない。

グレンデルが手近な一体を殴ろうとした瞬間、十人のロイの両手から、ほぼ同時にオーラが解き放たれる！

一斉に放たれた滅びのオーラによって、体の至るところを撃ち抜かれ、大量の青い血をぶちまけるグレンデル。

十人のロイはそれでも手を休めることはなく、ただひたすらグレンデルに撃ち込んで

いく！

『が、ああ、ああ……………』

体を滅多撃ちにされ、ついに膝だけではなく地に手をつくグレンデル。十人いたロイも徐々に姿がぶれていき、一人に戻っていった。

超高速の移動と、大量のオーラによって産み出して『質量のある残像』による集中放火。ロイの負担も大きく、体のあちこちの筋肉が悲鳴をあげるが、今のロイはそれを感じることができない。

グレンデルは血を吐き捨て、ギラつく銀色の瞳でロイを睨み付ける。

『……………』

ロイは無言で、トドメと言わんばかりに右手をグレンデルに向け、オーラを溜めていく。

グレンデルがとつさに火炎を吐こうとした瞬間、ロイを紫色の炎が包み込んだ。

『——ツ!?!』

「私がやりましたのよん♪」

驚愕するグレンデルを紫色のゴスロリ衣装の女性が見下ろしていた。

グレンデルはその女性を睨み付けながら叫ぶ。

『ヴァルブルガッ！テメエ邪魔しやがって！』

「あらん？ピンチに見えましたから助けて差し上げたのに」

『チツ！』

ヴァルブルガの言葉に反論できないグレンデルが舌打ちをすると、そこに黒い獣となったギヤスパーが現れる。

《ロイ先生！》

いまだに紫炎に包まれたロイに叫ぶが、彼からの返答はない。

「あらん。しつこい子は嫌いじゃないわよん♪お姉さんはこつちよん♪ついてら——
！」

ヴァルブルガの言葉はそれ以上続かなかった。

彼女の眼前に、全身から煙を出している黒い何かが飛び出し、まさに蹴りを放とうと
しているからだ。

「な!？」

『……………』

驚愕するヴァルブルガに、黒い何か——滅びを纏ったロイの蹴りが放たれる！

ヴァルブルガがとっさに障壁を展開、それを止めようとするが、ロイの一撃がその程度で止まるわけもなく、障壁もろとも弾き飛ばされた！

ロイはゆつくりと地面に足をつけ、滅びを解除する。

《——ッ!》

瞬間、ギヤスパーは絶句した。全身に火傷を負い、息を荒くしながら、ロイは力強く立っていたのだ。

「な、なんなのよん! あんた、悪魔なんでしょう!? なんて倒れないの!」

ロイに弾き飛ばされ、地面に叩きつけられたヴァルブルガが痛みに耐えながら、畏怖するような目でロイを睨んでいた。

悪魔にとって必殺である聖遺物レリックの攻撃を受けて、目の前の悪魔はダメージを受けはしたが問題はなさそうにしているのだ。

ロイはヴァルブルガを睨み返しながら言う。

「倒れたくねえからに決まってるだろうが」

ただ「意地で立っている」と口外に言っているだけなのに、目の前の男の言葉を否定することができない。

「もう、なんなのよん!」

ヴァルブルガが逃げるようにその場を飛び去っていく。

「ギヤスパー、奴を追え。グレンデルはこのまま押しきる」

《は、はい! 気をつけて!》

「そつちもな……………」

ロイがそう言ってギヤスパーを見送り、グレンデルに視線を戻すと、

『さて、まだまだ行けんだろ？ 悪魔ちゃああああん』

無くなった頭部の右半分以外の傷が完治しているグレンデルが立っていた。グレンデルの足元には小瓶らしきものの欠片が落ちていた。

——フェニックスの涙を使ったのか。

ロイは慌てた様子もなく、それを察していた。

ならば——、

「フェニックスの涙か。使いたければ使え。あと何個だ？ 十か？ 二十か？ どちらにしても——」

ロイの言葉から感情が消えていき、碧い左目の瞳からハイライトが消える。同時に黒いオーラが放たれ、一気に弾ける！

『——おまえを、殺す』

再び全身に黒い滅びのオーラを纏ったロイ。

グレンデルは再び好戦的に笑みながら、体勢を低く構える。

黒い滅びの化身と、黒い鱗の邪龍が同時に飛び出した！

搭城小猫は、イツセーの鎧についている宝玉をひとつ貫い、それを抱えて息を切らしながら走っていた。

彼女の姉である黒歌と検討した『邪龍を撃破する方法』、それをおこなうためだ。

同級生であるギヤスパーに渡された黒い獣に守られながら、懸命に走ることに数分。ようやくロイとグレンデルが戦闘している区域に到着することができた。

同時に彼女は目を見開いて驚く。

『アハハハハハッ！いいねえ、いいねえ！壊しあいはこちらでなくちや楽しくないぜえええええ！』

『……………』
全身から青い血を吹き出すグレンデルと、それを攻め続ける黒い滅びの化身となったロイの姿、そして、壊滅した町だった場所が目に見えたのだ。

小猫は首を左右に振り、思考を切り替えてロイに叫ぶ！

『……………ロイ先生！私に考えがあります！グレンデルを行動不能にしてください！』

『……………』

ロイは答えないが、とても小さく一度頷いて見せた。

小猫がホッと息を吐くと、グレンデルが叫ぶ。

『おいおいおい！邪魔すんじやねえよ！これは俺様と悪魔ちゃんの壊しあいなんだからよお！』

グレンデルが小猫に火炎を吐こうと腹部を膨らませると、それをロイが許すわけもなく、高速で肉薄。勢いのまま放たれた拳がグレンデルの腹部を貫く！

腹部にあいた穴から大量の火炎が溢れ、ロイを包み込むが、彼は怯むことなく腹部に突っ込んだ腕にさらに魔力を送り、拳から巨大な刃を産み出して背中まで貫通させる！

『ッ！』

グレンデルの口から声にならない悲鳴と大量の青い血が吐き出される。ロイはそれに構わず拳を引き抜き、一気に跳躍。

グレンデルよりも遙か上空まで飛ぶと、右手で手刀を作り、一気に降下していく。

『舐めんじやねえええええええつ！』

グレンデルは火炎を吐き出すが、先程までの勢いはない。腹に開いた穴のせいで溜めるに溜められないのだ。

そんなグレンデルの火炎の中を無いもののように突っ切り、手刀を大上段から振り下ろした！

ロイは地面に着地し、ゆっくりと、深く息を吐く。

『ふうふううう………』

『が、あ、あ、ああ………』

遙か先の結界を守る紫炎さえも斬り裂いたロイの一撃を受け、グレンデルの体は文字通り『一刀両断』され、内臓を地面にぶちまけながら左右に裂けていく。

グレンデルの体はビクビクと痙攣しているが、復活する気配も、転移する気配もない。それを確認したロイは小猫に視線を送る。

小猫は吐き気を抑えながら小さく頷き、『白音モード』になると、火車を出現させて何かの陣を描いていく。

小猫が片手で印を結ぶと、火車が回りだし、左右に別れたグレンデルを中心に、真っ白い魔方陣が生み出された。

それを確認した小猫は抱えていた宝玉をグレンデルに放ち、さらに印を結んだ。「邪龍グレンデル！その魂よ、常闇とこやみと閃耀せんようの狭間に眠れっ！」

小猫が呪文を口にした瞬間、魔方陣がいつそう強く輝く！

その光が止み、そこにあつたのはグレンデルの形をした土の塊と、深緑色の宝玉だった。

小猫はほっと安堵の息を吐いていた。

横でそれを見ていたロイがぼそりと漏らす。

「魂の封印か、考えたもんだ」

「はい。帰ったら天界などに任せて、この宝玉に結界を張ってもらいましょう。意識が漏れだしたら、また復活してしまうかもしれません」

小猫は返しながら横のロイに目を向けると、同時にその表情を青くした。

平然としているが、全身に火傷を負い、最後の一撃を放った右腕は骨が砕けてぐちゃぐちゃになり、その骨らしきものが飛び出ている。

小猫の表情に気づいていか、ロイが口を開く。

『あの状態』の応用で、短時間だけだが痛覚を無視できるようになった。おかげさまで、見た目のわりに痛くねえよ」

全開状態を解いても『痛覚無視』だけはする。それをできるようになったのはある意味では成長と言えるかもかもしれないが、それは自分の肉体の限界がわからなくなるということと同じである。

—— 姉様がお世話になっている以上、あまり無理をして欲しくない。

小猫はそう思いながらも、グレンデルを封じた宝玉を抱える。

グレンデルの撃破、封印。これが『D×D』の最初の戦果となったのだった。

この後、二人の元にアーシアとロスヴァイセが駆けつけ、ロイのダメージは回復。そ

の後、ソーナから送られてきた『学園の周辺に集合せよ』という指示に従い、そのまま四人で龍帝丸に乗り、学園のほうに急ぐのだった。

l i f e l l 防衛戦 終盤

邪龍を迎撃しながら、どうにか学校の眼前まで移動した俺たち。

俺——ロイの視界にリアスたちの奮闘ぶりが飛び込んでくる。

龍帝丸に乗る俺たち四人は頷きあい、そのまま龍帝丸に低空飛行をしてもらい、警戒しながら校庭に飛び降りる。

着地と同時に俺はふらつくいてしまうが、横のロスヴァイセが支えてくれた。ちよつと、無理をしすぎたか……。

ロスヴァイセから放してもらい、俺が校庭を見渡すと、豪快に邪龍を殴り飛ばす男性悪魔の姿が確認できた。

「サイラオーグ！来てくれたのか！」

「アグレアスではこちらが優勢になったので、加勢に参りました！」

そう言いながら邪龍を殴り飛ばすサイラオーグ。頼もしい限りだ。

俺はイツセーたちに指示を飛ばすリアスに声をかける。

「リアス、グレンデルはどうにか倒した。復活はしないんだよね？」

俺が小猫に訊くと彼女は頷き、リアスたちに宝玉を見せた。

「この宝玉に封印してあります。後で天界でしつかりと封印してもらえれば、問題ありません」

小猫の言葉に、リアスたちは少しだけだが歓喜していた。だが、手を挙げて喜べるほど余裕がねえ！

俺は迎撃に参加しようと思っていると前に出ると、片膝をついてしまう。

「だ、大丈夫ですか!？」

「気にすんな、戦闘に集中しろ……………」

俺の苦し紛れの言葉にリアスは心配そうにしながらも頷き、邪龍の群れに攻撃していく。

俺も、まだやらねえとなっ！

俺は銃剣を握り直し、弾丸を撃ち出していく。

体力が回復するまでは、砲台として機能するしかねえ！

それから十数分。決死の攻防戦を繰り返す俺たちの視界に、転移の光が映る。

その光は少しずつ大きくなっていき、学校を包み込んだ。

これで、少なくとも子供たちは助けられる。

安心する俺たちだが、一向に転移が始まらない。

「下で何かあったのか？」

俺が確認のために連絡用魔方陣を展開すると、転移の光が怪しいものに変わり、一筋の光となってアグレアスのほうに放たれた。

転移の光がアグレアスに——まさか！

俺が嫌な予測を立てたところで、俺たちの耳に高笑いが聞こえてきた。

俺たちが見上げるとそこにはヴァルブルガの姿があり、遅れてギヤスパーも駆けつけた。

ヴァルブルガは口元に手をやり笑った。

「おほほほ、残念でしたわねえ。アグレアスとここを攻めるといふのは建前ですのん」

俺の予測は当たっているようだ。

「つまり、狙いは『アグレアスそのもの』か。俺たちだと手に余るが、作り出した前魔王の息子——リゼヴィムなら何かに使えそうだ」

「そのとおりですのん。リゼヴィムおじ様はどうやら空に浮かぶあの島自体に興味があるのご様子ですのん。今回のような方法でいただくことにしましたのよん。魔法使いの中にも私たちの仲間がおりますのよん。作戦は成功みたいですわねん」

「つまり、全部おまえらの手のひらの上ってわけだったのか」

俺が睨み付けながら吐き捨てると、ヴァルブルガは一瞬体を強張らせたが、すぐに笑みを浮かべた。

「そうですね。出来ればロイ様も連れてと言われてましたが、それはちよつと無理っぽいですわん」

アグレアスを奪うためだけにこの町を、魔法使いを利用した。

ソーナが生徒会メンバーに目配せをして、それを受けた『僧侶』^{レシヨップ}の花戒と草下が頷いた。

走り出そうとする二人に声をかける。

「待て、内通者は学校から離れさせろ。別々の場所に分けるのも忘れんな」

「どうしてですか?」

ソーナの問いに、俺は苦虫を噛み潰したような表情で言う。

「戦争を経験しているとわかるんだよ。この手の奴は最後——自爆する」

『——っ!』

俺の発言に全員が驚いているが俺は確認する。

「わかつたな!」

『は、はい!』

返事をして、花戒と草下は走り出した。

俺はそれを見送りながら、ヴァルブルガに問う。

「三時間の猶予は術式完成までの時間稼ぎ、戦闘は俺たちを消耗させるため、か。おかげさまで俺はフラフラだがな。それで、あの島で何をするつもりだ？あそこに何かがある？」

ヴァルブルガは俺の言葉を無視して、視線をアグレアスのほうに向けた。

その視線の先では、アグレアスが転移の光に包まれて、ついには消えてしまった。

「転移完了。あの島で何をするかでしたわねん。それは——」

ヴァルブルガが何かを言おうとした瞬間、連絡用の魔方陣が彼女の耳元に展開される。それに聞き入っていたヴァルブルガから笑みが消え、白い空を見上げた。

「……………まさかっ！」

俺たちも釣られるように見上げると、白い空にヒビが入っていた。誰かが外から叩いているようだ。誰だ？デュリオか？それとも初代か？

俺が考えている最中でも少しずつヒビが大きくなっていき、ついに結界を壊し、紫色の空が確認できるようになった。

すると神々しいまでの光を放つ槍が校庭に突き刺さった。

あれは、あの槍は忘れるはずもない！

——『黄昏の聖槍』！
トゥルー・ロンギヌス

あの槍の持ち主は、あの野郎しかいねえ……………！

この場にいる全員が言葉を失い、立ち尽くしていた。

だが聖槍は転移の光に包まれどこかに消えてしまった。

ヴァルブルガは嘆息する。

「……………ここでこんなことになろうとは。けれど、もう遅いですわん」

ヴァルブルガが指を鳴らすと邪龍が集結し、学校を囲んだ。

「わたくし、殲滅するのが大好きですのん。もう少し遊んでくださいましねーん♪」

ヴァルブルガは傘を振り下ろす。それが合図となり、一斉に邪龍が俺たちのほうに向かってきた。

俺は体に鞭を打って立ち上がる。

「やるぞおまえら！ここで止めねえと、全てが無駄になる！」

『はいっ！』

リアス、ソーナ、サイラオーグを初めとした全員が返事をし、一斉に構え直す。

俺は真つ先にヴァルブルガに弾丸を放つが、ヴァルブルガはそれを避け、時には邪龍を盾代わりにして防いでいく。

するとヴァルブルガは学校の方に手を向けた。

その瞬間、校庭に紫炎が広がり一部施設を吹き飛ばした！

「学校がつ！ダメエエエツ！」

ソーナが悲鳴のような声をあげ、校庭のほうに走っていった。ソーナは冷静さを失っていた。

俺は追いかけるようにも、足に力がいらなくなってきやがった！

「私が行きますー！」

俺の状態を察してか、ロスヴァイセが飛び出し、ソーナにすぐさま追い付くと防御用の魔方阵を展開した。

ソーナとロスヴァイセが防御の態勢を整えた瞬間、紫炎が襲来した！

二人が展開した防御型魔方阵でなんとか防いでいるが、炎の勢いに押されしだいに魔方阵が崩れ始めていた。あのままじゃ、燃やされちまう！

「あの魔女を狙いなさい！」

リアスの指示でヴァルブルガに標的を変え、飛びかかっていくが、魔女は自分を囲むように紫炎を展開し、防いで見せた！

「その炎、触れただけでも、悪魔は致命傷ですわん！」

ならばとイツセーとゼノヴィアは砲撃の準備に入るが、邪龍が邪魔をしてオーラを溜められないでいた。

やるだけやるしか、だな……………!!

俺は直刀に魔力を込め、ヴァルブルガに接近しようとするサイラオーグに叫ぶ!

「サイラオーグ!俺を投げろ!」

「——ッ!はい!」

サイラオーグは一瞬驚愕するが、すぐさま俺の腕を掴み、そのまま回転。遠心力に乗せて俺をぶん投げた!

直刀を突き出し、自分の体を弾丸のように回転させながら、ヴァルブルガに向かう!

止めようと邪龍が飛んで来るが、勢いそのまま貫ぬいていき、ヴァルブルガの眼前に迫る!

ヴァルブルガは障壁を張り、俺との衝動に備える。その瞬間、切っ先から障壁に激突した!

甲高い金属音が響き、障壁にヒビを入れたが、勢いが完全に殺された!

俺は無理やり体勢を直し、ヴァルブルガに斬りかかろうとするが、右腕に邪龍が食らいつき、そのまま地面に叩きつけられた!

「——か!」

肺の空気を一気に吐き出したような感覚を俺が襲う。

俺は痛みに耐えて歯を食い縛り、右腕に噛みつく邪龍の首を落とす。

同時にヴァルブルガがソーナとロスヴァイセに紫炎を放った！

俺がフオーローに動こうと立ち上がるが、再びふらついて膝をつく。くそが、消耗しすぎたか……………！

俺が舌打ちをした瞬間、紫炎が放たれる！だが、それが二人に当たることはなかった。黒炎を纏った匙が盾になったのだ！

だが、匙は黒炎を相殺しきれずに身を焼かれてしまう！

匙の力じゃ一方的に焼かれるだけだ。だが、あいつの目に迷いも恐怖もない！

ボソボソと何かを呟いているが、距離のせいで何を言っているかはわからない。だが、匙から凄まじいオーラを感じとることはできた！

これは、この感じは……………っ！

俺が口元を笑ましていると、匙の体を黒いオーラが包んでいき、そのオーラが弾ける！そのオーラが晴れると、そこにいたのは暗黒の鎧を身につける匙の姿があった。

『マレホルジエ・ヴリトラ・プロモーション「罪科の獄炎龍王」。地獄の業火に等しい俺——いや、俺たちの黒炎とあんなの聖なる紫炎、どちらが強いか、勝負だッ！』

匙の声はヴリトラと混ざったものとなっているが、今まで感じたことがないほどの迫力と自信に満ちた声音だ。

匙はそのまま飛び出していき、ヴァルブルガとの戦闘に突入する！

俺はフラフラになりながらもリアスたちと合流する。

「お兄様！大丈夫ですかっ！」

「大丈夫じゃねえかも、これはヤバイ」

俺がフラフラになりながらリアスに話していると、何かを感じ取ったのかアーシアが声を出す。

「ファープニルさんのオーラを感知しました！」

「それは好都合、ファープニルを呼べ。ついでに俺も回復してくれ」

「わかりました！」

アーシアは頷くと俺に回復のオーラを当て、傷を治してくれる。

オーラは少しずつ回復しているが、もう少し待たねえとダメか。

俺が回復したことを確認すると、アーシアは龍ドラゴン門ゲートを展開した。

「我が呼び声に応えたまえ、黄金の王よ。地を這い、我が褒美を受けよ！お出てください

！『黄金龍王』！ファープニルさんっ！」

召喚の光が弾け、そこに現れたのは——クッキング帽を被ったファープニル。

……嫌な予感しかしないが、今のうちに休ませてもらおう。

軽く休憩に入る俺の耳に軽快なBGMが届いた。どこぞの三分クッキングで流れて

いそうな曲だ。

フアーブニルが口を開いた。

『こんにちは、フアーブニル三分クッキングによるこそ』

……ダメだこりや。惨劇が始まるぞ……。

俺が同情するようにアーシアに視線を向けた瞬間、フアーブニルが口を開く。

『今日のお料理は、ディアボラ風アーシアたんのおパンティー揚げ、です』

何だろう、今まで真面目にやっていた俺がバカに思えてきたぞ……！

絶句している俺たちに、フアーブニルはフリップを見せてくる。

『材料はこちら』

・アーシアたんのおパンティー 適量

・たまねぎ一個 みじん切り

・ニンニク一個 みじん切り

・オリーブオイル

・赤唐辛子一本 みじん切り

・塩コショウ 少々

・唐揚げ粉

『?』

疑問符だらけの俺たちと邪龍軍団。

おかげで攻撃が止まったわけだし、ゆっくり休めそうだ。
『それではスタート〜』

——ファープニルの料理が進んでいき、最後にファープニルから一言。

『ありのままのキミでいてほしい』

結論だけ言うと、これはヒドイ。

ファープニルの行動で何体かの邪龍が拍手したり、泣いたりしていたが、もうなんなんだよ！

俺たちがファープニルに集中していると俺たちの横を赤い閃光が通り過ぎていった。

「きやつー！」

赤い閃光の正体を確認しようと俺たちは振り向く。

ソーナを吹き飛ばし、赤い閃光はロスヴァイセを包み込んでいた。

光が止んだ先にいた者を俺は憎々しげに睨みつける。

そんな俺を睨み返しながら奴は言う。

「お久しぶりです。義兄上」

「ユーグリット………！」

ユーグリットはロスヴァイセを抱き寄せていた。ロスヴァイセは抵抗しているが、逃れることは叶わないようだ。

ユーグリットはロスヴァイセを抱き寄せたまま、口を開く。

「ロスヴァイセとあの島は我らクリフォトが活用させてもらいます。さて、アグレアスの転移も済みまし、そろそろ冥界の軍が来る頃合いでしょう。とつととおいとまさせてもらいたいところですが、そうはさせてくれないでしょうね」

俺たちはユーグリットを囲むように陣取った。

「おまえにロスヴァイセは渡さねえし、義姉^{ねえ}さんのところ突き出さないといけねえからな」

それを聞いたユーグリットはクスリと笑うだけだった。

「それは怖い。では、ささやかな抵抗はしましうかね」

ユーグリットが指を鳴らす。するとファープニル効果で固まっていた邪龍たちがハツとして俺たちに殺到してきた。

リアスたちが邪龍を相手していくなかで、俺は動かさずユーグリットを睨みつける。

「おや？あなたは戦わないんですか？」

「俺はおまえの相手をしなきゃならないんでね。リアスたちにも言ってる」
「私の相手を？ 消耗仕切っているその体で、ですか？」

俺とユーグリットが話していると、どこからか放たれた魔法の矢がユーグリットのほうに飛んでいった。

放った先に視線を向けると、疲弊しきった様子のゲンドウルさんが手を突き出している。

「孫を……返してもらいます！」

ゲンドウルさんは強い意志を感じる瞳でユーグリットを睨んでいた。

そのゲンドウルさんと、先程よりはましたがフラフラの俺にロスヴァイセが叫ぶ。

「ばあちゃんっ！ ロイ先生っ！ やめてっ！ 二人とももう限界なんでしょう！」

「黙ってる！ まだやれる！」

「黙っていなさい。おまえを救うぐらいはできます！」

強がる俺とゲンドウルさんを見て、ユーグリットは呆れたように息を吐いた。

「残念ですが、あなた方の状態で私の相手は無理です」

ユーグリットはそう言うのと転移型の魔方陣を展開し始めた！

それを見たゲンドウルさんは、渾身の力で作った魔法の矢をユーグリットの魔方陣にぶつける！

矢が当たった瞬間、ユーグリットの魔法陣が形を崩していき、ついには消失した。

「……転移封じ。こざかしいことをしてくれませぬ」

ユーグリットは忌々しそうに呟くと、ドラゴンの翼を広げて飛んでいった！

「逃がすか！」

飛び出そうとする俺に、ゲンドウルさんは崩れ落ちながら言った。

「ロイさん。……どうか、どうか、私の孫を、ロスヴァイセを助けてください」

俺は笑みを浮かべゲンドウルさんに告げる。

「当たり前です。ロスヴァイセは俺の恋人ですから」

俺はそれだけ言うとうーグリットを追い、そのまま飛び出していった。

l i f e 1 2 贖罪

俺——ロイがユーグリットを追っていくと、大分進んだ場所で奴は待ち構えていた。ユーグリットはロスヴァイセを抱えたまま、指で下を指す。

おそらく、降りろつてことだろう。そこで、俺とやり合うつもりらしい。

俺は奴と共に高度を下げていき、周りを確認する。

荒れた土肌の土地、ここなら無理できるな。まあ、今も無理してるわけだが……。

俺とユーグリットは同時に着地し、対峙する。

「それで、何で今頃現れた？兄さんたちへの——現政府への反逆のためか？」

俺はユーグリットの意志を確認しておきたかった。甘いと言われるのも百も承知だが、俺はあいつの『義兄』なんだ。

俺の質問にユーグリットは語り出す。

「諸々ありますよ。現政府への不満、姉への問い、膨大な時間をかけて自問し続けました。義兄にいいさん、答えてください。——悪魔とは何です」

「悪魔とは、か。悪魔は悪魔だ。人間同様、正義を志す者もいれば、悪を志す者もいる。それだけだ」

俺の返答に、ユーグリットは落胆するように息を吐いた。

「義兄上、あなたは甘すぎる」

「甘くて結構だ。それで、おまえはどう考えてるんだよ?」

俺からの問いに、ユーグリットは深く息を吐く。

「リゼヴィム様と同じですよ。どの生物よりも、どの存在よりも邪悪であるべきだと思います。しかし、ここからは私だけの答えです」

ユーグリットは両手を広げる。

「——私はリゼヴィムという男を通して全勢力に悪魔を見せます。知らしめます。悪魔がどれだけ凶悪か、どれだけ危険かを全勢力に知らせたいのです。支配や政治はこの際どうでもいいのですよ、私にとっても、リゼヴィム様にとっても。——最終的には悪魔を人間界にも見せたいところですね」

こいつがやりたいこと、それはあの学校にいる子供たちの、これから先に生まれてくる子供たちの未来を奪うもの……。

俺はユーグリットを怒りの表情で睨みつける。

「悪魔そのものを、世界から孤立させたいのか」

俺が静かな怒りをたぎらせている中で、ユーグリットは遠い目をしていた。

「姉は……私にとつて憧れでした。女性でありながら、誰よりも強く、誰よりも勇敢だった」

た。私にとっては、誇りそのものでした。姉を支えることこそが私の生きる道だと信じていたのです。その姉が、『ルシファー』に尽くすルキフグスのために反して、悪魔ともいえない異形に心を許した。これが、私にどれだけの衝撃をあたえたか、あなたには想像できますか？」

ユーグリットの言葉に、俺は義姉さんの亡命作戦を思い出していた。

あの任務を終えた時、兄さんに会った義姉さんは本当に嬉しそうだった。

だが、あの任務が、この状況を作り出してしまった。

ユーグリットは空を見上げた。

「私は長らく心の均衡を崩し、精神的にも肉体的にも屍と変わらぬ状態でしたが、好き勝手に振る舞い、冥界に新しい風を吹き込む彼に——兵藤一誠を知って思い至ったのです」

ユーグリットの表情はどこか晴れやかなものになった。

『ああ、そうか。自分も好きに生きればいいんだ』——と」

「イツサーを見て、ここまでの事をしようとしたのかよっ！」

俺は声を荒げたが、ユーグリットは特に気にする様子を見せず、言葉が続ける。

「単純な思いでした。悪魔が英雄を持つ。その英雄を子供たちが見て、影響を受ける。

それは悪魔らしくない。だったら私は子供たちに悪魔を見せないとね」

「その悪魔がリゼヴィムか。——イカれてるな。だったら、俺はおまえを止める」
俺は銃剣の銃口をユーグリットに向ける。

ユーグリットは薄く笑った。

「義兄上。あなたはそちら側ではないと言われたはずですよ。なぜ戦うのですか？」
俺は銃口を下ろさず、即答で答える。

「守るためだ。誰かの命を、夢を……」

「なぜリゼヴィム様は、あなたのような方に興味を持たれたのか、疑問ですよ」

ユーグリットは俺を軽蔑するような目で睨んでくる。

「あなたの答えと行動は、ある意味矛盾しています。守ると言いながら、あなたはそれ以上の命を奪っているではありませんか」

確かに、俺はこっちに来てからも何百、へたをすれば何千という命を奪ってきた。

だが——、

「全ての命を守るなんてこと、誰にもできねえよ。ただ目の前にあるものを必死に守るだけだ」

——そう、これが今の俺の生き方。前世むかしとは真逆とも言える生き方だ。二つが混ざり合うことは、ないかもしれない。

「どうやら、私たちとは合間見えないようです。なら、私はあなたを倒すまでです！」

ユーグリットは宣言するように俺に言ってきた。

「それはそれとして、どうしてロスヴァイセを狙った。いくらなんでも、リスクが大きすぎるだろ？」

残った疑問をぶつける。いくらロスヴァイセが優秀でも、あれは悪手だ。

ユーグリットはロスヴァイセに視線を向けながら言う。

「……………このヒトは賢明です。才能もある。私たちのもとに連れていけば、有効活用できるでしょう。何せ、彼女は666トライヘキサに封印を施すものを導き出そうとしていたのです」

——ッ！

ロスヴァイセの論文が、666トライヘキサを封印する鍵だったのか……………！

ユーグリットはロスヴァイセの銀色の髪を撫でる。

「それに……………ロスヴァイセは、似ているのですよ。とても似ている」

「似ている？どこの誰に似てるってんだ」

「——姉のグレイフィアにです」

——ッ!?

ユーグリットの言葉に驚く俺とロスヴァイセ。……………ロスヴァイセと義姉ねえさんのどこが似てるんだ？雰囲気は若干似ている……………？いや、似てねえな。

ユーグリットは薄く笑みを浮かべる。

「……………このヒトは私の姉になれるかもしれないのです。それはとても重要なことです」

……………そうか、こいつ、もう……………。

俺は悲哀を込めて言う。

「……………心が壊れたか」

「?何を言っているのです?私は至って正常ですよ?」

「……………そうか。それじゃ、やろうぜ?俺とおまえの最初で最後の……………『兄弟喧嘩』つてやつを」

俺がユীগリットを睨みつけながら言うと、奴はロスヴァイセに魔力の縄をかけてから、手を離れた。

俺とユীগリット、これが最初で最後の戦いになるだろう。

相手はレプリカとはいえ赤龍帝だ。勝てるかどうかはわからない。こっちは消耗してるから負ける確率のほうが高いかもしれない。

俺はロスヴァイセに目を向け、安心させるように笑みながら彼女に言う。

「ロスヴァイセ、一緒に帰るぞ」

ロイはロスヴァイセにそう告げると、全身から周辺一帯を吹き飛ばす黒いオーラを解き放ち、全身に纏わせる。

ユーグリットも兜を装着すると、周辺一帯を吹き飛ばす程の質量を持ったオーラを解き放った！

黒と赤のオーラがぶつかり合い、火花を散らすなか、二人は同時に飛び出した！

二人の拳が正面からぶつかり合い、凄まじい衝撃波を発生させる！

「きゃー！」

その衝撃波を間近でくらったロスヴァイセは、倒れながらも二人のほうに目を向け、驚愕した。

『』

「くっ！まだです！」

ロイとユーグリットは、お互い退かずに殴り合っているのだ！

ロイの拳の何発かはユーグリットの鎧を砕き、体にもダメージを与え、ユーグリットの拳の何発かもロイの滅びを突破してダメージを与えていくが——、

『……………ッ！』

ロイは右手から極太の黒いオーラの奔流を放ち、正面から迎撃した！

二つの莫大な魔力同士がぶつかり合い、大爆発を起こした！

大量の砂と煙が舞い、ロイとユーグリット、ロスヴァイセの視界を遮り、それぞれの状況を確認できなくなる。

それは一瞬のことであり、ロイが難いだ腕で砂と煙が切り裂かれる。

『……………ッ！』

「はあ……………はあ……………な、なぜ……………？」

大きく消耗した様子はないロイと、肩で息をするユーグリット。

既に限界を迎えているはずのロイが、なぜ立っていられるのか、なぜ戦えるのか、ユーグリットにはそれがわからず、ただ困惑していた。

そんなユーグリットに、ロイが右手を向けるが、

『……………ッ！』

大量の血を吐き出し、片ひぎをついた。

ロイは既に限界を迎えている。『痛覚』という警告を無視して動いている彼は、極端な話、肉体の限界が『わからない』。

腕の骨が砕けようが、足の肉が削がれようが、それに気づかず前進し、対象を殺そう

同時に放たれた二人の拳は――

「ッ！」

「私の、勝ちです」

ロイの拳が外れ、ユーグリットの拳がロイの左目付近を捉えた！

爆音と共にロイは吹き飛ばされ、後ろにあつた岩山に激突、大量に舞つた砂塵で姿が見えなくなる。

ユーグリットは肩で息をしながら、ロスヴァイセに視線を向ける。

「……………これで、あなたは私のものです……………」

狂つたような笑みで表情を歪めながら、ロスヴァイセに近づいていくユーグリット。

ロスヴァイセも逃げようとするが、縛られた体では無理がある。

ユーグリットの手が、ロスヴァイセに向かってゆつくりと伸ばされる。

ロスヴァイセは、諦めたように、ゆつくりと目を閉じた――。

俺——ロイは何もない、黒一色の空間に寝転んでいた。

どうしてこんなところにいるのか、そもそもここがどこなのか、全く検討がつかないが、まだやることがある。

俺が勢いよく立ち上がると、いきなり景色が変化した。

見覚えのある、森の中にある小さな村だ。ここは、前世むかし訪れた場所だ。確か、ここは——。

俺が思い出した瞬間、村が火の海に変わる。どこからか、悲鳴や怒号が聞こえてくる。そうか、ここは、『深層心理』ってやつか。『あれ』の最中に気を失っちゃったせいだ。こんなものを見ているのか？

燃える村を見渡すと、遠くに立つ誰かと目があった。体格的には男だが、顔は見えない。いや、あれは——。

この村、いつかの戦闘に巻き込まれた場所だ。この村で、俺は——。

俺が思い出した瞬間、物陰から人影が飛び出してくる。何かを察した男性が駆け出すと、間を空けて乾いた音が響き渡った——。同時に再び景色が黒一色になる。

俺は、あれで死んだんだったな。あの助けた奴がどうなったかは知らねえが、生きているといいな……。

『助けて……………』

『痛い、痛い……………!』

『どうして……………?』

………
俺の耳に声が届いた。苦しそうで、同時に悲しそうな声だ。だが、聞いたことがある………。

声の主のほうに目を向けると、

「——ッ！」

俺は声を失った。視線の先には、何かもよく分からない生物がうずくまっている。

『誰か、誰かあ……………』

『私は、あなたを救おうと……………』

ああ、そうか。あれは——俺が殺した奴らか。

ヴァレリーが言っていた「憑かれている」ってのは、これのことか……………。

俺は納得と共に、悲哀の眼差しでそれを見つめる。

前世から重ねてきた俺の『罪』、目の前にいるこれは、その象徴か……………。

殺して殺して、殺し続けて、それで得た金で生活する。前世の俺は、ただ自分のためだけに戦っていた。それしか知らなかったから、自分にはそれしかなかったから……………。

だが、今は違う。愛されることを知った。愛することを知った。戦う意味を、理由を見出させた。

それでも、前世の俺を否定する気も、『罪』から目を背ける気も、逃げる気もない。いまだに悲痛の声を発し続けるそれに、ゆっくりと近づいていく。

「俺は逃げない。逃げるわけにはいかない。おまえを受け入れなきや、俺は先に進めない。俺を殺したければ殺せばいい」

『——ッ！』

俺の言葉を受け、目の前にいる何かが俺に突っ込んでくる。だが、逃げるわけにはいかない。

足を踏ん張り、受け入れるように両手を広げる。その瞬間、それが俺に飛びつき、そのまま体内に入り込んでくる。

『殺してやるッ！殺してやるッ！殺してやるッ！殺してやるッ！コロシテヤルッ！コロシテヤルッ！コロシテヤルッ！コロシテヤルッ！』

頭の中に、老若男女の様々な声が響く。同時に凄まじい痛みが身体中を駆け巡る！

この痛み……！この苦しみ……！これが俺への罰だというなら、何としてでも耐える……！

「ぐッ……！あああああああつー！」

床に倒れこみ、激痛に悶え苦しむが、痛覚無視はしない。それは、痛みだけじゃなく、心を殺して、誰かを殺している事実からも逃げていただけだ……！

俺が侵した罪は、決して償うことはできないだろう！だが、俺を信じてくれる奴らのためにも、俺が信じる奴らのためにも、俺は——！

「どんな罰でも受けてやる！永遠の時間をかけてでも、殺した以上の人々を救ってやる——！」

激痛に耐えながら、叫んだ！

何をしても、償いにはならないだろう。そんな事は承知だ。

「おまえらに許してくれとは言わない！それでも——！」

俺は激痛に耐えながら立ち上がり、天に向かって、出来るだけ優しい声音で言う。

「——見ていてくれ。俺なりの『贖罪』を」

言い切ると同時に、身体中の痛みが引いていった。

俺が踏ん張って握っていた拳をゆっくりと開くと、どこからか、威厳溢れる声が聞こえてくる。

『ならば、償ってみせる。貴様の魂に刻まれた、決して償えぬ罪を。——そして、見せてみる。貴様の「生き様」を——』

「ああ。俺の生き様、見せてやる…………！」

「……………これで、あなたは私のものです……………」

狂ったような笑みで表情歪めながら、ロスヴァイセに近づいていくユーグリット。

ロスヴァイセも逃げようとするが、縛られた体では無理がある。

ユーグリットの手が、ロスヴァイセに向かってゆつくりと伸ばされる。

ロスヴァイセは、諦めたように、ゆつくりと目を閉じた――。

バアアアアアアンツツ!!!

「――ツ!」

凄まじい破壊音と共に、圧倒的な『滅びの魔力』を感じとったユーグリットは振り返

り、ロスヴァイセは目をあける。二人の視線の先には、抉りとられるように消滅した岩

山と――、

「待たせたな……………」

左眼が腫れ上がり、左目が開かなくなっているロイが立っていた。

t! Boost! Boost! Boost! Boost!」

ユーグリットは、再びオーラを増大させ、ロイに向けて解き放った!

再び放たれたオーラの濁流は、迷うことなくロイに向かつて突き進んでいくが――

!

「――ッ!?!」

突如として、縦に切り裂かれたのだ! ユーグリットは驚愕しながらも、今の一撃を切り裂いたであろう男――ロイに視線を向けると、

「ふうふうふう………」

紅よりもさらに濃い、鈍く深紅しんくの輝きを放つ刀身を持った、身の丈はあろうかという大剣が彼の右手に握られていた。

今まで使っていたシンプルな直刀とは少し違う、どこことなく西洋剣を思わせる形状をしている。

ロイは深紅の大剣を『八相の構え』を思わせる構えを取ると、その場から消え失せた!

ロスヴァイセにも、ユーグリットにも見えない速度で動いた彼は――、

「――ッ!」

既にユーグリットの懐に飛び込んでおり、ユーグリットがそれを認識した瞬間、ロイ

は左足を地面を砕くほどの勢いで踏み込み、

「俺の、勝ちだ——」

——音を置き去りにする速度で豪快に斬り上げる！

刀身の通り道には深紅の残光が残り、それが消えた瞬間、

「——ぐはッ！」

渾身の一撃に巻き込まれた地面は深く削り取られ、ユーグリット本人は袈裟懸けの傷がつけられた。そして、ユーグリットの背後にあつた岩山が、ロイの一撃の余波で真つ二つに切り裂かれる！

その一撃の前では、ユーグリットの鎧は無意味であり、難なく鎧を突破した一撃で、ユーグリットの体が空中に投げ出される！

ロイはゆつくりと息を吐き、大剣を背中に背負うように納刀すると、ユーグリットが鎧独特の金属音と共に地面に落下する。

ユーグリットは大量に血を吐きながら、ロイの髪と、彼が背負う大剣に目を向け、「姉上、そんなに『赤』が——『紅』が好きなのですか？ 私は……何を間違えてしまったのでしょうか……？」

ぼそりとそう漏らすと、気を失う。

それを聞いたロイは瞑目しながら深く息を吐き、そのまま仰向けに倒れこんだのだつ

た
—
。

life13 嵐が去つて

ユーグリットを撃破した俺——ロイは、そのまま仰向けに倒れこんだ。やばい、魔力も体力も尽きたし、腫れているせいか左目が開かねえ。右目も、いつ見えなくなるかわからねえな。

「ロ、ロイ先生！大丈夫ですか!？」

ロスヴァイセが叫びに、俺は顔をそちらに向けながら、右手を挙げて答える。

ロスヴァイセはホッと息を吐くと、ユーグリットにかけられた魔力の縄を解き、逆にユーグリットを拘束するところらに駆け寄ってきた。

俺の横で両ひざをつきながら、訊いてくる。

「起きられますか?」

「ちよつと、無理だな。手貸してくれ」

「は、はい」

ロスヴァイセの手を借りて上体を起こし、気絶するユーグリットに視線を向ける。

俺が必死に頑張つても、助けられねえ奴もいる。だが——。

俺はロスヴァイセに視線を移し、笑みを浮かべた。

「——おまえを守れたんなら、それでいいか」

「な!? な、ななな、何を言うんですか!？」

俺の口から漏れた言葉を聞いたロスヴァイセは、顔を耳まで真っ赤にしながら狼狽える。

気が抜けちまったみたいだな。もう少し気を付けねえと。

俺が苦笑していると、俺たちの耳元に連絡用の魔方陣が展開され、そこからリアスの声が届けられた。

『お兄様! ロスヴァイセ! 聞こえる!?!』

「こっちはどうにかなった。ロスヴァイセも無事で、ユーグリットも倒せた。そっちはどうだ?」

『よかった………。こちら大丈夫です。邪龍とヴァルブルガも撤退しました』

それを聞いた俺とロスヴァイセは、同時に安堵の息を吐く。

「とりあえず、ユーグリットを引き渡したらそっちに戻る。ちよつと待っていてくれ」

『わかりました。お気をつけて』

「おう」

俺は返事をして魔方陣を消し、腕輪のスイッチを押す。

『兄さん、聞こえるか?』

『ロイ！無事だったか！』

『なんとかな。ユーグリットを捕らえたから、後は任せるぞ。俺は疲れた』

『——ッ！そうか、わかった！』

兄さんがそう返すと、一方的に通信を切られた。

……もう少し劳いの言葉を期待したんだが、まあいいか。

ロスヴァイセの肩を借りて立ち上がると、

「義兄上……」

消え入りそうな声が俺の耳に届く。

俺はため息を吐きながら、その声の主に目を向ける。

「ユーグリット、目が覚めたか」

ユーグリットが薄く目を開け、虚空を見つめていた。

互いに目を合わすことなく次の言葉を探っていると、ユーグリットがぼそりと漏らす。

「……殺さないのですか？」

俺は再びため息を漏らし、ロスヴァイセから離れて、ふらつく足でユーグリットの横につき、片ひざをつけて顔を覗き込む。

「何も殺すだけが戦いじゃねえ。たまには、相手を殺さずに終わるつてもありじゃ

ねえか？」

俺の問いかけに、ユーグリットは答えず、ただ息を吐いた。

俺が立ち上がると、ユーグリットが漏らす。

「あなたは、甘すぎる……………」

「それで結構だ。その甘さがねえと、俺が俺じゃなくなるからな」

俺がそう言うと、俺たちの近くに転移魔方陣が複数個展開され、そこから魔王軍の軍服を着た奴らが現れる。

俺がホッと息を吐いて立ち上がると、この部隊の隊長と思われる男性悪魔が俺の右目を見て一瞬驚いたが、すぐに持ち直して敬礼してきた。

「ユーグリット・ルキフグスの身柄を確保しに参りました」

「そこに倒れている奴だ。あとは任せただぞ」

「お任せください」

隊長の号令で部下たちが動き始め、ユーグリットの拘束をさらに嚴重にしていく。

ユーグリットは抵抗する素振りを見せないが、不気味な笑みを顔に貼り付けている。

このままいえば、何らかの形で義姉さんに会うことになるだろう。ユーグリットも、それを理解している……………。

俺の目的も果たせたが、ユーグリットの目的も果たせるわけか。

俺が思慮しているうちに、ユーグリットと軍の連中は転移魔方陣の光に包まれ、消えていった。

……小難しいことは後で考えるところとして、今は学園だな。

俺は深く息を吐き、再びぶつ倒れる。

「ふらふらなのに、無理するからですよ！」

ロスヴァイセはそう毒を吐きながら、俺が何か言う前に肩を貸して、立ち上がらせてくれた。

俺は苦笑しながら言う。

「いや、何か言ってるやろうと思っただが、何も思い付かなかつたんだよ」

「とりあえず、戻りましょう。リアスさんたちが待っていますから」

「だな。で、どうやって戻るんだ？」

「学園にマーキングしてあります。結界も消えているのですから、このまま転移で戻ってしまいましょう」

「頼む」

俺がそう言うと、ロスヴァイセは手早く転移魔方陣を展開。それに魔力を注ぎ込んで起動し、俺たちは転移の光に包まれた――。

光が止み、目を開けてみると——校庭の真ん中だった。

「ん？おまえらか。無事で何よりだ」

そして、なぜか目の前にアザゼルがいた。まあ、異常を察して来てくれたんだろう。

俺が右手を挙げて答えると、アザゼルが俺の右目を見て眉を寄せる。

「その目、どうした？」

「なんかよくわからねえが、見えるようになった。まあ、一時的だろうがな」

なんて言っている側から、視界がぼやけ始める。左目は開かねえし、この状況で見えなくなるのは辛いな。アースシアはどこだ？

俺が周囲を見渡していると、ロスヴァイセが察してくれたのか、アザゼルに訊く。

「アースシアさんはどこでしょうか？ロイ先生を見てもらわないといけません」

「アースシアは向こうのテントだ。今なら、あいつの手も空いているはずだ」

アザゼルが校舎の方を指差しながら言った。向こうにテントがあるのか。

俺が頷いていると、ロスヴァイセがアザゼルに礼を言っていると、俺に訊いてくる。

「ありがとうございます。ロイ先生、歩けますか？」

「肩を貸してくれればな。足にも力が入らなくなってきた」

「急ぎましょう」

「じゃ、また後でな」

「おう」

「はい」

俺たちはアザゼルの言葉に軽く返し、俺は足を引きずるように進めながら、肩を貸してくれているロスヴァイセに言う。

「ロスヴァイセ、一ついいか？」

「?なんででしょうか？」

俺の顔を見ながら疑問符を浮かべるロスヴァイセ。

俺は若干無理をしながら笑みを浮かべて、そんな彼女に言う。

「ありがとうな。俺を彼氏にしてください」

「——い、いきなり何を言うんですか!？」

ロスヴァイセが顔を真っ赤にして狼狽えているなか、俺は続ける。

「いや。おまえの彼氏じゃなきゃ、たぶんあの『深紅の力』は手に入らなかつた。あの状況じゃ、ユーグリットにも勝てなかつたかもしれねえ」

三ヶ月前から一緒に戦つたり、非常に短い時間だったがデートしたり、他にも色々あった。

最初は面倒な奴だと思ったが、何だかんだで俺や周りのヒトのことを常に考えてくれていた。時々残念なところもあるが、それはご愛敬というやつだろう。

先程よりもゆつくりになった足取りで進みながら、俺は続ける。

「ロスヴァイセ、俺を——」

彼女の顔を見つめ、俺は一回深呼吸して、今度は満面の笑みを浮かべる。

「——『本当の彼氏』にしてくれないか？」

「……………」

俺の言葉を受けたロスヴァイセは、『ボン！』という音とともに顔を真っ赤にする——。

「……………きゅ〜」

—— 気絶した!?

ロスヴァイセの肩を借りていた俺も、もちろん一緒に倒れることになるわけだが、とつさに彼女の体を抱えて体を捻り、俺が下になるようにする。

「ぐー！」

背中から地面に叩きつけられた俺は、小さくうめき声をあげる。やべえ、衝撃が全身に響いた……………。

俺がどうにか体を起こそうとするが、いきなり視界が暗転した！気絶したわけじゃ

ねえってことは、右目が戻っちまったのか!?

本格的にやべえな。どっちがテントなのかわからねえし、気配やオーラを探っても、近くに誰もいねえ。

……手詰まりだな。誰かが通ってくれることを信じて待つしかねえか……。

俺——兵藤一誠は、町の復興作業を手伝うなか、周りのヒトたちから「少し休め」と言われたので、テントに向かっていた。

ヴァルブルガの攻撃でぼろぼろになってしまった校庭を歩き、もうすぐテントに到着というところで、あるものに気づいた。

「——この龍の気配、イツセーか！ちよつと手伝うってか、助けてくれ！」

「ぎゅ~~~~~」

左臉が腫れあがったロイ先生と、顔を真っ赤にして目を回しているロスヴァイセさんが倒れていた。

ロイ先生、左目が開けなくなっているから何も見えていないのか……。ロスヴァイセさんは、どうして倒れているんだ？なんか、見たことがないほど幸せそうな顔をしているし……。

とりあえず、助けたほうがいいよな……？

俺が黙っていたせいか、ロイ先生が周囲をキョロキョロと見渡しながら叫ぶ。

「ん？ イッセーじゃないのか……。この際誰でもいいから助けてくれ！」

「えと、はい！ 俺です！ 兵藤一誠です！」

俺が大きめに返すと、ロイ先生はこちらに目を向けた。

「ちよつと、アーシア呼んできてくれ。視界ゼロって、存外怖え」

「わ、わかりました。呼んできます！」

俺はテントまで走り、みんなの治療で疲れ気味のアーシアに軽く状況を説明して、了承を得たらお姫様抱っこで抱え、ロイ先生のもとを目指した。

後ろから「いいなあ」とか「む！アーシアだけか、イッセー！」とか聞こえたけど、今回ばっかりは無視させてくれ！

「いやー、助かった。ちよつと無理をしすぎたな」

「きゅ～～～～」

俺——ロイは回復した視界にイツセーとアーシアを捉え、礼を言っていた。ロスヴァイセは目を回して伸びたままだ。

俺はため息を吐き、ロスヴァイセをお姫様抱っこする。まさか、セラ以外にする日が来るとはな。

俺が苦笑していると、

「——ッ!」

全身に鳥肌が立った。な、なんだ? 殺気……………ではないな。

俺が周囲を見渡していると、イツセーが訊いてくる。

「どうかしましたか?」

「いや、鳥肌が立ったただけだ。気にすんな」

「はあ」

俺の言葉にイツセーは若干曖昧に頷く。

最近感じる殺気のような何か。本当、何なんだ?

ロイたちがそんなやり取りをしている頃。

「……………」

「…………セラフオール、どうかしたのかい？」

まさにユーグリットに会いに行こうとしていたサーゼクスが、明らかに不機嫌な様子
のセラフオールに訊く。

セラフオールはハイライトの消えた瞳でサーゼクスを一瞥すると、口を開く。

「何だが、『私の』ロイが色々とやっている気がするの……………」

「グレンデルの撃破とユーグリットの捕縛。確かに色々とやってくれたようだけど
……………」

「…………いえ、違うのよ。私の特権を取られた気がするのよ」

いつになく無感情なセラフオールの声音に、サーゼクスも真剣な表情になる。

「誰かに取られたのなら、取り返せばいいだろう？簡単じゃないか」

「そうよね。その誰かとも、お話ししないとイケないわよね……」

サーゼクスはその誰かとロイのことを考え、黙祷を捧げる。

極端な話、ここまで来たらロイに頑張ってもらうしかない。自分はユーグリットと話さなければならぬのだ。

サーゼクスは無表情でアウロスの方角を見つめるセラフオルを一瞥すると、足早に部屋を後にしたのだった。

l i f e l 4 苦勞は絶えない

氣絶したロスヴァイセをお姫様抱っこする俺——ロイは、魔力欠乏でふらつく足を引きずり、ようやくテントに到着した。

「ただいま戻りました」

「ただいまつと。俺たちが最後までいな」

「イツセー、お兄様、お帰りなさい。つて、ロスヴァイセー! どうしたの!」

戻ってきて早々に、リアスが詰め寄ってきた。

まあ、ぼろぼろの兄と氣絶している眷属が戻ってくれば、驚きもするだろう。

俺は苦笑しながら言う。

「いや、ちよつと色々あつてな。まあ、そのうち目を覚ますだろうよ」

と言いながら、空いているベッドにロスヴァイセを寝かせ、面倒だからそのベッドの端に腰をかける。イツセーとアーシアも余っていたパイプ椅子に腰をかけていた。

俺はテントを見渡しながらホツと息を吐いた。これで、ようやく休憩できる。てか、ちよつと寝ておくか?

俺がボケツとそんなことを思っていると、リアスが口を開く。

「きゅ~~~~」

まだ目を回していた。いい加減起きて欲しいんだがな。

俺は伸びをしながら言う。

「まあ、『見聞を広めろ』って言ったのは俺だからな。何事も挑戦だ」

「と、ロイ先生からも言われてね。オカ研を抜けることになりそうだが、どうしても生徒会長になりたいという野望を持ってしまったんだ。ご了承を願いたい」

ゼノヴィアの言葉に、イツセーたち固まったままだった。まあ、いきなりの告白だからな。驚きもするだろう。

俺は目を回すロスヴァイセを見て苦笑する。こいつも、そういう心境なのかもな。

……………気絶しちまったけど。

俺がため息を吐いて視線をゼノヴィアのほうに戻すと、

「ゼノヴィアさん、私も手伝います！」

「もちろん、私もよ！布教とか、宣教とか、結構得意だし！」

「ああ、私も布教はそこそこ得意だぞ！生徒会長になるぞ！」

「「おおっ！」」

教会三姉妹が張り切っていた。

布教だの宣教って、それは違う気がするんだが……。まあ、教師として、やり過ぎたら止める程度に留めておるか。

で、イリナがまたイツセーを見てニコニコしているし、何か約束でもしているのだろうか。

「……でかまいませんよ」

学園の隅で転移型魔方陣を展開するゲンドウルさん。今回の件で酷く消耗したゲンドウルさんは、一度冥界の病院に行くことになっていた。医療班に任せてもいいんだが、ゲンドウルさんは一人で行けると個人用の魔方陣を展開したらしい。

そのゲンドウルさんを俺と、先程目を覚ましたロスヴァイセで見送ることになったわけだ。

「……………」

「……………」

「……………」

三人して黙りこんでしまい、気まずい空気が漂っていた。俺とロスヴァイセに関して
は、先程の『あれ』のせいだろう。

俺が言葉を探していると、こちらに近寄る気配が複数。見れば、子供たちだった。

あの戦いのかいもあり、子供たちは全員無傷で済み、疲労しきった俺たちに元気な笑
顔を振り撒いてくれていた。

「ロスヴァイセ先生っ！」

「おばあちゃん先生っ！」

子供たちは二人に寂しそうに言った。

「先生、帰っちゃうって本当？」

「もう、この学校に来ないの？」

「先生の魔法、もつと教えてほしいです！」

「魔法、使えるようになりたい！」

ゲンドウルさんは子供たちの頭を撫でながら言った。

「また来ますよ。それにロスヴァイセ先生だっていつかまた必ず来てくれるはずですよ」
それを聞いた子供たちは最高の笑顔を見せてくれた。

ゲンドウルさんがロスヴァイセに真つ直ぐに言う。

「ロセ、おまえが通つてきた道は、学んできた知識は、たとえうちの家系と異なるものだとしても、間違つたものではないんだよ。ほら、見なさい」

笑顔の子供たちがそこにいた――。

「この子たちの笑みはおまえが通つてきた先にできたものだよ。それは今のおまえだからこそ、できたもの。もつと、自分を誇りなさい。――ロセ、おまえは自慢の孫なのだからね」

その一言を聞いたロスヴァイセは、込み上げてくるものを必死に抑えていた。それでも、目からは涙が溢れていく。

「……………はい。ありがとうございます」

それを確認して、ゲンドウルさんは魔方陣に魔力を込めていくが、何かを思い出したかのように言った。

「さて、私は行きますよ。あー、そうそう」

ゲンドウルさんは俺に視線を送り、ウインクした。

「ロイさん。ロスヴァイセをよろしくお願いしますね」

俺はゲンドウルさんの目ををまつすぐ見て、笑みを浮かべながら頷く。

「任せてください」

俺の言葉に、ゲンドウルさんは笑みを返して転移していった。

俺は息を吐き、ロスヴァイセに視線を向ける。

「で、さっきの答えは？」

「え?! い、今訊くんですか!？」

一瞬横を見て困惑するロスヴァイセ。俺もそちらに目を向けると、

「ねえねえ、チューするの?」

「紅い先生が、ロスヴァイセ先生とチューする!」

子供たちが俺とロスヴァイセを煽ってきた。あ、紅い先生って俺の事、だよな? ……
なんかいいもんだな。

俺が苦笑して頬を掻いていると、奥から子供たちの親と思われるヒトたちがこちらに
手招きしてきていた。

「ほら、呼ばれてるぞ。戻った戻った」

俺が言うのと、子供たちは元気に返事をして親の元に戻っていく。

俺が笑みで子供たちを見送っていると、ロスヴァイセが服の袖を引っ張ってくる。

「ん? どうし——」

振り向きながら言った俺の言葉は、それ以上続かなかつた。柔らかい何かで口を塞が
れたのだ。

その柔らかい何かはすぐに離れ、口が開けるようになる。

俺が間の抜けた表情をしていると、顔を真っ赤にしたロスヴァイセが、恥ずかしそうに体をもじもじさせながら言う。

「えと、その、私の初めて、です……………」

「……………ああ、うん。ありがとう」

突然すぎて反応できていないなか、ロスヴァイセが続ける。

「あ、改めて、よ、よろしくお願いします……………」

「おう、よろしく。あと——」

言葉が続けようとした矢先に、いきなり足から力が抜け、膝から崩れ落ちた。

な、なんだ……………。視界まで霞んできやがった……………つ。

「ロイ先生!?だ、大丈夫ですか!」

「だ、大丈夫だ。ちよつと疲れているだけだと思おう」

立ち上がるうと足に力を込めようとするが、まったく立ち上がれない。何だつてんだ、いきなり……………!

「はあ……………はあ……………くそ!」

足をぶつ叩いて濁を入れてみるが、そんなもの効果があるわけがなく、まったく動かない。

てか、息苦しくなってきた……………。

「ロイ先生！ロイ先生！しっかり——」

俺の顔を心配そうに覗き込むロスヴァイセの顔。それを最後に、俺の意識は暗転した——。

「——ほど、ロイ——ね」

「ほ、ほんと——すー信じ——レヴィア——ま——」

「にやはは。たい——ことに——るにや」

聞き馴染みのある三人の声で、俺の意識が覚醒していく。

視界は霞んでいるが、薬品独特の臭いがするってことは、病院だよな……………。

視界が回復すると、俺は両手を顔の前に伸ばす。左腕の義手は外れており、右腕の腕輪も外れている。

重い体を無理矢理起こしてみる。すると、

「あ、起きた？」

いつもの魔法少女姿のセラのハイライトが消えた瞳で睨まれた。まあ、何でかはわかる。

それはそれとして、

「なんで二人は正座させられているんだ？」

「半分私で、もう半分はロイ先生のせいです」

「私は、自業自得かじゃ？」

俺の問いに、若干ジト目のロスヴァイセ（スーツ姿）と、苦笑する黒歌（いつもの着物姿）が返してきた。

俺が首をかしげていると、セラが笑顔で俺の肩を掴みながら言ってくる。

「ロスヴァイセから話を聞いたわ。どういうことかしら？」

「自分の気持ちに素直に生きようと思つてな。うん。悪かった、悪かったから力を抜いてくれ！」

肩から『メキメキ』と嫌な音が鳴るなか、俺が言うと、セラはより力を込めてくる！
「どこをどう悪いと思つたのかしら？く・わ・し・く・お・ね・が・い」

「相談なしで色々決めちまって悪かった！だが、自分の気持ちにも、相手の気持ちにも中途半端はしたくねえんだよ！」

俺が言うと、セラはため息を吐いて手を離してくれた。ああ、肩がいてえ……………。

俺が肩の調子を見るように回していると、セラが言う。

「まあ、あなたのそういうところも好きよ？けどね——」

セラが満面の笑みを浮かべる。だが、目が笑っていない。

俺が口元をひきつらせていると、

「キスしたのよね？出会ってまだ三ヶ月のヒトと。私たちは付き合ってからしばらくやったことなかつたわよね？」

「いや、俺もするとは——」

「黙って聞く！」

「……はい……」

言い訳しようとしても、セラがそれを許すわけもなく、話は続く。

「もつと言うと、お風呂にも入ったのよね？そっちの黒猫とも」

「黒歌にや」

「それはどう説明するつもりなの？」

黒歌の指摘に、セラは特に訂正せずに締めくくった。

まあ、黒歌には色々と世話になっている程度なんだが、気になるようだ。

「色々と手を借りているんだよ。片腕ねえからな」

左腕を振りながら言う、黒歌も若干複雑な表情で頷く。

息^ひつたりの俺たちのそれを受けたセラは――、

「……………」

無言で俺と黒歌を睨んできていた！見たことがないほど冷たい目をしてやがる！

俺が冷や汗を流していると、黒歌がフォローしてくれる。

「こいつの腕がなくなつたのは私のせいなんだから、責任とるのは当たり前でしょ？それに本人も何だかんだで助かっているみたいだし」

「確かに、ロイも助かっているみたいけど――」

納得しかけたセラに、黒歌は続ける。

「そうにやそうにや。それにこいつだって――」

黒歌が俺の右腕に絡みながら言う。

「独占欲が強い奴は嫌いだと思ふにや」

「――ッ！」

黒歌の言葉に、セラは目を見開いて心底ショックを受けた様子だ。……………完全に黒歌のペースだな。

それはそれとして、黒歌の胸が当たってる。めっちゃ柔らかい感覚に襲われている！

俺がさつきとは違う意味で冷や汗を流していると、セラが焦った様子で再び俺の肩を

掴んでくる！

「ロイは私のこと嫌いじゃないわよね!? 嫌いじゃないわよねえ!」

「おまえは嫌いじゃないが、縛られるのは嫌いだな」

——物理的にも。

と、心中で呟くが、深い意味はない。

俺の言葉を受けたセラは、

「——ッ!!!」

先程以上にショックを受けた様子だった。目だけでなく、口も開いてしまっている。

俺が左手で頬を搔こうとするが、ないことを思い出さため息を漏らした。

「まあ、俺もヒト並みに自由が好きなんだよ。変に縛られるのは面倒だからな」

「——ッ!!!」

セラの顔色がどんどん青くなっていく。だ、大丈夫だろうか……………。

俺の心配をよそに、セラはふらふらと歩くと、そのまま椅子に力が抜けたように座り込んだ。

「お、おい。大丈夫かよ……………」

俺が心配していると、セラは勢いよく立ち上がり、俺とロスヴァイセに言った。

「——許可するわ。あなたたちがロイの恋人になること」

おお、あのセラが折れたようだ。まあ、ちよつとやり過ぎた気もするが、たまにはい

いだろう。……ん？『たち』って言ったのか？

俺の疑問をよそに、セラは続ける。

「ただ、一番を譲るつもりはないわ。これだけは、譲れないわ！」

それを強調してくるセラ。かなり妥協して許可していることを伝えたいんだろう。

ロスヴァイセは正座をしたまま嬉しそうに笑みを浮かべ、黒歌は、

「ま、それを奪うのが楽しいのじゃ」

と、呟いた。な、なんか、黒歌も含まれているような気がするんだが……。それに、

嫌な予感もする……。

俺がひきつった笑みを浮かべていると、セラが話題を変える。

「話はここまですべてにして、大丈夫？急に倒れたって聞いたから」

「ん？ああ、魔力も体力も尽きちまっただけだ。次から気を付けるさ」

「そう」

ようやく、セラからいつもの笑みがこぼれた。その笑顔に、俺は惚れたんだつたな

……。

「いきなり見せつけちゃって、熱々だにや。ま、今は邪魔しないで置いてあげる。ほら、

ロスヴァイセ、行くにや行くにや」

「え？ちよ！黒歌さん!?押さないでください！あ、足が痺れて——」

黒歌に押される形で、ロスヴァイセが部屋から出されそうになる。

「ロスヴァイセ、ちよつといいか」

「は、はい」

俺の言葉に、黒歌も気を利かせて止まってくれた。俺は笑みを浮かべ、ロスヴァイセに言う。

「オフの時だけでいいから、『先生』呼びは辞めてくれ。まあ、呼び捨てとまではいわねえから、せめて『さん』だな」

「は、はい！ロイさん！」

ロスヴァイセが嬉しそうに笑いながら呼ぶので、俺は頷き返す。

俺は続ける。

「ついでに、俺も『ロセ』って呼ばせてもらうが、いいか？」

「もちろんです！なんか、今まで以上に親近感が湧きます！」

「だな」

俺たちの話はそれまでとなり、ロセと黒歌が退室していった。

改めて二人きりになった俺たちの話は続く。

「それで、本当に大丈夫なのね？」

「ああ、だいじよぶら」

セラに確かめるように両頬を引っ張られ、変な声が出た。
俺の返事を受けたセラは手を離し、訊いてくる。

「それで、どうするの?」

「二人とも幸せにするが?」

「それはそうなんだけど。訊いたのはあなたについてよ。ここまできたら、『前世の話』するんでしょ?」

「まあ、そうだな。話すにしてもタイミングを見てからにするさ。……今は色々と立て込んでしまってるし」

俺がそう漏らすと、セラも頷く。いつか、リアスたちにも話さねえとな……。

俺が真面目に考えていると、セラが笑う。

「どうかしたか?」

「いえ、なんか、ちよつとだけ雰囲気変わったなって」

「嫌か?」

俺がわざとらしく笑みながら訊くと、セラは俺の右頬を撫でながら言う。

「まさか。そんなことじゃ、私の想いは変わらないわよ」

「ま、そうだろうな」

セラの手に右手を重ねながら、再び笑む。

誰かを守ることが俺の『贖罪』と言うのなら、誰かと共に生きることが、俺の——
なんて言うんだろうな……………。

真面目にそんなことを考えるなか、再び眠気に襲われ始めた。

うとうとする俺に気づいたセラは、優しく笑む。

「ロイ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

重ねあつた手に、最愛のヒトの温もりを感じながら、俺の意識は、再び暗闇に落ちて
いったのだった——。

聖誕祭のフアニーエンジェル

life 01 変わり始めた日常

アウロス防衛戦からしばらく経ったある日。

「……………」

自室で寝ていた俺——ロイは、謎の気配を感じて目を覚ました。いや、気配と言うよりは、感覚だ。なんか、仰向けに寝る俺の上に、すごい柔らかい何かが乗っかっている。俺が恐る恐る毛布をどかして中を覗き込んでみる。

「こゃっ…」

毛布を戻して視線を天井に戻した。

なんか、色々世話を焼いてくれる猫又と目が合った気がするんだが、気のせいだろう。きつと、連日の訓練で疲れているんだ、そうに違いない。

俺が再び寝ようとする、俺の上に乗る誰かがもぞもぞと這い上がり、毛布から顔を出す。

「ちよつと、無視しないでよ。ばつちり目が合ったでしょ?」

「……………」

俺は無言で自分の頬を引っ張る。——うん、痛い。つてことは、夢じゃない……………のか。

毛布から顔を出した猫又は、イタズラっぽく笑みながら言う。

「夢だと思つた？残念、現実には。寝込んだ隙に入り込ませてもらったのにや」

「……………最悪だ。おまえの侵入に気づかぬえなんて」

俺は頭を抱え、その猫又——黒歌を見つめた。

見つめられた本人はご機嫌そうに笑っているが、仙術の応用で気配を殺してきたのか？それとも、侵入に気づかないほど俺が爆睡していた？

俺が思考を巡らせていると、『ペロツ』と音と共に、首にざらついた感覚を感じ取った。

まさか——！

それを察した瞬間、全身に鳥肌が立った！

俺は思考する前に毛布もろとも黒歌をぶん投げる！

投げられた黒歌は、ひらりと体勢を整えると、静かに着地して見せた。

俺は声を荒げながら、黒歌に言う。

「おまえ、いきなり何しやがった!?なんか、首がぬめつと——！」

それ以上、言葉が続かなかつた。なぜか、それは——。

「何つて、ちよつと味を確認しただけにや」

ペロツと舌を出しながらなんて事を言う黒歌が、『全裸』だからだ！セラよりも大きいであろう胸と、ほどよく肉のついた肢体が視界に飛び込んでくる！

てか、物理的に舐められたのか!?!眠気がぶっ飛んだが、いきなり過ぎんだろ!?!てか、服を着ろ！

俺が勢いよく体ごと視線を外すと、黒歌が可笑しそうに笑う。

「にやははは！なに？恋人以外の女の裸を見るのは慣れてないのにかにや？意外と初々しいのにや」

「早く服を着てくれ。おまえの足元に落ちてるのがそうなんだろ？」

先程ちらりと見えた黒歌の着物と思われるものを指差しながら俺が言うと、頭を柔らかいものに包み込まれた。

俺は固まりながらも状況を把握できた。たぶん、黒歌に抱きつかれているな。

特に反応を示さない俺に疑問を感じたのか、黒歌が不満げに言ってくる。

「ちよつと、反応してよ。つままないにや」

「いや、いちいち反応してたら疲れるんだよ。仕事もあるんだからちよつと休ませろ」

「え、つままないにやつまないにや」

このイタズラ猫が。寝起きの俺は機嫌が悪いってのによ。

俺がようやく冷静になり、状況を飲み込んで額に青筋浮かべていると、部屋のドアが

ノックされた。

『ロイさん、起きていますか？朝食の時間です』

今の声、ロセか!?この状況を見られるのは色々イヤバイよな!

「黒歌、離れろ!ロセが部屋の前に!」

俺が焦る中、黒歌はいっこうに離れようとはしない。

「別に、見られたって問題ないにや」

「いや、おまえな!」

俺が引き剥がそうと躍起になっていると、ドアが開かれる。

「失礼しま——」

ドアから中を覗いたロセが、俺と黒歌を見て固まった。

「ロセ、これはだな……………」

「男と女の営み中じゃ。邪魔しないでちようだい」

説明しようとした俺を遮り、黒歌が俺を抱く力を強くしながらそんな事を言いやがった!

俺が困惑しながら黒歌を睨むが、ロセはぶるぶると体を震わせ、

「朝っぱらから何してるだーッ!」

訛り全開の叫びが、兵藤宅に響き渡ったのだった——。

その後、どうにか黒歌を引き剥がした俺は、ようやく朝食を摂ることができた。

その最中、ロセか不機嫌そうに俺を睨んでできていたが、今さらどうすることもできず、タイムリングを見てデートに行こうと言つて、どうにか機嫌を直すことができた。

「はあ……………」

「よー、モテ男。悩み事か？」

時間と場所が変わつて昼頃の職員室。

机に突つ伏してため息を吐いた俺に、アザゼルが苦笑しながら訊いてきた。

俺は再びため息を吐き、アザゼルに言う。

「いや、まあ、そうだな。朝っぱらから大変だったんだよ。やれやれ、ロセに告白したのに、黒歌にも絡まれるつてどういうことだ？てか、ベッドに潜り込まれても気づかないつて、どういうことだ？なあ、どういうことだ？」

俺の立て続けの質問に、アザゼルは若干引きながらも口を開く。

「黒歌は、昔からイタズラ好きだからだな。で、気づかないつてのは、たぶん仙術のせい

だ。おまえはもう少し休め。疲れているから余計にそうなるんだよ」

「そういうもんか？」

「——多分な」

若干間の開いたアザゼルの返しに、俺も思わず苦笑した。恋人のいないこいつにする質問じゃねえな。

それからさらに数日。

不規則におこなわれる黒歌の侵入に、俺は頭と胃を痛めながらも耐えていた。

そして、二学期の終業式が終わり、その後の仕事を終えた教師三人組と、リアスたちオカ研メンバー、教会から駆けつけてくれたグリゼルダは兵藤宅のVIPルームに集まっていた。

ノリノリな様子のイリナが言う。

「そのようなわけで、クリスマスを通じて、この駒王町の皆さんにプレゼントを配るの！」

そう、俺たちはこの町のヒトたちにちよつとしたプレゼントを配るのだ。

まあ、知らないうちに町の崩壊とか、はぐれ悪魔とか、様々な問題に直面させているわけだから、たまにはいいことをしてやろうとリアスやイリナが思い立ったことが始まりだ。

プレゼントと言つても、大きなものではなく、都市伝説になる程度のちよつとしたものを送ることになった。

例えば、おもちゃとか、ネクタイとか、なんかのサービス券とかだ。

と、だいたい理解できたところで、俺が言う。

「――で、サンタの格好をするわけだな」

「……………なんでサンタの格好をしているんですか？」

「……………変か？」

早速サンタの格好を試してみたのだが、イツセーからツツコミが入った。まあ、特に説明もなくこの格好だからな、気になるんだろう。

イツセーが若干引き気味にぼそりと漏らす。

「ロイ先生つて、サーゼクス様の弟ですよね……………」

「……………それは誉められているのか？」

そんなやり取りをしている横では、朱乃が女性陣にサンプルを見せていた。

ちなみに、ソーナたちはギリギリまで参加できないそう。アウロスの修復、修繕を手伝っているとのこと。

現在他よりも損傷が酷い風車小屋周辺を修復中って聞いたんだが、たぶん俺とグレンデルが戦った場所だろう。なんか、申し訳ないな。

奪われたアグレアスがどうなっているのか、それはいまだにわかっていない。だが、いいことにはならないだろう。

各々がクリスマスに関して色々と話し込んでいると、書類を見ていたアザゼルが訊いてくる。

「グレモリー兄弟。こんな時に聞くのもなんだが、グレイフィアはどうだ？」

「義姉さんは、ユーグリットの要望で、あいつの尋問をしている。あの野郎、気持ち悪いほどシスコンだな。聞いた話じゃ、なかなかエグいことをされているらしいが、ユーグリットはご機嫌だそうだ」

「お義姉様と会えただけで、ユーグリットの目的は果たせたのかもしれないわ。少しずつだけど、情報を漏らしているそうだから」

俺たち兄弟の話聞き、アザゼルは頷く。

「それは俺も聞いたな。すでにエージェントが送り込まれているそう。シエムハザからも行動を開始したと連絡があった」

ユーグリットが漏らした情報が本当か嘘かはわからないが、これでリゼヴィムが捕まることがないだろう。本人は、おそらくアグレアスにいる。そのアグレアスがどこにいるかがわからねえんだよな……………」

俺が色々と考え込んでいると、グリゼルダが時計を確認したあとに言う。

「まずはこのあと、皆さんを天界へお連れ致します。そこで、企画の中身——プレゼントの確認と、ミカエル様から年を明ける前のごあいさつをいただける予定です」

あー、天界行くのかー、嫌だなー。向こうのあらゆるヒトから殺気をぶつけられるんだらうなー。

俺が目を細めながら遠くを見つめていると、横のアザゼルが手を振りながら言う。

「んじゃ、ミカエルによろしくな」

「おまえは行かないんだよな。代わりのように行かされる俺の苦勞を知らないでよ」

俺が睨み付けながら言うと、アザゼルが苦笑する。

「まあ、いいじゃねえか。どうせ天界を見たことがないんだろ？ いい機会じゃねえか」
「まあ、確かに、そうだが……………」

天界に興味がないと言えば、嘘になる。一度は見てみたいって思っていたからな。——攻略対象として。

だが、今回は客として行くのだ。変な気はない。行ったらどうなるかわからねえけど

な!

「さて、地下の魔方陣から天界に行くわよ!」

リアスの号令のもと、天界に向かう俺たちは、地下の転移室に移動することになった。

「その前にお兄様」

「ん?」

「着替えてください」

「……………了解」

着替えを挟んで地下の転移室に到着。そこに描かれたのは見慣れた魔方陣ではなかった。

イリナとグリゼルダが祈る時のポーズを取りながら、呪文のように聖書の一説を口にしていく。

ちよつとした頭痛が悪魔である俺たちを襲うが、耐えられないものではない。

前もつて渡された、悪魔でも天界を行動できる『天使の輪』を頭の上に浮かべ、俺た

ちは転移の準備が終わるのを待っていた。

あー、天界に行くってことは、あいつに会うことになるんだよな。俺、暗殺とかされねえよな？

また遠い目をしていた俺の肩を揺すりながら、ロセが訊いてくる。

「ロイさん、体調でも悪いんですか？お休みになつていたほうが——」

「いや、大丈夫だ。これから起こるトラブルを想像して、現実逃避してただけだから」
「トラブル、ですか？——あ」

事情を察してくれたロセは、俺を同情的な視線を送ってくる。

ああ、どうしてこうなった……。行きたくねえな……。

俺がため息を吐いていると、教会三姉妹が何やら祈っていた。まあ、天界に行けるから嬉しいんだろう。

嫌がる俺と、喜ぶ三人。俺も気楽にいったほうがいいか。

俺がそう思慮した矢先に、俺たちの前に両開きの扉が現れた。白亜で出来ているのか、見事な門構えだ。扉が音を立てて開いていく。

「さあ、どうぞ」

グリゼルダが俺たちに門を潜るように促してくる。イリナははしやぎながら中に入っていく。

「ほらほら、早くー！これが上までいく天使用のエレベーターなの！遠慮なく入ってちょうだい！」

イリナは今回のクリスマス企画に一番やる気を出していたるからか、最近テンションが高い。まあ、天使として、誰かを助けられることを誇りに思っているんだろう。

俺たちがイリナに続くように門を潜ると、白い空間に出た。全員が白い空間に入ると、足元の金色の紋様が輝き始める！

不意に訪れる浮遊感。体全体が上に放り投げられたような感覚に襲われた！

おう、これが天界式転移なのか！光るだけの悪魔式と比べると、なかなか新鮮なものだ！

俺がそんなことを思っているうちに周囲の風景が一変、神々しい光に照らされた。

周りを見渡してみると、俺たちは雲の上に立っていた。見上げてみれば、白く輝く広大な天上、前方には巨大な門が現れた。

呆気に取られるイツセーやアーシアに比べ、リアスや朱乃は落ち着いたものだった。

ロセは、若干驚きながらも興味のほうが勝っているのか、目を輝かせていた。

俺が覚悟を決めるように息を吐くと、巨大な門が開いていく。

イリナとグリゼルダが開いていく門を背に、俺たちに言う。

「ようこそ、天界へ」

l i f e 0 2 天界巡り

巨大な門——天界の前門を潜ると、塵一つ落ちていない石畳の白い道、ずらりと立ち並ぶ石造りの建物、空に浮かぶ建物、道や空を行き交う天使たちが視界に飛び込んできた。

天使たちはリアスたちを珍しそうに見ると、俺に気づいて殺気のこもった視線を送ってくる。

俺がため息を漏らしていると、グリゼルダが説明を始める。

「天界は全部で七層あります。ここは第一層——第一天と呼ばれるところです。第七天は神の住まう場所とされています。今は奇跡を司る『システム』だけが存在しております」

イリナがそんな事を言っていた気もするな。多くの天使が働くところであり、天使の前線基地とか呼ばれているらしい。イリナとグリゼルダもここに來ることが多いそうだ。

イリナは真上を指さしながら説明を始める。

「ミカエル様やセラフの方々は第六天にいらっしやるわ。天界の本部もそこなの。ま

あ、私を含む末端の天使はここ——第一天にくることのほうが多いわ」

ミカエルは上にいるのか。目的地はかなり上のようなのだな。

リアスが興味深そうに辺りを見渡しながら言う。

「昔と構造が変わっていると聞いていたけれど」

「アザゼルを含め、純血の墮天使は第五天に收容されていたんだっただか？」

俺の問いかけにグリゼルダが頷く。

「はい。第五天は彼らの收容所だったと言われています。現在は研究機関の多い階層となっておりまして。『御使い』のカードもそこで製造されています」

『御使い』^{フレイブ・セイント} については、天使版の転生悪魔のようなものだ。悪魔はチエスに倣ったが、天使はトランプに倣い、セラフメンバーを『K』^{キング}とし、『A』^{エース}から『Q』^{クイーン}を直属の部下として転生天使にするものだ。

まあ、こちらの場合、何かしらの要因ではぐれとかにはならないが、墮天使になるらしい。そのままグリゴリに入るか、滅せられるかって感じだな。

なんて思っているうちに再びエレベーターに乗り、さらに上を目指す。第二、第三天はそのまま通過となった。

エレベーターに乗り、手持ち無沙汰の俺たちにグリゼルダが言う。

「一般的に天国と呼ばれるのは第三天となります。広大すぎて、橋がどこにあるのかわ

からないとさえ言われています」

「第二天はどんな所なんだ？」

話を飛ばされた第二天について訊いてみる。

「第二天は、暗闇が支配する世界です。そこでは主に星の観測をおこなっておりますが、罪を侵した天使を幽閉する場所でもあります」

天界にも暗闇が支配する場所もあるんだな。まあ、星を観測するなら邪魔な光はないほうがいいだろう。

俺たちが話しているうちに第四天も通過していた。

「第四天は別名エデンの園。アダムとイブのお話が有名よね」

イリナがそう口にしていた。

エデンの園、ね。いつかに世話になったサマエルはそこにいたんだよな。

ついに到着した第五天。話のとおり、研究所らしき建物が多い。第一天は神秘的な建物が多かったが、第五天は近代的な建物が多い。第一天は神秘的な建物が多かったが、第五天は近代的な建物が多い。

第五天の大通りを抜け、上に続くエレベーターに乗った時、グリゼルダが思い出したように言った。

「天界のルールなのですが……人間界や冥界ほど、俗世のものに強くありません」

人差し指を一本立てると、話をまとめた。

「つまり、邪なものに酷く脆いのです」

……うん、だよな。あいつの胸にダイブさせられた時は、俺よりもダイブされたほうが慌てていたし、周りの天使も大変そうだった。

俺はそれを思い出しながら苦笑し、イツセーに言う。

「まあ、イツセーは自重しろってことだな」

「はい！今回ばかりは自重します！」

イツセーが勢いよく返してきた。本当に自重するかは、わからないがな。

第六天に到着すると、バカみたいにデカイ門と扉が現れた。見渡す限り壁であり、門もざつと百メートルはあるだろう。そして、その門がゆつくりとひらいていき、俺たちはその門を潜る。

門もかなり分厚い。穴を開けるのには骨が折れそうだ。おそらく、全力状態のイツセーでも無理だと思う。

門を抜けると、長い道の先に金色に輝く光輪を背にした神殿が佇んでいた。

見ているだけで悪魔には毒になりそうなほど、神々しい力を神殿から感じ取れる。まあ、あんまり実害はないが。

グリゼルダが神殿に続く道を先導しながら、俺たちに説明する。

「あそこがセラフの方々に住まわれている現天界の中枢機関——『ゼブル』です。建物の

ことも私たちはそう呼んでおります。ここよりさらに上——第七天はセラフ以外立ち入り禁止なのです。ですから、基本的に私たちが足を踏み入れられるのもここままでになっています」

あの神殿にセラフの連中が住んでいるんだな。まさか、生きてこんなところまで来れるとは、長生きしてみるもんだな。

このまま真つ直ぐ神殿に——と思っていたら、先導するグリゼルダが途中の道を曲がって道から外れる。

……ん？ 目的地はあれじゃないのか？

疑問に思いながらも、先導するグリゼルダに続いて俺たちも道を曲がる。

「実は、『ゼブル』は内装工事中でして、セラフの方々はそれぞれ別のところに行かれています。ミカエル様はこちらにお待ちなのですよ」

工事中なのか、『ゼブル』。まあ、テロに備えて色々とやっているんだろう。こつちも大変だな。

さらに進むこと数分。中庭と思われる場所に到着した。多種多様な鮮やかな草花が咲き誇り、ちよつとした川のように水が流れている。まるで中庭つてよりも庭園だな。

テラスとなっている小屋のテーブルに、目的の人物を発見した。その人物もこちらを

確認すると、立ち上がって柔和な笑みを浮かべた。

「これは皆さん。お久しぶりです」

金色の翼を持った男性天使——ミカエルだ。現在の天使たちのトップ。結構久しぶりに会った気がする。

「お久しぶりです、ミカエル様。このたびはご招待いただきまして、まことにありがとうございます」

リアスを始め、オカ研メンバーが丁寧にあいさつしていくが、俺は軽い感じであいさつする。

「久しぶりだな、ミカエル。運動会以来か？」

「はい、あの運動会はなかなか楽しかったですね」

「……………あれを見てなぜそう言えるのか気になるが、今はいいか」

テーブルに促されて全員が着席していくなか、ミカエルが訊いてくる。

「どうですか、天界は？」

「なんだか、神々しいというか……………」

イツセーが正直な感想を言い、

「素敵なところですよ。人間の魂がここに運ばれてくるというのなら、それはまさに楽園なのでしょうね」

。リアスがそう漏らした。俺の目に写る天界は、何もかもが新鮮に思えた。だが――

「俺には眩しすぎるな。ちよつと落ち着かねえ」

俺はそうとも思えてしまった。楽園に『殺人鬼』は似合わねえ。

俺の言葉を受け、ミカエルが苦笑する。

「まあ、悪魔の皆さんが来ること自体想定していませんから、慣れていないところは眩しいかもしれないですね」

ミカエルは俺の発言を言葉のまま受け止めたようだ。確かに物理的にも眩しいけどな！

俺を除いて、固い表情の面々にミカエルが言う。

「あまりかしこまらないでください。何も無いところではありますが、ゆつくりとしていってください」

ミカエルが手を挙げると、女性天使が俺たちに紅茶を出してくれた。――のほうがいいが、最後に淹れられた俺は冷たい視線で睨まれた！理由が理解できているからどうしようもない！……毒とか、入っていないよな？ミカエルにも同じもので淹れていたいし……。

ミカエルは俺の心配をよそに、話を始める。

「改めて、今年一年、本当にありがとうございました。——激動の一年でしたね。あなた方がいなければ、今ごろどうなっていたか……本当にありがとうございました」

ミカエルから劳いの言葉が送られた。まあ、頑張ったのはイツセーたちだから、俺は聞き流す。

俺が紅茶に口をつけていると、俺たちに紙が手渡された。見てみると、プレゼントの一覧表のようだ。

「では、こちらがクリスマス企画における——」

ここから、クリスマス企画の話し合いが始まったのだった。

「——詳しくは、そろそろ現地に到着する企画立案者と打ち合わせていただければ問題ないかと。皆さんもお忙しいでしょうし、各々の持ち場に戻っていただいたほうがいいでしょう」

ミカエルは話し合いを締めくくった。駒王町に立案者が来ているのか。詳しくはそいつについてことだな。

話が一通り終わったところで、俺は深緑色の宝玉を取り出した。

「グレンデルを封じた宝玉だ。封印を頼めるか？」

そう、アウロスで倒した邪龍——グレンデルを封じた宝玉だ。事前に話し合ったとおり、天界に任せることにした。

俺の問いにミカエルは頷く。

「わかりました。お任せください」

ミカエルに宝玉をしつかりと手渡し、俺は安堵の息を吐いた。これで、グレンデルと戦うことは二度とないだろう。

「ミカエルさまあ」

そんな俺の耳に、若干間延びした女性の声が届いた。その瞬間、全身が硬直して動けなくなつた！いい、今の声は——！

俺が壊れたロボットののような音をたてながら首を動かし、その人物を視界に入れる。

「——ッ！」

その人物も俺に気づいた瞬間、全身を硬直させた。

ウエーブのかかったブロンド、おっとりした雰囲気醸し出す女性天使——ガブリエルだ！なぜかサンタクローズのコスチュームでの登場だった！

硬直したガブリエルに、ミカエルは困つたように苦笑しながら声をかける。

「ガブリエル、時間通りですね」

「は、はい、ミカエル様、な、なぜ彼が………」

相当切羽詰まっているのか、口調が固くなるガブリエル。できることなら、俺もここから立ち去りてえよ！

ミカエルは続ける。

「言っていないませんでしたか？駒王町の悪魔の皆さんをお呼びしたと」

「い、言われました。え、ええ……」

相当困惑しているようだ。そんな俺も大変だけどな！ミカエルの脇に控える女性天使からの殺気が凄まじい！

俺がその女性天使の殺気から逃げるように視線を泳がせていると、不運にもガブリエルと目が合ってしまった。

顔を赤くしながら、俺を警戒するように腕で胸を隠していた。

俺は、あそこにダイブしたわけか……柔らかかったな……。

俺がそんな事を思った瞬間、俺の体を覆うように結界のようなものが張られた！

「——っ！ちよ、なんだ!？」

俺が突然のことに驚愕していると、ガブリエルがさらに顔を真っ赤にし、女性天使が鬼の形相で光の槍を俺に放とうとしてきていた！

ミカエルは苦笑しながら女性天使を手で制し、言ってくる。

「それは、いわゆる墮天防止装置です。本来、天使の必要以上の煩惱を関知すると展開す

るものなのですが、あなたにも発動してしまったようですね」

「ぼ、煩惱!? そんな変なこと——」

——考えてた。うん、ガブリエルの胸にダイブしたことを思い出しちまってたよ！俺が変なところで言い淀んだせいで、リアスたちからも冷たい視線を送られ、イツセーからも「なにやってんですか………」と呆れられる始末。ロセからは、

「……………」

完全に軽蔑の視線を送られている！前の黒歌との一件からこれだからな、仕方ねえか！

くそ、こういうのはイツセー担当だろうが！なんで俺がこんな事に……………！とにかく、こんな時こそ平常心、平常心だ。落ち着け、落ち着け……………。

俺が何度か深呼吸すると、ようやく境界が消えた。それを確認するとため息を吐き、視線をリアスたちに戻す。

リアスたちも息を吐くと、視線から冷たさが消える。

あー、天界に来てからろくなことがねえ。さっさと下に戻りてえな。

俺がガブリエルを視界に入れないようにしながら、再びため息を吐いていると、

「おんや、イツセーどんたちじゃないか」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。声の主のほうに目を向けると、そこにはジョー

カー・デュリオの姿があった。にんまり笑いながらこちらに向かってきている。

「デュリオ、散歩は終わったのですか？」

ミカエルの問いにデュリオも頭を下げる。

「あ、どうも、すみません。こんな時期に気分転換の時間なんていただきました……」

「こんなときだからこそ、必要な休息もあるでしょう。デュリオもクリスマスプレゼント配りを手伝ってくれるのですよね？」

「はい、それはもちろん」

デュリオも参加するのか、クリスマス企画。まあ、大勢でやれば楽に終われるか。

デュリオの登場を皮切りに、グリゼルダがミカエルに進言した。

「ミカエル様、例の件をお知らせしたほうがよいのでは？」

ミカエルは頷き、俺たちに『例の件』というものを教えてくれた。

「そうですね。関係なくもないでしょうし。実は、現在、教会の役員が襲撃を受けるという事件が発生しています」

教会の役員が襲撃。いきなりきな臭くなってきたな。

緩んでいた空気が一変、真剣なものになる。

「ヴァチカン本部の幹部だけでなく、支部の重要人物にまで死傷者が出ています。まだ詳しくは調査中なのですが、どうにも邪龍の気配も感じ取れたということ——」

「

クリフオト、か」

俺の眩きに、ミカエルも頷いた。

「ええ、警戒はしておいてください。彼らの目的がわからない以上、怠れば隙を突かれるでしょう」

アグレアスの次は天界の関係者か。奴ら、何を企んでいやがる……。

クリスマス企画に浮かれる俺たちに、戦いの気配が迫ってきていた——。

l i f e 0 3 謎の剣士

天界から帰還した俺——ロイは、リアスたちと別れ、駒王町からだいたい離れたある都市に来ていた。格好は、ロセとのデートの時と同じものだ。てか、外出するときの服があまりない。

で、なぜそんな足を伸ばしたかというと、

「ロイー遅いわよー」

「悪い悪い、色々あったんだよ。つて、おまえは知っているだろうが……」

セラとデートをするためだ。ロセとの一件の時に約束して、なかなかタイミングが取れずにこんな時期になってしまった。

セラの格好は、茅色かやいろ——明るい茶のコートを羽織って前を締め、灰色のミニスカート、足の露出を控えるように黒いストッキングを履いていた。

相変わらず、女性のおしゃれは命懸けだと思う。寒くないのだろうか……。

俺がまじまじと見ていたせいかな、セラが頬を赤くして、
「もう、じろじろ見ないでよ」

と、照れながら言うが、表情はとても嬉しそうである。

俺は苦笑しながら言う。

「セラのそういう格好を見るの、久しぶりだからな。見惚れてた」

「——ッ！」

俺の言葉に、セラは余計に赤くなる。久しぶりだからな、こういうことを言うのも。なんか、こつちも照れ臭くなってきたぞ……。

俺も若干頬を赤くしながら、一度咳払いをしてセラに訊く。

「それで、どこに行くんだ？ 予定はそっちが決めるってことだったが……」

「うふふ、大丈夫よ、私に任せなさい！」

胸を張って笑みを浮かべながらそう言うセラ。相変わらずのかわいい表情、日頃のストレスが吹っ飛ぶな。

俺が笑みを返して頷くと、セラが俺の右手を取ってくる。

「さあ、行きましよう！」

セラはそのまま俺の手を引いて駆け出す！ 相変わらず、いきなりだな！ まあ、いつものテンションで安心できるけどさ！

セラに引つ張られながら、安堵からか、無意識に笑みがこぼれた。待望のデートだ、楽しまねえとな。

——で、

「ロイ、これなんてどうかしら?」

「……………」

「こっちは?」

「……………」

セラとのデート。一発目に訪れたのは、なぜかコスプレ専門店。魔法少女的なものから、戦士的なものまで、色々ある。

セラが俺に見せてきたのは、セラがいつも着ているミルクィコスプレ服の色違いバージョンと、露出多めのミニスカサントのコスプレセットだ。

俺としては、ミニスカサント——いや、いつものミルクィつてのもありか?でもな、新鮮味に欠ける……。

セラは黙り込んでいる俺の顔を覗き込み、若干心配そうな声音で聞いてくる。

「ロイ、聞いてる?」

俺は安心させるように笑みを浮かべ、頷いてやる。

「ああ、聞いてる。ちよつと考え事だ」

「なになに、悩み事？」

「目の前の二つのどつちが恋人に似合うか、真剣に考えてる」

俺がセラが持つその二つを見比べ、あごに手をやりながら言う、セラは少し驚いた様子を見せた。

「いつもなら『どつちも似合うと思うぞ』とか言うのに、珍しいわね」

「そうか？まあ、心境の変化つてやつだな。……よし、決めた。こつちだな」

俺はミニスカサンのほうを指差した。季節的なものを考慮してみた。まあ、セラに着て欲しいってのが本音だけだな。

セラの表情がパアツと明るくなる。な、なんだ、いきなりどうした。

「さつすが、ロイ、わかってるわね☆こつちのミルクィは『持っているもの』なの☆サントラを選んでくれるなんて、私のことをよく見ている証拠ね☆」

と、セラは言ってくる。——まったく気づかなかつたぞ。季節で決めていなければ、地雷を踏み砕くところだったのか……。

セラがミルクィのものを棚に戻している隙に、俺は冷や汗を拭い、振り返ったセラに笑みを浮かべて頷いてやる。

「まあ、勘なんだけだな。おまえを見ているうちに無意識に覚えていたんだろ」

「勘でもいいのよ☆ロイが見てくれていればそれで☆」

表情を緩ませながら、俺の腕に絡んでくるセラ。とりあえず、そのミニスカサンタ、買
うなら買ってこい。

それから、セラとのデートは何の問題もなく進んでいき、公園のベンチで一休みして
いた。

先程買った缶コーヒーを飲み、日が傾き、暗くなり始めた公園から帰っていく子供た
ちを眺めながら、隣に座るセラに言う。

「悪いな。いきなり休もうなんて言っちゃまって」

「いいのよ。私もそろそろ休もうって思っていたから☆」

「ならよかった」

俺はそう返し、小さくため息を吐いた。

天界に行つて神経を尖らせ過ぎたせいか、無性に疲れていた。まあ、あとは夕食を
摂つて終わりだろう。——何事もなければ。

公園から俺たち以外のヒトがいなくなると同時に、俺とセラは表情を引き締める。

俺たちの視線の先、木の影に誰かいるのだ。ただの人間なら気にするまでもないが、その誰かから殺気が向けられているのだ。

「おまえ、何者だ？」

「……………」

俺の問いに奴は何も答えず、木の影から姿を現す。

長い黒髪の男性だ。顔立ちからして、日本人か？

俺の疑問は、口に出す前に吹き飛んだ。——奴の手に、禍々しい波動を放つ剣が握られているのだ。

俺とセラが警戒を強めていると、男の持つ剣の波動が高まっていく。

——やる気のようにだ。

俺はセラに目配せすると深く息を吐き、魔力を解き放つ。普段見えない視界右半分も見えるようになり、全身から深紅の魔力が放たれ始める。おそらく、両目がユーグリツトと戦った時のように不気味なものになっているだろう。

セラが解き放った魔力は冷気となり、彼女の足元の地面が凍らせ始める。

俺たちが準備を整えると、男が憎しみを隠そうともせず言葉を発する。

「ロイ・グレモリー……………。僕は、あなたを——『滅びの血族』であり『彼女の死』を利用したあなたを、許さない……………ッ！」

なんか、いきなりすぎてよくわからねえが、『滅びの血族』つてのは、バアルの血のことだろう。俺の母親はバアル家の悪魔だからな。だが――、

『彼女の死』……だと?』

「ロイが誰かの死を利用するなんてこと、ありえないわ!」

セラが俺の事をかばってくれるのは嬉しいが、俺が利用して死んだ誰かか、それとも、そのヒトの死を利用して俺が何かをしたのか、どっちだ?

『――あなたの隊は、駒王町に潜入しなさい』

『確か、グレモリーとバアルが管轄している町……。警備も嚴重なものの筈ですが……』

『その問題はありません。縄張りになっていた悪魔が死に、今は警備が緩んでいます』

『その悪魔とは?』

『その悪魔の名は――』

「――クレーリア・ベリアル……っ!」

俺が思い出した瞬間に声を出すと、男の表情が憤怒に染まる。

「そう、彼女だ。三大勢力の平和のため、クレーリアの死をあなたは利用した!許せるわけがないだろう!」

男が叫ぶと剣のオーラが弾け、強烈な邪気が解き放たれる!

邪気の正体――八つの頭を持つ巨大なドラゴンと思われるそれは、血涙を流しながら

ら、大きな顎を開き、無数の鋭い牙を覗かせていた。その首の一本一本が意思を持つようにうごめいている。

剣からドラゴンが生えてきやがったのか!? それにしたって、デカイ! 首だけなのに十メートルは越えているぞ!?

俺が手に西洋のものを思わせる直剣を生成、セラが氷の魔力で氷柱つららのような槍を空中に生成していた。

それを見た男は、今度はセラを睨む。

「現魔王——セラフォル・レヴィアタン。あなたもあなただ。魔王でありながら、『奴ら』を止められない。いや、『奴ら』が何をするかを察知することもできない」

今度は『奴ら』か。セラにも止められない奴となると、大王派の重鎮か? あいつらはまず好きにやって、終わってからの事後報告が多い。まだまだ悪魔もひとつになりきれないな。

俺がちりとセラに目を向けると、彼女も複雑な表情になっていた。今言われたことを自覚はしているんだろう。だが、簡単に変えられる代物ではない。難しいところだ。

「セラ、起きちまったことは仕方ねえさ。今は目の前の相手に集中しろ」

「……ええ。わかってるわ」

改めて構え直した俺たちを、男と男の剣から出現した八つのドラゴンの首が睨み付け

る。

まさに一触即発。あとはどちらから仕掛けるかという状況になった矢先、左腕が疼き始めた。

「まったく、勝手な行動をされては困るんだがね」

「「——ッ！」」

突如響いた第三者の声。だが、今の声は聞き覚えがある。

俺は声の主を睨み付け、名を叫ぶ！

「リゼヴィム！」

「やあ、ロイクくん。久しぶりだね」

銀髪の男性——リゼヴィムが、不敵に笑みながら立っていた。

俺がリゼヴィム、セラが八つ首のドラゴンと男を警戒するなか、リゼヴィムが男に目を向けてため息を吐く。

「まったく、私たちの目的が一致したから協力しているというのに、計画をご破算にするつもりか？」

計画だと？天界の役員を狙っているのにも関わっているらしいが、それも計画のうち

……？

「しかし、彼はクレーリアの——」

考えを深める俺をよそに、熱の入り始めた男の言葉をリゼヴィムは手で制し、男の横について転移魔方陣を展開し始める。

「――待ちやがれ！」

「待ちなさい！」

俺たちはそう叫びながら、同時に攻撃に移った。俺は直剣を逆手持ちになると、投げ槍のように投げつけ、セラは氷柱を撃ち放つ！

まっすぐ放たれた俺たちの攻撃は、リゼヴィムの放った散弾状の魔力弾で全て撃ち落とされた。逆に、その流れ弾が俺たちに襲いかかってくる！

「チッ！」

俺は舌打ちをしながら両手に直剣を生成、セラの盾になるために前に飛び出し、向かってくる魔力弾を全て斬り伏せる！

全てを斬り伏せ、再びリゼヴィムたちのいた場所を睨み付けるが、すでに転移を済ませたようで、いなくなっていた。

俺はため息を吐きながら魔力を抑える。視界の右半分が見えなくなるが、消耗を抑えねえとな。

周囲の安全を確認し、同じく魔力を抑えたセラに声をかける。

「無事か？ケガは、していなさそうだが……」

「大丈夫よ。いきなりすぎて困っているけど」

息を吐くセラ。まあ、色々と起こりすぎだよな。

まずは、あの男は誰だ？次に、なぜリゼヴィムは現れた？あと、なぜ俺が女性と行動すると面倒になるのか？

俺は小さくため息を吐く。

「とりあえず、戻るか。色々と報告しねえとな……」

「そうね。はあ……。せつかくのデートが……」

深いための吐くセラに、俺は苦笑しながら言う。

「気にするな、とは言えねえか。まあ、また時間を見つけてだな」

「……うう、ロイとのデートが……」

顔を俯けて、若干涙目になっているセラの頬に、俺は優しく笑みながら手をやる。

「セラ……」

「なに？」

顔を上げたセラが、それ以上何かを口にするよりも早く、その口を塞ぐ。

「ん——!?!」

もちろん、俺の口でだ。ようは、俺とセラはキスしているわけだな。

俺がゆつくりと口を離し、顔も遠ざける。セラは顔を真っ赤にして驚いていた。

俺が笑むと、セラも照れ臭そうに、嬉しそうに笑う。

「さて、今度こそ戻るか。俺はクリスマスマス企画、セラは会議に勤しむことになりそうだな」

「そうね。まったく、面倒なことになったわ」

「ああ。本当、面倒だな」

俺たちは同時にため息を吐き、その場で転移魔方陣を展開、それぞれの持ち場に戻ったのだった。

l i f e 0 4 剣士再び

俺——ロイとセラのデートが中止になった翌日。

イツセーたちがトレーニングに励んでいる頃、俺は昨日起きたことを改めてアザゼルに連絡していた（兄さんたちにも連絡済み）。

『なるほど、リゼヴィムも出てきたか……』

「ああ。あいつ、俺にどんだけ興味あんだよ、気持ち悪い」

俺が吐き捨てるのと、映像に映るアザゼルが苦笑する。

『ま、男に付きまとわれるのには慣れているだろ？』

「コカビエルのほうがまだましだ。俺一人でどうにかできるからな」

俺がそう返すと、アザゼルの表情が引き締める。

『で、その剣士の話だが——』

「ああ、あいつの剣、八つ首のドラゴンが生えたぞ」

アザゼルがあごに手をやり、しばらく考えると、答えが出たのか口を開く。

『おそらく、「ヴェノム・ブラッド・ドラゴン靈妙を喰らう狂龍」、日本的に言えば、やまたのおろち八岐大蛇つてやつだ』

「すまねえ、日本神話はさっぱりなんだ」

『……勉強しろ』

軽くボケたら、アザゼルからマジの声のツツコミが返ってきた。

俺は苦笑する。

「冗談だよ。で、どう倒せばいい?」

俺の問いにアザゼルはため息を吐き、思い出しながら言ってくる。

『そうだな。八岐大蛇やまたのおろちの毒に注意しろ。噛まれるなんて、論外もいいところだ。あと、返り血にも注意だな。血にも毒がある』

「遠距離から削ればいいわけか、了解だ。銃剣がもつかかわからねえがな」

『改良してはいるんだがな。おまえの魔力が強くなったんだろうよ。使わずに戦ったほうがいいと思うぞ?』

「だよな。結構気に入っているんだが、そろそろ限界か……」

模擬戦中にいきなり煙を吹いたり、火花散ったりと、限界が近い。もう使わないほうがいいかもしれないと考えているこの頃だ。毎回修理に出してはいるが、前よりも壊れる間隔が短くなってきている。

『ま、代案を実行中だ。リゼヴィムにも対抗しないといけないからな』

「なんだそれ。聞いてないぞ」

『すぐにわかるさ』

すぐにわかるって、何が用意されているんだ？

俺が割りと真剣に思慮していると、アザゼルが訊いてくる。

『ところで、悪魔側で色々起きてるそうだが、大丈夫なのか？』

「ああ、それか。そつちはリアスが対応してる。そういうのはあいつのほうが得意だろうからな。俺は、リアスの穴を埋めて、休日返上でクリスマス企画に参加だ」

『少し休めつて言った矢先にこれか。おまえ、大丈夫か？』

「別に、十年近く神経尖らせるよりはマシだ」

若干拗ねたように言うと、アザゼルが苦笑する。

『おまえ、昔よりもちよつとした感情も表に出すようになったよな』

「そうか？まあ、色々吹っ切れたからな」

俺が笑みながら返すと、アザゼルも『そうか』と呟くと別れの言葉を残して連絡を切った。……さて、俺も頑張りますか！

アザゼルとの連絡を終えた俺は、クリスマス企画の立案者である栗毛の男性に頭を下げて謝罪していた。

「ロイ・グレモリーだ。昨日は私用で会えず、申し訳ない」

「頭をあげてください、私の到着もいきなりでしたから。プライベートは大切ですから」
男性の言葉を受けて俺は顔をあげると、男性が挨拶を始める。

「今回のクリスマス企画の立案者——紫藤トウジです。いつもイリナがお世話になって
おります」

そう、姓で分かるが、今回の企画の立案者はイリナの父親なのだ。初めて聞いたときは驚いたが、確かに面影がある。高めのテンションも含めて……。

俺とトウジさんが挨拶を済ませると、ちようどよくイツセーたちのトレーニングも終わった様子だった。

この後俺たちは、昼飯を挟んで町に繰り出す。プレゼントを探しに行くのだ！

そんなわけで、俺、ロセ、木場、ギヤスパ、小猫は、駒王町から三つ離れたある町に来ていた（それ以外のオカ研メンバーとトウジさんは別の町に行っている）。

あくびを噛み殺していると、小猫が謝ってくる。

「ロイ先生、ごめんなさい。姉様が迷惑をおかけして……」

「いや、気にすんな。気づけなかつた俺も俺だ」

俺は笑みを返し、懐からメモ書きを取り出して内容を確認する。

「一通りは調べ終わったな。あとは衣装だ」

俺の言葉に木場が訊いてくる。

「衣装というと、前にロイさんが着ていたあれですか？」

「いや、あれは仮だ。正式な決定はギリギリになるかも……」

女性はフアッションにこだわるからな。長いこと話し合うことになるんだろう。

俺はそれを想像してため息を吐くと、ロセが服の袖を引っ張ってくる。

「ロ、ロイさんは、女性が着るサンタのコスチュームは、ズボンとスカート……どちらがいいでしょうか」

「スカートだな。ズボンもズボンでいいが、おまえに着てもらうんだったら、スカートがいい」

俺が笑みながら即答で返すと、ロセの顔が真っ赤になって煙を吹き始めた。町中で気絶されたら敵わないので、耳元で手を叩いて無理やり意識を戻してもらう。

ロセはハツとしながら、何かをぶつぶつ呟き始める。

「そ、そうですか。……足、細く見えるかしら……今から準備しても間に合うわけ……魔法で誤魔化す？ けれど——」

すごく、考えてくれているようだ。彼氏としては嬉しいのだが……。

俺はちらりと木場たちのほうに目を向ける。見れば、三人とも微笑ましいものを見て

いるような目で見てきていた……!

俺はそれにもため息を吐き、いつの間にか目の前にあった目的の建物に視線を向ける。

「さて、仕事するか」

『はい!』

「うーん、スカート……スカート……? なかなか難しいですね……」

建物の前で止まる俺たちだが、ロセだけぶつぶつ呟きながらそのまま進んでいってしまふ。

俺は再びため息を吐き、ロセを呼ぶ。

「ロセ、どこに行くつもりだ?」

「ひゃい! え!? あ、今いきます!」

慌てながら振り返り、こちらに戻ってくるロセ。しっかりしてもらわないと、こっちも大変なんだがな……。

衣装選びを始めて数分。

「……ギャーくん、次はこれ」

「こゝ、小猫ちゃん？」

「……その次はこつち」

「き、聞いている？」

小猫がギヤスパーを着せ替え人形にしていた。サンタだけでなく、トナカイのようなものまで持ち出していた。

この際、トナカイも採用するべきか？サンタだけじゃ飾り気がないから、何人かはそれもあか？」

俺があごに手をやりながら真剣に悩み始めると、視線の先で悩む口せに目が止まった。

スカートがいいとは言ったが、今度はその丈で悩んでいるようだ。ここは衣装を考えて欲しいんだが、あいつも大変なんだろう。

真剣に考えてくれているのは木場くらいだろうか。その木場も、かなり悩んでいるようだ。ヒトの服を考えるとって、存外大変だよな。

俺がため息を吐くと、俺たちに一齐にメールが届く。各々が確認するなか、俺も手に取っていた衣装を棚に戻して見てみると、

『近辺で不審なオーラを検知。座標を送る』

とだけ書かれていた。座標は、イツセーたちが行った町のほうだ……。

俺たちは領きあい、店を飛び出すと人目につかない路地裏に駆け込む。

俺が義手を戦闘用のものに変えるとロセが転移魔方陣を展開、その輝きが強くなつていき、一気に弾けた――。

――光が止み、視界が回復すると、

「ロイ・グレモリー………ツ！」

「――ツ！またおまえか！」

先日遭遇した男（既に八岐大蛇やまたのおろちを出現させている）と、奴と対峙するイツセーたち、そして、苦しげに肩で息をしているトウジさんの姿が視界に映る。

トウジさんの肩に傷。まさか噛まれたのか………？

俺は一気に魔力を解放、両目で剣士を睨み付ける。だが、剣士のやる気はなしのよう
で、後方に飛び退いた。

「局長！必ず僕はあなたと天界、バアル家、そしてロイ・グレモリー、あなたに復讐しま
す！絶対に許すわけにはいかない！絶対にだツ！」

俺が銃剣を取り出して右手に握り、高速で飛び出した瞬間、大蛇おろちの首が殺到してくる

！
牙と血に注意つてことは、下手に斬れねえんだよな！撃つにしても銃剣がもつかわからねえ！だが——！

俺は舌打ちをしながらも引き金を引き、深紅の弾丸を吐き出させる！だが、銃剣から嫌な音と共に火花が散った！いきなり限界か……！

放たれた弾丸は大蛇おろちの肉を抉り、小さな風穴を開ける。が、その穴もすぐに埋まつてしまう。

邪龍だからか、あの程度ではダメージにもならないようだ。やはり首を吹き飛ばすか……八つもあるが、全部を同時に潰せば問題ねえだろう！

俺が魔力を銃剣に込め、引き金を引こうとした瞬間、銃剣が爆ぜた！

「——ッ——」

とつさに左腕で顔をかばう。義手だから痛みはないが、破片が大量に突き刺さった。おかげさまで、義手からもバチバチと火花が……。

俺が舌打ちをすると、男が転移の光に包まれ始める。

転移する直前、男がイツセーたちを目を向けながら言う。

「——キミたちがいる楽園という名の駒王町、多くの犠牲の上に成り立った世界だ。よく覚えておくといい」

男がそう言い残すと、奴は転移の光に消えていく。……あの男、何者だ？

l i f e 0 5 語られる真実

俺——ロイは襲撃を受けたイツセーたちを連れ、トウジさんの治療のために教会側の医療施設に転移した。

外傷自体はアーシアの能力で治せたが、そこから入った毒で苦しんでいるとのこと。イリナは、父親を守れなかったことで心に大ダメージを受けた様子で、椅子に座つてうつむいていた。

俺があっちについていれば、トウジさんが重症にならずに済んだかもしれない。だが、あの野郎がトウジさんを狙うとは、計算外だった。狙うなら俺だろうとばかり……。俺がそんな思考を巡らせていると、俺たちのもとに二つの影が近づいてくる。——リラスとアザゼルだ。

「ごめんなさい、大事なときにいなくて」

「事情は聞いた。クリフォトの対処と紫藤局長の解毒について、教会側と協議してくる」
そう言うのと、アザゼルは足早に廊下の奥へと消えていった。

リラスにあそこで何があったのか改めて説明していると、病室からグリゼルダと医師が出てきた。全員の視線が集中するなか、医師はその場で一礼して離れていった。

グリゼルダが言う。

「……局長の体には、邪龍から受けたと思われる毒が入り込んでいます」

それを受けて、イツセーの左腕に籠手が現れた。ドライグが俺たちにも聞こえるように、宝玉が点滅させながら喋り始める。

『八岐大蛇やまたのおろちの毒か。厄介だな。サマエルの毒ほどじゃないが、凶悪だ。放っておけば数日せずに魂まで汚染される。解毒ができるのも限られた術者か、施設のみだろう』

ドライグの言葉にグリゼルダが頷く。

「はい。ですので、局長を天界にお連れするつもりです。天界の解毒法ならば、治すこともできるでしょう。——ただ」

「ただ？」

聞き返したイツセーに、グリゼルダが病室の扉を開ける。

「その前に局長からお話があるそうです」

俺たちは顔を見合せ、入室していく——。

「パパッ！」

ベッドに横たわるトウジさんに、イリナが飛び付いた。

「…………ごめんなさい。私、ミカエル様選ばれたのに……天使になれたのに、パパを守れなかった……」

涙を流しながら懺悔するイリナを、トウジさんは愛しそうに抱き締めた。

「ハハハ、イリナちゃんが悪くないよ。それに死んじやうみたいなの霧囲気はやめておくれ。パパはこのあと天界で治療を受けるのだから、大丈夫大丈夫」

イリナを励ますように言うが、トウジさんの顔色は悪い。脂汗が顔中に浮かびあがり、皮膚が黒く変色している部分も見られる。腕に繋いである点滴から毒の進行を抑えているそうだが、効果は期待できなさそうだ。

トウジさんは俺たちを見渡しあと、重い口を開く。

「…………天界へ行く前に少しだけお話ししたいことがあります。先ほど襲撃してきた彼のことです」

大蛇おろちだけでなく、あの男の使っている剣は、『天叢雲剣あまのむらぐもつつぎ』と呼ばれる日本の聖剣らしい。数年前に折られたその剣をクリフトに奪われ、あの男の手に渡ったようだ。

先ほど聞いた情報を確認していると、トウジさんが話し始める。

「…………彼は八重垣正臣やえがきまさとむね。かつて私の部下だった男です」

「…………『だった』。つまり、あいつは…………」

トウジさんは俺の言葉に頷き、続ける。

「彼は亡くなっています。……教会側が、彼を肅清したのですから」

『——ッ!』

突然の事実にはリアスたちは驚愕していた。あいつ、死んでいるのか……。聖杯で甦つてまで復讐を目指すとは、クレーリアとはどういう関係だったんだ……。?

トウジさんは続ける。

「……教会の役職にある者たちが襲われているのは、ご存じですね?」

俺たちは頷く。前にミカエルから言われたことだ。

「彼がやったのでしょうか。彼にはそれをおこなうだけの動機がある。そして、殺された者たちは、かつての私の同僚ばかりです」

次々と告げられる真実に、全員が言葉を失っていた。

トウジさんの同僚が殺害され、トウジさん自身も狙われた。そして――、

「バアルの関係者も襲われている、と」

俺の呟きに、イツセーが驚愕しながらも訊いてくる。

「そ、それって、サイラオーグさんのところですね!? サイラオーグさんは大丈夫なんですか!?!」

「落ち着けよ。バアル家そのものには被害なしだ。バアル家ってよりは、その取り巻き

の政治家が襲撃を受けているって感じだな」

俺の言葉を受けた木場が、あごに手をやりながら口を開く。

「教会側と悪魔側、両陣営に被害が出ている……」

「ついでに、俺も襲われたんだよな。昨日……」

『え?』

俺が苦笑しながら言うと、部屋中の視線が集中する。それを無視して、トウジさんに訊く。

「クレéria・ベリアル。この名前に覚えはあるか? 駒王町の本当の前任者の名前だ」

俺の発言に反応したのは、リアスだった。

「お兄様、それは……一体どういことですか? 私の前任者はバアル家の縁者だと——」

「何事にも裏があるもんだ。真実を隠すために、体のいい嘘で塗り固められる。で、どうなんだ?」

視線をトウジさんに戻して再び訊くと、トウジさんは大粒の涙を流しながら、悲痛な表情で頷いた。

「八重垣くんと、クレéria・ベリアルは……お互いに惹かれあっていたのです。私たちは、彼らを武力で引き裂いた……ッ。私たちは、彼に殺されても何も文句は言えないで

しよう……ッ！」

嗚咽を漏らし始めるトウジさん。このヒトが抱えている真実は、かなり重いものになりそうだが……。

『「彼女の死」を利用したあなたを、許さない……ッ！』

八重垣の言葉の意味、そういうことか。

俺は、あいつ自身とあいつの『恋人』の死を利用して、リアスたちを守っていた……。

トウジさんが天界に送られたことを確認した俺たちは、バアルからの使者が来たというグレモリー城に来ていた。

ここにいるのは、リアス眷属一同とイリナ、俺だ。レイヴェルには兵藤宅に残ってもらった。少しばかり、バアルとグレモリーの政治的な話になりそうだからだ。

リアスの機嫌はあまり良くない。クレーリア・ベリアルのお話を一切知らされず、嘘だらけの情報で駒王町に送り込まれていたのだ。不機嫌になっても、無理ないだろう。グレモリー城の廊下を進んでいき、ついに応接室の前にたどり着く。

俺がドアをノックし、「父さん、全員到着しました」と告げると、中から『入りなさい』と返ってきた。

ドアを開け、一礼してから中に入り、リアルたちも俺に続く。

応接室は、装飾の施された見事なソファアールとテーブル、暖炉が目に入る。

「よく来てくれた」

父さんが立ち上がり、迎え入れてくれた。ソファアールに座っているのは、初老の男性だ。貴族服を着ている。紫色の瞳と黒い髪というバアル特有の特徴をしているから、バアル家の血筋のヒトだな。威厳溢れる雰囲気からして、かなり上の立場のヒトなんだろう。

男性が口元を少しだけ笑ませる。

「ごきげんよう、ロイ殿、リアス姫」

父さんが俺とリアスに言ってくる。

「二人とも、ご挨拶なさい。このお方はバアル家——初代当主様であらせられる」

「——ッ!？」

横のリアスは驚愕を隠しきれていなかった。かなり上とかじゃなく、バアルという悪魔の始まりのヒトじゃねえかよ……。

初代様は俺たちに改めて言う。

「はじめまして、ロイ殿、リアス姫。私の名はゼクラム・バアル。まあ、私のことは聖書

や関連書物を見ていただければ十分だろう」

「……はじめまして、お話だけはどうかがっております」

横で萎縮しているリアスに変わり、俺が挨拶を返した。眷属や部下じゃなく、初代様が出てくるとは、今回の話はかなり重要なことなんだろう。

「グリモリー眷属の皆々。活躍は私の耳にも届いている。我が家のサイラオーグともよくしてくれているそうで……礼を述べよう」

ゼクラム様はそう言うのと、すぐに本題に入った。

「訊きに来たこととは、あの町にいた……貴殿の前任者について、でよいな？」

リアスが息を整えて肯定する。

「はい。敵の……クリフトに手を貸す者の一人が『天界に、そしてバアル家に復讐する』——と」

ついでに俺にもな。今は面倒だから言わないでおこう。

ゼクラム様はそれを聞き、目を細めた。

「ふむ、どこから話したら良いものか……」

イリナが一步前に出てゼクラム様に言う。

「お願いします。聞かせてください。私のパパ……父も関与していたと聞きました。いま、その父はテロリストに命を狙われております。あの町で起こったことをお聞かせく

「ださいー！」

ゼクラム様はイリナが天使だと気づいたようだ。

「……貴殿は天使か。関与というと、当時の教会から派遣されたエージェント。もしや、紫藤という人間の？」

「はい、私は紫藤イリナ。紫藤トウジは私の父です」

それを聞いたゼクラム様は大きく息を吐いた。

「……これも縁か。まったく、サイラオーグの世代になってから、いろいろなことが噴出してばかりだ。……前もって訊こう。あの土地と我らの関係についてはご存じかな？」

リアスが頷いた。

「はい、今はグレモリーの統括ですが、以前——古くはバアル家とグレモリー家の共同地域と聞いております」

俺はその頃から任務にいそしんでおりました。

「貴殿たちが利用しているものの大半も古くから我らが関わっていたのだ。主にグレモリーが工面していたのだがね。駒王学園もしかり。だが、一時だけあの地を貴族の息子、子女の経験のために短期間貸し与えたこともあったのだ。そのなかにあの娘がいた」

つまり、あの娘つてのが、クレéria・ベリアルつてことか。しかもクレériaは、

デイハウザー・ベリアルに従姉妹だという。

ゼクラム様は続ける。

「クレリアの運営は順調であった。どこにでもある上級悪魔が取り仕切る町の様相を見せていたのだ。ところが、偶然が重なり、クレリアは人間の男と通じてしまった、いや、それ自体は咎めることではない。悪魔が人間と関係を持つことなど、古来、そう珍しいことでもないからだ」

所詮、我々よりも短命の存在。永生なる悪魔にとつて、一時の戯れとして付き合うには十分な素材だ。とゼクラム様は付け加えた。

すると、ゼクラム様の目元が険しくなる。

「ただし、相手が教会側の人間ならば、話は別となる」

ゼクラム様はイリナに目を向ける。

「いまでこそ、この場に天使が同席するということが許されているが、当時では考えられぬことだ。聖職者を墮とすならいいだろう。だが真剣に愛し合うなど、禁忌とも言えた。まったく、今年に入ってから価値観が覆るようなことばかり起こるものだな」

ゼクラム様は苦笑いをしているが、イリナが問う。

「……ベリアル的女性と、教会の戦士は……」

「あつてはならぬことだ。我々はそれぞれの立場から説得を試みた。……が、彼らの間

柄はすでに深いところまで行っていた。このままでは、特例を許してしまうことになる。強引に引き離すことが決定したのだよ。皮肉にも、教会側も同様の決定を下したようだった。彼らも業の深い存在だとは思わないかね」

俺の任務中にそんな事があったのか。俺が任務についていなくても、どうにもならないことだな。

リアスが訊く。

「二人は……亡くなった。……肅清したのですね？」

ゼクラム様は淡々と語る。

「結果的にそうなってしまうたのだよ。我らは最後まで説得を試みた。……が、業を煮やした教会側が……いや、我らのほうが先に手を出したのかもしれないが、お互いがお互いの不備を正した」

「結果的にあの町を管轄する悪魔がいなくなり、旧魔王派が潜り込む隙ができてしまった、と。……知らなかった」

「おそらく、どの勢力のトップにも伝わっていなかったのだろう」

俺の言葉にゼクラム様が返してくれる。

何とも言えないな。それがあつたから俺は駒王町に入り込めて、コカビエルを倒してリアスたちを助けられたわけだ。

父さんがあごに手をやって静かにうなつた。

「初めてうかがうお話ですな。まさか、リアスの縄張りにそのような事案があつたとは……。リアスの代になるまであの地をバアル側にお任せしていた面もありましたが、我らも肩書きの上では共に治めていた身です。一言いただきたいところでしたな」

父さんは不満そうな声音になっているが、ゼクラム様は気にせず続ける。

「過去を捏造し、あの地をリアス姫に紹介したことは謝罪しよう。しかし、そのようなことが起こつた地だ、早めに後任者を決めねばいらぬ邪推が飛び交うことになる」

「その後任者には有望な若手が適任だった。………ということですね。確かにリアスなら、バアルの血を宿す、魔王ルシファアの妹。不名誉なことが起きた地を上書きするには、十分な逸材と踏まれたと？」

父さんの言葉にゼクラム様は薄く笑む。

「たとえ、今回のように明るみになろうとも、有望な若手であるならば、その前に実績を積んで十分に清算できるだろう。………と思つたのだが、有望すぎて、あの地は三大勢力の和平の場所となつてしまった。上書きとしても、過分すぎるほどであろう」

確かに、ゼクラム様の言う通りだ。リアスはその町で現在進行形で実績を残している。今、この話が出てきても『今さら』で片付けられてしまうだろう。

リアスは首を横に振り、できるだけ怒りを抑えるように言う。

「当時の政治が絡んだのでしようから、それについて私は特に何もありませんわ。けれど、どうして——」

「どうして捏造したのか？ グレモリー卿を騙してまで——と、そういうことだろうか？」
「……………」

言いたいことを先に言われ、リアスは不満げに口を閉ざす。

ゼクラム様は続ける。

「サーゼクス殿には話した。伝わっていないかつたとしたら、それは彼の愛情だ。それは否定できることではあるまい。いらぬ情報、気苦労を妹にも、弟にもかけたくはなかった。そうは思えないかね？」

確かにあの任務のタイミングで話されてたら、確実に動揺なりしてバレることもあったかもしれない。

知らないところで兄さんも戦っていたんだな。

「ですが、それが今回の被害をもたらしてしまった。そうは考えられません。前もって知らされていれば、一人や二人なら助けられたかもしれない」

俺は若干の怒気を込めて言ったが、ゼクラム様は笑うだけだった。

「ロイ殿、キミはまだまだ若い。私のところのサイラオーグといい、リゼヴィムの坊っちゃんといい、まるで人間のようだ。話は聞いている。キミも悪魔は悪であるべきと

思っているのだろうか？」

「俺は……善悪両方あつて当然と思うだけですよ。ただ……俺自身は悪よりかもしれませんが……」

俺の言葉を聞いてリアスたちは何とも言えない表情になっていたが、ゼクラム様だけは鋭い眼光を放ち、そして言った。

「貴殿たちもよく心しておいてもらいたい。真の悪魔とは、古くから伝わる上級悪魔の血縁者を指す。それ以外は眷属——下僕であり、本当の悪魔ではない。邪悪であるにしろ、この貴族社会を未来永劫存続させることが、悪魔のすべきことだ」

これがこのヒトなりの悪魔の意味か……。邪悪であるにしろないにしろつてのは俺の意見と同じだが、それ以外のところは何とも言えないな。

ゼクラム様は息を吐き、立ち上がった。

「ふむ、年甲斐もなく話し込んでしまった。私もまだ若いのかもしれんな」

ゼクラム様は苦笑いすると、こう述べた。

「今回はキミたち、D×Dに任せよう。バアル側の動きをうかがっている者がいそうなのでね。下手に動くのは悪手と判断した」

警戒してるんだな。まあ、ゼクラム様もクリフォートのターゲットになっているかもしれない。

ゼクラム様は言う。

「あの町のことを黙っていて、申し訳なかった。――では、私はおいとまさせていただきますか」

「ゼクラム様、お送り致しましょう」

父さんが手をやって差し出すが、ゼクラム様は「かまわんよ」と断っていた。

ゼクラム様は部屋を出る直前に何かを思い出したように言った。

「アグレアスは何としても奪取したほうがいい。赤龍帝殿が上級悪魔を目指しているのなら、なおさらだ」

ゼクラム様はそう言うのと部屋を出ていった。

ゼクラム様が退室して、応接室にはなんとも言えない空気が流れていた。

俺は緊張を解すように息を吐き、口を開く。

「長く生きた悪魔は無気力になりやすくなるが、あのヒトはそれを感じられなかったな。悪魔とはうんぬんは抜きにして、俺もあんな感じに年をとりたいねえ」

周りの緊張を解すために軽い感じに言うのと、ロセが睨んできていた。さっきの俺は悪よりつてのが引つ掛かっているのかもな。

俺が苦笑していると、リアスが呟く。

「……大王がおこなったことは、大王の血を継ぐ者で決着をつける。私があのに送ら

れたのは、そういうことなのでしょうね」

「だったら、俺も頑張らねえとな。俺もゼクラム様の子孫——『滅びを継ぐ者』なんだから……」。

l i f e 0 6 託された剣

ゼクラム様から話を聞いた俺たちは、今後のことをざつくりと話し合った。話し合いの結果、とりあえず、調べるのは目の前の脅威を退けてからという方向にまとまった。

そして、ゼクラム様の話を踏まえて、改めてトウジさんから話を聞きたいということで再び天界に訪れていた。

第一天の医療施設は、近代的なものもありながら、どこか幻想的であり、一言で言えば不思議な場所だった。

トウジさんの病室に通された俺たち。昨日はかなり辛そうだったが、かなり楽になったようで、顔色もいい。

俺たちがゼクラム様からの話を伝えると、トウジさんは上半身を起こして話し始めた。

「……我々は最後まで彼を説得しました。当時では……いや、いまでも根強いとは思いますが、悪魔と信徒の恋愛は許さるものではありませんでした……」

「加えて、相手は『ベリアル』。下手をすれば、魔王クラスのデイハウザー・ベリアルが出てくる。そうなれば、再び戦争になるかもしれない。……そう思ったわけか」

俺が確認するように訊くと、トウジさんは頷く。

「そんな時に、バアル派の悪魔が接触してきたのです」

そして、二人とも殺されたわけか……。なんとも、和平前の三大勢力らしい出来事だな。昔は、何でもありだった……。

俺が瞑目してため息を吐くと、リアスが言う。

「過去の出来事は……当時の両陣営の事情があつたとはいえ、悲しい出来事です。だからといって、クリフォートの力を借りてテロ活動をしている以上、捨て置くわけにはいきません。——止めます。どんな結果になろうとも、いま止めないと悲劇と憎悪は増えていくだけですから」

リアスの覚悟に、俺も頷く。

「負の連鎖は、もう懲り懲りだ。俺たちで止める。たとえば、またあいつを殺すことになつても……」

俺たちの兄弟の言葉にイツセーたちも頷いた。

イリナがトウジさんに言う。

「私にも、パパの辛さはわかるよ。私も戦士だから……。戦士だけど、パパの家族だもん。パパが罪悪感を抱いていたとしても、パパを守って見せるから」

俺たちの覚悟を、立派なことを言ってみせたイリナの覚悟を受け、トウジさんは頬を

伝う涙を拭い、イリナに告げる。

「実はね、マイエンジェル。パパは、クリスマス企画だけのために、来日したわけじゃないんだ。渡したいものがあつたから、来たんだ」

マイエンジェルって呼び方が気になるが、それはいい。トウジさんはベッドの横に置いてあつた大きめのケースを取り出した。

開けるように促されたイリナがそつとケースを開けると――。

「これは――」

中身を手取るイリナ。ケースの中身は、静かに聖なるオーラを放つ、一振りの剣だつた。

トウジさんが言う。

「デュランダルを持ち主だつたローラン。そのローランの親友であり、幼馴染みであつたオリヴィエの持っていた剣――オートクレール」

オートクレール、か。デュランダル使いの親友の剣とは、イリナにぴったりだな。

トウジさんは続ける。

「真に清き者以外は触れられないとされた剣だ。斬つた者の心すら洗い流してしまふとされる。調べた結果、イリナちゃんが一番適性が高いことがわかつた。天使になつたことがそれを後押ししたと言われているけど、デュランダル使いのゼノヴィアさんの相棒

を長く務めたことも作用しているとも言っていたよ」

そう言われ、お互いに見つめ合うイリナとゼノヴィア。イリナが持てるってことは、優れた適性があるってことなんだろう。

トウジさんが言う。

「……イリナ。これで、八重垣やえがきくんを止めてくれ」

オートクレールを受け取り、力強い眼で頷くイリナ。

「パパ……ありがとう！私、あのヒトを止めるよー」

イリナの言葉を受け、ようやく笑みを浮かべるトウジさん。

その後、いくつかのやり取りをしたあと、見舞いを終了して退室していく。

不意に部屋を出ようとしていたイツセーが呼び止められた。

「……申し訳ないのだけど、イツセーくんだけ残ってもらえないだろうか。話したいことがあるんだ」

それを告げられたイツセーはリアスに視線を送り、リアルはそれに頷く。

そんなわけで、イツセーを残して退室すると、こちらに近づいてくる男性天使が一人。

「ロイ・グレモリー様、時間をよろしいでしょうか」

俺に用があるだど？リンチとかじゃ、ないよな……？

嫌な汗を流しながらリアスとロセに目配せすると、二人とも若干不安そうに頷く。

「……ああ、大丈夫だ」

俺も不安を感じながらも頷いた。

「では、第五天に向かいます。ついてきてください」

「わかった。そんじゃ、行ってくる」

「お兄様、お気をつけて……」

「ロイさん、気をつけてくださいいね……」

変に不安を余計に煽ってくる二人。たぶん、大丈夫だよな？

そんなわけで、第五天に到着。案内の男性天使に先導され、近代的な建物に入り、そのままその待合室に通された。

埃一つない、綺麗な部屋だ。中央には長机と、それを挟むように人間界にもありそうなソファアークが二つ置かれている。

「こちらでお待ちください」

男性天使はそう言うと、足早に部屋から出ていった。

待っている間、暇で仕方ないので部屋の中を歩き回っていると、ドアが開けられた。

全開ではなく、中を覗くときのようにほんの少しだけだ。

俺がじつとそのドアを見てみると、少女と思われる声がドアの向こうから聞こえてきた。

『ガ、ガブリエル様、が、がん……頑張ってください……。こ、これもミカエル様からのご指示です……』

『け、けれど、ミラナ、彼とは——』

駄目だ、これ以上は聞き取れない。だが、あのドアの向こうにはガブリエルがいるよ。うだな。帰りたくなってきた……。

俺はため息を吐きながらソファーに腰掛け、ドアの向こうにいる二人に声をかけた。

「入ってきたらどうだ？そこにいられたんじゃ気になって仕方ねえ」

反応なし。むしろ完全に黙りこんだのか、向こうが静かになった。

俺はため息を吐き、懐からタバコを取り出した。久しぶりに——。

「天界は全面禁煙です！」

一服しようとしたら、顔を真っ赤にしたガブリエルが怒鳴りながら入ってきた。ガブリエルに続き、緊張した様子の見慣れぬ女性天使も入ってくる。

見慣れぬ女性天使のほうは、黒いシスター服を着ており、灰色^{アツ}がかつた^{シユ}ブロンドの髪がベールから漏れてチラチラ見えている。顔を見た限り、イツセーたちと同じぐらいの

年に思える。

俺は再びため息を吐き、タバコをしまうとガブリエルに言う。

「……で、俺に用つてのは？俺としては、クリスマス企画をもつと詰めていききたいんだが」

わざとらしく不機嫌そうに言うと、二人は同時にビクツと体を強張らせるが、固い表情のまま長机を挟んで向かい側にあるソファーに腰掛けた。

ガブリエルが言う。

「た、単刀直入に言いますと、あなたに『あるもの』をお渡しします」

「単刀直入って言っておきながら、それを言わないって、どうなんだ？」

「……ええと、それはあ……………」

俺の返しに、ガブリエルは言い淀むと、横に座る女性天使に助けを求めるように視線を送る。

女性天使に訊く。

「ところで、おまえは？見覚えがないんだが……」

女性天使は表情を強張らせ、顔を若干俯けながら自己紹介を始めた。

「……わ、私はミラナ・シャタロヴァ……ガブリエル様の『A』^{エース}をしております……」

ほうほう、ガブリエルの『御使^{ブレイブ・セイント}い』ってことか。そういえば美人揃いだって、聞い

たことがある気がした。

「俺はロイ・グレモリーだ。つて、知ってるか。ガブリエルの『A』^{エイズ}だもんな」
「……………うう……………はい……………」

顔を赤くしながら頷くミラナ。あの出来事は、少し刺激が強すぎるか？

俺がそんな事を思っていると、ガブリエルが俺と視線を合わさないように努めながら話を戻す。

「あ、あなたにお渡しするもの、それはこの建物にあります。い、今から、そ、それを確認に向かいます……………」

ガブリエルがそう言うと、彼女とミラナは立ち上がり、足早にドアのほうへ。俺もそれに続いて立ち上がり、二人に続く。

待合室を出て長い廊下を進むなか、俺はガブリエルに問う。

「それで、俺に渡したいものってなんだ？」
「あなたにお渡しするもの、それは——」

若干落ち着いた様子のガブリエルが言いかけると、両開きの扉の前に到着した。横でミラナがデイスプレイを操作すると、両開きの扉が開いていく。

扉が開いた先は、大きめの空間だった。空間の真ん中には、攻撃的なオーラを放つ白銀の刀身の大剣が浮いている。その周りにいる研究員と思われる天使たちは、各々話し

たり、書類や機材とにらめっこしたりしていた。

俺が部屋を見渡していると、ガブリエルが剣を手で示しながら言う。

「――円卓の騎士、ランスロット卿が振った聖剣『アロンダイト』です」

――ッ！

ア、アロンダイト!?!円卓最強と言われたランスロットの剣だ?!?それを、俺なんかに渡すつてののか!?

驚愕しながらアロンダイトに目を向けるが、同時にある話を思い出す。

「聖剣って言ったが、魔剣に堕ちていなかったか?ガウエインの弟を斬ったとかなんとかで」

俺が訊くと、ガブリエルは頷く。

「その通りです。魔剣となつてしまったアロンダイトを回収、その危険性から今まで封印していました。しかし、木場裕斗様が提供してくださった聖魔剣、それを解析すること、魔剣となつてしまったアロンダイトを元の聖剣に戻すことに成功しました」

木場の聖魔剣が、こんなところにも生かされているとはな。量産型とかもあつたし、これからも色々とできるんだらうな。

俺が感心しながらアロンダイトに近づいていく。周りを円柱状の結界で囲まれているらしく、手で触れることはできない。

結界に手を添えながらアロンドイトを眺める俺に、ガブリエルが並ぶ。

「対リゼヴィム・リヴァン・ルシファア用に、この剣をあなたにお渡しします。その前に

――」

ガブリエルがミラナに目配せすると、ミラナが天界式の魔方陣を展開した。その周りを研究員が固めていく。

「あなたのオーラと、アロンドイトのオーラを同調させます。あの陣に入ってください」
「わかった」

俺が横のガブリエルに目を向け、笑みを浮かべると、ガブリエルは顔を赤くしながら顔を背ける。

俺は小さく息を吐き、その陣の中に入る。同時に研究員とミラナが操作を始めると、陣が輝き始めた。それに合わせるようにアロンドイトを囲む結界も輝き始める。

自分の中に違う何かの流れ込んでくる、気持ち悪い嫌な感覚に襲われるが、同調できるように集中していく。

周りでは研究員が忙しく動き回ってくれているが、手を借りっぱなしじゃ悪いよな。

俺は瞑目し、自分でもオーラを合わせるようにしていく。少しずつオーラが同調していき、気持ち悪さが無くなってきた。

嫌な感覚がなくなった矢先、周囲から歓声があがる。ゆっくりと目を開け、アロンダ

イトのほうに視線を向ける。

アロンダイトから、俺と似ているオーラを感じ取れた。「似ている」と言うのは、俺のオーラと聖なるオーラが混ざっているからだ。攻撃的なオーラは、ある程度落ち着いているように思える。

俺は周囲に確認するように視線を送る。横の研究員たちとミラナはホツと息を吐いていた。

ガブリエルが言う。

「これで、アロンダイトを振れるはずです。手に取ってみてください」

「了解」

結界が消え、触れられるようになったアロンダイトに近づいていき、手を伸ばす。

アロンダイトの柄をゆっくりと握り、感覚を確かめる。

見た目同様にずっしりとした重さがあるが、これぐらいなら問題なく振り回せるだろう。

俺はそれを確認しながら、ガブリエルに笑みを送る。

「ありがとうな。これなら、いけそうだ」

「……は、はい」

先ほどの落ち着いた様子から一変、再び顔が真っ赤になっていた。

再びため息を吐きながらアロンドイトを眺め、若干魔力を送ってみる。曇りのない白銀の刀身から、深紅の滅びの魔力と、攻撃的な聖なるオーラが入り交じった不思議なオーラが放たれる。

「聖剣つてよりは、聖魔剣だな。まあ、木場のやつほど綺麗に両立しているわけじゃないが……」

俺の一言に、男性研究員が返してくる。

「あなた専用の剣です。オーラと同調させたので、あなたの『滅びの魔力』にも問題なく耐えられるはずですよ」

「そんじゃ、早速纏わせて——」

一気に魔力を送って刀身を深紅の魔力で包み込み、すぐさま魔力を送りこむのを止め、元の状態に戻す。

「おお……！傷一つない。流石、聖剣だな」

そんな事を言う俺の視線の先には、傷一つない聖なるオーラのみを放つアロンドイトの姿がある。魔力を送れば、滅びの一撃を放てるが、無しでも聖なるオーラだけで攻撃できるんだな。

「さてと、貰うものを貰ったし、リアスたちの所に——」

俺がそう言いかけた瞬間、突然の揺れが俺たちを襲う！

空の上で地震は起こらねえだろうから、どっかで事故でも起きたのか!?

研究人员たちとミラナ、ガブリエルも仰天しながらも揺れに耐えていた。あいづらも想定外つてことだよな!

揺れが治まるよりも早く、部屋の壁に警戒を知らせる赤い天界文字が点滅し始めた! 「いきなりどうした!?!」

俺が怒鳴ると同時に、部屋に警備の天使が駆け込んできた。顔色が悪い。何かあったようだ。

「ガブリエル様、大変です!」

「何事ですか!」

凛々しい戦士の顔になったガブリエルが訊くと、警備の天使が報告する。

「……邪龍が、クリフォトが天界を攻めてまいりました……ッ!」

その報告に、部屋にいた天使たちの表情が青ざめる。

クリフォトの毒牙が、ついに天界にまで達してしまった――。

l i f e 0 7 天界防衛戦開始

第五天、研究施設の一室に、義手を戦闘用のものに変え、ついでにアロンダイトを背負った俺——ロイと、指揮として残ったガブリエル。そしてミラナを始めとした『プレイブ・セント御使い』たちが集合し、台を囲んでいた。

立体映像が中央の台に映し出されている。

どの映像も、邪龍が暴れまわっているものだ。第二天から第四天が攻め込まれている形のように、天使たちが必死に応戦していた。

「敵は第三天から侵入したようです！」

天使の一人がそう報告をくれた。同時に映像が切り替わり、第三天——天国の空中に浮くアグレアスが映し出された。そこから邪龍が湧き出ているようだ。

さらに映像が切り替わり、見覚えのある奴らが映し出される。

「……ラードウン、ヴァルブルガ、クロウ・クルワツハ。また面倒な奴らが来てやがるな……」

俺が嘆息気味に漏らす。ヴァルブルガはどうかなるが、ラードウンとクロウ・クルワツハは、なかなか苦戦するだろう。実際に、二体と一人に天使たちは苦戦を強いられ

ていた。

だが、奴らはどうやって天界に入った？天界の結界を突破するにしても、その段階で気づくはずだ。まさか、天使に裏切り者が……？

俺があごに手をやりながら考えこんでいると、何かを操作していた天使が声を出す。「第一天の司令室と繋がりました！映像に出します！」

そう言うなり、台からテレビ画面のように映像が映し出される。

『こちらは第一天です！そちらはご無事ですか?!』

向こうの天使は少々慌てているようだが、映像を見る限りあちらは大丈夫そうだな。俺の横にいたガブリエルが訊く。

「こちらは大丈夫です。状況は把握できていますが、クリフォトは一体どこから……」ガブリエルが俺たち共通の疑問を口にする、また別の映像が映し出される。

『——冥府サイドだろうか』

現在地上にいるアザゼルからだ。連絡がくるだけ、アウロスの時よりはマシだな。俺が訊く。

「そつちはどうだ？上がって来られるか？」

アザゼルが首を横に振る。

『ダメだな。天界への入り口が開けられない。増援は送れそうにない』

ダメか。増援は望めないが、天界の戦力は十分だろう。ラードウンだのクロウ・クルワツハだの、相手が悪いような気もするがな。

「原因はわかるか」

俺が問うと、再び映像が映し出され、今度はミカエルが顔を出す。

『申し訳ありませんが、調査中なのですが……今は第七天の障壁を補強を優先しています』

「まあ、天界の中心をやられるわけにはいかねえからな。エレベーターは後回しでも構わねえよ」

俺が軽く肩をすくめながら言うのと、ミカエルも『申し訳ありません』と再び謝ってくる。

話をアザゼルのものに戻す。

「さつき冥府って言ったよな?となると、ハーデスの野郎か……!」

俺が憎々しげに吐き捨てると、アザゼルが深く頷いた。

『あの野郎、どこまで俺たちに嫌がらせするつもりなのかね?まあ、それは後だ。奴ら、おそらく辺獄か煉獄から上がって来たんだろう』

話を進める俺たちに、イツセーが訊いてくる。

『あの、なんですか?その、辺獄とか煉獄とか……』

「ぎっくり言うのと、天国と地獄以外で死者が流れ着く場所だ。そこで身を清めると、晴れて天国に行ける。ようは、天国への裏口みたいなものだな」

俺の本当にぎっくりとした説明にアザゼルが続く。

『辺獄と煉獄は「ハデス」とも言う。聖書の神は冥府を参考にそれらを定義したらしい……。ここからは憶測になるが、ハーデスは辺獄か煉獄から天国に行く道を見つけた可能性がある』

アザゼルの憶測が終わると同時に、第一天の映像に映る天使が報告をしてきた。

『報告です！煉獄から第三天へ通じる扉が破壊されているとのことです！』

その報告に、俺、アザゼル、ミカエル、ガブリエルの表情が一層険しくなり、リアスたちの表情が驚愕に変わる。

あの骸骨野郎、どこまでやれば気が済むんだよ……っ！英雄派だけじゃなく、クリフォトにまで協力しやがって……！

「ハーデスの野郎。兄さんとアザゼルから『次はない』と警告されただろうが！」

俺の言葉にミカエルも険しい表情のまま言う。

『我々からも、ジョーカーを送りましたからね。冥府の主神は何を考えておられるのか……』

俺たちが愚痴をこぼしていると、アザゼルが思い出したかのように口を開く。

『……ユীগリットから聞き出した情報によると、復活した邪龍のなかで、リゼヴィムの支配を受け付けなくなってきたものが出てきているそうだ。それが、クロウ・クルワツハ、アジ・ダハーカ、アポプスの三体。こいつらは、リゼヴィムと取り引きをし始めていると言っていた』

「なんだ？ 『条件付きで解放』とかか？」

俺が思い付きで言うと、アザゼルが一瞬驚きながらも頷く。

『正解だ。内容はわからないが、おそらく「神クラスと契約しろ」とかそんなんだろう。そして、冥府——地獄と関連性が高いアポプスがハーデスと契約した。と考えられる』俺は呆れたようにため息を吐き、クリフォトたちの立てた筋書きを口に出す。

「クリフォト的に言えば、『逃げ出した邪龍が勝手に神と契約して、なんか知らないけど情報をくれた』ハーデス的に言えば、『逃げ出してきた邪龍と契約して、色々と教えてやった』……これを協力と言わずになんて言うんだらうな……」

俺の言ったことに、アザゼルが目を細める。

『——悔しいが、それを追及している場合でもない。俺たちは天界の扉を開けようと思う。おい、ミカエル！ そっちに手が空いている奴がいたら、門のほうも頼むぜ』

『わかりました』

「それはそれとして、奴らの狙いはなんだ？ 『システム』はいくらなんでも無理だ。ミカ

エルたちがもう固めてる」

俺は横のガブリエルとミラナに目を向ける。

「なら、そこを守るセラフとその『御使フレイブ・セイントい』の殲滅……も無理か。一人一人の強さがバ

力にならねえ。全滅覚悟ならまだしも、奴らの目的は異世界だ」

二人から視線を外し、あごに手をやりながら考える。

天界にあつて、重要か貴重なもの……。

「ミカエル。生命の実と知恵の実はどうなんだ？」

『……どちらも樹自体は健在ですが、長らく実が付いていません。主が亡くなられて以来、果実の成長は止まってしまいました』

ミカエルの言葉で、余計に目的がわからなくなる。奴ら、本当に何をしに天界に来た……。

俺が思考を深めていると、突然振動が俺たちを襲う！見た限り、リアスたちのいる第一天は揺れていない！つてことは――。

「奴ら、上がってきたか！」

俺が振動に耐えながら言うのと、映像に映るイリナが何かに気づく。

『……あれはッ！』

『――ッ！』

イリナの叫びにオカ研メンバーが反応した。大量の邪龍を引き連れた人間が、第五天の現状が流れる映像に映っているのだ。

「八重垣！あいつまで上がってきやがったか……！」

念のため、第四天の映像を確認するが、邪龍の物量に押され始めているようだ！天使たちが第五天の入り口となる門まで防衛ラインを下げており、邪龍が突破しつつある！グリゼルダが目元を厳しくした。

『……いけません。現在、第五天には、解毒の最終段階のかめに紫藤局長が上がっています！』

——なら、行く場所とやることが決まった！

「トウジさんのほうには俺が向かう！おまえらも敵を蹴散らしながら上がってこい！」

『はいっ！』

映像に映るリアスたちが勢いよく返事をしてきた。

俺がアロンダイトを背負い直していると、ミカエルが言う。

『ガブリエル、ミラナ、二人も紫藤局長の保護をお願いします。相手は邪龍、容赦はいりません』

「はい」

「お、お任せください！」

二人が頷き、ガブリエルが部屋にいた天使たちに指示を飛ばす。さっきの赤面が嘘のような凜々しさだな。

それを済ませたことを確認し、俺を含めた三人で部屋を後にしようとする、アザゼルが訊いてくる。

『ロイ、ぶつつけ本番だが、大丈夫か!?!』

俺は振り返り、不敵な笑みを浮かべてアザゼルに返す。

「俺は『切り裂き魔』だ。刃物なら、何でも振ってやるよ」

『へっ。そうだな。あんまり無理すんなよ!』

「おうよ!」

俺、ガブリエル、ミラナの三人は、勢いよく部屋を飛び出した――。

――

俺――兵藤一誠を含めたオカ研チームが、映像越しにロイ先生を見送ったとき、あることに気づいた。

「アザゼル先生、ロイ先生が背中中に張り付けていたものは……う？」

『「アロンダイト」だ。リゼヴィムを相手できるようにロイに渡してくれって話を通して
おいたんだが、今年中に渡せたようだな』

『——ッ!?!』

アザゼル先生が何てことがないように言うが、アロンダイト!?!俺でも名前を知っているぞ!?!

驚愕する俺たちをアザゼルが急かす。

『ほら、おまえらも出発しろ。紫藤局長のほうにロイが行ってくれているとはいえ、万が一もある。俺も門を開き次第、増援を送れるように準備する!おまえら、気張れよ!』

俺たちはハツとしながらも『了解!』と返し、第一天を出発する。

ロイ先生、俺たちが行くまで、イリナのお父さんをお願いします!

l i f e 0 8 共闘

俺——ロイとガブリエル、ミラナが研究所を出発して数分。

俺たちは、大量に侵入してきた邪龍を蹴散らしながら突き進んでいた。

「——で、どつちだ!？」

アロンダイトを振り、迫りくる邪龍を叩き斬りながらガブリエルに訊く。

ガブリエルは迫りくる邪龍の群れのほうを指差す。

「あちらです!—ミラナ、行きますよ!—」

「はい!—」

ガブリエルが高濃度の光の槍で邪龍を蹴散らし、ミラナは地面から大量の光の槍を飛び出させて、まとめて邪龍を串刺しにしていく。

俺は邪龍の群れに開いた穴に突撃し、アロンダイトをオーラを解放。邪龍どもを一気に凧ぎ払う!

「片付いたぞ!—」

俺が振り向きながら叫ぶと二人は頷き、再び駆け出す。二人に先導されながら、俺も駆け出した——。

再び走ること数分。

トウジさんがいるという建物前に到着したが、先客がいた。

「八重垣、待て！」
やえがき

「ロイ・グレモリー……ッ！」

禍々しいオーラを放つ剣を持った男——八重垣だ。

俺を視認した瞬間から、奴の持つ剣のオーラが一気に大きくなったように思える。

俺はアロンダイトを構え、八重垣を睨み付けながら言う。

「もう辞めろ！クレériaが復讐を望んで——」

「彼女の名を……口にするなああああああああああ」

八重垣が叫ぶと、剣から八つ首のドラゴン——やまたのおろち八岐大蛇が生えてくる。真っ赤な血涙

を流し、俺たちを睨み付けてくる。

それに反応したミラナが構えるが、ガブリエルが手で制する。

「あなたは紫藤局長をお願いします。彼は、私たちが」

ガブリエルはそう言いながら俺の横に並んだ。

ミラナは何か言いたげだったが、すぐに頷いて治療施設のほうに駆け出す。

それを察知した八重垣が大蛇おろちの首の一つをミラナに放つ！

「させるかッ！」

「その通りです！」

俺とガブリエルは高速で飛び出し、首を細切れにする！血がかからないように細心の注意を払ってな！

俺がアロンダイトの切っ先を八重垣に向け、ガブリエルはミラナに行くように指示する。

ミラナは頷き、今度こそ施設に入ってしまった。同時に細切れにした大蛇おろちの首が再生する。

八重垣の表情が怒りに染まり、剣のオーラがさらに大きくなる。

「紫藤局長は後です。先にあなたを……っ！」

「やるしかねえか……」

深紅のオーラを解放。視界の右半分も見えるようになり、アロンダイトの刀身が深紅の滅びに包み込まれる。

ガブリエルも先ほどまでとは比べ物にならない光力を放ち始めた。

俺たちが戦闘態勢に入ると、大蛇^{おろち}たちが一斉に吼える！

剣の持ち主である八重垣の怒りと憎しみが込められた咆哮が周辺一帯に響き渡る。奴の口から飛び散った唾液が地面に落ちると、気化しているのか、あちこちから『シュー……』と音と瘴気が出始めていた。……あまり吸い込まないほうが良さそうだ……。

俺は服の左腕の袖を破き、ガブリエルに渡す。彼女は俺の行動に怪訝そうに見てくることが、右腕の袖を破いて自分の口元に巻いてマスクのようにする。ガブリエルもそれにならって口元を隠した。

「やるか。だが、生物なのに首を吹き飛ばしても倒せないとききた。……さて、どうする」
「私たちは紫藤局長を逃がせればそれで良いのですが、彼はそれを許してはくれないでしょうね」

俺たちがそんなことを口にしてしていると、大蛇^{おろち}の首が俺たちに向かってくる！

ガブリエルはすぐにその場を飛び退くが、俺はアロンダイトにオーラを集中。聖と滅のオーラを撃ち放つ！

放ったオーラは大蛇^{おろち}の首を飲み込み、一瞬にして消し飛ばした！血は……蒸発しているみたいだな！

消し飛ばした首はすぐに再生し、再び俺のもとに突っ込んでくる！

やはり、体を全部吹き飛ばすぐらいの勢いじゃねえと駄目か……！デカイ一発を叩き込むにしても、下手に消耗しないようにしねえと！

今度は迎撃せずに避け、アロンドイトにオーラを溜めていく。

ガブリエルは迫ってくる大蛇おろちの首に大量の光の槍を放っていくが、そんなものお構い無しに大蛇おろちの首は突き進んでいく！

ガブリエルは華麗にそれを避けると、極大の光の槍を飛ばして、大蛇おろちの首を吹き飛ばした！が、すぐに再生してしまう。

ガブリエルは俺の横に降り立ち、訊いてくる。

「やはり、完全に消滅させなければ駄目のようですね。お任せできますか？」

「任せろ。最大火力つてやつを見せてやる」

俺は不敵に笑みながら返し、アロンドイトにオーラを溜めていく。

もちろん、八重垣がそれを許すわけがなく、大蛇おろちの首を放ってくる！

俺たちはその場を飛び退いてそれを避け、追撃に伸びてくる首も翼を展開して空中で避けていく。

ガブリエルが牽制として光の槍を放っていき、矛先をあちらに向けてくれるが、大蛇おろちの首は構わずに俺に向かってくる！

下手に攻撃しても無駄なら溜められるだけ溜めたら、一気に決めに行く！

大蛇おろちの牙を避け続け、ひたすらアロンダイトにオーラを集中させていく。アロンダイトの刀身から深紅の魔力の光と聖なる光が迸り、妖しくも神々しい輝きを放ち始める。――これなら、いける！

「ガブリエル！」

「はい！」

俺の合図にガブリエルは頷き、極大の光の槍を連続で投げつけて大蛇おろちの首を全て消し飛ばした！

ガブリエルが俺の背後まで下がった瞬間、オーラを解放。同時にアロンダイトを掲げると、天を突こうといわんばかりに伸びていく！

八重垣もそれを警戒し、自分を囲むように再生した大蛇おろちの首全てでどぐろを巻き、防御の体勢を取る。

集まってくれたのなら、好都合。一気に決める！

狙い済まし、左足を大きく踏み込んでアロンダイトを一気に振り下ろそうとした瞬間、俺たちと八重垣の間に凄まじい勢いで何か落下してくる！大量の砂塵が舞い、それが晴れるとそこにいたのは――

「ミラナー！」

「う……………」

満身創痕になっているミラナだ！トウジさんを確保しに行ったのに、何があった？！俺がアロンダイトを振り下ろすのを躊躇っていると、大量の魔力の塊が降り注いでくる！

俺は舌打ちをしながらアロンダイトを風呂払い、それら全てを迎撃、消滅させる。余波で近くの建物も消し飛んじまったが、仕方ねえ！

俺がオーラを辿って空中を睨み付けると、笑みを浮かべた奴がいた。

「リゼヴィム……ッ！」

「うん、いい攻撃だ。アロンダイトを託されているとは予想外だったよ」

俺の持つアロンダイトを見て苦笑するリゼヴィム。誰かを脇に抱えている。目を凝らしてみると、リゼヴィムが抱えているのは——トウジさん!?

リゼヴィムは八重垣の横に着地すると、奴に言う。

「さて、八重垣くん。キミの復讐を果たす前に、少々手伝ってもらおうか」

「局長を殺す場所は——『エデンの園』と決めています。それまでは、局長に手は出しませんよ」

八重垣が不気味に笑みながらそう言うと、リゼヴィムがミラナとガブリエルに目を向ける。

「セラフとその『A』^{エイヌ}、ここで殺してしまおうか」

「ツ！」

リゼヴィムの言葉に反射的に動いたのはガブリエルだ。倒れるミラナに駆け寄っていく！

八重垣はガブリエルに大蛇おろちの八つ首を放つ！ガブリエルがそれを迎撃しようとした瞬間、リゼヴィムが魔力弾を放ち、大蛇おろちの頭全てに向かつていく！

あのままいけば同士討ち。……いや、違う、まさか……！

俺は思考よりも先に高速で飛び出す！ミラナの盾になるように立つガブリエルの盾になるように割り込んだ。

その瞬間、大蛇おろちの頭が一斉に弾けた！大量に飛び散った血が、雨のように俺たちに降り注いでくる！

「舐めるな……っ！」

魔力を込めたアロンダイトを一気に振り上げ、剣圧で血を飛ばしていく！だが、再生した瞬間に再び爆破。そして再び再生したら爆破と連続で繰り返され、キリがない。

俺が焦り始めていると、突然それが止んだ。

荒れた息を整えながら顔だけ振り向き、二人には血が付いていないことを確認してガブリエルに訊く。

「ガブリエル、ミラナは大丈夫そうか？」

ガブリエルがホッと息を吐くと、安堵の表情で言う。

「大丈夫です。意識はありませんが、息はあります」

意識はないのか。まあ、助かっただけでも幸運か。

俺も安堵の息を吐いていると、リゼヴィムがトウジさんを八重垣に渡す。渡された八重垣は、トウジさんを抱えてどこかに向けて駆け出してしまった。

俺は追おうとするが、リゼヴィムが俺の前に立ちそれを許さない。

リゼヴィムは俺の両眼を見ながら、若干落胆したように言う。

「その眼、前よりも正義の色が強くなったように見える。キミは悪側だと、前に言ったんだがね」

「悪いが、俺には守らななきゃならねえ奴らがいるんでな」

俺が笑みながら返すと、リゼヴィムが俺の後ろでミラナを守るように結界を張っているガブリエルに目を向ける。

「天使を守る悪魔、か。昔では考えられないな。キミはなぜ戦うのだね？ 敵と認めたものをひたすら殺すためではなかったのか？」

リゼヴィムはまるで論すように言ってくる。確かに、誰かを殺すのはいつものことだ。だが――。

俺はアロンダイトを握る右手と、背後に立つガブリエルに視線を向ける。結界を張り

終えてこちらを向いたためか、一瞬目が合ったガブリエルは驚いていたが、それは無視だ。

リゼヴィムに視線を戻し、俺は言う。

「今まで散々殺してきた。だから、今度は誰かを守る。それが贖罪になるとは思えないが、俺にはこれしか思い浮かばねえ。一過去から逃げるつもりも、目をそらすつもりもない。過去を背負って、未来を守る。俺は、そのために戦ってる」

「その戦いで死ぬことになっても、かね？」

「覚悟は決めているが、死ぬつもりはねえよ」
俺が返すと、リゼヴィムから特大の殺気が放たれ始める！今までとは、別次元じゃねえか……っ！

俺が苦笑していると、結界を張り終えたガブリエルが俺の横に付いてくれる。だが、彼女の額には冷や汗と思われるものが流れていた。

リゼヴィムが冷たい視線で俺を睨みながら言う。

「失望したぞ、『紅髪の殺人鬼』」

「……それは光栄だ……」

顔を真顔に戻してアロンドイトの切っ先をリゼヴィムに向ける。こういう時のために貰ったんだ、使わねえと……。

俺の言葉を受けたりゼヴィムは、魔力を込めた右手を向けた。その瞬間、数えるのがバカに思えるほどの極小の魔力弾が放たれる！

俺はガブリエルの前に出ると、アロンダイトを風ぎ払い、深紅と聖なるオーラを混ぜたものを飛ばす！

リゼヴィムの放った魔力弾の大半はそれに飲み込まれて消滅。残ったものは俺たちの周りの建物に風穴を開け、時には倒壊させていく。

大量に砂塵が舞い、俺とガブリエルはそれに呑み込まれた。俺たちは同時に得物を構え、飛び出していく！

リゼヴィムの表情が、先ほどから浮かべていた冷徹なものから、吸血鬼の国で見せたような狂喜が入り交じるものに変える。

飛び出した勢いのままアロンダイトで突きを放つ！リゼヴィムは障壁を張ってそれを防いでくるが、高速で回り込んだガブリエルが光の槍で横一閃する！

リゼヴィムはルシファアの黒翼でガブリエルの光の槍を防ぎ、全身から魔力を放つ。放たれた魔力は衝撃波となり、俺たちに襲いかかる！

「ッー！」

「きゃっー！」

衝撃波をもろにくらった俺たちは綺麗に吹き飛びされるが、俺は足で地面を掴んで無

理やり止まり、ガブリエルは翼を操作して上手く勢いを殺しきっていた。

アロンダイトを逆手に持ち替え、深紅と聖なるオーラを込めていき、振り上げる勢いで斬撃として一気に飛ばす！

リゼヴィムは片手で障壁を展開、それを正面から受け止めるが、斬撃が少しずつ障壁を削ってきている！

振り上げたアロンダイトを順手に戻し、振り下ろす勢いで斬撃を放つ！リゼヴィムが障壁を張るのに両手を使ったと同時に、舞い上がっていたガブリエルが真上から極大の光の槍をリゼヴィムに落とした！

次の瞬間、凄まじい爆音が周辺に響き渡り、立っているのがやっとのほどの風圧が俺にも襲いかかる！

足を踏ん張り風圧から顔を庇っていると、ルシファアの黒翼が振るわれて風圧が切り裂かれ、上空にいるガブリエルに大量の魔力弾が放たれた！

ガブリエルは光の槍を変形させ、盾を形作って弾幕を凌ごうとするが、放たれた魔力弾が空中で突如停止した！同時にリゼヴィムが姿を消し、ガブリエルがこちらに弾き飛ばされてくる！

俺はアロンダイトを背中に背負い、吹き飛んできたガブリエルを受け止める！そして、先ほどまでガブリエルがいた場所に視線を向けると、不敵に笑みながら右手を挙げ

るリゼヴィムの姿が――。

あいつ、まさか……!?

ガブリエルを胸で抱えるようにして、そのまま自分の体を盾にするために背中に魔力を込め、リゼヴィムに背を向けた瞬間、奴が手を振り下ろす。

空中で停止していた魔力弾が、一斉にこちらに殺到してくる!

背負うアロンダイト越しに異常に重い衝撃を休みなく連続で受け、激痛が襲いかかるが、歯を食い縛ってそれに耐える! いま気絶したら、確実に死ぬ……! あれをやるしかねえ……!

覚悟を決めると同時に痛みがなくなる。だが、衝撃がすごいな……! 意識が、飛びかねえ……! つ!

痛覚無視もすることで耐えること数十秒。ようやく攻撃が止んだ。

俺は抱えているガブリエルに訊く。

「だ、大丈夫か……」

「わ、私は大丈夫です。あなたは――!」

ガブリエルが顔を上げながら訊いてくるが、表情が固まる。まあ、確かに、そうなるよな……。

アロンダイトを背負っていたとはいえ、背中全てを覆えるほど刀身は大きくない。魔

力の防御も、完璧ではない。ようは、魔力も無し、生身で剥き出しな箇所もあるわけだ。俺の背中から生き物が焼けたような異臭がするが、そこまで痛くねえ……。まあ、痛覚無視をしているからな……。

ガブリエルを放し、アロンダイトを杖代わりに立ち上がり、舞い降りてきたリゼヴィムのほうに向き直る。

リゼヴィムはあごに手をやりながら、俺に訊いてくる。

「キミは自分の命を掛け金にする癖でもあるのかね？それとも、ただ誰かを守るといふ『大義名分』のために死にたいのかね？」

アロンダイトを構え直し、俺は言う。

「『大義名分』？……そんなもん知るかよ。俺は、俺のやりたいようにやるだけだ」

俺は若干苦笑気味に続ける。

「それに、こいつを死なせるわけにはいかねえ……」

「ほう？なぜだね？今の天界を支える『四大セラフ』に名を連ねるからかね？」

「それもあるが、理由はもつと簡単だ……」

俺はガブリエルに視線を向け、不敵に笑む。

「セラフだからとかは関係ねえ……！俺の目の前で、こんな美人に死んで欲しくねえんだよ……！」

「——ッ!?!」

一番の衝撃を受けたのはガブリエルだ。顔を真っ赤にしながら目を見開いて驚愕していた。

リゼヴィムは可笑しそうに笑う。

「ハハハハッ！美人だから、か。面白い解答だ。欲のままに生きる。それもまた悪魔の姿だ」

『悪魔を異世界にも見せつける』とかほざく奴のセリフじゃねえなっ！」

俺はそう返しながら突撃、深紅の聖なるオーラを纏わせたアロンドイトを振り下ろす！

リゼヴィムは白羽取りでそれを受け止め、続ける。

「今の世界は、本当の悪魔を知らないだけさ。それを見せつけるのが私たちの目的。悪魔を否定するつもりはないよ」

リゼヴィムはそう言いきると、俺の腹部に高速の蹴りを放つ！

「うっ！」

痛みはないが、衝撃が凄まじい！胃から何かがこみ上げてくるが、吐き出さないように耐えると、リゼヴィムが俺の髪を掴んで顔を寄せてくる。

「やはり、キミは面白い」

リゼヴィムは再び嬉しそうに笑うと、俺を解放し、あごを蹴り抜いてきた！もろにくらってしまつた俺は、いつかのようにガブリエルのいるほうに吹き飛ばされる！

吹き飛ばされたまま、後頭部からガブリエルに突つ込んでしまふが、悪魔人生三度目の柔らかさに包まれて勢いを殺された。……つて、またかよ!?

俺が立ち上がろうとするが、ガブリエルが体勢を崩して尻餅をつく。脳が揺れているのか俺は踏ん張れず、一緒に倒れることになつた。ああ、くそ……!

後頭部が柔らかさに包まれているなか、リゼヴィムが笑みを浮かべながら言う。

「さて、八重垣くんのほうも終わった頃だろう」

リゼヴィムは俺の持つアロンダイトを指差す。

「また、その『聖滅剣』の力、味あわせてくれ。楽しみにしているよ……」

リゼヴィムがそう言うのと、転移の光に包まれていく。あの野郎、どこに……!?!いや、あの口振りからして、行き先は——。

俺は倒れたままガブリエルに訊く。

「ガブリエル、『エデンの園』への最短ルートは!?!」

「——ッ！そのケガで追いかけるつもりですか!?!」

心配そうに見てくるガブリエルに、俺は立ち上がりながら返す。

「ああ。ミラナは、近くの『御使フレイブ・セイントい』に——」

「ミラナはこちらにお任せください」

俺の言葉を遮り、俺たちの上から誰かが舞い降りてくる。セラフ特有の金色の十二枚の翼を生やした男性——ミカエルだ。後ろに部下やその他のセラフを引き連れている。

「ミカエル！エレベーターはどうかになったか！」

ミカエルは笑みながら頷く。

「ええ、システムの防衛術式も完璧です。リリンがどこに向かったか、わかりますか？」

『『エデンの園』だから……何天だ？』

ガブリエルが答えてくれる。

「第四天——このすぐ下の階層です」

……なんか、ガブリエルが落ち着いている。また胸にダイブしたのに気にしなくなっ

たのか……？

「——っ」

「だ、大丈夫ですか！」

今、一瞬意識が飛びかけたぞ……。ちよつと、無理をしすぎたか……？

ふらつく俺の肩をガブリエルが支えてくれる。

俺は視界が霞むなか、ミカエルに訊く。

「大丈夫だ。ミカエル、エレベーターはどこだ？すぐに向かわねえと」

「……わかりました、我々も同行します。天界に土足で入ってきたのです。リリンには、罰を与えなければなりません」

ミカエルが一瞬迷いながらもそう言うのと、後ろの部下たちに視線を配る。ミカエルと目が合った部下たちは頷き、ミラナのほうに向かっていった。

「では、我々も向かいましょう」

彼らを見送ったミカエルが言葉に、俺とガブリエルは同時に頷く。

視界も回復した。なら、いける！

ミラナの治療に向かったメンバーを除いた面々は、ミカエルの先導のもと、リゼヴェイムがいると思われる『エデンの園』を目指して駆け出したのだった。

l i f e 0 9 理由

第四天——『エデンの園』を指してエレベーターに乗り込んだ俺——ロイ、ミカエル、ガブリエルを始めとした天使の面々。

道中で大量の邪龍にも襲われたが、ミカエルの圧倒的な強さのおかげで怪我人はいない。

エレベーターに乗り込み、浮遊感と同時に第四天に到着した。

エレベーターの扉が開いた瞬間、遠くからファブニールのオーラを感じ取れた。ここからでも感じ取れるって、相当なオーラを放ってやがるな。ってことは、リゼヴィムもそこか……？

「ミカエル、先に行くぞ！」

俺はそう言うと同時に駆け出す！ 足に魔力を回し、軽く地面にひびが入るほどの勢いで突き進んでいく。

リゼヴィム、待ってろよ……！

第五天を目指していた俺——兵藤一誠とイリナ、ゼノヴィア、アーシア（リアスたちは下で戦っている）の前では、驚くべき光景が広がっていた。

『許さないッ！許さないッ！許さないッッ！』

怒りのままに攻撃するファブニールが、リゼヴィムを追い詰めているのだ！

いくら避けられても、撃たれても、執拗なまでに追っていく！相手を倒すまで決して倒れないであろう強烈なオーラを肌にひしひしと感じるぞ！

さすがのリゼヴィムも、これには驚愕していた。先ほどまで優勢だった奴がやってしまったこと。

——アーシアに危害を加えた。

リゼヴィムが一発、アーシアを殴ったのだ。それは俺たちを怒らせるには十分な出来事だった。それは、ファブニールも例外ではない。

リゼヴィムは、ファブニールの『逆鱗』に触れてしまったのだ。

憎悪に燃える双眸で睨み付けるファブニールを見て、リゼヴィムが呟く。

「これが龍王の『逆鱗』かあ。……いいものを見せてくれるじゃないか」

いつものふざけた様子がない、真剣な表情になっていた。

——と、ドライグが声を発する。

『相棒！我らも仕掛けるぞ！解放された力、今のおまえになら使えるはずだっ！』

遅いぜ、ドライグ。フアブニールが全部持っていかれそうだったぞ。けど、ちょうど良かった。あの野郎を一発ぶん殴らなきゃ、俺も気がすまねえ！

紅の鎧を装着し、リゼヴィムに突撃する俺。それを見て奴は笑う。

「無駄無駄あ！セイクリッド・ギア神 器が絡んでいる以上、無駄なんだよお！」

愚直に突っ込む俺を、リゼヴィムは正面から迎え撃つ！

奴の手が鎧に触れた瞬間、鎧が解除される！『セイクリッド・ギアキャンセラ神 器 無効化』の能力なんだろうが、

籠手だけは残っている！

残された籠手だけでぶん殴る！インパクトの瞬間、籠手から新たな音声^{ベネトレイ}が鳴り響く！

『ベネトレイPenetratē!!』

リゼヴィムは正面から打撃をもろに浴び、後方に吹き飛んでいく！

地に倒れ込むリゼヴィム。

「……………なんだ、こりゃ……………」

信じられないような声音で、倒れたまま自分の顔を拭う。鼻から噴き出した血がべつとりとついていることだろう。

「――生前のドライグが持っていた『透過』の力だ。これなら、おまえの『セイクリッド・ギア神器』
キャンセラ無効化』も通り抜かれる」

「な、なんじゃそりや!?!」

リゼヴィムは立ち上がり、無様に鼻血を垂らしたまま俺を睨んでくる。

俺が再びなぐりにいこうとすると――、

「ツ！おいおい、マジかよ」

リゼヴィムが何かに気づいたように上を見上げた。俺も釣られて上に目を向けると、何かが落下してきている。あれは――、

「リゼヴィム、見つけたぞツ！」

深紅の刀身の剣を大上段に構えたロイ先生だ！トウジさんは俺たちな無事に保護して、八重垣やえがきは……分かりあえそうだったのにリゼヴィムに殺されてしまった。

それを知らないロイ先生は、上から追って来てくれたようだ！

ロイ先生は落下の勢いのまま、剣を振り下ろす！聖なるオーラを感じ取れるってことは、あれがアロンダイトなのか！

リゼヴィムはその場を飛び退いて避けると、そこにファブニールが追撃に向かっていく！

リゼヴィムは自身の影からリリースを出現させると、そのままファブニールの相手をさ

せる。だが、ファブニールはお構い無しにリリースを吹き飛ばし、リゼヴィムを目指して突き進んでいく！

ロイ先生もファブニールに合わせるように飛び出し、リゼヴィムに切り込んでいった！

ファブニールの纏う黄金のオーラと、ロイ先生の纏う深紅のオーラの残光が、リゼヴィムに襲いかかる！だが、リゼヴィムも紙一重でそれらを避けていく！

すると、ファブニールが一旦距離を放し、口から強力なオーラを放つ剣や槍、斧などの武器を吐き出していく！リゼヴィムの至近距離にいるロイ先生も巻き込まれそうだが、驚きの光景が広がる！

飛んできた武器の一つをロイ先生がキャッチし、さらに攻勢を強めていくのだ！リゼヴィムに弾かれてもすぐに次を、さらに次をキャッチしていき、様々な角度から、様々な攻撃が放たれていく！

そして、ついに――！

「フッ！」

「……………ッ!!クソが……………！」

リゼヴィムの左腕が宙を舞った！ロイ先生はアロンドイトで宙を舞うリゼヴィムの

左腕に突き刺し、消滅させた！

だが、フアブニールがリリースに殴り飛ばされ、次にロイ先生にリリースが高速で迫る！ロイ先生はリリースの拳を紙一重で避けるが、その余波で体勢が崩れた。そんなロイ先生に、リゼヴィムが至近距離で魔力弾を放った！

ロイ先生はそれを義手で受けて弾き飛ばさせるが、体勢を整えて上手く着地し、再び構える。

リゼヴィムが前腕から無くなった左腕を見て、苦笑する。

「やれやれ、その腕のやり返しかなんか？結構痛かったよ……」

「あなたへの罰は、それでもまだ足りないと思いますよ」

突如聞こえてくる第三者の声。その主のほうに目を向けると、そこにはミカエル様がガブリエル様と天使たちを引き連れて立っていた。

リゼヴィムがミカエル様たちの登場に表情を険しくさせた。

ミカエル様は続ける。

「では、覚悟してもらいますよ。慈悲は……ありません」

ミカエル様の表情が冷淡なものに変わり、上空に巨大な光の槍が大量に現れた。

ロイ先生はそれを察知し、一気にこちらに戻つてくると、ガブリエル様が俺たちを囲むように結界を張った。

その瞬間、ミカエル様が手を下ろした。巨大な光の槍が降り注ぎ、リゼヴィムに襲いかかる！ガブリエル様の結界で俺たちは無事だが、リゼヴィムはあれを正面からくらくらつていく！

「はーっはっはっはっ！はっはっはっはっはっはっ！」

『エデンの園』で大規模な爆発が連続で起こり、地形が変わっていく！それでも、リゼヴィムは笑い続ける。

——すると、光の槍の爆破のなかから、黒い柱が、いや、ルシファアの黒翼が出現した！

攻撃が止むと、十二枚の黒翼を生やした無傷のリゼヴィムが立っていた。

今の攻撃を、耐えきりやがったのか……っ！

俺たちが驚愕し、ロイ先生が再び飛び出そうとすると、こちらに近づいてくる気配が複数。

「イツセー！お兄様！」

下から上がってきたリアスたちだ！オカ研メンバーと、たいしゃくてん帝釈天の尖兵となった曹操までいやる！

「ロイさん！大丈夫ですか！」

「何とかな」

ロスヴァイセさんは心配そうにロイ先生に駆け寄っていた。
「ういっす。間に合ったかな」

下でクロウ・クルワツハを相手してくれていたデュリオも上がってきてくれていた！
『D×D』メンバーが勢揃いするなか、リゼヴィムがあごに手をやる。

「——うん。ちよつと舐めすぎたな。いや、はしやぎすぎたか？まあ、悪かったな」
自嘲的に笑い、後頭部をかいたあと、冷徹な目を浮かべた。

「遊びは終わりってことにするか。俺は——いや、私は貴殿らを我が夢の宿敵として迎え入れよう」

口調も、重圧すらも、変化した……!?いきなりふざけた雰囲気が変わる。

ロイ先生は動じずに返す。

「それがなんだ。どちらにしても、おまえを殺すことに変わりはない」

アロンダイトの切っ先を向けると、リゼヴィムは首を横に振る。

「いや、今回は退こう。——目的は終えたんでね」

リゼヴィムの手には二つの果実が握られていた。

「それはっ!」

ミカエル様はそれを見て驚き、ガブリエル様も目を見開いていた。

リゼヴィムは言う。

「これは知恵の実と生命の実だ」

——ッ！聖書に出てくるあれか!?なんであいつが実を持っているんだ!?

「もう長くなつてないと聞いたんだがな……」

ロイ先生がぼそりと言うとリセヴィムが果実を見ながら言う。

「確かにもうなつてはいない。だが、保存はされていた。と言えはどうする」

「そうか。おまえの母親——リリスはここに」

「その通りだよ、ロイくん。私の母リリスはよく言っていた。『神の目を盗んで、果実を隠してやった』と、自慢げにな。昔は半信半疑だったが、こうして見つけられた。干からびていたがね」

「それを聖杯で復活させるのか?まったく、よく探したのかよ……」

ロイ先生がミカエル様とガブリエル様を半目で睨むと、ミカエル様が返す。

「探すも何もありません。感知もできませんでした」

「当たり前だ。これは煉獄れんごく、そののさらに奥地に隠されていた」

煉獄の奥地にあつた……?じゃあ、ここを攻める理由はないんじゃないや……。

俺がそう思っていると、ロイ先生が吐き捨てる。

「天界を攻めたのはついでか。……まったくいい迷惑だ」

リセヴィムはロイ先生の言葉を聞いて、ニヤリと口の端を歪めた。

「さて、私は帰るとしよう。リリス、行くぞ」

リゼヴィムの言葉にリリスがどこからか現れ、横につく。リゼヴィムはそれを確認し、転移型魔方陣を展開した。

「クロウ、キミもだ」

いつの間にか到着していたクロウ・クルワツハはリゼヴィムを無視した。

「それも一興、か」

リゼヴィムはそう言うのと転移の光に包まれていった――。

とりあえず、撃退は成功つてことか。リゼヴィムは、どうにかして早めに倒さないと、被害が広がっていきそうだな……。

俺たちがホツと息を吐いていると、

「キャッ!」

突如発せられた女性の悲鳴!俺たちが反射的にそちらに目を向けると――、

「……………」

ガブリエル様が顔を真っ赤にして固まっていた。そして、そんなガブリエル様の胸に、力なく頭を埋めるロイ先生。つて、あのヒトなにやってんの!?

いや、それよりも、大丈夫なのか!?!ガブリエル様、また墮天の危機なんじゃないのか

!?

俺たちが心配していると、何かに気づいたガブリエル様はロイ先生を寝かせ、乱暴に上着を破いた。すると、顔から赤みが引いていき、驚愕の色が強くなっていく。

「あなた、あの時……！」

俺たちもロイ先生の体を見ると、所々に黒い染みが出来ている。こ、これって……！
ロイ先生が苦しげに呼吸をしながら、ガブリエル様に言う。

「……お、おまえを……庇った時に……ちよつとな……。滅びで……。ど、どう……にか……抑えていたんだが、無理だつ……。た……。！」

もしかして、上で八重垣と戦っていて、その時に毒をもらったのか!?それでリゼヴェイムの追撃を!?何て無茶を!

ミカエル様が言う。

「とにかく、治療施設へ。悪魔なので本格的な治療は冥界にお任せすることになります
が、それまで繋ぐだけなら、こちらでもどうにかかります」

「ロイさん!しっかりしてください!」

ロスヴァイセさんが肩を揺するが、ロイ先生は安心させたいのだろうけど、むしろ逆効果な力のない笑みを浮かべるだけだ。は、早くしないと!

俺たちはロイ先生を無事な治療施設に運び込み、天界防衛戦は幕を閉じることになった。

余談だが、近くにいたはずのクロウ・クルワツハは、そのどさくさに紛れていなくなっていた。あいつ、どうやって人間界に戻るつもりなんだ!?

l i f e 1 0 プレゼント

大蛇おろちの毒で倒れ、そのまま解毒治療を受けた俺——ロイは、冥界の病院に担ぎ込まれていた。

入院している間、俺はある考えに浸っていた。

ゼクラム様から話を聞いたときは、色々と立て込んでいたからそこまで深くは考えなかったが、なぜクレériaを殺したんだ？

悪魔と人間の寿命なんて、比べるまでもない。クレériaを百年でも冥界で軟禁すれば、どうにかなった可能性もある。だが、殺害した。なぜだ……？

兄さんやセラに聞こうとも思ったが、二人のことだから教えてはくれないだろう。昔の同僚の手を借りるか。……ほとんど職を変えたか、引退して隠居していた気がするがな。

俺はそう決め、とりあえず退屈だったので——、

「買い物日和だなっ」と

病室を抜け出していた。しっかりと看護師の行動パターンを把握してから動いたので、騒ぎにはならないはずだ。

格好はいつかのデートと同じものだが、髪を魔力で黒く染めているおかげでグレモリー家の者だとはバレずに済んでいた。現に、店に入っても何も言われない。

「ん？」

何となく入った店で、あるものに目が止まる。

これ、買っていくか……。ちょうど色もぴつたりだし、価格は……ちよつと高めだな。まあ、だいたいこんなもんだろう。

俺はそう決め、それを購入。あとは、いつ渡すかだな……。

——で、病室に戻ってみたら、

「ロイ。髪を染めてまで、何をしているのかしら？」

額に青筋を浮かべている亜麻髪の女性——母さんがいた。連絡もなしに来るとは……予想外だった！

俺は冷や汗を流しながら、ゆっくりと正座する。

「ちよつと、気分転換に買い物に行っていました……」

「……それは、ちゃんと許可を貰ったんでしようね？」

俺は無言で視線を泳がせる。嘘を言ったところで、すぐにばれる。なら、素直に言ったほうがいいよな……？

「……か、勝手に出ていきました……」

俺が言うのと、母さんは眩しいほどの笑みを浮かべ、俺にアイアンクローをくらわせてくる！

「ぎいいいいやあああああッ！ごめんなさああああいつ！」

「病院では静かにしなさい。いいわね？」

「だったら、離してくださいだたたたっ！」

俺がタツプしながら言うのと、母さんはため息を吐きながら手を離す。

俺が唸りながら頭を押さえていると、母さんが言う。

「あなた、いつからそんなに自由になったの？昔はきっちりしていたのに」

「心境の変化です」

俺はそう言うのと、声のトーンを落とす。

「まあ、前世でクリスマスとか、その手のものをあまり経験できませんでしたから、ちよつとはしやぎたいんですよ」

俺が本音を言うのと、額に手をやりながら再びため息を吐く母さん。

「わかりました。今回は見逃します」

「ありがとうございます——」

「ただ……」

俺のお礼を遮ると、母さんは俺の額を小突く。

「次はありませんから、気を付けなさい」

「……はい」

俺が萎縮気味に返事をする、正座をする俺を抱き締めてきた。

俺が若干驚いて固まっていると、母さんは俺の頭を撫でながら耳元で漏らす。

「たまには心配するこっちの身にもなりなさい……」

「ごめんなさい……」

俺が謝ると、母さんは体を離して優しく笑む。

「あとはあの娘にお任せするわ」

そう言いながら病室の入り口に目を向ける母さん。俺が疑問符を浮かべながらそち

らに目を向けると、

「……………」

扉の隙間から、ゆらゆらと揺れる銀色の髪が見えた。もしかして、今のやり取り、見られていたのか……。

俺は若干頬を赤くしながら、頬をかく。何とと言うか、恥ずかしいな……。

母さんは可笑しそうに笑むと、「たまには屋敷にも顔を出しなさい」と告げて出ていった。

俺がため息を吐いていると、病室前にいた銀髪の女性——ロセが申し訳なさそうに入ってくる。

「その、すいません。覗くつもりはなかったんですけど……」

「いや、大丈夫だ。で、どうかしたか？」

俺が訊くと、お見舞いの品と思われるリンゴをベッド脇の机に置いてから彼女は言う。

「お忙しいセラフオール様に代わって、様子を見に来ました」

「そうか。ありがとうな」

俺が笑みながら礼を言うと、ロセは顔を赤くする。まだ慣れていないようだ。

そんなロセを見て苦笑しながら、話題を変える。

「クリスマス、明後日だったな。退院は明日だから、ぎりぎりか」

俺がぼやくと、ロセはリンゴを剥きながら頷く。

「確かに退院は明日ですけど、無理はしないでくださいね？紫藤局長は大事をとってお休みなさるのですから」

「俺のタフさを舐めるな。やると決めたら、意地でもやってやるよ」

俺が言うと、ロセは「そうですね」と苦笑する。そして、剥き終わったリンゴをこちらに差し出して来る。受け取ろうと手を出すが、なぜか引つ込められた。

俺が再び手を伸ばそうとすると、ロセは病室の扉がしつかりと閉まっていることを目で確認し、覚悟を決めた表情になる。

「あ、あーん……………」

リングゴを爪楊枝に刺し、そう言いながら差し出してきた。…………つまり、そういうことだよな…………。

俺も周囲の気配を探り、ヒトが周りにいないことを確認する。

俺はため息を吐き、ロセの差し出したリングゴをほおぼった。うん、ほどよく甘酸っぱいな。

「どうも。まあ、やるにしても、場所を考えて欲しいけどな」

「そ、それは言うんでねえ！わ、わた、わたすだつて恥ずかしいんだ！」
訛るロセ。久しぶりに聞いた訛り声だ。

ロセはその後も俺にリングゴを食べさせると、顔を真っ赤にしながら病室を飛び出して行った。まあ、何事も慣れなんだろう。…………たぶん。

そんな事があつた二日後。

『メリークリスマス！』

乾杯するオカ研メンバーと生徒会メンバーと企画参加者たち。ついでにルフェイと黒歌もいる。

無事に『クリスマス企画』を終えた俺たちは、ちよつとしたパーティーをしているわけだ。

プレゼント配りは、俺の分担を減らしてもらおう方向にしてもいい、無理を言つて参加させてもらった。

俺同様、かなりの無茶をしたファブニールは、現在眠りにについている。あいつのおかげでリゼヴィムの腕を飛ばせたんだ、しばらく休んでもらおう。

何て事を思いつつ、俺が黙々と食事に出しているなか、黒歌が腕に絡んでくる。

「ちよつと、聞いたわよ。八岐大蛇やまたのおろちの毒ももらったんでしょ？大丈夫なの？」

「大丈夫じゃなきゃ、ここにいないっての。おまえは心配しすぎなんだよ」

俺はそう返しながら黒歌を剥がそうとするが、全然離れてくれない。こいつ、意外と力あるな……！

小猫に助けを求めようとしたが、ギヤスパーと楽しそうに食事をしていて、声をかけられる雰囲気ではない。あとで手伝ってもらおう。

一人でどうにか剥がそうとしていると、リアスと朱乃が前に出る。

「皆、聞いてちようだい。私と朱乃から重大発表があるの」

「うふふ、こんな時に突然かもしれませんけれど、あえてこのタイミングでお伝えしようと、前から決めていたのですわ」

朱乃が微笑みながらリアスに続き微笑んでいた。

リアスが続ける。

「オカルト研究部の新部長と新副部長について、発表するわ」

ああ、あれか。事前に話を聞いていた俺とソーナは特にリアクションしないが、イツセーたちと生徒会の面々は驚いていた。

リアスは言う。

「私は、オカ研の部長を三年間やってきたけれど、特別強いルールを残さないようにしてきたわ。それはこれから継いでいく部長、部員たちにも覚えておいてほしいことなの。オカ研はその時々々のルールで運営していったほうがいいわ」

リアスは一度咳払いをして、新部長、新副部長を発表した。

「新しい部長はアジア、新副部長は裕斗よ」

言われたアジアは完全に不意打ちだったらしく、口をポカンと開けて面食らっていた。

リアスが続ける。

「アジアにした理由は、この中で一番新しいオカ研を作ってくれそうだと思ったから。

私とは違う方向へ部活を動かしてくれそうで、そう考えたら、一番楽しそうだったのよ」
続いて朱乃が木場を選んだ理由を言う。

「裕斗くんが副部長なのは、単純に二代続けて女性で固めるのも……という面と、男子生徒との架け橋にもなりそうだと、私とリアスが考えたからですわ」

「イツセーにしようかとも考えたのけれど、これから忙しくなりそうだし、かといって部活動をおろそかにするわけにはいかないから、裕斗にやつてもらおうってことになったのよ」

細かい理由は、そんな感じなんだな。最終的に決めるのはリアスと朱乃だから、俺はあまり口出ししなかった。

アーシアが部長だと、確かに何か新しいことが始まりそうだし、木場が副部長ならなんか安心して色々任せられる。男子生徒の架け橋って言ったが、むしろ女子が寄ってきそうだな。

リアスが二人に問う。

「それで、二人はこれを受けてどうなのかしら？」

「僕は問題ありません。光荣なくらいです」

木場は快諾していたが、アーシアはまだ戸惑っている様子だ。

「わ、わ、わ、私は……その！」

「とりあえず落ち着け」

どうにか黒歌を剥がした俺は、そう言いながらアーシアに水を渡す。アーシアはその水を飲んで、少し落ち着いてから言う。

「私で本当にいいのかなって思ってしまった……。人見知りの激しい私が、きちんと勤められるのか、不安で……」

イツセーがアーシアに言う。

「大丈夫だよ。その辺は俺たちがしつかりフォローするから。それにアーシアが部長つでだけで俺、張り切れちゃうし」

俺はうんうんと頷きながら、イツセーの肩に手を置く。

「そうそう、この通りイツセーは『誰かのために頑張れる単純バカ』だからな。何かあったら俺もサポートするから、やってみたらどうだ?」

「口、ロイ先生? た、単純バカって、誉めてます? バカにしてます?」

イツセーが何か言っているが無視して、みんなに訊く。

「みんなもいいだろ?」

俺の問いかけに、オカ研メンバーは笑みを浮かべながら頷く。

『もちろんです!』

それを聞いたアーシアはしばし考え込み、笑顔で頷く。

「……わかりました。謹んでお受け致します！若輩者の私ですが、よろしくお願ひします」

『はい、部長！』

一礼するアーシアにオカ研のみんなが返事をしていた――。

場所が変わって俺の部屋。

広めの部屋には、俺、ロセ、黒歌の三人がいた。俺はベッドに腰掛け、ロセは椅子に、黒歌は部屋を観察するようにうろうろしていた。

「八重垣やえがきはリゼヴィムに……」

「はい。イツセーくんは、『あのヒトとなら、分かりあえた』と……」

八重垣の動向について聞いて聞いていた。どうやら、俺が到着する前にリゼヴィムに殺されていたようだ。もう少し早くついていれば、どうにかなったか……？

俺がそんなことを思慮し始めていると、背中から黒歌に抱きつかれ、右肩に黒歌の顔が乗っかる。

「私が言うのもなんだけど、起きちゃったことは仕方ないにや。『あの時ああしておけば

——』なんて、考え始めたらきりがないにや」

俺とロセは驚愕しながら黒歌に目を向ける。こいつが、そんな真面目なことを言うなんて……。

俺たちの心中を察したのか、黒歌が不機嫌そうに言う。

「ちよつと！私だつて色々と考えてるのにや！考えなしに動いてるって思つてたわけ!?」

「ああ」

「……はい」

「ひどいじゃー！」

俺たちの返事を受け、わざとらしくシヨックを受けた表情になる。だが、俺から離れようとはしない。

俺が苦笑していると、俺たちの前に転移魔方陣が展開される。紋様はレヴィアタン。つまり、来るのは——、

「ロイ☆メリークリスマス☆」

ミニスカサンタ姿でポーズを決めるセラだつた！あの時買ったやつ、着てきたのか！「メリークリスマス。似合ってるじゃないか」

俺が言うと、セラが両手を頬にやりやがら体をくねくねし始める。

「もう、恥ずかしいじゃない☆」

そう言うわりには嬉しそうだけだな。それを見ていたロセと黒歌の表情が引き締まる。てか、俺を抱き締める黒歌の腕に力が入った。

俺は頬をかきながら、一旦黒歌に離れてもらう。残念そうにしていたが、ちよつとやりたいことがあるんでな。

俺は特に説明もせずに手元に小型の魔方陣を展開する。三人が疑問符を浮かべながら見てくるが、俺は構わずに言う。

「俺からのクリスマスプレゼントってやつだ。まあ、あまり期待はしないでくれ」

「ッ！」

俺の言葉で、セラとロセの表情が変わる。すごいキラキラした目で見てくるのだ。あまり期待するなと言ったんだがな……。

「まずはセラ。おまえにはこれだ」

魔方陣から小さな箱を取りだし、中身を見せる。セラはそれを手に取り、目をうるうるさせながらそれを眺める。

俺は照れ臭く後頭部をかきながら言う。

「ちゃんとしたものを渡したかったんだが、それは『本番』にとっておくことにした。どうだ……?」

「うん……うん……！嬉しいわ……！」

セラは何度も頷き、それを右手の薬指にはめる。俺が渡したのは小さな蒼い宝石がついている『指輪』だ。結婚式の時にも渡すんだよなとも思ったが、いつになるかわかったもんじゃねえから、思いきってこれにした。

「次はロセ。おまえにはこれだ」

「は、はい！」

俺は次の箱を取りだし、中身を見せる。

「指輪にしようかとも思ったが、セラと同じものだど特別感が薄れる気がしたからな。今回はこれで我慢してくれて」

「あ、ありがとうございます！」

ロセはそつとそれを手に取り、まじまじと見つめ始めた。俺はそんな彼女を見ながら苦笑し、手招きする。

「つけてやるから、こつち来い」

「は、はい！」

そんなわけで、それを首につけてやる。ロセにプレゼントしたのは銀色の宝石のついた『ネックレス』だ。これなら、服の下とかにも隠せるしな。

「——これで良し。次、黒歌！」

「にやい!？」

なんか勝手に関係ないオーラを出していた黒歌を指差す。いきなり呼ばれたあいつは驚いていたが、なんか嬉しそうである。

「日頃の感謝を込めてつてことで。ほれ」

俺はそう言いながら黒歌にプレゼントを渡す。こいつへのプレゼントは、黒い宝石のついた金属の『ブレスレット』。何となく、これしかないと思った。

それを受け取った黒歌は、それを大事そうに抱えながら笑む。

「ありがとね。大事にするわ」

「——っ」

その時の黒歌の笑みに、一瞬見惚れた自分がいた。いつものふざけたような笑みではなく、優しい笑みを浮かべていたのだ。ちよつと、面食らった。

それに気づいたのか、黒歌の笑みがいつものものに戻る。

「なに?見惚れてた?」

「そんなわけ、ねえ……」

「見惚れたんだ。ふふ……」

いじってくる様子もなく、嬉しそうに笑む。なんか、調子狂うな……。

俺が右頬をかいていると、セラが左頬を引っ張ってくる。

「あ、あのく、セラしゃん？」

「プレゼントを貰ったのは嬉しいけど、話があるの」

いきなり冷静な声音になったセラ。これは、説教パターン？

俺が黙っていると、セラは続ける。

「ロスヴァイセから聞いたわ。また、ガブリエルの胸に飛び込んだそうね？」

「飛び込んだってか、倒れたらそこにあつたと言うか……」

そう言いながら横目でロセに目を向けるが、気まずそうに視線をはずされた。

「言い訳は結構。今日という日は許さないわ！」

こうして、俺の聖なる夜は、恋人からの説教で更けていったのだった――。

所変わって天界某所。

『四大セラフ』に名を連ねるミカエルとガブリエルが、長机を挟んで書類を確認していた。

「無事に『クリスマス企画』も完了したようですね」

「……………」

ミカエルの言葉に、ガブリエルは反応しない。心ここに有らずと言わんばかりに、ボケツと虚空を見つめていた。

ミカエルは書類から視線を外し、苦笑した。

「彼のこと、気になりますか？」

「ふえ!?!い、いえ…………それは…………」

ミカエルの言葉に、露骨に反応するガブリエル。彼というのは、十中八九、ロイのことだろう。

ミカエルは言う。

「彼なら大丈夫と言ったはずですよ。現に、『クリスマス企画』にも無事に参加していますからね」

ガブリエルは小さくホツと息を吐いた。ミカエルは自分がロイの心配をしていると解釈したようだ。

だが、彼女の胸中にあるのは、リゼヴィムに面と向かって言つてのけたロイの言葉。

『セラフだからとかは関係ねえ…………!俺の目の前で、こんな美人に死んで欲しくねえんだよ…………!』

自分のことを『一人の女性』として捉える発言に、ガブリエルは困惑していた。

ミカエルをはじめとして、男性天使の顔は整った者が多い。そんな彼らと会う機会は多いが、彼らはあくまで『同僚』か『部下』、まとめてしまえば『仲間』だ。そう線引きし、主に代わって彼らをまとめる『セラフ』として、振る舞ってきたし、周りもそう接してきた。

では、ロイは？初めて会ったときは、『天使』と『悪魔』という絶対的な『敵』だった。そう線引きできた。

だが、今や三大勢力は和平を結び、悪魔を『敵』とは線引きできない。『仲間』と線引きしようとも思えたが、そう思うたびに違和感を感じ、彼の顔を思い出すたびに胸に何かが突つかかる。一体なにが突つかかっているのか。それがわからない。

悩み続けるガブリエルに、ミカエルは言う。

「ガブリエル。主が亡くなり、天界は大きく変わりました」

いきなり真面目なことを話し始めたミカエルに、ガブリエルは首を傾げた。

ミカエルは続ける。

「主だけではありません。多くの天使も失いながら、様々な工夫を凝らして今まで天界を運営してきました」

何が言いたいのかまったく把握できていないガブリエルに、ミカエルは書類を置き、

単刀直入に言う。

「たまには息抜きも必要でしょう。『セラフ』としてではない『あなた』として、彼と向き合ってみればどうですか？」

「……？」

余計にわからなくなり始めるガブリエルを見て、ミカエルはため息を漏らす。

「自分には鈍感なのですね。ガブリエル、あなたは彼に、ロイ・グレモリーに『恋』しているではありませんか？」

「ッ！」

いきなりミカエルの口から出た言葉を受けたガブリエルは驚愕の表情を浮かべるが、なぜか胸に突っかかっていたものが取れたような錯覚を覚える。

彼は初めて自分が『異性』として意識したヒトだ。

彼は進み続ける強いヒトだ。

彼は守るためなら無茶をするヒトだ。

彼は――。

『ありがとうな』

――笑顔が似合うヒトだ。

ガブリエルがそう思った瞬間、彼女の周りに墮天防止用の結界が展開される！

慌てるガブリエルとは対象的に、ミカエルは特に気にする様子もなく言う。

「あまり考え過ぎないようにしてくださいね。墮天されては大変です」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

ガブリエルはいつもの間延びした声で返し、自分を落ち着かせるように深呼吸をして結果が解けるのを待つ。

そう言えば、彼もこんなことをしていたような……。

ガブリエルがそう思った瞬間、結果からけたたましい警告音まで鳴り始める！

さすがのミカエルも慌て始め、ガブリエルに言う。

「ガ、ガブリエル!? 落ち着きなさい！ それ以上は大問題です！」

「ごめんなさい……」

今度は真面目に返し、ようやく結果が消える。

それを確認したミカエルは手元に魔方陣を展開。そこから『ドアノブ』を取り出した。

この『ドアノブ』は、紫藤イリナも持っているものだ。このドアノブを付けたドアを開ければ、『悪魔と天使が子作りできる部屋』に入ることができる。

それを知っているガブリエルの顔が赤くなる。

「念のため、渡しておきますね。使い方はわかっていると思います」

ガブリエルは顔を真っ赤にしたままそれを受けとるが、それと同時に再び結果が展開

された。

ミカエルは苦笑し、どこかにいるガブリエルの想いヒトに言う。
「ガブリエルを頼みますよ。あなたになら、彼女を任せられます」

「ご、ごめんなさい……!」

当のロイは、いまだにセラフオルーから説教されていた。セラフオルー曰く、「なぜガブリエルの胸がいいのか」「自分の胸では不足なのか」など、どちらかというといふ愚痴が多い。

それを見ているロスヴァイセと黒歌は、

「どうすればあの防御を崩せるかにや……」

「この際、後手に回るのも……」

「いやいや、それはないにや。狙うなら一番にや」

「そうですけど……」

どうやってセラフオルーを回避してロイに迫るか、真剣に話し合っていた。だが、まったくゴールが見つからない。

その時、ロイの耳元に天界式連絡用魔方陣が展開される。ロイは耳を濟ませ、セラフォルもそれに耳を近づける。

『ミカエルです。こんな時間で恐縮ですが、お話があるようなので、あるヒトをそちらに送ります。では——』

一方的な喋りのあと、連絡用魔方陣が解除される。それと同時に、彼らの前に転移用魔方陣が展開され、一気に光が弾ける。

「お、お邪魔しまあす……」

光が止み、そこにいたのは、サンタ姿のガブリエルだった。ロイは気まずそうに顔をそむけるが、セラフォルが無理やり前に向き直らせる。同時にロスヴァイセと黒歌もロイに詰め寄った。

「これはどういうことかしら?」

「これはどういうことですか?」

「これはどういうことによ?」

三人同時に詰め寄せられたロイは、全力で首を横に振りまくる。そんななか、ガブリエルが笑みながらロイに頭を下げた。

「末永く、よろしくお願ひしまあす」

「「「……………」」」

ガブリエルの発言に、完全に固まる四人。真つ先に復活したのはセラフオールだった。

セラフオールはガブリエルに詰め寄り、鬼の形相で問う。

「あなた！私からロイを奪うつもりなの!?!天使として、それはどうなのよ!?!」

「ミカエル様は、『信仰にも色々な形がある』と」

「どんな信仰よ!?!」

セラフオールはそう返すが、ガブリエルは特に気にした様子もなくロイに目を向けて笑みを浮かべた。それを向けられたロイは苦笑する。

「これは……面倒なことになりそうだな……」

「まさか、こんな事になるなんて……」

「にやはは……。またすごいライバルが来ちゃったにや……」

絶望的な表情になるロスヴァイセと、珍しく力なく笑う黒歌。三人の前では口論を続けるセラフオールとガブリエル。

ロイはそんな二人を眺めながら微笑する。

「ま、無下にはできねえか……」

「なんですぐに納得できるのよ！まさか、前から密会していたとか!?!」

「そんなわけねえじゃん」

ロイは軽く流すが、部屋に揃った四人に視線を配り、無意識のうちにロイは笑う。
——かつての敵同士が笑いあう。

ようやく叶ったセラフオールの夢。あとは、この状況を楽しみ、永く続くように戦うだけだ。

——それが自分なりの『贖罪』であり、『戦う理由』だから。

だが——とロイは思う。

目の前であれやこれや言い合う四人を前に、ロイは前から考えていたことの答えにたどり着く。

——誰かと共に生きること。それが俺の『夢』であり、『生きる理由』なんだろう。

前世ではまったく抱かなかったその想いに気づき、ロイの表情がさらに和らぐ。

また騒がしくなるであろうこれからを想いながら、それを楽しみにしている自分を自覚しながら——。

幕間編⑦

Extra life 01 また、山へ

突然だが、俺——兵藤一誠をはじめとしたオカ研メンバーは、冥界に来ていた。

初めは仕事の報酬の整理のためだったんだけど、その途中で、サイラオーグさんとその『女王』のクイーシャ・アバドンさん（金髪ポニーテールの美人さんだ！）がグレモリー城に来ただけけど……。

『我がバアル領にも「ゆるキャラ」を推進したいという話だな。俺がスーツアクターとして手を挙げたのだ』

サイラオーグさんはその『ゆるキャラ』の着ぐるみに身を包んだままそう言った。

寸胴な着ぐるみで、頭はリングをを思わせるフォルム、そこにかわいらしい顔が加えられている。背中からは悪魔的な翼の格好だ。

そのせいで、最初はサイラオーグさんって、分からなかったんですよ？せめて喋ってから被り物をしてください。

俺が心のなかで呟いていると、サイラオーグさんは続けた。

『実は、今日はグレモリー領で行われるイベントにこの「バップルくん」が招待されてい

るのだ』

イベント！それにバツプルくん！

なるほど、だからサイラオーグさんはこの格好なんですな。本番前に着替えれば良いのでは？と訊くのは野暮だろう。

「キャラクター名の由来は、我が領の特産品のひとつであるリンゴを取り上げてみたのです」

クイーシャさんが説明してくれた。

バアルの特産品であるリンゴ（アップル）のキャラクターで『バツプルくん』なのか、わかりやすい。

サイラオーグさんは強く頷く。

『次期当主として、公共事業を見据えていきたいのだ』

その一環として、次期当主がスーツアクターをしていると？

サイラオーグさんが少しわからなくなっていると、ロスヴァイセさんがリアスに訊いた。

「ふと疑問に感じたのですが、グレモリー領にも『ゆるキャラ』があたりするのですか？」

リアスは小さく笑うと、それに答えた。

「ええ、グレモリー領にも『ゆるキャラ』はいるわ。そして、その『ゆるキャラ』をメイ

ンとしたイベントが、もうすぐおこなわれるの。バアル領のバップルくとコラボレーションすることになっていて、サイラオーグが今日ここに来たというわけなのよ」

リアスはそう言うけど、若干テンションが低い。『ゆるキャラ』に何かあるのかな？サイラオーグさんは腕を組みながら言う。

『そのイベントに参加すれば、宣伝効果にも繋がり、我が領の特産品も注目を浴びるだろう。ぜひとも参加したい。今日は胸を借りるぞ、リアス』

被り物で表情はわからないが、とてつもない覇気を放っている！

リアスがサイラオーグさんに続いて言う。

「そのようなわけで、これからイベント会場に向かうわよ」

こうして俺たちは『バップルくん』と共にイベント会場に転移することになったのだった。

——というわけでイベント会場。

俺たちは舞台袖に集まっていた。見た感じでは、子供連れの親子を中心に、老若男女けっこうな数が集まって見える。

今回、俺たちの出番はないけど、俺たちの横には、

『……………』

無言で腕を組み、覇気を放っている『バップルくん』と、

『ゴモゴモ！』

「ひいっ！」

『ゴモ！』

「ひいひいっ！」

リアスにちよっかいを出しているグレモリー領の『ゆるキャラ』である『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』がいる。

『ゴモりん』はラクダを模したキャラクターだ。グレモリーはラクダに乗って召喚に応じると言われているため、そこからキャラクターを制作したらしい。

ちなみに、リアスが『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』を怖がっている理由は、幼い頃にラクダをかまっていたら、手痛い逆襲を受けたらしく、それからラクダが苦手になっ
てしまったそうだ。

ロイ先生曰く、

「任務に行つて戻つて来たたら、なんか大変なことになつていた……」

と、言葉少なに語るだけだった。

それにしても、サイラオーグさん、緊張しているのかな？ こうあうイベントとは縁のなさそうなヒトだし。『ゆるキャラ』が鬨気が漏れているのは、なかなかの恐怖なんですけど……。

そんな俺をよそに、ステージ上の司会進行役のお姉さんがマイクでお客さんに促す。

『それではみんな！ 「ゴモりん」と「ゴモりんJr.」、「バップルくん」を呼んでみようか？ みんなも大きな声で呼んであげてね！』

子供たちは満面の笑みで大声をあげる。

『『『『『ゴモりんっ！』』』』』

『『『『『ジュニアっ！』』』』』

『『『『『バップルくんっ！』』』』』

子供たちからの声援をうけた三人（？）は勢いよく袖から飛び出した！ 俺たちは見守るしかない。

舞台では慣れた様子で『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』が子供たちと接していくが、『バップルくん』は若干惑っているようで、挙動がおかしい。

『あれれ？ 「バップルくん」、どうかしたのかな？ 調子が悪いのかな？』

と、司会のお姉さんにフオローされている始末だ！やっぱり生真面目なサイラオーグさんに『ゆるキヤラ』のスーツアクターは無理だつて！

『バップルくん』が動かないなか、『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』は軽快な反応をお客さんに見せていた。そうとう場数を踏んでいるように見える。

その後、いちおう問題なくイベントは進んでいき、子供たちとの触れあいタイムとなった。

『ゴモゴモ』

「『ゴモりん』かわいいっ！」

『ゴモりん』に抱きついた女の子の一言で、『ゴモりんJr.』が「ガン」と音が出そうなほどわざとらしくショックを受けた様子で、四つん這いになりながら軽く地面を叩いていた。すると、

「僕は『ジュニア』の方が好き！」

男の子がそう言いながら『ゴモりんJr.』に抱きつくくと、

『ゴモモ！』

『ゴモりんJr.』は嬉しそうに男の子を抱きしめ返していた。

『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』は子供たちと楽しそうに戯れているのだが、

『……………』

『バップルくん』は立ち振る舞いもせず、無言で腕を組んで妙な迫力を放っていた！

サイラオーグさん！やっぱりあなたには無理ですって！あなたの闘気は視認できるレベルなんですから、体から漏れる白い発光現象は『ゆるキャラ』にあつてはならないものですよ！

『バップルくん』の近寄りがたいオーラについて子供が……、

「う、うえええええええんっ！」

泣き出してしまった！子供ってこういうのに敏感だから、余計に怖がってしまったのかも知れない！

「このリングゴ、なんだか怖いよおおおおっ！」

連鎖的に『バップルくん』の周りにいた子供たちが泣いてしまう。

こうなつてしまったら、もう收拾がつかなくなる。

俺がそう思った矢先、

『ゴモモ！』

子供たちの泣き声を遮るように『ゴモりんJr.』が大声をあげた！ステージ上の視線を一身に受ける『ゴモりんJr.』は、腕を腰に当て、胸を張るようなポーズを取つていた！

先ほど泣いていた子供たちも静かになり、『ゴモりんJr.』を見ているほどだ。

『ゴモりんJr.』はそれを確認すると『道を開けてくれ』と言わんばかりに、手首を横にクイクイツとするジェスチャーをした。

子供たち、司会のお姉さん、『ゴモりん』、『バップルくん』がステージの端に集まったことを確認して、『ゴモりんJr.』は舞台袖ギリギリまで移動して、右手を挙げた。

舞台袖の俺たちも注目していると『ゴモりんJr.』は走り出し、そして！

『ゴモーツ！』

手なしロンダートをした！確か『ブランデイ』って言うんだよな！前にロイ先生が見せてくれた！まあ、「真似するなよ」と真面目な顔で注意されたけどな！

それより今の、着ぐるみとは思えないキレのよさだったぞ！

子供たちだけでなく、俺たちも驚愕していると、『ゴモりんJr.』はそのまま――

『ゴモモーツ！』

前方宙返りに繋がった！ステージの反対側まで来たことを確認すると振り向き、再び助走をつけて、

『ゴモモモーツ！』

バク宙で締めた！しかも、バク宙で少しだけ前に進んでいる!?

『ゴモツ！』

そしてポーズを決める『ゴモりんJr.』。ステージは静寂に包まれるが、

「ジュニア、すごいーい！」

「ジュニアー！」

「すごいすごい！」

先ほど泣いていた子供たちも笑顔になり、『ゴモりんJr.』に飛び付いていた。

『ゴモモ……！』

複数人の子供にくつつかれ、そのまま押し倒される『ゴモりんJr.』。子供たちは笑顔になったが、

『……………ッ！』

『バップルくん』がショックを受けた様子で、その場で固まってしまっていた。

イベントが終わり、楽屋に戻ってきた俺、兵藤一誠を含めたオカ研と、三人の『ゆるキャラ』たち。

戻ってきて早々に、サイラオーグさんは椅子に腰掛けて深くうなだれていた。

「……………なんということだ。子供に嫌われてしまうとは…………俺は『ゆるキャラ』失格だッ！」

相当ショックを受けているようだ。顔を両手で覆い、見たことがないほど落ち込んで

いる。きつと、畑違いってやつだと思っただけですけど。

「きつと、気合いが入りすぎて闘気があふれ出してしまっただけですって」
「そうよ、気にする必要はないわ。場数を踏めば要領も得られるでしょうし。って、何も次期当主がやらなくてもいいのよ？」

俺とリアスが励ますが、サイラオーグさんは深く息を吐いた。

「それでも俺は……己の鍛練の甘さを恨めしく思うばかりだ」

根っからの真面目なヒトだから、いつも以上に張り切っていたのだろう。

『ゴモゴモ』

『ゴモモ』

『ゴモりん』と『ゴモりんJr.』がサイラオーグさんの肩に手を置き、励ましていた。

「……俺を慰めてくれるというのか、ゴモりん、ゴモりんJr.……。いや、あなた方は、まさか!？」

サイラオーグさんが何かを察して勢いよく立ち上がった。

『ゴモりん』が頭部を脱ぎ出した。そこに現れたのは――。

「ごきげんよう、皆さん。私です」

紅髪のダンディな男性！

「お、おとおおとおと、お父様っ!？」

仰天するリアス！当然だろう！『ゴモりん』の中からお父さんが出てきたのだから！
リアスのお父さんが言う。

「ちなみに、『ゴモりんJ r.』は……」

『ゴモモっ』

そう言つて『ゴモりんJ r.』から現れたのは、

「俺だ」

紅髪の若い男性！

「お兄様!？」

「ロイさん?!？」

リアスはさらに仰天した様子だ。ロスヴァイセさんも「今日は用事があるから行けな
い」と言つていたロイ先生が『ゴモりんJ r.』の中から現れたのはだから！

ロイ先生が汗を拭いながら言う。

「あー、しんどかった……。無理は禁物だな……」

「うん。ナイスフオローだったよ、ロイ。いきなりで驚いたがね」

「そうですか？まあ、俺たちは子供たちを楽しませてなんぼですからね」

「それもそうだ。少し踊つてみるもよかつたかな？」

「それで子供たちに一緒に踊つてもらおうとか、いいかもしれませんね」

「うん。次のステージでやってみよう」

——と、勝手に反省会を始めるお二人。な、なんか手慣れたるな……。

俺たちが突然のことで固まっていると、サイラオーグさんが深く頭を下げる。

「お二人の手を煩わづらわせてしまい、申し訳ありません……」

ロイは反省会を中断し、軽い感じに笑いながら言う。

「いや、気にすんなって。誰だつて最初は失敗からだ」

「そうだぞ、サイラオーグ。では、さつそくレクチャーを始めよう。『ゆるキャラ』の基
本は——」

サイラオーグさんに色々と教え始めるリアスのお父さん。手持ちぶさたのロイ先生
は、リアスの死角に回り込むと『ゴモりんJr.』の頭を被り——、

『ゴモモ〜』

「ひいっ!」

リアスを追いかけて回していた。ロイ先生は妹への軽いスキンシップなんだろうけど、
逃げ回るリアスの表情は真剣そのもので、必死にお兄さんから逃げている。

そして、ロイ先生の入る『ゴモりんJr.』を見ながら、ロスヴァイセさんは「……抱
きつきたい……」と漏らしていた。

クリスマスから、お二人の仲がより深まっているように見えるのはなんでだろう? 何

かあったのかな？

俺たちがそんな様子を見て苦笑していると、

「しかし、このままでは今後『ゆるキャラ』のイベントには出られんツ！他者が許しても俺がそれを許さないのだツ！このままでいいのか？否ツ！己を研磨してこそ俺ツ！己を虐げて高めることこそサイラオーグ・バルなのだツ！」

サイラオーグは心底悔しがっていた。すると、不意に俺に視線を送ってくる。

「兵藤一誠、頼みがある」

「え？あ、はい！」

サイラオーグさんが俺の肩をつかむ。

「——俺と山ごもりをしてくれないだろうか？山でおまえと共に『ゆるキャラ』を高めていきたい……ツツ！」

俺は困惑しながら訊く。

「や、山籠りですか？いい、いやー、俺、山籠りは何度かしたことありますけど、『ゆるキャラ』の修行はしたことないなあ……」

いきなりのことで消極的な俺だったが、リアスのお父さんは深く頷く。

「うむ。では、サイラオーグ、私が付き添おうではないか」

それにリアスを角まで追い詰めたロイ先生が、こちらに振り向きながら手を挙げて言

う。

『それじゃ、俺も行く(ご)も』

『行く(ご)も』って、何言ってるんですか!?そこは、「俺も行くか」でいいと思いますよ!?

俺が心中でツツコミをいれていると、リアスのお父さんさんは頷きながらロイ先生を褒める。

「さすが、ロイだ。己の殺し、キャラになりきること。『ゆるキャラ』の基本がしっかりとできている」

「なるほど。先ほど教えていただいたのは、この事なのですわね!」

熱心にリアスのお父さんの言葉に耳を傾け、ロイ先生の一挙動一挙動を注視するサイラオグさん。いいんだろうか、これで……。

「さつそく、『ゆるキャラ』修行に最適な山に案内しよう。兵藤一誠くんもついでに来な(ご)う」

マジですか!?!リアスのお父さんに言われたら拒否しようにも――。

『行く(ご)も行く(ご)も。きつと楽しい(ご)も』

俺の襟首をがつつり掴んだ『ゴモりんJr.』が、そう言いながらお父さんとサイラオグさんのほうに歩み寄る。

前言撤回。拒否権なんてねえよ!強制連行だよ!

俺は抵抗することなくそのまま運ばれていき、足元に転移型魔方陣が展開される。

転移の光に包まれていくなか、若干顔色が悪いリアスがお父さんとお兄さんと呼ぶ。

「……お、お父様！お兄様！きつと、お母様が激怒されますわ！」

……そ、それはまずい！リアスのお母さんは、誰に対しても厳しい方だ！こんな事態を知ったら、どうなるかわかったもんじやない！

リアスのお父さんは体を大きく震わせるが、振り切るように言う。

「……行こう、三人とも！」

転移の光が弾けようとした瞬間、

『……ここまで来たら、どうせ説教も……』

と、覇気のない『ゴモりん Jr.』の言葉が聞こえた気がした――。

Extra life 02 修行開始

俺——兵藤一誠とロイ先生、リアスのお父さん、サイラオーグさんの四人は、『ゆるキヤラ』修行のために山に来ていた。

俺たちの目の前には雄大な自然が広がり、耳をすませば鳥のさえずりなんか聞こえてくる。

サイラオーグさんは周りの自然を見渡し、感嘆の息を漏らしていた。

『……なるほど、いい山だ。木々も水もきらめいている』
着ぐるみを着たままのサイラオーグさんはやる気十分のようだ。

サイラオーグさんは俺の手を取ると、山を指さして宣言する。

『兵藤一誠！まずはあの山の頂上を目指すぞッ！』

「え、ええええええええええ!!?山登りですか!?!」

目玉が飛び出そうな勢いで驚く俺。ついていきなりだから驚いてしまった!

俺、装備とかなんにもないんですけど!学生服ですよ!?!まあ、サイラオーグさんは着ぐるみ姿のままですけどね!

「登ってこそ見えるものがある。まずはそれからだッ!」

……俺はいざとなったら鎧をまといばいいか。サイラオーグさんは、闘気でどうにかしてしまえそうだ。

それはそれとして、サイラオーグさんが指さした山は、富士山かそれ以上の高さがあるように見える……。

当惑する俺の横では、

『ここをキャンプ地とするぞもー！』

『ふむ。我々はここでキャンプの準備をしていよう』

着ぐるみ姿のグレモリー親子が楽しそうにテントを組み立て始めていた。お二人的には、久しぶりに親子でキャンプに来ているみたいな感覚なのかな？

『では、行くぞッ！』

俺の手を引き、山へ駆け出すサイラオーグさん！

かくして、俺は『ゆるキャラ』と共に山を登ることになった――。

『ゴモりんJr.』こと俺——ロイは、久しぶりに父さんと二人でキャンプの準備を進めていた。

着ぐるみを着ているせいか、細かな作業に時間がかかってしまったが、どうにか全ての作業が完了。久しぶりにコーヒーを淹れていた。

『うん。昔に比べれば、美味しいよ』

『どうも！』

父さんから褒めてもらえた。昔は酷評ばかりだったからな、嬉しいもんだ。俺が着ぐるみの中で笑顔になっていると、父さんが話題を変える。

『さて、真剣な話をしよう。最近、女性と縁があるようだな』

『……そうですね』

真剣な話ということで、口調を戻す。女性と縁があるって、確かに今年に入ってからすごいな。悪魔だけじゃなく、天使にまで好かれているようだからな……。

俺は小さくため息を吐いていると、父さんが俺の肩に手を置きながら言う。

『私も若い頃はやんちゃをしたものだよ。その度にヴェネラナからお説教されたが……。それはともかく、しっかりと皆を幸せにしないさい。ハーレムを作るなら、その覚悟を決めること』

——と、真面目な声音で言ってくる父さん。まあ、ロセに告白した時点で覚悟は決め

ていたけどな。

『わかりました』

俺が返すと、頷く父さん。すると、何かを思い出したように言う。

『女性の縁ということで思い出したんだが、この近くの湖にリリティファさんが暮らしているんだ。あいさつに行ってきたらどうだい？』

——ッ！リリティファが近くに住んでいるのか。あれからまったく会えていないし、たまには顔を出してみるのもいいだろう。

『行ってみます。ああ、ついでに魚も取ってきますね』

『うん。頼むよ』

そんなわけで、俺は近くの湖を目指す——前に着替えよう。着ぐるみで泳ぐとか、溺死しちゃう。

俺は一旦着ぐるみを脱ぐ。こんなこともあるかと、下にはジャージを着ておいたのだ。おかげで死ぬほど暑かったがな……。

俺は汗を拭い、父さんに「行ってきます」とだけ言ってその場を飛び出した。

——さて、あいつは元気になっているかな……。

そんなわけで、飛ぶこと数分。

湖のほとりに降り立ち、周りを見渡していた。

あく、やっぱり生身が一番。視界が広い（右半分は見えていない）な。

一度大きく体を伸ばし、湖のほうに視線を向ける。そこからは、特徴的な緑髪の女性が顔を出していた。ばれていないと思っっているのか、俺と目があつても動くことはない。

俺は後頭部をかき、そのヒトに言う。

「久しぶりだなーリリティファア！」

「ーッ！」

名前を呼ばれたリリティファアは驚きながら一度潜り、そのままこちらに泳いでくる。

浅瀬に入ると上半身を水面から出し、笑みを浮かべた。

「お、お久しぶりです。その節はお世話になりました」

「ああ、久しぶりだな。そつちも元気そうだなによりだ。こつちに来てからは何もないか？」

俺が訊くと、リリティファアは笑顔のまま頷く。

「はい。こちらに来てからは、恐いヒトに追いかけられることもなくなりました」

なら安心だ。あの時は、色々あつて死にかけてたからな。頑張ったかいがあつた。

俺がうんうん頷いていると、リリティファが若干不安げに訊いてくる。

「あなたもあれから大丈夫でしたか？時々ニュースで名前を聞くのですが……」

「ん？ああ、テロリスト相手に頑張つてるよ。左腕が吹き飛んだけどな」

俺がなんてことのないように言ったことに、リリティファが驚く。

「ふ、吹き飛んだんですか!?そ、それで、お体はだ、大丈夫なんですか!」

俺は服の左袖をまくり、肘まで見えるようにする。そこが義手と生身の繋ぎ目だ。

「この通り、義手だ。ちよつと不自由な時があるが、あんまり前とは変わらないな」

「そ、そうですか……」

ホツと息を吐くりリリティファ。何だろう。最近、行く先々で女性に心配されている気がする……。

俺はその思考を振り切るように首を横に振り、本題に入る。

「さてと、俺は魚を捕りに来たんだ。手伝つてくれるか?」

「はい！お任せください！」

元氣よく笑顔で返事をするリリティファ。やる気十分なのは結構だ。

魔力でジャージからウェットスーツに着替え、銚の代わりとしてアロンドایتを取り出す。

「さて、やるか！」

「はい！」

こうして、俺とリリティファは共同で漁をすることになったのだった――。

「大漁だな！」

「はい！」

数時間をかけ、ザルいっぱい魚を獲った俺とリリティファ。

漁をしながら思ったが、材料があつても料理するには調味料も必要だよな。

「リリティファ、調味料か何かを貸してくれないか？」

「はい、今取つてきます！」

リリティファはそう言つて湖に潜つていった。湖の中に住んでいるのか、それともほとりに家があるのか。

俺がそんな疑問を思いながら首をかしげていると、こちらに近づいてくる気配が複数。

「何者だ？ここは山賊『ブルーバ一家』の縄張りだ。殺されなくなかったら、身ぐるみとその食料を置いていけ」

山賊ね……。この手の輩はどこにでもいるもんなのか？

俺がため息を吐いていると、リリティファが戻ってきた。

「ロイ様、お待たせしました！」

調味料が入っていると思われる箱を持っている。だが、タイミングが悪かったな。ちやうど問題が発生したところだ。

リリティファが山賊たちを視界に捉える。

「あ、あなた方は！」

リリティファはどうやら知っているようで、驚愕の声を漏らしていた。だが、いつかの海賊の時ほど怯えている様子はない。

「リリティファ、誰だこいつら」

俺がそう訊きながらその山賊を指さすと、リリティファは歯切れ悪くこたえた。

「ええと、最近私に告白してくるヒトの部下さんです」

「……告白って、またかよ……」

俺が呆れていると、山賊共が言ってくる。

「えーい！貴様ら！俺たちを無視するな！」

「ちよつと黙つてろ……!」

俺はそう言いながら軽くアロンダイト振り、オーラを飛ばす!

『ギヤアアアアアアアアッ!』

その一撃をくらった山賊たちは吹っ飛んでいき、空の彼方でキラリと光った。……よ
うに見えた。

「これにて一件落着だな」

俺がなんてことを言っている、リリティファが訊いてくる。

「ところで、ロイ様はどうして魚を捕りに来たのですか?」

「……あ」

いけねえ、漁に夢中になって理由をど忘れしてた。父さんたち、もう待ちくたびれて
るだろうな……。

俺はため息を吐き、リリティファに言う。

「ま、これも何かの縁か。リリティファ、一緒にどうだ?」

「い、一緒に、とは……?」

聞き返してくるリリティファに、俺は言葉を足して言い直す。

「近くでキャンプしていてな、一緒に食事はどうだ?」

俺の言葉にリリティファは一瞬考えると、笑顔で頷く。

「お邪魔させていただきます」

「了解。そんじや、行くか……」

転移魔方陣を展開し、急いで父さんたちの元に戻ったのだった。

転移の光が止み、視界が回復すると、

『ロイ、お帰り。こっちの準備はできているよ』

そう言つて迎え入れてくれる父さん。奥には疲れた様子のイツセーと、なぜかびしょ濡れの『バツプルくん』が椅子に座つて休憩していた。

二人共、いつの間にか戻つてきていたのか。あつちは登山に行つたはずなのに、先に戻つてきているとは、向こうで遊びすぎたな……。

『リリティファさんもお久しぶりです』

「お、お久しぶりです。当主様？」

リリティファは疑問形で父さんに訊いた。父さんはまだ着ぐるみ姿だからだろう。

『ああ。私だよ。さて、イツセーくん、サイラオーグ。ロイも戻つてきたところで、食事の準備を始めよう。リリティファさんも食べていきなさい』

「は、はい……」

四人中二人が着ぐるみの状況に少し当惑しながら、リリテイファは返事をした。

その後、五人で騒がしく食事の準備を進め、俺たちが捕ってきた魚や、サイラオーグが森で捕ってきた鹿などで様々な料理を作っていく、少し遅めの、キャンプとは思えないほど豪華な夕食を摂ることになったのだった——。

Extra life 03 『ゆるキャラ』も楽じゃない

夕食を終えた俺——ロイをはじめとした五人は、一旦着ぐるみを脱いで談笑をしていた。

俺がイツセーとサイラオーグに言う。

「俺と父さんと散々『ゆるキャラ』言っているが、本来なら母さんが管理しているんだぜ？」

「うむ、彼女はいわゆる目利きだ。埋もれているものを取り上げる商才に恵まれている。グレモリー領の片田舎、その住民しか口にしない珍しい作物や、原住民の作る工芸品などを都市部で流行させ、一大企業に仕立てあげてしまう。彼女によつて救われた職人がどれほどいるか……」

本当、ただ怖いだけじゃないんだ。仕事をし始めれば手際いいし、何だかんだで優しいし。

いつかの病院で心配してくれたことを思い出して苦笑し、そのまま話を続ける。

「それにしても、母さんが若い頃はスゴかったらしいしな。俺はあんまり知らないが、『バアル家最強の女性悪魔』と呼ばれているぐらいだ」

「リアスの二つ名『紅髪ベにがみの滅殺ルイン・プリンセス姫』はそこから来ているんだが、リアスはまだかわいいものだよ」

俺もそれを聞いたときは驚いたが、今の母さんからは想像できないな。戦時中は、あんまり戦場で会わなかったし……。

俺は一度咳払いをして、話を戻す。

「——で、話は母さんの商才だったな。リリティファ、ここらへんに特産品とかないか？ 珍しい感じだったら、なおよしなんだが」

俺が訊くと、リリティファは首をひねる。

「えーと……この先の川を下った先に、綺麗で珍しい柄の織物を織る村があります」

リリティファはそう言いながら遠くを指さした。なるほど、織物か。

「父さん、どうしましょう。行ってみますか？」

「うむ、織物……か。それは興味深い。明日にでも行ってみよう」

俺たちがそう結論を出すと、リリティファは困り顔になっていた。

「……ですが、最近、この辺り一帯に山賊が出没しまして……。その村をよう襲撃しているんです」

なるほど、山賊が村を襲撃とは、穏やかじゃないな。つて、山賊……？ 何時間か前にぶっ飛ばしたような気が……。

「山賊って、あいっらかか？」

確認のために訊くと、リリティファは頷く。

「はい。あのヒトたちと、その頭領さんがいます」

「で、その頭領に告白されたと……。やれやれ」

俺が手を頭にやりながら嘆息し、首を横に振っていると、父さんが言う。

「山岳パトロールの人手が足りないのか。ふむ、領主としては山賊のことを耳にした以上、捨て置けない。……どれ、ここはひとつ山賊退治といこう」

膝を叩いて立ち上がる父さん。それに続くようにサイラオーグも立ち上がった。

「さすがは叔父上。当主自ら不逞ぶていな輩を退治とは……。上級悪魔の鑑、感服するばかりです。僭越せんえつながらこのサイラオーグ、加勢かせいしましょうぞ！」

「うむ、助かる。ロイとイツセーくんはどうするかね？」

父さんが俺たちに振ってきたが、答えは決まっている。

「俺は行きます。俺もグレモリー家の人間ですから」

「俺も行きます！三人を行かせて俺だけが行かないなんてできるわけないじゃないですか！」

ガッツポーズをしながら宣言したイツセーを横目で捉えつつ、訊いてみる。

「——で、本音は？」

「こんな美人の人魚さんを狙うなんて、許せません！」

それを横で聞いていたリリティアは、恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

「うむ、それでは共に山賊退治と参ろうではないか」

こうして、俺たちは山賊退治することになったのだった。

翌日。

険しい岩肌の山道を登る『バツプルくん』と『ゴモりん』、『ゴモりんJr.』、そして『ゴモりんJr. 2号』。

前の三つは俺たちが入っているわけだが、残りの一つにはイツセーが入っている。

そのイツセーが訊いてきた。

『あ、あの、なんで俺までこれを？』

『表向きはイツセーの正体を隠すためだ』

『では、裏向きは?』

そう返してきたイツセーに、俺は着ぐるみの下で笑みを浮かべた。

『イツセーにも俺たちの苦勞を知ってほしいからだ』

『……ですよね』

ちなみに、イツセーの着ぐるみは特注品で、中で鎧を装着できる作りになっている。これで戦闘も問題ないだろう。

俺たちが喋っていると、父さんが注意してきた。

『ここら二人とも。我々の言葉は「ゴモゴモ」や「ゴモモ」なのだよ?これを忘れてはいけない。いつだって、「ゆるキャラ」精神を忘れてはいけないのだ。我らは「ゆるキャラ」の精進のため、ここに来ていいるのだから。そうだね、サイラオーグ?』

『はい、おっしゃる通りです。今の俺たちはあくまで「ゆるキャラ」でしかないッ!』
気合い入りまくりのサイラオーグ。存外、山賊退治にノリノリなのかもしれない。

山道を進むこと三十分程、物陰からぞろぞろと現れる者がいた。

「おいおいおい、止まれ止まれ」

いかにも山賊つて格好の毛皮を着た物騒な男たちだ。見てみると、何人かは昨日吹っ飛ばしたやつのような。体中に包帯を巻いている。

山賊は忌々しそうに俺たちを睨んできた。端から見れば、変な格好だからな、仕方な

い。

俺が嘆息していると、山賊は吐き捨てるように口を開いた。

「つたく、ここはテーマパークじゃねえんだぞ？なんでこんな山中にラクダが3匹とリンゴのお化けが歩いてんだよ」

だよな……。返す言葉もねえよ……。

俺が口の端をひくつかせていると、山賊は高らかに宣言する！

「ここは『ビルバーバ一家』の縄張りだ！死にたくなかったら、おとなしく身ぐるみを置いていけや！」

『身ぐるみか。これは着ぐるみだが、それでもいいのか？』

サイラオーグが着ぐるみ姿でそう返すと、山賊はこめかみに青筋を立てて激怒した。

「んなこたあ見りゃわかるんだよッ！いいから、殺されたくなかったら脱げって……」

眼前の『バツプルくん』が高速で踏み込み、拳を放つ！同時に、激怒していた山賊が遙か後方に吹っ飛んだ！

「ぐぎゃああああっ！」

山賊は悲鳴をあげて後ろの岩に叩きつけられた。

サイラオーグは着ぐるみの手元に鬨気を発生させている。ただ殴っただけではなく、鬨気をまとわせて殴ったようだ。痛かっただろうな……。

そのサイラオーグが叫ぶ！

『欲しければ力づくで来いッ！俺の着ぐるみは無闇に渡せるほど安くはないッ！』

闘気を全身に纏い突き進む『バツプルくん』。この場で彼を止められるのは、本気の俺かイツセーだけだろう。

—

俺——兵藤一誠の前で次々と山賊を蹴散らしていくサイラオーグさん。そろそろ俺たちも参戦しないと、出番がなくなりそうだ！

『さて、やるいもよ』

横のロイ先生はそう言いながら、異空間からアロンダイトを取り出して手を伸ばすが……。

『い、いもつ、いもも……』

アロンダイトの柄が掴めずに悪戦苦闘していた……。だ、大丈夫なんだろうか……。

俺が心配そうに見ていると——、

『……でもおおおおおつ！』

突然叫んだと思つたら、そのまま山賊を殴り飛ばし始めた！ついに拳で行つちやつたよあのヒト！

お、俺も遅れないようにしないと！

四人で襲いかかる山賊を蹴散らしながら進むこと数分。

岩肌の山腹に大きな砦が現れた。外には大量の山賊が待ち構えている。

山賊の一人が、一際大きく粗暴そうな男に告げた。

「か、頭っ！あれです！あれがリングゴとラクダです！」

一歩前に出てきた山賊のボスと思われる男が、目を細目ながら言ってくる。

「こいつらの冗談かと思つたが、本当にリングゴとラクダじゃねえか。どうなってんだ、こりや……。イベント会場と間違えて登山してきたにしちや趣味が悪すぎだ！」

言われてみればそうですね！リングゴとラクダが山賊退治つて、よく考えなくてもなかなかカオスだ！

『バップルくん』が一歩前に出る。

『おい、貴様が頭目か？』

不敵に笑む山賊のボス。

「ああ、だとしたらなんだ？」

『近くの村を襲っているそうだな？ そのような不逞の輩、万死に値する。パール領「ゆるキャラ」代表「バツプルくん」として貴様らを成敗してくれようッ！』

『バツプルくん』の宣言に山賊たちが大笑いをあげた。

山賊のボスは巨大な斧を片手に息を吐く。

「おいおいおい、聞いたか、おまえら？ 『ゆるキャラ』様が俺たちを成敗だつてよ？ つたく、こんな山の上までそんな格好で来やがつてよ。どんな理由かは知らねえが、ハンパな力量は命を縮めるぜえッ！ やれえ、野郎共ッ！」

『オオオオオオオオオオオッ！』

山賊たちの叫声をあげて突っ込んできた！

それを見ていたロイ先生が肩をすくめる。

『言葉は不要か。行くぞ！』

『はい！』

ロイ先生は返事をしたサイラオーグさんと共に突撃していつてしまった！ 山賊たちは二人の高速の動きに翻弄され、次々と打ち倒されていく！

二人の異常なまでの撃破ペースに、完全に置いていかれてしまった！ けど、あの綺麗な人魚——リリティアアさんのためにも、カッコいいところ見せないと！

俺が意気込んで二人に加勢しようとすると、女性の声が届いた。

「これはどういうことでしょうね。あなた、ロイ？」

その言葉と共に現れたのは、リアスのお母さんだ！

怒りに満ちたご様子で黒いオーラをにじみ出している！

その後ろにはリアスの姿が！嘆息して首を横に振っていた。

すると、リアスのお父さんがハツとしたように、片言でリアスのお母さんに言う。

「……………ボクハ、『ゴモりん』ゴモ。コンニチハ」

それを聞いたリアスのお母さんが迫力のある雰囲気を持ちながら、目を厳しく細めた。

「それは、領主のお仕事をほっぽり出してまで演じなければならぬものなのではないか？息子と甥っ子を連れ出すなんて……。ねえ、あなた。いま吹き飛ぶのと、あとで吹き飛ぶのとで、どちらがお好みなのかしら？」

低く冷たい声音だ。吸血鬼の城でのロイ先生か、それ以上だと俺は感じた。それよりも、ロイ先生には何も言わないんですね……。

俺が気になったのを見てみると、ロイ先生はガタガタと小さく震えていた！これは言う意味ないですね！お母さんの恐怖が体に刻み込まれているよ！

グレンデルを前にしても余裕だったロイ先生が、たった一人の女性に怯えているのだ

！実際、横にいる俺も怖いんだけどね！

『ゴモりん』はふいに頭部を脱いで、その場に正座した。

「申し訳なかった。これにも深い事情があるのだよ、ヴェネラナ」

わずか一分で当主様が折れた！グレモリー男子は奥さんに弱すぎるよ！

ロイ先生はどうなるのかな……。レヴィアタン様に振り回される未来は目に見えて
いるけど！

俺がそんなことを気にしていると、山賊のボスが言った。

「何かよくわからねえが、チャンスだ！一気に攻めろ！」

『オオオオオオオオオオオッ！』

またやる気になった山賊たちだったが、

「……………お黙りなさい」

リアスのお母さんは、山賊冷たい視線を投げかけて、手元から膨大な魔力を解き放ち、
山賊もろともこの山の山の一帯を黒いオーラで覆い尽くしてしまった！

『ギヤアアアアアアアッ！』

悲鳴をあげて吹っ飛んでいく山賊たち！奥にいたボスもついでに空高く吹き飛ばされ
れていった！

この日、山賊一味は謎の着ぐるみ集団と女性悪魔によって山の一部分ごと吹き飛ばされ

たという。

かくして、母さんに連行された俺たちは、四人まとめて半日以上に渡ってお説教を受けることになった。

『ゆるキャラ』のプロデュースは母さんがすることになり、これにて一件落着……でいいのか？

余談だが、リリティアアが紹介してくれた織物も母さんに見出され、領土全域に広まっていくことになった。

リリティアアもその織物の宣伝ガールとして抜擢され、グレモリー領土で人気者となったのだった。

——のほうがいいが、問題が一つ。

『いつまでこのままなんだごも……』

「あと、五分だけお願いします」

「着ぐるみ越しじゃなくて、直接本人に抱きつきなさいよ……」

家に帰ったらロスヴァイセに迫られて『ゴモりんJr.』の着ぐるみを着せられ、なぜか熱いハグをされていた……。

黒歌が言っていたが、抱きつくなら俺本人にお願いします……。

総選挙のデユランダ

Life 01 年明け

色々と忙しかった今年が終わろうとしている頃。俺——ロイは、今年最後であろう面倒事に首を突っ込んでいた。

「にゅふふ、ロイ」

満面の笑みで右腕に抱きつく、酔っぱらっているセラ。

「うふふ……」

恥ずかしそうに笑みながら左腕に抱きつく、酔っぱらっているガブリエル。

二人とも顔が近い。息がかかるほど近い。ちよつとくすぐりたい……。

「おーでいんのくそじじい！かぐおっ！」

「なぜお主がここにいるんじや!？」

酔っぱらったロセに追いかけてまわされるオーデイン。そのせいで、ろくに酒や料理に手が出せないオーデイン。自業自得だけだな。

視線のずらした先では、酔っ払ったアザゼルが上半身裸で踊り、それに同じく酔っ払ったオリンポスの主神——ゼウスが即発されて踊り始め、これまた酔っ払ったミカエ

ルがその二人を見て爆笑。

酔つ払った義姉ねえさんに怒られ、正座しているコスプレ野郎、もとい兄さん。

——なんだこの状況は……!?

アザゼルと兄さんに誘われるがまま、忘年会に参加したのだが、様々な勢力の主神や代表者が集まるものだとは思わなかった。

特に説明もなかったから口セも連れてきたが、あの様子なら大丈夫そうだ。ストレス発散は大切だからな。

黒歌は置いてきた。てか、誘おうと思つたら逃げられた。何かしらの直感が働いたのかもしれない……。来なくて正解だったかもしれないな！なかなかカオスだぞ！

両腕を押さえられ、酒を飲もうにも飲めないし、何か食べようにも食べられない。なんだよこの生殺しは……!!

俺がどうにか二人を剥がそうとするが、謎の筋力でそれができない。俺ももつと食つて飲みてえのに！

本気で暴れようか迷い始めた頃、俺の胸に飛び込んでくる女性が一人。

「ロイヤン……。おーでいんのくそじじいつかまえるのてつらつてくたしやい！」

「……断る。面倒だ」

俺が視線をそらしながら言うが、ちょうど左腕に抱きついていたガブリエルと視線が

合う。向こうはにつこりと微笑えんでくるが、俺は苦笑で返す。

セラとロセからの視線が痛いのだ……い……あとで何かフオローしておかねえとダメだろうな！

俺がひきつった笑みを浮かべていると、ロセが俺の胸に顔を埋めてそのまま頬擦してくる。いつもの流れで頭を撫でてやりたいところだが、両腕は塞がれてしまっているのでもできない。

俺がため息を漏らすと、ロセが突然おとなしくなった。

「……………」

ロセの顔を覗きこんでみると、

「くう……………くう……………」

規則正しい呼吸で爆睡していた。こいつ、ヒトの胸を枕のように……。まあ、いいか。嫌ってわけでもねえ。

俺がロセの寝顔を見ながら癒されていると、両脇の二人が妙に静かなことに気づく。何かしら言ってきたり、リアクションしたりすると思うんだがな……。

ちらりと視線を向けてみると、

「ふふふ、ふにゆ……………」

「すう……………んん……………」

二人とも寝ていた。いつの間に潰れるほど飲んだのか……。俺は全然飲めていねえのに！これじゃあ、動こうにも動けねえじゃねえか！

俺が料理を前に悔しがっていると、踊っていたアザゼルがこちらに歩み寄ってくる。若干の憎しみのこもった邪悪な笑みを浮かべながら……。

「ロイ……。動くなよ？動いたら――」

アザゼルは懐から何かを取り出し、その先端を俺に向けてくる。

「――余計酷い事になるぞ」

アザゼルが取り出したのは、習字とかに使いそうな毛筆だった。

俺は口の端をひきつらせ、アザゼルに訊く。

「お、おまえ、何をするつもりだ……？」

「昔から今現在までの恨みを込めて、おまえに落書きする！日本の正月はこういうことをするみたいだからな！」

そう言いながら魔方阵を展開し、墨汁の入った紙コップを出現させる。そこに筆を突っ込み、墨汁を染み込ませていく……。

俺は逃げようとするが、三人に抱きつかれているため動けない。どうにか顔だけそらそうとするが――、

「これも何かの余興だ。ロイ、我慢してくれ」

「何だか楽しそうじゃねえか！」

兄さんとゼウスに頭を掴まれ、無理やり正面を向かされる。ダメだ、完璧に詰んだ……。

俺が諦めのついたことを強調するように息を吐くと、アザゼルが筆をこちらに向ける。

「さあて、覚悟しろよ……！」

「もうどうにでもなれ……！」

この後、なぜかアザゼルが筆を全員に回し始め、俺の顔は大変なことになった。止めない兄さんも兄さんだが、義姉さんもやってくるとは思わなかった。

ユーグリットの件で疲れているだろうから、俺と兄さんとで無理やり連れてきたんだが、正解だったな。落書きされたけど！

「——って、いい加減にしろおおお！」

俺の叫びは無情にも無視され、この後も忘年会は続いたのである。

もちろん、しばらくしてから起きた三人から爆笑されたの言うまでもない。墨汁つて、簡単に落とせるよな……？

時が流れて元旦。

「あゝ、動きたくねえゝ」

「そうだにやゝ」

「我も」

俺と黒歌、オーフィスはこたつに入りながら突つ伏していた。

リアスたちは京都に初詣に行つたが、忘年会で疲れ果てた俺は、兵藤宅でのんびりさせてもらうことにした。てか、こたつに入つたら出られなくなつた……。

ロセからは抗議的な視線を向けられたが、忘年会の惨状を思い出したのか、引き下がってくれた。

こたつに入つてみかんを食べながら、ポケットとっていると、黒歌が寄りかかってくる。こいつ、クリスマスにプレゼントをやつてから、余計に絡んでくるようになった気がしてならない。俺的には感謝の思いを伝えたかっただけなんだがな。

次のみかんを剥いていると、黒歌が袖を引っ張ってくる。俺が黒歌に目を向けると、

「あー」

と、間抜けに口を全開にしていた。なんだ、指を突つ込んで欲しいのか？

俺が疑問符を浮かべていると、黒歌がみかんと自分の口を交互に指さし始めた。あー、そういうこと。

みかんを剥き終えた俺は笑みを浮かべ、丸ごと黒歌の口にぶちこんだ！

「んぐ!?!」

驚く黒歌だが、そのままみかんを口に押し込んで咀嚼し始めた。……ま、まじか。丸ごといきやがったぞ……。

みかん丸ごとを噛みながら睨んでくる黒歌。食わせてやったのだから、文句はないだろう。

俺は鼻で笑って次のみかんを剥き始めると、今度はオーフィスが袖を引っ張ってくる。

「ん?」

そちらに目を向けると、

「あー」

黒歌同様に口を全開にしていた。つまり、そういうことだろう。

俺は小さくため息を吐き、みかんを小さく分けてから口に放り込んでやる。イツセーたちがいないから、俺にかまって欲しいんだろう。

俺がオーフィスにみかんを少しずつあげていると、黒歌が抗議の声をあげる。

「ちよつと！なんでオーフィスには普通なのに、私には丸ごとなの!？」

「小さい子にいたずらはしない主義だ」

冷静に返しながらみかんを食べる。……う！キツイ酸っぱさだな……。

俺が眉を寄せていると、黒歌はため息を吐いていた。

「子供に優しいのはいいけど、もっと女にも優しいほうがいいにや」

「へいへい」

黒歌に適当に返し、再びオーフィスにみかんを食べさせる。甘いやつだといいいんだがな……。

「うまうま」

大丈夫だったようだ。まあ、酸っぱくても平然としていそうだけだな。

小さくため息を吐き、ポケットと去年を振り返る。

十年間続けた任務が終わり、それから色々な面倒に巻き込まれて、その過程で左腕なくなつて、深紅の力が手に入つて、ロセに告白して、ガブリエルに告白(?)されて……。

激動すぎねえか、去年。その前の数百年が平和に思えるほど濃い一年になつてい
じやねえか……。

それを自覚して再びため息を吐く。今年、どうなるんだらうな……？

l i f e 0 2 新たな問題

悪夢の新年会から数週間、ついに駒王学園三学期が始まった。

旧校舎にはいつものオカ研メンバーと生徒会メンバー、アザゼルが集まっている。

全員いることを確認して、アザゼルが話し出す。

「新学期早々だが、悪いニュースだ。ま、悪いと言っても最悪ってわけじゃないが、おまえらの耳には入れておいたほうがいい」

イツセーたちの表情が固くなる。本当、新年いきなり問題発生とは、忙しくなりそうだな。

それを確認して、アザゼルは続ける。

「教会の一部信者——主に所属していた戦士たちがクーデターを起こしたのは話したな？」

まあ、簡単に言うと、今まで敵対していた奴らと突然「仲良くしましょう」と言われでも無理だ。と感じる奴が多く、不満が溜まりに溜まっていたわけだ。それが爆発し、現在発生しているクーデターに繋がってしまった。

俺が続く。

「——と、言っても転生天使が頑張ってくれたおかげで大半は收拾できてるんだが……首謀者の三名が逃亡中、その三人にはまだかなりの数の戦士が付き従っているらしい」
 ソーナが名を上げ始める。

「すうききよう司教枢機卿であるテオドロ・レグレンツィげいか倪下、すうききよう司祭枢機卿であるヴァスコ・ストラダ倪下、そして助祭枢機卿であるヴァルド・クリスタルデイ倪下です」

それを聞いた一名を除いたメンバーが、一様に険しい顔になる。

その一名——イツセーはよくわかっていない様子だ。まだまだ勉強不足だな。

「イツセー、簡単に言うぞ？教会の上から二番目、三番目、四番目の役職の奴がクーデターをやっているってことだ」

「……あ、ありがとうございます」

「だが、ストラダってかなりの年じやなかったか？」

イツセーの礼を流しながら訊いた俺の質問に、イリナが答える。

「はい、御年八十七になります」

「は、八十七……前デュランダル所持者もそんな年なのか」

俺の苦笑混じりの一言に、ゼノヴィアは目元を険しくさせた。

「……年齢のことは忘れたほうがいい。あの方は……生きる伝説、いまだ肉体は衰えていない」

「どんな鍛え方してんだよ……」

俺が呆れ気味に漏らすと、アザゼルが険しい表情のまま言う。

「まあ、ロイは任務とかで知らないことが多いかもな。ストラーダは昔にコカビエルと一戦交えたが、相当追い詰められた。つまり、少なくとも昔のおまえ並みに強いってことだ」

それから向こうも強くなっていることを考慮すると、今の俺と互角かそれ以上か……。

俺はあごに手をやりながら次のヒトに話題を変える。

「クリスタルディはエクスカリバーの使い手だったな。確か……三本を同時使用だったか？」

俺が若干疑問形で言うと、アザゼルは頷く。

「ああ。クリスタルディが現役だった頃はグリゴリでも話題の人物だった。理論上、全て使えたのではないかと言われてもいる。ていうよりも、ストラーダもクリスタルディも戦士時代に大きく名を馳せた怪物だよ。多くの戦士を育成した成果も相まって、戦士出の聖職者としては二大巨頭だ。そんな二人が声をかければ、どれほどの戦士が動くか……」

元デュランダル使いと、元エクスカリバー使いか。何か、変な縁みたいなものを感じ

るんだが……。

「それで、テオドロ・レグレンツィは最年少で司祭枢機卿に上り詰めたスゴい奴。……で、あつてるよな？」

再び疑問形で言うが、アザゼルもよくわかっていないような表情になっていた。

「俺もその程度の認識しかない。イリナ、どうなんだ？ 転生天使のおまえなら何か知ってるんじゃないか？」

イリナはあごに手をやり、首を傾けて考えている様子だった。

「私も名前だけしか知らないんです。シスター・グリゼルダも同様かと……」

転生天使でも会ったことがない司祭枢機卿、何かありそうだな。どんな奴かを想像してみるが、ほとんど予想つかない。とりあえず、転生天使でも詳しくは知らないほどの重要人物ってことだよな？

俺が横で小さく唸っていたせいか、アザゼルが若干憎々しげに言ってくる。

「おまえ、ガブリエルにでも聞いてみればどうだ？ 忘年会のとき、抱きつかれていたじゃねえか」

「……あいつも忙しいだろうから……って、なんでその話題を出すんだよ……」

俺は横目でリアスたちのほうに目を向けるが、一様に疑問符を浮かべていた。

「……ま、タイミングを見て訊いてみるさ。さっきも言ったが、あいつは忙しいだろうか

ら、そんなすぐには無理だろうよ」

「頼んだぜ」

俺の言葉に頷くと、アザゼルが改めて口にする。

「さて、話を戻すぞ？クーターを起こした連中が今も逃亡しているが、目的地はおそらく、ここだ」

アザゼルが人差し指を下に向けながら言った。

俺が続く。

「捕らえた戦士から聞き出した情報では、奴らはD×Dとの邂逅を望んでいるそうだが、同盟の中心とも言えるおまえらと会ってみたいんだろう。話し合いで済めばいいが……」

緊張感が増すイツセーたちにアザゼルは苦笑した。

「ま、そこまで気を張るな。命懸けの連続でそうなっちまうのもわかるが、今回は血生臭いことにはならないだろうよ。実際、クーターで怪我人は出ているが死人は出ていない。今回はあくま戦士の不満が爆発しただけだ」

俺はアザゼルに続く。

「だが、こういう時をテロリストは狙ってくる。噂じゃ、リゼヴィムが煽ったって言われているからな。用心を忘れるなよ」

『はい』

全員の返事を確認したところで俺は時計を見る。

「さて、そろそろ会議の時間だ。行ってくる」

俺の言葉にアザゼルが訊いてくる。

「ん？会議なんてあつたか？」

「体育教師は忙しいんだよ」

俺はそう言つて旧校舎を後にするのだつた——。

——で、俺が訪れたのは冥界だ。首都リリスの大通りにあるカフェに来ていた。格好はラフなもので、髪も黒く染めている。正体を隠してでもやりたいちよつとした用事があるのだ。

ちなみに、会議は実際に行われており、それは手早く済ませてきた。アザゼルたちに嘘は言っていない。

俺が冥界に訪れた理由、それは——。

「久しぶりだな、ゼロ」

「その呼び名は止めてくれ……。まあ、今はそのほうがいいか」

俺が苦笑しながら返すと、きつちりとしたスーツ姿にサングラスをかけた、元同僚の男性悪魔が向かいの席に座った。

特に話すこともないので、話題に入る。

「……で、どんな感じだ？」

俺の問いに、彼はため息を漏らす。

「クレーリア・ベリアルのごとは、あまりわからなかった。骨折り損だ」

「そうか、悪かったな」

「……………」

「……………」

そのやり取りを最後にお互い黙りこむ。空気が重いが、そうやって当たり前だろう。俺が頼んだことが頼んだことだ。

少し前、今もエージェントとして活動しているこいつには「クレーリア・ベリアルについて調べてくれ」と頼んだのだ。

病院で色々と考えて、俺なりに首を突っ込んでみることにしたのだが、俺一人では全然情報が見つからない。——不自然なほどに。

そんなわけで、今でも現役のこいつに頼んだわけだ。だが、こいつでもまったく探れ

なかつたとなると、いよいよよきな臭くなってきたな……。

「そう言えば、タバコを吸っているらしいな。吸うか？」

なんて言いながらタバコを箱ごと差し出してくる。なんで俺がタバコを吸っているって知っているんだ……？ 誰かから聞いた？

「たまにな。最近は吸えてねえから、助かる」

俺が手をだして受け取ろうとすると、いきなり顔を寄せてくると、耳元でぼそりと漏らす。

「(あまりこの件には関わるな。おまえのためにも、レヴィアタン様のためにも……)」

そう言うと彼は席を立ち、そのまま店を出ていった。

……なんか、かなりヤバイことに首を突っ込んでいるみたいだな。まあ、覚悟はしていたが……。

ふと、テーブルにタバコ箱が忘れられていることに気づく。あいつ、大事な話をしに来て忘れ物をするかね……。

俺はため息を吐き、そのタバコを手取る。——そして、同時に違和感を感じた。なんか、妙に重い。新品でもないのに、

タバコ箱の中身を覗きこむと、中にはUSBと思われるものがタバコに紛れこんでいた。

あいつ、何か掴んだのか……。

俺は箱からタバコを一本取り出し、火をつけた。何かかなりヤバイものに、あいつを巻き込んでしまったようだ……。

人間界に戻ってきて数時間経ち、あつという間に深夜になった。

兵藤宅の地下プールに、オカ研、デユリオ、グリゼルダ、ヴァーリチーム、スラッシュ・ドッグ刃 狗
が集まっていた。

何か大問題がってわけではないのだが、イツセーが『新技』を見てもらいたいというので集まったわけだ。

——で、見た感想としては、よく考え付いたもんだ。と言ったものか、俺では思いつかないものだった。

その発表を終え、イツセーたちはそのままプールで遊びはじめたのだが、俺はプールに入らずそのまま戻ることにした。あのUSBを確認しておかねえと……。

足早に立ち去ろうしたが、突然腕を引つ張られ、止められる。俺は振り向きその引つ張った相手を見ると、顔を真っ赤にした水着姿のロセだった。

「あのく、ロイさん？」

「ロセか、どうした？」

「えっと、その……」

ロセは口ごもっているが、チラチラとイツセーの方を見ていた。そのイツセーはリアスと朱乃のオイル塗りをしているわけだが……。

「……やっつてほしいと？」

俺の質問に無言で頷くロスヴァイセ。

「了解。オイル持つてこい、やっつてやるよ」

「あ、ありがとうございますっ！」

ロスヴァイセは満面の笑みを浮かべオイルを取りにいった。

たまにはいいだろう。こういうのも……。

俺が苦笑していると、背後から誰かに抱きつかれる。背中に強烈な柔らかさが伝わってきた……！

「なら、私もやっつてもらおうかにや」

抱きついてきたのはもちろん黒歌だ。いつものように気配もなく抱きついてきた。つて、こいつから布の感覚がないんだが、もしかして、直に触れあつてるのか……？

「あー、黒歌？おまえ——」

「何にも着てないにや。どう？気持ちいいかにや？」

なんて言いながら体を擦りつけてくる黒歌。彼女の身体の柔らかさを全身で感じてしまおうとうとうう！

「な、ななな何してるだあああああ！」

戻ってきたロセに押し飛ばされる黒歌。まあ、相変わらずの身のこなしで華麗に着地していたがな。

黒歌は余裕そうに笑みながら言う。

「ただのスキンシップにや。あんたもこんくらいできなきや、あいつらに勝てないわよ？」

！。 それを受けたロセは全身をプルプルと震わせながら水着に手をかけて、勢いよく――

「させるわけねえだろ！」

急いでロセの手を押さえ込み、それを阻止する！いきなり脱ごうとするなよ!!?リアスたちの目もあるつてのに！

ロセはじたばた暴れながら怒鳴る。

「こうでもしねっと、ロイさの心を掴めね！」

「そんな事しなくても大丈夫だつて！おまえに惚れてるのは事実だから！」

俺が勢いのままそう言うのと、ロセの顔が真っ赤に染まり、湯気が出始める。いけね、まだ慣れていないんだつた……。

俺は拘束を解いて素早く話題を変える。

「——で、オイルだろ？塗つてやるから横になれ」

「は、はい」

「はいにゃ」

ロセと黒歌が並んで横になる。……黒歌にまでやらねえといけないのか……。

俺はため息を吐きながら、二人にオイルを塗ることにした。まあ、あとで何かと言われるのは面倒だからな。

——で、なんかやるたびにロセと黒歌が「はうっ……」とか「ふにゃ……」とか甘い声を出しながら潤んだ眼で見つめてきて、崩れかける理性を支えるのが大変だった。

あいつに頼んでおいてなんだが、USBは明日にしよう。なんか疲れた……。

l i f e 0 3 情報

俺——ロイは、ロセと黒歌へのオイル塗りのせいでろくに確認できなかったUSBの中身を、自前のノートパソコンで確認していた。

「……………これは、なかなかだな……………」

それを確認した俺は、間抜けに声を漏らした。

調べたあいつの腕がいいってこともあるんだろうが、かなり事細かに情報が記されている。つてか、明らかに関わってはいけない類いの情報だ。

クレーリア・ベリアルがゴシツプ好きだったことから始まり、彼女が何を知り、なぜ殺されてしまったのか、なんとなくわかってしまった。

使用者の力を数十から数百倍にまで高められる悪魔イーザイル・ピースの駒にはないはずの『王』キングの駒、まさしくレーティングゲームの闇に当たる情報。彼女はこれに触れて、消されたのか……………? だとしたら、相当ヤバイぞ、この情報……………。

俺は頭を抱えながらため息を漏らした。俺もあいつも、下手しなくても殺されるんじゃないやねえか……………?

俺たちは現役のエージェント、昔の任務で恨みを買っているのは確実。その手の輩に

殺されたとか、筋書きはそうなるんだろうな。

ページを下にスライドさせていき、情報を確認する。どこで仕入れたのか、『王』^{キング}の駒を誰が使ったのかまで書かれているようだ。

深いため息を吐き出す。レーティングゲームトップランカーのほとんどが使っているじゃねえか……。だが、デイハウザーをはじめとした何人かは使っていないようだ。それは、いい情報……。なのかな？

ページの一番最後にこんな一文が書かれていた。

『——覚悟はできている』

向こうも覚悟ができているようだ。お互い、背中には気を付けないとな……。

やれやれ……。自分から首を突っ込んだとはいえ、かなり面倒なことになりやがったな……。

その日の深夜。

この地域の『D×D』メンバーが兵藤宅のVIPルームに集まっていた。

今日の午後、イツセーたちがクーデターを起こした連中と接触、宣戦布告されたらしいのだ。

——というわけで、ミカエルと連絡を取り合っていた。

『申し訳ありません。立て続けにこちらの関与する事件に巻き込んでしまつて……』

開口一番にそう言うミカエル。「立て続けに」というのはクリスマスのあれのことを言っているのだろう。

『彼らの要求は「D×D」との一戦です。特に駒王町に住まうあなた方との一戦を所望しているのです』

ミカエルの言葉を聞いてイツセーが訊く。

「どうして俺たちと……?」

その質問に俺が答える。

「この町は同盟のスタート地点になつた場所だ。あいつらにとっては複雑な思いを持つ場所なんだろ。そこで、おまえらもそのスタートに完全に首を突っ込んでいる。逆恨みに思えるかもしれないが、あいつらにとって『D×D』ってのは複雑でいて、憎い相手なんだろう」

コカビエル襲来、三大勢力の和平、そして和平の象徴である『D×D』、クーデターの

相手として狙ってくるのはある意味当然だろう。

グリゼルダが言う。

「クーデターに関与した者の大半が……家族を悪魔や吸血鬼に殺められたり、人生を狂わされた者ばかりです。復讐のため、あるいは悲劇を繰り返さないため、彼らは戦士となった——。三大勢力の同盟に誰よりも異を唱えたのは彼らや、彼らが育てた教会上層部の方々でした」

俺も戦士側だったら納得するのに時間がかかるか、クーデターに参加していたかもな。憎い相手と手を取り合うのは、難しいことだ。

イリナが言う。

「なかには離反して他の組織に移動した者もいたけれど、大半は信仰心のある敬虔な信徒ばかり。……神を信じながらも、不満を抱いていた」

それを聞いた俺はため息を吐きながら言う。

「とは言ってもこれは完全な内輪もめだ。サイラオーグやシーグヴァイラは呼べないぞ？上の連中がうるさいからな。それにこの隙にクリフトが冥界を攻めようとするかもしれないねえ」

ミカエルが険しい表情で言う。

『……我々の管理不足がそもそもの原因。今回は私たちが——』

「待て、おまえは動くな」

アザゼルがミカエルの言葉を遮る。

「ミカエル、おまえは天界の象徴であるべきだ。ここで厳しい決断を下すのも、トップの役目だろうと俺も思う。――が、この一件は言い方を変えれば喧嘩だ。事情はどうであれ、無理矢理抑え込めば禍根が残るだろう。だったら、落とすところはきちんとしておきなさい」

『しかし、アザゼル。それを皆さんに任せっきりにしてしまうのも……』

「俺は気になってもいるのさ。あのストラータとクリスタルデイが闇雲にクーデターを起こしたとは思えない。何か考えがあるのだろう。なんとなく気づいてはいるんだろ？」

『どちらも幼い頃から見えてきますから、彼らがどれほど敬虔な信徒か、よく知っていますよ。おそらく、回りくどいように、真っ直ぐな想いを抱いているのだと思います』

ミカエルが一通り話し終えたところで訊く。

「ところで、テオドロつて何者だ？ イッセーたちからの話だと十二そこらに見えると聞いたが」

『テオドロ・レグレンツィは「奇跡の子」なのです。その中でも彼の才能は抜きん出たのです』

「奇跡の子——天使と人間のハーフか」

俺が返すと、ミカエルは頷いた。

本来、あり得ないとまで言われている天使と人間のハーフ。天使は欲を持つと墮天する。だが、特別な儀礼と結界を用いれば、いちおうは可能だそう。その時にどちらかが肉欲に溺れれば、天使は墮天してしまふ。純粋な愛を抱き続けなければいけないのだ。……俺は、途中で邪念にかられるから無理だな。

まあ、その高いハードルを越えれば、天使と人間は子作りできるわけだ。で、産まれるのが『奇跡の子』というわけだ。

ふいにミカエルと目が合う。な、なんだ？何かあるのか……？

俺が小さく首をかしげていると、ミカエルが訊いてきた。

『……こんな時に訊くのも野暮ですが、ガブリエルとはどうですか？「あの部屋」、使われているといいのですが……』

『——っ!?!』

部屋中の視線が俺に集中する。大半は呆れの色が強い冷たいものだが、一部は怒りや嫉妬にかられたようなものだ。ところで、『あの部屋』って、なんだ？

俺がよくわからないまま頬をかきながら訊く。

「なんだ、その『部屋』って」

『おや、ご存知ありませんでしたか。実は、「悪魔と天使が子供を作る部屋」を開発しまして……』

「へえ……。ん？」

悪魔おれと天使ガブリエルが子供を作る部屋……？

「……なんてもん作ってんだよ」

俺がジト目で睨みながら言うと、ミカエルは苦笑する。

『ガブリエルも奥手ですね。私としては、次の世代を期待しているのですが……』

「ちよつと待て、クリスマスに問答無用であいつを送り飛ばしてきたのは、そんな裏があったのか」

俺の若干の怒気を込めた一言に、ミカエルは笑みで受け流した。この野郎、一発殴りてえ……。

俺がオーラをにじませながら右拳を血管が浮き出るまで握りしめっていると、アザゼルがひとつ咳払いをして話を戻す。

「つてわけだ。悪いが、あいつらの挑戦を受けてもらいたい。天界と教会の尻拭いってやつだ。いつも貧乏くじを引かせて悪い」

アザゼルの言葉にリアスは不敵に笑み、ソーナもやる気を感じる表情（長い付き合ひならわかるほど小さい変化だが）になっていた。

「……和平の原因はコカビエルだが、そもそもあいつをあそこまで狂わせたのは俺かもしれねえ。昔の自分の詰めの甘さがこれを招いたなら、全力を尽くすさ」

俺が若干の悲哀を込めて言うと、アザゼルがため息を吐く。

「あんまり背負いこむな。あいつを止められなかった俺も俺だ」

俺たちが少しばかり重い話をしていると、イリナが苦渋に満ちた表情でミカエルに訊く。

「私も参加してもよろしいのでしょうか？リアスさんたちの味方として——」

『ええ。あなたには苦勞をかけますね。私が不甲斐ないばかりに……』

申し訳なさそうにするミカエルだが、デュリオは笑って首を横に振っていた。

「ミカエル様が悩む必要性なんかありませんって。こういうのはどこでも起こりうる事件です。何かを変えれば、必ず不満を抱く者は現れてしまうもんですよ」

それを聞いたグリゼルダは感心していた。

「あなたがリーダーらしいことを言うなんて……成長しましたね」

「姐さん、もう少し俺のこと評価してくれるとうれしいんだけどなあ……」

デュリオはガツクリしながら言うが、今ので俺の中の評価も上がったぞ。ようやくリーダーっぽくなってきたな。

「天界も動いてくれるのはありがたいね。ところで、ストラーダとクリスタルデイって

「どんくらい強いんだ？大雑把でいいから頼む」

俺の言葉にグリゼルダがしばし考え、口を開いた。

「そうですね、デュリオと互角です」

「聞かなきゃよかつたかな……」

デュリオオクラスが二人とかホントに人間なのか？もはや化け物じゃねえか……。

「いやーあの二人、マジで強いから気を付けようねえ」

ホント、気を付けよう。

俺たちがそんなことを話していると、アザゼルが言う。

「まとめると、挑戦を受けるのは、リアスチーム、ソーナチーム、D×Dの『御使フレイブ・セイントい』

組ということだな。サイラオーグとシーグヴァイラには俺から言っておく。あと、

スラッシュ・ドッグ

刃 狗を裏のサポート要員に回しておくぞ。まあ、あいつならうまくやってくれるだろう。

そう。それと、黒歌とルフエイにも手伝ってもらえ何かしてくれるだろう」

まあ、それは俺から話しておこう。黒歌になにされるかわかったもんじゃねえが、

横に小猫カルフエイがいれば問題ないはずだ。

バックアップは十分。あとは前線が頑張らねえといけねえ。出来れば話し合いで済

ませたいが、もう、その機会は過ぎ去っているだろう。……やるしかない。

俺はそれを確認し、剣士三人の方を見る。木場、ゼノヴィア、イリナの表情は複雑極

まりないものになっていた。

その後の話し合いで決戦は三日後と決め、本日は解散となった――。

「ロイ、ひとついいか？」

部屋に戻ろうとした矢先、アザゼルに絡まれる。肩を掴まれて呼び止められたのだ。

「……なんだ？」

「ガブリエルとどういう関係だ？」

真面目な顔で訊いてくるアザゼル。鋭い眼光で睨み付けてきていた。

俺は気まずげに視線を外しながら言う。

「クリスマスに、『未永くよろしくお願いします』って言われた……」

「へえ〜」

アザゼルはあごを擦りながら言うのと、思いつきり肩を握ってくる！ な、なんか肩からメキメキと嫌な音が！

俺が痛みに耐えながら睨み付けて殴ろうとすると、アザゼルは手を離す。

「どうしておまえばかりモテるんだよおおおお！」

血涙を流してそう叫びながら部屋を飛び出していくアザゼル。あいつ、大丈夫か？

俺は小さく息を漏らし、今度こそ部屋を後にしたのだった。

life 04 チーム分け

決戦の日時は決まったが、その日を迎える前にやることがひとつ。

それを終わらせるために、俺——ロイは兵藤宅の地下に来ていた。

「——って、わけだ。色々を手伝ってくれ」

「はい！お任せください！」

「了解にや」

ルフエイと黒歌に手伝いを頼みに来たのだ。ルフエイはともかく、黒歌を含めたヴァーリチームが参戦したら殺しあいになりかけない。あくまで裏方のサポートだけだけだな。

黒歌が口元に人差し指をやりながら笑む。

「で、何かお礼とかはないの？」

「……あるわけねえだろ……」

嘆息混じりに返すと黒歌は「え〜」と不満げに漏らした。

「悪魔はギブアンドテイクでしょ？何かしてよ〜」

身を乗り出して言ってくる黒歌。ギブアンドテイク……か。確かに悪魔は仕事をこ

なし、その対価をもらってなんぼだ。だからって、いきなり言われてもなあ……。

俺があごに手をやって考えこんでいると、黒歌が妖しく笑む。

「じゃあさ、『添い寝』させてよ」

「……は？」

「だから添い——」

「聞こえてたよ。……なんでそうなる」

俺が訊くと、黒歌は説明を始める。

「戦ったら疲れるでしょ？」

「……だろうな」

「仙術使えば、疲れ吹っ飛ぶでしょ？」

「……ああ」

「元気になったら私を押し倒して」

「……ん？」

「そのまま子作——」

「ストツプ。バカじゃねえの」

俺が軽く睨みながら言うと、黒歌は可笑しそうに笑う。

「にやはは、冗談にや。単に私が添い寝したいだけにや」

それでも問題あると思うんだがな。冗談で流してもいいかもしれないが、こいつの場合、報酬ありとなしでは、反応の速さが違うだろう。

俺が真剣に思慮をし始めるなか、ルフエイと黒歌が色々と言いつつ合っていた。聞こえた部分だけだが、「あまりからかつてはダメですよ」とか「別にいつも通りにや」とかなんとか。ルフエイは報酬なしでやってくれるんだな。

俺は盛大にため息を吐き、口を開く。

「りよーかい。添い寝までなら許可してやるよ。ただ、しつかり仕事しろよ？向こうで何もなくて出番なしでも仕事してない判定だからな？」

「わかったにや。でも、その条件だと、向こうが変な邪魔してくれないか期待しちゃうけどね」

笑みながら言う黒歌。そもそも向こうがそんな姑息な手を使ってくるとは思えない。これなら問題なく一人で寝られるだろう。

「ま、何かあつたら頼むぞ」

「了解にや」

笑みを崩さずに頷く黒歌。やれやれ……。ストラーダ、真つ向勝負で頼むぞ……。

俺が敵にそんな事を祈るなか、ルフエイは、

「その、申し訳ありません……」

と、申し訳なきように頭を下げてきた。俺は「気にすんな」と一言で返し、二人の使っている部屋を後にした。

——で、自分の部屋のドアを開けたはずなんだが……。

「……なんだ、これ……」

まったく見知らぬ部屋に出た。

ざっと見た感じ、二十畳そこらの広さで、壁には何かの絵画が飾られている。それ以外にも装飾がいくらかあるが、最も目を引いたのは、部屋の中央に鎮座している天涯付きのベッドだ。

クローゼットの家具はなく、ベッドと椅子、テーブルとそれに乗った簡単なティーセット、時計程度しか確認できない。なんか、長時間いるよりは短時間休憩するような部屋だな。

俺は頬をかき、警戒しながら部屋に入る。なんか、光力に似た力を感じるから、悪魔

サイドが用意したのではないだろう。ならば、天界か墮天使サイドが用意したんだろうと予測できた。だが、こんな部屋になんの意味が――、

『実は、「悪魔と天使が子供を作る部屋」を開発しまして……』

これかあああ……！まさか話を聞いてすぐ来ることになるとは思わなかったよ。てか、いつの間に用意された!?

俺はそう思いながらゆつくりと後退。部屋から出ようとするが、

「……あ。お、お待ちしておりましたあ………」

突如、ベッドの影から声が発せられた。いや、聞き覚えがある間延びした声……つてか、もうあいつしかいねえ。

俺は小さくため息を吐き、警戒を解く。

「ガブリエル、何か用か？とりあえず、出てこい」

俺の言葉を受け、ガブリエルがゆつくりと顔を出す。顔が真っ赤になっているが、いつものことなので流す。

俺は近くの椅子に腰掛け、訊いた。

「で、何しに来た。こつちとしては、大事な決戦が近いんだが」

「それに関して、少し情報をもってきましたあ」

ガブリエルが机を挟んで向かいに座り、書類の束を渡してきた。ざっと目を通してみ

れば、ストラダーとクリスタルデイを始めとして、彼らに付き添っている戦士たちの素性が書かれていた。

なるほど、昔の部署を知れば、多少立ち回りの癖がわかるか。だが――、「少しつて量なのか、これ……」

口の端をひきつらせ、俺は書類をめくっていく。何だこれ、十枚とかそんなレベルは軽く越えてやがるぞ。

俺は頬をかき、この際取り巻きは諦めることにした。ストラダーとクリスタルデイの癖とか武器がわかれば、多少どうにかなるだろう。

そう決めたのはいいが、こいつら本当に化け物だろ……。二人とも現役時に使っていた聖剣のレプリカを持っている。

本物の五分の一度の力しかないらしいが、二人にかかれば本物と同じ力を引き出してくるだろう。現役の時剣使いを相手にしていると思わないと痛い目に遭うだろう。

だが、二人には人間ならではの弱点がある。二人とも結構な年だ。長期戦に持ち込めば、限界がくるだろう。嫌な勝ち方だが、最悪その手もある。

あごに手をやりながらそんな事を考えていると、ガブリエルが口を開く。

「……申し訳ありません。こちらの不手際ですのに……」

書類から視線を外し、ガブリエルに言う。

「ん？まあ、気にすんな。尻拭いには慣れてる」

なんて事のないように言うと、ガブリエルは「ありがとうございます」と返してきた。まあ、下手な作戦が通じる相手なのかって疑問もあるから、詳しくはリアスやソーナに任せるとしよう。今はそれよりも気になることがある。

「書類はありがたいが、別に手渡ししじゃなくても良かったんじゃねえか？」

書類を机に置きながら訊いてみると、ガブリエルの顔が赤くなる。

「いや、あの、その……」

顔を俯かせながら、聞き取るのがやつとの声を発する。

「あなたに会いたくて……」

「……ああ。うん、どうも」

いきなりそんな事を言われたので、俺まで顔が赤くなる。いや、まさか、そんなストレートに言われるとは思わなかった……。

頬をかきながら小さくため息を吐き、時計を確認する。

「さて、寝るとするか」

「……ふえ!？」

嫌な間を置いて、ガブリエルが間の抜けた声を出した。ベッドと俺を交互に見ているが、何を期待しているんだ？

俺は後頭部をかきながら訊く。

「——で、どうやったたら戻れるんだ？とりあえず、出ればいいのか？」

「えーあ、そうですね……。はい、すぐに戻します……」

若干残念そうに言うガブリエル。まあ、何かするにしても次の機会にしよう。決戦が近いんでね。

そんなわけで、書類を持ってガブリエルと共に一時退室。ドアノブを付け替えてからドアを開けると、俺の部屋に戻っていた。……相変わらずの技術力だな。

ガブリエルは俺の部屋に入ると、転移用魔方陣を展開して「それでは、またお会いしましょう」と言って転移していった。

……やれやれ、今日も疲れたぜ。主に女性関係でな！

そんなこんなで、ようやく訪れた決戦当日。決戦に参加するメンバーは兵藤宅の転移室に集合していた。

メンバーが揃ったところで、皆に言う。

「これは教会クーデター組との言つちまえば『喧嘩』だ。場所はこの転移魔方陣の先に

作ったレーティングゲーム用のフィールドで行う。相手もそれを承知した。ここよりは派手に暴れられる」

ソーナが言う。

「深夜零時ちようどに開始ということになっています。相手も、こちらが用意した転移型魔方陣でフィールドに来ることでしょう」

俺がソーナに続く。

「その転移で牢獄につてのも考えたが、そんなことしたら余計に禍根が残っちゃうからな、やらないことになった。それに、喧嘩をするなら正面からつてのが礼儀だろう。上の連中もクーデター組に退路がないのも重々承知なんだろうよ」

俺たち意見を受け入れてくれる辺り、多少は信頼してくれているのだろうか。それとも俺たちを信用したストラダとクリスタルデイを信頼しているのか。まあ、後者だろうけどな。

アザゼルが続く。

「貧乏くじを引かせてしまつて申し訳ない。だが、ストラダ、クリスタルデイ、この兩名がただイタズラに不満を抱いた戦士を連れてきてはいないだろう。戦士たちの憤りを俺たちにぶつきたいのが本音だろうが、枢機卿の三名の真意は他にある。ある程度、ヴァチカン本部から情報を得ていてな……あいつらは本当の大馬鹿野郎だつてことが

わかった」

アザゼルは苦笑いしているが、どことなく呆れと悲哀の色を瞳に映していた。

まあ、俺は戦闘に集中させてもらうがね。

俺がもうひとつ情報を言う。

「それと、フィールドのモデルは駒王町だ。学園を中心に半径十キロの地域を再現した。フィールドの形成にはロセが協力してくれた」

ロセが一步前に出て、説明を始める。

「トライヘキサ用に研究中の術式をフィールドに用いています。……良い結果が得られればいいのですが……」

ユーグリットが言っていた、ロセが書いた論文がトライヘキサの封印に一役買いそうだという情報。アザゼルや研究者と協力して作っていると聞いたが、だいぶ形になったようだ。

未知の相手に封印術式を作る。聞いただけでもストレスがスゴそうだな。今度息抜きにでも連れて行ってやろう。

俺は説明を続ける。

「向こうはストラダーを中心としたグループと、クリスタルデイを中心としたグループに別れてくるそうだな。というわけで俺たちも別れることにする。クリスタルデイのほ

うにはデュリオを中心として、グリゼルダ、イリナ及び『御使フレイブ・セイントい』の参戦メンバー、それと匙以外の生徒会メンバー。ストラダーのほうにはリアス眷属と匙、それと俺がつく」

アザゼルが追加で情報を言う。

「ルフエイと黒歌、スラッシュ・ドッグ刃 狗が裏でのサポートに入ることになっている。何かあつたら頼れ」

アザゼルが一通り話し終わると、俺は木場に言う。

「あと木場。先に言っておくが、おまえはクリスタルデイのほうに行け」

「——ッ！いいんですか?！」

驚愕する木場。まあ、特に前情報もなく伝えたからな。

俺は頷き、言葉が続ける。

「ああ。おまえの過去は一通り聞いた」

木場は人工的に聖剣使いを生み出す計画——『聖剣計画』なるものの唯一の生き残りらしい。コカビエルに殺されたバルパーが主導した、人道を無視した計画。多くの少年少女たちが犠牲になり、逃げ出すことができた木場だけが生き延びたらしい。だが、木場も瀕死だったらしく、そこをリアスに拾われて悪魔に転生したそうだ。

「——越えてみせろ。エクスカリバーを」

「……はいー」

応える木場。いい加減、あいつに根づく聖剣への想いを吹っ切ってもらいたいからな。無茶しまくって、見ていてハラハラするし……。

一通りの話を終え、あとは各々でリラックスを心掛けるなか、ロセが若干緊張の面持ちになっていることに気づく。

「不安か？」

「……はい。少しだけ、ですが……」

俺はロセの肩に手を置き、励ますように笑みを浮かべる。

「俺はおまえを信じてる。まあ、何かあっても、何とかするのが俺の役割だ」

「……が、頑張ります」

少しだけ表情が和らぐロセ。てか、照れてる？まあ、気が抜けすぎると逆に心配になるから、このくらいがちようどいい……のか？

俺が苦笑していると、俺の腕に絡み付いてくるヒトが一人。

「なによ、裏方の私には何もなしなの？」

「はいはい。おまえも頼りにしてるよ」

何て言いながら頭を撫でてやる。一瞬驚くが、すぐにくすぐったそうな笑みに変わる。やれやれ、下手したら一緒に寝ることになるのか……。

俺が小さく息を吐いていると、横から視線を感じた。見てみると、ロセが見つめてきているようだ。

「……いいなあ……」

「……………」

俺は黒歌を撫でるのを止め、無言でロセの頭を撫でてやる。まあ、たまにはいいだろう。

「えへへ……」

顔を赤くしながら笑うロセ。……かわいい。

俺がそんな事を思っていると、ソーナが時計を確認して皆に言う。

「時間です。——フィールドに入りましょう」

ソーナの号令で俺は撫でるのを止め、他のメンバーと同様に転移魔方陣に乗る。

さーて、喧嘩しに行きますか！

l i f e 0 5 喧嘩開始

俺たちが喧嘩の舞台となるフィールドに轉移し数分。ようやくフィールドの駒王学園に当たたる場所に到着した。

校庭で対峙する俺たちと教会クーデター組。今にも始まってしまいそうだが、俺は戦士たちの一団の奥に座るストラーダに言う。

「ストラーダ倪下、お初にお目にかかる、ロイ・グレモリーだ」

「貴殿が噂に聞く『紅髪クリムゾン・リッパの斬り裂き魔』ですな。お初にお目にかかる」

小さく笑みを浮かべながら言葉を返してくるストラーダ。

そんな彼に訊く。

「——言葉は不要か」

「ええ。では、始めるとしましょう」

ストラーダがそう言うのと、彼を囲む戦士たちが構える。

「ああ。始めよう」

俺は魔力を込めた拳を構え、リアスたちも構える。

ストラーダはデュランダルのレプリカの切っ先をこちらに向け、高らかに宣言した！

「戦士たちよ、天より許された一戦、思いの丈を今日この場で全て吐き出せつ！」
『オオオオオオオオオオオッ！』

この一帯が振動するほどの音量が発せられた！数も数だからな、なかなかの闘気を感じられる！

「死んでも後悔はするなっ！罪からくる報酬は——死なのだからっ！」

『オオオオオオオオオオオッ！』

それが開戦の合図となり、戦士たちが一齐に殺到してきた！

「……さて、やるか。おまえらも気を付けろよ！」

『はいー！』

リアス、朱乃、アーシア、ロセを後衛。小猫、匙、ギヤスパーを中衛。イツセー、ゼノヴィア、俺が前衛で迎え撃つ形になる。

一応だが、こっちは向こうを殺すつもりはない。クーデターを起こしたとはいえ、死者を出していない彼らをいきなり殺してしまうのはどうか、と言うのが俺たちの意見のためだ。

なので、アロンダイトを使えない。殴ったり、投げ飛ばしたりで戦士を倒していく。まあ、魔力による強化はある程度できるので、それはやらせてはもらうが。

男の光の剣をストレスで避け、あごに一発、ふらついた隙に右回し蹴りを撃ち、五人

ほど巻き込んでいく。

続けて遠距離から対悪魔用の銃から光の弾丸が放たれるが、それを体捌きで避け、放ってきた奴に一気に肉薄。邪魔してくる奴らの間をすり抜けて銃持ちのみぞおちに一発。先ほど無視した奴らが後ろから迫ってくるが、一人一人を素早く、確実に気絶させていく。

回りを見れば、リアスたちもうまく殺さないように注意しながら応戦していつていた。

イツセー、小猫は打撃、ゼノヴィアも加減しながらの斬撃。匙は神セイクリッド・ギア器で体力を奪い、後衛からは援護攻撃。今のところは死者は出ていないようだな。

死にかけてしまったら、すぐさまアーシアに治してもらえばいい気もするが、それはそれ、これはこれだ。出来れば、そんな重症を負わせたくはない。

にしても数が多いな。俺たちが始める少し前にソーナから始まったと連絡が来ていたが、向こうも大丈夫なはずだ。クリスタルデイがどれほどの化け物かにもよるがな……。

俺はそう考えながらも、向かってくる教会の戦士たちを蹴散らしていった――。

戦闘開始からもうすぐ二十分というところで、俺たちのもとに虹色のシャボン玉が飛んで来た。正体不明なので、念のためつてことで全て避けていく。

敵の攻撃かとも思えたが、そのシャボン玉は戦士たちにも飛んでいつているから、あちらの攻撃ではなさそうだ。シャボン玉に当たった奴が泣き崩れているんだが、なぜだ？

試しに突っついてみるか？いや、何かヤバイものだったらそれはそれで……。

俺がシャボン玉を避けながら考えていると、ここに近付く気配が二つ。どうやら向こうは終わったようだ。

その気配が到着すると同時に言う。

「そつちは終わったみたいだな。木場、イリナ」

と、言いながらもシャボン玉は避ける。そんな俺を見て、イリナが訊いてくる。

「はい、無事に終わりました。……それで、先生は何を必死に避けているんですか？」

「これってこつち陣営のいいんだよね？」

俺の避けながらの質問に木場が答える。

「はい。このシャボン玉はジョーカーが作り出したもので、相手の大切なものを思い返させて戦意を鈍らせるものだそうです」

我らがリーダーらしい、やさしい技だな。

俺は泣き崩れる戦士たちを見ながら感心していたが、この状況でも戦意が薄れない者が一人。

「これはこれは、キレイなシャボン玉ではないか」

しわくちやな顔で笑みを浮かべるストラーダ。

このシャボン玉でほとんどの戦士が泣き崩れ、戦線は崩壊した。今まで静観していたストラーダがようやく腰を上げたのだ。

ストラーダは祭服を脱ぎ捨てて。その祭服に隠されていた肉体は、八十七歳とは思えない筋肉の塊。

なんて肉体だよ……。どんな鍛え方してんだか……。

ストラーダが一步前に始まった出る。その瞬間、俺たちの背中を冷たいものが走った。まるで邪龍みたいなプレッシャーなんだが……。あいつ、本当に人間なのか……？

ストラーダは手を広げて、彫りの深い笑みを浮かべた。

「では、教義の時間といこうか。悪魔の子供らよ」

ストラダーダから感じるプレッシャーに全員が息を呑んだ。 バランス・ブレイカー 禁手状態のイツ
セーと匙ですら、警戒して動けないほどだ。

ゼノヴィアが言う。

「……デュランダルのプロプリカ。力は本物の五分の一ほどと聞くが……倪下が持つ以上、その限りではないだろう」

ゼノヴィアのエクス・デュランダルは性能的には勝っているだろうが、使い手の勝負になりそうだ。

最初に飛び出したのは木場とイリナだった。向こうで勝った勢いで、自信に満ちた足取りだ。

だがストラダーダは動かず、構えも取らない。油断をしているわけではなく、余裕ぶつているわけでもない。そこに木場の聖魔剣が伸びていくが、ストラダーダはその一撃を素手で止めた。……素手で止めた!?

俺も驚いているが、一番驚いているのは木場だ。目を見開きながら聖魔剣とストラダーダの顔を交互に見ていた。動かそうにもびくともしないようだ。

ストラダーダが頷きながら言う。

「いい剣筋だ。的確でいて、ためらいもない。しかし」

パリン……。と乾いた金属音が鳴り響いた。聖魔剣がストラダーダの握力によって折

られたのだ。

「まだ鍛練が足りない」

そう言い放ち、ストラーダは裏拳を木場に打ち、木場は折られた聖魔剣で防ぐが、吹き飛ばされていった。

「睨下、失礼を！」

イリナが斬りかかるが、今度は指二本で挟んで止め、豪快に剣ごと投げ飛ばされた！
「ならば魔法です！」

後衛のロセから大量の魔法陣を展開、そこから各種属性入り乱れのフルバーストを放った！

ストラーダは避ける素振りも防ぐ素振りも見せずに、魔法が直撃する瞬間、指を一本だけだして高速で術に触れていく。触れられた魔法は、力を失ったように霧散していく。

「——っ!?!術式を崩したというのですか!?!」

驚愕するロセに、ストラーダは諭すように言う。

「魔法とは、計算だ。——となると、方程式を崩す術をぶつければ相殺、あるいは壊すことが可能なのだよ。若い使い手は形だけの場合が多い。わずかな綻びを見つければ物の数ではないぞ」

……マジで？ロセのフルバーストをあんな形で防ぐことが出来たとは、知らなかった。てか、知っていても怖くてできねえよ！

《それなら、僕が行こう！》

闇の獣になったギヤスパーが飛び出していった！最近、接近戦の特訓を始めたわけで、それなりに期待できる……かな。今のを見たせいで不安のほうが大きい。

ストラーダは接近するギヤスパーに対し、構えを取った。右拳を引き、まさしく正拳突きを放とうとしているようだ。

次の手がわかった瞬間、ストラーダの右腕の筋肉が一気に肥大した！

「ふんッ！」

気合い一閃と共に、正拳突きが撃ち出された！正面から挑んだギヤスパーはギリギリで避けるが、

「ッ！」

こちらに迫ってきた余波をその場を飛び退いて避ける！同時に、俺の後方にあつた建物が崩壊していった！

「威力はサイラオーグ並み。直撃はアウトだな！」

体勢を整えながら皆にも言い聞かせるように言う。余波でもあれなら、直撃したら骨が砕け散るだろう。いや、その前に――。

「倪下のパンチは『聖拳』と呼ばれている。パンチにすら聖なる力が宿っている！」
ゼノヴィアが叫んだ。そう、ガブリエルから渡された書類にもあったが、ストラーダの拳は聖なる拳——『聖拳』。ただの拳に力が宿り、下手な聖剣よりも悪魔にとつて脅威となる。

拳をかいくぐり、懐に飛び込んだギヤスパー。彼の迎撃のため、ストラーダはようやくデュランダルを構えた。濃密な聖なるオーラが刀身を包み込む！

ギヤスパーが拳を蹴りを連続で放っていくが、ストラーダはそれを時には受け流し、時には避けて見せる。

ギヤスパーがデュランダルを抑えようとするが、デュランダルのオーラに負けて闇の衣が剥がされ、生身のギヤスパーの顔を覗かせた。

ギヤスパーの闇は魔神の化身とも言える。それを剥がすとは、何なんだあいつ……。

ギヤスパーは追撃を避けるためにその場を飛び退くと、そこに匙の放ったラインが向かっていく！ストラーダはそれを追撃するため、デュランダルを軽く薙いだ——。この場にいる全員が悪寒を感じ、体勢を低くする！同時に俺たちの頭の上を斬撃が通り過ぎていく！背後を確認すると、先ほど頭の上を通り過ぎた斬撃により、建物が斬られていた。だが、崩れるわけではない。窓ガラスも含め、鋭利なもので斬られたように横一文

字の痕跡が残っていた。

匙のラインも見事に真つ二つにされており、邪炎さえも一時的に消失してしまった。

『ま、マジかよ!』

驚愕する匙。ストラーダが再び論すように口を開く。

「貴殿らはあまりに神セイクリッド・ギア器に頼りすぎているのだ。私の力に理屈はない。愚直なまでの鍛練と無数の戦闘経験が私の血となり肉となり、パワーは魂にすら宿った。——貴殿らの魂にパワーは宿っているのか？」

魂にパワー……。何だろう、俺は軽くもない呪いとか業しごうが刻み込まれているが、それがパワーになっている？まあ、深紅の力が目覚めたきつかけがあれだから……。何て場違いなことを考えていると、いつの間にか真紅の鎧を纏ったイツセーがスト

ラーダに挑んでいった!あくまで正面からの勝負だ!

イツセーの全力の拳とストラーダのデュランダルがぶつかり合う!余波で二人を中心として地面が抉られる!

互角のぶつかり合いあった両者はその場を飛び退く。その瞬間、木場とイリナがストラーダに挑んでいき、朱乃と白音モードの小猫がそれに合わせる。

木場とイリナ、小猫が抜群の連携攻撃をしていくが、ストラーダをそれを全て捌いていく。朱乃が援護として放つ雷光龍も襲いかかるが、デュランダルのオーラで霧散させ

てしまう。

四人がデュランダルのオーラを避けて距離を開けた瞬間、ゼノヴィアが突貫していく！エクス・デュランダルのオーラを全開にし、ストラーダに斬りかかっていった！

ストラーダはそれを受けながら、心底楽しそうに口元を笑ました。

「いいぞ！それでいい！何も考えてはいけない！デュランダルの本質は——純粋なパワーだ！だからこそ、戦士ゼノヴィア、貴殿は選ばれた！否定するな！力を否定してはいけないッ！」

まるで弟子に指南するように言うストラーダ。いや、実際に何かをゼノヴィアに伝えようとしているように思える。

「——だが、パワーの表現はひとつではない。この剣の姿は、貴殿が本当に求めていたものなのか？」

「——ッ!!」

ストラーダの問いかけに、ゼノヴィアは何かを感じるものがあつたらしく、一瞬表情を変えた。

ゼノヴィアは飛び退き、エクス・デュランダルの意味ありげに視線を送る。それを見てストラーダは微笑んでいるが、デュランダルの使いにしかわからない何かがあるのだから。

今度はリアスが前に出る。全身にオーラを纏い、頭上に巨大な魔力の球体が生まれてきた。

「——なら、これならどう？」

イクステイニングイッシュ・スター

リアスが作り出した球体は『消滅の魔星』と名付けられた必殺技だ。邪龍にも効果抜群らしく、天界で俺がリゼヴィムと戦っている間にロードウンをあれで倒していたらしい。

「避けないと死ぬわよ！」

そう告げてから球体を放つリアス。避けてくださいと言わんばかりの速度で進むそれを、警告してから放つということは、文字通り『必ず殺す技』として作り出したからだろう。つまり、避けろってことだな。

だが、ストラードは避けようとしなない。ただ正面から愉快そうに微笑み、滅びの球体に視線を向けていた。

「これはこれは……老体にはちと厳しい代物だ。——しかし」

レプリカのデュランダルを天高く掲げる。刀身に莫大な聖なるオーラが集まっている。

周囲のものを吸い込み、消し飛ばしながら近づいてくる滅びの球体に、デュランダルが振り下ろされる！視界が白く染まるほどの光量に、思わず目をかばう。

ゆつくりと目を開けてみると、俺たちの視界に飛び込んで来たのは——真つ二つにされた滅びの球体だった！

あいつ、滅びを斬りやがったのか!? 牽制で撃つたものならともかく、当たれば確実に死ぬであろう高濃度のものだぞ!?

驚愕する俺たちに、ストラーダは肩で息をしながら言う。

「——デュランダルは『すべて』を斬れるのだ。バアルの滅びであろうと、例外はない」
デュランダルのただひとつの特徴を告げるストラーダ。

単純な破壊力は聖剣最強と称されるデュランダル。使い手とつかいかた次第で、ここまでできるのか。

俺は苦笑し、異空間からアロンダイトを抜き放つ。

「——さて、俺もやるか」

同時に深紅の魔力を解放。視界の右半分が見えるようになり、アロンダイトの刀身から滅びのオーラがにじみ出る。

息を整えたストラーダがこちらに目を向ける。

「——『折れぬ聖剣』アロンダイト。まさか、封じられたその剣を見ることが叶うとは……」

感嘆の息を漏らすストラーダ。なんか、変な気分だ。それにしたって、『折れぬ聖剣』

か。確かに、珍しく折れたとかそんな話がないからな。全盛期のエクス・カリバーとも打ち合えたとも聞いたし。レプリカとはいえあのデュランダルとも、いけるのか……？俺は一步ずつ近づきながら肩をすくめる。

「まあ、もろもろ昔とは違う代物になつてはいるが——」
ある程度近づいたところで、霞の構えに似た構えを取る。

「——堪能していけ」

不敵に笑みながら告げると、ストラダーも微笑みながらデュランダルを構える。
「始めるとしよう。さあ、来るといい『切り裂き魔』よ」

俺とストラダー。そしてアロンドイトとデュランダルの戦いが、始まろうとしていた。

l i f e 0 6 折れぬ聖剣（アロンダイト）VS全てを斬る聖剣（デュランダル）

構えを取るロイとストラダー。睨み合う二人の放つ気迫に、彼ら以外の人々は一様に息を飲んでいた。

そして、二人は同時に動き出す！『騎士^{ナイト}』である木場とゼノヴィア、ミカエルの『A^{エース}』であるイリナ以外には到底見ることの出来ない速度で、両者は激突する！

二人の衝突で巻き起こる聖なるオーラの混ざった衝撃波が二人の周りのものを吹き飛ばし、リアスたちに襲いかかる！

彼女たちはロスヴァイセがとっさに張った障壁で事なきを得たが、間近に食らったロイの皮膚から煙が吹き出し、表情を歪めるが、素早く『痛覚無視』をすることで意識が飛ぶことは回避した。

そして、二人の剣士が同時に間合いに入れば、起こることは想像に難しくない。――伝説に名を残す二つの聖剣がぶつかり合うのだ！

激しい金属音と共に火花が咲き乱れ、二人の足元にも余波で斬り傷が生まれていくが、眼前の敵に全神経を集中させている二人に、当たらなかつた攻撃を気にする余裕は

ない。一瞬でも違うことに意識を向ければ、その瞬間に逃れられぬ死が訪れるからだ。ロイはストラーダの重すぎる一撃を正面から受けることを避け、絶妙な力加減で受け流して攻勢に出るが、ストラーダが剣撃に織り混ぜる聖拳の一撃を警戒し、深追いは出来ない。決定的な隙を探り、ひたすらに捌いていく。

ストラーダはロイの考えを読むことは出来ていた。ゆえに下手な攻勢に出ず、ロイとの我慢比べに挑んでいた。力は圧倒的に自分が勝るが、技は彼のほうが上だろう。悪手を打てば、それが致命傷に繋がる。ありつただけの集中力を注ぎ込み、彼と対峙していた。ロイの振るうアロンダイトか残す深紅の軌跡と、ストラーダの振るうデュランダルの煌めく軌跡がぶつかり合い、その度に巻き起こる大小様々な衝撃波が周囲の景色を吹き飛ばしていく！

高速で数十という攻防を繰り返すうち、ストラーダがデュランダルにオーラを迸らせる。そのままロイに斬りかかる。ロイは反射的にその場を飛び退き、その一撃は避けた。受けるには余りに危険すぎる一撃だ。

ロイは着地を決めると、アロンダイトを天高く掲げながらオーラを解放する。深紅の滅びと聖なる煌めきが入り交じった柱が天に伸びていく。

ストラーダはそれに応えるようにデュランダルを天高く構え、オーラを解放する！

「だああああああああつー！」

「はあああああああああつー！」

二人の咆哮と共に二つの柱は同時に倒れ、激しく激突する！二つの力がぶつかり合い、フィールド全体を揺らしていく！

最初こそ互角だった二つのぶつかり合いは、徐々にストラーダの優勢に傾いていく。使い始めて数ヶ月のロイトと、数十年という年月をかけて磨いてきたストラーダとでは、聖剣から引き出せる力に差が出るのは当然だ。

だが、ロイトの狙いはそこにあつた。彼はオーラの放出を強引に中断、同時にその場を飛び退いてデュランダールのオーラを避け、高速でストラーダの背後を取る！

「——ッー！」

ストラーダもオーラの放出を止め、強引にデュランダールを振るってロイトに斬りかかる！

だが、ストラーダが斬つたのは残像であり、本体ははるか上空から落下してきていた。ストラーダは迎撃のためにタイミングを測りながら構えるが、ロイトはアロンダイトの切っ先をストラーダの逆——フィールドの天井のほうに向け、ジェット噴射の要領で魔力を放出、急加速しながら回転を加えてストラーダに斬りかかる！

アロンダイトとデュランダールがぶつかり合い、今まで以上の衝撃波を生み出し、フィールドの地面に地割れが起こつた！

ストラーダは押し返そうとするが、先ほどまでとは比べ物にならないロイのパワーに一気に押し返せないでいると、踏ん張るストラーダを中心に地割れが広がっていく。

「ぬうん！」

ストラーダはデュランダルを強引に振り抜いてロイを押し返し、彼を空中に放り出すと、そこをデュランダルで一閃する！

見えぬ斬撃がロイに迫るが、彼はその一閃を迎撃するためにアロンダイトを振り、同じく見えぬ斬撃を放った！

二つの斬撃がぶつかり合い、再びの衝撃波がリアスたちに襲いかかる。

空中でもろにそれを受けたロイは体勢を崩し、そのまま落下していくが、翼を展開して地面との激突は回避した。

ゆつくりと地面に着地するロイだが、同時に服の右袖が赤黒く染まり始め、義手から煙が吹き出し始める。

力が足りないのなら、無理やり引き出せばいい。痛覚を無視できるからこそ、筋繊維が限界を越えても何も感じない。現に、右腕が悲鳴を上げているが、それを無視していた。義手に関しては、また作ってもらえばいいので使い潰す。

ロイは右腕を見ながら小さく舌打ちし、アロンダイトを構え直すとストラーダを睨み付ける。紅の瞳と黒い眼球から放たれる不気味な眼光を、ストラーダは肩で息をしなが

ら睨み返した。

ロイが戦闘前から考慮していた作戦のひとつ。徹底的に消耗させ、撃破する。最も危険でありながら確実な作戦。それは文字通り効果抜群であり、ストラーダの限界は近づきつつあった。

——だが、これでいいのか？

ロイの脳裏にそんな想いがよぎる。ここまで自分を追い詰めた人間は決して多くはないが、ストラーダも彼らと同格かそれ以上だろう。だが、彼らと比べると何か足りない。そう、まるで常に手加減されているような気持ち悪さがあるのだ。

肩で息をするストラーダに目を向けたまま、ロイは自分の変化を自覚していた。

——存外、俺も戦いが好きになっていくのかも……。――

戦いに何も見出だせなかった自分が、まさか戦いを『楽しんでる』などと、思いもしなかった。それが自覚できたからこそ、もうひとつの想いがよぎる。

——もう三十年ほど早く、自分が今の自分ほど強ければ、全盛期のストラーダと会えていれば、もっと違った自分になれたのかもしれない。

だからこそ、ロイは思う。

——ああ、全力のストラーダと戦いたかった……。――

圧倒的な技で自分を追い詰めた小次郎と、最強の神滅具ロンギヌスを手に自分を打ち負かした曹

操。二人とは小細工なしで全力で戦い、一人には勝ち、一人には負けた。目の前にいる漢わたくしに、こんな姑息な手で勝つてしまつて、それでいいのか。いや、否いなだろう。

ロイは特に意識することなく構えを解き、そのままアロンダイトを背中に背負うと、ため息を吐いてストラーダに言う。

「悪い。なんか、冷めちまつた」

「……そうか、すまない」

ストラーダは苦笑しながらロイに答えるとデュランダルを下ろす。

ロイは何となくだが、ストラーダという生きる伝説と戦える機会に、真つ先に食いつきそうなヴァーリチームの面々が反応していないことに合点がいった。おそらく、彼らはこうなることを予測出来ていたのだろう。

ロイは驚くりアスたちを他所に、踵きびすを返して後ろに下がり、そのままどつしりと座り込んだ。

「ロイさん、大丈夫ですか!？」

駆け寄るロスヴァイセに、ロイは軽く手を挙げて「大丈夫だ」と一言で答える。右腕は流れ出る血で真つ赤に染まっているが、痛覚無視をしているためあまり気にしてはいない。

俺——ロイが一旦下がり、残されたイツセーたち。イツセーは宝玉から飛龍ワイバーンを出現させた。『白龍皇の妖精達』とリアスが命名した、イツセーが白龍皇の力の一部を使える便利なものだ。いつかにプールで披露した新技も、あの飛龍ワイバーンを応用しておこなうものだ。

だが、そんなイツセーの横を通りすぎ、ストラダーダと対峙する人物が一人。——ゼノヴィアだ。彼女はエクス・デュランダルをエクス・カリバーとデュランダルに分離させ、右手にデュランダル、左手にエクスカリバーという構えを取った。

エクス・カリバーという抑えを失ったデュランダルはオーラを迸らせていた。

それを見たストラダーダは、先ほどまでの疲労なぞないように、今回の戦闘で始めて戦闘高揚したかのように全身を震わせていた。

「そうだ。それでいいっ！デュランダルの元使い手の私からしてみれば、エクス・デュランダルは疑問の塊だった。デュランダルとエクスカリバー、完成したものの同士を組み合わせる必要がどこにある？それは貴殿がデュランダルに翻弄されて、補助などという愚

行をエクスカリバーに課せたからに他ならない。貴殿は……一刀でも二刀戦える戦闘の申し子だ。否定するな。パワーを信じてこそ、力は本物になるっ！」

そこまで詳しく知らないが、ゼノヴィアはエクス・デュランダルが完成するまでは二刀流を好んでいた。そして今、そのスタイルに戻したのだ。

分かれた二本の聖剣から濃密でいて純粹な、圧倒的な聖なるオーラが迸しり、そのオーラを肌を感じるストラダーは目を潤ませていた。

「……ようやく、再開できたな、デュランダルよ。そう、それこそ本当の姿だ。さあ、戦士ゼノヴィアよ。何も考えず、ただ来るがいい。デュランダルの真実は破壊のなかにしかないのだ」

「……はいー」

パワーの体現者たる二人が、ゆっくりではあるが、力強さを感じる歩みで距離を詰めていく。

まさに二人がぶつかるといふ距離で初めて剣が交錯した！

二人の剣が火花を散らしながらぶつかり合う！

「おおおおおおおおおっ！」

「はああああああああああっ！」

二人の戦闘の余波でフィールドが震えだし、ただですら俺とストラダーとの戦闘で悲

鳴をあげ始めていたフィールドはさらに崩壊していく！

無事だった建物が今度こそ崩れ、地面がさらに大きく裂け、フィールドの天井も割れ目も広がり、次元の狭間特有の万華鏡を思わせる模様がさらに克明に見えるようになり始める。

観戦している俺たちは、ただ冷静に二人の戦いの最後を見届けようとしていた。

二人の攻撃は激しさを増していき、フィールドの崩壊をさらに進めていく！

ゼノヴィアがエクスカリバーとデュランダルをクロスして、振り下ろし、ストラダーはそれを真つ正面からから受ける形になった！

「があああああああああつー！」

ストラダーが咆哮と共にゼノヴィアの攻撃を押し退けた！……だが、レプリカのデュランダルの刀身にヒビが生まれ、ストラダーも息を荒くしていた。もう限界に近い、いや、ゆうに越えているのだろう。

ついにその場で片ひざをつくストラダー。このままいけば、まず間違いなくゼノヴィアの勝ちになる。

ゼノヴィアは勝負を決めるために近づいていくが、ストラダーとゼノヴィアの間ひとつの影が割って入る。見た目十二歳ぐらいの凛々しきを感じさせる顔の黒髪をした少年。特徴からして、イツセーたちが会ったというテオドロだろう。

その少年は涙で顔をくしゃくしゃにしなげながらも、ストラーダを守るようにゼノヴィアの前に立った。さすがのゼノヴィアも困惑を隠せないでいる。

少年は涙しながら訴える。

「……ストラーダ陛下を許してやってくれ。全ては私が悪いのだ」

「テオドロ倪下……お下がりにください。この老骨が全てを決めますゆえ」

そう言つて立ち上がろうとするストラーダを少年が止める。

「もういい！もういいのだ！もう、十分だ！ストラーダ陛下までいなくなつてしまつたら、私は……私はどうしたらいいというのだ！」

少年は振り返り、背中に純白の翼を——『奇跡の子』の証拠である天使の翼を生やした。

少年は消え入りそうな声で言う。

「私の……父と母は……悪魔に殺されたのだ」

俺たちを、悪魔を見る少年の目は——悲しみに満ちたものだ。

「……悪魔は許さない！悪魔を許すわけにはいかないのだ！」

少年の叫びに返せる者はいない。悪魔である俺たちに、返す言葉があるわけがない。

ストラーダは悲哀に満ちた表情で少年を抱き寄せ、語り出した。

「……同盟もいい。それもひとつの平和の形だ。だがね。——それで救われない者、憤

りを感じる者もいるのだよ。テオドロ倪下も、今日立ち向かった戦士たちも生き方を魔なる存在に歪められて剣を取ったのだ」

——平和はヒトによって違う。誰かにとつての平和が、誰かにとつての苦痛にもなる。それはわかりきっていた。

俺が常に抱いている想いでもある。誰かを殺して誰かを救うのは、必ず戦いの火種になる。だが——、

「俺たちは——」

俺が口を開くが、それを遮る者が一人。

「僕たちはッ！」

木場だ。

「僕たちは、ただ平穏に暮らしたいだけだ。あなたたちにもあなたたちの正義があり、あなたたちだけの価値観があるんだろう。けれど、我が主リアス・グレモリーもイツセーくんも、朱乃さん、小猫ちゃんも、アーシアさんも、ギヤスパークくんも、イリナさんも、ロスヴァイセさんも、レイヴェルさんも、シトリー眷属も、ロイさんも、この町に住む多くの仲間たちは修羅場をくぐり抜けてきた仲間だ」

木場の表情は憑き物が取れたようなものになっていた。

彼にゼノヴィアも同調する。

「その通りだ。お互いに支え合ってきて命がけで戦い抜いてきた大切な仲間だ。たとえ、あなた方がそれをお認めにならなくても私たちにはここまで戦ってきた誇りがある！それに不満を覚える者たちが出たとしても、私たちが信じた者たちのためにこれからも戦う！」

ストラーダは二人の訴えに満足そうな笑みを浮かべた。

「なるほど、いい目だ。リアス・グレモリー姫よ。良い『騎士』を持たれましたな」

「ええ、自慢の『騎士たちよ』」

リアスも誇らしげにしていた。

二人の『騎士』に並び立つイリナ。

「私も、悪い悪魔はいると思います。けれど——」

イリナがイツセーに視線を送る。

「いい悪魔もいます。それは人間も一緒に、他の神話体系では、善神も悪神もいます」

ストラーダはそれを聞いて豪快に笑った。

「はっ—はっ—はっ—いやはや、なるほどなるほど。しかし、天使である貴殿が異教の神を語るとは……。これが、新たな時代の幕開けを意味するのだろうか」

ストラーダは考えこんでいるが、どこかで楽しげだ。だが、ストラーダは剣を手にした。

戦士だからこそ、振り上げたものはしつかり下ろさないといけない。ストララーダはここで死ぬ気なんだろう。

俺は立ち上がり、若干ふらつきながらもストララーダに言う。

「全ての罰を、自分とクリスタルデイだけで受けて死ぬ気だろ。おまえ……」

「ええ、私とクリスタルデイの首を以て、天に許しを請おう。テオドロ倪下も戦士たちもまだ若い。これは私が蜂起させたものだから……。この戦場で吐き出したものと、私の屍を越えて、戦士たちは新たな生き方に転じることもできるだろう」

やはりか。こいつは最初から自分の命を捨てるつもりでクーデターを起こした……。ストララーダの告白に戦士たちからも悲鳴が上がる。

「倪下！」

「そのようなことをおっしゃらないでください！」

「倪下、我らの命であれば、喜んで差し出しましょうぞ！」

「煉獄に行く覚悟はできております！」

戦士たちは涙を流し、ストララーダを止めようとし始め、俺たちも動くに動けない状況になってしまった。

「私がころころしてあげるわよーん♪」

そんな中、ここにいるはずのない第三者の声が響き渡った。

l i f e 0 7 乱入者

「私がころころしてあげるわよーん♪」

突如響いた第三者の声。全員が周辺に目を配らせ、声の主を探す。

俺たちから少し離れたところにゴシック調の衣装に傘を差している女性——魔女ヴァルブルガがいた。また侵入してきたようだ。てか、どうやって入ってきやがった……。

全員がヴァルブルガを狙い構えると、奴は愉快そうに笑った。

「最後の最後、美味しいところを横合いから取っちゃうよーん、燃え萌えだと思わない？」

ヴァルブルガはそう言うのとステップを踏み始めた。そのステップと同時に無数の転移型魔方陣が展開され、光を放ち始める！

その光が止むとそこには大量の量産型邪龍が現れていた！ぎつと見ただけで百はいる。まともに相手をするにしても、結構消耗している俺にはちよつと辛いものがあるな……。

そう考えているなかでも邪龍は増えていくと、俺を囲むように魔方陣が展開される！

「——ッ！」

魔方阵から複数本の鎖が飛び出し、俺を縛りあげる！な、なんだこれ……力が……抜ける……。

「ロイさん！」

「……ロセ、来るな！なんか、やべえ……！」

駆け寄るロセを止めると共に膝をつく俺に、ヴァルブルガが邪龍の群れをバックにしなからせせら笑う。

「あなたは苦手なのよん。そんなわけで、特別製の鎖を用意したわん。んじゃ、邪龍の皆に活躍してもらおうかなーん♪そこで仲間がころころされるところを、見ていなさい♪」

邪悪な笑みを浮かべ、手を前に出して邪龍に指示を出そうとするヴァルブルガ。

俺は強がるように笑みながら、心配そうにしているロセに指示を飛ばす！

「ロセ、頼む！」

「……はい！任せてください！」

ロセが指を鳴らす。すると、フィールド全体が銀色に輝き始めた！フィールドの全てが輝き、その光に包まれた邪龍が力を失ったように倒れ始める。

ピクリとも動かない邪龍軍団にヴァルブルガは驚愕していた。どうやら、うまくいつ

たようだ。

俺が笑みを浮かべロセにサムズアップをすると、彼女はホツと息を吐いた。

俺を縛る鎖が飛び出した魔方陣に、バグが起こったようにノイズが走り、最終的には消え失せた。同時に鎖も消え失せ、解放される。

肩を回しながらヴァルブルガを睨みつけると、奴はさすがに狼狽していた。

「これってっ！どうことなのん!?!」

ようやく状況を理解したヴァルブルガが声を出した。

そんな奴にロセが不敵に言う。

「あなたたちが来ることは想定済みです。このフィールドは私が独自の結界術式を編んで構築されたままです、邪龍を呼び寄せると機能を封じる作りになっています」

そう言うロセだが、トライヘキサ封印のために作っていたものが、こんな形でも役立つとは、わかんないもんだ。

ロセが続ける。

「アーシアさんが量産型邪龍を手懐けたのが、今回の術式の大元になっています。量産型邪龍を調査させてもらいましたね。結界を作る際、彼らの動きを停止させるという術を式に盛り込んだのです」

そう言えば、アウロスの一戦で何体かの邪龍をアーシアが手懐けたと言っていたが、

それからも繋がっているのか。手懐けたアーシアもすごいが、これを一発で成功させる口セもなかなかやるね。

「俺の方は、裏方が頑張ってくれたようだな。後で礼を言っておかねえと……」

俺たちの言葉にヴァルブルガは悔しそうに口元をひくつかせていたが、途端に哄笑する。

「わーお、これは怖いことになりそうだわん。んじゃ、おいとましましょうかしらねん」

到着から三分足らずで撤退しようとするヴァルブルガ。だが、彼女が転移型魔方陣を展開しても何も起こらない。

「……発動しない？まさか転移封じを……」

「いや、経路を全て断つただけだ」

再び響く第三者の声、だが今回は聞き覚えがある。

「遅かったな。刃 狗」

俺が声の主に声をかける。刃 狗スラッシュ・ドッグこと幾瀬鳶雄は右手を軽くあげ応えた。

「さすがに数万単位の術式を全て断つのは時間がかかるのですね」

俺と幾瀬が話を進めているとヴァルブルガが声を出す。

「あ、あんた……本当に人間!？」

俺も当然のように話をしていたが、結構驚いていたりする。どこにあるかもわからない数万の魔方阵を全て斬る。悪魔でもできる奴は限られるだろう。言ってしまうと、俺には無理だ。数千ぐらいなら、いけるかもしれないがな。

幾瀬はヴァルブルガを無視し、イツセーに言う。

「さあ、決めるんだ。兵藤一誠くん。表舞台で輝いてこそ、伝説のドラゴンなのだから」「は、はい！」

イツセーは返事をして、ヴァルブルガを視線に捉える。

さて、俺も仕事しないとな。

邪魔な取り巻きがいなくなり、退路を断たれたヴァルブルガに、俺たちD×D全員が集中していた。

だが、追い詰められているはずのヴァルブルガは高笑いを始めた。

「あーっはっはっはっはっ！」

両腕を広げ、紫炎を発生されるヴァルブルガ。

「じゃあ、見せてあげるわよんっ！私の禁パランス・ブレイカー手をねっ！」

ヴァルブルガがやる気になるとそれに呼応するのうに紫炎が膨張していった。

紫炎は少しずつ形を変え、巨大に膨れ上がり、何かを形成していく。超巨大な十字架と、そこに磔にされてある八つの首を持つドラゴン。……あれは、どこからどう見て

も八岐大蛇やまたのおろちじゃねえか……。

ヴァルブルグは紫炎の大蛇おろちを背後に言う。

「これが私の亜種バランス・ブレイカー 禁手、『最終審判イェンシネによる 覇焰ネレート・アンティフォナ・カルヴァリオの裁き』、よん♪」

長々とどうも、てかまた毒もっているんだらうな。今度は気を付けねえと。

俺がアロンダイトを構えると、ストラダーが言う。

「聞いた話では、現聖十字架の使い手の能力は、磔にしたモデルによって、その姿と特性を変えるという。此度の磔のモデルは八つ首の邪龍、ということなのだろう」

説明はありがたいが、時々飛んでくる紫炎の火の粉が地味に痛い。

そんなものを気にせず勇ましく前に出る者が一人。ゼノヴィアだ。二刀流のまま前に出た。

「私がやろう。いまなら、いけそうだ」

大胆な言動を裏付けるような自信に満ちあふれて表情。先ほどの一戦で何かを掴んだのだろう。

「さて、今度こそ仕留める！ てか、やり返す！」

「俺も行きます！」

俺とイツセーがゼノヴィアの横に付く。

アロンダイトに深紅のオーラを纏わせながら二人に言う。

「さて、お膳立てはしてやる。おまえらが決めろ！」

「はい！」

「ああ！」

俺は二人の返事を聞いてヴァルブルガの方に歩き出す。

「あら、あなたが来るのん。アウロスの時みたいに燃え燃えしてあげわすわん！」

ヴァルブルガが魔法を放ち、大蛇おろちからも火炎が吐き出される！だが、遅いな！

翼を展開して飛び上がり、魔法も火炎の全てを避けてヴァルブルガに肉薄していく！

「燃え燃えにしてあげる？ほざくな！」

焦るヴァルブルガが放った魔法を避け、正面から迫ってきていた火炎を切り裂いて最

短ルートをとる！

「——ッ！」

目を見開いて驚愕するヴァルブルガを視界に捉えながら、全開のアロنداイトを振り抜く！

放たれた深紅の聖滅のオーラをヴァルブルガは紙一重で避けるが、奴の背後にいた大蛇おろちの体が袈裟懸けに斬り裂かれる！

横目でそれを確認しながら、その場を飛び退く。

「さあ、()までやってやったんだ。決めてみせろ！」

俺の言葉にゼノヴィアは頷き、不敵な笑みを浮かべた。

「では、遠慮なしでいかせてもらおう！ 私たちは三つでひとつの剣！ さあ、共にいこうっ
！」

ゼノヴィアはオーラが高まった聖剣二本をクロスして、斬撃を放った！ 異常なまでの聖なるオーラが十字を形作り、放たれる！ 放った先のを両断していき、紫炎の大蛇おろちを十字に斬り裂いたっ！

その余波でフィールドが再び悲鳴を上げ、裂け目ができていった。

「——クロス・クライシス、とても名付けようか」

なんて言いながら決めるゼノヴィア。まあ、たまにはいいだろう。

「嘘、何でこんなので私の紫炎が……！」

今の一撃には体を強張らせるヴァルブルガ。イツセーが砲撃の態勢を整え、ヴァルブルガに砲身を向けた。

「いくぜっ！ クリムゾン・ブラスタアアアアアアッ！」

砲口から放たれた紅のオーラが、ヴァルブルガを包み込んでいった——。

全てが終わったバトルフィールド。教会クーデター組も素直に投降してくれていた。最後の一撃、巻き込まれるかと思ったぞ……。

ヴァルブルガはとっさに障壁を張ったのか、無傷ではあったが、気を失っていたためそのまま拘束し、冥界の機関に送り飛ばした。

そこにアザゼルが到着。審問を受けるため、転移魔方陣に足を進めていたストラダーダが声をかける。

「さて、元総督殿。どうやら、我らに付いていた背信の徒もあぶり出せたようすな」

「ああ、おかげさまでな」

「そこまでは知らなかったんだが……」

俺が訊くと、アザゼルは特に気にした様子もなく言う。

「ん？ああ、そうだったな。戦闘前に要らん情報を教えないほうがいいかと思ってな。リゼヴィムがクーデターを煽ったのは確かだった。となると、教会内に内通者がいるはずだ。事実ヴァルブルガが入り込んできたわけだしな」

「で、そいつらは捕まえたのか？」

「問題ねえよ」

俺の問いに即答するアザゼル。俺は小さく笑みながら返す。

「なら、いいさ。ロセの結果、封印術も試せたんだ。結界オーライだな」

俺がそう言うと、ロスヴァイセは苦笑する。

「フィールドが壊れないか、封印術以上にそこが心配になりましたよ……」

確かに、このフィールドは通常以上に強固な作りらしい。それが今や崩壊寸前だもんな。そりゃあ、心配もするだろう。俺も破壊に一役買ったけどな！

と、ストラーダが懐を探りひとつの小瓶を取り出した。

「アザゼル元総督殿、あなたにお渡ししたいものがあります。それは、此度の騒動の代価のひとつです。受け取っておいて損はないでしょう」

アザゼルが受け取った小瓶の中には陶器の欠片が入っている。聖遺物レリックの放つ独特のオーラを感じられるが、もしかして……。

「……この欠片、まさかとは思いが……」

「ああ、本物の聖杯の欠片だ」

『……ッ!?!』

それを聞いていたD×Dメンバーは驚いていた。まあ、驚いて当然だろう。神セイクリッド・器ギアとは違い、まさしく本物の聖杯の欠片だ。

アザゼルが確認するようにストラーダに訊いた。

「そういうことなんだな、ストラーダ」

ストラーダは無言で頷くと、リアスと木場に視線を配る。

「リアス・グレモリーの『騎士』よ。——イザイヤ、施設にいた時に仲間たちからそう呼ばれていたと聞く」

それを聞いた木場は、酷く驚いていた。

「——っ。……どうしてそれを？」

イザイヤつてのが、昔の木場の名前つてことか？まあ、今の名前はリアスにつけられたつてのは聞いたことがあったが。

ストラーダが続ける。

「繰り返しされる実験のなかで、一名だけ強固な結界型の神セイクリッド・ギア器を発現し、仮死状態ではあったが助かった者がいたのだ」

ストラーダが配下のヒトに視線を送る。すると、戦士の一団から一人の少女が姿を現した。白い髪をお下げにした十二、三歳ほどの女の子だろうか。

少女は木場を見つけると、口元を押さえてこみ上げてくるものを堪える。

「……イザイヤ？」

問いかける少女。木場は驚きながらも、涙を流していた。

「……ま、まさか……っ！トスカ、なのかい……？」

「……うん」

言葉もない俺たちに、ストラーダが語る。

「我々が保護したのは良かったのだが、結界を解くことは叶わなかった。しかし、同盟の折、墮天使側からの技術を応用して解くことができたのだ」

つまり、木場は唯一の生き残りじゃなかったってことか。生きていればいつか会えるというが、まさかその場に立ち会うとは。

「仮死状態ゆえか、成長は止まっており、衰弱も見られた。この国に連れてくるには時間を要したのだ」

トスカと呼ばれた少女と、木場が涙を流しながら抱擁を交わす。

……良かったな、木場。今まで生きていなければ、あの子とも再会できなかった。生きてさえいれば、奇跡ってやつにも巡り会えるだろう。

ストラダーは二人を優しく見守りながら言う。

「その者を連れていくといいだろう。教会にいては何かと利用する者が出るやもしれん」

少女と抱き合いながら、木場が言う。

「ストラダー 倪下……僕は……」

ストラダーは首を横に振る。

「決して、私を許すなよ、ナイトよ。許せば、貴殿の切れ味は鈍る。聖と魔の狭間こそが貴殿の力の根源となろう」

「……ストラーダ倪下」

次に俺に視線を向けるストラーダ。

「貴殿が振るう『聖滅剣』。使い方を間違えれば、貴殿自身にも毒にもたなろう。『聖なる力で滅する剣』となるか『聖なる力を滅する剣』となるかは、貴殿次第だ」

「俺は前者であり続けたいがな。俺を信じてくれるヒトたちのためにも」

リアスたちに視線を配りながら言うと、ストラーダは頷き、近くにいたゼノヴィアの頭を乱暴に撫でた。

「戦士ゼノヴィアよ。先程の一撃、見事だったぞ。そしてなによりも——恋せよ、乙女ゼノヴィア。デュランダルは愛にこそ寛容なのだ」

それだけを言い残し、ストラーダは転移魔方陣のほうに足を進める。

「ストラーダ、おまえ、最初から何もかも用意していたのか？」

俺の何となくの問いかけに、ストラーダは何も言わず笑みを浮かべ、右拳を天高く掲げた。

俺たちは転移の光に消えていく彼の背中を見送る。

悪魔として長く生きてきたが、あいつはこの世界で会った最高の人間だ——。

l i f e 0 8 仕事の対価

ストラダーダたちとの戦いを終えた日の夜。

疲れた体に鞭を打って寝間着に着替えた俺——ロイはベッドに腰をかけて、目の前にいる相手を見てため息を漏らした。

「はぁ……………」

「にやははは。さて、約束は守ってもらおうよ」

いたずらっぽく笑む黒歌。決戦前にした約束を果たしに来たのだ。

まあ、ヴァルブルガからの拘束を解いてくれたのは重々承知だ。それに、約束したのも俺だし……。

小さくため息を漏らし、黒歌に目を向ける。なぜ、下着姿なんだ……。

「なあ、せめて寝間着ぐらい着てこいよ……」

「何で?もしかして、襲いたくなっちゃうとか?」

何て訊いてきながら、色っぽく自分の体を撫でる黒歌。それを見ながら生唾を飲み込んでしまうことを自覚しながらも、なぜか視線を外すことができない。

それを気づいたのか、黒歌がブラに手をかけて勢いよく取っ払った!

何度か見たことのある、大きめの胸と、健康的なピンク色の先端が丸見えとなった！って、何を冷静に観察してんだ俺！？

視線を外そうと顔を背けると、正面から黒歌が抱きついてくる！その勢いのままベッドに押し倒された！

頭全体を非常に柔らかいものに包み込まれる！だが、強引に抱きつかれたためか、ちよつと息苦しいんだが！

そんな俺の想いを通じたのか、黒歌は一度俺から離れて顔を覗きこんでくる。黒歌の奴、若干頬が赤い気がするんだが……。ちよつと瞳も潤んでいるし……。

「黒歌、大丈夫か……？」

「だ、大丈夫よ。ちよつと待って……」

黒歌は何度か深呼吸をすると、自分の胸元に手を当てる。すると、頬の赤みが引いて落ち着いた表情になった。

俺が疑問符を浮かべていると、倒れこむように胸に顔を預けてくる黒歌。なんか、無理をさせているようでこつちも気を遣うんだが……。

何となく黒歌の頭を撫でてやり、それを受けた彼女は一瞬驚くが、すぐに持ち直して甘えるように頬擦りしてくる。

ボケツと天井を見上げながら黒歌を撫でていると、何か腹の辺りから音が聞こえ始め

た。なんか、外している……？

音のほうに目を向けると、黒歌がそつと俺の寝間着のボタンを開けていた！しかも、もうほとんど終わってやがる！

残ったボタンを守ろうと手を伸ばすが、寝るときは義手を外すことを思い出す時すでに遅く、そのまま全てのボタンが外れ、俺の上半身も丸見えになる！

黒歌は笑みながら、俺の体の上を這うようにして上がり、顔同士が触れあいそうなおどまで距離を近づけてくる。そのまま抱きつき直すと、腕の力を強めてきた。彼女の胸が俺の体でむにゅんと潰れ、ダイレクトに柔らかさが伝わってくる！

俺が完全に硬直していると、黒歌が耳元でささやく。

「あんたの体、温かいわね……」

「……そ、そうか？」

俺が聞き返すと、「ええ」と呟いて俺の耳たぶを甘噛みしてくる。体がビクツと反応してしまい、黒歌はそれを受けて楽しんでるように耳を舐め回してきた！

ああ、もう！寝るところの話じゃねえ！こいつの相手でそれどころじゃねえよ！

黒歌はそのまま下を這わせ、俺の頬や首まで舐めてくる！猫又だからか、猫の舌ようにざらざらとした感覚が伝わってくる！

いろんな意味で耐える俺に、再び黒歌がささやく。

「それに、美味しい」

「……………」

その一言で完全に硬直する俺。いや、もう、何て返せばいいのかわからねえよ……。何かに憑かれたように俺の首を舐めてくる黒歌。すると、彼女の手が俺の腹部に当たる。同時に体の芯から温まってきた。

「ふふ。いちおう、これも約束だからね」

いや、仙術でどうこうの話はしていたが、この流れでやつてくるのかよ……！

黒歌はそのままぎゅつと俺に抱きついて足を絡めると、身体全体で気の流れを良くしてくれているのか、全身がほかほかしてきた。

身体が温まってきたからか、いきなり強烈な眠気に襲われ始めると、黒歌が珍しく優しく笑む。

「今日はお疲れ様。お休みなさい……………」

こいつ、時々だけど、いい女性に見えるんだよね……。



「ふふ、本物に寝ちやうなんてね」

無防備な寝顔を晒すロイを見ながら苦笑する黒歌。

つい最近まで敵側だった自分を、ここまで信頼してくれているロイには感謝している。けれど――、

「あんた、見ててハラハラするのよね……」

優しく頬を撫でながらぼやく。戦う度にぼろぼろになって戻ってくるのは、基本待つ側の自分には辛いし、きつと現レヴィアタンもそうなのだろう。

とりあえず、自分も寝ることにしようとするが、その前にあることに気づく。

(さ、さすがに冷えてきたにや……)

ロイにくつついていれば温かいが、背中は無防備である。年が明けたばかりのこの時期は、まだまだ冷えるのだ。もしかしたら、さっきの寝間着どうこうの発言はそういう意味もあつたのかもしれない。

黒歌はロイに乗ったまま毛布を被り、彼の体をベッド代わりにして寝ようとする、

「んん……」

ロイが小さくうめき声をあげ、そのまま寝返りをうつ。もちろん彼の上に乗っていた黒歌も一緒に回るわけになり――、

「にゃ!？」

ロイに抱きつくようにして落ちることは避けた。お互い体を向かい合わせて寝る格好になり、ロイをベッド代わりに出来なくなったが、黒歌は特に気にした様子もなくロイを優しく抱き締める。

(とりあえず、今日はこれで我慢してあげる)

何て事を思いながら寝ようとすると、突然黒歌の体がロイの体にさらに密着する。彼女が近づいたわけではなく、背中から肩にかけて、温かい何かを押さえられているのだ。黒歌は何が起こったをすぐに察し、頬を赤く染める。まさか、いきなりロイに抱き締められるとは、思いもしていなかったのだ。

(ま、これもいいか)

黒歌はそのまま目を閉じ、寝りにつく。明日、彼が目を覚ましたらどんな顔をするのか想像し、少しいたずらっぽい笑みを浮かべながら――。



翌朝。

俺——ロイが目を覚ますと、なぜか俺が黒歌を抱き締めていた。いや、え？なんで？俺が必死に考えていると、黒歌が目を覚ましたのか、ゆつくりと目を開けると大きなあくびをする。

「ふにゃ。あ、おはようにゃ」

「おはようさん。——で、なんだこの状況は」

「あんたが抱き締めてきたんでしょ？覚えてないの？」

真剣な表情で言う黒歌。おそらく、嘘は言っていないんだろう。だが、一切覚えがない。

俺が若干眉を寄せていると、黒歌の表情が崩れ、いつものいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「ま、寝相でだけどね」

「……覚えてるわけねえな」

頬をかきながら言うのと、黒歌が笑う。

「おかげで温かく寝れたにゃ」

「それは、良かったな」

とりあえず、寝間着を直そう。こんな話をしている間にも黒歌の胸が当たっていて、

地味に気になる。

離れようと手を離すが、その分を黒歌が力を入れて抱き締めてくる。

「……………おい」

「もうちよつとこのままでいさせてよ。別に急ぐ用事もないでしょ?」

確かに、今日は日曜日。急いでやることも特にはないが…………。

俺が納得しかけていると、ドアがノックされる。

『ロイさん、朝食は何にしますか?今日は私が作ります』

ロセの声だ。今日の当番って、あいつだっただけか…………。

とりあえず、返してやろうと口を開く。

「それじゃあ、おまえに任せるー!」

「にゃん♪」

「はあん!?!」

言い切ると同時に黒歌が再び耳に甘噛みしてきて、明らかに変な声が出た。これは、恥ずかしいしヤバイ…………。

『……………失礼しますよ』

若干どころではない怒気のこもったロセの声。返す暇もなくドアが開き、顔を覗かせたロセとバッチリ目が合った。

「ん?」

「ま、あんたはこれも出来ないでしょ?」

黒歌は挑発するようにそう言う。俺の右手を自分の胸に誘導し、そのまま胸に埋めていく! セラのものとは違った弾力のあるものに手が埋まっていく! なんか、指が無意識にわしゃわしゃ動いちゃう!

「にゃふん……。ちよつと、あんまり激しくしないで……。にゃん……」

黒歌の喘ぎ声に、鼻から温かい何か吹き出そうになるが、それに耐えていると、口セがやけくそ気味に俺の左腕を掴む。

「で、できますもん! このくらい、キスに比べれば余裕です!」

ロセの発言を受けて、黒歌が眉を寄せる。ロセはそんなものお構いなしに俺の左腕を自分の胸元に引っ張り、そのまま埋没させていく! 触ればわかる。二人の胸の違いがあああああ!

何となくだが、イツセーの言っていた胸の素晴らしさがわかつちまったよ!

鼻から何か吹き出そうになる間際、黒歌が目元を厳しくしながら訊く。

「ところで、今『キス』って言ったわよね? 何回したの?」

「え!? それ……」

「ふーん、なるほど。じゃ、今から三回ぐらいさせてもらうかにや」

「だ、ダメです！それだけはダメですうううう！」

ロセと黒歌に引つ張られながら、俺の鼻からついにその何か——血が吹き出した。ダメだ、もつとしつかりしねえと……。

「ロ、ロイさん!?!大丈夫ですか!?!」

「や、やり過ぎちやつたかにや……」

心配するロセと、何となく反省する黒歌の声が聞こえた。

何か、視界が霞んできたが、とりあえず一言。

——こいつら、覚えてろよ……!!

l i f e 0 9 再会

教会クーデター組との戦いから数日。

生徒会選挙がおこなわれ、新生徒会長はゼノヴィアに決まった。

その打ち上げを済ませた俺——ロイは、グリゴリの施設に向かったリアスたちと別れ、冥界に来ていた。いつかにクレéria・ベリアルの情報くれたあいつから、再び連絡がきたのだ。

そんなわけで、再び髪の色を黒く染め、いつかに来たカフェに来ていた。またここにきてくれて連絡があつたんだが、まだ来ていないようだ。

空いていた席に座り、いちおうコーヒーを頼む。このコーヒー、意外と美味いんだよな。

周囲を警戒しながら待つこと数分。出されたコーヒーを飲んでみると、向かいの席に見慣れぬ長い紫髪のをかけた女性が座った。いや、何となく見覚えがあるような……。

俺が軽く睨むようにその女性を見ると、女性は特に気にした様子もなく苦笑する。

「そうか、この格好で会うのは初めてだったな」

女性は髪を撫でながらそう言うと、一度咳払いをして、何となく見覚えのある笑みを浮かべて言ってくる。

「お久しぶりです、リーダー。『ジル』と言えば、わかりますか？」

「——ッ！マジか……」

俺が驚愕していると、女性——ジルは頷く。

「まあ、ご存じのとおり偽名です。けれど、そちらのほう呼びやすいでしょうから、そのままでも構いませんよ」

「あ、ああ。じゃあ、そうさせてもらおう」

俺が驚きながらも頷くと、ジルは口調を戻す。

「さて、私がアジユカ様直属の部下だという話は聞いているな？」

「ああ。ルシファー様から聞いた」

変装しているので兄さん呼びは控えることにした。

ジルは頷き、ずれたメガネを直して言う。

「キミとキミが頼った彼が『あれ』にたどり着いたことがわかってな。少しばかり話をし
たくなつたそうだ」

「アジユカ様が、か？」

「そうだ。それと、彼はキミと別れた直後に保護した。まあ、苦労したけどね」

苦笑するジル。あいつ、ある意味で捕まっていたんだな……。まあ、アジユカ様のところは安全そうなので安心だ。

俺がそんな事を思っていると、ジルが身を乗り出して耳元で言ってくる。

「(さて、場所を変えよう。長居しすぎたようだ)」

「(——だな)」

ジルが入って数分してから、妙な視線を感じるようになったのだ。たぶん、この店はマークされていたんだろう。俺たちはそこに飛び込んだままだったわけだ。

俺とジルは席を立ち、会計を済ませて足早にその店を離れる。で、ついてくる気配が複数。尾行にしている、随分お粗末な連中だな。

「来てるな。三、いや、四人か」

「ああ。ついでに、正面に五人だ。店に入る前に確認しておいた」

「抜かりねえな。だが、甘い連中だな。大王派か？」

俺が訊くと、ジルは何とも言えない顔になった。

「どうだろうな。旧魔王派の残党は意外というものだぞ？まあ、誰であれ、煽ったのは大王派だろうがな」

「やれやれ……。面倒だな」

ため息混じりに言うと、ジルが路地裏に入ってしまった。ジルに続いて路地裏に入る

と、彼女はそのまま転移魔方陣を展開した。

「確かに面倒だからな。さっさと撒いてしまおう」

「頼む」

転移の光に包まれるなか、路地裏に飛び込んでくる影が複数。慌てて飛び込んできたようだな。

まあ、下らない連中だ。気にする必要もないだろう。

俺がそいつらを一瞥すると、転移の光が強くなっていた——。

光が晴れると、そこは見知らぬ建物の中だった。俺の回りを携帯のようなものをいじる人間が複数人いる……。

そいつらもそいつらで「何だこの『ランク』は」とか何とか言ってくる始末だ。

「こつちだ。皆が待っているぞ」

？
ジルは彼らの視線を気にすることなく進んでいき、俺も続く。てか、皆つて誰だ……？

部屋の奥にあったエレベーターで屋上庭園に移動、アジユカ様がいるという庭園の奥

に進む。

その奥に到着すると、アジユカ様が来客用と思われるスペースで優雅に紅茶を飲んでいた。

アジユカ様はティーカップをテーブルに置き、俺を視界に捉えると立ち上がる。

「やあ、久しぶりだね」

「お久しぶりです」

それだけのやり取りをすると、アジユカ様は椅子に座り、俺もアジユカ様に対面する形で座る。ジルはアジユカ様の後ろについた。

「それで、お話と言うのは」

俺は単刀直入に訊くと、アジユカ様は苦笑する。

「まあ、そこまで急がなくてもいいだろう。すぐに彼らも来る」

アジユカ様がそう言った矢先、こちらに近づいてくる気配が複数。感じたことがある、懐かしい気配だ。

気配のするほうに目を向けると、先頭にいた金髪ショートヘアの女性が反応した。

「あ！隊長！隊長ですよ、クリスさん！」

「お、本当だ。リーダー、お久しぶりです！」

その後ろにいた黒髪の男性がニカツと音がしそうなほど爽やかな笑みを浮かべてい

た。

俺は笑みを浮かべながら席を立ち、軽く右手を挙げながら二人に声をかける。

「アリサ、クリス！久しぶりだな！」

「いやー、やっと解放されました。まあ、今はジルさんのお世話になってるんですけどね」

「ま、気楽にやらせてもらってますよ」

二人が変わわらずの様子で言うのと、ジルが微笑する。

「見ての通り、彼らは相変わらさずさ。安心しただろうか？」

「ああ。いやー、色々ありすぎて忘れかけてたわ」

「ヒドッ！」

「冗談だよ」

俺たちが話の花を咲かせていると、二人に続いて入ってくる男性が一人。

「まったく、その三人に追いかけて回された俺の身にもなってほしいな。まあ、久しぶりのんびりさせてもらっているが」

いつかに接触した彼だ。無事に保護したって、こいつらに追いかけて回されたのか……。

若干の同情の念を送っていると、アジユカ様が言う。

「彼らには私の『ゲーム』にも参加してもらっている。時々だがね」

アジユカ様の言葉に合わせさせてか、四人がスマホを取り出し出していた。いつかに言っていたやつだな。俺も誘われたが、嫌な予感がしたから辞めておいたんだよな。

俺が「へー」なんて言いながら頷いていると、アジユカ様が話を戻す。

「さて、話を戻すそうか。皆、座ってくれ」

アジユカ様が言うので再び席につくと、ジル以外の三人も空いている席に座った。

それを確認し、アジユカ様が言う。

「ロイクんに伝える事は二つ。まず一つは、彼らの釈放に関しての条件だ」

「条件、ですか？」

俺が聞き返すと、アジユカ様は頷いて続ける。

「ああ。まあ、簡単だよ」

一拍間をおいて、アジユカ様が言う。

「彼ら二人を、キミの眷属にするというものだ」

「——っ。なるほど……」

二人を俺の眷属にするということは、二人が何かしら不穏な動きを見せれば、俺が対処しろということだ。最悪、殺すという選択肢も——ということにもなる。

表情を厳しくする俺に、アジユカ様が言ってくる。

「キミが眷属を持たないことも、その理由も知っている。だが、これを了承してもらいたい」

即答はせず、二人に視線を向けるが、二人とも俺に任せるように小さく頷くだけだった。まったく、信頼してくれて嬉しいが、なかなか決心するもの大変なんだぞ？まあ、こいつらが何かしでかすこともないだろうし、ずっとアジユカ様とジルに任せるわけにもいかねえか。

俺は苦笑し、了承する。

「……わかりました。で、おまえらは何をこそ所望だ？今なら何でも空いてるぞ」
俺が開き直ったように言うと、アリサが真っ先に挙手する。

「はい！『女——』」

「俺は『戦車』。アリサは『僧侶』でお願いします」

そんな彼女を遮り、クリスが要望を言ってきた。横でアリサが固まっているが、念を押すように言う。

「言い忘れたが、『女王』はダメだ。役職が役職だからな。そこは慎重に選ばせろ」

「は、はい……」

若干気落ちしているアリサを横目に、魔方陣から要望された悪魔の駒を取り出す。

「一つで足りればいいんだがな……」

ぼやきながらそれぞれの駒を二人に差し出す。二人はそれを受け取り、自分の胸に当たると、深紅の光に包まれた。

光が晴れてみると――、

「おお、力がみなぎる！」

「何だか、不思議な感じですね」

クリスは力こぶを作りながら、アリサは自分の胸に手を当てながらそう漏らした。どうやら、一つで足りたようだ。

俺がホツと息を吐いていると、アジユカ様が頷く。

「これで一つ目は完了だな。まあ、たまにはレーティング・ゲームのほうにも、こちらの『ゲーム』のほうにも参加してくれると助かる」

「まあ、レーティングのほうはともかく、そちらの『ゲーム』のほうは二人の意思を尊重します」

俺が返すと、二人も続いて頷く。

「どうせしばらくは暇でしょうからね」

「やってみると、結構楽しいんですよ！隊長もどうですか！」

「いや、辞めとく」

俺たちがわいわい喋っていると、アジユカ様が再び咳払いをして次の話題に入る。

「さて、次だ。彼——エリックが集めた情報は真実だよ」
「——ッ！」

俺は本日何度目かの驚愕の表情を浮かべる。情報の真偽はともかくとして、あいつエリックって名前だったのか!?

心のうちが表情に出ていたのか、エリックが嘆息気味に言う。

「……まあ、昔からコールサインで呼んでいたからな。なんだか、本名呼びが新鮮に思えるよ」

「俺はそんな事なかったけどな」

「おまえは半分引退しているようなものだろう。俺はまだまだ現役なんだよ」

俺とエリックが何て事を言い合っていると、アジュカ様が咳払いをしたので意識をそちらに戻す。

「キミたちがたどり着いた秘密。それを知ってしまった、いや、知らされた人物がもう一人いる。誰だかわかるかね？」

「……? まあ、知ってはいけない人物は間違いなくデイハウザーだと思いますが」

「そのデイハウザーが、あの情報を知ってしまったんだよ」

俺の適当な発言をアジュカ様は肯定した。まさか、皇帝が^{エンペラー}ライバルたちの不正を、親戚の死の真相を知っちまったのか……。

ジルが言う。

「アリサとクリスには事前に話したんだが、彼が何をするか、予測がつかない状況だ。現に――」

何かを言おうとしたジルを手で制し、アジユカ様と言う。

「この事は私からD×Dの面々に伝えるつもりだ。それと、一つ聞きたいんだが」「何ですか?」

俺が聞き返すと、アジユカ様は若干内容を隠しながら訊いてくる。

「二天龍討伐作戦の後、セラフォルーやサーゼクスにしたという話、本当か?」「あ、聞きました?」

なんか、知らないうちに俺の秘密が暴露されているんだが、少しは相談しろよ!

俺が何て事のないように返したことが気になったのか、さらに訊いてくる。

「その反応、つまりそういうことか」

「はい。まあ、あの二人が話すべきと判断したんでしょう。その判断は尊重しますよ」「そうかそうか。なるほど……」

興味津々と言った様子で俺を見てくるアジユカ様。な、何か、きな臭いマッドサイエントティストに睨まれているような嫌な気分だ。

俺が若干冷や汗を流しながら頬をかいていると、突然俺のケータイに着信が入る。見

てみると、ヴァインセントからだった。こんな時間に連絡とは、何があった？

一言アジユカ様に断りを入れ、一旦席を離れてケータイに出る。

「おう、俺だ。どうかしたのか」

『口、ロイ！おまえ、ニュース見てねえのかよ!? ああ、まだ流れてなかったんだ……じゃなくて、ライザーとレイヴェルがいなくなっちゃったんだ!』

「あのな、俺は基本人間界に住んでんだぞ？ 冥界の情報は少し遅れるんだよ。……で、何があった？」

『『皇帝ベリアル十番勝負』でライザーがデイハウザーと対戦したんだが、その時にデイハウザーもろともいなくなっちゃったんだよ！ 眷属として合流していたレイヴェルも一緒にな!』

焦りまくりのヴァインセント。そういえば、リアスがそんな特番があるとか言っていたな……。だが、デイハウザーが関わっているととなると……。

「ヴァインセント、ちよつと待ってろ」

『お、おう』

一旦ヴァインセントに待ってもらい、アジユカ様のもとに戻って開口一番に訊く。

「アジユカ様。フェニックス兄妹について、何かご存じですか？」

アジユカ様は意味深に笑むと、

「時が来たら、ということにしておいてくれ」

と言ってきた。このヒトが言うのであれば大丈夫だろう。

ケータイを耳元に当て、しっかりと待っていてくれたヴィンセントに言う。

「ヴィンセント、大丈夫だ。すぐに見つかる」

『ほ、本当か!?!おまえが言うんだつたらそうだろうが、本当に頼むぞ!?!』

「落ち着けよ。俺の予想じゃ、悪いようにはなつてねえよ」

念を押すようにアジユカ様に視線を向けながら言うのと、アジユカ様は確かに頷いた。

『わかった。それじゃあ、見つかったら連絡してくれ』

「了解だ。まあ、おまえの情報網のほうがい早いかもしれないねえけどな」

『そうかもしれないな。それじゃ、頼んだ』

ヴィンセントはそう言うのと一方的に電話を切った。……あいつ、俺の扱いが最近雑だ

よな……。

俺はそんな事を思いながらため息を吐くと、アジユカ様がジルに目で合図を送り、そ

れを受けたジルが言う。

「さて、話は終わりだ。駒王町まで送っていこう。アリサとクリスは引き続き『ゲーム』

のほうを頼む」

「わかりました!隊長、何かあればすぐに呼んでください!」

「了解だ」

「そう言えば、リーダーはなんと呼べば？」

クリスが突然訊いてきた。まあ、『リーダー』って呼び方をされる『王』^{キング}はあまりいいないだろう。

「まあ、好きに呼べ」

苦笑気味に言うと、二人は頷く。

アジュカ様とエリック、そして眷属になった二人に見送られてその場を後にする。やれやれ、また面倒が増えちまったな……。まあ、頑張つていくしかねえか……。

進路相談のベリアル

l i f e 0 1 限界

アジュカ様との会談から数日。駒王学園職員室。

レイヴェルとライザーの一件がニュースとなり、それを知らされたりアスたちの表情が暗くなっていた。だが、アジュカ様が「時が来たら」と言ったのだ、信じるしかない。てか、アジュカ様はいつ二人から俺の事を聞いたんだ？やはり、異世界の情報が出てきた辺りだろうか。それとも、魔王になった直後になのか……。

それに、眷属を持ったからには、何かしないと見え見えし、最悪の場合はレーティンゲームに参加しなきゃならねえわけだし……。

ああ、『王』^{キング}になったからには色々やらなきゃ見え見えのか。あの時は『二人が解放されるのならないか』なんて考えでやったわけだし、別に後悔はない。だが、何もプランがない。さて、どうするかな……。

「――先生？ロイ先生！どうかしたんですか？」

ロセが机に向かってポケットとしていた俺の肩を揺すり、意識をこちらに戻してくれ

ロセが訊いてくる。

「何か考え事ですか？何でしたら、相談に乗りますよ」

「まあ、考え事だな。そこまで急ぐことでもねえし、のんびり考えるさ」

苦笑気味に返してやると、

「そうですか？なら、何かあったら頼ってくださいね」

ロセが満面の笑みでそう言った。あー、癒される。これから本格的にどうするか考えねえと、二人にもいい迷惑だろう。

だが、今はシャキツとしねえと。今日から生徒たちが特に苦手とする『三者面談』だ。生徒だけでなく、保護者も学園に来ることになるだろう。迷惑はかけられない。

俺は一度両頬を軽く叩いて改めてスイッチを入れる。さて、頑張るとするか。

イツセーの三者面談が終わった日の夕食。

「つかあああああつー！こんなうまい酒は久しぶりだつー！」

いつになくイツセーの父親が上機嫌になっていた。さらに、その状態で酒を飲んで余

計にテンションを上げ、今にも男泣きをしそうになっている。

なんでも、『今まで何も言っていない息子が、すっかり将来を見据えていたから』
だそうだ。

そのイツセーは、はしゃぐ父親を見て、顔を赤くしている。

ロセがイツセーに言う。

「ダメですよ？ 将来のことはご家族ときちんと話すべきです。ちゃんと話し合わないと理解を得られない場合があったとき、大変なことになりますよ？ 二年生のこの時期に――」

長々と説教が始まりそうなので軽く聞き流して、俺もこれからの事を考えねえと。とりあえず、どこかに縄張りとか探したほうがいいのか？ 和平の輪が広がった今なら、昔よりは多少見つけやすくなっていると思うが……。

俺が横で真剣な顔をしていたせいか、ロセが訊いてくる。

「ロイさん。昼間も真剣な顔をしていましたけど、何かありましたか？」

「……まあ、隠してもしようがねえか」

「隠し事があるんですか……！」

いきなり詰め寄ってくるロセ。まあ、『隠し事』発言で変なものを想像しているのかもしれない。

俺は苦笑しながら言う。

「昔の知り合いに会ってな。兄さんの友人から色々頼まれたんだ」

悪魔のことを知らない兵藤夫妻の手前、本当の事を言うと混乱を招くので、少しだけはぐらかす。

ロセもそれを察してくれたのか、少し控えめに頷いた。

「なら、今度じっくりと聞かせてもらいます。何か力になれるかもしれません」

「そうさせてもらう」

頷き返すと、不意に頬が引つ張られる。引かれるがまま振り向いてみると、黒歌が俺が手をつけていない料理を指差しながら笑っていた。

「食べないなら貰っちゃうわよ？」

「ダメだ。好きなもんは最後に食うタイプなんだよ」

「あら、残念」

黒歌に取られる前に食事の手を進めていく。やれやれ、のんびり食いたいんだけどな……。

黒歌に何も取られることもなく、どうにか食事を終えた俺は、改めてロセに説明するために自室を目指していた。

俺の部屋のある階に到着すると、廊下の端に段ボール箱が置かれていた。

「……ロセ、何か買ったのか？」

「いえ、私は何も……」

俺とロセはお互いに顔を見合せ、疑問符を浮かべていた。段ボール箱といえばギヤスパードだが、あいつは下で小猫と談笑していたから違うだろう。

とりあえず、ゆつくりと箱を持ち上げてみると――。

「あ、ぎげんよう」

中にいた金髪の女性の赤い双眸と目があった。その女性は俺とロセを交互に見ると、ニツコリと笑った。

てか、こいつは……！

「ヴァレリー、だよな……？」

俺の確認に女性――ヴァレリーは頷いた。

「はい。お久しぶりです」

そう言えば、俺がアジュカ様と会っていた頃に、ストラダーからもらった聖杯の欠片を使って意識を戻すことには成功したとか言っていたな。

そうだとしても、なぜここにいる。もつと経過観察とか、検査とかなかったのか？俺が怪我したり倒れたりした時は、本当に大変だったんだぞ！

完全に固まっているロセを横目に訊く。

「なんで、ここに？てか、箱に？」

ヴァレリーは立ち上がり、少し辛いのか、段ボール箱に優しく腰掛けながら言う。

「体調が良くなったので、転移魔方陣経由ではありませんが、こちらのお家まで来ることができるようになりました。それと、ギヤスパアの真似を試みました」

ニコニコ笑いながら語るヴァレリー。まあ、そうやって笑ってくれるだけで、頑張ったかいがあったと思える。

不意にヴァレリーが言う。

「……あなたに憑いているヒトたちが、何となく薄くなったような気がします。もしかしたら、『皆』の声が聞こえない事とも関係があるのかもしれない」

『皆』つてのは、死者たちの集合体のことだろう。俺もそれっぽいものは見たことがあるが、おそらくあれよりももっと醜いものだろう。精神こころが壊れていた頃には見えていて、今は見えていないつてのはいいことだな。

……しれっと憑いているつて言われたが、そういうのは感じ取れるのな。まあ、

セイクリッド・ギア
神 期の能力だから仕方ねえか。

ロセが硬直から復活すると、階段から駆け上がったくてくる気配がひとつ。

「あ、ヴァレリーー！こんなところに！小猫ちゃんの部屋から出ちゃダメだよ！それに、ロイ先生にも迷惑かけちゃ！」

慌てながらギヤスパーが現れた。部屋からいなくなったヴァレリーを探していたんだらう。若干だが、額に汗をかいている。

こいつ、ヴァレリーが関わると急に頼もしくなるからな。護りたいヒトがいるつてのは大切だ。

俺がほっこりしていると、ギヤスパーがヴァレリーの手を引いて、「失礼しましたー！」と言いながら階段を駆け降りて行った。何となく、まだまだ気弱なのかもしれない。まあ、ヴァレリーは楽しそうに笑っていたが。

「さて、改めて入るか」

「はい。お邪魔します」

てなわけで入室。置いてある机を挟むように座り、向かい合う。

「で、悩み事つてのは、簡単な話だ」

「もったいぶらずに教えてくださいよ」

急かしてくるロセ。確かに出し惜しむような話ではないか。

「ああ。俺な、眷属を持つことになった」

「……………」

俺の告白に固まるロセ。俺が眷属を持たない理由を知っているから、驚き何だろう。

そんなロセを構わずに続ける。

『王』^{キング}になった方がいいが、やることがわからねえんだよな……。そのうち縄張りとか探したほうがいいのか？」

「そ、それは、リアスさんやソーナさんに相談するべきでは？」

「だよな」

出来ることなら妹たちを頼りたくはないんだが、最悪そうなるだろう。

「……………だったら、私もロイさんの……………」

俺が思慮していると、ロセがぼそぼそと何か言っていた。なんだ、ロセなりに考えてくれているのか？

「ま、のんびり考えるさ。悪魔の一生は永い^{なが}からな」

「そうですね……………」

優しく笑みながら頷くロセ。同時に何か覚悟を決めたような表情になっていた。

俺が疑問符を浮かべていると、ロセは「少し急用を思い出しました！」と言って足早に部屋を飛び出していく。…………元気な奴だな。

俺は苦笑しながら時計を確認。さて、そろそろ寝るか…………。

次の日の昼。

アザゼル経由でアジユカ様から連絡があり、二人の無事が確認された。いちおうヴィンセントにも報告したんだが――。

『マジか!?!良かった、本当に良かった……。まったく、帰ってきたらあいつらに説教してやる!』

と、やる気満々だった。ちなみに、まだ報道はしないようにも伝えた。てか、させないようにジル経由で釘を刺された。まあ、二人が何かに巻き込まれたのは確実だ。報道は控えたほうがいいだろう。

二人をいつ受け渡すかも連絡があつたようで、それは二日後だそうだ。長いような、短いような時間だな。

あつという間に二日後。

フェニックス兄妹の受け渡しの日なのだが、リアスたちにも相談して俺は別行動を取ることにした。どうにも、嫌な予感がしたのだ。

その嫌な予感というのは、リアスたちに何かあるというわけではなく、普段なら巻き込まれる事のないヒトたち。つまり、兵藤夫妻に何かあると第六感が告げてきたのだ。

夫妻は最初はイツセーを釣りに誘ったそうだが、今日はフェニックス兄妹の受け渡しの日となつてしまったのでイツセーは参加できなくなった。なので、代わりになるかわからねえが、俺が参加することにしたのだ。

まあ、義弟おとうとの両親と親睦を深めるのもいいだろう。父さんと兄さんも二人に色々としているらしいから、俺も何かしておかないと。

てなわけで、イツセーのお父さんが釣り仲間から聞いたという穴場の釣りスポットを訪れ、釣竿を振つて釣糸を垂らしていた。

獲物が餌にかかるのを待ちながらボケツとしていると、イツセーのお父さんが言う。「いやー、ロイさんも釣りをするんですね。失礼かもしれないですけど、素潜りをしている姿のほうが想像できます」

「まあ、最悪そつちのほうが捕れますよ。あんまり濡れたくないときは釣りをします」俺が返すと、イツセーのお母さんが笑う。

「確かに、この時期はまだまだ冷えますからね。風邪を引いたら、お仕事にも影響してしまいますよ」

「生まれてこのかた、風邪を拗らせたことはありませんよ。体調管理は基本ですから」
若干どや顔をしながら言うと、夫妻は若干可笑しそうに笑った。

こんな普通の家庭からイツセーみたいな英雄ヒーローが産まれたんだよな……。世の中わからねえもんだ。

呑気にそんなことを考えていると、いきなり左腕が疼うずき始めた。つまり、奴が近くにいる……。

俺が周囲を警戒し、周囲を見渡していると、イツセーのお父さんが訊いてくる。

「あの、ロイさん？どうかしましたか……？」

失礼だが無視して、近くの茂みに目を向ける。そこにいたのは――。

「おや、奇遇だねロイくん。ここまで意見が合うとは驚いた」

相変わらず、邪悪な気配を漂わせるリゼヴィムだ。嫌な予感的中したわけか。だが、片腕を飛ばしたのに五体満足だ。どうやって治した……？

そんな考えが過るが、最優先である兵藤夫妻の盾になるために前に出ると、後ろにいる二人に申し訳ないが魔力で簡単な催眠術をしながら言う。

「二人とも、先に帰っててください。あいつは俺の知り合いです」

「え？ああ、はい……」

「失礼しますね」

瞳が若干虚ろになった兵藤夫妻は頷くと、その場を離れようとするが、「おっと、今回は二人に用があるんだ。逃がすわけにはいかないな」

リゼヴィムが二人に右手を向け、魔方陣を展開。そこから鎖を飛ばす！

「ッ！やらせるかよー！」

二人に向かう鎖を異空間から取り出したアロンダイトで切り裂き、同時に深紅の力を解放。広がった視界にリゼヴィムを捉え、睨みつける。

俺に睨まれながらリゼヴィムは不敵に笑む。

「相変わらず、その目は正義の色が強いな。だが、私にも考えがある」

「何を考えているかは知らねえが、ここで仕留めさせてもらうぞ……い！」

深紅に染まったアロンダイトの切っ先をリゼヴィムに向け、俺はそう告げた。こいつをここで仕留められれば、色々と楽になることは确实。邪龍も俺たち総出でならどうにかなるはずだ。

俺が思慮するなか、リゼヴィムが挑発するように人差し指で手招きしてきた。

「さあ、来い。『紅髪クリムゾンの殺人鬼キラー』！」

挑発に乗るわけでもないが、俺はその場を飛び出してリゼヴィムに斬りかかる！

リゼヴィムはその場を飛び退いてそれを避けると、俺に散弾型の魔力弾を放ってきた

！

刹那で魔力弾の軌道を見切り、体捌きで全てを避けきりリゼヴィムに肉薄する！その間にもリゼヴィムが魔力弾を放ち、周囲の木々が吹き飛んでいくが、その破片も含めてアロンダイトで斬り裂きながら直進する！

一気に間合いを詰め、アロンダイトを大上段から振り下ろす！リゼヴィムは白羽取りの要領で止めるが、聖滅のオーラで手が焼かれていく！

「このオーラ、以前と比べると段違いだな！」

「おまえ、腕はどうした。あの時消滅させたはずだ！」

俺の怒鳴りつけるような問いかけに、リゼヴィムは笑いながら答える。

「ハハハハッ！魂が少しでも残っていれば、聖杯でどうとでもなるさ。今こちらに来れば、キミの目と腕も治せるが、どうする？」

「今さら治す気もねえよ！」

俺の返事を合図に、お互いの腹部に蹴りを放ち、同時に後ろに吹き飛んだ。

足を地面につけて無理やり勢いを殺し、そのまま斬撃を放つ！

体勢を整えたりゼヴィムは素直に避けるが、そこを狙って飛び出していく！障害物は特になし。一気に加速していく！

正面からリゼヴィムに斬りかかる瞬間、奴はカウンターを狙ってくるが、そこを狙って残像を残して背後を取る！

リゼヴィムの蹴りが残像を捉えた瞬間、アロンダイトを横一文字に振り抜く！——が、空を斬った感覚したねえ！

俺が切り裂いたリゼヴィムが霞かすみのように消え、背後から絶大な殺気を感じ取った。こいつまで残像を、いや、この感じは幻術か！

判断すると同時に飛び退こうした瞬間、俺の頭が蹴り抜かれた！……っ！なんて重さだ……！今までの比じゃねえ……っ！

勢いよく地面に叩きつけられ、水切りの石のように跳ねる俺。……くそ、これがこいつの本気ってわけか！

吹き飛びながら『痛覚無視』をおこなない、アロンダイトを地面に突き立てて勢いを殺す。同時に重心を深く落として力を溜め、地面が抉れるほどの勢いで飛び出していく！ズボンに赤黒い染みが出来たが、ストラダーと一戦やった時にもなったんだ、今さらにしねえ！

余裕で腕を組ながら立っていたリゼヴィムは、先程よりも速くなった俺に驚きながら、俺が飛び出した勢いのまま放った一撃を今度は避けた。

アロンダイトを振り下ろした余波で地面が捲めくれ、大量に舞った砂塵の中でリゼヴィム

の気配を探り、そこに刺突の勢いで斬撃を飛ばす！

砂塵が斬撃によって消し飛び、それをギリギリで避けたりゼヴィムの姿があらわになる。奴の頬には一本の赤い線が出来ていたが、表情は狂喜の色に染まっている。

……狙いが甘かったか。眉間を撃ち抜くつもりだったが、少し逸れたようだ。

アロンダイトを握り直し、再び突貫。周囲の被害をお構いなしにアロンダイトを振り回し、木を薙ぎ倒し、地面を砕き、空気を切り裂きながらリゼヴィムを追い詰めていく。一撃を避けられ、同時に間合いを一気に開けられたので急いで接近。若干右足に違和感を感じたが、無視して突き進む。

間合いを詰めて斬りにいくが、若干体の反応が悪い……？いや、そんなはずはないだろう。

放った剣撃があっさりと避けられ、距離を離れたリゼヴィムから、反撃の魔力弾が放たれる。

再び体捌きで避けていくが、一発が左足を掠める。痛みはない。なら、大丈夫だ……。アロンダイトを振り回して魔力弾を斬り裂いていき、リゼヴィムに接近していく。だが、妙に遠く感じる。いや、俺が遅いのか……？

それでも無理やり間合いを詰めて斬りかかるが、あっさりとリゼヴィムに止められた。

リゼヴィムは俺の手足を一瞥すると、ため息を漏らした。

釣られるように手足を確認してみると、両腕両足のいたるところに赤黒い染みが出来ていた。リゼヴィムはそれを見ていたのだろう。

『痛覚無視』をするのもいいが、少しは痛みがなければどうにもならないだろう！」

リゼヴィムはそう言いながら一気に力を込めてくる。押し返そうと俺も力を込めようとするが、まったく力が入らない。

ついにアロンダイトが俺の手から弾かれ、リゼヴィムの拳が俺の鳩尾みぞおちにめり込んだ！

「……………」

痛みはない。だが、息ができねえ……………！

一瞬動きが止まったところに、リゼヴィムの蹴りが炸裂する！

「……………」

あごを撃ち抜かれ、一瞬だが意識が飛んだぞ……………。

俺そのまま崩れ落ち、立ち上がれなくなる。痛くねえのに、体が動かねえ……………！

視界が左半分だけに戻ってしまい、アロンダイトも遠くの地面に突き刺さっている。

もう限界かよ……………。まだ行けるだろう……………！

意気込んで立ち上がろうとするが、体は動いてくれない。痛みはねえのに、どうして

動かねえ！

リゼヴィムは地面に倒れる俺を一瞥し、兵藤夫妻が逃げて行ったほうに目を向けた。「さて、あの二人も連れてこなければ。元の目的は彼らだからね」

リゼヴィムはそう言うのと、俺の首を掴み、そのまま持ち上げた。……この……野郎……！

掴んでくる腕を殴りつけるが、リゼヴィムにダメージはない。むしろ力を込めてきている……！

「痛みが無いのは、確かに良いことかもしれない。だが——」

リゼヴィムは俺の手足を憐れむように見ながら言ってくる。

「——痛みがなければ、その傷にも気づけないだろう。これがキミの限界ということさ」俺の手足の染みはどんどん大きくなっていく。まさか、筋肉が切れてやがるのか……？力が入らねえのは、そのせい……？

視界が霞んでいくなか、リゼヴィムが言う。

「さて、キミにも役に立って貰おう。『紅髪クリムゾンの殺人鬼キラー』」

みんな、すまねえ……。勝てなかった……。

俺が懺悔のよう心中で言うのと、意識は底の見えない暗闇に落ちていったのだった——

life 02 最悪の再会

僕——木場裕斗を含めたチームDXDは、さつきまでアジユカ様からレイヴエルさんの受け渡しと『王』^{キング}の駒の話をされていたんだ。

その話が一段落したら、オフィスが重症を負ったこと、イツセーくんのお父さんとお母さん、そしてお二人に同行していたロイさんが行方不明になったことを知らされた。

イツセーくんやリアス元部長、ロスヴァイセさんが動揺していたけど、朱乃さんを中心にどうにかフォローして今は持ち直している。

それから、ヴァーリチームがアグレアスを発見したことを聞かされ、すぐにアグレアス攻略のための作戦が練られた。

まず、アジユカ様が用意してくださった禁呪の類いの転移型魔法を使う。しかし、それで一度に送れる人数は限られてしまうそうさ。

なので、陽動のためにソーナ元会長とシトリー眷属、デユリオとシスター・グリゼルダさんが中心となった『御使』^{フレイブ・セント}「御使い」複数名が先陣を切る。

そして、陽動で隙ができたなら、僕たちオカルト研究部、そして刃^{スラッシュ・ドッグ} 狗こと幾瀬鳶雄さ

んがアグレアスに転移する。とは言っても、幾瀬さんはすぐに別行動になるそうだけだね。

最後に、ヴァーリチームもそれに合わせて踏み込んでくるそうだ。

僕たちがそれを確認したところで、ようやく作戦が開始されたのだった。

アグレアス攻略作戦が始まり数分。

リアス・グレモリーと彼女の眷属たちは、アグレアスの庁舎にたどり着いていた。リゼヴィムがいるとすれば、そこが可能性が高いからだ。

イツセーとアーシアを兵藤夫妻救出に向かわせ、後は時間を稼ぐだけとなったのだが、その途中、皇帝ベリアルからの『レーティングゲームの闇』なる放送が冥界全土におこなわれた。だが、彼らにそれを気にする余裕はない。異常なまでの邪龍が彼らに殺到していたからだ。

オーフィスに重症を負わせた邪龍——『アレス・レイジドドラゴン外法の死龍』ニーズヘッグは、突如現れたク

ロウ・クルワツハに蹂躪されていた。

リアスはそれを見ながら邪龍を殴り倒していく。今の彼女は紅の鎧を見に纏つてい
る。これがイツセーとの『新技』、赤龍帝の力を込めた飛龍フイロンを鎧として纏う、
『深紅の滅殺龍姫』だ。今の彼女は一定時間限定の擬似的な赤龍帝となっていた。
そんな彼女と眷属たちの猛攻で邪龍を蹴散らしていると、突如、彼らに群がっていた
邪龍が四方八方に散っていった。

全員が何かしらの罫かと周辺を警戒していると、庁舎の崩れた正面玄関から、人影が
現れる。

全員が気配でそれを察し、そちらに顔を向けると、そこにいたのは――。

「お兄様！」

「ロイさん！」

行方不明になっていたロイ・グレモリーだ。妹であるリアスと、恋人であるロスヴァ
イセは緊張感もなく彼を呼ぶが、すぐに異変に気づく。

まず一つ目は、彼の持つアロンダイトから、聖剣と呼ばれるには程遠い邪悪なオーラ
が放たれて、白銀の刀身が黒く濁っていること。

二つ目は、右手に見慣れた赤い籠手カゴテがつけられていること。

そして三つ目は――。

「はあああ……………」

感情を感じさせない虚ろな目でリアスたちを睨み、今にも斬りかかってきそうなことだ。

「お兄様、その籠手は……………」

リアスが心配そうに問いかけると、彼の代わりと言わんばかりに籠手の宝玉が点滅し始める。

『どうも、D×D諸君！リゼヴィムおじちゃんです☆さて、どうして彼がこのレプリカの「赤龍帝の籠手」ブーステッド・ギアを持っていて、キミたちを睨んでいるか、聞きたいでしょ？聞きたいでしょ！』

リゼヴィムの声に一樣に顔をしかめる一同。それにかまわず、リゼヴィムの音声は続く。

『いや、何回言っても協力してくれないもんだから、聖杯を使って「洗脳」させてもらっちゃった☆てなわけで、今の彼は僕ちやんの忠実なる僕しもべってわけさ！いやああああ、楽しかったよ！彼の魂を覗くのはさっ！そのせいで完璧に壊れちゃったけどね☆今の彼はまさしく戦うだけの戦闘マシーン！「紅髪クリムソン・ヘアードの殺人機」ってやつかな？我ながらいいセンスッ！それじゃ、後はよろしくっ！ばいちゃっ！』

リゼヴィムの音声途切れると、ロイはアロンダイトを構え、リアスたちを睨み付け

る。

「お兄様！しつかりしてください！」

「ロイさん！私です！ロスヴァイセです！」

二人が叫ぶが、ロイは無視して右手の籠手を掲げ、言葉を紡ぐ。

「……禁……手化……」

『Balance Breaker!!』

ロイの身体を赤い光が包み込み、一気に弾ける！

光が晴れ、リアスたちの視界に飛び込んできたのは――。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！」

赤を基調とした、鋭角の目立つ全身鎧プレート・アーマー。まさしく『赤龍帝の鎧』を纏い、獣の

如く天に叫ぶロイの姿だった。

彼を見ながら、ゼノヴィアがエスクカリバーとデュランダルを構え、リアスに言う。

「リアス部長、やるしかなさそうだ」

「部長、少々手荒いですが、力づくで」

ゼノヴィアに木場が聖魔剣を構えながら同調すると、リアスも一瞬迷いながらもすぐに覚悟を決めて拳を構える。

「……お兄様、あなたを止めます！」

どす黒い滅びのオーラに背後の建物が叩き斬られ、次々と倒壊していく！

ストラダーダのように崩壊させることなく、研ぎ澄ませた一撃で斬られたわけでもなく、ただ火力で叩き斬られたため、建物が耐えきれなかったのだ。

《はあ！》

そんな中、闇の獣を引き連れながらギヤスパアが飛び出していく！

迫りくる獣を次々と力任せに叩き斬っていき、最後に放たれたギヤスパアの拳は左手で受け止める。

《このー！》

拳を止められた状態で蹴りを放ち、ロイの横腹を捉えるが、打たれたロイは特にダメージがある様子もなく、そのままギヤスパアをジャイアントスイングの要領で投げ飛ばした！

ギヤスパアが近くの建物に叩きつけられると、木場とゼノヴィア、イリナの三人が飛び出し、白音モードの小猫が火車で援護をおこなう。

火車を切り払いつつも、剣士三人を迎え撃つロイ。その動きはまるで獣のようであり、言われなければロイだと気づく者はいないだろう。

ロイは三人の猛攻を捌いていくが、少しずつ鎧に傷がついていく。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

リアスの滅びとロイの滅びがぶつかり合い、空間が揺らす！そして、二つの滅びのぶつかり合いは――。

「オオオオオオオオオオオッ！」

ロイの勝ちに終わった。リアスの滅びは文字通り一刀両断され、アロンダイトには傷一つない。周辺に留まっていた粒子が全て消し飛ばすことが出来たのは幸いか。

リアスは兜の下で表情を険しくしていると、口を開く。

「まるで黙ね。後先考えずに本能で動いているように見えるわ……。なら、フェイントや陽動をすれば……」

リアスの言葉に眷属たちとイリナが頷き、再びロイに目を向けると、

「うう……うう……オオオオオ…………！」

頭を押さえ、肩で息をしながら苦しげに呻いていた。そのまま息が荒くなっていき、突然膝をつく。

「ロイさん……っ！」

ロスヴァイセが一瞬戦意を鈍らせ、彼に手を伸ばした瞬間――、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

ロイが再び天高く吠えた！それを合図として、大量の黒い触手が鎧の各所を突き破り、不気味に蠢き始める。

まる。が、すぐに壁をぶち抜いて戻ってきた。

リアスたちは再び構えを取るが、ロイは腹部を押さえて苦しげに息を吐いた。

「うう……うう……があー！」

兜の間から大量の血が吹き出し、今の一撃の重さを彼女たちに知らしめる。だが、それでも倒れない。

リアスたちが次の一手を思索するなか、朱乃があることに気づき叫ぶ。

「みんな、避けてー！」

『——ッ！』

動き出そうとした瞬間、地面から大量の触手が飛び出し、彼女たちに襲いかかる！木場やゼノヴィア、イリナはうまく触手を斬り捌くことがで凌いだ、それ以外のメンバーは触手の攻撃をもろにくらい、体に大小様々な傷が生まれる。

鎧を切り裂く攻撃を受け、リアスが片ヒザをついた瞬間、ロイが彼女に向けて飛び出す！木場とゼノヴィアが反応しようとするが、触手に阻まれて近づくことができない。

眼前に迫り、アロンダイトを振り上げるロイの姿に、リアスが腕をクロスさせて防御の体勢を取る。砕かれた鎧で耐えられるかわからないが、今は賭けるしかない。

リアスが衝撃に備えた瞬間、

「おらあああああッー！」

横合いから現れた誰かの攻撃にロイは再び吹き飛ばされ、再び庁舎に突撃する。

「あ、あなたは！」

リアスは自分を助けてくれた人物を見て、驚愕の声をあげた。

「よ、スイッチー……で、何だありや」

三國志の武将を思わせる鎧に身を包んだ男性——ヴァーリチームの美猴だ。彼が如意棒を肩に担ぎながら庁舎のほうに目を向けていると、ロイがアロンダイトを引きずりながら庁舎から出てくる。

「おいーあれ、おまえの彼氏じゃねえか？」

美猴が虚空に問いかけると、宙に穴が空き、そこから着物を着た女性——黒歌と、聖剣を携えた背広を着た男性——アーサーが現れ、地面に足をつける。

黒歌がロイに目を向け、一瞬表情を険しくさせる。

「本当だ。行方不明って聞いたけど、まさかあんなことになっているなんて……」

若干だが心配するような声音の彼女に、美猴はいじるネタができたと言わんばかりに笑みを浮かべていると、リアスが言う。

「ルフェイとフェンリルは一緒じゃないのね」

「ええ。ルフェイとフェンリルには、周辺に散った邪龍の掃除を頼んであります。ルフェイをここに連れてくるのは危険と判断したままですよ」

アーサーはそう答えると、一歩前が出る。

「こんな形になってしまいました。あなたと戦えるのならいいでしょう。私としては、アロンダイトにも興味がありますから……」

最強の聖剣と名高い一振り、『聖王剣』コールブランド、またの名をカリバーンを構え、好戦的な笑みを浮かべる。

彼らの参戦で、ロイとの戦いは激化の一途となっていく——！

life 03 罪(かこ)に呑まれた男

コールブランドを構え、ロイと対峙するアーサーと、彼を睨みながら触手を蠢かせ、アロنداイトを肩に担ぐロイ。一触即発の空気が両者の間に流れ、他の者の介入を許さない。

近くの建物が崩れ、瓦礫が地面に落ちた瞬間、アーサーが飛び出す！一瞬でロイとの間合いを詰め、コールブランドで斬り込む！

ロイは彼の一太刀をアロنداイトで受け、つばぜり合いに持ち込もうとするが、アーサーはそれを受けずにそのままラツシュに持ち込んでいく！

アーサーの高速の剣撃と、空間に穴を穿ち、そこから刀身を飛び出せることで相手の死角をつく彼の剣技に、ロイの鎧に少しずつ傷が増え、碎けていく。だが、ロイはそんなものお構いなしにアロنداイトを振り回し、アーサーに打ち込んでいくが、アーサーはそれを華麗に避けて距離を取った。

アーサーは落胆したように息を吐き、興味なさげにロイを一瞥する。

「やはり、獣の相手は退屈ですね。力任せで技がない」

「オオオオオオオオオオッ！」

それを挑発されたと判断したのか、ロイは叫びながらアーサーに肉薄していき、豪快にアロンダイトを振り下ろす！だが、そこにアーサーはいない。彼は既にその場を待避し、ロイの背後を取っていた。

「あなたを殺したら、後が大変そうですからね……」

アーサーの声に反応し、ロイが振り向いた瞬間、彼をコルブランドの連撃が襲う！腕を斬られ、足を斬られ、体中を滅多斬りにされ、全身の鎧を砕かれたロイは脱力したように両膝をつく。一瞬のタイムラグを置いて兜が砕け、虚ろな瞳で俯き、動かなくなった。

暗い。見渡す限り真つ暗だ。何も見えない。何も感じない。俺は、何だ……？
大切な何かがあったはずだ。大切な誰かがいたはずだ。だが、何もわからない……。俺は、誰だ……？

『——おまえは罪人。もはや生きる価値はない』

『——あなたは道具。もはや生き物ではない』

『——おまえは人形。ただ殺すことしかできない、壊れた人形』

『——あなたは』

『——おまえは』

『——殺しを生き甲斐にする、狂った人形』

問いかけに、様々な声で返ってきた。恨みを込めた、怒りを込めた声が俺に届けられる。

耳を塞ぎたい。この場を逃げ出したい。だが、体の感覚なんて、感じない。腕の感覚も、足の感覚も何もない。

ああ……。ああ……。心なんてなければどれだけ楽か。思いなんてなければどれだけ楽か。

黒一色の世界に、突然ある情景が映された。見覚えのある世界だ。血と炎と、誰かの悲鳴と生き物が焼ける匂いが充満し、むせかえりそうになる。だが、すぐにそんなものには慣れた。いや、思い出した。

ああ、そうだ。この世界が俺の居場所だ。この地獄が、俺の生きた、いや、生きる場所だ。

俺は影の世界に生きるべきだ。幸福も、平和も、未来もいらない。ただ殺して、壊し

迎え入れるように、四対の手を広げていた。

それを迎え入れるように両腕を広げて近づき、躊躇いなくそいつを斬り伏せた。

地面にぶちまけられたそいつの血を口にすると、何かが俺の中に流れ込んでくる。ああ、これだ。俺の求めたもの。鉄臭く、生温かい。癖になりそうなの、いや、もう癖になっている味。『死』の味だ。

もつと、もつと、もつと、もつと、もつと味殺わしいたい。……そうすれば、俺もいつか死ぬるだろう……。この味を覚えた時点で、心は死んだのだから……。この味をあとどれくらい味わえば、体も朽ち果てるだろうか……。

「——もつと、もつとだ……。」

「ッ！」

アーサーは突然の殺気を感じ、その場を飛び退く。その刹那、アーサーのいた場所を黒い軌跡が通りすぎた！

リアスたちは驚愕の表情を浮かべる。先ほど膝をついたロイが立ち上がったからだ。それに加え、アーサーにつけられた傷は、黒い滅びの糸により縫い止められていく。

怪我の治療を済ませたロイはアロンダイトを杖代わりに立ち上がると顔をあげ、周囲を見渡す。

「……ロイ……さん？」

ロスヴァイセが声をかけるが、ロイはハイライトの消えた黒い瞳で彼女を睨む。

ロスヴァイセがそれに気づき、半歩後ずさると、ロイが一瞬にして彼女の眼前にまで迫っていた！

「ッー」

「……もつとだ……」

そう言いながら、ロスヴァイセの腹部に拳を放ち、そのまま殴り飛ばす！ロスヴァイセはそのまま瓦礫の山に突っ込み、意識を失った。

アロンダイトを持ち上げ、切っ先をリアスたちに向ける。

「もつとよこせ。おまえらの血を……」

アロンダイトを両手で構え、リアスを目指して飛び出す！木場とアーサーが反応する

と、ロイは急停止、回転の勢いを乗せ、二人に向けて滅びのナイフを放って牽制する！

二人はそれをそれぞれの得物で弾くと、ロイが全員の視界から消え失せる！

黒歌は仙術による関知で彼の居場所を瞬時に突き止め、指示を飛ばす！

「アーサー、後ろよー！」

「——ッ！」

一瞬反応が遅れたアーサーの背中に、袈裟懸けに傷がつけられる！

「くっ！」

それでもコールブランドを振り、ロイを牽制するが、彼は既にその場にはおらず、全員から間合いを取った場所に立っていた。

アロンダイトの刀身についた微量の血。それを指で拭い、指についたものを舐め取る。

「……全部だ。全部超越せ。そうすれば——」

左手に魔力を溜め、そのまま風呂敷払う。同時に黒い滅びが刃となり、相對する者たちに襲いかかる！

全員が反射的に姿勢を低くしてそれを避けると、ロイは再び左手に魔力を溜め、天に向けてそれを放つ。

「——俺も死ぬる。罪から解放される」

『ツ！』

ロイの呟きにリアスたちが彼のいるほうに目を向ける。いや、向けてしまおう。

全員の視界から外れた天高く放たれた魔力の塊が弾け、滅びの槍が雨のように降り注いできたのだ！

それを足に自信のある者は避け、自信のない者は防ぐが、ロイは次の手を打つ。左手で指鉄砲を作り、魔力を練っていく。

滅びの雨を防ぎきり、リアスたちは次の一手を止めようとするが、同時に地面から触手が飛び出す！先ほど放った触手がまだ地中に残り、それが再び動き出したのだ！

だが、木場はそれさえも掻い潜り、背後からロイに斬りかかる！

完全に死角のはずなのだが、ロイはアロンダイトの刃を背中に回してそれを防いでみせた。同時に、正面からアーサーが斬り込むが――

「な……………」

魔力を纏わせた手刀で難なく受け止めた。だが、これで両手を封じられたことになる。

「はあ！」

「この！」

ゼノヴィアとイリナが側面からロイを攻めにいくが、彼は足で軽く地面を叩く。その

瞬間、二人を串刺しにするために、地面から黒い刃が飛び出す！

「ツッ！」

二人はギリギリでそれを避けると、ロイが両腕に力を込め、アロンドイトと手刀を風ぎ払いながら一回転。木場とアーサーが弾かれ、空中に投げ出された二人に滅びのナイフを投げる。

二人は刹那の見切りでそれを弾き、体勢を整えて地面に着地する。ロイは彼らに追撃せず、後衛のいる方向にアロンドイトのオーラを放った！

黒歌が後衛全員を囲むように転移魔方陣を展開し、そのまま短距離転移。全員がその場を飛ばされた瞬間、彼女たちのいた場所が黒い濁流に呑み込まれ、塵一つ残さず消滅、小型のクレーターが完成していた。

リアスたちはダメージのある体に鞭を打って立ち上がり、ロイを包囲するように散らばる。一ヶ所に固まれば、まとめてやられると判断したのだ。

「おりゃー！伸びろ如意棒！」

美猴が如意棒を伸ばし、ロイに向かわせるが、

「フッ！」

ロイの振るったアロンドイトによってあっさりと砕かれた。美猴は一瞬驚愕するが、すぐに笑みを浮かべる。

ロイは天に浮かぶ邪魔者を睨み付ける。そこにいたのは――、「いやー、ギリギリセーフ。で、ロイさん。今、なにしようとしたの……?」

今までとはうって変わり、殺気を放つデュリオが翼を展開していた。

デュリオはぼろぼろになったリアスたちに目を配り、最後にロスヴァイセだけが気絶していることに気づく。

デュリオはロイに対して、手で丸を作るような構えを取った。攻撃のためではない、彼を助けるために構えたのだ。

ロイは何か来ると判断したのか、デュリオにナイフを放とうとするがそれを木場、ゼノヴィアが阻止し、朱乃はデュリオを守るように障壁を張る。

「行くよ、ロイさん。『虹色スベランツァ・ポツラ・デイ・サボネの希望』……」

デュリオはそう言うのと、手で作った丸の中心にやさしく息を吹き掛けた。すると、そこから虹色のシャボン玉が出現した。それは一つや二つではなく、数十、数百にもなるうとしてる。

ロイはをアロンダイト振り、シャボン玉を割っていくが、いくつかのシャボン玉は当たる。本来なら一つでも十分だ。だが、それでは足りないだろう。

デュリオはそう判断し、さらにシャボン玉を作り出し、ロイに向けて放っていく。

そして、数え切れないほどにシャボン玉が当たった頃、暴れまわっていたロイの動き

が突然止まった。

時を同じくして、上空で起きていたイツセーとりゼヴィムの戦いが、終わりを迎えようとしていた……。

どこまでも広がる地獄に、また不釣り合いなものが現れた。虹色のシャボン玉だ。さっきの男といい、これはなんなのか。

シャボン玉が当たる度に地面に波紋が走り、火が陰つていき、地獄の様相が崩れていく。

それを眺めていると、不意に声がかけられる。

「まあ、なんだ。我らがリーダーの技だな」

「——ッ！」

驚愕と共に振り返る。そこにいたのは——、

「おまえは、さっきの……！」

「よう、俺。久しぶりだな」

先ほど殺したはずの筈の男だった。

俺——ロイの目の前には、俺の髪と瞳をそのまま黒くしたような男が、血塗れで立っていた。いや、まあ、誰かはわかるんだがな。前世で嫌ってほど見た顔だ。

頬をかき、目の前の男を睨む。

「さて、どういう状況なのかよくわからねえが——」

俺が言い切る前に男がどす黒く、禍々しいオーラを放つアロンダイトで斬りかかってくる！俺はいつの間にか手に握られていた本来の輝きと聖なるオーラを放つアロンダイトで受け、そのままつばぜり合いに持ち込んだ！

「過去との決着のチャンスだよな？」

「ほごくな。何度でも殺してやる……！」

俺たちは同時に蹴りを放ち、そのまま後ろに吹き飛ばされる！

地面をスライドしながら勢いを殺し、同じく勢いを殺した男と睨みあう。
『過去を受け入れ、自分を見失わない』。おそらく、それができる本当のチャンスは今だ
ろう。

燃え盛る地獄を背景に、俺と俺の戦いロイが始まろうとしていた。

life 04 過去との決着

立ち昇る炎と瓦礫がどこまでも広がる、この世の地獄とも言える場所。何も無いであろうその場所を、二つの影が駆け抜ける。

一つは俺——ロイだ。全開状態の深紅の魔力を体から放ちながら、地獄を駆け抜ける。

もう一つは、俺とほぼ同じ速度で、怪しげな黒いオーラを放ちながら地獄を駆け抜けている奴だ。……奴は、俺が目を背けてきた、罪とはまた別の闇の部分。心のどこかにあった俺の弱さで生まれた影。

リゼヴィムに負けてからの記憶がないが、たぶん何かしらされたんだろう。そのせいで、心の奥底に眠っていた奴が表に出てきた。……なら、決着をつけなければならぬだろう。

アロンダイトを握り直し、並走している奴に斬りかかる！奴もそれを得物で受けとめ、そのまま至近距離での攻防に入る！

振り下ろしを、突きを、横風ぎを、今まで培ってきた全てを使って斬りにいくが、奴はそれを全て読んでいるように立ち回り、的確に捌いてくる！だが、それはこちらも同

じ事。奴は俺だ。どう動こうとするかは、嫌でもわかる。

つまり、お互いの攻撃は全く当たらず、決定打が一切なしでただひたすらに消耗していくだけだ。先ほどからこれが続いており、極端な話、突破口が見えない。

奴はいきなり黒いアロランダイトをオーラを込めて振り回し、危険と判断した俺は回避、距離を取らされる。

俺が体勢を整えた瞬間、奴が左手をこちらに向け魔方阵を展開。俺が身構えた瞬間、魔方阵からオーラで形作られたと思われる黒い頭骸骨が無数に放たれた！

速度こそ遅く、回避は余裕でできるだろう。だが――！

『死ね！死ねえ！』

『殺してやる！殺してやる！殺してやる！』

『あああああああああああ！』

あいつ、怨念を飛ばしてやがる！うまく制御しているのか、怨念は奴ではなく俺のほうを憎んでいるのか……。

確かに、取り込んだ時に拒絶反応のように強烈な痛みが襲ってきたが、向こうはそんな事もなさそうだな。何か違いがあるのか……？

なんて事を思慮しているうちに怨念が迫ってきており、今回ばかりは避けさせてもらう。再びあの痛みで動けなくなれば、確実に奴が殺しにくる。

その場を飛び退いて迫ってくる怨念を避けるが、怨念は遅いが確実に俺のことを追いかけてくる！切り払ったら切り払ったで、どうにもならないだろう。避けるしかねえ！回避に専念していると、奴が肉薄してくる！奴は接近の勢いのままアロンダイトを振り下ろし、俺はそれを真正面から受け止める形になる！

甲高い金属音が響き渡り、余波で近くの火が全て消火されるほどだ！だが、今は競り合っている場合じゃねえ！

俺は強引にでも奴を蹴り飛ばそうするが、背中になんかが当たる。その瞬間、

『殺してやる！殺してやるぞ！今度こそ、今度こそ！』

「ツ！あああああああああああああああああああ！」

全身を激痛が駆け抜ける！怨念に当たった……！

歯を食い縛り、奴に押しきれられないように耐えながらも、激痛と怨念の声に耐える！だが、怨念は次々と体当たりをおこない、俺の中に入ってくる！

「あああああああああああああああああああ！」

「死ねば、その痛みからも解放される」

「ふぎ……けるな……！」

押し返そうとするが、現状で耐えるのが精一杯だ。

俺が激痛で息を荒くしていると、奴は続ける。

「俺は死を受け入れた。受け入れていないのは、おまえだけだ」

——ッ！それが、こいつと俺の違い。死を受け入れて、怨念と同じような感じになっ
ていやがるのか……！

痛みに耐えながらも奴を睨み、今にも崩れ落ちそうな体に入力を入れる。

「受け入れてたまるかよ……！俺にはやらなきゃならねえことが——」
「意地だけではどうにもならない。受け入れろ……！」

俺の言葉を遮った奴はアロンダイトを右手だけで押し込み、空いた左手を俺に向けて
魔方陣を展開する。こいつ、まさか………！

俺は押し返そうとするが、奴の腕一本の力にも勝てない。駄目だ、避けられねえ！

覚悟を決めた瞬間、魔方陣から怨念が溢れだし、俺に流れ込んでくる！

「がああああああああああああああつ——」

一瞬意識が飛びかけ、視界が霞む。だが、奴がアロンダイトが振り抜こうとする姿が
朧気に見え、それを防ぐために俺もアロンダイトを振る。

俺の腰の入っていない迎撃は弾き飛ばされ、近くの瓦礫の山に頭から突っ込む。アロ
ンダイトは、地面に突き刺さっていた。

駄目だ………力がはいらねえ………。視界も霞んで………全身がいてえ………。

無様に伸びる俺に、奴が歩み寄ってくる。

「死を受け入れろ。そうすれば、罪から解放される。楽になれる」

……奴が俺だと言うのなら、奴の言っていることは俺の意思でもある。俺は、心のどこかで死にたがっていた……？

いや、そんなわけねえ！俺は生きなきやならねえ！俺にもようやく生きる意味が見つけられたんだ！死ぬわけにはいかねえ！

激痛が走り続ける体に鞭を打ち、齒を食い縛って立ち上がる。だが、アロンダイトまで遠い……！

手元に深紅の剣を生成しようとした瞬間、俺の腹部を何かが貫く。

「……………はっ！」

「何度も言わせるな。面倒だろう……」

大量の血を吐く俺に、奴は冷酷に告げてきた。アロンダイトが引き抜かれ、仰向けに地面に倒れる俺。

ああ、くそ……意識が遠くなりやがる……。ここまで、なのか………？

彼女——黒歌を始めとして、ロイと戦っていた者たちは、動きを止めた彼を心配げに見つめていた。ロスヴァイセは瓦礫から救出され、今は朱乃を中心に介抱されていたが、いまだに目を覚まさない。

イツセーとリゼヴィムの戦いが激化していく間にも、デュリオはシャボン玉を当て続けていたが、ロイが突如として動き出す！

「フッー」

短く息を吐きながらアロンダイトを一閃し、シャボン玉を全て切り裂いた！

「ツーンこれを破られるとは、どうしたもんかな……」

デュリオはわざとふざけた調子で言うが、表情に余裕はない。

彼の放ったシャボン玉は、相手に大切な何かを思い出させるものだ。それが通じないということは、ロイにはもう何も残っていないという可能性がある。

美猴は如意棒を肩に担ぎ、ロイの挙動に注意を向けながら口を開く。

「やけくそでお決まりの逆パターンでもやるか？ 王子様からじゃなくて、お姫様からのキスだ」

今までなら異口同音で「ふざけるな」と返すところだが、もはや打つ手かない以上、何でも試すしかない。最悪、彼の命を奪うしか彼を救う方法は——。

リアスが言う。

「お姫様と言ったわね？ ロスヴァイセはまだ無理よ。レヴィアタン様もこの場にいるわけがないわ」

「確かにそうだ。けど、たまには和服のお姫様つてのも乙じやあねえか？」

黒歌に視線を向けて彼が言うと、全員の視線が彼女に集中する。それを受けた彼女は美猴を睨むが、すぐのため息を吐いて覚悟を決める。

「……してもいいけど、どうやってするのよ？ 簡単には近づけないわ」

黒歌の発言に、ゼノヴィアとイリナがアイコンタクトと同時に飛び出す！ 二人は複雑な軌道でロイに迫り、別方向から同時に彼に斬りかかる！

ロイは二人の動きを完全に見切り、アロンダイトと手刀で二人の一撃を同時に受け止めるが、

「はー！」

神速で背後を取った木場が突きを放つ！ ロイは一瞬驚愕の表情を浮かべるが、滅びを纏わせた翼を展開して木場の一撃を止める。

そこにアーサーが飛び出し、三人が押さえつけるロイに斬りかかる！ ロイは先ほどと同様に、地面から滅びの刃を飛び出させて彼の進路を塞ぐが、アーサーの剣技で宙に穴を穿ち、滅びの刃を貫通させるようにコールブランドの刀身を飛び出させ、ロイを狙う。

ロイは滅びの盾を宙に生成し、コールブランドの一撃をギリギリで受け止める！

これで、彼の動きを封じることが出来たが、まだ足りない。彼らが接近し過ぎたため、肝心の黒歌が近づけない。

次の一手として、小猫がロイを狙う。四人はさらに力を込めて彼をその場に縛りつけ、その隙に小柄な小猫が彼らの隙間からロイに一撃をくわえる！

鈍い音と共に小猫の拳がロイの腹部に突き刺さり、彼の内側の気を乱す。

気を乱され、ロイの力が急激に下がったことを確信できた五人がその場を離れた瞬間、入れ替わるようにリアスが急接近し、抵抗してこないロイを羽交い締めにする！

「黒歌、今よー！」

黒歌は深呼吸してロイのもとまで駆けていくと、その勢いのまま彼と口づけをした。
——が、

「ッー！」

ロイはそんな彼女を蹴り飛ばし、拘束してくるリアスは全身から魔力を放出して弾き飛ばす！

追撃しようとするロイだが、苦しそうに膝をつき、小猫に殴られた腹部を押さえ込んでいた。

黒歌も彼に蹴られた腹部を擦り、小さく舌打ちをする。

「ちよつと、ダメじゃないの！私はちゃんとキスしたわよ！」

黒歌は美猴を怒鳴り付けるが、彼は氣にした様子もなく自分の髪の毛を何本か抜き、分身を生み出す。

「あのな、形だけじゃダメだつての！もつと氣持ちを込めろ氣持ちを！わからねえのか！？」

「き、氣持ちつて言われても……」

美猴は生み出した分身たちをロイに向かわせ、先ほどよりもさらに強く彼を拘束する。キスをしやすいようにするためか、わざわざ立ち上がらせてだ。

美猴はその分身に紛れてロイを押しさえ込みながら、さらに黒歌をまくし立てる。

「ほら、早くしろ！結構押しさえんのも大変なんだよ！」

黒歌は目を閉じ、一歩ずつロイに近づいていく。

——彼に近づいたのは、白音の邪魔をしたくなかったからだだった。

一歩踏み出す度に、彼への想いを表に出していく。

——時々だけど、一緒にふざけて、一緒に戦つて、腕を無くしてまで一方的に助けられた……。

自分のことを憎悪の対象のように睨んでくるロイの頬を、できる限り優しく撫でる。

——私のことを煙たがっているけど、何だかんだで氣にかけてくれている。

彼を撫でる手に巻かれた、黒い宝石のついたブレスレットを眺め、優しい笑みを浮かべる。

『こいつは、黒歌は——俺の仲間だ』

『なら、死んでも守るさ。それが今の俺の生き方なんだな!』

『——ありがとうな』

——いつの間にか、彼に気をかけてばかりで、それが普通になっていた。安息の地なんかなかった自分が、彼といて『平和』というものを感じることが出来た。

「がああああああッ!」

左手から放った滅びで美猴の分身を消し飛ばし、そのまま滅びを左拳に纏わせ、黒歌に放つ!

黒歌はそれを紙一重で避けると、優しくロイを抱擁し、誰にも聞こえないように耳元でささやく。

「……あんたのこと、好きになっちゃったじゃない。だからさ、早く元に戻ってよ。また一緒にバカしよう?」

黒歌は優しく笑み、ロイに優しく口づけする。

『誰かを守る』。それがあんたの生き方なんですよ?勝手に曲げてんじゃないわよ……」

彼女が言葉を締めくくると同時に、上空で続いていたイツセーとリゼヴィムの戦いも、終わりを告げたのだった。

『……あんたのこと、好きになっちゃったじゃない。だからさ、早く元に戻ってよ。また一緒にバカしよ?』

『「誰かを守る」。それがあんたの生き方なんでしょ?勝手に曲げてんじゃないわよ……』

ああ、そうだよな。せつかく見つけたのに、何を迷ってんだよ俺は……。

「うう……!」

小さく呻きながら立ち上がり、腹部から再び大量の血が垂れ流しになる。でも、どうせ心のなかだ、実際は大した怪我はしてねえんだろうな……。

なんて余裕ぶっこいているが、立っているのもやつとだよ、くそ……!!

俺が立ち上がったことに驚き、奴は後ろに飛んで距離を取った。

「なぜ立ち上がる！死を受け入れれば、全てから解放される！そこまでして、なぜおまえは死を恐れる！」

奴が怒鳴る度に、声が頭ががんがん響いてきやがる。

血が出続ける腹部を押さえ、奴に言う。

「死ぬのが怖いなんて、当たり前だろうが。一回死んだからよ……。だから、死ぬほど怖いから戦ってたんだ。死にたくねえから、誰にも死んで欲しくねえから……！」

俺が叫んだ瞬間、奴が怨念が放つ！それは回避もろくにしなかつた俺の体に当たり、そのまま吸い込まれた！そして、再びの激痛が全身を駆け巡る！

「ッー！」

泣き叫ぶのはもう懲り懲り、ちよつと痛みにも慣れてきたからな……！！

痛みには耐えながら、俺は続ける。

「おまえは何で死ぬことに拘るこだわ！解放されたいと願う！おまえも俺ならわかるだろ！俺は逃げないと誓ったんだよ！」

言っている間にも怨念が俺に流れ込み、痛みがより強く、激しくなっていく！

それでも、まだ、まだ耐えられる！

「何でおまえは生きることから逃げようとする！償いようのない罪を犯してまで生きてきたのに、何故だ！」

「生きることに意味がないと知ったからだ！殺すことしか知らないのなら、生きていても仕方ないだろう！」

『殺すことしか知らない』？ふぎけんな！こつちの世界に来て、殺すこと以外の生き方を知つただろうが！」

「――何を言っている……？俺はそれ以外、何も知らないぞ」

俺の言葉に、奴はいきなり的外れなことを口にした。だが、同時に合点がいった。

……こいつ、前世の記憶しかねえのか……。だから、解放を望んでいる……。あの地獄から、意味のない生から、犯してきた罪から。

俺は微笑しながら言う。

「そんなわけねえよ。俺はこつちに来て、色々なことを知ることが出来た。誰かに愛されること、誰かを愛すること、家族の暖かさ、仲間の尊さ。前世むかしじゃ絶対に関わることのなかったものだ」

「……………なんだそれは？知らない、俺はそんなもの知らない！」

奴は叫びながら俺に向けて飛び出す！俺は慌てることもなく、奴の攻撃をその場で待った。

「がああああああッ！」

アロンダイトの突きを体捌きで避け、奴の手を蹴りあげる！奴の持つアロンダイトを

弾き飛ばし、無防備になった瞬間、俺は奴を優しく抱擁する。

「知っているはずだ。おまえは俺なんだから……」

「おまえが俺だと言うのなら、解放を望んでいるはずだ……」

「今さら、楽になるうなんて思わねえよ。死ぬその瞬間まで罪と向き合って必死に生きる。さらに罪を重ねようが、解放は望まねえ」

俺がそう言っていると、奴は悲しげな声音で言う。

「俺は、誰だ……？俺は、何だ……？」

俺が口を開こうとすると、お互いに巣くう怨念たちが忌々しげに言う。

『おまえは——』

「おまえは俺だ。理由もなく誰かを殺しまくるイカれた奴だが、誰かを愛することが出来るまともな奴でもある」

怨念の言葉を遮り、俺はそう言った。俺の言葉を受けた奴は、納得した表情でぶつぶつと言葉を漏らし始める。

「……ロイ……？ああ、そうか……そうだったな。そうだったんだったな……」

俺はそう言っていると、脱力したように俺に体を預けてくる。同時に体が透け始め、漏れでた怨念が一ヶ所に集まり、ヒト型になり始める。

『おまえの罪は消えない。解放を望むなら、その命を捨てる……』

老若男女の声が入り交じった何かが言ってきた。

俺が返そうとすると、今にも消えそうな俺が口を開いた。

「解放は望まない。生きることから逃げたら、おまえらを殺してまで生きてきた自分を否定することになる。おまえらの死が、無駄になっちゃう」

「だから、俺は生きる。今度は誰かを守るために生きて、罪を償う」

「それが、俺の生き方だ」

俺たちがそう言うと、俺は俺に溶け込み、怨念と俺だけが残される。

「……………」

無言でそれを見つめていると、怨念がこちらに近づいてくる。

『罪は消えない。抗う術もない。それでも、おまえは償うと言うのか?』

俺は無言で頷く。

『ならば、足掻いてみせろ。私たちは見ているぞ』

怨念はそう言うのと俺の胸に飛び込み、そのまま体に吸い込まれる。

俺たちを囲んでいた火が消え、地獄が崩れて黒一色の空間に戻る。

俺が自分の胸に手を当て、瞑目する。

彼らは許してくれないだろう。だが、彼らなりに俺のことを認めてくれたようだ。そのおかげか、不思議と力が溢れてくる。今までとは違う何かが、俺のから湧き出ている

みたいだ。

不意に、頭上から光が漏れた。見上げてみると、そこから懐かしいオーラを感じ取ることが出来た。あいつらが待っている。早く、戻ってやらねえと。

翼を展開し、一気に飛び上がる。少しずつ光に近づいていき、俺は勢いのままそこに飛び込んだ。

「ねえ、聞こえてる?」

黒歌はロイを抱き締めたまま訊く。だが、返事は期待していない。今の彼に意識があるかもわからない。

「ああ、聞こえたよ」

「ツ!」

黒歌はハツとしながら彼の顔を覗きこむ。そして、同時にちよつとした変化に気がついた。

ロイは優しく笑みを浮かべていたが、彼の瞳の色が変わっているのだ。今までの全開状態では白目が黒く、黒目が紅に染まっていた。だが、今の彼の白目は通常の白に、黒目の部分が吸い込まれそうなほど鮮やかな深紅に染まっているのだ。

ロイは黒歌の頬を優しく撫でる。

「まあ、返答は——」

彼が黒歌に返そうとすると、突如、彼を中心に転移魔方陣が展開される！

「ッ！」

「え？」

転移の光が弾け、ロイだけではなく、彼に巻き込まれる形で黒歌まで転移させられてしまう！

「姉様！」

「お兄様!?!」

小猫とリアスはそれぞれの家族を呼ぶが、そこにいない二人から返答があるわけもなく、虚しく二人の声が響く。

アグレアスでの戦闘のほとんどが『D×D』優勢で進み、戦いの決着が刻一刻と近づいていた——。

l i f e 0 5 悪意の終わり

俺——アザゼルはリアスたちから別れ、アグレアスの内部に侵入し、動力室を目指していた。

作戦開始前に頭に叩き込んだ地図を頼りに、設置された罠を解除しながら進むこと数分。リリスに遭遇した。まあ、こいつはポケットに入っていたチョコレートで説得していたわけなのだが、その途中でボロボロのリゼヴィム、そしてヴァーリが現れた。

ヴァーリはダメージで動けなくなったりリゼヴィムにトドメを刺そうとすると、今度は満身創痍のファーブニルが現れた。ファーブニルは天界でアーシアを守るために重症を負い、治療中のはずだった。だがファーブニルは相当な無理をしてここに来たのだろう。ただリゼヴィムを殺すために……。奴はファーブニルの逆鱗に触れた。それだけで万死に値する。

リリスはお菓子に夢中。配下のはずのアジ・ダハーカとアポプスにも見限られ、聖杯を奪われた。奴を守るものは誰もいない。リゼヴィムが死ぬのは時間の問題だった。

「ここで、使う気はなかったんだか、しゃーねえ！」

リゼヴィムは自分の目の前に転移型魔方陣を展開する。俺たちは逃げる気かと構え

るが、どこかに転移するのではなく、ここに転移させていることに気がついた。

転移の光が弾けると――、

「……忙しいねえか？」

「なんで私まで……」

ボロボロのロイと黒歌が現れた。めつちや仲睦まじい様子で。

ふと、ロイの体に砕かれた赤い鎧の一部が張り付いていることに気づく。右手の籠手は原型を留めているが、切り傷だらけ。左手の籠手は手の甲を防ぐ程度しか残されていないし、脚甲は右足の脛^{すね}まで、左足は太もも程度しか守れていない。胴体の鎧は完全に砕け散っているようだ。

それと、ロイのオーラが変わっていることにも気づいた。何か、いつにも増して静かで、濃密なオーラだ。上で何があった？

リゼヴィムはロイを見ながら驚愕を隠せない様子で、狼狽えていた。

「……な、ななんて、まともになつてやがるんだよ!? おまえは完璧に――」

「壊れたとか言いたいのか? まあ、正解ではあつたが……」

ロイはリゼヴィムの言葉を遮り、黒歌に目を向ける。

「恋人が頑張ってくれたつてことだな。たぶん」

「あとできつちり対価はいただくからね」

ロイの恋人発言に、黒歌は少し頬を染めていたが、いつもの調子でそう返していた。こいつら、いつになく仲睦まじいな。本当、上で何があつた……？

俺が腕を組ながらあごを擦っていると、今にも飛び出しそうになつていたファープニルにロイが待つたをかけた。

「ファープニル。こいつを殺すのはまた今度にしてくれ」

ロイのいきなりの発言に、ファープニルは怒気を込めながら返す。

『そいつはアーシアたんを泣かした！』

「わかつてるが、殺すのは色々と終わつてからにしてくれ」

ロイはそう言うなり、吸い込まれそうなほど鮮やかな深紅の瞳でリゼヴィムを睨む。

「おまえの事だ。死んだら何かあるんだろ？」

「……ッ！な、何の事だ？ここまで来て死ぬのは嫌だなーって気持ちはあるよ？」

一瞬。ほんの一瞬だが、リゼヴィムの表情が険しくなつていた。そのあとはいつものふざけた調子だったが、一瞬見せたあの顔、何かあるな。

俺はロイに目で合図を送り、あいつが頷いたところで話を合わせる。

「なるほど、おまえならやりそうなことだな。で、何が起ころんだ？」

「さ、さあな。ほら、さつさと殺したら？俺のことを殺したくてたまらないでしょ？」

リゼヴィムはヴァーリとファープニルを煽るように言うが、彼らは動かない。かなり

殺気立っているが、ギリギリで耐えてくれているようだ。

ロイが少しだるそうに言う。

「そんなに言われて殺すかよ……。何か起きたら面倒だろうが……。ちなみにだが、俺なら魂を666の封印解除に注ぐ」

「……………」

露骨に黙りこむリゼヴィム。ああ、これはおそらく間違いないだろう。

ロイはさらに続ける。

「おまえ、前に言ったよな？俺とおまえは似ているってよ。俺がそれを思いついたんだ、おまえも似たことは考えてんだろ？」

ロイの言葉にリゼヴィムは露骨に視線をそらした。なるほど、これはビンゴだ。リゼヴィムのリアクションで、俺の中の予想が確証に変わった。

「そんなわけだ。こいつを殺したら、ヤバイことになる可能性が高い」

ロイはそう締め括り、ヴァーリとファープニルに目を向ける。

ヴァーリは黙って瞑目し、ファープニルは歯を食い縛りながら頭ごと視線を外し、八つ当たりのように壁を殴り抜く。

「ありがとう」

ロイは小さく礼を言うと、リゼヴィムに近づき、流れるように奴のあごを外す。

「あがつ!？」

「舌を噛み切られたら敵わねえからな」

俺に目配せするロイ。俺は頷き、本来なら力のあるドラゴンに使うような特別強力な拘束用魔法を使う。簡単なものじゃ、破られちゃうからな。

じたばた暴れるリゼヴィムをロイと二人がかりで無理やり押さえつけ（ロイがリゼヴィムの腕を本来とは逆方向に曲げたが、気のせいだろう）、サーゼクスたちに連絡をいれてから転移用魔方陣を展開する。

「あばよ、リリン。てめえの顔は二度と見たくねえ」

俺が吐き捨てると、ロイもため息を吐きながら頷いた。

同時に魔方陣の輝きが強くなっていき、リゼヴィムを転移させる。向こうにはサーゼクスを始めとして手練れが待機しているはずだ。問題ないだろう。

光が止むと、そこにリゼヴィムはいなかった。無事に転移させられたようだ。

リゼヴィムがいなくなると、ファープニルも龍ドラゴン・ゲート門を展開してこの場を去っていき、

ヴァーリは、

「こんな幕引きか。呆気ないものだな……」

目を開きながらそう漏らした。どこことなく憑き物が落ちたような表情だが、心中なかなか複雑なものなんだろう。

俺——ロイは、リゼヴィムを送り飛ばされるのを見届けると、壁にもたれ掛かってそのまま座り込んだ。ダメだ、しんどい。

そんな俺に黒歌が駆け寄ってくると、仙術による回復をしてくれる。怪我は治らねえが、体力はある程度回復できるだろう。

アザゼルが訊いてくる。

「で、何があった。その壊れた鎧は、レプリカの『ブリストテッド・ギア・スケイルメイ赤龍帝の鎧』か？」

「ああ、そうだ。だが、主にアーサーのおかげでボロボロだよ。おかげで反応しねえ……」

右腕の籠手の宝玉を叩きながら言うと、そこを軽くペチペチ叩いてくる女の子が一人。

「……ん？」

リリスだ。今までのリゼヴィム捕縛劇を無視して、ずっとチョコレートを頬張ってい

たのだが、いきなり俺を構い始めたのだ。

とりあえず、頭を撫でてやる。オフィスにもやったことがあるが、この子はどんなリアクションをするのかね。

「……………」

ダメだ、首をかしげる以外に反応してくれない。

ある程度だが体力も回復したのでリリースを撫でるのを止めて立ち上がり、アザゼルに訊く。

「で、この先が中心部だよな。とりあえず、行くんだろ？」

「そのつもりだ。おまえらはどうする」

俺は黒歌と目配せして頷きあい、口を開く。

「ここまで来たんだ、付き合うさ」

「同じくいや。こいつが心配だし」

黒歌が肘で俺を小突きながら言った。まあ、心配だらけなんだろう。本来なら動けないほどの満身創痍だし。

すると、リリースが俺の手を引いて自分の頭に乗せた。なんだ、撫でて欲しいのか？

とりあえず、そのままリリースを頭を撫でてやると、黒歌の耳元に連絡用魔方陣が展開される。

「はいにや。あ、白音？こっちは大丈夫にや。え？あいつ？そっちも大丈夫よ。ぴんぴんしてるにや」

小猫からのような。色々とやってしまったが、リアスたちは大丈夫だろうか。

不意に黒歌が俺のほうに連絡用魔方陣を飛ばしてくる。それを受け取った俺は、魔方陣を耳元に近づける。

「おう、俺だ。すまねえな迷わ——」

『ロイさん！大丈夫ですか!?怪我は！目眩は！息切れは!?!』

「……とりあえず落ち着け。俺は大丈夫だ」

ロセの怒濤どとうの確認ラツシユを、俺は若干引き気味に止める。ロセ、目を覚ましたんだな。

俺がホッと息を吐いていると、リリスが服の袖を引っ張る。

「……もつと」

存外気に入ったようで、催促してくるリリス。まあ、減るもんじゃねえし、やってやろう。

リリスを撫でていると、ロセが安堵の声音で言う。

『とりあえず、大丈夫なんですね?よかつた……』

「心配かけたな。こっちにはアザゼルとヴァーリもいるから、俺たちはこのまま奥を目

指す。あとで会おうぜ」

『わかりました。でも、無理はしないでくださいね?』

「わかってるよ」

俺が返事をする、連絡用魔方陣が消える。

ゆつくりと息を吐き、改めて身体を確認する。切り傷多数に、腹には鈍痛。切り傷は滅びの糸で縫われているから血は出ていない。下手したら開くかもしれないから注意しねえと。鈍痛のほうはどうにもならねえな。

「行けるか」

「このくらい、問題ねえよ」

アザゼルの問いかけに即答する。この程度で倒れていたら、世話ねえからな。

アザゼルは頷くと、通路の奥に視線を向ける。さて、鬼が出るか、蛇が出るか、……
 獣が出るか、何にしても行くしかねえか。

そんなわけで、俺、アザゼル、ヴァーリ、黒歌、リリース（俺と手を繋いでいる）は、アグレアスの奥地を目指していた。

俺も来るのは初めてなんだが、『イーザゼル、ヒース悪魔の駒』の材料があるんだよな。『フレイト、セイント御使い』のカー

ドの材料もそれだったんだっけかな？

俺がそんな事を思い出していると、アザゼルが俺の右手を指さしながら言ってくる。

「そのレプリカ、どうする？」

もはや動かないレプリカの『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギア、さてどうしたもんか。

「外してもらいなさいよ。どうせ使わないし、使えないでしょ？」

思慮する俺に、黒歌が訊いてきた。確かに、斬られ過ぎたせいか、機能が完全に停止している。これじゃ、ただの硬い防具だ。

籠手を見ながら言う。

「まあ、確かに何かあるってわけでもねえからな。……今度こつちからグリゴリの施設に行くから、その時に外してくれ。赤龍帝はイツセーだけで十分……だろ？ヴァーリ」
「ああ。リゼヴィムの討伐は出来なかつたのでね、ライバル対決だけは邪魔しないでくれ」

そう言いながら、ヴァーリは俺を睨んでくる。もともと邪魔をするつもりはねえけどな。

「怖いねえ、まったく」

俺はわざと怖がるように肩をすくめながら言うと、リリースが俺を見上げながら訊いてくる。

「赤龍帝……赤龍帝辞める?」

「まあ、そう言うことだな。もともとから偽物だが」

「……………」

首をかしげるリリスの頭を撫でてやると、少しくすぐったそうに目を閉じる。だが、何となく嬉しそうだ。まったく、かわいい顔してんな。

「なんか、手慣れてるな」

「小さい頃のリアスとソーナの面倒を誰が見たと思ってるんだ」

「あー、なるほど」

俺とアザゼルが何て事を話していると、俺たちの前にデカイ両開きの扉が現れた。これが、動力室への扉か……。

アザゼルは俺たちに目を配り、小さく頷く。俺たちも頷き返し、再び意識を戦闘モードに切り替える。

「それじゃ、行くぞ」

俺たちの空気が変わったことを察したアザゼルはそう言うのと、ゆつくりと扉を開いていく。

扉が少し開いたと同時に、悪寒が全身を駆け巡った!これは、かなりヤバイぞ……!リリスも何かを察したのか、いきなり俺の背中に隠れる。

アザゼルもリリスの反応を受けて危険を察し、手から力が抜けかけるが、踏ん張って扉をこじ開ける。そうだ、ここまで来たからには行くしかねえ！

俺たちは覚悟を決め、開かれた扉を潜るのだった――。

l i f e 0 6 核 (コア)

動力室に入った俺たちの視界に、巨大な獣が映る。

それぞれ別の生物の形をした七つの首と、特徴的な十本の角を持った怪物。軽く百メートルはあり、グレートレッドよりもデカイ。

こいつが『アボカリティック・ピースト黙示録の皇獣』、トライヘキサ666か。

圧倒的なオーラを周囲に放つそれは、眠るように目を閉じている。

俺は額を流れる冷や汗を拭いながら、アザゼルに言う。

「復活前でよかったな。ロスヴァイセの研究、明らかに間に合わなかったろ」

「ああ、この速度は異常としか言えない。……リゼヴィムの野郎、動力の結晶も封印の解除に使っていやがったか」

トライヘキサに繋がれている結晶を見ながら吐き捨てるアザゼル。旧魔王の血族だからこそ、こんな使い方も出来たんだろう。

「これは、今の俺の手に負えるものではないな」

「さ、さすがにこれは無理にや」

普段なら余裕を見せてくれるはずの二人も、顔を強張らせていた。

俺たちがトライヘキサを見てみると、俺の後ろに隠れているリリースが壁を指さす。

「ドライグ、ドライグ」

この子に釣られるようにそちらに視線を向けてみると――。

「――マジかよ!?!」

アザゼルの余裕のない表情に驚愕が追加された。

当たり前だろう。壁にべっしりと繭のようなものが張り付き、その繭から
ブリストッド・ギア・スケイルメール
『赤龍帝の鎧』そっくりなものが顔を覗かせているのだ。

「リゼヴィムの野郎、こんなものまで作ってたのかよ」

俺が愚痴るが、この数はヤバイ。このバカデカイ動力室の壁一面にあるのだ。数は軽く千を超えている。

俺やユークリットのレプリカの発展、量産型か。

だが、これを起動前に止められるのはラッキーだ。てか、起動されてらこの四人でもどうにもならんだろ。

アザゼルは頭を振り、冷静さを取り戻す。

「さっさと止めちまおう。ここに長時間いるだけで病気になりそうだ」

アザゼルが動力の操作装置の前に足を進め、作業を始める。確かに、トライヘキサからにじみ出ているどす黒いオーラは、かなり体に悪そうだ。

アザゼルが魔方陣を展開して作業を開始し、俺たちが周辺を警戒していると、突然、俺たちを振動が襲う！

「きやつー！」

「お、おいー！」

倒れかけた黒歌を支えてやり、周囲を見渡す。空の上で地震はありえねえ。つまり、人為的な揺れつてことだよな。

黒歌を立たせ、俺たちが周囲を見渡して被害を確認していると、動力部に音声か鳴り響く。

《さすがはD×Dと言ったところか》

聞き覚えのない声がある後も続く。

『ただでは倒れない！』

『さすがっ！』

『でもウゼエツ！』

突如響いた声、放送か何かか？

「この声、アポプスとアジ・ダハーカか!？」

アザゼルが作業を続けながら叫んだ。その名前、伝説の邪龍二体じゃねえか！こんな声だったのか!？」

驚く俺を他所に、話は進む。

《肯定だ、元総督殿。声のみで失礼する。作業中のところ申し訳ないが、我々の宣言を聞いてもらいたい》

アジ・ダハーカとアポプスが、宣戦布告を始める。

『俺たちはこのトライヘキサと偽赤龍帝どもをいただく』

『もらっちゃうよ！』

『使っちゃうよ！』

《我らは邪龍だけの世界を作り出す。そのためにトライヘキサと偽赤龍帝を利用してもらおう》

二体の宣言を聞きながら、俺は叫ぶ。

「トライヘキサの封印は解けてない！どう利用するってんだ！」

するとアポプスと思われる声が言う。

《確かに、肉体の封印はどうしようもない。だが、「核」^{コア}だけなら、解呪できないわけではない》

……な、なんだ。コアって……。明らかにヤバイってのはわかるが……。

俺たちが表情を強張らせるなか、アポプスは続ける。

《コアだけの摘出で肉体はダメになるかもしれないが、この世界の蹂躪だけなら十分だ》

「異世界への侵略は諦めるってことか……」

俺の眩きにアポプスが返す。

《そういうことだ。異世界から来た者よ》

「「ッ!？」」

それを聞いてアザゼルとヴァーリ、黒歌が驚愕しながらも俺を見る。

「異世界って言われても実感ねえがな……」

俺が肩をすくめながら言うと、アポプスが訊いてくる。

《貴様は何者だ? 聖杯で魂を覗かせてもらったが、「あの景色」はなんだ? 貴様の中にいる「あの男」は誰だ?》

「ずいぶん質問が多いな。……おまえら、前世って信じるか?」

俺の問いかけに、アジ・ダハーカが返してくる。

『俺たちは生まれ、死ぬまで邪龍だ。前も後もない』

『産まれながらの邪龍!』

『死んだら終わり! 次なんてない!』

なぜか楽しげに返された。こいつらに訊いた俺がバカだったな。

俺はため息を吐き、いまだに驚愕しているアザゼルたちに言う。

「詳しくは全部終わってから教える。だが、今は――」

視界の先で、トライヘキサの体が朽ちるように崩れ始めていた。同時に偽赤龍帝軍団も繭を破り始める。

「——ヤバイな。リリス、トライヘキサをどうにかできないか？」

俺は屈んで視線の高さを合わせ、リリスに出来るだけ優しい声音で声をかける。だが、リリスはトライヘキサから隠れるように、俺の後ろに回り込んでしまう。

「こわい……」

龍神の半身さえも恐れさせるか。本能から来るものなら、簡単には越えられないだろう。だったら、

「じゃあ、偽の赤龍帝を頼む」

リリスはそれを聞くと頷き、トタトタと走りだして偽赤龍帝を倒し始めた。

ゆっくりすぎるが、これ以上無理言っても聞いてくれなさそうだしな。

「黒歌！リリスの援護を頼んでいいか！」

「わかったわ、任せなさい！」

偽赤龍帝の撃破に黒歌も加わり、倒せる数は少し増えるが、それでも底が見えねえ！
どんだけいやがるんだよ！

そんな事をしている間にもトライヘキサの崩壊は進み、ついに激しい閃光を放ち始めた！

突然の光に俺たちは視界を奪われるが、その光が止み、視力が回復すると――。

『……………』

動力炉のちょうど中央の空間で、胎児のように身体を丸めた白く発光させる何かが浮いていた。姿形は人間の少年を思わせるものだ。

アザゼルは魔方陣を消すと操作装置から離れ、俺たちの横につく。

アポプスがそれを確認したのか、口を開く。

《成功だ。さて、D×Dと我々の最後の戦いを始めよう》

『ヴァーリ・ルシファー、もう一度勝負といこうぜ。トライヘキサの破壊を眺めながらの一戦だ。燃えるだろう？ 戦いを生きがいにするのなら、この状況で戦わないドラゴンは嘘だ！』

『天龍対邪龍！』

『本物の赤龍帝も連れてくるのだ！』

邪龍二体の宣戦布告を背に、トライヘキサのコアはゆっくりと身体を広げ、こちらを睨んでくる。

見た目は全身真っ白な人間なんだが、放たれるオーラは別次元のものであり、先程から脂汗が止まらない。

《これも余興だ。一戦交えてみたらどうだ？》

「やるしかねえか……!」

異空間からアロンダイトを引つ張り出し、構える。同時にあることに気づいた。

——アロンダイトのオーラが、いつになく静かだいて力強い。加えて、いつもの『聖』と『滅』がぶつかり合うように両立しているわけではなく、並び立っている。過去の俺と通じあったことで、アロンダイトが本当の意味での『聖魔剣』になったということだろう。

そんなアロンダイトを見て俺が笑みを浮かべていると、ヴァーリは鎧を纏い、アザゼルも光の槍を構える。

俺たちに敵意を向けられたコアは、興味深げにこちらに視線を向けてくる。

俺は振り返らずにアザゼルに言う。

「アザゼル。構えたところ悪いが、おまえは逃げてくれねえか?」

「なっ?!おまえ、何を言い出すんだよ!」

アザゼルはそう言って構えを解かず、トライヘキサに意識を集中させている。

「この事態を各勢力のトップに伝えてくれ。俺とヴァーリでやるだけやってみる」

「だがな……」

渋るアザゼルにヴァーリが言う。

「彼がここまで言っているんだ。聞いてやればいいだろう」

ヴァーリの言葉にアザゼルはわざとらしく大きく息を吐くと、翼を展開した。

「死ぬんじやねえぞっ！」

アザゼルはそう言つて扉の方に飛び出していくと同時に、コアが右手を天井に向け、オーラを溜め始める！

「リリース、黒歌……こっちに来い！」

偽赤龍帝を倒してくれていたリリースと黒歌をこちらに呼ぶ。

二人が俺たちの後ろに着くと同時に、俺はアロンダイトを床に突き立てて深紅の滅びの壁を数十枚作り出し、ヴァーリも大量の障壁を作り出す！

俺たちが防御の態勢を整えた瞬間、コアの一撃が放たれる！

アグレアスの内部ほぼ中央に位置する動力部の天井を容易くぶち抜いた一撃は、その余波だけで俺たちの障壁を砕いていく！

「だあああああああああああ！」

「はあああああああああああ！」

俺とヴァーリは叫びながら障壁にさらに力を流し込んで耐える！それでも次々と障壁が砕かれてしまうのは奴が別次元だからだろう！威力が高すぎる……！！

耐えること数十秒。ようやく余波がおさまる。な、何とか耐えきれたか……。

俺とヴァーリが肩で息をしながらコアを睨み付けると、奴は全身で天井の穴から漏れ

だす光を全身に浴びていた。偽赤龍帝の軍団はその穴から飛び出していき、外にいた『D×D』を始めとした面々に撃墜されていく。だが、数が多過ぎて減っているようには見えない。

息を整えながら再び構える。

「ヴァーリ、行けるか？」

「ああ。『無理』と言つても『やれ』と返すのだろうか？」

「よくわかってんじやねえか」

俺たちは軽口を叩きながらコアを睨むと、奴は俺たちのマネをするように睨み返してくる。

俺は振り返らずに言う。

「黒歌、リリースを頼む」

「あんたたちは大丈夫なのね？」

黒歌の確認に俺は少しだけ振り向き、顔に笑みを浮かべて頷く。ヴァーリは振り向きはしなかったが、小さく頷いた。

黒歌は少し心配そうな表情だったが、リリースを連れて近くの瓦礫に隠れると、そこを中心に結界を張る。

俺は視線をコアのほうに戻すと、奴は動かずにこちらをじっと見つめてきている。

俺たちはアイコンタクトでタイミングを合わせ、同時に飛び出す！

俺たちの速度にまったく反応できていないコアの首をすれ違い様に落とし、残った胴体をヴァーリが殴り飛ばす！

コアは快音と共に吹き飛ばされ、壁に激突と同時に豪快な破壊音が動力部に響き、そのまま落下してきた瓦礫の下敷きになる。

息をゆつくりと吐きながらアロンドイトを霞に似た形で構え、オーラを纏わせる。コアが瓦礫を吹き飛ばして飛び出した瞬間を狙い、刺突の要領で溜めたオーラを撃ち放つ！

無防備のコアはあっさりとオーラに呑み込まれ、完全に消滅した。――が、すぐに身体を再生させて俺を睨んでくる。一撃で塵一つ残さず消し飛ばさねえとダメか……。

コアの注意が俺に向けた瞬間、ヴァーリが奴の背後を取り、零距离で魔力弾を撃ち放つ！

コアは吹き飛ばされ、今度は床に叩きつけられる。

ヴァーリはこちらに戻ってくる、立ち上がらないコアを睨みながら言う。

「手応えはある。だが、撃破には遠いな……」

「完全に消し飛ばすにも、俺じゃ届かねえ。おまえならいけるか？」

「リゼヴィム相手に『極覇龍』を使ってしまったら、全力での攻撃は無理だ。……いや、

使えても無理だろう」

ヴァーリがそう言うのと、コアがゆっくりと立ち上がる。奴は顔を上げ、俺たちを睨み付けると、体が発光し始める！

突然の発光に俺たちの視界が塞がれ、目を庇う。光が止んだ瞬間に目を開け、コアを見てみると、

『はあああ……………』

頭からは五本の角が生え、背中にはコウモリやカラス、白鳥を思わせる翼がそれぞれ一対ずつ生えている。オーラの質も、先程とは桁違いだ。

コアはゆっくりと息を吐くように動くと、構えを取った。

ヴァーリが訊いてくる。

「ロイ・グレモリー。その籠手は本当に使えないのか？」

「……………どうだかな。ちよつと待つてくれ」

右腕の籠手に触れてみるが反応なし。念じてみても反応なし。

「あーくそ！ さつきまで動いてたんだろうが！」

流石にムカついたので思いっきり殴ってみると、宝玉に光が戻る！

『——Boost!』

「っ！ 動いたぞ！」

俺とヴァーリは肩で息をし始めていた。お互いに激戦と大技の連続で、消耗し過ぎたのだ。コアにダメージを負わせたような気配はない。

ヴァーリが俺の横につき、息を整えながら言う。

「限界……だな。これ以上はこちらがもたない」

「それはそうだが、あいつは逃がしてくれねえだろうな……」

俺たちの視界の先には、なぜか苦しげに頭を押さえるコアの姿があった。俺たちが驚愕しながら目線を外さずにいると、再び変化が訪れる！

少年を思わせる体格が青年を思わせる体格にまで成長し、頭の角がさらに五本増えて計十本に、背中にはドラゴンを思わせるものを始め、様々な生き物の特徴を持つのがさらに生えて計六対になった。オーラの質は、もはや今までのは何だったのかと思わせるほど強力なものだ。

俺たちが警戒を強めた瞬間、奴の姿が消える！俺は反射的に横のヴァーリを蹴り飛ばすと、眼前にコアが現れ、拳を放ってくる！

当たる箇所を瞬時に予測し、一点集中の盾を生成。それを真正面から受ける形になる！

「——ッ！」

盾越しに拳を受けた瞬間、凄まじいという言葉さえも優しく思えるほどの衝撃が全身

を駆け巡る！次々と骨が砕けていく感覚が脳に伝わり、痛みで意識が刈り取られる。

——ああ、もう、限界か……。

俺はそのまま意識を手放し、床に落下していった——。

「ロイ・グレモリー！」

ロイに蹴り飛ばされたことでコアの一撃をくらわずに済んだヴァーリは、落下していくロイの名を呼ぶが、彼は一切反応せずに落下していく。

床に激突しそうになった瞬間、彼を影が抱き止めた。結界を解除して飛び出した黒歌とリリスだ。

ロイが二人にキヤッチされたことを確認し、ヴァーリは思わずホツと息を吐く。そして、この間にも何もしてこなかったコアに目を向けると、彼らに興味を失ったかのように穴の開いた天井のほうに目を向け、並の者では視認できない速度で飛び出していった。

ヴァーリは追撃を考えるが、すぐに却下した。今追っても、奴を仕留める手立てがない。いたずらに消耗し、決戦に参加できなくなったら、それこそ間抜けだ。

「あー、もう！なんで毎度ボロボロになるのよ！」

「偽龍帝、生きてる？」

愚痴るように叫ぶ黒歌と心配するリリスの声がヴァーリの耳に届く。彼を助けなくては、他の『D×D』メンバーの士気にも関わるだろう。それに、彼の『異世界』の話も気になる。

「黒歌、彼を運び出す。手伝ってくれ」

「わかってるわよ！えと、あんたも手伝って！」

「うん」

ヴァーリの指示に黒歌の返し、さらにリリスの返事が続く。

『D×D』の努力虚しくトライヘキサは復活し、リゼヴィムとの戦いの終わりと同時に、世界の崩壊にも繋がる戦いが始まろうとしていた――。

自由登校のルシファー

lif e 0 1 力を求めて

俺——ロイが目を開けると、そこは病院だった。鉛のように重いのが、体に痛みはない。どうにか動けそうだ。

重い身体をどうにか起こしてみると、ちようど看護師が入ってくる。が、目を覚ました俺を見て「先生！先生！」と叫びながら飛び出してしまった。

それよりも、今回は何日寝ていた？いや、それよりも——。

《確かに、肉体の封印はどうしようもない。だが、「核」^{コア}だけなら、解呪できないわけではない》

《これも余興だ。一戦交えてみたらどうだ？》

ああ、そうだ。トライヘキサの核^{コア}と戦ったんだ。本気で死ぬかと思つたが、どうやら助かつたようだ。

俺がベッドから降りようとする、その下から女の子が這い出てくる。

「偽龍帝、起きた」

リスだ。どうやらついてきてしまったようだ。なぜそこに隠れていたかは訊かな

いでおく。

俺が苦笑しているとリリスがベッドに腰掛け、何かを求めるように俺を見つめながら足をぶらぶらさせ始めた。こういうところだけ見れば見た目相応の子供に見えるんだがな……。

「俺はロイだ。偽龍帝じゃない」

「わかった」

頷くりリスを頭を撫でてやると、くすぐったそうに目を細める。本格的に懐かれたよ
うだ。

リリスを撫でながら小さくため息を吐くと、誰かが病室に入ってきた。

「ちよつと心配だったが、その様子なら大丈夫そうだな」

アザゼルだ。俺とリリスを見ながら苦笑していた。

一旦リリスを撫でるのを止め、アザゼルに訊く。

「トライヘキサはあれからどうなった」

「あいつらは手始めに冥界にある墮天使の研究施設を破壊した。その後は天界を襲撃。今は北欧の領域で、既に二日近く暴れている」

「暴れているって、ならおまえがここにいたらダメだろ」

俺が睨み付けながら返すと、リリスが俺の手を頭に乗せる。……話が進まねえ。

とりあえずリリースを撫でてやり、アザゼルの言葉を待っていると、すぐに口を開いた。

「それはそうなんだが、おまえにつけられたレプリカの『赤龍帝の籠手』、ブーステッド・ギア摘出は難しそうだ。聖杯を使ったのか、おまえの魂との繋がりが強すぎる」

アザゼルの言葉を受けて、俺は右手に籠手を出現させる。傷だらけの赤い籠手と、色の濁った宝玉。見ればわかるが、今度こそ機能が停止しているようだ。

トライヘキサを倒すには今の俺じゃ届かねえ。何か爆発的に力を手に入れることのできる手段はないのか……。

そう言えば、イツセーは『デイバイン・デイバインデイング・スケイル・メイル白龍皇の鎧』の宝玉の欠片を戻じ込んで白龍

皇の力を行使出来るようになり、それが『ワイバーン飛竜』になったとか聞いたな。代償は生命力、寿命だったか……。

「……ひとつ頼んでいいか？」

「何だ？」

アザゼルに右腕の籠手を見せながら、俺は単刀直入に言う。

「この宝玉に――」

俺は、悪魔人生最大の博打を打とうとしていた。

「——頼めるか」

ロイの口から、信じがたい言葉が漏れた。

俺——アザゼルは驚愕しながらもロイの胸ぐらに掴みかかり、柄にもなく怒鳴り付ける。

「おまえ、なに考えてやがる！そんな事をすりや、おまえがどうなるかわかったまんじゃねえ！寝込んでいるうちにイカれちまったか!？」

「イカれなきや、あいつらには勝てねえ。誰も守れねえ……」

俺とは正反対に、ロイは冷静な声音で言う。瞳は決してぶれない覚悟の色に染まり、もはや俺の説得は聞いてはくれないだろう。いや、こいつの恋人の言葉でも、おそらく無理だ。そう思わせるほどこいつの覚悟は硬い。

俺はわざとらしくため息を吐き、頷いてやる。

「……わかった。ミカエルに打診してみるが、おまえはグリゴリの施設に向かえ。そこに持っていく」

いつもならもつと考えてから行動に移すが、今回ばかりはいくらあっても戦力が足りない。一人でも強い奴が必要なんだ。それが、あいつらに恨まれる結果になったとしても……。

「アザゼル、悪いのは俺だ。あんまり気負うなよ」

ロイが笑みながら言う。ロイに頭を撫でられているリリスはよくわからないと言った様子で首を傾げているが、もしかして……。

俺はある機械を取りだし、それをロイとリリスに交互に向ける。……やはりか。今のロイは、ちょっととしたリリスの加護を受けてやがる。オフィスの加護を受けるアーシアやイリナ、イツセーと同様だ。

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない」

ロイが訊いてきたが、はぐらかす。聞いても「よくわからん」とか言うだろうからな。ロイは立ち上がり、一瞬ふらついて壁に手をついた。身体が鈍ってしまったているようだが、心配している時間がない。早く行動に移さなくては……。

ロイに肩を貸してやり、そのまま転移室を目指す。目指す場所は人間界だ。即席の魔方陣じゃ届かない。

リリスが後ろをついてきたが構わずに転移室に入り、そのまま魔方陣を起動、座標を

打ち込む。このときに平行してグリゴリと天界に連絡を入れておく。

それを済ませて座標を打ち込み終わると、魔方陣が輝き始め、あとは俺たちが乗るだけとなった。

「本当にいいんだな？もう後戻りはできないぞ」

「今さら戻るつもりはねえよ」

即答するロイ。やはり、グレモリー三兄妹はどいつもこいつもわがまま野郎だよ……。

俺たちが魔方陣に乗ると、リリースがそのままついてくる。一緒に行くことになりそうだが、それに関しても連絡を入れたから大丈夫のはずだ。

最大の問題は今から行動を開始して間に合うかだ。それはロイを信じるしかないし、リリースの加護にも期待しないといけない。

俺が思慮しているうちに魔方陣の輝きが強くなり、俺たちを包み込んだ。

—

人間界某所。グリゴリ施設。

アゼルと別れた彼——ロイは、準備が終わるまで待合室で待機していた。張り詰めた表情の彼の隣にはリリスが座り、少しだけだが不安げにロイの顔を覗き込んでいる。

ロイは優しく微笑しながら彼女の頭を撫でてやり、リリスの表情が和らぐ。

二人がそんなやり取りをしていると、待合室にヒトが入ってくる。ロイはそちらに目を向けると、驚愕を隠しきれず、目を見開いた。

「……ガブリエル」

「……はい」

名を呼ばれ、頷くガブリエル。だが、彼女の声音はいつもの間延びしたのではなく、少し悲哀の色が込められたものだ。

彼女の名を呼んでから口を開こうとしないロイに、ガブリエルが言う。

「あなたは、どうして……?」

「……」

黙りこむロイにガブリエルは詰め寄り、彼を睨むが、すぐに眼に涙がにじむ。

「どうして自分の命を大切に出来ないんです……!」

涙が彼女の頬を伝っていくが、ロイの指がそれを拭い、そのまま彼女の頬に触れる。

「大切にはしているさ。だが、命を懸けなきゃならねえ時だつてある」

覚悟の色が彼の瞳に宿り、決して揺らぐことはない。

ガブリエルは何か言おうとするが、すぐに躊躇う。今の彼には、何を言っても無駄だろう。彼は以外と頑固だ。

彼との付き合いはまだまだ短いが、何となくそれを察していたガブリエルは、彼に何も告げない選択肢を選ぶ。

ロイも彼女に気を使わせたことがわかったのか、苦笑しながら言う。

「死ぬかもしれないけど、死ぬつもりはねえよ。死んじまつたら何にもならねえからな」
そう言うがガブリエルの頬から手を離し、部屋の入口に目を向けると同時にドアが開き、アザゼルが入ってくる。

彼らは言葉を交わすことなく頷きあい、そのまま部屋を出ていくが、彼らの後ろにリリスとガブリエルが続く。

ロイだけが途中で別れ、ある部屋に入る。部屋の中央に腕を置いたための機械と、それを中心に魔方陣が展開され、機械には嚴重に固定された深緑色の宝玉が装着されている。

ロイは右手に籠手を出現させ、一步、また一步と機械に近づいていく。

その部屋と特殊ガラス越しに隣接する部屋にはアザゼルとリリス、ガブリエルが入り、ロイの様子を伺っていた。

ロイが機械の前に移動し終わると、アザゼルがマイク越しに話かける。

「ロイ、いいな？これが最後の――」

『言つたら、今さら戻るつもりはねえ』

アザゼルの言葉を遮り、ロイは告げた。

アザゼルは小さく嘆息し、横目でガブリエルを見る。彼が天界にいた頃では想像もできないほど、誰かを心配する表情でロイを見つめていた。

――ガブリエルに会わせれば、考え直してくれるかもしれない。

アザゼルの思惑はあっさりと下され、ロイの覚悟は揺るがない。

アザゼルはロイに指示を飛ばす。

「その機械に腕を突っ込め。そうしたら、細かいのはこっちで操作する」

『頼むぞ』

ロイはガラス越しにアザゼルを見ると、何の躊躇いもなく機械に腕を突っ込む。それを確認したアザゼルは手元のコンソールを操作を始める。

機械に固定された深緑色の宝玉が輝き始め、それが少しずつロイの籠手に填められた宝玉に移っていく。

籠手の宝玉に深緑色の輝きが触れた瞬間、ロイの表情が苦悶に染まり、血が出るほど歯を食い縛り始める！

『——ッ！ぐうううううう！』

空いている左手で無意識に逃げようとする右腕を無理やり押さえつけ、痛みと共に流れ込む意識の侵食に耐え続ける！

『ああああああああああ！』

「ロイ様！」

苦悶の絶叫を放つロイに、我慢の限界となつたガブリエルが今にも飛び出していきそうになるが、アザゼルが止める。

「止めとけ。今あの部屋に飛び込んだら、どうなるかわからん」

アザゼルはそう言いながら視線をロイに戻す。あまりの激痛のなか、ロイの身体から無意識に漏れ出す滅びの魔力により、部屋の壁には傷が生まれ始めていた。

ガブリエルはそれを見ても飛び出していこうとすると、横で静かにしていたリリスが小声で漏らす。

「大丈夫。ロイなら平気」

何の確証もない発言ではあるが、龍神の半身である彼女の言葉には謎の説得力があり、ロイから漏れ出す滅びの魔力が少しずつ落ち着き始める。

それでも顔は苦悶の色に染まっており、意識を飛ばさないように歯を食い縛り続けていた。

深緑色の宝玉の輝きの全てがロイの籠手に移った頃、変化が起きた。籠手の宝玉から深緑色の光が溢れ、ロイの身体を這い上がり始めたのだ。

『ぐツッ！あああああああああああああああ！』

ある程度落ち着いた様子から一転、再び絶叫するロイ。ついには固定していた機械から煙が吹き出し、彼の腕が抜けてしまう。押さえるものがなくなったロイは右腕を抱えながらのたうち回る。

「も、もう見ていられませんか！」

「お、おい！待て！今行ったら——」

アザゼルの制止を無視して部屋を飛び出していくガブリエル。そのままロイのいる部屋に飛び込み、四つん這いになりながら右腕を押さえる彼を見つける。

そんなロイにガブリエルはゆっくりと近づいていき、両膝について彼に声をかける。

「……ロイ様……」

「はあ……はあ……ガブリエル……！」

ロイがゆっくりと顔を上げると、ガブリエルは狼狽える。

彼の右肩から顔の右頬にかけてが黒い鱗に覆われ、右目の瞳も銀色に変わってしまったのだ。

ロイはいきなりガブリエルを突き飛ばし、睨み付ける。

「離れろ……！」

「な、何を——」

再び近づいた彼女が口を開いた瞬間、彼の右腕がガブリエルの首に伸び、そのまま掴みかかる！

「——ッ!?口、ロイ……様……！」

首を絞められながらも彼を心配するガブリエル。だが、ロイの両方の瞳が銀色に染まり、まるで親の敵を前にしたように殺気立っているのだ。

「気を……しっかり……！」

呼び掛けるが、ロイは反応しない。むしろ余計に力が加わっていつてしまっているのだ。

それでもガブリエルは諦めない。首を絞められながらも、出来るだけ優しい声音で語り懸ける。

「誰かを守る。そのために力を求めたのでしょうか？思い出してください……！」

ガブリエルの言葉を受けて、僅かながら力が弱まる。それを直接感じることできた彼女は、先程ロイがしたように優しく彼の頬に触れる。

「あなたが言ったのでしよう？過去つみからは逃げないと、未来を守ると。……なら、負けてはなりません！ロイ・グレモリー——」

「ッ！」

ロイの左目の瞳が深紅の色に染まり、左手の指の隙間に滅びのナイフを挟むと、そのまま右腕を殴りつける！

滅びのナイフは籠手を貫通し、生身の腕に達すると、ガブリエルの首を絞める手の力が一気に抜ける。

いきなりの行動で解放されたガブリエルは、咳き込みながらも心配げにロイに目を向けると、

「この程度の奴に負けてられねえ。俺にはやらなきゃならねえことがあるからな……！」

腕からナイフを引き抜くと、そのまま右腕に魔力を送りこむ。深緑色の光が深紅の光に押され始め、そのまま籠手の宝玉まで押し返されていく。

「何が何でも守るさ。それが俺の生き方だ。それが俺の戦う理由だ。戦うことに意味を見出だせねえようなおまえに、負けるはずがねえ！」

力強いロイの言葉と共に深紅の輝きが強まると深緑色の光が一気に宝玉の内に押し戻される。

「はあ……はあ……はあ……っ！」

息を荒くしながら右腕の籠手を見る。深緑色の光が宝玉から漏れ出ているが、風に揺

れる灯火のように弱々しく、先程のような勢いはない。

「ガブリエル、大丈夫か……?」

「は、はい。大丈夫です」

ガブリエルは笑みながら頷くが、彼女の首には巻き付くように痣あざが出来ており、痛々しい。

それに気づいたロイは自分の弱さを責めるように歯を食い縛り、煙が吹き出すほど義手である左拳を握る。

「すまねえ。俺のせいだ……」

「大丈夫です。戻ってきてくれましたから」

「だが——」

「大丈夫ですから。生きていれば、どうにかかります」

殺させかけたというのに、ガブリエルは一切気にした様子もなく笑む。

ロイは彼女の優しさに感謝しながら、ちょうど部屋に入ってきたアザゼルのほうに目を向ける。

「アザゼル、戦場に送ってくれ」

「大丈夫なのか? 向こうで今みたいなことになっちまうかも——」

「私も行きます」

心配するアザゼルの言葉をガブリエルが遮る。

「何かあれば、私と向こうにいるヒトたちで止めます」

ロイ同様に覚悟を決めた顔をするガブリエルに、アザゼルはわざとらしくため息を吐くと言う。

「どいつもこいつ無茶しやがるな……」

「無茶しなきやならねえ状況だ。やるしかねえ」

「そう言うことです」

アザゼルは二人の言葉を受け、二人を囲むように転移用魔方陣を展開する。

「おまえら、死ぬなよ」

「当たり前だ」

「わかっています」

二人が頷くと同時に転移の光に包まれ、一気に弾ける。

「死ぬんじやねえぞ。あの話、聞かなきやならねえからな」

アザゼルの呟きと共に光が止む。二人の姿は既になく、静寂だけが室内を支配するなか、

「……ロイ……」

リリスが寂しげに、戦場に向かった彼の名を口にしていった――。

『D×D』を含めた様々な神話勢力による連合軍と、トライヘキサを含めた邪龍軍団との戦いが続く北欧神話の領域。

大量の量産型邪龍と偽赤龍帝、それらに指示を飛ばす伝説の邪龍二体と、彼らと激突する連合軍に無慈悲にオーラを放ち、地形もろとも吹き飛ばしていくトライヘキサの核。^{コア}

ロスヴァイセの開発した量産型邪龍を封じる術式も数の前では無意味であり、倒したとしても聖杯によりすぐに復活して向かってくる。

偽赤龍帝は一人一人の力が強く、なかなか数が減らない。

三つ首の邪龍——アジ・ダハーカはあらゆる系統の魔方陣を展開してフルバーストを放ち、連合軍が聖杯に近づくと事を許さず、一方的に蹴散らしていく。

今は人間の姿をとっている邪龍——アポプスは自らの力で生み出した影で太陽を隠し、『原初の水』と呼ばれる全てを飲み込む水と呼び出そうしている。

アポプスを止めようと、ロスヴァイセを含めたヴァルキリーの大部隊が魔方阵を展開し、彼の術を妨害する。

それでも術の発動を遅らせているだけであり、発動は時間の問題だろう。

そんな戦場を一望できる山の頂上に、彼らは現れる。紅髪青年——ロイと、金髪の女性——ガブリエルだ。

ロイは戦場の風と臭いを直に感じると、無意識のうちに笑みを浮かべる。

「間に合って良かった。それじゃ、万が一の時は頼む」

「その万が一がないようにお願いします」

ガブリエルの言葉にロイは苦笑すると、右腕の籠手を顔の横に持つていき、力のある言葉を口にする。

「バランス・ブレイク禁手化……!!」

『Crime Force Dragon Balance Breaker!!!』

彼の身体を深緑色の輝きに包まれ、彼の右腕がその輝きを切り裂く!

光が晴れ、そこにいたのは——、

「……これなら、行けそうだ」

両腕につけられた肘までをカバーする黒い籠手、両足には脛^{すね}までを覆う黒い脚甲、胸部には黒い胸当て、背中には小さな魔力噴出口のついた装甲と、イツセーやヴァーリた

ちのような全フレイト・アーマー身ライト・アーマー鎧ではなく、装甲をギリギリまで削り、動きやすさに特化した軽ライト・アーマー鎧を纏ったロイだった。

彼がアロنداイトを異空間から取り出すと、耳元から顎先までが装甲に包まれ、さらにそれが鼻までを覆うマスクのように変形、両方の瞳が深紅に染まる。

「さて、とりあえず——」

ロイは眼を細めて戦場を眺めると、アロنداイトの切っ先をアポプスに向ける。

「——あいつを止めるのが先決か」

彼はそう呟くと、背中の魔力噴出口から魔力を放出して一気に飛び出し、一瞬にして最高速度まで加速していく！

彼の速度に反応しきれなかったガブリエルだが、現在戦闘中であろう仲間たちとの合流を目指して飛び立つ。

激化の一途となる北歐戦線に、たった二人だが、増援が到着したのだった。

life 02 邪龍VS邪龍を宿す者

連合軍と量産型邪龍、偽赤龍帝軍団の戦いが続くなか、戦場を深紅の軌跡が通りすぎ、それを掠めた邪龍と偽赤龍帝が次々と細切れにされていく。

戦場を縦横無尽に駆け抜ける深紅の影——ロイは、斬つては加速を繰り返し、味方の援護をおこないながらも確実にアポプスへ近づいていく。

遠目から敵陣を掻き乱すロイの姿を視認した『D×D』の面々は驚愕し、一様に眼を見開く。意識不明だった彼が前線に現れ、暴れ始めたのだ。驚きもするだろう。

そんな彼らの元にガブリエルが現れる。

「ガブリエル様！いつこちらに!？」

一番近くのリアスが訊くと、ガブリエルはロイの動きを眼で追いながら言う。

「彼に同行して参りました。少々不安定でして……」

そう言う彼女の首に痣あざがあることに気づき、表情を強張らせるリアス。

そんな中、太陽を隠す影に異変が起こる。ヴァルキリー部隊が必死に押し止めていた影が、突如消え失せたのだ。

リアスが再び視線をロイのいる方向に戻すと、黒い軽ライト・アーマー 鎧を纏い、邪龍の群れを突破

した彼が、アポプスに斬りかかっていた！

「らあー！」

彼——ロイは加速の勢いそのまま邪龍の群れを突破し、祭服を着た褐色肌の青年——アポプスの人間態に迫る！

彼の接近を察知していたアポプスは自身を守るために盾として影を産み出すが、ロイはそんなものお構いなしにアロンダイトを振り抜く！

深紅のオーラを纏ったアロンダイトは、容易く影を両断してアポプスに迫っていくが、紙一重で避けられる。

《——ッ！》

『原初の水』の発動に集中し、防衛に回すオーラが少なかったとはいえ、あっさりと突破されたことに驚愕の表情を浮かべる。

ロイはそのまま連撃に持ち込もうとするが、アポプスは刹那的に『原初の水』の発動

を中止すると、至近距離から先程よりもオーラを込められた影を撃ち放つ!

ロイは身体を捻って回避するが、影が掠めた籠手が削り取られる。並大抵の者ならそれを気にするんだろうが、ロイは一切気にした様子はない。――むしろ、楽しいな笑みを浮かべている程だ。

籠手の損傷を瞬時に修復すると、ロイは被弾覚悟で連撃に持ち込む。

アポプスの放つ影がロイを貫こうとするが、ロイは時には避け、時にはアロンダイトで受け流し、削られるのは鎧だけに留める。

ロイの放つ高速の剣撃も同じく、アポプスは体捌きで避け、影で防ぐ。だが、こちらは捌ききれずに確実にアポプスの身体に傷をつけ、少しずつだが消耗させていく。

アロンダイトによる連撃を避けるアポプスの腹部に衝撃が走る。アロンダイトの連撃に紛れ込ませたブローが、的確に彼の腹部を捉えたのだ。

一瞬だが動きが止まるアポプス。ロイは作り出した隙を逃がすほど甘くはなく、渾身の力を込めたアロンダイトを振り降ろすが、アポプスに当たる間際に彼の背中に魔力弾が直撃して弾き飛ばされる。

ようやく作り出した隙を潰され、舌打ちをするロイ。そのまま体勢を整えて地面に着地すると、魔力弾を放ったであろう敵を睨み付ける。

上空で、アポプスを守るように大量の魔方陣を展開するアジ・ダハーカが邪悪な笑み

を浮かべているのだ。

ロイが砕かれた背部装甲を修復した瞬間、アジ・ダハーカがフルバーストを放つ！

ロイは背中の魔力噴出口から魔力を放出してその場を飛び出して回避すると、そのままアジ・ダハーカに向かっていく！

数えることが愚かに思えるほどの数の魔力弾がロイに迫っていくが、その隙間を縫い、時には切り払いながらアジ・ダハーカに肉薄していく！

弾幕を突破したロイがアロンダイトで斬りかかるが、アジ・ダハーカの展開した障壁に阻まれる。アロンダイトと障壁がぶつかり合い、激しく火花を散らす！

「はあああああああつー！」

ロイが気合い一閃と共にアロンダイトを強引に振り抜く！儂い音と共に障壁が砕かれるが、ロイが切り返そうとした瞬間にアジ・ダハーカの首の一本がロイに食らいつく！

「つーは……つー！」

ただですら薄い鎧はあっさり突破され、アジ・ダハーカの牙はロイの肉体に達する！ロイは血を吐きながらも脱出しようとするが、彼をくわえたアジ・ダハーカは自身の身体を回転させて遠心力を乗せると、そのまま近くの山に向けて投げ飛ばす！

放たれた矢のようにまっすぐ飛ばされたロイは頭から山に突っ込み、爆音に似た音を

響かせる。そこにアジ・ダハーカは追撃としてフルバーストを放った！

「があああああつー！——ハハハハハハハハハッ！」

様々な属性が乗せられたオーラの塊がロイに襲いかかり、彼の鎧と身体を砕いていく！が、ロイの口からは激痛による絶叫ではなく笑い声が漏れる。

フルバーストは放たれ続けるが、ロイは鎧の修復を早々に魔力噴出口から魔力を放出し、再び突撃する！先程と違うことがあるとするば、それは直線的な軌道であり、被弾しようとお構いなしになっていることだ。

鎧を砕かれ、身体から大量の血を撒き散らしても止まることなく、減速回避一切なしの最短距離で間合いを詰めにかかる。

アジ・ダハーカはそんな彼に攻勢を強めていくが、結果は変わらず、ついにアロンダイトの間合いに入る！

ロイの一閃を読んだアジ・ダハーカは先程よりも強力な障壁を展開させるが、ロイはアロンダイトを持っていない手で渾身の拳を撃ち放つ！

同時に腕から大量の血が吹き出すが、お構いなしに振り抜いた一撃で障壁を強引に破ると、アジ・ダハーカが反応するよりも早くアロンダイトで胴体を貫く！

アジ・ダハーカの三つ首は苦痛で表情を歪めるが、すぐさま急降下して、自身の身体ごとロイを地面に叩きつける！

肉が潰れる鈍い音と骨が砕ける乾いた音がアジ・ダハーカの下から漏れるが、同時に彼の身体を深紅の刃が貫ぬく！刃から体内に直接滅びの魔力を流し込まれ、悶絶するアジ・ダハーカ。彼は自身のみを短距離転移させて一旦間合いを離す。

アジ・ダハーカは全ての首から血の塊を吐き出すと、狂喜的な笑みを浮かべてロイを睨む。それを受けたロイはふらふらと立ち上がり、満身創痍の身体とは裏腹に、絶大なまでの闘気と殺気を放ちながらアロンダイトの切っ先を向ける。

彼の銀色に染まる右目の瞳は狂気、深紅に染まる左目の瞳は覚悟の色に染まり、全身からは深紅のオーラを、鎧に填まる宝玉からは深緑色のオーラを迸らせる。

ロイが魔力噴出口から一気に魔力を放出させ、アジ・ダハーカに肉薄する！それを受けたアジ・ダハーカは再び短距離転移、無防備なロイの背中に大量の魔力弾を撃ち放つ！

ロイはアロンダイトを地面に突き立てて無理やり方向転換すると、空いている手に深紅の直剣を生成して二刀流の構えを取ると、迫り来る大量の魔力弾を片っ端から切り伏せていく！

ロイは高速で迫り来る弾幕を超高速で切り捌いていくなか、ついに通り抜けられる穴を見つける。彼に迷っている余裕もなく、そのまま飛び出していく！

ようやく見つけた穴を通り抜けた瞬間、彼の眼前に迫ったアジ・ダハーカの中央の首

が魔方陣が展開し、そのまま至近距離で魔力弾を放つ！

「ッー！」

貫通力を高めた魔力弾によって腹を貫かれ、アロンダイトが手から離れる。そのまま意識も飛びそうになるが歯を食い縛ったロイはそのままアジ・ダハーカの頭に掴みかかり、

「らあっー！」

その眼球に腕を押し込む！

『ぐああああああああああああああっ!?!』

『ぎやああああああああああああああっ!』

『いてええええええええええええええええっ!?!』

ついにアジ・ダハーカが痛みで悶える。ロイを剥がそうとしたばたと暴れ始めるが、ようやくアジ・ダハーカを捕まえた彼がそう簡単に離れることはなく、そして、

「ぬうらあっー！」

押し込んだ腕ごとアジ・ダハーカの脳の一部を引きずり出す！

押し込んだ腕には脳の肉片がこびりつき、彼の身体を帰り血で赤黒く染め上げる。だが、ロイの表情は狂喜的な笑みに染まっており、腹に風穴が空いているとは思えないものだ。

アジ・ダハーカは中央の首の活動が止まるが、残った二つの首のうち右の首がロイにかじりつき、そのまま強引に投げ飛ばす！

投げ飛ばされたロイは四肢を使って上手く勢いを殺すと、そのまま拳を構える。が、すぐに大量の血を吐いて片ひざをつく。

それでも足を踏ん張り立ち上がるが、完全に膝が笑っており、これ以上の戦闘は不可能に近いだろう。

お互いに腹に風穴が空き、片や首を潰されてなお戦闘意欲は消えず、片や満身創痍でありながら無理にでも戦闘を継続しようとする。

産まれながらの邪龍と後天的に邪龍を宿した者、一体と一人の戦いは前者有利で進んでいた。

このままいけば、ロイは負けるだろう。まだ完全に力を制御しきれていない彼一人では荷が重い相手だ。そう、一人では。

アジ・ダハーカが魔方陣を展開した瞬間、北欧式のフルバースト、妖術と仙術の混成砲撃、極太の光の槍が襲いかかる！

それを察知したアジ・ダハーカは攻撃魔方陣を障壁に変更、それらを真正面から受け止めると、それらを放った者たちを睨む。

『ドラゴン同士の戦いを邪魔するんじゃないやねえよ！』

『ま、俺たちもアポプスから横取りしたんだけどね☆』

アジ・ダハーカの首二本がそう言うが、彼女たちは怯んだ様子もなく返す。

「また無茶をした恋人を助けて何が悪いんですか！」

「ドラゴン同士のは、ヴァーリ相手に言いなさい！そいつはまだ中途半端でしようが！」

「そもそも、そのまま死んでもらっては困ります！」

ロスヴァイセ、黒歌、ガブリエルが救援に駆けつけたのだ。ロイが真つ先にアポプスに挑み、『原初の水』を阻止したからこそ合流できたのだ。

「お、おまえら……」

ロイは立っているのがやつとであり、眼も虚ろになっている。見るまでもなく、治療が遅れば確実に死んでしまう状態なのは確かだった。

どうにか彼を助けたい三人に加勢するように、白銀の閃光がロイとアジ・ダハーカの間に舞い降りる。

「なら、俺と一対一で勝負だ。不足はあるまい」

『ドラゴン擬きを一方的に苛めるほど、貴様も落ちぶれてはいないだろう』

ヴァーリとアルビオンがアジ・ダハーカを煽る。ロイは彼の後ろで構えを解かずに見続けていた。

ヴァーリたちに意識を向けたアジ・ダハーカは楽しみに笑みを浮かべるが、すぐにトライヘキサの核コアがいる方角に目を向ける。

強力な複数の神性がそちらから感じ取れ、戦局を変えることのできる増援が連合軍に到着したことは確かだった。

今の彼らが知るよしもないが、インド神話と阿修羅神族が増援として駆けつけ、一気に攻勢に出ているのだ。それでもトライヘキサを倒すことは出来てはいないが、量産型邪龍と偽赤龍帝軍団は文字通り駆逐されていった。

アジ・ダハーカの耳元に連絡用魔方陣が展開され、二三やり取りをすると、転移魔方陣を展開する。

『残念☆時間切れみたいだ☆』

『次は白龍皇と遊びたいな！』

アジ・ダハーカはそう言い残すと転移していく。少し間を開けて、量産型邪龍と偽赤龍帝軍団、アポプス、トライヘキサの核コアが転移の光に包まれて姿を消していく。

それを見届けたロイは鎧の解除と共に崩れ落ちるが、ヴァーリに受け止められた。

「まったく、無茶をするものだな」

「まあ、何とかなっただろ……？」

二人が小声でそんなやり取りをしていると、彼の恋人三人が彼らに駆け寄る。

「ロイさん！しっかりしてください！」

「あーもう！何で毎回こうなるのよ！しっかりしなさい！」

「ロイ様！聞こえますか！ロイ様!?!」

彼女らの心配をよそに、ロイの意識は暗闇へと落ちていく。

トライヘキサ復活から五日目となったこの日。北欧戦線はトライヘキサと邪龍軍団の突然の撤退という形で連合軍の辛勝しんしょうとなり、何の前触れもなく幕を閉じたのだった。

l i f e 0 3 説明

俺——ロイは目を覚まし、ボヤける視界で天井を見つめる。

あいつらがいきなり消えたのは覚えているが、あの後はどこに向かった……？どこかで戦っているのなら、早くそこに向かわねえと……。

俺は上半身を起こしてベッドを降りようとすると、違和感を覚える。

戦闘中でも深紅のオーラを解放しているわけでもないのに、視界の右半分が見えてい
るのだ。視界がボヤけてまったく焦点が合わないのはそのせいなのか？

俺は確かめるように右手で右目の近くに触れると、妙に硬いものに触れた感覚を感じ
取れた。まるで、鱗に直に触れたような感覚だ。

少しずつ目の焦点が合ってくると、鏡を探して右手を伸ばすが、

「——ッ！ やっぱり、こうなるよな……」

その右手を見て自嘲じちやうするように漏らす。右手は全体的に黒い鱗に覆われており、爪も
鋭く長くなっている。

右手を捻りながら様々な角度でよく見てみるが、俺の面影がある部分はない。完全に
ドラゴンのものになってしまっている。

俺はため息を吐きながら立ち上がろうとすると、病室に誰かが入ってくる。

「ロイさん！目が覚めたんですね！って、まだ寝ていてくださいー！」

ロセだ。彼女は俺が立ち上がるうとしていることに気づき、慌てながら俺を寝かそうとしてくる。

下手に手を出して爪で彼女を切るわけにもいかない俺はされるがままになるが、寝かされた瞬間に起き上がってロセに訊く。

「トライヘキサはどうなった。今はどこで——」

「それなら大丈夫にや。今は行方不明ってね」

唐突に病室に入ってきた黒歌がそう言う。行方不明だと？あいつら、どこで何をやっていやがる……。

あごに手をやつて思慮していると、ロセと黒歌が意味深に視線を合わせていることに気づく。何か隠していることでもあるのだろうか。

「なあ、何かあるのか？出来れば隠さずに教えて欲しいんだが」

俺に言われた二人はほんの一瞬狼狽うろたえるが、頷きあうとロセが机から手鏡を取り出した。

「一応、覚悟をしておいてください」

真剣な表情で言うロセ。

俺は頷きながら右手を左手で小突く。

「まあ、こいつを入れた時点である程度の覚悟は決めてるよ。見せてくれ」

ロセは頷くと、ゆっくり手鏡に俺を写す。そこに写ったのは――、

「おお、マジか……。思っていた以上だ……」

俺の顔だ。だが、右頬は右肩から首を伝って上がっていった黒い鱗に完全に覆われ、右目の瞳は銀色に染まっている。少しだが、右の犬歯も鋭くなっているような気もする……。

俺が鱗に覆われた右頬から首にかけてを撫でていると、黒歌が言う。

「また無茶したわね。アザゼルからざっくり聞かせてもらったけど、正気の沙汰じゃないわ」

「相手が相手だ。手段は選んでられねえ」

俺が返すと、ロセは心配げに言ってくる。

「それもそうですけど、少しは相談してください。セラフォル様も流石に怒っていませんよ……」

「あ、あれは怖かったわ……」

途端に顔を青くする二人。セラよ、二人に何をした……。

俺は肩をすくめながら言う。

「まあ、フオローしとくよ。今は会議とかに行つてんだろ？」

「ガブリエル様もそちらです。トライヘキサも邪龍たちも突然消えたんですから、上は大変なことになっていきますよ」

そうだろうな。あいつらは指示を飛ばしたり被害を確認したりで大忙しだろう。俺も呑気に寝ているわけにもいかねえか。

俺はベッドから降りると、足の感覚を確かめる。足までは持つていかれていない。歩いたり走ったりは問題なさそうだ。

「リアスたちはどこだ。一応、声をかけておきたい」

「でしたら休憩フロアです。イツセーくんのお見舞いをして、アザゼル先生から話があるとされてそこに向かいました」

「ヴァーリたちもそこにや」

なるほど、皆いるわけだな。てか、イツセーは大丈夫なのか？ 籠手を準備する前にアザゼルから聞いた話じゃ、リゼヴィムをあそこまで追い詰めたのはあいつだが、力尽きて意識不明になったと聞いたんだが。

病室を出ながらも抱いていたその想いが顔に出ていたのか、移動しながら口セが言う。

「イツセーくんも無事に目を覚ましました。少々問題があるようですが……」

「なんだっけ、胸が見えなくなっただっけ？」

「声に出すこともできません」

「マ、マジか……」

イツセーから胸への想いを取ったら、何が残るんだ。とも思ったが、胸で奇跡が起きないだけで、ただの仲間想いのパワーバカになるだけだな。なんか、会話の内容とかも普通になるだけに思えるが、イツセー的には死活問題だろう。

黒歌が俺の右手に触れながら言う。

「この手、気を散らせば戻るかしら。でも相手は邪龍だし、散らすこつちがどうなるかわかんないのよね」

「とりあえず、対策が見つかるまではギブスや三角巾で隠しましょう。頬は、包帯か何かどうにかするとして、学校は事故で怪我をしたとしてしばらくお休みになったほうが……」

色々と先のことを考えてくれるのは嬉しいが、黒歌がいたずらっぽく笑っている。絶対に何か考えてる！

俺の心中を察してか、黒歌が腕に絡みながら言う。

「そうだったら、一日中相手してあげる。安心して、絶対に戻してあげるから」

「わ、私だってお手伝いしますよ！黒歌さんばかりにいい思いはさせません！」

ロセが反対の腕に絡みながら言ってきた。言われたこっちは嬉しいんだが、ちよつと声が大きくない？ここ病院だし、回りには怪我人や病人が多いだろうに。

そんな心配をしていると、そのまま二人に引つ張られる形で休憩フロアに到着する。中にはリアスたちオケ研とヴァーリチーム、幾瀬鳶雄と見覚えのないヒトたちが数人。

「お兄様！大丈夫なのです……か……」

入ってきて早々にリアスはそう言いながら詰め寄ろうとするが、俺の顔を見て驚愕の表情を浮かべる。会いに来たらいきなりこんな顔だからな、驚かせちゃったようだ。

「大丈夫、大丈夫。ちよつと座らせてくれ」

俺はそう言つて場所を空けてもらい、どつしりと座り込む。身体が重い。戦闘になれば大丈夫なんだろうが、まだ馴染んでいないってことだろう。

「それで、あんたらは？」

俺は見覚えのない数人について訊く。

最初に答えたのは、朱乃に似た雰囲気の二十代女性。

「姫島朱雀すざくよ。よろしく」

朱雀と言えば、姫島家の現当主が代々襲名する名前だったか。つまり、この女性が姫島家のトップ……。

次に金髪に碧眼の二十代女性。とんがり帽子にローブ姿を見るに、魔法使いか？

「私はラヴァニア・レーニです。分かりやすく言いますと、『アフソリユート・テイマイス永遠の水姫』の所有者なのです」

な、なるほど。彼女がメフィスト様の秘蔵っ子、ロンギヌス神滅具の所有者というわけだ。なんか、すごい面子が揃っていやがる。

俺が苦笑していると、アザゼルが訊いてくる。

「それで、ロイ。体に問題は——あるな……」

「見た目以外は問題ない。まだ違和感はあるが、どうにかなる」

俺は右手を握ったり開いたりしながら言うと、リアスが俺とアザゼルに視線を配る。

「アザゼル、お兄様。そろそろ詳しく説明していただきたいのですが」

リアスが急かしてくるので、いい加減説明を始めよう。

俺は右腕に籠手を出現させる。ブリステッド・ギアレプリカの『赤龍帝の籠手』だったものは黒く変色し、

宝玉も深緑色の輝きを放つものになっていた。

「お兄様につけられたのはレプリカの『ブリステッド・ギア赤龍帝の籠手』だったはずですよ。この色は、やはり……」

「ああ。動かなくなっただから、グレンデルの魂を入れてもらった」

『……ッ!?!』

俺の言葉でリアスたちは驚愕し、言葉が出なくなっていた。アザゼルから説明を受け

ていたとはいえ、本当にやったとは思っていなかったのか。それとも、信じたくなかったのか……。

「やはり、そうなんですネ……」

ロセがドラゴンのものになってしまった俺の頬を優しく撫でる。

それを横目にアザゼルが言う。

「天界に封印されていたグレンデルの宝玉。それに封じられたグレンデルの意識をロイのレプリカの宝玉に流し込んだ。提案された時は驚いたし、成功するかも賭けだったがな」

「まあ、俺も元から賭けのつもりだったわけだしな」

俺が言うと、アザゼルが俺の耳元で言う。

「(リリスだが、今はグリゴリの施設で保護している。終わったら迎えに行つてやれ)」

「(あ、ああ。わかった)」

なぜ俺がリリスを迎えに行くのかはさておいて、トライヘキサをどうにかするつてのはなかなか難しいぞ……。

俺が思慮をしている横で、アザゼルが顔を青くさせながらぼやく。

「それにしたつて、あの後セラフオールにどれだけ言われたと思つてやがる……。久々に死ぬかと思つたぞ」

こいつにも色々あったようだ。まあ、それはそれとして、おかげで力が増したことは事実だな。

「おかげでアジ・ダハーカともある程度だが張り合えた。それでいいだろ？」

「強くなったかもしれないが、そいつとの癒着はギリギリ外せるつてところだ。下手に長時間戦えば取り外せなくなるどころか、文字通り意識を喰われる可能性もある」

俺の問いかけにアザゼルが真剣な表情で返してきた。こいつにもいらない罪悪感つてものを背負わせてしまったわけだし、当たり前前か。

俺は右手を眺め、静かな声音で言う。

「覚悟はしていたさ。……まあ、喰われるつもりはねえよ。外すのは何もかも終わってから、やるだけやってみてくれ」

「そうか。気を付けろよ……」

アザゼルはそう言うのと椅子に深く腰かけて大きくため息を吐いた。俺のせいもあるが、心労がたかっているのかもしれない。

俺は右手の籠手を顔の前に持ち上げながら言う。

「これは、人工セイクリッド・ギア 神クライム・フォース・ギア 器だよな。——『大罪龍の籠手』とでも呼ぶか」

俺が適当に命名していると、それを聞いた全員も呆れるように息を吐いた。

「ロイさん、前向きすぎです」

「そうか？なんか照れるな」

「誉めていません！」

ロセと俺がそんなやり取りをしていると、アザゼルが言う。

「とにかく、聖杯に関する新しい情報が手に入った。ロスヴァイセ、ギヤスパー、意見が聞きたい。ちよつと来てくれ」

「はい」

返事を聞いたアザゼルは立ち上がり、この場を後にしようとするが、スーツを着た男性が休憩フロアに駆け込んでくる。顔色が非常に悪いところを見るに、余程の緊急事態が起きたのだろう。今の状況で緊急事態なんて、言われなくてもわかってしまう。

俺は立ち上がりながら単刀直入に訊く。

「動き出したのか。で、どこだ」

「はい。現れたのは——日本近海です！」

邪龍の魔の手が、ついに人間界にまで伸びた。その事実を突きつけられ表情を強張らせるリアスたち。

次の戦場は人間界のようだが、やることは変わらねえ。何がなんでも、トライヘキサを殺す……！

l i f e 0 4 決戦に向けて

トライヘキサと邪龍どもが日本近海に出現の報を受けた俺——ロイを含めて休憩スペースにいたメンバーは玄関ロビーに移動していた。

先ほど目を覚ましたというイツセーも合流したが、リアスたちから心配の言葉をかけられていた。まあ、本人はたじたじになっていいるがな。

リアスたちの意識がイツセーに向いた隙をついてか、ロセが若干恥ずかしがりながら日本風のお守りを手渡してくる。

「北欧の護符を日本のお守り風に収めてみました。ある程度の厄から守ってくれるはずです。持っていてください」

「それは助かる。ありがとうな」

受け取ったお守りを角度を変えて見てみると、裏側にハートマークが刺繍されていた。苦笑しながらロセに目を向けると、頬を赤く染めながら照れ笑いしていた。

お守りを懐にしまうと、ロセが頬を赤く染めたまま言う。

「ロイさん。その、お願いを聞いてもらっていいですか？」

「ん？まあ、簡単なものならな」

俺が返すと、ロセは一度深呼吸をして気分を落ち着かせると言う。

「その、私を——」

「なにに、真剣な話？」

と、そこに黒歌が割り込んできた。彼女は話割り込むと俺の腕に絡みついてくる。

黒歌の登場にロセは言葉を失って硬直していたが、すぐに気を取り直して不機嫌そうに黒歌を睨む。

「大切な話をしているんです！邪魔をしないでください！」

ロセの批判の声を笑って受け流すと、黒歌は俺の鱗に包まれた右頬を優しく撫でながら言う。

「そういう話は終わってからにしなさい。今は結構大変な状況なんだからさ」

「……そ、それもそうですけど……」

あつさりと言い負かされ、テンションだだ下がりのロセ。何か大切な話らしいが、終わってからのんびりと聞かせてもらおう。

それはそれとして——、

「なんでヴァレリーがここに？」

俺の視界の先にはギヤスパーに付き添われたヴァレリーの姿があった。先日会ったとはいえ、あそこまで元気になっていたとはな。

「敵の手の内にある聖杯を止めるために、彼女の力が必要なんです」

「雑魚どもを打ち止めにできるのか？」

「そのはずです」

簡単に答えるロセ。とりあえず、敵の復活を阻止できるのは大きいだろう。トライヘキサを倒せるかは別としてだが。

俺とロセが話していると、情報を整理していたためか遅れて現れたアザゼルが言う。

「さて、ロスヴァイセ。作戦の確認を頼む」

「わかりました」

ロスヴァイセは頷き、説明を始める。

「今回の聖杯を停止させる作戦で、トライヘキサの核コアに対して、私とアザゼル先生たちとで作り出した専用の束縛結界を使います。制限時間が付きますが、確実に止められるでしょう。ただし——」

言いよどむロスヴァイセに代わり、アザゼルが続ける。

「現状、その結界は一度使用の使い捨てだ。同じ事をしようとしたら、一から術式を練り直すしかない。加えて、これはトライヘキサにしか効果がない。それに、展開するのも時間がかかるのが難点だ。ロスヴァイセやその他術者が無防備になる」

「つまり、護衛が必要なわけか」

「ああ」

俺の問いにアザゼルが頷く。手の空いた奴が護衛に回るのはいいが、戦場に出たらそんな余裕がないだろう。チームを別けるにしても、イツセーやヴァーリには伝説の邪龍二体を相手にしてもらわなければならない。俺が護衛につくにしても、グレンデルが言うことを聞いてくれるかどうか……。

俺があごに手をやって考えていると、ロビーに三人の見覚えのある悪魔が現れた。

「マスター！呼ばれていませんが、到着しました！」

「お久しぶり……でもないですが、助っ人に来ました」

「やあ、相変わらず無茶をしたようだ」

アリサ、クリス、ジルの三人だ。って、こいつらも参戦してくれるのか。

疑問が顔に出ていたのか、アリサが（そこまで大きくもない）胸を張りながら言う。

「マスターの眷属なんですから、こんな時こそ頼ってくださいい！」

「……眷属いたのか、おまえ」

アザゼルが何てことを言ってきた。あんまり周りの連中にも伝えていなかったから、こいつにも伝わっていなかったんだろう。リアスは思いの外驚いていないようだが……。

俺は咳払いをして簡単に三人を紹介する。

「黒髪のがクリス。金髪がアリサ。紫髪がジルだ」

俺のぎっくりすぎる説明に続き、クリスが丁寧に一礼する。

「ロイ・グレモリー様の『戦車』、クリスです」

クリスに続いてアリサが慌てて一礼し、顔をあげると同時に人懐っこい笑みを浮かべながら自己紹介を始める。

「ロイ様の『僧侶』、アリサです！よろしくお願いします！」

最後にジルが優雅に一礼し、苦笑混じりに言う。

「私はジル。ロイの眷属ではないが、十年近い付き合いのある同僚だ」

「——と、まあ、こんな感じだな。で、エリックは？」

俺の素朴な疑問をぶつけてみると、ジルが答える。

「『王』の駒が公おみやげになってから、それに関わったゲームプレイヤーたちが少々騒ぎ始めてね。そちらを鎮圧するための支援に向かった」

こんな状況でも自分の富だの名声だのに拘って、前線に来てくれない奴らがいるとは。こっちは命懸けの戦いに行くっていうのに……。

俺が小さくため息を漏らしていると、ジルがロセに目を向けながら言う。

「アジユカ様から話は聞いた。術式も教えてもらったから、微力ながら手伝わせてもらうよ」

ロセが心配げにこちらを見てきたので、俺は頷いてやる。

「腕は保証するから安心しろ」

俺の言葉にロセは不安げに頷くと、アザゼルが訊いてくる。

「展開までの間、ロスヴァイセの護衛は適当にチームロイでいいか。おまえらに任せていいんだな？」

黒歌に離れてもらい、右腕を左手の指で小突き言う。

「俺に関しては、こいつが放棄しなけりやな……」

呑まれるつもりは毛頭ないが、万が一もある。先に言っておいたほうがいいだろう。それに対してクリスが反応した。

「まあ、エリックのほうも終わり次第合流するらしいので、最悪彼も頼ります」

「まだ誰かいるのか……?」

「そいつは眷属じゃなくて同僚だ。腕は確かだぞ。……諜報に関しては」

あいつの戦闘能力はしらん。だが、一人であそこまでたどり着いた諜報能力は流石だろう。まあ、追っ手であるジルたちから逃げ回ったんだ、最低限の護身術ぐらいならいけるだろう。

「それはそれとして、その術式つてのが発動したら行動開始か」

俺の問いにアザゼルが頷いて説明を始める。

「ああ、まずはトライヘキサを止めて、邪龍と偽赤龍帝を蹴散らしつつ、聖杯を停止させる。雑魚どもを打ち止めにさせるってことだ」

ヴァーリが言う。

「それで、トライヘキサを止めたらどうするつもりだ？」

当然の質問にアザゼルは笑みながら答える。

「各神話、各勢力トップ陣の集中砲火を浴びせる。それでもダメだったら、俺たちに考えがある。まあ、成功させるさ」

何かしらの作戦があるようだが、どうにも嫌な予感がする。短い付き合いだが、アザゼルの表情が覚悟を決めたというか、大仕事を控えてやる気になっているようなものに見える。見えないでもない。

俺はそれを気にしながらもリアスたちに言う。

「ダメだったらかかは気にせず、成功をイメージしろ。でないと出来るものも出来なくなる。いいか、死ぬ気でベストを尽くせ！」

『はいっ！』

全員が力強く応じる。そんな俺を見たクリスとアリサ、ジルがなぜか苦笑していた。俺は構わずに続ける。

「——とは言ったが、死んだら許さねえからな！いつも通り、全員揃って明日を迎えてえ

からな！」

俺の言葉を受け、アリサがいきなり吹き出す。そのまま彼女は笑いを堪えながら言う。

「や、やっぱりそう言うんですね……！一番危険な仕事をやるのはマスターなのに——
—あ、ごめんなさい、ごめんなさい！冗談です！部下のかわいい冗談ですから！」

俺が右手の骨をゴキゴキ鳴らしていることに気づいたのか、アリサは勢いよく土下座した。確かにかわいい冗談だが、こいつは俺の怖さを忘れていたようだ。眷属になったというのに。

俺たちのやり取りのおかげなのか、作戦開始までもうすぐだが場の空気がなんとなく和んだ。そんな気がした。

病院を出発して数十分。俺たちは連合軍の集合場所である日本近海の名も知らぬ島に来ていた。

トライヘキサが近くにいるせいか、天候が酷く悪く、先程から悪寒がする。あの時は気にしなかったが、凄まじいプレッシャーだ。

俺は一旦リアスたちと別れ、孤島の林の中で倒れた樹を椅子代わりにして座り込んで

いた。

「……まったく。トライヘキサのオーラに当てられたか？いきなり騒ぎ始めやがって……」

先程から右腕の疼きが止まらない。戦闘前にこれだと、戦闘が始まったらどうなる。下手すりや、いきなり呑まれる可能性もある……。

俺の心中に不安が渦巻くなか、背後にヒトの気配を感じて振り返る。そこにいたのは、俺の人生を変えてくれた最愛の恋人。おんじん

「……セラ」

「探したわよ、ロイ」

セラはそう言うのと俺の横に腰かける。お互いに話さない時間が続くが、不意に彼女が口を開く。

「もっと自分を大事にしてよ。今回だけでいいから……！」

涙混じりに言葉を漏らすセラ。確かにここ最近無理をしてばかりだが、今回ばかりは流石に無理をしすぎたか……。

俺はドラゴンのものになってしまった右手を眺め、思わず苦笑した。

「まあ、これが終わればしばらくは平和になるだろうよ。そしたら、のんびりとさせてもらうさ。またどっか行こうぜ」

「……うん、そうね。これが終わればとりあえずは平和になる。そのためにも頑張らな
いと」

いきなり真剣なことを言い出すセラ。アザゼルといい、セラといい、どうしてこう覚
悟を決めた顔をしているのか……。

俺がじつと見ていることに気づいたのか、セラは急にいつもの無邪気さを感じる笑み
を浮かべる。

「そうしたら、またデートに行きましよう☆欲しいグッズがあるのよ☆」

「またミルクィか？相変わらずだな」

俺が肩をすくめながら言うと、身を取り出してくるセラ。いつにも増していい臭いが
するのは、中途半端にドラゴンだからだろうか。

セラは人差し指を突きつけて目を輝かせながら言う。

「ロイにもミルクィの素晴らしさが伝わってくれてくれるって信じてるからね☆いえ、伝わっ
てくれるまで観賞会を開催しちゃうんだから☆」

「それはまたキツイな……」

俺が引き気味に苦笑していると、セラの両手で俺の両頬が包み込まれ、正面から彼女
の顔と見合わせる。

いきなりの行動に俺は疑問符を浮かべるが、セラは優しく笑むとそのまま優しく口付

けしてきた。彼女の温かさと柔らかさが唇に伝わり、何となくだか俺の心中も落ち着いたような気がする。

彼女の顔が離れていくなか、ほんの一瞬だけ名残惜しそうな表情になつていたことに気づく。もしかして、何かしようとしているのか……？

俺が問いただそうとすると、セラはわざとらしくやる気を出したとアピールするようにガッツポーズをしながら言う。

「さて、頑張りましょう☆私も日本も大好きなの☆」

明らかに俺に質問させないように今の発言をしたんだろう。それを察することはできた俺は無理に質問しないようにして、彼女に続く。

「俺も日本は好きだな。まあ、今はこっちが職場だし、結構日本に潜伏していたからな」「好きのベクトルが違う気がするわ……」

「……そうか？」

このやり取りを最後に、俺とセラはそれぞれの持ち場に向かう。アザゼルやセラが何を考えているにしても、出来るだけそれをさせたくはない。あんな覚悟を決めた顔をされたら、その身を犠牲にするような何かなんてことは簡単に予想できる。させられるわけがない。

俺が島の岩礁まで戻つてくると、緑色の指輪――

『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』を装備したアリサ

が大袈裟に手を振って俺を迎え入れる。

「あ、マスター！遅いですよ！どこに行ってたんですか？」

「風に当たりにな。さつきまで倒れてたんだから、少しは当たっておかねえと」

身体を伸ばしながら言うのと、クリスが一度肩を回して拳を握りながら言う。

「俺は万全です。いつでも何でも来いって感じですよ！」

やる気十分のようだ。

横ではジルとロセが魔方阵を展開して話し込んでいたが、不意にジルが作業をしながらもこちらに目を向けて言う。

「まあ、何かあったらシトリー眷属の『ポイン兵士』——匙くんだったか？まあ、彼に止めてもらえ。龍王を宿しているんだらう？」

「まあ、最悪の場合は頼るか……。イツセーでも暴走を止められたんだ、匙にも出来るだらう」

一通りの調整を終えたからか、ロセは作業の手を止めると言ってくる。

「それもいいですけど、本当に無理はしないでくださいね？こつちがもちません」

「お、おう……」

散々言われたが、無理はしない方向でいこう。無茶はすると思うけどな……。

ふと、こんな時に間違いなく絡んでくる黒歌がないことに気づく。あいつ、どこに

行った？

俺が周囲を見渡していたからか、ロセが言う。

「黒歌さんはヴァーリチームと一緒に行動しています。まあ、『終わったら報酬をいただくにや』とか何とか……」

地味にロセの『にや』をかわいいと思ってしまった俺がいた。黒歌の口調に慣れすぎたか？

そんな下らない疑問をよそに、連合軍の面々が近くの島や俺たちのいる島から次々と飛び立っていく。

妖怪に始まり西洋の魔物、悪魔、天使、堕天使、その他神話に属する者たち。それぞれの本拠地を守るために多くの戦力を割いていると聞いていたが、それでも迎撃にも送ってくれたようだ。感謝するしかねえな。

トライヘキサのいる方向に向かう連合軍を背に、俺は仲間たちに言う。

「さて、俺たちも行くとするか。準備は」

「いつでもどうぞ」

「右に同じです！」

「問題ない」

「私も大丈夫です！」

クリス、アリサ、ジル、ロセがそれぞれ答えてくれる。

俺は頷き返して右腕に籠手を出現させてアロンダイトを取り出す。

「新メンバーロセを加えた俺たち『チームロイ』の初陣だ。派手に行こう……」

「……ロイさんつて、こんな事言うキャラでしたか？」

「いつもの事ですよ」

小声でロセとアリサがそんな会話をしていたので、振り向いてアリサを睨む。

俺に睨まれたアリサは自分の頭を守るように手で隠しながらクリスの後ろに隠れた。

「……ま、まだですか、またなんですか!?!」

「おまえは懲りたらどうなんだ……」

巻き込まれたクリスは困り顔で苦笑していたが、地味に楽しそうでもある。まあ、今は状況が状況だから無視して視線を前に戻し、籠手に力を込める。

『Crime Force Draggon Balance Breaker!!!』

黒を基調とした軽 鎧を身に纏い、顎から鼻先までを覆うマスク状の兜を装着する。

「——それじゃ、行くぞ!」

「はい!」

「了解!」

「ああ!」

「了解です！」

俺たちはその場を飛び出して戦場に向かう。トライヘキサを倒すために。この世界を護るために――。

life05 ロイVSトライヘキサ

「はあっ!!」

鎧を纏った俺——ロイは勢いのままアロンダイトを振り下ろし、量産型邪龍を一体屠り、そのまま得物にオーラを纏わせて振り抜く。

放たれた深紅のオーラは次々と邪龍を、さらには偽赤龍帝を呑み込み、掠めた部位を削り取っていく。

それにしたって、

「ああ、くそ！減らねえもんだな」

一向に数が減らない。殺しても殺してもすぐに次が来やがる。

俺の愚痴が聞こえていたのか、邪龍を豪快に殴り飛ばしたクリスが言う。

「確かに多いですが、ここはまだ楽なほうらしいですよ。ロスヴァイセさんが例の捕縛術式を使うことな通達してありますから、他のヒトたちが頑張ってくれているんですよ！」

言い切りながら偽赤龍帝も殴り飛ばす。流石はクリス、魔力も使えるパワーバカだ。

と、クリスに緑色の光が届く。同時に血の滲んだ拳の傷が治り、万全の状態で次の

ターゲットを探す。

後方のアリスが俺たちだけでなく、連合軍の面々に緑色の回復オーラを飛ばして戦線を支えている。近づく邪龍は、雷や炎の魔力で迎え撃ち、返り討ちにしていた。

さらに後方ではロセとジルが数百の魔方阵を同時進行で動かしていくが、表情が強張っている。何かトラブルでもあったのだろうか。

何てことを横目で確認しながらも邪龍を叩き斬り、返り血が若干かかる。まあ、いつもの事だな……。

血を拭うとかは特にしないでいると、耳元に連絡用魔方阵が展開された。

『ロスヴァイセです。術式の発動にはまだ時間がかかると共に、距離があります。さらに接近しなければなりません』

「了解だ。あんまり離れるなよ?」

俺の軽口に答えたのはジルだ。

『離れても私が守るさ。好きに暴れてくれ』

何てことを言ってくれる我が同僚。なら、お言葉に甘えて頼らせてもらいますか。

俺たちが前進しようとした瞬間、俺たちを悪寒が襲う!まるで、絶対的な死がそこまで来ているような感覚。これは、ヤバイ……!

俺たちが異常なまでのオーラの放出を察知し、そちらに目を向けた瞬間、オーラの塊

が放たれる！運良く俺たちのいる方向には来なかったが、それに呑み込まれた連合軍の面々は何もできずに消滅してしまう。

今のはトライヘキサの一撃だろう。当たれば即死は免れない、絶対の一撃。早く奴を止めねえと、被害がさらに増えるだろう。

俺たちは前進しようとするが、相変わらずの物量に進むことができない。このようなりや、やるしかねえ！

俺は連絡用魔方陣を展開してジルたちに言う。

「俺が突っ込んで奥から掻き乱す！ロセのこと頼むぞー！」

『了解！』

『任された』

クリスとアリサ、ジルが返事をくれるが、ロセだけ少し遅れて心配げに言ってくる。

『ロイさん。死なないでくださいね……』

「任せろ。死なねえのが特技だ」

俺はそう返すと、背中の魔力噴出口から魔力を放出して一気に加速。すれ違い様に邪龍を切り裂いていき、興味を無理やりこちらに向ける。

狙い通りに邪龍は次々と俺に向かってくるが、どいつもこいつも雑魚なので一方的に狩っていく。返り血で全身を汚していくが、いつもの事なので無視。

俺を無視しようとする邪龍の群れにアロンダイトの切っ先を向け、一気に突っ込んで片っ端から殺しまくる。ロセがトライヘキサを射程に捉えるまで、何がなんでも殺し続けてやる……！

そんな事を繰り返して突き進むこと数分。

「はあ……はあ……。流石にしんどいな……」

邪龍に囲まれている状況で、呑気にそんな事を漏らしていた。何だろう、結構危険な状況なのに、落ち着いてきている自分がいる。

視界の先にはトライヘキサとアジ・ダハーカ、聖杯を持つアポプスの姿がある。どうにかしてあそこまでの活路を開かねえといけねえのか……。

息を整えていると、三体の邪龍が俺を取り囲む。銀色の瞳の邪龍——グレンデルの量産型だ。

ため息を吐くと同時に正面の一体に向けて飛び出す！それに反応して拳を放つてくることが、余裕でそれを避けて腹にアロンダイトを突き立てる！

貫くと同時に滅びを体内に流し込み、一気に決めにかかる、量産型グレンデルが大量の青い血を吐き出して動かなくなる。俺は頭からそれを被ってしまうが、お構いなしにアロンダイトを引き抜いてその場を飛び退く。

俺のいた場所に火炎が放たれ、量産型グレンデルの死骸が焼かれて嫌な臭いが鼻につ

いた。

火炎を吐いた二体目の量産型グレンデルに向けて飛びかかると、その眼球に腕を振じ込み、滅びを流し込みながら強引に引き抜く！

大量の血と共に脳髓の一部が一緒に飛び出し、俺の身体を汚していく。構うことはない、次だ。

三体目の量産型グレンデルに飛びかかろうとすると、トライヘキサがオーラを溜めていることに気づく。どうにかして放出を阻止しようとするが、それが悪手だった。

その隙に接近を許してしまった量産型グレンデルの拳が俺を捉え、そのまま殴り飛ばす！

「かはっー！」

肺の空気を一気に吐き出したが、翼を調整して無理やり勢いを殺すと、トライヘキサのほうに目を向ける。

奴は莫大なオーラを放ち、連合軍に大打撃を与えていく。

それを確認している間にも量産型グレンデルが向かって来ているが、俺は落ち着いてアロндаイトにオーラを溜めながら霞の構えを取る。

オーラが最高潮まで溜まった瞬間、刺突の要領でそれを解き放ち、量産型グレンデルに向けて放つ！

その一撃は的確に量産型グレンデルの眉間を撃ち抜き、絶命させた。だが、トライヘキサまでまだ遠いな。

「——ッ！」

俺がそんな事を考え始めると、突然の頭痛に襲われる！なんだってんだよ、いきなり……！

『おらおら、どうした！もつと殺させろ！もつと！もつとだああああ！』

脳内に響き渡るのはグレンデルの怒鳴り声だ。こいつ、意識がここまで戻っていやがるのか……！

歯を食い縛ってグレンデルの声と頭痛に耐えていると、耳元に連絡用の魔方陣が展開される。

『ロイさん！準備は整いましたが、距離が遠すぎます！』

いきなりロセから連絡が飛んできた。と、同時にクリスが俺の横につき、アリサの回復オーラが俺を包み込む。が、頭痛はおさまらないしグレンデルの声がまだ響く。

『そんな奴等はほつといて、もつと暴れさせろ！俺様に身体を寄越せ！なんでもぶつ殺してやるよ！』

俺は頭を押さえながら横のクリスに言う。

「ど、どうにかして距離を詰めてえが、アポプスとアジ・ダハーカを引き離さねえと。あ

いつらがいるんじゃないやどうにもならねえ……」

「下手に攻撃してもあつさりと返り討ちですからね。何か手は……」

クリスの一瞬心配げな視線を送ってくるが、あごに手をやって考え込んでいた。

俺は頭を押さえながら荒れた息を整え、周囲を確認していると、槍を持った青年が横に現れる。

「手詰まりと言ったところですか。それよりも、大丈夫ですか？」

「曹操か。久しぶりだな……」

聖槍を持つ男——曹操だ。既に禁手バランス・ブレイク化状態なのか、例の球体のひとつに乗り、残り

は周りに浮遊させている。俺を心配するつてことは、まだ余裕なのだろう。

曹操は槍で肩を叩きながら言う。

「邪龍をその身に宿すとは、予想外ですよ」

「何がなんでも勝たなきゃならねえ。だろ？」

「確かに」

曹操はそう言うのと槍を構える。

「あなたの前での使用は初めてでしたね？少し下がることをおすすめます」

「おまえ、何をするつもりだ……？」

俺の問いかけを無視し、曹操は力強く呪文を口にしていく。

「槍よ、神を射貫く真なる聖槍よ！我が内に眠る霸王の理想を吸い上げ、祝福と滅びの間を抉れ！汝よ、遺志を語りて、輝きと化せッ！」

曹操の詠唱に合わせて槍のオーラが高まっていき、俺とクリスの身体を地味に焼いていく。アリスが回復オーラを同時進行で流してくれているが、鎧越しでも結構痛いぞ……。

俺たちがダメージを受けるなか、曹操は最後の一節を口にする。

『トウルース・イデア
覇 輝ッ！』

槍から聖なるオーラが迸り、トライヘキサと伝説の邪龍二体に向かう！

量産型邪龍や偽赤龍帝軍団はそれを受けただけでその身を溶かされ、伝説の邪龍二体はギリギリまで耐えるが、ついに耐えきれなくなりその場から離れた。グレンデルの声も遠のいていき、頭痛もおさまった。のほろほろが、肝心のトライヘキサは――、

『ッ！』

それを真正面から受けても少し怯む程度で、全くと言えるほどダメージがない。おかげさまで、アポプスが手にしていた聖杯はトライヘキサの真横に浮いている。

「――ッ！ダメージ無しか。まさかこれほどは……」

流石の曹操も驚愕を隠せないでいた。生物なら即死するであろう聖書の神の遺志を力として放つ一撃を、奴は耐えたどころか無傷なのだ。規格外すぎる。

……例の術式でトライヘキサを止めるにしても、奴は完全にこちらを警戒している。もう少し近づけば発動出来るんだろうが、先程から凄まじい悪寒がする。

トライヘキサが右手をこちらに向け、オーラを溜め始めた。ここまでくりや、迷っている暇はねえ……！

背中の魔力噴出口から魔力を放出、一瞬でトライヘキサとの間合いを詰めてタツクルをかます！トライヘキサを捕まえ、そのまま近くの島に自分ごと突っ込み、岩礁に叩きつけると共に離れる。

今のでトライヘキサの溜めたオーラをどうにか散らせたが、注意は完全に俺に向けられるだろう。後は、ロセの到着まで耐えるだけだ。

覚悟を決めてアロンドイトを構えた瞬間、トライヘキサが突如として天高く咆哮する！

『オオオオオオオツ！キエヤアアアアッ！』

大気を揺らす生物とは思えない奇妙な声の咆哮に、俺はたまらず耳を塞ぐ。同時に嫌な感覚が襲ってきた。敵側の結界か何かに関われた時のような嫌な感覚、まさか……。

トライヘキサを警戒しつつ、五感を研ぎ澄まして周辺を探る。吹き荒れていた風が止み、先程まで荒れていた波が嘘のように静かになり、誰かの怒号や邪龍の咆哮も聞こえない。どうやら、本当に結界に入れられたようだ。

俺はため息を漏らし、何となくトライヘキサに声をかけてみる。

「どっかの神様でもなく、俺を指名とはな。最初に首を飛ばされたのがそんなに気に入らないか？」

『……………』

返答なし。まあ、予想通りではあった。今さらこいつとコミュニケーションを取ろうなんざ、俺も焼きが回ったもんだな……。

一度深呼吸して気分を落ち着かせ、アロンダイトを構えてトライヘキサを睨む。奴も睨み返してくるが、手を出してくる気配はない。——なら、先に仕掛ける！

背中の魔力噴出口から魔力を放出、静止状態から一気にトップスピードに達するが、トライヘキサはカウンターを合わせるように回し蹴りを放ってくる！

ギリギリで姿勢を低くしてそれを避けるが、余波で地面が抉り取られ、それに巻き込まれる形で俺も宙に投げ出された。

翼を展開して体勢を整えた瞬間、トライヘキサが瞬時に間合いを詰めてくるとそのまま乱打を放ってくる！ひとつひとつに込められたオーラは危険極まりないのであり、当たればただではすまないだろう。

——逆に言えば、放たれる拳全てに大量のオーラが込められているわけだ。ようは、避けながらオーラの流れを注意深く見てやれば、動きを先読みできる。

放たれる乱打を刹那的に見切り、最小限の体捌きで避け続けていく。拳の速度は一気に上がっていくが、グレンデルに身体を持っていかれているおかげなのか、それとも馴染み始めているおかげなのか、いつも以上に身体が軽く、余裕で避けられる。

流石にイラついたのか、トライヘキサが豪快に振り抜いてきた拳を再び避け、アロンドイトでその腕を落とす。

『……ッ！』

腕を落とされて奴の体勢が崩れた一瞬の隙を見逃さず、一気にアロンドイトを振り抜く。

トライヘキサの身体は袈裟懸けに斬られ、上半身と下半身が泣き別れする。上半身はそのまま地面に落下していくが、下半身はそのまま霧散し、白い靄もやとなって上半身のほうに向かっていく。

今撃てば、ある程度のダメージを期待できるか……。

アロンドイトに魔力を込めていき、一気に解放。上半身だけのトライヘキサに叩きつける。

トライヘキサは深紅の柱に叩き潰されるが、それを一瞬で掻き消して立ち上がる。上半身と下半身がくつつき、再び万全の状態となっていた。

一度高度を落として地面に足をつけ、霞の構えを取る。トライヘキサは俺が何をす

つもりなのか読んだのか、すぐさま距離を詰めてくるが、俺は地面が砕けるほどの勢いで一步踏み込み、トライヘキサの拳にカウンターを入れるように一気に切り上げる。

再び身体を袈裟懸けに斬られたトライヘキサだが、上半身だけになっても俺に掴みかかり、頭突きをかましてくる！

「ッー」

ギリギリのタイミングで義手である左腕で防ぐことができたが、籠手が完全に砕け散り、義手がひん曲がる。

トライヘキサは頭突きを防がれても俺を離すことはなく、そのまま翼を動かして縦軸回転すると、遠心力に乗せて俺を投げ飛ばす！

ものすごい速度で飛ばされる俺だが、翼を展開して勢いを少しずつ殺していき、最後は叩きつけられるはずだった岩を足場にして完全に勢いを殺しきり、そのまま飛び出してトライヘキサに向かう。

身体を再生させたトライヘキサの腹にアロンダイトを突き立て、一気に滅びを流し込んでいく。目の前で奴の身体を食い破るように滅びが飛び出していくが、そんな事に構うことなくトライヘキサはアロンダイトの刀身を両腕で押さえ込んだ。

引き抜こうとするが全く動かない。相当な力で押さえられているようだが、折れないのは流石と言うべきか。

アロンダイトを手放して、その柄頭に回り蹴りを放つ。アロンダイトはさらに深く突き刺さり、ダメージによってなのか、トライヘキサはアロンダイトから手を離す。

その隙に引き抜き、兜割りでトライヘキサの身体を叩き斬る。が、再生した身体に包み込まれ、奴の腹部あたりで動かせなくなった。徹底的にアロンダイトを封じてきやがる。

アロンダイトを腹に刺したまま、トライヘキサが蹴りを放ってくる。その場を飛び退いてそれを避けると、奴は一瞬で俺の眼前まで詰め寄ってくる。今までとは段違いの速さ、どうなつてやがる……！

トライヘキサの放つ拳をギリギリで避け、アロンダイトに手をかけると、奴の蹴りが迫ってきていた。アロンダイトを取りに行つたせいで回避が間に合わない。防ぐしかねえ……！

とつさに左腕を差し出して蹴りを受けるが、凄まじい衝撃と共に弾き飛ばされる。ようやくアロンダイトが抜けてくれたが、それどころじゃない。勢いを殺しきれねえ！

勢いよく地面に叩きつけられ、大量の砂塵が舞う。痛みを堪えて素早く立ち上がろうとするが、同時に悪寒が襲う。トライヘキサがオーラを放つときに感じたものと同じ。狙いは俺しかいねえ。これは、間に合うか……！

その場を急いで退避しようとするが、眼前にトライヘキサが現れる。俺がほんの一瞬

驚愕すると、至近距離でオーラが解き放たれる。

視界を包み込む閃光に呑み込まれ、同時に襲いくる激痛。それに抵抗できるわけもなく、俺の意識は飛ばされたのだった――。

トライヘキサは腕を引き、今しがた吹き飛ばしたロイを見る。土壇場でアロンドイトを盾にしたため原型こそとどめているが、戦闘不能は確定だった。

そんな彼にトライヘキサは近づいていく。一步、また一步と歩を進め、彼のすぐ近くまで来ると再び腕にオーラを込めていく。

それを解き放とうとした瞬間、トライヘキサに滅びの球体たちが襲いかかる！トライヘキサは無抵抗でそれに呑み込まれるが、ロイから少し離れた場所で肉体を再生させた。

トライヘキサが空中に目を向ける。そこにいたのは――、

「やれやれ、ロイは人気者だね」

軽口を叩きながらも、絶大な殺気を放つサーゼクスの姿があった。外の術者や眷属の助力で、トライヘキサの結果を無理やり通り抜けたのだ。

彼はゆっくりと降下して地に足をつけると、視線が冷たいものに変わり、魔力を高め始める。彼の放つ魔力で島が揺れ始め、近くの小石や岩が砕け散っていく。

魔力を完全に解き放つと、彼の身体を滅びの魔力が覆い始め、一気に弾ける！

紅の輝きがおさまると、そこにいたのはまさに滅びの化身。ロイとは比較にならない濃度の滅びを全身に纏ったサーゼクスの姿だった。

『さて、アポプスはイツセーくんが、アジ・ダハーからヴァーリくんがどうか倒してくれた。ロスヴァイセくんが聖杯も止めた。後は、キミを倒すだけだ』

静かに告げるサーゼクスに、トライヘキサは飛び出していく！サーゼクスもそれに答えるように飛び出し、二人の激突で空間が悲鳴をあげ始めた。

サーゼクスの放つ滅びがトライヘキサの腹を穿ち、足を消し飛ばし、頭を削り取っていく。だが、トライヘキサは止まらない。驚異的な再生能力でサーゼクスに食らいついていく！

俺——ロイが目を開けると暗闇の世界。また飛ばされたか……。

俺はため息を吐くと、変化に気づく。回りはいつかのように燃えていないし、怨念たちもいない。妙に静かで、不気味だ。

不意に視線に気づき、そちらに目を向けると——、

『あの野郎が！ぶつ潰してやる！ぶつ殺してやる！』

グレンデルが鎖で地面にうつ伏せで大の字に寝かされるように拘束され、俺を睨んできいていた。

『よお悪魔ちゃん！だらしねえな、あんなんでもくたばつちまうのか？』

「ほざけ。まだやれる」

『行けたって勝てねえだろうがよ！俺様に寄越しやがれ！悪魔ちゃんの身体をよ！』

唾を撒き散らしながら怒鳴り付けるグレンデル。

確かに、中途半端にこいつを取り込んでも勝てねえ。ならいつそのこと受け入れちまえば、まだ戦えるか……。

俺が手を伸ばそうとすると、腕を掴んで止めようとするヒトたちがいた。怨念たちだ。

若干呆れたような声音で言ってくる。

『また殺すのか』

『また戦うのか』

『また奪うのか』

「ああ。俺がどうなつたとしても、やるしかねえ」

そう返しながら腕を振り払うと、少し幼い声が訊いてくる。

『また傷つくの?』

その問いかけをうけて、伸ばした手を一度引つ込める。それでも声は続く。

『また誰かを泣かせるの? また誰かを悲しませるの?』

『どうしたんだよ、悪魔ちゃん! そんなくそどものことなんざほつとけよ! さつさと寄越せ!』

グレンデルが騒いでいるが、俺は瞑目しながら言う。

「またぼろぼろになるかもしれない。また誰かを泣かせて、悲しませるかもしれない。だが——」

ゆつくりと目を開き、笑みを浮かべながらグレンデルに手を伸ばす。

「その誰かを助けるためにも、その誰かの所に帰るためにも力が欲しい。今回限りで構わない。俺に——」

俺の手がグレンデルの鼻先に触れ、深紅と深緑が入り交じる輝きが放たれ始める。

「——戦^守うための力を超越せ！」

『なんじやこりや、何で奪えねえ！何で食えねえ!?』

狼狽えるグレンデルを無視し、俺は呪文を口にする。

「我、罪を重ねし罪人なり」

『我ら、罪人に罪を問いつける者なり』

俺の呪文に、怨念たちの老若男女な声が入り交じった呪文が続いてくれた。

彼らの行動に小さく笑みを浮かべて続きを口にする。

「この身は朽ち果て、魂^{こころ}のみが継^つがれ——」

『その身朽ち果ててなお、魂^{こころ}に刻まれた罪は消えず——』

「故に死せず、さらなる罪を重ね——」

『故に解放されず、さらなる罪を重ね——』

「それでもなお、未^あ来^すを望み——」

『それでもなお、死^{かいほう}を望まず——』

俺たちが言葉を発する度に深緑のオーラが深紅のオーラに呑み込まれていき、グレンデルが怯えの表情を浮かべ始めた。

『な、なんで食えねえ！なんで俺様が食われそうになってやがる!?!』

「それこそが贖罪となるならば——」

『それこそが罰となるならば——』

俺はグレンデルに目を向ける。奴はついにいつものギラギラした視線ではなく、怯えの色に染まった視線で睨んでくる。

それを受けながらも、俺は続きを口にする。

『『汝に見せよう、我らが闘いを——』』

『や、やめろ……いやめろ！』

俺と怨念たちの声が混ざり、身体の奥底から力が湧いてくる。グレンデルが暴れ始めるが、そこまで力を感じない。

それを感じながら、俺たちは最後の一節を口にする。

『『我らが家族ともに遺のこそう。我らが生きた証を——！』』

俺たちがそれを口にした瞬間、深緑のオーラは完全に深紅のオーラに呑み込まれ、生気を失った様子のグレンデルが俺の身体に溶け込んでいく。

さあ、行くか。あいつらの所に帰るためにも——！

『Panished
Drive!!!』
『——ッ！なんだ！』

トライヘキサと激闘を繰り返していたサーゼクスは、トライヘキサを消し飛ばすと共に異常なオーラの高まりを察知してそちらに目を向ける。

その隙に身体を再生させたトライヘキサが背後から迫るが、横合いから蹴り飛ばされて海面に叩きつけられる。

サーゼクスは振り返り、トライヘキサを蹴り飛ばした人物に目を向けると、目を見開いた。

『ロイ、なのか……？』

『ああ。ほとんど面影ねえけどな……』

サーゼクスの問いに、ロイは自分の頭を、正確にはそこから後ろ向きに伸びる角を撫でながら返す。

姿こそはロイである。だが、彼の頭からは紅の髪を掻き分けるように二本の角が伸

び、顔の右半分は完全に黒い鱗に覆われてしまっている。だが、グレンデルに吞まれた様子もなく、逆にオーラも爆発的に上がり、怪我也完全に治癒していた。

サーゼクスは正面からロイの姿を捉えると、再び驚愕を露にした。ロイの右瞳は美しくもどこか恐ろしいほど曇りのない黒に染まり、左瞳は吸い込まれそうなほど鮮やかな紅に染まっている。

黒一色だった軽ライト・アーマー 鎧には血管を思わせる深緑色のラインが走り、薄く点滅を繰り返していた。

『罰せられしは罪を重ねし滅魔龍』とでも呼ぶか。グレンデルはどうか押さえつけたから大丈夫だ』

自分の身体を眺めながら適当に言うロイ。いつもの調子の彼にサーゼクスはホッと息を吐くと同時に、トライヘキサが海面から飛び出して彼らと対峙する。

それを受けたロイはアロンダイトの切っ先を向け、サーゼクスは滅びの球体を複数自身周囲に出現させる。

グレモリー兄弟とトライヘキサの闘いが、まさに始まるうとしていた――。

l i f e 0 6 兄弟共闘

俺——ロイは兄さんと並び、トライヘキサを睨む。奴は立ち上がった俺を見て多少警戒していたが、すぐに兄さんのほうにも意識を傾ける。

グレンデルの力が馴染んだのはいいが、自分でもどの程度いけるのかがよくわからない。まあ、やるしかねえけどな。

俺はゆっくりと息を吐き、兄さんに目で合図を送る。それを受けた兄さんが小さく頷いた瞬間、魔力噴出口から魔力を放出させて一気に飛び出す！

自分でも驚くほどの速度を叩き出したが、そんな事で驚いているほど余裕はない。すぐさま意識を切り替えてアロンダイトを振り下ろす。

トライヘキサは防ごうと腕をクロスさせるが、俺の一撃はその腕ごと奴の身体を切り裂き、真つ二つにする。トライヘキサはすぐさま距離を離そうとするが、そこに滅びの球体が襲いかかり、身体を完全に消し飛ばした。

——が、その程度で倒れてくれるほど優しくはなく、すぐさま身体を再生させて俺に向かってくる。

俺は慌てずに左手の手元に深紅と深緑の入り交じったオーラを溜め、トライヘキサに

向けて放つ。神速で放たれたそれをトライヘキサは回避できずにあっさり呑み込まれた。

左手をトライヘキサを呑み込んだ球体に向け、閉じる。同時に球体が圧縮されていき、中のあるものを消滅させる。だが、まだ終わりではない。トライヘキサは肉体を再生させながら球体から飛び出し、正面から俺に拳を放ってくる。

軽く首を傾げるだけでそれを避け、オーラを纏わせた左拳で腹部を撃ち抜く。数歩分トライヘキサとの間合いが開いたところでアロンドایتにオーラを纏わせ、それを叩きつける。

トライヘキサの左半身が見事に削り取られ、一瞬動きが止まる。その隙を狙った兄さんの放った滅びの球体が残りの右半身を消し飛ばし、再び再生される。

それと同時に放たれた蹴りを避け、一旦兄さんの所まで下がる。まったくもって倒せねえ。どうやれば削りきれんんだ？

『情報通りのタフさだね。あと何度消滅させればいいのやら』

「まあ、ヤバくなったら結界を破って外の連中にバトンタッチもありだけだな。なんか作戦があるんだろ？」

俺の問いかけに兄さんは頷き、右手の指を二本立てた。

『ひとつは聞いていると思うけど、そのあとにも保険がある』

その保険を知りたいんだけどな。セラとアザゼルのあんな顔見せられたら、嫌なものを想像しちゃおう。

俺が思いきって問おうとした矢先、トライヘキサがオーラを溜め始める。まとめて消し飛ばすつもりのようなのだ。

俺と兄さんはそれぞれ左右に別れて回避しようとする、オーラを半分に分散させてそれぞれを狙い撃とうとするトライヘキサ。だが、甘い。

俺はまっすぐ横に逃げていたが、放出のタイミングを狙って一気に直線的にトライヘキサとの間合いを詰めにかかる。横に逃げていた俺の動きを予想しての攻撃はあっさりと外れ、海面に叩きつけられて大きな水柱が生まれた。

跳ね上がった水しぶきの中を突っ切り、アロндаイトを振り下ろす。再びトライヘキサの身体を切り裂くが、今度は途中で肉体を再生させたのか、途中でアロндаイトが止まってしまう。

俺一人の時は対応しづらいが、今は二人だ。同じくトライヘキサの攻撃を避けた兄さんが一気に肉薄し、トライヘキサの身体をその拳で削り取る。

同時にアロндаイトを引き抜いて一旦下がり、再び深紅と深緑のオーラをトライヘキサに放つ。トライヘキサの頭が綺麗に吹き飛ばされるが、再生させる前にそのまま殴りかかってくる。先程と同じように紙一重で避けていき、時にはカウンターの拳を放って

いく。

俺が右拳をフルスイングで撃ち抜いてトライヘキサを殴り飛ばすと、そこに兄さんが滅びの球体を放って再び消滅させた。

俺たちは再生からの反撃にに備えるが、なかなか現れない。なんだ、どこにいった……。

俺と兄さんが目を合わせると、俺たちから少し離れた所にトライヘキサが現れ、今まで以上のオーラを溜め始めた。

『この空間ごと吹き飛ばすつもりか！』

兄さんがすぐさまトライヘキサに向かおうとするが、俺はアロンダイト刀身をゆつくりと撫でてオーラを込めていく。鎧に刻まれた深緑のラインを伝ってオーラがアロンダイトに流れていき、刀身にも深緑色のラインが現れ始めた。

アロンダイト本来の聖なるオーラ、深紅の滅びのオーラ、そしてグレンデルの深緑のドラゴンのオーラ。

その三つが合わさると光の柱となり、空間を震わせるほどのオーラを放ち始める。だが、こんな無駄はいらない。もっとピンポイントで奴を撃ち抜かねえと削りきれねえ。

俺の意思がアロンダイトに伝わってくれたのか、光の柱が圧縮されていき、三つのオーラが刀身に納まるほどになった。

強烈な閃光を放つ刀身は振動しているのか、耳障りな甲高い音が鳴り響かせる。それに掻き消されないように俺は叫ぶ。

「兄さん、下がれ！」

『！ッ！』

俺の言葉を受けた兄さんがトライヘキサへの突貫を止め、射線を開けてくれた。

同時にアロンダイトを振り抜き、空間ごとトライヘキサの身体を削り取る！身体を真つ二つに削り取られたトライヘキサはオーラを散らしながら硬直し、削り取られた空間からは万華鏡を思わせる次元の狭間が見えるようになってしまった。

「すげえな。こんなことになるとは……」

まさかここまでとは、存外やってみるもんだな。

アロンダイトに残るオーラを空を斬って散らすと、トライヘキサに目をやる。流石に空間ごといかれたら再生しにくいのか、いつもよりも時間をかけて再生させていくが、その間は隙だらけだ。

俺と兄さんは頷きあい、横並びになると同時に魔力を迸らせ、右手を前に突き出す。鎧の深緑色のラインに乗って全身の魔力とドラゴンのオーラが右手に集中し、兄さんも絶妙なコントロールで右手に魔力を溜めていく。

それが最大まで溜まった瞬間、

『消し飛ば！』

俺と兄さんが異口同音で言葉を発し、同時に魔力を解き放つ！二つの深紅と深緑のオーラが混ざりあい、トライヘキサへと向かう。

そのオーラは無抵抗のトライヘキサを呑み込んだまま結界に当たるが、流石にそちらは突破出来ずにオーラは弾けてしまった。

「結界は無理か。どうにかして出たいんだがな」

『外の皆も頑張ってくれているさ。さて、気を引き締めていこう』

それぞれそんな事を漏らしながら再び構える。トライヘキサは身体をずたぼろにされても生きているようで、少しずつ身体を再生させながらこちらに近づいてきていた。

「空間ごと削れば再生に時間がかかるみてえだな。なら、また今のをやればいいのか？」
『あまり飛ばしすぎないほうがいい。あちらにも何か奥の手があるかもしれない』

俺の問いかけにそう返す兄さん。確かに、まだ何かあっても不思議ではないな。

俺たちが手短にその話を終えると、トライヘキサが身体を完全に再生させ、こちらを静かに睨んでくる。なんだ、微妙にだがオーラの質が上がった……？

その疑問を抱いた瞬間、俺たちの視界からトライヘキサが消える。俺たちは目を見開きながらも振り向き、兄さんは障壁を展開、俺はアロンダイトを盾代わりにして防御を体勢を取った。そして、凄まじい衝撃が叩きつけられる！

『——ッ！』

それを耐えきることが出来ずに俺たちは弾き飛ばされ、兄さんは海面に、俺は島に叩きつけられた。やれやれ、ここからが本気モードってわけか。

俺は痺れる腕を気にしながらもため息を吐いて立ち上がり、上空のトライヘキサに目をやる。向こうは先程よりも強く白く発光しながら、俺を睨み付けてくる。

俺は翼を展開し直して、トライヘキサへと向かう！同時に兄さんも海面を消し飛ばしながら飛び出して俺の横に並んだ。

俺たち兄弟で同時にトライヘキサに撃ち込んでいくが、先程のように一方的に殴られらわけでもなく、的確に防ぎ、時にはカウンターが飛んでくる始末だ。

トライヘキサは確実に強くなっている。このままいけば、倒す前に倒せる奴がいなくなるだろう。

撃ち込みながらもそれを察することの出来た俺と兄さんは、一瞬目を合わせると少しだけ速度を上げる。下手に強くなられても困るので、一気には上げない。まだ余力を残しておく。

そんな中、トライヘキサな翼に変化が起こる。先端が鋭く、長くなり、まさに刃物と言ったようになったのだ。

コカピエルとの戦いでも似たようなことがあったからすぐにわかった。こいつの翼

は武器になったのだ。

トライヘキサは俺たちの攻撃を防ぎながら、刃となった翼を軽く振るう。俺たちは紙一重でそれを避けたが、余波だけで空気を切り裂き、結界を揺らしていた。

俺たちは一旦別れて間合いを開けようとするが、トライヘキサは俺に一気に詰め寄ってくる。奴の乱打を避け、翼による剣撃を避け続け、カウンターでアロンダイトを振り抜くが、翼で止められた。

トライヘキサはそのまま俺の腕ごとアロンダイトを翼で縛りあげ、離れられないようにすると、そこに拳を放ってくる。が、俺はそれを展開している悪魔の翼とは別に、新たに展開したドラゴンの翼で受け止める。鈍痛が翼を伝って流れてくるが、耐えられないわけではない。

トライヘキサがそのまま連続で拳を放とうとしてくるが、両腕から魔力を放って翼を消し飛ばし、口元の兜を一旦解除。離れ際に口から滅びを織り混ぜた深紅の火炎を吐き出してトライヘキサを焼く。

そのまま一旦距離を離し、火炎を振り払って追撃を放とうとしたトライヘキサに滅びの球体が襲いかかり、再び消滅した。

「げほーげほ……っ！ああ、慣れねえもんだな……」

やってみたのはいいが、むせ返っていた。喉を押さえながら痰たんを吐き出すが、何か

引つかかっている気持ち悪さがなかなか抜けない。

俺がそんな事をやっていると、消し飛ばされたトライヘキサが白く発光しながら復活し、再びオーラが高まっているように見える。

今までと違い、倒す度に段飛ばしで強くなつてやがる。俺たちを本格的に脅威と認めて、マジで殺しに来てやがるな。

俺が兜を元に戻しながら目を細めていると、横に兄さんが並んで耳打ちしてきた。

『連絡がきた。そろそろ結果が破れるよ』

「了解。それじゃ、あと何分か粘れば勝ちか」

『（そういうこと）』

俺にも連絡が欲しかったんだが、巻き込まれた俺と突入してきた兄さんとじゃ、連絡の取りやすさが変わってくるか。

俺が一度小さくため息を吐くと、トライヘキサが神速で突っ込んでくる。並みの奴なら反応できずに殺られる所だが、俺たちをそこら辺の奴らと一緒にされたら困る。

突っ込んで来たトライヘキサにカウンターで拳を叩き込んで吹っ飛ばすと、兄さんが間髪いれずに滅びの塊を放って腹に風穴を開けると、今度は俺が飛び出してアロンダイトで兜割りを放って身体を切り裂いた。

まあ、いつものようにすぐさま再生されて乱打が飛んでくるわけなのだが、速度が今

までとは段違いに速い。無理にカウンターを狙わずに回避に徹し、全て紙一重で避ける。翼を刃にして攻勢を強めてくるが、まだ動きが単調で避けやすい。

こちらが注意を引いている間に魔力を溜めていた兄さんはトライヘキサの背後に回ると、俺が離脱した瞬間にそれを解放。トライヘキサは滅びの球体に覆われて姿が見えなくなる。――が、すぐさま自身のオーラで滅びを食い破ると、身体を再生させながら兄さんのほうへと突撃していく。

それを見た俺は背中中の魔力噴出口から魔力を放出してトライヘキサに突貫。無防備な奴の横っ腹に渾身の蹴りを放つ。

蹴りのインパクトの瞬間に滅びを体内に流し込み、身体を内側から消滅させながら蹴り飛ばす。吹き飛ばされたトライヘキサは翼でぎこちなくはあるが体勢を整えると、身体を再生させると同時に右手にオーラを溜め始め、それをこちらに向ける。

俺が回避しようとした瞬間、兄さんが叫ぶ。

『ロイ、境界が破れる！』

「このタイミングでかよ……！」

万が一俺の背後に連合軍が集まっていれば、大打撃を受ける。だが、避けなければ死ぬ。またあれをやるしかねえ！

アロンダイトの刀身を撫でながらオーラを込めていき、血管のような深緑色のライン

を出現させる。先程のように柱から一気に圧縮するわけではなく、最初から全てのオーラを刀身に閉じ込める。

振動による甲高い金属音がアロンダイトから響き始めたら準備は完了。奴が放つよりも早く一気に振り下ろす！

その一撃はトライヘキサと空間を両断し、トライヘキサのオーラを散らすと共に、再び次元の狭間を覗かせた。

空を斬つて残留するオーラを散らすと、突然空にヒビが入り、それが広がっていく。外の連中が頑張ってくれたようで、ようやくここから出られるようだ。

俺が短くため息を吐いた瞬間に結界が砕け散り、外の様子が探れるようになった。五感を研ぎ澄ましてロセたちやリアスたちのオーラを探ると、存外すぐに見つけることが出来た。

あいつらの無事にホツと息を吐くと、俺を悪寒が襲う。反射的にそちらに目を向けると、トライヘキサが再びオーラを溜め始めていた。奴は俺に背を向け、あらぬ方向に手を向けているが、その方向には術式を発動しようとしているロセとジルの姿が！

俺は考えるよりも早く飛び出してトライヘキサに向かう！今あいつらを殺らせるわけにはいかねえ！

瞬時に加速してトライヘキサとの間合いを詰め、背後からアロンダイトで斬りかかる

うとした瞬間、反転した奴と目が合った。同時に腹部に激痛が走る。

「——ぼ……っ！」

『ロイツ！』

兄さんの叫び声が聞きながら、俺は血を吐いて腹部に目を向ける。オーラの込められたトライヘキサの拳が、俺の腹部を貫いたのだ。

—

トライヘキサ捕縛用の術式を発動させようとした彼女——ロスヴァイセは目を見開いてその手を止めた。彼女の目の前で、トライヘキサがロイの腹を貫いたのだ。

「ロイ——」

「心配するのは後だ！術式を起動しろ！」

結界の解除に奔走していたアザゼルが彼女の横につき、肩に手を置く。ハツとして彼に目を向けるロスヴァイセだが、それでもロイのほうに意識が向いてしまう。

心配げにロイのほうに目を向けた瞬間、彼女は覚悟を決めた。

腹を貫かれたロイがトライヘキサを押さえつけ、術式を発動させやすいように彼女のほうにトライヘキサの背中を向けさせたのだ。

同時に彼女の耳元に連絡用魔方陣を展開され、息を絶え絶えにさせながら掠れたロイの聲が届けられる。

『……やれ……やれ……ロセ……！』

「……は、はいー！」

ロスヴァイセが術式を発動させようとした瞬間、トライヘキサはロイの腹から腕を引き抜き、そのまま踵落として海面に弾き飛ばす。吹き飛ばされたロイは海面に叩きつけられ、そのまま沈んでいくが、ロスヴァイセに迷いはない。

彼女とジルは頷きあうと、術式を発動させる！

神々しいまでの輝きが魔方陣から放たれ、トライヘキサに向かう。ロイに気をとられていたトライヘキサは成す術なく光に飲み込まれる。

一瞬の間を開けて光が晴れ、トライヘキサが姿を見せる。連合軍の面々は息を呑んで様子を探り、数秒しても微動だにしないトライヘキサの姿に、ようやく表情が和らぐ。

既に量産型邪龍と偽赤龍帝軍団の全てが撃破され、問題だった二体の伝説の邪龍も現二天龍の手によって撃破された。後は、目の前で無防備な姿をさらしているトライヘキサを倒せば連合軍の勝ちだ。

連合軍のトップの面々がオーラを高め始めるなか、オーラを溜めるアザゼルの横に少し息を切らせたサーゼクスが到着すると、アザゼルは言う。

「ロイは大丈夫なのか!? まあ、あいつのことだから大丈夫だとは思うが!」

『それは信じるしかない! 今は——』

サーゼクスは魔力を練り上げながらトライヘキサに目を向ける。捕縛術式が破れかけているのか、身体が小刻みに震え始めていた。

アザゼルはそれを見ながら舌打ちをすると、連絡用魔方陣を展開して『D×D』のメンバーに言う。

「おまえら! 無理は承知だが、追撃の準備を頼む! 念のためだ!」

『はい!』

『ま、任せてください!……!』

『あと一撃なら、いける……!』

術式の維持をするロスヴァイセを除いた『D×D』の面々が返事をし、イツセーとヴァーリが辛そうでありながらも勇ましく返事をする。

彼らの返事を合図にしたように、トライヘキサへの一斉攻撃が始まった!

様々な神話の神、魔物、妖怪、悪魔、天使、堕天使、人間。連合軍に参加する著名な者たちが波状攻撃を放ち、トライヘキサに再生の隙を与えずに肉体を削り取っていく!

空間が悲鳴を上げ、余波で空が砕け散り、次元の狭間を覗かせる。

全ての攻撃が止み、今の攻撃に参加した者たちが一気に消耗して肩で息をするなか、爆煙が晴れてトライヘキサの姿が露あらわになる。

「——マ、マジかよ……」

アザゼルが絞り出すように漏らした。

そこにいたのはトライヘキサだ。右腕と左足が根こそぎ吹き飛ばされ、六対あつた翼は一対しか残っていない。頭部も半分吹き飛びされ、全ての角が折れていた。

そしてもうひとつ驚くことがあるとすれば、トライヘキサは残った左腕にオーラを溜め、ロスヴァイセを守るように集まった『D×D』ほうに向けていることだ。ロスヴァイセごと彼らを討ち、術式の根幹を崩そうとしているのだろう。

リアスたちはほんの一瞬待避を考えるが、その考えはすぐに捨てる。おそらくトライヘキサを倒せるチャンスはこれで最後であり、それを重々承知していたリアスたちはありつたけのオーラを溜めていく。

先程の攻撃に参加したアザゼルたちではフォローすることはできない。どちらが早いかの勝負だが、その勝敗はアザゼルの目から見ても明らかだった。

「おまえら、待避だ！後は俺たちに任せろ！」

アザゼルがとつさに叫ぶが時既に遅く、トライヘキサがオーラを解き放つ！

『——ッ！』

ように思われたが、そうはならなかった。突如として海面を突き破って放たれた深紅と深緑の入り交じった剣撃により、腕が断ち切られたのだ。

剣撃はそのまま空を覆う厚い雲を切り裂き、空間をも切り裂き、満点の青空に次元の狭間の景色が浮かび上がる。

驚愕する『D×D』の面々の耳に、海に沈んだはずのロイの叫びが届く。

『撃てええええええええええええ！』

『——ッ！』

彼の叫びに答えるように、『D×D』の面々がオーラを解き放つ！先程の一斉攻撃に比べればかわいいものだが、瀕死の獣を追い詰めるには十分すぎる攻撃だ。

満身創痍のトライヘキサは無防備なままそれをくらい、身体を吹き飛びされていく。

そして、全てを終わらせる最後の一撃を放つのは——、

「ヴァーリ！まだ倒れるんじゃないぞ！」

「ふ、キミに言われたくはないな！」

二天龍だ。オーフィスの助けて無限をその力とし、紅と黒が混ざった鎧を纏うイツセーと、同じくオーフィスの助けて魔王としての解放し、白銀と黒の混ざった鎧を纏う

ヴァーリ。

に続く影がふたつ。

「私にもそれやって！ロスヴァイセはそういうの得意でしょ！」

「こちらにもお願いします！」

セラフォルとガブリエルだ。トライヘキサへの初撃に参加して消耗しきった身体に鞭を打ち、息を荒くしながらもロスヴァイセと黒歌に続く。

黒歌とロスヴァイセは領きあい、それぞれに自身と同じものをかける。

それを済ませた瞬間、四人はほぼ同時に海面に叩きつけられ、そのまま潜水していく。

——何としても、ロイを助けなければ。

彼女たちの想いはひとつ。トライヘキサ撃破に繋がったあの一撃を放った彼を助けるまで、彼女たちの戦いは終わっても終われないのだ。

Life 07 帰還

トライヘキサとの戦いが終わり、負傷者の搬送や戦死者の遺体の搬送、もしくは遺品の回収が始まった頃、恋人たちや眷属たちによるロイの搜索はいまだに続いていた。

だが、見つからない。ただですら広い海に約十分前に落ちたのだ、かなり流されているか、沈んでいるだろう。それに加え、トライヘキサの攻撃で島のいくつが消滅してしまっただけで海流が狂ってしまったている。かつてのデータ頼りでは、見つかるものも見つけない。

「くそーどこまで流されたんだよマスターー！」

クリスが海面から顔を出すと、息継ぎついでに愚痴を漏らす。

そんな彼の頭上では、ジルが魔方陣を動かしながら言う。

「最新の海流のデータではこの辺りのはずなんだが……、少し調整しなければ駄目か」

そんなやり取りをしながら、二人はロイを探す。眷属であるアリサも参加するべきなのだろうが、彼女は負傷者の治療に向かっている。回復の力を持つ者は大変貴重であり、あちらこちらから引つ張りだこになってしまっているのだ。

クリスたちとは別に行動し、ロイの落ちた場所の周辺を探すセラフオールたちもま

た、一向に見つからずに焦りを隠せないでいた。

「クリスさんたちのほうも見つからないみたいですね……。ロイさん、いつたいどこに……」

ロスヴァイセが息継ぎをしながらそう漏らした。沈んでいったと予想した彼女はより深い場所を搜索しているが成果なし。魔方陣を使った広範囲搜索も結果は同じだった。

そんな彼女の横に黒歌が泳いでくる。

「手がかり無しで探すのはキツイわね。何かないの？手早く召喚できる術式とか」

「——召喚できる術式……？」

黒歌の提案を復唱するロスヴァイセ。そしてすぐに思い至ったのかハツとした表情を浮かべると、嬉しそうに笑みを浮かべて黒歌の肩を掴む。

「それですよ！それですよ黒歌さん！」

「え？いや、何？何?!ちよ、離して！」

いきなり肩を掴まれ、溺れかける黒歌。泳ぎ慣れていても、いきなり両肩を掴まれれば驚きもするし、泳ぎ中にいきなり硬まるのはかなり危険である。

そんな彼女に構うことなく、ロスヴァイセは言う。

「ドラゴン・ゲート龍門』ですよ！グレンデルの封じられた籠手をつけているんです、きつと呼び出せ

ます！」

「ナイスアイデアだけど、本当に離して！足だけって辛いのよ！って、あんたもよく足だけで平然と泳いでいられるわね！」

かく言う黒歌もしつかりと泳いでいるあたり、何だかんだで鍛えているのだろう。

ロスヴァイセは黒歌から手を離すと、浮遊魔法で宙に浮かび上がりながら言う。

「アザゼル先生を探しましょう！まだ近くにいますはずです！」

「その前に他の連中も呼ばなきや駄目でしょ！いつまでも探させるのも酷にゃー！」

黒歌の叫びを無視する形で飛び出していくロスヴァイセ。残った魔力で身体強化の術式を自分にかけてさらに加速していった。

ヒトは焦ると周りが見えなくなる。ロスヴァイセとて例外では、むしろ色々と真面目な彼女だからこそ余計そうなのかもしれない。

黒歌はため息混じりに翼を展開して飛び上がると、ロイを搜索している面々に連絡を入れ、ロスヴァイセの後を追う。

そんなこんなで数分後。とある孤島の砂浜。

「そういうことなので、アザゼル先生！よろしくお願いします！」

「善は急げよ、早く！」

「私からもお願いします！」

「た、体力お化けばかりにや……」

非常に遅れてかけつけた彼——エリックの視線の先で、なかなかシニールな光景が広がっていた。

アザゼルが全身びしょ濡れの女性三人に詰め寄られ、困り顔になっているのだ。同じくびしょ濡れの一人は疲れきった様子で座り込んでいるが……。

ちなみにだが、上からロスヴァイセ、セラフォル、ガブリエル、黒歌だ。

「どういふ状況だ……？」

エリックがそう漏らすと、彼の後ろにジル、クリス、アリサが現れる。アリサはかなり慌てている様子だが、他の二人は落ち着いたものだった。

「遅かったな。向こうの用事は済んだのか？」

開口一番に問いかけるジルに、エリックは頷いて返すと盛大にため息を漏らす。

「主犯は『D×D』のシトリー眷属とバアル眷属が押さえてくれたんだが、逃げ出した連中がギリギリまで抵抗してくれたからな。おかげで余計に時間がかかった」

エリックはそう言うのと全身びしょ濡れのクリスに目を向け、次に後ろの女性四人に目を向ける。

彼の視線の動きに気づいてか、ジルが口を開く。

「少々面倒な事になっていてね。具体的に言うとなロイが行方不明だ」

「……海に落ちた、いや落とされたか。その様子じゃ、かなり探す回ったように見える」
状況を察したエリックが言うと、ジルは小さく頷く。

「まあ、彼のことだから生きてはいるだろう。どこにいるかがまったくわからないが……」

「だから召喚しよってことだ。初めからすれば良かったな、まったく思い付かなかったが」

クリスのため息混じりの言葉に、アリサがやる気十分といった表情で答える。

「大怪我していても、私何がなんでも治します。そのための神セイクリッド・ギア器なんですから」

「「珍しくやる気だな」」

「……私の評価っていったい……」

チームメンバー三人からのツツコミに露骨にショックを受けるアリサ。この状況でも冗談を言い合う辺り、慣れているのだろう。

彼らのやり取りをよそに、ようやく話を理解したアザゼルが言う。

「わかった。処理もようやく落ち着いてきたんだ、やってみる」

「早く！ロイがどんな状態なのかもわからないんだから！」

アザゼルの首根っこを掴んで前後に揺さぶるセラフオルー。そのせいで作業に入れないことを理解できていないようだ。

そんなセラフオルーをジルたちが一旦引き剥がすと、アザゼルは一度咳払いをして『ドラゴン・ゲート龍門』を展開する。

「アーシアみたいに契約をしているわけじゃないからな、多少だが時間がかかるぞ」
そんな前置きをしておきながら、まばた瞬きする暇もなく『ドラゴン・ゲート龍門』は深緑色の輝きを放ち始める。

アザゼルの神がかった操作により、グレンデルのオーラを手繰り寄せたのだ。

息を呑むセラフオルーたちの横で、ガブリエルが両膝をついて静かにロイの無事を祈り始める。

数秒の間をあけて、『ドラゴン・ゲート龍門』の輝きが一層強くなり、一気に弾ける。同時に大量の砂塵が舞い上がり、セラフオルーたちの視界を塞ぐ。

とっさに腕で顔を庇った彼女たちは咳き込みながらもその砂塵の奥に何かの影を見つける。砂塵が晴れ始めると共にそれが何かかわかり始める。チラチラと見えるそれは剣であり、それを握る黒い籠手に包まれた右腕も見え始めた。

セラフオルーたちの表情が和らぎ、アザゼルもホッと息を吐く。

時間はかかってしまったが上手くいった、これで彼を助けられる！

彼女たちの想いはそのひとつだった。彼に何をするか、何をしてもらうかなども考えるが、今は治療が最優先だ。生きていなければ、何も出来ないのだから。

セラフォルーたちが駆け寄ろうとした瞬間、突然の突風で砂塵が完璧に吹き飛んだ。そして、彼女たちの表情が一気に青ざめ、硬直した。

確かに『龍門』^{ドラゴン・ゲート}による呼び出しは成功した。ひとつ計算違いがあるとすれば、ロイトグレンデルの癒着が完璧ではなかったことだ。

ロイトグレンデルの意志を封じ込めることは成功した。だが、完全に吞み込まれた右腕はともかく、その他の部員はまだ繋がりが中途半端だったのだ。そのせいで起こってしまった悲劇。

狼狽える面々をよそに、セラフォルーは一切の覇気を感じない瞳でそれを見つめる。

「……………どう……………して……………」

絞り出すようにそう訊くが、答える者は誰もいない。

セラフォルーはその目の前に来ると両膝をつき、涙を流しながら黒い籠手に包まれた右腕を優しく撫でる。

「……………どうして、あなたは……………」

『龍門』^{ドラゴン・ゲート}を通過してきたのは刀身がボロボロになったアロンダイトと、彼の右腕だけだ。二の腕の中間ほどから千切れたように切断されているが、海の中をかなりの時間

漂っていたのか、流れ出る血も残っていない。

「……誰かの命を優先するのよ……!」

崩れ落ちる彼女の言葉は届かない。届くこともない。

この瞬間、ロイ・グレモリーの戦死はほぼ間違いないとなってしまう。生存も、召喚の成功も絶望的。

その事実を突きつけられ、ロスヴァイセは耐えきれずに崩れ落ち、黒歌は流れ出る涙に耐えながら天を仰ぎ、ガブリエルは涙を流しながら静かに祈る。彼女たちの後ろのロイの眷属や同僚たちは、静かに敬礼する。

トライヘキサ撃破の代償はあまりに大きかった。各神話の神の一時的な消滅や地形の変化、そして散っていった多くの戦士たち。

それでも、世界は平和になったと言われるだろう。戦いは終わったと言われるだろう。遺された者たちの想いを置き去りにして、理解しようともせずだ。

——平和というものは、多くの犠牲の上に成り立っているのだ。

10st01 遺された者

リゼヴィム率いた『クリフオト』とのアグレアスでの最終決戦。

伝説の邪龍二体とトライヘキサの核コアが率いた邪龍軍団との日本近海での最終決戦。

このふたつの戦いは『邪龍戦役』と呼ばれ、連合軍の、特に『D×D』の健闘でリゼヴィムは捕らえられコキュートス送りに、伝説の邪龍二体は消滅、トライヘキサも撃破された。だが、それでも割りに合わないほど多くのものを奪っていった。

それでも一部の者たちは『最終手段』をおこなっていけば、さらなる被害が出ていただろう」と発言している。

確かに彼らの言うとおりだろう。現在発見されている戦死者に加えて『最終手段』——各神話の実力者たちがトライヘキサの隔離空間に引きずり込み、倒せるまで戦い続ける——をしていれば、各神話の政治的な被害はさらに広がっていたに違いない。

だが、遺された者たちはそんな意見などどうでもよかった。『最終手段』をやるうとやらないと、自分が愛した者が、信頼した者が逝ってしまった事実に変わりはないのだから。

だからなのだろうか、『最終手段』に参加する予定だった神々は遺された者たちに今ま

でないほど気をかけ始める。彼らが死んでいった者たちの後を追わないようにするためというのが大きな理由だが、神々としても珍しく何かしなければと思つたのが大きいのだろう。それは三大勢力もそれと同じ事だ。

だが、ひとつ大きな違いがあるとすれば、本来周りを気にかける側であるはずの悪魔たちのトップである魔王——セラフォル・レヴィアタンと、天使たちのトップであるセラフ——ガブリエルが気にかける側になつてゐることだろう。

彼女たちだけではない。ロイ・グレモリーの恋人であつたロスヴァイセと黒歌も例外ではなく、四人は度々カウンセリングのようなものを受けることもある。本人たちは強がつて平静を装つてゐるが、それが限界であることを知らせてしまつてゐる。

ロイの眷属であつたクリスとアリサは、再びアジュカの保護下に戻ると与えられた仕事をこなししていく。まるで、彼の死を気にしないようにするように、必死になつてだ。彼らほどショックを受けてはいないにしろ、同僚であるジルとエリックも同じようなものだった。仕事から、彼ら以上に二人は誰かの死に慣れてしまつてゐるのだろう。

彼らだけではない、ロイの家族や仲間、親友であるヴィンセント・フェニックスも同じようなものだ。メディアの幹部として、邪龍戦役の勝利を大々的に伝えたが、親友としてはあまり喜ぶことは出来ずにいた。

ロイは確かに世界を救う一因になつたことは確かだ。しかし、彼の周りには彼のこと

を想う者が多すぎた。

彼は彼らがこうなることをわかっていながらもその命を懸けたのか、わからないまま命を懸けたのか、それを知る者はいないし、誰も知ることはできない。

邪龍戦役終結の一週間後。冥界某所。

「——なるほど、アポプスがそう言ったのか」

彼——サーゼクスは相づちをいれながら、対面する形で席につく男に視線を向ける。

「あの野郎が確かに言ったんだよ。《異世界から来た者よ》ってな。まあ、そう言った当の本人はイツセーに倒されて消滅、言われたロイも……な」

男——アザゼルは後半から少し悲哀を込めた声音でそう言った。

一通りの戦後処理が完了したアザゼルは、サーゼクスの元を訪れていた。先程の言葉の通り、ロイの真実を知るためだ。

話題の関係上、いまだに彼の死から立ち直れない恋人たちには気づかれないよう細心

の注意を払い、その場にいたヴァーリを同行させていた。彼はアザゼルの後ろに控えているだけだが。

そんな二人に対して、サーゼクスは重い口を開ける。

「……真実だよ。何百年も前にロイから話を聞いたさ」

懐かしむようにそう言うサーゼクスに、アザゼルは小さくため息を吐き、ヴァーリは腕を組んで瞑目した。

サーゼクスは続ける。

「ロイからは『話せるタイミングが来るまで待っていてくれ』と頼まれていたんだが、まさかこうなるとはね」

「それは仕方がないとして、それを知っているのは何人いるんだ？おまえら魔王だけってわけでもないんだろ？」

アザゼルの問いにサーゼクスは頷き、言葉を続ける。

「ああ、母様と父様も知っているとも。だが、グレイフィアには話していない。ロイが個人的に話していれば、僕でも気づくよ」

「つまり、知っていたのは六人だけか。まあ、余り広めないで正解だったな。広まっていれば、確実にあいつは『異物』として処理されてもおかしくはなかっただろうよ」

アザゼルが言うように、ヒトとは自分たちとは違った何かを恐れるものだ。特に、自

分たちの常識が通じない本当の意味での未知なるものには。

そういう意味では、それを受け入れたグレモリー夫妻や魔王たちは相当器が大きいのだろう。彼らからしてみればロイはロイであり、大切な家族仲間だ。

ヴァーリが組んでいた腕を解きながら言う。

「それで、この話は他の『D×D』のメンバーにはどう伝える。俺たちだけではなく、黒歌も聞いてしまっているが……」

ヴァーリの最もな意見に、アザゼルは少し考えると口を開く。

「……止めておこう。死んじまった奴の秘密を伝えるつても酷だ。黒歌には、向こうから訊いてきたら答えてやる程度にしておくか」

アザゼルの意見に頷くヴァーリと、「ありがとう」と手短かに伝えるサーゼクス。彼らの気遣いがどうなるかはわからないが、今はこうするしかない。

アザゼルは二人に頷き返すと、サーゼクスに訊く。

「――で、おまえはともかくセラフオールはどんな様子だ？」

その問いかけに、サーゼクスは心配そうな声で返す。

「……かなりの無理をしているが、本人は休む気がなくてね。あれからずっと仕事をしているさ」

「やはりか。ガブリエルもそんな調子らしい……。ロスヴァイセもいちおう教師の仕事

に戻ったが、ボケっとしている時間が目立つ」

「黒歌はそこまでは変わらないが、よく思い詰めた表情になるな」

アザゼルとヴァーリの言葉にサーゼクスは小さくため息を漏らす。弟が遺していった恋人たちは、そう簡単には彼の死を乗り越えることは出来ないだろう。セラフォルーに関してはロイに軽く依存していたほどだ。彼女はなおさらだろう。

アザゼルが続ける。

「リアスたちは何とかって感じだな。無理はするなどは伝えたが……」

「すまない、何から何まで任せてしまつて」

「気にすんな。今の俺の立場上、それぐらいしかしてやれねえ」

今のアザゼルは『総督』ではなく『駒王町の監督』であり『特別技術顧問』だ。サーゼクスに比べれば周りを気にする余裕があり、リアスたちのフォローに回っていた。

二人がそのやり取りをしていると、ヴァーリが口を挟む。

「黒歌は俺たちでもフォローしてみろさ。美猴が変に煽らなければいいのだが……」

小さくため息を漏らすヴァーリ。彼も彼なりにチームのことを思い、不器用ながら黒歌のことを救おうとしているのだ。

「さて、ここからは込み入った話になる。ヴァーリは戻ってくれて構わねえよ」

「そうか。ではな」

ヴァーリは手短かに返して退室していく。彼がいなくなったことを見計らい、アザゼルはもうひとつの話題に入る。

「それで、『王』の駒キタに関わった連中は更迭するんだろ？」

「そのつもりさ。その後のことも、アジユカたちとは話を済ませてある」

サーゼクスの返しにアザゼルは頷く。凝り固まった思考の悪魔の上層部連中が変わっていけば、少しはマシな方向に進んでくれるだろう。

「あいっただけじゃない。あの戦いで死んじまった連中のためにも、少しはマシな世界にしてやらねえと」

「そのセリフだけだと危険な奴だと思われてしまうよ？」

茶化すサーゼクスを軽く睨みながら、アザゼルは盛大にため息を吐くが、不敵に笑む。

「今から悪いイメージをどうこうなんて思っちゃいねえよ。悪なりに頑張ってみるさ」

「……本当に大丈夫なのか……？」

なぜかやる気のアザゼルに若干引き気味になるサーゼクス。アザゼ尔的にはサーゼクスを励ますついでに遊びを入れているだけなのだが、彼は真に受けてしまったようだ。

アザゼルは一度咳払いをするとサーゼクスに言う。

「——これからが大変だろうな。おそらく、噛みついてくるぞ」

「予想は出来ているさ。彼らをどこかの神が煽る可能性も含めてね。だが、どうにかするしかない。たとえ、さらに血が流れたとしても」

アザゼルはサーゼクスの覚悟を込めた目を見ると、小さく笑う。

「ま、何かあっても多少は手伝ってやるさ。ようやく勝てたんだ、何がなんでも守らねえとな」

「すまない、何度も迷惑をかけてしまつて……」

「謝りすぎだ。聞き飽きたつての」

二人がそんなやり取りをしていると、ふとサーゼクスが訊く。

「そう言えば、リリス——オーフィスの半身の少女がどこに行つたかはわかつたのか？」

「いや、まつたく。ロイと一緒にグリゴリの施設に来たんだが、あのあといなくなつたきりだ」

さらなる話題。オーフィスの半身の少女——リリスの行方だが、これを知る者はこの部屋には誰もいない。

時を同じくして、次元の狭間。

真つ赤な大地に大量の鎌が突き刺さり、その持ち主だった者たちの亡骸とその中身が辺り一面にぶちまけられていた。

《ま、待て！待ってくれ！た、頼む、命だけは！》

『……………』

黒いローブを纏い、意匠の凝った仮面をつけた男——おそらく上級死神は、目の前で『深紅の槍』を握る黒い霧もやに包まれた誰かに無様に命乞いをしていた。

霧は器用に槍をくるくる回転させると、その切っ先を死神の首に向ける。

《ひっ！》

死神は怯えながら目を凝らす。その瞬間、彼は目を疑った。霧の姿が筋肉質な男になり、瞬きをすれば華奢な女に、幼い子供に、よぼよぼの老人に変わっていくのだ。

《き、貴様、なに——》

死神の言葉は続かなかつた。言い切る前に槍で喉を貫かれ、そのまま自身の身体から漏れでた深紅の輝きに呑みこまれると、抵抗も許されずに消滅してしまう。

大きく息を吐くと同時に霧が晴れ、中にいた男が姿を現す。

鮮やかな短い紅髪に、暗いながらも確かな意思の籠った黒い瞳、そして綺麗に整った

顔。町ですれ違えばだいたいのヒトが振り向くであろう、いわゆるイケメンという面構えだ。ただし、上半身裸である。

彼は自分の手を開いたり閉じたりしたあと、周りの惨状に目を向ける。――が、興味なさげにそれらを一瞥して視線をある一点に向けた。

真つ赤な大地にある小さな窪み、そこから少女が顔を出す。

「……おわつた？」

「ああ……」

少女の確認に男は頷き、手元の槍を消す。

ホツと息を吐い窪みから飛び出し、駆け寄つて来た少女の頭を撫でながら、男は心中で呟く。

『俺は誰だ。この胸のなかにくすぶ燃る想いは何だ』

「……ロイ？」

「いや、何でもない」

少女――リリスに『ロイ』と呼ばれた男は優しく笑みながら彼女の頭を撫でながら言葉が続ける。

「今はキミがいてくれるだけで十分だよ」

「ほんと？」

「ああ、本当だ」

ロイの言葉にリリスは嬉しそうに笑み、ロイも笑みを浮かべる。

そんな二人のやり取りを間近で聞いている巨大な影。というよりも彼らが立っている真つ赤な大地の正体であるドラゴン——グレートレッドは二人に気づかれないうにため息を漏らす。

『こいつら、他人の背中の上で好き勝手やりよつて』

言葉には出さず、ただ心中で愚痴る。

それを知らない二人はいまだにじやれあっているわけだが、唐突にロイは大きく息を吐くと寝転んだ。万華鏡を思わせる次元の狭間を見上げながら、彼は再び考える。

『俺は誰だ。この胸のなかに燻る想いは何だ』

それは全くわからないが、とロイは思考を切り上げると自分の横に寝転んだリリスに目を向ける。

『この子を守らなければ。理由はわからないが、それが俺の役目なんだろう』

胸の中でそれを確認しながら、襲ってくる眠気に身を任せ始める。

——死してなお罪は消えず。過去を失ってなお罪は消えず。抗え、償えと何かが叫ぶ。その叫びが届いていなくとも、止むことはない。

何もかもをなくした男がその叫びに気づくのは、血にまみれる戦いの中か、誰もが望

む平和の中か、それは彼を含めた誰にもわからない。

だが、彼の知らぬところで戦いは始まろうとしていた。一方的な憎しみによる同族同士の戦いが、決して相容れぬ存在との戦いが、始まろうとしているのだ。

学年末のフアントム

lost01 変わってしまった日常

『邪龍戦役』から一ヶ月以上が過ぎた頃。

俺——兵藤一誠をはじめとした『D×D』メンバーは、少しずつだけロイ先生の死を受け入れ、乗り越えようと頑張っていた。

学年末テストを終えた俺は、力尽きて机に突っ伏していた。

「あー、やっと終わった……」

今年に入ってから色々あったあげく、その最後にあんなことになってしまつて、余計に勉強に手をつけられなかった。けど、まあ、どうにかなつた。

俺が燃え尽きてポケツとしていると、アーシア、ゼノヴィア、イリナの三人が歩み寄つてきた。

ゼノヴィアが言う。

「いろいろあつたせいで、勉強が疎かになつてしまった。生徒会長として、少々不甲斐ない」

「学生生活との両立だもの、仕方ないわ。けど、とりあえずはお疲れさまつて感じ」

イリナが俺の肩を揉みながらそう言った。俺が「あく」と唸っていると、アーシアが言う。

「けれど、私は楽しいです。毎日が本当に……」

少し悲しげに言うアーシア。あの戦いはどうにか勝てたが、失ったものも大きい。多くのヒトが亡くなって、多くの自然が破壊された。何もかも上手くはいかないものだ。

俺たちからしんみりとした空気が漏れるなか、後ろから近づいてきた誰かにアーシアの両頬が引つ張られる。

「なーに、しんみりしてんのさ。山張り間違えちゃった？」

なんて気軽に声をかけてきたのは、アーシアたちとも仲の良い眼鏡女子の桐生だ。女子ではあるが、俺が認めるほどスケベだったりする。あと、俺たちが悪魔であることを知っている数少ない人物だったりもする。

「うう、ひつはらないでくらはい……」

アーシアが若干涙目になり始めると桐生は手を離す。

桐生はいたずらっぽく笑みながら謝る。

「あはは、ごめんごめん。ま、アーシアちゃんは山張らないで全部がんばるタイプでしょ？あのバカどもと違って」

「誰がバカだ！」

桐生が指差した先にいた二人、俺の悪友である眼鏡男子の元浜と丸坊主男子の松田が軽く怒鳴りながらこちらに詰め寄ってきた。

「反応したってことはバカの自覚ありってことね」

「ぐっ……」

桐生の返しにあっさり沈められる二人。こいつらはぶれないと言いますが、単純と言いますか……。

俺が苦笑していると、真っ先に復活した元浜が訊いてくる。

「……そ、それはそれとして、ロイ先生に何かあったのか？いきなり学校辞めるなんて、思いもよらなかつたぞ」

「人気あつたからな、ロイ先生。厳しいけど、その分面倒見良かったし……」

二人の言葉に真実を知る俺たちは固まってしまふ。

表向きは『とある事情で教師を辞めた』ということになっており、この学園の生徒にはそう伝えられている。だが、実際は……。

真実を知る俺たちの表情が思わず暗くなるなか、桐生が空気を変えるために明るく努めてくれた。

「ほ、ほら暗くならないの。また会えるかどうかはわからないけど、あんたたちがそんなんじゃない、ロイ先生が帰って来た時に驚いちゃうわよ」

「……ああ。そうだよな……」

俺は無理やり笑顔を作って頷く。あのヒトの分もしつかりしないと、笑われちゃう。俺たちがどうにか表情を明るくしていくなか、元浜が言う。

「ところで、ロスヴァイセちゃんは大丈夫なのか？　なんか、最近ポケッとしている気がしてならないんだが」

「周りの連中も良く言っているよな。見ていて危なっかしいとかなんとか」

話題はロスヴァイセさんのものに変わる。あの戦いから、ロスヴァイセさんは物思いにふける時間が多くなってしまっている。授業の小テスト中とか、ポケッとしているのだ。

「ロイ先生とロスヴァイセさんは、まあ、個人的な付き合いとかもあつたらしいから……」

俺が周りを気にしながら小声で言う、二人はなぜか納得したように頷いた。

「事情ってそういうことか……」

「なるほど、それなら……」

「お、おい。いきなりどうしたんだよ？」

俺が訊いてみると、松田が言う。

「ほら、教師って仕事柄、そういうのはうるさいだろ？」

「つまり、そう言うことだな」

二人はロイ先生とロスヴァイセさんが何かしらしたと思っているのか。まあ、教師同士が結婚したら、片方は別の学校に行かなきゃならないとか何とか聞いたことがあった気がする。そう思ってくれていたほうが、まだ楽かもしれないな。

ロスヴァイセさんが立ち直るのは、もつと時間がかかるかもしれない。今はどうにか耐えている感じだ。

ロイ先生、何で死んじやったんですか……？あなたが死んじしまつて、俺たちはどうにも落ち着きませんよ……。

時間が変わって深夜の旧校舎。

部活動を無事に終え、俺たちはいつも通り悪魔業をすることになった。アザゼル先生は用事があるとして冥界に行ってしまった。

「……はあ」

何も無い待機時間。手持ちぶさたの俺は思わずため息を吐いてしまった。

理由としては単純で、俺に上級悪魔への昇格の話が来ているのだ。こんなタイミングで、そんな話をされてもあんまり実感湧かないし、素直に喜べない。アザゼル先生は、

『いきなりすぎるのは承知だが、この前の戦いで各勢力が大打撃を受けたからな。冥界も、早めにその穴を埋めたいんだらうよ』

と言っていたけど、それで「わかりました」とすぐに頷けるほど俺も単純ではない。なれるのは嬉しいし、リアスたちも喜んでくれるだろう。だけど……。

俺が一人考えこむなか、前にリアスから言われた事を思い出す。

『イツセー、考えるも大事だけれど、覚悟を決めたほうがいいわよ。あなたが上級悪魔になると知って、色々なヒトから接触される筈よ。私の眷属としてではなく、あなた個人にね』

リアスの眷属としてではなく、俺として見られるようになる。そして、色々なヒトが会いに来る。しばらくは悩みの種は消えそうにないな……。

書類に目を通していたリアスが不意に部屋を見渡す。暇をしているのは俺とゼノヴィア、イリナぐらいだ。誰かを探しているようだが……。

「どうかしたの?」

「いえ、ロスヴァイセはまだ戻らないのね」

俺の問いかけにリアスはそう返した。そうか、ロスヴァイセさんがまだ来ないのだ。部活の時間はしっかりいたのだが、終わって早々にどこかに行ってしまった。けど、どこに行っただのかはわかってる。

ゼノヴィアが小さく息を吐くと、少し悲哀を込めながら言う。

「毎日欠かさず祈りを捧げにか。主に仕えた身としてはわかるが、何とも言えないな……」

俺たち異形は死んでしまったら、魂はどこにも行かずに消滅してしまう。何も感じず、何も出来ない、文字通りの無になってしまうのだ。

それでも、ロスヴァイセさんはロイ先生の冥福を祈りに行っている。そうでもしないと、きつとダメなんだろう。

俺たちの間にまた暗い空気が流れ始めるなか、仕事に行った木場たちが戻ってくる。それを確認したリアスがひとつ咳払いをして優しく笑みを浮かべる。

「みんな、お疲れ様」

リアスのその一言を皮切りに、再び部室が賑やかになり始めた頃、リアスの耳元に連絡用の魔方陣が展開された。そのまま彼女は二三やり取りをすると、一度頷く。

「——仕事よ」

リアスの一言に俺たちは表情を引き締める。

あの戦いが終わっても、俺たち『D×D』の仕事は終わらない。まだ、テロは続いているのだから——。

冥界グレモリー領。

日本の本土とほぼ同じ面積ほどある領土の、とある山の頂上。地平線までが一望できるそこにロイ・グレモリーの墓があつた。

西洋風の墓に彼の名が刻まれ、その下にはグレンデルを引き剥がし、元の姿に戻った彼の右腕が埋葬されている。墓石の後ろには彼の最期まで共にあつた聖剣アロンダイトが地面に突き刺さっている。

彼の墓の前には花が供えられており、それを供えたであろうスーツ姿の女性が両膝をついて座り、顔の前で両手を握りながら静かに祈っていた。その女性——ロスヴァイセは毎日欠かすことなく、彼の墓参りに来ていた。

最初の頃こそ来る度に涙を流していたものの、今ではある程度の落ち着きを取り戻した。だが、それでも涙を流さないように耐えるのに必死だった。

祈りを捧げていたロスヴァイセは、背後に気配を感じとり一度祈りを中断して振り返る。そこにいたのは亜麻色の髪の女性、ロイの母親であるヴェネラナ・グレモリーだ。

ロスヴァイセは彼女の登場に驚きながらも目元の涙を拭い、立ち上がる。

「ご、ごきげんよう、ヴェネラナ様」

「ごきげんよう、ロスヴァイセさん」

手短に挨拶を済ませると、ヴェネラナはロスヴァイセの横につくと持っていた花を墓に供える。

「ありがとうございます。この子の事を想っていただけで」

「いえ、そんな……。私にはこれくらいしか出来ませんから……」

ヴェネラナの言葉に申し訳なさそうに返すロスヴァイセ。だが、ヴェネラナは優しく笑みながら言う。

「それでもです。私は毎日来てあげられませんから……」

少し悲哀の色を帯びた瞳で、彼女の息子の墓に目を向ける。

ロスヴァイセが何も言えないでいると、彼女の耳元に連絡用魔方陣が展開されると一方的に情報が伝えられ、魔方陣が消える。

それを受けたロスヴァイセは一度深呼吸をすると、覚悟を決めたようにヴェネラナに言う。

「行つてきます。まだ、終わっていませんから」

そう言うのと駆け出していくロスヴァイセ。彼女の背中を見送ったヴェネラナはバカ

な事をした息子を説教をするように、だがそれ以上に悲哀を込めながらぼそりと呟く。

「やはり、良いヒトですね……。彼女の事を幸せにしてあげなさいよ、まったく……」

彼女は言葉に返す者はいない。ただ、冥界の優しい風が吹くだけだ。

ヴェネラナは一度息を吐くと、墓の前で両膝をついて祈りを捧げる。

——願わくば、あの子にもう一度だけ、どこかで生きる機会がありますように……。

悪魔ではあるが、子を想う気持ちは人間と変わりはない。

——また別の人生を、出来ることなら平和に生きることの出来る機会をどうか……。

一人の母として、息子の未来を願う。今の彼女にはそれが精一杯だ。ロイの遺していった恋人たちを、妹たちを、仲間たちを、今を生きるヒトたちを支えていかねばならない。

ヴェネラナは静かに覚悟を決め、ロイの墓を後にしたのだった。

俺——兵藤一誠をはじめとしたオカ研メンバー（客分であるレイヴェル、別行動中の

ロスヴァイセさんを除く）は、とある都市の郊外にある廃ビルを見上げていた。

パツと見た感じ、十何階とかありそうな高層ビルだが、色々とあつたんだろう。今はヒトの気配はない。

リアスが周囲を見渡しながら言う。

「周りへの被害を考えると、下手に大技は使えないわ。特にイツサーとゼノヴィアは気をつけて」

「はい」

「わかった」

リアスの注意に頷く俺とゼノヴィア。下手にやつてこのビルを倒壊させようものなら、周りへの被害が大変なことになってしまうだろう。

今から俺たちはロスヴァイセの合流を待つて、このビルに攻め込む。——と言ったら人聞きが悪いが、実際にそうなのだ。

『邪龍戦役』の戦後処理が一段落すると、サーゼクス様とベルゼブ様が中心となってレーティングゲームの不正に関わったヒトたちの一斉摘発をおこなったのだが、それで摘発された一部のヒトたちがテロ行為を始めたのだ。

あの戦いで死んでしまったヒトたちを、ロイ先生を侮辱されているようでムカつくけど、この怒りは抑えておかないと、たぶんビルを吹き飛ばしてしまう。

俺が自分を落ち着かせるように深呼吸していると、リアスが情報を確認する。

「私たちはこのビルから関知されたという不審なオーラの確認、テロリストならこれを排除することになるわ。周りは墮天使のエージェントが固めてくれているそうだから、万が一に撃ち漏らしてもそう簡単には逃げられないはずよ」

もしかして、アザゼル先生がいなかったのってこの手引きをしてくれていたからなのかな？ だとしたら感謝しないと。

リアスが腕時計を確認しながら言う。

「そろそろロスヴァイセが戻ってきてても——」

ドゴオオオオオオオオンツ！

『ツー！』

突如の爆発音に身構える俺たち。見上げてみると、ビルの上の階から大量の煙が舞っていた。さらに目を凝らしてみると、そこから何かが落下してくる！

俺たちがその場を飛び退くと、それが地面に叩きつけられる。

「ああ、いてえ……、いてえよお……」

そう呻きながら、黒いローブを着た男性悪魔が立ち上がるようにするが、その男性を上から降ってきた数本の矢が身体を貫く！

俺が素早く真紅の鎧（前の戦いの影響なのか、呪文無しで纏えるようになった）を纏

うなか、リアスたちが防御の体勢に入る。

「があ……！」

男性悪魔が苦悶の声をあげた瞬間、再び降ってきた矢に頭を貫かれた。貫いた矢は役目を終えたからか、塵になって消える。

動かなくなる男性悪魔。リアスが俺たちに向けて一度領くと同時に翼を展開、俺もアーシアをお姫様抱っこして翼を展開、みんな一斉に飛び立つ。この間に攻撃が来そうなものだが、特に何もなく俺たちは上昇していく。

急な反撃に備えて爆発の起きた階のひとつ下に降り立つと、気配を殺して素早く陣形を組み直して上を目指す。

上を目指すなか、何かの戦闘音が俺たちの耳に届いた。ヒト同士ではそう簡単には出ないような激しく、それでいて重い音が連続していく。

音を頼りに階段に駆け上がり、爆発の起きた階に到着してみると、俺たちは驚愕した！先程の爆発のせいなのか、柱を残してほとんどの壁が吹き飛ばされ、大量の瓦礫が床に散乱しているのだ。

警戒しながら音を頼りに進んでいくと、ピタリと戦闘音が止む。戦闘が終わったのか、こちらに気づいて中断したのか、どっちだ？

さらに奥に進んでいき、ようやく音の発生源に到着。残っていたであろう柱も砕か

れ、大量の血が床にぶちまけられているのだ。

そして、その血溜まりの中央に立つ血塗れでマントを思わせるぼろぼろの黒い外套を身に纏い、フードを目深に被っている男性がいた。腕には金属製と思われる簡単な手甲がつけられており、吸い込まれそうなほど鮮やかな深紅の太刀が握られている。あの色を見るとロイ先生の事を思い出してしまいが、今は目の前のことに集中しないと……。

俺たちが身構えるなか、男性がため息を漏らす。

「増援、か。まったく面倒だな……」

……今の声、何となく聞き覚えがあったような……。

リアスたちもそう思ったのか眉を寄せているが、男性が太刀を構えながら言う。

「まあいい。やることは変わらねえ」

そう言いきった瞬間、男性のオーラが爆発的に上がる！身体から漏れでたオーラに当てられて、大量の塵が舞うほどだ！

自身の姿を隠すほど待った塵を切り裂き、そこから現れたのは、

『——あの子は渡さん……！』

ヒトを形作る黒い靄の塊だ。外套の形に添うようにも靄が掛かっているため、一目ではヒト型とはわかりづらいが、人間で言う目に当たる部分が怪しい紅の色になっているので、何となくどこがどの部位かっるのがギリギリわかる。

だが、「あの子」って誰のことだ？俺がそれを問おうとした瞬間、男性の姿が消える！
ドゴンツ！

重い音と共に俺の腹部に衝撃が走る！それを認知した瞬間、何かに弾き飛ばされたように吹っ飛ばされた！

「が……！」

柱に叩きつけられ、一気に吹っ飛ばされた勢いをなくした俺は、自分の腹を見る。完全に鎧が砕かれてはいるものの、そこまで問題はなさそうだ。

俺は簡単な確認を終えると、先程までいた場所に目を向ける。

そこにはいつの間にか両腕に深紅の籠手を装着し、拳を振り抜いた体勢の男性が立っており、リアスたちを一瞥する。

『……どこからでも来い』

どこか冷たいながらも確かな覚悟に満ちた声で、俺たちに告げてきたのだ――。

l o s t 0 2 邂逅

『……どこからでも来い』

俺——兵藤一誠をはじめとしたグレモリー眷属に、黒い靄がそう告げた瞬間、木場とゼノヴィアが飛び出す！

まさしく神速と呼べるであろう速度だが、黒い靄は二人の一撃を深紅の籠手で受け止めた！

『いい速度だ。だが、まだまだだな！』

黒い靄はそう言いながら二人を押し返すと、追撃として回し蹴りを放つが、二人は余裕でそれを避ける。

黒い靄が体勢を整える前に闇の獣となったギヤスパーが飛び出していき、続いて俺も一気に飛び出す！

《この！》

「オラッ！」

俺とギヤスパーの乱打で一気に攻め立てていくが、黒い靄は完全に動きを読んでいるかのように体捌きだけで避け続けてしまう！

「二人とも、下がって！」

《「ッ！」》

リアスの指示に俺たちは瞬時に反応して飛び退くと、そこにリアスの滅びの魔力と、朱乃さんの雷光が放たれる！

黒い靄は再びそれを籠手で受けるが、反動で後ろに弾き飛ばされる。今ので焦げたのか、籠手から煙が出ているが、本体にはダメージはなさそうだ。

黒い靄が籠手に目を向けている隙に、イリナが飛び出し、白音モードの小猫ちゃんが火車を放つ！

イリナのオートレクルと光の鞭によるラッシュを余裕で避けながら、次々と火車を殴り壊していく！

黒い靄は最後の火車を破壊すると、オートレクルと光の鞭を掴んで受け止め、そのままジャイアントスイングの要領でイリナを投げ飛ばす！

「キャー！」

「イリナ！」

「こちらに飛んできたイリナを受け止め、そのまま床に降ろしてやる。」

「ご、ごめん………」

「気にすんな！だけど………」

立ち上がりながら謝るイリナに、俺はそう言いながら黒い靄に目を向ける。

『……………』

小さく顔を動かして左右を警戒する黒い靄。木場やゼノヴィアのスピードにも対応出来ることは、俺やギヤスパアのスピードじゃ足りない。もっと連携して手数で勝負するべきか……。

俺たちが目配せをして合図を取り合った瞬間、黒い靄が軽く右手を風ぐ。同時に深紅の籠手が長柄の槍に変わった!?

『ふうふううう……………』

黒い靄がゆつくりと息を吐きながら体勢を低く構えると、俺たちの視界から消えた!俺が警戒を深めた瞬間、甲高い金属音が響き渡る!そちらを見ると、木場が聖魔剣で深紅の槍をギリギリで受け止めていたのだ!

ま、まったく見えなかったぞ!?!狙いが木場じゃなきや、今ので誰かがやられていたかもしれない!

黒い靄はそのまま深紅の軌跡を残す連撃で木場を攻め立てる!木場はギリギリで反応しているが、少しずつ押され始め、いつ当たってもおかしくはない!

俺は背中の魔力噴出口から魔力を吹き出させて一気に加速、そのまま黒い靄の背中に拳を放とうとするが、

ゴッ！

「な………に………！」

振り向くことなく放たれた黒い靄の後ろ蹴りが、寸分の狂いなく俺の腹部を捉えたのだ！

突撃の勢いで余計にダメージが多いこともあつてか、思わず膝をつきそうになると、黒い靄は木場に打ち込んでいた槍を風呂敷つて俺を弾き飛ばす！そして、再び背中から柱に激突してしまった。

だが、その隙に木場は異空間からグラムを取り出し、一気に攻勢に出る！先程よりもより速く、鋭くなった連撃を放ち、消耗覚悟の短期決戦に挑んだようだ！

そんな木場を嘲笑うように、黒い靄はさらに速度を上げて全ての攻撃を避けていく！ゼノヴィアとイリナが頷きあうと同時に飛び出し、剣士三人によるラッシュが黒い靄を襲う！

それでも、まだ足りない！黒い靄は体捌きだけで三人の攻撃を避け続け、隙を見つけでは槍でカウンターを放っているのだ！

アーシアの回復オーラが俺に届き、腹部の痛みが和らぐ。右腕の籠手部分にオーラを込め、小型のキャノン砲を作り出す。

大がかりな攻撃は出来ない。なら、ギリギリまで圧縮した砲撃を叩き込む！

凄まじい爆音と爆煙に包まれ、黒い靄の姿が見えなくなる。後ろに下がった木場は肩で息をしながらグラムを杖代わりに立っていたが、限界が近そうだ。

警戒する俺たちの横に、自分でぶち抜いた外壁から入ってきた女性が降り立つ。

「すみません、遅れました」

ヴァルキリーの鎧姿のロスヴァイセさんだ。ようやく到着した様子だが、先程の援護はこのヒトが放ったものだろう。

「いいえ、ナイスタイミングよ」

リアスはロスヴァイセさんにそう言うのと、爆煙に包まれた黒い靄のほうに目を向ける。

黒い靄が振った槍で煙が切り裂かれ、その姿が見えるようになった。

見た限りでは、ダメージがあるようには見えない。今の攻撃を直撃してもあれだとして、相当タフだぞ……。

再び構える俺たちを睨みながらも、黒い靄はロスヴァイセさんに目を向けて言う。

『まだいたのか……。なら、少しギアを上げるか』

黒い靄はそう言うのと一気にオーラが跳ね上がり、身体に変化が起こる！

靄が右目部分に集まっていき、黒い炎のように揺らめく。他の部分は生身となるが、俺たちの表情は驚愕に染まった。当たり前だ。だって……、

「……ロイ……さん……？」

ロスヴァイセさんが消え入りそうな声で漏らす。そう、俺たちの目の前にいるのは、鮮やかな紅髪に黒い瞳をした男性。目の色が違うぐらいで、死んでしまったはずのロイ先生と瓜二つなのだから！

驚愕する俺たちを他所に、ロイ先生（？）はゆつくりと息を吐くと、深紅の槍を握り直し、俺たちを睨み付ける。

「行くぞ……！」

「ま、待って——！」

ロスヴァイセさんの言葉が言い切られる前に、俺たちの視界からロイ先生が消える！

俺の真横を突風が通りすぎていくと、

「が……っ！」

俺の後ろにいた木場の腹部が貫かれた！一切見えなかったどころかオーラすら感じなかったぞ？！

「おまえは厄介だ。先に潰させてもらおう」

ロイ先生は冷淡な声音でそう言うと、木場を貫いたまま直進していき、そのまま柱の一本に串刺しにしてしまう！

「祐斗！」

「木場！こんちくしょうが！」

《こいつ、よくも！》

木場を助け出すために俺とギヤスパーが飛び出すのが、それを察知したロイ先生は木場を串刺しにした槍を引き抜くと、俺たちを睨んでくる。

俺たちも全力全開の乱打は全て余裕で避けられてしまう。相手が本当にロイ先生だとしたら、俺の動きはほぼ読まれているんだろう。だが、ダチがやられたのに黙っていられるかよ！

「あなた、ロイ先生なんですか!? 何で俺たちと戦うんです！」

俺が怒鳴るように問いかけるが、ロイ先生の返答は、

「ヒト違いだ。名前はあっているがな」

だけだった。「名前しかって」ことは、『ロイ』って名前ではあるようだ。

俺は次々と拳や蹴りを放っていくが、当たる気配がない。これじゃ、いたずらに消耗するだけか……！

俺は兜を収納しながら後ろに飛び退くと肺に火種を発生させ、それを一気に吐き出—

「隙だらけだ……」

ドゴ……！

「かはっ!」

《イツセー先輩!》

そうとした瞬間に、一瞬で間合いを詰めたロイの魔力を込めたであろう拳が鎧を砕いて生身の腹部に届く。同時にただの打撃とは違う、身体の底を直接殴られたような衝撃が襲ってきた!

一気に力が抜けて膝をついた俺に、ロイはトドメとして新たに作り出した槍の切っ先を向けてくるが、

《やらせない!》

ギヤスパーが闇の獣を放ちながら再び突撃していく!ロイはターゲットをギヤスパーに変えると、再び視界から消える。そして、一瞬だけ間を開けて――、

「がは……」

全ての闇の獣が切り裂かれ、全身の闇を剥がされてぼろぼろになったギヤスパーが倒れた。今の一瞬だけで全ての闇を剥がしきるって、いったい何をしやがった!

ロイは倒れるギヤスパーにトドメを放とうとするが、

「やらせるか!」

「の!」

その背後からゼノヴィアとイリナが斬りかかる!ロイは無造作にギヤスパーを蹴り

飛ばすと、二人の剣撃を真正面から受け止め、器用にゼノヴィアのエクス・デュランダ
ルだけを受け流す。

イリナを槍で弾き飛ばすと、体勢の崩れたゼノヴィアの腹に蹴りを放ち、そのまま吹
き飛ばす！

床を転がりながらどうにか勢いを殺したゼノヴィアは立ち上がるが、すぐに蹴られた
腹を苦しそうに押さえながら膝をついてしまう。

俺とゼノヴィアにアーシアの回復オーラが飛ばされるが、痛みは引いても身体に力が
入らない。やはり、ただの打撃じゃない。何かある……！

俺たちのダメージを見てか、小猫ちゃんがハツとしながら言う。

「……まさか、仙術！」

その声がロイにも聞こえてしまったのか、小猫ちゃんに目を向けながら言う。

「……おまえ、『先生』と同じ猫又か。また面倒だな」

今度は『先生』か。また知らないヒトが出てきたな。だけど、仙術が扱えるってこと
は否定しなかった。

ロイは器用に槍をクルクル回し、軽く肩を叩く。どことなく曹操に似ているような動
きだったが、何だ……？

「まあいい。次だ」

リアスに目を向けながらそう言うや否や、視界からロイの姿が消える！俺とゼノヴィア、木場がまったく動けないなか、それに反応したのはイリナだ。リアスの前に盾になるように立つと、オートレクールで槍を受け止めた！その隙にリアスは後ろに飛び退く。

「少し露骨すぎたか……」

距離を取ったリアスを見ながらわざとらしく言うロイだが、それを受けるイリナの表情に余裕はない。ギリギリで耐えられているだけの様子だ。

動かない身体に鞭を打って立ち上がろうとするが、まったく動いてくれない。

リアスが魔力を放とうとした瞬間、イリナがその場を飛び退くが、ロイ先生は一気にイリナに接近そのまま打ち込んでいく。そのままイリナを盾にするように立ち回り、リアスをはじめとした後衛陣に何もさせないつもりのようなようだ。

小猫ちゃんが火車を放ちながら飛び出し、イリナに加勢する！

火車と共に小猫ちゃんの鋭く重い拳打が放たれていくが、全て見切られ当たる気配がない。そして――、

「遅すぎたぞ」

その一言と共にイリナの腹部が槍で貫かれ、小猫ちゃんの腹に拳が撃ち込まれた。二人は同時に倒れ、動けなくなる。

ロイは倒れる俺たちを一瞥すると、リアスたちに槍の切っ先を向け始めた。このままいけば、確実に負ける。

俺の脳裏で最も最悪な可能性がちらつくくなか、ロスヴァイセさんが目に涙を溜めながら言う。

「ロイさん、もう止めてください！ 私たちがわからないんですか！」

「……わからねえな」

ほんの一瞬考えただけでそう言い切った。このヒトは、ロイ先生じゃない。ただ似ていて、名前が同じな誰かなんだろう。そう思わなきゃ、やってられねえよ……！！

槍を構え直すロイだが、突然何かに気づいたように遠くを見つめ始めた。苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちをすると、俺たちを睨んでくる。

「おまえらは時間稼ぎか……！！」

ロイはそう言うと、ロスヴァイセさんが壊した外壁から飛び降りていった。

先程まで戦闘があつたとは思えない静けさに包まれる俺たち。

「……くそー！」

その中で、俺はいまだに力が入らない拳で床を殴り付けた。

ロイ先生そっくりのヒトが出て来て、何かしらの秘密を抱えていて俺たちの敵で、テロリストの敵でもあつて、もう訳わかんねえよ！

こうして、俺たちは所属不明の男『ロイ』と遭遇、惨敗を期したのだった——。

人間界某所、グレモリー眷属とロイが戦闘をおこなった場所から数十分の森の中。

数人の悪魔の死体が転がるそこには、深紅の槍を握るロイの姿があった。

右目に灯った黒い炎は彼が瞑目すると共に消え、放たれていた重圧も消える。

興味なさげに辺り一面に転がる死体を一瞥すると、近くの丸太に腰をかけ、懐から誰かの手作りと思われる紙巻き煙草を取り出して一本を口にくわえる。

人差し指の先に火をつけるとそれで煙草に着火、肺一杯に吸い込んだ紫煙を一気に吐き出す。

それを数回繰り返していると、不意に少女が彼の隣に座る。黒いドレスの上にロイのものと同じマントのような黒い外套を被っている。

ロイは少女——リリスの姿を確認すると右手で煙草を握り潰し、左手でその子の頭を優しく撫でる。

リリスがくすぐったそうに笑うなか、ロイは少女に訊く。

「さて、移動するか。次はどこに行く？」

「……どいこへ？」

問い返されて思わず苦笑するロイ。だが慣れた様子で立ち上がると、先ほど切り捨てた悪魔たちの死体を探る。

数秒探ると、懐から紙の切れ端を見つけ出してそれをじつと眺める。悪魔文字で何かしらのことが書かれているが、血で半分ほど読めなくなっていた。

「……よ、読めねえ」

眉を寄せながらぼやく。血のせいでもなんでもなく、彼は悪魔文字が読めないのだ。

ロイは盛大にため息を吐くと、その切れ端を持ったままリリスの横に座り直す。

「ま、適当に歩き回るか。そのうち何かあるだろ」

「うん」

ロイの言葉にリリスは頷くと立ち上がり、急かすように彼の手を引く。

「はやく、はやく」

「はいはい。あんまり引つ張るなよ」

再び苦笑するロイだが、彼の心中はあまり穏やかではなかった。

——先ほど戦った彼らは、今の自分に欠ける何かを知っていた。だが、おそらく敵だ

ろう。あんな場所に来る悪魔なんて、自分たちを狙う奴らでなければありえない。

だが——、とロイは思う。

『ロイさん、もう止めてください！私たちがわからないんですか！』

あの銀色の髪の女性の表情は必死だった。それに、心のどこかで『彼女だけは傷つけない』と思っている自分がいるのだ。

——俺にとって、彼女は何か大切なものなのかもしれないな。

ロイは立ち止まり、彼の手を引いていたリリスも彼につられて立ち止まる。

「ロイ？」

振り向きながら問いかけるリリスに、ロイは微笑しながら言う。

「リリス、目的地が決まったぞ」

「……どいどい」

興味深々といった様子で訊いてくるリリスに、ロイは笑みを不敵なものに変えながら言う。

「あいつを探す」

「……だれ？」

ロイは肩をすくませると自分の鼻を指差しながらどや顔をする。

「名前はわからねえが、匂いは覚えた」

「じゃ、探そう」

グレモリー眷属とロイの邂逅の時が、彼らには知られることなく近づいていたのだ
た——。

l o s t 0 3 再会

ロイとの戦闘から三日ほど経った日の深夜。

負傷したメンバーの治療も終わり、俺——兵藤一誠をはじめとしたオカ研と、ソーナ先輩とその眷属たち、アザゼル先生が部室に集まっていた。

アザゼル先生が部室を見回して訊いてくる。

「ロスヴァイセは、まだ無理か」

「ええ。まだ気持ちの整理がつかないそうよ」

リアスが悲哀を込めた声音で言った。ロスヴァイセさんはこの部屋にいない。あの戦いのあと、ロスヴァイセさんは部屋に籠ってしまい、出て来ていないのだ。ロイとの接触はあのヒトの落ち着き始めた心を乱すには十分すぎる出来事だった。

アザゼル先生は「そうか」と一言言うと、書類にざっと目を通しながら言う。

「先日リアスたちが遭遇した『ロイ』についてだが——」

アザゼル先生は続ける。

「どうやら、各地を転々としているらしい。テロリストの討伐に向かったエージェントの数人が接触したようだ。正確には、テロリストの討伐に向かったらあいつがいて、全

員殺害されていたとのことだ。接触したエージェントも攻撃されたが、どうにか撒いたらしい」

あいつは他の拠点も攻撃していた。俺たちよりも早く見つけては潰しを繰り返しているのか？

俺が真剣に思慮を深めるなか、ソーナ先輩が言う。

「リアス、本当にロイ様だったの？話を聞いた限りでは、似ても似つかないのですが……」

「顔はロイお兄様だったわ。けれど、戦い方は……」

表情を曇らせるリアス。ロイ先生の戦闘スタイルは時々銃を使っただけで剣がメインだ。だけど、あいつは籠手だの槍だのと、近接メインだったけど剣は使わなかった。

アザゼル先生が追加の情報を言う。

「聞いた話じゃ、他にも色々を使うらしいぞ。弓とか鎌とかな」

他にもまだ何かあるのか。次に会って見たこともない武器を使われたら余計に危険だ。どうすれば勝てるんだ……？

速さは木場以上、武器も豊富、打たれ強さも並み以上。普通にやりにくい相手だな。

アザゼル先生は続ける。

「あと、あいつは誰かと行動を共にしているようだ。誰かはわからないが、発言からして何かから守っているようだな」

確かに『あの子は渡さん』とか言っていたし、誰かを守っているのだろう。その『あの子』ってのが誰かはわからないけど、何かしらの鍵を握っているのは確かだ。

リアスが言う。

「ロイおに——ロイがどうして私たちに牙を剥いたのかはわからないけれど、向かってくるのなら、今度こそ滅するわ」

覚悟を決めた表情になるリアスに俺たちは頷き返す。何だろうが、俺たちの敵だって言うのなら何がなんでも倒してやる。

そんな俺たちにアザゼル先生が言う。

「出来れば話し合いに持つていつて欲しいんだが、今回ばかりは向こうから仕掛けた訳だからな。まあ、殺さない程度に頼む」

「それが出来るかはわからないわ」

リアスの返答にため息を吐くアザゼル。加減して勝てる相手ではない。殺すつもりがちようどいいぐらいだろう。

ソーナ先輩が言う。

「私たちも接触した場合は出来るだけ捕縛する方向にします。どうかして話を聞いた

ほうが良さそうですから」

「頼む。戦闘になつたらそんな余裕はないかもしれないが、俺もそいつから話を聞きたい」

アザゼル先生の一言にソーナ先輩とその眷属たちが頷く。俺たちも一応頷くが、生け捕りに出来るかはわからないな。あいつ、相当強いぞ。

ロイの動向も気になるけど、今はテロリストをどうにかしないとイケない。あの戦いで死んでしまったヒトたちのためにも、頑張つていかないと。

それぞれが覚悟を決めるなか、今回の会議は終了となつたのだった。

「……へ、ヘックシユツ！」

「へいきっ。」

「ああ、大丈夫だ。誰かが噂してやがるのか？」

人間界某所の森。

倒れた丸太を椅子代わりにして座るロイとリリスは、簡単なテントを張ってそこを中心に結界を貼ることである程度の安全を確保したら、そこをキャンプ地としていた。

放浪人である彼らは基本的にそうした拠点を作り、気が向いたら移動、もしくは場所がバレたら移動を繰り返している。

自分で淹れたコーヒーを啜り、ロイは夜空を見上げる。焚き火以外の光源がない森の中だからこそ見える満点の星空を眺めながら、ロイは少し思考する。

——彼女がどこにいるかはだいたいわかったが、どうやってあの町の結界を越えたものか……。

この三日で、ロイはロスヴァイセの居場所をだいたいながら把握することが出来ていた。だが、彼女の住む町の結界を越える手段を見つけれないでいた。下手に触れて場所がバレるリスクを犯したくはないのだ。

ロイの横で彼に倣って夜空を見上げるリリスだったが、ひとつあくびをしてロイの膝を枕代わりにして寝転ぶ。

ロイは特に気にした様子もなく思考を切り上げ、リリスの頭を優しく撫でてやると、それを受けたリリスの表情が一気に和らいでいく。そのまま目が細くなっていき、完全に閉じられると同時に規則正しい寝息をたて始めた。

ロイは小さく息を吐くとコップを置き、焚き火に土を被せて鎮火すると、リリスを抱

きかかえてテントの中に潜り込む。

リリースを抱きかかえたまま寝転び、彼も目を閉じる。寝ているはずのリリースがロイの服をギュツと握ってくるが、ロイは気にせず抱き締め返してやる。

今のロイにとってはリリースが全てであり、彼女を守ることが使命なのだ。

夢を見た。見たこともない少女と共に笑う夢だ。

夢を見た。見たこともない男性と殺しあう夢だ。

夢を見た。見たこともない三人と共に何かをする夢だ。

夢を見た。見たこともない女性を助けるため、勝ち目のない戦いに挑む夢だ。

夢を見た。見たこともなかったはずなのに、この間出会った銀髪の女性と共に、子供たちの笑顔を見る夢だ。

夢を見た。見たこともない女性に、何かを託された夢だ。

夢を見た。見たこともないはずの女性たちと共に歩み、不器用ながら嬉しそうな笑み

を浮かべる夢だ。

「まただ。あの銀髪の女性と出会ってから、こんな夢ばかり見る。何も無いはずの俺に、何かを無理やり教えるように見せられる。」

「俺は、誰だ……？」

「——イ？・ロイ？・へいき？」

ロイは肩を揺すられて目を覚ます。一気に意識が覚醒した彼の目には、心配そうに自分の顔を覗きこむリリスの姿が映る。

「横並びで床についたはずなのに、なぜこの子は俺に馬乗りになっているんだ？」

ロイはそんな疑問を飲み込むと、いつもの調子で笑みながら返そうとする。だが、あ
ることに気づくと驚愕を露にした。

「なぜ、俺は泣いているんだ。」

理由はわからない。だが、自分の頬を伝う雫は間違いない涙だろう。

先ほど見た夢が原因かもしれないが、内容はもう覚えていない。

ロイは一度ため息を漏らし、涙を拭いながら起き上がる。彼に乗つかつていたりリスはずれ落ちそうになるが、とつきにくつついたことで事なきを得る。

不機嫌そうにむすつとするリスにロイは苦笑しながら「ごめん」と一言で謝ると、そのまま抱きかかえてテントを出る。

かなり寝ていたようで、太陽は二人のほぼ真上に位置し、空はとつくに明るくなっていく。ロイは目を細め、リスは愚図りながらロイの胸に顔を埋める。

ロイは青空を見上げながら目を閉じ、一気に集中していく。探るべきはあの女性の気配と匂い。仙術と自身の五感を総動員してどこにいるかを探す。

「……ん？」

探りを終わると同時に何かに気づいて目を開けるロイ。それに反応したのはリスだ。

「ロイ〜？」

「これは、うん。行けそうだな」

若干愚図る声音のリリスだが、ロイはそれを無視する形で勝手に納得したように頷く。

ロイは静かにリリスを丸太に座らせると、言い聞かせるように言う。

「ちよつと用事を済ませてくる」

「……ん」

眠たそうに答えるリリスにロイは苦笑で返し、そのまま彼女をテントに運んで寝かせてやる。

素直に二度寝を始めたリリスに自分の外套を毛布代わりに被せ、頭を優しく一撫ですると、ロイは表情を引き締めてテントを出る。

一度大きく息を吐き、背中から紅いあかの鱗に覆われたドラゴンの翼を展開すると、そのまま助走をつけて一気に飛び立つ。

——目的地はよくわからないが、あの町に比べれば結界の突破はしやすそうだ。

そこら辺の上級悪魔程度には視認できないほどの速度で飛ぶロイは、一人笑みを浮かべる。

——もうすぐ何かがわかるかもしれない。俺にとって大切な、何か……。

—

少し時間が流れて、東京。

スーツ姿のロスヴァイセは一人、ロイとのデートで訪れた、ユーグリットとも遭遇した喫茶店でコーヒーを飲んでいた。

ロイとの遭遇で乱れた心もある程度落ち着きはしたものの、完全には吹っ切れていない。どうにかして気分転換をしようと、リアスたちに無理を言っ出てきたのだ。

今の彼女にとって、ユーグリットのことなど歯牙にかけるほどのものではなく、ただ前にロイと来たからという簡単な理由でこの店を訪れているのだ。

コーヒーを飲みきると手早く会計を済ませ、そのまま足早に店を後にする。先ほどから誰かに見られている気持ち悪さがあるのだ。だが、相手は人間だろう。近くから異形のオーラは感じ取れない。

ロスヴァイセがため息を吐いた矢先、声をかけられる。

「そこのお姉さん。これから暇？」

見るからにチャライ男だ。後ろにはその連れと思われる同じような雰囲気の男性が三人ほど。

今さらではあるが、ロスヴァイセはかなり美人の部類に入るだろう。そんな女性が一人で歩き回っていれば、声をかけられて当然だろう。

「……」

ロスヴァイセは興味なさげに彼らを一瞥すると、そのまま彼らを避けて足を進めていくが、すれ違った瞬間に後ろから肩を掴まれる。

「ちよつと、無視は酷くない？何か言つてよ」

「……急いでいるので、失礼します」

男の手を払い、再び歩みだそうとするロスヴァイセだったが、その男の連れに行く手を阻まれる。

「いいじゃん。ちよつとぐらい遅刻したつて何にも言われないよ。俺たちと遊ぼうぜ」

男がそう言うのと、彼の連れが下卑た笑みを浮かべる。ロスヴァイセは心のなかでため息を吐き、冷たい目で彼らを見る。それに気づいていないのか、男が何かを言おうすると、ロスヴァイセはいきなり引つ張られて誰かに抱き止められる。

驚愕するロスヴァイセを他所に、その誰かは彼女を自分の後ろに隠しながら男たちに言う。

「——悪いな。こいつは俺の連れだ」

その声を聞き、ロスヴァイセは驚きながらその誰かの顔を確認する。

「誰だてめえ！つて、ハハ！だせえ格好だな！」

男は周りのヒトたちからの視線を気にすることなく、彼らの邪魔をした誰かを指さしながら爆笑する。

黒いシャツに黒いズボン、極めつけは黒いロングブーツ。全身黒で統一された服だけならまだしも、ロングブーツを除いて縫い目だらけでぼろぼろになっているのだ。

指でさされたその誰かは自分の服を見ながら苦笑し、男たちに言う。

「この服に愛着があつてな。何かあつたらすぐ次に乗り換えるおまえらとは違うんだよ」

『んだと！』

男たちが同時に返しながらガンを飛ばすが、ロイは冷たい笑みでそれを受け流すと、表情以上に冷たい声音で言う。

「――殺気つてのは、ここう出すんだよ」

『ッ！』

ロイが告げた瞬間、男たちは腰が抜けたように尻餅をつく。命懸けの戦いをしたことがない彼らでも、いわゆる本能というものはある。

その本能が告げているのだ。こいつはヤバイと。

男たちは情けない声を出しながら逃げ出す。ロイがしたことは単純だ。ほんの一瞬、相手にだけ伝わるように殺気をぶつける。周りのヒトたちには伝わらないように、彼らが失禁しない程度に抑える絶妙な加減でだ。

ロイは彼らを見送るとため息を吐き、振り替えて背後にいるはずのロスヴァイセに

目を向けるが、

「……あいつ、どこ行つた……?」

肝心のロスヴァイセがいなくなつていた。再びため息を吐くロイだが、すぐさま気配を探つて見つけ出す。

「……俺の邪魔をしないでもらいたいな」

ロイはそう呟く同時に消える。どこかに連れて行かれてしまったロスヴァイセを追いかけて、人混みをすり抜けて駆け抜けていった。

「あ、あの、これは……?」

「静かにしてください。先ほどこの結界を何者かが越えたのです。我々はあなた
の保護が任務ですので、ご理解とご協力を」

ロスヴァイセは困惑していた。チャライ男に絡まれたと思つたらロイに似た誰かに助けられ、今度は二人の女性墮天使に連行されたのだ。困惑して同然だろう。

とりあえず裏路地に逃げ込み、周辺を警戒する女性墮天使Aが言う。

「今のところは大丈夫そう。この人混みなら、そう簡単には見つつか——」

言い切る前に、突然の突風が三人を襲う。とつさに目をかばった三人だが、それと同じに糸の切れた人形のように倒れる墮天使A。それに気づいたロスヴァイセの横につく墮天使Bが警戒するがもはや遅く、彼女も墮天使Aと同じように倒れた。

「な、なにが……」

余計に困惑するロスヴァイセだが、彼女の目の前にロイが現れる。身構えるロスヴァイセだが、ロイは彼女を興味深そうに眺めるだけだ。

「……やっぱり、おまえは他の奴らとは違うな」

「え？」

ロイの発言を聞き返そうとした瞬間、ロスヴァイセを浮遊感が襲う！それに驚いたのもつかの間、凄まじいGが彼女に襲いかかる！

感じたことのない強烈なGに、ロスヴァイセの意識が持っていかれそうになるなか、それに気づいていないロイが言う。

「ちよつと付き合ってくれ、すぐに済む」

ロイのその発言を最後に、ロスヴァイセの意識は完全に持っていかれてしまったのだった——。

l o s t 0 4 過去を探って

「ロスヴァイセさんが連れていかれた?!」

兵藤家VIPルームに、俺——兵藤一誠の声が響いた。

俺が反応する横で、リアスが試しに連絡を取ろうと魔方陣を展開するが、まったく繋がらないでいた。

リアスが心配げな表情になるなか、アザゼル先生が頷く。

「ああ、その通りだ。護衛をさせていた二人は負傷したが命に別状はない」

そ、それは良かったけど、ロスヴァイセさんが連れていかれたって情報が衝撃的すぎる!気分転換のために東京行ったとは聞いたけど、そこで連れていかれたとしたら、結界を突破されたってことだ!

表情を陰しくさせた木場が訊く。

「連れ去った人物はどうやって結界の突破をしたんですか?東京の結界はそれなりに強力なものはずですが……」

『『邪龍戦役』で結界に関わる連中も死んじまって、結界にちよつとした穴があったのかもしれない。だが、そうだとでもどうにもおかしい。そいつが結界に突入して数十秒

しても反応がなかったらしい。詳しく調べてみたが、運悪く結界が誤作動を起こしたってわけでもなさそうだ」

眉を寄せながら言うアザゼル先生。誤作動ってわけでもないってのはどういうことだ？

俺たちが訝^{いぶか}しげな表情をしていたためか、アザゼル先生は一度俺たちを見渡してから重い口を開く。

「その侵入者からロイ・グレモリーのオーラが検知されたそうだ。だから結界の反応が遅れたらしい」

「……待つて、アザゼル。ロイお兄様のオーラって、どういうことなの……」

アザゼル先生に詰め寄るリアス。表情は必死そのものであり、いつもの余裕はない。

アザゼル先生の言葉を信じるなら、ロイ先生がロスヴァイセさんを拐ったことになる。だが、そのロイ先生は死んでしまっているはずだし……。

ふと、俺の脳裏に先日戦ったロイのことが思い起こされる。

アザゼル先生がリアスを落ち着かせるように言う。

「おまえらが出会ったロイは、本当に俺たちの知るロイなのかもしれない」

「それって、どういうこと……？」

リアスの問いに、アザゼル先生は表情を険しくさせたまま返す。

「そいつから、ロイとは別のオーラも検知されたそうさ。何のオーラかはよく分からないけど、それのおかげで異物として結界が反応したらしい」

「万が一あのヒトがロイ先生だとしても、なぜ私たちのことがわからなかったのでしょうか。何かしらの反応があっても良かったと思うのですが……」

朱乃さんが当然の疑問を口にする。あいつは俺たちのことを知らないと言い切った。ロイ先生ならわかって当然だと思うのだが、どうしてだ？

アザゼル先生が指を一本立てて言う。

「可能性としては、また誰かに操られている。だが、可能性は低いだろう。リゼヴィムが使った聖杯は全てヴァレリーに戻した」

そう言えば、俺がリゼヴィムと戦っている時に、リアスたちはリゼヴィムに操られたロイ先生と戦ったそうさ。聖杯を使って操られていたそうだが、その時はデュリオやヴァーリチームの協力でどうにかなったそうさ。

その聖杯は無事に奪還され、ヴァレリーに戻された。今は検査中だけど、彼女の回復は時間の問題だ。

アザゼル先生は二本目の指を立てながら言葉を続ける。

「次に、何らかの形でおまえらを認識できなくなっている」

俺たちを俺たちと認識できない？何かしらの術をかけられているのか、それとも記憶

がなくなってしまうているのか……。

俺が柄にもなく思考を巡らせていると、アザゼル先生はのもうひとつ情報を口にす
る。

「話をもどすぞ。ロスヴァイセの搜索は刃スラッシュシュドックドック 狗をはじめとしたエージェントにやらせている。すぐに見つけてみせるさ」

安心させるようにそう言うが、俺たちの表情が暗いままだ。

アザゼル先生は一度ため息を吐くと、出来れば言いたくなかったのか神妙な面持ちで言う。

「何かあればすぐに知らせるが、また不穏な気配があつてな」

「ま、まだ何かあるんですか!」

俺の返しにアザゼル先生はため息混じりに頷く。

「テロリストどものアジトにあつた情報に、冥府に関係のあるものがいくつも見つかった。おそらく、あの骸骨神様が裏で何かしているんだろう」

またあの神様か!英雄派の時といい、クリフォトの時といい、今回といい、何回俺たちにちよつかいかけてくるんだよ!

アザゼル先生は悔しがるように拳を握りながら言う。

「だが、まだ足りない。もっと決定的な情報がないことには、あいつを黙らせることがで

きない」

アザゼル先生はため息を吐くと、拳を開きながら俺たちに言う。

「とにかく、ロスヴァイセのことはこっちに任せろ。何かあったらすぐに知らせる」
頷くことしかできない俺たち。今は、アザゼル先生を信じるしかないか……。

—

「……………う、うーん……………」

彼女——ロスヴァイセは重い瞼を開ける。どこかのテントの中に寝かされ、毛布を被らされているようだ。

痛む頭を押さえながら上体を起こし、少し考える。東京に出掛けて、変な男たちに絡まれて、そして——

『ちよつと付き合ってくれ、すぐに済む』

ロイに問答無用で誘拐された。きつとりアスたちが心配しているだろうと思いが

ら、ロスヴァイセは重いため息を吐いた。

彼女はテントの中を見渡す。ヒト一人がギリギリ入れるほどの大きさだが、片隅に医療器具の入った箱が置かれているぐらいで、それ以外のものは見当たらない。

「——ロイ、焼けた？」

「もう少しかな。つて、焼き始めたばかりだぞ……」

「むう……」

『そんな顔されてもな、もう少しだから我慢してくれ』

テントの外からどこか聞き覚えのある二人の話し声が聞こえた。一人は男の声だが、もう一人は幼い女の子の声だ。

『……そろそろ起きたか？』

「っ！」

明らかにこちらに向けられた声に、思わず身体を強張らせるロスヴァイセ。そんな彼女の様子を知るよしもない外の男は、何の躊躇いもなくテントの中に顔を突っ込んできた。

鮮やかな紅の髪に底の見えない黒い瞳の男性——ロイとロスヴァイセの視線が交差するなか、ロイは笑みを浮かべる。

「起きているなら、返事くらいしてくれてもいいだろう」

「あ、いえ、ごめんなさい……」

いきなり謝られたロイは苦笑するが、そのまま彼女に左手を差し出す。

「立てるか？いきなり気絶したから仙術で簡単に治療したんだが、そっち方面は慣れないもんでね」

「は、はあ……」

ロスヴァイセは警戒しながらもその手を取る。そして、違和感を覚えた。彼の左手が暖かいのだ。本物のロイの左腕はリゼヴィムに吹き飛ばされ、義手のはずなのだが、目の前の彼の手には生きている証と言わんばかりの暖かさがあつた。

ロイの手を借りて立ち上がり、そのままテントの外に出る。日は落ちて外は真つ暗だが、光源として焚き火がたかれ、その周りには調理器具が並べられ、串刺しにされた川魚が焼かれていた。そして、その魚を涎よだれを垂らしながらじつと見つめる少女——リリスを見た瞬間、ロスヴァイセは驚愕の声を発した。

「リ、リリス!？」

「……ん？ひさしぶり」

「ちよつと待て、リリス。こいつと知り合いなのか？」

「うん」

即答されたロイは倒木に座り込みながら項垂れた。

まさか、先日遭遇した彼らもこの子の関係者だったのかもしれない。だとしたら、彼らに仕掛けたのは少し早計だった……？

ロイが大きいのため息を吐くと同時に、少し焦げた臭いが彼らの鼻につく。それにいち早く気づいたリリスがロイに言う。

「ロイ……げてる！」

「——ああ、悪い。すぐに取る」

手早く魚を回収し、臭いを嗅ぐロイ。まだ食べられることを確認し、一度頷いた。リリスは笑みながら頷き返して魚を頬張り始めた。

ロイは焼けた魚を差し出しながらロスヴァイセに訊く。

「食うか？別にどっちでもいいが……」

ほんの一瞬考えるロスヴァイセだが、不意に彼女の腹の虫が鳴る。突然の事態にロスヴァイセは赤面しながら頷き、ロイは苦笑しながら焼き魚を差し出した。

「いちおう味付けはしてあるが、不味かったら悪い」

「そ、そんな、お気遣いなく」

ロイはその返事を聞いてから残った焼き魚を取り上げ、リリスの横に腰を降ろす。その対面にロスヴァイセは腰を降ろして恐る恐る焼き魚を口に運んだ。

「——ッ！美味しいです！」

「そんなオーバーリアクションしなくてもいいんだが、まあ、何よりだ」

その後、特に話すことなく気まずい空気が流れていき、リリースが次々と焼き魚を頬張るなか、ロイが切り出す。

「ところで、名前は？」

「……はい？」

「だから、名前だ。教えてくれるとありがたいんだが」

ロイの言葉に、ロスヴァイセは少し寂しげな表情になりながら答える。

「……ロスヴァイセです」

「ロスヴァイセ、ロスヴァイセね……」

ロイは顎に手をやりながら彼女の名前を反復すると、一度ため息を吐いて彼女に訊く。

「なあ、『ロセ』って呼んでいいか？ どうにもロスヴァイセじゃ違和感がある」

「……え？」

思わず間聞き返すロスヴァイセだが、ロイは特に構うことなくうんうん頷いていた。

「ロセ、ロセか。うん、何か言いやすいし、しつくりくる」

「……」

ロイが一人で納得していると、ロスヴァイセが目には涙を溜めながら焼き魚を落として

しまう。

それに気づいたロイは慌てながらロスヴァイセに言う。

「ちよ、悪かった！なんか変な呼び方しちゃまって、その、すまん！」

「い、いえ、違うんです。少し、思い出してしまつて……」

「思い出すつて、何をだ」

身を乗り出して問いかけるロイに、ロスヴァイセは涙を拭いながら返す。

「私の大切なヒトに、『ロイ・グレモリー』というヒトがいたんです。そのヒトも私のことをロセと……」

「……その話、詳しく頼めるか」

目付きを鋭くさせながら言うロイに、ロスヴァイセは問いかける。

「どうしてですか？あなたは——」

「俺には記憶がない。だが、俺はあのとき、おまえだけは斬りたくないと思った。俺の中で、おまえは『大切なヒト』つてやつだったのかもしれない」

ロイの突然の告白に、思わず目を見開いて驚くロスヴァイセ。彼女に構うことなく、さらに続ける。

「だから、おまえの知る『ロイ・グレモリー』を教えてください。俺が俺を知る切っ掛けになるかもしれない」

「……………」

「……………」

お互いに視線を外さない二人だが、ロスヴァイセが折れたように一度息を吐く。

「わかりました。私が話せる範囲であれば、お話します」

「そうか！それは助か——」

「ひとつ条件があります」

ロイの言葉を遮り、ロスヴァイセは指を一本立てた。

思わぬ行動に首を傾げるロイに、彼女は告げた。

「私だけではなく、他の方の話も聞いてください。先日あなたが倒してしまつた彼らを
含めて、『ロイ・グレモリー』を大切に思つていたヒトはたくさんいますから」

彼女の言葉に、ロイは少し考えると渋々と言つた様子で頷く。ロスヴァイセはそれに
頷き返すと、優しい声音で語り始める。

「そうですね。私とあのヒトが初めて会つたのは——」

|

初めてロイさんと出会った日のこと。

初めてロイさんと共に戦った日のこと。

初めてロイさんに胸を触られた時のこと。

初めてロイさんの怖さに気づかされた時のこと。

初めてロイさんとデートをした時のこと。

ロイさんに告白されて、その後セラフオール様にこっぴどく怒られたこと。

初めてロイさんにプレゼントを貰った時のこと。

ロイさんに牙を向けられたことも話しました。

次々とロイさんの話をしていくうちに、私——ロスヴァイセの頬には涙が伝っていました。

当たり前です。私にとって、ロイさんの誰よりも大切なヒトだったんですから。

目の前のヒトは、ロイさんかもしれませぬ。いえ、きつとそうなのでしよう。私の話を聞いている時の表情は、真面目な時のロイさんそのもので、時おり話を区切って空を見上げていました。

ロイさんのことを大切に想っているヒトたちのことも話しました。

そして最後に、ロイさんはもう死んでしまったことも話しました。

それを聞いた目の前のヒトは驚いていましたが、何かを察したように瞑目すると、小さくですが一度頷きました。

すると、なぜかテントや調理器具を片付け始め（と言っても数秒で終わらせてしましたが）、焚き火に土を被せて鎮火すると、不意にこちらに近づいてきました。

「……あ、あの、どうかしたんですか？」

私の問いかけを無視して、彼はいきなり私を優しく抱き締めてきました。私がいきなりこのことで固まっていると、そのヒトは私の耳元でとても小さな、それでいて優しい声で私に言いました。

「……ごめんな、ロセ」

彼はそう言うのと身体を離します。そして、碧い両目で私を見ます。

彼は優しい笑みながら、言葉が続けました。

「また迷惑をかけちゃう。あいつらにも言っておいてくれ」

ああ、やっぱり、このヒトは――。

「……ロイさ――」

名前を呼んだ矢先にいきなり視界が霞み、足元がおぼつかなくなっていました。

ロイさんは私を抱き止めると、彼は続けます。

「俺はまだ戻れない。まだ終わってないから……」

「……ロイ……さ……ん……」

彼の言葉を最後に、私の意識はさらに微睡まどろんでいきました。その中でも、私はあることだけは強く思いました。

早くリアスさんたちに、セラフォル様たちに伝えないと。——ロイさんは生きていますと！

眠らせたロスヴァイセをお姫様抱っこで持ち上げ、近くの木に背中を預けるように寝かせた彼——ロイは大きなため息を吐いた。

「ロイ？」

「ああ、大丈夫だ」

心配そうに顔を覗き込んでくるリリスの頭を撫でてやり、ロイは笑みを浮かべる。

彼女のおかげで、自分が誰なのかは少しわかった。だが、まだ何か足りない。霧がかかったように、肝心の部分がはつきりしないのだ。

ロイはそう思いながらも、先ほど結界に侵入してきた者たちがいる方向を睨む。

「リリス、隠れてろ」

「……? うん」

リリスの近くの茂みに隠れてもらうと、ロイは森の闇の奥に殺気に向けながら口を開いた。

「……いぬ狗か」

「その通り。いぬ狗だよ」

視線の先には黒い狗を引き連れた一人の青年が彼のほうに歩み寄ってくる。

——彼のことはわからないが、おそらく知り合いなのだろう。何となく既視感がある。

ロイはオーラを解放して黒い靄を身に纏うと、右手に深紅の大鎌を作り出す。俺に答えるように、青年も身の丈以上の大鎌を取りだし、狗も口に禍々しい刃の剣をくわえた。

「投降は、してくれませんか」

『悪いが、やらなきやいけなことがある。それは譲れない』

そのやり取りを最後に、二人と一匹は闇に消える。

誰にも知られることのない深い闇の中で、何かを手に入れた男と、闇の狩人の戦い火蓋が切つて落とされたのだ——。

105 追う者たち

満月と幾多の星が輝く夜空とは対象的に、一切の輝きがない森の中を三つの影が駆け抜け、交差する。

交差する度に小さな火花が散り、辛うじてその三つの影の姿が浮かび上がった。

一つは黒い靄を身に纏うロイだ。深紅の鎌を右手に握り、残像すらも残さない速度で森の中を駆け抜けていく。

そんな彼を追う二つの影は『刃スラッシュ・ドッグ 狗』こと幾瀬鳶雄と、彼の宿す神滅具ロンギヌスであり相棒である黒い狗、刃ジンである。

先行するロイは森の開けた場所にある草原まで来ると足を止め、改めて追跡者たちを睨む。

月の輝きで辺り一面を照らされたことで鳶雄の目も十二分に利くようになり、改めて構えを取る。彼に続く形で刃は体勢を低くし、いつでも飛び出せるように備えた。

眼前の敵を見据えながら、ロイは左手にも小さめの鎌を作り出して握る。

二人と一匹が静かな気迫を放つなか、彼らの身体を冷やすように優しげな夜風が吹く。だが、それが開戦の狼煙となり、ロイが一気に飛び出していく！

地面をスケートのように滑る移動方法で一氣に加速した彼は、その勢いのまま右手の鎌を風ぎ払う。鳶雄はそれを受けようとするが、彼の第六感が警鐘を掻き鳴らす。

鳶雄は防御の選択肢を刹那で捨てると、ロイの鎌の一閃を身体を後ろに剃らせて避ける。

空を切ったロイの一撃は空間ごと空気を切り裂き、小さいながらも次元の狭間を覗かせた。

鳶雄は少し目を見開いて驚きをあらわにするが、その時に生じた隙を庇うように刃が飛び出し、口にくわえた剣でロイを攻め立てる！

ロイは体捌きで刃のラツシユを避け続けるなか、そこに鳶雄が加勢する。息の合った動き、否、^{いな}二体で一体の動きはまさに完璧の一言だ。

——だが、届かない。ロイに攻撃する隙を与えぬよう、圧倒的な手数と速度で攻め続けても、彼に当たる気配がないのだ。

鳶雄と刃は焦らない。焦れば動きに無駄ができ、そこを確実に突かれることになる。そうなれば、まず間違いなく死ぬことになるだろう。

鳶雄と刃がほぼ同時に一撃を放とうとした瞬間、彼らを悪寒が襲った。脊髓反射の速度で反応して彼らが飛び退いた瞬間、ロイが鎌をそれぞれがいた場所に降り下ろした！地面に当たるすれすれで鎌は止められたが、その余波だけで地面が砕け、小さなヒビ

が広がっていった。

鳶雄がその威力に眉を寄せるなか、ロイが左手の鎌を構える。明らかに届かない距離で構えたことに鳶雄が警戒した瞬間、鎌が振り抜かれる！

「ツー」

鳶雄はとっさに身を屈めると、頭の上を鎌が通りすぎていった。鎌からはロイに向かって鎖が伸びており、鎌の刃と柄の部分が繋がれていた。

ロイが左手に作り出したのは『鎖鎌』だったのだ。不意に放たれた間合いを無視した一撃は、鳶雄の体勢を崩されるには十分だった。

ロイは左手の鎖鎌を回収しながら一気に加速。地面を滑りながら勢いを乗せた一撃を鳶雄に放とうとするが、あいにく相手は彼だけではない。

刃が高速で飛び出してロイを迎撃、刃のくわえる剣とロイの握る鎌が激突して激しい火花を散らせた。

ロイは強引に刃を空中に弾き飛ばすと、鎖鎌で追撃を放つ！刃は鎖鎌の軌道を見切つてそれを防ぐと、軽やかに着地を決めた。

鳶雄は一度息を吐く。アザゼルからは生け捕りの指示が出されているが、これ以上の手加減は無理だ。下手をしなくてもこちらが殺されてしまう。

鳶雄の意思が伝わったのか、刃が小さく唸る。同時に周囲の影が蠢き、そこから大量

全ての刃を砕ききったロイの耳にそれが届いた時、そこにいたのは闇の衣を纏った人の形をした擬いものの刃の神。暗黒を吐く狗を従えた狩人だった。

その姿こそが幾瀬鳶雄の神滅具——『黒刃の狗神』の禁手、『夜天光の乱刃狗神』だった。

それを見据えたロイは一度ため息を漏らす。

『……ギアを上げたほうが良さそうだな』

ロイの全身を包む黒い霧が右目へと集まり、黒い炎となつて闇を照らす。

手短にその行程を済ませたロイは首をゴキゴキと鳴らすと、籠手にさらにオーラを込め始める。

ロイが脱力するように自然体で構えた瞬間、鳶雄と刃が消え失せる！

ロイは特に驚いた様子もなく、右拳で自分の右側の空間を軽く殴り付ける。

パンツ！という快音が草原に響き渡り、何かが吹き飛ばされ地面を転がると、その近くの地面に鎌が突き刺さる。

『速度はそちらが上か……！』

「舐めるなど言つたはずだが？」

地面を転がったのは鳶雄だった。そんな彼に人差し指を左右に振りながら言うロイ。そんな彼の背後に、禁じられた紋様、呪文が刻まれた剣をくわえた刃が飛び込み、その

ま貫こうとする！

だが、剣に貫かれる直前にロイの放った回し蹴りが刃を捉え、そのまま吹き飛ばす！
「——遅いな」

ただ一言そう告げる。

鳶雄は鎌を拾い上げ、再び飛び出す。体勢を整えた刃も彼に合わせて飛び出し、二体による連携攻撃が開始された！

ロイは利那的な見切りでそれさえも避け続けるが、さすがに反撃の隙を見つけられずに避けの一手のみとなっていた。

少しずつ鳶雄たちの速度が上がっていくなかで、それでもロイは避け続ける。たとえば死角を付かれたとしても、若干視認出来ていなくても確実に避ける。

そして、鳶雄と刃が同時にそれぞれの得物を振り抜いた瞬間、ロイはそれぞれの腕で真正面から受け止めた！

激しい火花が散り、お互いに引かずに押し合うなか、ロイが鳶雄と刃を交互に睨んだ。
「いい動きだ。だが——」

ロイは瞬間的にオーラを解き放って二体を弾き飛ばすと、そのまま鳶雄に肉薄して腹部を殴り付ける！

低く重い打撃音が響き渡り、そのまま鳶雄は身体をくの字にして吹き飛ばされる。

「——甘い。殺す気はあるのか？」

『耳が痛いな……』

腹を擦りながら立ち上がる鳶雄。もう一段階上もあるが、そうなれば彼の生け捕りは無理だろう。どうかして一撃、それが届けば生け捕りが出来るはず。

ここまででされてもまだ生け捕りを諦めない鳶雄だが、彼の横に刃が戻ってくる。先ほどに比べ、若干殺気立っていることが鳶雄だからこそわかった。

——使うか。

鳶雄が切り札を切ろうとした瞬間、白銀の閃光がロイに向かって落下してくる！

「ツッ！」

ロイは一瞬驚愕の表情を浮かべるが、籠手を消して両足に足甲を作り出すとタイミン
グを計り、

「オラアツッ！」

上段回し蹴りで対応した！深紅と白銀がぶつかり合い、激しい衝撃波が発生する！
数秒間の押し合いは結果的に白銀が押し負ける形となり、白銀は鳶雄の横の地面に叩
きつけられる。——が、すぐに立ち上がって押し負けた右拳を見つめる。

『ヴァーリ!?』

「偶然近くを通りかかってな、様子を見に来たんだが……」

白銀の鎧を身に纏うヴァーリは、ロイに目を向けながら言う。

「アザゼルから聞いた話は本当だったようだな」

「……また増援か。この前といい、今回といい、面倒だな」

ロイは足甲を消すと左手に弓、右手に矢を作り出す。そして慣れた様子で矢をつがえると引き絞り、矢を放つ。

避けてみると言わんばかりの真正面からの攻撃だが、ヴァーリたちは迷わずに回避した。直撃は危険だと、第六感が囁いたのだ。

回避を済ませた彼らはほぼ同時にロイに向かって飛び出していくが、ロイは次々と矢をつがえて連射していく。

鳶雄と刃がヴァーリの前に出ると、それぞれの得物で全ての矢を切り払い、射線をそらしていく。

「――追え」

ヴァーリたちの横を通りすぎていった大量の矢だが、ロイの眩きと共に空中で方向転換し、執拗にヴァーリたちを追い始めた。

空中に飛び上がって縦横無尽に飛び回り矢を避けるヴァーリだが、矢の速度は一切落ちることなく、むしろ少しずつ速くなっていった。

「しっしっいな……」

ヴァーリは手元に白銀のオーラを溜めると、自身に殺到する矢に向かってそれを放つ。

矢とオーラがぶつかり合い、爆煙が巻き起こる。ヴァーリの視界が一瞬遮られた瞬間、彼はその場を飛び退く。

ヴァーリがいた場所を先ほどのものよりもオーラを込められた矢が通りすぎていった。そちらは戻ってくることはなく、深紅の流星となつて夜空に消えていく。

草原を駆け回り、矢を切り払う鳶雄と刃の視界の端に、深紅の輝きが映る。そちらに目を向けると、右膝をついたロイが弓を構え、渾身のオーラを込めた矢を放とうとしているのだ。

ロイの目が見開かれると同時に、矢が放たれる！

空気を切り裂きながら直進する矢だが、鳶雄は得物である鎌で一閃して防いで見せた。だが、切り裂かれてなお矢の勢いは止まることを知らず、鳶雄の遙か後方にあつた木々を薙ぎ倒しいき、その音が聞こえなくなるほどになつてようやく消えた。

鳶雄と刃、ヴァーリがロイを挟むように距離を開けて立ち、隙を伺う。

彼らを交互に睨みながら、ロイは楽しげに笑みを浮かべた。

「ここまで楽しめるのは久しぶりだ。いや、戦いを楽しむつてのもおかしいか」

弓を消し、槍に切り替える。器用にくるくると回すと両手で握り、体勢を低く構える。

ヴァーリたちが警戒を強めた瞬間、ロイが視界から消える！ 鳶雄とヴァーリは目を見開きながら気配を頼りにロイの姿を探すなか、ヴァーリの背後に突きを放とうとしているロイが現れた。

『ヴァーリ、後ろだ！』

「ッ！」

鳶雄の声で反応しようとするヴァーリだが、無情にもロイの攻撃は放たれてしまう。ガキンツ！と甲高い金属音と共に鎧が穿たれ、血を吐きながら弾き飛ばされるヴァーリ。それでも意識は手放さず、地面に両足をついてスライドしながら勢いを無理やり殺す。

片膝をついて口元の血を拭うヴァーリ。ほんのわずかに笑みを浮かべながら、立ち上がるのとオーラを高める。

槍で肩を叩きながら、ロイは少し驚愕しながら言う。

「鎧」と身体を貫きに行ったが、ギリギリでオーラを盾代わりにしたか。いい反応だ」

「それは光栄だ。だが、俺ばかりに意識を向けていいのか？」

「ん？」

間の抜けた表情になるロイの背後を取った鳶雄は、そのまま鎌を横一文字に振り抜くが、垂直にした槍で防がれた。

「別に警戒していないってわけでもないんだがな」

不敵な笑みを崩さず、ロイは鳶雄を押し返すとそのまま槍を振るって弾き飛ばす。そこに飛び込んできた刃の一撃は避け、その場を飛び退いて一旦間合いをあける。

一度大きく息を吐き、こちらに近づいてくる気配のほうに目を向ける。

「待たせたな、ヴァーリ！つて、大丈夫かよ!？」

「遅かったな。ロスヴァイセはどうした」

「彼女にはルフエイがついています。安心してください」

美猴とアーサーが森の中から現れ、美猴は負傷したヴァーリに驚き、アーサーはロスヴァイセのことを報告した。

ロイは槍で肩を叩きながら、盛大にため息を吐いた。

「まだ来るのか……。来るなら小出しじゃなくて一気に出てこいよ、全く」

ふと、新たに現れた二人とは別の気配を感じてそちらに目を向ける。それと同時にロイの表情が一気に険しくなり、少しの驚愕の色も混ざっていた。

彼の視線の先にいるのは一人の女性。名前はわからない。だが、ロスヴァイセと出会った時と同様の感情が渦巻くのだ。

そんなロイの視線を受け、黒歌は複雑な表情になっていた。目の前にいる男は本当に彼なのか、他人の空似なのか、判別は出来ない。

ロイの意識が完全に黒歌に向いた瞬間、ヴァーリと鳶雄、刃が今までとは比にならない速度で動きだし、ロイとの間合いを詰める。

「ッー」

それを察知して回避しようとしたロイの足が何かに捕まれ、その場を動けなくなつた。

彼の足を掴んだのは美猴が事前に作り出し、地面の中を進ませていた分身だ。ヴァーリの高めたオーラと仙術の応用による気配遮断により、ロイに気付かれないように放つていたので。

いきなりの事態だがロイは素早く分身を突き殺して脱出しようとするが、既に手遅れだった。それを察したロイは再び黒い靄を全身に纏う。

その矢先にヴァーリの拳が腹部を捉え、重い打撃音と共に吹き飛ばされる。

地面に槍を刺して勢いを殺していくロイだが、そんな彼にヴァーリは右手を向ける。

『Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide!』

同時に光翼から半減を意味する音声が連続で発せられ、ロイのオーラが急激に小さくなつていった。

そして、そこに飛び出した鳶雄と刃がすれ違い様に同時に彼を一閃する！
魂さえも切り裂く一撃を受け、ロイは――、

『……何ともない、のか……？』

平然としていた。その結果に流石の鳶雄も驚愕し、刃はさらにロイへの警戒を高める。

オーラは小さくなった。だが、それ以外の何かに守られてロイに攻撃を通すことが出来ない。その何かが何なのかわからないのが問題なのだが……。

一様に眉を寄せるロイ以外の面々だが、ロイは黒い靄を右目に灯る炎に、槍を籠手に変えると黒歌に目を向け、その場から消える。

真つ先に反応したのは鳶雄だ。

『そつちに行つたよ！』

「任せろ！」

「どこからでも！」

美猴は如意棒、アーサーはコールブランドを構えるなか、黒歌は反応を返せないでいた。

「おい、どうし――」

「よそ見とは、いい度胸だな……！」

彼女を心配したのか、後ろに振り返った美猴が殴り飛ばされ、森の木に背中から叩きつけられる。

アーサーがその背後からコールブランドで突きを放つが、ロイの籠手に受け止められる。そのまま二人は超至近距離による攻防を繰り返して行く！

空間を穿ち、相手の死角からコールブランドの突きを放つアーサーの十八番が織り混ぜられたとしても、ロイはまるで全てを読んでいるかのように避け、ついに、

ドゴン！

「……な、なに……！」

「いい動きだが、まだまだだな」

ロイのボディーパープローで腹を打ち抜かれ、アーサーはその場に崩れ落ちかけるが、歯を食い縛って耐えた。だが、それも予期していたように放たれたロイの蹴りが横っ腹に炸裂し、弾き飛ばされる。

その場に残された黒歌はハツとしながらもロイに攻撃しようとするが、それよりも速く彼の手が伸び――、

「おまえも、他の奴とは違うな」

いつの間にか籠手がなくなっており、彼の暖かい手が愛おしそうに、優しく彼女の頬を撫でる。

「それって、どういふこと……？」

「言葉のままだが？」

ロイがそう返した瞬間、黒歌の意識が微睡む。今の一瞬で、何かしらの術をかけられたのは間違いなかった。

ロイは倒れかけた黒歌を抱き止め、そのまま肩に担ぐとそれ以外の面々に目を向けて口を開く。

「少しこいつを借りていくぞ。そのうち返すから、まあ、心配すんな」

「そんな言葉、受け入れると思うか！」

ヴァーリは明らかな怒気を込めた言葉と共に、両手からオーラを放つ！ロイが籠手を作り出して対応しようとした矢先、ロイの前に立ちはだかった小さな影によつてオーラはあっさりと掻き消された。

ロイの前に現れた小さな影の正体に、ヴァーリたちの表情は驚愕に染まる。

「ロイ、おそい」

「あー、悪い。でも逃がしてくれそうになくてな」

現在行方不明のはずのリリースだからだ。そのリリースはロイの言葉を受けると、彼の懐を探り始める。

「ちよ、止め、くすぐった……！」

「——あった」

笑いを堪えるロイの懐からリリスが引つ張り出したのは、魔方陣が描かれた紙切れだった。先日、ロイが悪魔の死体から追い剥ぎしたものだ。

リリスはそれをロイに手渡し、急かすように言う。

「おーらこめて」

「こーうか？」

ロイが言われるがまま紙切れにオーラを込めた瞬間、彼らを囲むように転移魔方陣が展開させ始める。だが、バグでも起こっているのか、ノイズ混じりだ。

転移の光が強くなっていくなか、ロイは不敵に笑みながらヴァーリたちに言う。

「次にやる時は、全力だ。それまで勝負は預けといてやるよ」

「逃がすか!」

ヴァーリ、鳶雄、刃が飛び出した瞬間、彼らの急所に向かって深紅のナイフがまっすぐ飛んでくる。それぞれがそれを防ごうとした瞬間に爆発、彼らの視界を塞ぐと同時に速度を無理やり落とす。

彼らが煙を突破した時には既に遅く、転移の光が一気に弾けてしまった。その中心にいたロイとリリス、黒歌の姿はない。

ヴァーリは歯を食い縛りながら拳を握り、鳶雄も静かに怒りをたぎらせる。刃は静か

に唸り、目を細めた。

そんな彼らの頬を、戦場には不釣り合いの優しい夜風が撫でる。

グレモリー眷属、ヴァーリチーム、刃スラッシュ、コード、ドッグ、狗とロイのファーストコンタクトは、考えうる最悪の形で果たされてしまった――。

l o s t 0 6 追われる者

「う、うにや……」

ロイに誘拐された黒歌は、目を覚ますと共に異常に重い瞼を開ける。それと同時に、彼女の目に飛び込んできたのは――、

「目が覚めたみたいだな。良かった」

彼女に覆い被さる形で顔を覗き込むロイの顔だった。言葉の通り、安心したように表情を緩めているが、問題があるとすれば、二人の顔が鼻が触れ合いそうなほど近いことと、ロイが上半身裸なことだろうか。

「な、なんて格好してるのにやあああああ！」

「ぐぼぼ!!」

顔の距離はともかく、彼の格好を見た黒歌は顔を真っ赤にさせながら拳を握り、いつつき彼の頬を撃ち抜く！いきなり過ぎたからか、それとも黒歌を相手に油断していたのか、それをもろにくらったロイは吹き飛び、壁に顔から叩きつけられた。

黒歌は興奮した様子で肩で息をしながら、周りを確認する。

捨てられた屋敷なのだろうか、ヒトの気配は目の前の彼ともうひとつしか感じられな

い。

彼女は天蓋つきのベッドに寝かされ、壁に顔から突つ込んだロイは頭がめり込み、どうにか引っこ抜こうとじたばたと暴れていた。

黒歌は落ち着きを取り戻すと共に、ロイは頭を壁から引き抜いて身体の汚れをはたく。

「せつかく水浴びしてきたつてのに、いきなり汚れるとは思わなかったぞ……」

彼の言うとおりの水浴びをしていたのだろう、髪が湿っており、運悪くそこに汚れがついてしまったのか、いつもの鮮やかな紅が少し濁つて見える。

ロイは髪を気にしながらも、黒歌に言う。

「てか、『なんて格好』とかなんとか言つたが、おまえに言われたくないわ。着物を大胆に着崩しやがつて」

「しつかり着るとキツイのにや！てか、あんた服は?」

「乾かしてる。洗つたのはいいが、あんまり着る服の持ち合わせがないことにさつき気づいてな」

ロイは部屋の出入口を指差しながら言うと、一度ため息を吐く。

「つたく、どこかもわからねえ場所に来たと思つたら、今度は女にぶん殴られるとはな」
「目が覚めていきなりあれじゃ、殴られて当然にや」

明らかな怒気を込められた黒歌の言葉を受けたロイだが、苦笑して受け流す。

「まあ、なんだ。飯の用意は出来ているが、どうする？あの子はもう食い始めているがな」

彼の言葉を受け、鼻を引くつかせて匂いを確認する黒歌。確かに何かしらの匂いを感じとることが出来た。

「別に寝ててくれても構わねえよ。予定が少し先伸ばしになるだけだ」

そう言つて部屋を後にしようとするロイを追うため、黒歌は素早く立ち上がつて数歩踏み出すが、いきなり身体を動かしてしまったためか足がもつれて転びかける。

「にゃ……」

「ツ……」

神速で動き出したロイは黒歌を抱き止めてやり、そのままベッドに座らせる。間近で彼の身体を見た黒歌は、あることに気づいて少しの驚愕と悲哀をあらわにする。

（こいつの身体、ボロボロね……）

無駄な筋肉のない引き締まったロイの身体の至るところには、大小様々な切り傷や刺し傷の痕があり、特に目立つのは右胸にある一際大きい切り傷の痕だろう。

ロイは心配そうに彼女の顔を覗き込みながら言う。

「あんまり無理すんな。睡眠系の術は得意じゃねえんだ、ちよつと加減を間違えたのか

もしれねえ」

「大丈夫にや。あと、私も何か貰っていい？」

「了解。運んできてやろうか？」

ロイの親切心からの発言だが、黒歌は首を横に振った。

「だから大丈夫にや。そつちまで行くわよ」

そう言つて立ち上がる黒歌を見て、ロイは苦笑する。

「じゃ、こつちだ」

ロイに先導され、部屋を出る黒歌。そのまま屋敷の廊下をすすんでいく。

捨てられてから余り時間は経っていないようで、廊下や天井はまだ綺麗であり、生活するには苦はなさそうだ。絵画などの調度品は前の主が持つていったのか、盗賊に持ち去られたのか、目立つものはない。

進むこと一分ほど。屋敷自体はそこまで広いわけではないようで、あつさり料理が並べられた部屋に到着した。

部屋に入って早々に、黒歌は再び驚愕の表情を浮かべた。

部屋の中央には大きめのテーブルが置かれ、それを囲むように椅子が配置され、そのひとつに女の子——リリスが座っているのだ。テーブルには小さめの鍋が三つ。

「ロイ、おかえり」

「ただいまつと。俺たちの分まで食べてないよな？」

「うん」

口元に食べかすをつけたリリスが、空になった鍋とにらめっこをしていた。行方不明だったリリスが死んだはずの男と共に目の前にいて、食事を済ませている。

出されている料理は、簡単に言うくと肉鍋だ。肉メインで野菜もちらほらと入っている。

席についた黒歌は、肉鍋を見ながらロイに問いかける。

「これ、何の肉にや……？」

「近くの山で獲った鹿のような何かの肉だ。空も紫色で、ここがどこなのかもわからねえんだよな……」

席について肉鍋に箸を入れながら言うロイ。彼の発言を受けた黒歌はとりあえず冥界にいることを理解する。

黙々と箸を進めるロイを横目に、黒歌も恐る恐る肉鍋を一口。

「…お、美味しい」

「初めての食材だったが、存外美味しくできたな」

黒歌に続いて味をそう断ずるロイ。意外と拘りがあるのかもしれない。

それから数分、食事に集中して黙りこむロイと食事を終わらせて手持ちぶさたのリリス

ス、その二人を気にしながらも食事を進める黒歌という形は変わることはなく、そのまま食事は終了となった。

食事の後片付けをするため、空になった三つの鍋を回収して部屋を後にしようとするロイ。黒歌は彼の後に続くこうとするが、ロイがそれを制する。

「ちよつとリリースを見ていてくれ。ざつとで片付けちまうから」

「え……」

ロイはそう告げると足早に部屋を後にしてしまう。部屋に残された黒歌とリリースとお互いに見つめ合うと、黒歌は小さくため息を吐いて懐からハンカチを取り出す。

「べたべたじゃないの。ほら、こつち来なさい」

「ん」

とたとたと駆け寄って来たリリースの口元を少し乱暴ながらも拭いてやりながら、黒歌は考える。

（あいつら、絶対心配してるわよね……）

何だかんだで結束が強い自身の仲間たちのことと、

（白音、大丈夫かによ……）

彼女の唯一の肉親である妹——白音のことだ。

ゆつくりしてしまっているが、彼女は仲間たちの目の前で誘拐されたのだ。取り残さ

れた彼らには、相当の心配をさせているはずだった。

不意に、リリスが黒歌の手を取って自分の頭の上に乗つけた。黒歌は一瞬困惑するが、そう言えばと思い出す。

(あいつ、よくこの子のこと撫でてたわね)

トライヘキサの核と戦う前、ロイはリリスにせがまれて何度か頭を撫でていた。おそらく、ロイの代わりに撫でてもらいたいのだろうと彼女は推理した。

そうと決まればやるだけなので、黒歌はできるだけ優しくリリスの頭を撫でてやる。くすぐったそうだが嬉しそうに笑うリリスの表情に、黒歌の表情も思わず緩む。

「さっそく懐かれたか。まあ、前に会ったことがあるのかもしれないがな」

黒いシャツを着て、黒い外套を脇に抱えるロイが戻ってくる。黒歌に甘えるリリスの姿を見て、優しい笑みを浮かべていた。

ロイが戻って来たことに気づいたリリスは黒歌から離れ、そのままロイに抱きつこうと駆け寄って行った。腰を落として彼女を抱き止めたロイは、腰に抱えた外套を椅子の背もたれにかけるとそのまま席につく。

「さて、おまえを連れ去ったのにはちよつとした理由があるんだが、説明していいか？」

「まあ、聞くだけ聞くにゃ」

ロイの対面の席に座りながら言う黒歌。彼女の反応にロイは頷くと、神妙な面持ちで

言う。

「おまえは『ロイ・グレモリー』を知っているな？」

「……ええ。まあ、死んじゃ——」

「そいつ、俺かもしれない」

真剣な顔で突拍子のないことを言い出したロイと、間の抜けた表情になる黒歌。

ロイは続ける。

「ロセ、ああ、ロスヴァイセのことな。あいつから色々話を聞いて、なんとなく思い出したんだよ。この子に会う前の記憶は一切なかったが、俺はロセと割りとき長い時間一緒にいることがあったんだなってな。だから、おまえを連れ去った。ロセと同じように、あいつらのおまえだけは『傷つけたくない』って思ったんだよ」

ロイの言葉に黙りこむ黒歌。今の話で彼が記憶喪失だということはわかったが、本当に『ロイ・グレモリー』なのかどうか、それはわからない。

黒歌が言葉を発しようとする、ロイは鋭い視線をあらぬ方向に向けた。疑問符を浮かべるしかない黒歌だが、ロイは立ち上がる、ロリスを彼女の膝に乗せた。

ロリスは愚図り、黒歌は困惑するしかないが、ロイは外套を纏うと部屋から出ようとする。

「ロリスを頼む。客が来たみたいだ」

「客って、何が来たのよ」

問いかける黒歌に、ロイは首だけで小さく振り抜くと絶対零度の殺気を放ちながらぼそりと呟く。

「よくわからん骸骨どもだよ」

その呟きを最後に部屋を出ていくロイ。『骸骨』という言葉で黒歌は死神の想像するが、ロイを追いかけようとするリリスに気づいて思考を切り上げる。

「ストップにや。あいつなら大丈夫だろうから、私と一緒にいるにや」

「ロイ、だいじょうぶ？」

「大丈夫よ。あいつが本当にあいつなら、こんくらい問題ないにや」

ロイたちが滞在する廃屋敷、そこに黒いローブを身に纏う者たち——大量の死グリム・リツバ神が押し入ろうとしていた。

一際大きく不気味なオーラを纏うリーダー格の死神が大鎌で扉を切り裂いて開くと

部下の死神が一斉に雪崩れ込む。

広い玄関ホールに雪崩れ込んだ死神たちの視界に、一人の男が入り込む。

玄関ホールのちようど中央を陣取り、余裕を見せているのかタバコを吸っている男――ロイは次々と入り込み、自分を取り囲む死神たちを睨み付けた。

彼を取り囲む死神たちの群れが左右に別れると、そこを通つてリーダー格の死神が廃屋敷に入ってくる。

リーダー格の死神が言う。

《あの娘を差し出せ》

「断る」

ロイは即答するとタバコを握りつぶすと黒い靄を身に纏い、両腕に深紅の籠手を生成、脱力して自然体で構える。

《ッ！》

『何度言われようと、あいつは渡さん。諦めろ』

リーダー格の死神は眼球のない双眸を光らせ、ロイの姿をはつきりと見ようとする。だが、見えない。魂を刈り取れることを生業とする彼らはある程度魂を見ることが出来るのだが、目の前の何かは不気味なものだった。

男に見えれば女に変わり、時には子供に老人に変わり、正確な姿を見ることが出来ない

いのだ。

《貴様、魂を喰らったのか?》

『何のことだかさっぱりだが、俺は降りかかる火の粉を払っただけだ』

ロイがそう言った矢先、リーダー格の死神が指示を飛ばす。

《なんであろうと構わん、殺れ!》

『はっ!』

リーダー格の指示を受け、一斉に飛び出していく死神たち。目の前の何かの強さは今までの戦闘でわかっている。ならば、物量で攻めるまでだ。

だが、彼らの計算違いがあるとすれば、ロイは現在進行形で強くなっていること。昨日までなら通じたかもしれないが、今のロイに物量は――、

『雑魚が』

無意味だった。ロイに向かって突貫していった死神たちは、一瞬で全員の頭が殴り砕かれて全滅した。

《な、なんだと!》

《怯むな。多少の犠牲は致し方ない》

一瞬で十人近い仲間が殺されたことに驚愕を露にする部下に、リーダー格の死神は冷静に告げると、自身の影から鎌を取り出す。

《私が押さえよう。リリスを探せ!》

リーダー格の指示に部下たちは頷くと一斉に散り、廃屋敷の奥へと消えていく。彼らを追いかけてようとするロイだが、リーダー格の死神が前を陣取って行かせまいとする。

『邪魔だ!』

《行かせん!》

放たれたロイの拳とリーダー格の死神と鎌がぶつかり合い、衝撃で屋敷の柱が軋み始める。二人は残像を残しながら高速で動き出し、ぶつかり合う。

ぶつかり合うごとに発生する衝撃波に、屋敷は悲鳴をあげ始め、天井からは埃だけでなく板の一部も落下してくる。

『やるもんだな……!』

《貴様には同胞を殺され過ぎたのでな、その時に送られてきた情報は十分にあるのだよ》
リーダー格の死神がそう言うのと、ロイは不敵に笑みながら籠手を消して刀身が身の丈以上に長い太刀を作り出すと、黒い靄を右目に集め、黒い炎に変える。

「それじゃあ、こいつを見たことはあるか?」

ロイはそう言うのと太刀を両手で握ると床と水平に構え、リーダー格の死神に背中を向けると、瞑目した。

素人から見ても隙だらけのロイに対し、リーダー格の死神は高速で動き出し、幾重に

も残像を残しながら接近していく。

ロイを間合いに入れた瞬間、リーダー格の死神は鎌を振り上げるが、それよりも早くロイが動き出す！

身体を捻って死神を正面に捉えると、太刀を振るう。脇腹と左肩、頭部を狙った三つの斬撃が、まったく同時に放たれたのだ！

《ツ！》

リーダー格の死神は刹那の反応で頭と左肩を狙った斬撃を防ぎ、脇腹を深く切り裂かれる。だが、それでも止まらずにロイの身体を鎌で切り裂きにくくが、

「フツ！」

間髪いれずに放たれた四撃目で首を飛ばされ、呆気なく絶命した。

ロイは太刀を消して気配を探る。と同時にその場を駆け出した。

リリスを預けた女性が、リリスを連れて屋敷を離れていくのだ。おそらく、死神に追われている。

考えている余裕はない。今の彼にとって、リリスを守ることが使命だ。理由はよくわからないが、あの子を守らなければと自分の内の何かが訴えているのだ。

それに、とロイは半日ほど前に誘拐してきた彼女のことを思い浮かべる。

「誰も死なせねえ……、死なせてたまるかよ！」

なにがなんでも守らなければ。自分^{ロイ}にとって、彼女は大切なヒトなのだから――。

「はあ……はあ……！」

「だいじょうぶ？」

「な、なんとかにや」

息を切らしながら、リリスを抱っこしている黒歌は息を潜める。おとなしくロイを待っていていれば、代わりに死神がドアをぶち抜いてくるとは、思いもしなかっただろう。急いでリリスを連れて脱出したが、追いかけて回されていた。

《さて、その抱えている子供をいただこうか》

「ッー！」

不意に背後から声が聞こえた。他の死神と比べ、少し高めの声だ。

黒歌は驚きながらその場を飛び退くと、いつの間にか一人の死神が佇んでいたのだ。

オーラからして上級か、下手をすれば最上級クラスの死神、屋敷に来た死神とは別に

森に潜伏していたのだろう。

《二度は言わんぞ?》

死神はそう言うのと、自身の影から大鎌を取り出す。黒歌は抱きかかえるリリスを守るように庇いながら、ジリジリと後ろに下がっていく。

《そうか。ならば——》

死神は消えると黒歌背後を取り、大鎌を振り上げる。それに気づいた黒歌は回避を諦めてリリスを庇うために背中を向け、衝撃に備えてきつく目を閉じた——。

森の中を駆け抜けるロイの視線の先で、まさに切られようとしている女性の姿があった。それを視認したと同時に、彼を頭痛が襲う。それと同時に、走馬灯のように何かが駆け抜けた。

どこか見知らぬ場所で、彼女を助けるために駆け抜けたことがあったのだ。彼女と共に笑いあったことがあったのだ。彼女を守るために戦ったことがあったのだ。

——間違いない、彼女は俺の大切なヒトだ。なぜ忘れていたんだ、彼女の名前は……

！

「——黒歌！」

《ツ！奴ら、もう少し粘って欲しいがな……！》

黒歌はゆつくりと目を開くと、後ろに振り抜く。そこには自分に背中を向けて槍を構えるロイと、彼と対峙する死神の姿があった。

死神は肩をすくめると闇の中に消えていく。

《貴公との勝負は次の機会だな。また会おう》

闇の中から響く死神の声。ロイはしばらく周りを警戒するが、死神の気配がなくなつたことを確認して二人に訊く。

「黒歌、リリース、無事か」

「だ、大丈夫にゃ」

「へいき」

黒歌はリリスを降ろして答え、疲れた様子で座り込み、リリスは元気よく手を挙げた。二人の無事を確認し、ロイはホッと息を吐くと手にしていた槍を消し、優しく笑みながら腰を降ろして片膝をつくと黒歌の頬を撫でる。

「ありがとうな、リリスを守ってくれて」

「なんてことないにや」

黒歌は強がるように笑うが、その手は震えていた。それに気づいたロイは優しくその手を握ってやり、励ますように言う。

「おまえはいつもふざけるのに、ここぞって時はやってくれるからな。たまには怖がつて欲しいんだが、まあ、助かったよ」

「……………」

ロイの言葉を受け、間の抜けた表情になる黒歌。そのままロイに訊く。

「あんた、私のことわかるの……………」

「ああ、黒歌だろ。何で忘れてたんだろうな、おまえは俺の——」

ロイが言葉を続けようとすると、不意に伸びてきた小さな手が彼の頬を引っ張る。

「むう〜」

「あによ、りりしゅしゅちゃん？ひたいんらけろ」

不機嫌そうなりリスに、若干涙目になりながら抗議するロイ。

黒歌は二人なやり取りを見ながら可笑しそうに笑うと、立ち上がる。

「それで、どうするにや？あいつらのところに戻る？」

リスの手を離してもらい、ロイは赤くなつた頬を擦りながら言う。

「いや、駄目だな。戻ったら、あいつらに余計な負担をかけちまう。俺たち色々な奴に追われているからな……」

「戻った方が安全じゃない？」

「そうかもしれないが、相手が相手だ。冥界政府の誰かが繋がっている可能性もある」

「あら、恋人の魔王様とセラフ様を頼ればいいじゃないの」

黒歌が何となく言った言葉に、ロイは懐疑の視線を彼女に送る。

「恋人って、ロセとおまえだけじゃなかったか……？」

「完全には戻ってないのね……」

何もなかった男が、戦いの中で何かを取り戻し始めていた。だが、全てを取り戻せるのは、もう少し先の話になりそうだった――。

l o s t 0 7 戦場へ

「今度は黒歌か……」

兵藤家のVIPルーム。俺——兵藤一誠を含めたオカ研メンバーとヴァーリチーム、鳶雄さん、アザゼル先生が集まり一様に表情を険しくさせていた。

アザゼル先生が言う。

「ロスヴァイセは無事だ。例の男に術をかけられたようだが、無事に解除できた。が、色々と溜まっていたんだろうな、また眠っちまったそうだ」

アザゼル先生に続いて、表情に若干の怒りをにじませたヴァーリが言う。

「その例の男だが、一言ではよくわからないとしか言えないな。半減は通ったが、ダメージが通らなかった」

鳶雄さんが続く。

「一撃、確実に当たりましたが、特に負傷した様子はありませんでした。何かに守られているのか、そもそも当たっていなかったのか……」

二人ともその時のことを思い出してか、怪訝そうな表情をしていた。鳶雄さんの強さは俺たちも十分知っているし、ヴァーリの強さだってわかりきっている。

その二人ですらロイを止められず、今度は黒歌が連れていかれた。あいつは何が目的でロスヴァイセさんと黒歌を……。

リアスが鳶雄さんに訊く。

「それで、例の男とロイお兄様の戦い方に何か似ているところはありましたか……？」

「いいや、ロイ殿と似た点は速度と技量が中心なところ意外はなかったよ。鎌と弓なんて、彼が使ったところを見たことがあるヒトは？」

鳶雄さんの問いに全員で首を横に振る。ロイ先生は剣と銃をメインに時々拳で、ごく稀に鞭なんかで戦っていた。弓と鎌なんて、使っていたところは見たことがない。

小猫ちゃんが弱々しい声音で言う。

「…姉様、大丈夫でしょうか……」

彼女の言葉に、俺たちは思わず黙ってしまう。色々とわだかまりがあつたとはいえ、ようやく仲が修復されてきたんだ。そんな中でこれでは、余計に心配しているんだろう。

レイヴェルが小猫ちゃんの肩に手を置きながら言う。

「きつと大丈夫ですわ。何て言つたつて小猫さんのお姉様ですもの」

「そ、そうだよ小猫ちゃん！きつと大丈夫だよ！」

レイヴェルに続いてギャー助も小猫ちゃんを励ます。同級生として、二人は俺たちが

上に小猫ちゃんのことを気にかけてくれているのだろう。

「うん。ありがとう、二人とも」

少し余裕が出来たのか、表情が気持ち明るくなる小猫ちゃん。当の二人は照れ臭そうに顔を赤くしていた。

俺も何か言つてあげようとする、アザゼル先生の耳元に連絡用の魔方陣が展開される。情報を伝えられたアザゼル先生の表情は一気に険しくなつていった。

「おまえら、どうやら仕事のようだ。テロリストどもが暴れている」

「わかつたわ、場所はどこなの？」

立ち上がりながら訊くりアスに、アザゼル先生は表情を強張らせながら答える。

「——タンニーンの領地だ」

テロリストの牙は、俺たちの仲間の喉元近くまで迫っていたようだ。

「……………」

「どうかしたにや?」

冥界の森の中。突然立ち止まって明々後日の方向に視線を向けたロイに、寝ているリスを抱っこする黒歌が訊いた。

「あいつら、暴れ始めたか……」

「あいつらつて、どいつら?」

黒歌の問いかけを無視して、ロイはリリースごと黒歌をお姫様抱っこし、深紅の鱗に覆われたドラゴンの翼を展開する。

「俺たちを追いかけてくる連中だが、俺たちが追っている連中でもある」

「また死神かにや?」

「いや——」

手短に答えたロイは飛び上がり、視線の向けた方向に身体を向ける。

「——ただの獣だよ」

ロイはそう言うのと、抱える二人に出来るだけ負担のかからないようにゆっくりとだが、一気に加速していく。

記憶の欠けたロイと、いきなり抱き上げられた黒歌、寝ているリリースと、この三人には知るよしもないが、目指す場所はタンニーンの領土の一角。

奇しくも、『D×D』と目指す場所は同じなのだった。

冥界悪魔領、タンニーンの領土。

元龍王タンニーンが統治し、多くのドラゴンが住むその場所は、未曾有のパニックとなっていた。

突如として現れた数十体の化け物と、それらに指示を飛ばすロープ姿の不審者たち。強力な結界とドラゴンたちによって守られているはずのこの場所は、地獄のような戦場に成り果てていた。

『貴様ら、目的はなんだ！』

怒鳴りながら化け物に火炎を吐き出し、化け物を焼き払うタンニーン。だが、魔王クラスと呼ばれる彼の攻撃を受けても、化け物は怯むだけで進軍は止まらない。

化け物の見た目は様々だ。ヒト型であったり、四足歩行の獣のような何かであったり、タコや昆虫のように複数本の足があるものもあり、ひとつとして同じ見た目のものはいない。共通点があるとすれば、身体を覆うように黒い毛が生えていることと、所々

に血のように赤い鱗があることか。

タンニーンの前にローブ姿の男が現れ、不敵に笑む。

「いえ、少々データの採取にご協力をしていただこうと思ひまして。元龍王とその配下、これ以上の相手はそうはいないでしょう？」

男はそう言うのと、暴れまわる化け物たちに目を向ける。全くと言つていいほど統制はとれていないが、個々が非常に強い。ドラゴンたちの攻撃を受けても怯む様子がなく、次々と葬つていく。

「他の都市も考えましたが、一方的な虐殺ではいいデータが取れないことと、結界を抜けるのが面倒なので辞めました。まあ、多少は抵抗してもらわないね」

化け物とドラゴンたちの戦いを見ながら不気味に笑う男。タンニーンは彼を睨みながら歯を食い縛る。

『外道が……！』

「テロリストに外道もないもないでしょう？早めに終わらせなければ『彼』が来てしまうので、ペースを上げさせてもらいますよ」

そう言い切ると、男は手元に大量の魔方陣を展開し、それらを化け物たちに向け始める。

彼が何かしようとしていることを察したタンニーンは、その男に火炎を吐き出そうと

するが、横合いから飛んで来た何かに殴り飛ばされる！

十メートルを越える巨体を一撃で殴り飛ばしたのは、他の化け物と違い、どこか冷静な雰囲気を持つモノだった。姿はドラゴンを思わせるもので、人間の大人とたいして変わらない体軀は、全身を血のように赤い鱗に覆われている。

「では、任せますよ」

男の言葉にドラゴン型は頷くと、自分で殴り飛ばしたタンニーンを睨む。タンニーンは殴られた頬を擦り、明確な怒りを向ける。

『我らの姿を模すとは、侮辱しているのか！』
「模したと言われても、その姿はまったくの偶然なのですがね……」

男はため息混じりに言うと、魔方陣の輝きが強くなっていた。その輝きを受けた化け物たちはピタリと止まり、動かなくなるが、全体の三割ほどは効いていないかのように暴れ続ける。

男はその結果を受けて眉を寄せるとあごに手をやって考えるが、すぐに笑みを浮かべて再び魔方陣を動かす。

動きを止めた化け物たちが再び動き始めるが、先ほどとは全く違う、統制の取れた軍隊のように攻撃を始める。止まらなかった三割を支援するように、残りの七割が動き始めたのだ。

「計算通りと言ったところですか。まあ、失敗は仕方のないことですね。『失敗は成功の母』とよく言いますし」

『チツ！小癩な！』

彼の近くでは、ドラゴン型とタンニーンが周りを巻き込みながら、正確にはドラゴン型がわざと巻き込むように立ち回って戦闘を繰り広げていた。おかげでタンニーンは本気を出せず、もはや一方的な戦いとなってしまうている。

『ぐうー！』

ドラゴン型の猛攻の前に、タンニーンは地面に叩きつけられ、呻き声をあげた。ドラゴン型の強さはタンニーンと同じかそれ以上、最上級悪魔か、下手をすれば魔王クラスの可能性もある。

タンニーンは息を荒くしながら立ち上がろうとするが、ドラゴン型が脳天に踵落としを決めて地面に這いつくばらせる。

「さて、この調子なら壊滅は——おや、来ましたか」

ドラゴン型と周辺の戦況を確認していた男は、ある方向に目を向けながら笑んだ。

視線を向けた先には、獅子を模した全身プレート・アーマー鎧を纏った男が次々と化け物を殴り飛ばしているのだ。

『D×D』のメンバーにして大王家次期当主、サイラオーグ・バアル。ふふ、これはい

「データが取れそうです」

「ハッ！」

獅子の鎧を身に纏う男性——サイラオーグ・バアルは次々と謎の化け物を殴り倒し、進撃していた。後方では彼の眷属たちと同じく『D×D』に所属するシーグヴァイラ・アガレスとその眷属が負傷したドラゴンの治療や敵の迎撃に勤しんでいる。

彼らを横目に確認しながら、真正面にいた化け物を豪快に殴り飛ばす。化け物は快音と共に吹き飛ばされ、近くの岩に激突するが、大きなダメージがないのかすぐに立ち上がる。

動きは単調だが異常なまでにタフであり、パワーもなかなか。一瞬の油断が間違いなく死に繋がるだろう。油断をすればの話だが。

「ッ！」

再び化け物を殴り飛ばしたのはサイラオーグだが、すぐに何かを察してその場を飛び

退く。一瞬の間を開けて、彼のいた場所に巨大な影が激突した！

「タンニーン様！」

影の正体に気づいたサイラオーグはすぐ脇に着地、彼の無事を確かめる。

「サイラオーグ・バアル、来るぞ！」

タンニーンの警告と共に、彼らの前にドラゴン型が降り立つ。放つ重圧は先ほどよりも強くなり、サイラオーグを警戒しているのは確かだ。

サイラオーグが拳を構えた瞬間、ドラゴン型の姿が消え、背後に現れた。だが、サイラオーグも甘くはない。瞬間的に敵の動きを見切り、ドラゴン型が背後を取った瞬間、地面が碎けるほど踏ん張ると身体を捻り、その勢いを乗せた拳を放つ！

ドラゴン型が拳を放ったのはそれと同時にであり、お互いの拳がお互いの胸部を撃ち抜いた！

「ぐー！」

『つ……！』

お互いに半歩下がる結果になったが、十分に近い。そこからお互いに退かずに殴りあつていく！

ドラゴン型の拳はサイラオーグの纏う鎧を一撃で碎き、生身へと届かせる。

サイラオーグの拳はドラゴン型の鱗を碎き、確実にダメージを通していく。

凄まじい快音が連続で響くが、それに混じった鈍く潰れるような音、何かが砕ける乾いた音が一人と一体の殴りあいの壮絶さを周囲に知らしめる。

「うおおおおおおおっ！」

サイラオグの雄叫びと共に渾身の力が込められた拳が放たれ、それを真正面から受けたドラゴン型は吹き飛ばされる。だが、空中でうまく体勢を整えて着地を決めた。

口から流れる血を拭い、サイラオグは問いかける。

「貴様、何者だ。いや、それよりもその力はなんだ？」

『……………』

ドラゴン型は答えず、握っていた拳を開くとそれぞれの指を少し曲げ、爪を立たせる。戦法を変えてくるのは明らかだった。

サイラオグが身構え瞬間、ドラゴン型の姿が再び消える。先ほどとは段違いの速度に、サイラオグは反撃の選択肢を捨てると腰を落として地に根を張るように踏ん張り、腕を顔の前でクロスさせ、防御の体勢に入った。

彼が体勢を整えた矢先、鎧に幾重もの切り傷が生まれ、剥がされていく。鎧が剥がされ、修復するよりも早く生身にも傷が生まれ、おびただしい量の血が吹き出す。

歯を食い縛り、反撃の隙を伺うなかでサイラオグはあることに気づく。

（攻撃に魔力が込められている。だが、この魔力の質は——）

彼がほんの一瞬その思考に意識を傾けた隙を、ドラゴン型は見逃さなかった。神速で動き続けるドラゴン型の爪が、サイラオーグの両足の腱を捉える！

「ッー」

不意打ちで腱を切られ、両膝をつくサイラオーグ。だが、彼の目から闘志の炎は消えていない。

少し目が慣れ、ドラゴン型の動きが見えるようになってきたなか、ドラゴン型はいきなり後ろに飛び退いてサイラオーグと距離を取った。

ドラゴン型は両手を前に出し、そこに魔力を溜め始めた。

——その魔力は怪しくも美しい深紅の光を放っていた。

サイラオーグはその輝きで先ほどの思考の答えにたどり着き、表情を驚愕の色に染める。

「まさか、貴様は……！」

ドラゴン型は躊躇うこと魔力を解き放ち、深紅の波動がサイラオーグに放たれる。

地面を抉り取りながら突き進んでする波動を真正面から受けようとするサイラオーグだが、彼の前に割り込んだ影によって波動は掻き消された。

「また会ったな……」

『……………』

右目に黒い炎が灯し、深紅の籠手を両腕に装着したロイは、右胸を人差し指で掻きながら、絶対零度の殺気を放つ瞳でドラゴン型を睨む。

それを受けたドラゴン型は同じように殺気立ち、体勢を低くして構えを取った。

ロイは直立したまま脱力して構え、明々後日の方向に目を向けながら言う。

「黒歌、こいつとその子のこと、あとさつき伝えたこと頼むぞ」

「……あ、あんた、いきなり投げ飛ばしておいてよく言うわね」

ふらふらの足取りで岩影から出てくる黒歌。彼女の登場にサイラオーグは驚くが、それ以上に気になるのは彼女が連れている少女だろう。

だが、今は戦闘中だ。目の前の敵と、それに対峙する男に目を向ける。

静かな殺気を放つ一人と一匹の放つ圧で、彼らに挟まれた空間が歪み始める。

どこまでも静かな殺気を放つ彼らの戦いが、始まろうとしていた。

108 助言

ドラゴンたちの咆哮と爆音が鳴り響く戦場のほぼ中央、ロイとドラゴン型の化け物が静かな殺気を放ちながら睨み合う。

静寂が一人と一体の空間を支配するなか、彼らの近くにドラゴンの放ったオーラの流れ弾が当たり爆発が巻き起こった。それを合図に彼らは飛び出していく！

ロイとドラゴン型はほぼ同時に拳を放ち、真正面から衝突させた！

「にやー！」

「くっ……い！」

凄まじい衝撃波が黒歌とサイラオーグを襲い、拳自体には掠りもしないのに、殴られたような鈍痛が全身を駆け抜けた。

黒歌に抱きかかえる形で庇われたリリスは、ひよこりと顔を出してロイの様子を探る。彼女の視線の先では、深紅の籠手を装着したロイがドラゴン型と殴りあっていた。

サイラオーグとの殴りあいと違うことがあるとすれば、お互いにノーガードの殴りあいではなく、確実に相手の拳を避け、時にはうまく受け流していることか。おかげで初撃の時ように衝撃波は生まれない。

「ラァッ！」

殴りあいは永遠に続くかと思われたが、ロイのほうが一枚上手だった。仙術による感知能力の向上で相手の動きを見切り、カウンターの一撃をドラゴン型の胸部に叩き込んだのだ！

『……………っ！』

手痛い反撃をもらい、半歩後退るドラゴン型。ロイがその隙を見逃すはずもなく籠手を消して脚甲を装備すると、そのまま回転の勢いを加えて右足で上段回し蹴りを放つ。

「マジかよ……………」

——が、彼の読みは甘かった。今のカウンターでドラゴン型に与えたダメージは微々たるものであり、あつてないようなものだった。

つまるところ、ロイとしては追撃の一撃だったが、ドラゴン型からしてみれば隙だらけの大振りの一撃となったわけだ。

ドラゴン型は片手でロイの蹴りを受け止め、そのままジャイアントスイングの要領で投げ飛ばした。手を離す瞬間、ついでと言わんばかりにロイの足首を異常に捻ることも忘れない。

「——ッ！」

右足首に鈍い痛みを感じ、ロイは表情をしかめる。だが刹那的に意識を切り替えて体

勢を整えると翼を展開、勢いを殺してゆっくりと地面に足をつける。

「いつて……」

それと同時に右足首の痛みが余計に強くなる。見てみると、足首が異様な方向まで曲がってしまっていた。具体的に言うと、爪先が後ろ向きになるほど曲がってしまっている。

ロイは深く息を吐きながら脚甲を消すと右足を上げ、足首に手を添えると一気に力を込め――、

「フンッ！」

無理やり元の方向に戻す。『ゴキヤァ！』と聞くからにエグい音が周囲に響くが、ロイ自身は特に気にした様子もなく右足を地面につけると、何回か足首を回す。

「投げる瞬間に足首を砕きにくるとは、相変わらずえげつねえな……」

右足の爪先をトントンと地面に当てながら、ロイはドラゴン型に言うが返答はない。それは予想通りだったようで、ロイは左手に弓を、右手に矢を作り出す。

手慣れた様子で矢をつがえ、目一杯引き絞って放つ。放たれた矢は空気を切り裂いて一直線にドラゴン型に向かっていく。

対するドラゴン型は高速で迫る矢を払おうと腕を風ぐが、突然矢の軌道が変わる。ドラゴン型の腕を避けるように下に潜り込むと急上昇、アッパーカットのように顎を撃ち

抜いた！

『っ！』

盛大な爆発と共に仰け反るドラゴン型。ロイは次の矢をつがえ、放った。足を踏ん張って転倒を避けたドラゴン型の視界には、再び自分に向かつてくる一本の矢が映る。

先ほど迎撃に失敗したドラゴン型は回避しようとするが、突然矢が弾け、内側に仕込まれていた細かく鋭い大量の矢が襲いかかる。

ドラゴン型は回避の選択肢を捨て、自分の身体を深紅のオーラで包み込む。矢が直撃したのはその一瞬後のことだ。先ほどと同じ規模の爆発が連続で巻き起こり、爆煙がロイたちの視界からドラゴン型の姿を隠す。

ロイは次の矢をつがえ、それを天高く放った。一拍間を開けて、深紅の輝きを放つ極太の柱が爆煙を切り裂いてドラゴン型に襲いかかる！

地面ごと対象を穿つ一撃を受ければ、並の生物なら跡形もなく消し飛ばさざらう。だが、相手は並の生物ではない。得体の知れない化け物なのだ。

柱が消えていき、ドラゴン型の姿が現れる。彼が立つ場所を残して地面には大きな穴が開き、身体は血まみれになってはいるが健在であり、その瞳に宿る殺気は一切弱まっていない。

ロイは苦笑しながらため息を吐いた。

「本気で撃つたんだが、タフな野郎だ」

弓を消して槍を作り出し、それを両手に握って体勢を低くして構える。

ドラゴン型は首をゴキゴキと鳴らすと、ロイに答えるように同じく体勢を低くして構えた。

黒歌が心配そうに戦いを見つめるなか、一人と一体は彼女の視界から消え失せたのだった――。

俺――兵藤一誠は、オカ研の仲間たちとヴァーリチームという久しぶりのメンバーで謎の怪物たちとの戦闘を繰り返していた。ソーナ先輩とその眷属は、万が一他の場所への襲撃に備えて待機中だ。

ここがタンニーンのおっさんの領地ということもあつてか、ここに住むドラゴンたちも協力してくれているが、戦況はいいとは言えなかった。

「クソ！なんて固さだよ……！」

怪物の一体（蜘蛛のような姿）を全力で殴り飛ばしたが、ピンピンしていた。いくらダメージを与えても撃破には至らず、すぐに立ち上がって攻撃を再開してくる。

横目で他のメンバーの方を見てみると、一様に苦戦を強いられていた。動きも単調だから攻撃を貰うなんてことはそう簡単にはないが、バカみたいにタフだ。火力バカと言われる俺たちでも決め手に欠ける状態だった。ヴァーリチームの面々も、どうにも決め手に欠けるようだ。神を殺せると言われるフェンリルでさえも。

「（ ）までして削りきれないととなると、ただの魔物ではなさそうだな」

俺の背後に背中合わせになるように、デュランダルとエクスカリバーを構えるゼノヴィアが現れた。彼女が相手取っていた怪物（象のような姿）は全身を斬られまくっているが、まだ生きており、這いながらも彼女に向かっていこうとしている。

何か弱点でもわかれば話が変わるんだが、それを探ろうにも数が多すぎる。一体や二体ならともかく、怪物は俺たちの周りだけで数十体。戦場全体にこんな奴らがいるとなると、数は百じゃきかないかもしれない。

「消し飛びなさい！」

「雷光よ！」

リアスと朱乃さんが一体の怪物（狼のような姿）に火力を集中させ、滅びと雷光が混ざった塊を放つ。怪物は避けようともせず、真正面からそれを受けると、そいつの頭が

吹き飛んだ！残された身体がうつ伏せに地面に転がり、どす黒い色の血をぶちまける。あれなら確実に倒れるはずだ。頭がなくなったら流石に生きてはいられないだろう。俺が小さくガツポーズをしているなか、異変が起こる。頭を吹き飛ばされた怪物の首の肉が蠢き始め、少しずつ何かを形成していく。

怪物はゆっくりと身体を起こし、リアスの方へと足を引きずりながら近づいていく。「まさか、そんなことって……！」

驚愕するリアスの視線の先では、頭を再生させた狼型の怪物がいた。だが再生は完璧ではないらしく、皮膚や体毛が一切なく、筋肉や脳みそ、骨と思わせるものが丸見えになっていた。

リアスと朱乃さんが再び魔力を放とうと手を向けた矢先、上空から何か落下してきた！それは狼型の怪物を押し潰し、大量の砂塵を舞わせる。

落下してきた何かが深紅の残光で砂塵を切り裂き、その姿を現す。それと同時にリアスの表情がいっそう険しくなった。

「ツ！あなたは……！」

落下してきたのは、紅髪に深紅の槍を手に持った男性——ロイだったのだ！凄まじい速度で地面に叩きつけられたはずだが、直立不動で立っており、目立ったダメージはない。

ロイは俺たちに目を向けることなく、自分で押し潰した狼型に槍を突き立てる。狼型は一度ビクリと身体を跳ねさせると動かなくなつた。一拍開けて、狼型はどす黒いドロドロの泥のようなものになつてしまふ。

何かしらの手を使って狼型を仕留めたようだが、何をしたのかがわからない。だが、向かつてくるのなら対処しないといけない。現に、ヴァーリチームの面々は少し殺氣立っていた。

俺たちが怪物とロイに警戒するなか、再び空から何かが降下してくる。ドラゴンを思わせる怪物だが、他の奴と比べるととても静かで、それでいて圧倒的なオーラを身に纏っていた。

明らかに一体だけ別次元なのがわかるが、そいつはロイと対峙しているようだ。

不意に俺たちにロイが声をかける。

「その獣どもの身体のどこかには所謂^{いわゆる}心臓に当たる部分、核^{コア}がある。そこを潰さねえといくらやつても死なねえから、まあ、上手くやれよ」

ロイはそう言うのと、ドラゴン型に向かつて飛び出していった！俺では見えない高速の攻撃が放たれていくが、ドラゴン型はそれらを見切つて避けていく。

怪物たちはドラゴン型の邪魔にならないように、再び俺たちに向かつて飛び出してくる。俺たちは迎撃を強いられるが、先ほどのロイの言葉を思い出す。

核^{コア}を見つけてそこを潰せばいいということだが、それがどこにあるのか検討もつかない。この際身体を全部吹き飛ばしてしまつたほうが楽に思えてきた！

俺が怪物を殴り飛ばすと、小猫ちゃんが吹っ飛ばされた怪物を指差してイリナに言う。

「その個体の右足の付け根に気が集中しています！そこを破壊してください！」

「わかつたわ！」

イリナは飛び出してオートクレールでそこを貫くと、怪物が動かなくなり、一拍開けてドロドロ口になっていった。

小猫ちゃんが見つつけられたつてことは、仙術を扱えれば弱点を見つけることが出来るつてことなのか？ここにいるメンバーで仙術を使えるのは小猫ちゃんと、ヴァーリチームの美猴も使えたはずだ。だが――、

「そんな期待した目で見るなよ！こつちも忙しいんだつての！」

怪物二体を同時に相手取つていて、核^{コア}を探る余裕はなさそうだ。

小猫ちゃんに頼りきりにしてもいいが、彼女の負担が大きすぎる。全てを倒しきるまで集中がもたないだろう。それほどまでに怪物の数が多すぎる。

俺たちが怪物を迎撃しながらも手を探るなか、突然指示が飛んでくる。

「象は鼻の付け根、蜘蛛は頭と胴体の繋ぎ目、蝙蝠は眉間、蛇も同じ場所にや！」

『ッ！』

俺たちは瞬時に反応して各々の相手取っていた怪物を撃破していく。って、今の声は聞き覚えがある。

その声の主が小猫ちゃんの真横に降り立つ。

「姉様！」

「心配かけたわね。お待たせにゃ！」

声の主は黒歌だった。ロイに連れていかれと聞いてはいたが、あの様子では大丈夫そうだ。

ふと、彼女がおんぶしている女の子の存在に気づく。オーフィスによく似た黒いドレスに、マントのような黒い外套を羽織った女の子——リリースだ。

驚く俺たちを他所に、ドラゴン型と互角の戦闘を繰り広げるロイがこちらに叫ぶ。

「黒歌、あいつはどうした！」

「眷属と合流したから大丈夫にゃ。あと、化け物の倒し方も伝えといたにゃ」

「それは助かるなっ！」

ドラゴン型を思いっきり蹴り飛ばし、そのまま槍を投げる！音を置き去りにする速度で飛ぶそれは、ドラゴン型にあっさり叩き落とされた。

ロイは鎌を手元に作り出し、地面を滑るといふ死神を思わせる動きでドラゴン型に向

かつていく。ドラゴン型は翼を広げて飛び出していき、ロイの鎌とドラゴン型の拳がぶつかり合い、激しい衝撃波が発生する！

そのまま二人は他者の介入を許さず、圧倒的な速度とパワーの戦闘を繰り広げていく。余波で地面が抉れ、近くの巨岩が切り裂かれ、砕け散っていった。

両者一步も引くことはなく、相手の動きを最低限の動きだけで避け、反撃に転じていく。見ているこつちではどつちがどう攻撃しているのかもよく分からないほどだ。

ヴァーリは怪物を殴り飛ばし、黒歌に問いかける。

「無事でなによりだが、あの男と何かあったのか？」

黒歌は少し考ええると、ドラゴン型と渡り合うロイに目を向ける。そして悲哀を込めた声音で俺たちに言った。

「あいつは、ロイ・グレモリーよ。間違いないわ」

「ツ！それは本当なの!？」

驚愕するリアスに、黒歌は小さく一度頷いた。

「ただ、記憶のほとんどがなくなってるみたい。色々と話してみても、私とロスヴァイセのことは辛うじて感じてんだけど、他の連中のことは全く……」

黒歌の言葉を信じるなら、ロイは本当にロイ先生で、記憶がないから俺たちのこともわからなかったと。とりあえずそれは後にして、どうしてロイ先生はリリースを連れてい

るんだ？

黒歌の言葉に俺たちが何とも言えない空気になるなか、ヴァーリがリリスを見ながら訊こうとした矢先、盛大な爆音が俺たちに届く。

そちらに目を向けると、吹き飛ばされたドラゴン型が片ヒザをついており、対峙するロイ先生も片ヒザをついていた。いつの間にか槍から籠手に変わっているから、殴りあいになっていたのだろう。

ロイ先生が息を切らしながら、ドラゴン型に言う。

「おまえ、タフにも程があるだろ。今まで会ったなかでも一番だぞ……」

ドラゴン型は首をゴキゴキと鳴らしながら立ち上がり、再び突撃の体勢に入る。

「おっと、そこまでです」

突如響く第三者の声。声の主はドラゴン型の横に降り立ち、俺たちに目を向けてきた。

声からして男だろうか、ローブにフードで顔は口元以外はよく分からない。男の登場と同時に怪物たちが一齐に下がり、攻撃が止まった。

男は優雅に一礼しながら口を開く。

「初めまして『D×D』諸君。今までのご活躍、私の耳にも届いていますよ」

謎の男の登場に驚くしかない俺たちだが、男は顔を上げると続ける。

「まあ、挨拶はこのくらいにして。私は『クリフォト』の残党、そのリーダーをしている者です」

男の言葉に、俺たちはほぼ同時にそいつを睨み付ける。

男は特に気にした様子もなく言葉を続けた。

「そんなに睨まれても困るのですが、気持ちにはわからなくもありませんがね」

「あなた、ここを襲撃した目的はなんなの」

リアスの問いに男は周りを見渡しながら言う。

「主な目的はデータタの採取です。この獣たちのコントロールも完全ではないので」

「『主な』ということとは、他にも何かあるということかしら？」

「ええ。もうひとつは——」

男はゆっくりりと手を上げ、ロイ先生を指差す。

「そのの——」

「ヒトを指差すなって、誰かに教わらなかったのか？」

「……」

ロイ先生の突然の一言に、男は言葉を詰まらせる。

ロイ先生は立ち上がり、男と俺たちを警戒しながらもこちらに、正確には黒歌とリリスに歩み寄ってきた。

男はひとつ咳払いをして言葉が続けた。

「その男、『燃え滓』に興味があつたのでどうにか接触したかつたのですよ」

——『燃え滓』。

男は確かにそう言った。あいつはロイ先生が記憶を無くしていることを知っているからそう表したのか、それとも何かしらあつてそう呼んだのか。

「『燃え滓』ね。記憶がない俺にはぴつたりな呼び方もな」

ロイ先生は苦笑しながら男に返すが、「だが——」と言いながらいきなり表情を引き締めて、黒歌とリリスを守るように立ちはだかる。

「記憶がない俺にも守らなきやならねえヒトがいる」

確かな覚悟が込められた言葉。その時、俺はあることに気づいた。ロイ先生の目の色が変わっているのだ。この前に遭遇した時は黒かつたけど、今は碧あお、リアスやサーゼクス様、昔のロイ先生と同じ色をしているのだ。

リアスたちもそれに気づいたようで、何となくだが表情が緩んでいた。記憶がなくなつても、このヒトの底にあるものは変わらないようだ。俺たちは眼中になさそうだけど！

ロイ先生の言葉を受け、男は口元を不気味に歪ませる。

『守らなければならぬヒト』、仲間、恋人ですか。なるほど、それは一考の価値はあり

そうですね。獣たちにそのような意識を組み込めれば、ククク……！」

不気味に笑う男に、珍しくヴァーリが問いかけた。

「貴様、何者だ。オーラからして悪魔だが、貴様のようなものは感じたことがない」

「麗しきルシファー様の系譜、その末裔。ああ、あのお方の血が、あなたの身体を流れているのですね……！」

興奮した様子でヴァーリの全身を舐め回すように見つめながら、男はそう呟いた。関係のない俺まで鳥肌が立つほど、男の声は気味の悪いものだった。

それを諸に受けたヴァーリは、

「っ……っ……！」

珍しくドン引きしていた。その横では、ロイ先生も「うわあ……！」と露骨に嫌そうな顔をしている。

男は「失礼、取り乱しました」と言うと、ドラゴン型に目を向ける。

「この特異個体と『燃え滓』。とてもいいデータが取れましたよ。やはり、私の計算通りでした。あなたとこの個体は引かれあっている」

その言葉を受けて、ロイ先生はドラゴン型を睨む。相手も睨み返してきているが、お互い体力的に限界なのか、いきなり仕掛けるなんてことはなかった。

男がそう言うってドラゴン型とロイ先生をそれぞれ見たあと、怪物たちの足元に次々と

転移魔方陣が展開され、そのまま展開の光に消えていく。

男とドラゴン型の足元にも転移魔方陣が現れ、転移の光に消えていくなか、リアスが男に叫んだ。

「待ちなさい！あなたは何者なの?!」

リアスの問いに、男は不気味に笑む。

「ルシファー様に遣える一族は、何もルキフグスだけではないのですよ。では、またお会いしましょう……」

男がそう言うのと転移の光に消えていった。『ルシファーに遣える一族』、また面倒なことになりそうだな。

俺たちが表情を強張らせるなか、不意にロイ先生が黒歌の手を取った。

「もうしばらくこいつを借りていく。構わ——」

「ストップにや!」

ロイ先生の言葉を遮り、黒歌はそっとロイ先生の手をほどいた。

ロイ先生は驚きながらも無理に連れていくつもりはないらしく、素直に手を引つ込めた。

黒歌が言う。

「せっかくならと合流出来たんだから、話ぐらい聞いたらどうなのよ。ロイ・グレモ

リーについて知りたいんでしょ？」

「まあ、そうだが……」

「こいつらだつて、そいつのことよく知ってるんだから、もつと話を聞きなさい！」

「お、おう……」

黒歌に気圧されてか、どんどん萎縮していくロイ先生。黒歌の背中にくつつくりリスは、上に這い上がって肩車をしてもらうと、黒歌の頭の上から顔を出してロイ先生をじつと見つめていた。

俺たちが困り顔になるなか、どこからか鳶雄さんが現れ、魔方陣を展開し始めた。

「他の場所の怪物たちも撤退した。とりあえず、指示通りにアザゼルを呼ぶ。あのヒトなら、もう少し落ち着いて話せるだろう」

そう言うのと、魔方陣が輝いてそこからアザゼル先生が現れる。到着早々にロイ先生を見つけると、流石に驚いていた表情になるかが、すぐに持ち直して改まった様子で声をかけた。

「俺はアザゼルだ。色々話を訊きたいんだが、一緒に来てもらえるか？」

アザゼル先生の言葉を受け、ロイ先生は警戒しながらも考えるなか、リリースが黒歌の肩から飛び降りてアザゼル先生の足元に駆け寄る。そのまま無言で手を差し出していた。

首を傾げるアザゼル先生とロイ先生だが、不意にリリスが言う。

「チヨコちようだい」

「ん？ ああ、チヨコな。やりたいのは山々なんだが、今は持ち合わせがないんだよな……」

アザゼル先生の言葉を受けたリリスは、露骨に不機嫌そうに頬を膨らませた。

それを見たロイ先生はため息を吐き、不機嫌そうなりリスを抱き上げるとそのまま肩車をして、困り顔のアザゼル先生に言う。

「わかった、一緒に行くよ。この子にチヨコを食わせてやりたいしな」

器用にリリスの頭を撫でながら優しげに笑むロイ先生。なんか、子供のことを気にする父親の顔に見えるのは気のせいだろうか。

アザゼル先生は表情を元に戻して一度頷くと、俺たちに言う。

「戦後処理はこっちのスタッフにやらせるから、おまえたちも戻るぞ。こいつと話さなきゃならないだろうしな」

俺たちはほぼ同時に頷く。このヒトが本当にロイ先生だというのなら、どうにかして記憶を取り戻さないといけない。どうすればいいかはわからないけど、やるしかない。

またロイ先生と戦って、誰かが傷つく姿なんて見たくはないし、ロイ先生に誰かを傷つけて欲しくない。

こうして、俺たちはタンニーンのおっさんと合流することなくその領地を後にすることになった。今度機会を見て顔を出しておこう。おっさんは俺の恩人なんだから、たまには会いに来てもいいだろう。

「どうかしたにや?」

リリースを肩車しているロイは、不意に黒歌に声をかけられて彼女に目を向けた。

「どうにも、胸につつかえていた何かが取れたような気がするんだよな。なんでだろ」

ドラゴン型と死闘を演じた後だというのに、まだ余裕そうな彼に、黒歌は思わず苦笑した。

「ま、それもそのうちわかるでしょ。あんたが一番最初に惚れた女にも会えるだろうし」「だといいいんだがな……」

ロイが少し不安げに言うと、リリースが彼の髪を軽く引つ張り始めた。

「ロイ、ロイ……」

「ん、どうかしたか？」

ロイはリリスを一旦肩から降ろし、優しく頭を撫でながら訊くと、リリスは目を擦りながら言う。

「ねむい……」

「了解。おいで」

両腕を広げ、リリスを受け入れる体勢になるロイ。リリスは倒れるように彼の胸にダイブすると、そのまま寝息をたて始めた。

リリスを抱き上げたロイは、黒歌に言う。

「とりあえず、この子がぐっすりと眠ればいいか。最近ろくに寝れていないんでね」

「まあ、毎度死神とやりあっていたんでしょ？ 当たり前前によ」

「かもな」

思わず苦笑するロイ。だが、何となく安堵の色が濃いのは、これからいく場所が割りと安全だと何となくわかっているからだろう。

そんな彼らのやり取りを見ながら、アザゼルは少し思慮を深めていた。

（オーフィスの半身であるリリスが、あそこまで爆睡するほど体力を使うか。考えられることとしては――）

ロイとリリス、『D×D』の接触、合流。そして動き始めた謎の男と彼が率いる化け物

たち。

『D×D』の面々はロイとの合流に安堵しながらも、戦いの激化に備え、表情を引き締め
ていくのだった。

——戦いは終わっていない。むしろ始まったばかりなのだから。

lost 09 Memory is back And
Starts mission

ロイとリリースが『D×D』に保護されてから三日ほど。

冥界悪魔領首都——リリースに建てられた高層ビルのひとつに、四大魔王のサーゼクスとアジユカ、元墮天使総督であるアザゼル、四大セラフであるミカエルが集まっていた。

「それで、保護したロイの検査結果は？」

「急かすように確認を取るサーゼクス。そんな彼に書類を手渡しながら、アザゼルは言った。」

「結果としては、遺伝子の約五十パーセントがロイと一致した。もう半分は——」

途端に言葉を詰まらせるアザゼル。サーゼクスは彼の言葉を待たずに書類を確認し、表情を険しくさせた。

「グレートレッドの肉体を持つイツセーくんと一致した。つまり、ロイくんは彼と同じ方法で戻ってきたわけだな」

そんな彼に代わってアジユカが言った。

アザゼルは頷くが、表情は険しいままだ。

「だが、イツセーみたいに全てがグレートレッドの肉体ではなく、中途半端にロイの肉体がある。そのせいなのか、身体能力がバカみたいに高い」

アザゼルの除いた三人は書類に目を通し、眉を寄せた。様々な検査の結果が並んでいたが、上級悪魔や最上級悪魔のそれを遙かに上回っていた。

ミカエルが訊く。

「話によると、彼は今までの記憶が無いそうですが、その原因はわかったのですか？」

ミカエルからの問いに、アザゼルは肩をすくめた。

「全くもってわからん。無自覚記憶を封じ込めているのか、本当に無くなっちゃまったのか……」

「だが、ロスヴァイセくんや黒歌くんのこととは思いついているのだろうか？」

サーゼクスの問い。立て続けの質問にアザゼルは若干うんざりしながらも頷いた。

「らしいな。理由はよくわからんが、ロイにとって『一定以上に大切に想える存在』のことはかすかに覚えているのかもしれない」

サーゼクスの表情が思わず曇る。アザゼルの仮定がもしも本当なら、彼の実の妹であるリアスや、彼女を始めとした戦友である『D×D』の面々は、『一定以下の存在』ということだ。少々残酷ではないだろうか。

ミカエルがため息を吐く。

「彼の無事が知らされた時、ガブリエルが少々取り乱しましたが、下手に会わせるのは愚策でしょうか」

「会っても思い出してもらえなかったら、マジで発狂するんじゃないか？まあ、シヨックで倒れるだけで済むかもしれないが……」

ガブリエルの話が出たためか、アザゼルはそう返すとサーゼクスに問う。

「セラフォールの様子はどうか？なんか、別人みたいに落ち着いていると聞いたんだが」「前と比べてかなり静かになったよ。僕でも見たことがないぐらいに仕事に集中している」

「そうか」

いつもハイテンションのセラフォールが落ち着き、仕事に集中している。そう言えば、最近魔法少女姿のセラフォールを見ていないかとアザゼルは回想する。

アジユカが続く。

「オーフィスの半身たる少女——リリースだったな。彼女はどんな様子なんだ？」

「寝て、ロイに構ってもらって、飯食って、また寝る。それだけだ。総合的に見ても、寝ている時間がやたらと多い」

「イツセーくんの復活にドライグが極端に消耗したように、彼女も消耗したのか。だが、今は有限とはいえ無限の龍神ウロボロス・ドラゴンの半身である少女がそこまで消耗するものなのか……？」

サーゼクスの当たり前の疑問に、アザゼルも困惑したような表情になる。

「なぜあそこまで消耗しているのか、それがわからん。ロイを復活させる以外にも、あいつに何かしたのかもしれないが……」

そんなアザゼルにミカエルが言う。

「詳しくは調べてみるしかありませんか。タイミングを見て、ガブリエルを会わせようと思いますが」

「それで頼む。もしかしたら、何かの拍子に記憶が戻るかもしれないからな」

アザゼルの言葉に頷き、ミカエルが席を立つ。

「そう言えば、彼はどこに？グリゴリの施設からは移されたのでしょうか？」

ミカエルの問いにサーゼクスが答えた。

「今はセラフオール記念病院で検査中だ。そこで魔力に関して詳しく調べる手筈になっている。そのあとは、グレモリー家の屋敷に連れていくつもりだ」

「それで……ッ！」

ミカエルは部屋の外で何かが動いた気配を感じ、言葉を切る。三人もそれに気づいたように、真つ先に動き出したのはサーゼクスだった。表情を険しくさせながらドアを勢いよく蹴り破る

万が一にも『クリフォト残党』のスパイが潜り込んでいた場合、彼らの居場所が知ら

れたことになる。部屋の防音性は高いが、何らかの術で聴力を強化すれば聞き取れなくもないだろう。だが、その心配は杞憂に終わった。

サーゼクスが部屋を飛び出した瞬間、見覚えのある黒髪の女性悪魔が曲がり角に消えていったのだ。それと同時にまた別の問題が発生した。

万が一ロイが彼女のことを思い出せなかつたら、一大事通り越して完全に終わりである。

「すまない、用事が出来てしまったようだ。行ってくる！」

サーゼクスは自分で蹴破ったドアには目もくれず、そのまま駆け出した。

残された三人は、盛大にため息を吐いた。

「なんと言うか、ロイが絡むと熱くなるよな。あいつにロイの居場所を伝えなかつたのが、こんな形で問題になるとは思わなかつたぞ」

アザゼルの言葉にアジユカが頷く。

「サーゼクスもルシファーとはいえ、流れているのは慈愛深いグレモリーの血だからな。家族が絡むと少々先走るんだろう。特に死んだと思われた弟なら尚更だ」

「私も無用心でした。まさか彼女が聞き耳を立てているとは……」

この場に集まった四人でも探知できないように気配を殺し、情報が出てきたら即離脱。どこぞの諜報員のような行動の速さに、三人は再びため息を吐く。

話題に出ている魔王少女様の行動の速さは、こんな時こそ役に立つのだろう。それに振り回されるヒトたちがどう思おうが、今の彼女の最優先事項はロイなのだから。

冥界悪魔領、セラフォルー記念病院。

魔王の一人であるセラフォルーの名をつけられたこの病院は、悪魔領の中でもトップクラスの医療機関であり、最先端と設備が整っている。

そんな病院の一室に、患者服のロイがいた。リリスがベッドを占領して寝ているため、彼はベッド脇の椅子に腰かけている。

「やれやれ、検査つてやつはいくつあるのかね」

優しく笑みながらリリスの頬を撫でてやると、彼女の表情も和らぐ。まあ、病院のものとはいえふかふかのベッドで眠ることができ、ロイが近くにいと知っているためか、元から油断したように表情は緩んでいたが。

ロイは小さく息を吐き、目を閉じて集中する。様々な気配を感じ取りながら、念のた

めに警戒しておく。

ここは割りと安全だが、絶対なんてものはない。滞在する先で毎回のよう死神に追いかたれ、ろくに休めた記憶はない。ロイが『先生』と呼ぶヒトにいた時を除いて。

完全に手持ち無沙汰のロイは椅子の背もたれに身体を預け、目を開いてポケツと天井を見上げる。病室で出来ることなんてほとんどない。

ロイは仕方ないと言わんばかりにため息を吐き、また目を閉じると意識を集中させていく。

心を無にし、自然の中に溶け込み、気を練り込む。奥深い仙術において、最も基本的な修行方法。

『——暇な時間があつたら、それぐらいしておきな』

『先生』の元を去る際に言い渡されたことを、彼は守り続けていた。そのせいなのか、仙術の感知能力だけで言えば、彼は黒歌や美猴を上回る。

故に気づいた。今まさに、彼のいる部屋に入り込もうとする悪魔の気配に。

ロイは目を開き、扉のほうに目を向ける。それとほぼ同時に凄まじい勢いで扉が開かれ、外にいた女性とぼつちり目があった。

「……………」

「ロイ……………」

涙目になりながら彼の名を呼ぶ女性の姿に、ロイは困惑を露にする。

何かしらの制服なのか、きつちりとした格好をしているが、外見年齢のせいなのか違和感が凄まじい。

「私よ、わかる……?」

問いかけてくる女性を見つめながら、ロイはまた違和感を覚えた。ロスヴァイセや黒歌に会った時と似ているが何かが違う、もつと強烈なものが胸に燦るのだ。

ロイは自分の胸に手を当てながら、申し訳なさそうに首を横に振る。

「すまない……」

女性は彼の言葉を受けて俯くが、とりあえず病室に入って扉を優しく閉める。

女性はロイの前まで移動すると、優しく彼の頬を撫でた。彼が既視感となぜか安らぎを感じるなか、女性は名乗った。

「私はセラフオール。セラフオール・レヴィアタンよ」

「セラフオール、か。いい名前だな」

彼女の名を反復すると、ロイは頬に触れる彼女の手に自身の手を重ねながら訊く。

「『セラ』って呼んでいいか? どうにも——」

「大丈夫よ。昔からそう呼ばれていたもの」

ロイの言葉を遮ったセラフオールの発言で、彼は自分と彼女が何かしらで繋がりが

あったということを察することが出来た。だが、同時に違和感を覚える。何かが違う気がするのだ。その何かはわからないが、割りと大切な何かが足りないのだ。

ロイは小さく首を傾げるが、気にすることを止めてセラフオルーに問いかける。

「俺のこと、知っているのか？まあ、『ロイ・グレモリー』のことをつて方が正しいんだろうが……」

「もちろんよ。ロイのことは、誰よりも知っている自信があるわ」

セラフオルーはそう言うと言手を離し、優しい笑みを浮かべる。それを受けたロイは、若干ながら引いていた。

言っている内容は割りと普通のはずなのに、瞳のハイライトが消えているせいで全てが不気味に思えるのだ。

だが、とロイは我慢してセラフオルーに言う。

「なら、俺に教えてくれ。おまえの知る『ロイ・グレモリー』のことを」

「ええ、任せて。何でも教えてあげ——」

「セラフオルー、ストップだ」

突如届いた第三者の声に反応して、二人は扉のほうに目を向ける。そこにいたのは、ロイと同じ紅髪の男性だった。年齢はロイよりも少し上に見える。

「サーゼクス、どうして止めるの？私的には最優先事項なのだけど」

感情を感じさせない声音で、サーゼクスを睨むセラフオル。睨まれたサーゼクス本人はセラフオルを心配するように見るが、横に座るロイにも目を向ける。

「まあ、待つてくれ。僕はサーゼクス・ルシファーだよ。よろしく」

「……ルシファーだと？」

『ルシファー』の名に反応して、突然殺気を放つロイ。前回の戦いで出てきた名が突然出てきたため、少々過剰反応しているのかもしれない。

ロイの殺気を正面から受けながらサーゼクスが言う。

『ルシファー』を名乗ってはいるけど、彼らが言ったルシファーではないよ。それは保証できる」

サーゼクスの言葉を受けても、ロイは信じられないと言わんばかりに睨み付けるが、セラフオルが一度ため息を吐いて言う。

「大丈夫よ、彼は関係ないわ。それよりもお話ししましょう。サーゼクスについても教えてあげるから」

彼女はそう言うのと、サーゼクスに歩み寄って彼に耳打ちする。

「言いたいことはわかってるわよ。けど、話をさせて。彼が私を覚えていなくても、大丈夫だから」

セラフオルはそう言うが、幼なじみであるサーゼクスだからこそわかってしまうこ

とがある。

——セラフォルは、かなり無理をしている。

大丈夫とは言っているが、何かあれば今度こそ彼女は壊れてしまうかもしれない。だが、この問題はあまり先伸ばしには出来ないだろう。

サーゼクスはちらりとロイに目を向ける。こちらのことを気にしながらも、リリスの寝返りでずれた毛布を被せ直していた。

サーゼクスはセラフォルに目を向ける。不安げだが、覚悟を決めた表情。彼女がこの表情をした時は、決して退いてはくれない。

一度わざとらしくため息を吐き、サーゼクスは頷いた。

「何かあったら呼んでくれ。フォローさせてもらう」

「ありがとう」

サーゼクスが退室して扉が閉まると、セラフォルはロイの方へと向き直る。

「それじゃあ、お話ししましょうか。あなたのことも聞かせてもらえるかしら」

「まあ、あまり楽しい話ではないけどな」

ロイが苦笑しながら言うが、セラフォルは気にした様子もなく首を横に振った。「楽しいかどうかじゃないわ。あなたとお話できればそれでいいのよ」

「そうか。なら、話すとするか。色々」と

「私も教えてあげるわ。私が愛するヒトのこと」

二人の話は進み、人間界でいう夜になっていた。冥界にも昼夜の概念はあり、夜になると月の代わりとなるものが空に浮かぶ。

月明かりに照らされた病室で、セラフオールとロイははまだ談笑していた。

「あの時のロイは——」

『先生』にはかなりしごかれたが——」

代わる代わるに話し、お互いの理解を深めていく。やがて、ロイの胸にある思いが芽生え始めた。

——俺は、このヒトのために戻ってきたんだろう。

セラフオールが笑うたびに、胸につかえていた何かが取れていく。奥底に眠っていた何かが、目を覚まそうとしている気がした。完全に目を覚ませば、自分が自分では無くなる。そう感じる事が出来たが、不思議と恐怖はない。

ロイは笑みながらセラフオルーに言う。

「セラフ、ひとついいか？」

「何かしら？」

お互いに向き直り、ロイは改まったように言う。

「おまえがいたから、『ロイ・グレモリー』は変わったんだと思う」

「ど、どうしたの、いきなり……」

困惑するセラフオルーを他所に、ロイは続ける。

「殺すことしか出来なかった俺が、誰かを愛して、誰かに愛されることが出来た」

言葉を続けるごとに、奥底に眠る何かが目覚める。もう迷いはない。きつと、この言葉を言いたいがために戻ってきたのだから。

「セラフ、俺はおまえを愛してる。だからあの時、命を懸けられた」

「……」

言葉が出ないセラフオルーに、『ロイ・グレモリー』は面と向かい、満足げに笑いながら言った。

「ただいま、セラフ」

セラフオルーがその言葉を受けて驚愕した瞬間、彼女の唇が塞がれた。いきなりのことで息が出来なくなるが、状況を理解すると同時に表情を和らげる。

セラフオルーの口を、ロイの口が塞ぐ。所謂キスいわゆるをしているわけだ。それも数秒だけのことであり、ロイはすぐに唇を離す。

照れ臭そうに笑いながら、彼は言った。

「やっぱ、おまえの近くが一番落ち着く」

「ロイ、もしかして……」

彼女の問いに、ロイは笑みながら頷く。

「まあ、あいつらにも説明しとかないとダメだろうな……」

軽く頬をかきながら、苦笑する。セラフオルーは目にハイライトが戻り、その目に涙を溜めながら彼に抱きつこうとするが、ロイが手で制する。

「けど、それはまだ先だな。あいつらをどうにかしねえと……」

『あいつら』、それはクリフト残党のことなのか、それとも――。

ロイはセラフオルーをいとおしそうに抱き締め、彼女の耳元で囁くささや。

「俺は戻らない。死んだ扱いのほうが、自由に動き回れるからな」

「え？」

まるでここを出ていくと言わんばかりの言葉だが、それを理解する前に彼女の意識が微睡む。何かしらの術をかけられたかのように突然にだ。

睡魔に襲われ、全身から力が抜けていく彼女を抱き上げ、そのままベッドに寝かしつ

ける。代わりに寝ていたリリスを抱き上げ、病室の窓を全開にした。それと同時に部屋の扉が豪快に開け放たれ、サーゼクスが中に入ってくる。

ベッドで眠るセラフォルーに気づくと、警戒を強めてロイを睨む。

それを受けながら、ロイは魔力で患者服からいつものマントのような黒外套に黒いズボンとシャツ、簡単な手甲をつけた、手甲以外を全身黒で揃えた物に変える。

「——悪いが、やらなきゃならねえことがある」

「彼女はそれを望んでいないと思うよ」

「それでもだよ。これが最後の大事な仕事だ、邪魔をしないでくれ。兄さん」

「……………っ！」

ロイの発言に、サーゼクスは驚愕を露にした。今彼は、自分のことを兄だと言った。つまり、記憶が——。

「前は行方不明だったが、今回は死亡だ。大して変わらねえだろ？」

ロイは不敵に笑みながらサーゼクスに言った。

それを受けたサーゼクスは肩をすくめ、わざとらしくため息を吐いた。

「キミは変わらないね。面倒臭がりなくせに、自分からそれに飛び込んでいく。悪い癖だ」

「俺らしいだろ？」

「まったく、キミらしいよ」

二人はそれぞれ笑むと、ロイは窓から飛び降り、そのまま深紅のドラゴンの翼を広げて飛び出していく。

——死んだ者を縛る法はない。死んだ者を止められる者はいない。故に、彼はその道を選んだ。

サーゼクスはあつという間に小さくなつたロイわしうとの背中を眺めながら、再びため息を吐く。

「さて、どう説明したものかな、これは……」

もうひとつロイに悪い癖があるとすれば、周りのことと後先考えずに行動することがあることだ。フォローする側は堪つたものではない。

だが、彼は言った。「これが最後の大仕事」だと。ならば、それをサポートしてやるのがベストだろう。早くことが済めば、彼は帰つてくる事が出来る。

サーゼクスは簡単にプランを練りながら、セラフォルーを見る。毎度ロイに振り回される可愛そうな役ではあるが、それでも彼女はロイの側にいてくれる。だからこそ、ロイは頑張れるのだろう。戦い続けるのだろう。

だが——、とサーゼクスは思う。

「もっとセラフォルー以外のヒトも大切にしていけないと、後が怖いよ？」

サーゼクスの眩きは届かないが、それでも言わずにはいられなかった。

何だかんだで恋人たちに捕まり、説教されるロイの姿を思い浮かべ、思わず苦笑する。その姿を現実にするためにも、サーゼクスは動き出した。

まずは『クリフオト残党』を殲滅する。今回ばかりは、次の機会を与えるつもりも、残党を残すつもりはない。確実に、完全に、芽であるうがそれを摘む。冷酷だと、残酷だと言われようが、気にするつもりはない。

今までとは一線をがす覚悟を元に、グレモリー兄弟は動き出していた。

一人は恋人たちとの未来のために。一人は悪魔という種と、家族の未来のために――
！。

mission 01 覚悟を決めて

冥界のとある森の中。

俺——ロイはリリスを連れて、野宿できそうな場所を探していた。セラを眠らせてしまったのは申し訳ないが、あそこを戦場にするわけにもいかない。『あいつら』は場所とか関係なく襲ってくるだろう。

ふと、空を見上げる。先ほどまで冥界特有の紫色の空が覗いていたが、今は雲に覆われてしまっている。一雨来そうだ。

「ロイ〜?」

「ん? ああ、雨降りそうだなってな」

俺に手を引かれる形で歩きながら、眠そうに大きく欠伸あくびをしたリリスに苦笑しつつ、俺は前方にある大きめの洞穴に視線を向けた。

生物の気配はしないし、周りにも何かいるって訳でもない。ここら辺で休むとするかね。

警戒しながらも、軽く身を屈めて洞穴に入り込む。少し低いが、何かするには問題ないだろう。あとは、結界を張って簡単な陣地にするだけだ。

リリースを近くの岩に座らせると、異空間からキャンプ道具を取り出し、とりあえずの寝床を作る。変なタイミングで飛び出したせいなのか、リリースはまだまだ眠そうなのだ。

手早く寝床を確保したら、そこにリリースを寝かせる。身じろぎして自分にフィットする場所を見つけると、リリースはそのまま寝息を立て始めた。

俺はホッと息を吐き、一旦洞穴を出る。少し水っぽい、雨の時独特な臭いが鼻についた。今すぐにも降ってきそだが、足を進める。結界は早めに張っておかないと、意味がなくなる。

結界にはいくつ種類があるが、多いのは術者を中心に張るものだ。これはその術者の力量で範囲や強度が左右されやすい。

——で、俺がこれからするのは各所に陣を描き、それらで陣地を囲む方法だ。多少燃費が悪いが、力量のある程度無視して範囲がバカみたいに広くできるし、強度も確保できる。所謂チェックポイントが大量に設置出来るので、結界乃で何かあったときにわかりやすい。

仙術と並んで、『先生』から教えてもらったものだ。そのうちあのヒトのところにも戻って礼を言わねばならないだろう。そのぐらい世話になっている。

森の木や岩、時には地面に陣を描いていく。途中で雨が降り始めたのでフードを被つ

て凌ぐことにした。ちなみに、俺の服やリリスの外套も『先生』が用意してくれたものだ。見た目も軽さも普通だが、特別な繊維で出来ているらしく、意外と何でも防いでくれる。

陣の設置を終え、洞穴に戻ってくると、リリスは涎を垂らしながら寝ていた。俺が戻ってきたことに気づいていないのか、それとも俺だとわかつているからか、起きることはない。

手頃な岩に腰掛け、最後に足元に陣を描いて魔力を込める。陣は淡い光を放つと共に消えていき、同時に何かに囲まれた感覚が伝わってきた。

「ん……？」

それを感じてかりリスが身体を起こすが、いつものことと割りきって再び寝転ぶ。三秒も経たないうちにまた寝息を立て始めた。

結果を張り終え、盛大にため息を吐く。兄さんには伝えたが、いかんせんまだ思い出せないことがある。

具体的に言うのと、セラ、ロセ、黒歌、ガブリエルとか、割りと身近なヒトは思い出せた。だが、俺が何と戦って記憶が飛んだのかが思い出せない。

兄さんと二人で戦った記憶はある。だが、霞みがかつたようにその相手が思い出せない。まるで意図的に隠されているみたいだ。

まあ、その前後のことも若干臆気だから、その戦い全体のことが曖昧と言うべきか。思い出そうとすると頭に鈍い痛みが走るのもまたそう思わせる一因か。

この際気にしなくてもいいか。それ以外のことは粗方あらかた思い出せた筈だし、終わったらセラたちに聞けば済む話だろう。

考えるのも面倒になり、リリスの横に寝転ぶ。この子と旅をしたことはもちろん覚えているし、守らなきやならないことも承知だ。記憶は戻ったが、今さらこの子を置いてどこかに行くつもりはない。

リリスの頭を軽く撫でてやると、笑いながら俺に抱きついてくる。

飛び出してきたしまつが、問題は山積みだ。まず『クリフト残党』をどうにかしないといけないし、それに『あいつら』のこともある。

セラたちに「ただいま」って言ってやれるか、微妙なところかもな……。

リリスを起こさないように、小さめのため息を吐く。

面倒だが、やるしかないわけだがな……。



人間界、兵藤家VIPルーム。

俺——兵藤一誠の前では、リアスと眷属一同、ソーナ前会長と眷属一同、アザゼル先生が集まり、俺たちと対面する形で展開された連絡用魔方陣には、サイラオーグさんとシーグヴァイラさん、デュリオやグリゼルダさん、ヴァーリの姿がそれぞれ写し出されていた。

アザゼル先生が言う。

「それじゃあ、始めるぞ。っと、その前に。ロスヴァイセ、体調はどうだ？」

「は、はい。問題なしです。ご心配お掛けしました」

ロスヴァイセさんがそう答える。ロイ先生の術で眠り続けていたのだが、先日目を覚ましたのだ。当のロイ先生は検査中なんだとか。

アザゼル先生は一度頷くと、改めて話題に入った。

「今回集まってもらったのは、おまえらが相手した怪物とそれを率いていた男についてだ。まあ、まだよく分からない部分が多いんだが、一応伝えておく」

怪物というのは、この前戦ったあれのことだろう。核を潰さない^{コア}と何度でも立ち上がり、こちらに向かってくる気味の悪い連中。

「おまえらが倒してヘッド口状になったものを採取したんだが、調べる前に全て蒸発、消滅

しちまった。おかげさまで何もわからずじまいだ」

心底困ったという様子のアザゼル先生。死んでも死骸が残らないってのは、また不思議というか、明らかに何かしら手が入られているということだろう。自然的に生まれただけではないのは確かだ。

『私たちの光の攻撃も効果が薄いようです。決定打には、やはり急所を潰さなければ駄目なようです』

グリゼルダさんが言った。魔物の退治に慣れているはずの天使の皆さんでも手に余るようだ。

「生け捕りに出来た個体などはいないのですか？」

ソーナ前会長の問いに、アザゼル先生は首を横に振る。

「それは刃スラッシュ・ドッグ 狗に別行動をさせてやらせたんだが、どうにもその手の術式に耐性があるようだ。試した限り、効果のあったものはない」

俺たちが戦っている裏で、鳶雄さんも色々とやってくれていたようだ。対策はし尽くしているって感じか。それだけこっちに情報を与えたくないほど、何かしらバイも のつてことなのだろう。

現状、小猫ちゃんか黒歌、美猴の誰かと一緒にやないとあいつらを倒せないってことなのだが、それでは倒せる数が限られてしまう。どうにか仙術以外で弱点がわかるよう

なならないものか……。

俺の考えが伝わったのか、アザゼル先生が言った。

「すまないが、対策が出来るまでは仙術の使える三人に無理を強いることになる。いけるか？」

「大丈夫です。やるだけやってみます」

『任せるにゃん♪』

『ま、やるしかねえし』

三人がそれぞれ返していた。黒歌の機嫌がやたらといいのは、ロイ先生と話せたおかげなのだろう。てか、本人がそう言っていたわけだし。

そんな黒歌にロスヴァイセさんが少し不安げに訊く。

「黒歌さん、ロイ先生はどうでしたか……？」

『相変わらず、誰かを守るために無茶ばかりしてるにゃ』

「やっぱり……」

心配そうな顔をしながらため息を吐くロスヴァイセさん。検査中の今はともかく、あのヒトは旅をしながらも戦い続けていたのだろう。

「死グリム・リッパ神に追いかけられているんだろ？おまえも襲われたと聞いたが」

『ま、そのおかげであいつの記憶が戻ったんだけどね。さすがに死ぬかと思ったけど』

……』

「冥府の連中は、それほどリリスを欲しているんだろう。正確には龍神の力を、だな」
不機嫌そうに言うアザゼル先生。

ふと、思い付いたことを訊いてみる。

「その事で何かしら言えないんですか？」

「まあ、それも考えたんだが、対外的にはリリスがオーフィスってことになっていることは話したな？」

「はい」

オーフィスが『禍カオス・ブリゲードの団』を率いていたということになっているが、そのオーフィスは俺の家にいるわけだ。今はオーフィスの半身たるリリスが『禍カオス・ブリゲードの団』を率いている。たつてことになっている。

俺の返事にアザゼル先生は頷き、言葉が続ける。

「で、そのテロリストの親玉と対テロチームのメンバーが接触、行動を共にするのは対外的にまずい。下手に言い寄ったら、それこそ向こうの思う壺だろうよ」

見るからに不満気な様子のアザゼル先生だが、一度咳払いをして続ける。

「とりあえず、そのロイとリリスは今のところ監視下にあるから、大丈夫だろうよ」

アザゼル先生はそう言うのと、先ほどから難しそうな顔をしているサイラオーグさんに

目を向けた。

「で、サイラオーグからも何かあるんだろ？」

『はい。少々気になることがひとつ』

サイラオーグさんはそう言うのと、表情をそのままに続ける。

『あの男が「特異個体」と呼んだドラゴンを模した怪物。奴は「滅びの魔力」を使っていた……』

『ッ！』

サイラオーグさんの発言に、一様に表情を強張らせる俺たち。

アザゼル先生が顎に手をやりながら言う。

「奴らの実験で『滅びの魔力』をどうやってか再現したのか、それともそれを有する人物が実験であんな姿にされてしまったのか、後者の可能性のほうが高いが、そんなところだろう」

「その個体と戦闘するときには、出来るだけ攻撃をもらわないようにしなければならぬわね」

リアスがそう言うが、その表情は硬い。

バアル家の血を継ぐヒトでない、滅びは扱えない。リアスの遠い親戚の誰かが利用されていると思うと、その心中は複雑なんだろう。

アザゼル先生はため息を漏らし、続きを口にする。

「そして、そいつを作り出した男つてのがまだまだ謎だらけだ。奴の発言を鵜呑みにするとすれば、初代ルシファーに遣えた六家の生き残りだろうな」

「何ですか、その六家つて……?」

俺の問いに、リアスが答えてくれた。

「初代ルシファーに遣えているのは、グレイフィアお義姉様のルキフグス家だけではないのよ」

「ルキフグス、アガリアレプト、サタナキア、フルーレティ、サルガタナス、ネビロス。それが初代ルシファー様に遣えた六家です。存続している家もありますが、断絶状態や、行方不明の家もあります」

リアスに続いてソーナ前会長がそう言った。簡単に考えれば、その行方不明の誰かが今回の事件の裏にいるということだろう。

俺が難しい顔をしていると、アザゼル先生の耳元に連絡用の魔方陣が展開された。

「ああ、どうした。ん?はあ!ちよつと待て、どうということだ!」

座っていた椅子をひっくり返す勢いで立ち上がると、アザゼル先生は頭をかきむしりながら怒鳴る。

「あのな、なに考えてやがる!ああ?あいつから言い出したあ?なにふざけたこと言っ

てんだよ！予定が狂いまくりじゃねえか！」

ついていけない俺たちが間の抜けた顔になるなか、アザゼル先生は盛大にため息を吐くと椅子を元に戻して、どかりと座った。

「で、連絡手段とかはあるんだろうな？ならいい。起こつちまったものは仕方ない」
「……どうしたの？」

困惑するようにリアスが訊くと、アザゼル先生はうんざりしたように言う。

「ロイがいなくなつたそうだ。当然のようにリリースを連れてな。まったく、あの野郎……」

アザゼル先生の発言に真つ先に反応したのはロスヴァイセさんと黒歌だった。

「それはどういうことですか!?監視下にあるから大丈夫とかなんとか言つていませんでしたか!？」

『そうにや！せつかくこつちに戻れたのにいなくなるって、どういうことにや!』

アザゼル先生は盛大にため息を吐き、頭を抱えた。

「言葉の通りだ。検査が終わつたらいきなり飛び出して行つたんだと……」

「その説明をお願いします！」

『その説明を頼んでいるのにや!』

ロスヴァイセと黒歌がほぼ同時に詰め寄る。アザゼル先生は困り顔で答えに困って

いた。

「情報がまとまってないんだよ。わかりしだい伝えるから待ってくれ……」

一気に疲労した様子になるアザゼル先生。心労が溜まっているのだろう。

俺が若干同情の視線を送っていると、アザゼル先生は立ち上がる。

「そんなわけだから、俺は一旦戻る。詳しくはまた今度だ」

そう言うのと足早に退室するアザゼル先生。俺たちも何とも言えない空気になるが、リアスが一度咳払いをして言った。

「とりあえず、解散ね。ロイお兄様のことにも気になるけれど、今は例の男と怪物に対処しないとならないわね」

俺たちは頷き、とりあえず解散となった。

ロイ先生、どこに行ってしまったんだろう……。

「……また……か」

俺——ロイは一面真つ黒な空間。何度か来たことがある場所に来ていた。

座り込む俺の目の前には俺がいた。違いがあるとすれば、両目が黒く、右目に黒い炎が灯っていることだろうか。

「寝るだけで飛ばされるって、そんなに身近な場所じゃなかったよな、ここ」

俺が言うと、黒目の俺は苦笑する。

『あの時、我らと貴様は溶け合った。今までのように半端ではなく、本当の意味でな。我らも消えるわけにもいかぬし、貴様に死んでもらうては困るのでな』

いつになく饒舌じょうぜつな黒目の俺に、俺は困惑しながらも礼を言う。

「なんか、ありがとうな。面倒をかけたままっらしい」

俺の言葉に、黒目の俺は目付きを鋭くさせながら言う。

『贖罪たぐひの戦い、まだ終わらせぬ。いや、元より終わらぬだろうよ』

「覚悟の上だ」

俺が不敵に笑うと、黒目の俺は若干嬉しそうに笑って見せた。

『実に貴様らしい答えだ。ならば、我らは——』

黒目の俺の言葉の途中で意識が微睡み始める。寝ているはずなのに微睡みつてのも変な気分だが、目が覚めそうってことなのか？

その疑問の答えはすぐに出るだろうと、俺はそのまま意識を手放したのだった……。

「——イ。ロイ？ロイ！」

「んあ？ああ、リリスか。おはよう」

「おはよう」

夢の中で寝るといふ変な目覚め方をした俺は、そのまま腕の中にいたリリスの頭を撫でてやる。彼女も気持ち良さそうに目を細めていた。

欠伸を噛み殺し、リリスを抱えたまま洞穴を出る。雨も止んで、森からは水っぽい臭いを感じ取れる。

珍しく追っ手が来なかったからか、結構寝むることが出来た気がした。

洞穴に戻ってリリスを岩に座らせると、俺は一旦伸びをする。

「さて、行きますか。どこに行くかは完全に未定だが」

「はい」

キャンプ道具を片付けながらそう言う俺と、手を挙げて答えるリリス。

あの『ドラゴン野郎』を追うのが先決か。奴を追えば、とりあえずテロリストどもを

どうにか出来るはずだ。

キャンプ道具を片付け終え、洞穴から出ながらリリスに訊く。

「準備は出来た？」

「だいたいじょうぶ」

俺の背中に飛び付きながら答えるリリス。

俺は笑みを浮かべて翼を展開、そのまま飛び立つ。最後の^{ミッション}大仕事だが、さっさと終わらせる。一日でも早く、セラたちの元に帰らないといえねえからな。

なんて思いつつ、俺とリリスは冥界の空を進んでいく。

始まってしまった戦いはそう簡単には終わらない。だからこそ、力づくで終わらせる。大切なヒトを守るために俺が出来るのは、それしかねえ。

自分の不器用さに笑うしかないが、今はそれでいいだろう。交渉なんざ、元より無意味な相手なのだから――。

—

グレモリー領、とある山の山頂。

ロイの墓があるその場所に、紅髪の青年が訪れていた。

祈りに来たわけでもなさそうな青年は、心底興味なさげに墓を一瞥すると、躊躇いなく拳で粉碎した。

墓を破壊した拳を見つめると、その後ろにあるアロンダイトに右手をかけてそのまま引き抜く。

青年がアロンダイトの刀身を撫でながら魔力を送り込むと、待ちわびていたかのように刀身が深紅の輝きに包み込まれた。

青年はそれを見ても特に表情を変えることなく、魔力供給を止めるとアロンダイト背中に背負い、背中に悪魔の翼を展開、そのまま冥界の空に消えていったのだった――。

mission 02 紅髪の聖劍使い

俺——ロイがリリスを連れて病院を飛び出した翌日。

冥界の森の中にひっそりとある廃屋敷の中で、

「ほいっと。お待たせ」

「ごほん♪ごほん♪」

存外のんびりさせてもらっていた。すぐに追っ手が来るものとばかり思っていたが、どうにも今回は違うようだ。まあ、それが不気味ではあるのだが……。

話を戻して、今俺たちは食事をとろうとしていた。森で捕ってきた冥界の猪、それで簡単にまた肉鍋を作ったのだ。ちなみに、料理も『先生』に教えてもらった。

「いただきます」

「いただきますーすー！」

てなわけで早速一口いったわけだが、若干生臭さが抜けていないよう気がする。昔は割とどうでもいいって感じで食っていたが、自分で作った手前、こだわ拘りたい。

俺が眉を寄せて小さく首を傾げている横で、リリスはお構い無しと言わんばかりにがつついていた。食べ滓で口元が大変なことに……。

俺は苦笑しながらも食べ進めていく。まあ、慣れれば結構いけるか。

同じく冥界、グレモリー領。

とある山の頂上に、悪魔たちの住まう冥界には不釣り合いな純白の翼を携え、濃密ながら優しい光のオーラを放つ女性が来ていた。

墓に名を刻まれた本人は無事であったが、すぐに行方不明となってしまうた。一目も会うことが出来なかった彼女は、せめてもの思いで無事の帰還を祈りに来たのだが――

「い、これは……！」

その女性――ガブリエルは到着と同時に異変を察知して警戒を強める。

ロイの墓石は無残にも砕かれ、アロンドイトがなくなっている。墓石だけなら彼に恨みのある誰かという可能性はあるが、アロンドイトまで持ち去られているのは不可解だ。

ロイとオーラを同調させた結界、彼にしか振れず、彼以外が触れば身を焼かれる代物と成ったものを持ち去るなど、損はあっても得はない。ならば、なぜ……？

ガブリエルは思考を一旦切り上げ、緊急連絡用の魔方陣を展開、ミカエルと連絡を取る。

『ガブリエル、どうしました？これを使うということは――』

「彼の墓が破壊され、アロンダイトが持ち去られています」

『ッ！状況を』

いつもと違う間延びしない声のガブリエルに、ミカエルも表情を引き締める。

ガブリエルは周囲を見渡しながら、ミカエルに伝える。

「持ち去った犯人は見当たりません。けれど、その者と思われる足跡が残っています」

『足跡ですか？』

ガブリエルはしゃがみこみ、地面に残された足跡に触れる。

「大きさからすると、男だとか……。私は専門家ではありませんので」

『それもそうですね。すぐに調査に向かわせます。それまでは現場の保護を』

「わかりました」

ガブリエルはそう返すと連絡用魔方陣を消す。先ほどまで凜としていた表情が崩れ、不安げなものに変わるのはいすぐのことだった。

——一体誰が、どうしてこんなことを……!!

怒りと不安が彼女の内を渦巻き、純白の翼が白黒に点滅を始める。彼女もそれを自覚したのか、何度か深呼吸をして落ち着きを取り戻そうとした。

彼女がある程度落ち着きを取り戻したのと、天使と墮天使の合わせて五人の調査班が到着したのはそれとほぼ同時だった。

時を同じくして、罪人たちが収容、封印されている地獄の最下層——コキユートスへと続く道を守る関所。

相当なバカか愚か者でもなければまず攻め込まないその場所は、完全に戦場と化していた。

深紅の軌跡が陣を組む衛兵たちの隙間を通りすぎ、一瞬の間を開けて衛兵たちが倒れる。だが、死人は出ていないようで、足や腕を押さえてのたうち回っていた。

「くそー何がどうなってんだよ!?!」

若い衛兵の一人がパニックになりながら怒鳴り散らす。いつもと同じように同僚と共に暇な時間を過ごすことになると思つた矢先、突然の敵襲である。多少はパニックになつても仕方ないだろう。

「落ち着け。敵はたつたの一人だけだ」

そんな衛兵の肩に手を置き、落ち着かせようとする隊長と思われる男。だが、言葉とは裏腹に表情に余裕はない。そのたつたの一人に、約半数の衛兵が一方的に撃破され、地面に倒れているのだ。

隊長も伊達にここを任されているのではない。三大勢力の戦争を生き残り、テロリストを相手に戦つた経験もある。おそらく、この中で一番強いのは彼だろう。

隊長は残つた部下を横目で見ると、敵である紅髪碧眼の男を睨み付けた。あの顔は見覚えがある。そう、見覚えがあるのだ。だが、隊長が確信を得られないのには理由があつた。自分の知る彼は、あんなに子供ではないのだ。

男の外見年齢は十五、六。つもりはまだ青年と言える。先日死亡となつたあの男は、基本的に外見年齢を二十代後半にしていると聞くと、実際に見たこともある。他人の空似だとしても、あまりにも似すぎている。悪魔なら外見年齢を変えられるが、本人は死亡したはずだから違うだろうと隊長は思考していた。

隊長が警戒するなか、紅髪の青年の横に転移魔方陣が展開され、光が弾けると共に

フードを深く被った男が現れる。

「まだやっていましたのですか。早く終わらせなさい」

男が指示を出しているが、青年は答えない。むしろ反応すらしない。

男は何かを思い出したかのように魔方陣を展開し、それを青年に当てた。

青年は一瞬身体をビクリと反応させると、手にする折れぬ聖劍を肩に担いで衛兵たちの視界から消え伏せた。

「ツー」

隊長だけはギリギリで手にしていた刀劍で青年の一撃を防ぐことが出来たが、部下たちはそうもいかない。青年が隊長の視界から消えると同時に次々と無力化され、地面に倒れていく。だが、死者は出ていないようだ。

——わざと負傷させ、その対処に手間を取らせるつもりなのだろう。

隊長は青年の行動の意味をそう推理した。

相手の狙いはコキュートスへの侵入。そして、自分達を半殺しにすることで、その治療のために到着するであろう増援が、短時間でも足止めされることを狙っているのだ。

青年が少し離れた場所で立ち止まると、隊長を冷や汗を拭った。速すぎてほとんど見えない。今の一撃を防げたのは一重に勘が働いたからだ。だが、それでは攻撃に移ることができない。増援到着まで、何がなんでも耐えるしかない。

隊長は防御の姿勢を取った瞬間だった。彼の意識が微睡む。

「……………」

頭を振って無理やり意識を戻そうとするが、効果がない。それでも足を踏ん張って倒れまいとするが、

ドゴンツ！

「か……………っ！」

一瞬にして間合いを詰め、無慈悲に放たれた青年の拳が鎧を砕き、隊長の意識を刈り取った。

青年は地面に倒れふした隊長を一瞥すると、聖剣を背負い直し、フードの男のほうに目を向けた。男の手元には怪しげに輝く魔方陣が展開されており、何かしたのは明白だった。

男は肩をすくめると、青年に言う。

「やれやれ。その姿に戻せたのはいいですが、色々と面倒ですね……………」

青年に言い聞かせるように言うが、返答はない。何かを待っているかのように男を見るだけだ。

男は再びため息を吐くと、魔方陣を展開してそれを青年にぶつけた。それを受けた青年はコキユートスへと続く道を進み始める。

男はそんな青年の背中を見送ると、不気味に笑む。

「まあ、彼はあの剣が振れた時点で及第点。きゆうだいてんあとは——」

その不気味な笑みが恍惚としたものに変わり、目を見開く。

「あのお方を救うのみ。そうすれば、きつと寵愛をいただける。ふふふふ、ハハハハハ………っ！」

男は狂ったように笑うと、青年を追って歩き始める。——が、すぐに大量の魔方陣を展開して怪物を呼び出していく。地に足をつけるものから空を飛ぶものまで、その数は百を越えて千にも届きそうな数である。

「……の守備は任せますよ。もう来たようですから」

その発言の一拍後、上空から影が落下してくると、爆音にも似た音を響かせて着地を決めた。

右腕を薙いで土煙を払った彼は、怪物たちを睨み付ける。

「……また面倒なことになってやがるな」

現れたのは紅髪碧眼の男——ロイだ。背中には必死にしがみつくリリスの姿もある。

ロイはコキュートスへの道を塞ぐように立ちはだかる怪物たちの奥に立っている男を睨んだ。

「おまえ、何者だ？七十二柱ななじゅうふたはしらに名がある悪魔じゃねえな。エキストラ・デーモン番外の悪魔か」

「そこまでわかっていれば十分でしょう？ 私にはとても重要な責務がありますので、失礼いたします」

男はそう言うのと、そのままコキュートスへの道を進んでいく。ロイは追いかけていこうとするが、怪物たちが立ち塞がった。

「本当に面倒だな。リリス、隠れるついでに怪我してる奴を引きずっていつてくれ」

「はい」

ロイはリリスを降ろして、近くの岩を指差す。リリスは右手を挙げて答えると、負傷者を引きずりながら岩の影に隠れ、また次の負傷者の元に駆け寄っていく。

それを確認したロイは、両手をまっくず横に伸ばし、それぞれの手に深紅の直剣を生成して身構えた。

「邪魔をするなら容赦はしねえ。たとえおまえらが利用されただけの被害者だとしてもな……！」

憎しみをぶつけるようでありながら、どこか悲哀を込めた声音で言うと、ロイは飛び出していった。

ロイの墓前、調査班が慌ただしく動いていくなか、ガブリエルの耳元に緊急連絡用の魔方陣が展開された。

「ミカエル様、どうかされましたか」

『少々問題のようです。現在、悪魔領のコキユートスの入り口が襲撃を受けたと連絡がありました。それに加え、ただですら辺境だというのに、近くの転移場所も破壊されたためか使えず、増援を送るのにも時間がかかってしまうそうです』

「ッ！わかりました。すぐに向かいます」

『「D×D」の皆さんにも連絡はつけていますが、到着がいつになるのかはわかりません。無茶はしないでください』

「わかっています」

ガブリエルは即答で返すと、調査班に後を任せて純白の翼を広げる。調査班の面々はそれを見て感嘆の声を漏らす。彼女は構わずに飛び立った。

天界最強の女天使が叩き出す速度は、並の者では目で追えるものではなく、あつという間に彼女の姿が空の向こうに消えていく。

調査班の面々は彼女を見送ると、再び作業に取りかかっていた。

人間界、兵藤家VIPルーム。

もはや『D×D』の集合場所となつてゐるその部屋に、グレモリー眷属とシトリー眷属、ジョーカー・ジュリオ、シスター・グリゼルダ、アザゼルが集まっていた。

アザゼルが切り出す。

「現在、悪魔領にあるコキュートスへと続く道がある場所が、『クリフォト残党』に襲撃を受けたそうだ」

『ッ！』

驚きを隠せない面々だが、ソーナが人差し指で眼鏡の位置を直すと、アザゼルに言った。

「彼らの狙いはあそこに囚われている者。つまり——」

「ああ、まず間違いない。奴らの狙いはリリン——リゼヴィム・リヴァン・ルシファアードらうよ」

憎々しげにアザゼルが頷くと、『D×D』の面々は表情を引き締める。

彼らがやつとの思いで捕らえた男が、また出てこようとしている。それだけでもまた世界に悪影響が出るだろう。

「おまえたちには、これからコキュートスへの入り口に向かつてもらおう。近くの町までは転移でいけるが、奴らに施設を破壊されたみたいだな。そこからは自力で行くしかない」

「なら、急ぎましょう。リゼヴィムを出すわけにはいかないわ」

リアスがそう言うと、眷属たちはほぼ同時に頷く。

シスター・グリゼルダが立ち上がりながら言う。

「ガブリエル様が先行して向かっているそうです。それと、協力者は既に現場に到着し、戦闘に入っていると連絡がありました」

「協力者？ 一体だれなの？」

リアスがアザゼルに目を向けると、彼は一度肩をすくめる。

「行けばわかるし、おまえらのことを味方だと思ってくれてくれるだろうよ。だから早く行け。そいつに無茶をさせるな」

アザゼルが急かすように言うと、リアスたちは頷いて部屋を後にする。アザゼルは彼らの背中を見送り、小さくため息を吐いた。

「あいつのこと、任せたぞ」

彼の呟きは誰にも届くことはなかったが、その声音は心から出たものであることは自覚出来ていた。

いつも無茶し、結果的には成功させる。周りのことを心配するくせに、その後のことをまったく考えない。

無鉄砲という言葉をもヒトにしたような男だが、嫌いではない。

だからこそ、今度こそ全員での無事の帰還を願う。後々フオローするのも、かなり面倒なのだ。

「フッ！」

短く息を吐くと同時に横一閃した直剣に切り裂かれ、三体の怪物がどす黒い色のヘド口状のものに変わる。

返り血で服と髪を黒く染めながら、ロイは次のターゲットに向けて跳び、そのまま怪

物を踏み潰しながら核コアに刃を突き立てる。

潰した怪物がどす黒いヘドロに変わり、彼のズボンを膝まで黒く染め上げた。次に向けて跳ぼうとするが、ヘドロの滑りぬめ気が強すぎて一瞬だが足を捕られてしまう。

その隙をついて怪物たちが一齐に飛びかかるが、上空から放たれた数百という光の槍が貫いていく。その真つ只中ただちゅうにいるロイには一本も当たらないあたり、凶つたものは相
当な腕なのだろう。

ロイがヘドロから足を引き抜き、近くの怪物を切り払うと同時に上空からそのヒトが舞い降りた。

「――ガブリエル!？」

「はい。お待たせしました」

手短に挨拶を交わすと、二人は背中合わせになつて構えた。

「おまえ、何でこんなところにいるんだよ！危ねえだろうが!」

「それはこちらの台詞セリふです！それよりも、私のことがわかるのですか?」

「……………」

ロイは気まずそうに視線をそらした。記憶喪失でまた行方不明になつたと聞いていたのに、彼はガブリエルを知っていた。

ガブリエルがさらに畳み掛けようとするが、彼女に上空から貫ぬかれ、地面に倒れて

いた怪物たちが立ち上がり始める。

「核を潰さねえと死なない。教えたはずなんだが、知らずにやったわけじゃないよな？」
「どこかわからないので、とりあえず撃ちました」

彼女の発言にロイはため息を吐くが、横目で怪物を見る。確かに、ガブリエルの攻撃で何体かヘド口になっていた。当てずっぽうでも、案外行けるようだ。

「まあ、いい。あいつらが来るまで、付き合ってもらおうぞ」
「その後もしつかりお付き合います」

「ああ、そうかよー」
「当たり前ですー」

軽口を叩きながら、二人はほぼ同時に飛び出していく！

ガブリエルが怪物の足を止め、ロイが核を潰して確実に仕留める。

手間はかかるが、二人の連携で確実に怪物たちを討ち取っていく。ロイ一人の時と比べ、撃破のペースは格段に早くなっていた。

「す、す……い……」

二人の連携を見た衛兵が感嘆の息を漏らす。

ロイの残す深紅の軌跡と、ガブリエルの残す白い軌跡。二つは絡み合いながらも決して互いを邪魔することはなく、その美しさを際立たせ、人々を魅入らせる。たとえ、そ

れが恐ろしい『死』を運ぶものであったとしても。

二人の舞いは決して止まることなく、衛兵^{かんきやく}たちの心を奪いながら、眼前の敵を駆逐していくのであった――。

mission03 突入、地獄の最下層（コキユートス）へ

兵藤家を出発した俺——兵藤一誠を始めとした『D×D』は、コキユートの入り口に向けて飛んでいた。

本来なら転移があつという間に行けるそうなのだが、その施設が『クリフト残党』に破壊されてしまったようで、こうして自力での到達を狙っているのだ。

俺たちの視線の先で、黒い煙が立ち上っていることが確認出来た。協力者とガブリエル様があそこで戦闘を繰り広げているのだろう。

「急ぐわよー！」

『はいー！』

リアスの号令で俺たちはさらに加速し、その場所を目指すのだった——。



「まったく、面倒だったな」

「ですが、これでほぼ全て討伐出来ました……」

まだまだ余裕そうなロイと、少し息を荒くしたガブリエルは、周囲を警戒しながら言葉を交わしていた。

二人がかりで数百の怪物を全て狩り、とりあえず一息ついているといった感じだ。

途中、何体か転移で逃げた、正確には誰かに回収されたのだが、二人はそちらまで意識する余裕はなかった。逃げる敵を気にする余裕があるのなら、向かってくる敵への対処が優先だ。

ロイがリリスのいるほうに目を向け、声をかける。

「リリス、無事か？あと、衛兵も」

「だいじょうぶ！」

「あ、ああ。何とか……」

リリスは笑いながら、衛兵の隊長はいまだに困惑した様子で返した。

ロイはひとつ頷くと、ガブリエルのほうに向き直る。

「リリスと怪我人を頼めるか。俺はこれからコキュートスに入る」

「つ！一人では危険です！せめて『D×D』の皆さんが来るまで待つてください！」

ガブリエルは止めようと抗議するが、ロイは首を横に振る。

「時間が惜しい。早くあいつらを追わねえと、大変なことになる」

「なら、私も行きます！」

ロイに詰め寄りながら言うガブリエル。冷静さに欠く彼女の言動に、ロイは頭を掻きながらため息を吐くと直剣を消し、空いた手で彼女の頬を撫でた。

「心配してくれるのはありがたいが、この先は結構厳しいぞ。そんな薄いローブだと特にな」

ガブリエルは自分の服に目を向ける。いきなり戦闘に入ったため、彼女にとつての普段着でもある純白のローブは、返り血で少し黒く染まっており、余り防寒性が高いようには見えない。

ロイは微笑を浮かべ、彼女の頬から手を離す。

「だから、ここで待って——」

「が、我慢します！多少の寒さは、何とか耐えます！」

やけくそのように言うガブリエル。ロイの微笑していた口の端がピクピクと引き釣り始め、額には薄く青筋が浮かび上がる。

「あのな、この先はそんな根性論でどうにか——」

「します…これでも鍛えているんです！」

諦める様子のないガブリエルに、ロイは諦めたように大きいため息を吐くと、自分の羽織っていた外套を投げる。

「ついてくるなら羽織つとけ。リリース、ちよつとここで待ってろ」

「はい」

「衛兵も、無理しない程度にその子のことを頼んでいいか？」

「わかった。だが、ひとつ聞いてもいいか？」

「ん？」

コキュートスの入り口に足を向けていたロイは、隊長のほうに向き直る。

「貴様は、『ロイ・グレモリー』なのか？」

「……いや、似ているだけだ。よく間違われる」

衛兵の質問に、ロイは少し間を開けて返した。表向き死亡扱いなのだ、そう返すしかない。

ある程度の事情を察した隊長は、ロイの返しに複雑そうな表情を浮かべると、彼に警告した。

「相手に『聖剣を使う紅髪の少年』がいる。その少年一人に、我々はこの有り様だ。気を付けてくれ」

「『紅髪の少年』？まあ、気を付けるよ。警告に感謝する」

ロイは衛兵に礼を言おうと、ガブリエルと目を合わせて頷きあい、コキュートスの入り口に向けて駆け出す。

リリスはコキュートスに消えていく二人の背中を見つめながら、横に倒れている衛兵に声をかけた。

「だいじょうぶ？」

「このくらい、何てことない！」

応急処置を終えて強がる衛兵だが、巻いた包帯は血で真っ赤に染まっている。早く病院に連れていかなければ、手遅れになってしまうだろう。

ふと、リリスは見知った気配を感じて空のほうに目を向ける。彼女の視線に、数人の悪魔たちがこちらに向かつてくる姿が写されていた。

俺——兵藤一誠を始めとした『D×D』は、ようやくコキュートスへの入り口に到着

したのだが――、

「あ、赤龍帝」

「リ、リリス!? な、なんでこんなところに!？」

俺は思わず驚きの声をあげた。当たり前だろう、俺たちの前には、ロイ先生と共に再び行方不明となったリリスがいるのだから！

驚く俺たちを他所に、リリスは俺の後ろにいたロスヴァイセさんに目を向ける。

「ロセ、ひさしぶり!」

「え? ああ、お久しぶりです……」

笑顔で挨拶するリリスと、困惑気味のロスヴァイセさん。まあ、いきなりあだ名で呼ばれれば、驚きもするだろう。

それはともかくとして、リリスのいる岩の近くに、負傷した衛兵の皆さんが倒れている。応急処置はしてあるようだが、それでも危険な状態なヒトもちらほらいるようだ。

アーシアがいち早く駆け寄り、そのヒトたちを治療し始めた。

その様子を横目で確認しながら、グリゼルダさんが衛兵の隊長と思われるヒトに訊いた。

「ガブリエル様と、協力者の方はどちらにいらっしゃるのですか?」

「お二人は既にコキュートスに入りました。追うのなら、早く行ったほうが良いかと」

隊長さんの言葉に、俺たちは表情を険しくさせた。俺たちを待たずに行つてしまふとは、よほど切羽詰まつているのだろう。あまり時間の余裕はなさそうだ。

この状況を見てか、ソーナ前会長が言う。

「怪我人の搬送は私たちが行います。リアスたちは先に進んでください」

リアスが頷こうとした矢先、上空から何かが落下してくる！だが、それから感じるオーラには覚えがある。てか、よく感じる気配だ！

その何かは地面に当たると寸前で急ブレーキをかけて停止、ゆつくりと地面に足をつける。

「すまない。待たせてしまったな」

「ヴァーリ！おまえも来たのか！」

「あの男が出てくるかもしれないんだ、当たり前だろう」

現れたのはヴァーリだった！アザゼル先生が連絡を入れてくれたのか、このタイミングでの到着だ。

ヴァーリの横の空間に穴が穿たれ、そこから数人の男女と一匹の大型犬ほどの大きさの狼が現れる。

「この前ぶりだな、スイッチ！」

「……………」

美猴の登場と挨拶に、露骨に嫌そうな顔をするリアス。まあ、この二人は『犬猿の仲』ならぬ『姫猿の仲』。ようするに仲が悪い。

「黒歌、ひさしぶり！」

「にや？おー、リリスじゃないの。元気にしてたかにや？」

「うん！」

割りと仲良さげな雰囲気黒歌とリリスだが、黒歌は一度周囲を見渡してからリリスに訊く。

「リリス、あいつはどこにや？」

『あいつ』——おそらくロイ先生のことだ。リリスと常に行動を共にしているらしいあのヒトが見当たらないのが気になったのだろう。

「んとね、あっちー！」

笑顔のリリスが勢いよく指差したのは、コキュートスの入り口の方向。つまり、ロイ先生はコキュートスへ？もしかして協力者って……。

リアスたちも俺よりも早くそれを察していたようで、皆複雑そうな表情になっていた。

いなくなったあのヒトが協力者つても変な気がするが、その可能性が一番高い。合流すれば、何かわかるかもしれない。

「ソーナ、こっちはお願いね。私たちはこのまま進むわ」

「ええ。私たちも済み次第追いかけます。サイラオーグたちもそろそろ到着するそうですから」

ソーナ前会長の言葉に俺たちは頷きあい、リアスが走り出すと同時に俺たち『グレモリー眷属』と『ヴァーリチーム』もコキユートス入り口に向かう。

リゼヴィムの野郎を、外に出すわけにはいかない……！

「——で、大丈夫か？」

「だ、だだだ、大丈夫でしゅ……！」

俺——ロイが走る横で、ガブリエルが死にかけながら走っていた。まあ、薄手のローブに布切れ一枚だけだと、さすがに寒いのだろう。俺は仙術の応用で体温を上げていたりする。

「それにしても、派手にやるじゃねえか。立ち塞がった魔物を片っ端から狩ってやがる。

おかげで追いかけてやすいが……」

そう言った側から近くに魔物の死骸を見つけた。剣で腹を斬られており、内臓を地面にぶちまけている。しゃがみこんでそれらに触れてみると、まだ温かった。つまり、殺されてからあまり時間が経っていない。

「かなり殺られているな。生態系に何かないか、調査班を呼んだほうがよさそうだ」
「そ、そうですね……！」

腕を組みながら身体を擦り、必死に寒さに耐えているガブリエル。俺は一度ため息を吐くと、彼女の手をとる。

「……あ、あの……」

驚くガブリエルを他所に、彼女の手を魔物の腹に突っ込んだ。

「っ?!?!」

「生物は死んでもしばらくは熱を持つ。冷えきった身体には効くだろう？」
「本当ですね。……とても温かいです……」

俺も手を突っ込んで手を温めながら言う。

「この『熱さ』が俺たちを生かしてくれる。——って、先生に教わった」

「先生、ですか？」

「俺に仙術とかを教えてくれたヒトだ。今度色々聞かせてやるよ」

俺はそう告げると腹から手を引き抜く。おかげで十分温まった。こいつの毛皮を剥いで防寒具を——といきたいところだが、そんな時間はないし、ばらして今日の夕飯に——といきたいところだが、その時間もない。

俺は仙術で周囲の気配を探り、近くに他の魔物がいないかを確かめる。

……少し遠いが、何体かいるようだ。そいつらの夕飯になるだろうな。

俺は立ち上がり、地面に転々と残る血痕に目を向ける。これを追えば、奴らに追い付けるか。この様子だと、もう少しで接触できるはず。

「行けるか？」

「はい、大丈夫です！」

身体が温まったからか、元気になっているガブリエル。その手は真つ赤に染まっているがな。

俺は頷き、血痕を辿って走り始める。『紅髪の聖剣使い』ってのは気になるが、とりあえずリゼヴィムを出さないことが最優先だ。出てきても、ソッコで殺す。

ガブリエルが後ろに続くなかで、俺は静かに魔力をたぎらせるのだった——。

「……………」

「おや、もう来ましたか」

フードを目深く被った男の言葉に、紅髪の少年は返さない。ただ視線の先に揺れる二つの小さな影を睨むだけだ。

男は顎に手をやりながら少し考えると、横に転移魔方陣を展開させた。

「時間稼ぎをさせてもらいましょう。まだあのお方の元までは時間がかかりそうですから」

そこから現れるのは大量の怪物。極寒のコキユートスに合わせてか、体毛が多く、狼のような個体たちだ。

『仲間意識』。それを組み込んだこれらならば、彼らも少しは苦戦するでしょう」
「……………」

男の言葉に少年は返さず、勝手に進み始める。男は肩をすくめると、少年を追って歩き始めた。

少年は一切の感情を感じさせず、男は冷徹でいて、狂喜を内包している不気味な表情を浮かべる。

「ああ、もうすぐです。もうすぐですよ」

男はそう言うなり、両腕を広げて天を仰ぐ。

「——我が愛する主よ^{ルシファー}」

その眩きは少年の耳には届いているのだろうか、相変わらずリアクションはない。男はそれを良いことに不気味な笑みを深めた。

「クハハハハ……っ！ええ、その通り。もうすぐ、もうすぐですよ！ハハハハハハ！」

狂った男の笑い声は、氷の大地に虚しく響く。近くにいた魔物たちは何かを感じて逃げ出し、群れで固まっては震えて動けなくなる。

男の目的はただひとつ。ルシファーの寵愛をいただくこと。その為だけに、彼はその生涯の全てを懸けていた——。

mission04 進化した怪物

コキュートスを進む俺——ロイとガブリエルの視線の先で、複数の影が揺れた。その方向から嫌な気配を感じるから、おそろく敵が放った怪物どもだろう。

「前から来るぞ。数は——五十つてところか」

「わかりました。蹴散らします！」

「……おまえじゃ核コアの場所がわからねえだろうが」

意気込みガブリエルにため息混じりに返す。

俺の言葉を受けたガブリエルは「そ、そうですね……」と若干不満げに顔を赤くしていた。

「しつかり指示してやるから、あんまり無茶するなよ」

「わかっています」

手短にやり取りを終えると、前方から迫る影の姿がはつきりし始める。

黒い体毛に覆われた、狼か何かか？ 珍しく全てが狼型だ。極寒の気候であるコキュートスに合わせて、あいつらは作り出したのだろう。

逆に言う、あいつらは計画的に、しつかりと準備を整えてここを襲撃したってこと

だ。あいつら、いったいいつから準備をしていた……？あの怪物を作り出すのも、リゼ
ヴィムが捕まってるから今までのそんな短期間では無理だろうに……。

俺が考えながら表情を険しくさせていると、前方から迫ってきていた群れが突然散り
散りになり、俺とガブリエルをぐるりと囲み始める。

奴らの行動に、俺は眉を寄せた。大概は戦闘中にいつの間にか囲まれていたり、俺が
群れのど真ん中に降り立ったりなんてことが多かった。だが、今回は向こうから囲ん
きた。

俺は両手に直剣を、ガブリエルは右手に光の槍を生成し、背中合わせに構え、狼型を
睨む。同時に仙術で高めた関知能力で核^{コア}の位置を探る。

「個体毎に核^{コア}の場所が違うと思っただが、同じだな。どいつもこいつも急所は眉間だ」
「それさえわかれば、どうにかかります」

俺たちが警戒するなか、怪物たちは唸りながらこちらを睨むだけで何も仕掛けてこ
ない。いつもなら我先にと突っ込んでくるのだが、やはり何か変だ。

「何かおかしい。気を付けろよ」

「……？わかりました」

あまりこいつらとの戦闘経験がないガブリエルは、一瞬だけ疑問符を浮かべたが、す
ぐに表情を引き締める。

どの五十は斥候だったようだ。

俺たちは飛びながら言葉を交わす。

「また来やがったか。面倒だな……」

「今までの戦闘で、彼らがここまで連携したことはありませんか？」

「いつもは力任せに突っ込んできて、あのローブ野郎が何かすれば簡単な連携を——な。だが、ここまでのものは一度も……」

唸りながらこちらを見上げてくる狼どもを睨み返しながら、ガブリエルに訊く。

「まだ伏兵がいるかもしれないねえ。もっと効率よく、消耗しねえように片付けられるか？」
「わかりました。やってみます」

ガブリエルが頷いたことを確認し、俺は左手の直剣を消す。少しでも魔力を温存しておかねえと、何かあるかわからん。こいつらを相手するなら、一本でも十分だろう。

ガブリエルも光の槍を右手だけに生成し、ゆっくりと息を吐く。動き回っているとはいえ、流石に見逃せないほど冷えてきた。動き続けなければ、下手すれば凍りつくだろう。

「行くぞ！」

「はいっ！」

俺たちは同時に急降下。地面に着地したと同時に狼型が殺到してくるが、ガブリエル

と連携して片っ端から討伐していく。

一体倒したら二体飛び出し、二体倒せば四体、四体倒せば八体と、はつきり言ってきたりがない。だが、無視すれば確実に追いかけてくるだろう。そうになると、リゼヴィムの解放阻止どころではなくなる。ここで殺しきるしかない。

だが、狼型は次々と地面に空いた大穴から飛び出してくる。終わりはあるのだろうか、いつ終わるのがわからない。そう思うだけでも、地味に焦る。

それでも二人がかりで狼型を倒していく。辺り一面が黒いヘドロまみれになり、俺たちも返り血で服や髪、肌が黒く染まっていく。

そのせいなのか、先ほどからやたらと冷える。返り血が冷気で凍り、体温と共に体力を一気に奪いさつていくのだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

ガブリエルが相当疲弊した様子で、白い息を吐いていた。俺も結構ギリギリだな。仙術で体温を上げられても、それ以上に冷えやがる。俺でこれなら、ガブリエルは相当だろう。これ以上の無理はさせられねえ。

俺は狼型を一体撃破し、ガブリエルに叫ぶ。

「ガブリエル、おまえを逃がす！これ以上は無理だ！」

「……だ、大丈夫です……まだ、まだ、まだ……！」

の冷気を纏っているのか、それとも凍った氷が体温で溶けているのか、白い霧もやのようなものが身体から放たれていた。

「ここに来てボス登場かよ……!」

無意識に苦笑してしまう。消耗したガブリエルにとどめを刺しに来たのだろう。眼中にないように俺とは一切目を合わさず、ガブリエルを血のように赤い瞳で睨んでいた。

「核コアは腹の中。いや、普通に心臓がある位置か。また狙いづらい場所だな……!」

「私が狙いなら、囷クワになります……!」

そんな事を口走るガブリエル。やる気はあるようだが、やらせるつもりはない。

俺は首を横に振り、巨大な狼型を睨み付ける。

「それはさせられねえ。危険すぎだ」

「ですが……!」

引いてくれないガブリエルだが、そんな事をしているうちに狼型のボスが飛び出してくる!

「チッ!」

舌打ちをしながらガブリエルを抱き上げ、その場を飛び退く。一瞬後に彼女がいた場所に高速で爪が振り下ろされ、地面が抉りとられた。

俺はともかく、ガブリエルへの直撃はアウト。一撃で身体がバラバラにされるだろう。だが、回避できるほどの余力があるかどうか……。

てか、くつついているお陰なのか、少し温かい。まあ、お互いの身体が冷えきっているから、余り意味はないがな。

「さて、どうするか。俺はギリギリ止められるが、おまえじゃ無理だろ？」

「そ、そうですが、やはり囿は私が……」

まだ言うガブリエルだが、なんか宙を見つめてボーっとしているように見える。

俺が彼女を心配している側から狼型が俺たちを包围し、ボスが再び狙いを定める。

さて、退路は上しかないが、あの大きさだとかなり飛ばないと駄目だろう。ガブリエルを抱えていることに加え、身体が冷えきっている今だと、避けられるかわからねえな。足を踏ん張り、思い切り飛ぶ準備を整えた瞬間だ。どこからか紅のオーラの塊が飛来して群れの一部を吹き飛ばした。

群れに開いた大穴に二つの影が飛び込み、狼型を次々と切り裂いていく。

驚く俺とガブリエルを他所に、俺たちの横に見知った人物たちが現れた。

「ロイさん！ガブリエル様も、大丈夫ですか!？」

防寒着をしつかりと着こんだロセが、我先にと俺たちに詰め寄ってきた。見てみると、リアスやイツセー、デユリオ、ヴァーリなどのメンバーが狼型を蹴散らし始めたい

た。

「俺はなんとかだが、ガブリエルが限界だ。……レイヴェルは、いないよな。何でもいから何か火を、火をくれ……」

「は、はい!」

ロセは手元に魔方阵を展開すると、そこから火を起こしてくれた。

とりあえず、どうにかして身体を温めねえと、まじで死ぬ。戻ってきて一ヶ月ぐらいでまた死ぬとか勘弁だぞ……。

「ガブリエル。ガブリエル!大丈夫か、おい!」

「……だ、だいじょうぶです……!ちよつと意識が遠く……」

「つ!戻ってこい!ようやく暖がとれるんだぞ、しっかりしろ!」

「ああ、温かいですう——」

俺に抱えられたまま火に当たり、表情を緩ませるガブリエル。何か、戦場のど真ん中にする会話じゃねえな。

俺はホツと息を吐き、狼型の群れのほうに目を向ける。黒歌や小猫、美猴の指示で、リアスたちは的確に核を潰していった。

だが、そのボスである巨大な個体は——、

『オオオオオオーン!』

「チッ！」

ヴァーリと一対一でいい勝負していた。だが、割りとヴァーリが押しているか……？ 身体を温めながら、ガブリエルの身体に気を送ってやり、さらに体温を上げられるようにする。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！』

俺とガブリエルの身体がだいぶ温まってきたころ、突然狼型のボスが吠えた。同時にどこかへ向けて駆け出し、半数以下にまで減った取り巻きもそれに追従して去っていった。

死ぬまで戦うことなく、転移で回収されるわけでもなく、撤退するとはな。何かしらの方法で奴らを進化させたのか？ また面倒だな……。

温まりながらそんな事を考えていると、

「……まあ、そうなるよな」

今度はリアスたちに包囲された。逃げるつもりはないが、こいつら、嫌に殺気立っているんだよな……。



俺——兵藤一誠と仲間たちで、あのデカイ狼とその取り巻きを撃退したあと、ガブリエル様を抱きかかえているロイ先生を取り囲んだ。まあ、念のためだけど。

リアスが訊く。

「……まさか、あなたが協力者なの？」

ロイ先生は頷き、微笑しながら言う。

「相変わらず、いい動きするもんだな、おまえら」

そう言いながらも、火に当たることは止めず、ガブリエル様を温めながらも自分もしっかりと温めている。

「とりあえず、ガブリエルを外に出せねえか？これ以上は無理だ」

「わ、私は——」

「はいはい。無理はしなくていいから、ゆっくり休んどけ。グリゼルダ、頼めるか」

「え、ああ、はい」

突然名を呼ばれ、若干困惑気味に返事をするグリゼルダさん。

……ロイ先生、記憶喪失って聞いたんだけど、なんでわかったんだ……？

ロイ先生は困惑する俺たちに構うことなく、懐を探りながら続ける。

「とりあえず、話は後。リゼヴィムを出すわけにはいかねえ。先導はするから、リアス、行けるか？」

「え？ええ。お兄様……？」

「……あ、ああ。その悪かったな。無くなっている間に色々をやっちゃまって……」

ばつが悪そうに頬をかきながら謝るロイ先生。つてことは、このヒト——。

「とりあえず、『ロイ・グレモリー』、『D×D』に合流するつてか？」

何て言いながらタバコを吸い始めるロイ先生。

どうやら、俺たちが知らない間に、大部分の記憶は戻っていたようだ。

mission 05 紅が交差するとき

俺——ロイとガブリエルを囲んでいたリアスたちは警戒を解いてくれたが、状況は一刻を争う。ガブリエルはもう限界のようだし、ここで離脱してもらうしかない。

俺は紫煙を吐き出し、ガブリエルに肩を貸しているグリゼルダに言う。

「とりあえず、そいつを頼む。指先とか、軽く凍傷になっているかもしれない」

「わかりました。ガブリエル様、歩けますか？」

「……だ、大丈夫です。ロイ様、ひとつよろしいでしょうか？」

「ん？なんだ」

タバコをくわえながら、俺は小さく首をかしげる。

「アロンダイトはお持ちでしょうか」

「……いや、てか、あれどこにあるんだ？」

俺が聞き返すと、ガブリエルの表情が険しくなった。

「皆様にもまだ伝わっていないのですが、アロンダイトが何者かに持ち去られました」

『っ!?!』

「……なに」

「驚愕するリアスたちを他所に、俺も表情を険しくさせた。

「一体誰が……？あれは俺にしか振れねえんだろ？」

俺の疑問にガブリエルは頷く。

「あの剣と波長のあう人物、つまりロイ様にしか振れないはずなのですが、何者かが盗み出しました」

「……なぜだ。盗む意味なんてねえだろうが」

紫煙を吐き出し、顎に手をやりながらぼそりと呟く。だが、実際に盗まれたのなら、何かしら意味があつてのことなんだろう。

「とりあえず、その話は後にしよう。今はリゼヴィムが優先だ。グリゼルダ、頼む」

俺の言葉にグリゼルダが頷いたことを確認し、二人を囲むように転移魔方陣を展開する。

脱走用にコキュートスの入り口にマーキングはしてある。今回はそれを使わせてもらおう。

「では、後はよろしくお願いします」

転移の光に包まれながら、グリゼルダの言葉に俺たちは頷く。

「どうか……無事で……」

転移の光に消えていくなか、ガブリエルの呟きが俺たちの耳に届く。当たり前だ、そ

のために俺は戻ってきた。

——何がなんでも、ロセたちを守る。この命に懸けて……！

「……さ、寒い」

覚悟を決めて走り出して一時間ほど。現実はかなり厳しいもので、寒さが容赦なく俺の体力を奪っていく。

「だから、あんたも休んでなさいって言ったのにや！」

走りながら寒がる俺の横で、防寒具に身を包んだ黒歌が地味に怒りながら言う。

防寒具の外套はガブリエルに持っていかれてしまったし、今回ばかりは諦めて耐えることにする。まあ、そういうのには慣れているからな。

リアスが訊いてくる。

「お兄様、どうして脱走したのですか。記憶が戻ったのなら、合流してもよろしかったのでは？」

「まあ、死亡扱いで単独行動のほうが動きやすきからな。多少の法を犯しても、後で俺だ

「けが色々と言われるだけだ」

俺の返しに、リアスは少し複雑そうな表情になっていた。

「今まで散々心配かけたのだから、もう少し何か言っておけば良かったかもしれない。それが言えるような状況ではなかったんだけどな。」

「まあ、下手におまえらを巻き込みたくなかったんだよ。あの骸骨神様がしつこくてな。あいつ、なりふり構わずって感じになり始めていやがる」

俺がそう言うのと、不意にロセが俺の肩に手を置いた。

「もつと、私たちを頼ってください。ロイさんだっていつも言っているじゃないですか。私たちは大切な仲間だって……」

悲哀を込めてそう言うロセ。

確かにロセたちは大切な仲間だ。だが、大切だからこそ、出来るだけ巻き込みたくないと思ってしまう。

「……そうだな。仲間だもんな」

本音とは裏腹に、微笑しながらロセたちに心配をかけさせないようにそう返す。

リアスやイツセーたちは頷き返してくれたが、ロセと黒歌だけは少し不安げな表情のまままだ。もしかしたら、俺の本音のほうに気づいているのかもしれない。

俺は前方に目を向け、視線の先で揺れる大きな影と二つの小さな影を睨み付ける。

「見えたぞ。まだ解放出来てはいねえみたいだな」

「急ぎましょう。いつ出てきてもおかしくはありません」

俺とリアスは領きあい、速度を上げていく。おそらく、あの狼型の群れと、『特異個体』とかいう奴との戦闘は避けられない。そいつらを相手しつつ、リゼヴィムが出てくるのを防がなければならない。

こうやって考えてみるとなかなかきついが、やるしかない。ようやくあの野郎をぶちこめたんだ。一ヶ月程度で出すわけにはいかねえ。

「——おや、来ましたか」

手元で数百の魔方陣を動かしながら、ローブの男は近づいてくる悪魔たちの気配を察し、不敵に笑んだ。

「では、彼らの相手はあなた方におまかせしますよ。特に、あの『燃え滓』はあなたが相手しなさい」

声音こそ申し訳なきそうだが、その表情に口を歪いびつに歪めた笑みを張り付けながら、男は天を仰ぐ。

「もう少しです。もう少しだけお待ち下さい。我が主よ………」

「寒さみいっ！なんでこのタイミングで吹雪いてくるんだよ!？」

「我慢してください！予備の防寒具はないんです!」

俺が愚痴ると、すかさずロセがツツコミを入れてくる。もつと予備を用意しておいて欲しかったな。俺も外套を脱ぐことになるとは思わなかったけどさ。

俺が何か言い返してやろうとした矢先、仙術で高めた感知能力に何かが引っかかる。この気配はさっきの奴らと同じ。

「正面、来るぞ!」

『はい!』

リアスたちが返事をした瞬間、狙ったかのように吹雪が弱まる。お互いの姿を目視で

確認した瞬間、右胸の傷が疼いた。

反射的に右手に直剣を生成、ロセのほうに飛ぶ。

「ロセ、伏せろ！」

「え……」

反応しきれていないロセを左手で突き飛ばし、直剣で振り下ろされた一撃を止める。

甲高い金属音が響き渡り、その相手と、奴が握る武器を見て、俺とロセは驚愕の表情を浮かべた。

「……おまえ、何者だ!？」

「……」

俺の問いには答えず、ただ力を込めてくる。

俺は困惑しながらも無理やり相手を押し返し、横風ぎに直剣を振るう。

相手は余裕でその場を飛び退くと、一度深く息を吐き、構え直す。

その間、俺とロセはただ相手を見つめていた。

あいつが持っている武器に見覚えがある。それだけならそこまで驚くことではないが、問題はその持ち主。

聞いていた通り『紅髪の少年』だ。外見は十五、六だが、だが………！

「ロ、ロイ、さん………？え………？どういうことですか………？」

弱々しい声音で訊いてくるが、俺はそれを気にする余裕がなくなり始めていた。

「それは俺が聞きてえよ。なんで——」

少年は己の武器——アロンダイトに魔力を込めていき、刀身を深紅に染め上げる。

まるでそうすることを知っているように手慣れた様子で、これは俺のものだと見せつけるように……。

「——俺の前に俺がいるんだよ……!?!」

リアスたちが狼型の群れと派手に戦闘を繰り広げるなか、俺とロセの回りは、わざと孤立させたように静かだ。

ロセは立ち上がると俺の横に立ち、俺と少年を交互に見比べる。

「ロイさんにそっくりですね。でも、だいぶ幼い感じが……」

「確かに、若い頃の俺にそっくりだ。あそこまで無表情じゃねえが……」

困惑したまま、ロセにそう告げた。そっくりと言うよりは、そのままだ。一切の表情を顔に出していないところが不気味だけだな。

俺は少年を睨み付けながら、言葉に少々の怒気を込めて訊く。

「おまえ、何者だ。名前は」

「……………」

回答なし。まあ、さつきもそうだったし、あまり期待していたわけではないがな。

衛兵が言っていた聖剣使いは、あいつなんだろう。そして、アロンダイトを盗み出したのもおそらく……。

俺が警戒しているなか、少年が一気に飛び出した。俺の目から見ても驚異的なまでの速さだが、まだ遅い！

飛び出してきた勢いで放たれた突きを直剣で受け流し、そのまま刃を返して背中を斬りにいくが、少年はその場を飛び退いて避ける。

「ロセ、下がっていてくれ。あいつとは、一対一で勝負がしたい」

直剣に魔力を込めながらロセにそう言うと、彼女は一度頷く。

「わかりました。けれど、危なくなったら援護に入ります」

「了解。その時は頼んだー」

言い切ると同時に瞬時に間合いを詰め、少年に斬りかかる。少年は普通に見えていたようで、アロンダイトで俺の一撃を受け止めてみせた。

つばぜり合いをしながら、相手の力を測る。見た目以上に力強く、重い。前の俺なら一気に押しきられていたかもしれないが、力だけじゃ俺には勝てねえよ。

「——で、俺の言葉はわかるか？」

競り合いながらそう訊くが、少年は何も反応を返してこなかった。そこまでポーカーフェイスなのか、あるいは本当に理解できていないのか……。

俺は小さくため息を吐き、力を抜きながら直剣を傾ける。押しきろうと必死に力を込めてきていた少年が、前につんのめるように体勢を崩した瞬間、

「フッ！」

「ッ！」

腹に膝蹴り撃ち込む。無表情を貫いていた少年だが、身体をくの字に曲げながら、歯を食い縛って苦痛に耐えていた。

それを横目で見ながら足を引き戻し、今度は少年の顎を蹴りあげる。快音が吹雪の音に混ざって俺の耳に届くが、それを無視して無防備な腹に拳を放った。

「か……………ッ！」

肺の空気を吐き出しながら吹っ飛ぶ少年。だが、空中で体勢を立て直して足の裏を地面に擦りながら無理やり勢いを殺した。

何だろう。こいつ、弱くないか？足は速いが、剣の扱いが雑だ。いきなり慣れないことをさせられている感じがしてならない。

俺の予想が正しいければ、こいつはあの龍型の正体なんだろう。だが、あの時のほうがだいぶ強かった。具体的に言うのと、刺し違えを覚悟する程度には強かった。今はそこまでもないな。

俺はゆっくりと息を吐き、直剣を両手で握りながら重心を落とし、剣を顔の横にやり

ながら刀身を地面と水平にし、切っ先を相手に向ける。ようは『霞の構え』を取ったわけだ。久しぶりだが、いけるだろう。

俺の構えを見た少年は目を細め、警戒を強めているように見える。

それを見ながら俺は不敵に笑み、一気に飛び出す。音を置き去りにした俺の踏み込みを見切るとは出来ていない様子だが、見逃してやるほど甘くはない。

少年の背後を取った瞬間に、渾身の力を込めた突きを放つ！

軽く空間を穿ったほどの突きだが、少年はギリギリで反応してアロンダイトで受け止めた。耳障りな甲高い音が響くが、俺たちはそのまま剣撃の応酬が始まる！

俺たちの回りで火花が乱れ舞い、顔の横すれすれを刃が通りすぎていくが、慌てることはない。当たらなければそれでいい。

俺は余裕があるが、少年の身体には少しづつ傷が増えていく。傷からは赤黒い血が流れ出るが、それに構わず少年は打ち込み続けてくる。傷からは赤黒い血が流

突きと風ぎの応酬がひたすら続き、お互いに決して引かず、至近距離で斬り続ける。途中で蹴りや拳を織り交ぜ、少年にダメージを蓄積させていく。

少年の動きは明らかに鈍くなっていくが、それでも引かない。その選択肢がないのか、俺が間合いを開けたら速攻で潰しに行くことがばれているのか、どちらにせよもうすぐ押しきれぬだろう。

「ロイさん、避けてくださいい！」

「ッ！」

ロセからの突然の警告に、俺は反射的にその場を飛び退く。一瞬後に俺のいた場所に狼型の一体が飛びかかり、地面に爪を食い込ませていた。

横目でリアスたちのほうに目を向けると、明らかに数を増やした狼型の群れとそのボスに苦戦を強いられていた。加勢に向かったほうが良さそうだが、今は目の前のあいつをどうにかしねえと。

少年はぼろぼろになった自分の身体を見つめ、首をゴキゴキ鳴らすと、静かに瞑目した。その横では狼型が俺に向かって唸り声を上げている。

少年はゆっくりと息を吐き、先ほどの俺とまったく同じ構えを取った。見よう見まねだとは思いますが、どうにもあいつが放つ圧が強くなった気がする。

俺が肩をすくめて構え直すと、俺たちの視線の先、本来の目的地の方向から嫌な気配が滲み出始める。この気配、忘れるわけもない。これは、奴の……！

殺気立ちながらそちらを睨み付けると、少年が狼型に跨がり、群れに紛れて吹雪の中に消えていく。行き先は間違いなく奴のところだろう。

「ロセ、追うぞ！」

「はい！」

既に追いかけて始めているリアスたちに続き、俺たちも走り出す。おそらく、この先であの野郎と戦いになる。奴の能力の都合上、戦力になるのはごく少数になっちまうが、仕方ねえだろう。

吹雪吹き荒れるコキユートの真ん中で、再び最悪の悪意が始まろうとしていた。

mission 06 悪意の再開

吹雪に消えた狼の群れと、紅髪の少年を追いかけ、俺——ロイを含めた『D×D』はコキユートスを走っていた。

先ほどよりも酷くなった吹雪に影響され、少し時間がかかってしまったが、ようやく追い付くことが出来たのだが、

「待っていましたよ、『D×D』の諸君。そして、『燃え滓』」

俺たちに目を向けながら、不敵に笑むローブの男。その横には少年が立っており、その回りを狼型が囲んでいた。

俺は男を睨みながら言う。

「あの野郎が復活したのかと思ったが、まだみたいだな」

「ええ、後五分ほどです。まあ、既にオーラが漏れ出ていますが」

そう言う男の後ろ、リゼヴィムが封じられていると思われる場所に魔方陣には怪しげな魔方陣が展開され、ゆっくりとだが回転しているようだった。おそらく、あれが一回転すると出てくるのをだろう。

白銀の鎧を纏うヴァーリが、強烈な殺気と共に強力なオーラを放ちながら男を睨む。

「舐められたものだな。五分もあれば、貴様なぞ殺せるぞ」

並の奴ならびびるのだろうか、目の前の男は違う。何故か興奮した様子で、恍惚の表情を浮かべていた。

「ああ……。ああ……。その殺気、そのオーラ、最っ高です！流石はあのお方の末裔！素晴らしいっ！」

「ツ！」

ヴァーリは気味悪がりながらも一切の躊躇いなく、右手から白銀のオーラを撃ち放つ。それは吸い込まれるように男の顔面に直撃した。

男は凄まじい爆音と共に体全体を仰け反らせて背中から倒れそうになるが、足と腹筋だけで体を支え、すぐさま体を起こす。

「な、なに……。!?」

困惑するヴァーリ。当たり前だろう。ヴァーリの攻撃を真っ正面から受けた男は――

「いい……。とてもいい……。非常にいい！あ、あ、下品なのですが、久しぶりに勃起してしまいましたよ！」

顔を血塗れにしながらも、めっちゃ嬉しそうにしているのだ。な、なに、あいつ。変態？変態なの？いや、紛れもない変態だよな!?

ドン引きしている俺たちを他所に、男は恍惚の表情を浮かべたままヴァーリに目を向ける。

「やはりあのお方の血族は、我が主、ルシファー様の系譜の力は素晴らしい……っ!!」
「……っ!」

流石のヴァーリも気圧されたのか、数歩後退る。兜で見えないが、その表情は険しいものか、口の端をひきつらせて引いていることだろう。

美猴がそんなヴァーリを励ますように、珍しくふざけた様子もなく、少し同情するようにその肩を叩く。

「あ、あ、……。それはそうと、いいのですか?あなたの方がそうしている間にも、リゼヴィム様の復活の時は確実に、刻一刻と迫っておりますが」

男は大きく息を吐き、落ち着いた様子でこちらに言ってきた。確かに、それはそうなのだが、こいつのせいでヴァーリの戦意が鈍ってしまった。

まだやる気の俺たちは目配せすると、再び構える。相手は少年と狼型の群れ、そしてあの^{おとし}変態。どうするか。まあ、俺の相手は決まっている。

ちらりと少年に目を向けると、しっかりと睨み返してきた。先ほど与えた傷も完治しているようで、背中に背負うアロンダイトに右手をかけていた。

小さく息を吐き、リアスたちに言う。

「すまねえが、あいつは俺が相手する。ちよつと因縁ありなんだな」

左手で右胸の傷をかきながら、右手に直剣を生成。少年はアロンドイトを抜き放ち、殺気を放ち始める。

そんな少年を見ながら、男は不気味な笑みを浮かべた。

「ふふ、これはあなたは夢中のようですね。必死になつて親を追いかける子供のようにです」

親を追いかける子供、ね。家族に言われるのならともかく、敵に面と向かつて言われるつてのは妙な気分だ。

「……とりあえず、あの変態と狼どもは任せるぞ」

男の言葉を気かけながらも、リアスたちに確認を取る。

「任せてください。お兄様のそっくりさんはお任せします」

「変態、ですか。まあ、否定はしないでおきます。自覚はありますので」

男は何てことのないように言いながら、不気味な笑みを一層強くする。

「……とにかく頼んだ！」

「……ッ！」

そいつから逃げ出すように、少年を誘い出すようにその場を離れる。少年は少し驚きながらも俺についてきてくれた。

俺がホツと息を吐いたと同時に少年が飛び出し、大上段からアロンドイトを振り下ろしてくる。だが――、

「遅え！^{おせ}」

「っ！」

直剣を下段から、体の捻りを加えながら一気に振り抜き、アロンドイトを正面から受け止める。

お互いの腕に凄まじい衝撃が伝わるが、俺は不敵に笑み、少年は反応を示さなかった。あと男とは別の意味で不気味だが、今は気にしてられない。このまま勝負！

一時間ほど前と同じように、至近距離での撃ち合いを始める。だが、始めてすぐに、前とは違うことに気づいた。

前のように被弾してもお構いなしにひたすら撃ち込んでくるわけではなく、俺の攻撃を防ぎ、時にはカウンターを放ってくる。

まあ、その程度で俺に当たるわけでもなく、前に比べて当てにくくなっただけだ。そこまで問題は無い。

横風ぎに振るわれたアロンドイトに合わせ、こちらも直剣を風ぎ払う。甲高い金属音にも似た音が、吹雪に混ざって周辺に響き渡る。

競り合いながら少年に声をかける。

のボスのものだろうが、初遭遇時に比べればだいぶ弱々しいものだ。どうやら、リアスたちも優勢のようだ。

ゆつくりと息を吐き、再び気を練り上げる。とりあえず、一撃だな。二撃目はその時に考えればいい。

一度脱力し、直剣を握ったまま腕をだらりと下げる。筋肉の緊張を一旦ほぐし、隙を伺う。少年は俺の挙動全てを限界まで警戒しているようだが、あれでは無駄に疲れるだけだ。力の抜きどころがわからないってことは、そこら辺はまだまだと言ったところか。

俺は苦笑すると、一気に右に飛ぶ！——フリをして真つ正面から殴りにいく！

俺が右に飛んだと錯覚した少年の不意を突く形で、彼の腹に拳をめり込ませる。インパクトの瞬間に拳を捻り、一気に気をかき乱す。

少年は肺の空気を吐き出しながら吹っ飛び、地面に展開されている魔方陣のほうまで行ってしまう。

急いで追いかけると、倒れる少年の横に男が現れ、顎に手をやりながらため息を吐いた。

「やはり、まだまだ調整が必要ですね。難しいところですよ」

「変態野郎が。その少年は——」

俺が問い詰めようとした矢先、魔方陣の輝きがいきなり強くなり始めた。

「今さらですが、アンチマジック対策も、私が死んでからの対策もしてありますので、あなた方の妨害は本当に無意味なものでしたよ。いいデータが取れましたが」

——ツ！つまり、こいつに魔方陣を張られた時点で俺たちの負けだったってことか……！道中で無駄に苦戦しすぎたな……！

表情を険しくさせる俺の横にヴァーリが降り立ち、それに続いてヴァーリチームの面々が合流する。

「おまえら、出てくるぞ。やるしかねえが、行けるか？」

「元よりそのつもりだ。今回は殺してはいけない理由はないだろう？」

「その筈だ」

俺とヴァーリがそのやり取りを終えると共に、魔方陣の輝きが一層強くなり、一気に弾けた。

「い、いや、しんどかった……。ファープニルに何回殺されたかな？もう慣れ始めた自分

分が怖い！」
魔方陣のちょうど中心に、少しやつれた様子で、目の下に濃い隈くまを浮かべた銀髪しじいの爺

——リゼヴィムが立っていた。
かなり消耗している様子だが、放つオーラは相変わらず邪悪極まりない。

俺たちが一斉に構えるなか、男が恍惚の表情を浮かべ、リゼヴィムにすり寄って行く。
 「ああ。お待たせいたしました、リゼヴィム様！ ようやく、あなたをお救いすることが出来ました！」

「あー、おまえか。はいはい、助かったよ」

「ありがたきお言葉！ 私わたくしめには過ぎたお言葉です！」

男の様子に若干うんざりした様子で、リゼヴィムは男を引き剥がす。あいつの変態性は、昔からということか。

「リゼヴィムッ！」

「お、ヴァーリか。いや、久しぶりじゃん。元気にして——」

リゼヴィムが言い切る前にヴァーリが手元から白銀のオーラを放つ。だが、奴に当たった瞬間に霧散してしまう。その結果を受けて、ヴァーリは小さく舌打ちをした。

「——たみたいだね。お祖父ちゃん感激！……駄目だ、跳び跳ねる元気もねえ」

露骨に疲れたように肩で息をするリゼヴィム。

やはり神セイクリッドギア器が絡む攻撃は駄目か。

俺たちが構えるなか、リゼヴィムが少年に目を向け、少し驚いた様子で俺にも目を向けた。そして、少し引いた様子で目を細めるながら男に目を向けた。

「昔からヤベー奴だなどは思っていたけど、ここまでかよ。いやー、流石に引くわー」
「ひとつでも使える駒が必要だったのです。ルシファーを騙るかた忌々しい一族を侮辱した
かったというものありますが」

「ふーん」

興味なさげに言うリゼヴィム。話題の少年は、アロンダイトを杖代わりにしてふらつく体を無理やり支えていた。

俺はリゼヴィムを睨み付ける。

「出てきたところ悪いが、死んでもらうぞ」

「わーお、ロイクくんじゃあないか。でも、だいぶ雰囲気変わったんじゃねえの？ 具体的に言うのと、反吐へどが出そうなほど正義の臭いがプンプンするね」

「そいつはどうも。褒めてくれた礼に、おまえの命を貰いたいね」

「えー、やだ。折角出てくれたのに、即帰宅とかつまんねえじゃん」

両腕を水平に広げながら言うリゼヴィム。感覚を確かめるように肩を回しながら、横に控える男に言う。

「さて、とつとと出るとしますか。そこんところも準備万端なんだろう？」

「ええ、もちろんです。出口も確保してあります」

男は小さく頭を下げながらそう言った。つまり、こいつら——！

「逃がすかよー！」

「リゼヴィム、止まれ！」

俺は手にしていた直剣をぶん投げ、ヴァーリが右腕の籠手を解除して自身のオーラのみを込めた魔力弾を放つ。

その二つはまっすぐリゼヴィムに向かっていくが、

「……っ！」

直剣は少年のアロンダイトに弾かれ、

「リゼヴィム様！」

魔力弾は男がその身を盾にして防いだ。胸から大量の血がぶちまけられるが、その男の表情は――、

「あ、あ、やはり素晴らしい……！」

嬉しそうなものだった。ひたすらに気持ち悪いな、あの変態野郎。

守られた側のリゼヴィム自身も流石にその表情を異物を見るものに変わる。あいつもあの野郎の扱いに困っているのだろう。

突如、リゼヴィムたちを囲むように転移用の魔方陣が展開され、輝き始める。

「……何もメンバーは私だけではないのですよ。外部にもサポートのメンバーがいるのです」

地面をのたうち回りながらそう言う男。表情は先ほどのものから変わっていない。

「……まあ、なんだ。どうせトライヘキサはおまえらが止めたんだろ？なら、仕切り直しだ。あの時出せなかった奥の手を見せてやるよ」

リゼヴィムがそんな男を虫を見るような目で一瞥すると、俺たちにそう告げてきた。同時に魔方陣の輝きがさらに強くなっていく。

俺たちが逃がすまいと飛び出そうとしたと同時に、彼らを守るように満身創痍の狼どもが現れる。横目でリアスたちのほうに目を向けると、一際大きなヘドロの山が出来上がっていた。ボスは倒せたようだ。

小さく舌打ちしながらリゼヴィムを睨むと、こちらを見つめてくる少年の姿が写った。特に何かあるわけでもないのだが、俺が見つめ返すと少年が口をパクパクと動かす。

俺と男がほぼ同時に首をかしげると、少年の口からようやく音が漏れ出る。

「つぎは、こころす………！」

的確な殺意と共に宣戦布告。それを受けた俺は無意識に笑みを浮かべた。

「っ！なんだよ、喋れるじゃねえか」

「ほう、これはおもしろい」

俺と男が同時に反応を示すと共に、転移の光が強くなっていく。

「そんじや、『D×D』の諸君。また会おう」

リゼヴィムがそう告げると共に奴は転移の光に包まれていく。同時に狼の群れが一斉に飛び出して俺たちに襲いかかる。

狼を蹴散らしながら前進していくが、文字通り命懸けで食らいついてくる狼の猛攻になかなか進めないでいるが、多少のダメージはお構い無しで突き進んでいく。

最後の一体を撃破し、直剣を投げた瞬間、リゼヴィムたちは転移の光と共に消えていった。目標を失った直剣ははるか彼方まで飛んでいき、視認出来なくなってしまう。

「ああ、くそ……」

俺は流石の疲労から膝をたき、悔しさをぶつけるように地面を殴り付ける。視界の隅では、ヴァーリも怒りでオーラを滲ませていた。

俺たちの戦いは、更なる激化の一途を辿っていくようだ――。

mission07 仕切り直し

リゼヴィムたちを逃してしまつた俺——ロイヤリアスたち『D×D』のメンバーは、俺がマーキングをしておいた転移魔方陣を使い、コキュートスからの脱出を済ませていた。

「ロイ！」

「おつす、リリス。ただいま」

到着早々に飛び付いてきたリリスを抱き止め、優しく頭を撫でてやる。くすぐつたそうでいて嬉しそうな表情になるリリスを横目に、ここを任せていたソーナたちに訊く。

「おまえらにも面倒かけたな。この子は割りと自由だから、大丈夫だったか？」

「大丈夫です。……ロイ様？」

少し困り気味の表情になるソーナ。そう言えば、まだ俺のことを話していなかったな。

俺は苦笑しながら頷く。

「ああ。記憶は戻っているから大丈夫だ。その、面倒かけたな、本当……」

学園からいきなりいなくなったということ、リアスやソーナには色々と迷惑をかけ

たことだろう。今はどういう扱いなのかがまったくわからないが。

リリスの頭を撫で続けていると、ヴァーリが言う。

「リゼヴィムがどこに逃げたか、見つけなくてはな。奴が言っていた『奥の手』というのも気になる」

「それに関しては、アジュカ様か兄さんにでも訊いてみる。コキュートスの囚人には追跡用の魔術烙印が刻まれているはずだから、それを追えるはずだ」

俺がそう言うのと、ヴァーリは頷く。

「そう言えば、そんな話を聞いたことがあったな。刻んだ部位を落とされないように心臓に刻むのだったか」

「そうだ。よく知ってるな」

「仮にも『元テロリスト』だからな。多少は調べていたさ」

ヴァーリが苦笑混じりに返してきた。下手すれば自分がぶちこまれる場所だったからか、無駄に警戒していたのだろう。

俺は小さくため息を吐き、リアスたちに向き直る。

「そんなわけで、何かわかったら連絡くれ。俺も俺なりに追いかけてみる」

そう言いながら、俺は直通回線の連絡用魔方陣をリアス、ソーナ、ヴァーリ、ロセ、黒歌に飛ばす。

それを受け取りながら、リアスが訊いてくる。

「お兄様、どうやって追いかけるのですか？今のところ情報は何もありませんが……」

リアスのごもつともな指摘に俺は不敵な笑みで返し、背中から深紅の鱗に包まれたドラゴンの翼を展開。俺の突然の行動に驚くリアスたちに見せつける。

「今の俺はドラゴンでな、異常に鼻が効くんだよ。奴等やロセを見つけたのはそのおかげだ」

自分の鼻を小突きながらそう言い、リアスたちに来るだけ優しい声音で言い聞かせる。

「そんなわけで、俺は行くぞ。死神どもはもうしばらく俺が引き受けるから、安心しろ」

そう言い残し、俺は飛び立とうとするが、それを止める人物がいた。

「ま、待ってください！」

ロセだ。少し慌てた様子で、俺のほうに手を伸ばしてきていた。

「今度は、ちゃんと帰ってきてくれますよね……？」

悲哀の表情を浮かべているロセの言葉に、俺は軽く頬をかき、瞬時にロセの目の前に移動する。

「大丈夫だ。這ってでも帰ってくる」

ロセの頬を優しく撫でながら、安心させるように優しく笑みながらそう言いきる。そ

して、彼女に軽く触れ合う程度の口付けをした。

すぐに顔を離れたので、ほんの一瞬触れ合ったただけだが、ロセはかなりの衝撃を受けた様子で俺を見つめてきた。

「……ッ！」

「何がなんでも、な。必ず戻る！」

ロセにそう告げて今度こそ飛び立とうとするが、再びそれに待ったをかけられる。今度は言葉だけではなく、体全体でた。背中から誰かにぶつかられた。

「そいつばかりずるいじゃ！ 私とも約束してよー！」

黒歌だ。俺の首に腕を回し、必死にしがみついてくる。ちよつと息苦しいが、振り払うほどでもない。背中に当たる柔らかい感覚が気になるが、気にしない。

俺は黒歌に目を向け、少しお茶らけたように笑う。

「はいはい。ちゃんと帰ってくるって！」

「絶対よ。今度約束破ったら許さないからね」

「ああ」

そう返して黒歌とも軽く口付けをする。こっちは強引に舌をねじ込もうとしてきたが、無理やり顔を背けて逃れる。

黒歌は不機嫌そうに頬を膨らませるが、諦めたように息を吐いて小声で言ってくる。

「あんたとの子供、まだ諦めてないからね」

「(そうかよ)」

そのやり取りを最後に黒歌に離れてもらい、改めてリアスたちに訊く。

「——で、他に言っておきたいことはあるか？今なら聞くが」

俺の問いかけに、リアスは首を横に振った。

「いいえ。私たちが言いたいことはロスヴァイセと黒歌が言いましたから」

リアスに続いてイツセーたちが頷く。なら、もう行っても大丈夫だろう。いい加減出発しないと、リリースが愚図り始めそうだ。

「そんじゃ、おまえらも死ぬなよ。帰る場所がなくなる以上に切ないことはねえからな」

『はい』

リアスたちの返事に俺は笑みながら頷いて返し、今度こそ飛び立った。ある程度の高度に達したら一気に加速。とりあえず、今日の拠点に出来そうな場所を探す。

「リリース、キツくないか？」

「だいじょうぶ！」

俺の心配をよそに笑顔で返事をする、ギュツと俺の服を掴む力を強くするリリース。

リゼヴィムの『奥の手』も気になるところだが、俺としてはあの少年も気になる。ちぐはぐだったとはいえ、初めてあいつの声を聞いたわけだが、あの変態野郎もそれに驚

いていたように見える。

奴がアロンダイトに滅びの魔力を纏わせていた以上、バアル家の血が流れているのは確実。そして、あの染めただけでは出せないような、鮮やかな紅の髪はグレモリーの血が流れていなければありえないだろう。

父さんにも母さんにも隠し子がいたなんて話も、俺たち三人以外に兄弟がいたなんて話も聞いたことがない。

それに、俺にしか振れないはずのアロンダイトをある程度だが使いこなしていた。まだまだだが、あの様子だと次に会うときは更に成長していることだろう。

「はぁ……」

「……? どうしたの?」

小さくため息を漏らしたら、リリスが心配そうに顔を見上げてきた。

俺は安心させるように笑み、リリスの頭を優しく撫でる。

「大丈夫だよ。ちよつと疲れてるけどな」

「きようは、はやくねよ」

「そうだな」

ある程度飛んだところで、手近な森に降り立つ。近くに大きめの湖があり、あそこで魚を捕れば今夜は大丈夫だろう。

「さて、寝床を探すか。最悪ここら辺でキャンセルだな」

「はい」

リリースの返事を聞いて、彼女を抱っこしたまま歩き始める。とりあえず、細かいことはリアスたちに任せることにしよう。今はしっかりと休める場所を探さなければ。



あつという間に小さくなっていったロイ先^{せん}せ、じやなくてロイさんを見送った俺——兵藤一誠を含めた『D×D』の面々は、張り詰めていた空気を少し緩めていた。

先ほどロイさんにキスをされたロスヴァイセさんは頭から煙を吹き出し、黒歌は上機嫌そうにしていた。

そんな二人を見て、リアスは一度咳払いをした。

「とりあえず、一度戻ってアザゼルやアジュカ様、サーゼクスお兄様にも連絡をいれないとならないわ」

「アザゼルには俺から連絡を入れよう。鳶雄もすぐに動き始めるだろう」

ヴァーリの提案にリアスは頷き、俺たちに目を向けた。

「サーゼクスお兄様のほうには私が連絡を入れるわ。だから、皆は先に戻っていて。朱乃、一緒に来て」

「はい。わかりましたわ」

リアスと朱乃さんが頷きあう横で、ソーナ前会長が少し困ったように息を吐いた。

「ソーナ、どうしたの？」

それに気づいたリアスが訊くと、ソーナ前会長は右手で頭を押さえながらため息混じりに言う。

「……また姉様が大変なことをしなければいいのですが……」

『……………』

その言葉に、思わず返す言葉を失う俺たち。ロイさんの行動とその意味を知ったレヴィアタン様が、冥府に攻め込まないかどうかを心配しているのだろう。

ロイさんが知るよしもないことだが、授業参観の時に初めてお会いしたときは、その事を教えてくれなかった八つ当たりにも天界に攻め込むことを考えたそうだ。

つまり、そのソーナ前会長と同じかそれ以上に大切に想っているであろう恋人が、しよつちゆう冥界にちよつかいをかけてくる神様に追いかけて回されていると知ったらどうなるか、わかったもんじやない。

……これ、無理にでもロイさんを止めたほうが良かったのではないのだろうか。俺たちじゃレヴィアタン様を止められる気がしないんだけど。

「……だ、大丈夫ですよ、きつと。セラフオール様もそこまでしなくていいですよ。……たぶん」

ロスヴァイセさんが不安げにそう言った。いや、本当に何をするかわかったもんじゃない。今からでも追いかけるか？いや、あのスピードに追い付くのは流石に無理があるし、てかどこに行ったのかわからないし……。

全員が思わずため息を吐き出すなか、黒歌が苦笑する。

「……まあ、何かあったら連絡すればいいでしょ。そのための連絡用魔方陣なんだからさ」

「それもそうね。……不安しかないけれど」

リアスが諦めたように言うのと、俺たちも解散することになった。

リアスと朱乃さんは報告のために冥界に戻り、ヴァーリチームはアザゼル先生のいるグリゴリの施設へ。ソーナ前会長たちは事後処理をしてくれるそうだ。

色々と不安を残しながら、俺たちは帰宅の準備を始めたのだった。

「ひつくしゆつ！あいつら、何を噂してやがるんだ？」

キャンプを張り終え、食料調達のために湖に釣糸を垂らしながら、俺はそんなことをぼやいていた。岩に腰かける俺の膝の上にはリリスが座り、俺の体を背もたれにしてうとうとしていた。

イツセーの復活でドライブグが消耗したように、この子もかなり消耗しているようだが、なぜここまで疲れているのか。

イツセーの場合はサマエルの呪いの影響とか色々あったんだろうが、俺の場合は文字通り死にかけただけだ。なのに、龍神の半身のはずのリリスが下手をすればドライブグ以上に消耗している。俺の体に何かあるのか……？

俺が思慮を深めっていると、魚がヒットしたのか浮きが沈んでいった。それを確認して、座ったまま腕力だけで一本釣りをする。

釣れたのは、俺の両腕で抱えられるほどの大物だった。腹の中に卵でも詰まっているのか、パンパンに膨れ上がっている。こいつは当たりだな。

それに気づいたのかりリスが目を覚まし、釣り上げた魚に手を伸ばしていた。

「さて、飯も確保出来たし、戻るか」

「うん……」

「眠いか？」

「……ん」

目を擦りながら頷くリリース。

俺は苦笑しながら魚のエラに手を突っ込んで持ち上げ、空いている手でリリースを抱き上げる。

リゼヴィム探しは明日からだな。それまで待てば、誰かから連絡が来るかもしれない。

冥界の辺境。そびえ立つ8000メートル級の山々と、そこに住む魔物たちに守られるように、その近代的な施設は存在していた。

施設自体は山の中に作られ、両開きの入口も巧妙に隠されている。場所を知らない者

が来ればまず気づかないだろう。そんな入口の前に、三つの影が立っていた。

「うんうん、ここは見つかってなかったみたいだねえ」

「こんなところに施設があったとは……」

「……」

リゼヴィムと例の男、そして紅髪の少年だ。三人は迷うことなくその入口を潜り抜け、中に進んでいく。

「あの狼ども、元は悪魔だろ？はぐれだったり、旧魔王派の連中でしょ」

「おっしゃる通りです。そして、あのデータを解析することで『あれ』を回収し、すぐに数を用意することが出来ました」

長く続く廊下を進みながら、少年を除いた二人が話し続ける。

「あのデータを解読するとは、天才と狂人は紙一重ってことなのかね。他の連中は解けてないんだろ？」

「私に見つけて欲しかったのではなかったのですか!?あの程度、私にかかればすぐに解読出来ます」

「わーお。なんかバカにされた気分……」

「いえ、断じてそう言ったわけでは！」

二人がそんなやり取りをしていると、三人の前に新たな扉が現れる。非常に大きく、

分厚い両開きの扉だ。

リゼヴィムはその扉に手を当て、魔方陣を展開する。高速で魔方陣が動きだし、それに合わせて少しずつ扉が開いていく。

同時に、男と少年は身構えた。扉が開くと同時に強烈な瘴気が漏れ出てきたのだ。

扉が完全に開き、その部屋に入った途端、男の表情が驚愕に染まった。

「リゼヴィム様……、これはまさか……!?!」

「ああ。やったことはおまえと同じだよ」

リゼヴィムは少年に目を向けながらそう言うと、視線を正面に戻す。

三人の視線の先には巨大な培養槽ばいようそうがあり、その中には一匹の巨大な四つ足のドラゴンのような獣が眠りについていた。

その巨大な培養槽から壁に管くだが伸び、壁を埋め尽くす大小様々な大きさの培養槽に接続されており、その中にも様々な形をした獣が眠っていた。

「トライヘキサが死んじまったから、異世界にはいけなйдらうけど。まあ、この世界の連中相手に喧嘩売るぐらいならいけるかな」

邪悪を孕んだ不敵な笑みを浮かべ、リゼヴィムは巨大な培養槽を撫でる。

生き物とは、子をなすものである。神であれ、悪魔であれ、その事実が変わることはない。ならば、伝説の獣が子を成していたとしても、何ら不思議ではないだろう。

それが人為的に作られたものだとしても、あの獣は子を成したのだ。

自らを作り出したリゼヴィムの狂喜に答えるように、獣は薄く目を開く。動物は初めて目にしたモノを親と思い込むものが多い。リゼヴィムはそれを狙い、作り出しても意識を覚醒させることはせず、今まで休眠させていたのだろう。

「さあ、始めようぜ。これが真正正銘の、ラストバトルだ……」

目標を失った悪意リゼヴィムは癌がんとなり、この世界を侵し始める。その先にあるのは、悪意の目に宿るのは、ただ破滅した世界だけである。

mission08 戦場へ

リゼヴィムが脱獄してから数日。

俺——兵藤一誠をはじめとした『D×D』駒王町チーム（いつかに教会のクーデター組と戦ったメンバー）とアザゼル先生という面々が、再び兵藤家のVIPルームに集まっていた。

アザゼル先生が開口一番に言う。

「アジュカからの情報提供のおかげで、リゼヴィムの居場所をだいたいが把握できた。今は刃スラッシュ・ドック 狗をはじめとした三大勢力のエージェントに偵察に向かわせて、正確な場所を確認しているところだ。あいつによると、ヴァーリたちもあつちにいるようだぞ」

ようやく場所が掴めたようだ。この数日間、あいつがいつ動き出すかが気になつてしまつて、よく眠れなかったよ。

俺たちが頷くと、アザゼル先生がどこかの地図を取り出した。冥界の山間部のようだが、俺ではよくわからない。冥界の広さは地球とほぼ同じ。冥界には海がないぶん、土地の広さは地球よりも大きいだろう。そんな冥界の地形を完全に把握しているヒトなんて、そこまで多くはないはずだ。

「冥界悪魔領の辺境、旧魔王派が追いやられた場所の近くだ。この周辺は8000メートル級の山が多いは、強力な魔物が多いはと、問題が山盛りだな。搜索はかなり難航しているようだ」

「けれど、リゼヴィムがこの山のどれかにいることは確かなのよね？」

リアスの問いに、アザゼル先生は頷く。

「それは間違いない。もしかしたら、旧魔王派の残党と合流を目指したのかもな。少しでも戦力が欲しいところなんだろうよ」

険しい表情で言うアザゼル先生。もし旧魔王派と合流されれば、また大規模なテロ行為を行うかもしれない。いや、もしかしたらその準備を進めている可能性もある。

俺たちが一様に表情を険しくさせるなか、アザゼル先生の耳元に連絡用の魔方陣が展開される。

「ああ、俺だ。なに？待て、落ち着いて報告しろ」

アザゼル先生はそのまま二三やり取りをすると、俺たちに目を向ける。

「どうやら、入り口と思われる場所を見つけたようだが、あの怪物どももが現れたようだ。エージェントたちも対応しているが、流星に多勢に無勢。増援として、おまえらに向かわせることになるが、大丈夫か？」

「問題ないわ」

「大丈夫です」

リアスとソーナ前会長がほぼ同時にそう返し、俺たちも頷く。

「こちらも問題ありません。デュリオ、聞いていたわね？」

「大丈夫です。……俺だつてちゃんと聞くときは聞いているんですよ」

シスター・グリゼルダとデュリオがそんなやり取りをしていた。

まあ、とにかく、早く向かったほうがいいだろう。あの怪物たちは一体がやたら強く、そして異常なまでの生命力を持っている。実戦経験が多くても、奴らとの直接の交戦経験が少ないヒトたちが大半では、流石に辛いだろう。

「協力者にも連絡を入れておく。あいつの眷属と仲間もいることだしな」

ロイさんの眷属と仲間って、あの四人のことかな？ 余り話したことはないけど、ロスヴァイセさんからは「悪いヒトたちではないですよ」とだけ言われたことがある。

まあ、ロイさんの知り合いなのだから、極悪人ではないだろう。……やたらと癖が強そうだけでも。



俺——ロイは現在、冥界の森のど真ん中で——。

「鬱陶しいんだよ！」

《があ……!?!》

死神一行と戦闘を開始していた。嫌な気配を感じてそこを目指そうとした途端、それを見計らったかのようなタイミングで湧いてきやがったのだ。その数およそ五十。

直剣ですれ違いざまに死神の首をはね、鎌ごと体を叩き斬り、体を脳天から真つ二つに切り裂く。戦闘を開始して数分で、死神の数は一桁台となっていた。

その生き残りの中で、特に強いオーラを纏う死神——たぶん上級死神に切っ先を向ける。

「まったく、しつこいんだよ。いい加減諦めろ」

《諦めろ?まったく、可笑しなことを言いますね》

大半の部下が殺されたというのに、まだまだ余裕が消えない上級死神だが、その部下の面々からは少し怯えの雰囲気を感じ取れる。

必死に背中貼り付いているリリスに気をかけながら、俺は死神どもに最後通告をおこなう。

「さっさと手を引け。今なら、殺さないで置いてやる」

《お断りします。その子供を連れていかなければ、我々がどうなるかわかりませんので》

上級死神がそう言うのと、部下の死神たちも覚悟を決めたように鎌を構え直した。

どうやら、あの骸骨神様は本気のようなようだ。部下が何人死のうが、回りにどんな影響が出ようが、何がなんでもリリスを奪おうとしている。相当諦めが悪い部類のようだ。

俺は一度小さくため息を吐き、死神どもに本気の殺気を飛ばす。

「そんじゃ、死んでもらおうか」

《それはこちらのセリフです！》

上級死神が真つ先に飛び出し、部下たちがそれに追従してくる。不規則に高速で動き回りながら俺の隙を探っているようだが……。

「甘いな……」

俺が直剣を地面に突き立てたと同時に、大量の深紅の刃が地面から飛び出し、死神どもを貫いていく。

次々と死神は貫かれていくが、上級死神がそれを掻い潜って俺の背後を取った。

《あなたの魂、貰い受け——》

そのセリフは最後まで続くことがなかった。俺の背中に貼り付くりリスの放った拳によつて、体をばらばらにされたのだ。

疲れているとはいえ仮にも龍神、上級死神程度には遅れを取らないようだ。まあ、明

らかな不意討ちだったから貰ったというのもあるのだろう。

上級死神が消し飛んだことで、生き残った二人の死神が流石に狼狽え、戦意が一気に無くなったように見える。だが、逃がすつもりはない。最後通告は先ほど済ませたのだから。

俺は神速で飛び出し、一思いに二人の死神の首を刈り取った。頭と泣き別れた胴体は一気に力が抜けたように両膝をつき、ゆっくりと地面に倒れた。

フツと短く息を吐き、直剣を消す。いきなりなことでは驚いたが、そこまで強いやつはいなかったな。前に黒歌を殺しかけた野郎がいなかったのは、どうにも不安だ。何か企んでいるのかもしれない。

「ん〜」

「どうかしたか?」

背中で愚図り始めたリリスを背中から降ろし、向かい合う形で膝について顔の高さを合わせる。

眠そうな顔で目を擦りながら、リリスは俺に言ってくる。

「つかれた……」

疲れたって、さつきまでは元気そうだったのに、死神に一発入れただけでそこまで消耗したのか……?」

リリスの頭を優しく撫でながら言う。

「さつきはありがとうな。眠いか?」

俺の問いにリリスはこくりと一度頷く。

ゆつくりと眠って欲しいのが本音だが、先ほどから感じる嫌な気配の正体を探らないといけないし、それが危険なものならロセや黒歌たちに危険が及ぶ前に対処しておきたいんだよな……。

頬を掻きながら困り顔で苦笑していると、耳元に連絡用魔方陣が展開された。前に口セたちに渡したものだ。

「おう、俺だ」

『俺はアザゼルだ。協力者はおまえで合っているな?』

盗聴を警戒してか、初対面のような名乗りで、俺の名前は出さないアザゼル。俺もそれに合わせて自分の名前を出さないで返す。

「ああ、大丈夫だ。何か情報でもくれるのか?」

『こちらとおまえが追いかけている男の場所をだいたい把握出来たが、搜索に向かったエージェントが襲撃を受けたらしい。援護を頼めるか』

「わかった。座標を送ってくれ、すぐに向かう」

俺が手短に答えると連絡用魔方陣が消えると同時に転送用魔方陣に展開され、紙切れ

が送られてくる。って、旧魔王派の本拠地の近くじゃねえか。またあそこに戻ることになるとは……。

一度ため息を吐くとリリースが俺に抱きつき、胸に顔を擦り付けてくる。

「ロイ、またどつかいく?」

「ああ。ロセたちを助けに行く」

まだあいづらがそこにいるかはわからないが、きつとその結果に繋がるのだろう。もしかしたら、もう現場にいるかもしれない。

リリースを優しく抱き締め返し、なだめるように背中を撫でてやる。

「また危ない場所に行くけど、大丈夫だ。俺が守るから」

「……ん」

俺の胸に顔を埋めたまま頷くリリース。きつと眠たくてしょうがないのだろう。

このままキャンプ地を探してそのまま眠らせてあげたいが、戦闘は既に始まっている様子だ。急がなければならないだろう。

「大丈夫?」

「……うん」

「よし。それじゃ、行くか」

リリースを抱っこしたまま立ち上がり、背中からドラゴンの翼を展開する。

それに合わせてリリスがギユツと俺の服を掴んだことを確認し、彼女に負担をかけないようにゆっくりと上昇する。

先ほどまで立っていた場所が小さくなっていき、ある程度の高度に達したらリリスをしつかりと抱き、一気に加速して目的地を目指す。

ロセか黒歌のどちらかはおそらく現地にいるだろう。何となくだが、そんな予感がする。てか、目的地に近づくとつれて黒歌の匂いを感じられるようになってきた。

さて、急ぐとしますか。あいつのことも守ってやらないといけないし。

俺は心中でそう思うなか、さらに加速する。黒歌の匂いを感じたと同時に、大量の怪物どもの気配も感じ取れたのだ。

それだけならまだしも、今までとは何かが違う。まだ見えないほど遠いのに、気配だけで何体いるかがわかってしまうほどだ。相当強力な生命エネルギーを放ってやがる。

「オラッ！」

黒髪の男性悪魔——クリスは魔力を込めた渾身の拳で、ライオンを思わせる怪物を殴り飛ばす。快音と共に吹っ飛ばす怪物だが、すぐさま体を起こして身を低くして構える。

「回復します！頑張ってください！」

彼に守られる形で立つ金髪の女性悪魔——アリサは回復の力を込めたオーラを飛ばし、負傷した他のエージェントやその使い魔を癒していく。

「なるほど、これは厄介だな……」

魔力で作られた杭で地面に打ち付けられ、身動きの取れない怪物を魔方陣で調べあげながら、紫髪の女性悪魔——ジルがため息を吐いた。

「なかなか見つからないな。……この状況では場所が絞りきれん」

額の汗を拭いながらそう漏らすスーツ姿の男性悪魔——エリック。クリスが怪物を引き付けてくれている隙に敵の拠点を探しているが、まったく見つからない。

エージェントが搜索を始めるとほぼ同時に、周辺の山岳部を被うように妨害電波のようなものが放たれ、リゼヴィムに刻まれた烙印の座標がはつきりしないのだ。

そんな事をぼやいたエリックにクリスが怒鳴る、

「だが、やるしかないだろ！あのヒトが命懸けで繋いでくれたんだ！俺たちも次に託せるようにしないとよ！」

主を守れなかった悔しさと不甲斐なさに歯を食い縛りながら、再び向かってきたライオ

ン型の脳天にあびせ蹴りを放ち、ひび割れが出来るほどの勢いで地面に叩きつける。

脳ミソが耳や鼻の穴から垂れ出てくるが、ライオン型は身体を痙攣させながら立ち上がろうとする。

クリスは小さく舌打ちをしながら軽く跳躍、全体重をかけたストンプで頭を踏み砕く。

だが、それでもライオン型は動こうとする。クリスの表情が驚愕に染まるが、首から漏れでる発光した何かを発見し、躊躇いなくそれを引き抜いた。

ライオン型の身体がビクリと一度痙攣すると、ドロドロのヘドロになってクリスの足を絡めとる。

「……な、なんなんだよ、こいつら……!?!」

ヘドロから足を引き抜き、汚物を見るように怪物たちを見ながら言うクリス。

そんな彼にジルが魔方陣を消しながら言う。

「どうやら、今クリスが引き抜きたものを破壊したければ死なないようだ。最近出現するようになった例の怪物たちと同種、あるいはその上位種だな」

「消耗戦は覚悟の上でしたけど、流石に疲れましたよ……。負傷者が多すぎます……」

「治療は重症者に絞れ。軽傷者には少し無理をしてもらうしかない」

負傷者を片っ端から癒していたアリサに、ジルはそう告げた。隠す気もなく、軽傷の

者は見捨てろと言っているのだが、その言葉にアリサは複雑そうな表情を浮かべた。

そんなアリサの髪を優しく撫でながら、ジルは呟く。

「誰であつても、全てのヒトは救えないさ……」

——それでもひとつでも多くの命を救おうと、今まで重ね続けた罪を償おうと抗い続けた男がいたがな……。

誰にも聞こえないように、心の中でそう漏らすジル。その瞳には悲哀の色が浮かび、どこかを見つめていた。

十年という悪魔からしてみればあつという間の時間ではあつたが、彼とは生活を共にしたのだ。

いつか死ぬかもと覚悟を決めていたとはいえ、あの別れ方はあまりにもいきなり過ぎた。最期くらい、何か言つてやれば良かったとも思っている。

「さて、その急所を探らないといけないな。どうしたものか……」

ジルは雑念を振り払い、顎に手をやりながら思慮を深めていく、個体ずつのエネルギーが集まっている部位を探り、そこを潰すしかないが、一体ずつ探しては時間がかかりすぎる。

「そろそろ場所を移すか。この周辺は探り尽くしたはずだ」

地図を確認しながらエリックがそう言った。エージェントはエリアごとに散ってい

るが、怪物の迎撃のために隣接するエリアのチーム同士が合流していることが多い。

ジルたちもその例に漏れないが、場所によつては彼女たちの担当と違い、搜索が一切進んでいないエリアもあるだろう。

「移動つて、どうやつてですか……？」

まだまだ湧き続ける怪物たちを見ながら、アリサはそう漏らす。包囲網を破ろうとしても、その最中にまた包囲されてしまうのだ。

それでも敵の間を潜り抜けて搜索を続けるエリックは流石の一言に尽きるが、その努力の結果が伴わない。その小さな苛立ちが彼の胸中を渦巻いていた。が、冷静さを保ち続ける。そうでなければ、本当に見つからない。

ジルがさらに思慮を深めようとした矢先、空から大量の深紅の剣が降り注いでくる。その剣は次々と怪物たちを貫き、確実にヘド口に変えていく。長遠距離からの攻撃にも関わらず、怪物たちの心臓を寸分の狂いなく撃ち抜いていくのだ。

突然の事態に警戒を深める面々だが、そんな彼らの目の前に『彼』が降り立った。

鮮やかな紅の髪に、それよりもさらに深く、意識が吸い込まれるほど鮮やかな深紅の剣を携えた一人の男。

「——待たせたな」

驚愕するジルたちのほうに向き直り、彼——ロイは不敵に微笑んだ。

mission09 リゼヴィムを探せ

「——待たせたな」

俺——ロイは久しぶりに再会した眷属や同僚たちに、不敵に笑みながらそう言った。何かしらのリアクションを期待していたのだが、あいつらの表情は驚愕の色で固まっていた。

「……大丈夫か？」

俺は構えながらそう訊いた。先ほどの攻撃で取り囲んでいた怪物どもはかなり減らしたが、全滅させたわけではない。まだ油断は出来ないのだ。

「マ、マスター!?!生きていたんですか!?!」

ようやく復活したアリサが目を見開いて驚きながら叫んだ。俺の状況をアジユカ様から知らされていなかったのだろうか。

そんなアリサを横目に、ジルがどこか安堵した様子で頷いた。

「アジユカ様から聞いていた『協力者』とはおまえだったのか。意外だったよ」

「まあ、色々あってな」

俺が苦笑混じりに返すと、クリスが俺の背中——正確にはリリスを見ながら訊いてく

る。

「もしかして、その女の子を保護しているんですか？そのくらいなら連絡をくれても良かったのでは？」

「だから色々複雑なんだよ。——で、黒歌見てねえか？あいつの匂いは感じたんだが、血の臭いで方向がわからなくなっちゃった」

俺の問いかけに、エリックが反応する。

「黒歌？ああ、ヴァーリチームの猫又か。あいつらなら、向こうにいるはずだ」

明々後日の方向を指差すエリック。なんだが、だいぶ違うほうに飛んできてしまったようだ。まあ、ジルたちを助けられたからいいか。

手短に「そうか」と返し、改めて手元に直剣を生成する。

「まあ、ヴァーリが近くにいれば大丈夫か。とりあえず、ここら辺の奴らを掃討するかね。エリック、リゼヴィムは見つかったか？」

「まだだ。そろそろ移動して他のエリアを調べようとしていたところだ」

「なるほど」

俺が頷いて返すと、それを合図にしたように一体の怪物が俺に挑みかかってくる。

飛びかかりを半歩右に動いて避け、すれ違いざまに核コアごと身体を切り裂く。怪物は空中でヘッドロになっていき、それは——、

「わぷッ！」

アリサに直撃した。頭からヘド口を被り、それを拭いながら疲れた表情を更に引きつらせる。

「狙いました……?」

「……さあな」

アリサの苦情に苦笑で返す。まあ、存外勢いがついてしまったというのが本音だが、いつものノリとして受け入れてもらいたい。

俺たちのやり取りを横目に、クリスが豪快に怪物を殴り飛ばしながら言う。

「とにかく、ご無事でなによりです。さっさと片付けましょう！」

「そこなくちやな。よし、行くぜ！指示は任せろ！」

「はい！」

「……うう、はい」

俺の言葉にクリスがやる気に満ちた様子で、アリサは少し拗ねた様子で返し、

「やはり、こうでなくてはな」

「やれやれ。まあ、そんなもんか」

ジルは微笑しながら、エリックは苦笑しながらぼやいていた。

今にも飛び出してきそうな怪物たちを警戒しつつ、俺はリリースに言う。

「リリース、あの紫色の髪の毛のヒトのそばにいる。ジル、この子を頼めるか」

「ん」

「ああ、任せておけ」

リリースは眠たそうに頷くと俺の背中から飛び降り、とたとたとジルのほうに駆け寄って行った。ジルも両膝をついてリリースを抱き止めてやると、優しく頭を撫でていた。

さて、リリースはいいつに任せて俺は――、

「暴れるか。少しストレスが溜まってんだよ……!」

殺気立ちながら怪物どもを睨み付け、直剣の切っ先を空に向け、地面と垂直になるように持ちながら体勢を低くして構える。

「ク、クリスさん！マスターがいきなりぶちギレモードです!」

「何かあったんだろ？変なこと言ってるアイアンクローされても助けないぞ?」

「え!」

そんな俺の後ろで、二人は相変わらずの話をしていた。

久しぶりにアイアンクローをするか？少しはストレスが吹き飛ぶかもしれない。

まあ、その話は後だ。今は目の前の怪物どもをどうにかしなければならぬ。アイアンクローをするにも、まずは戦闘を終わらせなければならぬわけだし、する相手が生きてることが前提だ。

俺は若干怯えるアリサを尻目に、迫り来る怪物どもの群れに飛び込んでいくのだった。

「それにしても、見つからないわね」

黒歌は自身を含めたヴァーリチームであっさりと撃破した、怪物たちだったものを一瞥しながらそう呟いた。

仙術使いが二人いることと、一人一人の技量がずば抜けていることもあり、まったく苦戦することなく撃破を終えたのだ。

白銀の鎧を纏い、兜を収納したヴァーリが表情を険しくさせながら言う。「そう簡単には掴ませてくれないか。この際、山を吹き飛ばしてしまつたほうが早いかもしれないな」

いつになく物騒なことを口にするリーダーに、美猴が口の端を引きつられながら言う。

「流石にそれはやばくねえか？後が面倒だぜ、たぶん」

「冗談さ、本気にしたか？」

フツと鼻で笑うヴァーリに、美猴は額に青筋を浮かび上がらせる。

その横で、アーサーが眼鏡の位置を直しながらため息を吐いた。

「確かに問題ですが、その手も考えたほうがいいかもしれませんね。もしかしたら、入り口が山の中に——という可能性も考えられますから」

チームの面々がそんな話を続けるなか、フェンリルとゴグマゴグに守られながら、いくつもの魔方阵を同時に展開するルフエイが言った。

「あの山の中に、大きい空間があるみたいです。もしかしたらそこが目的地かもしれません」

とある山を指差しながら報告したルフエイに、ヴァーリが頷いて返す。

「なら、そこを目指してみるか。鳶雄たちにも連絡をしなければな。だが——」
言葉を区切り、ルフエイが指差した山のほうを睨み付ける。

「奴らの相手が先か」

彼の視線の先では、怪物たちが群れを成して迫ってきていた。並の者なら狼狽えるところだが、ヴァーリチームの面々は不敵に笑む。

「さて、進むか。少し時間が——」

「しゃらくせえんだよ！」

ヴァーリが飛び出そうとした矢先、怪物たちの群れの横つ腹に深紅の軌跡を残しながら何かが突っ込み、凄まじい速度で蹴散らし始めた。

思わず黙りこむ面々だが、その横に人影が降り立った。

「ヴァーリチームか。久しぶりだな」

「……確か、ジルだったか？そちらも終わったのか」

現れたのはリリスをおんぶしたジルだ。彼女に続く形でクリス、アリサ、エリックも降り立った。

「あ、黒歌」

「リリスじゃないの。また会ったわね」

黒歌が微笑みながら言うと、リリスはジルの背中から飛び降りて黒歌の胸に飛び込んだ。

黒歌がリリスの頭を優しく撫でている横で、エリックが困り顔で言う。

「……そちらも見つけたか？あの山がどうにも怪しいんだが」

彼の問いに、ルフエイが答える。

「はい、先ほど確認しました。目指そうとした矢先に、あれが現れたのです」

「……なあ、もう終わりそうぞぞ」

二人の言葉を遮るように、クリスが群れを眺めながら言った。彼の言葉の通り、突撃した人物——ロイの無双によって怪物たちは全滅一步手前という状況だった。

ヴァーリが一度息を吐き、兜を装着しながら言う。

「なら、仕上げを手伝うか。アーサー、美猴、行くぞ」

「わかりました」

「おっしや。さっさと終わらせるか」

二人はヴァーリにそう返すと、真つ先に飛び出して行つたリーダーに続いて群れに飛び込んでいく。

攻撃手が三人も増えたことで群れの殲滅は更に進み、逃げようとする怪物さえも逃がさずに殺していく。

「ヴァーリ、リリスと黒歌はどうした。——そいつは眉間だ」

「大丈夫だ、後ろで見ているぞ。それに、あなたの部下に守られている」

「なら良かった。そろそろロセたちも来る頃だろ——右足の付け根」

「おそろくな。アザゼルの反応もそこまで遅くはないだろう」

敵の核を教えながら戦うロイと、それに瞬時に反応するヴァーリだが、途中で別の話をしながらも怪物を討伐していく。

そして——、

「こいつでラストだな」

ロイが最後の一体の核を貫いた。直剣を消して返り血を拭いながら、黒歌の目の前に移動する。

「怪我はしてねえな？」

「だ、大丈夫よ」

「返り血飲んだとか、目に入ったとかは？」

「ないにや」

「怪我は——」

「それはさつき聞いたにや！」

いつになくずかずか来るロイに若干引きながら、自分は大丈夫であることをアピールする。

ロイは彼女の様子にホツと息を吐き、笑みを浮かべた。

「ならいいんだ。何かあつたら言えよ？」

「はいはい。で、この子はこのままのほうがいいの？」

黒歌は自分の胸に顔を埋めるリリスを見ながら訊いた。

ロイは少し困ったように額に手をやると、申し訳なさそうに笑った。

「しばらくそのままで頼む。死神に襲われてちよつと疲れちまったみたいでな。寝かし

てやってくれ」

「わかったにや。——って、この子寝てるの？え？この状況で……う？」

困惑しながらも、改めてリリースに目を向ける黒歌。視線を向けられたリリースは、規則正しく呼吸を繰り返していた。

「なぜかはわからねえが、その子はどんな状況でも寝るぞ」

「あ、そう」

リリースを抱き直しながら頷く黒歌。そんな彼女の肩に、ロイは手を置いた。

「何がなんでも守るから、頼まれてくれ。ロセたちが来てくれれば、もう少し楽なんだが

……」

「呼びましたか？」

「ああ。ちょうどおまえの——」

ロイは一度首をかしげ、後ろに振り返る。そこにはリアスを始めとした『グレモリー眷属』と、ソーナを始めとした『シトリー眷属』が集合していた。

その中で、一歩前に出ていたロスヴァイセがロイに訊く。

「それで、私がどうかしましたか？」

「いや。リリースが寝てるから、俺はそっちも気にしなきゃならねえんだ。だから、もう少し手が欲しくてな」

「なるほど」

ロスヴァイセが頷くと、ロイがエリックに訊いた。

「で、目的地はあの頭ひとつ高い山でいいのか？ さっさと終わらせちまおう」

「ああ、その山だ。さて、攻め手が増えたところで移動するか。他のエリアもどうにか落ち着いたようだしな」

「到着していきなりだが、リアスたちもそれでいいか。まあ、慣れていると思うがな……」

ロイがぼそりと呟いた最後の一文に、リアスたちは苦笑混じりに頷いて返す。

「大丈夫ですわ、お兄様。慣れていきますから」

リアスの言葉にロイは苦笑で返すと、背中にドラゴンの翼を展開した。

「そんじゃ、行くか」

『はい！』

リアスたちの返事を聞き、自身の眷属と同僚たちとヴァーリチームも翼を展開したことを確認し、一気に飛び出していった――。

――

ロイたちが真つ直ぐに目指すリゼヴィムのアジト。その最奥で、高速で魔方陣を動かすリゼヴィムは苛立ちを隠せずにいた。

「何なんだよ、あいつら!?! 雑魚クラスとはいえあの化け物トライヘキサのがきどもだぞ!?! それを瞬殺とか、冗談だろ!?!」

怒鳴り散らすリゼヴィムの横で、同じく魔方陣を動かしながらローブの男が申し訳なさそうに言う。

「リゼヴィム様、落ち着いてください。私が産み出してしまった紛い物のせいで、完璧ではないにしろ、対策が練られてしまっていたようです。勝負を急ぎすぎました……」

「それもあるけどよー!?!——とりあえず一旦落ち着くか。まあ、本命はこいつらだしな」

壁の巨大な培養槽と、まだ中身が詰まった壁を埋め尽くす培養槽を横目に見ながら、リゼヴィムは一度大きく息を吐いた。

「——で、覚醒まではもうちょいか。どうするかな、時間稼がないとな」

「……おれが、いく」

リゼヴィムのわざとらしい言葉に、紅髪の少年が返した。壁に立て掛けていたアロンダイトを背負い直し、足早にアジトの入り口のほうに歩を進めていくが、

「ああ、ちよつと待つて」

それにリゼヴィムが待つたをかけた。

少年が無表情で向き直ると、リゼヴィムは邪悪な笑みを浮かべながら言った。

「——死んでも止めといてね。うん、死んでも」

「……………」

少年は無表情のまま頷くと、リゼヴィムは更に続ける。

「それと、狙うなら銀髪の女か、黒髪の猫又にしときな。少なくとも、それでロイちゃんは止まるから」

「……………」

今度は眉を寄せながら頷く少年。そんな彼の反応を楽しむようにリゼヴィムは笑う。

「さて、ラストスパートといきますか」

「御意！」

リゼヴィムの言葉にローブの男は勢いよく返し、作業の速度を更に上げていく。

ロイたちの到着が先か、獣の覚醒が先か、力だけでなく時間との戦いも、既に始まっていたのだった——。

mission10 突入

俺——兵藤一誠を含めた『D×D』は、エリックさんとルフエイが見つけた内側に大きな空間のある山の目の前に移動し終えていた。

エリックさんとルフエイが入り口を探そうと魔方阵を展開すると、ロイさんが目元を寄せて険しい表情を浮かべながら、右胸を搔いていた。

「あの、どうかしましたか?」

ロスヴァイセさんが訊くと、ロイさんは少し表情を和らげながら言う。

「いや、あいつがいるのを感じてな。この距離まで近づかなきゃわからねえとは思わなかったが……」

ロイさんの言う「あいつ」というのは気になるが、何かを感じ取ったようだ。

少し不気味な笑みを浮かべていたロイさんだが、突然笑みを消すと迷う様子もなく歩き始めた。

「……ああ、感じるぞ。そこか、そこにいるんだな?」

一度こちらに振り向くと一度頷き、翼を展開して飛び立っていく。

「ついてこい」ってことなのか?俺たちは困惑しながら顔を見合せ、ロイさんの後を追っ

て飛び立っていく。

ロイさんがどこを目指したのかはわからないけど、何か意味のあつての行動なんだろう。文字通り一刻を争うこの状況で、無駄なことはしないはずだ。

追うこと数分。

ロイさんは山肌を睨み付けながら右手の手元に魔力を集めていた。俺たちが追い付くのを待っていたようだ。

俺たちが追い付いたことを横目で確認すると、手元に集めていた魔力を解き放ち、山肌に叩きつけた！

物を強引に削り取る音が山に響き渡るが、放たれた滅びの魔力で舞った砂塵は全て消し飛んでいく。

削り取られた山肌。そこから現れたのは――、
「これだな」

近代的な様相をした廊下だった！扉はロイさんに消し飛ばされたのか、削り取られた場所の断面からはバチバチと火花が散っている。

どうやって見つけたのと訊きたいところだけど、いきなり過ぎて声も出ないよ！事前

の説明なしでこんなことをいきなりするんだからさ！

ロイさんは右拳を開いたり閉じたりしながら感覚を確かめると、ソーナ前会長と黒歌に言う。

「ソーナたちはここを固めて、黒歌はリリスと一緒に残ってくれ。ジルたちはこいつらの援護を頼む。ルフエイは『刃スラッシュ・狗ドッグ』も来るだろうから、早めに連絡をつけておいてくれ。ついでにゴクマゴグは目印代わりで、フェンリルは内側から何かが出てきた時のために残ってもらいたい。いいか？」

早口で捲し立てるロイさんに、ソーナ前会長が訊く。

「それはよろしいのですが、戦力は大丈夫なのですか？この先に何がいるのかは完全に未知数です」

「ああ、それもそうなんだが……」

頼もしいものを見るような目で俺たちを一瞥し、最後にロスヴァイセさんに目を向けると、不敵に笑んだ。

「こいつらならどうにかなるだろ。最悪おれが守るからよ」

いつもの調子で言うロイさん。

「いや、死なれちゃ困るのよ。わかってるの？」

それに対して、黒歌が少しイラついた様子で返した。毎回そう言って、時々重症にな

るから、心配なのだろう。

ロイさんの表情が苦笑に変わり、頬をかいた。

「わかつてるよ。つたく、そんなに信用ないか？」

「ええ」

「はい」

「ロセまで……」

黒歌とロスヴァイセさんに即答され、項垂れるロイさん。

「マ、マスター……」

そんなロイさんに、眷属であるアリサさんが少し不安げに声をかけた。

ロイさんは顔を上げ、そんな彼女の頭を少し乱暴に撫でる。

「大丈夫だ。そこまで無茶するつもりはねえよ」

「気を付けてください……」

眷属からの心配の声に、ロイさんは確かに頷いて返した。

リアスが言う。

「お兄様、急がなければなりません」

「おう。そんじゃ、リリースとここを頼んだぞ」

「任されたにや」

「はー」

「任せてくれ」

「死ぬなよ」

黒歌と眷属、仲間たちからの返しにロイさんは頷き、表情を引き締めた。

「さて、行くぞ……」

『はい！』

真つ先に進んで行ったロイさんに続いて、俺たちも剥き出しになった廊下に飛び込んで行った——。

——

そんなこんなで、俺——ロイを先頭にする形で突き進んでいるなか、リアスが訊いてきた。

「お兄様。どうやってこの施設の入り口を見つけたのですか？ 私たちではまったくわからなかったのですが」

「言つたら。感じるんだよ、あいつをな」

「あいつとは、リゼヴィムのことなのですか？」

「いや」

少ししつこく訊いてくるリアスの質問に手短に答え、俺は速度を緩め、最終的に立ち止まる。

長い廊下を抜けた先にあつたのは、半球型の大きな部屋であり、視線の先には奥に続いているであろう扉があつた。問題は――、

「久しぶりだな、少年」

「まって、いたぞ……！」

大量の怪物どもと、例の少年がいることだ。様々な形状をした怪物どもは唸り声をあげながら不気味な眼光を放ち、少年はアロンダイトを背負い、俺とロセを睨み付けてきっていた。

俺は小さくため息を吐き、美猴に声をかける。

「美猴。俺はあの少年の面倒を見なきゃならねえ。気にはかけるが、怪物どもを何体か頼めるか？ 具体的に言うと、三分の二ぐらいを――だが」

「……その数を一人で捌けての？」

「出来なきゃ、何人か巻き添えにして死ぬだけだが？」

美猴の不満に、俺は即答で返す。少年の相手をする以上、リアスたちは守りきれないだろう。最低限のフォローはするが、各自で死なないように頑張ってもらいたい。

「あんだ、そんなに鬼だったか!？」

「悪魔ではあるが、鬼じゃねえよ」

「そういう意味じゃ。ああ、もう、やりやいいんだろー!」

美猴が自棄になりながら叫ぶと、目を閉じて集中し始めた。

さて、俺もやらねえとな。一度瞑目して集中、手元に直剣を生成しながら怪物どもの核コアを探しておく。

俺たちが戦闘態勢に入ったからか、少年はアロンダイトを構えると、刀身を手で撫でながら深紅のオーラで包み込んでいった。

……前に会った時よりも魔力の質が上がってやがる。油断は出来ねえな。

少年が深紅に染まったアロンダイトの切っ先をこちらに向けた瞬間、怪物どもが一斉に飛び出してきた。姿はバラバラではあるが、またある程度の統制が取れていることだろう。

「さて、とりあえず片付けるかね。俺はあの少年の相手するから、最悪置いていってくれ」

「……わかりました」

リアスは渋々と言った様子で頷くが、

「嫌です……!」

ロセは首を横に振った。まあ、おまえのことだろうからそう来るとは思っていたけどな。

俺が言い返そうとするが、それよりも先に怪物が飛び付いてきた。

「フツ——!」

短く息を吐きながら踵落として床に叩きつけ、核^{コア}を貫く。怪物は『ビクンツ!』と一度身体を跳ねさせると、いつも通りヘド口になっていった。

「まあ、ロセは残ってくれて構わねえよ。そのほうが俺もやり易い」

俺は仕方ないとして、リアスたちに足を止めてもらおうわけにもいかないので、そういうことにした。それに対して、ロセは一度頷いて返す。

怪物を一体切り伏せ、リアスに言う。

「そう言う訳だ。しばらくロセを借りることになるかもしれん」

「……っ! その話は後にしてください!」

怪物に滅びの魔力を放ち、核^{コア}とか関係なしに全身を一気に消し飛ばそうとしているが、魔力に全身が呑み込まれる直前に広い空間の片隅に核^{コア}だけを吐き出されてしまう。

他の怪物はそれを群がり、再生までの時間を稼ごうとしていた。

その結果にリアスは小さく舌打ちをする。

「美猴、フオローしてやれ！こっちもちよつと忙しくなってきた！」

纏めて五体を切り伏せ、ヘドロに還していく。こいつらは、外を固めていた『新型』じゃないだろう。いや、ただの時間稼ぎなら、それで十分か。

小さくため息を吐いて、今度は三体斬る。はつきり言つて、弱いな。俺を止めるには――。

そんな考えを持つた瞬間、俺は神速で駆け出した。目指す先にいるのはロセだが、彼女の死角に回り込むように動く深紅の軌跡が見えたのだ。

リアスやイツセーたちも怪物どもに苦戦しているが、最優先はこつちだ。あいつらなら大丈夫だろう。

「ロセ、しやがめー！」

「ツー！」

俺の叫びに反射的にその場にしやがみこむロセ。

彼女の首のあつた場所で、二つの深紅の軌跡がぶつかり合った。

「俺を無視してロセを狙うか……。覚悟は出来てんだよな」

俺の威圧を真正面から受けた少年は、眉を寄せながら俺を睨む。前までは何の感情も籠っていないかつた瞳に、確かな殺意が宿っている。

そうだ。それでいい。感情もなしに誰かと戦うなんて愚の骨頂だ。そんなもの、無人兵器となにも変わらない。何でもいい、何かしらの感情が宿れば、こいつはまだヒトになれる。

なんてお節介なことを心中に宿しながら、上段回し蹴りで少年の顔面を蹴りにいくが、その場を飛び退いて避けられた。

「ロセ、怪我は？」

「大丈夫です。ちよつと怖かったですけど……」

「それは悪かったな。……しばらく背中を頼む」

「任せてください」

簡単なやり取りを終え、直剣に込める魔力を上げる。下手をすれば、剣が折られかねない。

俺と少年の滅びの魔力はほぼ同質ではあるが、俺の魔力には少し混じり気が多いからな。はつきり言って、純度に欠ける。純粹な滅びの魔力と、混じりものがある滅びの魔力など、本来なら勝負にならないだろう。

まあ、その混じりものをうまく使ってやれば、純粹なものよりも強力にすることも出来るだろう。今は試行錯誤中だけどな。

ゆつくりと息を吐き、右足を後ろに下げて半身になりながら重心を落とす。剣は右脇

に構えた。

少年のほうは、前と同じように『霞の構え』に似た態勢に入った。

怪物どもの唸り声も、周りの戦闘音も、俺たちの耳には届かない。お互いに極限まで集中し、そして――、

「――ツッ！」

同時に飛び出した。

少年は加速の勢いを乗せた突きを放ってくるが、振り上げた剣で弾き、そのまま兜割りの要領で一氣に振り下ろす。

少年は無理やりアロンドイトを引き戻し、俺の振り下ろしを防いで見せるが、

「ツッ！」

思わぬ重さに齒を食い縛りながら片ひぎをついた。

こちらと死神から逃げながら、毎日山の中で身体を鍛えているんだ。前よりも少しだけだかパワフルになってるよ。

少しずつ剣を押し返して立ち上がり始める少年が、振り払おうと一番力を込めるタイミングを見計らって剣を一度消し、体勢を崩させる。

体勢が崩れたら、無防備は顔面に左足で膝蹴りを放った。

確かに膝蹴りを放った。だが、少年は吹き飛ばない。とっさに展開した悪魔の翼で、

器用にも俺の足を防いで見せたのだ。

それを察知した俺は反射的に上に軽く跳び、右足で回り蹴りを叩き込む。うまく腰の回転が入らなかつたら、そこまでの威力はないだろう。

——まあ、軽く吹っ飛ぶくらいの威力はあるが。

現に蹴りを顔面にくらつた少年は吹っ飛ばされ、床を転がった。その勢いを止めて、ふらつきながらもすぐに立ち上がり、口の周りにべつたりとついた鼻血を拭う。

「……ッ！」

少年は文句ありげに睨んできた。まるで「正面から勝負しろ」と言わんばかりだ。

「いいか、少年。殺し合いに卑怯も何もねえんだよ。勝生きるつか負死ぬけるかだ。負死んだけたら何もねえからな」

言い聞かせるように少年に言うのと、何か得心するところがあつたのか、一度瞑目した。「かつかいきるまけるか。……知ぬつたことか」

急に流暢に言葉を紡ぎだした少年は、ゆっくりと目を開く。

アロンダイトを両手で握り直し、『正眼の構え』を取った。

「勝殺すつか負殺されるけるか。それだけだ」

少年はそう眩き、今までとは比にならない殺気を放ち始めた。

俺は思わず笑みをこぼす。

「いい殺気を出しやがる。盛り上がってきたな……」

今の俺は生きること——未来も含めて見ているが、少年は殺すこと——今この瞬間だけを见ている、か。

昔の俺はあんな感じだったのか。……なかなか問題有りだな。よく恋人できたものだ。

俺は横目でリアスたちに目を向ける。ちょうど怪物どもを蹴散らしたようで、少し荒れた息を整えていた。

リアスとヴァーリに目を向け、続けて先に続いているであろう扉に一瞬目を向けて、小さく頷いてやる。

リアスとヴァーリは頷き返し、眷属や仲間たちを連れてその扉に向かって走り出した。

残ったのは俺とロセ、少年だけだ。

少年は俺に集中したいのか、リアスたちを追う素振りは見せない。まあ、追いかけてうとしたらソツコーで邪魔をさせてもらうがな。

リアスたちが扉の向こうに消えていき、次第に気配も小さくなっていく。

それを感じながら、俺は一度肩を回す。

「さて、邪魔者は消えたな」

「……もう一人いるが？」

少年がロセを睨みながら言うが、俺は苦笑する。

「後ろに守りたい奴がいるほうが強くなれる。——なんてな」

「……どちらでもいい。殺すだけだ」

少年はそう告げると、更に魔力を高めたのか、深紅のオーラを放ち始めた。

「殺^やらせねえよ……」

少年に答えるように俺も深紅のオーラを放つ。

二つの深紅のオーラが空気中でぶつかり合い、火花を散らす。

「さあ、行くぜ？」

「来い……」

その言葉を合図に、俺たちはロセの視界から消え失せたのだった——。

mission11 目覚める皇獣（クローン）

彼女——ロスヴァイセの視界から、ロイと彼によく似た少年が消えた一瞬後、甲高い金属音が空間に響いた。

ロスヴァイセは反射的にその音の発生源——彼女よりもはるか上に目を向ける。

彼女の視線の先で、二人は落下しながらも攻防を繰り返していた。ロイが突きを放てば少年が斬り返し、少年がアロンダイトを薙げばロイはそれを受け流して反撃に出る。

ロスヴァイセでは視認できない速度で数十という攻防を繰り返しながら、二人の足が床につく。踏ん張りのきく場所に戦いの場所を移し、二人の攻防は更に激化していく。二つの深紅の軌跡が混ざり合い、深紅の火花を散らしていく。

端から見れば互角といった様子だが、ロスヴァイセには確かな感覚があった。

——確実に、ロイさんが押している……！

その実感が湧いた理由は簡単だ。

二人の攻防で深紅の火花が咲き乱れているが、それに混じって鮮血が空間を舞っているのだ。

目を凝らせば、少年の頬や脇腹から出血し、肌や服を汚していることが見て取れた。

そんなロスヴァイセの分析とは打って変わり、ロイの心境は穏やかではなかった。戦闘を開始してからまだ数分だが、その数分で少しづつだが確実に差を埋めてきているのだ。まだ埋まりきってはいないが、それも時間の問題だった。

頬や脇腹を初め、何カ所かには小さいながらも傷をつけた。だが、少年は動きの精細さを欠くことなく、段々とロイの動きに食らいついていく。否、ロイの動きを取り込んでいく。

格段に速く、鋭くなつていく少年の攻撃に対して、ロイもギアを上げて対応していく。二人の音さえも置き去りにした攻防を目にしながら、ロスヴァイセはロイの勝利を静かに祈り始めた。

——悪魔の私が祈っても逆効果でしょうか。

ほんの一瞬、そんな事が頭を過つた。祈るなら、自分よりもガブリエルのほうが適任だろう。そこまで思慮し、再び二人の戦いに目を向ける。

それと同時に、少年の顔面にロイの拳がぶち当たり、殴られて体勢を崩しながらも放たれた少年の蹴りが、カウンターの要領でロイの顎を蹴り上げた。

並の者ならその一撃で意識を刈り取られるだろう一撃ではあるが、ロイは歯を食い縛って意識を繋ぎ止め、追撃に放たれたアロンダイトの一撃を直剣で受け止めた。

つばぜり合いながら、二人は肩で息をする。だが、ロイの表情には余裕があった。

たかが数分。されど数分。極限まで集中した二人にとって、この数分はもはや数時間集中し続けた状態と同じであり、消耗も大きい。

だが、前世でも戦いに明け暮れ、この世に二度目の生を受けてさらに戦争に参加したロイと、この前まで言葉もわからなかった少年には、絶対的に『経験』の差があった。所謂『力の抜きどころ』という奴を知る知らないとは、多少消耗の度合いにも差があるだろう。

「どうした、少年。まだまだこれからだろう！」

「……当たり前……前だ……！」

ロイの挑発にあっさりと乗り、彼を弾こうと渾身の力を込めていくが、まったく動かない。少年の表情に少しの焦りが見え始めた。

ロイは不敵に笑むと同時に少年を押し返し、蹴りを放つが、少年は後ろに飛び退いてそれを避ける。

少年が床に着地する直前にそのポイントを見極め、瞬時に加速、着地の際の一瞬の硬直時に渾身の突きを放つ。

少年はアロンダイトでそれを受けるが、凄まじい衝撃で弾き飛ばされ、そのまま背中から壁に叩きつけられた。

ロイは一度深く息を吐き、刺突の勢いで伸びきっていた腕を引いて構えを変える。

少年は咳き込みながらアロンダイトを杖代わりに立ち上がり、ロイを睨み付けた。

再び二人が飛び出そうとした矢先――、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！

「ッ！」

「キャツ!!」

突然の爆音と振動に襲われ、ロイは驚愕しながらも倒れそうになったロスヴァイセの元に向かい、彼女の身体を抱き止めた。

「大丈夫か？」

「は、はい。ありがとうございます。……一体なにが？」

「リアスたちが何かしたのかもな……」

ロイは冷静にそう呟くと、先程の振動で倒れたのか、再び立ち上がろうとしている少年のほうに目を向ける。

「とりあえず、あの少年をどうにかするから待っていてくれ。もう一押しって感じだからな」

「わかりました」

ロスヴァイセが頷くと、ロイは彼女を立ち上がらせて自分の後ろに隠す。同時に少年も立ち上がった。

「さて、続けるか」

「来いー!」

二人は再び消え、音を置き去りにした攻防を再開したのだった――。

――

ロイさんとロスヴァイセさんを残して先に進んだ俺――兵藤一誠を含めた『D×D』突入組は、特に何の問題もなく突き進んでいた。

「ここまで何もしてこないと、逆に不気味だな……!」

ゼノヴィアが眉を寄せながら呟いた。

確かに、あそこを突破したことはもう知れているはずだ。それでも何も妨害がないもなると、もしかしたらリゼヴィムの野郎は既に目的を終えたという可能性もある。

警戒を続ける俺たちの視線の先に、ばかでかい両開きの扉が現れる。あそこが終点か？

扉を確認した途端にヴァーリが少し先走り始めるが、リアスが言う。

「この先で温存させた残りの全戦力をぶつけてくる可能性もあるわ。みんな、ヴァーリチームも、気を付けて」

『はい!』

「スイツチに言われるまでもねえよ……」

「何が来ようと、切り伏せるまでですよ」

集中し続けていた美猴は少し疲れた様子で、アーサーはそんな美猴をきしながらも不敵にそう返した。

まあ、こいつらしい返し方だ。現に、俺たちの少し前方を走るヴァーリは何かを感じ取っているのか殺気を放ち始め、手元に魔力を溜め始めた。

「ヴァーリ!? おまえ、何をするつもりだ!？」

「手っ取り早く行くだけだ。開ける時間も惜しい」

困惑する俺をよそに、ヴァーリが手元に溜めた魔力を扉に向けて撃ち放つ! 凄まじい轟音と衝撃が施設を駆け巡り、爆煙が俺たちの視界を奪い取った!

それでも足を止めるわけにはいかなかったので、そのまま直進。煙を突っ切った先にあったのは――。

「な、なんだよ、これ……?！」

俺は思わずそんな声を漏らした。

だだっ広い空間の壁一面に嵌め込まれた培養槽と思われる容器と、奥の壁にある明らかにひとつだけサイズが違う培養槽。そこにはドラゴンを思わせる巨大な何かが眠りについていた。

その巨大な何かが眠る培養槽からは瘴気が漏れ出しているのか、健康に悪そうなどず黒い煙が床を伝って空間に広がっていた。

俺たちが部屋を見回すなか、俺たちの耳にパチパチと拍手する音が届く。

それに真つ先に反応したのはヴァーリだった。その音の主を憎々しげに睨み付ける。

「リゼヴィムッ！」

「やつほー、『D×D』諸君。元氣そうで何よりだ」

リゼヴィムの野郎が巨大な培養槽の前を陣取り、邪悪な色を含んだ笑みを浮かべていた。あいつの横には前に遭遇したローブの男が立っていた。

「まったく、あのガキンちよには困ったもんだ。突破されたなら連絡寄越しなさいってね」

「リゼヴィム様、それは無理でしょう。あれは彼に夢中——いや、彼以外眼中にありませんよ」

「だよねー。まあ、ヴァーリが来てくれたならいいや」

勝手に話を進めるリゼヴィムと男に、ヴァーリはノーモーションで魔力の塊をぶつぱ

なした！

リゼヴィムに向かっていくそれは――、

「おい」

「御意！」

リゼヴィムの言葉に反応した男が盾になって防いだ！あいつ、前もあんなことしていなかったか！？

爆音と共に胸から大量の鮮血をぶちまけながら、男の口元は変わらず笑みが浮かんでいる。

「あゝ、いゝいゝ！これはだまりませんな。あゝゝ！」

死にかけながらもそう言う男。ヴァーリとの相性は最悪な部類に入るのではないだろうか。

流星にヴァーリの表情もリゼヴィムに向けた憎悪から、男に向けた嫌悪の色が強くなる。殺す気で放った一撃を受けて喜ばれたんじや、気持ち悪くてたまらないだろう。

リゼヴィムはそんな男に一切目もくれず、培養槽を軽く小突きながら俺たちに告げる。

「さて、この子が俺様の奥の手。『トライヘキサのクローン体』だ」

『ッ!?!』

ト、トライヘキサのクローン!? なんてももの作りだしてんだよ!? 本体ですらあそこまで手こずった相手なのに、そのクローン!?

混乱しっぱなしの俺の横で、リアスが叫ぶ。

「まさか、それを使って再びテロ行為をするつもりなの!？」

「あつたり前じゃん。それ以外に何かがあるよ? 邪龍たちには裏切られるは、腕折られて顎を外されるは、氷付けにされるは、異世界には行けないはと、この世界の連中はどこまで俺の邪魔をすれば気が済むのかね? どうせ俺を殺すまで邪魔してくんだろ? なら

——」
リゼヴィムは不敵に笑み、高らかに宣言する。

「——この世界を終わらせちまおうと思つたわけよ! 異世界への行き方はそのあと考えればいいしね!」

「そいつを使ってこの世界に宣戦布告というわけか。ふざけているな……」

ヴァーリが怒気を込めながらそう呟くと、リゼヴィムは首を横に振る。

「いんや、ふざけてねえよ。俺はマジだぜ本気^{マジ}。本気と書いてマジと読むからそこんとこ注意ね」

ふざけた様子でそう言うリゼヴィム。すると、男が勢いよく立ち上がった。

「リゼヴィム様……。本当によろしいのですね? どうなるかは計算も無意味なほど不確

定ですが」

「うん、やる。何がなんでもやる。こんな世界、俺がこの手で、自らぶっ壊したいのよ」
「……そうですか。少し残念です」

男が言葉通りの声音で言うのと、魔方陣を展開して動かし始める。

「ツ！何をするつもりだ！」

ヴァーリが叫ぶと、リゼヴィムが言う。

「何って、俺とこいつを合体させるんだよ。俺がどうなるかわかったもんじゃないけど、
少なくともこいつにセイクリッド・ギア・キーンセラ神器無効化が継がれるわけだ。どう思うよ？」

『っ！』

俺たちの表情が驚愕の色を深める。トライヘキサ並の怪物にセイクリッド・ギア・キーンセラ神器無効化が盛り込まれるって、相当厄介だぞ?! 少なくとも、俺たちじゃどうにもならなくなる!

「そんな事、させるわけねえだろ！」

真紅の鎧を瞬時に身に纏い、背中の魔力噴出口から魔力を吹き出させて一気に飛び出していく!

狙いは魔方陣を動かすあの男だ。リゼヴィムを殴るよりは断然楽なはず。

加速の勢いのまま男をぶん殴ろうとした途端、転移の光に包まれて消えた。同時に部屋
の片隅に転移の光と共に現れた。

短距離転移で避けられた？俺が飛び出したことを察知してから瞬時に展開と転移をしてきたってことは、相当手慣れているようだ。

男は俺に構うことなく魔方陣の操作を続け、リゼヴィムに言う。

「少し時間がかかりますね。リゼヴィム様も私も余り動かないほうがいい。使いますか？」

「いいよ。こいつらの調子も見ておきたいし」

リゼヴィムの肯定の言葉を受けて、男は不気味に笑む。

「では早速。『D×D』の皆さん。メインイベントはこの後ですから、こんなところでリタイア死なないでくださいね？」

男が俺たちに告げた瞬間、壁の培養槽のいくつかが開け放たれて中の怪物どもが飛び出してくる！

いくつかと言っても、全体の一割にも満たない数だ。だが、感じるオーラは外にいた奴らとも、先ほど遭遇した奴らとも違う。段違いにオーラの質が邪悪だ。近くに寄るだけでも危険かもしれない。

見た目も生物ではあるが、既存の生物よりもいくつかの生物の特徴を取り入れたキメラのように見える。かなり強いことがオーラだけでも察することが出来た。

俺たちが冷や汗を流しながら構えを取るなか、美猴と小猫ちゃんの表情が驚愕に染ま

る。

「こいつら……ッ！」

「気を付けてください！核コアと思われる場所がいくつかあります。全てが本物なのか、それともひとつだけなのか、気を見るだけでは判別できません！」

小猫ちゃんの言葉に、俺たちは更に表情を険しくさせる。

核コアを全てを潰すか、どれかもわからない本物を潰さなければならぬことは、今まで以上に気を使わなければならぬ。美猴と小猫ちゃんの疲労を考えれば、全ての相手はしてられないだろう。

「くそーリゼヴィム！」

「もく、邪魔しないでよ。もう少しなんだからさ」

ヴァーリは群がる怪物と対峙ながら、リゼヴィムに近づこうとするが、それが叶わない。怪物たちの数と一体一体の強さが段違いだ。

「ヴァーリ、戻ってこい！一人で突破は無理だ！」

俺が怪物を殴り飛ばしながら叫ぶと、ヴァーリは一度舌打ちをしてこちらに戻ってくる。

その間にも男の魔方陣の操作は進んでいき、リゼヴィムと培養槽から光が漏れ始める。

美猴が怪物を如意棒で殴り飛ばすと、何かに気づいたような表情になる。

「こいつら。ああ、そういうことか！」

一人で何かを察した様子で、自分の毛を抜いて分身を大量に作り出し、怪物たちにつけていく。

「ちよつと美猴！何を考えているの!? そんな事をしてもいたずらに消耗するだけよ！」

リアスが怒鳴るが、美猴はニヤリと笑う。

「いいんだよ。どうやら、間に合っていたみたいだ」

「それって、どういう——」

リアスが怪訝そうな表情を浮かべた途端、怪物たちがもがき苦しみ始めた。中には血を吐き出してそのままへドロ口が変わっていく個体までいる。

疑問符を浮かべるしかない俺たちだが、男が焦った様子でフードを取っ払い、灰色の髪の毛をかきむしりながら魔方陣の操る手を速くしていく。

「肉体の調整が曖昧だった? そんな馬鹿な! 私、私とリゼヴィム様の計算に狂いがあ
る筈がない!」

「これは予想外だ。なんだ? 何か不確定要素でもあったか?」

リゼヴィムも少し怪訝そうに言う。何となくだが、あいつらの計算が外れたってことか? よくはわからないけど。

リゼヴィムたちがそんな事をいつている間にも怪物たちは次々と死に絶えていく。外に飛び出してきた怪物たちの数は既に半分ほどになっており、今も少しずつ数を減らしていく。培養槽に入っている奴らは変化なしだ。

「おい。早く俺とこいつを融合させろ。ちよいと考えがある」

「御意……！」

男は落ち着くように努めながら深呼吸を繰り返すと、再び魔方陣を動かし始め、リゼヴィムと培養槽の輝きが強まっていく。

今度こそやるつもりか！やらせるわけには——！

俺とヴァーリが飛び出そうとした瞬間、怪物たちがヘドロになりながらも俺たちに飛びかかってくる！

俺たちに飛び付いた怪物たちの体のほとんどがねばねばしたものに変わり、俺たちの体にへばりついて動きを阻害してくる！

「この！引っ付くんじゃねえ！」

「くそー！」

俺たちは必死に暴れまわり、どうにかねばねばを体から引き剥がす。少し動きづらいが、このぐらいいなら問題ない！

「ヴァーリ、行くぞー！」

「言われるまでもない！」

俺は男の手を止めようとそちらにドラゴン・ショットを放ち、ヴァーリは鎧の籠手部分を解除してリゼヴィムに向けて魔力弾を放つ！

「当たるならそちらがいいです！」

男が高速で動き出して俺の攻撃を避け、ヴァーリの魔力弾にぶち当たりに行った！

再びヴァーリの攻撃を諸にくらい、悶絶する男だが、その表情は――、

「あゝ、あゝ、これは癖になゝりますなあゝ」

恍惚としたものだった！こんな状況でもあの態度を崩すつもりはないようだ！

ヴァーリが大きめの舌打ちをした瞬間、『ピシッ』と何かにヒビが入る音が俺の耳に届いた。

その音は連続していき、どこから発生しているかを明確にさせる。

リゼヴィムの背後にあった巨大な培養槽。それに大きなヒビが入っているのだ。それを確認した途端、リゼヴィムと培養槽の輝きが更に強まっていく！

そして――。

バリン……………ッ！

培養槽のガラスが砕けちり、ドラゴンのような怪物の目が開き、血のように赤い瞳が露になった。

それと同時に感じる強烈な重圧。背中に嫌な汗が流れているのが実感できる。こいつ、相当ヤバイ……………!

怪物はリゼヴィムに目を向け、頬が裂けているとも思えるほどデカイ口を開き、そのままごとリゼヴィムを口に含んだ!

咀嚼することなく丸呑みすると、怪物が苦しそうにえづき始める。だが、それも数秒のことですぐに慣れたのか、俺たちに向けて邪悪な笑みを見せる。

ま、まさか……………、本当に融合しちまったのか……………?

俺たちが警戒するなか、男が笑う。

「やった。やったぞ! 私の計画通りだ! これで、ようやく、ようやく……………! アハハハハハハハハハハ……………」

男が狂ったように笑うなか、怪物が再び苦しみ始める。

今度は何だよ!? これ以上なにが起こるってんだよ!?

怪物は何を思ったのか、施設を破壊しながら壁に埋め込まれた培養槽を次々と丸呑みにしていく。

俺たちはそれに巻き込まれないように逃げ回るだけだ。くそ! デカイ奴が暴れまわるだけでも迷惑だつてのに、こんな狭い場所で暴れるかよ!

全ての培養槽を呑み込んだ怪物が、天井を見上げて口を開き、そこに火炎と共に魔力

アガリアレプトは続ける。

「と言つても、生き残りは私だけ。先日まで、冥界の辺境で孤独に生きていたのですよ」
少し悲しげな声音になりながら、アガリアレプトは俺たちに目を向けた。

「リゼヴィム様からの伝言。いえ、当時からしてみれば遺言と変わりはありませんか。それを受け取った私がどんな思いを抱いたか、あなた方にわかりますか？ 生きる意味を無くし、居場所を失った私に託された最後の仕事。あの時の感動は忘れられませんよ……」

「外の怪物どもはそれで産まれたのか」

俺が睨みながら言うと、男は頷く。

『『トライヘキサの血液』。隠されたそれを見つけ出し、調整し、現政府に反抗する悪魔たちを利用して研究を続けました。その結果が、あれですよ』

リゼヴィムと融合した獣が背中から一対の巨大な翼を生やし、飛び立とうとしていた。

攻撃を加えようとした途端、俺たちを囲むように結界が展開された！

「な、これは?!」

「あなた方の戦闘データを元に、対応策として作り出した結界です。簡単には破れませんよ?」

言うや否や、転移魔方陣を展開するアガリアレプト。

「——では、またお会いしましょう。次に会うときが、最後になるでしょう……」
静かにそう告げると、転移の光に包まれていく。

それと同時に怪物が飛び立ち、天井に開いた穴から飛び出していく。

「くそ！何なんだよ、この結界！」

ありつたけの力を込めて結界を殴つてもびくともしない。リアスたちもどうにか破ろうと攻撃していくが、結界は同じだ。

これならロスヴァイセさんを無理矢理にでも連れてくるべきだったか。あのヒトなら素早く解析できるはずだ。

獣が覚醒をしたちようどその頃。ロイと少年の激闘は、突然終わりの時を迎えた。

「——ッ！な、んだよ。いきなりどうしたんだ……!?!」

ロイが突然苦しみ始め、息を荒くしながら片ひぎをついてしまう。

「ロイさん!？」

異常を察したロスヴァイセは急いで彼の元に駆け寄っていくが、彼女よりも早く少年がロイに肉薄して斬りかかる。

「……チッ!」

歯を食い縛り、急に重くなった体を無理やり動かして少年の攻撃を紙一重で避ける。先程までの動きのキレはなく、足もふらついている。見るからに危険は状態であることは確かだった。

——これ以上、追撃を受けては危険です……!」

ロスヴァイセは数十の魔方陣を展開して一気に砲撃。様々な属性の盛り込まれたフルバーストが少年に向かっていくが、

「邪魔だ……!」

それを全て避けた少年は、標的を死にかけのロイからロスヴァイセに変え、一気に飛び出していった!

「後ろだ……!避けろ……!」

彼女の目で追えるほど少年の速さは優しいものではなかったが、とつさに叫んだロイの言葉に反応して振り向き様に障壁を張るロスヴァイセ。

だが、少年の渾身の突きで障壁ごと弾き飛ばされ、反対側の壁に叩きつけられる。

「かは……………っ！」

ロスヴァイセは肺の空気に混じり、微量の血を吐き出した。

ロイはその光景に目を見開き、脱力したように俯いた。

「……………テメエ」

ロスヴァイセを傷つけた少年に、ロイはどすの効いた低い声を出しながら睨み付ける。

体にあつた重さが消え、しっかりと床に足をつけながらゆっくりと立ち上がり、顔を上げる。

深紅に染まった瞳の瞳孔は獣のように縦に割れ、炎のように燃え盛る絶大な殺気を放ち始める。

「ロセに——」

少年が警戒を最大にした瞬間、ロイの姿が消える。

「——何してくれてんだ！」

少年はハツとしながら振り替える。その瞬間、少年の顔面に深紅の鱗に包まれた拳が直撃した！

肉が潰れる鈍い音が空間に響かせながら少年は吹き飛ばされ、壁にめり込むほどの勢いで叩きつけられる。

「……ッ???!」

顔にべつとりとついた鼻血を拭うことも忘れ、少年はひたすらに動揺していた。

彼の視線の先にいるのは確かにロイだ。だが、ロイの両腕は深紅の鱗に包まれ、その表面を滅びの魔力がスパークしていた。

ロイと目が合い、問答無用で睨まれた少年は下がることが出来ないはずなのに、無意識の内に後ずさるうとしていた。

「殺してやる……！壊してやる……！潰してやる！」

先程までであった冷静さはない。怒りに身を任せた純粹な殺気は、少年に初めて恐怖を感じさせた。

その感情がわからない少年はひたすらに焦り、目の前の男かいぶつをどうするか、必死に思慮していく。

——速度。あちらが上。

——筋力。あちらが上。

——経験。あちらが上。

——体力。あちらが上。

何をどう考えても、勝てる算段が浮かばない。このままでは間違いなく自分は——

！

いくら考えても打開策が浮かばない。どうすれば、どうすれば……! !

「オラアアアアアアアアアアアッ! !」

ロイの叫びに反応して少年はその場を飛び退く。彼がその場から消えた一瞬後、彼がいた場所にロイが拳を叩き込み、壁を完全に破壊した。

「どうした! ! 逃げてんじゃねえよ! !」

ロイは挑発するが、少年は乗らない。否、乗れない。今ロイの間合いに飛び込めば、間違ひなく即死させられる。

怯える少年の真横に、転移魔方陣が展開される。そこから現れたのは――。

「おや。これは予想外です」

アガリアレプトだった。怯える少年と、尋常ではないオーラを放つロイ、そして口の端から血を垂らすロスヴァイセを一瞥し、苦笑した。

「これは、驚きです。逆鱗にでも触れましたか? ! ―とにかく撤収です。ここでの用事は済みました」

「逃がすわけねえだろうが! !」

ロイは瞬時に飛び出していくが、アガリアレプトは短距離転移で少年ごと飛ぶ。

アガリアレプトは少年に言う。

「力が欲しいのなら、私と共に来なさい。おそらく、彼にも勝つことが出来ますよ? !」

「……ッ！了解」

しつかりとした返事を返した少年に少し驚きながら、アガリアレプトはロイを囲むように大量の魔方陣を展開、そこから魔力の鎖を飛ばして彼を絡めとる。

アガリアレプトは転移魔方陣を展開、転移の準備を始める。

「——では、また後程。冥界の未来を懸けた戦いで会いましょう」

「次の機会なんざ、やるわけねえだろうが！」

全身から滅びの魔力を解き放ち、鎖を消し飛ばすと同時に飛び出し、アガリアレプトと少年もろとも消し飛ばそうと両手から滅びの魔力を放つ！

それが二人に当たりそうになった間隙で転移の光が強まり、二人をどこかへと飛ばしてしまふ。

標的を失った滅びの塊は壁を突き抜けて山の壁を削っていき、そのまま外へと抜けていく。

「ああ、くそ！くそが！」

床に足をつけたロイは衝動のままに壁を床を、近くにあった何かの機材を殴り壊していく。——その拳から血が流れ、何かが碎ける乾いた音が出ても、止まる気配はない。

「ロイさん……！」

「どこだ！どこに逃げやがった！殺してやる！ぶつ殺してやる！」

「ロイさん！私は無事です！落ち着いてください！」

「どこだ！どこだ！！どこだ！！」

ロスヴァイセの叫びも届かない。その間にもロイは破壊活動が続けていく。

ロスヴァイセは手を握り、その場を駆け出す。

「ッ！……ッ！」

もはやヒトの言葉からかけ離れた叫び声を上げるロイの背後から近づき、少し背伸びをしながら彼の首に腕を回して優しく包容した。

彼女が触れた途端、今までの暴走が嘘のように止まり、ロイは静かになる。

ロスヴァイセは彼の耳元で優しい囁く。

「……私は大丈夫です。落ち着いてください」

ロイの鱗に包まれた手がロスヴァイセの手に重なる。

「ロセ……？」

「はい」

ロイは手を離すとゆっくり振り向き、ロスヴァイセと目を合わせる。

ロイの瞳の色が碧あおに戻り、縦に裂けていた瞳孔も元の形に戻っていく。

「大丈夫なんだな……？」

「さつきからそう言ってます」

「怪我は……?」

「しましたけど、そこまで酷くはないですよ」

「なら、よかつ——」

ロイが優しい微笑んだ途端、ロスヴァイセに体を任せるように倒れこむ。いきなりの事態に反応できずにロスヴァイセは下敷きにされてしまう。

「ロ、ロイさん!」

「すう……くう……くう……」

体を起こそうとしたロスヴァイセの耳元から出る、規則正しい呼吸音。いきなりだが、ロイは眠っているようだった。

ロスヴァイセは少しオロオロしながらも、優しく彼の頭を撫で始めた。

「ど、どうしましょう……?」

ロイの腕に目を向けながら呟くロスヴァイセ。彼の目は戻ったが、腕はそのまま鱗に包まれている。このままでは、日常生活に支障が出るだろう。

冥界全体に危険が迫るなかで、しれっとロイのことだけを心配しているあたり、彼女も相当だろう。

その後、突入した『D×D』の面々は駆け付けた増援に救出され、無事に全員が脱出。ロイは病院に担ぎ込まれ、動けるメンバーはリゼヴィムと融合した獣の対応するために

動き始める。
悪意リゼヴェイムの化身との決着の時が、近づいているのだった！

「やれやれ、手酷くやられましたね」

「早くしろ。俺は奴に勝たなければならぬ」

また別の研究所に、アガリアレプトと少年はいた。

少年は手術台に座り、アガリアレプトの手には禍々しい光を放ちながら脈動する何か
が握られている。

アガリアレプトはそれを少年の目の前に差し出しながら、さも当然のように言う。

「では、これを食べてください。一口で」

「そうすれば、俺は——」

「勝てますよ。負ければ確実に死にますが、どうします？」

「聞かれるまでもない」

mission12 救うために

獣の復活から二日。冥界某所。会議室。

俺——アザゼルの前には、リゼヴェイムと融合したという怪物が進軍している映像が映し出されていた。

アジユカが険しい表情をしながら言う。

「報告の通り、リゼヴェイムを取り込んだためか、セイクリッド・ギア 神 器の攻撃はほぼ通らないようだ。対抗策の術式を計算中だが、サンプルもなしにやっているから、残念だがもう少し時間がかかる」

映像の中で、ヴァーリと思われる白銀の閃光が怪物に殴りかかるが、奴に触れた瞬間にそのオーラを霧散させていた。

怪物の姿はドラゴンを思わせるもので、全身を血のように赤い鱗で覆われ、頭頂部から尻尾の先にかけて黒い毛が生えている。

大きさは五十メートルはくだらないと思えるほどに巨大だ。出現してから二日ですらにでかくなりやがった。

一対の巨大な翼はあるが、今は機能していない。おそらく、体が重くなりすぎて飛べ

なくなったのだろう。そのため、せいぜい盾代わりと言った具合に使っているが、その強度と再生能力と相まって、生半可な攻撃では突破出来ない強力なものとなっている。

巨体なこと、翼が機能しないこと、さらに都市部から程遠い山岳部の、さらにその奥に出現してくれたため、進軍の速度は極めて遅い。都市部に侵入されるとしても、後三日の猶予はあるだろう。翼が再び使えるようになったら、それはさらに短くなる。

「状況的にはトライヘキサの時よりも、『超獣鬼』^{ジヤハウネック}のほうに近いか。雑魚が無限沸きしているのが気になるがな」

俺は映像を見ながらそんなことを漏らす。

母体となる怪物の肉を食い破って小型の個体が現れ、迎撃に出ている悪魔や墮天使、天使たちに襲いかかっていた。

だが、いい情報があるとすればそいつらのことだ。仙術を扱えるものたちによると、各個体には核^{コア}が複数あるようだが、多い個体ほど寿命が短いそうだ。

より強い個体ほどすぐにヘドロになり、弱い個体ほど長い間戦闘を行える。

逆だったらしんどいことこの上ないが、まだどうにかなるだろう。まあ、減ったところですぐさま次が出てきてしまうのだが……。

サーゼクスが言う。

「今のところ問題はないが、いつ他の神話勢力に飛び火するかもわからない。転移術に

も警戒をしておかなければならないな」

「まあ、その他の連中もこっちに戦力を回してくれているのはありがたいがな」

映像では、妖怪や戦乙女ヴアルキリーを始め、他の神話勢力の戦士たちもちらほらと見ることが出来る。

もつとも、先ほどサーゼクスが言ったように、いつ自分の勢力圏に飛び火するかわからない以上、あまり回してはくれないがな。だが、いないよりはマシだ。

ミカエルが顎に手をやり、真剣な面持ちで言う。

「リリンを取り込んだということなら、光力や聖なるオーラによる攻撃では駄目なのでしようか」

「その予測は正しいな。他のものに比べればダメージはだいぶ通るさ。すぐに回復されちまうが」

俺が言うのと、ミカエルはため息を吐く。

「もつと強力な一撃が必要ということでしょうか……」

「それである獣の胸の奥にある核コアを潰せればいいんだがな。神セイクリッド・ギア器が絡まない攻撃と

なると、それこそ神クラスじゃないと駄目だ」

今まで集まった情報を総括し、核コアが胸の奥にあることがわかり、その周辺の鱗が一段と高いこともわかった。

だからといって、おいこれと神クラスを戦場に行かせるわけにもいかない。邪龍戦役で神が死にすぎた。万が一の事態でこれ以上減られると、各方面に悪影響が出ることは間違いない。

ファルビウムが欠伸あくびを噛み殺しながら言う。

「やつぱり二天龍に頼るしかないかな。トライヘキサを倒したあれで核コアを撃ち抜いてもらう。……あー、駄目か。赤龍帝くんの龍神化は使えないし、中途半端な火力じゃ神セ・クリッド・ギア・キャンセラ器無力化があるから、たぶん途中で止められる……」

そう言うのと、ぶつぶつと呟きながら一人で策を練り始めてしまった。

……もしかして、考え事をしている時の俺もあんな感じなのか？ だとしたら、イツセーたちが気味悪がるのもわかる気がする。

なんて現状どうでもいいことで一度凝り固まった思考をほぐし、対策を練る。

手っ取り早いのが、非神セ・クリッド・ギア器で神クラスの一撃を叩き込むこと。同盟を結んだどこかの神様か、目の前にいる魔王に前線に出てもらうのもありだが、万が一このタイミンググで誰かが死なれたら、あれの開催に悪影響になる。

他には、奴の回復速度以上の速度で肉を削ぎ続けて、核コアを露出させて直接それを破壊する。だが、現状それが出来る奴がない。戦力を編成がまだ完璧ではないのだ。

盛大にため息を吐き、空席になっているサーゼクスの隣に目を向ける。

「……で、セラフオルーはどうした？」

「あれから爆睡中のロイクんを起こしに行かせた。彼にも出てもらわないとまらないだろう」

アジユカがそう告げた。

ロイの野郎は、二日前から寝込んでいるのだ。

まあ、リリスの世話をしながら死神どもから逃げ回り、果てにはテロリストの基地を潰して回って、最終的には俺たちと合流して援護までしてくれていたんだ。疲労が溜まりに溜まっていたのだろう。

俺はサーゼクスに訊く。

「大丈夫なのか？ロスヴァイセから聞いた話だと、あの怪物が目覚めたタイミングで苦しみ始めたとか聞いたんだが」

「……それは何とも言えないな。ロイのこの獣に何かしらの関係があるのかもしれない。だが——」

サーゼクスは言葉を区切り、映像に目を向けた。

映像では、深紅のオーラが体から漏れ出す紅髪の少年と、ヴァーリを除いたヴァーリチームが相対し、そこにロイの眷属の二人と同僚の二人が援護に回っているところが映し出されていた。

映像越しでもあの少年に苦戦していることがわかる。あいつらが抑えてくれているから、少年による被害は皆無に等しいが、その分こちらの火力もだいぶ下がっているのが本音だ。

サーゼクスがどう思っているかは別として、俺としてはロイをあの子にぶつけてしまいたいのが本音だ。ロイ自身あいつに執着しているようだし、さっさと決着をつけてもらいたい。

「——あの少年。何者なんだ……」

サーゼクスの呟きに、アジユカが顎に手をやりながら答える。

「取り押さえればわかる。と言いたいが、ロイくんに関係するのは間違いないだろう。写真で確認したが、若い頃の彼と瓜二つだ」

「ロイに隠し子でも——ッ！」

俺が冗談を言おうとした矢先、突然全身に鳥肌がたつた。な、なんだ。この、地雷を踏んだことを自覚した瞬間のような感覚は——！

サーゼクスが俺の様子に気付き、苦笑した。

「ロイの悪口は止めておいたほうがいい。彼女は地獄耳だから、後が怖いよ？」

「……ああ、そうする」

俺たちのやり取りが終わったところを見計らって、ミカエルが険しい表情で口を開

く。

「クリフォトはフェニックスの涙を確保する際に、悪魔フェニックスの『クローン』を作り出しましたよね？その、まさかですが……」

「ああ、こちらもそれを考えていたところだ」

「まあ、そう考えるよな。クリフォトの連中がロイの遺伝子を手に入れる機会は何度もあっただろうし、冥界の施設とかを調べれば、DNA情報だけでも入手するだけなら簡単だろうよ」

アジユカ、俺が続き、サーゼクスの表情が曇る。

「ロイはそれを知っているのだろうか……」

「あいつなりに、そんな事は考えてはいるんじゃないか？ついでに、どうにかしようとも考えているみたいだがな」

そこら辺は、ロイ自身にやってももらわないとどうにもならない。あいつなら、どうにかしてくれるだろう。

「あー、ハーデスが気になってしょうがない。下手な手を打ったら、絶対に妨害の一手が来るよ……」

今まで一人でぶつぶつと言っていたファルビウムが机に突っ伏しながらぼやいた。

それも俺たちにとって大問題だった。いちおうの牽制として、『刃^{スラッシュ}・ドッグ^{ドッグ} チーム』に動

いてもらっているが、そちらにも戦力を割いてしまっているのが惜しいところだ。映像に目を戻し、戦況を確認する。

トライヘキサとの戦いに比べれば、まだまだ戦況は優勢だ。融合したりゼヴィムが怪物の力を扱いきれれていないようにも見える。

それを証明するように、トライヘキサの本体が見せた山や島を吹き飛ばすような一撃を放つことはない。もしかしたら、その力を蓄えているところなのかもしれないがな。

「神に頼らない場合、怪物と融合したりゼヴィムでも無効化しきれない一撃を叩き込んでもらうしかないか。イツセーの龍神化——は、あまり使わせたくはないな」

龍神化したイツセーと、魔王化したヴァーリの二人の同時攻撃ならおそらく通るだろう。

だが、龍神化は使わせるわけにはいかない。あの力は、一時的とはいえ『無限』を宿すことになる。今のイツセーでは、その力に耐えきる事は出来ないだろう。

オーフィスが諸々と調整をしてくれているようだが、まだ実戦段階ではない。今あいつに死なれるわけにはいかない。

俺が小さくため息を漏らすと、戦場を映す画面の横にまた別の映像が投影される。

『サーゼクスちゃん？アジユカちゃん？誰か聞こえる？』

緊張感の欠片もない声。

ロイの横つ腹に突っ込みながらセラフオルーは必死になりながら言った。

ロイも少し申し訳なさそうな表情を浮かべてセラフオルーの髪を撫で、アジユカに言う。

『アジユカ様、少年をこちらに飛ばすように言ってください。あと、俺の眷属の二人も。今から座標を送ります』

そう言うと、ロイが魔方陣を展開して映像越しにこちらに飛ばしてくる。

それを受け取ったアジユカは、高速で魔方陣を動かしながら座標を確認しながらロイに訊く。

「ロイくん。キミはあの少年をどうするつもりかね？」

ロイは小さく俯き、覚悟を込めた表情で言う。

『——あいつを助けます。あいつは、戦うことしか知らないんです。だから、それ以外のことを知るチャンスを与えたい。そのために戦います』

どこか悲哀の色が込められた言葉に、俺たちは押し黙るしかなかった。

切り裂き魔リッパとまで言われた男が、『殺す』ためにでも『守る』ためでもない。相手を『救う』ために戦う、か。

こいつがそこまで言うのだから、何かしら手があるのだろう。案外行き当たりばったりな作戦かもしれないがな。

サーゼクスはため息を吐き、ロイに言う。

「わかった。セラフォールのことと、例の少年のことはキミに任せる。ところで、リリスは――」

『よんだ?』

サーゼクスに名を呼ばれたためか、画面の下ギリギリから顔を覗かせるリリス。

………そいつまで連れ出したのか。いや、リリスとロイは基本的に一緒にいる。ロイが戦場に出れば、それについていくのは当然か。

「その子も任せるよ……」

『ああ』

少し疲れた様子のサーゼクスを気にしながら、ロイは一度頷いた。

『アジユカ様。先ほどの件、お願いします』

「今しがた連絡を済ませたところだ。すぐに来るだろう」

『ありがとうございます』

『私もロイの用事が終わったらそのまま参戦しちゃうから、そっちはお願いね☆』

セラフォールはそう言うのと一方的に連絡を切った。

あのコンビ、ずいぶん自由になったもんだな。一応のブレーキ役だったロイが本格的に仕事放棄をしたせいかな?

「……まあ、あつちはロイに任せるとして。問題はアガリアレプトだな」

「かつて、初代ルシファー様の右腕の為政者となった一族だ。相手の精神的、政治的な弱味を握ることに關しては右に出る者はいない」

俺の言葉にアジュカが続き、映像に目を向ける。

戦場が様々な角度から映し出されていくが、奴の姿はない。どこか死角に入っているのか、それともどこかに隠れているのか……。

「あの野郎、どこで何をしていやがる。どうにも嫌な予感がしてならないんだよな……」俺はぼやくが、それで戦況が良くなるわけではない。

だが、ヴァーリチームと相對していた例の少年が、ロイの眷属と同僚が張った轉移魔方陣の輝きに包まれ始めていた。

特に抵抗する様子もなく、それを待ちわびていたかのような態度。ロイと少年が引かれあっているというのもあながち間違いでもなさそうだ。

それを見ていたアジュカが得意気に笑む。

「さて、お膳立てはした。後はキミ次第だ、ロイクくん」

「——来たか」

俺——ロイは前方に展開された転移魔方陣を確認し、吸っていた煙草を消滅の魔力を込めた右手で握りつぶす。

リリスには近くの岩影に隠れてもらい、セラフオールにはあの子についてもらった。転移の光が弾けた瞬間、俺の両脇に飛び込んでくる二つの影。

「マスター、指示を」

「マスター……あのヒトすつごく強いんですけど!?!」

クリスは落ち着いた様子で、アリスは少しテンパりながらと言った様子だ。

二人に目を向け、最後に前に視線を戻す。

待っていたと言わんばかりに笑む少年がそこにいたが、どうにも様子がおかしい。目が血走っていて、興奮しているのは明らかだ。

体から深紅のオーラが滲み出し、それに混ざってどす黒いオーラのようなものも感じる。

本来白銀に輝くアロンダイトの刀身が、持ち主のオーラに当てられてどす黒く染まっている。

俺は小さく息を吐き、二人に言う。

「あいつを助ける。手を貸せ」

「了解！」

二人の返事に俺は思わず苦笑した。

俺を信じてくれていて、このためにも、俺を待っていてくれるヒトたちのためにも、俺は自分を誇れるようになりたい。

そのためにも――。

「俺とクリスで少年を行動不能にするぞ。アリサは回復の準備だ。ゆっくり話すためにも、一旦黙らせないとな」

「了解です。任せてください」

「物騒ですね……」

クリスは右拳を左手の平に叩きつけながら返し、アリサは少年に同情するような視線を送る。

「アリサ、返事」

「りよ、了解です！」

改めて二人の返事を確認し、ゆっくりと息を吐く。

何も殺すだけが戦いじゃない。何かを守ること、助けることもまた戦いだ。

「よし。クリス、行くぞ！」

「了解！突撃します！」

「フオローは任せてください！」

俺たち三人が動き出したと共に、少年がさらにオーラを解き放ちながら構える。

「どこからでも来い。叩き潰すだけだ」

激化しているであろう怪物との戦闘を他所に、俺たちの戦いが静かに始まったのだつた――。

――

「――さて、仕込みは上々。あとは『あれ』しだいですね」

アザゼルたちの懸念材料――アガリアレプトは、双眼鏡を手に冥界にあるとある山の頂上にいた。

彼の見つめる先には一つの大きな屋敷があり、そこには『紅髪の男の子』と『銀髪の女性』の姿が見てとれた。

アガリアレプトは女性の姿を目にした途端、双眼鏡が軋むほどの力で握り始める。

「ルシファアを騙る者にたぶらかされた裏切り者が……っ！ 貴様の血統も、ルシファア様の名を汚したグレモリーの血統も、この世界に残すわけにはいかない……！」

アガリアレプトの目に宿る狂気と憤怒の色は一層濃くなり、女性を睨み付ける。

それを感じ取ったのか、女性は窓越しに彼のいる山を睨んだ。

「グレイフィア・ルキフグス。サーゼクス・グレモリー。貴様ら二人とも、世界に絶望しながら死んでいけ……。そのためにも、まずは——」

女性——グレイフィアの異変に気づいた男の子。彼女とサーゼクスの息子であるミリキヤス・グレモリーが声をかける。

グレイフィアは警戒しながらも表情を少し緩め、優しく笑みながら彼の頭を撫でる。

アガリアレプトに二人の言葉を聞き取ることは出来ない。むしろ聞くつもりはないし、読唇術で読み取るつもりもない。

「——貴様らの息子を奪ってやろう。理不尽に、無様に、大切な者を奪われた私の痛みを知るがいい……ッ！」

これから殺す者たちが最期に何を話していようが関係ない。ただ殺す。出来るだけ惨たらしく、惨めに、死の元に晒け出す。

それが彼の復讐だ。悪魔の未来を勝ち取った英雄への復讐の始まりだ。

アガリアレプトは不気味に笑む。これでようやくスタートラインだ。一度諦めたこの復讐が、ついに果たされようとしているのだ。

「貴様らの弟を殺す役は『あれ』に任せた。最悪、『あれ』こちらに呼び寄せてもいい。弟の姿をした者に息子を殺されるといふものもまた滑稽か……？ククク………！」

この戦いも、リゼヴィムへの協力も、全てはこの瞬間のため。不気味に笑うアガリアレプトは静かに歩き始める。

彼の影は主の心に反応してか、元あつたヒトの形を崩していき、不気味に蠢き始める。アガリアレプトは目を血走らせながら、うわ言のように呟く。

「我が生涯の全ては、我が主のために………」
アガリアレプトは進み始める。

全ては復讐のため。裏切り者の罪を清算させるために――。

mission 13 死を纏う者

冥界の僻地にある採石場。かなり前までは稼働していたであろうそこにヒトの気配はなく、廃棄された機材や施設、巨岩が放置されていた。

俺とクリスはほぼ同時に飛び出していくが、あえて速度を緩めてクリスの影に隠れる。

「オラッ！」

先行するクリスが少年に拳を放つが、片手で止められた。

クリスは驚く様子もなく、空いている手で拳を止めた腕を逆に捕まえ、少年の動きを止める。

「ハアッ！」

クリスを飛び越え、落下の勢いのまま大上段から直剣を振り下ろす！

少年は片手でアロンダイトを掲げてそれを受け止める。

前回ならそのまま押し込めただろう。だが、今回は――。

「！片手で止めるか……！」

片手持ちのアロンダイトにあっさり止められてしまう。力を込めてもびくとねえ

!

俺はドラゴンの翼を展開してその場から離れ、クリスは腕を掴んでいた手を離すと肘に魔力を溜めていき、一気にそれを爆発させる！

爆音と共に少年に止められた拳が強引に振り抜かれ、少年の顔面に直撃した。クリスはその場から飛び退くが、拳を振って少し痛がつているように見える。クリスの横に着地し、真っ赤になつている拳に目を向ける。

「……大丈夫か」

「はい、何とか。凄まじい堅さですよ、彼」

下手な鉄板なら簡単に打ち抜くクリスの拳にダメージを与えるほど、か。相当な堅さだな。

パワーも前回とは比べ物にならないほど上がつているようだし、あの変態野郎に何かされたようだな。

俺は一度ため息を吐き、軽く右胸を搔く。

「核コアの気配が見えねえから、あの怪物とは違うんだろうが。いかんせん、よく見えねえ

「……」

「見えない、ですか？」

俺の言葉にクリスが首を傾げる。

俺は一度頷いて軽く説明する。

「どうにも、気の流れとか生命エネルギーを探ろうとすると、全体的に霞がかって見えるんだよな。おかげでよくわからん」

「弱点がわからないと」

「その通りだな。まあ、わかったところで狙うつもりはねえが」

直剣に込める魔力を増やし、姿勢を低くして構える。

「力で負けるなら手数で勝負だ。クリス、フォロー頼むぞ」

「了解です」

アリスが飛ばした回復のオーラで拳を治療されたクリスは、再び拳を握り、魔力で先程よりも厚くコーティングを施していた。

「……作戦は決まったか？」

血走った目でこちらを睨み、こちらに歩み寄って来る少年。前回に比べて、随分と迫力が増したように思える。

俺とクリスがゆっくりと息を吐き出して構えた瞬間、少年の姿が消える！

クリスはほんの一瞬驚愕するが、俺は素早く振り向いてアロンダイトの振り下ろしを受けとめる。

凄まじい重さで体を一気に沈み込ませるが、膝をつくことは避けた。

だが、何て重さだよ……！前にやったときはここまでじゃなかっただろうが！

クリスが少年の腹に拳を放つが、怯みもしないし力が抜けることもない。

なんだ、俺が寝ている間にそこまで変わった、いや、変えられちゃったのか……！

歯を食い縛って無理やり押し返し、返した刃で少年の腹を斬りつける。

――が、服が斬れただけで本体には傷一つついていない。グレンデルほどじゃないが、相当堅いな。

俺は小さく舌打ちをし、クリスと共に後ろに飛び退く。

「さて、どうするか。殺すつもりでもちようどいいのかわからんぞ」

「……割りと殺すつもりだったんですけどね。どのくらいで打ちにいけばいいのやら……」

お互い困り気味に言うと、少年は不気味に笑む。

「そうか、安心した」

少年の言葉に同時に首を傾げる俺とクリス。

少年は俺たちのリアクションに構うことはなく、斬られた腹を撫でる。

「俺は、あんたよりも強いようだ」

清々しいほどの笑顔。戦闘中とは思えないそれは、本来なら違う時に、それこそ心から笑える時に浮かべるそれだ。

クリスがため息を吐く。

「マスターが彼を助けるって言った意味、何となくわかった気がします」

「……そうか」

俺たちは手短にそのやり取りを終え、直剣に込める魔力を増やす。殺さない程度でダメージを与えなければならぬというのは、実に面倒だ。

「さて、行くぞ……！」

「了解！」

俺が先行する形で動き出し、少年に斬りかかる。

少年はアロنداイトで真正面からそれを受け止め、俺を嘲笑う。

「この程度か！あの時のあんたはもっと強かったぞ！」

俺を強引に押し返し、体勢を崩したところにアロنداイトが振るわれるが、少年の脇腹にクリスの超低空の飛び蹴りが放たれる。

クリスの蹴りは少年の脇腹にめり込み、確実に内臓にも皮膚と肉越しに届いているだろう。

少年はそれがどうしたと言わんばかりにアロنداイトを豪快に振り抜き、思い切り踏ん張っていた俺とクリスを弾き飛ばす！

「チィ……ッ！何て出鱈目なパワーだよ！」

「ですが、聖なるオーラは弱い通り越してありませんね！ただの魔剣になっていますよ、あれ！」

足を地面にスライドしながら勢いを殺した俺と、体全体で受け身を取ったクリス。そこに回復のオーラが飛んできた。

少年の姿が消え、俺の眼前に現れると、オーラを迸らせたアロンダイトを振り下ろしてくる。

体を半身にしてそれをギリギリで避けると、アロンダイトのオーラは易々と地面を砕き、余波だけで採石場の岩の一つを叩き斬った！

直撃したらバラバラになるな、これは！当たらなければどうってことはねえか！

その場を急いで飛び退いた瞬間、少年が追撃に飛んでくる。

体捌きで避けながら直剣で受け流し、紙一重で捌いていく。速度も前とは段違い。下手をすれば一撃もらうかもしれないねえ……！

直剣とアロンダイトがぶつかり合い、火花を散らす。

そのままお互いに両手をそれぞれの得物に添えてつばぜり合いに突入した。こっちは歯を食い縛って耐えるが、むこうはまだ余裕が見え隠れしている。

これは、本格的に不味いかもしれねえな！

「あの、野郎……！」

そこにクリスが突っ込んでくる！

加速中に足の裏に魔力を溜めてそれを爆破、さらに加速に入って勢いのまま拳を打ち放つ。

少年は一切避ける素振りを見せず、クリスの拳を右頬にくらう。

「があ……っつ」

乾いた音と共に痛みで声をあげたのはクリスだった。

苦悶の表情になりながら放った拳を押さえてその場から離れる。

気にかけてやりたいのは山々なんだが、はつきり言つて余裕がない。気を抜いたら押し切られちまう！

「やはり、俺のほうが強い！あんたはもう雑魚だな！」

「ほざくな………！」

瞬間的に魔力を高めることで力の差をどうにか埋め、強引に押しきる。

体勢を整えられる前に直剣で全力殴打。少年を吹っ飛ばす。

斬れないのなら殴る。ダメージ自体はなくてもある程度の衝撃は通るだろう。

近くの岩場に頭から突っ込んだ少年は、全身からオーラを放つて近くの岩を全て消し飛ばしながら立ち上がる。

パッと見た感じではダメージはなさそうだ。まあ、これでダメージがあつたら苦勞な

いけどな。

盛大なため息を吐き、直剣の刃を撫でて欠けた部分を修復する。

少年は体や服についた埃を気にそぶりはなく、アロンダイトを杖のように地面に突き立て、拳を握りしめていた。

「この程度？あの時のあんたはもつと凄まじい強さだったぞー」

全身から深紅とどす黒い色のオーラを放ちながら、何故かキレ気味に怒鳴る少年。まるで予想と違うと言わんばかりだ。

あの時って、言われてもよく覚えてねえんだよ！自覚があるのは急に視界が真っ赤になった程度だ。もう一度やれと言われてもやり方がわからん！

ぶちギレていた少年は、後ろに下がったクリスト、あいつを回復中のアリサに視線を向ける。

「……あの時、そうか、そうすればいいのか」

ニヤリと笑い、少年がその場から消える。

俺はもはや反射と言える速度でその場を飛び出し、アリサたちの前に出る。

直剣をフルスイングで振り抜いた瞬間、少年の振るったアロンダイトとぶつかり合った。

「きゃー」

「ぐ……っ！」

後ろの二人は衝撃に襲われて吹き飛ばされ、地面に転がった。

「テメエ、狙うなら俺を狙え……！」

「まだ足りないか……」

睨む俺を他所に、少し残念そうに顔を俯かせる。

「リリスちゃん、危ないわよ！」

再び競り合いになった俺たちの耳にセラの声が届く。

目を見開いて驚きながら、俺はゆっくりとそちらに目を向けた。

「クリス！アリサー！」

セラに抱えられたリリスがじたばたと暴れながら二人の心配をしていたのだ。

少年はセラとリリスに目を向け、俺との競り合いを強引に止めるとそちらに向けて飛

び出していった。

「テメエ……！」

ありつたけの力を両足に込め、一気に飛び出していく！

景色が一気に流れていき、あっという間にセラとリリスの前に到着することが出来た。

俺は先ほど同様に少年の一撃に備えるが、俺の読みとは逆に少年は少し離れた位置に

立っていた。

アロンダイトを天を突くように高々の掲げ、深紅と黒のオーラを迸らせる。

完成したのは巨大な柱だった。こちらを塵一つ残さないであろうほど、強烈なオーラが込められている。

「——あんたに受けきれるか？」

少年の呟きと共にそれがこちらに倒れこんでくる！

セラを抱えて避けるにしても、範囲から逃げ切れるかが微妙なところ。それ以前に位置的にクリスとアリサが巻き込まれる。

——相殺しきれるか……？

ほんの一瞬の思考。いや、答えなんて最初から決まっている。

「——やれなきや、死ぬだけだ！」

叫ぶと同時にオーラを一気に解放。直剣にありつたけのオーラを込めて柱に叩きつける！

俺のオーラと少年のオーラがぶつかり合い、スパークを起こす。だが、こちらが少し押されているのは明らかだった。

歯茎から血が出るほど歯を食い縛り、地面にめり込むほど両足を踏ん張ってどうにか押し返そうとする。

俺の踏ん張りを嘲笑うように、少年はさらにオーラを込め始める。

このままいけば死ぬかもしれない、押し返せないかもしれない。そんなことどうだつていい。

——何が何でもこいつらを守る……！

『——まったく、貴様は変わらん』

『！今忙しいんだよ、黙ってる！』

『ロイ!? どうしたの!?!』

突如として頭の中に響いた声に怒鳴る。このタイミングで声をかけてくるとか、ふぎけてんのか!? あと、セラは心配してくれてありがとう！

俺に憑く怨念たちが言う。

『まあ、聞け。単刀直入に言おう。手こずっているようだしな、貴様に力を貸そう』

『すまん、何て言った!?!』

何かこいつらの口から信じられない言葉が聞こえたぞ! 力を貸そう? どういうことだよ!?

困惑する俺を他所に、こいつらは勝手に納得したように言う。

『うむ、百聞は一見にしかずだな。いくぞ!』

怨念たちがそう言った瞬間、柱がこちらに倒れこんできたのだった——。

「こんなものだったか……」

勝ちを確信し、残念がりながらも笑みを浮かべていた。

——ロイを殺すこと。それが自分の存在価値であり、産まれた理由。

少年が信じて疑わない信念。いままさに、それが果たされた。

踵を返してアガリアレプトに合流しようとした瞬間、ロイたちがいた場所から黒い炎の柱が発生した！

「！」

少年は驚きながら振り返る。彼の視線の先にいたのは——。

「な、なんか変な気分だな……」

黒い炎をその身に宿し、両瞳は深紅に染まり、右目から首にかけて血涙のような赤いラインが三本現れ、それは右腕を通って右手まで伸びているロイの姿だった。

赤いラインは腕の途中で枝分かれしているのか、右手に浮かび上がるラインの各指に

絡み付くようになっていた。

ロイは右手の感覚を確かめるように開いたり閉じたりすると、後ろに振り向く。

「おまえら、無事か？」

「ええ、何とか……」

「へいきー！」

「し、死ぬかと思った……」

「大丈夫です〜」

ロイは少年に構うことなく四人の無事を確認していた。

「……バカな！今の一撃、確実に当たったはずだ！」

「当たる瞬間に相殺しきれただけだ。急に力がみなぎるって、変な気分なんだな……」

右手の平を眺め、そのまま少年に向ける。

その瞬間、少年はもはや反射的速度で反応するとその場を飛び退く。

少年が飛び退いた途端、ロイの手のラインが輝き、滅びの濁流が放たれる！

少年は目を見開き、ロイに目を向けた。

放った本人であるロイ自身も、驚いたように右手と抉られた地面に目を向ける。

「……加減できねえな、これは」

右手の感覚を確かめ、特に意味はなく鎌を作り出すロイ。

深紅の刀身は黒い炎が燦り、不気味に輝く。

「あれ？マスタ―って、鎌使ったことありました？」

彼の後ろに駆け寄ったアリサが問いかけた。

ロイは自身で作り出した鎌を眺め、さも当然のように頷く。

「逆に鎌を使ったところ、見たことあるか？」

「ないわね」

「ないですね」

「ないです」

「ある！」

首を横に振るセラフォルーたちだが、リリスだけが頷き、ロイは笑む。

「何でかわからねえけど、使い方がわかるし、妙に手に馴染む。何でだ？」

『過去、貴様が殺した者たちの技術を、ある程度だが再現させる。鎌が手に馴染むのは我らの中に多数の死神がいるからだ。殺した者の魂を喰らうとは、罰当たりな存在だな』

赤いラインが点滅し、男の声が周りに届く。

驚愕する一同をよそに、ロイは関心したように何度か頷く。

「なるほど。いや、よくわからねえけど……」

『うまくやれ。使い方はわかるだろう？』

「ああ。まあ、何となく」

ロイは前に出ながら鎌を器用にクルクル回し、構えを取る。

少年はアロンダイトを構え、ロイの動きに注意を傾ける。

ロイが音もなく飛び出し、地面を滑りながら少年に急接近していく。

鎌を回転させ、遠心力に乗せた速くも非常に重い斬撃が連続で少年に襲いかかる。

少年はアロンダイトでそれを捌き続けていくが、ついに右腕に一撃貫つてしまう。

「ツッ」

突然の激痛に歯を食い縛り、表情を険しくさせる少年。

斬られただけならまだしも、刃に燻る黒い炎で傷口を焼かれ、さらに傷を酷くさせられたのだ。

少年は飛び退き、傷口を押さえる。

「なぜだ！俺はあの時よりも強くなった！それなのに！」

滅びの糸で傷口を縫い止め、再び飛び出していく少年。

ロイは鎌を籠手に変えて両腕に装着。ゆっくりと息を吐きながら重心を落とし、右腕を引く。

「強さの意味は一つじゃねえ。それに——」

少年が放ったアロンダイトの一撃をギリギリで避け、無防備な腹に渾身の拳を叩き込

んだ。

「——意味のない力が、強いわけねえだろうが！」

右拳を引き戻し、腰を捻りながら力を乗せ、左拳を少年の顔面に叩き込む！

快音が採石場に響き、少年は吹き飛ばされていく。勢いがなくなり始めると地面を転がっていき、止まる頃には仰向けに倒れこみながら、脳が揺れたせいかわろになつた瞳で空を見上げる。

今のたつた数十秒ほどの攻防で相当消耗したのか、肩で息をするロイ。だが、闘志はまだ消えていない。

「何で強くなろうとしたのかは知らねえが、おまえはまだまだ弱い」

体勢を直立に戻しながら右拳を握り、左手を右手首に添えると、不敵な笑みを浮かべた。

「——今のままじゃ、俺には勝てねえよ」

ロイの挑発とも取れる発言を受け、少年はフラフラと立ち上がる。

黒い炎に焼かれたためか、顔の皮膚がいくらか爛ただれているが、瞳には再び闘志が宿り始めていた。

同時に、ロイの中にある何かが始まる。

現在体に燻る黒い炎とも違う何か。これにだけは吞まれてはいけない、憎悪という感

に変わり、臀部からは同じく赤い鱗に包まれた尻尾が生えていた。

異形のものとなった右腕は手の甲が怪しい深紅の輝きを放ち、それが肘のほうへと細くなりながら伸びていく。

それとは対象的に、手の平はくすんだ黒い鱗に包まれ、それが肘の内側に伸びていく。アロンダイトは左腕と一体となり、有機的なフォルムへの変化し、不気味に脈動を続けていた。

両方の瞳は爬虫類を思わせるものへと変わり、瞳孔が縦に裂け、純粹な殺気を放ちながらロイを睨む。

この世のものとは思えない怪物に、ロイは悲哀の色を込めた瞳を向ける。

「待ってる、少年」

『カカツテコイ』

籠手だけでなく脚甲も同時に装備し、その場で何度か軽く跳んで緊張をほぐすと構えを取る。

怪物は姿勢を低くし、両足を肥大化させながら力を溜めていき、同時に左腕アロンダイトに血液と共にオーラを込めていく。

「――必ず助ける!」

『――カナラズコロシテヤル!』

二人は同時に動き出し、ロイの拳と少年の左腕アロンダイトがぶつかり合う。片方は己を呪うはずの死を纏い、目の前の怪物しよんねんを救うために。片方は怪物に成り果てても、目の前の男ロイを殺すために。

mission 14 父として

ロイと怪物と成り果てた少年の戦闘が始まり数分。

採石場だったその場所にはいたるところに切り傷やクレーターが生まれ、もはや見る影もなかった。

「フッ！」

『ガアアアッ！』

深紅の軌跡を残すロイの回り蹴りと、空間を削り取るほどのオーラが込められた少年の尻尾の一撃がぶつかり合い、周囲のものを吹き飛ばしながら地面にクレーターを穿つ。

『オオオオオオッ！』

アロンダイトが一体化した左腕を振り回しロイを攻め立てるが、彼は全てを的確に避け、カウンターで脇腹に拳を叩き込む。

硬いものを殴る鈍い音と、ものを焼く音、それを証明するように生物が焼ける臭いと煙が少年の脇腹から漏れる。

ロイは追撃はせず、一旦その場を離れる。それと同時に彼がいた場所にアロンダイト

が振り下ろされ、地面を抉る。

ロイが空中で籠手と脚甲を解除、弓と矢を生成するなかで、少年が腰を回しながら左腕を大きく左に振りあぶる。

ゆつくりと息を吐きながら弓を引き絞り、呼吸を止めると同時に放つ。

空間を抉りながら飛ぶそれは、少年の顔面に直撃する。

だが、少年は怯まない。顔の鱗が焼き爛れても、即座に再生していくのだ。

ロイは表情が一瞬驚愕の色を帯びた瞬間、少年が左腕を振り抜く。

異常なまでの靱性を持った左腕は鞭のようにしなり、急激に長さを伸ばしながら振り抜かれた。

しならせたことによつて乗った強力な遠心力と、並外れた腕力が生み出したその一撃が、凄まじい速度でロイに迫っていく。

ロイは空中で上体を後ろに反らすことで紙一重で避け、次の矢をつがえる。

引き絞りながら矢の先端をドリル状にすることで貫通力を底上げし、それを放つ。

『ツ！』

今度は危険と察知したのか、少年は首をかしげて避ける。だが、矢に削り取られた空間に巻き込まれた頬の鱗が剥がされ、微量の出血を強いる。だが、それもすぐに癒えてしまう。

ロイは地面に降り立つと弓を消して槍に変え、それを右手に握りながら姿勢を低くし、両足を力を含めながら左手を地面につける。

「フウウウ……」

ゆっくりと息を吐き、それを止めると同時に飛び出していく。

一步を踏みしめるごとに地面を砕き、三步目を踏み込んだと同時に跳躍、槍を回して逆手に持ちかえる。

槍から禍々しいほどの深紅のオーラが迸り、それに混ざって黒い火の粉が舞い踊る。

「ツラア！」

気合い一閃と共に槍を放つ。

流星のように鮮やかな深紅の軌跡を残しながら突き進むそれは、

『フンツ！』

少年の放った右拳で完全に粉碎された。

だが、槍は拳がぶつかった瞬間に爆発し、少年の視界を塞ぐ。

アロンダイトを振り回して煙を払い、周囲を警戒する少年だが、ロイの姿が見当たらない。

その瞬間、少年の足元の地面が砕かれ、ロイが飛び出してくる！

同時に放たれたアッパーカットが少年の顎を捉え、体を地面から浮き上がらせる。

空中で体を回転、その勢いを乗せた蹴りを少年の腹部に叩き込む。――が、その一撃は刹那的に反応した少年の右手で受け止められる。

少年は怪物とに成り果てた顔でニヤリと笑い、浮き上がった体を急降下させてロイを地面に叩きつける。

「チィ……っ！」

ロイは小さく舌打ちをするが、少年は素早く彼の足から手を離して頭を掴み直すと、そのままロイを地面に叩きつけたまま超低空飛行で採石場を飛び回る。

地面とロイが擦れあい、地面が急速に削られていくが、少年の腹に強烈な衝撃が走る。それが二度続き、三度続き、寸分の狂いなく同じ場所に放たれた四度目の何かは、少年の鱗を砕いてダメージを体の芯まで届かせた。

『ガア……ッ！』

たまらずロイを手離すが、勢いは止まらずにロイは地面を削りながら数十メートル滑っていく。

勢いがなくなり始めた頃を見計らって後転の要領で体勢を建て直し、立ち上がる。

彼の右腕には、手甲部分に杭のようなものが仕組まれた籠手が装着されており、そこに少年の血が付着していた。

「いっつ……っ。って、服がボロボロじゃねえか……」

体には多少の擦り傷が出来ている程度で、戦闘不能になるほどの重症にはならなかった。

地面を引きずり回される程度では、ドラゴンと悪魔のハイブリッドとなっていて彼にはそこまでダメージを与えることは出来なかったようだ。

本来なら特殊な素材で作られた彼の服もその程度でボロボロにかかるわけもないのだが、今まで散々酷使され続けた結果傷みきり、強烈な摩擦熱がトドメとなつて背中部分が焼き爛れてしまったのだ。

ロイは一度ため息を吐くともはや前掛け状態の上着を破り捨て、旅の中で鍛えぬかれ、無駄な贅肉の一切が削ぎ落とされながらも、旅の道中の戦いの激しさを物語る傷跡だらけの上半身が丸見えとなる。

右目から伸びる赤いラインも見えるようになり、腕だけでなく、右胸にも伸びており後ろから恋人の荒くなった鼻息が聞こえてきたが、無視して籠手の杭を消して左手に籠手を、両足に脚甲を生成し直す。

少年は撃ち抜かれた腹を押さえ、歯を食い縛る。

すぐに治るはずの傷口は、焼かれたことで無理やり塞がれ、再生しきれていない傷口からは粘性の高い黒い血が垂れ流されていた。

ロイはその傷口を一瞥し、重心を落として右拳を引く。

ロイは瞬時に籠手を直剣に変え、膨大な魔力を込めながら左脇に構えた。

『コロスッ!』

少年の怒号と共に再びアロنداイトが振り下ろされた。

ロイはゆっくりと息を吐き、少年の一撃に対してカウンターとして、直剣を振り上げる!

肉が断ち切れる鈍い音が周囲に響き、一拍開けて地面に一本の魔剣が突き刺さる。

『……グ、オオオオオオオオオオオオオオ!?!』

少年のアロنداイトを内包した左腕が切り裂かれ、断面からどす黒い血が吹き出す。

返り血で顔の左半分を黒く染めながら、ロイは少年の左頬に飛び上段回し蹴りを叩き込んだ。インパクトの瞬間、脚甲から魔力を噴射させてさらに勢いを乗せ、ダメージを上乗せする。

快音と共に少年は吹き飛ばされ、水切りの石のように地面を何度も跳ねていく。

だいぶ間合いが開いたことを確認し、ロイは鼻血を拭って目を閉じて集中。少年の氣の流れを探っていく。

怪物に変容したことで左腕がなくなったことで氣の流れが乱れに乱れているが、極限まで集中して彼の核コアを探る。

狙うはその一点。次の一撃でそこを潰し、体が消える前にある物を少年の体内に振じ

込む。

成功するかはわからない。むしろ、少年が死ぬ可能性のほうが高いだろう。だが、救うためにはこの手しか思い浮かばなかった。

成功したとしても、その後は問題が山積みとなるだろう。面倒だが、少年の命が救えるのなら安いものだ。

『キミは変わらないね。面倒臭がりなくせに、自分からそれに飛び込んでいく。悪い癖だ』

いつかに兄に言われたことを思いだし、思わず苦笑する。

「――俺は面倒が嫌いだ」

誰に言うわけでもなく独白する。

右手の上にある物――『イェツイル・ピース悪魔の駒』、その中の騎士ナイトに当たる駒を取り出した。

ロイが持ったただ一つの『ミューテーション・ピース変異の駒』であるそれを、ロイは少年を救うための切り札として取り出したのだ。

少々強引な手になるが、少年を『怪物』から『悪魔』に転生させる。そうすれば、最悪命は助かるだろう。

その後、はぐれになるか、眷属になつてくれるのか、それは少年次第。前者になる可能性がはるかに高く、そうなったら面倒なことこの上ないが、気にはならない。

「だが、目の前で誰かが死ぬのはもっと嫌いなんだ」

——面倒以上に誰かの死を嫌う。

それがロイの本質だった。

前世では無心で人を殺し続けた結果か、まともな心をもった今世で、前世で犯してきた罪と、三大勢力の戦争で殺し続けるなかで無意識下で罪悪感に襲われていた。

その結果が、あの死を望む俺だったのだろう。

敵だから。そんな単純な理由で、一方的に相互理解不能と決めつけて殺していく。

だからこそ、いつかにセラフォルーの言った夢が彼の支えになった。

——彼女がいなければ、俺は変われなかった。変わろうともしなかった。

手元の直剣を消し、再び両腕に籠手を装着する。

——片目が潰されようが、片腕がなくなろうが、限界をとづくに越えていようが、毒に犯されていようが関係ない。救える命があるのなら、例えもがれようと手を伸ばす。

それが自分の贖罪の道なのだろう。

敵にも手を伸ばすのは難しいことだ。『一を救う』ために、『十を、百を殺す』ことにもなるだろう。

それでも、たった一人だけでも構わない。誰かを守るために戦いたい。

ロイは核の場所を探り終え、目を開くと共に少年が立ち上がる。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

少年の咆哮が響き渡り、同時にロイに向けて右手を伸ばした。

同時に本来の右腕の数倍はある、滅びで形作られた手がロイに向かつていく。

避けることは容易い。だが――。

ロイは小さく首を回して後ろを見る。

彼の背後にはセラフォルーたちがおり、少年の攻撃を避けるわけにはいかない位置にいた。

少年はそれを込みで放ってきたのだろう。俺のことをよくわかっていやがる。

ロイはそう思いながらため息を漏らす。同時に巨大な手に体を掴まれ、そのまま体を天高く持ち上げられる。

少年はそのまま彼を頭から地面に叩きつけようとするが、

「待っている、少年」

眩きと共に全身から放たれた滅びのオーラで巨大な手を消し飛ばし、体勢を整えて地面に降り立つ。

『…………オオオオオオオオオオオオオオオオ!』

不意打ちの一手をあつさりど防がれるが、それでも少年はロイに向かつていく。

ロイはゆっくりと息を吐いて右手の籠手に『イ・ウ・イル・ヒース悪魔の駒』を仕込み、左手を抜き手に構

えて直立のまま脱力していく。

少年は助走の勢いのままロイに向けて右拳を放つ！

『ッ！』

「——ッば……！」

避けることは容易いだろつ。だが、ロイは避けなかった。

少年の拳が腹を貫き、ロイは大量の血を吐き出す。

血を吐きながらも、ロイは優しく笑みながら少年の頬を撫でる。

「……少年。まったく不器用にもほどがあるぞ。この生き方しか出来ない、この生き方しか知らないつてよ」

まるで親が子に言い聞かせるように優しい声音で、少年に告げながら彼の肩に手を置いた。

「——俺もヒトのこと言えないが、俺でもここまでなれたんだ。おまえだって、まだ変われるさ」

そう告げた瞬間、一切の躊躇いなく、ロイは左腕を少年の胸に突っ込む。

『ガッ………!!?』

少年にとっての心臓コアに当たる部分を掴み、一思いにそれを引き抜いた。

同時に少年の肩に置いた右手が深紅に光輝き、ロイと少年を包み込んでいく。

光が晴れ、そこにいたのは二人の男。

元の姿に戻った少年は仰向けに倒れ、その拍子に右腕がロイの腹から抜ける。

ロイは倒れる少年を抱き止め、そのままゆっくりと地面に寝かしつけた。

「俺はなんだ……………」

「……………そうだな。おまえは」

ロイは顎に手をやって考え込むと、苦笑した。

「ツヴァイツてのはどうだ？ 『ツヴァイ・グレモリー』。俺のクローンだ」

「俺が、あんたの……………？笑わせる……………。俺はあんたを殺そうとしたんだぞ？」

ロイは片ひざを立てながら座り込み、大きめのため息を吐いた。

「それがどうした。それはおまえがそうする以外に何も知らなかったからだ。これから色々なことを知ればいい」

「……………あんたは、バカだな」

「自覚はある。お互いさまだろうが」

ロイが笑むと、少年——ツヴァイも不器用に笑みを浮かべた。

「ロイイイイ！大丈夫!？」

「マスター、動かないでくれない！すぐに治療します！」

「クリス、はやく！はやく！」

「わかったから、髪の毛引つ張らないでくれ……」

駆け寄ってくるセラフオルと眷属二人、リリスを眺めつつ、ロイはツヴァイに言う。「話は後でゆつくりと、だな。これは、かなりしんどい……」

貫かれた腹を撫で、たまらず息を漏らす。痛みをあまり感じないのは怨念たちの仕業か。

「そうだな。俺も、この体に馴染みきつてはいらないようだ」

ツヴァイはそう言うのと、目を閉じて寝息をたて始める。

ロイは苦笑し、セラフオルたちに手を振る。

「早く治療して！早く！」

「は、はい！マスター、動かないでくださいね」

アリスは回復のオーラをロイの腹部に当て、傷を癒していく。

それに当てられながら、クリスの肩から飛び降りたリリスがロイに飛び付く。

「ロイ！」

「お待たせ、リリス。とりあえずひとつは解決だな」

リリスを頭を優しく撫で、そう告げた。

そう、まだひとつだ。問題はまだいくつか残っている。

傷痕も残さず腹の穴が塞がったことを確認したロイは、左腕前腕部がなくなったツ

ヴァイに目を向ける。

「……こいつの治療も頼めるか。今は俺の眷属だ」

「りよ、了解です！ って、眷属!？」

「このマスター似の少年が、同僚ですか。まあ、俺はマスターの判断を信じますよ」

ふと、ロイは自分の右腕を顔の前に持ち上げて見つめた。

血管とも違う深紅のラインが腕や指を這いまわり、薄く発光していた。

「……これ、いつになったら消えるんだよ」

『さあな。燃え尽きるまで待て』

怨念たちの軽い返答にため息を漏らすと、セラフォルの耳元に連絡用魔方陣が展開される。

「あら、アジユカちゃん、どうしたの？ こっちはどうにか——え？ そんな！」

「どうした……」

ズボンのポケットからタバコを取り出し、火をつけて一服しながらセラフォルに訊く。

「……グレモリー屋敷が襲撃を受けたそうよ。襲撃犯は例の男——アガリアレプトよ」

タバコを投げ捨て、立ち上がる。

先ほどまで浮かべていた優しげな表情は鳴りを潜め、再び冷徹なものへと変わってい

た。

「……行くぞ。クリスはこツヴァイとリリスを頼む」

「了解です。アリサ、へまするなよ」

「わかってますよ！何であろうがドンと来いです！」

「セラは戻っていてくれ。魔王が最前線つてのは体裁が悪いだろ」

転移場魔方阵を展開しつつ、それに便乗しようとしたセラフォルーに釘を刺す。

「リリスもいくの！」

必死に剥がそうとするロイに抵抗し、ぎゅつとしがみつきながら言うリリス。

クリスに任せると言った手前、どうにかしようとしているのだが、なかなか引き剥がせない。

アリサがため息混じりに言う。

「……私が一緒に行動しますよ。早く行かないと」

「——だな。さっさと行くか」

ロイは諦め、リリスを抱えたまま転移魔方阵にオーラを込めていく。

こんな形で帰宅することになるとはな……。

ロイは心中で呟く。

いつか必ず帰るためにも、その場所を守らなければどうにもならない。

「もう少しだけ、力を貸してくれ……」
右腕を撫でながら、ロイは静かに呟いた。

mission 15 終わらせる者

冥界グレモリー領土。グレモリー屋敷。

本来なら平和であろうその場所は、現在は戦場と成り果てていた。

「ルキフグスの裏切り者めが！どこに隠れたッ！」

アガリアレプトと、彼が召喚した犬を思わせる形状の怪物たちによる襲撃が行われたのだ。

アガリアレプトはイラつきながら、屋敷の玄関ホールで、柱や壁を魔力の波動で破壊していき、怪物たちは臭いを嗅ぎながら目標を探す。

「……アガリアレプト家に、生き残りがいたなんて」

物陰に身を隠し、ミリキヤスを庇いながら呟く。グレイファイア。

近くの物陰にはグレモリー夫妻の二人とメイドや執事が息を潜めていた。

セラフォルと並んで女性悪魔最強と名高いグレイファイアと、バアル家最強の女性悪魔であるヴェネラナの二人がいれば、上級悪魔を眷属ごと相手にしてもどうにかなるだろう。

だが、現在進行形で暴れている男は規格外。二人の攻撃でも大きなダメージを与える

ことは叶わなかった。

怪物が鼻を引くつかせると、グレイファイアが隠れている物陰のほうを向いて一度吠えた。

「そこかあつー！」

「ツー！」

グレイファイアは危険を察知してミリキヤスを抱えてその場を飛び退く。

一瞬後、二人がいた場所が盛大に爆ぜた。

再びグレイファイアとミリキヤスを視界に捉えたアガリアレプトは、邪悪な笑みを浮かべた。

「グレイファイア・ルキフグス。そしてその息子。貴様らの命をもって、我が主への贖罪を果たせ！」

二人諸とも吹き飛ばすため、魔力を溜めた右手を二人に向けるアガリアレプト。

それが放たれようとした瞬間、彼の右腕が消し飛んだ。

アガリアレプトは自分の右腕を消し飛ばした者——ヴェネラナを睨む。

「邪魔をするか、バアルの血統が……！」

肉が盛り上がり、すぐさま新たな腕が生えてきた。

「私の邪魔をするものは誰一人として生かしておかん！死ぬ！死んで我が主に詫びるの

だ！」

犬型の怪物たちがヴェネラナに群がっていくが、彼女の前に立つ男が一人。

「はッ！」

ジオテイクスが放った大量の魔力弾が怪物たちに当たり、次々と吹き飛ばしていく。アガリアレプトはイラつきを隠すつもりもなく、盛大に舌打ちをする。

そんな彼を挑発するように、ジオテイクスが不敵に笑む。

「グレモリー家の現当主として、妻と義娘むすめにばかり無茶はさせられないな」

ジオテイクスはそう言うが、怪物たちは吹き飛ばされた部位を再生させながら立ち上がり、グレモリー夫妻を取り囲んでいく。

前線を離れた久しいとはいえ、二人は戦争経験者だ。アイコンタクトもなしで背中合わせになると、怪物たちを睨んだ。

グレモリー夫妻に注意が向いた隙に、グレイフィアはミリキヤスをメイドたちに任せてこの場を離れさせる。

夫であるサーゼクスは、進軍中のリゼヴィムへの対応でここには来られないだろう。倒し方はわかっている。体のどこかにある核コアを破壊すればいい。どこにあるかもわからないそれを、今この場にいるメンバーでどうにかするしかない。

グレイフィアは短く息を吐き、グレモリー夫妻とミリキヤスが逃げた方向に目を向け

た。

三大勢力の戦争と、その後の悪魔勢力内での内戦で、彼女の一族は一人を除いて死に、残った一人は現在獄中だ。

だが、今は家族がいる。血の繋がりはなくとも、それ以上の繋がりを持った大切な家族がいる。

世界と家族を守るために死んでしまった義弟のぶんまで、家族を守らなければならぬ。

優しさを感じる母親の目から、冷徹な戦士の目に変わる。否、戻った。

瞬間、グレモリー夫妻を囲んでいた怪物たちが銀色の魔力に襲われ、核を吐き出す隙さえも与えられずに一瞬で消滅していった。

「義母様、義父様、下がっててください」

全身から銀色のオーラを放ちながら、グレイフィアは眼前の敵を睨む。

「――彼は私が倒します」

凜とした彼女とは対象的に、アガリアレプトは唾を飛ばしながら怒鳴り散らす。

「舐めるなよ、裏切り者風情が！今の私に勝てるものは、我が主以外にいるはずがない！」

アガリアレプトが叫ぶとともに、彼の体から瘴気が吹き出し、全身を包み込んでいく。

同時に肉の塊のような触手が生き残った怪物たちに襲いかかり、取り込んでいく。

『貴様が裏切った一族と、我が主に代わり、私が貴様を断罪する！死だ！死以外の罰が与えられると思うなよ！』

ノイズのような雑音と共に飛ぶ怒号。そして、アガリアレプトからどす黒いオーラが放たれた。

瘴気が晴れ、そこにいたのは一体の化け物。

全身を触手のようなものが蠢き、その表面の皮の全てが焼き爛れ、絶えず瘴気を放ち続けるそれは、化け物以外に形容しがたい、冒瀆敵な形だった。

『そう、断罪だ！裏切り者に死を！悪しき血統に終わりを！我が主を裏切ったこの世界に破滅を！』

脳内に直接響くアガリアレプトの怒号に、グレイフィアは冷静でありながら強い声で返す。

「終わらせません。この世界も、私の家族も、守ってみせます！」

『ほごくなああああああああああッ！』

瘴気をばらまきながら、化け物はグレイフィアに飛びかかる。

グレイフィアはその場を飛び退き、壁に開いた穴から外に飛び出していく。

化け物は彼女を追い屋敷の外への消えていく。

「グレイファイア！」

ヴェネラナが手を伸ばすが、彼女の横を一陣の風と共に深紅の軌跡が通りすぎていく。

懐かしくも、昔よりも力強くなった、二度と会えないはずの波動を感じ、彼女は彼の名を呟く。

「ロイ……?」

——ただいま。

彼女の呟きに、優しい声が答えた気がした。

グレモリー屋敷の中庭。

かつてはサーゼクスとロイの兄弟が共に鍛練を積んでいたその場所は、グレイファイアと化け物の戦いで見るも無惨な姿へと変わり果てていた。

『なぜだ、なぜ殺せない!? 私は貴様よりも強くなった!なのに、なぜだ!?!』

瘴気を放ちながら慟哭する化け物。

そんな化け物にグレイフィアは冷徹に告げる。

「あなたには何もありませんよ。守りたいものも、未来も、希望も……。それを奪ったのは私たちかもしれないわ」

『ならば——！』

「……せめて、おまえの主のところに送ってやるよ、アガリアレポート」

突如として響いた第三者の声。

一人と一体は同時にその声の主のほうに目を向けた。

彼らの視線の先には、なぜか余裕そうな様子でタバコを吹かしているロイの姿があった。

『馬鹿な！なぜ貴様がここにいる!?!』

「なぜって、そりゃ、少年を倒したからだろ?」

挑発するように、肩をすくませながら言うロイ。

紫煙を吐き出し、タバコを握りつぶす。

「次はおまえだ、化け物。義姉^{ねえ}さん、行けますか!」

「え、ええ。ロイ、なのね……?」

ロイの登場に驚いた様子のグレイフィアに、彼は首を傾げる。

「兄さんから聞いていなかっただんですか？まあ、突然飛び出して行った俺も俺ですけど……」

義姉弟がそんなやり取りをしていると、化け物が吠える。

大気を震わせる咆哮をものに受け、ロイとグレイフィアは耳を塞ぎ、その隙を見逃すはずもなく、化け物はグレイフィアに向かっていくが、

「——やらせると思おうか？」

ロイが瞬時に復帰すると共に動きだし、脚甲を装着。横から化け物の頭に当たる部分に蹴りを叩き込み、蹴り飛ばす。

グレイフィアが魔力を解き放ち、追撃の一撃を放つ。地面を抉りながら突き進むそれは、化け物の尻尾のような触手に受け止められる。

化け物はそのまま押し返そうとするが、再び飛び出したロイが魔力の塊にドロップキックを放つて後押しし、尻尾の防御の隙間に強引に振じ込み、塊を爆発させる。

爆発の瞬間に離脱したロイは、グレイフィアの横につく。

「まあ、並の生き物なら即死ですよ、間違いなく」

「あれが並の生き物ではないことは見ればわかります」

ロイはグレイフィアの言葉に苦笑し、化け物に目を向ける。

『この程度の痛みで、私が死ぬわけがないだろう！』

だよなと言わんばかりに息を吐く。

深紅のラインが這い回る右腕を一瞥し、輝きが弱くなっていることに気づく。色も少し薄くなっているようだ。

「あまり時間をかけていられないか。義姉さん、ソツコーで終わらせますよ」

「ええ、わかっています」

『舐めるなああああああつー!』

化け物は叫ぶと共に瘴気がばらまかれる。

瘴気でできた霧に包み込まれるなか、ロイが言う。

「あまり吸わないほうが良さそうですね。体に悪いですよ、これ」

——なら、あなたも喋らないほうがいいわよ。

呼吸を止めながら、グレイフィアはそんなことを思っていた。

何もしないよりはマシだとメイド服の端を破り、簡単なマスク代わりにして口元を覆う。

ロイの場合、吸い込んだ瞬間に体内で暴れさせている滅びの魔力で瘴気を消滅させることで事なきを得ているのだが、グレイフィアがそれを知るよしもないだろう。

グレイフィアの心配をよそに、ロイは目を閉じて集中していく。

狙うは一点。化け物の核^{コア}だ。そのためにもまずは、場所を探るところから始めるしか

ない。

化け物もそれは重々承知だ。彼のその行動を阻止するために化け物は動き始めた。た。

足の裏の触手を地面に潜ませ、地中から彼の首を狙う。

だが、それすらも読んでいたロイは、目を閉じたままその場で半身を取って首を狙った一閃を避ける。

同時にそれは終わった。

「頭の中か。脳ミソが核コアですね」

グレイフィアが一度頷くと魔力を溜め、ロイは指をゴキゴキ鳴らしながら籠手を装着、体勢を低くして突撃の姿勢に入る。

ロイが飛び出していこうとした瞬間、あることに気づく。

「いや、頭だけじゃない。胴体の中心と、尻尾の付け根にも——あわせて三つか……」
「その三つは全て同時に破壊しなければ駄目よね」

グレイフィアの問いに頷きで答える。

近ければ、あの男の技を借りて潰すことは出来ただろう。だが、位置が悪い。どうやっても、三つ同時に潰すことが出来ない。

ロイは体勢を楽にしながら顎に手をやり一瞬思索するが、ため息を漏らす。

化け物はもう少し粘ればいいが、ロイは一刻も早く勝負をつけなければならない。

ロイは短く息を吐く。

「……この際無茶は承知か。義姉さん、行きますよ。頭は任せます」

魔力を解き放ち、全身に深紅のオーラをたゆたわせながらグレイファイアに目を向ける。

グレイファイアの頭部の核コアの破壊と同時に、胴体と尻尾の核コアも潰す。魔力を脚部に集中させ、暴走させれば、限界を超えた最高速度が出せる。それで叩けばどうにかなるだろう。

……体が耐えられるかは別問題だが。

ドラゴンと悪魔のハイブリッドであるロイは、そう簡単なことでは死にはしないどころか、ダメージにすらならないだろう。

その体が耐えられるかもわからない速度を叩き出せば、離れた位置にある核コアの同時破壊も可能はずだ。

ロイはグレイファイアが何かを言い出すよりも早く、全身の力を抜き、両腕をだらりと垂らしながらスタンディングスタートの姿勢に入った。

全身の力を抜き、両足に魔力を込めて瞬間的に爆発させられるようにする。

『ぬおおおおおおおおおおおおおおおおー！』

ロイが攻勢に出ると見た化け物は叫びながら跳躍。天高く飛び上がると、二人に対して魔力弾による雨を降らし始める。

とつさにグレイフィアは前に出ると、ロイと自分を覆うように障壁を展開。次々と降り注ぐ魔力弾に耐える。

一発当たるとに凄まじい衝撃が伝わり、グレイフィアは片ひぎをつきかけて障壁が破られそうになるが、歯を食い縛って踏みとどまる。

化け物は歪みきつた口の端を吊り上げる。

魔力塊の雨を降らせながら、体の触手の先端を鋭利にさせて鞭のように振るう。

触手の一撃はグレイフィアの障壁を掻い潜り、身動き出来ない彼女に迫っていくが、

「ッー」

「——ロイ!？」

寸前でロイがその身を盾にして飛び出し、触手が彼の脇腹を深く切りつけ、軌道がズレてグレイフィアに直撃することはなかった。

「このくらい、問題ねえ……!」

片ひぎをつきかけて踏ん張るが、ダメージは確実に与えられたため、口の端から血が垂れる。

脇腹からも絶えず血が垂れていくが、傷口から吹き出た黒い炎で焼き塞がれた。ロイ

は眉ひとつ動かさなかったが、肉の焼けた臭いから察するに、文字通り焼いて塞いだの
だろう。

口許の血を拭い、もはや火傷になっている脇腹を押さえる。

「……存外ヤバイかも」

ロイは苦笑するが、グレイフィアは気が気ではない表情に変わる。

「ロイ、大丈夫なの!？」

「血は止まりました。まだ行けますよ」

化け物は地面に降り立ち、ロイを睨む。

『貴様、化け物か……!?!』

「おまえに言われたくねえよ。さて、どうするか……」

傷口を塞いだせないなのか、右腕の輝きは余計に小さく弱くなっていく。

次の一撃が最後なのは確実。だが、一撃では奴を殺しきれない。

化け物が再び触手を蠢かせ、ロイとグレイフィアに矛先を向け、二人を貫こうと一気に飛び出していく。

回避しようとした二人の後ろから複数の深紅の球体が飛び出し、次々と触手を呑み込んでいく。

突然の事態に驚愕する二人をよそに、背後から声がかけられた。

「まったく、無茶をするね。ボロボロじゃないか」

『貴様は……!』

怒りをあらわにする化け物をよそに、二人は振り返り、声の主を見る。

「兄さん!」

「サーゼクス!」

「やあ、無事でなによりだ」

驚く二人を半ば無視する形で、サーゼクスは笑みながら気軽に片手を挙げた。

化け物はサーゼクスを睨み、興奮した様子で触手を逆立てる。

『そちらから出てくるとはな、偽りのルシファーめが!』

サーゼクスの表情が冷酷なものに変わり、化け物を睨む。

「アガリアレプト。ルシファーとして、貴様を冥界の敵として滅しに来た」

『私の前で、ルシファーを語るなあああああ!』

化け物は触手をサーゼクスに向けて放つが、彼の操る滅びの球体で次々と滅してい

く。

消し飛ばされた触手は再生を始めるが、今までになく遅い。

『ツ!なぜだ、なぜ治らない!?!』

同様する化け物に、サーゼクスは球体を手元に寄せながら不敵に笑む。

「アジユカが対抗術式が大方完成してね。効果があるかを確かめさせてもらったわけだが、問題なさそうだ」

滅びとはまた違うオーラを纏う球体に、化け物はたじろぐ。

ロイは息を整えると手元にナイフを作り出し、サーゼクスの横につく。

「あいつの核は三つあるのは確認した。頭部と腹部、あとは尻尾の防御付け根。その三つを同時に潰さねえとおそらく殺しきれねえ」

サーゼクスが頷くと、グレイフィアが彼の横についた。

久しぶりに揃った三人を見て、ロイは笑みを浮かべた。

「兄さんが腹、義姉さんは尻尾を頼みます。俺は陽動してから頭を潰すので、少し待っていてください」

二人が頷いた瞬間、ロイは音もなく飛び出していった。

化け物は反応するが、全てが遅い。体のいたるところを斬られ、傷口を焼くことで再生を妨害する。

腹と尻尾の付け根の核が露出するほど斬られた瞬間、ロイは高速で動き続けながら二人に目を向けた。

瞬間、サーゼクスとグレイフィアが動き出す。

サーゼクスは滅びの球体を操り、グレイフィアは溜めに溜めた魔力を手元を集める。

ロイは右手に握るナイフを籠手に変え、指を全開にしながら鉤爪のように曲げる。

化け物が触手を振り回して抵抗を始めるが、ロイは被弾お構いなしに懐に飛び込む。そして――、

「ハッ！」

「これで終わりだ……！」

夫婦がまつたく同時に攻撃を放った瞬間、ロイは籠手に包まれた右腕を化け物の頭に振り込んだ！

『――わ、私は…………！』

化け物が苦しげに声を漏らすなか、ロイは化け物の目をまつすぐ睨む。

「おまえの苦しみは察するよ。だがな――」

ロイが核コアを引き抜いたと同時に、夫婦の放った魔力塊コアがそれぞれの核を破壊した。

化け物がピクリとも動かなくなるなか、ロイの手元には怪しく点滅する化け物の心臓コアが残されていた。

ロイは化け物を睨みながら告げる。

「――俺たちにも譲れないものがある」

ロイは心臓コアを握りつぶし、その血で顔の右半分を汚した。

それに構うことなく、ロイは静かに告げる。

「——たとえ何を殺したとしても、何を壊されたとしても、守りたいものがあるんだよ」
ロイがそう告げたとともに、化け物はヘドロへと還つていく。

完全にヘドロへととなる前に、化け物はどこかに遠い場所に向けて手を伸ばした。

『——ああ……我が……主よ……。今……そちらに参ります……』

近くにいるロイの耳にだけ届く声で、アガリアレプトは満足そうに呟いた。

どこかへと伸ばされた腕はヘドロとなり、重力に従つて地面へと落ち、急速に崩壊を始めた体もヘドロへとなつていった。

「……俺たち悪魔は死んでも無になるだけだろうがよ。まったく」

ロイが呟いたと共に右腕の輝きが消え、一気に脱力した彼は倒れこむ。

「ロイ、大丈夫かい！グレイフィア、彼の眷属がこちらに来ているはずだ！彼女をここに呼んできてくれ！」

「わかつたわ。ロイ、気をしっかり保つのですよ！」

グレイフィアはサーゼクスの指示に従つて屋敷の方へと戻つていく。

「……ちよつと、無理をしますがたか……？」

「とりあえず、しばらく休むといい。リゼヴィムはこつちで何とかするよ」

ロイが安堵の表情で小さく頷くと、

「ロイ——だいじょうぶ？」

彼に向けて駆けてくる少女——リリスと、その後ろを走るアリサに目を向ける。

サーゼクスの手を借り、ロイが無理をしながら立ち上がったその時だ。

《——ようやく、このタイミングが訪れたな》

一陣の黒い風がリリスに襲いかかり、彼女を拐う。

ロイたちがリリスを拐った者を睨んだ瞬間、その者は気絶した様子のリリスを抱えながら優雅に一礼する。

そんな行動とは裏腹に、邪悪を孕んだ声音で死神は告げる。

《私は冥府に属する最上級死神ゼクロムと申します。魔王ルシファードの、我が主、ハ—
デス様のお言葉を聞いていただきたい》

。眼球のない双眸には、怨敵を睨む絶対的な敵対者としての輝きだけが灯されていた—

卒業式のアポカリプス

sinol 冥府へ

《私は冥府に属する最上級死神ゼクロムと申します。魔王ルシファー殿、我が主、ハーデス様のお言葉を聞いていただきたい》

アガリアレプトを討伐したロイ、サーゼクス、グレイフィアの三人と、その場に駆けつけたアリサの四人にゼクロムはそう言い放った。

彼に囚われたリリスを助けようと、ロイは飛び出そうとするがサーゼクスに手で制される。

「ゼクロム殿。まずは、なぜあなたがこの場所にいるのかをお聞かせ願いたい」

サーゼクスはあくまでも冷静に問いかける。

ゼクロムはその身に纏う敵意を隠すことなく、鎌の刃をリリスに突きつけながら彼に返した。

《テロリストの首魁——オーフィスがこの屋敷に現れたと聞かされ、急いで参った次第でございます》

本来のオーフィスは兵藤家にいるのは関係者にのみ知らされ、対外的にはリリスが

オーフィスということになっていく。

ゼクロムの言葉だけを取れば、テロリストのリーダーを捕らえに来たということだ。サーゼクスは質問を続ける。

「では、この屋敷の周辺に張られた結界はどうやって抜けてきたのか、説明をしていただきたい」

《オーフィスに破られておりましたので、機能しておりませんでした。まあ、これは後ほど説明すれば良いかと、無視させていたいただきましたが……》

表向きは申し訳なさそうに告げるゼクロム。

実際に破ったのはアガリアレプトであり、リリースではないのはサーゼクスたちはわかっている。

彼はロイに目を向け、顎に手をやった。

《……ですが、戦死なされたはずのロイ・グレモリーが生っており、その彼がオーフィスを匿っていたとは。この事はどう説明されるおつもりですか？》

サーゼクスは心の内で舌打ちをした。

目の前の死神は、いや、彼に指示を出したであろう冥府の神は、何かなんでも悪魔を排除したいようだ。

《テロリストの首魁を、『D×D』に所属する悪魔が匿っていた。この事実を、明確な条

例違反であり、裏切り行為として、我々冥府は冥界政府を告発いたします。ハーデス様はそうお考えです》

そのような理由で現政府を責め立て、和平に同調してくれた勢力からの信頼を失墜させ、悪魔を世界から孤立させ、衰弱させていく。

回りくどいが、確実に悪魔の力を削いでいくつもりのようなだ。冥府の神は、ずいぶん辛抱強いものだな。

サーゼクスは小さく息を吐き、答えようとした瞬間、

グシャ……………！

「……………え？」

彼の胸を、深紅の刃が貫いた――。

「サーゼクス！」

グレイフィアの叫びへの返答は、サーゼクスの血となって口から吐き出される。

サーゼクスを背後から貫いた男——ロイは邪悪な笑みを浮かべ、サーゼクスを蹴り倒す。

その勢いでサーゼクスに刺さっていた直剣が抜け、その刃は血に濡れていた。

グレイフィアだけではなく、アリサもパニツクに陥るなか、彼女らを追いかける形でグレモリー夫妻がその場に駆けつける。

同時に二人は驚愕の表情を浮かべ、倒れるサーゼクスと、血濡れの直剣を握るロイを交互に見つめる。

《貴様、とち狂ったか！ 実の兄を……！》

流石のゼクロムも、ロイの行動に憤りを見せる。

アガリアレプトの襲撃に合わせグレモリー領に侵入し、リリスを拐う。そして彼女を庇い続けたロイ・グレモリーを元に、悪魔政府の弱味を突きつけ、ロイが彼女を救出に来ないように仕向ける。

彼の仕事はたったそれだけだった。そのはずなのな、肝心のロイがサーゼクスを刺したのだ。

ロイは肩で息をしながら髪をかき揚げ、清々しいほどの笑みを浮かべた。

「……ようやく、我々の目的が達成された。カエレア様、ご覧になりましたか？ ついに私はやりましたぞ！」

少しずつテンションが上がっていく彼の言葉に、表情を曇らせたのはアリサだ。

今、彼が挙げた名は、彼の直属の上司であり、旧魔王派のトップの一人だった者の名だ。忘れたくても、けっして忘れることなど出来ない名前だった。

ロイは微動だにしないサーゼクスの背中を踏みつけ、邪悪な笑みを深めながらその場にいる全員に告げた。

「――俺はジャック。旧魔王派の生き残りだ」

「……ロ、ロイ？おまえ、い、いったい何を……」

困惑するジオテイクスに目を向けると、ジャックはズボンのポケットからタバコを取り出して口にくわえて火をつけた。

紫煙を吐き出しながら、ジャックは言う。

「言つたら、俺はジャックだ。なんでも、俺の顔はロイ・グレモリーとか言う奴と瓜二つって言うじゃあねえか。死んじまった奴を利用するのは気が引けたが、そいつに変装すれば『D×D』とかいう言う奴らだろうが、サーゼクスだろうが、そのルキフグスの生き残りだろうが、必ず油断するはずだ。この瞬間、どれほど待ったことか」

ジャックは直剣の切っ先をサーゼクスの首もとに向け、ゼクロムに告げた。

「――ゼクロム、そいつを返してもらおうか。今治療すれば、サーゼクスは助かるが？」

《……お断りします。テロリストの要求を飲むほど、我々も落ちぶれてはおりません。

それに、サーゼクス殿もそれを望むでしょう」

「それもそうだな……」

ジャックは直剣を逆手に握り直すと、何の躊躇いもなくサーゼクスの首に突き刺した。

刺された体が一度小さく跳ねると、微かに感じられた生気も感じ取れなくなる。

彼の行動を見ていた四人の顔は真っ青になり、グレイフィアは目を虚ろにしながら膝から崩れ落ちた。

そんな彼らとは違い、ゼクロムの眼光にも憤りと驚き、そして焦りの色が入り交じる。

——目の前でテロリストが魔王を殺した。

なぜ目の前にいて何もなかったのか。なぜ交渉を進めようとしなかったのか。難癖をつけられても文句は言えない。

ジャックは続ける。

「ゼクロム。そいつを返してはくれないんだな？」

《……っ！ええ。それに、貴様は生かしておいてはいけない男のようだ》

ゼクロムはそう言うのと鎌で空を切り、空間に裂け目を作り出す。

《貴様のことだ、オフィスを助けに来るのだろうか？》

「まあ、そうだな。そいつがないと何もできねえ」

サーゼクスから離れ、直剣の切っ先をゼクロムに向けながら苦笑するジャック。ゼクロムは彼がこれ以上下手な動きを見せる前に、リリースを抱えたまま裂け目に飛び込む。

ロイも瞬時に追いかけてしようとするが、足がもつれて転びかけたために失速、その間に裂け目は閉じてしまった。

ジャックは舌打ちをすると、濁った瞳でアリサに目を向ける。

「……おまえはそこにいろ。俺に付き合う必要はない」

アリサにそう告げると、ジャックは転移用魔方陣を展開。そのままどこかに消えてしまふ。

消える直前に見せた、感情の消えた表情と、濁りきった瞳。

ヒトであることを捨て、亡霊のように冷えきったそれは、その男がロイ・グレモリーだと思わせない。他人にしか見えないのだろう。

——たとえば、それが彼を愛するヒトたちであったとしても。今の彼はロイだと言いきえることは出来ないだろう。

ゼクロムとリリス、ジャックが姿を消したグレモリー屋敷。

グレイフィアは力なく立ち上がり、身動きみじろひとつしないサーゼクスへと歩み寄る。

「サーゼクス……」

彼の横に膝をついて座り、体を仰向けにすると、優しく包容する。

目に涙を溜めながら、出来るだけ優しく、それでも力強く、ぎゅつと抱き寄せた。

彼女の頬に涙が伝っていくなか、

「……ああ、やっぱりグレイフィアは泣いた姿も綺麗だ」

「……………」

「……それに柔らかいなあ」

抱き寄せる男の間の抜けた声に、グレイフィアの体が固まった。

それに構わず、ここぞとばかりにグレイフィアの胸に顔を擦り付けるサーゼクス。

グレイフィアは額に青筋を浮かべながら彼と目を合わせた。

「サーゼクス、あなた……」

「うん、大丈夫だよ。まさかロイに刺される日が来るとは思わなかったけどね」

顔に土がついているが、いつもの笑みを浮かべたサーゼクスの姿に、グレイフィアは顔を赤くしながらぶちギレる。

「あなた、何を考えているのよ……!」

「いや、考えたのはロイだよ。全責任を自分で背負って、何もかも終わらせるつもりみただい」

サーゼクスは真剣な顔で言うが、いまだにグレイフィアに抱かれたままだ。

離さないグレイフィアもグレイフィアだが、離れようとしないうサーゼクスもサーゼクスだろう。

二人のやり取りでハツとしたように、グレモリー夫妻が二人に駆け寄る。

「サーゼクス、大丈夫か!」

「サーゼクス、怪我は!大丈夫なのね!」

いつにも増して心配してくる両親に軽く引きながら、サーゼクスは頷く。

「ロイが咄嗟に刺したんですよ。急所を外して、致命傷になる可能性が最も低い位置を。流星に痛かったですけど、殺気だけ本気で威力はデコピン程度でしたよ」

サーゼクスはグレイフィアから離れ、少し足をふらつかせながら立ち上がる。

「首を刺された時は、本気で刺してくると思いませんでしたけど、そこは上手く刃を引っ込ませてくれて、それっぽく見せただけですよ」

「サーゼクスの発言を裏付けるように、胸からは微量の血が流れているが、首は無傷だった。」

説明を受けた三人はホツと息を吐くが、アリサはおろおろと落ち着かない様子でサーゼクスの治療を始める。

……殺す気がなかったとはいえ、魔王を刺したのはいかなものなのだろうか。

アリサは治療しながら、そんな事を思っていた。

「……あ、あの、マス——ジャックはこれからどうなるんでしょうか？」

「おそらく、冥府を襲撃するだろうね。リゼヴィムへの攻撃で『D×D』の大半が出払っているから、スラッシュ・ドッグ刃 狗 チームと、手の空いている誰かに動いてもらったほうがいいかな」

それに——と、サーゼクスは続ける。

「未遂とはいえ、魔王の暗殺を狙ったんだ。今度こそジャックには死んでもらわないとね」

サーゼクスの言葉を聞き、アリサはようやくやくホツと息を吐いた。

ジャックとして死ぬことになるだろうが、ロイとしてはとりあえず無事は保証されるだろう。

「問題は冥府がどう動くか、かな。ロイも何をするつもりなのか、まったく見当がつかない」

「い

サーゼクスはそう続けると、四人から離れて転移用魔方陣を展開した。

「とにかく、僕は戻ります。グレイフィア、ミリキヤスを頼む」

「ええ、任せて」

サーゼクスは頷くと、両親に目を向けた。

彼の瞳は、絶对的な覚悟の色で染まっている。

「僕を信じてください。今度こそ、ロイを守ってみせます」

トライヘキサとの決戦。あの時、一番近くにいたのに、ロイのことを救えなかった。守れなかった。

だから、今度こそは——。

「また家族全員で食事をしましょう。リアスや、僕、ロイの眷属たちも全員集めて」

サーゼクスの笑みに三人は迷いなく頷き、アリサはそこに自分も含まれていることに、勝手にひとりで感動しているのだった。

彼——ジャックは冥界の森の中で、木に背を預けながら脇腹を押さえ、息を荒くしていた。

焼き塞いだ傷痕を撫でながら、サーゼクスに近づいたためとはいえ、なかなかの無茶をしたのもだなと苦笑する。

深呼吸をして呼吸を整えると、ジャックは意識を切り替える。

「……兄さんを刺すなんて、何てことをしちゃったんだよ」

彼——ロイは、頭に手をやりながらそう呟いた。

あの状況でジャックとしての自分を掘り起こし、サーゼクスを刺すタイミングでロイに戻り、またジャックとしての自分を表に出す。

それを行うことは潜入任務の時以上に負担が大きく、酷い頭痛に襲われていた。

——だが、と再び思考を切り替える。

「……早くあいつを助けにいかねえとな」

そう呟くと共に、彼の瞳は深紅に染まり、瞳孔が縦に裂ける。

獣の眼光を放ちながら、ロイは森のある一点を睨む。

そこにいたのは一人と一匹。

「……狗か」

「ええ、お待たせしました」

戦闘服に身を包んだ刃スラッシュ・ドッグ 狗

——幾瀬鳶雄と、彼の相棒たる大型犬——刃ジンが、並び

立っていた。

鳶雄が訊く。

「冥府に向かうつもりですね？」

「ああ、そのつもりだ。——止めるか？」

片手に直剣を生成し、絶対零度の殺気を放ちながら鳶雄を睨む。

鳶雄は首を横に振り、懐から紙切れを取り出した。

「チームメンバーも待機させてありますから、彼らと合流します」

「……そうか。そんじや、行くか」

ロイの言葉に頷き、紙切れにオーラを込めていく。

向かうは冥界の更に下。冥府に座する神のお膝元。

「……あの子は俺が必ず助ける」

リゼヴィムと『D×D』の激闘が続くなか、命の恩人を救うため、悪魔ロイハムデスと神の戦いが

始まるうとしていた——。

sin02 命を刈り取る者

辺り一面にもない、荒れた広野だけが広がる場所、冥府。

そこにあるとある洞窟に、彼らは集まっていた。

「ここにくるまでの足から服まで借りちまって、色々とすまねえな」

黒を基調とした、軽さを重視したボディーアーマーと、それを隠すように上から羽織る同じく黒いロングコート。右手にだけ黒いグローブ。

それらを着こんだロイは、体の調子を確かめながら鳶雄に軽く頭を下げた。

鳶雄は頷きながら返す。

「アザゼルさんから、あなたを支援するように頼まれましたね。怪我の調子は大丈夫ですか？」

彼の言葉にロイは頭を上げると、脇腹を撫でる。

「……痛覚が鈍いみてえだ。ちよつと痛むが、そこまで問題はねえ」

アガリアレプトにつけられ、自ら発生させた黒い炎により焼き塞がれた傷。

普通なら泣き叫んでもおかしくはないほどの傷だが、ロイは大したことのないように振る舞っていた。

鳶雄は少し眉を潜めるが、状況の説明を始める。

「私たちの任務は、リリスの保護と、今回の騒ぎが終わるまでハーデスを捕縛することで
す」

「そこにジャックおれの殺害も追加しておいてくれ。そうしてもらわねえと、後が面倒にな
る」

ズボンのポケットからタバコを取り出し、口にくわえながらため息を吐く。

火をつけようとするが、刃が小さく唸ったことでそれを断念し、一度タバコを口から
離しながら続ける。

「おまえのチームメンバーにも言っておいてくれると助かる。あと、ハーデスを捕縛つ
て言ったな？」

鳶雄は頷くが、ロイは瞑目しながら言う。

「それは絶対にか？ はつきり言って、俺は自分を抑えられる自信がねえ」

彼はそう言うとも目を開き、獣のような深紅の眼光を放ちながら鳶雄を睨む。

「――殺しちまうかもしれねえぞ？」

「……！」

ロイの発言に、鳶雄は表情を険しくさせ、刃は威嚇するように唸り始める。

「神が死ねばどういふ影響が出るかはわかっている。だが――」

ロイは洞窟の外を目指しながら、背中越しに鳶雄と刃ジツに告げる。

「あいつは、やりすぎた。今までのことも含めてな。今のうちに排除しておかねえと、たぶん将来的に痛い目にあうぞ」

「ロイさん、あなたは——」

鳶雄が先を続けようとするが、ロイは右手を軽く上げて制すると、不敵に笑んだ。

「俺は守りたいだけだ。仲間と家族と、そいつらと一緒に生きる未来つてやつを。そのため、俺は命を懸ける」

軽く上げた右手の平を上に向け、その上に黒い炎を出現させる。

それを見た鳶雄の表情は驚愕に染まる。

セイクリッド・ギア

神器に深く潜った彼だからか、それとも死神と同じく魂をも斬れるからなのかはわからない。

だが、ひとつだけ言えるとすれば、ロイの手の上にある炎は危険で、異質だということだ。

炎とは、使い方さえ間違わなければ、人々を暖め、照らし、守るものだ。

だが、あの黒い炎はそんなものではない。人々の怒り、哀しみ、恨み、妬み、後悔などの負の感情を入り混ぜ、ひとつに凝縮させたものだ。

その異質な黒い炎を、ロイは何の躊躇いもなく握り潰す。

彼の体が一瞬黒い炎に包まれるが、その身を焼くことはなく、炎は彼の内に収まり、燻り始める。

彼の体から黒い火の粉が舞い、右目から伸びた深紅のラインが右腕を這い回り、指に絡み付く。

「そんじゃ、フォローは任せた」

ロイはそう言い残すと、その場に黒い火の粉を残して消えた。

鳶雄は一度息を吐き、別の場所に待機している仲間たちに連絡を入れる。

——テロリストが冥府を襲撃。これを制圧する。

——

冥府の中心部、ハーデス神殿の最深部。

《——さて、頃合いか》

玉座に座る冥府の主神——ハーデスは、綺麗に整列し、膝間付く自らの部下たちを前にして、小さく呟いた。

《我が同胞たちよ。まもなく、この娘を救いに、あれがここに来るだろう》

ハーデスはそう告げると、床に描かれた怪しく輝く魔方陣の中心でぐったりとしてい
るリリスを一瞥し、部下たちに目を戻しながら怪しい眼光を放つ。

《——滅しろ。あやつの魂を刈り取ろうなどとは思わな》

『御意！』

ハーデスの言葉に、部下である死グリームリップス神たちが一斉に応えると、次々とどこかへと散つていく。

そんな彼らを見送りながら、ハーデスは脇に控えていた一人の最上級死神——タナトスに目を向けた。

《タナトス。そちらの準備はどうだ》

《いつでも。ですが、あくまで準備だけでございます》

《わかっておる。私も、お主にその任務を完遂せよとは言いたくはない》

少し悲哀を込めた声音に、タナトスは何か言うわけでもなく、一礼した。

《では、私は戻ります》

《ああ。頼んだぞ》

タナトスはハーデスの言葉を聞き、影に潜ってどこかへと消えた。

《これで、ようやく蝙蝠とカラスどもを蹴散らせる。フアフアフア……》

どこか後ろ向きな覚悟を決めたようなハーデスの声が、誰もいなくなつたはずの部屋に虚しく響く。

《……………》

そんな彼の声を、ある一人の死神が聞いていたことにも気づかずに――。

――

「……………さて。始めるか」

神殿を一望できる岩の上に腰掛け、タバコの紫煙を吐き出しながら、右腕の感覚を確かめる。

ロイはタバコを握りつぶすと立ち上がり、大鎌を生成して両手を添える。

「リリース、待つてろよ」

ロイは優しく、それでいて力強く言うと、神殿に向かって突撃を開始した。

そんな彼を待ち受けていたかのように、神殿から死神が湧き出ると、彼に斬りかかっていくが、すれ違い様に切り払われていく。

斬り殺した死神の魂を喰らい、右腕の輝きが一層強くなり始め、鎌の一撃はより鋭く、重くなっていく。

「どうした、この程度か！」

向かってくる死神を一撃で葬りながら、ロイは止まることを知らない。

黒い火の粉を撒き散らし、たった一撃で下級から上級まで、強さ関係なしに平等に死を与え続ける彼は、死神以上に死神だった。

そんな彼の強さに死神たちは狼狽え始めるが、それでも圧倒的な物量で押し潰そうと攻め立てる。

五人では駄目。ならば十人で。それでも駄目なら百人で。

本拠地であることの強みを武器に、次々と斬り込んでいくが、文字通り無意味。まさに一騎当千と言える強さで、一方的に死神を斬り倒していく。

そして、倒せば倒すほど、ロイはさらに強くなっていく。

数で攻めるとその分が確実に潰され、相手が余計に強くなっていく。それだけでも絶望的だと言うのに、

《……誰か、助けて……》

《痛い、痛い……！》

《なぜ俺がこんな目に。俺はただ――》

死んでいった同胞の音が、死神たちの耳に響き続ける。魂を刈り取る彼らだからこそ、本来聞いてはいけない声が聞こえてしまう。

自分が殺されるかもしれない恐怖。そして、死んでいった同胞の感情。

普段は感じることものない二つの要因が、死神たちの精神を蝕んでいく。

戦いに慣れた中級死神ならばまだ耐えられるだろう。だが、まだ経験の浅い下級死神たちは、次々と戦意を失い、膝をつくなり逃げ出すなりをし始める。

だが、背中を向ける敵をそのまま逃がすほど、彼は甘くはない。十年後、百年後に、再び自分の驚異になるかもしれない。

——ならば、殺ることはひとつだ。

鎌を消して弓と矢を生成、すぐさまつがえて一気に放つ。

空間を削り取りながら飛ぶそれは、死神たちを一瞬で貫き、紙一重で避けられたとしても体勢を崩させ、すぐさま反転してきた矢でその身を貫かれる。

一対千と言ってもまだ足りないほど、数だけで見れば圧倒的にロイのほうが不利なことに間違いはなかった。

だが、魂を刈る死神と魂を喰らうロイは、あまりにも相性が悪すぎだ。おそらく、ただの死神では、どうあがいてもロイに勝てない。

今のロイは、まさに死神の天敵だった。

ハーデスはこれを知っていて彼らをロイにぶつけたのか。

遣えるべき主に捨て駒として使われたのではないか。

死神たちの間に、嫌な空気が流れ始める。

だが、その空気は、天に昇っていく深紅の流星によって文字通り切り裂かれた。

天高く放たれた矢が落下しながら分散し、流星群となつて死神たちとその背後にある神殿に突き刺さっていく。

「……こんなものか。存外あつさりだったな」

ロイは流星群が止むと、周囲を見渡す。

体のどこかが欠損した死神だったものや、砕けた神殿の破片が大量に荒野に散らばり、そこに生きている者はロイを除いて誰もいない。

一度息を吐き、神殿の入り口に当たる巨大な両開きの扉の前に進むと、手にした鎌を縦横無尽に振り回す。

扉に様々な線が刻みこまれると、左手で軽く押した。

ガラガラと音をたてながら扉が崩れ落ち、神殿の内側に入れるようになる。

ロイは殺気を強めると足早と神殿の奥を目指す。

進行方向に感じる強い気配。おそらく最上級死神たちが待ち受けているのだろう。

だが、止まるわけにも、負けるわけにもいかない。

——何がなんでも、リリスを助ける……！

冷酷な色に染まった双眸から、深紅の眼光が漏れでる。

だが、それとは違う白い光が混ざっていることに、彼自身も気づいていなかった——

《……来たな》

新人たちの稽古や古株たちの腕試しなどに使われる広い空間。そこに、本来なら一ヶ所に集まらないであろう、最上級死神たちが集っていた。

ゼクロムが周囲を見渡しながら隣の同胞に訊く。

《……オルクスとプルートの後釜はどうした》

《知らぬ。元より奴らはこの作戦に反対していたからな》

ゼクロムに返したのは、一度ロイとも出会っている最上級死神だった。

リリスを連れ戻した黒歌を襲撃し、ロイとの再戦を一方的に告げた死神。回りからはケ—

ルと呼ばれている。

完全に余談だが、女性である。

ケールは肩をすくめ、自身の影から大鎌を取り出す。

《穏健派だったか。まったく、敵のわかりあおうなどと、私には理解できぬ》

《そう言うな、ケールよ。あやつらにも、あやつらなのに考えがあるのだろう。今はそれを考えることは出来ぬようだが》

ゼクロムが視線を前に戻すと、前方の通路の奥からロイが現れる。

《先ほどぶりだな。ジャック、だったか?》

「あの子はどこだ」

鎌を片手に、早足で歩み寄りながらゼクロムを睨み付ける。

彼の放つ絶大な殺気を真正面から受け止めながら、ゼクロムは影から大鎌を取り出す。

《なぜテロリストに答えなければならぬのだ?》

「それもそうか……」

ゼクロムの返しにロイは自嘲するように笑うと、鎌を構える。

同時に彼と対峙する最上級死神たちの耳に同胞たちの無念の声が届き始めるが、それを受けて彼らの殺気はさらに膨れ上がる。

同胞たちを殺してきたという自白を受け、怒りを覚えないほど、彼らも落ちぶれては
いない。

ゼクロムとケールを除いた最上級死神たちが一斉に飛び出し、ロイに挑んでいく。

四方八方から突撃してくる死神たちの動きを全て把握しながら、休む間の間なくとんでくる鎌の連撃を捌いていた。

死神の何体かが質量を持った残像を複数作り出し、さらに攻め手を増や始めると、ロイの表情が険しくなり始め、防戦一方となっていた。

そんな彼の様子を見ながら、ゼクロムは顎に手をやる。

《……ふむ。あの強さも、制限付きのようだ。だが――》

ゼクロムの視線の先には、少しずつではあるが最上級死神たちの猛攻に対し、カウンターを放ち始めるロイの姿があった。

おそらく最上級悪魔でも防ぎきれないであろう攻撃に、たったの数秒で慣れたのだ。

彼の強さは、怨霊に憑かれながらも折れない異常なまでの精神力と、反射神経なのかもしれない。

《ふむ。あんなものか》

彼の横で、ケールは残念そうに呟いた。

ゼクロムが首を傾げると、ケールは鎌をロイに向けながら口を開く。

《あの男に憑く怨霊たち。そこから経験を取り出し、自らの肉体に反映させているようだ。あの鎌の動き、私がしごいた若手たちに似たものがある》

ロイの動きをそう断ずるケールだが、すぐに《ほお……》と感嘆の息を吐いた。

ロイが最上級死神三人の動きを完全に見切り、鎌の一閃でまとめて斬り伏せたのだ。そこからは早かった。三人が欠けた集団の穴をさらに広げ、次から次へと死神を斬り伏せていく。

最後の一人の首を飛ばし、ゼクロムとケールに目を向ける。

「次はどっちだ。それとも両方同時か」

二人を交互に睨むロイに、ゼクロムとケールはお互いに目配せをすると、二人同時に歩き始める。

《死を纏うと言ったところか。だが、そこまでだろう》

《始めよう。貴公の魂、滅してくれよう》

「同時か。まあ、どちらにしる変わらねえ」

ロイとゼクロム、ケールが消え、空間のほぼ中央で激突した。

神殿のいたるところが悲鳴をあげ、砕けた天井から、パラパラと小石が降り始める。

三本の鎌が次々とぶつかり合い、余波だけで柱が斬られ、床が抉りとられる。

そんな中、ケールが笑う。

《堪らん！これでこそだ！》

「舐めるな！」

ケールの言葉を受け、ロイの攻撃はさらに速くなっていく。それをケールは捌き続けることが出来ていたが、

《ぬう！これは……！》

ゼクロムも必死に食らいつくが、少しずつ足を引つ張り始めているのは確かだった。彼も実戦を積み、死神たちの中でも猛者と呼ばれてもいいほどだ。

だが、ケールとロイは彼の上をいつていた。否、いなもはやレベルが違いすぎた。

《ゼクロム、邪魔だ！下がっていろ！》

《すまぬ！》

ケールがロイの鎌を受け止めた隙にゼクロムは下がり、同時に鎌を投げる。

ブーメランのように飛ぶそれはケールの手に収まり、彼女の攻撃の手がさらに激しくなっていく。

「チツ……！」

《どうした、素人なようだぞ！》

ロイの速度も上がっていくが、ケールはそれらを全て見切っているようにして避け続ける。

ロイの鎌使いは、彼が討った死神たちの技を反映させたものだ。逆にいえば、死神たちの戦い方を頭に叩き込んでおけば、対応自体は出来てしまう。

そう。鎌使いは。

ロイの手から鎌が消え、太刀へと変わる。

「フッ！」

《ツ！》

ケールは太刀の一閃を紙一重で避けるが、ローブが少し斬られてしまった。

ローブの斬られた部分を撫で、小さく舌打ちをすると、再び笑った。

《ふふ、そう来なくてはな》

ロイは彼女の言葉を無視し、太刀を地面と水平になるように構え、体を捻って敵に背中を向けた。

ケールが飛び出そうとした瞬間、彼女を追い越す形でゼクロムが飛び出した。

そんな彼に対し、ロイはあの男の技を放つ！

『燕返しつばめかえ（偽）！』

高速で振り抜かれた太刀の三つの斬撃が全く同時にゼクロムを捉え、体を断ち切ろうとするが、

《ぬうお！》

「なにつ！」

ゼクロムは自らの体にめり込むその刃を腕で掴んで止めると、ケールに目を向けた。

だが、彼女はその場から既に消えており――、

《流石だな。私には出来んよ》

ロイの背後に立ち、既に鎌を振り上げていた。

ロイがその場を飛び退こうとした瞬間、鎌が降り下ろされ、鎌の一撃は彼の背中を袈裟懸けに切り裂いた――。

――

ロイが暴れまわっている真つ最中、スラッシュ・ドッグ 刃 狗 チームも動き始めていた。

ロイの流星群によって破壊された神殿の壁から侵入し、彼とは別ルートで最深部を目指していたのだが、彼らの前に二人の死神が現れていた。

「あれ、バレちゃってみたい」

チームメンバーの女性――皆川夏梅が少し驚きながら言うと、彼女の隣にいた男性――

―鮫島綱生は肩に乗せた猫を槍への変え、戦闘体勢に入る。

「ま、たまにはド派手なのもいいじゃあねえか」

そんな二人をよそに、鳶雄は静かにその二人の死神を見つめていた。

彼らから敵意は感じない。むしろ、助けを求めてくる時のそれを感じるのだ。

二人がなにもしない鳶雄に目を向けると、死神の一人が彼らに頭を下げた。

《私はオルクス、こちらが当代のプルートです》

紹介されたプルートの後継ぎも頭を下げたところで、オルクスが頭を下げたまま単刀直入に彼らに告げた。

《ハーデス様の思惑、そしてロイ・グレモリーを止めるために、ご協力をお願いしたいのです》

彼の言葉に三人が顔を見合わせるなか、もはや抑えられなくなったかのようにプルートが語気を強めて言う。

《このままでは、あの獣が、皇獣が目を覚ましてしまう！》

「「ッー」」

プルートの言葉に、三人は同時に息を飲む。

この世界において、皇獣と呼ばれる怪物はあの獣しかいない。

文字通りの総力戦で挑み、ようやく討滅に成功した黙示録の獣。

「トライヘキサが、復活するのか……?」

流石の鳶雄も困惑しながら訊くと、オルクスは迷いなく頷く。

《このままいけば、まず間違いなく。なので、もう一度お願いします》

オルクスとプルートの頭を下げ、懇願する。

プライドも何もかもを捨て、目の前の彼らが最後の希望であるかのように、懇願してきたのだ。

彼らの素直すぎる言葉に、思わず裏に何かあるかもしれないと考え始めしもう鳶雄だが、彼らの後ろからまた別の人物が現れる。

「聞いてみるだけ聞いてみるのですよ。それからでも、きつと遅くはないのですよ」

刃 スラッシュ・ドッグ 狗 ロンギヌス チーム所属の神滅具使い——ラヴァニア・レーニが、優しげに笑みながら、彼

らの前に現れたのだった——。

sin03 死に挑め

ゼクロムの捨て身の時間稼ぎと、ケールの渾身の一撃。

二人の最上級死神の連携の前に、ついにロイは崩れ落ちた。

ロイに致命傷を与えることに成功したケールは、死にかけのゼクロムを抱え、その場から離れる。

《はあ……はあ……。ここまで無茶をしたのはいつぶりだろうな》

体が細切れにされかけたゼクロムは、肩で息をしながらそう漏らした。

ケールが笑う。

《貴公は手堅い手段ばかり取るからな。たまには馬鹿になってみるものだが……》

《クハハハ……。今回ばかりは馬鹿だったでは済まぬな》

ゼクロムを柱にもたれかけさせ、ケールは彼の鎌を差し出す。

それを受け取ったゼクロムは、ようやく一息つく。

《これで、ハーデス様の目的が果たされる。あの少女の力を奪えば、きっと冥界を――！》

ある違和感を覚えたゼクロムは、倒れ伏しているロイに目を向けた。

「ああ……………」

自身の血で出来た血溜まりから、幽鬼のように立ち上がる。その目は虚ろで、どこを見ているのかはわからない。

白い靄と共に斬られた臓器が修復され、黒い炎で傷口が焼き塞がれ、傷跡を残して体を再生させた。

「死んで、たまるか……………」

ロイの宣言と共に、黒と白の火の粉が彼の体から舞い散る。

やがて黒と白の入り交じった炎が彼の体を包み込み、眼に当たる部分が深紅に輝く。

ヒト型の黒と白の炎へと変わったロイに、ケールは再びゼクロムから鎌をぶんどると構えを取った。

《またその姿か…………》

構えながらも、ケールは嘆息した。

ロイの姿を視ようとすればするほど、彼の本来の姿がわからなくなる。

老若男女、様々な者の姿に見え、時には獣のような何かにも見える。

ケールの切っ先が定まらないなか、ロイは全身の力が抜けたまま、ゆつくりと歩き始める。

亡者のようにゆつくりとだが、確実に二人に歩み寄る。

《気味が悪いな》

ケールはそう呟き、瞬時にロイとの間合いを詰める。

そして――。

《フッ！》

短く息を吐くと共に、すれ違いざまに彼の膝を切り裂き、片膝をつかせる。

《――これで仕舞いだ》

残念そうな声音で告げると、彼女は両手の鎌の刃でロイの首を挟み込み、躊躇いなく鎌を振り抜く。

防御も回避もしなかったロイの首は飛び、再び膝をつく。

《ツ！》

本来なら勝利を確信しているはずのケールは、恐ろしいものを見たかのようにゾツとしながら、すぐにその場を離れた。

彼女の手には、確かに肉と骨を断ち切った感覚がある。

――なぜ目の前の男の首は繋がっている!?

だが、ロイの首は繋がったままであり、すぐに立ち上がると、先ほどよりも確かな意思を持ってケールを睨む。

『貴様らでは、死を斬ることは出来ん』

ロイとは別の、二人には聞き覚えのない声。様々な年代、性別の声が混ざったそれを聞いた二人は、その正体を瞬時に把握することができた。

《その男に巢食う怨嗟の念か。貴公らを削りきらねば、本体は斬れぬということか?》

ケールは二つの鎌を構え、残像を残しながら一気に間合いを詰め寄ると、すれ違いざまに彼の首をはねようとするが、

「舐められたもんだな……」

ひとつは眩きと共に籠手を装着したロイの右腕で止められ、もうひとつは彼の身に纏う白と黒の炎で、体に触れる前に溶かされた。

《なっ!》

「遅い」

鎌が瞬時に溶かされたことに驚愕したのも束の間、音を置き去りにしたロイのアツパーがケールの顎を撃ち抜く。

一拍おいて、快音と共に骨が砕ける乾いた音が彼女の頭から漏れ、ロイは追撃に動くとするが、

《させぬ!》

ぼろぼろの体を動かしたゼクロムがフォローに入る。

だが、ケールに比べて一段劣る彼の動きではロイを翻弄するには速度が圧倒的に足り

ていないことは明白だった。

彼の動きを瞬時に見切ったロイはゼクロムの首を掴み、そのまま締め上げながら深紅の眼光で睨み付ける。

「てめえらは、やっちゃいけないことをした」

ロイが纏う白と黒の炎がゼクロムの体に燃え移り、彼の体をじわじわと焼いていく。

《ぬおおおおおおおおお………っ！》

苦悶の声を漏らすゼクロムを無視し、ロイは続ける。

「俺だけならまだしも、あの子を傷つけた……」

言葉に静かな怒りが込められた瞬間、ゼクロムを焼く炎はさらに燃え上がり、完全に彼の体を包み込む。

ロイは手を離し、火だるまになりながら倒れたゼクロムには目もくれず、ふらふらと立ち上がるケールを睨む。

《ゼクロムッ！》

ケールの叫びに、ゼクロムは力なく彼女に手を伸ばす。

助けを求めているわけでもなく、何か特別な感情が込められたその腕は、

「——まだ生きているのか」

無慈悲にも、ロイの生成した直剣によって斬られ、宙を舞う。

《ツ！》

ロイの挑発行為に、ケールは動いてしまいそうになった自分の体を無理やり抑え、荒くなつた息を落ち着かせようとする。

ゼクロムの腕が彼女の目の前に落ち、灰なつた瞬間、ロイの姿が消える。

「怒りに身を任せても良かったかもな」

どこまでも冷たい声音で、彼はそう告げる。

それとほぼ同時に、ケールの胸を彼の腕が貫いた。

《が……！》

「向こう側でよろしくやってろ」

ケールを貫いた腕の籠手が、枝分かれするように変形して彼女の体を食い破り、四散させる。

痛みを感じても一瞬のことだった。体も残さず即死したケールを気にすることはなく、全身を包む炎が消えると共に、ロイは奥へと続く通路に目を向ける。

無理やり最高速度を出したためか、焼き塞がれた背中の傷から微量に血が垂れる。

ロイが瞑目すると傷口から白い靄が発生し、開きかけた傷を塞いでいく。

ゆつくりと息を吐き、目を開く。

瞳孔が縦に裂けた瞳は、先ほど以上に危険な色を放ち始めていた。

傷が塞がったことを確認し、首をゴキゴキと鳴らすと、奥を指して歩き始める。

全身にたゆたわせる深紅のオーラに混ざる怪しげな白い靄は、その量を増やしなが
ら、確実に強くなり始めていた。

もし、深紅と白の割合が逆転したとしたら、その時何が起ころのか。

それはロイ自身にもわからないことだが、間違いないと言えることは。

「——これ以上の面倒は勘弁してもらいたいがな」

彼がそう呟いた瞬間、視界が霞み、意識が飛びかけ、思わず片膝をつく。

頭を振って意識を無理やり引き戻すと、深紅のラインが絡み付く右手に目を向ける。

いまだに輝きを放つそれには、まだ問題はなさそうだ。

「……消耗し過ぎたか。だが、急がねえとな」

一度大きく息を吐いて立ち上がったロイの犬歯が、獣のように鋭くなっていること
に、彼が気づくことはなかった。

ロイが最上級死神を蹴散らした頃。

幾瀬鳶雄と刃^{ジン}、ラヴァニア・レーニは、オルクスに先導される形で神殿を走っていた。時間は数分前にさかのぼる――。

「聞いてみるだけ聞いてみるのですよ。それからでも、きつと遅くはないのですよ」

ラヴァニアの登場に、鳶雄たちの表情が僅かばかり緩む。

神滅具^{ロンギヌス}が二つ揃った状況を喜んでか、オルクスが思わず安堵の息を漏らす。

《――お話させていた দিয়ে、よろしいですか》

彼の問いに、刃^{スラッシュ・ドッグ} 狗 チームの面々が頷くと、オルクスは口を開く。

《事の発端は、ハーデス様とアガリアレプトが接触した時です。あの狂った悪魔は、こう言ったのです》

『――トライヘキサの血液を手にいれ、それを元に魔物を作り出しました。これから冥界に混乱をもたらします』

《それからです。ハーデス様はアガリアレプトを支援を始めたのは。我々はロイ・グレモリーとオーフィスの半身——リリスでしたね。その二人の追撃を続けるなかで、ハーデス様の興味はロイ・グレモリーに移っていききました》

何かを考えるように天を扇ぎ、オルクスは続ける。

《彼は戦いを続けるなかで、加速度的に強くなつていったのです。怨念から技術を引き出しているだけでは説明がつかない、異常な速度で、です》

《多くの同胞が犠牲になつていくなかで、アガリアレプトからどこから手にいれたのか、ロイ・グレモリーの血液と、肉片が送られてきたのです。どうやって手にいれたのかはわかりません。ですが、それを調べていく中で、ハーデス様は何かに気づいたのです。ですが、それに気づいてはいけなかつた》

言葉を区切り、怯えるように体を震わせながらオルクスは言う。

《彼の体には、トライヘキサの因子が仕込まれていた。実際に戦場に出ていない我々では、いつ仕込まれたのかはわかりません。ですが、あの戦いのどこかで因子が仕込まれていたことは確かです》

オルクスの言葉を受け、鳶雄は顎に手をやりながら思慮していく。

トライヘキサがロイに因子を仕組めるタイミング。

——ロイとトライヘキサが初遭遇した時。

そこではないだろう。復活して調子が出ず、ヴァーリもその場にいたのだから、そんな余裕はないはずだ。

——ロイとトライヘキサが対一で戦った時。

そこでもあり得るが、サーゼクス・ルシファアの話聞いた限り、トライヘキサはロイを殺す気で攻撃していたようだ。

——なら、いつだ。いつ因子を……。

「あの時か……！」

鳶雄は思わず語気を強めて言う。

全ての準備が整い、拘束術式を発動する直前。ロイはトライヘキサに腹を貫かれ、浴びせ蹴りによって海面に叩きつけられた。

その後、彼の援護によってどうにか勝利を掴んだわけだが、その時点で疑うできだった。

——トライヘキサは、自分の因子を仕込んだロイを安全な場所まで蹴り飛ばし、その後消滅した。

肉体の一部をロイに植え付けたからこそ、再生の速度が落ち、こちらの攻撃で殺せるほど生命力が落ちた。

もしかしたら、ロイはそれをわかっていたから、『ドラゴン・ゲート龍門』による帰還をしないために、

グレンデルのオーラを右腕だけに集め、千切ったのかもしれない。

最後の一撃を放つと共に、次元の狭間にその身を投げたのかもしれない。

リリースが消耗しているのは、そんなロイに宿るトライヘキサの因子を抑制するためかもしれない。

そのリリースがハーデスに連れ去られ、何かしらの手段でさらに消耗させられたとしたら――。

その答えにたどり着いた瞬間、彼らの背後に複数の人影が現れた。

《オルクス殿、プルートの殿。まさか、裏切るおつもりで?》

《やはり来たか……》

オルクスたちとほぼ同じオーラの質の死神五人と、その腹心の死神が数十人。

身構える刃 スラッシュ・ドッグ 狗 チームの面々だが、彼らをすり抜け、守るように前にたつた死神が

一人。

《オルクス様。 スラッシュ・ドッグ 刃 狗 チームの皆さん。行って下さい》

自身の影から大鎌を取りだし、構えたのはプルートだった。

同胞を敵に回してでも、彼は刃 スラッシュ・ドッグ 狗 チームを先に進ませようとする。

だが、そんな彼の横につく二人の人間がいた。

「死神ばかりに格好いいところ見せられないってね」

「ド派手なものもって言ったのは俺だからな」

皆川夏梅と鮫島綱紀だ。

二人はそれぞれの相棒を武器にプルートの横につくと、鳶雄とラヴァニアに目配せする。

鳶雄とラヴァニアは頷いて返すと、オルクスに目を向ける。

《プルート。お二人を頼むぞ！》

《わかっています》

死神二人がそのやり取りを終えると、彼らは二つのグループに別れて動き始める。

プルートと夏梅、綱紀は時間稼ぎに。

オルクスと鳶雄、ラヴァニアはロイとハーデスを止めるために。

《フアフアフア。来たか……》

玉座に座り、怪しい眼光を放ちながら王室への入口に目を向ける。

深紅と白のオーラをたゆたわせる男——ロイは、静かな怒りを滲ませた表情でハーデスを睨む。

「……あの子を返してもらおうぞ」

ロイが言うと、ハーデスは玉座の横の床に目を向ける。

そこには怪しげに輝く魔方陣に乗せられ、顔色を悪くさせてぐったりとしているリリスの姿があった。

怒りボルテージが振り切れた瞬間、周囲の壁や床、柱に大きなヒビを入れるほどの衝撃波と共に、ロイの両腕と両足が深紅の鱗に包まれる。それでも、右腕に絡み付くライオンはそのままだった。

全身にオーラをたゆたわせ、ハーデスを睨み付ける。

「覚悟は、できてんだろうな……いー」

《それはこちらの台詞だよ。獣が》

ハーデスは玉座に立て掛けられた自身の鎌を手に、立ち上がる。

同時に放たれる重圧は、彼が絶対的強者の立場にいる者のそれだ。

魔王クラスでも身構えるほどの圧を正面から受けたロイは、それとほぼ同じ重圧を全身から放ち始める。

二人の圧を受けた空間が悲鳴をあげ、歪み始める。

誰の介入も許さない二人の戦いが始まろうとするなか、そんな彼らを——正確には口イを見て興味深そうに笑う、両腕に籠手をはめ、スマホに似た端末機器を弄る少年がいることに、二人が気づくことはなかった。

s i n 0 4 覚醒

冥府、ハーデス神殿。

ハーデスが座する玉座がある王室を二つの影が疾走し、時には交差する。

影がぶつかり合うたびに強烈な衝撃波が室内を駆け巡り、柱や床、天井を砕いていく。

《フーン！》

「ラアッ！」

ハーデスの降り下ろした鎌の一撃と、深紅の鱗に包まれたロイの拳がぶつかり合う。

お互いの得物が弾かれ体勢を崩すなかで、ロイは鎌の柄を掴んでそのまま強引に投げ飛ばす。

凄まじい勢いで飛ばされたハーデスだが、壁に激突する間に勢いを殺し、ゆっくりと壁に両足をつけ、屈伸の要領で力を溜める。

ロイが右腕にオーラを集め、放った瞬間、ハーデスは壁を砕くほど力を爆発させ、勢いのまま飛び出していく。

「ッ！」

ロイの放ったオーラを切り裂き、減速なしで放たれたすれ違い様の一閃を、上体を大

きく後ろに反らして避ける。

振り抜かれた鎌の余波で壁が真一文字に斬られ、部屋の天井が僅かに傾く。

そんな事には目もくれず、ハーデスは鎌を降り下ろす。

今度は横に転がって避ける。

「はあ……はあ……。くそ……！」

表情を険しくさせながら、脇腹に手をやり悪態をつく。

ほぼと言っているほど治った背中はともかく、アガリアレプトに挟られた脇腹はいまだに治りきっていないかった。正確には、内側を含めて焼いてしまったため、治癒が出来ない状態になっているのだ。

ロイ自身も、ここまで響いてくるとは予想していなかったのか、思わず苦笑する。

痛みを感じにくいとはいえ、多少は感じるのだ。

ツヴァイ、アガリアレプト、死神数百体、最上級死神数体。

目を開けての戦闘なら大丈夫だったのかもしれないが、ほぼ休みなく戦い続けた彼の体は、限界が近かった。

だが、極限まで追い詰められた彼の精神は、激情から再びの冷静さを取り戻し始める。「とにかく、やるしかねえよな……！」

体から深紅と白のオーラをたぎらせ、黒い火の粉を舞わせながら、痛みを無理やり誤

魔化す。

より強くなっていく白いオーラを一瞥し、ハーデスはロイに勘づかれぬように心で笑みを浮かべた。

《そうだ。お主か私。残るはどちらか片方しかあり得ぬ》

ハーデスが告げた瞬間、ロイが黒い火の粉だけを残してその場から消える。

最上級死神程度では見失う速度だが、ハーデスは彼の動きを捉えていた。

僅かに、本当に僅かにだけだが残像が見えるのだ。慣れてくれば、完全に見切ること容易いだろう。

ロイが背後に回ることを察知したハーデスは、体を反転させる勢いで鎌を振るう。

完全な不意打ちのはずだが、その攻撃は空を斬った。

何者も捉えなかつた鎌の一撃は、余波だけで再び壁を切り裂き、天井を僅かに低くさせた程度に留まった。

ずれた天井の極小の破片が舞い散るなか、ハーデスは気づく。

反転した彼の背後に、ロイはいるのだ。

ハーデスの動きを読んだロイは、わざとバレるように背後に周り、ハーデスの反転に合わせて瞬時に回り込んだ。

すべてはこの一撃。この一瞬のために。

「オオオオオオラアアアアアアアッ！」

《チイツ！》

雄叫びと共に放たれたロイの渾身の拳が迫るなか、ハーデスは再び反転すると、鎌を差し出す。

その瞬間、ロイの拳がハーデスの鎌を捉えた。

凄まじい衝突音が王室に響き渡り、次に響いたのは、鎌が砕け散った音と、骨が砕けた音の二つだった。

破片がハーデスの顔に襲いかかり、いくつもの傷を刻んでいくが、そんなものお構いなしに自身の影から次の鎌を取りだし、残像を残しながら連撃を叩き込む。

顔や腕、首と体に無数の切り傷を刻まれながら、最後の一闪を紙一重で避け、ハーデスの腹に蹴りを叩き込んで無理やり間合いを開かせる。

ハーデスは床を何度もバウンドしながら勢いを殺し、再びロイを睨む。体中から白い靄が漏れ、ばきばきと乾いた音を出しながら、飛び出た骨が皮膚の下に収まり、体中の傷が焼き塞がれる。

痛みはないが、彼の体は火傷だらけだった。

——継ぎ接ぎだらけだな……。

ロイが自分のことの筈なのに、どこか他人事のように思うなか、ハーデスの眼光が僅

かに曇る。

それに気づいたロイは、脇腹を押さえながらハーデスに言う。

「どうした。いまさらビビったか」

《……まだ足りぬか》

「あ？」

ハーデスの眩きがロイに届くことはなかったが、ハーデスは少し声を大きくして彼に問う。

《——なぜ怯まぬ。なぜ退かぬ。なぜ死なぬ。お主は、一体なんだ》

「……………」

今の自分は何か。ハーデスの問いに、思わず考えこんでしまうロイだが、彼の視界にリリスの姿が映る。

先ほどよりも消耗しているのか、苦し気な息づかいで、顔色も余計に悪くなっていた。あの子を苦しませる元凶が目の前にいる。

その事実を再び認識し、激情の渦に吞まれそうになった矢先、

「——っ！」

右腕に絡みつくラインが消え、意識が飛びかけた。部屋の中の酸素が失われたかのような錯覚に陥り、息が苦しくなり、視界が歪む。

立ちくらみを起こし、片膝をついたロイを見て、ハーデスは怪しく笑んだ。
《激情に身を任せたらどうだ？ 本能を無理やり抑え込むことに、意味はない》

「……………」

歯を食い縛り、感情を押し殺す。

だが、彼の内に巢食う何かが叫ぶのだ。『全てを壊せ』と、『全てを憎め』と。

白い靄が彼の体から放たれ、空間を砕く。

ハーデスの眼光がほんの一瞬強くなり、同時にドス黒く禍々しいオーラの放たれる魔方阵が展開された。

消えかける意識の中で、ロイは驚愕をあらわにするなか、魔方陣から何かの姿を現す。頭部、胴体、黒い羽に十字架。いや正確には十字架に磔になっていいる何か。

体を強烈に締め付けている拘束具、それにも何か文字が浮かび、目にも拘束具がつけられ、隙間から血涙が流れている。

そして続けて姿を現した下半身は鱗に包まれていた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………』

「……………サマエル……………!?!」

ロイは片膝をつきながら、ハーデスに驚愕で見開いた目を向ける。

ハーデスは一度頷き、鱗に包まれたロイの腕を指差しながら言う。

《今のお主は半分ほど龍なのだろうか？ならば、こいつも十二分に驚異となりえるはずだ》
 サマエルの一挙動一挙動に気を配りながら、ロイはふらつく足を踏ん張って無理やり立ち上がる。

そんなロイを嘲笑うかのように、ハーデスは告げた。

《——喰らえ》

ハーデスの指示を受けたサマエルが口を開き、超高速で舌を伸ばす。

「ツー」

ロイが避けようとした瞬間、舌が彼の目の前で反転し、その矛先を変える。

舌の行き先。そこにいるのは一人の少女。ドラゴン

「リリースー」

ロイが飛び出すよりも早く、リリースの体を黒い塊が包み込む。

ゴクン……ゴクン……。

塊と舌が脈動し、何かがサマエルのほうへと流れ込んでいく。

立ち尽くすロイを見下ろしながら、ハーデスは言う。

《先ほどまでは魔方陣を介して喰わせていたが、時間がかかり過ぎたのでな。この際直接吸出すことにした。で、どうする、蝙蝠もどき》

「……」

ロイは何も答えず、膝から崩れ落ちる。
追撃と言わんばかりにハーデスは続ける。

《このままいけば、間違いなくあの娘は死ぬぞ?》

ハーデスの言葉を受けても、ロイは反応しない。

《やれやれ。だったこれだけのことで心が——》

ハーデスが肩をすくめ、やれやれと首を横に振った矢先、彼の右腕が吹き飛び、巻き込まれる形でサマエルの片翼が根元から吹き飛ばされる。

《ぬう!?!》

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……!』

ハーデスだけでなく、サマエルさえも痛みの声を漏らし、舌を引つ込める。

ハーデスは解放されたリリスを一瞥すると、ロイに目を向ける。

彼は白いオーラを纏う左手をそちらに向けていた。

予備動作はおろか、オーラを溜めた素振りさえも見せず、彼は何かを放つたのだ。

ロイは左手を下げるとゆっくりと立ち上がり、ハーデスとサマエルに目を向けた。

その瞳はハイライトが消え、白く染まり、焦点がずれているのか、どこか危険な雰囲気
気を放っていた。

ハーデスは小さく笑う。

——ようやく。ようやく始まったか。

サマエルは舌を伸ばしてロイを狙うが、彼は再び左手をサマエルに向けてオーラを放つ。

サマエルのどす黒い舌とロイの放った白いオーラがぶつかり合い、壁や天井をさらに砕く。

二つは拮抗——することはなく、白いオーラをサマエルの舌を押し返して顔の右半分を吹き飛ばす。

『――』
声にならない悲鳴をあげながら、サマエルの体が倒れかける。

《やはり駄目か》

サマエルを魔方陣の先へと返しながら、ハーデスはピストル型の注射器を取り出す。

中はどす黒い液体で満たされ、あからさまに危険な雰囲気を放っていた。

「……」

ロイは左手の矛先をハーデスに変え、再びオーラを放つ。

ハーデスは瞬時に動きだし、余裕をもって放たれたオーラを避ける。

オーラの直撃を受けた神殿の天井は吹き飛ばされ、冥府の空を覗かせた。

ロイは瞬時に照準を正すが、ハーデスの接近のほうが一瞬早かった。

注射器の針がロイの首に刺さり、中の液体が流し込まれる。

ロイは目を見開きながらもハーデスを殴り飛ばし、注射器に刺された首を押さえる。

――が、特に気にする様子もなく壁に叩きつけられたハーデスに目を向ける。

体中の骨にヒビが入り、息も絶え絶えになったハーデスに歩み寄りながら、左手にオーラを込めていく。

《はあ……はあ……。これで、目的は果たされた……》

「……………」

ロイは苦しげに自分の胸を押さえ、その場でうずくまった。

息が荒れ、視界が歪む。体の中を溶岩が流れているかのような錯覚するほど、体の底が熱くなる。

心臓が破裂しそうなほど鼓動し、先ほど打ち込まれた液体が全身に行き渡っていく。

「ああ、あああああああああああああああつ！」

先ほど打ち込まれた液体の正体。それはトライヘキサの血液だった。

因子を仕込まれた男に、微量とはいえ血液を流し込めばどうなるか。

《ファファファ……ファファファファファファ！》

ハーデスの笑いがこだまするなか、ロイの体が白く発光しながらどんどん大きくなり、形が変わり始める。

この状態の彼を冥界に送り込めば、リゼヴィムと合わさって壊滅的な打撃を与えられるだろう。

多くの部下の命が失われたが、保険の一手も打ってある。そちらと合流出来れば、冥府を持ち直すことも――。

ハーデスの淡い期待は転移魔方陣と共に切り刻まれた。

彼の横に降り立ったのは一人と一匹。

《……狗、か》

「……………」

ハーデスの眩きに、鳶雄と刃は返さない。

彼らを氷の壁が囲むと共に、ラヴァニアとオルクスが現れた。

《ハーデス様……》

《やはり、おまえか。フアフアフア。裏切るとは思っていたがな……》

暴れまわる怪物から身を隠し、鳶雄はハーデスに詰め寄る。

「ハーデス殿、部屋に仕込まれていた転移魔方陣は斬らせてもらいました。……単刀直入にお聞きします」

壁を破壊して外に飛び出していた怪物に目を向け、目を細めると死にかけのハーデスを睨みながら訊く。

「……どうすれば止められる」

もはや敬意を払う素振りを見せず、一方的に問いかけた。

ラヴァニアの拘束術式で体を縛られながら、ハーデスは苦しげに言う。

《……止まらぬよ。ここを全て破壊すれば、どちらにしろ次は冥界に行く……。お主らの働きは、所詮は時間稼ぎにすぎぬさ……》

鳶雄の表情が険しくなるなか、ラヴァニアが彼の肩に手を置く。

「落ち着いて、深呼吸をするのですよ。似たような状況は、何度か経験済みなのです」

《あなた方がどのような経験をしたのかはわかりませんが、これと似た状況とは一体……?》

一人困惑するオルクスを他所に、鳶雄は顎に手をやり、氷の壁越しに部屋を見渡す。

そして、一ヶ所違和感を感じるものを見つけた。

玉座の横に、なぜか崩れていない場所があるのだ。怪しげな輝きを放つ魔方陣だけが
見ることが出来た。

オルクスが何かを察したのか、ハーデスに言う。

《先ほどサマエルをお使いしましたね。あの子に使ったので間違いはありませんね?》

リリスが因子を抑え込む一因だったことは確かだ。そのリリスが弱りきっているから、覚醒の時間がさらに早まった。

そう考えたオルクスは深く息を吐き、二人に告げた。

《私はサマエルの元に向かいます。どうにかすれば、リリスのオーラをある程度なら戻すことが出来るかもしれません》

「本当にそんな事が？」

鳶雄が問うと、オルクスは頷く。

《食べたものを吐き出させればいいだけのことです。少々危険が付きまといますが、一応は可能かと》

「お願いします。もしかしたら、あなたが頼みの綱になるかもしれません」

「それでは、私たちが時間を稼ぐのです。神殿は壊れてしまうかもしれませんが、それは先に謝ります」

《構いませんよ。冥府が滅びれば、それどころではありません》

オルクスの言葉に二人は頷き、氷の壁を越えて怪物のほうへと向かっていった。

《オルクス……》

ハーデスがオルクスに目を向けると、オルクスは落ち着いた様子で言う。

《ハーデス様。我々はもつと互いに歩み寄るべきだったのです。冥府は、冥府にしかありません》

《サマエルから龍の力を取り出すなど、自殺行為だぞ》

怪物の咆哮と共に放たれた熱線が、冥府の山々と、無謀にも挑んでいった死神たちを無へと還していく。

怪物が再び熱線を放とうとした矢先、その足四本が凍り付く。

「あまり暴れては駄目なのですよ」

ラヴァニアの神滅具——『永遠の氷姫』は、彼女の傍らに立つ三メートルほどの氷

像だ。

刃と同様に独立具現型に分類され、所有者の意思に依ってその場に参上する。

その氷像の力で、怪物の四肢を固めたのだ。

「では、あとはお任せするのです」

ラヴァニアが告げると、闇の世界が始まった。

その闇の中心に立つのは一人と一匹。鳶雄と刃である。

闇に包まれる鳶雄の口から、呪詛のような呪文が紡ぎ出される。

《——人の理を斬るなら幾千まで啼こう》

闇の侵食は止まらず、辺り一面を覆いつくしていく。

《——化生と凶兆、斬るなら幾万まで謳おう》

鳶雄の四肢に闇が張り付き、異形のものへと作り替えていく。

《——遠き深淵に届く名は、極夜と白夜を騙る擬いの神なり》

これこそが、幾瀬鳶雄だけの境地。セイクリッド・ギア 神器と混ざりあうことでたどり着いた、バランス・ブレイカー 禁手の新たな形だった。

今の彼と、彼が率いる漆黒の旅団であれば、神々ですら容易く屠るだろう。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

だが、今回の相手は神ではない。

その神ですら殺しきれなかった獣の子供であり、彼にとっては仲間の一人でもある悪魔の男。

鳶雄はゆっくりと息を吐き、眼前の獣に告げる。

『いきます。今回は、手加減なしだ……！』

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

神をも殺す旅団である、漆黒の狗たち。

神をも越えた獣の子供である、深紅の龍。

二つの力は、冥府を舞台に激突する。

「――すべては『革新』^{イノベイト}と『業』^{カルマ}のため、か」
彼らを眺める、少年の存在に気づくことはなく。

欠けた分はすぐさま闇から次が生じて穴を埋めていくが、それでも数は無限ではない。旅団の長である幾瀬鳶雄が消耗しきってしまえば、次がなくなってしまう。

残機が限られているという意味では、鳶雄のほうが劣性であった。

ドラゴンに決定打を与えることは出来ず、鳶雄は一撃でも当たればその時点で終わり。

その緊張感が、彼の神経を尖らせると共に、消耗を大きくさせていく。

少しだが荒れた息を整え、大鎌を構え直す。

オルクスがリリスを復活させるまでの間、何とか凌ぎきれば――。

鳶雄は自分のその考えの甘さを呪った。

殺す気で行ったとしても、それでもまだ足りないだろう。

どうにかしてダメージを与えられないものか……。

ドラゴンに対して次々と挑んでいく猟犬たちの動きを観ながら、鳶雄は対抗策を考える。

ラヴァニアに頼んで、増援を送ってもらおうように打診させたが、彼女から連絡がないことを考えると、なかなか難航しているのだろう。

そのラヴァニアは、リリスに解呪を施すために一度神殿に戻らせたが、そちらも難航しているのかもしれない。

リリースが死んでしまったら、その時点で打つ手なしとなる。彼女に関しては、ラヴァニアに頑張ってもらうしかない。

『オオオオオオオオオオオオッ!?!』

『っ！なんだ！』

突如として響いたドラゴンの咆哮に意識を戻すと、右目の付近から血が吹き出していた。

吹き出た血が雨のように降り注ぎ、鳶雄と彼の旅団を濡らしていくが、鳶雄は一匹の猟犬に目をやる。

血に濡れた刃をくわえた猟犬は、鳶雄の元に戻ると彼にそれを渡す。

鳶雄は刃についた血を人差し指で拭うと、親指と擦り合わせる。

少し粘性の強い血は、すぐさま乾いて固まった。

ドラゴンが何度も頭を振ると、右目から白い靄が立ち上って傷が塞がったのか、血の雨が止む。

先ほど以上に殺気のこもった瞳が鳶雄たちを捉えるが、対する彼らは落ち着いたものだった。

すぐさま治るのなら、目を潰し続ければある程度動きを制限出来るかもしれない。

かといって、やり過ぎると治らなくなる可能性もある。下手に後遺症を残してしまう

と、彼にも迷惑な話だろう。

何だかんだで気にしないような気もするが……。

思わず苦笑する鳶雄だが、表情を引き締めて大鎌を構えた。

『さて、俺も動くとするか』

彼が呟いた瞬間、姿が消える。

旅団に気をやっていたドラゴンは、一瞬で彼の姿を見失い、そして、視界が暗転した。神速で動き出した鳶雄と刃の同時攻撃で、両目を同時に潰されたのだ。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

ドラゴンが大きく体勢を崩した瞬間、鳶雄は地面を闇で覆い尽くし、闇から大量の刃を出現させる。

地面から生えた刃はドラゴンの四肢の全てを貫き、飛び上がれないように地面に縫い止める。

さらに追撃として巨大な刃を出現させ、両翼を貫いて飛行を完全に封じる。

その隙に、大量の猟犬がドラゴンに切り込んでいった。

——一度で駄目なら何度も斬ればいい。

鱗を少しずつ削りながら、確実に刃を通していく。

ドラゴンが小さく唸ると、深紅の粒子が舞い始める。

外に飛び出した影響で広範囲に散ったのか、物を溶かすほどの力を失っていたそれが、ドラゴンの周囲に集まり始めたのだ。

粒子に包まれた猟犬の何匹かが一瞬で溶かされ、彼らのくわえている刃と、ドラゴン自身を拘束する刃さえも溶かし始める。

鳶雄が小さく舌打ちをすると、ドラゴンが治りたての目を見開くと同時に、深紅の粒子が爆ぜた。

深紅の爆煙が鳶雄たちに襲いかかり、彼らの体を急激に溶かしていく。

闇を見に纏う鳶雄に大きなダメージはなかったが、猟犬たちはそうとはいかず、次々と消滅していった。

ドラゴンが翼をはためかせると、爆煙が吹き飛ばされ、周囲の被害が浮き彫りとなる。ドラゴンを中心に地面が抉りとられ、近くにあった岩は跡形もなく消しとんでいた。

猟犬たちはくわえていた得物ごと消し飛び、鳶雄の発生させていた闇も、ドラゴンの周囲には欠片も残っていなかった。

ドラゴンが小さく唸るなか、鳶雄は自身の鎌に目を向ける。

若干ながら刀身が爛れ、歪んでいた。

『さて、どうしたものかな……』

新たな鎌を闇より取り出しながら放った鳶雄の独り言に、刃は一度鳴いて答えた。

まだまだやる気の相棒に不敵な笑みで返すと、彼らの横に二つの巨大な影が到着した。

「苦戦中みたいだな。待たせた」

「お待たせつと」

雷を纏う巨大な猫型の怪物を引き連れた綱生と、風を纏う背に二対の翼を生やしたグリフォンに乗る夏梅だった。

「――で、どうする？」

猫の頬を撫でながら、綱生が鳶雄に訊く。

鳶雄は頷くと、ドラゴンに目を向ける。

『目を潰せばある程度のダメージを与えられる。何かしらの後遺症が残ってしまうかもしれないが、それしかない』

鳶雄の言葉に無言で頷く二人。

夏梅が周囲を見渡し、首を傾げながら訊く。

「ところで姫とオルクスさんは？」

『ラヴァニアはリリスの治療、オルクス殿はサマエルのところに向かった。プルート殿はどうした』

「死神が一斉に退いていったら、そのまま力尽きて倒れちゃった。とりあえず、結界だけ

張って、その場に置いてきたわ」

夏梅のどこか適当な言い方に、鳶雄は思わず苦笑した。

——が、ここまで来てあることに気づく。

『何も仕掛けてこなかった……？』

生き残りの猟犬たちが絶えず攻撃を続けていたとはいえ、ドラゴンがこちらに何もしてこないことに、流石に違和感を覚える。

鳶雄が目を向けると、何やら苦しんでいるドラゴンの姿が映った。

何かが喉に詰まっているのか、苦しげにえづいているのだ。

「なんか、ヤバくないか……」

「何か来るわよね、あれ……」

『二人とも、備えろ』

三人と一匹が構えた瞬間、ドラゴンが血の塊を吐き出した。大ききとしては、大の大人がすつぽり収まるほどだ。

吐き出された血の塊は不気味に脈動しており、怪しげな白いオーラを空气中にばらまき始める。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……』

断末魔に似た咆哮と共に、ドラゴンは崩れ落ちる。

倒れると共に地震に似た衝撃が鳶雄たちに襲いかかるが、倒れたドラゴンからの肉や骨が腐つていき、それに伴って腐敗臭が漂い始める。

三人と一匹の表情が険しくなるなか、五感の鋭い鳶雄と刃ジの表情は余計に酷い。

それ以前に、助けようとしていた男の成れの果てが、目の前で腐つていつているのだ。これでは助けようが……。

グシャー！

「『ッー』」

腐つていく肉の山を白い籠手に包まれた腕が生える。

飛び出た腕が力強く手を握ると、白いオーラが爆発する。

ドラゴンだったものの肉片が辺り一面にぶちまけられ、血の塊の中身であり、腕の持ち主が姿を露にした。

《はあああ………》

肩などに鋭角の目立つ軽ライト・アーマー 鎧アーマーに身に纏った男と思われる何者か。

背中に翼のように三対の角と思われる意匠があり、兜の一部が冠を思わせる形状だった。

兜の瞳にあたる部分是不気味な白い輝きを放ち、そこから血涙と思われる何かが流れ落ちる。

白い鎧が左手をまっすぐ横に伸ばすと、そこに身の丈を越える弓と思われる何かがり出される。

弓を地面に突き刺して固定し、何も持たずに右手で弓の弦を引くような動きをした瞬間、鳶雄たちはその場を飛び退く。

白い鎧が右手を開くと、鳶雄たちがいた地面が抉りとられる。

一体何を放ったのか。それはわからなかったが、その瞬間、彼らは同じ事を思っていた。

——当たれば間違いなく死ぬ。

痛いとか、苦しいとか、そんなものを感じる余裕なく、一瞬で死を与えてくるであろうそれを、白い鎧はただ息を吐くように自然に放ってきたのである。

『先ほどまでのあれは繭まゆ。本体はあれか……!』

どうにか着地した鳶雄は、白い鎧を睨みながら吐き捨てた。

攻撃をし続けていたドラゴンは、本体を守るただの繭であり、今まで与えたダメージは完全に無意味だったのだ。

「何だかよくわからねえけど、やるしかねえか!」

「あははは……。これは姫も呼んでこなきや駄目かな」

それぞれがやる気になるなか、白い鎧は彼らの方に向き直る。

人の形になってなお、その赤い瞳から放たれる憎しみの色は消えることなく、さらに濃く、深くなっていた――。

ハーデス神殿の地下深く。

少し時間がさかのぼり、鳶雄とドラゴンが激闘を繰り広げている真つ最中だった頃。

地上での激闘の余波も感じられなくなるほどの地下の奥底に、サマエルは捕らえられていた。

覚醒しかけていたロイの攻撃で、片翼と頭部右半分が削り取られて、痛々しかったその姿をさらに醜く歪めていた。

《……さて、始めるとしましょう》

一人でこの場を訪れたオルクスは、自身の得物である大鎌を構え、サマエルの腹に狙いを定める。

《……食べたものを、吐き出してもらいますよ。その腹、捌いても》

どこか後ろ向きな覚悟を決めた声音でそう呟くと、自身の体に特殊な紋様の魔方陣を刻み、足元に魔方陣を描くと、サマエルの懐に飛び込む。

そして、

《ぬうん!》

その腹に刃を突きつけた。

『オオオオオオオオオオオオ………ッ!』

サマエルが苦痛の声を漏らすと共に、オルクスの大鎌を中心に、サマエルの体を魔法文字が這っていく。

魔法文字の輝きが、先ほど設置した魔方陣と同調すると、サマエルの体から濡羽色のオーラが転送され始める。

オルクスはその様子を横目で確認した瞬間、サマエルの傷口から血が吹き出し、それを頭から被ってしまう。

聖書の神の憎しみの込められたそれは、ドラゴンに対しては絶対的な威力を誇るものだ。オルクスは純血の死神ではあるが――、

《ぬうおおおおおおおおお!?!》

全身を駆け巡る激痛に意識が飛びかけるが、歯を食い縛ってそれに耐える。

――全ては、愛する娘の未来のために……!

《おおおおおおおおおおお！》

オルクスは血を被ることもいとわず、鎌をさらに深く突き刺し、魔法文字の輝きをさらに強くしていく。

地上で白い鎧が出現したのは、それとほぼ同じタイミングだった。

ハーデス神殿の王室。

ドラゴンとなったロイが暴れまわった結果、もはや見る影もなくなったその場所で、二ヶ所だけ無傷の場所があった。

ひとつはラヴァニアの作り出した氷の壁で守られた、ハーデスが拘束されている部屋の一角。

もうひとつは、無造作に床に寝かせられたリリスの近くだった。

そのリリスを介抱しているのは、鳶雄たちとは別行動をとるラヴァニアだった。

サマエルによる呪いを出来る限り解呪し、治療を施していくのだが――、

「このくらいが限界ですかね……」

いかんせん、サマエルの呪いが強すぎる。

万全の状態のリリスならある程度対抗出来たのかもしれないが、消耗しきっている彼女に、その呪いは強すぎた。

他の手を思慮するなかで、突如リリスを囲むように魔方陣が展開され、濡羽色の輝きを放ち始める。それと共に、リリスの顔色がほんの僅かだがよくなっていた。

ラヴァニアは小さく笑むと、この場にはいないが、頑張ってくれているであろう死神に「ありがとうございます」と小さな声で礼を言う。

それとほぼ同時に、凄まじい振動が冥府の大地を揺らし、ぼろぼろとなっていた神殿がさらに崩れ始める。

「皆さんは大丈夫でしょうか……」

心配ではある。だが、彼らを信頼しているからこそ、彼女はここに残り、リリスを守り続けることを決めた。

冥府の荒野の真つ只中。

そこに転移用の魔方陣、それも悪魔たちが使うものではなく天使たちが扱うものが現れ、光が一気に弾けた。

そこに現れたのは複数人の天使たち。

ひときは目を引くのは、腰まである金糸のような綺麗な髪に、どこぞの赤龍帝なら見ただけで鼻の下を伸ばすであろう豊満な胸の女性天使。

最強の女性天使にして、四大セラフに名を連ねるガブリエルが、冥府に到着したところだった。

ガブリエルは周囲を確認し、そしてそれらを見つけた。

彼女の視線の遥か先では、いくつもの爆発が起き、雷が落ち、爆煙が何かによって切り裂かれ、闇から何かが生まれている。

この世のものとは思えない戦闘が繰り広げられるその場所を見つめ、ガブリエルはゆっくりと息を吐くと、周りにいる部下たちに指示を飛ばす。

「皆さんは死神の捕縛、及び情報の集積を。私はあの場所に向かいます」

だいたい状況は、ラヴァニアの報告で把握している。

あの戦闘を行っているのが刃^{スラッシュ・ドッグ}、狗チームと、自分の想い人であることも――。

だからこそ、彼女は自ら地獄に飛び込む覚悟を決めた。

ロスヴァイセと黒歌はリゼヴィムとの戦いに向かい、セラフォルは避難指示や各神話体系への協力を仰ぐために駆け回っている。

——彼を止められるのは、現状私しかない。

世界を救い、恋人も救うためには、自分が頑張るしかない。

自分にそう言い聞かせ、部下たちと別れて行動を開始する。

この行動が吉と出るか、凶と出るかは、彼女を含め、誰にもわからない。

sin06 懺悔 (ざんげ)

白い鎧が弓を構え、弦を弾く度に地形が塗り替えられ、漆黒の猟犬たちがその命を散らす。

その中でも刃 スラッシュ・ドッグ 狗 チームの面々は狼狽えず、白い鎧に挑んでいく。

隙を見つけた鳶雄と刃 ジン の一撃で鎧を斬られようと、神速で踏み込んだ夏梅とグリフォンによって鎧を削 そ がれようと、攻撃後の隙をつくかたちで綱生と彼の相棒である猫型の怪物——もはやサーベルタイガーと呼んでいいその雷撃に襲われようと、鎧は怯まな い。

避ける素振りも見せず、どんな攻撃を受けても怯まず、ひたすら弓を構え、弦を弾き、敵を討とうとする。

そんな機械と戦っていると錯覚しそうになる鳶雄たちだが、鎧の隙間や鳶雄と刃 ジン がつけた鎧を突破した切り傷から垂れる血と思われる体液が、白い鎧の中身は生き物であるということを知らしめる。

そして、その中身というのはおそらく——。

その予想が当たっているのか否か、どうにか判断をつけたい鳶雄は、大きく息を吐き、

夏梅と綱生に声をかける。

『二人とも、あれの兜を砕く。陽動を頼めるか!』

「了解!」

答えた瞬間、二人は動き出す。

夏梅とグリフォンは突風を発生させて視界を潰し、綱生とサーベルタイガーによる多重雷撃により、鎧に多少なりともダメージを与える。

「オラッ!」

綱生はサーベルタイガーをランスへと変え、瞬時に飛び出し、渾身の一突きを放つ。

鎧の脇腹を抉るように放たれたそれは、鎧を砕き、肉を削ぎ、そして綱生の手には、粘りが強く、生温かい返り血がかかる。

思わず表情をしかめる綱生だが、鎧が反撃に転じる前にその場を飛び退く。

そんな彼に反撃しようと、抉られた脇腹が元通りになると共に、白い鎧が矢をつがえた瞬間、二つの刃が合わさり、鎧の兜を捉えた。

それらを放った鳶雄と刃の得物には、微量の血液が付着しており、彼らが全力で今の一撃を放つたことを物語る。

その一撃で強烈な衝撃に襲われた鎧は、流石に片膝をつくが、すぐさま立ち上がる。直後、凄い音をたてながら兜が砕け散った。

そこから覗いた素顔は、鳶雄の読み通りだった。

整った顔立ちではあるが今は表情はなく、風になびく鮮やかな紅の髪は黒味が増し、本来碧いはずの瞳は白く染まり、幽鬼のようにどこか虚ろになっている。

それでも、どす黒く染まった瞳孔には、強烈な怨嗟の念が渦巻いていた。

今の一撃で出来たのか、左頬には真一文字に傷が刻まれ、ゆっくりと血が垂れていく。治癒しようと白い靄が傷口から漏れ出るが、刃越しに傷口に刻まれた呪文が怪しい輝きを放ち、回復を阻害し続けていた。

鎧を修復する様子もなく、白い鎧を纏った男——ロイは弓を構え、何もつがえずに弦を弾く。

それを察知した鳶雄たちはすぐさまその場を離れ、どうかその一矢を避けるが、その直後、ロイが右手を前に突き出す。

黒紅色くろべにの粒子が彼らを囲うように舞い散ったと思った瞬間、それと同じ色の爆発が発生した。

三人とそれぞれの相棒たちは黒紅色の爆煙が晴れると、彼らのいた場所の地面は抉られ、クレーターのようになっていた。

だが、そんな場所の中央にドーム型の闇の塊が鎮座し、それがなくなると、

『今のは、危なかった……』

「いきなり新技つて、危ねえな……」

「ひ、久しぶりに走馬灯が見えたわ……」

無傷の鳶雄たちとその相棒たちがいた。

爆発に巻き込まれる寸前に、鳶雄が自分たちを囲むように闇のドームを生成、その中に退避したのだ。

だが、問題は今の一撃が『滅びの魔力』によって起きたことだ。

こちらを油断させるためにトライヘキサがロイの姿形だけを真似た。その可能性が消え、本当に彼がロイである可能性が高まってしまった。

その場合、むやみに殺してしまうわけにはいかない。

鳶雄が案を思慮しようとした矢先、近づいてくる気配に気づく。

どこかに隠れていた死神の気配ではなく、かといって悪魔や墮天使のものでもない。

ロイもそれを察知し、弓をその気配の方向に向けるが、その瞬間、動きを止めた。

驚愕したように目を見開き、弦を弾こうとした右手を震わせる。

ロイの視線の先には、純白の翼を背に生やした女性天使——ガブリエルがいた。

ロイが体と思考を停止させるなかで、少しずつ、彼女の姿が大きくなっていく。

彼女がゆっくりと地面に着地すると、悲哀の念がこもった視線がロイに向けられる。

「……ロイ、様……」

「……………」

名を呼ばれても、彼は答えない。ただ、目を見開きながら、弓を構えてガブリエルに向けるだけだ。

鳶雄たちは万が一に備えていつでも動けるように構えるなか、ガブリエルはゆっくりと、一歩ずつロイに近づき始める。

ロイは表情をそのままに、弦を引く右手に力を入れる。

鳶雄たちが動き出そうとするが、ガブリエルが彼らを手で制した。

「……………皆が、あなたが戻ってくるのを待っています」

ガブリエルが声をかけるが、ロイは狙いをすまして弦を弾く。

鳶雄たちが声を出すなか、ガブリエルは目をそらすことなく、まっすぐにロイのことを見続けた。

放たれた不可視の矢が彼女を撃ち抜く——かに見えたが、放たれた矢は彼女の横を通りすぎ、遙か彼方の山の一角を吹き飛ばすだけにとどまった。

照準が僅かにずれた弓を放った姿勢のまま、ロイは怨嗟の念の込められた瞳で、まっすぐにガブリエルのことを見つめ返す。

「何をそんなに恨むのですか……………」

ロイとの距離を十分に詰めたガブリエルは、血が垂れる彼の左頬に優しく触れる。

「何がそんなに許せないのですか……」

「……俺、は……」

ロイが答えると共に弓が消え、彼の纏っていた雰囲気も変わる。

その様子を見ながら、ガブリエルはただ黙って言葉の続きを待った。

「……俺は、役立たずだ……」

「……守ると誓ったものも、守れねえ……倒すと誓ったやつも、倒せねえ……」

少しずつ瞳に意思が戻っていくなか、ロイがぼつぼつと言葉を紡ぐ。

黙って彼の言葉を聞くガブリエルの手に、彼の目元から垂れた、血とは違う温かい何かが当たる。

「……なにより……俺のせいで、あの戦いで死んでいった奴らの覚悟も、命も、何もかも無駄にしちまった……」

左目から涙を流しながら、ロイの告白は続く。

「……頼む。俺が、俺じゃなくなる前に、俺を――」

その時、ロイの左頬をガブリエルの平手が打ち抜いた。

少し湿り気のある音が辺りに響くが、ロイは特に痛みを感じた様子もなく、ただ俯く。

そんな彼の両頬に手を添え、半ば無理やり顔を上げさせると、まっすぐに彼の目を見た。

ガブリエルの迷いのないまっすぐな視線を受け、ロイはたまらず目をそらす、彼女は優しく笑んだ。

「彼らの死が無駄になるか、それはまだわかりません」

ガブリエルはそつと彼の頬の血を拭い、優しい声音で続ける。

「少なくとも、今は無駄にはなっていません。あなたは、あなたのままですから」

「……」

ロイは答えないままだが、ガブリエルは彼の頭を優しく撫で、彼に告げる。

「私や、セラフォル様、ロスヴァイセさんが、黒歌さんが、あなたが獣に堕ちないように、楔くさびとしてお側にいます」

「もう、一人で抱え込まないでください。私たちは、あなたにも、笑っていてほしいです」
ガブリエルが涙ながら伝えた想いに、ロイの両目から涙が流れる。

何もかも一人で抱え込んで走り続け、怪物に成りかけた自分を、彼女はいまだに想ってくれていた。

ガブリエルは涙を流すロイを優しく抱き寄せ、頭を撫でる。

「子供っぽいところがあるんですね。少し意外です」

「……うるせえ……」

拗ねたように返すロイだが、無駄に抵抗しようとはせず、ガブリエルに抱き寄せられ

たままである。

ガブリエルが苦笑していると、鳶雄たちの後ろに転移用の魔方陣が展開された。

ロイとガブリエルのやり取りを見守っていた鳶雄たちは、その魔方陣の出現に警戒や慌てた様子もなく、そこから現れる人物を心待ちにしていると、転移魔方陣の光が弾ける。

「お待ちせなのです。ようやく助けられたのですよ」

そこから現れたのは二人の女性。ラヴァニアと、彼女におんぶされたリリスだった。

リリスは眠たげにしているが、ロイとガブリエルの姿を見つけると、ラヴァニアの背中から飛び降りて二人の方へと向かっていく。

少しふらつく彼女の背中を心配げに見送り、鳶雄は元の姿に戻りながら言う。

「彼の意識が戻ったのは、ガブリエル様の到着とリリスの復調のタイミングが合わさったからこそ、か」

「オルクス様とハーデス様は、天使の皆さんに任せてきましたのです。オルクス様は、呪いにやられていましたが、もう病院に運ばれたので安心してください」

ラヴァニアの言葉に、ホッと息を吐いて頷き返す鳶雄たち。

次に彼らがロイたちのほうに目を向けると、

「ロイ、へいき……?」

「ああ、大丈夫だよ。ごめんな、リリス……」

「だいじょうぶ……」

ガブリエルから離れたロイが涙を拭い、いまだ顔色の悪いリリスと優しく抱擁を交わしていた。

その時、繋がりが二人に戻ったのか、それを証明するように、ロイの纏う白い鎧に漆黒のラインが走り、兜以外の破損箇所が直っていく。

ロイの瞳の色は白いままだが、怨嗟の念に染まっていた瞳孔が、深紅の輝きを取り戻した。

ロイはリリスを抱き抱^だえ^{かか}たまま立ち上がり、彼女の頭を撫でながら鳶雄のほうに目を向ける。

「すまねえ、おまえらにも迷惑かけちゃったな」

涙は止まったが、目元を赤く腫らしたまま謝ったロイに、鳶雄は一度頷く。

「大丈夫です。こちらは全員無事ですから」

「そうか。……で、これからどうするか」

白い鎧に包まれた自分の体を眺め、首を捻る。

全身の力を抜いて解除を試みるが、駄目だったようで、割りと大きめの舌打ちをした。「どうにかして、トライヘキサのオーラを発散させなきゃ駄目か」

「……うん。ロイ、ためすぎ」

眠たそうに目を擦りながら、リリスはそう呟いた。

ガブリエルは少し表情を険しくさせながら、ひとつ提案した。

「その力で、リゼヴィムを倒すことはできませんか？ いまだに撃破の報告がありませんので、まだ戦闘中だと思えますが……」

それに対して、鳶雄も同じく表情を険しくさせる。

「それは、賭けですね。今の状態のロイ殿をリゼヴィムに接触させた場合、どうなるか……」

リゼヴィムとトライヘキサの複製クローンが融合し、解放された時、ロイは一度暴走している。

鳶雄はそれを危惧しているのだが、

「それなら、大丈夫だ」

問題のロイ自身が否定した。

リリスと目を合わせ、次にガブリエルに視線を送ると、不敵な笑みを浮かべて鳶雄に言う。

「俺には、繋ぎ止めてくれる奴らがいる。怪物にはならねえよ」

ロイの言葉にリリスは笑って抱き締める力を強くし、ガブリエルも力強く頷いて返す。

「大丈夫です。万が一の時は、私が何とかします」

有無も言わせないセラフの言葉に、鳶雄たちは言葉を返さないでいた。

「——行かせればいいじゃないか、幾瀬鳶雄」

『ッ！』

突如として放たれた第三者の声と共に、謎の結界のようなものがロイたちを囲む。

彼らが構えるなか、その声と結界の主が、何も無い空間から突如として姿を現れた。

全身を覆うボデイスーツに、両腕には籠手と思われるものをつけた、年齢は兵藤一誠たちと大きく変わりはないと思われる青年。

ロイとリリスが「誰だこいつ」という表情を浮かべて首をかしげる中で、鳶雄たちは驚愕をあらわにした。

「おまえは……ッ！」

スラッシュ・ドッグ

「刃 狗 チームには初めまして。とすべきなのかな？まあ、こちらでは初対面のはずだから、これでいいか」

少し考えるように口を開いた青年を警戒しながら、ロイはリリスをガブリエルにおんぶさせると、右手に胸の高さまで挙げて、手のひらの上に黒い炎を出現させる。

ロイがその炎を握りつぶした瞬間、黒い炎が彼の体を包み込み、深紅に輝くラインが血涙のように右目から頬を伝って伸びていく。

その様子に驚いた楊子の青年は、面白いものを見られた子供のようことわりに笑みながら言葉
を続ける。

「やはり、その力は面白い。あなたが纏うその霊たちは、理の外にあるもの、というこ
とか」

神崎の言葉に訝しげな表情を浮かべる鳶雄たちをよそに、静かに殺気を放ちながら問
いかける。

「テメエ、何者だ」

その殺気を受けながらも、少年は丁寧ことわりに会釈をして返す。

「初めまして、ロイ・グレモリー。僕は神崎光也といひます。うん、本当の意味でこの言
葉を使うのは久しぶりだ」

何か意味深なことをいう神崎に対して、ロイは、

「……知らねえ名前だ」

少し考えてから返す。

二人のやり取りを黙って見守っていた鳶雄が、神崎に訊く。

『ゼニス・テンベスト』『イノベト・クリア』『煌天雷獄』、『蒼き革新の箱庭』の使用者。『始まりの闇』、神崎光也。今まで尻尾も掴
ませなかった男が、何の用だ」

明らかことわりな敵意を孕んだ声音に、神崎は肩をすくませて返す。

「何の用と言われたら、ただの挨拶に。としか返せないな。少し前から、彼に興味が沸いたものだから」

じつとロイを見ながら答える神崎に、鳶雄はいまだに警戒を解くつもりはない様子で鎌を構える。

そんな鳶雄を、神崎は手で制した。

「忘れたかい？ここは僕の空間だ。彼には効かなかつたが、キミには十分な効果があると思うよ」

神崎の言葉に、鳶雄が悔しそうに歯を食い縛るなか、ロイは再び白い弓を出現させた。

「……まあ、なんだ。用が済んだら帰ってくれねえか？こつちは忙しいんだ」

「ええ、そうさせてもらいますよ。お話は、また今度ということにします」

神崎はそう言うと、少しづつその姿を透明にさせていく。

完全にその姿を消す直前、

『すべては「革新」^{イノベート}と「業」^{カルマ}のため。なんてね』

という声が発せられた。

同時に彼らを囲んでいた結界のようなものが解除される。

『『業』^{ごう}と『革新』？ずいぶん今さらじゃねえか……』

ロイは弓を消しながら彼の言葉に不敵に返し、空いた手でガブリエルの手を取る。

「さて、終わらせにいくか」

「はいー」

リリスはぎゅつとガブリエルの服を掴み、一緒に行くという意思を伝える。

今までの彼なら、ガブリエルにリリスを任せて一人で向かったところだろう。

だが、先ほど言われた言葉が、彼の内にあるものを変えてくれた。

——自分一人で進むのは、もう辞めだ。

ガブリエルの手を力強く握りながら、ロイは笑う。

——あいつらを置いて、どこにも行かねえ。

記憶を失い、一人で戦い続けた男に、本当の意味で支えてくれたヒトたちへの想いが

戻る。

『さて、行くか。終わらせるのだろう』

「ああ。最期まで付き合ってもらうぜ」

『元よりそのつもりだ』

彼に憑く霊たちも、いつになくやる気な声で答えた。

——問題は何も無い。やることをやって、今度こそ帰るだけだ。

ロイを中心に転移用の魔方陣が展開され、輝きを放ち始める。

光が弾ける直前、ロイは鳶雄に声をかける。

「そんじや、後のことは任せたぞ」

「わかりました。そちらを、お願いします」

「おうよ」

ロイが頷いた瞬間、光が弾ける。

無事に転移していった三人のいた場所を一瞥し、鳶雄は仲間である三人のほうへと向き直る。

「それじゃ、こつちも仕上げようか」

「おう」

「うん」

「はいなのです」

綱生、夏梅、ラヴァニアがそれぞれ返事をするなか、それぞれは逃げた死神の足取りを追うために情報を集めに冥府に散っていく。

——戦いの終わりが、刻一刻と近づいていた。

Sin07 誇りと共に

冥界某所。会議室。

「やれやれ、あんまり無理するなよ？」

「ああ、大丈夫だ。アリサくんがしっかりと治してくれたからね」

俺——アザゼルは、何があったのか左胸に穴の空いた服を着たまま戻ってきたサーゼクスを心配しつつ、戦場を映す画面に目を戻す。

木が生い茂っていた山岳地帯は、獣に成り果てたりゼヴィムとそこから産まれ出る怪物たち、『D×D』のメンバーを中心とした連合軍が激突した結果、もはや草木一本生えない荒れ地へと成り果てていた。

アジユカが用意してくれた対抗術式のおかげで戦況はこちらに傾き始めているが、リゼヴィムをどうにかしないことにはどうにもならない。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

大地を揺らす咆哮と共に、リゼヴィムが口からブレスを放てば、山が、地面が抉られていく。

直撃すれば即死は免れないだろうが、俺の教え子や戦場にいる連中があそこまでわか

りやすい攻撃に当たるわけもなく、地形が変わるだけにとどまっていた。

まあ、その地形が変わるだけだったのが大問題なのだが、命には変えられない。何かあっても、死ななきや安いとはよく言ったものだと思う。

それはそれとして、

「鳶雄たちからの定時連絡がない。何かあったことは間違いないな」

「ロイは無事だろうか。流石にまた行方不明になったら、セラフォルーがもたない」

俺とサーゼクスがそちらの心配をするよそに、ファルビウムが表情を険しくさせた。

「……やっぱり、ちよつとずつ翼がしつかり始めてるね。下手したら飛び始めるよ」

「な……！ おまえ、そういうのは早く言え！」

「今気付いたんだから、しようがないじゃん」

怒鳴る俺をよそに、ファルビウムは特に気にした様子もなく息を吐いた。

「部隊に攻撃を翼に集中させるように指示を出して、それから後は——」

色々と策を巡らせているようだが、決定打がないのは致命的だ。いつまで経っても撃破できない。

やれやれ、これ以上進撃されるのは避けたいんだがな。

どうにかして奴の核を破壊できる一撃が欲しいところだ。

俺が作ったもので、何か強力なものがなかったか？ まあ、あったとしても、後で何を

言われるかわかったものじゃないけどな。

思慮していく俺の耳元に連絡用の魔方陣が展開され、だいぶ遅れた定時連絡が始まる。

ロイのことも話すだろうから、サーゼクスたちにも聞こえるようにスピーカーにしておくと。

『アザゼルさん。聞こえますか』

「鳶雄、遅いかったな。何があった」

俺が早口で訊くと、鳶雄も若干早口で返してくる。

『ハーデスは無事に捕縛、リリースとロイ殿は——』

「ロイに何かあったのか!？」

う。兄バカ全開で勢いよく席から立ち上がりながら訊くサーゼクスを横目に、鳶雄に言う。

「とりあえず、続けてくれ。ロイに何かあったのか?」

『リゼヴィムの元に向かいました。すぐにでも姿を現すと思います』

「待て。休憩もなしに向かったのか!？」

『はい』

なかなかの無茶をする同僚に、俺はたまらず息を吐いた。

今のあいつが行っても、消耗しまくりでどうにもならねえだろうが……。

鳶雄は続ける。

『おそらく、大丈夫でしょう。ガブリエル様も同行していますから』

「それはそうかもしれないが、本当に大丈夫なのか」

『それは、俺を信じてもらうしかありません』

鳶雄がそう言うのと、向こうで何かあったのか、何言かやり取りをすると『すみません。また連絡します』と言って一方的に切られてしまった。

まあ、死神どもが暴れているんだろう。その程度、あいつには障害にもならない。それは断言できる。

映像に変化が訪れたのは、鳶雄からの連絡が終わってすぐのことだった——。

俺——ロイとガブリエル、リリスが転移してきたのは、冥界の空の上だった。驚く暇もなく、重力に引かれるまま落下していく。

うん。雲が下にあるって、どんだけの高さからフリーフォールしてんだ。てか、座標ずれすぎだろうが。

それはそれとして、俺は手を繋いだままのガブリエルを引き寄せ、抱き止めると、いつものように翼を展開した。

その瞬間、俺の背後から何かが舞ったのか、視界の端に黒紅色の粒子が映る。

「……すいー」

俺に抱きついた姿勢のガブリエルがそんな声を漏らした。

ゆっくりと背中の方を向いてみると、背中にあつた三対の角のような突起物の間から黒紅の粒子が吹き出し、それが薄い膜となつて翼の形を作っているのだ。

ガブリエルが純白の翼を展開し、飛べるようになったところで体を離し、滞空したまま気配を探る。

——と、さつそく見つけたぞ。

「この真下か。存外いい場所に出られたみたいだな」

「わかりました。行きましょう」

俺たちは頷きあい、そのまま急降下していく。

大気を切り裂き、勢いのまま雲を突つ切つた瞬間、俺たちの視界に飛び込んできたのは、今にも飛び上がろうとしているリゼヴィム(?)の姿だった。

左手の手元に弓を生成し、体勢を整え、何もつがえずに弦を弾く。

弦に弾かれた空気が矢となり、刃となり、リゼヴィムの翼を撃ち抜き、地面に突っ伏させる。

『あまり悠長に攻めている時間はなさそうだな。短期決戦を薦める』

「わかってるよ、まったく。急かすなよ!」

落下しながら連続で弦を弾き、リゼヴィムの体と、その取り巻きの怪物どもを片っ端から吹き飛ばしていく。

着地点の安全を確保し、俺とガブリエルはそこに降り立つ。

周囲からは驚愕の視線が送られてくるが、それを無視するかたちで再び弓を構えて弦を弾き、リゼヴィムの膝を砕き、再びダウンさせる。

俺が不敵に笑むと、俺たちの元に近づいてくる気配が複数。

「ロイさん! その格好、それにその目はどうしたんですか!」

「とにかく、無事で良かったにや」

その先頭にいるのは、ロセと黒歌だ。

心配げな表情を浮かべているが、二人とも無事なようで何よりだ。

「すまねえ、待たせたな」

「待たせすぎにや。もう、こっちは大変だったつてのに」

「こつちも色々大変だったんだがな。まあ、その話は後か」

黒歌の頬を撫でながらそんなやり取りをしていると、ロセが頬を膨らませてご立腹の様子になっていた。

そんなロセの頭を撫でてやり、遅れて到着したりアスたちとヴァーリチームの面々に目を向ける。

「おまえら、無事でなによりだ」

「ロイお兄様、その瞳と鎧は、一体……？」

困惑しながら訊いてくるリアスだが、今はそれどころじゃない。

「細かくは後だ。少しだけでいい。時間を稼いでくれ」

俺はそう言いながらリゼヴィムに視線を送り、表情を引き締める。

先ほど砕いた膝がだいぶ治ったようで、ガクガクしながらも立ち上がり始めていた。

「一撃で決める。頼めるか」

弓を握り直しながら、再度確認を取ると、リアスたちはそれぞれ頷いてくれた。

「ヴァーリ、それでいいか。トドメを譲る余裕はねえ」

「……ああ。かまわない」

瞑目しながら一度頷いた。こいつなりに、色々と穏やかではないんだろうが、そんな余裕はない。決められる時に、一撃で決めてしまいたい。

問題はどこから射つかだ。下手な位置からじゃ、奴の核コアを撃ち抜いた勢いで射線上の山や友軍を吹き飛ばしたくはない。

吠えながら左前足で俺たちを踏み潰そうと踏み込んできたので、それぞれ一気に散って避ける。

飛び退きながら翼を展開し、奴の斜め上から弓を構えて奴の胸部にある核コアを狙う。

「ロイ様、大丈夫ですか」

「ああ。別に何かあるってわけじゃねえよ」

一緒の方向に避けてくれたガブリエルに返ししながら、左手に先端をドリル状にした矢を生成する。

いつもなら深紅の輝きをはなっているのであろうそれは、黒紅色に鈍く輝き、ほんのり熱がこもっているのか、蒸気が漏れ出る。

矢をつがえ、弦を引き絞る。

リゼヴィムが妨害しようと小型種を放ってくるが、それはリアスたちが持ち前のチームワークで迎撃し、本体が暴れようとすると、それをヴァーリチームが圧倒的な力をもって押さえ込む。

籠手の下の右腕に、血管が浮かび上がるほど力を入れるなか、そつとガブリエルの左手が重ねられた。

驚く俺をよそに、彼女は弓を握る俺の左手に右手を重ねる。

「言つたはずですよ。一人で抱え込まないでください。近くにいるのですから、もつと頼ってください」

「……そう、だな。頼むよ、ガブリエル」

微笑しながら頼むと、彼女は眩しいほどの笑みを浮かべて矢に光力を込め始める。

黒紅の矢にに神々しいまでの光が混ざり、独特の輝きを放ち始めた。

「んあ。リリースも」

寝ぼけ眼のリリースが、ガブリエルの肩に頭を乗せて顔を出す。

そのままリリースは手を伸ばし、矢に濡羽色のオーラを込め始めた。

二人に習うように、俺も込めるオーラの量を増やしていく。

俺のオーラである紅の色がさらに強く。

リリースのオーラのおかげで黒が漆黒へと変わり。

ガブリエルの光力が矢に更に力を与えてくれる。

俺一人じゃ、ここまで力強く、優しいオーラは出せないだろう。

『貴様に遺されたのは、我らの憎しみだけではない』

ああ、わかってるよ。憎しみだけが残されているんなら、俺はここまで来られなかった。

翼の維持ができなくなるなか、ガブリエルが素早く俺の体を引き寄せてくれた。されるがままになっていると、頭がとてつもなく柔らかいものに包まれる。

ま、またか……。もう、この際甘えさせてもらおう。ちよつと休憩……。

視界がぼやけたままだが、改めて悪魔の翼を展開し、ガブリエルの胸から顔を離す。彼女は赤面しながら、じつと俺の顔を見つめてきていた。

「あの、大丈夫ですか……？」

「ああ。ちよつと疲れただけだ」

手短にそのやり取りを終え、俺たちはゆっくりと地面に降り立つ。

大きく息を吐き、手頃な岩に腰をかけた。右腕に巻き付く深紅のラインは消えていないようだ。

リリスがガブリエルの背中から飛び降り、俺の膝の上に飛び乗った。

「ロイ、おわった？」

「ああ。とりあえず、これで終わり、かな」

強烈な倦怠感に襲われながら、無理やり笑みを浮かべてリリスの頭を撫でてやる。

「ん〜♪」

嬉しそうにしながら、俺の胸に顔を擦り付けてくる。まあ、それ以上に眠そうではあるけどな。

俺たちがじゃれあっていると、ガブリエルが俺の横に腰をかけた。

「お疲れ様でした」

「ああ」

「これからどうするつもりですか？」

「とりあえず、家に帰って、みんなに謝って、『ただいま』って言って、寝る」

ボケツとそんな事を口にしなが、俺はあることを思い付く。

ちらりと俺に抱きつくリリスに目を向ける。おとなしいと思つたら、規則正しい呼吸音と共に、肩が上下していた。

何だかんだで、もう寝てしまったようだ。

まあ、さつきの矢にもオーラを送ってくれていたから、余計に疲れちまったんだろう。仙術を使って周りの気配を探り、状況を確認する。

取り巻きどもも、リゼヴィムの撃破と共に死滅していつているようだ。これなら、勝ち決まったようなものだろう。

短く息を吐き、俺の隣に腰をかけるガブリエルに声をかける。

「なあ、ガブリエル」

「はい。何でしょ——」

一気に顔を近づけ、彼女の唇を俺の唇で塞ぐ。

軽く触れるだけキスだが、今はこれぐらいしかできねえ。こっちもギリギリだ。

いきなりのことで目を見開いて驚くガブリエルをよそに、顔を離して少しイタズラっぽく笑う。

「今までの礼つてことで、ひとつ、な」

「え、あ、はう……」

両手で顔を覆い、俺に背中を向けてしまうが、耳まで真っ赤になっていた。

彼女の様子に微笑しながら、俺が正面に向き直ると――。

「説明をお願いできませんか？」

鼻が触れあいそうな距離に、目からハイライトが消えたロセの顔があった。後ろにはニヤニヤしている黒歌の姿もある。

いつの間に来たのかはわからないが、見られていたようだ。

「ッ！」

「……どうしたんですか？早く説明してください」

いつか感じた殺気のようなものを感じたが、気のせいだろう。目の前のロセの目が怖すぎるんだが……。

俺は肩をすくめ、満面の笑みを浮かべる。

「後は頼んだ」

「「え？」」

三人が間の抜けた声を出すなか、俺はリリースをしつかりと抱きながら、背中から倒れこんだ。

右腕のラインが消え、全身の力が抜けていく。

「口、ロイ様!?!しつかりしてください!」

「もー、ロスヴァイセが怖い顔するからにや」

「え!?!わ、私のせいなんですか!?!」

視界が霞み、意識が微睡んでいくなかで、騒がしい三人の声が脳に響いた。

何だかんだで、ようやく帰ってこられた。

意識が消えていくなかで、そんな充足感が、俺の心を満たしていた――。

「……そこか」

白銀の鎧を身に纏う青年――ヴァーリ・ルシファーは、上空からあるものを見つけ、ぼ

そりと眩いた。

ロイたちの一撃で地面に穿たれた穴から這い出てきたのか、かろうじてヒト型をたもっている肉塊が、地面に降り立ったヴァーリのほうに顔を向ける。

その肉塊には左半分が溶けて骨が剥き出しになった顔のようなものが貼り付いており、体もドロドロに溶けていた。

ヴァーリはそのヒト型の顔を憎々しげに睨む。

「醜いな、リゼヴィム。貴様にはその姿がお似合いかもしれないが……」

「あ、ああ………」

ヴァーリの声に肉塊——リゼヴィムは呻き声で返す。

ロイたちの一撃で核の大半を消し飛ばされたが、幸運にもその一部が残っていたのだ。

だが、それはあの巨体を支える核として機能するにはあまりに不完全で、小さすぎる。

ヴァーリは鎧の籠手部分だけを解除すると手を指鉄砲のように構え、指先に魔力を込めていく。

「トドメを譲るつもりはない、か。なら、これは神が与えてくれたチャンスなのか？」

——悪魔なのにな、と苦笑しながら付け加え、躊躇いなく魔力弾を放つ。

弾丸として放たれたそれは逸れることなく、リゼヴィムの眉間を撃ち抜いた。

「あ、あ、あ………」

「さらばだ、リゼヴィム。貴様にルシファアの名を語る資格はない」

ヴァーリに眉間を撃ち抜かれ、リゼヴィムはその体を塵へと変えていった。

彼はその姿が完全に消えてなくなるまで、じつと見つめ続け、脳裏に焼き付ける。

——あれほど殺したくて堪らなかった男の最期が、こんなものか……。

あまりに呆気ない幕切れに、思わず苦笑が漏れる。

「おう、リーダー。終ったか？」

そんな彼に、仲間である美猴が声をかけた。

「ああ、終わった」

鎧を解除しながら手短に返してくるリーダーだったが、美猴はそんなもの気にする様

子もなく、彼の肩に腕を回しつつ笑う。

「さっさと戻ろうぜ。腹減っちゃまった」

「そうだな。と言つても、今日の調理担当は俺だ」

「うげ、またインスタントラーメンかよ……」

そんな愚痴を漏らしつつ、美猴はヴァーリの顔を覗きこむ。

憑き物が落ちたようにすつきりした顔をするリーダーに、美猴は堪らず吹き出した。

「どうした？」

訝しげに訊いてくるリーダーに、声を震わせながら答える。

「お、おまえ、そんな顔できるんだな」

「それはどういふことだ？」

「いや、何でもねえよ」

ニカツと笑いながら、二人は帰路につく。

戦いが終わり、復讐も終わり、残ったのは少しの虚無感と、次へと向かう覚悟。強者を求め続ける宛のない彼らの旅は、まだまだ終わることはないのだろう。

この世界には、リゼヴィムとは比にもならない強者が溢れているのだから――。

Return life01 病室にて

異常に重たい瞼を開き、ボヤける視界が安定するのを待つ。

『先日発生した、連合軍と魔獣の群れとの戦いの爪痕は、少しずつ癒されています。今回の騒動の主犯だったリゼヴィム・リヴァン・ルシファート、アガリアレプトの両名は死亡。彼らを支援していた容疑で、冥府の主神、ハーデスが拘束されました。この件に関して、オリュンポスの主神、ゼウス様は——』

つけっぱなしのラジオと思われる機械から、そんなニュースが流れていた。

視界が鮮明になるなかで、ボケツと天井を眺める。

フカフカのベットに寝かされているようで、長いこと寝ていたのか、体が思うように動いてくれない……。

大きいため息を吐き、鉛のように重い体をゆっくりと起こす。

……上半身裸なのは気にしない。きつとサイズに合う患者服がなかったんだろう。

改めて病室を見渡してみたが、見覚えのない場所だった。

いつもの『セラフォルー記念病院』の病室ではない。壁や天井は白一色で、専門的な研究施設とか、そんな雰囲気がある。

広さとしては、少し広めの個別の病室って感じか？

それはそれとして、頭がいてえ。二日酔いになった時みてえだ。

ふと、頭を押さえていた右腕を眺めてみる。

「っーこれは、また、酷いな……」

右腕を這い回る火傷痕。それは腕を伝って右肩に当たり、さらに頭のほうへと伸びている。

あの力を使いまくった影響なのかね？まあ、見た目の割に痛みがないだけマシか。

割りときめのため息を吐き、ベット脇に置いてあったお見舞いの品と思われるフルーツの詰め合わせに左手を伸ばす。

そして、その時になって気付く。左腕の手首にゴツイ腕輪が嵌められているのだ。

目を凝らせば、腕輪には様々な魔術文字が刻まれ、知っているものもいくつもある。

……封印に使うような代物が多い気がするが、まあ、理由がわかるから何とも言えねえな。

腕輪から視線を外し、手頃な位置にあったリングを掴み、そのまま口元まで運んで丸かじりする。

ほどよい歯応えと、少し酸味の強い甘さが口の中に広がっていった。

ああ、体に染み渡る。久しぶりにこんな甘いものを食べた気がするな。

夢中になって食べ続けると、手元から何もなくなった。芯を含めて食っちゃまったが、美味しかったからいいか。いい、よな……？

苦笑しながらベットから降りるために体を回し。ベットに腰をかけたまま両足をしっかりと床につけ、指を開いたり閉じたりして感覚を確かめる。

体のほうに問題はなさそうだ。問題は――、

「さて、あれを開けなきゃならねえのか」

機械でロックされた扉を睨み、そんなことを漏らした。

映画の宇宙船とかについていそうな自動扉だが、横にあるカードリーダーには赤いランプがついている。

殴れば開くだろうか……。

後頭部をボリボリとかきながら、立ち上がる。

腕輪はゴツイが、そこまで重さは感じない。

まあ、アザゼルかアジユカ様で作ったものだろうから、そこら辺は考えられているんだろう。

左腕の感覚を確かめ、扉のほうに近づいていく。

何度か拳をぶつけてみるが、反応はない。てか、どうやったら開くんだよ、これ。

扉の前で腕を組み、うんうん唸っていると、何かの機械音と共に扉がスライドし始め

た。

俺が間の抜けた表情をしていると、その扉の奥から黒髪の女の子を抱っこした魔法少女姿の女性が姿を現した。

女の子は、幼稚園年長ぐらいだろうか。ドングリみたいなクリクリとした目が、俺の姿を捉える。

「あ、おとーしゃん！おはよー！」

舌足らずな感じに俺のことを『おとーしゃん』と呼んでくる女の子。

……おとーしゃんって、どういう意味だ？

「え、ああ、おはよう……？」

困惑する俺をよそに、その子を抱っこしている女性——セラが俺に近づいてくる。

「セラ、おは——」

俺が彼女の手を取ろうと右手を伸ばすと、

「フーン！」

ベシンツッ！

「よおっ!?」

返答代わりの平手打ちが俺の頬を打ち抜いた。

打たれた頬を撫でながら、俺は涙目でセラを睨む。

「い、いきなり平手打ちはねえだろ!？」

「当然よ!今回ばかりは許さないわ!」

俺の言葉をはね除け、肩を掴んで前後に振り回す。

ああ、この感じ。懐かしいな……………。

数分して、ようやくセラが落ち着いてくれた。

「おとーしゃ♪おとーしゃ♪」

ベツトの上であぐらをかく俺の膝の上に乗り、ご機嫌そうにする女の子。

……………あ、八重歯なのね。かわいらしい。

「……………なあ、この子って」

「リリースちゃんよ。見ればわかるでしょ?」

「……………ああ」

当然のように言ってくるセラ。

確かに鼻とか眉の形とか、特徴は似ている気がするが、ここまで幼くはなかつたよな?俺が寝ている間に何があつたんだよ……………。

リリースを見ながら苦笑していると、ニコツと笑って返してくれた。

「か、かわ……」

思わず声が漏れるなか、セラはリリスを抱っこしながら言う。

「ロイが倒れた後、こんな姿になっちゃったのよ。アザゼルはオーラを消耗し過ぎたから、『低燃費モード』になっただんじやないかって」

て、低燃費モード……。まあ、そうなっても仕方ない事態ではあったが。

リリスはセラになついている様子で、セラもセラで彼女の頬をプニプニとつつき、リリスもニコニコしている。

な、なんだ、この胸にあるモヤモヤは……流行に乗り遅れちゃった感は……！
俺が貧乏揺すりをするなかで、セラが言う。

「さて、リリスちゃんは今先に戻っててね。一人で大丈夫？」

「うん、へーき！」

リリスはセラに降ろしてもらうと、トコトコと小走りしながら扉の向こうへと消えていった。

「……さて」

セラはこちらに向き直るとベッドの上に乗し、体を乗り出して顔を近づけてくる。

「セ、セラ……？」

「ちよつと黙って……」

セラは俺の頬に手を添えると、さらに顔を近づけてくる。

少しずつ近づいてくる彼女の顔に照れながら、言われた通り黙っていると、彼女の唇と俺の唇が触れあった。

軽く触れあったただだけのキスで、すぐに顔が離れていく。

思わず苦笑を漏らすと、それを待っていたと言わんばかりにセラが再びキスをしてきた。

油断して口が半開きだったためか、そのままセラの舌の侵入を許してしまい、互いの舌が絡み合う。

お互いの舌が絡み合う湿っぽい音が、静かな病室を支配する。

今度こそ顔が離れていき、俺たちを繋ぐように透明の糸が伸びていく。

「……ガブリエルの分は上書きできたかしら」

「……セ、セラ、今、なんて？」

蕩けた思考をどうにか纏めながら聞き返すと、セラはむすつとしながら俺の頬を摘まむ。

「私の目を盗んでキスだなんて、ずいぶん大胆になったのね？ 驚いちゃった」

「うう……」

「それに、私を眠らせて勝手に出ていったわよね？」

「おう……」

覚えがありすぎて返す言葉が思いつかない。

視線を泳がせながら言い訳を考えるなかで、セラは視線をそらすことなくじつと見つめ続けてくる。

……な、なんか、照れるんだが。

「なあ、ちよつと離れてくんない？」

「いや」

「そうですか……」

お互いに見つめ合うこと数分。

痺れを切らしたかのように、セラが口を開く。

「何か言うことはないのかしら？」

「……ご、ごめんなさい」

俺が素直に謝ると、セラは仕方ないと言わんばかりに息を吐いた。

「もつと早くそれが出てきても良かったんじゃない？」

「そう、かもな……」

俯く俺の顔を無理やり上げさせ、セラは優しく笑った。

初めて見た時と変わらない、輝くような笑顔だ。

俺が守りたいと思つた顔が、俺と一緒にいたいと思つた顔が、目の前にあつた。俺も笑みで返し、セラの目をまっすぐ見つめ返す。

言つてやろう。今度こそ、本当の意味で、この言葉を使うことが出来る。

俺は彼女の手を取り、出来るだけ優しく笑う。

「セラ……」

「ん？」

「——ただいま」

「ふふ、お帰りなさい」

優しく笑みながら返してくれるセラ。

ああ、この笑顔のために、俺は命を懸けられた。

結果的に余計な問題を抱え込んだけど、こいつがいれば、乗り越えられる。

……いや、違うな。

俺は苦笑し、病室の扉に目を向ける。

いつの間にか開いていたそこに隠れるように、三人が顔を覗かせていた。

「おまえらも来たらどうだ？」

「え？」

セラが首を傾げた途端、黒歌が待つていましたと言わんばかりに飛び込んできた。

そのまま俺の胸に——と思つた瞬間、セラの回し蹴りが黒歌を捉えた。

「に、あ、あ、!?」

ものすごく変な声と共に、黒歌は壁とキスをする。

その様子を見ていた後ろの二人は、驚きはするものの心配することはなく、俺のほうに近づいてくる。

「ロイ様あ、目を覚ましたと聞いてえ、飛んできましたあ」

ガブリエルが苦笑しながら間延びした声で言う、ロセが素早くセラの反対側に回り込み、俺の手を取った。

「ロイさん、良かったです！本当に、本当に……！」

声を震わせる彼女に「ごめんな」と謝りながら、優しく頬を撫でてやる。

「……だ、誰か、私の心配もして……」

体を起こした黒歌が、そんなことを漏らしていた。

俺は苦笑し、顔を真っ赤にさせている彼女に声をかける。

「あー、大丈夫か？」

「うう……遅いじゃ、テキストじゃ……」

わざとらしくうづくまって落ち込む黒歌をよそに、ロセが俺の手を握る力を強くした。

俺の手から、何かが軋む音がする程度に……。

「あの、ロセ……?」

「積もりに積もった話がありますが、とりあえず無事で何よりです」

「うん、だったら、離してくんない?」

「嫌です」

ロセは輝く笑顔で言った。

見ているこつちも気持ちがいい、優しい笑顔なんだが、目が怖い。ハイライトが消えてる。

俺が黙りこむ中で、完全復活した黒歌が笑う。

「ま、生きてりやいいにや」

そう言ってくれるのはありがたいが、目が怖い。どうしてこう、ハイライトが消えているのかね……?」

たぶん、まともなのはガブリエルだけ——、

「どうかしましたかあ、ロイさまあ?」

——と思っていた俺が甘かったよこんちくしょう!

あいつの目からも消えてんじゃねえか。俺が寝ている間に何があった!?

思わず頭を抱えそうになるが、両手はセラとロセに捕まっているためどうにも出来ない

い。

小さくため息を漏らすのが、四人には聞こえていない様子だった。

「ところで、リリスはどうした」

今のところ、俺がリリスを任せられるのは、『先生』とここにいる四人、後は俺の眷属たちだけだ。てか、それ以外にはリリスがなついていないだろう。

……じゃあ、クリスとかが見てくれていいのか？

俺の素朴な疑問に、ロセがニコニコと笑いながら答える。

「ジルさんやクリスさんたちが見てくれます。『邪魔しないようにするから、ゆっくりしてきてくれ』と、気を遣ってもらいました」

ああ、やっぱりあいつらか。まあ、それなら安心か。

俺が内心ホツとしていて、ロセは続ける。

「あと、ツヴァイクくんもついてくれていきます！」

「あいつ、無事だったか」

俺の確認に、セラが頷いた。

「あの後すぐに病院に運んで、その日のうちに治療をしたの。目を覚ましたのはこの前」

あいつも無事、か。それは良かった。

「まあ、『親父オリジナルが戻ってくるまでなら……』って言ってたけどね」

「そこんところ、しつかり教育しねえとな……」

一人ぼやくと、セラが「さて」と一度手を叩いた。

「ようやく四人揃ったんだから、私たちが溜めに溜めた不満をぶつけさせてもらおうわよ」
☆

ニコツと笑いながら告げてきた。

「これから、四人分の説教を受けなきゃならねえのか？」

「……なあ、病み上がりなんだが……」

「「それが何か？」」

「アツハイ」

こうして、エンドレスお説教が始まりを告げた。

まあ、こんな時間のために、俺は頑張り続けたつてもある。

だが、一人で抱え込むのは終わりだ。こいつらと一緒なら、どんなことでも乗り越えていける。

そんな事を思いながら、小さく笑みを浮かべる。

そんな俺を見て、セラは『シユビツ』と音が出るほどの勢いで指を突きつけてきた。

「ほら、ボケツとしていないで話を聞くん！」

「ははは……」

『『ははは』は一回！』

「……へい」

「そう言うところよ！」

—

『ポケットとしていないで話を聞く！』

『はいはい……』

『『はい』は一回！』

『……へい』

『そう言うところよ！』

ロイの病室の扉の前、タブレットを持ったアザゼルは一人腕を組んで唸っていた。

ロイが目を覚ましたことを聞いて急いで来てみれば、恋人たちが先回りしていたのだ。

彼女たちはどこから情報を仕入れたのか。

セラフオールとガブリエルはともかく、ロスヴァイセと黒歌は隔離用の病室のセキユリテイをどうやって突破したのか、キーカードを手に入れたのなら、いったいどこからか。

ロイからだけじゃなく、彼女たちにも聞きたいことが山ほどある。

——だが、まあ、明日でいいか。

ロイの検査を一刻も早く行いたいのが、ようやく再会できた恋人たちの中から引きずり出すほど、天界から堕ちてもそこまでは落ちぶれてはいない。

——本音を言おうと、後が怖いだけなのだが。

Return life 02 現状把握

セラたちからのお説教が終わった翌日。

俺——ロイが病室のベットで暇を持て余していると、突然扉が開いた。

「よお、目が覚めたんだってな」

「アザゼルか。なんか久しぶりだな」

「……おまえ、酷い限くまだぞ」

アザゼルの指摘に、俺は目の下を撫でながら、大きめのため息で答える。

昨日は本当に大変だった。眠いし騒がしいし、本当、大変だった。

昨日のことを思い出して項垂れる俺に、アザゼルは一度肩をすくめると言ってきた。

「ま、散々やった罰だな。むしろそれで済んだだけマシだと思え」

「だよな。家に帰ってえのに帰りたくねえ……」

絶対にお説教だぞ。今度は母さんと義姉ねえさんからだ、間違いない二日は拘束される。

テンションがだだ下がりになっていくなかで、アザゼルに訊く。

「——で、いつになったら帰れるんだ？てか、帰れんのか？」

鳶雄たちから報告がされているのなら、今の俺がどんな状態なのか把握しているだろ

う。

アザゼルは手元のタブレットを弄ると、それを手渡してきた。

それを受け取り、画面を確認してみる。

そこには家の間取りと思われるものが映されており、画面の右上に『特別隔離用住宅』というテロップが出ていた。

俺が疑問符を浮かべながらアザゼルを見ると、一度咳払いをして説明を始める。

「駒王町から駅三つ分のところにおまえの縄張りになる場所と、おまえたち用の家を用意中だ。この病室と同じセキュリティにしないから、ちよいと建設に苦戦してんのさ」

「縄張りに家、ね。おまえたちってことは、住むのは俺だけじゃねえのか。まあ、縄張りって言うくらいだからあいつらと、あとリリースが来るってのは何となくわかるが……」

俺が言うと、アザゼルは苦笑した。

「最初はその予定だったんだがな……」

「じゃあ、違うのか？」

俺の問いにアザゼルは頷いた。

「おまえの同僚のジルってやつ。あと、おまえの恋人四人もだ」

「あいつらか……」

あいつらのことだ、かなり無理を言ったことだろう。特にセラがわがままを言ったはずだ。

急に申し訳なくなつて頬をかくなか、アザゼルはわざとらしくため息を吐いた。

「住む人数が変わつて、設計を一からやり直さなきゃならないのに、おまえの予想のとおり、セラフオルーが聞かなくてな。それにミカエルとオーデインの爺さんが便乗してきやがった挙げ句、アジユカも『監視役は多いほうがいいだろう?』とか言つてきやがった」

「——で、後で言われても面倒だから、黒歌の分も考えてんのか」

俺の指摘に、アザゼルはまた盛大にため息を吐いて頷いた。

「つたく、オーデインの野郎は『今までの恩返しじや。おお、あやつの部屋はそこにしろ』とか、ミカエルは『彼女の恋路の邪魔はしたくありません。あ、部屋はそこを指定します』とか、アジユカも『まあ、彼らならこちら辺でいいだろう』とか、あいつら、建てるのはこつちだからって好き勝手言いやがって……!」

額に青筋を立てながら愚痴り始める。

まあ、そのことはこいつに任せるとしよう。それ以外にも気になることが多い。

「それで、その苦戦中のセキュリティって、どんなものなんだ?」

俺の問いかけに、興奮した様子で肩で息をしていたアザゼルは、何度か深呼吸をしてから言う。

「天界の第七天のセキュリティ、わかるか？」

「確か、あれだろ？許可なしに入ったら僻地に強制転移させられるとかなんとか」

「ああ。まさにそれをこの病室とおまえの新居に施しているんだが……」

言葉を詰まらせるアザゼルだが、再び大きなため息を吐いた。

「昨日、ロスヴァイセと黒歌が入ってきたら？」

「ああ、来たな。その前にリリスも来ていたが……」

「リリスはいいんだ、ちゃんとカードを作った。問題は二人だ。あいつらにカードを作った覚えはなかったんだがな……」

「どうせガブリエルが手引きしたんだろ？一緒に入ってきたし」

「そうか……。まあ、そうなるよな……」

——女って、恐ろしいな……。アザゼルは染々とそう付け加えた。

恋する奴は誰にも止められねえ。

俺が悪魔の生の中で学んだことのひとつだ。そこに性別とか、種族とか、そんなものは関係ねえ。

遠い目をしているアザゼルの腹をタブレットで小突き、意識をこちらに戻したところ

でそれを返す。

アザゼルが受け取ったところで、今度は左手首に巻きつく腕輪を突き出す。

昨日ちよつと弄ってみたが、外れる気配はなく、かといってガツチリと密着しているわけでもない。

「なあ、これについては何かないのか？」

「あ？ああ、それか。各神話の封印術のハイブリッドに加えて、リリスとオーフィスに加護を施してもらつてな。どうにか作り出した、おまえの中にある『因子』を抑制するためのものだ」

憂いを帯びた表情で言うアザゼル。

たぶん、これをつけるまでに色々あったんだろう。

俺の心中を察してか、簡単な説明を始める。

「最初はおまえが寝ている間に完全に封印するか、殺してしまおうって意見があつただ」

そう言うと、アザゼルは魔方陣から手鏡を引つ張り出して俺に差し出してくる。

それを受け取り、覗きこんでみた。もちろん俺の顔が映るわけだが……。

「ほえ、こんなことになつてんのか」

自分の右頬を撫でながら、間の抜けた声を漏らした。

右腕から続く火傷痕が、そのまま右目に伸びていき、遠目から見れば、血涙を流しているように思われても仕方ないと思うほどだ。

左頬の切り傷は、痕だけを残して塞がっていた。

……逆に言えば、鳶雄の一撃は俺に通ったってことだ。最悪の場合はあいつに——。そこまで考えて、俺は首を振った。

駄目だな。誰も置いて行かないと決めたのに、最悪の事態を考えちまう。

気分を変えるため、更なる問題を確認する。

おそらく、俺の顔で一番異常な部位——両目の瞳だ。

色は碧いままなのだが、瞳孔が深紅に染まっているのだ。自分の体なのだが、ぶつちやけ気味が悪い。

口を開けてみると、全体的に歯が鋭くなっていた。犬歯にいたっては、知らないヒトが見たら吸血鬼とかに思われそうなほどに鋭くなっている。

髪の色は紅だったものが少し黒くなり、なんか触り心地がいい。上質な毛皮を撫でてみるみたいだ。

昔の俺の見た目を知っている奴でも、きつと首を傾げてしまうほど、様変わりしてしまっていた。

こ、これは、俺が俺なのか疑われても仕方ねえな。ここまで変わっていたか……。

自分の顔を様々な角度から見ていると、アザゼルが言ってきた。

「――で、何回か試してはみた」

「……今、なんて？」

俺の確認に、アザゼルはあつけらかなとした様子で答える。

「何回か殺そうともしたし、封印しようともした」

「……………」

こゝ、言葉も出ねえよ。

俺は寝ている間に処刑されかけていたってことか……。

まあ、目が覚めた瞬間に暴れだされるとか考えたのかもしれないねえねどよ。

黙りこむ俺に対し、アザゼルはフツと笑った。

「冗談だよ。血とかを抜いて、その腕輪を作るためのデータを取っただけだ。まあ、殺し

てしまおうって意見が多かったけどな」

「よく殺らなかつたな……」

「……ガブリエルの意見に返せる奴がいなかつたんだよ」

首を傾げる俺に、アザゼルは言い聞かせるように言ってきた。

「『微睡みにある獣を起こし、あの戦いの続きを始めるおつもりなら、彼の首をはねれば

いいでしょう』ってな。会議場が静まりかえつたぜ？」

「ずいぶん物騒なことを言ったんだな」

思わず苦笑が漏れる俺に、アザゼルは妬みの視線を送ってきた。

「まあ、その後に『私の生涯をかけて、獣を微睡みのままにしてみせます。信じてください』って頭をさげられちゃあな……」

「……………」

ガブリエルがしたという宣言を受け、俺は口の端をひくつかせた。

ガ、ガブリエルの愛が重い。その発言は、遠回しに『一生彼の側にいます！』って宣言したもんじゃねえ？

アザゼルは「おまえも大変だな」と他人事のように（実際に他人事なのだが）告げってきた。

一度息を吐き、アザゼルに訊く。

「まあ、それはそれとして、リリースに何があったんだ」

真剣な声音で言うのと、アザゼルは苦笑した。

「倒れたおまえの病院に担ぎ込んで、視界の端でなんか光ったと思っただらああなっただよ。ガブリエルに抱っこされたままだったな」

「おまえが何かしたってわけじゃあないんだな？」

少し殺気のコもった声を出すと、アザゼルは慌てた様子で両手を顔の前で振り始め

た。

「そ、そこは信じてくれよ！今まで散々やっちゃまった俺が言えたことでもねえけど！」

「……仕方ねえな」

殺気を抑えながら、さらに訊く。

「で、『おとーしゃん』つてのは？」

「ん？ああ、『お父さん』が言えてないのか。寝ているおまえを見ながら心配そうにソワソワしてて、『なんか迷子の子供だな』なんて言ったら、セラフォルーたちが捲し立ててな……」

アザゼルが遠因で、セラたちが原因か。

「——ならいいか」

俺が言うと、アザゼルは面を食らったように驚いていた。

「どうした？」

「いや、多少は怒るのかもなって思っていたんだが、意外だ」

アザゼルの発言に、逆に首を傾げる。

「何でセラたちを怒らなきゃならねえんだよ。大切な恋人だつてのに」

「ちなみに、俺がそう呼べつて言つたとしたら、どうくる？」

アザゼルが自分を指差して訊いてきた。

おそらく興味本位なのだろう。アザゼルの悪い癖のようなものだが、俺はニコツと笑いながら言う。

「殺す」

「怖っ！なんていい笑顔で言いやがるんだよ、こいつ！」

リリースに悪影響を与える野郎を、生かしておく理由はない。即殺だ。

俺はニコニコしながら続ける。

「大事な家族を護るためだ。そのためなら俺は——」

顔を真剣なものに戻し、アザゼルにまっすぐ視線を送りながら告げる。

「神だろうが何だろうが、ぶっ殺す」

その宣言と共に腕輪が変形を始め、籠手のようになった。

同時に、視界が一変する。

アザゼルや俺、果てにはお見舞いの品である果物に至るまで、そこを流れるオーラが視認出来るようになったのだ。

その変化に困惑しながらも「どうでもいいか」と納得して、籠手を一瞥、さらに続ける。

「どうする。封印しておけば良かったは無しだぜ？」

アザゼルは額を流れる汗を拭うことはなく、ひきつった笑みを浮かべた。

「その後悔がしないように、色々と手をうってんだよ」
アザゼルがそう告げると共に魔方陣を操作すると、籠手から『ピピツ』と機械音が鳴った。

籠手を見つめて首を傾げると、いきなり視界が歪む。

「——っ。アザゼル、テメエ……！」

「腕輪は、おまえが戦闘体勢に入ると、籠手に姿を変えるようにはしておいた。万が一、おまえが戦う時に備えてな。だが、それをつけるために、保険は用意しておかなきゃ駄目だろう？」

籠手が腕輪へと戻っていくなか、俺は吐き捨てる。

「……強制的に眠らせるってか。まったく——」

面倒なものを仕込みやがって……。

俺の言葉は吐き出されることはなく、そのまま意識は微睡眠、ベットに倒れこんだ。

俺——アザゼルは、不機嫌顔のままいびきをかくロイの寝顔を睨むと、割りときめのため息を吐いた。

腕輪が変形するまでは予想通りだったが、まさか瞳孔が縦に裂けるとは思わなかった。あれじゃあ、獣そのものじゃねえか。

それに、病室から出す前に強制睡眠を使うはめになるとは思わなかったぜ。

ロイを起こさないように注意しながら、腕輪に魔方陣を当てる。

ああ、やはりか……。

再びため息を吐き、とりあえず病室を出る。

長い廊下を歩きながら、耳元に魔方陣を展開、シエムハザに連絡を入れる。

『アザゼル、どうかしたか？今日は例の男の見舞いだらう』

「ああ、それは済ませた。ひとつ問題があつてな……」

『どうかしたのか？』

シエムハザの問いかけに、俺は歯切れ悪く返す。

「例の、強制睡眠だが、成功した」

『暴れたのか？』

「いや、ちよいと試しただけだ。だが、本題はここからだ」

『もったいぶらずに教えてくれ。腕輪の管理はグリゴリだからな』

俺たち墮天使が中心となり、あの腕輪を制作した。弄れるのは俺たちだけだ。

逆に言うと、腕輪に不備があったら全部こちらの責任になる。まったく、また面倒な仕事を引き受けちゃったな……。

で、先ほど気づいた問題だが――、

「あの魔方陣、ロイに対しては二度と効果を出さないな。簡単に調べたが、耐性が出来上がっていやがったぞ」

『……それは問題だな。また新しい術式を組まなければならないのか』

「オーデインの爺さんと、メフィストに協力を仰ごう。これじゃあ、十年経たずに何も効かなくなっちゃおう」

『そう、だな。対策を練らなければ……』

お互いに重苦しい雰囲気を持ち始める俺たち。

『邪龍戦役』で死んじまった奴らには、この手の術が得意な奴らもちらほらいた。そいつらがいれば、もう何年か粘ることが出来たかもしれないが……。

そこまで考えて、俺は左右に首を振る。

無い物ねだりをしてどうする。今ある手でどこまでやれるのか。それを考えなきゃ駄目だろうが……！

再びため息を吐き、断りを入れてから連絡を切る。

さて、やることは多いが、次の術式を腕輪に仕込んだら、帰しても大丈夫か。下手にストレスを溜めさせると、何をされるのかがわからない。

そんなことを思いつつ、タブレットの画面に目を向ける。

あいつにはまだ建設中みたいに言ったが、墮天使の技術力で家自体は完成している。本当に、セキュリティの構築が大変なのだ。住む奴が増えに増えたらからな。

タブレットの電源を切り、本日何度目かのため息を吐いた。

あの野郎じゃないが、この状況は本当に――、

「――面倒なことになったな……」

俺の眩きは誰にも届くことはない。

もしかしたら、誰かが近くにいるかもしれないが、この時間に見舞いに来る物好きは俺以外にいないだろうからな……。

Return life 03 帰宅

病室に拘束されること一週間ほど。

アザゼルに眠らされてからというものの、毎日検査、検査、検査と、研究員や医者以外とはほとんど会うことなく過ぎていった。

毎日同じことの繰り返しに飽き始めたころ、

「さて、と。ここには戻ってきたくねえな……」

ワイシャツの上からフード付きの黒いコートを羽織り、薄茶色のズボンを履いた状態で、思い切り体を伸ばしながら独り言を漏らしていた。

そんなこんなで、俺——ロイは、検査も一段落ということのでめでたく解放もいうことになった。

ようやく患者服からまともな服に着替えることが出来たのだ。謎の達成感と安堵感がある。

……腕輪が引つ掛かって左腕の袖が伸びまくって大変なことになったが、それを見越してのゴム袖だったのだろつ。じゃなきや着られないしな。

まあ、もとから服装に関してはこだわりはまったくないし、さっさと帰りたい。その

後の説教が長くなりそうだからな……。

待ち望んだ退院なのに、テンションが下がりがまくっていくなか、不意に病室の扉が開く。

「よう、いつかぶりだな」

気安く右手をあげながら挨拶してきたアザゼルを軽く睨み、思ったことを素直に口にする。

「……なんだ、おまえだけか」

セラとか誰かが来てくれるのかなとか思っていたが、こいつだけとはね。まあ、あいつにも仕事があるし、大変なんだろう。

露骨に嫌そうな顔をしていると、アザゼルが額に青筋を浮かび上がらせながら言う。

「俺だけで悪かったな！まあ、おまえがそうなると思つてな、暇そうにしてたこいつを連れてきてやったぞ」

「私にや」

「黒歌じゃねえか！なんだ、いるなら最初に言えよ！」

アザゼルに呼ばれ、開きっぱなしの扉の隙間から顔を覗かせた恋人に、思わずテンションが上がる。

黒歌は驚きながらも嬉しそうに笑い、病室に入ってきた。

「家でのんびりしてたら、いきなり呼ばれたからびつくりしたにや。他の三人は仕事でこれないから、今のうちに甘えさせてもらおうかにやってね？」

そう言いながら、真正面から抱きついてくる。

そう言えば、前はセラに迎撃されて未遂で終わったんだったな。

俺の胸に顔を埋める彼女の髪をとかすように優しく撫でると、黒歌は顔を上げてニコツと笑う。

彼女の笑顔に見惚れつつ、俺も笑みを返した。

「アザゼルだけよりは何倍もマシだ。ありがとうな」

俺は本心をぶつけただけなのだが、

「……………♪〜」

言葉の意味を飲み込むのに時間がかかったのか、一拍開けてから照れ始めた。

真っ赤になった顔を隠すように、再び胸に顔を埋めてきた。

あー、駄目だ……、なんか、胸がもやもやする……。

自分を落ち着かせるように遠い目をしてしていると、アザゼルがジト目で睨んできていることに気づく。

俺は目を細くしながら睨み返す。

「なんだ」

「いや、見せつけやがってこの野郎なんて思ってたねえよ！」

不機嫌そうに言うアザゼル。

周りが身を固めていくなか、孤立し始めている独身男には辛いものなんだろう。

そこで、俺はアザゼルに気づかれないように小声で呟く。

「そうか……」

——なら、もつと見せつけてやろう。

俺はフツと鼻で笑い、ご機嫌そうにぴこぴこ動いている黒歌の猫耳を撫で、そのままマッサージのように優しく揉み始める。

「つー……ん……ふっ……にゃ……」

一瞬間黒歌だったが、全身の力が抜け始めたのか、どんどん俺のほうに体重を預けてくる。

最初こそ踏ん張ろうとしていたが、意志に反して体はリラックスをし始めたのか、最後は開き直って俺に甘えるように頬擦りしてきた。

俺は黒歌を支えながらベツトに腰掛け、彼女を膝の上に乗つけて耳マッサージを続けたようにするが——、

「おまえらなあああああつー！」

唐突にアザゼルがぶちギレ、怒鳴り声をあげたことで中断させられた。

睨む俺をよそに、アザゼルは続ける。

「この野郎、見せつけやがって！ なにか！ 恋人のいない俺への当てつけか！」

「ああ」

「即答！ おまえ、こんなことする奴だったか？」

どんなポリウムが大きくなっていくなか、黒歌は俺に寄りかかりながら、うるさいと言わんばかりに背中越しにアザゼルの睨む。

まあ、目がトロンとしてゐるし、耳を垂れているし、力が抜けているから尻尾も垂れ下がっているしで、迫力に欠ける。

いつもと違う恋人の姿に、俺の中の何かが悲鳴をあげ始める。あー、胸がもよもやする。なんだ、この気持ちは……。

意識をそらすため、俺はちよつとした心境の変化を説明することにした。

「今までは『教師』とか『同僚』とか、立場を気にする必要があつたけどさ、今の俺は『放浪者』で『テロリスト』で『監視対象』だろ？」

「な、何が言いたい……」

アザゼルの答えを急かすような問いかけに、俺は満面の笑みを浮かべながら言う。

「——吹っ切れた」

「ただ開き直っただけじゃねえか！」

アザゼルの指摘に「そうかもな」と軽く返し、黒歌への耳マッサージを続行する。さらに続ける。

「あと、こいつを含めた恋人と、リリスを前にすると、何でかはわからねえけど——」一度手を止めると黒歌に笑みを向け、優しく抱擁した。

「——なんか、他の奴のことがどうでも良く思えてくる」

俺の発言に、アザゼルは目を見開いて驚愕をあらわにした。

「……おまえ、本当に、そんな奴だったか……？」

「……さあな。表に出ないだけで、根っここの部分はこんな感じだったのかもしれない」自分の火傷痕だらけの右手を見つめ、苦笑が漏れる。

「こんなこと言っちゃまって、こいつらに怒られるかもな……」

「にゃ〜、ロイ〜」

「んっ」

黒歌に呼ばれて視線を下げると、蕩けた瞳で俺のことを見つめてくる彼女の顔が、鼻が触れあいそうなほどの距離にあった。

思いの外近かったので驚いたが、不意に彼女の唇が俺の唇に触れる。

誰かさんの驚愕の声が聞こえた気がしたが、気のせいかと聞き流し、彼女の口に舌を入れ、彼女のものと絡める。

「ん…………ふ…………ちゅ…………」

「ふっ…………ん…………にゅふ…………」

隙間から息が漏れるなか、誰かさんが叫びながら病室の外に飛び出していったを別に追いかける理由も、呼び止める理由もないので、無視を決め込む。

お互いの味を堪能したところで顔を離し、目を合わせる。

黒歌の蕩けた金色の双眸は次を求めてきているし、俺も答えてやりたいが、ここはぐっと抑えて息を吐いた。

「期待に応えてやりたいけど、また後でな。今は帰らねえと」

「……………ずるいにや、これじゃ、生殺しにや……………」

俺に寄りかかり、息を荒くしながら耳元で囁いてくる。

背筋がぞくぞくする感覚に耐えながら、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「どこぞのいたずら猫がしつこいんでね、たまには仕返しをしたくなるんだよ」

「うう……………」

黒歌は頬を膨らませると、俺の首筋に噛みついてきた。

ちよつとした痛みを感じたが、そこまで気にする必要はなさそうなので止めることはせず、彼女の髪を撫でる。

「また今度、な？」

「……………うん」

俺が言い聞かせるように伝え、黒歌が渋々と言った様子でうなづく、再び病室の扉が開いた。

「……………お、わ、った、か、お、ま、え、ら、ー！」

誰かに喉でも潰されたのか、それともやられるほど叫んだのか、声をがらに枯らせたアザゼルが戻ってきた。

奴の手には缶コーヒーのブラックが握られており、既に空っぽになっている様子だった。

俺は黒歌をお姫様抱つこで持ち上げると、彼女に気をかけながらゆつくりと立ち上がる。

「大丈夫だ。こいつは満足してないけどな」

「むう……………」

可愛く頬を膨らませる黒歌をよそに、アザゼルが何度か咳払いをしてから言う。

「なら、戻るぞ。グレモリー家の屋敷に向かって、しばらくの間は自室で待機してもらうことになる」

「ここに比べりや、天国だな。その前に地獄が待っているけどよ……………」

視線を横にそらしながら呟く。本当、何を言われることかね。

俺の心配をよそに、アザゼルはなぜか得意気に笑う。

「はっ！どうにでもなりやがれ！」

アザゼルの笑顔を思わずぶん殴りたくなったが、ここは我慢する。てか、黒歌を抱えているから殴れねえ。

……後でぶん殴ろう。殺さない程度に加減して。

その思いを顔に出さないように必死に抑えていると、アザゼルがカードを投げ渡してくる。

受け取りたいのは山々なのだが、黒歌をお姫様抱っこしているので俺の両手は塞がっているわけだ。

俺の首筋に心配をよそに、黒歌が気をきかせてキャッチしてくれた。

「それがおまえの許可証だ。それがないとここから出られないから、胸ポケットにでも突っ込んでけ」

「なるほどね。黒歌、頼めるか？」

「はいはい」と

黒歌はテキトーに返事をしながら、カードをしつかりと胸ポケットに突っ込む。

それを確認したアザゼルは病室の扉のほうに歩き出し、俺に告げてくる。

「いちおう退院ってことだが、週に一回の定期検診ってことで、毎週土曜に施設に来てく

れ」

「……面倒だな」

思わず本音を漏らしながら、アザゼルに先導される形で病室を出ると、そのまま廊下を歩いていく。

前を歩くアザゼルの背中を眺め、俺に抱えられている黒歌に目を向ける。

目があつた彼女は嬉しそうに笑い、俺も釣られるように笑う。

「あんた、ちよつと変わったにや。なんか、前に比べてずいぶんと柔らかくなったと思うにや」

「そうか？ たぶん、心境の変化つてやつ、なのかね……？」

質問されたはずのこつちが齒切れ悪く答え、申し訳なく首を傾げると、黒歌は可笑しそうに笑う。

「自分でもよくわかつてないのかにや？ まあ、そういうところがあんたらしいけどにや」
黒歌はそんなことを言いながら腕を俺の首に回し、器用に抱きついてきた。

辛くないように俺も腕の位置を彼女に合わせて支えてやると、俺の頬に口付けをしてきた。

その時、ふと気づく。

心境の変化。先ほどの質問の答えは本当にそれなのだ。

あんなに煙たがっていたこいつが、こんなにいとおいしいと思うなんて、俺の中の何かが変わったからに決まっている。

……まあ、遺伝子が変わりに変わりまくってんのは百も承知だけだな。

ふと、アザゼルが背中越しに俺たちのことを見てきていることに気づく。

どうせ、『また見せつけやがって』とか何とか思っているんだろう。離れるつもりはな
いから無視するがな。

なんてことがありつつ、ようやく転移室にたどり着いた。

アザゼルがどこかに連絡を入れると、部屋のちゅうおうおうに描かれた魔方陣が輝き始める。

ようやく帰宅、か。前に戻ったのは、アガリアレプトを追いかけた時だ。

あれから約二週間、半壊した屋敷は直っているとは思うが、大丈夫だろうか。

……まあ、他の屋敷に一時的に引っ越している可能性もあるのか。

俺が苦笑していると、アザゼルが言う。

「……いい加減離れたらどうだ？」

「え〜」

転移の準備が完了しても、俺は黒歌を降ろしていなかった。別に抱えたままでも転移には問題ないだろう。

アザゼルは諦めたかのように大きめのため息を吐き、転移魔方陣にオーラを送る。強くなつていく光が俺たち三人を包み込み、一気に弾ける。

光が止み、視界が回復すると、そこは見慣れた転移室だった。

懐かしく、落ち着く雰囲気を感じる。

本当に、帰つてこれたんだな……。

染々と思ひながら、部屋を見渡していると、

「お待ちしておりました。ロイ様、アザゼル様、黒歌様」

部屋の入口の脇にいたメイドが一礼してきた。

義姉さんじゃないとは珍しい。なんか、急な仕事でも入つたのかね？

メイドは俺に目を向け、冷静に告げてきた。

「旦那様と奥様が執務室でお待ちです」

だ、だよな……、うん、わかつてたよ……。

間違ひなく説教コースが待ち構える執務室に行く前に、黒歌を降ろす。

まだ足腰がしつかりしていないようだが、こいつを巻き込むわけにはいかない。

ふらつく黒歌の耳元に顔を寄せ、小声で告げる。

「部屋にいてくれ。しばらくしたら戻るはずだから」

「……わかった」

彼女の返事をきき、俺は微笑しながらメイドに声をかける。

「ちよつとこいつを頼めるか？俺の部屋まで連れていってくれりゃいいから」
「かしこまりました」

メイドが優雅に一礼し、黒歌に肩を貸しながら部屋を後にすると、アザゼルが二人について部屋を出ようとしていた。

「おまえはどうするんだ？施設に戻るのか？」

「どうするか。リアスたちと合流するにしても、まだ学校だろうしな……」

「学校だろうしなつて、おまえ教師だろうが……」

俺が嘆息しながら言うと、アザゼルは肩をすくめた。

「誰かさんのせいで施設から出るに出来なくなてな。おかげさまで、教師業は休みだよ」
「それはすまねえな」

いちおう謝ると、「今さら気にするなよ」と返ってくる。

アザゼルの返答に思わず苦笑するが、今度は邪悪な笑みが返ってくる。

「じゃ、久しぶりの親子面談を楽しんでこいよ」

右手をひらひらと振りながら退室していく。

今度なにか奢るか。テキトーに酒かなんかでいいだろう。

俺は息を吐き、執務室を目指して歩き出す。ああ、解放されるのはいつになるんだろ

うな……。

Return life 04 説教

黒歌たちと別れてから数分。

俺——ロイはたった一人で屋敷内を徘徊していた。

「……またここか」

本来執務室がある場所に、何も無い。

扉があるはずの場所には壁だけがあり、触れてみても何か起こるわけでもない。

もしかしなくても、これは——、

「また改築しやがったな……」

誰もいないことをいいことに、絶対に母さんたちの前では言えないことを吐き捨てる。

壊されたから改築したのだろう。いや、他の部屋の配置は変わっていないから、執務室をもつと防御しやすい場所に移したのかもしれない。それはそれで正しいことだろう。

……俺に伝えられていないことを除いて。

久しぶりにやらかした迷子というものに困惑していると、

「……何をしている」

俺によく似た声で話しかけられる。

その声の主のほうに目を向けると、そこには一人の青年が立っていた。

鮮やかな紅色の髪に碧い瞳^{あお}。左腕は三角巾で吊られ、右腕には俺と同型の腕輪（俺は黒紅が基調だが、彼のは紅が基調になっている）が嵌められている。

「ツヴァイか、久しぶりだな」

俺の息子にして眷属である青年——ツヴァイだった。

ツヴァイは俺を見つけて少し驚いた様子だったが、すぐに真顔に戻って答える。

「ああ」

思いの外素っ気ない返答に、思わず苦笑が漏れる。

いや、今まで敵同士だったわけだし、生まれてからまともな教養は受けてねえだろうから、仕方ねえのか……。

一度肩をすくめ、あの戦いで斬り飛ばしたはずの左腕を見ながら訊く。

「その腕、義手だよな？」

「そうだ」

左腕を一瞥すると、ぎこちなく開いたり閉じたりし始めた。

思い通りに動いてくれない腕にイラついたのか、少し不機嫌そうに言う。

「あなたの細胞を元に作られた腕を微調整したものだ。『生きた義手』とかいうものをつけた」

「ああ、あれか。作ってもらったな、そんなもの……」

少し遠い目をしながら言った。

アジユカ様が用意してくれたが、最終的に使うことのなかった義手。まさか、こんな形で使われるとは思わなかった。

「――で、その腕輪はどうした」

右腕の腕輪を指差し、再び問いかける。

「こっちか？あなたが核コアを抜いてくれたのはいいが、まだ『因子』が残留しているらしい。あなたに比べれば少ないが、念のためだそうだな」

「そうか。まあ、生きているんならそれでいいさ」

俺が微笑しながら言うと、「そうだな」と返ってきた。

……ここまで素っ気ないと、もはや愛想がないとか思われそうだな。

「――で、リリースは？クリスたちといるのか？」

「あなたの眷属はベルゼブブのところの手伝いに行つた。リリースは兵藤一誠たちの家にいる」

あら、ここにはいないのか。ミリキヤスとじゃれ合わせて和もうと思っていたのに。

まあ、それはまた後日ということで本題に入る。

「なあ、執務室はどこだ？」

「執務室……。ああ、あそこか……」

顎に手をやって思慮すると、思い当たる場所があつたようで、廊下の向こう側を指差した。

「そこなら、たしか——」

「あら、何をしているのかしら？」

ツヴァイが答えようとすると、彼の背後から言葉を遮る形で、俺が最も恐れるヒトの声が聞こえてきた。

ツヴァイは振り向くと、小さく頭を下げる。

「あら、やつと一礼を覚えたのね」

「ああ。！——ッ」

テキトー（おそらく本人は真面目）に返した途端、ツヴァイの頭にアイアンクローが放たれる。

ツヴァイはすんでのところで避けたが、おかげでそれを放ったヒトと目が合うことになつた。

「言葉使いは、また今度にします。今は——」

俺はそつとツヴァイの影に隠れようとしたが、そのヒトの優しい笑みおそろが視界に映る。
「こんなところで息子とスキンシップだなんて、急に父親らしくなったのではありませ
んか？ ねえ、ロイ」

「か、母さん……」

俺が最も恐れるヒト——俺の母親であるヴェネラナ・グレモリーが、顔に笑みを貼り
付け、じつと俺のほうを見てきていた。

母さんの登場に思わず身構えてしまうが、ツヴァイは不思議そうに首を傾げた。

「何を怖がっている。優しいヒトだと思いが」

何を言い出すのかと思えば、いきなりすげえことを言いやがったな……。

固い笑みを浮かべる俺をよそに、母さんは笑う。

「あら、優しいだなんて嬉しいわ。そこで縮こまっている息子にすら滅多に言われな
かったのに」

「……な、なんか、すみません」

萎縮しながら小声で謝ったが、母さんの耳に届いただろうか。

母さんは「さて……」と一度手を叩くと、俺の首根っこを掴んだ。

母さんは眩しいほどの笑みを浮かべ、俺に告げてくる。

「さあ、お説教の時間よ。ついてきなさい」

「……はい」

ついてきなさいと言われて引きずられる俺をよそに、母さんは廊下で突っ立っていたツヴァイに言う。

「あなたは検査も終わったのだから、好きなようにしていなさい」

「……そうか」

ツヴァイは頷き、俺とは逆方向に歩き始める。そして、手近な位置にあつた窓を開くと、そのまま飛び降りて行つた。

……あいつ、どこ行くんだ？てか、飛び降りやがつたぞ、窓から……。

なんて疑問を考える余裕は、母さんの眩きと共にあつさりと消える。

「まったくあの子は……。無邪気な子供のようにですね」

「まあ、外見はともかく、精神年齢は無邪気な子供つすからね」

俺はそう言つてツヴァイを庇うと、その流れのまま問いかける。

「……改築したんすね、驚きました」

「敬語が可笑しいわよ？」

俺の問いはあつさりとぶつた斬られ、言葉遣いを指摘された。

言われてみると、なんか変だ。寝ている間に忘れちまつたか？

首に手を当て、何度か咳払いを試してみる。いや、意味はないんだろうがな。

「いつの間にか、改築したんですね」

本当に直っているのかはわからないが、修正を加えて聞き直す。

「ええ、色々とありましたから」

『色々と』の部分強調しつつ、言葉を言い切ると共に俺のほうに目を向ける。

ま、まあ、確かに、色々あった。散々やらかした。

母さんの視線から逃れるように目をそらし、愛想笑いを浮かべる。

今回ばかりはやり過ぎたと思う。だが、あの土壇場ではあの手しか思い浮かばなかった。

その結果として、冥府が壊滅、ハーデスは捕縛、俺は少々面倒なことになった。

……いつも通りじゃね？とか思ったが、被害がとんでもないことになってんだな。

俺がボケツとそんな事を思慮していると、ふいに扉が開く音が聞こえた。

どうやら、目的地に到着したようだ。ああ、ここで俺は正座させられて、酷い目に遭うのか……。

俺が諦めをつけると共に母さんの手が離れ、支えを失った頭が床に激突する。

ゴツ……！と鈍い音が床に響き、鈍い痛みが俺の後頭部に走った。

まあ、怪我をした時の痛みに比べれば、蚊に刺されたようなものだ。……相当デカイ蚊にな。

慌てて姿勢を正して正座をすると、俺は間の抜けた表情を浮かべる。

「やあ、ロイ。久しぶりだね」

「に、兄さん……?」

怖い笑みを浮かべる兄さんと、視線が交差したのだ。

こうしてみると、本当に親子なんだなって思う。母さんがぶちギレた時に見せる笑顔にそっくりだ。

それはそれとして、兄さんはオフでも貰ったのか、魔王の制服ではなく、真紅の貴族服に身を包んでいた。

ニコニコ顔の兄さんの後ろには、礼の如くメイド服の義姉さんが待機しており、近くには給仕台が用意されている。

で、兄さんと母さんに挟まれる位置にある社長机のような場所には、怒ってますオーラを放つ父さんが座っていた。だが、二人に比べれば、父さんの怒気はまだかわいいものだ。

俺がポケットとそんなことを考えてつつ、兄さんに訊く。

「なんで兄さんまでここに……?」

「うん。とりあえず、事態が落ち着いてきたから、旧魔王派の構成員に刺された傷の療養を、とね。たいした傷では無かったけど、『邪龍戦役』から働き詰めだったから、アジュ

力からも『たまには休め』って言われていたから」

きつと俺が何だかんだしている時にも、兄さんは色々とやっていたんだろう。

「それは、大変でしたね……」

何となく視線をそらしながら言うと、父さんが一度咳払いをした。

俺は思わずビクツツと反応し、そちらに目を向ける。

「さて、仕方がなかったかもしれないが、セラフォルークンやロスヴァイセくんたち、私たちに無断で無茶をしたあげく行方不明になり、ようやく帰って来た息子、及び弟に対して、我々から一言ずつ言わせて貰おうと思う」

「は、はい……」

父さんから面と向かって色々と言われると、余計にとんでもないことをしたんだなと思う。

受け身の姿勢を見せる俺を一瞥すると、父さんは母さんに目を向けた。

「では、後の予定が詰まっているサーゼクスからお願いしよう」

「ええ、わかりました。では、まずは――」

ああ、これは長くなりそうだ……。黒歌を待たせてんのにな……。

ロイが家族会議を連行されたのと同時刻。

グレモリー屋敷のロイの自室にて。

「黒歌、ちよつといいか」

「こや？」

例のマツサージにより、いまだに足腰が立たない黒歌は、ロイのベットに腰をかけて部屋を持ち主の帰りを待っていた。

だが、部屋に入ってきたのはグリゴリのトラブルメーカーにして、技術顧問——アザゼルだった。

彼の入室に露骨に嫌そうな顔を浮かべる黒歌に、アザゼルは苦笑する。

「おまえら、似たような反応するんだな……」

「だって、今の私はいつとにやんにやんしたいのよ。それ以外の奴に用はないわ」

真剣な顔で言い切った黒歌の言葉に、アザゼルは複雑な表情を浮かべる。

「そのロイについての話なんだよ。そのにやんにやん？とか言うのにも間違いなく絡んでくる」

真面目に切り返してきたアザゼルに、黒歌は首を傾げた。

そんな黒歌の様子にため息を吐き、「やつぱりか……」と呟く。

「……他の三人には話してあるし、言われる前からある程度は察していたけどな」

「ちよつと、何の話よ」

ヴァーリチームの面々と共に、各地で暴走を起こした怪物たちの残党の討伐や、甘えん坊のリリスの世話、妹である白音（小猫）との修行など、何だかんだで忙しかったわけで、いつの間にか進んでいた話から一人だけ仲間外れにされていた黒歌は、明らかに不機嫌そうに返した。

アザゼルはそんな彼女の反応を無視しつつ、話し始める。

「単刀直入に言うのと、出来るだけあいつとの子作りは避けて――」

「お断りにや」

アザゼルの言葉を遮り、黒歌は一言で断じた。

予想通りではあったものの、取りつく島もなさそうな黒歌に、アザゼルは説明を始める。

「あいつの体にトライヘキサの『因子』がある以上、子供だけじゃなく、おまえにまで影響が出る可能性がある」

「それがなに？ そのくらい、問題ないわ」

「そのくらいじゃねえよ。もしかしたら、おまえや、おまえの子供が——」
「あの怪物みたいになるかもって言いたいんでしょ？」

黒歌の確認に、アザゼルは頷く。

ロイとツヴァイの体内にあるトライヘキサの因子は、他の生物の体内に入ると、その生物すら食い尽くさんと動き出す。

これはとある馬鹿がやらかした実験により発覚したことだ。その馬鹿は牢屋にぶちこまれ、使われた生物は形容しがたい肉塊へと変わり、最後は腐って塵へとなった。

件の二人は、リリスの加護や、遺伝子レベルの調整を加えられた結果、腕輪に刻まれた専用の術式だけで抑制することが出来ている。

黒歌たちにもリリスの加護は働いていることも確認してあるが、その子供にまで加護が及ぶのか。

アザゼルの最大の疑問がそこであり、さらに言ってしまうと、出産とは、母子共に大きな負担がかかるものだ。

もし、何かの拍子でその加護が弱まり、『因子』の侵食で母親が衰弱してしまった場合、母子共に間違いなく助からないだろう。

その時、その二人は『ヒト』として死ぬのか。

『因子』が暴走してしまえば、例の実験生物の最期のように、醜い肉塊に変容してしまう

ことだろう。

アザゼルの心配をよそに、黒歌は訊く。

「でもさ、あれじゃないの。グレートレッドの遺伝子がいい感じに『因子』とかいうのを

――」

「残念だが、それはない」

アザゼルの発言に首を傾げる。

黒歌の疑問に答えるため、アザゼルは魔方陣からタブレットを取り出してそれを渡した。

「あいつの体に、グレートレッドの遺伝子はない。おそらく、『繭』から『本体』が出てくる時に、除外されたんだろう」

アザゼルの言葉に、黒歌は目を向けていたタブレットを放り投げた。

「な!」と声を出しながらアザゼルは急いでタブレットに向けて飛び付き、どうにかキヤッチすると黒歌を睨むが、当の彼女はどこ吹く風と言わんばかりの顔をしていた。

「ま、どうでもいいにゃ」

「良くねえよ!」

アザゼルが思わず怒鳴ると、黒歌は優しく笑みながら自分の下腹部に手を添える。

「あいつとの子供は欲しいし、こう見えても私だって母親になりたいのよ?」

「それは見ればわかる。だがな、万が一——」

「その万が一が起こつたら怖いわよ?でもね」

黒歌はいつになく真剣な表情を浮かべ、アザゼルに真っ直ぐ視線を向けた。

「そんなに怖がつてたら、あいつと一緒にいられないわよ」

ロイと共にいるということは、間違ひなく様々な問題に直面することになるはずだ。

どうにかロイの力を手中に修めようする者から狙われる可能性もあるし、恨みを持つ者から問答無用で殺される可能性も捨てられない。

だが、それがどうしたと言えないと、きつと、彼の側にはいられない。

——まあ、そう簡単に手を出させるとは思えないけどね。

内心でそんな事を思いながら、アザゼルに目を向けると、

「……おまえ、本当にあいつに惚れてんだな」

呆れたように笑っていた。

黒歌は少しいたずらっぽく笑い、目を細める。

「まあにやゝ。それでも思わなきや、他に勝てないっしょ」

「——つて、他の奴らも似たようなことを言っていたぞ」

アザゼルから投下された爆弾に、黒歌の笑みが止まる。

「マジで?」

「マジだ。おまえも大変だな」

アザゼルはそう言うのと不敵に笑み、手元に魔方陣を展開してそこから何かを取り出す。

「ま、そういうことだから、ほらよ」

それを黒歌に投げ渡し、首を傾げる黒歌に説明する。

「ロイたちから得られたデータを元に、『因子』を予防する腕輪を用意した。でもな、過信はすんなよ？あいつとにやんにやんしたら、早めに検査を受けてくれ」

「……あんたがにやんにやんなんで、ただ気持ち悪いだけにや」

ロイとツヴァイのつけているものに比べ、だいぶ小型に作られた黒い腕輪を手の上で弄び、重さを確かめていた。

「結構軽いのね」

「グリゴリの技術力を舐めるなつての。まあ、ロイたちのものに比べて、だいぶ簡略化してあるけどな」

アザゼルはそう説明すると、半目で黒歌を睨む。

「おまえ、あいつとがつつりキスしたんだから、早めにつけとけよ。何かあつてからじゃ、俺たちも責任取れないからな」

黒歌のアザゼルの言葉に頷くと、その腕輪を右手首に嵌める。

あくまでロイに心配をかけさせないためと、これから彼と存分に楽しむためだ。

『カチツ』という音と共に腕輪が固定されると、その表面を魔術文字が薄く輝いた。

数秒してその輝きが止むと、アザゼルはタブレットに目を向けた。

「おし、問題はなさそうだな。我ながら完璧だ」

「ありがとにや。これで後腐れなく襲えるわ」

急に肉食獣の眼光を放ち始める黒歌を視界の端に捉えながら、明らかにヤバいものを渡してしまったと後悔を始めるアザゼルだが、

「そんじゃ、またな！」

現実から逃げるように部屋を飛び出して行った。

黒歌は自慢の猫耳を立てながら遠くなっていくアザゼルの足音を聞き、それが聞こえなくなつたところでロイのベットに身を投げる。

「はあく、あいつ、まだかにや〜」

いまだに戻つてこない恋人の姿を思い浮かべると、思わず笑みが溢れる。

当のロイは――、

「ツ！」

「あら、どうかしたのかしら？」

「いえ、何も……」

黒歌の言葉が聞き取れたのか、はたまた研ぎ澄まされた六感によるものか、彼女が待っていることを感じ取ったのだが、ヴェネラナにより止められる。

「私で最後なんですから、もう少し我慢なさい」

「……はい」

サーゼクスとグレイフィアは言いたいことを言うと退室し、ジオテイクスは叱られる息子に視線を送っていた。

ロイの集中が切れていることを察したヴェネラナはため息を吐き、指を一本立てた。

「では、これで最後にします」

「はい」

ヴェネラナは痺れた足を気にするロイに視線を合わせると、彼をゆつくりと、そして優しく抱擁した。

ロイが驚くなか、いつの間にか近づいてきたジオテイクスが、ヴェネラナとロイの二人を纏めて抱き寄せる。

驚愕しながらも両親の温もりを全身で感じるロイの耳元で、ヴェネラナは震えた声を絞り出す。

「前に言ったでしょう？心配するこっちの身にもなりなさいと……」

「……覚えてます」

ロイが呟くように答えると、ジオテイクスが彼の頭を乱暴に撫でる。

「私たちだつて覚悟を決めてはいるがな、さすがに堪える」

「……申し訳ないです」

「そう思うのなら、今度こそ約束しなさい」

ヴェネラナがそう言うのと、ジオテイクスは力を抜き、二人はロイから少し顔を離す。

少し離れた両親の顔を見つめるロイに、二人は優しい笑みを浮かべた。

彼が幼い頃に見せてくれた笑みと変わらない、慈愛に満ちた母親と父親が、そこにいた。

ヴェネラナは頬を伝う涙を拭うことはなく、精一杯の凛々しさを込めた表情を浮かべる。

「もう二度と、死んではなりません。家族を悲しませること、泣かせることを、絶対にしてはいけません」

「わかったか、ロイ。まあ、おまえのことだから『善処します』と返すんだらう?」

ジオテイクスの横槍に、ロイは思わず苦笑した。

「……その通りです」

変わらない息子の姿勢に両親揃って苦笑するが、ロイは「ただ——」と続ける。

「俺は絶対に死にません。二度と負けません」

強い覚悟の込められた宣言を、両親は無理に止めはしない。

一度決めたことを曲げないのが、グレモリー三兄妹の長所にして短所だと、もうわかっているからだ。

子供がそうと決めたなら、親はその背中を押してやるだけだ。

息子が覚悟を決めたように、二人もまた覚悟を決める。

彼が進むのは、間違いなく茨の道だ。なら、せめて彼が足を止めないよう、声をかけ続けてやろう。側に居続けてやろう。

二人も覚悟を決めたことを知ってか知らずか、ロイはだいぶ強くなった腕力で二人を抱き寄せた。

少し驚く二人をよそに、ロイは照れ臭そうに二人にだけ聞こえるように呟く。

「その、もう少しだけこのままでお願いします」

珍しく甘えてくるロイに驚きながら、二人は声が出ないように笑い合う。

——せめて、この平和が少しでも長く続きますように。

ヴェネラナは胸の内で静かに祈り、火傷痕に包まれたロイの右頬を優しく撫でる。

——彼の行く先に、平穏がありますように。

グレモリー屋敷、中庭にて。

「……彼は何であんなところにいる？」

「私に聞かないでください」

サーゼクスとグレイフィアは顔を見合せ、首を傾げた。

二人の視線の先には、

「えっと、うんと、大丈夫ですか!？」

「ああ……」

左腕の三角巾が枝に引っ掛かり、宙ぶらりんになっている無表情のツヴァイと、彼を降ろそうとおろおろしているミリキヤスの姿があった。

因みにだが、彼は窓から飛び降りた直後にあんなつたため、ロイが説教を受けている間、ツヴァイはずっとこの体勢である。

——新しい家族は、なかなか変わっているなあ。

サーゼクスは他人事なように思いつながら、おろおろしているミリキヤスに目を向ける。

「まあ、あの子がなついてくれたのならいいか」

「それもそうですね」

サーゼクスの言葉に、何となく嬉しそうに笑うグレイフィア。

そんな彼女の笑みに見惚れるサーゼクスだったが、

「父様、母様、助けてください！」

「あ、ああ。待っていてくれ、今行く」

ミリキヤスの言葉にハツとして彼の手伝いに向かう。

ロイとヴェネラたちが親子の仲をさらに深めている他所で、こちらもまた親子の仲を深めていく。

ようやく勝ち取れた日常を満喫しながら、サーゼクスは小さく笑みを浮かべた。

ようやく、あの計画を滞りなく行える状況になった。

あとは、それを各勢力に改めて打診し、『出場者』を募り、会場を揃えていくだけだ。
「サーゼクス」

不意に彼の愛する妻に名を呼ばれ、彼女が少し不機嫌そうにしていることに気づく。

思わず首を傾げると、グレイフィアは彼の頬を撫でた。

「オフの時くらい、余裕を持ちなさい。本当に倒れてしまいますよ？」

非常に珍しく、彼女に甘やかされたサーゼクスは面を食らうが、その後苦笑した。

「そうだね。とりあえず、彼を助けてあげないと」

再びツヴァイとミリキヤスに目を向けると、

「ツヴァイ兄様、離してください！」

「……………」

空いている足でミリキヤスを捕まえているツヴァイの姿があった。

相変わらず無表情だが、何となく楽しそうである。

「……………助けてあげないと……………」

「ええ」

「む」

僅かな殺気を感じ取ったツヴァイが、その気配の主に目を向けると、そこには二人の
修羅^{親バカ}がいた。

ツヴァイが首を傾げると、ミリキヤスを解放して彼が木から引きずり下ろされるのはほぼ同時だった。

—

「あゝ」

俺——ロイは廊下を歩きながら、額に手を当てながら間の抜けた声を漏らした。今考えてみると、俺は相当恥ずかしいことをしたのではないのだろうか。

久しぶりに親に甘えてしまった。気が緩んでいたのかもな……。

なんて思いながら、俺の自室の扉を開ける。

電気は消えているが、悪魔の遺伝子が残っているためか、暗くても問題ない。

俺は一度息を吐き、とりあえず羽織っていたコートを椅子にかける。

「あー」

ガチガチに固まった肩をほぐしていると、背中から抱きつかれた。

ワイシャツ越しに感じる柔らかさ、間違いない。

「黒歌、どうかしたのか？」

「……いつまで待たせるにや」

「……ごめん」

腹に回された彼女の腕に手を添え、右手首に嵌められた腕輪を撫でる。

「これ、俺と同じような物か？」

「うん」

背中当たる彼女の額が上下し、少しくすぐったい。

俺は頬をかき、一度息を吐いてから後ろに振り替える。と共に少し驚いた。

いつものことのような気もするが、案の定、黒歌は既に服を脱ぎ捨てて裸になっていたのだ。

なぜか彼女の裸体に見慣れている自分にも驚きつつ、火照ったように赤くなった彼女の頬を撫でた。

「なんか、おまえらにも面倒かけちまったな……」

「別に、このくらい気にしないにや……ん」

それだけで黒歌から艶っぽい声が漏れる。

「にや……ロイ……」

ワイシャツのボタンを外し、誘うように俺の胸に舌を這わせる。

猫の舌独特のザラザラとした感覚が俺を襲い、背筋がゾクゾクし始め、俺は気を紛らわせるように遠くを眺める。

ああ、駄目だ。俺ってこんなに我慢出来ねえ男だったのか……。

摩り切れかけた理性をなんとか繋ぎ止め、彼女を優しく抱き寄せると、耳元で囁く。

「本当にいいのか？」

「良くなきや、こんなことしないにや……」

「そうか」

そつと彼女をベツトに押し倒し、覆い被さると、どちらからという訳でもなく再び口づけを交わす。

後が怖いのが、知つたことか。目の前に俺を求めてくる恋人がいるのに、それを無視するなんて男が廃るつてもものだ。

自分にそう言い聞かせ、黒歌と体を重ねる。

まるでお互いの無事を確かめ合うように、二度と離さないと言い聞かせるように――
！。

Return life05 過去を語る

「ん……」

彼女——黒歌は、僅かな動きを感じとり目を覚ます。

戦闘とは全く違う倦怠感と、満腹になった時とはまた違う満足感に包まれ、今の彼女は最高に幸せだった。

それはそれとして、彼女は目を覚ました原因に目を向ける。

「くう……くう……」

彼女の胸に顔を埋め、寝息をたてている恋人——ロイである。

目を覚ます気配のないロイの頭を愛おしげに撫で、黒歌自身も優しく笑む。

黒歌に触れられたロイは一瞬体を強張らせたが、再び寝息をたて始めた。

胸に顔を埋められているため、ロイの寝顔を堪能できないのは残念だが、これはこれで役得である。

恋人の特権を堪能しつつ、二度寝を始めようとした黒歌だったが、近づいてくる気配を感じてそれを中断する。

ロイを起こさないようにそっと離れ、ベッドの端に放置されていた彼のワイシャツを

羽織る。

(あ……、こいつの匂いがするにや……)

僅かだが香る彼の匂いを堪能し、表情を綻ばせるが、その直後に部屋の扉が豪快に開け放たれる。

「ロイさん！部屋に戻ったと聞いて起こしに——」

部屋に飛び込んで来たのは恋人の一人——ロスヴァイセだった。

彼女の左腕には銀色の腕輪が填められており、それが黒歌と同じ効果のものだということはずぐに察することが出来た。

彼女は元気一杯と言わんばかりの絵柄を浮かべていたが、明らかにサイズが合わないワイシャツを羽織る黒歌の姿を見つけ、表情を驚愕に変える。

「く、黒歌、さん？どうしてロイさんのシャツを……う？」

黒歌の羽織るワイシャツをロイのものだと断定したロスヴァイセの目からハイライトが消え、いつものシーツ姿からヴァルキリーの鎧姿に瞬時に変わる。

明らかに殺気立っているロスヴァイセに怯む様子もなく、いたずらっぽく笑う。

「そりゃ、私の着物よりも近くに落ちてたから」

黒歌の言葉を受け、ロスヴァイセは部屋の端に目を向け、無造作に放置された着物を一瞥した。

黒歌に視線を戻し、彼女に右手を向けて禍々しいまでの輝きを放つ魔方陣を展開する。

「どうして、裸で、ロイさんとベットに……?」

もはや何を言っても撃つと言わんばかりに迫力を放つロスヴァイセを尻目に、黒歌は二又の尻尾を器用に使つてハートマークを形作る。

「そりゃ、恋人二人が男の部屋で二人きり。あとは分かるでしょ?」

優しく下腹部を撫で、勝ち誇つたように妖艶に笑んだ。

瞬間、ロスヴァイセの魔方陣から魔法弾が放たれる。

それは黒歌に吸い込まれるように突き進んでいくが、

「んあ……」

急に体を起こしたロイが無造作に振つた右腕に当たり、あつさりと打ち消された。

「……………」

突然の出来事に黙りこみ、目を見開く二人をよそに、ロイは再びベットに倒れた。

彼が寝息をたて始めたことに二人して安堵の息を吐きつつ、黒歌はロスヴァイセに怒鳴る。

「ちよつとあんた!今のマジで殺す気だったでしょ!」

「抜け駆けは許しません……!」

「そんな事言うんだったら、あんたも仕事終わりに来れば良かったでしょ！」

「ロイさが疲れてるかもって気を使っただ！そっちだつて気をさせえ！」

「変な方言出すんじゃないわよ！何言っているのかわからないにや！」

「おい……」

「……ごほん！——少しはロイさんが疲れているかもとか、ゆつくりとさせてあげたいとかないんですか!？」

「誘つてきたのはこつちにや！」

「え?!？」

「おい……!？」

「ふふん。どうかしたにや？言い返してきなさいよ」

「え、えと、あの、その……」

「おい！」

「はい！」

「にや？」

口論を続ける二人だったが、突如発せられた声に遮られる。

眠っていたはずのロイが体を起こし、右腕の調子を確かめる。

首をゴキゴキと鳴らし、気だるそうに二人を睨んだ。

「……………うるせえ」

「ごめんなさい」

割りとは本気の怒気が込められた言葉を受け、素直に謝る恋人二人。

ロイは後頭部をかきながらため息を吐き、側に落ちていた自分のズボンに手をかけ、とりあえずと言わんばかりにそれを履いた。

上半身裸のままベットから立ち上がり、欠伸を噛み殺しながら体を伸ばす。

「なんであんなに喧嘩をしていたかはわかるが、寝ている奴の横でやらないでくれねえか？」

頷く二人を横目に、目を擦りながら欠伸を噛み殺し、椅子にかけられたコートの懐を探り、強引にタバコを取り出すと口にくわえる。

睨んでくるロスヴァイセがうるさいだろうから、それに実家である屋敷の中であることを考慮し、火をつけることはない。

「いや、俺のせいなのか？でもな、あの状況で……」

一人でぶつぶつと呟くロイだったが、ロスヴァイセに目を向けて優しく笑んだ。

「とにかく、起こしに来てくれたんだろ？ありがとかな」

「え、は、はい……」

照れ隠しで真っ赤になった頬を両手で隠しながら、嬉しそうに笑うロスヴァイセを横

目に、黒歌は立ち上がる。

下着もつけず、ワイシャツのボタンも止めていないため、かなり大きめの胸が揺れる。その胸を凝視していたロイに対し、黒歌は飛び付いた。

それを読んでいたロイは、黒歌をしつかりと抱き止める。

前までなら避けられるなり、近くのを身代わりにしてくるなりしていたかもしれないが、今の彼はしつかりと抱き止めてくれた。

嬉しそうに彼の胸に頬擦りし、尻尾を左右に振る。

「ねえねえ、子供の名前どうする？ 私は女の子だと思っただけど」

「名前って、気が早くねえか？」

「こういうのは早め早めがいいにや。ねえ何にする？」

嬉しそうに笑いながら言う黒歌に、ロイは困ったと言うように苦笑しながら頬をかいた。

そんな微笑ましい光景を見て、一人怒りに震える人物がいた。

「……………」

ロスヴァイセだ。体から溢れ出る魔力で、銀色の髪が不気味に蠢く。

ロイはそれに気づきながらも、黒歌を髪を撫でる。

「やっぱり和風な名前がいいのか？」

「まあにやー、私は和風がいいかも」

「そうか」

ロスヴァイセは無表情で気配を殺し、本格的に未来の子供の名前を考え始めてしまうロイの背後に忍び寄り、そのまま飛び付いた。

「仲間はずれにしないでください!」

その叫びと共に、彼女はロイの首筋に噛みついた。

「いつ……!」

ロイがちよつとした痛みで表情を歪め、くわえていたタバコを取りこぼす。

ロイが落としたタバコが眉間を直撃した黒歌は、流石に怒った様子でロスヴァイセを睨む。

「ちよつと、何してるにや!」

「んー!」

怒鳴る黒歌を無視し、ロスヴァイセはさらに噛む力を強くする。

「口、ロセ、さすがに痛いんだが……!」

「むう!」

「悪かったって!謝るから離れてくれよ!」

涙目で睨んでくるロスヴァイセに早口で謝り、それを受けた彼女はそつと口を離し

た。

ロイの首筋にはくつきりと齒形が浮かび、ほんのり血が滲んでいた。

ロイがその傷口を擦っていると、ロスヴァイセは彼の背中に額を当てる。

「……黒歌さんばかり、ズルいです」

「ごめん」

背中越しに彼女を見つめ、申し訳なきように笑む。

そんな彼の表情を知ってか知らずか、ロスヴァイセは続ける。

「今度、埋め合わせしてください」

「わかった」

ロイの返事にロスヴァイセは顔を上げ、満面の笑みを浮かべた。

目のハイライトは、いつの間にか元に戻っている。

そんな彼女の笑顔に見惚れつつ、苦笑した。

「まあ、いつになるかわからねえけどな」

「むう。なら、今夜にでも……」

「流星にそれは……」

二人で今後のことを話していると、ロイに抱きついたまま放置されていた黒歌が、何かをいたずらでも思い付いたかのようにニヤリと笑う。

爪先立ちになると、そつと彼の首筋の傷を舐める。

ロイの口から変な声が漏れると、ロスヴァイセが額に青筋を立てて彼の正面に回り込んだ。

「黒歌さん、邪魔をしないでください！今は私が甘える時間なんです！」

「知らないにや。隙があれば攻撃が基本じゃないの」

そう言いきると、ロイに抱きつく力を強め、何度も彼の首筋を舐める。

彼女の矛先は、明らかに傷とは無関係の場所である、顔や胸の火傷痕にまで及んだ。

ロイはくすぐったいそうにしながらも、無理に引き剥がそうとはしない。

「ぐぬぬ……」

再びロスヴァイセの表情が険しくなると、黒歌の腕を掴むと、『戦車』^{ルーク}としての力を存分に発揮し、その腕力を持って彼女を投げ飛ばす。

宙に浮いた黒歌は華麗に回ると床に着地、ペロツと舌を出す。

「いいじゃん、このくらいさ。スキンシップは大事にやん」

「スキンシップ。なるほど、スキンシップですか……」

ロスヴァイセは確認するように眩くと、ロイのほうに向き直る。

「……ロセ？」

不思議そうに首を傾げると、そんな彼の唇がロスヴァイセの唇で塞がれる。

驚くロイと感嘆の息を漏らす黒歌。そんな二人をよそに、ロスヴァイセはロイの頭を押さえて逃がさないようにすると、舌を絡め始める。

奥手だった彼女の急な攻めに驚きつつ、ロイは横目で部屋の入り口に目を向けた。

「……何をしています……るんですか」

そこには呆れたような表情（ロイにしかわからないほどの変化）のツヴァイが立っていた。

「あ、おはようじゃ」

「おはよう……ごいいます……」

ツヴァイがぎこちない敬語で挨拶をすると、黒歌はニコツと笑った。

「ほら、先生。ちゃんと挨拶しなきゃ駄目でしょ？」

黒歌の言葉に、ロスヴァイセは名残惜しそうに唇を離すと、ツヴァイのほうに向き直った。

「……おはようごいいます、ツヴァイクン」

「おはようごいいます」

ロスヴァイセの挨拶に素っ気なく返すと、ツヴァイは頭から蒸気を吹き出しているロイに目を向けた。

「あなたの両親とリアス……様とソーナき……ま、サイラオーグ様、シーグヴァイラ様と、

それぞれの女王、^{クイーン}それと俺を含めたあんたの眷属、ヴァーリ、ジョーカーと刃^{スラッシュ・ドッグ}、狗、ミカエル様、ガブリエル様、アザゼル様が来ている。もう少してセラフオルー様とサーゼクス様、グレイフィア様と、ヴィンセント?とかいう奴も来るそうだ」

「勢揃いだな。何かあつたのか?」

慣れない「様」付けに苦戦するツヴァイに苦笑しつつ訊くと、当の本人は首を傾げた。

「よくわからん。あんたから話があると云つていたが」

「……?まあ、行けばわかるか」

取りこぼしたタバコを拾い上げ、椅子にかけられたコートの懐に戻すと、魔力を使つて瞬時に服をラフなものに着替える。

貴族服を——とも考えたが、場合によつては長話になるかもしれないとして、その考えは却下となった。

ロイがゴキゴキと首を鳴らす横で、黒歌はワイシャツのボタンを（胸元ははだけているが）止め、ロイのコートを手に取り、下着——正確にはパンツだけ——を確保する。

「ねえねえ、ズボンか何か貸して」

「あ?着物がそこにぶちまけられてんだらうが」

「いいじゃない。えっと、ここら辺かにや?」

黒歌はクローゼットと思われる場所を見つけ、躊躇いなくそこを開け放つと、テキ

トーに身繕い始める。

ロイはため息を吐き、彼の服に身を包む黒歌を、羨ましそうに見つめるロスヴァイセに目を向けた。

「……おまえはスーツ姿に戻ったらどうだ？」

「私も」と言われる前に先手を撃つ。

考えを見透かされていたロスヴァイセは頬を赤くして俯くが、瞬時に鎧姿からスーツ姿に変わる。

素直に従ってくれたロスヴァイセの髪を撫でつつ礼を言い、どたばたと騒がしいクローゼットを無視してツヴァイに目を向けた。

「さてと、場所は？」

「こつちだ。……あいつはいいのか？」

ツヴァイは無表情で黒歌のいるほうに目を向けると、

「お待たせにゃ！」

全身ロイの私服に身を包んだ黒歌がポーズを決める。

流石の彼女にも羞恥心が残っていたのか、コートのボタンが止められ、だいぶ露出を抑えたように思える。

三人の視線を一身に浴びるが、黒歌はどこ吹く風とロイの右腕に絡み付く。

「さ、早く行くにや。これ以上待たせちゃ悪いにや」

「そう思うんなら、自分の服を着ろつての」

「そうです、ずるいです!」

ロスヴァイセはそう言うと、ロイの左腕に絡み付いた。

両手に花とも言える状況だが、その中央にいるロイは疲れ果てたように息を吐く。

「……ツヴァイ、頼んだ」

「ああ、こつちだ」

ツヴァイの先導で屋敷を進む。

その間、上機嫌の黒歌と不機嫌なロスヴァイセに挟まれたロイは、何度も盛大なため息を吐いていた。

「——そんなわけで、だいぶ遅れて申し訳ない」

俺——ロイは、ぎっくりと遅れてきた経緯（黒歌と色々したというのは除いて）を説

明し、席についていた。

俺の右隣にはセラ、左隣にはロセ、その隣に黒歌、そこから俺の眷属たちといった感じに並んで座っている。

そんな俺たちと対面する形で席が並べられ、呼ばれた面々が腰をかけていた。

それはそれとして、

「おまえも座つたらどうだ……?」

俺は背後に控えているツヴァイに目を向け、苦笑混じりにいったのだが、当のこいつは、

「『騎士』^{ナイト}は『王』^{キング}を守ることに使命だと聞いた。なら、この位置がいいだろう」

母さんか、それともリアスカ、ツヴァイはそんな事を告げてきた。

使命って、ずいぶん大袈裟だな。単なる仕事のひとつみたいなものだろうに。

一度肩をすくめ、少し意地悪な質問をぶつける。

「ちなみに、座れと命令したら?」

「あんたの指示なら、従おう。だが、身の安全を考えるのなら、待機を指示しろ」

即答である。

「こいつ、真面目だな……。いや、そもそも指示をされて何かするということしか知らないのかもしれない。」

「……好きにしろ」

俺が諦めたように口にする、ツヴァイは少し狼狽える。

「……好きにしろ、か。むう……」

「どうした」

「いや、このまま待機する」

「そうか」

俺とツヴァイがそんなやり取りを終えると、クリスがため息を漏らす。

「そいつはずっとそんな感じですよ。指示を受ければすぐに済ませるのに、それがないと何もしないか突拍子もないことをするんです」

「……窓から飛び降りたな、そういえば」

母さんに好きにしろと言われ、窓から飛び降りたことを思い出す。

何であんなことをしたのかは気になるが、それはツヴァイのみぞ知る、だ、

「それはそれとして、あの子は？」

「えっと、兵藤さんの家にお邪魔しています。フィスちゃんになついているんですよ」

アリサが笑みながら言うと、リアスが苦笑した。

「ふふ、フィスとリース、ずっと一緒にいるんですよ？」

アリサたちの『フィス』や『リース』呼びに小さく首を傾げたが、ヴィンセントがい

るのだ、彼女たちの本名は隠しておいたほうがいいだろう。

「まあ、姉妹みたいなもんだしな。今度見にかねえと」

じゃれ合うというか、リリスが一方的に甘えている姿が目には浮かぶ。

俺がほっこりしていると、アザゼルが一度咳払いをした。

「——そろそろ始めていいか？」

「ああ、すまん。で、何を話せばいいんだ？」

痺れを切らすアザゼルに聞き返すと、ため息が返ってきた。

「まあ、忘れていても仕方がないか。おまえ含め、事情を知っている奴らに単刀直入に訊

くぞ」

アザゼルはそう言うのと、俺、セラ、兄さん、父さん、母さんに順番に目を向けた。

「——アポプスの言葉、どういう意味だ」

……ああ、それが。

完全に忘れていたことを思い出し、思わずため息が盛れた。

「……どうって言われても、言葉の通りだ」

疑問符を浮かべるリアスたちを一瞥し、最後にロセ、黒歌、ガブリエルに目を向ける。

「——俺には『前世』ってやつ記憶があつた」

俺が何てことのないように言うと、事情を知らない面々の表情が険しくなる。

俺は続ける。

「俺が俺ロイじゃなく、俺だれかだった頃の、人間だった頃の記憶がな」

俺はそう付け加え、アザゼルに目を向ける。

兄さんか誰かから話を聞いていたのか、そこまで驚いている様子はない。

「それが『異世界』ってやつなのかはわからねえ」

俺の告白に一樣に混乱が広がっていくなか、俺は自分の右手を顔の前にやり、火傷痕に目を向けた。

「……ただ、こつちの人間界より戦争は多かったと思う。俺は、物心ついた頃から戦って来たからな」

広げていた右手を閉じ、苦笑する。

「後で聞かれるだろうから言っておくと、恋人や家族、親友、仲間に隠し事はいけねえかなってな」

俺が言うと、ヴィンセントが半目で睨んできていた。

「……今さらおまえが何を言おうが驚かないって思っていたが、想像以上だ……」

「ふっ、俺は常に予想を越えていく男だぜ？」

俺がどや顔で言うと、ヴィンセントは「そんなキャラだったか？」と呟いて頭を抱えた。

俺たちのやり取りが終わった頃を見計らい、ロセが訊いてくる。

「……何であれ、ロイさんはロイさんなんですよね？」

「むしろ、その記憶があつたから今の俺になつたわけなんだがな」

「なら、それでいいです。私は今のロイさんが好きですから」

「そうじゃ。てか、そういうのは私を抱く前に言っておいて——」

黒歌はそこまで言ってから「しまった」と言わんばかりの表情で口を塞いだ。

だが、現実是非情なり。俺の肩に優しく手が添えられた。

俺は壊れたロボットののような音をたてながら、その手の持ち主——セラに目を向け

る。

「ロイ、どういふことかしら？」

力を入れれば折れてしまいそうな細腕から、俺の肩を砕かんばかりの力が込められて

いく。

「……欲望に誠実になろうかなと思ひまして」

「ふうん……」

明らかに納得していないセラから視線をそらすと、完璧に固まっているガブリエルが

視界に入った。

天使としてその反応はどうかと思うが、恋する乙女にそんなものは関係ないのだろ

う。……たぶん。

俺たちがいつものようなやり取りをしていると、ミカエルが訊いてきた。

「色々とお伺いしたいことは多いのですが、なぜその記憶が保持されていたのかは覚えていたのですか？」

「ま、まあな。なんか神様のな奴に会ったから、かな？」

何百年も前のことで、もううろ覚えだ。

女性だったってのは何となく覚えているが、どんな顔立ちだったとかは、ほとんど思い出せない。

俺の言葉を受け、ミカエルは顎に手をやった。

「あなたの記憶にある場所が異世界だとしたら、その神は変わり者ですね」

「……おまえがそれを言うのか」

アザゼルの突っ込みが入ったが、ミカエルはどこ吹く風と言った様子で返す。

「神が悪魔を生み出すなど、まったく、こちらに産み落としてくれれば良かったもの……」

「あんな戦時中大混乱のなか、そんなイレギュラーがいたら面倒だろうが」

ミカエルのアザゼルの口論がヒートアップするなか、ソーナが眼鏡の位置を直しながら言う。

「ですが、ロイ様。なぜその話を私たちにしたのですか？隠しておこうと思えば出来たはずですよ」

「さつき言った通りだ。隠し事はしたくなかったつてのと、色々と迷惑をかけたお詫びとして、かな」

俺が言うと、ソーナは不機嫌そうに目をそらす。

そんなソーナをよそに、アザゼルがリアスたち『王』^{キング}に言う。

「下手に巻き込みたくないから全員は呼ばなかったが、出来るだけ他言は控えてくれ。ここににいる奴ら以外に話す時は、ロイと俺を呼べ。そのほうが手っ取り早いだろ」

「……また説明しろと？」

「責任とれ」

「……了解」

俺たちが言うと、アリサが首を傾げた。

「これ、ジルさんには何と説明すれば……」

「まあ、あのヒトなら『それがどうした』とか返してきそうではあるけどな」

クリスが苦笑混じりにそう返し、アリサもつられて笑みを浮かべた。

俺は一度息を吐き、席を立つ。

「納得してくれていなくても、それは仕方がないことだ。俺自身も突拍子のない話をし

ていることは承知している」

その後、部屋に集まってくれた全員に目を配り、深々と頭を下げた。

「今まで隠し事をしていたこと、そして多大な迷惑をかけたこと、この場を借りて謝罪したい。——本当に、申し訳なかった」

たったの数秒のわずなのに、数分間頭を下げているように思えてくるなか、リアスの声が響いた。

「お兄様、顔を上げてください。それはそれでこつちが困ります」

困った時の声音のそれに、俺はゆっくりと顔を上げた。

リアスたちは一様に苦笑を浮かべ、目を合わせる。

「何であれ、お兄様はお兄様です。私たちがどうこう言うつもりはありません」

リアスの言葉に、ソーナ、サイラオーグ、シーグヴァイラがそれぞれ頷いてくれた。

その際に、ヴェインセントが言う。

「ま、男なら隠し事のひとつやふたつあつて当然だろ。それを告白してくれた奴を蔑ろにするほど、落ちぶれてないってよ」

「……ありがとう」

無意識の内に盛れた言葉に、ヴェインセントは「よせよ」と苦笑した。

「私の、いえ、私たちの気持ちも変わりません。あなたを想う気持ちは、いまさら揺らぎ

ません」

ガブリエルの微笑と共に送られた言葉に、ロセと黒歌は頷いた。やっぱり、あの神様に感謝しねえとな。他の場所じゃ、こいつらには出会えていなかったはずだ。

「そんなじゃあ、改めてよろしくつてのと」

全員を見渡し、最後に両親に目を向け、最後にセラに目を向ける。

彼女と目があうと、自然と頬が緩み、笑みを浮かんだ。

「——いまさらながら、ただいまってことで」

「ふふ、おかえりなさい」

セラも笑みで返し、俺の手を優しく握ってくれた。

ようやく、この言葉が言えた。

俺が安堵の息を吐くなか、背後から、

「——これが家族というものか……」

という呟きが聞こえた。そんな気がした——。

Return life06 父の代わりに

俺——ロイの告白から幾日か。

「あゝ、暇だ」

現在俺は、屋敷の自室で相変わらずの待機状態だった。

ベッドに寝転び、ポケットと天井を眺める。

このまま寝てもいいんだが、さっきまで爆睡していたためか、眠れる気がしない。
寝返りをうち、体ごと右を向けると、そこにいるのは、

「にやふ、ん……………にや……………」

「ふにゆ……………くう……………えへへ」

爆睡している恋人である黒歌と、愛娘であるリリスがくつついて寝ていた。

寝ているリリスに胸を揉みしだかれて、黒歌が寝ながら喘いでいるのだが、気にしない方向で行こう。

少し前までは二人とも起きていて、三人で遊んでいたのだが、リリスが眠いということで、三人で川の字（リリスが真ん中）で睡眠。……………で、俺だけ早めに起きてしまったわけだ。

二人を起こさないように体を起こし、先日設置したテレビの電源を入れる。

『先日発表された、レーティングゲーム国際大会開催につきまして、各神話勢力での話し合いのもと、各地で予選大会の準備が着々と進んでおります。それにつきまして、当番組では——』

そこまで聞いてテレビのチャンネルを変える。

レーティングゲーム国際大会。俺は関係ないと言いたいところだが、そうもいかない。

むしろ、俺はそこに飛び込むことになるのだ。

——俺の意思は関係なく、文字通り強制的に。

再びため息を吐き、数日前、俺がリアスたちに秘密を告白した直後のことを思い出す。

「——さて、ロイからの話が終わったところで、俺とサーゼクスから話がある」

話に見切りをつけたアザゼルは、サーゼクスに一瞥をくれてからリアスたち

『ルークリーズ・フォー』
『若手四天王』に目を向ける。

それに真つ先に反応したのはヴィンセントだった。

興奮した様子で前のめりになりながら訊く。

「もしか、一部で噂されているあれのことですか！」

それにサーゼクスが頷き、苦笑した。

「その通りだよ。どこから漏れたのかは、今回は聞かないでおくでしょう」

「おおー！」

一人で感嘆の息を漏らすヴィンセントをよそに、アザゼルが数度頬をかいて言う。

「なら、話は早いな。もう少ししたらニュースで流していいぜ」

「言質もらいましたよ。流しますからね」

ロイは勝手に話を進める三人を興味なさそうに眺め、欠伸を噛み殺すと、サーゼクスに問いかけた。

「——で、何を始めるつもりなんだ？」

「レーティング・ゲームを悪魔だけでなく、各勢力から選手を募って行う、『レーティング・ゲーム国際大会』だよ」

『ッ！』

「ほお……」

サーゼクスの発言に、驚愕を露にするリアスたちと、不敵に笑むヴァーリをよそに、サーゼクスは続ける。

「細かなルールは通常のものに合わせつつ、多少の変更をいれるつもりだから、よろしくね」

サーゼクスの言葉に真剣に頷く面々をよそに、ロイはあくまで呑気な様子だった。

「まあ、あんなだけ頑張ったんだから、祭りのひとつやふたつあってもいいだろうよ」

我関せずと言った様子で言うと、アリサが目を輝かせながら言う。

「す、すごいですよ！なんか、こう、盛り上がりそうです！」

「確かに、見てるだけでも楽しめそうだな！」

それに返すのはクリスだった。

彼も興奮した様子で言うが、口外に出るつもりはないと言わんばかりの二人を一瞥し、ロイはリアスたちに笑みを向けながら言う。

「そうだな。そんなわけだから頑張れよ、若いの」

——と、明らかにやる気無しのロイに対して、アザゼルは申し訳なさそうに告げた。

「ああ、ロイとツヴァイは出てくれ。二人は強制な」

「あ？なんでだよ……。下手に戦って『因子』が活性化したらどうすんだ」

「……俺にまだ戦えというのか」

面倒臭そうに返すロイと、心底嫌そうな声音で返すツヴァイだが、アザゼルは何てことのないように言う。

「その『因子』がどうなるのか、腕輪のアップデートのためにもデータが必要なんだよ。ツヴァイのほうもそれに同じな」

「だが――」

「最悪何かあつたら、隔離空間に飛ばせるようにしておくから心配すんなって」

言い返そうとした矢先にこれである。

「む、むう……」

「そうか……」

腕輪組の二人はなにも返せず、ロイは唸り、ツヴァイは無表情で頷いた。

そんな二人の様子に、クリスとアリサは苦笑した。

「俺たちもお供しますよ。眷属ですし」

「はい！『王』^{キング}が出るのに眷属が出ないなんて、ありえませんか！」

ロイが眷属二人に小声で「すまねえな」と呟くと、困り気味のロスヴァイセと黒歌が視界に留まる。

何かに迷っているように見えるのは気のせいではないだろう。

ロイはそう判断すると、なぜ悩んでいるのかを考え、すぐに答えにたどり着いた。

ロスヴァイセはリアスの眷属として参加するか、否か。
黒歌はヴァーリチームとして出るか、否か。

二人はその狭間で迷っている。

そんな二人の様子に、ロイに比べて少し遅れて気づいたのか、それぞれのリーダーは言う。

「あなたの好きなようにしなさい」

「おまえの好きなようにするといい」

放たれた言葉こそ違えど、込められた意味は同じもの。

その言葉を受けた二人は、

「ぞ、そうします」

「じゃ、そうさせてもらうかにや」

片や申し訳なさそうに、片や嬉しそうに返した。

ロイは思わずため息を吐く。

「メンバーは後にするとして、俺ってどういう立場で出るわけなんだ？ 悪魔代表チームのひとつで訳でもねえだろ」

彼の少し不満な声音の問いに答えたのはアザゼルだ。

清々しいほどの笑みを浮かべ、ロイに告げた。

「それは追々つてことで、な。俺に任せとけ」

「[「……………」」

ロイ、ロスヴァイセ、黒歌の三人は半目でアザゼルを睨み、睨まれた本人はそれを笑顔で無視する。

だが、その三人がアザゼルを睨んでいる横で、セラフオルーが何か覚悟を決めた表情をしていることと、ミカエルが顎に手をやりながら真剣な顔をしていることに、気づくことはなかった――。

――

先日の一件を思い出し、再びため息を吐く。

俺は面倒は嫌いだし、しばらくは家でのんびり静養を決め込みたかったんだが、そうはいかないようだ。

左手首に巻かれた腕輪に目をやり、小さく息を吐く。

逃げたところで、すぐさま追いかけてくるんだろう。俺とツヴァイの内に仕込まれた

ものは、むしろ苛烈を通り越した激戦を望んでいる筈だ。

俺という殻を破るタイミングを、今か今かと狙っている。どうやってそれを抑えるかは、俺たちとアザゼルたちの努力によるってところか。

「どうかしたにや……？」

いつの間にか目を覚ましていた黒歌が、背中から優しく抱きついてきた。

背中に感じる柔らかさを堪能しつつ、首に回された細い腕に手を添えた。

「悪い、起こしちゃったか？」

「別に、ちよつと寝すぎちゃったかにやってね」

そう言うのと欠伸あくびを噛み殺し、猫耳をぴこぴこ動かしながら俺の耳たぶを甘噛みしてくる。

今さら驚くことはなく、受け入れながら窓の外に目を向ける。

「あいつら、大丈夫かね」

「ま、大丈夫つしよ。戦場に放り込まれるわけじゃないし」

二人でそんな事をぼやき合う。

今日、この屋敷にはあまりヒトはいない。

まあ、メイドとか執事はあるだろうが、父さん、母さんを初めとしたヒトたちは外に出ている。

結構大事な行事が執り行われるので、それに参加しに行ったのだ。

俺も行きたかったのだが、立場がそれを許してくれない。『因子』が暴走して何かあったら、取り返しがつかないからだ。

代わりといつてはなんだが、現場にはツヴァイと俺の眷属たちに向かつてもらった。

『因子』の量、純度の都合上、ツヴァイのほうに俺よりも安定してあるから、まだ安心だ。

対外的に、ツヴァイを俺として扱うことも視野に入れているとも考えられる。

まあ、遺伝子的にはツヴァイのほうが昔の俺に近いんだよな。

色々と考えることが多いなか、黒歌が俺の頬を撫でる。

「あんまり考え込んでも仕方ないにや。不自由だろうけど、決められたなかで自由にすればいいじゃない」

「それもそうだな」

苦笑混じりにそう返し、一旦黒歌の腕をほどいて、反転して彼女を正面に捉える。

「ま、面倒だろうが付き合ってもらおうぜ？」

「ふふ、あんたと一緒なら何でもいいにや。まあ、楽しければなお良しって感じだけだよ」

ニコニコと笑いながら言った黒歌は、今度は正面から俺に抱きついてきた。

俺の胸に顔を埋めながら、呟く。

「……あんまり無茶はして欲しくないけどね」

「無茶はしねえよ。もう二度と、な」

出来るだけ優しく頭を撫でてやると、嬉しそうに顔を埋める俺の胸元に頬擦りしてきた。

「なら、いいけどにゃ!?!」

顔を上げて笑んだ途端、何かに驚いた様子で俺に抱きつく力を強めた。

疑問符を浮かべる俺をよそに、黒歌はピクピクと痙攣しながら俺の服を噛んで、声が出ないように必死に耐えている様子だ。

俺は部屋の中を見渡し、彼女が驚いた原因を探すと、それはすぐに見つけることが出来た。

「えへへ……あむ………」

「んん!」

……リリースが黒歌の尻尾を口に含んでいるのだ。それに加えて手でしごいている。猫又の急所って奴なのかね？

「口、ロイ……!こ、この子、とめ、止めてにゃ……!は、はやくふうん!」

「どうしようかなあ。止めてやりたいけど、リリースが楽しそうだからなあ」

我ながら邪悪な笑みを浮かべていることだろう。

俺の笑みを見た黒歌は、必死に声を抑えながら抗議的な視線を向けてきた。それを無視して俺も暇なので、いつかのように黒歌の猫耳を弄り始める。

「……か？……がいいのか？ほれほれ」

「も、やめ、てえ……」

黒歌が何か言っていたが、それを無視して猫耳を弄り続ける。

あいつら、早く帰ってこねえかな……？

時を同じくしてグレモリー家所有の電車内。

「何か用か」

いつもと違う貴族服に身を包んだ彼——ツヴァイは、相変わらずの無表情で電車内にいる人物たちにそう告げた。

そんな言葉を受けた青年——兵藤一誠をはじめとしたりアスの眷属たちと、兵藤一誠の両親は、何とも言えない表情を浮かべる。

彼がどういった経緯で生まれ、その後保護されたのかは説明されている。

だが、彼とこうして面と向かいあうのは、ほとんどのメンバーが今日が初めてだった。

そして、その第一声が「何か用か」である。困惑して当然だろう。

そんな一誠たちの表情を見て、ヴェネラナはツヴァイを小突いた。

『『自己紹介』は教えたはずですよ？』

「紹介する『自己』がないと言ったはずだ」

小突かれたことを気にする様子もなく、ヴェネラナの苦言をそう断じた。

それを受けたヴェネラナは額を押さえ、それを横で見ていたジオテイクスがため息を

吐いた。

「申し訳ない、皆さん。なかなか難しい性格でして……」

「そうか？」

「そうね」

「そうか」

ジオテイクス、ヴェネラナとの掛け合いを終え、小さく息を吐くツヴァイ。

一誠たちは苦笑混じりに首を捻るが、ロスヴァイセが苦笑した。

「えっと、ロイさんの新しい眷属になったツヴァイクんです」

「よろしく頼む」

ロスヴァイセの紹介を受けてツヴァイが一礼した矢先、再びヴェネラナが彼を小突く。

「敬語は教えたはずですよ」

「む？むう……」

小さく唸るツヴァイの横で、クリスとアリサ、ジルの三人は苦笑していた。

この少年と、向こう数百年間行動を共にするのだ。なかなか苦労することだろう。

そんな中、見慣れない貴族服を着た一誠が、苦笑しつつも右手を差し出した。

「えと、とりあえず、よろしくな！」

「……」

スーツ姿のクリスが、困ったように一誠の右手を見つめるツヴァイの肩を叩き、耳元で告げる。

「（握手だ握手。右手出せ）」

指示通りに勢い良く右手をまっすぐ前に出し、一誠の顔すれすれで止める。

風圧で一誠と、彼の後ろにいたリアスの髪が揺れる。

驚愕する一誠とリアスをよそに、ツヴァイは首を傾げた。

「……右手を出すのだろうか？」

彼の発言に、車内の全員がため息を吐く。

そして、ヴェネラナが怖いほどの笑みを浮かべながら彼の肩に手を置いた。

その笑顔を受け、ジオテイクスとリアスが怯え始めるのだが、ツヴァイは狼狽えない。そんなツヴァイにヴェネラナは言う。

「とりあえず、今日は大人しく私たちについてきなさい」

「わか……りました」

不器用に返すツヴァイに苦笑しながら、ヴェネラナは内心で懐かしんでいた。

——あの子もここまで難しい性格はしていなかったわね。

目の前にいる青年の父親が、もつと幼かった頃のことを思い出していると、電車がゆつくりと減速していく。

それにハツとしたのは一誠だった。

緩んでいた空気が一変し、再び張り詰めていく——とまでは言わないものの、多少の緊張が混ざり始める。

——この日は、兵藤一誠が上級悪魔へと昇格する儀式の日なのだ。

そんなこと知らぬと言うように、固めた髪が気になるのか、ツヴァイは髪を弄り始める。

その後ろで、ドレス姿のアリサとジルがため息を漏らす。

「また髪をセットしてもらわないといけませんね……」

「やれやれ、この際坊主にでもしてしまおうか？」

「む」

女性陣の苦言と提案に、何となく嫌な予感を感じたツヴァイだが、特に気にした様子もなく、自身の髪を後ろに流す。

彼の髪型がオールバックになると、電車が止まったのはほぼ同時。

彼らはここからさらにリムジンで移動をすることになる。

電車から降りた彼らを待ち受けていたのは、彼らを一目見ようと集まってきたヒト、ヒト、ヒトである。

「……………」

ツヴァイは初めて見る光景に目を見開きながら立ち尽くし、一拍開けてたかれたカメラのフラッシュで視界を焼かれた。

それに気づいたクリス、アリサ、ジルの三人が彼のカーパーに回り、ヴェネラナが彼の手を引き、警備員の先導でリムジンを目指す。

半ば投げ込まれる形でリムジンに乗り込んだツヴァイは、座席の感覚を確かめつつ目を擦り、何度も瞬きを繰り返していた。

彼の横に座ったアリサが、心配そうに彼の顔を覗きこむ。

「あの、大丈夫ですか……………」

「ああ……」

「これからこういう機会が増えていくだろうから、今のうちに慣れておくことだ」

ジルはそう告げ、リムジンの窓から外を眺める。

前方を走る一誠たちの乗ったリムジンと、ヴェネラナとジオテイクスが乗るリムジン、その二台に続く彼女らが乗るリムジンを囲むように、手配されていた警備車両が並走し、後ろからはマスコミの車が一定の感覚を開けて追いかけてきていた。

「仕事熱心なことだ」と言いながら足を組み、ドレスのスリットから、染みひとつない白い太もが覗く。

——が、クリスとツヴァイは一切気にした様子はない。

十年近く一緒に過ごした——もはや家族を呼んでいいほどの——ヒトに、そう言った感情を持つほど、クリスは子供ではない。

それに対して、彼女とはほぼ初対面のツヴァイのほうは、根本的にそう言った感情を持ち合わせていないのだ。

そんな男二人の反応につまらなそうに息を吐くジルだが、アリサから向けられる羨望の眼差しに気づく。

「ふふ、そこまで不安に思うことはないさ」

「うう……、そうですかね……？」

ジルの胸と太ももに目をやり、次に自身の体に目を向ける。

周りにいる女性と比べて控えめの——リアスをはじめとして、そもそも比較対象がおいしいのだが——胸と、少し痩せすぎと思える太もも。

——もう少し、肉付きがいいほうがいいのかな……？

重いため息を吐くアリサだったが、不意に彼女に声をかける男がいた。

「……どうかしたのか」

ツヴァイである。

精神的に幼いなりにも何かを察したのか、彼なりにフォローしようとしたのだろう。

ただの好奇心の可能性が高いが。

だが、彼に相談してどう返ってくるのか、彼女は考えた。

『もう少し、肉付きがいいほうがいいんですかね？』

『……？』

何を言われているのか理解出来ない彼の顔が思い浮かぶ。

『胸とか、大きいほうがいいですよね……？』

『……動きにくくないのか？』

何の悪意もなく、ぼつさり切り捨てられることが思い浮かぶ。

『私のことどう思いますか？』

『…………どう、とは？』

質問を理解出来ないことが思い浮かぶ。

——は、八方塞がりです…………！

助けを求めるようにジルに目を向けるが、クリスに駄弁つてそれに気づいてくれない。

否、気づいていて助け船を出していない。

現に、彼女の顔には会話とは別に、楽しそうな笑みが貼り付いているのだ。

あああうと魚のように口を開閉させているアリサの頬に、突然手が添えられた。

ビクツと体が反応させたが、視線だけでその手の主に目を向ける。

「…………大丈夫か」

ツヴァイは無表情でありながら、ほんの僅かに心配しているような声音でアリサに声をかけた。

彼の心使いに感謝しつつも、強がるように笑みを浮かべて彼に言った。

「だ、大丈夫です！ ツヴァイさんのほうこそ、大丈夫でしたか？ その、さつきまで目を庇ってましたけど…………」

「少し驚いただけだ。問題ない」

臉を撫で、簡単に返すツヴァイ。

驚いたというだけでも、彼も少しは成長したということだろう。

「なら、大丈夫ですね。私も大丈夫ですから……」

「そうか」

ツヴァイはそう返すと、窓の外に目を向けた。

見たこともないヒトの数と高層ビル群に、興味津々といった様子——しかし、無表情——で、世話しなく視線だけを動かしている。

そんな彼を見守る保護者たちが微笑し、それに気づいたツヴァイが首を傾げる。

そんなことを何度か繰り返しているうちに、彼らの乗ったリムジンは、会場の関係者入り口の方へと入っていく。

「では、降りる準備でもしようか。もっとも、特に何かあるというわけでもないが」
ジルは何てことのないようにそう言うが、その目には警戒の色が強い。

原因は、間違いなくツヴァイ絡みである。

彼が何かするかもしれないということ、彼に何かしてくるかもしれない。

二つの問題を同時に警戒し、それに対応していかなければならない。

——せっかくの式典だというのに、料理を楽しむ余裕はなさそうだな。

彼女は小さくため息を吐き、ツヴァイたちを引き連れてリムジンを降りる。

事情を知らないヒトが見れば、ジルが『王^{キング}』で、それ以外の三人が眷属と思われるだ

ろうが、ジルはフリーであり、三人はまた別の人物の眷属である。

準備と着替えのために一誠とリアスは控え室に向かい、彼らと別れて会場に入ったりアス眷属とツヴァイたちは、いわゆる関係者席に通されていた。

既に有名どころであるリアス眷属たちに向けられら視線には、歓迎の色が多いが、それに対してツヴァイたちに向けられるものには、怪訝としたものや、隠す気のない敵意が込められたものすらある。

むしろ、ツヴァイを的確な異物として捉えているものがほとんどだ。

だが、ツヴァイはそんなもの気にしない。気にならない。そんな余裕はない。

隔てるものもなく、大勢のヒトから様々な視線を受けるツヴァイは、それらがどういったものかを考えなければならぬ。

考えたところでわかるものでもないとわかったのか、ツヴァイはジルに声をかけた。

「……睨まれているのか？」

「気にするな。式が始まれば、こちらに気にする余裕はなくなる。それに――」

ジルはどこから拝借してきたのか、ワイングラス片手にそう返すと、その中身を一息で飲み干し、ホッと息を吐き、ツヴァイに告げる。

「『無視する』というのも、選択肢のひとつということさ」

「なるほど……」

彼が一人で納得していると、盛大な音楽が会場に鳴り響く。

式が始まり、ジルの言うように彼に向けられた視線が落ち着いていく。

今日この場所での主役は一誠だ。ツヴァイは、視界の端に映る『誰か』でしかないのだ。

式は滞りなく進み、何事もなく終了した。

ツヴァイにとって大変だったのはその後だ。

式が終わり、ヴェネラナとジオテイクスの挨拶回りに強制的に付き合わされ、それを済ませると、休むことなく二人に引っ張られる形で一誠たちの控え室に向かう。

慣れないことの連続で疲弊していたツヴァイが控え室に放り込まれるのと時を同じくして、一誠とリアス、レイヴェルの母親の間で『トレード』が行われたのだ。

アーシア、ゼノヴィアの二人がリアスの眷属から一誠の眷属に移籍し、レイヴェルを彼女の母親から譲り受けた。

上級悪魔になって一時間足らずで眷属三人を抱えることになった一誠だったが、話題

は『レーティングゲーム国際大会』のほうへと向かい始める。

基本的には、一誠はどのようなのか。というのが話題の中心なのだが、不意にツヴァイのほうに質問が飛んだ。

質問したのは、レイヴェルの兄であるライザーだ。

「それにしても、見れば見るほどロイ様にそっくりだ。おまえも出るのか？」

「ああ。アザゼルに出ると言われてな」

隠すつもりもなく言うと、ライザーは苦笑した。

「口の悪さは目を瞑ろう。だが、もう少し愛想良く話したほうがいいと思うぞ？」

「お兄様がそれを言いますか？」

「……………」

レイヴェルの突っ込みを受け、口の端をひきつらせるライザー。

無表情で疑問符を浮かべるツヴァイだったが、不意にかけられた声で我に帰る。

『まあ、そう言ってくれるな。まだまだ成長中ってな』

机の上に展開された連絡用魔方陣に投影された、手のひらサイズのロイがそう返したのだ。

突然の登場に驚く一誠に、ロイは気さくに声をかける。

『久しぶりだな、イツセー。とりあえず、おめでどう』

「は、はい。ありがとうございます」

困り顔で返す一誠に、ロイは申し訳なきように言った。

『出来れば直に会って言いたいんだが、いざ会うとなると、な……』

左手の腕輪を撫でながら言うと、ツヴァイが続いた。

「俺でも平気なら、大丈夫だろう」

『かもしれないねえけどさ……。万が一グレートレッドの力に反応してみろ、考えたくもねえ』

そう返されたツヴァイは、また小さく「むう……」と唸った。

『困ると唸る癖があるんだな』と苦笑するロイに、ツヴァイは「そのようだ」と返す。

何だかんだで仲の良い親子の姿に、ヴェネラナは小さくホッと息を吐いた。

「とにかく、もうすぐパーティーが始まるわ。そろそろ移動しないと。主役が遅刻だなんて、格好がつきませんわ」

それに同調したのはレイヴェルの母親だった。

レイヴェルをその場に残し、車を待たせているからとライザーを引き連れて一足先に会場に向かう。

二人が控え室を後にして、イツセーたちも出るかと準備を始めたとき、また誰かが控え室に入ってくる。

青光りする黒髪を持つ、中学生ほどの少年。端正な顔立ちをしている。

その少年は身構える一誠に目を向け、小さく笑んだ。

「へえ……。初めて見るけど、噂通りの面と違う面が見える。とりあえず、賛辞を贈ろう、赤龍帝」

一人で拍手する少年に対して、部屋にいる面々は誰一人として返すことが出来なかった。

彼が放つ圧倒的なオーラが、口を閉ざしているのだ。

……それを感じることに出来ない一誠の両親と、映像越しのロイ、何か違和感程度にしか感じていないツヴァイを除いて、だが。

少年は拍手を止めると、ツヴァイとロイに目を向けた。

「そして、黙示録の獣の力を継いだ者たち、か。面白い」

愉快そうに笑みを浮かべる少年に対して、ツヴァイは告げた。

「――迷子か？ 保護者はどうした」

『ツ!?!』

『あつはつはつ！マジかよ、おまえ！このオーラを放つやつにそんなこと言えるのか！ある意味流石だぜ！』

驚愕するリアスたちと、豪快に笑うロイ。

ロイの爆笑に釣られてか、少年の後を追うように三人の男が入ってくる。

「おいおい、誰だロイを連れてきやがったのは？って、映像か、びつくりした……」

「流石にここに連れてくるわけにはいかなないと話したはずだ。それに、腕輪を作ったのはそちらだろう、確認したらどうだ？」

まず入ってきたのはアザゼルとアジユカだ。

二人は映像越しに笑い転げるロイに目を向け、苦笑を漏らした。

二人に続いて現れたのは、またも男性だった。

強力な神性を纏って、それに引けを取らないほどの覇気を放っている。

長い黒髪、ガタイの割に透き通るほどの白い肌を持ち、サリートを身に纏っている。眼

光も鋭く、それをイツサーに視線を合わせた。

「ほう、これがアポプスを倒した『？誠いっせの赤龍帝』か」

品定めをし、合格したような口ぶり。

次に男性はいまだに笑い転げるロイにも視線を向けた。

「そして、トライヘキサの力を継いだ男と」

合格と言うように頷き、そのままツヴァイにも目を向け、顎に手をやる。

「——そして、その息子と言ったところか」

ツヴァイにはまだまだと言った様子の様子の視線を向けた男性が再びイツサーに目を向け

ると、アジユカが言う。

「イツセーくん、ロイくん、ツヴァイクくん。このお方がキミたちに会いたいとおっしゃられたものだから、お連れした」

アジユカはそう言うのと、少年を紹介を始める。

「——シヴァ様だ」

『ッ!?!』

再びの驚愕が控え室を駆け抜けるが、いまだに笑い転げるロイと、まず誰のことなのかわからないツヴァイはそこに含まれなかった。

そんなツヴァイの様子に気づいてか、シヴァが自己紹介を始める。

「はじめまして、リアス・グレモリーの関係者の皆様。僕はインドの三柱神のひとつはしち一柱たるシヴァだ。今後は長い付き合いになるだろうから、改めてよろしく」

そう言いながら、イツセーに右手を差し出して握手を求めた。

「よ、よろしくお願ひします」

イツセーは恐る恐ると言った様子で握手に応じる。

その横で、

「なるほど、握手とはそうするのか」

ツヴァイが他人事のように呟いた。

目に溜まった涙を拭い、ロイは脇腹を押しえながら言う。

『いや、教えたと思っただがな。まあ、また今度でいいか』

自由に話し始める紅髪親子を他所に、サリーを身に纏った男性が言う。

「私はマハーバリという。上級悪魔昇格おめでどう、赤龍帝」

「……誰だ」

ツヴァイの無遠慮の問いに、ロイは耐えきれずに吹き出す。

アジユカは苦笑しながらツヴァイに告げた。

「阿修羅神族の王子だよ」

「阿修羅神族、とは？」

「それは——」

ツヴァイの質問への解答をアジユカに任さ、マハーバリは続ける。

「ロイ・グレモリー、貴殿とは会いたいと思っていた。邪龍戦役での活躍は耳にしている。私も貴殿と共にトライヘキサと打ち合いたかったぞ」

『そ、それはどうも……』

必死に笑いを堪えるロイは、そうとしか返せない。

アザゼルから「真面目にやれ」と言われたロイは、自分を落ち着かせるように大きく息を吐く。

『いやー、息子が勤勉で嬉しいなっと。それでは改めて、映像越しで失礼する、マハーバリ殿。俺はロイ・グレモリーだ。息子がとんだ失礼を……』

「いや、話は聞いている。好奇心旺盛なのはいいことだ」

大して気にする様子もなく返したマハーバリに、ロイは小声で礼を言う横で、シヴァは一誠を見て楽しそうにしていた。

「性欲に正直と聞いたが、そのようには見えないよ。ハーレム王が夢だっけ？」

「は、はい！夢はハーレム王です！服を透視できる新技を開発中です！」

極度の緊張のせいか、とんでもないことをカミングアウトした一誠だったが、そこにロイからの横槍が飛んだ。

『別にそれは良いが、俺の恋人に使うなよ？使ったら……』

「わかっています！わかっていますから！そんな睨まないでください！」

仲良さげな——実際に戦ったら大惨事不可避の——二人のやり取りを眺めながら、シヴァは苦笑する。

「破壊神を前にしてそこまで出来るなら、きっと大物になるね」

『ああ、申し訳ない。ロイ・グレモリーだ、よろしく頼む』

「敬語というものは使わないのか？」

『……忘れてた』

「そうか……」

いちいち会話をぶった切ってくるツヴァイの一言を気にしつつ、シヴァは続ける。

「ロイ・グレモリー。キミは『紅髪クリムゾンの斬り裂き魔リッパ』と恐れられ、殺意によつて成長したと聞いているよ」

『それは昔の話です。今はだいたい落ち着きました』

ロイが敬語を使うことを心がけながら返すと、シヴァは何か納得したように何度も頷く。

「それだ。赤龍帝は煩惱から、ロイ・グレモリーは殺意により新たな力を身に付けてきた。だが、今の二人を見たら、そう思うヒトはいないだろう」

そこまで言うと、シヴァは二人に問いかける。

「キミたちはそれぞれ何を望んでいる？やはり、女？それとも富？」

ロイが考えていると、イツセーが先に答える。

「どつちも欲しい。………というのではないんですかね？」

シヴァはイツセーの言葉に首を横に振り、言い直す。

「もつと根底だ。いま、一番欲しているのはなんだい？個ではない。全とした場合だよ？」

さらに小難しくなった質問に、ロイは瞑目して自身の胸に手を当てた。

ロイが何かを解答しようとしているからか、周りの人物も自然と黙りこんでしまう。部屋が静寂に包まれるなか、ロイはゆっくりと目を開く。

『――破壊と闘争。守護と平穩』

右目の瞳孔が縦に裂け、禍々しいほどの深紅の輝きを放ち、対する左目は、優しげな碧い輝きを放っていた。

トライヘキサとしての言葉と、ロイとしての言葉。その二つが続けて発せられた。

アザゼルたちは、その言葉に表情を曇らせる。

矛盾を抱えているが、確かな意志の込められた四つの言葉。

だが、片方の内容が物騒すぎて、シヴァ、マハーバリ、ツヴァイを除いた面々の表情は険しいものとなった。

シヴァはそんな彼に言う。

「神すらも恐れさせる獣の本能は、そう簡単に消えることはない、か」

そこからは、文字通りの警告だった。

「破壊と創造は深い繋がりとあると言うが、キミのもたらす破壊はただそれまでだ。その後にあるはずの創造が欠けている」

『……』

破壊を司る神からの警告に、ロイは聞き入っていた。

その横で、彼と同じ『因子』を持つツヴァイも耳を傾けている。

シヴァはどこか残念そうに息を吐き、ロイと一誠に告げた。

「まあ、話しはまた今度、個人的にさせてもらおう。なに、まだ時間はあるし、やることもただの勧誘さ」

『?』

ロイと一誠は小さく首を傾げるが、そんなものお構いなしにシヴァはマハーバリに声をかけ、控え室を後にしていった。

シヴァは部屋を出る間際、部屋にいる全員に言う。

「ただ、ひとつだけ言わせてもらおう。僕と誰かが戦争を始めたら、出来れば僕の陣営に来て貰いたいね。それじゃあ、また」

シヴァはそう告げると、後は黙って部屋を出ていく。

先程とは打って変わり、強烈な殺意を孕んだ波動を放つマハーバリが、彼らに告げた。「私もそうなることを望む。貴殿らとは、命の奪い合いはしたくない」

ロイたちには、なぜ彼が殺意立っているのかはわからない。だが、その『誰か』と何かしらの因縁があるのだろうと予測できた。

二柱の神々が部屋を後にし、アザゼルとアジュカが少し慌てながら彼らを追いかける。

何とも言えない雰囲気部屋を支配するなか、ロスヴァイセが映像越しにロイを睨む。

彼女に睨まれても、当のロイは気にした様子はない。

「あのですね、ロイさん？もう少し言葉を選んでください」

『家族を守るためなら、何だろうがぶつ壊す程度には思っているんだが……』

「そう思ってくれるのは有難い……有難い？のですけど、無理と無茶はやめてください
！」

『へいへい……』

ロイはテキトリーな返事をする、一誠たちに言った。

『まあ、色々あったが、パーティーを楽しんでこい。ああ、ツヴァイを頼む』

ロイの言葉に頷く面々。

それを受けたロイは満足げに頷き、連絡用魔方陣を解く。

ロスヴァイセは一瞬のうちに消えたロイにため息を吐き、一誠たちに言った。

「とりあえず、行きましょう。ロイさんがロイさんとして生きられるように、私たちは頑張るんですから……」

覚悟を決め終えた表情をするロスヴァイセに、リアスたちは頷いて返す。

その時が来ないように祈りながら、その時に備えなければならぬ。

彼女たちの心労が絶えることは、ないだろう――。

ロスヴァイセたちがパーティー会場に移動している頃。

グレモリー屋敷、ロイの自室。

「ちよつと脅かしすぎたか……？」

部屋の主であるロイはベッドに腰掛け、先程まで一誠の昇格式が中継されていたテレビを見ながら、顎に手をやり、苦笑していた。

想ったことを想った通りに口にしたのに、ロスヴァイセたちを困らせてしまったのだ。

――まあ、今に始まったことじゃねえか。

視線をベッドに戻すと、そこにいるのは一人の女性と女の子。

「ろっか、へいきさ？」

寝ぼけ眼のリリスが、ぐったりとしている黒歌を揺すっていた。

心配されている当の彼女だが――、

先程まで続いていた二人の責めにより、完全に放心状態となっていた。

今この場にはいない面々がそれを知ることになるのは、少なくとも、今日ではないことは確かだ。

Final life 次の舞台で

俺——兵藤一誠の上級悪魔昇格式から時は流れ、ついにリアスたち三年生組の卒業式となった。

今は、式が始まる前のちよつとした時間を使ってリアスの様子を覗きに来たんだけど……。

「頑張った甲斐があったわ。今日を楽しみにしていたのだから」

「……………」

リアスが紅いスーツに身を包んだ女性に絡まれているところに遭遇してしまった。だけど、その女性には見覚えがあるというか、何か既視感があるというか……。

俺が困惑していると、その女性がこちらに気づいたのか、爽やかな笑みを浮かべて小さく手を振ってきた。

「あら、イツセー。ごめんなさい、リアスを借りてしまつて」

女性は申し訳なさそうに言うのと、再びニコツと笑みを浮かべる。

髪の色は静脈血のような黒みかかった紅色で、肩にかからない程度の長さ。

瞳の色は髪色とは対称的に碧く、透き通っている。だけど、瞳孔だけが鮮やかな紅のあわ

色を帯びていた。

で、極めつけはリアスにそっくりな顔立ちだ。その整った顔立ちは、すれ違えばだいたいのヒトがまず間違いなく振り返るであろう美しいものだが、右頬にある火傷痕がそれを隠してしまい、左頬には斬り傷がある。

胸はリアスほどではないが大きめで、ゼノヴィアと同じか少し大きいほどだろうか。着痩せとかがしていなければ、の話だけだな。

——つて、このパツと見た印象を纏めあげると、いくつかはあのヒトに結び付くんだけれど、目の前のこのヒトは女性だしな……。

俺がどう返そうか悩んでいると感じたのか、女性が自身の体を一瞥し、ハツとしながら言う。

「そうだ、女になっていたんだったわ」

女性はそう言うのと、一度大きく咳払いをして、低くした声で俺に言ってくる。

「俺だ、イツセー。わかるか？」

「や、やっぱり、ロイ先——」

俺が言おうとした矢先、口を塞がれた。

もぐもぐと音が漏れるなか、ロイ先生が言う。

「今は『先生』じゃないから、『さん』で頼む。あと、『アインス』って呼んで欲しいわ」

途中で声音を女性モードに切り替えながらそう言うロイ先生。もといロイさん。もとい、アインスさん……。

そう言えば、このヒト『性転換銃』とかいうのを持っていたな、そう言えば……。

俺が頷くと、アインスさんは満足そうに頷いて手を離してくれた。

アインスさんは言う。

「ここまで来るのに苦労したのよ？人間界に拠点を移すにあたって、『因子』の暴走を抑制する腕輪も一対になってしまったし、アザゼルたちの目を盗むためにこんな姿をとらなければならなかったし……」

腕を組んで重そうにしている胸を支えながら言うので、そちらに目を向けてしまったが、アインスさんは腕輪を探したと判断してくれたのか、苦笑した。

「不可視の魔力がかけてあるから、見えないはずよ。まあ、そこまで気になるものでもないけどね」

ウインクをしながら軽く手を挙げて肩をすくめ、何てことのないように言うアインスさん。

「胸は気になるけれど……」

遠い目をしながら付け足した。

リアスが困ったように小さくため息を吐くと、半眼で睨みながら言う。

「お兄様、大丈夫なのですか？」

「ええ、体調に変わりはないし、大丈夫そうよ。胸が重いけれど。それと『お姉様』って呼んで欲しいわ」

「いえ、そうではなくて、ちゃんと許可は貰ったのですか？」

リアスが追及すると、アインスさんは無言で笑うだけで何も言わない。

もうそれが答えですよ、間違いない……。

もはや笑うしかない俺の横で、リアスは変わらずにアインスさんを睨む。

「後でどうなっても知りませんからね」

明らかかな怒気の込められた言葉だが、アインスさんは狼狽えない。

なぜか不敵に笑ってリアスに返す。

「大丈夫よ。セラと兄さんも来ているから」

「「え？」」

レヴィアタン様と、サーゼクス様が、来ている……？

俺は当然の疑問をぶつけてみる。

「あの、そのお二人は、お仕事を——」

「終わらせてきているよ。安心してくれ」

「「ッ！」」

突然背後から声をかけられ、俺とリアスは二人してビクツと反応してしまふ。

その反応にニコニコと笑いながら、話題の人物の一人、サーゼクス様が軽く右手を挙げた。

「やあ、三人とも。間に合って良かったよ」

「お、おはようございます、お兄様」

「お、おはようございます！」

二人して慌てながら挨拶をすると、アインズさんが顎に手をやって周囲を見渡し始めた。

「義姉さんとミリキヤスは一緒じゃないの？さつきまで一緒にいたでしょ」

「ああ、飲み物を買いにいったよ。父様と母様は、途中でサイラオーグを見つけたから、挨拶に行ったところさ」

「そうなの？サイラオーグにも挨拶しておこうかしら」

「……その姿で行ったら、正気を疑われるよ？」

「あら、私は正常よ」

再びのウインク。

流石のサーゼクス様も困り顔で頬をかいていた。

帰って来た弟が突然こんな行動をすれば、困惑して当然だろうけどさ。

アインスさんを除いた俺たち三人がため息を吐くと、当の彼女(?)は何かに気づいたのか、鼻を引くつかせる。

「む、この匂いは……。こつちに来ているわね」

アインスさんがそう言うのと、廊下の角から誰かが飛び出してきた。

あれは、ソーナ先輩だ。何かから逃げているのか息が上がっている。

ソーナ先輩はアインスに気づくと、小走りで近づいてくる。

「少し匿ってください」

「あら、私で良いの? 誰から逃げているかは訊かないでおくけれど」

「……ところで、あなたは?」

ソーナ先輩が隠れてから訊いた途端、もう一人の人物が角から飛び出してきた。

「ソーナちゃん! って、あれ?」

飛び出してきた人物であるレヴィアタン様は、わざとらしくキョロキョロしながら少しずつこちらに近づいてくる。

ソーナ先輩はアインスさんの影に隠れ、どうにかやり過ごそうとしているが、明らかに隠れきれない。

いつものソーナ先輩ならすぐに場所を変えるのだろうけど、今はその余裕はないようだ。

それに、隠れた人物に関しても悪いとしか言いようがない。

レヴィアアタン様はアインスに気づき、満面の笑みを浮かべた。

「あら、ここにいたのね☆ロイ☆」

「この姿の時は『アインス』って呼んで。前に決めたじゃない」

アインスさんは笑みながらそう言った。

その言葉を聞き、後ろに隠れるソーナ先輩の顔色が、一気に青くなっていく。

アインスさんは少し邪悪な気配を孕ませた笑顔を浮かべ、背中越しにソーナ先輩に目を向けた。

「ソーナも、今は『義姉様』って呼んでね。プライベートなら義兄様で良いから」

「ロイ……様……?」

ソーナ先輩が恐る恐る訊くと、アインスさんは大きく一度頷いて見せた。

瞬間、アインスさんは反転してソーナ先輩を捕まえた。

「ふふ、油断したわね」

「ふふん☆今日は私のほうが上だったわね、ソーナちゃん☆」

ほんの少し悪い顔をするアインスさんと、機嫌よさそうにニコニコと笑うレヴィアアタン様。

その二人に捕まったソーナ先輩は、もはや可愛そうに思えるほど顔が真っ青になって

いた。

助けを求めるようにこちらを見つめてきたが、

「サーゼクス、それにリアスとイツセー様も。ここにいたのね」

「父様、リアス姉様、イツセー兄様、探しましたよ！」

グレイフィアさんとミリキヤスがこちらに来たことで、俺たち三人はその視線からの逃げ道を得ることができた。

俺たちがわざとらしく視線を外したからか、ソーナ先輩の口からは音にならない批判の声漏れた。

サーゼクス様が駆け寄って来たミリキヤスを抱き止め、そのまま持ち上げた。

グレイフィアさんは優しく笑みながらそんな親子の側につき、そつとサーゼクス様の手をとった。

オフを貰ったからなのか、サーゼクス様やミリキヤスとの距離がいつになく近く思える。

まあ、そのいつもというのをよく知らない気がするけど……。

リアスが耳元で告げてくる。

「(お義姉様、最近サーゼクスお兄様とミリキヤスという時間を大切にしているのよ)」

「(そうなんだ……)」

俺が頷くと、リアスが横目でアインスさんのほうを見る。

アインスさんはソーナ先輩に何だかんだと言っているようだが、その顔には笑顔が浮かんでいる。

「(ロイお兄様に戻ってきてからよ。きつと、何か変わったのでしょね、いい方向に)」
そう言うのと、リアスも優しい笑みを浮かべた。

「今、俺の名前が出ていなかったか？まあ、今はアインスだけけれど」

いつの間にかこちらに来ていたアインスさんはそう言うのと、サーゼクス様たちのほうに目を向ける。

笑いあう三人を見たアインスさんは、嬉しそうに笑みながら、染々と言う。

「……子供欲しい」

「！」

それに反応したのはレヴィアタン様だった。

撫で回していたソーナ先輩を解放し、アインスさんを後ろから抱き締める。

「うふふ、頑張りましょう☆きつと強い子になるわ☆」

「それは、そうだけだよ」

アインスさんは自身の左手を撫で、ため息をひとつ。

ロイさん(今はアインスさんだけ)の子供ということは、トライヘキサの『因子』を

継ぐことになるだろう。

俺たちはともかく、他の勢力や一部のヒトたちがその子供のことを許すかどうか……。

「——まあ、手を出してきたら、その時はその時だ」

若干の殺気が込められた言葉に、レヴィアタン様は真剣な表情で頷いた。

「そうね。けど、手は出させないわよ。なにが何でも守るんだから」

我が子を守るため、覚悟を決める恋人二人。

言葉にすれば格好はつくんだけど……。

俺と同じ事を思ったのか、サーゼクス様がため息を吐いた。

「二人はコスプレ、もう一人は女体化。セラフォルはともかく、ロイがいつも通りならもう少し説得力も増すんだろうけどね」

「む、だからアインスよ！アザゼルに見つかったら——」

「——俺に見つかったら、どうなるんだ？」

背後から届いた声に、アインスさんはビクツと反応し、ゆっくりと振り向いた。

そこには額に青筋を浮かせ、憤怒の表情で仁王立ちするアザゼル先生の姿があった。

「……………」

「なあ、ロイ？ああ、今は『アインス』だったか？まあ、どっちにしろ……」

アザゼル先生は周囲を気にしながら手元に魔方陣を展開し、それを高速で操作して行く。

異常を察知したアインスさんは逃げようとするが、途端にふらついて膝をついた。

「あふ……」

「ちよ！大丈夫!？」

レヴィアアタン様が急いで体を支え、肩を貸して立ち上がらせる。

ぐったりとしながらアインスさんは言う。

「ち、力が入らねえ。野郎、な、何しやがった……」

当然の疑問を投げ掛けられたアザゼル先生は、なぜかどや顔しながら言う。

「腕輪に色々と仕込ませて貰ったのさ。まあ、おまえの体質上、効果があるのは一度限りだがな」

アザゼル先生はそう言うため息を吐き、アインスさんとレヴィアアタン様に言った。

「まったく、面倒をかけやがって。さあ、戻ってもらうぞ、セラフォルは居てくれて構わないけどな」

その言葉を受けたレヴィアアタン様は、アインスさんを庇うように構える。

「ロイと一緒に参加するって決めたのよ！渡せないわ！」

「むう、無理やり連れ出したらどうなるかわからんからな……」

そのレヴィアタン様の行動に、アザゼル先生は困り顔で顎に手をやっている、ぐったりしていたアインスさんが目を見開き、両足を踏ん張る。

「セラ、逃げるぞー！」

「え？ きゃー！」

突然復活したアインスさんは言うや否や、レヴィアタン様をお姫様抱っこすると、音も、残像も残さずにその場から消えた。

魔方陣がなかったってことは、単純な速さで消えたってことだよな、見えなかった……。

残された俺たちが呆然と立ち尽くすなか、状況を理解したのかアザゼル先生が膝から崩れ落ちた。

「か、回復が早すぎる……俺たちの苦勞が、術式が……」

それを眺めていた俺たちは、アイコンタクトで合図を済ませると、そつとその場を離れた。

その直後に「こんちくしよおおおおお！」と叫びが聞こえたけど、今は放置させてもらいます。

卒業式が始まる前に、サイラオーグさんやリアスのご両親に挨拶しておきたいしね。

「あゝ、無駄に疲れた……」

俺——ロイは旧校舎まですつ飛んでくると、いつもの男の姿に戻り、大きめのため息を吐いた。

俺の腕に抱えられているセラは、目を回してしまったようだ。口から煙を吹き出してぐったりしている。

旧校舎の一室を拝借して、ソファーにセラを寝かせる。

「おーい、大丈夫か?」

声をかけながらペチペチと何度か頬を叩き、反応を待つてみるが、全然目を覚ましてくれない。

再びため息を吐き、セラの額に手を当てて気を送る。

仙術を習っておいて正解だったな。存外汎用性がある。

そのまま何分かつてみると、ようやくセラが目を開けてくれた。

「ふへ……う?あ、おはよ〜☆」

「おはよう。で、大丈夫か？」

「大丈夫よ。ちよつと頭痛いけど」

体を起こそうとしたセラの肩を押し、無理やり寝かせて時計を確認。まだ時間はあるようだ。

「最近働き通しだったじゃねえか、寝とけ」

今日のため、セラが必死になって仕事をしていたのは知っている。

その卒業式がもうすぐだと言うのに、途中で寝落ちなんて格好がつかないし、ソーナたちにも失礼だ。

「むう、じゃあ、ちよつと寝る……」

「おう、寝とけ寝とけ。俺は側にいるから」

そう言い聞かせながらセラの髪を撫で、優しく笑む。

彼女が寝付いたのはすぐだった。疲れが相当溜まっていたのだろう。

上着を脱いで毛布代わりに被せてやり、表情を引き締めて部屋を出る。

首をゴキゴキと鳴らし、掌に産み出した黒い炎を握りつぶす。

ワイシャツ越しに右腕に走った深紅のラインを確認し、手元に深紅の直剣を生成する。

同時に視界がクリアになり、オーラの流れが視覚で捉えられるようになる。

「いるんだろ、神崎」

振り向きながら言うのと、そこには少し驚いた表情をする神崎光也がいた。

その隣に見覚えのない女がいるのは気になるが、二人してなんと臍おぼろげ気なオーラだ。吹けば消えちまいそうなほどに。

俺に睨まれていると判断したのか、話を切り出したのは神崎だった。

「お久しぶりです、ロイ・グレモリー。ようやく出てこられたようですね」

「まあな。――で、何か用か？」

俺が怒気を隠すことなく言うのと、神崎の隣に立つ女が興味深いものを見たように言う。

「話には聞いていたけど、不思議なヒトね」

「誰だ、テメエは」

俺が訊くと、その女は不機嫌そうにしながらも一礼した。

「霧乃静香。よろしく」

「……で、あんたら二人は何の用でここに来やがった。場合によっちゃ、ここで狩る」
名前を聞いたところで、どうでもいいことだったな。

直剣の切っ先を向け、そう告げた。

「アザゼルから聞いたぜ？そのスマホだかよくわからんのを壊せば、とりあえずこつち

の勝ちなんだろう？」

「勝てるかどうかという問題と、暴走しないかという問題があるが、セラを守るためならどうでもいい。」

敵意剥き出しで二人を睨むと、神崎はそれを手で制してくる。

「その情報は間違いありませんよ。ただ、今回は戦いに来たわけではありません」

「……………」

神崎と霧乃を睨みながら直剣を降ろす。

だが、いつでもその首を落とせるようにはしておく。敵であることは間違いないだろう。

一応だが戦闘態勢を解いたからか、神崎は説明を始めた。

「あなたが件の大会に出ることと、人間界に拠点を置いたことは、前に聞きました」

「どこから漏れたのかは訊かないで置いてやる。さっさと本題に入れ」

さっさとセラの横に戻りたいので、急かす。

神崎は小さく一度咳払いをすると、単刀直入に切り出した。

「時折ですが、お邪魔すると思えます。あなたのその力に興味がありますので」

神崎はなぜか笑いながら言っつきやがった。

俺は額に青筋を浮かび上がらせながら、切っ先を向ける。

「何を上がり込む宣言してくれてんだ。その首はね飛ばすぞ……い！」

「いえ、無条件というわけではありませんよ？」

「なんだ、三食付けてくれとかか？こちとら大食い俺含めて四人も居るんだよ、これ以上増やすな！」

「いや、どうしてそちらが不利になることを言うんです？別に食事は自力でどうにか出来ますよ」

「じゃあ、なんだ。たまに部屋を貸してくれ、とかか？俺の家はアパートじゃねえんだよ！」

「ですから、時折お邪魔するだけです……」

疲れたと言わんばかりの神崎と、驚いた顔をする霧乃。

霧乃は苦笑しながら言う。

「相手は悪魔なんだから、『対価』を示さないと駄目じゃないの？」

「示す前に話が進んだんだけどね」

「ほお……。払えるものがあるのか、なんだ」

状況が変わったので話を聞く体勢に入る。

ギブ・アンド・テイク、悪魔業界はこれが大事だからな。

俺が黙ったところを見計らい、神崎は言った。

「あなたが家を留守にする間、僕たちが彼女を守ります。どうにも、冥府の残党が騒がしいので」

「む、むう……」

神崎の提案に、思わず唸り声が漏れた。

大会に参加する以上、リリスの側にいられない時間が増えるだろう。

その間、リアスやソーナ、アザゼル辺りに任せようとも思っていたが、そいつらにも都合があるだろう。

——この提案、割りと良いものなのでは？

目の前のこいつらの強さというか、異様さは見ればわかる。

そいつらが確定で来る場所があれば、アザゼルや鳶雄たちも少しは楽になるか。

それに、

「これも何かの縁ってやつかね……」

後頭部をかきながらぼそりと一言漏らす。

勝手に来て僻地に飛ばされたって、こいつらならどうにかなるだろう。

俺はまつすぐに二人を見据え、直剣を消す。

「わかった、その時はあの子を頼むことにする。だが、てを出したら……」

「わかっています。僕たちも死に急ぎたくはありませんので」

神崎がそう告げると、霧乃と共にその姿がぼけていく。

消えていく二人を見続け、苦笑した。

「俺も甘くなつたもんだな。よくわからん相手を信じるなんてよ」

俺の独白に、二人は少し驚いたような顔を見ると、そのまま消えていった。

戻ってきてから、俺じゃあ予測できないことが多くなってきたな。まあ、退屈はしねえけど。

一度息を吐き、セラのいる部屋に戻る。

卒業式まであと少ししかないが、二人でゆつくりさせてもらおう。

——の前に、もうバレちまつたけど、念のため女に戻っておかねえとな……。

卒業式は滞りなく進み、駒王町で行われた行事にしては珍しく、何事もなく終了した。卒業式終了後、再び男に戻った俺は、リアスたちオカ研と共に旧校舎に来ていた。

ちなみにセラはソーナを捕まえてどっかに行った。まあ、「後で合流してね☆」とは言

われたけどな。

兄さんたちはイツセーのご両親と共に先に兵藤宅に帰っていった。

アザゼルは、まだ俺を探してんじやねえかな？

話を戻して、結果を言うと、木場、小猫、ギャスパアの三人がリアスを『姉さん』呼びすることを伝え、イツセーはリアスに改めて告白し、自分のチームを率いて大会に出るむねを伝えていた。

リアスたちの話が一段落したところで、ロセがリアスに切り出す。

「リアスさん、その、前にしたお願いしたことを、いいですか……？」

遠慮がちに確認すると、リアスは笑みながら頷いた。

「ええ。これからを考えて、今のうちにしてしましましょう」

勝手に話が進んでいくなかで、リアスが俺に向けて言う。

「お兄様。言われたのはずいぶん前になりますが、ロスヴァイセと話したんです」

「ロセとリアスが、ね。何だ、頼み事か？」

俺の確認に、二人は頷く。

そして、ロセが俺の手を取って身を乗り出すところ切り出した。

「ロイさん！私をあなたの眷属にしてください！」

勢いに身を任せたように、結構早口で言ってきた。

ロセを眷属にすることは、リアスの眷属からの移動、つまりはトレードをするわけだ。

ロセは『戦車^{ルック}』だから、俺の『戦車^{ルック}』はクリスト、空きがひとつだ。

つまり、その空きとロセをトレードしようという話なんだろう。

ロセの息が鼻先をくすぐってくるのを気にせず、俺は小さく頷いた。

「俺は構わねえよ。むしろその方が助かる」

「では、早速始めましょう！リアスさん、お願いします！」

嬉しそうで、そして興奮した様子で言う。

ロセのテンションの高さに、俺とリアスは揃って苦笑し、手早く準備を整える。

まあ、専用の魔方陣を展開して『王^{キング}』同士がオーラを込め、同調させるだけだ。

さつさとトレードを済ませた途端、ロセが満面の笑みで抱きついてきた。

「ふふふ……。これでいつでも、どこでも一緒です」

顔を上げたロセの目からはハイライトが消えていた。

何だか怖い雰囲気を感じるんだが、気のせいだろう。

イツセーたちが変な汗をかいているようだが、知らん。

力強く抱き寄せてくるロセの髪を撫で、俺からも伝えることを思い出す。

「そうだ。今さらだが、俺は教師引退だな。面目ない……」

「それは仕方ないですよ、状況が状況ですから……」

ロセはそう言ってくれるが、確かに状況が状況ではあるけどな。

「下手に外出できねえ、あの子の面倒も見なきゃならねえってことで、アザゼルからも言われてな……」

俺が言うと、ロセは不機嫌そうにしながら余計に力を入れてくる。

「そのせいで私が一緒にいられる時間が減ってしまいました」

「まあ、聞け。ロセとアザゼル、リアス、ソーナには前に伝えたが、新オカ研組には俺の口から伝えておきたかったんだ」

「……私たちに伝えたいこと、ですか？」

小猫が小さく首を傾げながら訊いてきたので、俺は自分の真横に転移魔方陣を展開し、そこからある人物を呼び寄せる。

魔方陣の光が弾けると、そこにいたのは――、

「む、何か用か？」

フリル付きのエプロンと、三角巾を頭に付けたツヴァイが現れた。

どうしてエプロンや三角巾、顔に黒くなっているんだ？

「……何をしていたんだよ、おまえは」

「黒歌とリリスがうるさいのな。本を見ながら適当に作ろうと思ったんだが、爆発した。何故だ？」

三角巾を外し、顔をごしごしと力強く拭い始める。

多少きれいになったツヴァイを眺めながら、俺は肩を落とし、目の前の料理下手に言う。

「おまえ、字読めねえだろうが……」

「悪魔文字は頭に入れたのだが、何を間違えたのか」

「どうせ『小さじ』と『大さじ』を間違えたんだろ？ まったく、他の奴等は？」

「ジルとアリサは、ガブリエルが住むからということで、彼女を連れて物品の買い出しに行った。クリスはトレーニングループを試している」

思わず頭を抱え、小さく唸る。

次からはツヴァイに料理をさせないようにしよう。怪我人が出ちまう。

「……まあ、なんだ。今度料理当番を決めよう」

「そうだな」

「毎日でも私が作りますよ？」

ロセはそう言ってくれるが、俺は首を横に振る。

「それだとおまえの負担がバカにならねえ。それは許さん」

俺がそう言うと、ロセは嬉しそうに笑う。

「……まで露骨に嬉しそうにされると、こつちが照れ臭くなるんだが……」

「——で、父さん。何故呼んだ」

ツヴァイの問いかけに答える前に、一旦ロセに離れてもらい、服のしわを伸ばす。

「おうよ、これから面倒になるヒトらに挨拶しとけ」

「む。その話か」

そう言うと、ツヴァイはエプロンを取り払い、その下に着ていたものをイツセーたちに見せる。

「……この学校の制服、ですか？」

木場の確認に頷き、ツヴァイに目で合図を送る。

ツヴァイは頷き、身だしなみを整えると口を開いた。

「この学校で世話になることになった。よろしく頼む」

「ちなみに二年生への編入になるから、新二年組は特に世話になると思う」

俺が捕捉し、ツヴァイは二年組の三人（小猫、ギヤスパ、レイヴェル）に向けて小さく一礼した。

イツセーが苦笑しながら言う。

「何だか、また騒がしくなりそうですね」

「まあ、さっきのを見ればわかるが、時々予想を越えてくるから、よろしく頼む」

俺も苦笑で返し、ツヴァイとロセを側につかせながら、笑みを不敵なものに変える。

「——だが、次の大会じゃライバルだ。お互い全力でいこうぜ」

俺はそう告げ、右拳を前に突き出す。

意図を察してくれたのか、リアスとイツセーが拳を突き合わせてくれた。

俺は笑み、イツセーとリアスに言う。

「それじゃあ、大会で会おう」

「はい、負けませんよ！」

「私もです。手加減はいりません」

「当たり前だ。死ぬ気で勝ちにいくし、勝ちにこい」

「はい！」

二人の返事を聞き、俺は満足げに頷く。

さて、挨拶も済ませたことだし、帰にげるか。

俺が部室を出ようと踵を返した瞬間だった、オカ研部室の扉が豪快に開け放たれる。

「見つけたぞ、この野郎！」

「おっと、見つかったな。じゃ、あばよ！」

俺は窓から脱出しそのまま駆けていく。

ロセとツヴァイを置いてきてしまったが、あの二人なら大丈夫だろう。

ツヴァイには『家族は守れ』と教えてある。

「待ちやがれ、今度こそ逃がさねえぞ！」

「はっ！前線から退いて研究メインになった野郎に、今さら捕まるかよ！」

旧校舎近くの庭を駆け抜けていく俺とアザゼル。

ようやく勝ち取った平和と、戻ってこられた日常だ。

これが少しでも長く続くように、俺は戦おう。

それを壊そうとするのなら、神だろうが世界だろうが、何だろうがぶつ潰す……！

冥界の底の、さらに底。

水に包まれたコキュートスの一角に、不自然なほど近代的な研究所が鎮座していた。

その研究所の最深部に、それはあった。

培養液で満たされた容器に納められた、不気味に蠢く肉塊。

その肉塊には数十本の管が繋がり、何かを吸い上げていく。

まともなら触れようとも思わないそれを、いとおしげに撫でる一人の女性がいた。

彼女の背後には数十、数百とも見てとれる死神たち。

死神の一人——タナトスが女性に告げた。

「準備は順調です。ハーデス様が手を回してくださった神々も、我々の計画に同調しております」

「そう。そうでなくては、あのヒトの苦労が報われませんわ……」

生気を感じさせず、感情が欠如した抑揚のない声。

タナトスは彼女のことを心配しつつも、それを表には出すことなく続けた。

『『ペルセポネ』様、我々はあなたについて行きます。それが、ハーデス様の最後の命令ですので』

「……ええ。頼りにしていますよ、タナトス……」

『『獣』と成り果ててなお、家族を守る男がいた。』

夫の仇を討つため、『魂』を無くした女がいた。

『獣』との戦いは終わり、祭りが始まる。

だがその影で、『獣の子供たち』を巡る戦いが、始まろうとしていた――。

喪失者と龍神少女

Missing link01 次元の狭間

「……や……やれ……！ロセ……！」

彼——ロイは、トライヘキサの核コアに腹を貫かれながら、反撃の準備を整えた恋人に、連絡用魔方陣越しに声をかけた。

「——ッ」

ロスヴァイセが拘束用魔方陣を展開しようとした瞬間、トライヘキサの腕が変形し、触手となってロイの体の内側を這い回る。

現在進行形で全身を食い散らかされていくロイは、全身に激痛を感じながら、意識を飛ばさないために歯を食い縛り、トライヘキサを睨み付けた。

それがトライヘキサの何かに触れたのか、腹を貫いた腕が引き抜かれ、流れのまま踵落としを決められる。

凄まじい速度で海面に叩きつけられたロイは、水しぶきと共にそのまま沈んでいく。

トライヘキサが彼を一瞥した際に、ロスヴァイセの魔方陣が輝き、動きを止める。

ここから連合軍の反撃が始まるのだが、ただ一人それどころではない人物がいた。

「いぼ………っ！」

ロイだ。

風穴の空いた腹から内臓がこぼれ、口からは酸素も漏れていく。常人ならそれで死を悟ることだろうが、ロイは違うことを考えていた。

——この瞬間にも、体が治り始めていやがる……！

海底に沈んでいく彼の身体中の血管が浮かび上がり、左目に不気味な白い光が灯る。自分が別の『何か』に上書きされていく。

その不気味な感覚に襲われながら、ロイは内側がボロボロになった右腕でアロンダイトを握り直し、海面に目を向ける。

視界が点滅を繰り返し、意識が消えていくなかで、彼は籠手に包まれた右腕を通し、ありつたけの魔力と、ドラゴンのオーラをアロンダイトに込めていく。

チャンスは一度だけ。それを放った後、自分がどうなるのか、わかったものじゃない。いや、間違いなくその『何か』へと変異してしまうだろう。

——だが、迷っている場合じゃねえ……！

何もせずに終わるのなら、せめて一撃。

アロンダイトの刀身を深紅と深緑のオーラが包み込み、漏れでたオーラが海水を震わせる。

薄れる意識を懸命に繋ぎ止め、海面のさらに向こうにいるはずのトライヘキサを睨み付け、そして――。

『――』

残された力の限り、一閃した。

海を斬り、トライヘキサを斬り、雲を斬り、空さえも斬ったその一撃は、まさにロイの人生における最大の一撃。

それと同時に、最後の一撃でもあった。

中身がほとんど空洞になっていた右腕は千切れ、大量の血液がぶちまけられる。

ロイはそれを気にする素振りを見せず、切り裂いた海面に目を向けた。

そこには、トライヘキサにとどめを刺そうとオーラを溜める、なんとも頼もしい二天龍の姿が一瞬見えた。

ロイは笑みを浮かべ、口だけで『撃て』と呟く。

それと同時に海は元の姿に戻り、押し寄せてきた海水がロイを包み込む。

本来なら浮き上がるはずの彼の体は、逆に沈む速度を上げた。

今の一撃の余波は海底をも切り裂き、そこに開いた次元の狭間が海水を吸い込み、ロイを引きずりこもうとしているのだ。

意識が喪失と覚醒を繰り返し、その度に蟲に喰われたように『彼』は欠落していく。

——俺は……どうして……こんなことに……？

傷だらけの体を眺め、ぼんやりとそんな事を思う。

欠落した隙間に、別の何かが入り込もうとするが、『黒い炎』がそれをさせまいと彼の内側で激しく燃え、防波堤となり始めていた。

——大切なヒトが……いたはず、なのに……。

そうは思っても、そのヒトたちの顔すらも朧気で、消えてしまいそうだ。

——死ぬ……のは……久しぶり……だ……。

彼は自嘲的に笑む。

だが——、

——ひさし……ぶり……だと……？

彼はそれすらも、覚えてはいなかった。

別の何かによつて身も心も食い散らかされた彼には、もはやぼろくず同様の肉体と『黒い炎』以外に、何も残っていない。

だが、それでも、彼と黒い炎が守つたものがあつた。

それ以外のものを全て除外し、それでようやく守られたそれは黒い炎に守られ、奥底に眠る『彼』のさらに奥、もはや自分でも自覚出来ないほどの場所へと仕舞いこまれた。

万華鏡のような風景が広がる次元の狭間。

そこにこぼれ落ちた彼の体は、すぐさま次元の狭間の力に晒され、その肉体を崩していく。

だが、その肉体が崩壊するよりも早く、白い靄が修復していくのだ。肉体が治っていったところで、彼の意識は戻らない。

次元の狭間を落ちていく彼の体は、偶然にも通りかかった真紅の鱗を持つ巨大なドラゴン——グレートレッドの背中で受け止められた。

崩壊と修復。そのふたつを休みなく続ける彼の体に、小さな手が触れた。

「ロイ……?」

海水でずぶ濡れになったリリスだ。

彼の帰りを待っていた彼女は、何かしらの直感が働き、彼が落ちていった次元の狭間に飛び込んでいたのだ。

リリスは体の至るところから白い靄を吹き出す彼の体を揺すってみるが、反応はない。

むしろ、彼女でも悪寒を感じるほどの何かを放っているのだ。

リリスは何かを考えると彼の背中に手を置き、そこからオーラを流し込んでいく。

濡羽色のオーラが彼を優しく包み、白い靄を無理やり抑え込むように、体の内側に押し返していく。

それを行うリリスの額に脂汗が垂れるが、彼女は気にする素振りを見せず、更にオーラを込めていく。

リリスのありつたけのオーラをロイに流し込み、白い靄を抑え込むと、その代わりに血が吹き出し始める。

リリスは肩で息をしながら、無表情でオロオロし始めた。

周囲を見渡していくなか、ふと、真つ赤な大地に突如として穿たれたへこみのようなものを見つける。

突き破られた繭のようなそれは、大人の一人や二人放り込めそうである。

破られてからだいぶ時間が経っているのか、塞がりかけている。

リリスはほんの少し——瞬き一度程度の時間——悩み、躊躇いなくロイのそこに放り込む。

彼の体が綺麗にそこにおさまると、肉が蠢き始め、ついには彼の体を覆い隠した。

リリスは心配そうにしながらも繭に手を触れ、何度も軽く叩く。

繭は叩かれる度にブニブニと形を歪め、すぐさま元の形に戻る。

リリスは眠そうに目を擦り、繭に身を寄せる。

彼女が寝息をたて始めたのはそのすぐ後であり、繭はゆっくりと脈動を繰り返す。

そして、そんな二人を背中に感じながら次元の狭間を進むグレートレッドは、

『……………』

無言の圧力を放ちながら、背中の繭にオーラを集中させていく。

下手をすれば自分まで食われかねないものを、唐突に体に放りこまれたのだ、彼の機嫌は最高に悪かった。

いつかに赤龍帝を助けたものを、思い出のひとつ感覚で残しておいたことが、ここに来て仇となるとは…………。

過去の自分の浅はかさに憤り、さらに機嫌は悪くなる。

そんな事露知らず、背中の二人は深い眠りにつく。

——片や、一日でも早い復活のため。

——片や、一日でも早い目覚めのため。

—————

一週間後。

次元の狭間。

「むう……」

一度もリリスは何か不穏な気配を感じとり、目を覚ます。

あれから一度も目を覚ますことなく、文字通り寝続けていた彼女だったが、流石に何か来れば目を覚ます。

なりより、今は守らねばならないものが近くにある。

その事を自覚しているからか、余計に敏感になつていいるのだろう。

《ようやく捉えたぞ……》

そんな呟きと共に、数十人の死神がグレートレッドの背中に舞い降りる。

彼らがここを見つけられたのは、死神の『死にゆく魂』を感じ取れる特性のようなものによるためか。

だが、そんな事を考えられる余裕は、リリスにはない。

たつぷり寝たはずなのにオーラはまったく回復している様子がなく、まだまだ眠い。

寝ぼけ眼で死神たちを見つめ、拳を構えるが、そんな彼女を死神たちが嘲笑う。

《オーフィスの半身。ずいぶん疲れているようだな》

《紛い物とはいえ、龍神を相手できると思つたのだが》

死神たちは鎌を構えたと同時に、リリスが動く。

瞬時に飛び出し、手頃な死神を殴り付けたのだ。

小さな拳は十分な速度で死神の鳩尾を捉え、吹き飛ばす。

だが、次の瞬間に倒れたのはリリスであり、殴られた死神はむせながらもすぐさま立ち上がった。

リリスは自分の手を見つめ、僅かに目を見開く。

力が出ないとは思っていたが、ここまでとは……。

そう思ったところで、もう遅い。

死神たちは倒れたリリスを包囲し、一斉に鎌を振り上げる。

死神数人がかりで、リリスが気を失うまで魂を削り続ける。

いかなる存在も、魂を斬られてしまえばそれまでだ。

死神たちだけが出来る戦術に、彼らは絶対的な自信があった。

敵も何故か消耗しきっている子供一人だけ。数も十分。負けるなど、万が一にもない。

この場にいる死神全員が、勝利を確信していた。

——だからだろうか、『それ』に気づくことが出来なかった。

繭から音もなく、這うように出てきた『黒い靄』。

それは四つん這いで身構えると、その場から消え、

《ぎゃあ!?!》

《な、なん——!?!》

死神二人の首を捻り斬った。

二人の断末魔を聞き、死神たちは一斉に散る。

首の無くなった死体と倒れるリリスの脇に、『それ』はいた。

四つん這いだったそれは不気味に蠢き、死神たちを睨む。

頭部と思われる場所にある、死神たちを睨む一对の紅の輝きは、ヒトでいうところの瞳だろうか。

死神たちは正体不明の『それ』を睨むが、『それ』は気にした様子もなく、リリスを守るように構え、手元に槍を生成する。

それを合図に死神たちが動き出すが、『それ』は槍を逆手持ちに切り替え、力の限り放った。

槍は音を置き去りにし、掠めた死神の右腕を千切り、とある死神の腹を貫き、命を奪って次元の狭間に消えていく。

《ぬう!》

間合いを詰めた死神が鎌を振り下ろすが、『それ』は片手で刃を受け止め、そのまま半ばから片手でへし折ると、手元に残った切っ先で死神の首をはねる。

《はっ!》

《こいつー!》

左右から同時に迫り、すれ違い様に真一文字に一閃するが、『それ』は高く飛び上がることで避け、空振りの勢いで隙を生み出した死神二人に、落下の勢いを乗せた拳を叩き込む。

つ………?!

押し倒された二人の胸は『それ』により貫かれ、反撃をする暇もなくその命を絶たれた。

その魂は腕を通して『それ』へと流れ込んでいき、力へと変えられる。

『それ』は再び蠢くと、ゆつくりと立ち上がり始めた。

しっかりと両足を地面につけ、体を起こす。

膝が笑っていたが、それはすぐに収まる。

だが、全身が不気味に蠢いていることに変わりはなく、余計な気味の悪さを感じさせる。

同時に放たれる重圧は先程の比ではなく、死神たちは鎌を握る手に無意識に力を込めた。

構える死神たちとは対象的に、『それ』は全身を痙攣させながら、片手に直剣を生成する。

死神たちは一斉に動きだし、『それ』に殺到していく。

すれ違い様に『それ』を切り裂いていくが、怯む様子も、倒れる様子もない。

魂を削っているはずなのに手応えがないのは、どういうことなのか。

死神たちは先程の余裕が嘘のように消え、少しずつ焦りと恐怖を募らせ始めた。

だからこそ、その動きは精細を欠いていく。

《があっ！》

《——ッ！》

一人の体が真一文字に斬り裂かれ、もう一人は首を掴まれ、そのまま握り潰された。

断末魔もなく倒れたその死神は、とどめの蹴りで体が快音と共に弾けとんだ。

その死神の破片に襲われ、何人かの死神が怯むことになったが、『それ』はその隙を見

逃さない。

斬りかかってくる死神たちの攻撃を掻い潜り、怯んだ死神に飛びかかった。

袈裟、逆袈裟、刺突、と足を止めることなく流れるように放ち、放った数だけ敵を屠つ

ていく。

討ち取った死神が二桁に突入した頃、『それ』に異変が起きた。

痙攣が激しくなり始め、直剣を取りこぼす。

地面に落ちる乾いた音と共に直剣は消えるが、『それ』は頭を押さえ、膝をついた。

死神たちは内心で笑みを浮かべた。

ようやくこちらの攻撃が効いてきたようだ。

ダメージが通るのなら、勝てるだろうと。

だが、『それ』は彼らを嘲笑う。

先ほどまでそこにいた『それ』が、死神たちの視界から消えた。

その事に驚愕の声をあげる前に、数人の死神の体がバラバラに切り刻まれる。

《な、なんだ!?!》

《奴は、どこに!》

お互いに背中を預けるように構えた二人の死神だったが、その体は一本の槍によって

貫かれ、深紅の輝きに呑み込まれて消えた。

『はああ……………』

『それ』はゆっくりと息を吐き、生き残った僅かな死神たちに目を向けた。

ここから始まったのは、戦闘ではなかった。

——ただ一方的な虐殺が、開始されたのだ。